



校中丁番二東

東北學院
校中圖書

地屬併高指達

仙臺通信局

東北學院中圖書

校中圖書

一之分百八十尺縮

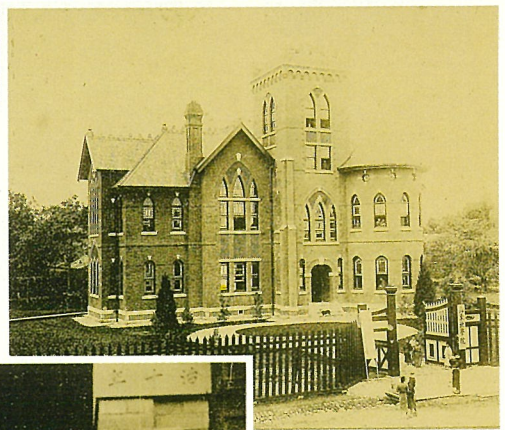
大正 15 年

東北學院百年史

資料篇



二人の教師と六人の生徒(1886年)



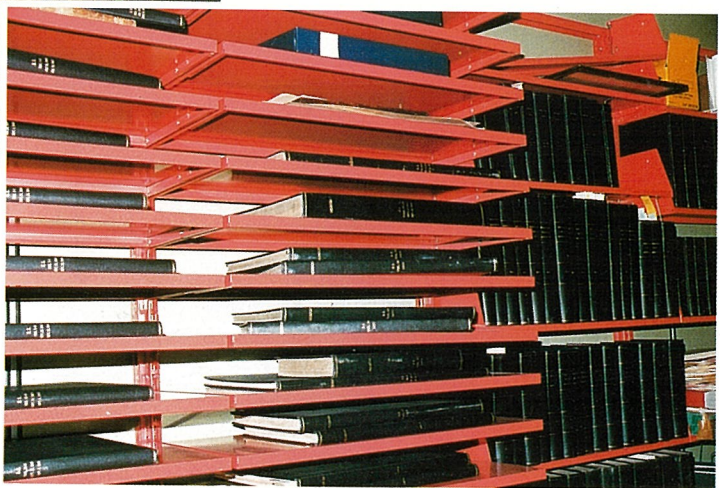
仙台神学校校舎(1891年)



三校祖(1926年)



東北学院史料室文書保存庫



ランカスター神学校文書保存庫(中・下)

押川方義の
「産髪包紙銘記」
(1850年)

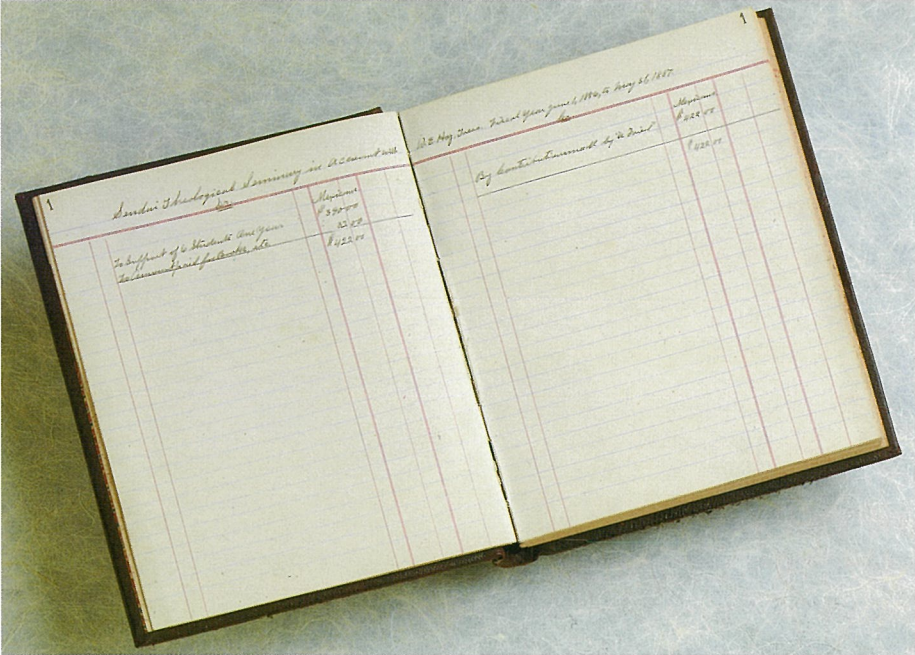


Sendai, Mar. 24.
Dear Mr. Bartholomew,
An un-
expectable calamity has befallen
us. Last night a terrible
gale was blowing, and about
half past two o'clock we heard
the fire bells, and on looking
we found a large blaze not
far away, and already many
shards were being blown on
to our and the girls' school
building the wind was from
the southwest. Our Seminary
and church buildings were quite
near, but not in the path of the
wind as it blew from the SW.
But our little school and our

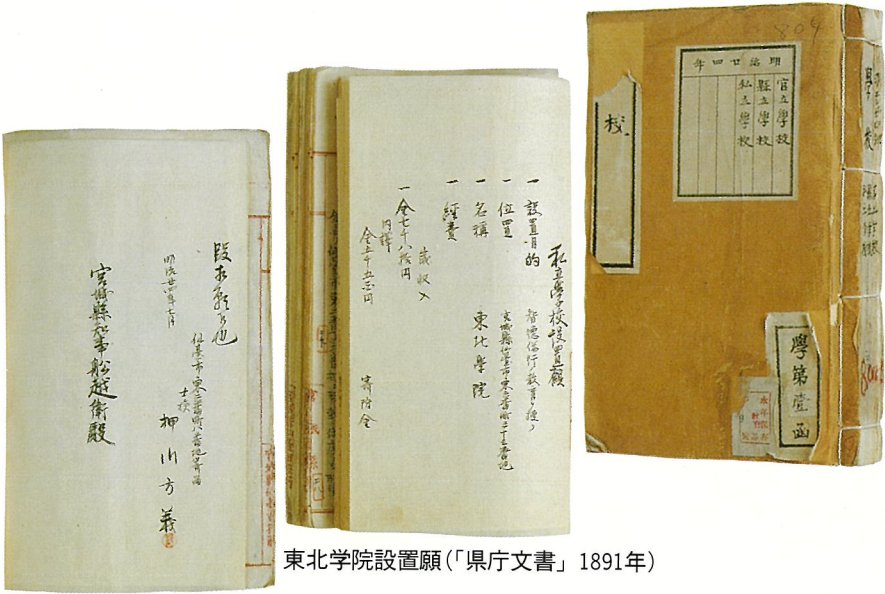
the girls' school dormitory
at the main building were in
imminent danger, but finally
lost. It is said that some
hundred houses burned,
them being the post office
than large buildings. Then
it was that of our build-
ing in now a mass of
ash equally is being
We must hope that in
it will work together for
the greatest calamity
you must pray again, but
must not lose heart. We have
no plans yet. Insurance \$45,000.
Yours faithfully,
C. P. Schudson.

For the church building
Sendai, Mar. 24.
Dear Mr. Bartholomew,
An un-
expectable calamity has befallen
us. Last night a terrible
gale was blowing, and about
half past two o'clock we heard
the fire bells, and on looking
we found a large blaze not
far away, and already many
shards were being blown on
to our and the girls' school
building the wind was from
the southwest. Our Seminary
and church buildings were quite
near, but not in the path of the
wind as it blew from the SW.
But our little school and our

ホーイとシュネーダーの筆跡



ホーイの仙台神学校会計簿(1886~1887年)



東北学院設置願(「県庁文書」1891年)

財団法人設立願
 (「国立公文書館資料」1928年)

設立変更願

今般東北学院専門部及東北学院中学部設置者社団法人
 私立東北学院ヲ解散シ新ニ財団法人東北学院ヲ設立シ之ヲ
 維持經營ヲ為セントスルヲ以テ法人設立許可ト同時ニ設立者更
 更改度候間御認可相成度次第申請候也

昭和三年七月五日

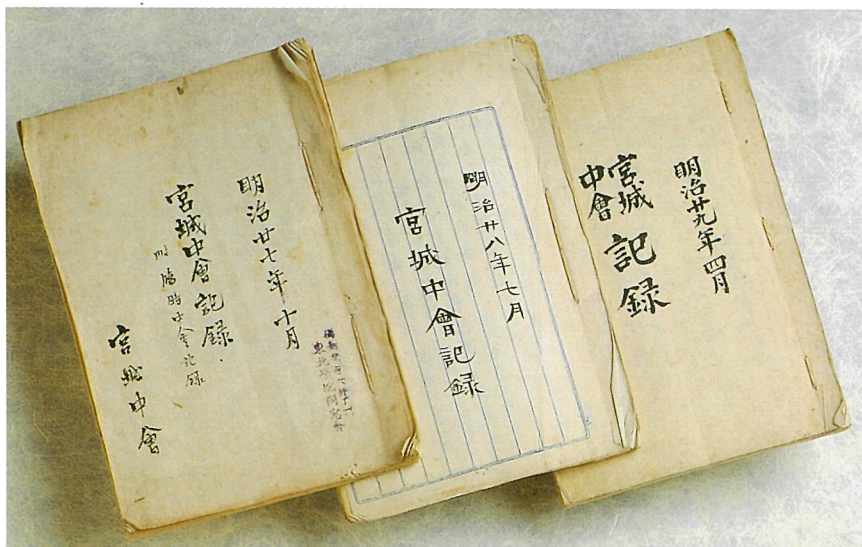
私立東北学院理事

デー、ビー、シネーター

文部大臣 勝田主計殿



理事会記録(和英両文)



宮城中会記録



初期文学雑誌

発刊の辞

院長 情野 鉄雄

昨年五月、『東北学院百年史』通史篇の刊行を見、本院創立一〇四年記念および教養学部開学を機として、これを奉獻できたことは、まことに大きな喜びであつた。幸いにも、通史篇は大方の好評を博し、その編纂の趣意たる「建学の精神を明らかにし、今後の歩むべき道を望見する」有力なるよすがとなりつつあることも、感謝の限りである。担当された諸氏の労苦に、改めて満腔の敬意を表する次第である。

この度、かねての計画に従つて、その続篇とでも言うべき「資料篇」が完成し、公刊に至つたことはいつそうの喜びである。すでに、通史篇においても大幅に直接資料が引用され、出来事の脈絡をたどり、また、先人たちの息吹を肌に感ずる手掛かりとすることができた。今回の資料篇は、過大な説明を抜きにして、資料そのも

のに語らせようとする企図に基づいている。通史篇では部分的にしか触れられなかった「過去」が、そのままの形で読者の現前に迫って来る思いである。

編集委員会は通史篇の刊行後も、営々として文献や物件の収集・整理に努めてきた由であるが、その成果の一部として、通史篇では用い得なかつた新発見の資料も、この資料篇には収載することができたとのことである。いづれにしても、これらの資料によって、読者諸賢が、各自の東北学院史を構築して見られるのも一興ではなかろうか。

本資料篇のもう一つの特徴は、多数の英文資料が発掘・再録されていることである。百年前の創立の前後、はるか太平洋の彼方の地に澎湃として沸き上がった海外伝道熱、それに押し出されるようにして来日したあまたの宣教師たちの情熱、その辛苦のさまが伝わってくる。ことに感銘を受けるのは、百年も前に、日米両国の落差がたとえようもなく大きかつたであろう時代にも、海外の先人たちが日本の同僚たち、さらには日本人全体に対して抱いていた敬意と慎みの念である。それは、言ってみれば、対等な同労者意識であつた。

今日、太平洋を挟む日米両国が世界の平和と発展に背負う責務が、ひとときわ声高く語られる。まさに先覚者たちの夢の実現の好機としか思えない。この史料集を通

して、東北学院がその創立の時以来担ってきた独自の務めを改めて考究し、決意を新たにしたいものである。それにつけても、せっかく収集された貴重な資料や物件が四散することのないように、東北学院記念館のごとき施設を真剣に考慮すべき時期が来ているように思われてならない。

多忙な本務の中で、本篇の刊行のために、時間と労力を惜しまなかつた編集委員各位に深甚なる敬意を表し、本篇もまた識者の間で広く用いられることを願いつつ、一言刊行の言葉に代える次第である。

一九九〇年五月

凡 例

- 一 本書に収めた資料は、本学院が所蔵するもののほか、アメリカのランカスター神学校文書保存庫に整理されてあるドイツ改革派教会関係資料、また国立公文書館、宮城県図書館その他の機関が所蔵する本学院関係資料等である。本学院所蔵以外のものは、資料の末尾にその所蔵者名を掲げた。
- 二 本篇は、既刊の『東北学院百年史』通史篇の史料集として、通史篇に言及・引用した資料を選択して編集することを基本としている。従つて本篇は、通史篇と同じ編・章構成とし、相互に対照できるように配列した。
- 三 資料に通し番号を付し、関連資料は枝番を付して併載することとした。
- 四 英文資料は編集の都合上、巻末にまとめて掲載した。
- 五 資料の出典は、必要に応じてその資料の末尾に掲げた。
- 六 資料の表題は、原資料の表題を用いない場合、または表題がないものについては、内容に則して編者が適宜これを付けた。また補記した年代・月日は、原則としてその資料が書かれた月日、または資料に言及されている事柄が発生した年代とし、邦文資料は元号で、英文資料は西暦でそのまま掲げた。

七 編集にあたっては、原資料を忠実に再現することに努めたが、特に以下の諸点に配慮した。

- ① 漢字は、新字体に改められるものは新字体に改め、略字、俗字などは正字に改めた。
- ② 変体仮名、合字は、通常の文字に改めた。
- ③ 明らかな誤りは訂正したが、あて字、誤用と思われるもの、疑義のあるものについては、〔ママ〕〔sic〕を付し、あるいは「 ー」で補った。
- ④ 空白、欠落個所には、それぞれ〔空白〕、〔…：欠落〕と注記した。
- ⑤ 省略した部分は、〔前略〕、〔中略〕、〔後略〕、〔…：省略〕で示した。また公文書の欄外書き込みは押印を除いて省略したので、これにより文書の年月日が不明になる場合は、文書末尾にその年月日を補記した。
- ⑥ 句読点、傍点、傍線などはできるだけ原文通りとしたが、判読しにくい個所に句読点を付したところもある。ルビは原則として省いたが、判読しにくい語句にルビを付したところもある。
- ⑦ 押印は㊦または㊧で示し、英文のサインには特別に注記を付していない。

東北学院百年史 資料篇 目次

口 絵

院 長 情 野 鉄 雄

凡 例

第一編 心の夜あけ―黎明時代―

一八八五(明治十八)年以前

第一章 源流を求めて

一 ドイツ改革派教会外国伝道局の設置……………一八三八(天保9)……………英文1

二 外国伝道好機到来の訴え……………一八七三(明治6)……………英文2

第二章 日本のプロテスタント開教

三 モリソン教育会第三年次報告……………一八四一(天保12)……………英文5

第三章 押川方義―伝道者への道

四 押川方義の出生……………一八五〇(嘉永2)……………2

五 押川方義の横浜時代

五―1 『横浜公会名簿』……………一八七三(明治6)……………2

五―2	『横浜公会日誌』……………	一八七三(明治6)	4
-----	---------------	-----------	---

第四章 押川方義―宮城中会の設立まで

六 押川方義の新潟時代

六―1	S・R・ブラウン書簡(フェリス宛)……………	一八七六(明治9)	7
六―2	『七一雑報』掲載記事……………	一八七八(明治11)	7
七	エディンバラ医療伝道会関係記事……………	一八七四(明治7)	13

第五章 ドイツ改革派教会の日本伝道

八	外国伝道活動への呼びかけ……………	一八七四(明治7)	英文 9
---	-------------------	-----------	------

九 日本伝道献身への訴え

九―1	伝道開始への呼びかけ……………	一八七五(明治8)	英文 10
九―2	献身への呼びかけ……………	一八七七(明治10)	英文 11
一〇	A・D・グリーング夫妻壮行の辞……………	一八七九(明治12)	英文 12
一―	A・D・グリーング書簡(ジョンストン宛)……………	一八七九(明治12)	英文 14
二―	A・D・グリーングの年次報告書……………	一八八二(明治15)	英文 15
三―	A・D・グリーング書簡(ジョンストン宛)……………	一八八二(明治15)	英文 20
四―	J・P・モール「余はいかにして宣教師となりしや」……………	一九二五(大正14)	英文 23
五―	「我々は日本に教育機関を持つべきか」……………	一八八三(明治16)	英文 26
六―	J・P・モール書簡(ジョンストン宛)……………	一八八四(明治17)	英文 27

第六章 ホーイの献身と来日

一七	W・E・ホーイ「全米神学校外国伝道協議会報告」	一八八二(明治15)	英文30
一八	W・E・ホーイの宣教師任職式	一八八五(明治18)	英文32
一九	W・E・ホーイ書簡(ジョンストン宛)	一八八五(明治18)	英文36
二〇	W・E・ホーイ書簡(ジョンストン宛)	一八八五(明治18)	英文37

第二編 東北を日本のスコットランドに―草創時代―

一八八六(明治十九)年〜一九〇〇(明治三十三年)

第一章 仙台神学校の創設

二一	W・E・ホーイ書簡(ジョンストン宛)	一八八六(明治19)	英文39
二二	W・E・ホーイ書簡(ジョンストン宛)	一八八六(明治19)	英文43
二三	W・E・ホーイ書簡(フィッシャー宛)	一八八六(明治19)	英文44
二四	在日宣教師団会議録	一八八六(明治19)	英文46
二五	W・E・ホーイ書簡(ジョンストン宛)	一八八六(明治19)	英文48
二六	仙台神学校の創立と生徒		
	二六一―1 七人の生徒名	一八八六(明治19)	20
	二六一―2 六人の生徒名	一八八六(明治19)	20
二七	W・E・ホーイ書簡(ジョンストン宛)	一八八六(明治19)	英文50
二八	W・E・ホーイの詩「十二枚の銀貨」	一八九四(明治27)	英文51
二九	A・K・ファウストの香味チカに対する追悼文	一九一四(大正3)	21
三〇	W・E・ホーイ書簡(ジョンストン宛)	一八八六(明治19)	英文54

三一	W・E・ホーイ書簡(改革派教会の教友宛)	八八七(明治20)	英文 58
三二	D・B・シュネーダー夫妻壮行の辞	八八七(明治20)	英文 60
三三	在日宣教師団会議録	八八八(明治21)	英文 65
三四	仙台神学校会計収支書	八八六(明治19)	英文 66
三五	W・E・ホーイ書簡(改革派教会の教友宛)	八八八(明治21)	英文 69
三六	仙台神学校憲法の制定	八八八(明治21)	23
三七	仙台神学校の職員選任	八八九(明治22)	26
三八	仙台神学校設立認可申請の協議		
三八一	認可申請の発議	八八九(明治22)	27
三八二	認可申請の委員選任	八八九(明治22)	27
三九	ドイツ改革派教会全国総会における押川方義の演説	八八九(明治22)	英文 71
四〇	A・R・バーソロミュー「押川方義小伝」	八八九(明治22)	英文 76
四一	W・E・ホーイ書簡(改革派教会の教友宛)	八八九(明治22)	英文 78
四二	W・E・ホーイ書簡(バーソロミュー宛)	八八九(明治22)	英文 79
四三	D・B・シュネーダー「仙台神学校」その起源、発展、そして現況	八九〇(明治23)	英文 80
四四	A・D・グリーン「我々は如何にして仙台と山形を宣教の拠点とするに至ったか」	八九〇(明治23)	英文 86
第二章 東北学院への成長			
四五	学科課程調査委員の選任	八九〇(明治23)	29
四六	W・E・ホーイ書簡(キャンランダー宛)	八九一(明治24)	英文 94
四七	東北学院新憲法起草委員の選任	八九一(明治24)	29

四八	島貫兵太夫の神学校改革論	一八九一(明治24)	30
四九	押川方義「東北学院の教育方針」	一八九一(明治24)	36
五〇	東北学院設立認可申請書類	一八九一(明治24)	41
五一	J・P・モール「新しいわが神学校校舎」	一八九二(明治25)	96
五二	東北学院新憲法の制定	一八九二(明治25)	58
五三	学科課程の改正	一八九二(明治25)	63
五四	職員招聘規則等の制定	一八九二(明治25)	70
五五	東北学院開院式次第の決定	一八九二(明治25)	71
五六	H・K・ミラー「東北学院開校式」	一八九二(明治25)	97
五七	東北学院開院式におけるW・E・ホーイの演説	一八九二(明治25)	103
五八	各学科の年限に関する協議	一八九三(明治26)	71
五九	規則改正認可申請書類	一八九三(明治26)	72
六〇	『東北文学』発刊の辞	一八九三(明治26)	86
六一	W・E・ホーイ書簡(キャレンダー宛)	一八九四(明治27)	107
六二	W・E・ホーイ書簡(キャレンダー宛)	一八九五(明治28)	109
六三	普通科と専修部の設置	一八九五(明治28)	87
六四	島崎藤村の学院時代		
六四―1	島崎藤村の招聘決議	一八九六(明治29)	91
六四―2	島崎藤村の辞任承認	一八九七(明治30)	92
六五	島崎藤村「芙蓉峯を讀みて」	一八九六(明治29)	92

第三章 労働会—祈り、働き、学へ			
労働会の精神……………	六六	一八九六(明治29)	95
労働会入会手続と事業……………	六七	一八九六(明治29)	97
労働会趣意書……………	六八	一八九六(明治29)	99
故金子謹三にかかわる謝辞……………	六九	一八九五(明治28)	100
労働会憲法および条規の制定……………	七〇	一八九七(明治30)	101
労働会規約の制定……………	七一	一八九七(明治30)	103
労働会関係理事會記録……………	七二	一八九七(明治30)	104
七二—1 地所および建物購入の審議……………	七二—1	一八九六(明治29)	104
七二—2 會計調製書および所有品調書等の審議……………	七二—2	一八九七(明治30)	105
七二—3 會計報告と會員に対する補助の審議……………	七二—3	一八九七(明治30)	105
七三 野沢正「東北学院労働會歴史」……………	七三	一九〇五(明治38)	106
第四章 国家主義の嵐に抗して			
不敬事件に対する押川方義他の意見書……………	七四	一八九一(明治24)	113
第五章 押川方義—より広く、より遠く			
大日本海外教育會の設立……………	七五	一八九四(明治27)	115
大日本海外教育會告白と憲法……………	七六	一八九四(明治27)	116
渡韓視察結果報告……………	七七	一八九五(明治28)	119
大日本海外教育會賛成員および會員姓名……………	七八	一八九五(明治28)	121
北海道同志教育會旨意書と會則……………	七九	一八九六(明治29)	125

八〇	押川方義の休暇問題……………	八九七(明治30)	129
八一	普通科規則改正認可申請書類……………	八九八(明治31)	130
八二	私立学校令による届書……………	八九九(明治32)	131
八三	押川方義の院長継統開申書……………	八九九(明治32)	145
八四	押川方義の教況報告……………	九〇〇(明治33)	147
八五	本多庸一・巖本善治書簡(シュネーダー宛)……………	九〇〇(明治33)	148
八六	押川方義の辞任……………	九〇一(明治34)	149
八七	押川方義の顧問就任……………	九〇一(明治34)	149
八八	第六章 ホーイー「もう一つの出発」		
八八	W・E・ホーイーの辞任問題……………	八九三(明治26)	150
八九	押川方義とW・E・ホーイーの辞任問題……………	八九四(明治27)	151
九〇	W・E・ホーイーの辞任問題……………	八九四(明治27)	152
九一	W・E・ホーイーの辞任問題……………	八九四(明治27)	152
九二	W・E・ホーイーの辞任問題……………	八九四(明治27)	153
九三	W・E・ホーイー書簡(キャレンダー宛)……………	八九七(明治30)	111
九四	W・E・ホーイー「我らは前進すべきか」XII……………	八九九(明治32)	113
九五	在日宣教師団会議録……………	八九九(明治32)	116

第三編 LIFE LIGHT LOVE—興隆時代—

一九〇一(明治三十四)年～一九三〇(昭和五年)

第一章 シュネーダーの院長就任

九六	D・B・シュネーダー書簡(キャレンダー宛)……………	一九〇〇(明治33)	英文	118
九七	D・B・シュネーダー書簡(キャレンダー宛)……………	一九〇一(明治34)	英文	119
九八	普通科徴兵猶予認定申請書類……………	一九〇一(明治34)	英文	156
九九	D・B・シュネーダー「仙台教会献堂式」……………	一九〇一(明治34)	英文	120
一〇〇	D・B・シュネーダー書簡(パソロミュー宛)……………	一九〇二(明治35)	英文	123
一〇一	専門学校令による認定申請書類……………	一九〇三(明治36)	英文	178
一〇二	専門科徴兵猶予認定申請書……………	一九〇四(明治37)	英文	201
一〇三	D・B・シュネーダー書簡(パソロミュー宛)……………	一九〇四(明治37)	英文	125
一〇四	社団法人設立認可申請書類……………	一九〇八(明治41)	英文	210
一〇五	東北学院二十五年の歴史……………	一九一一(明治44)	英文	217
一〇六	創立二十五周年記念式における院長式辞と本多庸一の講演……………	一九一一(明治44)	英文	222
一〇七	創立二十五周年記念感謝会における押川方義の講演……………	一九一一(明治44)	英文	226

第二章 中学部の振興

一〇八	D・B・シュネーダー書簡(キャレンダー宛)……………	一九〇一(明治34)	英文	127
一〇九	D・B・シュネーダー「東北学院のための訴え」……………	一九〇三(明治36)	英文	128
一一〇	普通科仮校舎増築および定員変更認可申請書類……………	一九〇四(明治37)	英文	231
一一一	普通科校舎落成式……………			

一二九	D・B・シュネーダーの帰朝……………	一二四(大正13)	295
一三〇	専門部校地取得と神学部独立の決議……………	一二五(大正14)	295
一三一	D・B・シュネーダーの専門部校舎建築計画……………	一二五(大正14)	296
一三二	出村悌三郎の専門部校舎建設資金募金要請……………	一二五(大正14)	299
一三三	専門部校舎の定礎式……………	一二五(大正14)	301
一三四	創立四十周年記念式並びに専門部校舎落成式……………	一二六(大正15)	304
一三五	D・B・シュネーダー「東北学院沿革」……………	一二六(大正15)	305
一三六	創立四十周年記念祝賀晩餐会……………	一二六(大正15)	308
一三七	D・B・シュネーダー「東北学院創立四十周年」……………	一二六(大正15)	145
一三八	創立四十周年記念映画の募金……………	一二六(大正15)	310
一三九	ハウスキーパー記念社交館の建設……………	一二八(昭和3)	312
一四〇	ハウスキーパー記念社交館献堂式……………	一二八(昭和3)	149
一四一	A・R・バーソロミュー「H・M・ハウスキーパー長老への弔辞」……………	一二八(昭和3)	149
一四二	財団法人への組織変更認可申請書類……………	一二八(昭和3)	149
一四三	現役将校配属の通達……………	一二九(昭和4)	314
一四四	リフォームド教会に対する感謝決議……………	一二九(昭和4)	320
一四五	財団法人の認可報告……………	一二九(昭和4)	321
一四六	財団法人役員の選任……………	一二九(昭和4)	321
一四七	D・B・シュネーダー「神の国とは何ぞ」……………	一二九(昭和4)	322
一四八	D・B・シュネーダーの高等学部礼拝堂建築計画……………	一三〇(昭和5)	322
一四九	D・B・シュネーダー「東北学院礼拝堂定礎式」……………	一三〇(昭和5)	324
一五〇	D・B・シュネーダー「ラーハウス」記念礼拝堂献堂式……………	一三一(昭和6)	325
		一三二(昭和7)	151
			英文

第四章 神学部と東北伝道

一五一	清水東四郎「東北中会史」	一八八五(明治18)	328
一五二	宮城中会伝道委員規則	一八八八(明治21)	330
一五三	押川方義の伝道方策	一八九四(明治27)	332
一五四	宮城中会の独立伝道決議	一八九七(明治30)	333
一五五	「仙台教会内の紛擾」	一九二一(大正10)	334
一五六	東北学院伝道教会の設立願	一九二三(大正12)	337
一五七	東北学院伝道教会の設立承認	一九二四(大正13)	338
一五八	「東北学院教会建設式」	一九二六(大正15)	339
一五九	東北学院教会の独立性に関する中会審議	一九三三(昭和8)	339

第五章 押川方義のその後

一六〇	院長辞任後の活動	一九〇一(明治34)	340
一六一	渡瀬常吉書簡(押川方義宛)	一九〇五(明治38)	341
一六二	洪沢栄一書簡(押川方義宛)	一九〇五(明治38)	342
一六三	押川方義書簡(川合信水宛)	一九〇九(明治42)	342
一六四	東京同窓会の動向	一九一(明治44)	342
一六五	孫文歓迎会	一九一三(大正2)	343
一六六	押川方義書簡(川合信水宛)	一九一三(大正2)	345
一六七	三矢次郎書簡(押川方義宛)	一九一三(大正2)	346
一六八	押川方義書簡(川合信水宛)	一九一六(大正5)	347
一六九	押川方義書簡(川合信水宛)	一九一七(大正6)	348

一七〇	押川方義の葬儀	一九二八(昭和3)	349
一七一	押川方義追悼式	一九二八(昭和3)	349
一七二	D・B・シュネーダーの押川方義追悼式辞	一九二八(昭和3)	350
一七三	A・R・バーソロミューの押川方義への追憶文	一九二八(昭和3)	153

第六章 宣教師の時代―福音の種を日本へ

一七四	D・B・シュネーダー「合衆国改革派教会の日本伝道」	一九〇一(明治34)	英文156
一七五	D・B・シュネーダーによる日本伝道好機到来の訴え	一九〇五(明治38)	英文160
一七六	D・B・シュネーダー「日本はアメリカにとって脅威か」	一九一五(大正4)	英文162
一七七	合衆国改革派教会全国総会外国伝道局報告		
一七七―1	日本伝道における過去二十五年間の進展比較表	一九二六(大正15)	英文164
一七七―2	外国伝道活動における本国の進展を示す表	一九二六(大正15)	英文165
一七八	W・E・ランペ「過去四十年間の外国伝道の目的と方法」	一九二七(昭和2)	英文166
一七九	合衆国改革派教会日本派遣宣教師一覧	一八七九(明治12)〜	英文176

第四編 我は福音を恥とせず―苦難時代―

一九三一(昭和六)年〜一九四七(昭和二十二)年

第一章 自立への努力

一八〇	五十嵐正「商科の事件に就いて」	一九二六(大正15)	358
一八一	神学部騒擾に関する中会審議		
一八二	D・B・シュネーダー「基督教主義学校の危機に際して」	一九二六(大正15)	360

東北学院の使命を惟ふ	一九三一(昭和6)	360
一八三 高等学部生徒同盟休校に関する文部省との往復文書	一九三一(昭和6)	366
一八四 D・B・シュネーダー書簡(バーソロミュー宛)	一九三一(昭和6)	182
一八五 D・B・シュネーダー書簡(バーソロミュー宛)	一九三一(昭和6)	185
一八六 東北学院基本金募集趣意書	一九三四(昭和9)	374
一八七 東北学院基本金募集への協力	一九三四(昭和9)	375
一八八 D・B・シュネーダー書簡(キャッセルマン宛)	一九三八(昭和9)	185
一八九 新東北中会運動の決議	一九三八(昭和9)	376
一九〇 出村悌三郎「母校の経済的独立に就いて」	一九四〇(昭和15)	381
一九一 東北学院維持会の成立	一九四〇(昭和15)	382

第二章 創立五十周年

一九二 D・B・シュネーダー書簡(キャッセルマン宛)	一九三四(昭和9)	英文 186
一九三 E・H・ゾーグのシュネーダー院長辞任に関する報告	一九三四(昭和9)	英文 187
一九四 創立五十周年祝賀会におけるD・B・シュネーダーの演説	一九三六(昭和11)	383
一九五 創立五十周年記念行事とD・B・シュネーダーの説教	一九三六(昭和11)	388
「我は福音を恥とせず」	一九三六(昭和11)	388
一九六 出村悌三郎の院長就任挨拶	一九三六(昭和11)	391
一九七 D・B・シュネーダー書簡(キャッセルマン宛)	一九三六(昭和11)	英文 192
一九八 創立五十周年記念式における出村悌三郎の式辞	一九三七(昭和12)	397
一九九 出村悌三郎「国民精神総動員に就いて」	一九三七(昭和12)	400
二〇〇 D・B・シュネーダーの逝去	一九三八(昭和13)	403

第三章 強まる非常時体制

二〇一	E・H・ゾーグ書簡(キャッセルマン宛)	一九三五(昭和10)	英文	194
二〇二	D・B・シュネーダーの神学部合同に対する見解	一九三五(昭和10)	英文	197
二〇三	出村悌三郎「神学部合同問題に就いて」	一九三六(昭和11)		404
二〇四	神学部の近況	一九三七(昭和12)		406
二〇五	高等学部学則変更認可申請書	一九三七(昭和12)		407
二〇六	中学部生徒定員変更認可申請書類	一九三九(昭和14)		409
二〇七	高等学部勤労奉仕の報告	一九三九(昭和14)		412
二〇八	出村悌三郎「宮城県当局の基督教主義学校に対する要望」	一九四〇(昭和15)		415
二〇九	昭和十五年度東北学院学事報告	一九四一(昭和16)		417
二一〇	同窓生戦没者の慰霊祭	一九四一(昭和16)		418

第四章 存廃の危機に立って

二一一	兵式教練と東北学院	一九二五(大正14)		420
二一二	高等学部東亜研究会「会報」序文	一九三九(昭和14)		422
二二三	出村剛「御親閲拝受の光栄に浴して」	一九三九(昭和14)		422
二二四	配属将校質問事件	一九四〇(昭和15)		424
二二五	E・H・ゾーグの辞任	一九四〇(昭和15)		426
二二六	文科生徒募集停止認可申請書類	一九四一(昭和16)		427
二二七	商科第二部設置認可申請書類	一九四一(昭和16)		428
二二八	第二中学部設置認可申請書類	一九四一(昭和16)		432
二二九	第二中学部の新設	一九四二(昭和17)		434

二二〇	A・M・アンケニー書簡(クララ・バイン宛)	一九四二(昭和17)	英文	198
二二一	問題になった東北学院の三上標語	一九四二(昭和17)		435
二二二	学徒勤労動員に関する文部省布達	一九四三(昭和18)		436
二二三	学校報国隊出動令書の発令	一九四三(昭和18)		439
二二四	航空工業専門学校設置認可申請書類	一九四四(昭和19)		440
二二五	航空工業専門学校設立趣意書	一九四四(昭和19)		445
二二六	萱場資郎「航空工業専門学校設立の秘史」	一九七一(昭和46)		449
二二七	仙台空襲と「当直日誌」	一九四五(昭和20)		455
二二八	東北学院の戦災	一九四五(昭和20)		455

第五章 戦後の苦難

二二九	航空工業専門学校の名称および学則変更認可申請書類	一九四五(昭和20)		457
二三〇	専門学校設置認可申請書類	一九四六(昭和21)		462
二三一	寄附行為変更認可申請書類	一九四六(昭和21)		463
二三二	高等商業部廃止認可申請書	一九四六(昭和21)		465
二三三	工業専門学校生徒募集中止認可申請書類	一九四六(昭和21)		466
二三四	専門学校学級増加認可申請書	一九四六(昭和21)		467
二三五	八木山土地問題記録	一九四六(昭和21)		468
二三六	創立六十周年記念式における出村剛の式辞と記念行事日程	一九四六(昭和21)		469
二三七	工業専門学校在学生の措置に関する認可申請書	一九四六(昭和21)		472
二三八	院長制復活の審議	一九四六(昭和21)		473
二三九	審議会と事業局の設置	一九四七(昭和22)		474

二四〇	『東北文学』の再刊	一九四七(昭和22)	475
二四一	月浦利雄「よりよい学院」	一九四七(昭和22)	475
二四二	工業専門学校廃止認可申請書類	一九四七(昭和22)	477
二四三	基督教教育調査報告	一九四八(昭和23)	478

第五編 エホバを畏るゝは知識の本なり―復興時代―

一九四八(昭和二十三年)～一九五八(昭和三十三年)

第一章 新しい内外協力

二四四	A・M・アンケニー書簡(クララ・バーン宛)	一九四七(昭和22)	英文 201
二四五	福音・改革派教会全国総会国際伝道局報告(日本関係)	一九四七(昭和22)	英文 203
二四六	福音・改革派教会全国総会国際伝道局報告(日本関係)	一九五〇(昭和25)	英文 208
二四七	シュネーダー記念図書館建築資金募集趣意書	一九四九(昭和24)	498
二四八	大学諸施設の献堂式	一九五〇(昭和25)	501
二四九	シュネーダー記念図書館の建設計画	一九五一(昭和26)	502
二五〇	シュネーダー記念図書館の落成式	一九五三(昭和28)	503
二五一	図書館壁飾「エホバを畏るゝは知識の本なり」の完成	一九五五(昭和30)	504

第二章 新学制による出発

二五二	大学昇格への審議	一九四七(昭和22)	505
二五三	中学校学則	一九四七(昭和22)	506
二五四	高等学校および大学設立準備委員の選任	一九四七(昭和22)	509

二五五	宮城学院との合併問題……………	一九四八(昭和23)	509
二五六	高等学校設置認可申請書類……………	一九四八(昭和23)	509
二五七	大学設置認可申請書類……………	一九四八(昭和23)	518
二五八	大学学則……………	一九四九(昭和24)	518
二五九	短期大学部設置の審議……………	一九四九(昭和24)	536
二六〇	短期大学部設置認可申請書類……………	一九四九(昭和24)	537
二六一	出村剛「現代思想の批判と我らの主張」……………	一九三五(昭和10)	549
二六二	月浦利雄の出村剛への思い出……………	一九四九(昭和24)	552
二六三	出村悌三郎の葬儀……………	一九五〇(昭和25)	554
二六四	A・アンケニーの院長就任内諾……………	一九五〇(昭和25)	556
二六五	A・アンケニーの院長就任挨拶……………	一九五〇(昭和25)	557
二六六	A・アンケニー「東北学院卒業生に贈る」……………	一九五一(昭和26)	560
二六七	A・アンケニーの埋骨式……………	一九五一(昭和26)	561
二六八	学校法人寄附行為の審議……………	一九五〇(昭和25)	562
二六九	学校法人への組織変更認可申請書類……………	一九五〇(昭和25)	564
二七〇	短期大学部法科第二部設置の審議……………	一九五一(昭和26)	572
二七一	短期大学部法科第二部増設認可申請書類……………	一九五一(昭和26)	573
二七二	小田忠夫「新学年への出発に際して」……………	一九五三(昭和28)	577
二七三	月浦利雄「高等学校の昨今」……………	一九五五(昭和30)	579

第三章 小田忠夫の院長就任

二七四	第一回市民クリスマス会の開催……………	一九五〇(昭和25)	581
-----	---------------------	------------	-----

二七五	神学部予科新設他の協議	一九五一(昭和26)	581
二七六	小田忠夫の院長選任	一九五一(昭和26)	582
二七七	小田忠夫の大学将来計画	一九五一(昭和26)	582
二七八	小田忠夫の院長就任挨拶	一九五一(昭和26)	583
二七九	ロバート・ゲルハートの送別会	一九五一(昭和26)	586
二八〇	神学科増設の決議	一九五一(昭和26)	587
二八一	神学科増設認可申請書	一九五一(昭和26)	588
二八二	神学科増設取下げの決議	一九五一(昭和26)	592
二八三	神学科増設認可申請取下げ書	一九五一(昭和26)	593
二八四	花輪庄三郎『東北学院七十年史』編纂の委嘱をうけて	一九五一(昭和26)	594
二八五	七十年史編纂の計画	一九五四(昭和29)	596
二八六	創立七十年記念行事の協議	一九五四(昭和29)	596
二八七	小田忠夫「創立七十年に鑑みつつ」	一九五五(昭和30)	597
二八八	中学・高等学校の施設建築資金計画	一九五五(昭和30)	599
二八九	創立七十年記念式における鈴木義男の式辞	一九五五(昭和30)	600
二九〇	創立七十年記念行事	一九五五(昭和30)	602
二九一	W・E・ホーイと出村悌三郎の記念碑建立計画	一九五五(昭和30)	606
二九二	献鐘式の挙行	一九五五(昭和30)	606
二九三	W・E・ホーイと出村悌三郎の記念碑建碑式	一九五六(昭和31)	607
二九四	小田忠夫「母校『東北学院』につらなるもの」	一九五六(昭和31)	609
二九五	学校と教会との伝道協力懇談会	一九五八(昭和33)	611
二九六	アセンブリー・ホールの献堂式	一九五八(昭和33)	612
二九七	花輪庄三郎の『東北学院七十年史』執筆後記	一九五九(昭和34)	612

第六編 地のきわみまでもー発展時代ー

一九五九(昭和三十四)年以後

第一章 土樋キャンパス

二九八	アメリカ文化研究所規則	一九五〇(昭和25)	616
二九九	三部門協議会の発足	一九五七(昭和32)	617
三〇〇	文経学部第二部増設認可書	一九五九(昭和34)	617
三〇一	短期大学部廃止認可書	一九六〇(昭和35)	618
三〇二	文学専攻科設置認可書	一九六一(昭和36)	619
三〇三	鈴木義男への追悼文	一九六三(昭和38)	619
三〇四	諸施設の建築状況	一九六三(昭和38)	622
三〇五	文経学部の分離・独立構想	一九六三(昭和38)	623
三〇六	文学部・経済学部設置認可書	一九六四(昭和39)	623
三〇七	大学院設置・増設認可書		
三〇七-1	英語英文学専攻 修士課程	一九六四(昭和39)	625
三〇七-2	財政金融専攻 修士課程	一九六五(昭和40)	625
三〇七-3	英語英文学専攻 博士課程、応用物理学専攻 修士課程	一九六六(昭和41)	626
三〇七-4	経済学専攻 修士課程	一九六七(昭和42)	627
三〇七-5	経済学専攻 博士課程、応用物理学専攻 博士課程	一九六八(昭和43)	628
三〇七-6	機械工学専攻 修士課程、電気工学専攻 修士課程	一九七一(昭和46)	629
三〇七-7	機械工学専攻 博士課程、電気工学専攻 博士課程	一九七四(昭和49)	630

三〇七―8	法律学専攻 修士課程	一九七五(昭和50)	630
三〇七―9	法律学専攻 博士課程(後期)	一九七九(昭和54)	631
三〇八	星宮啓「昨年度の学生運動を顧みて」	一九六四(昭和39)	632
三〇九	杉山元治郎の追悼式	一九六四(昭和39)	637
三一〇	法学部設置認可書	一九六五(昭和40)	638
三一―	山根篤の理事長就任	一九六五(昭和40)	639
三一二	星宮啓「最近の学生運動について」	一九六七(昭和42)	640
三二三	小田忠夫「学費改定に関する所信」	一九六八(昭和43)	644
三二四	文経学部および同第二部廃止認可書	一九六九(昭和44)	645
三二五	アールサイナス大学との国際教育交流協定	一九八二(昭和57)	645
三二六	フランクリン・アンド・マーシャル大学との国際教育交流協定	一九八六(昭和61)	646

第二章 多賀城キャンパス

三二七	小田忠夫「母校の現況と展望」	一九五七(昭和32)	647
三二八	多賀城校地の払下げ申請書	一九五八(昭和33)	648
三二九	多賀城校地の構想計画	一九五八(昭和33)	655
三三〇	小田忠夫「学院教育の現実と希望」	一九六〇(昭和35)	656
三三一	小田忠夫「年末年始に際して」	一九六一(昭和36)	657
三三二	工学部増設認可書	一九六二(昭和37)	659
三三三	工学部新設趣意書	一九六二(昭和37)	660
三三四	小田忠夫「年末年始の所感」	一九六二(昭和37)	662
三三五	隣接国有地の取得	一九八〇(昭和55)	664

三二六	工学部体育館の献堂式	一九八一(昭和56)	665
三二七	工学部図書館の献堂式	一九八二(昭和57)	666
三二八	工学部礼拝堂の献堂式	一九八三(昭和58)	667
三二九	幼稚園設置認可書	一九六二(昭和37)	668
三三〇	幼稚園新園舎の献堂式	一九八五(昭和60)	669

第三章 中学・高等学校および榴ヶ岡高等学校

三三一	月浦利雄「榴ヶ岡分校設置」	一九五九(昭和34)	670
三三二	月浦利雄「新学年を迎えて」	一九六四(昭和39)	672
三三三	月浦利雄「年頭に当りて」	一九六九(昭和44)	674
三三四	月浦利雄「年頭所感」	一九七〇(昭和45)	675
三三五	月浦利雄「榴ヶ岡高校のヴィジョンと構想」	一九七一(昭和46)	676
三三六	榴ヶ岡高等学校設置認可申請書類	一九七一(昭和46)	678
三三七	榴ヶ岡高等学校校舎定礎式	一九七二(昭和47)	686
三三八	小田忠夫の月浦利雄に対する弔辞	一九七三(昭和48)	687
三三九	二関敬「新年のご挨拶」	一九七四(昭和49)	689
三四〇	田口誠一「校長に就任して」	一九七七(昭和52)	692
三四一	田口誠一「高校二部の閉校に際して」	一九八三(昭和58)	693

第四章 創立百周年

三四二	小田忠夫「百周年を迎えるにあたり建学の精神の発揚を」	一九八一(昭和56)	695
三四三	創立百周年記念行事準備諸規程		

三四三—1	東北学院創立百周年記念行事準備事務室規程	一九八一(昭和56)	696
三四三—2	東北学院創立百周年記念行事準備委員会規程	一九八一(昭和56)	697
三四三—3	東北学院創立百周年記念行事運営委員会規程	一九八一(昭和56)	697
三四四	創立百周年記念行事の準備開始	一九八一(昭和56)	698
三四五	情野鉄雄の小田忠夫に対する弔辞	一九八二(昭和57)	699
三四六	情野鉄雄の院長就任式	一九八二(昭和57)	702
三四七	創立百周年記念行事の具体化	一九八二(昭和57)	703
三四八	情野鉄雄「新年のごあいさつ」	一九八五(昭和60)	704
三四九	創立百周年記念行事概要	一九八五(昭和60)	706
三五〇	創立百周年記念式における理事長児玉省三の挨拶	一九八六(昭和61)	707
三五一	創立百周年記念式における院長情野鉄雄の式辞	一九八六(昭和61)	709
三五二	創立百周年記念行事	一九八六(昭和61)	712

英文資料	938
------	-----

収録資料一覧	941
解説	942
略年表	954
編集後記	972

第一編

心の夜あけ

＝黎明時代＝

1885(明治18)年以前

第一章 源流を求めて

一 ドイツ改革派教会外国伝道局の設置

〔英文〕

(一八三八年十月二日)

第二章 押川方義—伝道者への道

四 押川方義の出生

(嘉永二年十二月五日)

二 外国伝道好機到来の訴え

〔英文〕

(一八七三年四月二十三日)

熊三郎産髮包紙銘記

嘉永二年十二月五日出生 熊三郎産髮

第二章 日本のプロテスタント開教

五 押川方義の横浜時代

五—1 『横浜公会名簿』

(明治六年四月)

三 モリソン教育会第三年次報告

〔英文〕

(一八四一年九月二十九日)

耶蘇降世千八百七十三年四月改之

公会名簿

明治戊辰

東京飯倉片町

第三章 押川方義一伝道者への道

於横浜	一粟津 桂二郎	同断	当時洋行申九月十三日出帆
balan 師ヨリ受洗	九瀬々藩	同断	九安藤劉太郎
フランス住居	当時洋行		西京
同断	二鈴 木貫一		申九月帰国
明治二己巳正月	元彦根	同断	十進 村 漸
於横浜	当時伊勢		松山
タムソン師ヨリ受洗	三鈴 木 鉦次郎	同断	横浜
同断	元宮津	同断	十一押川方義
	金川		同
	四島屋 だい		同
同断	築地	同断	十二吉田信好
明治三午	五小川廉之助		同
於長崎	横浜石川		当時東京愛宕下三才小路ヨリ
英国エムソー師ヨリ受洗	六仁村 守三		南手ノ小路
明治五壬申二月	元肥前	同断	十三佐藤一雄
於横浜	東京下谷寺町源空寺寓		伊勢津
balan 師ヨリ受洗	七竹尾 録郎		東京
同断	静岡	同断	十四戸波捨郎
	横浜		同
	八篠崎桂之助		横浜
同断	静岡	同断	十五大坪正之助

明治五年三月

於横浜

balan 師ヨリ受洗

十六 杉山 孫六
静岡

東京南鍛冶町六番地

三木田や藤五郎同居

十七 熊野 雄七

大村

東京

十八 桃江 正吉

大村

当時洋行
十九 朽木 鑑

福智山

東京

二十 伊藤^(マユ) 友賢

仙台

横浜

二十一 湯浅 久兵衛

同

二十二 本多 庸一

津輕

〔後略〕

(東京女子大学比較文化研究所所蔵)

五—2 『横浜公会日誌』

(明治六年)

公会日誌(耶蘇降世千八百七十三年自改曆一月未安息日)

〔前略〕

三月朔日

一四字前百六十七番学校へ集会先ツ議長モシン(勸発人
也) 執筆等ヲ撰 議長 balan 師 モシン タムソン師
執筆 奥野

右撰衆無異議

一祝謝神 balan 師 次ニヨハンネ十七章 執筆 読之
但此章ノ祈リハ耶蘇君際期遺教之祈ナル由章意ヲ講ゼ
リ

一長老 小川氏云公会ノ規則中凡ソ可ナリト雖モ或ハ改
ムベキ条モアランカ且安息日ヲ守ルベシト云ノ条ヲ増
加セバイカン

一本多篠崎押川云是迄公会規條ト称スルモノハ多分信ズ

- ベキノ箇条ニテ之ヲ規条ト称スルハ穩当ナリトセズ故ニ之ヲ信ズベキノケ条トシテ規則ニ区别シ之ヲ規則ノ前ニ掲テ以テ規則ノ因テ出ル所ノ源由ヲ表スベシ規則ハ内外ノ称ヲ止メ一般ニ規則ト称スベシ從來規條ノ内宜ク規則中ニ置クベキモノハ信ズベキノ条中ニ置カズ^(シカ)ノ之ヲ規則中ニ加入スベシ掲載スベキノ条々定交セバ會中両三名ヲ撰ンデ之ヲシテソノ文章ヲ檢セシメ成ルノ後之ヲ會中ニ示シテ衆望ニ充テ而後之ヲ上梓スベシ
- 一從來公會規則第一条ヲ以テ第四条ノ次ニ列セバイカン
- 一同十二条中聖餐ヲ守ル事ハ分ケテ別条トナサバイカン
- 一同十三条ハ規則中ニ掲シ公法ヲ守ルコトハ別条トセバイカン
- 一同十五条ハ規則ノ最尾ニ書シ以テ祈禱ノ意ヲ存スルトセバイカン
- 一規則一条ハ別紙ニ誌モノヲ以テ交換セン
- 一同第三四五ノ三条ハ第二条ニ附シテ別ニケ条ヲ立ツヲ要ナリト思フ
- 一同七条八条ヲ合併シテ一トナサバイカン
- 一二月首ノ安息日ノ會議ハ安息日ノ前日トセバイカン
- 一十一条救済ノ事ハ但シ十分一ト書シテ自便ニ方金ノ語ヲ除カバイカン

- 一十五十六条ハ除キ去ラバイカン
- 我輩ノ公會ハ他ノ諸宗派ニ係ラズ実ニ主耶蘇キリストノ名ニ依テ建ラレシモノナリ且我輩心志ヲ一ニシ相与ニ勉勵シ以テ各ソノ体ノ一ヲ具ンテ希望ス故ニ凡テ三一真神ヲ信シ唯聖書ヲ以テ標準トシ而適合セン事ヲ勉ルモノハ同クコレ耶蘇キリストノ徒弟タルベキニ因テ海内ハ勿論海外諸洲ノ信者共ニ耶蘇キリストノ故ヲ以テ一家同胞ノ親愛各宜ク体認スベシ
- 一長老云右本多篠崎押川等イヘル如ク規則ノ条々改メテ然ベキナレドモ上梓ノ事ハ異議ノヨシナリ
- 一タムソン師云曾テ聖書ヲ講ゼシトキニハ此等ノ条ヲ改ントスルノ意アリシガ今卒爾ニハ能ハズ併ナガラ兼テ組手五六輩ヲ撰テ条々ヲ改正セン事ハ然ルベキカ又改正ノ上衆議一決セバ上梓モ又可ナランカ今速ニ改テ上木センハ不可ナルベシスベテ此条ヲ改正スル組手ヲ撰ブニハ六人ノ内^{日本人三人 西洋人三人}撰ブベシイカニトナレバ日本ノ人ハ日本ノ風俗ヲヨク知レリ又西洋人ハ信ズベキノケ条ヲヨク熟知セリコレハ一朝一夕ノ事ニ非ズ昔ヨリサマ^マノ議論アリシ事ニシテ前轍ヲフムヲ戒メ改正スル事アラバ永ク公會ノ基礎トモナルベク又西洋ノ人ヲシテ撰シムルハ宗派多クアレバ改正ノ後ソノ書モノ

ヲ神戸ノ教師ニモ見セテ此ノ日本ノ公会後ニハ同一ト
ナスベケレバナリ。

一 仁村云衆議シカルベシサレドタムソン師云ヘルゴトク
今速ニ改ムルハ難カルベシ且コノ公会ノ規則中始終不
可改革条又臨時可改革ヲ區別スベシ又外国ニテハ宗派
イカニカハレル事アルカ知ズトイヘドモ日本公会ハ一
公会ニ定メテ永々ノ規條トナスベク且文章ノ増減モア
ルベキカ

一 バラン師云神ノ恵ニテ此公会ヲ立テシトキ条目未ダ熟
セザリシユエ損益スル事アルハ恰モ衣ノ時ニ從テ更ル
ガ如クニシテ神ノ教ノ永ク易フベカラザルガ如キニ非
ズ

一 六人組人撰各入札

小川 十三 奥野 十一 仁村 七 本多 七

タムソン師 十四 バラン師 十三 グリン師 九

一 タムソン師云本多仁村兩人同數ナレバ半數ヲ取テ七人
組ト定メ然ルベシト衆同意セリ

一 長老執事人撰入札人数十四人

長老 奥野 十一 執事 仁村

右人撰衆無異議

一 バラン師云老執事ノ權ヲ授ル事ハ何日ニスベキヤ安息

日二次過ルノ後ニスル事モアリシカシナガラ従前ノ如
クセバイカン

一 仁村云規則改正ノ後ニセバイカン

一 小川云明日ハ受洗ノ者モアリ喜悅ノ日ナレバ定メタシ
ト云ヘリ衆同意セリ

一 今日評議ニモレタル事アラバ五月ニイタリ再評スベシ
ト衆同意

三月二日安息日

一 九字三十九番江集会先祈禱次歌頌同音次ニ英語ニテ聖
書ヲ講ズルメス師和語ニテ聖書ヲ講ズタムソン師人数四十
人余

一 三字再ビ同所江集会先祈禱次ニ馬太五章ヲ讀ム小川老

一 受洗ノ者牧某 中山 佐々木 都合五人

一 昨日人撰有之長老執事ニ權ヲ授クルトキ先祈禱バラン
師外フラオン師ルメス師一同手ヲ按シ長老執事トモ躑踞
シ之ヲ受ク次ニ受洗ノ志銘々江訊問フラオン師畢テ洗禮
授之

〔後略〕

(東京女子大学比較文化研究所所蔵)

第四章 押川方義—宮城中会の設立まで

六 押川方義の新潟時代

六一 1 S・R・ブラウン書簡（フェリス宛）

（明治九年一月二十七日）

新潟の伝道 さて、他の事を申し上げねばなりません、すでに、この帝国のいたる所に福音の光が照りそめていきます。わたしたちの神学生の一とりで、パーム博士を助けるため、新潟まで行っている者からの手紙によると、最近、一名の者が洗礼を受けました。それで、回心者一四名が、ごく短期間にできたのです。この青年押川（方義）は、ここの教会の長老の一とりです。パーム博士から、日本人のキリスト者を、助手に頼みたいとの、熱心な懇請があつたので、祈つて考慮した結果、押川が、横浜基督教会から委嘱されて、応援に出かけることになつたのです。彼は有望な青年であり、聖霊に満されています。新潟に行く途中、本州の裏側を形づくる山脈の反対側

ある信州に、一晚とどまりました。そして、そこに、十誠を憲法として禁酒会を組織し、安息日を厳守し、聖書の一部を読むという、小人数のバンドを、彼は見たのです。このバンドは、押川を三日間ひきとめ、彼の口から福音を学びたいと申し出たのです。そこで、このバンドの一員で、聖霊に潔められた者が横浜に来て、信州に、福音を説く人を得たいと申し出るような事態に発展しました。その結果、横浜基督教会の、もうひとりの長老、篠崎（桂之助）が、その人といっしょに信州へ行く決心をしました。そのため、わたしの神学塾のいちばんすぐれた生徒ふたりを失つたのですが、しかし、こういう召命への懇請を、断わることはできません。

（高谷道男編訳『S・R・ブラウン書簡集』）

六一 2 『七一雑報』掲載記事

（明治十一年〜十三年）

○新潟在留パーム氏の料理人埴谷惣五郎といへる人は四年ほど前よりパーム氏にしたがひたる人なるが道を聞きしより次第に信仰の心つよくなり身は賤しき職業なるも其の敬虔と信仰とにいたりては殆々^{オヤク}学力ある信徒にも

おとらぬ程にて誠心に主に事へ忠実を尽したるは実に人々を感じしめ教会の益となす少なからざりしが惜むべし去る六月十二日の午後心臓の病のため三十歳を一期として終に眠りに付きたるよし或教友の語なりき

(三卷二九号 明治十一年七月十九日)

○東京大親睦会は去十五日より十七日迄三日間に於て午前七時より十二時迄なり其演説順席左の如し尚委しくは報知次第

大親睦会演説順序

七月十五日

- 第一 一致ノ基礎 奥野 昌綱 東京
- 第二 一致ノ性質 飛鳥賢次郎 長崎
- 第三 基督教ト之ニ敵スル者ノ教 押川 方義 新潟
- 第四 聖教ヲ保全スルノ方法 マクレール 米人

〔後略〕

(三卷二九号 明治十一年七月十九日)

○日本基督教信徒大親睦会の記事

明治十一年七月十五日東京築地新栄橋の会堂に於て午前第七時三十分親睦大会を開かれたり。初めに東京親睦会

委員 服部章蔵氏迎接演説をなし。次に奥野昌綱氏より当会の議長書記を置かんことを議し各地方名代人の評決により投票多数を以て議長一人書記二人を選ぶことに決す

各地方名代人の名左のごとし

- 西京。第一教会仮牧師市原盛宏。第二教会員上野栄三郎○大坂。浪花教会牧師澤山保羅。同会執事丁野大八。
- 大坂教会仮牧師上代知新○神戸教会会長鈴木清○兵庫教会牧師村上俊吉○長崎メソジスト教会員飛鳥賢次郎。一致教会瀬川浅○信州上田教会々長真木重遠。同教会員糸我莊○新潟教会員押川方義○箱館メソジスト教会員菊地卓平○上州安中教会仮牧師海老名喜三郎。
- 同執事湯浅次郎。同知木良昌庵○静岡メソジスト教会員山中笑。同新庄仁右衛門○横浜海岸会堂仮会長稻垣信。同会長老熊野雄七。住吉町会堂長老南小柿洲吾。
- 同会員松山高吉。メソジスト教会員栗村左衛門○東京麹町教会牧師奥野昌綱。メソジスト教会員津田仙。新栄町橋教会員服部章蔵。銀坐長老教会長老原胤昭
- 右地方合せて十二人員合せて廿七人投票の多数により左の人名を選決せり。議長津田仙。書記原胤昭。村上俊吉。坐定まりて議長開会の祈禱をなし次に少しく議事を試みしかども為に刻限の短縮するをもつて之を午後に約

し左の祈禱演説をはじめたり。祈禱箱館の菊地卓平氏。

讚美歌。西京教会の景況上野栄三郎氏。上田教会の景況

真木重遠氏。神戸兵庫三田にある教会の景況鈴木清氏。

讚美歌(以下略す)演説は一致の基礎東京奥野昌綱氏。聖

教を保全する方法横浜在留米人マクレイ氏。祈禱東京

浅草牛込二教会牧師小川義綏氏。祝禱大坂澤山保羅氏以

上正午に終る。

同日午後第三時銀坐原女学校に集まり議會を開くに當つ

て新瀉の押川方義氏先祈禱をなし夫より親睦会の方法に

つひて議し。

(中略)

同日(十六日)午後三時再び銀坐原宅に会し初めに祈禱

(姓名を記し落せり)して夫より親睦大会の事に付て議し

(議事の形状は略す)終に明治十二年七月下旬大坂にお

ひて第二の大親睦会を開くことに衆議一決せり長崎の飛

鳥賢次郎氏祈禱して会を閉じ同夕六時東京の信者より各

地方の名代人を饗応せんため築地精養軒に夕餐を催ふさ

れたり食後互ひに入交り親話し終に菊地卓平氏は箱館の

景況を述べ海老名喜三郎氏は安中の景況稻垣信栗村左衛

八の両氏は横浜の景況押川方義氏は新瀉の景況を述べら

れ大坂の上代氏祈禱して此夜散会す。

(三卷三十一号 明治十一年八月二日)

○新瀉教会近報

新瀉教会は去る明治八年第五月英国伝教師ドクトルパー

ム氏の始て伝道せる地にて翌年の第二月始て教会を設立

し当時の伝道地方は水原(五里を隔つ)新発田(七里)三日

市(八里)中条(十一里)平林(十四里)村上(十七里)岩船

(十五里)沼垂(半道)龜田(三里)の九ヶ所にして孰れも每

月三回づゝの伝教なり而してパーム氏は平林、岩船、村

上等を除き其他へ月に一度づゝの伝教され余は残らず押

川氏の受持なるよし該地の小林さんより

(四卷七号 明治十二年二月十四日)

○新瀉教会より各地へ伝道の記

小林氏報

本年五月十五日当港より押川吉田二氏米沢地方へ聖書を

携さえて伝道に至りしが米沢にては慮外に聖書を買人も

なく講義の為に場所を借んとするも誰も之を忌みて貸ぬ

ゆる遂に講義を為ざりき、当港より十八里ある関と申す

所にては講義をなし夫より玉川、御国町、手の子、小松

(此四ヶ所は羽前国山形県の管下にて米沢街道なり)山

形、塩川、会津、津川、赤湯等にて書物を売捌き並びに

講義を為り聴衆何れも多く甚だ愉快なりし由聖書類売捌きし全数は三百冊余なり彼の地の人民は当地と異ひ甚だ能く聞き能く求め人の性質も亦質樸の風あり然れども専らグレイキ教盛んにて所々に会堂ありと。山形にては押川氏の伝教により或る二人今は深く新教を信ずる様になりし由而して押川吉田両氏は六月三日帰港せり

前の景況美しにより七月上旬吉田氏一人にて再び山形地方より仙台地方に向ひ聖書を売捌の為参られたり尤とも吉田氏は陸前国石巻港にまいるより其より仙台、古川、高清水、金成(以上五ヶ所は陸前国)および一の関(陸中)岩沼、白石(陸前)福島(岩代)山形、天童、酒田、鶴岡、米沢(以上羽前)凡そ十四ヶ所を経過し聖書を戸毎に促がし遂に八月上旬まで聖書雑書合せて八百冊余を播布せり而して何れも美き景況殊に新教師の来りて伝教せん事を望む者其内に在し由右各所の中尤とも聖書を求め以来伝教に働くべき所は山形、石巻、柳川等なるよし嗚呼実に感謝に堪ざるなり。又過る九月十八日押川氏山形に向ひ発途す之は山形より来ることを望みしに由るゆゑなり過日押川氏の報道によれば山形より十里程前の官駅と申す所にて大に聴衆あり聖書も百四十冊程売捌たりと其後は何の報道もなし然れども彼の地方は何れも此越後人の如

く頑ならざるよし之を以て見れば後來結果は彼にあらん
(以下次号)

(四卷四四号 明治十二年十月三十一日)

○新潟教会より各地へ伝道の記 前号の続

小生ことは前山氏と共に過る七月中佐渡へ参りて伝教す其経る所は佐渡の赤泊、小木、新町、川原田、沢根、二見、相川、新穂、夷港なり皆各所にて講義を為せり唯為ざりし所は小木のみなり毎戸に聖書を求むる事を促したれども更に求むるものなく各所にて六七冊を売捌せしのみ小生甚だ不愉快なり然し聴衆は何れも多し是には兼て一昨歳当地教会より押川、陶山、パーム氏出張せり人民は頑にして仏教に凝固せり又二見港申す所に我教会の教友渡邊氏なるものあり之は佐渡プロテスタント教の菓なり而して彼は医師にて大いに尽力せり当港より早く誰人が参んとするも未参るものなし後來は必らず行くべし然し成べくは横浜東京にある伝教師居を佐渡に遷されん事を深く望む如何となせば彼夷港は居留地なればなり。当港より十二里隔たりたる中条駅には昨年の暮一の講義所を設けて出張毎に講義し一人の教友ありて甚だ熱心なり。然るに先頃虎列拉流行中頑民の暴動によりて右の講

義所を破壊し屋根を始として建具畳等まで用ひられぬ迄に打破たり依て一教友の尽力により此頃修復して廻る八日パーム氏出張して講義せしに聴衆過多なりし由云々

(四卷四五号 明治十二年十一月七日)

○越後水原に会堂設立せし事

新潟より七里を距る水原と申すは狭き町なれども当国にては随分富豪家もあり又多少方今の時勢を曉れる人も住ところなり此地の伝道は英国宣教師パーム氏一名の信者と共に四五年前播種せしを始めとし其後一軒の家を借受講義場を開き毎月三回づゝ信徒かはるゝ出張講義し居たりしに其家に就て少しく故障おこり殆ど止んとするの場合に至りしに其地にありて兼て耶蘇教の真理を信ずる医者佐藤安氏の憤発により同氏の自費を以て講義場を保存し講義を続ける事を得しが昨年の九月に至再び該場に付て不都合を生じ此度は全く買取ざればならぬ様になりしに同氏は又もや憤発し元來蓄財家と云ほどには有ざるも只信仰によれる神の恩賜により懷囊を虚にして之を買取更に修復を加へ之を聖別して天父に奉獻^{ささ}げ耶蘇の会堂となさん事を新潟教会に告げ昨十月廿五日当港の信徒を抱きて会堂開きの礼を執行せり。世には既に信徒たるの

名をもち才能資財にも乏しからざる人にして目今教会の難艱を顧慮ざる者あり斯る人は以て自らの勸戒となすべしと右は該地吉田龜太郎氏より報知の摘抜

(五卷七号 明治十三年二月十三日)

○予州松山伝道の近況(坂地の或教友へ該地より送られし書翰の抜)

昨十二月廿二日予州今治より伊勢氏と一名の教友と松山に來り廿二日に橋本某の周旋にて智環学校を借り受け翌廿四日午後六時より該校内に於て演舌を始められしかば聴衆は五六百人位もありて中には余程感ぜし者もあり廿五日朝橋本氏の宅にて真道の話をしたされ午後よりは伊勢氏と外二名と三ヶ浜へ行れ同所にて演説会を開れし時は聴者二十名其より又松山へ帰り其夜も六時より智環学校にて伊勢氏と同所の中邊氏と演説ありしが此夜は大雨にて聴衆は前日より少く三十名位なり

(五卷八号 明治十三年二月二十日)

○予州今治教会近況

当時越後の新潟にて伝道を事とさるゝ押川氏の母君は前月松山にて伊勢氏より受洗し今度今治教会に入会せり

(五卷一六号 明治十三年四月十六日)

○新潟教会近報

越後新潟教会にて本年今までに受洗せし人の数は男女ともに十一人有り又三週間ほど前に岩船郡村上より男四人参りて「パプテスマ」を受入会せり。又中条会堂に於て本月より同地の信者と新発田村上の信徒と共に相会して聖晚餐を行ふことに成たり之は実に喜ばしき事にて神に感謝するところなり此信者は中条に六人新発田に一人村上に四人合せて十一人なりと該地より報知

(五卷二七号 明治十三年七月二日)

○押川氏新潟より仙台に赴く

新潟の小林瀧太郎氏の書翰中に「当会押川方義氏事は兼て去る明治八年十二月伝道の為に来り英国宣教師ドクトル・パーム氏と共に道の為力を尽し内は信徒を奨励し外は伝教を専らにし実に我曹信徒の為に益する所少からざりき然るに去歲山形仙台地方に出張する事二回なりしが以来該地に於て新教を求むる者あり加之未だ新教少なきを以て常に出張を志せしが此度上帝の御恩恵に由て仙台上に兩三年間寄寓し益々福音の真道を播布する事に決定

せり依て本月六日押川氏の挙族と石巻港住吉田龜太郎氏と共に当港を出立せり誠に我曹信徒は別離を惜し^{おしみ}も是は人情にして神の為に却て感謝欣喜す可き事なり尚これより近在伝道はパーム氏ならびに二三の教友にて働く事に決せり」と見へたり

(五卷三九号 明治十三年九月二十四日)

○越後国村上伝道の近報

新潟県下越後国岩船郡村上は本県を去る事十八里有余にして此地へ伝道の始は明治十一年の五月新潟より押川氏出張ありて坂田氏方へ毎月二夜づゝ講演を開かれしに始の程は珍しき故か二百余名の聴衆ありしが追々減じて四十名となりたり然し夫よりは下ず中には殊外感伏して聴者四五名は有しが肉慾魔鬼に誘なわれて信仰する者も無ししに氏は少しも倦こと無く二年間汲々として真理を講窮されし事の聖意にや叶けん追々道を求むる者ありて中にも二名の医師申し合せ本年五月新潟より宣教師ドクトル・パーム氏を招き診断を乞ひ且板垣氏方にて三日間毎夜説教せられたり爾后六月に至り主の召に応じ男四名新潟に於て洗礼を受けたり云々又爰に美談とするは某の商家は家内六人なるが此頃より聖教を求め先非を悔ひ未

だ洗礼を受ざるまへより安息日を守り店を閉ぢ大なる休業札を掲げ商品は定価を以て壺銭の懸引もせず誠実なる商法を営まれ一家団結して親睦の食は実にも外見にも美しく見へける又伝道師押川氏今般仙台に赴むかるゝに付八月廿一日より出張され離別の講義なども有り同三十日パーム氏夫婦外三四名の信者も出張ありて三十一日に村上より男二人女三人中条より女一人合て六名の受洗あり九月一日には村上より男二人女二人の受洗あり前後拾名の信者起りしは主の御恵により押川氏の勤勞に果を結びしならんと爾後は中条会堂に住るゝ井上敏美氏が毎月五六日間參られる筈なりと該地より報道の略

(五卷四一號 明治十三年十月八日)

○押川方義氏は新潟より仙台に赴むかれし後は同所本〔木〕町通七丁目にて講義場を開かれしが該地にはポットと云る教師の働きて已に四名の信者ある由

(五卷四三號 明治十三年十月二十二日)

七 エディンバラ医療伝道会関係記事

(明治七年〜十五年)

一八七四年

文学修士・医学修士であるセオバルト・A・パーム夫妻が、エディンバラ医療伝道会の最初の日本派遣使節として来日したのは五月であつた。パーム博士は一時東京に滞在し、おもに語学の研究に従事した。

一八七五年

パーム博士は東京から新潟に移つた。その場所を自分の福音伝道の中心にしようと思つていたのである。パーム博士の自宅で約三カ月間毎日説教会が雨森信成氏(福井のワイコフ氏の初期の生徒)によつてひらかれていた。これには反対も起つたが、それ以上に関心をもひきおこした。一八七五年の終り近く、横浜の日本人キリスト者の教会に宛ててなされた要望にこたえて、押川方義氏が新潟に派遣され、その土地で祝福のうちに開始されていた伝道の働きをおしすすめた。押川氏はS・R・ブラウン博士とジェームズ・バラ師のもとで牧師となる

ために学んでいた人であつて、横浜の教会の長老に任じられていた」。

一八七六年

「一月に一人が洗礼を受けた。この時からキリスト者の数が序々に増えてきた」。

一八七八年

統計表によれば、このミッションには組織された教会が一個あり、二八名の教会員がいた。

一八八〇年

この年の九月まで押川方義氏は、パーム博士と協力して伝道者として働いていた。説教所は同時に施療所としても用いられてきた。「右記九月に、押川方義氏は仙台に移り、その地域で別個の伝道を開始した。同氏は以前の伝道旅行の間に、この国のあの地方で特別な関心と励ましを受け、越後(新潟県)の人々の無気力さと著しく違うものがあるを見て、その所で伝道する使命感をもつに至つたものである。そのようにして仙台で伝道するため、祈つて決心をし、吉田亀太郎氏を協力者・聖書販売

人として連れて行つた」。新潟とその近隣の伝道は活発に続けられたが、医療事業は、都市の大半を焼きつくした火災によつて、七月、中断された。

一八八一年

この年の春、入院と施療の目的の新しい建物が建てられた。一八八〇年七月の大火で中断していた医療事業が、新しい建物で再開された。新潟とその近辺での宣教は、ほとんど何の障碍もなく、立派に続けられた。

一八八二年

「現在、ミッションに関係のある教会員の総数は六〇名(内五名は他教会から転入)で、その内三一名は新潟に居住し、二九名はその周辺の村落に住んでいる。受洗者総数は最初から数えると八八名になり、内七名は死去し、一四名は他教会に転出し、一二名は除名された。まがりなりにも規則正しく説教が行われている宣教地は一三カ所で、最も遠い所は一七『里』離れている。これらの多くは期待しにくいために放棄され、現在ではこの地方では三カ所だけが、規則的に礼拝を守っている。宣教地の多くは当初、医療事業をとおして開かれたものであつた。

多くの場所ではキリスト教に対する偏見が強く、説教のために部屋を貸そうとする者はどこにも見出せなかつたほどである。

新潟は人口が四六、〇〇〇人である。この地の最も華やかな施設は、評判の悪い家である。日本人の間でさえも、その不道徳さで知られている。その他については、宣教師の宣教地としてとりたてて言うことはない。キリスト教が数年にわたって充分に伝えられたにもかかわらず、住民はむしろ無関心であつて、そのためにその宣教地を放棄することとなつた。ここは、しかしながら、日本の西海岸の唯一の開港場なのである。

自給教会はまだない。新潟にいるキリスト者が過去一年間に集めた献金は一〇二円九四銭である。

押川方義氏に加えて、二人の日本人助手が雇われている。

押川方義氏（二八八〇年の項を参照）はしばらく病気で静養していたが、二カ年の間に、会員数七三名の教会が仙台に形成され、ほぼ自給教会となつてゐる。過去一二カ月の間に教会員が献金した額は一二七円五三銭であつた。

ミッションは、病院の助手に対して医学上の問題につ

いて個人的に教授したばかりは、教育事業というものは行つてはこなかつた。

医療事業は小規模に開始された。日本人開業医との協力は、実行できなかつた。やがて都市の中央で治療所が開かれるようになったとき、患者が増加した。それで入院患者を受け入れるために病室を建てた。毎月定期的に田舎の方に往診もし、そこで日本人開業医と協力して患者をみた。一八八二年に治療所に登録された患者数は、二、九五〇名で、入院患者は一五一名、田舎で診察した数は一六二名であつた。医療事業は自給して余りあるものであつたので、伝道費の相当額をまかなうことができた。（宣教上の）成功について評価することは困難である。病院をつうじて幾人かの人々が教会に来るようになったけれども、もっと多くの人々がキリスト教の真理を幾分でも受け入れ、誤解や偏見が取り除かれ、やわらげられるようになることが望まれる。

文書事業としては、教会員の義務に関して押川方義氏が英語から翻訳した小著と、それに、ルカによる福音書一五章の小冊子の出版以外は、何もしていない」。

（フルベッキ著『日本プロテスタント伝道史』）

第五章 ドイツ改革派教会の

日本伝道

一一 A・D・グリーング書簡(ジョンストン宛)
(一八七九年八月十一日)

[英文]

八 外国伝道活動への呼びかけ

[英文]

(一八七四年十二月二十三日)

一二 A・D・グリーングの年次報告書

[英文]

(一八八二年六月一日)

九 日本伝道献身への訴え

[英文]

一三 A・D・グリーング書簡(ジョンストン宛)

[英文]

(一八八二年六月十九日)

九―1 伝道開始への呼びかけ

[英文]

(一八七五年十二月一日)

一四 J・P・モール「余はいかにして宣教師と

なりしや」

[英文]

(一九二五年)

九―2 献身への呼びかけ

[英文]

(一八七七年十一月二十八日)

一〇 A・D・グリーング夫妻壮行の辞

[英文]

(一八七九年三月十三日)

一五 「我々は日本に教育機関を持つべきか」

[英文]

(一八八三年六月二十日)

一六 J・P・モール書簡(ジョンストン宛)
〔英文〕 (一八八四年五月十九日)

一九 W・E・ホーイ書簡(ジョンストン宛)
〔英文〕 (一八八五年十二月四日)

第六章 ホーイの献身と来日

一七 W・E・ホーイ「全米神学校外国伝道協議
会報告」

〔英文〕 (一八八二年十月二十六日～二十九日)

一八 W・E・ホーイの宣教師任職式
〔英文〕 (一八八五年十月十五日)

二〇 W・E・ホーイ書簡(ジョンストン宛)
〔英文〕 (一八八五年十二月十八日)

第一編 心の夜あけ—黎明時代

第二編

東北を日本のスコットランドに

＝草創時代＝

1886(明治19)年～1900(明治33)年

第一章 仙台神学校の創設

二五 W・E・ホーイ書簡 (ジョンストン宛)

(英文) (一八八六年四月三十日)

二二 W・E・ホーイ書簡 (ジョンストン宛)

(英文) (一八八六年二月十六日)

二六 仙台神学校の創立と生徒

二六一 七人の生徒名

二三 W・E・ホーイ書簡 (ジョンストン宛)

(英文) (一八八六年三月二十六日)

(明治十九年春)

二三 W・E・ホーイ書簡 (フィッシャー宛)

(英文) (一八八六年四月八日)

明治十九年春北六番丁木町通角に借宅学生を寄宿せしめ授業開始、之東北学院の創始なり学生早坂千三郎、橋本宗之進、阿部保次郎、西堀幸八、島貫兵太夫、松田順平、田村兼哉

(「東北中会史」未刊)

二四 在日宣教師団会議録

(英文) (一八八六年四月十二日)

二六一 2 六人の生徒名

(明治十九年春)

明治十九年春神学候補生を集め木町通北六番丁角より二軒目に一民家を借りて此処に宿泊せしめ田辺某女に賄は

せてホーイ氏、押川氏及菅田勇太郎氏が交互に其処に授業に出掛けるのであつた。塾生は島貫兵太夫、早坂千之助、早坂寅哉、橋本宗之進、松田順平、田村兼哉の六名だつた。是が頓て仙台神学校となり東北学院となつたのである。之と殆んど同時に東二番丁田辺繁久氏邸を借りて一小女塾を開いた。是が即ち宮城女学校の濫觴である。

〔『東北学院時報』八九号 昭和五年七月八日〕

二七 W・E・ホーイ書簡(ジョンストン宛)

〔英文〕 (一八八六年六月四日)

二八 W・E・ホーイの詩「十二枚の銀貨」

〔英文〕 (一八九四年二月)

二九 A・K・ファウストの香味チカに対する追悼文

悼文

(大正三年六月二十五日)

故香味ちか子女史

ファウスト博士

久しく病床に呻吟せられたる、香味ちか姉は、去る五月三十日の夜、遂に主の召を蒙りて永眠に就かれた、享年七十有七、姉は永らく宿痾に侵されたりしが、昨年十月より全く病床の人となり、其病床に在る殆ど八ヶ月に亘る長期間、能く病苦に堪へ、些の不満を洩らすことなく、終りまで極めて平和なる日を送られた、茲に同女史が生涯の一斑を記さんに、姉は、天保八年仙台に生れ、二十六歳にして香味氏に嫁し、幾もなくして良人を失はれ、明治十一年基督教を信じ、押川方義師より授洗す、当時基督教に対する反対尚甚しく、同姉も為めに頗る烈しき迫害を受けられた、其家庭に於て祈禱の自由を得ざりしを以て、屢々広瀬河畔に到りて独り余念なく神に祈られたといふことである。

姉は篤信の婦人にして、常に主の事業に対し深き興味

を懐き居られたれば、其信仰生涯は、実に、尋常一様のものではなかつた、仙台に神学校（今日の東北学院の前身）の創立せらるゝや、姉は之に多大の同情を寄せ、兼て非常の用意にとて貯蓄し置きたる金子二両を其創立費に寄贈せられた、これ所謂「寡婦のレプタ」にして、然かも頗る有力なる「レプタ」といふべく、此篤志婦人の善行の一として仙台並に米国の友人は永へに忘るゝことが出来ないのである、姉は始め僅に二名の生徒を以て起りたるかの神学校が、年を追うて漸次発展、拡張して、今日殆んど五百の生徒を有する、有数の学校となつたのを観て、必ずや心窃かに満腔の悦を懐いて居られたことと思ふ。

姉の葬儀は、六月二日、東二番丁仙台日本基督教会堂に於て執行せられ、萩原牧師の説教に次ぎ、出村博士は東北学院を代表し、モール博士は「レフォームドミツシヨン」を代表して、各弔辞を述べらる、会葬者は堂に溢るゝばかりにて、中にも多数の東北学院及宮城女学校生徒の参列せるを見た、特に、学院理事員諸氏は、堂内に於て、靈柩昇移の労を執られた。

香味ちか子姉を記念するには、敢て石碑を要しないのである、姉が神に対する信仰奉仕の生涯は、木石の記念

碑に優りて、同姉の好記念碑となるものである。

〔『東北教会時報』一五七号 大正三年六月二十五日〕

三〇 W・E・ホーイ書簡（ジョンストン宛）

〔英文〕

（一八八六年七月三十日）

三一 W・E・ホーイ書簡（改革派教会の教友宛）

〔英文〕

（一八八七年七月一日）

三二 D・B・シュネーダー夫妻壮行の辞

〔英文〕

（一八八七年十月二十五日）

三三 在日宣教師団会議録

〔英文〕

（一八八八年一月五日）

三四 仙台神学校会計収支書

〔英文〕

(一八八六年〜一八九一年)

三五 W・E・ホーイ書簡(改革派教会の教友宛)

〔英文〕

(一八八八年十月十四日)

三六 仙台神学校憲法の制定

(明治二十一年十二月十日)

(一) 日本基督一致宮城中会ノ議長ハ一千八百八十八年
即チ明治廿一年十二月十日ニ於テ秋期中会ヲ仙台
区仙台教会堂ニ開カン為メ諸教会ノ代員内外ノ諸
教師等ヲ集ム

〔中略〕

(廿三) 書記、神学校憲法ヲ朗読ス

ホーイ氏曰ク第十三条ヲ附加シテ憲法ヲ受ケン

中会之ヲ可トス

(廿四) シュネドル氏動議シ神学校憲法ニ基キ今此中会ヨ

リ四名ノ商議員ヲ選舉セン但シ其中二名ハ任期ヲ
明治二十三年春期中会マデトシ他ハ廿五年ノ春期
中会マデトスベシ 中会之ヲ可トス

(廿五) 北山動議 三浦徹君來場セリ請フ氏ヲシテ議事ニ
参与セシメン 中会之ヲ可トス

(廿六) 神学校商議員投票

押川氏 任期二年

市原氏

植村氏

三浦徹氏 任期四年

(廿七) 北山動議 議長ニ請フテ市原氏が右ノ撰挙ヲ承諾

スルヤヲ照会セシメン 中会之ヲ可トス

〔中略〕

(廿八) 西森氏動議 押川氏近日洋行セラレントス故ニ此

中会ニ於テ氏ノ送別祈禱会ヲ開カン

押川氏曰ク各教会伝道地ノ為メニ祈禱会ヲナシ

傍ラ余ノ事ヲ加ヘラレバ充分ナリ

中会之ニ從フ

(廿九) 北山動議 合衆国リフオームド教会外国伝道会社

社長ドクトル、ワイザル氏ヨリホーイ氏ノ許ニ電

報ヲ以テ押川氏ノ来米ヲ悦ビ受クル旨ヲ申越サレ
タリ請フ当中会ヨリ返書ヲ送リテ其好意ヲ謝セン
片山氏曰乞フ此事ヲ書記ニ委托セン

中会之ヲ可トス

(世二)押川氏曰市原氏神学校商議員当撰ノ事ヲ悦ビ受ケ
呉レラレタリ然レドモ種々ノ関係アルヲ以テ熟考
ノ上確答スベシト中会請フ此意ヲ諒セヨ

北山勳議 右ノ報道ヲ受ケタシ 中会之ヲ可ト
ス

(世三)北山勳議 神学校ノタメ中会ノ議員ハ其資本ノ募
集ニ尽力スベキ旨ヲ決議セシ且参考ノタメ外国ミ
シヨンガ将来出ス処ノ金額ヲ聞キ置キタシ

中会之ヲ可トス

ホーイ氏曰クミシヨンガ将来神学校ノ為メニ出金
スベキ金額ハ毎月凡弍百円ナリ然レドモコハ只余
ノ見込ナレバ確答致シ難シ

〔中略〕

日本基督一致教会仙台神学校憲法

第一条 名称

本校は日本基督一致教会仙台神学校ト称ス

第二条 目的

本校ハ完備セル神学ヲ教授シ福音ノ役者タルニ適當ナル
者ヲ養成スルヲ以テ目的トス

第三条 資金

本校ハ本校ノ利益アルヲ見認ムルトコロノ日本人及合衆
国リフオームド教会ノ「ミシヨン」ヨリ供給スル資本
金ヲ以テ之ヲ維持ス

第四条 管理

本校ハ日本人ヲ以テ組織シタル商議員並ニ合衆国リフオ
ームド教会「ミシヨン」ノ四人ノ會員ヨリ成立ツトコ
ロノ理事員会ノ総理スルモノトス

第五条 理事員会

第一款 理事員会ハ教授ヲ進退シ学課ヲ撰定シ職員ヲ举
ゲ日本諸教師及役員ノ給料ヲ定メ会計ヲ主リ生徒ノ
補助金ヲ定メ又年報ヲ製定シテ之ヲ中会及ビ「ミシヨ
ン」ニ出スヘシ

第二款 理事員会々々員中退会若クハ死去ノ為メ欠員ヲ生

スル時ハ理事員会ハ次ギノ春期中会ノ例会マデ其欠員
ヲ補フ可シ

第三款 理事員会ハ宮城定期中会ノ時其例会ヲ開クベシ

會員三分ノ二ノ出席ヲ以テ満数トス

第六條 商議員

商議員ハ宮城中会ノ撰挙シタル四人ノ日本基督信者ヨリ成立ツ

第一款 商議員ハ長ク本校ノ教務ヲ担当シ之ガ進歩ヲ来シタル者若クハ特ニ適任ト見認メラル者ヨリ撰挙ス可シ

第二款 商議員ハ日本ノ法律ニ從ヒ一ノ会社ヲ組織ス可シ

第三款 商議員ハ日本基督一致教会ノ名義ヲ以テ学校ニ附属スルトコロノ土地及建物ヲ所有ス可シ

第四款 商議員ノ任期ヲ四年トシ二年毎ニ春期中会ニ於テ其半数ヲ改撰ス可シ但シ退会若クハ死去ノ為メ欠員ヲ生スル時ハ理事員会ハ次ノ春期中会ノ例会ニ至ルマデ其欠員ヲ補フ可シ

第七條 教員会

教員会ハ教授及教員ヨリ成立ツ

第一款 (1)教員会ハ理事員ノ意見ニ從ヒ学校ヲ管轄スルノ權ヲ有ス(2)教員会ハ生徒ノ入学退学及戒規ヲ司リ學課ヲ定メ校則ヲ作ルノ權ヲ有ス

第二款 教員会ハ学期中毎半月一回ノ例会ヲ開キ又必要ナル時ニハ臨時会ヲ開ク可シ

第八條 役員

本校ノ役員ヲ校長副校長書記及會計トス

第一款 校長ハ教員会ノ意見ニ從ヒ学校ノ規則ヲ執行シ教員會議及ビ凡テ其他校務上ノ集会ニ於テ議長トナリ又日本基督一致教会ニ對シテ学校ノ利益ヲ示ス可シ

第二款 書記ハ凡テ教員会ノ議事ヲ精細ニ記録シ各学期ノ終ニ於テ生徒ノ評点ヲ作ル可シ

第三款 會計ハ理事員会ノ意見ニ從ヒ生徒ノ需要学校一般ノ費用ニ関スル金員ヲ受ケ又之ヲ支出スルモノナリ

第九條

本校ハ之ヲ分テ三学部トス英語神学部、邦語神学部、及ビ英語予備科之ナリ

第十條 英語神学部

英語神学部ハ英語ヲ以テ神学ヲ教授ス学期ヲ三年トス

第十一條 邦語神学部

邦語神学部ハ邦語ヲ以テ生徒ヲ教育シ伝道ノ事業ヲ執ルニ適當ナラシム学期ヲ二年トス

第十二條 英語予備科

英語予備科ハ英語神学部ニ入ルノ生徒ヲ予備スル処ナリ学期ヲ四年トス

第十三條 憲法ノ改正

此憲法ハ理事員会ノ請求ニ応ジ中会三分ノ二ノ同意ニヨ
リテ改正スル事ヲ得可シ

(宮城中会記録)

三七 仙台神学校の職員選任

(明治二十二年二月十五日)

千八百八十九年二月十五日仙台市東三番丁七十五番地
仙台神学校理事員ハ上記ノ所ニ於テ上記ノ年月日ニ集
会ス

押川方義教師ノ祈禱ヲ以テ開会、出席者四名、即押川教
師、市原教師、ホーイ教師、シユネーダー教師、シユネ
ーダーヲ仮議長、ホーイ教師ヲ仮書記ニ撰ヒテ開会ス
動議ニヨリ理事員ノ職員ヲ投票ヲ以テ撰挙シ 其任期ハ
千八百九十年春期宮城中会マテトシ 其以後ハ毎年春期
宮城中会ニ於テ撰挙スル事ニ決ス
撰挙ノ結果左ノ如シ

議長ダブルユー、イー、ホーイ教師、書記デー、ビー、
シユネーダー教師、会計ホーイ教師

動議ニヨリ仙台神学校憲法第五条ノ条文「局員三分二ノ

出席ヲ以テ満数ト為ス」トアルヲ「局員半数ノ出席ヲ以
テ満数ト為ス」ト改正セン事ヲ宮城中会ニ請求スル事ニ
決ス

仙台神学校理事員ニ関スル憲法ノ条ヲ朗読シ其職務ノ
条条ヲ執行セリ

動議ニヨリ東北トウホクニ在ル植村正久教師ヲ仙台神学校教授ニ
撰任セリ、仙台神学校職員ヲ撰挙スルコト左ノ如シ

校長押川方義教師、副校長ホーイ教師、書記シユネーダ
ー教師、会計ホーイ教師

供費生徒月手当最高額ヲ金五円ト定ム、又宮城中会ニ属
スル各教会ニ向テ神学校ニ寄附ヲ為サン事ヲ請求スル事
ニ決ス

動議ニヨリ神学校生徒ノ入校退校ニ関スル事ハ本校ノ普
通教員ト區別シテ、本校教授ニ於テ之レヲ為スノ権ヲ有
シ、現時ニ於テハ其教授ノ職ニアル者ヲ押川教師、ホー
イ教師、シユネーダー教師ト為ス

閉会

(理事会記録)

三八 仙台神学校設立認可申請の協議

(理事会記録)

閉会

三八―1 認可申請の発議

(明治二十二年三月十五日)

千八百八十九年三月十五日、仙台市東三番丁七十五番地

議長ホーイ教師理事局員ヲ招集シ、シユネーダー教師ノ祈禱ヲ以テ開会

出席 三浦徹教師、市原教師、ホーイ教師、シユネーダ

―教師

市原教師ハ神学校設立ノ許可ヲ政府ニ出願スル事可ナル可キヲ以テ、之レカ委員ヲ設クルベシトノ発議ヲ為セリ
動議ニヨリ三浦教師、シユネーダー教師ヲ日本人ノ教員ヲ神学校ニ招聘スル委員ニ挙ク

會計ヨリ講堂、教場及書籍館ノ為メ已ニ金二百円以上寄附金ノ約束調ヒ、前途金モ多シトノ報告アリタリ

市原教師ヨリ遠カラス外海旅行ノ目的アルヲ以テ、七月十五日限り理事局員ヲ辞職シ度キ旨ノ辞表ヲ提出セリ動議ニヨリ此辞職ヲ認諾セリ

三八―2 認可申請の委員選任

(明治二十二年七月八日)

千八百八十九年七月八日、仙台市東三番丁七十五番地議長ホーイ教師ノ招集ニヨリ、植村教師ノ祈禱ヲ以テ理事局員会開会

出席 植村正久教師、市原教師、ホーイ教師、シユネー

ダー教師

動議ニヨリ市原教師理事局員ヲ辞シタルニヨリ、其後任トシテ首藤陸三氏ヲ撰挙セリ、又下ノ如キ決議ヲ為セリ
理事局ハ市原教師カ理事局員トシテ在職中ノ労ヲ謝シ、併セテ氏カ外国在留中神恩ノ常ニ氏ノ上ニアリ盛栄ナラシム事ヲ希望スル事ヲ氏ニ通スル事ニ決議ス

シユネーダー教師ヨリ神学校教員招聘委員トシテ、此度明治学院ヲ卒業スル富岡氏ヲ聘スルヲ得ル旨ノ報告アリタリ、而シテ富岡氏ヲ正式ニヨリ九月一日ヨリ神学校教員ニ任撰シ其給料ハ追テ定ムル事ニ決ス

動議ニヨリ首藤氏、植村教師ヲ神学校設立ノ許可ヲ政府

ニ出願スル委員ニ撰任ス

書記ハ此年度ニ於ケル神学校職員カ執行シタル事務ノ重ナルモノ大體報告ヲ為セリ

常任教授ノ他ニ神学校ノ教員ノ列ニアル者左ノ如シ

阿部虎之助氏、金成兵助氏、藤野氏

祈禱閉会

(理事会記録)

四二 W・E・ホーイ書簡(バーソロミュー宛)

[英文] (一八八九年十二月十八日)

四三 D・B・シュネーター「仙台神学校—その

起源、発展、そして現況」

[英文] (一八九〇年二月・三月)

三九 ドイツ改革派教会全国總會における押川

方義の演説

[英文] (一八八九年八月二十八日)

四四 A・D・グリング「我々は如何にして仙台

と山形を宣教の拠点とするに至ったか」

[英文] (一八九〇年四月)

四〇 A・R・バーソロミュー「押川方義小伝」

[英文] (一八八九年九月十一日)

四一 W・E・ホーイ書簡(改革派教会の教友宛)

[英文] (一八八九年九月二十三日)

第二章 東北学院への成長

四五 学科課程調査委員の選任

(明治二十三年十一月二十六日)

千八百九十年十一月二十六日、仙台市東三番丁七十五番地ニ於テ開会

前会ノ続会議事ノ条件ハ学科ノ変更及将来入学ヲ許ス可キ学生ノ性質ニ付キテ

決議 四名ノ委員ヲ挙ケ下ノ件ヲ調査セシム、学科程度

ヲ高メン為メニ現今ノ課程ヲ如何ニ変更ス可キ乎ヲ調査スル事、将来入学ヲ許ス可キ学生ノ資格及入学許可ノ条件、而シテ此委員ハ次会ニ於テ調査ノ結果ヲ報告スルカ

若シ必要ナル時ハ臨時会ヲ開キテ報告スル事

右ノ委員下ノ如シ 押川、藤生、ホーイ、シユネーダー

諸教師

次会ハ議長ニヨリ招集セラル可キ事ニシテ議長ノ祝禱ヲ

以テ閉会

(理事會記録)

四六 W・E・ホーイ書簡 (キヤレンダー宛)

[英文]

(一八九一年五月二日)

四七 東北学院新憲法起草委員の選任

(明治二十四年六月二十七日)

千八百九十一年六月二十七日、仙台市東三番丁七十五番地ニ於テ臨時会開会

一 新規則草案ニ付キ討議シ修正ヲ加ヘテ之レヲ受ケ入

レタリ

[中略]

一 本校新憲法起草委員トシテ 押川、ホーイ、藤生、

シユネーダーノ四名ヲ挙ク

一 押川、ホーイ、藤生ノ三氏ヲ挙ケテ委員トシテ理科、

漢学ノ教員各一名及幹事、舎監ヲ招聘セシムル事ニ

決ス

閉会

(理事會記録)

四八 島貫兵大夫の神学校改革論

(明治二十四年六月)

改革論

第一章 基督教社会

第一 神学校

我邦基督教神学校教育ノ方針其宜シキヲ得サル也、我儕ハ仏者学校ノ不整頓無考、不順序ヲ笑フ然リ彼モ笑フベキ流弊ヲ存セリ此レモ又笑ハルベキ流弊ヲ有セリ彼等カ教育ノ方針ハ時勢ニ後レタリ、時ノ人後ニ落チタルハ事實ナリ、我党ハ世ニ先チタリトテ誇レリ我未タ其実否ヲ確知スル能ハスト雖ドモ幾分カ我レノ彼ニ先チテ歩ミツゝアルコトハ世人ノ認定スル所ナルベシト雖ドモ、我党未タ高大仰クベキ人傑ノ輩出セザルヲ如何セン、何故ニ輩出セザルカ生徒ハ世ノ余リモノ、世ノ废物、賤力家ノ赤貧児ノミナリシカ故ニヨリテ然ルカ、然ラス、有為ノ生徒モ、万夫不当ノ勇者モ世ノ上位ヲ占ムル俊秀モ自費ヲ脩メタル独立生モ又少ナカラサリキ、豈ニ尽ク世ノ余リモノ、世ノ废物魯鈍ノモノノミニテアラサリシ也、校資不足ナルカ為メカ然ラス、洋人邦人共ニ熱心ナラサ

ルカ為メカ、然ラス彼等ハ共ニ真面目ニ日夜粉骨碎身茲ニ熱勉スル所アリタリキ、豈ニ不熱心ノ三字ヲ以テ冠セシムルコトヲ得ンヤ、否ナ彼等ハ熱心己ヲ食ヘリト云フサルベカラス、然ラハ則チ何ソヤ唯

彼等カ取りタル教育ノ方針ノ不可ナルカ故ナルノミ、何ヲカ不可ト云フカ、彼等カ希望高大ナラザリシ也、彼等カ期スル所ハ間ニ合セ伝導者ヲ造ラントシタルノミ、彼等カ教育ハ其基礎堅固ナラサリシ也、其基礎広カラサリシ也、堅カラサルノ礎、広カラサルノ礎上ニ妄ニ白粉塗ノ城郭ヲ造リテ先ツ一時強敵ヲ禦カントシタルナリ、斯ノ如キ方針ヲ取レル学校ヨリシテ高大仰クベキノ人傑ノ輩出ヲ望ム固ヨリ至難ノ事ナリ、斯ク論ジ来ル時ハ誰カ過キニシ時ノ誤謬ヲ悟ラサルモノアラン、サレドモ顧ミレハ此レ今日モ又其同シ途上ニアリ、此レ余輩カ改革セントスルノ点ナリトス、余輩カ将来ニ望ム所ハ此ノ間ニ合セノ浮石の伝導者ヲ千石ノ親舟ニテ百二百造ランヨリ、唯一個ナリト雖ドモ可ナリ、金剛石の伝導者ヲ造ラレン事ヲ此ナリトス、徳ニ於テモ智ニ於テモ肉ニ於テモ、意ニ於テモ、方ニ於テモ、勇ニ於テモ、精神ニ於テモ、仁ニ於テモ、万夫不当ノ傑物逸才ヨリ此レ余輩ノ願フ所ノモノナリ、百万ノ凡僧俗坊ヲ造成センガ為メニ費

ス資金ヲ以テ此ノ一人ヲ特ニ優待シテ之ヲ養フノ方寸ヲ取ラレン事此レ余輩ノ願フ所ナリ、人固ヨリ完全ナラス、肉ニ於テサムソンノ如キモノ必シモ其意ノ強固ナルナボレオン、ヘステングスナラス、其意ノ強固ナルモノ必シモ其深思カント、ニュートン之如クナルヲ保スベカラス、其深思ナルモノ又其活才、フランクリン、プロピタスノ如キヲ必スベカラス、其活才アルモノワシントン、ペートル帝ノ如ク大経倫アルヲ保スル事難シ、嗚呼三足揃フタル智仁勇ノ三徳ヲ兼備シタル人ヲ得ル事難イカナ、然リ我邦従前ニ於テハ至難ノ事ナリキ、然レドモ今ヤ然ラス、数千ノキリスト教青年ノ徒我邦ニアリ、シカモ彼等ノ多クハブライトボーイナリ、豈ニ三足揃フタル人ヲ得ル能ハストシテ手ヲ袖ニシテ涙ヲ吞ミツ、凡夫凡僧ヲ造ル事ニ金ヲ費スニ及ハンヤ、人或ハ言ハン然リブライトボーイハ国ニ散在セリ、然レドモ彼等ハ大学ニ入ラントスルヲ如何セン、彼等ハ青雲ノ志壮ナルヲ如何セント、余輩トテモ豈ニ之ヲ知ラザランヤ、此レ余輩ノ改革方寸論ヲ主張スル所以ナリ、夫レ屍ノアル所ニハ鷲集ル名譽ノアル所ニハ有為活潑ノ青年ノ集ル所也、待遇ノ厚キ所青年ノ集ル所ナリ、士ハ己ヲ知ルモノノ為メニ死シ、青年豈ニ己ヲ知ルモノノ為メニ死セザランヤ、人或ハ言ハ

ン、斯ノ如キ「モーターヴ」ヲ以テ集リ来リタル青年ハ神学者、伝導者、牧師、役者、ニ適セサル也ト、然レドモ青年ノ特性ヲ考ヘ見ヨ、青年之特性ハカクアリシナリ、ルーテルナリ、クレメントナリ、オレジンナリ、ホリカーフナリ、ペテロナリ、ヨハネナリ、下テハノックスナリ、ホイートフキルトナリ、ウエスレーナリ、皆是レ青年ノ特性ヲ失ハスシテ主ノ召ヲ被リタリ、否ナ此ノ胸中ニ抑ヘ可ラサルモノアルニヨリテ神ハ之ヲ召サレタリ、キリストハ之ヲ呼集メ玉ヘタリ、若シ青年ニシテ胸中已ニ此活火ナキモノハ物ノ役ニハ立サルモノニシテヨシヤ高尚ラシク、成人ラシク見ユルモ実ハ废物ナリ、老朽人ナリ、補助ナリ、死火山ナリ、顧ミテ従来取リタル一般神学校生徒募集ノ有様ヲ言フトキハ先ツ生徒ヲ募ルヤ、教師勸メテ曰ク、主ノ為メニ一生ヲ送ラサルヤト、而シテ其地位ハ如何、遇待ハ如何ト問ヘ返セバ直チニ駁シテ曰ク、名譽ハ賤ムベキモノナリ、金ナトハ無益有害ノモノナリト、従来青年独リテ自ラ悟ル点ヲ唯賤ムベキモノナリ云々ト攻メ青年ヲシテ失望セシメタル事有為ノ青年ヲ逸セシ事果シテ幾何ゾ、金、名譽、固ヨリ道理ニ於テハ賤ムベシ然リト雖ドモ實際世界ハ然ラサルモノアルヲ見ル、ドレホト主ニ身ヲ任セント決心セシモ青年ノ特性

アリ、其特性ヲ考ヘヨ、余ハ青年ノ特性ヲ独リ名譽、地位、金、トハ言ハス、然レドモ從來取リタル生徒集方ハ青年ノ特性ヲ隱シテ寧ロ殺ロシテ否ナ變的老青年即チ唯口ニノミ堂々ト唱ヘテ心之二違ヘ居ル人ヲ善シトシテ之ヲ集メタルモノナルカ故ニ見ルベシ、集リタルハ皆ナ青年ノ特性ヲ失シテ恰モ庭前園丁ノ手ヲ入レタル曲リニ曲リタル松ノ如クニシテ峯上寒風ニ嘯キ、頂上青空ヲ磨スルカ如キ丁々タル大木ニアラサル也、從來ハ斯ノ如ク青年ノ特性ヲ考ヘサレバコソ知ラサレバコソ秀物逸才高足ノ才傑ヲ集ル事難ク已ム事ヲ得ス、鈍物ヲ得テ甘ンゼザルベカラザリシ也、已ニ鈍物ナリ、焉ソ之二高才ノ教育ヲ授クルトモ上智ト下愚トハ移ラサルノ理アルヲ如何セシ、蛙ノ子ハ蛙ニシテ如何ニ之ニ教育ヲ施ストモ如何ニ進化ストモ龍トナリテ九天ニ登ル事ヲ得ンヤ、山芋ガ鱈ト化ケ目高ガ鯨ト変スルハ此レ天下ノ戻理ナリ、況ンヤ從來取リタル神学生教育ノ方針ハ其希望小ニシテ基礎大ナラサルニ於テオヤ、豈ニ智仁勇ノ三徳ヲ兼備シタル三軍ノ勇將ヲ造成スル事ヲ得ンヤ、然レドモ造成スル事ヲ得ストシテ自ラ棄ツベカラス、蓋シ我日本宗教社会ニハ、将来益々万夫不当ノ勇者ヲ要スルヤ火ヲ見ルヨリモ炳然タレバナリ、故ニ我カ日本ノ活世界ニ立チテ活劇ヲ奏セ

ントセバ百万ノ凡僧ヲ造ランヨリハ唯一個ニテモ可ナリ、万夫不当ノ勇者ヲ造ルノ方針ヲ取リ智仁勇ノ三徳ヲ備ヘタル三軍ノ大将ヲ造ラザルベカラサル也、嗚呼今ニシテ尚ホ小刀細工ノ方針ヲ取ラ八十年ノ後今日ノ如キ有様ヲ見ルノミ、否ナ一層ノ不幸不運ヲ見ルヤ明カナリ、夫レ然リ学校ニ於テハ此ノ方針ヲ取リタリキ学生モ又其小刀細工方針ノ中ニ育セラレタルニ応ヘテ「何——己レハ三年勉強シ卒業シテ後一教会ノ牧師ニテ月給二十円取レバ足レリ」ト、口ニハ言ハネド胸中ニ糞ノ如ク充滿シテアル考ハ此ノ蛆蟲、糞アブ、ノミノ鞆玉ニモ劣ル卑屈下賤ノ考ニテアリタリキ、何ヲ以テ之ヲ知ルヤ、余輩今日其活例ヲ見ツゝアルヲ以テナリ、学校ニアルヤ心私ニ大成高達ヲ期シ、小人区々ノ評我カ意ニ介スルニ足ラシヤ、余ハ唯真理ノ忠臣ナルノミ其年限ノ長短固ヨリ意ニ介セス脩学中途倒ルゝモ甘ンスル所也、後世我志ヲ嗣クノ志士アラントノ精神偉志ヲ懷抱シタリシ我カ愛敬スル或先進ノ諸士ノ如キ志ニテアリシナラバ、豈ニ今日碌々人ニヨリテ功ヲナスカ如キ人ハ成リ果テ、改革論ヲ蹙額シテ読ムモノトナランヤ、廿四年後ノ神学生ハ、然スベカラス、教員動クベシト云フトモ動クベカラス、世人動クベシト云フトモ動クベカラス、家事ノ情実動クベ

シト勸誘スルモ動クベカラス、先進動クベシト云フトモ動クベカラス、心二期スル所ハ大成ニアリ、真理ニ忠義ナルニアリ、之ヲ熱研スルニアリ、心意勃々禁スル能ハス、我カ知リシ所、我信セシ所、述ヘサルヲ得ス、即チ始メテ起^{マツ}チベシ動クベシ、已ムヲ得スシテ動クベシ、已ムヲ得スシテ動クハ真正ノ英傑ニアラスヤ、人ニヨリテ動クニアラスシテ自ラ動クナリ、真理ノ為メニ動クナリ、豈ニ高貴ナル運動者ニアラスヤ、然ラサレバ蘧秦、張儀、子貢ノ弁アルモ貴ブニ足ラスマコレ、スコット、韓子、東坡、馬琴、三馬ノ筆アリト雖ドモ未タ其可ナルヲ知ラス、クロンウヰルノ鉄腸、蘧武ノ忍耐、高山ノ血涙モ何ソ貴ブニ足ラサル也、況ンヤ其肉ヲ言フトキハ歛ヲ取ルニ力ナリ、顔色憔悴形容枯槁頤デ蠅ヲ追フヤウニナリ果テタル瘦セ青ニ才ノ如キ白面ノ書生ニ於テオヤ、況ンヤ其弁ハ京董ニ勝ル事ナク己カ思ヲサヘ十分ニ述ブル事能ハサル田舎育チノ箱入娘ノ如ク不熟ナル者ニ於テオヤ、況ンヤ其筆ハ町役場ノ筆生ニ劣リ文ヲ草セント欲スルモ一字モ草スル事能ハサルモノニ於テオヤ、況ンヤ慈眼ナク愛腸ナク忍耐ナク、寛大ノ心ナク。血涙至誠ナキモノニ於テオヤ。焉ソキリストノ高潔ナル意志ヲ嗣キテ其正教ヲ播布スル事ヲ得ンヤ、妄ニ学校ノ規則ヲ重ンジ……

真理ヲ重ンスルヨリハ……教員ノ鼻息ヲ窺^ウヘ信ナキニ信アリト吹聴スルモノ月給取ヲ目的トスルモノ百ノ長タルヲ喜ブモノ、未タ出テ、仕フル能ハサルニ出テ、仕ヘント欲スルモノ、己レ確知セスシテ人ヲ教ヘント欲スルモノ、小成ニ安セントスルモノ、高慢ナルモノ、卑劣ニシテ畜生同様ノ胆玉ヲ持^ツ居ルモノ、区々タル心胆ノミノ舉玉ノ八ツ割ニ劣ルモノ等ハ、我党ニアラサル也、宜シク鼓ヲ鳴ラシテ攻ムベキノミ、我邦神学校ヨリ一日モ早く放逐スベキ斗屑ノ輩ナルノミ、然ドモ廿四年後ノ神学生ハ然スベカラス、ソレ唯期スル所ハ正大ニアレ、高大ニアレ、我前述ノ先進ノ士ノ如クアレ、我邦今日ノ神学校ノ流弊豈ニ此ノミナランヤ、學術ヲ賤ム事此レ其一ナリ、固ヨリ学校ハ口ニハ之ヲ言ハサル也、公ニ之ヲ陳述セザル也、然レドモ心ニハ「何ニ此百忙ノ世、収獲多キ日本ニ學術ナトガ入ルモノカ、先ツ差当リ不完全ナカラモ神学校教ヘテ新約書ヲドーカ、コーカ、解説スルノ力ヲ与フレバ足レリ、而シテ其余ハ信仰アレバ足レリ」ト、故ニ口ニ學術ハ勿論必用ナルモノナリト云フト雖ドモ動モスレバ其馬脚ヲ暴シテ万般ノ事ニ其學術ヲ賤メツゝアル事ヲ示セリ、於是カ此主義流入シテ神学生ヲ濡シ、神学生モ又知ラス識ラス此毒水ヲ吞下シテ恰モ酔ヘルカ如

ク共ニ雷同シテ曰ク、何モ知ラサルモ可ナリ、一通リノ神学上ノ智識及新約書ノ智識アレバ足レリ學術ナドハ入ルモノカト嗚呼誤レルモ又甚シカラスヤ、此主義ヲ以テ教育セラレタルノ神学生ナリ其言フ所ニシテ誤謬ノ少ナキヲ欲スルモ豈ニ得ベケンヤ、昔創設ノ時代人文未タ進マザルノ時代ニ於テバ或ハ左程學術モ入用ニアラサリシナルベシト雖ドモ社会ハ活物ナリ、基督教社会独リ進歩セスシテアリト雖、駿々乎トシテ進ムハ今日ノ社会ナリ、而シテ今日ハ十九世紀ナリ。十九世紀ハ學術復興ノ時代ナリ、其進歩ノ速カナル「ヘラクリタス」ノ所謂「ピカニンング」ノ如クニシテ転進ノ間毛髪ヲ容レザルナリ、看ヨ近時我邦数学思想ノ進歩ヲ、物理学觀察ノ進歩ヲ。如何ニ其二三年前ノ昔日ト赴ヲ異ニシタルノ甚シキヤ、然ルニ独リ基督教神学校ノミ嫌ニ尊大ニ構ヘ、老成人ヲ氣取り、唯我独尊ノ真似ヲナシテ心私ニ學術ヲ賤ムノ結果トシテ世人已ニ棄タル、ステールヤ、ロスコー等ノ化学書、ステワード、ステール、チャンバー位ノ物理学、スマイス、ロビンソン、トトホントル、ウキンントワルス位ノ数学書等ヲ教ヘ教ラレ普通學術ハ已ニ之ヲ得タリ、學術ハ与ミシ易シキノミト（カルガ故ニ彼等ハ皆淺薄ナルモノトナレリ、而シテ淺薄ノ伝導者トナレリ）、知ラス己

ハ井底ニ座シテ天ヲ望ミ天ノ小ナルニアラス坐スル所小ナルヲ、嘗テ聞ク先年木村駿吉氏西京ナル夏期学校ヨリ帰ルヤ植村氏問フテ曰ク、何ヲ感ジタルカト、曰ク〇〇〇ノ無学ヲ感ジ入タリト、然リ余モ又之ヲ感ジタルキ処ハ異ナレドモ或伝導者カ声高ラカニ遠心力求心力ノ講義ヲ始メタルトキハ學術者ナル伝導者ナリト思ヒタリシカ、遂ニ此人一層大音声ニ遠心力ト求心力トヲ転倒シテ幾度トナク繰リ返シテサモ学者然ト説教セラレタルニ於テ余輩大ニ疑ヒタリキ、此レハ先ツ少シノ誤トスルモ他ノ伝導者カ百六十五元素ト云ハレタルヲ聞キ落雷ハ重力ノ作用（直接ノ）ナリト説明セラレタルヲ聞キ誠ニ其御説明ノ御手際ニハ感服致シタレドモ廿四年後ハ到底斯クノ如キ事ニテハ事埒アカザルベシト考ラル、此等ノ伝導者ハ四五年前ノ昔日ニ教育セラレタル神学生ナリシト雖ドモ今日養ハレタル神学生ト雖ドモ學術ノ一所ニ至ルトキハ先ツ大学生否ナ高等中学生ニモ少シク劣ル所アルガ如シ、コハ固ヨリ専門ナラサルカ故ニ知ラスト雖ドモ敢テ申シ訳立ザルニアラサルベシト雖ドモ學術ヲ深く脩ムベシトハ人ノ為メニナスベシト言フニアラスシテ己ノ為メニセヨト云フニアリ、人ヲ感服セシメンカ為メニ、法螺吹ク為メニ学ヲ勉メヨト云フニアラサル也、我ハ唯真

理研究ノ助ケトセヨト云フニアリ、神学研究ニ哲学不用ト云ハ、余又何ヲカ言ハン、哲学研究ニ學術無用ト云ハ、余又何ヲカ言ハン、然レドモ已ニ神学ヲ熱研セント志シタルノ志士豈ニ其難キヲ畏レ其本ヲ務メスシテ可ナランヤ、一寸偷安ノ卑屈根性ヲ養フテ可ナランヤ其本乱レテ未治マルモノ未タ之レアラサル也、ピサノ斜塔先ツ其基礎ヲ堅クセスシテ可ナランヤ、ワシントン府ノカピトルハ先ツ其基ヲ堅固ニセスシテ可ナランヤ、余輩ハ飽マテモ神学校ニ學術ヲ貴ブノ氣風ヲ盛ニシ務メテ神学生ヲシテ最モ高等ナル學術ヲ知ラシメン事ヲ希望スルモノナリ、神学校ガ此方針ヲ取ラレン事ヲ希望スルモノナリ。然ラサレバ到底我邦ヨリ法螺吹伝導者ヲ絶滅スル事能ハサル也、法螺^{マユ}伝導者如何ゾ能クキリストノ教ヘタル真理ヲ伝フル事ヲ得ンヤ余輩又次ニ述ベサルベカラサル一事アリ、神学生ノ氣風是レナリ、少シク高貴ノ思想ヲ養ヘヨ、偉人ノ精神ヲ養ヘヨ、俊傑ノ精神ヲ養ヘヨ、神学生ハ快樂ヲ求ムルモノニアラサルヲ知レ、世ノ名ヲ求メ、功ヲ追フ所ノ人ニアラサルヲ知レ、唯口ニ聖書ヲ背誦スル鸚鵡的^{カウ}神学生タルノ名ヲ免レシメヨ、私ニ約束ヲナス米国流ノ神学生タルノ名ヲ免レシメ、利息等ヲ能クスル神学生タル息名ヲ去ラシメヨ、金銀出入帳ノ帳合法ヲノ

ミ能クスル神学生タルノ名ヲ去ラシメヨ、忠臣義士ノ殉死ヲ犬死ト笑フ輕薄神学生ノ名ヲ去ラシメヨ、義理人情ヲ蔑視シテ水草ヲ追フテ転移スル野蛮の神学生ノ名ヲ去ラシメヨ、身ハ世ニアルモ世ニ染マラス罪人ノ中ニアリテ其塩トナリ、光トナル剛強ノ人タラシメヨ、精神一到何事成ノ精神家タラシメヨ、真理正道ヲ追求スル哲者^{ソフィ}タラシメヨ、人情義理ヲ重ンジル慈腸愛顔ノ仁人タラシメヨ、一言以テ之ヲ敵ヘハ小キリストタラシメヨ、小ルーテルタラシメヨ、人若シ汝ノ婆言日本ニ無用ナリト云ハ、又何ヲカ言ハン、人若シ日本ハ斯ル神学生ナリ唯君子アルノミト云ハ、又何ヲカ言ハン、次ニ言フベキ一弊事ハ何ソヤ、今日ノ神学校ハ動モスレバ異色特面ノ学生ヲ同一ノ模形ニ入レテ之ヲ同形ニ造成セントスルノ傾向是レナリ、人各其特性アリ或ハ思想家ニ適スルモノアリ、詩人文客ニ傾クモノアリ、演舌家ニ文章家ニ牧師ニ著述家ニ音楽家ニ各天然ノ賦与性アリ、人其賦性ニ從テ教育セバ其発達甚タ迅速活潑堅固ナルベシト雖ドモ之ニ反シテムーデー氏ヲカント、エマルソンノ職ヲナサシメントノ教育ヲ施ストキハ、即チ真純ムーデーニモアラスカントニモアラサル一種變的ノ人物ヲ出スニ至ルベシ。一種變的ノ人物トハヨハネノ所謂冷ニモアラス熱ニモアラサル

温然タルモノ中途アラリノ物ニシテ即チ珍香モ焼カズ屁
モ放ラサル人ニシテ無害ノ人トナリ果ツベシ、無害ノ人
尚ホ可ナリ無益ノ人ト教育スルニ至リテ余輩豈ニ一言ヲ
述ヘスシテ黙スペケンヤ、次号ニ於テ余輩ハ大ニ茲ニ論
スル所アラントス。(以下次号)

(『仙台神学校文学会雑誌』一号 明治二十四
年六月)

四九 押川方義「東北学院の教育方針」

(明治二十四年初秋)

東北学院の教育方針

須藤 鬼一 筆記
川合 信水 校正

第一 講

百年の迷夢は一朝に覚めず、二百年の妄想は一夕に改
まらず、我が国民が基督教に向つて夢みし歲月や甚だ長
し、二十年來欧米文化の浸入と共に、我が国の外形は著
しき変更をなし、と雖へども、之が為に我が国民が数十
年來懐き来れる基督教に対する妄念は、容易に改まらず、

之を旨するに種々雑多なる綽名を以てし、或は之を「邪
教」といひ、或は之を「外教」といひ、或は「君父を無
みする教」といひ、或は「国を奪ふ教」といひ、其の他
偏頗自慢なる解釈を下すに至れり。此の説或は愛国の赤
誠より出づるものありと雖へども、多くは宗教の異同に
よりて之を嫌悪するあり、或は正義の光に照さるゝを嫌
ひて、故らに之を忌むが如きもあり、或は学問の見解の
狭隘なるにより之を容れざるもあり、或は自尊自卑の念
より遂に此に至れるもあり、或は先入主となり、古人の
妄信を其の俛受けて之を斯く曰ふもあり、兎に角基督教
に対し、之に正解を試みる者甚だ稀なるは豈に遺憾なら
ずや。

疑心暗鬼を生ず、已に基督教に向つて疑を懐く以上は、
基督教信者の為す事に対しても、亦同一の誤解を為すに
至るは、無理ならぬ事なり、基督教信者は己れ先づ正義
を重んじ、真理を遵守し、国家を愛し、君に忠に、親に
孝に、神を尊び、信を慕ひ、又人をして正道を履ましめ
んことを旨とす、其の為す所の事業一にして足らずと雖
へども、学校を開設して子弟に教育を施さんと欲するが
如きは、遠大なる目的を抱かずんばならず、世人我党の
精神を知らざれば、或は国粹を攻撃する者なりといひ、

或は自國を卑下して他國を尊重する者なりといひ、甚だしきに至りては、或は我党の學校を宗教學校といふ、是れ果して如何なる意なるか、教員中耶蘇信者あるの故を以てなるか、然らば何れの學校か或種の宗教（広き意味に於て）を信ずる教員の其の職に在らざらんや。又校長若しくは主座教員の如き者が宗教信者なるが故に斯く謂へるか、然らば校長若しくは主座教員が漢學者なる時は、其の校を目して之を漢學校と唱ふるか、或は仏教信者なる時は、之を仏教學校と稱するか、或はカントを奉じスペンセルを尊ぶ時は、之をカント學校、スペンセル學校と云ふか、豈に其の理あらんや、或は何れの主義もなき校長等の任ずる學校をば、冠詞なき純然たる學校とするか、然らば只無主義の學校のみ、始めて世人の誹謗を免かるゝの學校とするの外なし、此くの如き學校にして社會の稱賛する所とならんか、國は則ち亂れ、社會は則ち壞れ、家は則ち滅し、人は則ち亡びん、若し又我党の學校は、唯宗教のみを教授する者となすか、斯の人願くは五分間の勞を惜まず、我學校の規則を通覽せよ。疑團自ら氷解せん。

或は基督敎主義を以て建てられたる學校を指して、坊主學校と嘲り、女學校を尼學校と目するに至る、世人既

に斯くの如き疑惑を抱きしが故に、我等之を弁明して、我黨の主義を公にするは、亦止むを得ざるなり。是に於てか我が東北學院の主義目的方針等を諸君の前に發表して、近くば仙台の人之を耳にし、遠くば日本の人之を知りて、而して後に之に批評を加へんことを望む者なり。

東北學院といへば、諸君も既に規則に於て見らるゝが如く、一般には高等普通敎育を授くるを目的とし、また其の外に専門部を置く、目下は独り神学部のみを敎ふと雖へども、将来に至りては、商業學なり、法學なり、文學なり、理學なり、凡そ今日日本子弟に必要な學科を授けんと欲する目的なり。

諸君、東北學院敎育の主義とは何ぞと曰はゞ、敢て國家主義に對する論難攻撃に非らず、然れども若し關係を及ぼす場合には、此等の事をも加えて論ずることもあるべし。

東北學院の高等普通敎育

斯く曰はゞ、東北學院の敎育と、世人一般の敎育と、主眼に於て何の異なる所あるか、敎育上には主眼あり、東北學院の取る所は如何、之を前以て曰はざるべからず、併しながら敎育に就いては種々の説ありて一定せず、然れども或は先覺者ペスタロツジ、スペンセル、フォツプ

ス、ミルトン、フローベル等の有名なる人ありて、教育に就きての見解を論議せり、此の人々が教育てふ語に下したる定解は世既に之を知る。曰く、人物其れ自身を完全に発達せしむるにありと。

教育に就いて、其の方法をいふときは、種々異なる所あれども、其の主眼に至りては、自ら一定する者あり、即ち不具者を作らずして、完全なる人物を作り出すにあり、細言すれば、人には靈魂と肉体とあり、靈魂は靈を完全に発達せしめ、肉体は体を完全に發育せしめざるべからず、身体の養成には又それ／＼の方法ありて、四肢五体を養ひ、或は運動に、或は音楽に、或は健全字に、或は医学に、其の他種々なる形体上に就き、教養其の宜しきを得たる方法あり、また靈魂の教育に至りては、靈魂には智情意の三者ありて、智は如何にして発達せしめんか、情は如何にして之を潔めんか、意は如何にして之を養い、之を強めんかの問題あり、智識を進め、情を清くし、意を強くせんが為には、種々なる事により、其の発達を凶らざるべからず、是れ所謂哲学、宗教、道德、審美科学等の学問のある所以なり。此の学院よりして、将来は学者も出でん、詩人も出でん、科学者も出でん、政治家も出でん、其の他種々なる者出で来るべし、教育

の目的たる斯くの如くにして、其の結果如何を問はゞ、即ち豪腸男子、真正なる人物、所謂有為の人物、偉人賢者を養成するにあり。智識は狭からずして事理に曉通せんことを要し、道德は高くして所謂俯仰天地に愧ぢざらんことを要し、意志は剛くして潔からんことを要し、身体は壯健ならんことを要す。知識広く、道德高く、精神活発有為に、身体強壯健全なるに非らずんば、真正の人物とはいふべからず。斯く論じ来らば、我が東北学院の人に授くる教育は、世人の授くる教育と比して、何の異なる所かある。また決して異なる事のあるべきやうなし。然らば基督教徒が基督教主義を以て教育を施さんとするは、彼の世人の言ふが如く、決して狹隘淺薄なる目的を以て、教育の主眼となす者にあらざるなり。世に真理は二つあることなし、人を導きて完全の教育を授けざれば、其の国立たず、人物養成の道豈に他あらんや。名將の戦鬪に先んじて其の兵士を訓練するに異ならず、既に人物となりたる上は、其の人即ち独立の人物なり、見識ある人物なり、善悪利害を明識する人物なり、此くの如き人にして、衷情より我党と事業を共にせんと欲せば、是れ志を同うする人にして、提携ていけいして天下の為に立たんのみ。何ぞ敢て人を束縛することをなさんや。ユダヤ教より、

スピノザ出で、ローマ教よりはルーテル出でたり、ブラマ宗より出でたる釈迦は、独立して一宗を開き、パウロはユダヤ宗の教育を受けながら、自己の定見を以て、基督教に服従せしにあらざや。然るに尚ほ我儕を以て偏頗なる教育を施し、子弟をして一も二もなく基督教の範圍に於て、強いて之を模倣すること、菓子屋のおたふく面や、鬼面の菓子を作るが如く看做すは、愚昧の甚だしき者にあらざや。是れ畢竟我儕を知らざる者の妄語なるのみ。

夫れ日本をして文明の花を咲かしめ、開花の実を結びしめんと欲せば、宜しく斯くの如く完全なる教育の下に出でたる人物が、同志協力以て生命を擲ち、国家に殉ずる覚悟なかるべからず、我國民にして、此の献身的精神を有するに非らざるよりは、日本の事得て期すべからず。若し天、幸にして我が国を棄てず、日本の継続者中此くの如き人物を出すに於ては、天下何事か成就せざらんや、此の人平時にありては、或は鋤を肩にし、或は商売に従事し、或は新聞記者となり、或は演説家となり、或は政治家となり、或は教育家となり、或は宗教家となるべし。是れ所謂国家の元氣、社会の主動者たるなり。斯かる豪邁なる人物によりてこそ、其の国の改良は真に出来得る

なれ、十人、二十人、百人、乃至千人と、志士仁人追々増加するに至りて、始めて我国の改良以て期すべし、此の人々が戦場にありては如何、乃ち勇壯直進、千軍万馬の間を馳駆し、軍事に従事することを得べし、斯かる人物を我が学校に於て造成せんことを望むなり、教育の成否は校舎の大小、生徒の多少、書籍の多寡にもあらざるなり、唯此の校果して真正なる人物を養成し得るや否やを見るべし、此の事にして成就せば、我儕は上帝に謝せん、若し成就せざれば、我教育は其の目的を誤れるものと謂ふべし、我が東北学院は此の目的を以て世に立つ者なり。諸君よ、願くは此の目的を体し、此の主義を守り、此の方針を取り、唯鞠躬勉勵して怠ること勿かれ、我儕は唯諸君が此の豁大有望なる決心を持たれんことを希望して止まざるなり。

今日我が国教育界の状況を通覧すれば、我が国には未だ欧米富強の国にあるが如き、完備なる大学校を見ることを得ざれども、今日我が国情に對しては、寧ろ強いて進歩せしめたりと言ふも、敢て過言にあらざるべし。是れ蓋し國民一般の経営に出でし者に非らずして、多くは政府の設立維持する所たればなり、我が国には都府に政府の設立せる一大学校あるのみならず、各地方に於ても、

亦七個の高等中学あり、其の利害果して如何、其の他中
小学校の如きに至りては、或は千を以て、或は万を以て
数ふが如き有様にして、之に加ふるに数多の私立学校あ
りて、其の教員及び子弟の數に至りては、実に無量なり
と言はずんばならず、併しながら今日の教育界に於て、
教育其の當を得たる者果して幾許かある、是れ吾人の今
日に於て、尤も考究を要する一問題にあらずや。

夫れ教育は、文字を理解し、事實を証明するのみを以
て足れりとすべからず、人物其の物を養成するこそ、教
育の主眼にてあるなれ、人を造るの道果して如何、教師
其の人を得て、子弟に生氣を吹き、其の心を移すの他に
其の道なきを知る。是れ所謂以心伝心を離れては、外に
其の方法あらざるべし、今日我が教育界に於て、一の痛
歎すべき事は、智育其の者の不足なるに由るか、將た徳
育其の者の実行を欠くに由るか、抑々体育の未だ不整頓
なるに由るか、凡そ教育者は、彼の所謂智徳体の三者を
發達せしむるを以て主眼とせり、果して之を完全なる教
育なりとすれば、其の内或は一に長じ、他に欠くる所あ
れば、必ず完全なる教育とは謂ふを得ざるなり。

我が国今日の教育界を見るに、智識其の者に於ては、
稍々適當なる進歩をなしつつある者の如し、彼の欧米の

新發明、新実験を輸入して、之を活用する者多く、また
体育に至りても、菜根を咬んで勉学するといふが如きは、
既に野蠻時代の教育法として、既に陳腐に属し、或は体
操に、運動に、擊劍に、みな身体の發達を奨励する者の
如し、彼の雄弁を以て欧米人を驚かしたるクック氏が、
嘗て我が国に渡來し、当時の教育界の状況を觀察して、
其の見聞する所を批評せし言を聞くに、彼れまづ大書校
の有様を見て一驚を喫し、それより都会並に各地方の書
籍店にある書籍を調べ、割合に高尚なる欧米の書籍の列
べあるに驚きたり、彼曰く、「学者或は其の能を誇らんが
為、敢て必要にもあらざる書籍を架上に積むことはあり
と雖へども、書籍店にして敢て販売の道なき書籍を多く
店先に陳列するが如きは、万あるべき事にあらず、され
ば斯かる高尚なる書籍の書店にあるは、是れ正しく日本
子弟の此の書籍を購読する者ある一証と謂ふべきなり、
日本も尚不文社会の一と思ひ居りし其の矢先に、欧米人
すらも容易に解し得ざる所の心理書、或は哲學者、其の
他有名な學者賢人の脳裡より作爲せられし高尚なる書
籍を読み得るを見れば、容易に侮るべきにあらず、今日
の日本は、欧米の文化に比しては、其の距ること尚遠し
と謂はざるを得ざれども、此の有望なる国は、必ず文化

開運の人民が、其の将来の成行を刮目して見るに足るべき者なりとす、然りと雖へども、日本に於て最も歎くべきの一事は、今や国会も將に開設せられんとするの運に際会しながら、其の国一般の道德墮落したることなりとす。」と、是れクツク氏が日本に与へたる評にてありしなり。

五六年前の予言は、今日に於て思ひ当りぬ、道德を重んずること智識を重んずると等しかるべき学校内に於てすら、教員其の人にして、精神、生徒に通じ、至誠、天地を動かす程の人物は、僅々にして多く見ること能はざるが如し、是れ今日吾人が智育を重んずると共に、確乎たる主義を有する有徳者の此の国に出でて、身を教育界に容れ、日本の継続者たる子弟の教育に着手せられんことを希望して止まざる所なり。

東京の下宿屋などには、官私立の学校に通学する書生中、多くは其の風俗を紊し、人倫を破り、或は其の所有の書籍を典売して、以て情欲を遂げんとする材料となすが如きは、敗徳者中のまだ恕すべき者にして、男女相集つて骨牌をなし、其の勝負によりて色を売買するの道を見出すといふが如きに至つては、最早之を公衆に告ぐるに忍びざる程の有様にして、実に道德は地に墮ち、廉

恥は廃れたりと謂はざるべからず、豈に一大痛歎すべき事にあらずや、地方の父兄が汗水に塗まれて、得たる金を濫費して、学業を成就せざるのみならず、遂に徳を敗り、身を殺し、汚名を百載に遺し、恩愛ある父兄を泣かしめ、国家の大計を害し、身を過る者其れ如何に多きぞ、(東北学院講堂に於て)

(鬼塚正二編『恩師のみあと』)

五〇 東北学院設立認可申請書類

(明治二十四年七月十四日)

庶第五三八七号

私立学校設置願

- 一 設置目的 智徳併行ノ教育ヲ授ク
 - 一 位 置 宮城県仙台市東二番町三十三番地
 - 一 名 称 東北学院
 - 一 経 費
 - 歳収入
 - 一金七千八拾円
- 内訳

金五千五百円

寄附金

仙台市東二番町八番地寄留

金八百四拾円

授業料

士族 押川 方義

金七百四拾円

寄附金

明治廿四年七月

歳支出

宮城県知事 船越 衛殿

一金七千八拾円

内訳

明治廿四年七月改正

金五千百六拾円

教員俸給

東北学院規則一覽

金貳百四拾円

諸給料

仙台市東貳番町三拾三番地

金千五百円

書籍器械費

東北学院

金百貳拾円

営繕費

東北学院一覽

校舎坪数

百貳拾九坪

理事員

敷地坪数

千貳百坪

押川 方義

図書器具数

別紙之通

植村 正久(東京)

外ニ英書千部漢書五百部(注文中)

生徒数

三十三名

藤生 金六

職員数

八名(別紙履歷書之通)

三浦 徹(東京)

教則及校則

別紙之通

ウヰリヤム、

科用図書

別紙之通

デー、ビー、

設置主履歷

別紙之通

ヂエー、ビー、

右之通設置致度候間御認可相成度此段相願候也

職員

モエー、ピール

英語、聖經、心理学、希臘語
院長 押川 方義(愛媛)

副院長兼教授 ウキリヤム、イー、ホーイ(米国)
英語、神学、哲学、倫理学

教授 デー、ビー、シユネーダー(米国)
教会歴史、英語

教授 ギェー、ピー、モール(米国)
哲学、論理学、経済学、万国公法、徴証論

教授 藤生 金六(群馬)
英語、独逸語、拉典語、歴史 教員 唐澤 造酒(長野)

同 [空] 白
理化学 同 [空] 白
同 松浦鳳之進(東京)

同 ミセス、ホーイ(米国)
英語、音楽 同 ミセス、シユネーダー(米国)

同 [空] 白
訳読 同 [空] 白
嘱託教員 真山 良(千葉)

同 金成 兵助(宮城)
訳読 同 [空] 白

同 [空] 白
幹事 同 [空] 白
舎監 同 [空] 白

東北学院規則

目的及ヒ名稱

一 開発的主義ニ基キ智徳併行ノ教育ヲ授クルヲ以テ本校ノ目的トス

一 本校ヲ東北学院ト称ス

学科課程

一 本院ノ学科ヲ分テ本科予科及ヒ神学科トシ本科ノ課程ヲ四学級ニ分チ予科ノ課程ヲ二学級ニ分チ神学ノ課程ヲ三学級ニ分チ一学年ヲ以テ一学級ヲ終ルモノトス神学部外ニ専門部ヲ設ケ本科卒業者ノ為ニ更ニ高等ノ学科ヲ授クル事アルベシ

一 本科予科及ヒ神学科ノ各学科課程ヲ定ムル事左ノ如シ但シ時宜ニヨリ変更スル事アルベシ

予科第一年

学期 秋期 冬期 春期

一 倫理講話 同上 同上
二 発音読法 同上 発音書
書取習字 同上 取読法
三 綴字 同上 同上
四 訳読 同上 同上
五 習字 和文 同上
和漢学 習字漢学 同上

予科第二年

秋期 冬期 春期

一 同上 同上 同上
二 読法書 読法書取
取会話文 会語英作
三 訳読 同上 同上
四 英文法 同上 同上
五 習字 同上 同上
和漢学 同上 同上

十 画学	九 万国史	八 日本歴史	七 理化科	六 算術代数 幾何	五 和漢学	四 英文法	三 訳読	二 話法書取 会話作文	一 倫理講	本科第一年	九 体操	八 画学	七 日本地理	六 算術代数 幾何
										秋期 冬期 春期				
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
十 画学 (任意)	九 万国史	八 米國史	七 理化科	六 三角法 弧三角 实地測量	五 和漢学	四 文辞作	三 訳読	二 英文法	一 同上	本科第二年	九 体操	八 画学	七 日本歴史	六 算術代数 幾何
										秋期 冬期 春期				
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
本科 同	予科 聖書	神学部志願者ノ外ハ随意	十 拉典学 (任意)	九 独逸文学 (任意)	八 論理学 心理学 社会学	七 英国史	六 天文学	五 動物学	四 解析幾何	三 和漢学	二 修辞作文	一 倫理講話	本科第三年	十 体操
													秋期 冬期 春期	
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
本科 同	予科 聖書	神学部志願者ノ外ハ随意	十 拉典学 (任意)	九 独逸文学 (任意)	八 論理学 心理学 社会学	七 英国史	六 天文学	五 動物学	四 解析幾何	三 和漢学	二 修辞作文	一 倫理講話	本科第四年	十 体操
													秋期 冬期 春期	
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上

神学部

第一年	第二年	第三年
一 自然神学及徴証論	聖經及基督教古事	旧約全書神学
二 聖經地理	旧約全書入門	原文弁
三 聖經史	原文弁	教義沿革史
四 原文弁	牧会学	教会政治
五 新約全書入門	基督教倫理	基督教倫理
六 組織神学	新約全書神学	組織神学
七 教会歴史	組織神学	教会歴史
八 基督教倫理	教会歴史	信条問答
九 仏教	説教学	説教学
十 哲学	仏教	神道

右ニ掲クル学科ノ外音楽（風琴、洋琴）ヲ正科ノ余暇
ヲ以テ之ヲ兼修セシムル事アルベシ

学年学期及ヒ休業

- 一 学年ハ九月十一日ニ始リ翌年九月十日ニ終ル
 学年ヲ分テ三学期トシ第一学期ハ九月中旬ヨリ十二
 月下旬ニ至リ第二学期ハ一月上旬ヨリ三月下旬ニ至
 リ第三学期ハ四月上旬ヨリ六月下旬ニ至ル
- 一 学年中休業日ハ日曜日、土曜日午后、大祭日、夏期
 冬期及ヒ春期ノ休業トス
- 一 春期休業 從四月一日至四月七日
 夏期休業 從七月一日至九月十日
 冬期休業 從十二月廿五日至翌年一月七日
- 一 入学 在学及ヒ退学
- 一 入学ノ期ハ毎年九月上旬ト定ム
 但シ時宜ニ依リ臨時入学ヲ許ス事アルベシ
- 一 予科一年級ニ入学ヲ許スベキ者ハ左ノ試験ニ及第ス
 ル者トス
- 但シ尋常小学科ヲ卒業セザル者ハ年齢十四年以上
 タル可シ
- 皇朝史略 仮名文章 初等数学
- 予科二年級以上ニ入学セント欲スルモノハ其級ニ合
 格スベキ課目ノ試験ヲ受クベシ
- 一 入学ヲ願フモノハ入学試験ノ期日ニ先チ左式ニ抛リ

履歷書相添へ入学願書ヲ差出スベシ

入学願書

私儀今般御学院本(予)科第何級へ試業ノ上入学仕
度履歷書相添此段出願候也

年月日 住所 族籍 姓 名 何年何ヶ月 ㊦

東北学院院长 押川 方義殿

履歷書

姓 名

出生年月日

生国地名

寄留又ハ現在住所番地

族籍

父兄ノ官位、爵、或ハ職業

何年何月ヨリ何某ニ就キ或ハ学校へ入り何学修業何

年何月何級卒業或ハ何学校へ移学現今何学校何級ニ

在リテ修業

入学ノ許可ヲ得タルモノハ丁年以上ノ者ニシテ仙台

市ニ住居ノ戸主ヲ保証人トナシ左式ニ抛リ在学証書
ヲ差出ス可シ

在学証書

私儀今般入学御許可相成候ニ付テハ在学中御規則等
堅ク相守可申候依テ証書如件

年月日 住所 族籍 戸主何ノ誰子弟 姓 名 何年何ヶ月 ㊦

東北学院院长 押川方義殿

何誰儀今般入学御許可相成候ニ付テハ御規則等堅ク相
守ラセ万一不都合ノ廉有之節ハ私一切引受可申候病疾
又其他止ヲ得サル事故アリテ退学願度節ハ私ヨリ其事
由ヲ申立出願可仕候依テ保証如此候也

但向後宿所移転候節ハ速ニ御届可仕候也

住所

年月日 族籍 戸主何ノ誰子弟 姓 名 何年何ヶ月 ㊦

東北学院院长 押川方義殿

何誰儀今般入学御許可相成候ニ付テハ御規則等堅ク相守ラセ万一不都合ノ廉有之節ハ私一切引受可申候疾病又ハ其他止ラ得サル事故アリテ退学願度節ハ私ヨリ其事由ヲ申立出願可仕候依テ保証如此候也

住所

族籍

年月日

保証人 姓

名 ⑥

何年何ヶ月

一 保証人死去若クハ他府県ニ移住スル時ハ他人ヲ以テ之ニ代ヘ更ニ在学証書ヲ改メ差出スベシ

一 生徒ニ通学生ニ限ル疾病或ハ事故ニ依リ欠課スルモノハ其当日乃至翌日中ニ必ス保証人ヨリ其理由ヲ詳記シタル届書ヲ差出スベシ且欠課後出席スルトキハ何月何日ヨリ何月何日マテ欠課シタリト記セル証明書ヲ差出スベシ

一 生徒疾病或ハ事故等ニテ退学セント欲スル時ハ其事由ヲ詳記シ保証人連署ヲ以テ願出ベシ

一 生徒無断欠課スル事一ヶ月ニ及プトキハ其事故ノ如何ニ拘ハラス之ヲ退学ト見做スベシ

一 不行状ナルカ又ハ学業ニ見込ナキ生徒ハ退学セシムル事アルベシ

一 届済欠席ト雖トモ一ヶ月ニ及ブ時ハ更ニ届出ルニアラザレバ退学ト見做スベシ又更ニ入学セント欲スルモノハ新入学生同様ノ手続ヲ経ベシ

試業

一 学期試業ハ每学期ノ終ニ於テ本学期中履修セシ諸課目ノ試業ヲ行フモノトス

一 試業ノ成績ハ点数ヲ以テ評定シ各課目ニ付百ヲ以テ最高点トス

一 学期評点ハ平常点及試業点ノ平均点数ニ依テ之ヲ定ム

一 平常点ハ其学期中履修セシ課業及出席ノ成績ヲ表スルモノトス

一 二学科試業ノ成績六十点ニ滿タザル者ハ進級スルヲ得ス

但シ特別ノ理由アルトキハ次学期ノ初メニ於テ再試業ヲナス事アルベシ

一 総平均六十点ニ滿タザルカ或ハ三課以上六十点ニ滿タザルカ或ハ一課ニテモ四十点ニ滿タザルモノハ進級スルヲ得ス

一 学期試業ノ当日疾病等ニテ欠席ノ許可ヲ得タルモノハ次学期ノ始ニ出席スレバ特別ニ之ヲ試業スベシ

寄宿及取締

- 一 生徒ハ行状ニ就キ幹事ノ監督ヲ受ク幹事ハ諸規則ノ実施ニ注意シ且ツ生徒ノ指導ニ供センガ為メ院長ノ許可ヲ得テ細則ヲ設立シ又ハ臨時告示ヲ為ス事アルベシ
- 一 生徒ノ在学証書ニ記名セル保証人ハ該生徒ノ寄宿ニ関スル事項ニ付一切其責ニ任スベシ
- 一 在舎生徒ハ起臥出入等定期ニ從ヒ儀容ヲ修メ規則ヲ守リ寄宿舎管理ノ指揮ニ從フヲ以テ必要ノ約款トス
- 一 在舎生徒ハ各自ノ室内ヲ清潔整頓ナラシムベシ
- 一 在舎生徒ハ他人來訪ノ節ハ必ス応接所ニ於テ面晤スベシ
- 一 在舎生徒ハ舎内ノ整式秩序ニ妨害ヲ為スベキ物品ヲ携帯スル事講堂及ヒ寄宿舎内ニ於テ喫煙飲酒スルヲ禁ズ
- 一 在舎生徒ハ先ツ幹事ノ認可ヲ得ルニアラザレバ疾病ノ故ヲ以テ欠課ヲ許サズ但シ疾病ニ依リ欠課シタル者ハ寄宿舎管理ノ許可ヲ得ルニアラザレバ外出スル事ヲ許サズ
- 一 在舎生徒帰舎ノ定期ニ後ルヽトキハ其延刻ノ理由ヲ証明シタル保証人ノ証書ヲ持參シ寄宿管理ニ差出ス

ベシ

- 一 食時ノ外食堂ニ入り飲食スル事ヲ要スルトキハ許可ヲ受クベシ
- 一 在舎生徒若シ幹事ノ許可ヲ受ケス漫ニ外泊スル事アルトキハ之ヲ保証人ニ通知シ直ニ退学セシムルモノトス
- 一 在舎生徒舎内諸規則又ハ時々ノ告示ヲ遵奉セス又ハ不良ノ行状アルトキハ之ヲ訓戒シ或ハ在舎許シ難シト認ル時ハ退舎ヲ命ス本人及ヒ保証人ニ於テハ一切故碍申立ツベカラス
- 一 寄宿舎ハ職員時ニ巡視スル事アレバ生徒ハ常ニ之ヲ心得居ルベシ
- 一 生徒心得
 - 一 生徒ハ毎朝講堂ニ集リ徳育上ノ講話ヲ聴クベシ
 - 一 生徒ハ品行ヲ正クシ志操ヲ直クシ虚文ニ馳セス空想ニ流レズ専ラ応用ノ道ヲ修ムベシ
 - 一 交際ハ信義ヲ重ンジ友誼ヲ失フベカラズ
 - 一 身体ハ才智ヲ貯フルノ器ニシテ德行ヲ載スル車トモ言フベキナレバ常ニ飲食ヲ節シ肌膚ヲ清潔ニシ運動ヲ適度ニスル等凡ソ摂養ノ道ヲ守リ氣力ヲ壯ンニセシムル事ヲ勉ム可シ

- 一 課業ヲ勉励シ時限ヲ堅守シ規則ヲ遵奉ス可シ
- 一 学校附属ノ書籍器械等私ニ使用スベカラス
- 一 猥リニ集会シ無益ノ雑談ヲナシ他人ノ勉学ヲ妨クベカラス
- 一 諸規則ヲ遵奉シ職員及ヒ教員ノ指揮ニ従ヒ又敬礼ヲ失フ可カラス
- 一 生徒ノ交際ハ互々相親睦シ信義礼讓ヲ尚ヒ団結ヲ堅クス可シ
- 一 学校附属ノ物品ヲ破壊スルトキハ生徒其責ニ当リ修繕料ノ全額ヲ償納スベシ
- 一 束修授業料及ヒ其ノ他ノ費用
- 一 束修ハ金壹円ト定ム入学ノ許可ヲ得タル者ハ即日之ヲ納ムベシ
- 一 授業料ハ一ヶ月金七十銭トス毎月十日マテニ本校事務所ニ納ム可シ
- 一 食料ハ一ヶ月金貳円七十銭ト定ム前月ノ末ニ於テ之ヲ徴集ス但シ定日ニ於テ納付セザルモノアルトキハ保証人ヨリ徴収スル事アルベシ
- 一 通学生規則
- 一 通学生ハ授業時間ノ外通学生控所ニアリテ勉学シ猥リニ寄宿舎内ニ立入ル事ヲ禁ス

一 通学生ハ其宿所ヲ事務所へ通知スベシ移転スルトキモ亦同シ

門監規則

- 一 校門ノ開鎖ハ晨起ノトキ及午后十時ヲ以テ定限トス
- 一 鎖門後ハ校員及小使ノ外ハ鑑札ヲ有スルニ非レバ出門ヲ許スベカラズ

教員委嘱御届

群馬県平民

東北学院教授

藤生金六

東京府平民

東北学院教員

唐沢造酒

東京府士族

東北学院教員

真山 良

宮城県平民

東北学院助教

金成兵助

右本院ニ於テ今般教員ニ委嘱仕候間此段御届申上候也

東北学院々々長

明治廿四年七月

押川 方義 ㊤

宮城県知事 船越 衛殿

教員委嘱御届

北米合衆国ペンセルベニア州

東北学院教授

ダブルユー、イー、ホーイ

W. E. Hoy

東北学院教員

ミツセス、ホーイ

Mrs. Hoy

東北学院教授

デー、ビー、スネータル

D. B. Schneider

東北学院教員

ミツセス スネータル

Mrs. Schneider

東北学院教授

ゼー、ジョー、モール

J. P. Moore

東北学院教員

ミツセス モール

Mrs. Moore

右本院ニ於テ今般教員ニ委嘱仕候間此段御届申上候也

東北学院々々長

明治廿四年七月

押川 方義 ㊦

宮城県知事 船越 衛殿

履歴書

愛媛県温泉郡松山市小唐人町壱丁目拾貳番地原籍

宮城県仙台市東二番町八番地寄留

士族 押川 方義

嘉永四年十二月廿六日生

一 安政四年ヨリ愛媛県松山藩立明教館ニ於テ漢学修業小

林小太郎ニ就キ傍ラ英学ヲ修ム

一 慶応三年ヨリ東京開成学校入学定期ノ学科修業傍ラ算

作週平及ヒ英人ダラスニ就キ英学修業

一 明治三年ヨリ明治九年マテ神奈川県横浜ニ於テ米国人

ブラオン、バラ、ミロル、タムソン、ルミスノ諸氏ニ

就キ英学修業

一 明治十年ヨリ同十三年マテ新潟県新潟ニ於テ英国人パ

アムニ就キ神学修業ス

一 明治十四年ヨリ宮城県仙台ニ於テ基督教伝道ニ従事ス

一 明治二十年ヨリ仙台神学校ニ於テ校長及ヒ教授ヲ兼任

ス

一 明治二十年ヨリ同廿三年マテ山形英学校々々長依嘱セラ

ル

一 明治二十二年ヨリ教育及ヒ宗教視察ノ為メ欧米ヲ漫遊

ス

右之通りニ候也

明治廿四年七月

右 押川 方義 ㊦

履 歴 書

群馬県山田郡大間々町二百十七番地原籍

宮城県仙台市柳町通り九番地寄留

平民 藤生 金六

安政六年八月四日生

一明治四年ヨリ神奈川県立修文館ニ於テ該館規定ノ課業修学

一明治五年ヨリ横浜ニ於テ外国人ニ就キ英学修業

一明治六年横浜高嶋学校ニ於テ該校規定ノ学課修業

一明治七年東京語学校（現今第一高等中学）ニ入学該校規定ノ学科修業

一明治七年秋ヨリ横浜ニ於テ米国人博士ブラウン氏ニ就

キ英学及普通学修業側ラ米国人ルーミス、ミロル、バ

ラ等ノ諸氏ヨリ修身学神学哲学等ヲ修メ同十年七月卒

業

一明治十年九月ヨリ十二年四月マテ東京一致神学校ニ於

テ神学等ヲ修メ専ラ哲学ヲ修業ス

一明治十二年ヨリ農商業ニ従事シ併セテ学会政社等ノ事

ニ従事ス

一明治十六年一月ヨリ上野新報商議委員兼主任記者トナル

ル

一明治十七年九月ヨリ横浜ヘラルド新聞記者トナリ同十

九年八月ニ至ル

一明治十九年九月ヨリ廿年十一月マテ福嶋地方ニ於テ基

督教伝道ニ従事ス

一明治廿年十一月ヨリ仙台神学校教授ヲ委嘱セラレ同廿

一年六月ニ至ル

一明治廿一年六月ヨリ山形県西田川郡鶴岡町私立荘内中

学校々長ヲ委嘱セラレ同廿三年三月辞職ス

一明治廿三年四月ヨリ宮城県仙台市東三番町宮城女学校

幹事ヲ委嘱セラレ今日ニ至ル

右之通候也

明治廿四年七月

右 藤生 金六 ㊦

学業履歴書

東京市麴町区有楽町二丁目三番地会堂内

唐澤 造酒

慶応元年二月十九日生

一明治八年二月東京芝区烏森小学校ニ入り後清水小学校

番町小学校ニ転シ同十二年小学全科卒業

一明治十年一月ヨリ傍ラ曾田愛之介氏ニ就キ仏学修業

一明治十二年四月神田区表神保町訓蒙学舎ニ入り独逸学修業

一明治十三年三月文部省直轄旧東京外国語学校独逸部ニ入り同十六年七月十日卒業

一明治十六年七月ヨリ英学修業

一明治十七年二月二日出発米国ニ渡航シ「カリフォルニア」州ヨークランド市小学校ニ入り翌十八年五月二十三日卒業

一明治十八年九月ペンシルヴァニア州アレゲニー府^{ペンシル}辺州西部大学予備科ニ入ル

一明治十九年インディアナ州ウアバシユ大学文学科ニ入り二十年六月古文学優等ナルニ仍リ賞金十五弗ヲ得タリ(第一等賞)

一明治二十一年六月学業優業ニ仍リ二年間ウアイアツト、スカラシップヲ賞与セラレタリ(二年七十五弗ツト)

一明治二十三年六月十八日卒業シ「バチエロル、ラブ、アーツ」ノ学位ヲ得タリ

一第三第四年学生ノ節撰科トシテ学ビシハ希臘独逸文学

ナリトス

右之通相違無之候也

明治廿四年七月

右 唐澤 造酒

履 歴 書

東京市麴町区下六番町三十八番地原籍

宮城県仙台市東一番町五番地寄留

東京府士族 真山 良

一明治一年一月ヨリ同四年十二月マテ都合四年間高橋卯嘉永五年十二月生

ニ從ヒ珠算研究

一明治五年一月ヨリ同年十二月マテ都合一年間大坪慎正

ニ從ヒ筆算研究

一明治六年一月ヨリ同九年十二月マテ都合四年間木村信章ニ從ヒ読書研究

一明治十年一月ヨリ同十一年十二月マテ都合二年間富田

淳久ニ從ヒ英学研究

一明治十二年一月ヨリ東京麴町ニ於テ私立数理学舎開設

数学及英学ヲ教授ス

一明治二十一年九月ヨリ山形県山形英学校ニ於テ数学教授

授同二十二年十月辞職

一 明治二十二年十一月ヨリ東京麹町ニ於テ数理学舎再設ス

一 明治二十三年二月ヨリ東京数学院ニ於テ数学科教授
右之通り御座候也

明治二十四年七月

右 真山 良 ㊦

履 歴 書

宮城県仙台市良寛院町四番地

平民 金成 兵助

元治元年十二月生

明治十六年一月ヨリ同十九年八月マテ東京駿河台成立

学舎ニ於テ英語科高等普通学脩業

明治十九年九月ヨリ同廿年十二月マテ東京神田区共立

学校ニ於テ高等中学校受験科専脩

明治廿年一月ヨリ同八月マテ仙台台英語学校英学教授ニ

従事ス

明治廿一年五月宮城県英語科訓導免許状下附セラル

明治廿一年九月ヨリ同廿二年五月マテ山形県山形英学

校英語教授ニ従事ス

明治廿二年九月ヨリ同廿四年六月マテ在仙台米国人ホ

ーイ氏シネダー氏及モール氏ニ就キ英文学脩辞学論理

学心理学倫理学哲学史神学并ニギリシヤ語脩業
右之通相違無之候也

明治二十四年七月

金成 兵助 ㊦

内三第五〇五四号

届 書

庶第 七二九五号

東京府平民

東北学院教員

松浦 鳳之進

右本院教員ニ依嘱候間此段御届申上候也

院長 押川 方義代理

真山 良 ㊦

明治廿四年九月十日

宮城県知事 船越 衛殿

履 歴 書

東京府下東京市京橋区築地二丁目拾七番地

東京府平民

岡山県士族 亡恕己四男 松浦 鳳之進

文久元年五月生

一 明治二年ヨリ同五年十二月迄旧足守藩学追琢館ニ於テ

漢学修業

一明治六年一月ヨリ八年十二月足守小学ニ於テ生徒ヲ教授ス

右之通り候也

右 松浦 鳳之進

一明治九年七月十一日岡山県庁ヨリ三等助教ニ任セラレ

啓己小学在勤申付ラル

科用図書目録

一明治十一年三月十九日六級訓導補ニ任シ庭瀬小学在勤

命セラル

文部省会話読本卷之一

十四部

一明治十二年一月ヨリ同廿年一月迄東京二松学舎ニ入り

〃 卷之二

〃

三島中洲ニ從ヒ漢文学修業同十四年卒業爾後ハ幹事塾

〃 卷之三

〃

頭助教詩文掛ヲ嘱セラル

〃 卷之四

〃

一明治十四年同廿年迄重野成斎方へ通へ支那哲学和漢文

ロングマン卷三読本

拾三部

学史学等修業

シヨウ氏英国文学史

四部

一明治十七年ヨリ同十九年川田甕江ニ從ヒ漢文学修業

ゼボン氏論理学

〃

一明治廿年一月十五日文部省総務局雇申付月給金貳拾円

ラベートン氏ヒストリカルアットラス

貳部

給与

デクソン文法書

九部

一同廿一年七月廿七日試験ノ上尋常師範学校尋常中学校

ワーレン ヘスチングス

六部

漢文科教員タルコトヲ文部大臣ヨリ免許セラル

クワツケンボス氏小米国史

拾三部

一同廿二年三月月俸金貳拾参円給与

スウキントン氏万国史

拾五部

一明治廿二年十一月九日依願解雇

ニューナシヨナル第四読本

拾貳部

一同日在職中勉勵候ニ付手当トシテ金貳拾参円給与

ユニオン第二読本

拾五部

一同十二月ヨリ築地二丁目ニ於テ漢学ヲ教授シ旁ラ重野

スチール氏物理学

拾四部

成斎ニ從ヒ国史眼伏敵編等著述ノ業ヲ補ク

ミツチヨル氏小地理書

拾貳部

—	モンテース氏地文学	拾部	—	正統文章軌範	拾部
—	スチール氏生理学	八部	—	唐宋八大家文	〃
—	〃 地質学	七部	—	春秋左氏伝	五部
—	〃 化学書	七部	—	莊子	五部
—	〃 動物学	七部	—	荀子	〃
—	〃 植物学	七部	—	四書五経	四部
—	シル氏イングリツシユエキザサイス	七部	—	国史眼	四部
—	ノツクス氏初等文典	七部	—	正統皇朝史略	五部
—	ウエントラールス氏算術書	七部	—	日本外史	拾部
—	〃 〃 代数学	七部	—	近世算術 上野 寿著	〃
—	〃 〃 幾何学	七部	—	近世代数 〃	〃
—	ポータル氏道徳学	七部	—	平面幾何学 〃	〃
—	ケロツグ氏修辞学	七部	—	校舎器具目録	〃
—	〃 英国文学	七部	—	レバノン風琴	七個
—	ピリー氏経済学	七部	—	暖炉	七個
—	ケロツグ氏文法書	七部	—	黒盤	七個
—	〃 健全学	七部	—	腰掛	七個
—	ワイカツフ氏英作文書	七部	—	椅子	百式拾個
—	マコツ氏コクニチーブブール	七部	—	卓子	式拾個
—	〃 モーチーブパール	七部	—	撃剣道具	拾個
—	マコツ氏論理学書	七部	—		七個

百六拾六個

庶第五三八七号

私立学校設置之儀ニ付上申

仙台市東二番町八番地寄留押川方義私立学校設置之儀別紙之通り出願相成候間御検閲之上御認可相成候様何分之御詮議相成度此段上申仕候也

明治二十四年七月十四日 仙台市長 遠藤 庸治

宮城県知事 般越 衛殿

内務部長

第三課長

知事

学務係

属 浅井 元齡

文部省総務局長へ御照会案左ニ相伺

今般当管下仙台市東二番丁三十三番地ニ東北学院ナルモノ設置致度義ニ付明治十九年四月勅令第拾六号第三条ニ拠リ認可相受度旨申出候処同院規則中学校課程ハ本科予科及神学科ノ三種ニシテ前六ヶ年ハ普通学科、後三ヶ年ハ神学科通計九ヶ年ノ修行学年ニ候処右神学科ノ一科有之候トモ普通私立学校ト認メ差支無之哉左モ右神学科トハ全ク其源理ヲ講究スルノ自然神学ノ一科トモ相見へ候得

共何分疑義ニ相涉候ニ付別紙規則相添へ候条何分ノ御回答相成候様致度此段及御照会候也

知事

文部省総務局長

追而本文ハ目下至急ヲ要候儀ニ付折返御回答相成候様致度且規則書ハ御一覽ノ上御返戻相成度比段申副候也

(注・明治二十四年七月十六日付)

内務部長

第三課長

学務係

佐藤 信行

文部省総務局長へ督促按

去月十六日付及御照会候東北学院設置ノ件ハ御調査中ニ可有之与存候得共設置主ヨリ至急何分之詮議相成度旨申出候付早速御回答相成度且同月廿二日付及御照会候尋常中学校へ地方税ヨリ補助之件モ何分御取急キ御回答煩シ度此段済度及御照会候也

知事

(注・明治二十四年八月一日付)

内務部長[㊦]

第三課長[㊦]

知事[㊦]

学務係[㊦]

属 浅井 元齡[㊦]

文部省総務局長へ重ネテ御照会案左候

去月十六日付及本月三日付ノ両度ニテ東北学院設置ノ件ニ付御照会致置候処目下頻リニ設置主ヨリ何分至急ノ詮議相成度旨申出ニ付御調査中ニハ可有之候得共何分折返御回答相成候様致度此段重テ及御照会候也

知事

総務局長宛

(注・明治二十四年八月二十日付)

本年七月十六日附内三第四〇三四号ヲ以テ貴県下東北学院学則中神学ノ一科有之儀ニ付当省総務局長へ御照会之趣承了右ハ各種学校トシテ取扱相成差支無之候条此段及御回答候也

明治廿四年九月四日

文部省専門学務局長 濱尾 新[㊦]

宮城県知事 船越 衛殿

追而別冊東北学院一覽ハ御申越之旨ニ依リ及御返送候也

内務部長

第三課長[㊦]

知事[㊦]

学務係[㊦]

属 浅井 元齡[㊦]

私立東北学院設立御認可案并ニ同院教員仮免許状御交付案左ニ伺

院主 押川 方義

明治二十四年七月十四日付私立東北学院設置之件認可ス

年月日

宮城県知事

理由 同院規則ヲ調査スルニ明治二十二年県令第二十九号ニ違背ノ廉モ無之且文部省総務局長へ御照会ノ末各種学校トシテ御取扱相成差支無之トノ回答有之候ニ付御認可相成可然哉

右私立東北学院設置御認可済ノ上ハ明治十九年四月勅令第拾六号第四条ニ拠リ左ノ人名へ同院教員タルノ仮免許状御交付ノ積リ

族籍身分

外国語学科

唐澤 造酒

生年月日

哲学科 経済学科

同上

藤生 金六
生年月日

右各通

教員仮免許状

私立東北学院（外国語）（経済学科 哲学科）教員タルコ
トヲ免許ス

年月日

宮城県知事

理由 右兩人履歴ヲ調査スルニ東京語学校規定ノ学科ヲ
修業シタルモノ若クハ東京外国語学校及米国カリフヲ
ルニヤ州立大学等ヲ卒業シタルモノニシテ同院教員タ
ルノ資格アルモノト認メ候ニ付右仮免許状御交附ノ御
詮議相成可然哉

〔注・明治二十四年九月十一日付〕

（県庁文書）

五一 J・P・モール「新しいわが神学校校舎」

〔英文〕

（一八九二年五月十九日）

五二 東北学院新憲法の制定

（明治二十五年八月二十九日）

明治二十五年八月二十九日、仙台市東三番地ニ於テ開
會

出席 押川方義氏、藤生金六氏、ウイルリアム、イー、
ホーイ氏、ダビッド、ビー、シユネーダー氏

ホーイ氏ヲ仮議長ニ挙ケ、シユネーダー氏ヲ仮書記ニ挙
ケテ、理事局組織ニ関シテ下ノ如ク議決ス

日本基督教會ニ於テ新憲法ヲ採用シタルニヨリ、仙台
市ニ設立セル仙台神学校ハ以前ノ關係ヲ永続ス可カラサ
ルニ至リタルモ

該校ノ永続ヲ希望スルヲ以テ

吾人ハ自ラ該校ノ理事局ヲ組織シテ以テ之ヲ永続セン
事ヲ議決ス

一、押川氏ノ動議ニヨリ下ノ憲法ヲ採用ス

第一条 名称

日本国宮城県仙台市ニ設立セル当院ヲ東北学院ト称ス

第二条 目的

当院ノ目的（其一）基督教主義ニ相反スルナカラシム

ヲ期シ以テ完全ナル高等普通教育ヲ授クルニアリ

(其二) 聖書ニ從ヒ基督教ニ基キ以テ德育ヲ授クルニア

リ

(其三) 基督教々師タラン事ヲ希望スル者、若クハ他ノ

職務ヲナサント欲スル青年ノ為メニ更ニ高等ノ教育ヲ授

クルニアリトス

第三条 学 科

学科ヲ分テ(一)予科本科、(二)神学科、(三)及他ノ専門部ト

ス、但シ専門部ハ追テ之ヲ設ク

第四条 管 理

第一項 内外共同ノ精神ニ基キ東北学院ノ管理ハ之ヲ

理事局ニ委任ス、而シテ理事局ハ日本基督教會ト北米合

衆国リフオームド、チヨルチ外国伝道局トノ同情ヲ表白

ス

第二項 理事局ノ事務ハ委員会ニ於テ執行ス

第五条 理事局

第一項 理事局ハ合衆国リフオームド、チヨルチ在日

本ミスシヨソノ男教師総員(常ニ一名ヲ除ク)ト著名ナ

ル日本基督教徒ノ同数ヨリ組成ス

但シ局員ノ多数ハ日本基督教會會員タル可シ

第二項 理事局ハ自統体タルベシ

第三項 局員中有害ナリト認定セラル、者ハ多数ノ投票ヲ以テ之ヲ除名ス

第四項 学院ノ為メニ功績アルカ又ハ其利益ノ為メニ

勞スル人ハ之ヲ名譽局員トス

但シ名譽局員ハ投票ノ權ナシ

第五項 局員総員ノ三分ノ二ヲ以テ満員トス

第六項 憲法ノ改正若クハ修正ニ関スル事ヲ除キ諸ノ

議題ハ出席員ノ多数ヲ以テ決ス、投票同数ナル時ハ局長

裁決ノ權ヲ有ス

第七項 理事局ノ通常會ハ東北学院学年期ノ一週間内

ニ開ク可シ

第六条 理事局ノ權限

理事局ハ左ノ件ヲ執行スルノ權ヲ有ス

第一項 東北学院ノ職員及教員ヲ任免シ又之ニ関スル

諸般ノ規則ヲ制定シ、又諸教員ノ受持学科ヲ指定スル事

第二項 諸教員及備役者ノ給料ヲ定ムル事

第三項 會計事務ヲ総理スル事

第四項 貸費生ノ費額ヲ定ムル事

第五項 新タニ科程ヲ定ムル事

第六項 卒業生ニ卒業證書ヲ授与スル事

第七項 各学科ノ程度ヲ撰定シ科程表ヲ制定スル事

第八項 入学及月次試験ノ出席勤惰評点行状及崇虔修養ノ為メニ規則ヲ造リ、入学志願者ニ対シテ学院要求ノ件ヲ定ムル事

第九項 東北学院ノ所有ハ之ヲ教育若クハ崇虔修養ノ目的ノ為メニ神聖ナル信用ニ対シ之レカ所有者タルニ適當ナル人ヲ拔擢スル事

第十項 一切ノ所有ニ適當ナル注意ヲナシ且将来増築ス可キ校舍及寄宿舎ヲ管理スル事

但建築費ノ多分合衆国リフオームド教会外国伝道局ノ寄附ニ係ハル間ハ建物ノ雛形模形及ヒ其費額ハ之ヲ該伝道局若クハ在日本ミスシヨンノ協賛ヲ經ヘシ

第十一項 事務ヲ渉ラセン為ニ理事局ハ年会ニ於テ日本人二名、外国人二名ヲ撰定シテ之ヲ常置委員トナス、委員ノ一名ハ必ス局長タル可シ、委員ハ年会ニ於テ理事局ニ報告ヲ為シ、重要ノ事件若クハ至難ノ問題起ルトキハ臨時会ヲ招集ス可シ

第十二項 理事局長ハ必ス常置委員ノ議長タルヘシ

第七条 理事局役員

第一項 局員ハ局長、副局長、書記二名(外国人一名、日本人一名)、及會計トス

第二項 理事局長ハ通常ミスシヨンノ會員タルヘシ

第八条 理事局職務

第一項 局長ハ理事局ノ通常会、臨時及常置委員會ノ議長トナリ、合衆国リフオームトチヨルチ外国伝道局ニ対シ学院ノ利益ヲ代表スルヲ以テ其特務トス、又年報ヲ製シテ之ニ報告スヘシ

第二項 副局長ハ局長不在ノ時其代理タル可シ

第三項 書記ハ理事局一切ノ事務ヲ精密ニ且周到ニ記録シ之ヲ保存スヘシ

第四項 會計ハ職員ノ俸給、建築、土地一切ノ修繕、書籍、理化器械、貸費生ニ給スル費額及諸雜ニ対スル金銭ノ出納ヲ司ル可シ、會計簿ハ何時ニテモ局員ノ要メニ応シ閲覧ニ供スヘシ、又精密ナル會計年簿ヲ製シ、理事局年会ニ於テ其報告ヲ為ス可シ

第九条 学院ノ職員

第一項 学院ノ職員ハ院長、副院長、幹事及二名ノ掌書ヲ以テ組織ス

但掌書ハ日本人一名、外国人一名タルヘシ

第二項 院長ハ通常日本人タル可シ

第十条 学院職員ノ職務

第一項 院長ハ教員会ノ通常会及臨時会ノ議長トナリ、学院ノ規則ヲ執行シ、戒規ヲ行ヒ諸学科ヲ監督シ、

殊ニ学院ノ利益ヲ公衆ニ代表シ公会ノ議長トナリ、学院ノ情況、進歩及必要ニ関シ年報ヲ製シ理事局ニ出ス可シ

第二項 副院長ハ院長不在ノ時其代理タル可シ

第三項 幹事ハ左ノ職務ヲナスヘシ

(甲) 学生ヨリ月謝及他ノ学費ヲ募集シ、之ヲ會計ニ納ム可シ

(乙) 学院ノ土地建物等ヲ守リ、之ヲ修繕スル時會計ヲ補助スヘシ

(丙) 理事局ノ規則及院長ノ指揮ニ従ヒ欠席届ヲ聞届ケ、

又院長学院ノ戒規ヲ執行スルト、信書ノ往復ヲナスト

キ之ヲ補佐スヘシ

第四項 掌書ハ理事局ノ規則ニ従ヒ、書籍室ノ事務ニ執掌シ、又年表ヲ製シテ之ヲ理事局ニ出ス可シ

第十一条 教員会

第一項 予科及本科ノ教員会ハ院長教員及幹事ヨリ組成ス、囑託教員及補助教員ハ客員トシテ会場ニ招ク事アル可シ

第二項 神学部教員会ハ院長及神学部ノ教員ヲ以テ組織ス、囑託教員及幹事ハ客員トシテ会場ニ招ク事アルヘシ

第三項 教員会ハ既定シタル事件ノ外其事務ヲ処分ス

ル為メニ必要ナル役員ヲ撰定スル事アルヘシ

第十二条 教員会ノ権限

教員会ハ入学志願者ヲ許否シ、緊要ナル場合ニ於テ戒規ヲ司トリ、学生ヲ停止シ或ハ退学シ、理事局ニ対シテ卒業証書ヲ授与スルニ適當ナル試験ヲ卒ヘタル学生ヲ薦挙シ、且教授ニ関スル事件ヲ決定ス可シ

第十二条 追加

憲法ハ理事局ノ通常会ニ於テ局員三分ノ二以上ノ投票ニヨリ改正スル事ヲ得

但六ヶ月以前ニ全局員ニ其旨ヲ通知ス可シ

シユネーダー氏動議ニヨリ理事局ノ役員ヲ撰挙ス、其結果左ノ如シ

局長 ダブルユー、イー、ホーイ教師

副局長 押川方義教師

日本人書記 藤生金六教師

外国人書記 シユネーダー教師

會計 ホーイ教師

シユネーダー氏動議ニヨリ理事局ノ学院職員ヲ撰挙ス、其結果左ノ如シ

院長 押川方義教師

副院長 ウィルリアム、イー、ホーイ教師

幹事 五十嵐良碩氏

掌書 ウィルリアム、ホーイ教師

予科及本科ノ教員ヲ撰定スル事左ノ如シ

押川方義教師 聖經教授

デー、ビー、シュネーダー教師

ウイリアム、イー、ホーイ教師

心理学及ギリキ語教授

ヘンリー、ケイ、ミラル教師

藤生金六教師

熊谷駒之助教師

唐沢造酒氏

鐸木近吉氏

真山良氏

松浦鳳之進氏

奥太一郎氏

金成兵助氏

補助

和漢学教授

訳読及歴史教授

訳読及歴史補助

佐藤庸男氏 体操教授補助

神学部ノ教員ヲ撰定スル事左ノ如シ

押川方義教師 聖經及組織神学教授

ダブユール、イー、ホーイ教師 解釈神学教授

デー、ビー、シュネーダー教師 組織神学実

践神学教授

セームル、デー、モール教師 歴史神学教授

藤生金六教師 自然神学教授

熊谷駒之助教師 歴史神学教授

ヘンリー、ケイ、ミラル教師 基督教倫理及

証拠論教授

囑託教員 唐沢造酒氏 独逸語教員

松浦鳳之進氏 和漢学教員

次キニ理事局ハ全員ヲ挙ケテ諸規則及一覽表ヲ制定ス

ル委員トナス

各委員ヨリ諸般ノ事務進行シ居ル旨ノ報告アリテ閉会

ス

(理事會記録)

五三 学科課程の改正

(明治二十五年九月六日)

明治廿五年九月六日仙台市東三番丁七十五番地ニ於テ

議長ホーイ氏ノ祈禱ヲ以テ開会

出席 全員

各部ノ学科課程ヲ定ムル事左ノ如シ

予科及本科

予科第一年級

第一期

一 修身講話

業一週授
業時間

一時間

二 和漢学 講読、作文、習字

五時間

三 英学 訳読、綴字、発音、習字

十時間

四 数学 算術

五時間

五 地理 日本地理

二時間

六 図画 // 一時間

七 体操 // 三時間

全断

第二期

全断

第三期

予科第二年級

第一期

一 修身講話

業一週授
業時間

一時間

二 和漢学 講読、作文

四時間

三 英学 訳読、綴方、書取、発音

九時間

四 数学 代数

五時間

五 歴史 日本歴史

二時間

六 図画

一時間

七 体操

三時間

全断

第二期

全断

第三期

全断

予科第三年級

第一期

一 修身講話

業一週授
業時間

一時間

二 和漢学 講読、作文

三時間

三	英学	訳読、文法、綴方、書取、作文	〃	八時間	八	図画	〃	一時間
四	数学	代数、幾何	〃	四時間	九	体操	〃	二時間
五	歴史	支那史	〃	一時間	二期			
六	地理	万国地理	〃	二時間	全断			
七	図画		〃	一時間	三期			
八	体操		〃	三時間	全断			
					本科第二年度			
					第一期			
					二期			
					三期			
					全断			
					本科第一年度			
					第一期			
					二期			
					三期			
					全断			
一	修身講話		業一週授	一時間	一	修身講話		業一週授
二	和漢学	講読、作文	〃	三時間	二	和漢学		〃
三	英学	訳読、文法、会話、作文	〃	八時間	三	英学		〃
四	数学	代数、幾何	〃	四時間	四	数学		〃
五	歴史	万国史	〃	二時間	五	歴史		〃
六	地理		〃	二時間	六	地理		〃
七	図画		〃	二時間	七	体操		〃
八	化学		〃	二時間	八	化学		〃
九	万国史		〃	二時間	九	万国史		〃
十	三角弧三角(第三期)		〃	四時間	十	三角弧三角(第三期)		〃
十一	ヨリ測量航海術製図		〃	四時間	十一	ヨリ測量航海術製図		〃
十二	英語	修辭、作文、英文学	〃	四時間	十二	英語		〃
十三	和漢学	講読、作文	〃	三時間	十三	和漢学		〃
十四	修身講話		〃	一時間	十四	修身講話		〃
十五	初等物理学		〃	二時間	十五	初等物理学		〃
十六	物理及化学		〃	二時間	十六	物理及化学		〃
十七	地文学		〃	一時間	十七	地文学		〃

		本科第三年級 (第一期)					
一	修身講話	業一週授 時間	一時間	三	英 学	高等英文学(詩歌之類)	一時間
二	和漢学	業一週授 時間	二時間	四	数 学	微分(第二期ヨリ積分)	二時間
三	英 学	業一週授 時間	三時間	五	理 化	天文学(第二期ヨリ地質学)	二時間
四	数 学	業一週授 時間	三時間	六	政 治	日本憲法、政治学、行政学 社会学	四時間
五	理 化	業一週授 時間	三時間	七	哲 学	倫理学、西洋哲学史	七時間
六	政 治	業一週授 時間	二時間	八	体 操		二時間
七	哲 学	業一週授 時間	四時間	予科本科ノ随意科			
八	体 操	業一週授 時間	二時間	一	聖 書	各級共ニ	業一週授 一時間
		第二期		但将来神学志願ノ者ハ之ニ出席スヘシ			
		全 断		二	独逸語	本科二年ヨリ三年ノ終マテ	三時間
		第三期		三	拉典語	本科四年	二時間
		本科第四年級		四	希臘語	本科三年ヨリ	二時間
		第一期		五	仏 語	本科四年ヨリ	三時間
一	修身講話	業一週授 時間	一時間				
二	和漢学	業一週授 時間	二時間				

英語神学部

第一年級

第一期

- 一 神学総論
- 二 徴証論及自然神学
- 三 聖書歴史及地理
- 四 新約聖書原文弁
- 五 新約聖書総論
- 六 教会歴史
- 七 哲学
- 八 聖書註釈

業一週授

一時間

〃 三時間

〃 二時間

〃 二時間

〃 二時間

〃 二時間

〃 三時間

〃 一時間

第二期

一 神学総論

業一週授

一時間

二 徴証論及自然神学

〃 三時間

三 聖書歴史及地理

〃 二時間

四 新約聖書原文弁

〃 二時間

五 旧新約書総論

〃 二時間

六 教会歴史

〃 三時間

七 哲学

〃 一時間

第三期

業一週授

一時間

一 神学総論

二 徴証論及自然神学

三 聖經及基督教古事

四 新約聖書原文弁

五 旧約聖書総論

六 教会歴史

七 新約聖書神学

八 聖書註釈

第二年級

第一期

一 組織神学

二 基督教倫理

三 旧約聖書原文弁

四 旧新約書神学

五 教会歴史

六 聖書註釈

七 仏教及神道

〃 三時間

〃 三時間

〃 二時間

〃 二時間

〃 三時間

〃 一時間

〃 二時間

第二章 東北学院への成長

九	英学	第三期	〃	三時間	八	英学	第二期	〃	三時間
一	聖書及聖書神学	第三期	業一週授 一時間	一時間	一	聖書及聖書神学	第二期	業一週授 一時間	一時間
二	新旧約書総論	第三期	〃	二時間	二	組織神学	第二期	〃	二時間
三	新旧約書原文弁	第三期	〃	二時間	三	教理歴史	第二期	〃	三時間
四	組織神学	第三期	〃	二時間	四	基督教倫理	第二期	〃	三時間
五	比較宗教	第三期	〃	二時間	五	教会神学	第二期	〃	二時間
六	仏教及神道	第三期	〃	二時間	六	仏教及神道	第二期	〃	二時間
七	社会学	第三期	〃	二時間	七	哲学	第二期	〃	二時間
八	和漢学	第三期	〃	一時間	八	英学	第二期	〃	三時間
九	英学	第三期	〃	三時間			第三期		
		第三年級							
		第一期							
一	聖書及聖書神学	第一期	業一週授 一時間	一時間	一	聖書及聖書神学	第一期	業一週授 一時間	一時間
二	組織神学	第一期	〃	二時間	二	組織神学	第一期	〃	二時間
三	教理歴史	第一期	〃	三時間	三	比較神学	第一期	〃	三時間
四	基督教倫理	第一期	〃	三時間	四	教会政治	第一期	〃	二時間
五	説教学	第一期	〃	一時間	五	基督教倫理	第一期	〃	三時間
六	仏教及神道	第一期	〃	二時間	六	仏教及神道	第一期	〃	二時間
七	哲学	第一期	〃	二時間	七	哲学	第一期	〃	一時間
		第一期			八	英学	第一期	〃	三時間
		第一期				閉会	第一期		

(理事会記録)

五四 職員招聘規則等の制定

(明治二十五年九月七日)

明治二十五年九月七日仙台市東三番丁七十五番地ニ於テ議長ホーイ氏ノ招集ニヨリテ祈禱ヲ以テ開会ス
全員出席

(中略)

委員ヨリ提出セラレタル下ノ如キ規則ヲ可決セリ

職員招聘規則

才一條 凡ソ東北学院理事局ニ招聘セラル、職員ハ聘者ト被聘者トノ間ニ締結スル条約書ニ記名捺印ス可シ
才二條 凡ソ職員ニシテ其職ニ任²ヘサル者ハ本人ニ対シ一ヶ月以前ニ其事情ヲ通知シタル上何時ニテモ解職スル事アル可シ
才三條 凡ソ職員ニシテ忠誠ニ其職務ヲ尽サ、ルカ若クハ其行為ノ東北学院ノ主義ニ反シ其目的ニ害アリト認定スル時ハ何時ニテモ解職スル事アル可シ
才四條 凡ソ職員ニシテ辞職セントスル者ハ必ス二ヶ月

以前ニ其願意ヲ理事局ニ通知ス可シ

才五條 凡ソ職員ニシテ疾病若クハ他ノ事故ニ依リ一ヶ月以上其職務ヲ継続スル能ハサルトキハ理事局ノ見込ヲ以テ之ヲ解職スル事アル可シ

財政規則

才一條 幹事ハ学院ノ雜費中必要ナリト認ムル時ハ一ヶ月金五円以内支出ヲ為スヲ得
才二條 会計ハ学院ノ為メニ不意ニ起リタル出費ニ付キ一事件金十円以内ノ支出ヲ為スヲ得

貸費生規則

才一條 予科生及本科生タル貸費生ノ月額ハ金五円以内トス、未婚神学生ノ貸費生ノ月額ハ金六円以内ニシテ已婚者ノ月額ハ金八円ヲ超過ス可カラス
才二條 貸費生志願者ハ先ツ神学部職員ニ於テ其品性、目的及資性ニ付キテ試験ヲ受ク可シ、若シ該職員ニ於テ薦挙スル時ハ理事局ハ此者ニ補助ヲ与ヘ本人及保証人連名ニテ其指定ノ学科卒業ニ至ルマテ在学シ卒業ノ後モ基督敎事業ニ従事スルノ約条書ヲ差出サシムヘシ

(後略)

(理事会記録)

五五 東北学院開院式次第の決定

(明治二十五年十一月十四日)

(理事会記録)

明治二十五年十一月十四日、仙台〔市〕東三番丁七十五番地ニ於テシムネーダー氏ノ祈禱ヲ以テ開会
本年十一月十八日午后才二時ニ挙行スル所ノ東北学院
開院式ノ順序ヲ左ノ如ク定ム

開院式執行順序

- 一、奏 楽
- 二、聖書朗読
- 三、讚美歌(第二百五十六)
- 四、頌告³⁾
- 五、勅語奉読
- 六、副院長ウイリアム、イー、ホーイ氏演説
- 七、開院祝歌
- 八、院長押川方義氏演説
- 九、讚美〔歌〕(英語)
- 十、宮城県知事演説
- 十一、仙台市長演説
- 十二、国歌

十三、国家万歳祝賀

十四、祝 禱

〔後略〕

五六 H・K・ミラー「東北学院開校式」

〔英文〕

(一八九二年十一月十八日)

五七 東北学院開院式におけるW・E・ホーイの

演説

〔英文〕

(一八九二年十一月十八日)

五八 各学科の年限に関する協議

(明治二十六年一月二十三日)

明治二十六年一月廿三日仙台市東三番丁七十五番地ニ於テ議長ホーイ氏ノ招集ニヨリ全氏ノ祈禱ヲ以テ開会
出席、ホーイ氏、押川氏、シユネーダー氏、ミラル氏

藤生氏

- 一、書記前会ノ記録朗読 可トス
- 一、押川氏動議、規則中ニ各科ノ年期ヲ記入シアラサルヲ以テ更ニ予科三年、本科四年、神学部三年ト記入シ政府ニ届ケ出ス事ニ決ス

〔後略〕

(理事会記録)

五九 規則改正認可申請書類

(明治二十六年二月二十一日)

規則改正認可願

今般本院規則改正致候ニ付御認可被成下度別冊相添此段

奉願候也

明治二十六年二月二十一日

東北学院長 押川方義郎

宮城県知事 船越 衛殿

東北学院一覽

職員

院長	押川方義(愛媛)
副院長	ウヰキリヤム(米国)
幹事	五十嵐良碩(新潟)
掌書	ヘンリー、ケル(米国)
全	藤生金六(群馬)
理化器械主管	鐸木近吉(福島)

教員

聖書及神学教授	押川方義(愛媛)
神学心理学希臘語教授	ウヰキリヤム(米国)
神学哲学英文学教授	デビット、ビー、シユネーダー(米国)
歴史神学教授	ゼーラス、ピール(米国)
倫理徴証学英语教授	ヘンリー、ケル(米国)
自然神学社会学教授	藤生金六(群馬)
歴史神学経済学	熊谷駒之助(東京)
英語教授	バチエロル、オフ、アールツ
外国語教授	バチエロル、オフ、アールツ
理化教授	鐸木近吉(福島)
農学士	鐸木近吉(福島)

数学教授	真山 良(千葉)
和漢学教授	松浦 鳳之進(東京)
訳読及歴史教授	奥 太一郎(東京)
訳読及歴史補助	金成 兵助(宮城)
体操教授補助	佐藤 庸男(宮城)
普通部	
職員	
院長	押川 方義(愛媛)
副院長	ウキリヤム、イ、ホーイ(米国)
書記	デビット、ビー、シユネーダー(米国)
全	唐 沢 造 酒(長野)
幹事	五十嵐 良 碩(新潟)
舎監	萩原 金太郎(群馬)
教員	
哲学及英文学教授	バチエロル、オフ、アール、デビット、ビー、シユネーダー(米国)
心理学及 ギリキ語教授	バチエロル、オフ、アール、ウキリヤム、イ、ホーイ(米国)
倫語英語教授	マスタール、オフ、アール、ヘンリー、ケール(米国)
社会学教授	藤 生 金 六(群馬)
経済学及英語教授	バチエロル、オフ、アール、熊 谷 駒之助(東京)

外国語教授	バチエロル、
理化学教授	オフ、アール、唐 沢 造 酒(長野)
数学教授	農学士 鐸 木 近 吉(福島)
和漢学教授	真山 良(千葉)
訳読及歴史教授	松浦 鳳之進(東京)
訳読及歴史補助	奥 太一郎(東京)
体操教授補助	金成 兵助(宮城)
	佐藤 庸男(全)

東北学院規則

第一条 名称

本校ヲ東北学院ト称ス

第二条 目的

本院ノ目的ハ高等教育ヲ授クルニアリ

第三条 学科

本院ノ学科ヲ分チテ予科本科学科及他ノ専門部トス
但シ他ノ専門部ハ追テ之ヲ設ク

一予科ノ課程ヲ三学級二分チ本科ノ課程ヲ四学級二分チ
神学科ノ課程ヲ三学級二分チ一学年ヲ以テ一学級ヲ終
ルモノトス

一予科本科及神学科ノ各課程ヲ定ムル事左ノ如シ

但シ時宜ニヨリ変更スル事アルベシ

一 修身講話 予科第一年級 第一期 老週授業時間 一時間

二 和漢学 講読、作文、習字 全 五時間

三 英学 訳読、綴字、発音、習字 全 十時間

四 数学 算術 全 五時間

五 地理 日本地理 全 二時間

六 図画 全 一時間

七 体操 全 三時間

予科第一年級 第二期 前全断
第三期 前全断

随意科

聖書 老週授業時間 一時間

但シ将来神学志願ノ者ハ之ニ出席スベシ

予科第二年級 第一期

一 修身講話 老週授業時間 一時間

二 和漢学 講読、作文 全 四時間

三 英学 訳読、読方、書取、発音 全 九時間

四 数学 代数 全 五時間

五 歴史 日本歴史 全 二時間

六 図画 全 一時間

七 体操 予科第二年級 第二期 前全断

全 三期 前全断

随意科

聖書 老週授業時間 一時間

但シ将来神学科志願ノ者ハ必ズ之ニ出席スベシ

予科第三年級 第一期

一 修身講話 老週授業時間 一時間

二 和漢学 講読、作文 全 三時間

三 英学 訳読、文法、読方、書取、作文 全 八時間

四 数学 代数(第二期ヨリ平面幾何) 全 四時間

五 歴史 支那史 全 一時間

六 地理 万国地理 全 二時間

七 図画 全 一時間

八 体操 予科第三年級 第二期 前全断

全 三期 前全断

第二章 東北学院への成長

	全	第三期 前全断							
聖書	随意科								
但シ将来神学志願ノ者ハ必ズ之ニ出席スベシ									
	本科第一年級	第一期							
一 修身講話	業時間	一時間							
二 和漢学	全	三時間							
三 英学	全	八時間							
四 数学	全	四時間							
五 歴史	全	二時間							
六 理化	全	二時間							
七 地理	全	一時間							
八 図画	全	一時間							
九 体操	全	二時間							
	本科第一年級	第二期 前全断							
	本科第一年級	第三期 前全断							
聖書	随意科								
但シ将来神学志願ノ者ハ之ニ出席スベシ									
	本科第二年級	第一期							
一 修身講話	業時間	一時間							
二 和漢学	全	三時間							
三 英学	全	四時間							
四 数学	全	四時間							
五 歴史	全	三時間							
六 理化	全	三時間							
七 体操	全	二時間							
	本科第三年級	第二期 前全断							
	本科第三年級	第三期 前全断							
聖書	随意科								
但シ将来神学志願ノ者ハ之ニ出席スベシ									
	本科第三年級	第一期							
一 修身講話	業時間	一時間							
二 和漢学	全	二時間							

三	英 学	英文学史	全	三時間																
四	数 学	解析幾何(第三期ヨリ微分)	全	三時間																
五	理 化	生理学(第二期ヨリ動物及植物学)	全	三時間																
六	政 治	経済学(第三期ヨリ社会学)	全	二時間																
七	哲 学	論理学、心理学	全	四時間																
八	体 操		全	二時間																
		本科第三年級	第二期	全断																
		全	第三期	全断																
		随意科																		
		聖書	老週授業時間	一時間																
		但シ将来神学志願ノ者ハ之ニ出席スベシ																		
		独逸語	全	三時間																
		拉典語	全	二時間																
		拉典語	全	三時間																
		希臘語	全	二時間																
		仏語	全	三時間																
		但シ将来神学志願者ハ之ニ出席スベシ																		
		聖書	老週授業時間	一時間																
		随意科																		
		本科第四年級	第二期	全断																
		全	第三期	全断																
		随意科																		
		天文学(第二期ヨリ地質学)	全	二時間																
		日本憲法、政治学、行政法及社会学	全	四時間																
		倫理学、西洋哲学史	全	六時間																
		八 体 操	全	二時間																
		本科第四年級	第二期	全断																
		全	第三期	全断																
		随意科																		
		院長	押川 方義(愛媛)																	
		副院長	ウキリヤム、イ、ホーイ(米国)																	
		書記	ダビッド、ピール(米国)																	
一	修身講話		第一期	一時間																
二	和漢学	支那及日本文学史	全	二時間																
三	英 学	高等英文学(詩歌之類)	全	一時間																
四	数 学	微分(第二期ヨリ積分)	全	二時間																
		老週授業時間																		
		神学 部																		
		職員																		

第三年級		第一年期		第二年期		第一年期	
一	組織神学	老週 授業	三時間	五	倫理学	全	二時間
二	基督教倫理	全	三時間	六	心理学	全	二時間
三	教理歴史	全	二時間	七	英学	全	三時間
四	説教学	全	一時間	八	和漢学	全	二時間
五	信条及問答書	全	二時間	九	英学	全	三時間
六	聖書註釈	全	一時間	一	聖書及聖書神学	老週 授業	一時間
七	比較宗教	全	二時間	二	新旧約全書総論	全	二時間
八	仏教及神道	全	二時間	三	新旧約書原文弁	全	二時間
	第二期ヨリ教会神学	全	一時間	四	教会歴史	全	二時間
	第三期ヨリ教会政治	全	一時間	五	比較宗教	全	二時間
	第三年級	第三期	全断	六	仏教及神道	全	二時間
	全	第二期	全断	七	社会学	全	二時間
	邦語神学部	第一期	二時間	八	和漢学	全	一時間
	第一年級	老週 授業	二時間	九	英学	全	三時間
一	聖書及聖書神学	全	一時間	第二期ヨリ神学総論	全	二時間	
二	自然神学及徴証論	全	二時間	第三期ヨリ組織神学	全	二時間	
三	新約書原文弁	全	二時間	但シ教会歴史ハ第一期ニ終リ神学総論ハ第二期	全	二時間	
四	教会歴史	全	二時間				

二終ル	二年級	二期	全	断
全	二年級	三期	全	断
一 聖經及聖經神学	三年級	一期	全	一時間
二 哲学		全	全	二時間
三 組織神学		全	全	二時間
四 教会歴史		全	全	三時間
五 基督教倫理		全	全	三時間
六 説教学		全	全	二時間
七 仏教及神道		全	全	二時間
八 英学		全	全	三時間
	二期ヨリ牧会神学	全	全	二時間
	三期ヨリ比較神学	全	全	三時間
	教会政治	全	全	二時間
終ル	但シ説教学ハ第一期ニ終リ教理歴史ハ第二期ニ	全	全	二時間
	三年級	二期	全	断
		三期	全	断

学年及学期

一 学年ハ九月十一日ニ始マリ翌年九月十日ニ終ル

一 学年ヲ分チテ三学期トシ第一学期ハ九月十一日ヨリ十二月廿四日ニ至リ第二学〔期〕ハ一月八日ヨリ三月廿一日ニ至リ第三学期ハ四月八日ヨリ六月卅日ニ至ル

一 一日ニ至リ第三学期ハ四月八日ヨリ六月卅日ニ至ル

休業

一 学年中休業日ハ日曜日土曜日大祭日グッドフライデー、アツセンションデイ夏期冬期及春期ナリトス

夏期休業 七月一日ヨリ九月十日ニ至ル

冬期休業 十二月廿五日ヨリ翌年一月七日ニ至ル

春期休業 四月一日ヨリ四月七日ニ至ル

崇虔脩養

一 生徒ハ毎朝講堂ニ集マリ道德敬虔及靈性ヲ脩養セン事ヲ要ス崇拜ハ通常奏樂唱歌頌告及聖書朗読ヨリ成ル又生徒ハ自己集会ヲナシ靈性ノ脩養及頌告ヲナスヲ奨励ス

入学及在学

一 入学ノ期ハ通常毎年九月六日ヨリ十日迄トス

但シ各級トモ現級生ト共ニ進ミ得ルノ学力アル者ハ試験ノ上臨時入学セシメ一ヶ月ヲ経テ教員会ニ於テ成績充分ト認ムルモノハ之ヲ本入学トシ不充分ト認

ムルモノハ入学ヲ許サズ

一予科一年級へ入学ヲ許ス可キモノハ高等小学卒業ノモノカ又ハ左ノ試験ニ及第スルモノトス

但シ尋常小学ヲ卒業セザルモノハ十四年以上ノモノ

ニ非レバ入学ヲ許サズ

日本外史 仮名交リ文章 初等数学

一予科二年以上ニ入学セント欲スルモノハ其級ノ学脩シタル科目ノ試験ヲ受ケ之ニ合格シタルモノトス

一邦語神学ニ入学ヲ許ス可キ者ハ其信仰志願ノ旨趣及普通教育ノ有無ト聖書ニ対スル智識ニ就キ試験ニ合格ノモノトス

モノトス

一英語神学ニ入学ヲ許スベキ者ハ本学院ノ本科ヲ卒業シタルモノ若シクハ之ニ均シキ学力ヲ有スルモノニシテ

其信仰及志願ノ旨趣ニ就キ試験ニ合格ノモノトス

一入学ヲ願フモノハ入学試験ノ期日ニ先チ左式ニ拠リ履歴書相添へ入学志願書ヲ差出ス可シ

入学願書

(用紙美濃紙)

私儀今般御学院本(予)(神)科第何年級へ試業ノ上入学仕度履歴書相添へ此段相願候也

住所族籍

年月日

氏 名(印)

何年何ヶ月

東北学院院长 押川方義殿

履歴書

(用紙美濃紙)

氏 名

一出生年月日

一 生国地名

一本籍又ハ寄留現在住所番地

一族 籍

一父兄ノ官位爵或ハ職業

一何年何月ヨリ何某ニ就キ或ハ何学校ニ入り

何学脩業何年何月何級卒業或ハ何学校へ転

学現在何学校何年級ニアリテ脩業

一 入学ノ許可ヲ得タルモノハ十年以上ノモノニシテ仙台市ニ住居ノ戸主ヲ保證人トナシ左式ニヨリ在学証書ヲ差出ス可シ

在学証書

私儀今般入学御許可相成候ニ付テハ在学中御規則等堅ク相守リ可申候依而証書如件

年月日

氏 名(印)

何年何ヶ月

住所族籍戸主何誰ノ子(弟)

東北学院長 押川方義殿

何誰儀今般入学御許可相成候ニ付テハ御規則等堅ク為相守万一在学中不都合ノ廉有之節ハ私一切引受ケ可申候疾病又ハ其他不得已ノ事故アリテ退学願度節ハ私ヨリ其理由申立出願可仕候依而保証如此ニ候也

但シ向后宿処移転ノ節ハ速ニ御届出仕候也

住所族籍

年月日

保証人 何之誰(印)

試業

一 定期入学試験ハ第一学年第一学期始業ノ五日前ヨリ始ム臨時入学試験ハ臨時ニ之ヲ行フ

一 予科及本科学期試験ハ每学期ノ終リニ於テ本学期中履脩シタル諸課目ノ試験ヲ行フモノトス 神学科試験ハ每学期ノ終リニ於テ本学年中履脩シタル諸課目ノ試験ヲ行フモノトス

評点

一 試業ノ成績ハ日課及学期試験ノ点数ヲ以テ評定シ(一科目ニ付キ一百ヲ以テ最高点トス)

一 平常点ハ其学期中履脩シタル課業及出席ノ成績ヲ評スルモノトス

一 日課評点ハ毎月末之ヲ平均ス

一 学期評点ハ平常点ノ平均点ニ試業ノ平均点ヲ加へ之ヲ二分シタルモノトス

一 予科及本科ノ学年評点ハ学期評点ノ平均点ヲ以テ之ヲ定ム

一 神学科ノ学年評点ハ平常点ヲ三分シ之ヲ試業点ニ加へタルモノトス

一 随意科ノ評点ハ之ヲ正科ノ評点ニ加へズ

一 入学試業ノ評点ハ総平均六十点以上トス六十点以下ト

雖ドモ二科目以上四十点以上ナルトキハ再試験ヲナス
ト雖ドモ一課ニシテモ三十点以下ナルトキハ之ヲ許サ
ズ

一 学年総平均点七十点ニ滿タザルカ或ハ二科目以上六十点
ニ充タザルカ或ハ一科ニテモ五十点ニ充タザルモノハ
進級スルヲ得ズ

一 随意科ノ学年評点六十点ニ充タザル者ハ其課目脩業ヲ
停止ス

一 随意科ト雖ドモ教員会ノ許シナクシテ猥リニ廢課スル
ヲ得ズ

欠 席

一 生徒ハ些少ノ事故ノ為メニ猥リニ欠席スルヲ得ス若シ
疾病若シクハ不得已事故ニヨリ欠課スルモノハ其事由
ヲ詳記シタル届書ヲ当日モシクハ翌日ニ於テ幹事迄差
出ス可シ

一 通学生ハ先ノ手続ヲ經保証人連書ノ上届出ツベシ

但シ二日以内ニ届出デズシテ後課業ニ欠席スルトキ
ハ欠席ノ日数ト其事由ヲ詳記シタル保証人連書ノ届
書ヲ差シ出スベシ

一 幹事其届書ニヨリ欠席ヲ許スヲ得ルト雖ドモ欠席ノ日
数一週間ヲ超過スルトキハ院長ニ其事由ヲ報ズベシ

一 無断欠席ハ一回毎ニ平常点ノ一点ヲ除去ス一ヶ月ニ及
ブトキハ退学ト見做スベシ

一 学期試験ノ当日疾病或ハ不得已事故ニヨリ教員会ノ許
可ヲ得テ欠席シタルモノハ次学期ノ始メニ於テ再試験
ヲナス事アルベシ

一 凡テノ試験ニ欠席シ其許可ヲ得ザル者ハ退学ト見做ス
ベシ

行 状

一 生徒ハ品行ヲ方正ニシ思想ヲ廉潔ニシ智ヲ研キ徳ヲ脩
メ親睦ヲ厚フシ課業ヲ怠ラズ信義ヲ重ンジ団結ヲ堅フ
シ職員及教員ニ從ヒ学院ノ規則ヲ遵奉ス可シ猥リニ不
從順ノ行為ヲナシ又不行状ナルモノハ退学セシム

一 学業ニ見込ナキ生徒ハ退学セシムル事アル可シ

一 生徒ハ学院ニ対シ請願權ヲ有ス而シテ願書ハ凡テ院長
ノ許ニ差出シ平常ノ如ク課業ヲ脩メ以テ其処置ヲ待ツ
可シ

一 徒党ガマシキ挙動ヲナシ課業ニ欠席スルモノハ退校セ
シムル事アル可シ

一 学院附属ノ書籍理化器械其他一切ノ物品ヲ毀損スルモ
ノハ本人其實ニ任ジ相当ノ金額ヲ弁納スベシ

一 生徒ハ授業時間ニ先ツ必ず教授室ニ於テ各自ノ席ニ着

キ居ルベシ又授業中大声ヲ発スル等凡テ他人ノ学業ヲ妨クル可ラス

一 生徒ハ教員会ノ許可ヲ経ズシテ自級ノ或課業ニ欠席シ又ハ他級ノアル課業ニ出席スル事ヲ得ズ

費用

一 生徒ハ入学ノ際束脩トシテ金一円ヲ納ム可シ

一 生徒ハ授業料トシテ金七拾銭ヲ納ム可シ入塾生ハ授業料ノ外ニ食料トシテ毎月二円七拾銭(物価ノ高低ニヨリ変更アリ)ヲ其月ノ五日迄ニ幹事ニ納ムベシ

但シ定日ニ於テ納付セザルモノハ保証人ヨリ徴収ス

一 生徒ノ父兄又ハ引受人ヨリ依頼アラバ生徒学資ノ幾分ヲ学院ニ預リオキ精々注意シテ之ヲ渡シ少年生徒理財ニ慣レザル者ノ金員ヲ浪費スルノ憂ナカラシム

退学

一 生徒疾病或ハ不得已事故ニヨリ退学セント欲スルトキハ其事由ヲ詳記シ保証人連署ノ上退学願書ヲ差出スベシ

但シ退学ヲ願フ者ハ在学中学院ニ対スル一切ノ負債ハ必ズ之ヲ弁納スベシ

寄宿舎規則

一 生徒ハ行状ニ付キ院長ノ旨ヲ戴シ幹事及舎監ノ監督ヲ受クベシ

一 入舎セント欲スル生徒ハ其旨ヲ幹事ニ申出其許可ヲ得タル上左式ニヨリ入舎証書ヲ差出ス可シ

入舎証

何ノ誰儀今般入舎相願候ニ付テハ在舎中舎則ヲ遵奉スルハ勿論猥リニ退舎等致間敷候且ツ本人身上ニ関スル一切ノ事ハ保証人ニ於テ引受ケ決シテ御迷惑相掛申間敷候依テ保証人連署ノ上入舎証書如件

族 籍

何 誰(印)

何年何ヶ月

族 籍

年月日

保証人 何 誰(印)

何年何ヶ月

東北学院院长 押川方義殿

一 在舎生徒ハ起臥出入等規則ニ從ヒ時刻ヲ嚴守シ寄宿舎管理ノ指揮ニ從フ可シ

一 在舎生徒ハ他人來訪ノ節ハ通常応接所ニテ面会スベシ

一 在舎生徒ハ先ツ幹事ノ認可ヲ得ルニ非レバ疾病ノ故ヲ以テ欠課スルヲ得ズ

但シ疾病ニヨリ欠課シタルモノハ欠課中寄宿舎管理

ノ許可ヲ得ルニ非レバ外出スルヲ得ズ

一 在舎生徒帰舎ノ定刻ニ後ルヽカ又ハ外宿ヲ要スルトキ

ハ其理由ヲ証明シタル保証人連署ノ証明書ヲ寄宿舎管理ニ差出ス可シ

一 在舎生徒ハ舎監モシクハ幹事ノ許可ヲ得ズシテ猥リニ

外泊シ保証人ヨリ其理由ヲ証明シタル證書ヲ差出サザル時ハ退舎セシムルモノトス

一 在舎生徒舎内ノ諸規則又ハ時々ノ告示ヲ遵奉セズ又不良ノ行状アルモノハ退舎ヲ命ズ

一 寄宿舎ハ職員時々巡視スル事アレバ生徒ハ常ニ之ヲ心得居ルベシ

一 舎内細則ハ院長ノ許可ヲ得生徒ノ選定スルモノトス

通学生規則

一 通学生ハ授業時間ノ外通学生扣所ニアリテ勉学シ猥リ

ニ寄宿舎内ニ入ル可ラズ

一 通学生ハ其宿所ヲ事務所ニ届置クベシ

門監規則

一 院門ノ開鎖ハ午前六時及午后十時ヲ以テ定限トス

一 鎖門後ハ職員及小使ノ外ハ鑑札ヲ所持スルニ非レバ出門スルヲ得ズ

書籍室

一 書籍室現在ノ書類ハ英書二千三百卅部和漢書一千三百四十部ニシテ諸学科ヲ学習スルニ最モ有益ナル書類ヲ選定セリ生徒ハ書籍室ノ規則ニ從ヒテ縦覧スルヲ得

理化学器械

一 学院ガ必要ナル理化学器械ヲ備ヘ実験ヲ以テ該科ヲ教授ラナスニ便ナラシム

体操器械

一 学院生徒ノ体操ヲ奨励スルガ為メニ体操器械ヲ備ヘ生徒ノ体育ヲ完全セシメ智徳体三育ノ道ヲ全フセン事ヲ期ス

明治廿五年略曆

一 九月 六 日 入学試験始マル

一 九月 十二日 秋期授業始マル

一 九月 廿二日 秋期皇靈祭

一 十月 十七日 神嘗祭

- 一 十月 三日 天長節
- 一 十月 廿三日 新嘗祭
- 一 十月 廿五日 冬期休業始マル
- 明治廿六年略曆
- 一 一月 一日 四方拝
- 一 一月 三日 元始祭
- 一 一月 八日 冬期授業始マル
- 一 一月 卅日 孝明天皇祭
- 一 二月 十一日 紀元節
- 一 三月 二十日 春期皇靈祭
- 一 三月 三十一日 グードフライデー
- 一 四月 一日 春期休業始マル
- 一 四月 八日 春期授業始マル
- 一 四月 三日 神武天皇祭
- 一 五月 十一日 アツセンシヨンデイ
- 一 六月 三十一日 終業式施行
- 一 七月 一日 夏期休業始マル

内務部長[㊤]

第三課長[㊤]

知事[㊤]

学務係

高岡 松三郎[㊤]

東北学院規則改正之儀ニ付願御指令按

東北学院院长 押川 方義

明治二十六年二月二十一日付願東北学院規則改正之件許可ス

知事

理由

本件ヲ審査スルニ從來ノ規則中ニ改正ヲ加ヘタル重ナル廉ハ其設置目的ニ於テ智徳併行云々トアルヲ高等教育ヲ授クルニアリトシ予科ノ二年ヲ三年ニ各科中ニ倫理講習トアルヲ修身講話ト改メタル等ニシテ其他ニ於テハ從來ノ規則ヲ稍々細密ニ更正シタルモノニシテ指シテ不都合ノ廉モ相見得サルニ付御聴許相成可然欵相伺候

(注・明治二十六年三月八日付)

(県庁文書)

六〇 『東北文学』 発刊の辞

(明治二十六年十月十日)

東北文学の発行

二千五百有余年の間我国民の内層に蘊蓄せられたる潜勢力は米艦の砲声と共に一時に暴発し、凡そ国家の存立に必要な万般の事物は大に其躰面を改め、一躍して文化の躰裁を具ふるに至り、我日本文学界も漸く其歩を進めて日に月に発達し、基督教主義なる諸学校より発行する所の雑誌も亦漸く其数を増加し、同志社文学、青山評論、九州文学等各其健筆を揮て智徳を増進し社会の文化を裨益せんことを務むるに至れり、茲に我東北文学も亦浅学短才を顧みず、敢て此多事なる日本文学界に生れ出ることとはなれり。因て左に東北文学が懐抱して出でたる一二の希望を述て発行の辞に代へんとす。

東北文学は外部の必要よりも寧内部の必要より起りたるものなり、即ち他の諸学校は各其機関雑誌を有すれば我東北文学も亦之を發行せざるべからずと云ふ精神よりも、寧学院内相互の智徳を増進せんとするの希望より出でたるものなり、然り而して万事一として孤立するもの

なきを思へば、我東北文学も或は我日本の文学界に向て多少の影響を及ぼすに至ることなきにしもあらざるべし。

東北文学は宗教を伝播するの機関にあらず、苟も智徳の増進を助くるものは、宗教にもあれ、經典にもあれ、其他百事万般採て批評考究の材料となし、以て智徳の養成を務めんと欲す、即ち東北文学は最も自由なる精神を有するものなり。

東北文学は妄りに錦字繡句を連ねて世を瞞着せんとするものにあらず、必ず一個の問題を発見し之を考究し之を批評し、其結果を吐露して會員相互の意見を叩き併せて大方の高批を仰がんとす。

之を要するに東北文学は自由の精神により、自然と人界とを批評考究し、以て智徳の養成を務むるの手段として出でたるものなり、名づけて東北文学と云ふも純文学を意味するものにあらざるや勿論なり、今や其第一号を發行するに臨み妄りに大言を吐露して龍頭蛇尾の醜躰を呈せんことを恐る、因て東北文学が有する希望の一二を陳述すること斯の如し。

(『東北文学』 一号 明治二十六年十月十日)

六一 W・E・ホーイ書簡 (キャレンダー宛)

[英文] 一八九四年九月二十九日

和漢学 // 六時間

日本語 // 一時間

英語 // 九時間

日本歴史及日本地理 // 二時間

数学 // 四時間

画学 // 一時間

体操 // 三時間

六二 W・E・ホーイ書簡 (キャレンダー宛)

[英文] (一八九五年一月十一日)

第二期、第三期、同前、但英語科習字時間ヲ書取教授トナス

六三 普通科と専修部の設置

(明治二十八年三月二十九日)

第二年、第一期、第二期、第三期

修身講話 // 一週 一時間

和漢学 // 六時間

英語 // 八時間

数学 // 四時間

日本歴史及地理 // 二時間

地文学 // 二時間

画学 // 一時間

体操 // 三時間

明治二十八年三月二十九日、シュネードル氏〔宅〕ニ於テ、熊谷氏ノ祈禱ヲ以テ開會、出席シュネーダー、モール、ミラー、斎藤、熊谷、押川英邦兩語前回ノ記録朗読、可トス理事局ハ午後一時マデ臨時散會

東北学院予科本科ノ学科課程ヲ五年間トナシ、次ノ如ク議決ス

第三年、第一期、第二期

修身講話 // 一週 一時間

和漢学 // 五時間

第一年、第一期 修身講話 一週 一時間

		第四年、第一期			
英語	数学	支那歴史及地理	生理	体操	第三期、同前、但此期ヨリ生理ノ座ニ植物学ヲ教授ス
〃	〃	〃	〃	〃	
八時間	四時間	二時間	二時間	三時間	
		第五年、第一期			
修身講話	和漢学	英語	数学	万国歴史及ヒ地理	植物
〃	〃	〃	〃	〃	〃
一週一時間	五時間	八時間	四時間	二時間	三時間
英語	和漢学	修身講話	数学	万国歴史	植物
〃	〃	〃	〃	〃	〃
七時間	五時間	一週一時間	四時間	二時間	三時間
		第二期、第三期、同前、但此二期ノ植物学ノ代リ			
数学	各国歴史	理科	化学	理科	植物学
〃	〃	〃	〃	〃	〃
四時間	二時間	二時間	二時間	二時間	三時間
修身講話	和漢学	英語	数学	各国史	解説天文
〃	〃	〃	〃	〃	〃
一週一時間	五時間	六時間	四時間	七時間	四時間
英語	数学	各国歴史	理科	化学	植物学
〃	〃	〃	〃	〃	〃
六時間	四時間	二時間	二時間	二時間	三時間

第一年		第二年	
解説天文	// 一時間	修身講話	一週 一時間
理科	// 二時間	英文学	// 二時間
化学	// 二時間	訳読	// 二時間
体操	// 三時間	近世歐羅巴及亜米利加史	// 二時間
神学志願者ノ外、聖書科随意		和漢史	// 一時間
文学専修科、学年ヲ二年トシ、普通部教員会ノ管理ニ属シ、之ヲ学院内ニ創設スル事ニ決シ、次ノ学科課程ヲ採用セリ		倫理	// 二時間
		社会学	// 一時間
		哲学史	// 四時間
		体操	// 三時間
修身講話	一週 一時間	聖書(神学志願者ノ外)	一時間
和漢学	// 三時間	希臘語(同上)	三時間
英文学	// 三時間	独逸語	四時間
訳読	// 二時間	法学	三時間
近古歐羅巴史	// 二時間	第一年、随意科	
和漢歴史	// 一時間	聖書(神学志願者ノ外)	一時間
論理	// 一時間	独逸語	四時間
心理	// 二時間	三月二十九日、午前八時 ^{マデ} マデ散会	
経済	// 二時間	三月二十九日、シュネードル氏ノ祈禱ヲ以テ開会ス、	
日本憲法及ビ行政	// 一時間		
体操	// 三時間		

出席シユネードル、ミラー、齋藤、熊谷、押川
英邦前回ノ記録ヲ朗読シ、修正ノ上之ヲ可トス

普通科課程表ヲ左ノ如ク、修正スル事ニ決ス

二年級、第一期、日本歴史、及ビ地理、第二期、第三期、支那歴史、及ビ地理、第三年、第一期、支那地理及ビ歴史、第二期及ビ第三期、万国歴史及ビ地理ヲ第二年級ノ日本地理及ビ歴史、第三年級ノ支那歴史及ビ地理、全年ノ教授ノ代リニ教授スル事ニ決ス

普通科教員会ノ管理ノ下ニ、二学年ノ課程ヲ以テ理科專修科ヲ学院内ニ設立スル事ニ決ス、左ノ学科課程表ヲ採用セリ

第一年

修身講話	一週 一時間
和漢学	〃 一時間
理科	〃 三時間
無機化学	〃 二時間
英語	〃 二時間
数学	〃 三時間
論理学	〃 一時間
地質及ビ鉱物学	〃 三時間
画学	〃 二時間

第二年

体操	〃 三時間
随意科、聖書	一時間
独逸語	四時間
修身講話	一週 一時間
和漢学	〃 一時間
理科	〃 三時間
天文	〃 二時間
数学	〃 三時間
英語	〃 二時間
倫理	〃 一時間
生物	〃 一時間
有機化学	〃 二時間
画学	〃 二時間
体操	〃 三時間
随意科、聖書	一時間
独逸語	四時間

普通学部、神学部課程表ハ、明治二十八年四月十日ヨリ之ヲ実施スル事ニ決ス、然レドモ始メノ二年間ハ、次ノ修正課目ノ詳細ハ、英文記録ニ詳カナリ、就テ見ルベシ

文理両撰科^{ワリ}ハ、明治二十八年四月十日ヨリ実行スル事ニ決ス

従前ノ学科課程ニ従ヒ、本科二年級、又ハ三年級ヲ修了シタルモノハ、無試験文理両科ノ中ニ入学スル事ヲ許可スル事ニ決ス

従前課程ノ予科第一年、第二年、第三年、及ビ本科第一年級ハ、新学科課程ノ第二年生^{ワリ}、第三年級、第四年級、第五年級ニ編入シ、次学年ヨリ之ヲ実施スル事ニ決ス
文科専修者ノ第一年級ニ一週一時間、化学ヲ加フル事ニ決ス

従前学科課表^{ワリ}ノ本科第三年及ビ第四年級ハ、卒業時期マダ、従前ノ仮定^{ワリ}ニ從テ教授スル事ニ決ス

東北学院新学科課程採用ノ件ニツキ、合衆国リホームド教会外国伝道会社ニ通知スル事ヲ理事局長ニ委任ス

幹事ニ委任シテ新学科課程表一千枚ヲ印刷セシメ、会計其費用ヲ払フ事ニ決ス

院長、幹事、及ビ会計ヲシテ必用ナル教場ヲ設クル事ヲ委任ス

動議ニヨリ散会

臨時書記 押川記

(理事会記録)

六四 島崎藤村の学院時代

六四―1 島崎藤村の招聘決議

(明治二十九年九月七日)

明治廿九年九月七日東三番町七十八番地に於て局長ホーイの招集に依り臨時会開會々々する者ホーイ、ノツス、齋藤、押川の四氏 齋藤氏の祈禱を以て開會す。

田村(田中)四郎氏を本年九月一日より数学教授として月俸金貳拾円を以て招聘する事に決す

嶋崎春樹氏を本年九月一日より日本作文教授として月俸金貳拾円を以て招聘する事に決す

神学部生徒の貸費額を本年九月より毎月金七円で給与する事に決す。

新両教授の旅費は会計をして支出せしむるに決す

動議により明八日午後四時まで散会

六四―2 島崎藤村の辞任承認

(明治三十年四月三十日)

明治三十年四月三十日午後一時ホーイ氏宅に於て臨時会
開会 出席ホーイ、ミロル、ノツス、斎藤、押川の諸氏
とす 斎藤氏の祈祷を以て開会す
邦語前二回の記録英語前一回の記録朗読す
之を可とす

(中略)

嶋崎春樹氏より当学期限り辞職致度との願書を呈出せり
之の願を請ける事に決し後任者は院長をして之を撰ばし
むる事に決す

(理事会録)

六五 島崎藤村「芙蓉峯を讀みて」

(明治二十九年十二月)

芙蓉峯を讀みて

島崎 春樹

はじめて人と語るの喜びは、はじめて山河に遊ぶの心な

るべく、はじめて山河に遊ぶの喜びは、はじめて文字を
読むの心とも言ふべきなり。旅の身の常として秋雨さみ
しくふりそゞぐおりくなど、ことに人こひしく友なつ
かしく、尺牘一則、短歌一首、それすら捨てがたく思は
るゝをり、芙蓉峯の主筆氏その月刊の草紙をわれに示し、
拙なき言葉を求めらる。われは東北に遊びて三葉を得た
り。未だ見ざりし人に逢ひ未だ知らざりし友と語るは其
一なり。未だ見ざりし東北の山河に遊びて擅に宮城野の
秋色を楽しむは其二なり。未だ見ざりし人の文を讀み未
だ聞かざる人の説を聞くは其三なり。芙蓉峯は東北の草
紙のうちにてわれには未見の文、未聞の説なれば、文を
嗜む身のことさら旅情を慰むることかぎりなし。歩みて
始めて旅となし、逢ふて始めて友と思ふ予の所謂旅情の
如きものは、天地を逆旅と見、光陰を百代の過客と観ず
る人の目より見ば、これまことに笑ふべき小児の感情に
類すべきも、喜びは喜びなり、樂みは樂みなり、大人よ
小児の噱戲を笑ふべしとなしたまふか、われ小児なるが
故にみだりに大人の前に沈黙せんとも思はず、思ふこと
を語り、語ることを聞き、興あれば乗じ、殊あれば拾ひ、
かくて始めて吾心は慰むべきものと思へばなり。
芙蓉峯は既に号を重ねること七に及び、其欄を別つを見

るに一々主筆氏の思を凝らされたるものなるべく、押川先生説教大意と題する一篇の如きは殊に敬虔の文字と称すべし、その躰裁もまためでたく清楚にして前途最も多望なるは、この草紙のため、記者諸君のため労働のために祝すべきことなり。都に生ひたつも花なり、山家に生ひたつも花なり、われ常に嘆ず、山家に生ひたつ花の多く一ひら二ひらにて散りうするほど口惜しきはなしと、今この草紙の前途ますく隆盛ならんとするを祝ふにつけて、やがて都にさくほどの花とも生ひたつんことを願ふ。わが始めてこの草紙を読み感ぜしことを言へば、喜ぶべし、誰が目にもその新教的思想の一種の特色明瞭にして、其の大抱負を告白することの誠に男らしく無邪気なるにあり。宗教を言ふ雑誌に於て浮華なる文字なきほど心地よきものはなく寺院教会に華嚴なる威観、教導牧者に微妙なる盛徳なきほど惜しきものはあらじ。今日道を説くもの漸く多きを加へたりと雖も、猶宗教の思想いまだ民俗の間に深しといふべからず、猶思想の根底に偉大なる宗教心の植えられたりといふべからず、東西聖賢の観、猶未だ全く光輝分明なりといふべからず、これを詩文に徴するに耶蘇新教の詞に発し花と開くもの少なからずと雖も、猶ヨブの心を歌ひ、ダビデの神を伝ふべき

余地多からずとせず。シヤアロンの野の花、何ぞそれ靈妙なる。香柏と野の百合と、何ぞそれ可憐なる。ヨブ記に怒り、哀歌に悲み、雅歌に樂み、十二の亞聖と手を携へてアブラハムのむかし創世記の玄妙を高誦し、シオンの山巔に徨徬して造化と逍遙遊するの人よ、靈界の蝶よ、思想の刃よ、聖賢の学を垂ぎて凡愚を教えんと欲するの人よ、思ふに芙蓉峯記者諸君の期するところ、もしかくの如きものならば、願はくは高邁雄大なる思想の杯を挙げて吾等に飲ましめよ。

かくしるすうち、われはふと思ひつきたることあり。この草紙は労働会より発行さるゝものならずや。われはじめ労働会より発する草紙の名に芙蓉峰とあるをめぐらしきことに思ひ、労働の動に山嶽の不動を名づけしはいかなる適例古典によられしものになど感ぜしが、労働会の精神なる文をよみて始めてわが誤解を悟り、其名は其形を言はずして其心を言ひしものなることを知り。トルストイ伯が著のうちに『労働』なる一篇の長論文ありて、一農の説を骨髄となし、これに伯の深刻なる意見と観察とを附して、労働の生命なることを論ぜしもの、たましくこの草紙を読むにつけて先づ吾心に浮び来ると共に、わがこゝに一つの遺恨とするは、労働会より発する

草紙にして他宗教雑誌と同じく靈界の消息をのみ伝ふるにあり。この芙蓉峯が他宗教の諸誌と特なる経験希望を記すことの少なきはいかに、宗教敬虔なる文字に富むは誠に喜ぶべきことなりと雖も、また労働に関する觀察を伝ふる文章のこの草紙のうちに少なきはいかに。

労働の休息を求めたるためしは鮮なからず。蘇格蘭土の一農夫、かれ学あり、才あり、当時情鬱し、感むすばれてとけず、相を采りて「エリスランド」に耕す。「エリスランド」は「ダムフライス」を去ること六里あまり、「ニス」河の西岸にありて、はるかに「ダルスウイントン」の深林を望む。西には「ダンスコア」の丘陵あり、北には「コルシンコン」の山々をも仰ぐべし。耕地凡そ百坪、半ば小麦を作り、半ば烏麦を作れり。才あり情ある農夫がこゝにうつりしは西曆千七百八十八年の春にして、「ニス」の河畔に耜をなげ、草を藉き、花を分け、情熱燃るが如くにして流水に唸ぜしは、バアンス詩集として世に伝はれり。

愛は労働なり、労働は愛なりとかや、愛なき人は希望なきなり、希望なき人は労働なきなり、労働なき人は開拓なきなり、開拓なき人は活動なきなり。われ曾てルウソオの讖悔録を読み、精神の倦怠を記すあたり、殆ど活動

なき人とならんとせしや、庭の掃除すらものうくて、帯も捨て草もぬかず、なすこともなくて思ひなやみしよしを今尚心に記して忘れざるなり。エルテルのわづらひを通して人心を震動せし暗黒なる近代の思潮を写せし書簡のうち、人は必ずしも勞せざるべからざるかとの疑念は、やがて悲惨なる自殺によりて答へられたり。

思ふに「労働」なる問題は広濶深遠なり。この問題は記者諸君の朝暮に経験を積まるゝところなるべし。そのうちより生ずる快樂はいかに、慰惜はいかに、活力はいかに、希望はいかに、はたまた労働によりて人の性情に及ぼすべき影響、労働と忍耐、労働と悲苦、身軀の労働と精神の自由、労働と勉学、労働と熱意、労働と体力、労働と觀察、其他かくのごとき妍究の芙蓉峰誌上に掲げられんことを望むものは、思ふにわれ一個の渴望のみにあらで、この草紙の読者のなべて期せらるゝところなるべし。

（『芙蓉峯』九号 明治二十九年十二月）

第三章 労働会一祈り、働き、学べ

六六 労働会の精神

(明治二十九年四月)

労働会の精神

客あり、問ふて曰く、労働会の精神とする所如何、山月子曰く、余はたゞ南六軒町の会内に住する一員、未だ以て充分なる答をなすこと能はず、然れども余が知る所、感ずる所だけを以て、少しく貴問に応ぜん、

(第一)文武を兼備し、理想と実行とを伴はしめんことを欲す、日本封建時代の教育は、不完全ながらも文武一途にてありき、彼の大和の桜花と並べ称へらるゝ武士は、其師たる儒者先生の講席に於て、聖賢の道、臣子の道を聴き、而して其道場に於て、或は実戦に於て武を争ふや、必ず其聴きし所の精神を実にせんことを欲せり、故に彼等は勝つも男らしく勝ち、負くるも男らしく負くるを以て榮とす、たとひ他に勝つも、卑怯未練、道に非る挙動を以てせば、忽ち万人の擯斥する所となる、知行合一は、

彼等の希望にして、又彼等の修練なりき、之が為めに、其学問をいへば、今の小学生徒に劣る者にして、なほ毅然卓立、難に臨んで屈せざる丈夫を出したりき、

維新の後、文道独り盛にして、武道地に落ち、人は偏頗の教育中に生育し、一方に於ては、非常に高尚なる事を知り、却て一方に於て之が実行を期するもの少く、片々たる空論空議、縦横無尽に行はれて、確信断行、黙して能く働く者少きに至りぬ、是れ憂ふべきの弊なりといふべし、我が会は此際に起り、文武を一にし、理想と実行とを伴はしめんことを欲するものなり、而して世界と国家とに對して真人物を出さんことを欲するものなり、毎日東北学院に学ぶ、毎週会内に於て祈禱感話を開く、毎月一回押川会長の講話ある、皆是れ我が会の文道教育なり、而して其武道教育は如何といふに、即ち労働なり、朝たに星を載きて牛乳を運び、夕に月を踏んで新聞を配る、或は味噌醬油を鬻ぎ、或は牛肉を売り、或は学校、教会の掃除をなす、凡て是れ武士が道場に武を研ぎ、又は實際戦場に生死を争ふが如し、彼等は信仰といふことを聴く、犠牲献身といふことを聴く、知行合一といふことを聴く、忠実正直といふことを聴く、勉強忍耐といふことを聴く、廉潔公義といふことを聴く、而して彼等は

労働の際之を實行せんことを欲す、其怠慢にして事業に不忠実なるが如きは、是れ武士が一城を托され、或は一の攻め口を委ねられて、臆病風を起し、敵に後ろを見せて敗走すると同一なりとなす、故に東北の都会仙台は、我が会員の大道場なり、又一種の戦場なりといふも不可なし、単に貧乏書生の集会所なりと思ふが如きは誤れり、仮令彼等の衣は弊れ、下駄の齒は欠け居ると雖も、其精神に至りては、永久に弊れず欠けざるものありて存す、(第二)日本学問の平等普及を望む 胸底に止むべからざるの壮志あり、而して家貧なるがために、恨を呑んで槽檻の間に蟄伏す、卞和の璧あり、而も之を磨くに由なし、人生の恨事、豈之に増すものあらんや、故に我が会は、斯の如き人を入れんことを欲す、勿論人物の選定は厳しくなす所、固より妄に入らしめず、通常毎月二円の寄附金をなすものは、会に在ることを得、又會長の見込によりては例外の者もあるべし、要する所、よき人物ならば、貧生なりと雖も、富者に劣らず、教育の恩沢に与らしめんと欲するにあり、

(第三)社会をして労働を重んぜしめんことを欲す、自己の額に汗して自己の口を糊す、自己の手を以て自己の衣服を着す、是れ眞の独立なり、自由なり、神は人間を働

くべく造り給へり、基督曰く、『我父は今に至るまで働き給ふ、我も亦働くなり』と、労働は神聖なり、之を重んずる国は富強に、之を軽んずる国は貧弱なり、吾人は現今我國の紳士、青年輩の風を見て、痛歎に堪へざるものあり、彼等は、口に巻烟草を喫し、長き羽織を着し、細き杖を携へ、眼鏡の間より人を見下して得々行歩するを以て高等なりとし、而して敢て自ら手を下して労働に従事するの勇氣に乏し、我が会は此弊風を打破し、国家千年の為に労働を重んずるの氣風を盛んならしめ、且は二十世紀社会問題の解釈を实地になさんことを希図す、

(第四)俗事業を聖化せんことを欲す、職業に高下なし、高下は人物にありて存す、廟堂の上に立ちて威權飛ぶ鳥を落せし僧道鏡の姿は、竹村の閑居に野菜を作りて働かし西郷南洲の様に比すべくもあらず、労働の軽んぜらるゝは、労働者其人の品格の野卑賤劣なるに由ること多し、頭、天に在りて、足、地を踏み、心、聖にして、手に俗務を執る、働くときは充分に働く、何人にも劣らず、而も休むときは、静かに天父の前に祈る、悠々の中に繁劇の業務を執り、繁劇の中に悠々の天地を有す、而して事業其者を聖化し、而して天国を此世に成す、是れ吾人の理想なり、我が会の希望なり、

客曰く、なほ其他に期する所ありや、答へて曰く、固より之あり、更に委しく知らんと欲せば、之を会長に問へ、たゞ我が会の精神とする所、前述の如く、実行を重んずるに在るが故に、余は今敢て之を言ふこと能はず、客退くに及びて遂に其問答する所を記す。

(『労働会雑誌』一号 明治二十九年四月)

六七 労働会入会手続と事業

(明治二十九年四月)

雑報

労働会入会手続

会員は品行方正にして学業の見込あり身軀強健にして労働事業に忠実なるものとす

会員の年齢は十五才以上とす

会員の労働は凡そ三時間内外を度とす

会員は東北学院に於て少くとも普通科を卒業せざるべからず

べからず

会員は会費の幾分を寄附すべし(通常金二元)

但会長の見込により例外の者もあるべし

入会の許可を得たる者は左の入会証及約定書を納むべし

入会証

何県何国何郡市村何番地

何之誰長(次)男(或は弟)

何之某

生年月日

右何之誰儀今般入会御許可相成候に就ては僅かの事故の為め家に呼ぶが如きことなきは勿論東北学院普通科(文科、理科、或は神学科)卒業に至る迄は妄りに退会為致間敷半途退会の節は本人在会中御給与の費用全額或は幾分御指揮に従ひ退会後半ケ年以内に於て弁償可仕且在会中万一不都合の廉有之候節は私に於て一切引受け可申又貴会の御都合に由り何時退会を命ぜられ候共決して異議無之候依て証書如件に候也

何県何国何郡市何町村何番地

族籍

保証人 何之誰(父兄の名)

労働会長 押川方義殿

約定書

一金何円也

右者今般何之誰入会御差許に相成候に就ては毎月十日限り必ず納金可仕右約定書依而如件

労働会事務所御中

何 之 誰(父兄の名)

一、会内の規則は別に之を設けずたゞ会長塾長及び事務所の命令に従て万事を為すべし

労働会祈禱会 は南六軒丁は土曜日午前八時より九時まで、日曜日午後一時より二時まで不信者の為め聖書講義あり、土樋牛舎の方の祈禱会は日曜日午後六時より七時迄、東二番丁に於ては日曜日午前八時より九時まであり。

講話 毎月第二土曜日、会員全躰を集めて、南六軒丁労働会に於て押川先生の講話あり。

会の近況 五年以前に於て六名の会員を基し、直に八名となり僅かに二三の職業を為すに止まりし我労働会は、年と共に盛大に赴き、会員日に加り職業月に拡張す、誠にこれまで出入せる会員を計算すれば無慮百八

十名の多きに達し、現に在る者亦八十二名而して最初の会員にして残れる者二人、即ち門脇広治氏、谷津善治氏なり。

事業は左の如し

新聞(朝夕)、雑誌、牛乳(朝夕)、牛肉、牧牛、洗濯、味噌醬油、学院及教会掃除、周旋係、事務会計等にして尚他に一二の職業なきにあらず、

近時事業拡張の手段として企てたるは乳搾にして昨年未北海道より精牛七頭を買ひ入れたり、不幸にして其一頭は郵船会社の不注意の為め、船中風難に遇ひて負傷し、萩(萩)の浜に於て死去せしも尚六頭あり其中一頭は一月一子を産したり、且下牛小屋並に牧場を新設せん為め準備中なり。

労働会員県別 会内に住する者八十二名、今之を県別にすれば左の如し

福島(三十)、山形(十二)、高知(七)、宮城(五)、新潟(四)、青森(三)、山梨(三)、愛知(二)、東京(二)、北海道(二)、福岡(二)、石川(二)、大阪(二)、三重(二)、愛媛(二)、福井(二)、佐賀(二)、和歌山(二)、群馬(二)、茨城(二)、長野(二)

(『労働会雑誌』一 号 明治二十九年四月)

六八 労働会趣意書

(明治二十九年四月)

労働会趣意書

我が労働会は、多く有望なる書生を集め、一方には学校に通学せしめて智識を研かしめ、一方には自ら労働して幾分の学資を作らしむ、斯くして日本現時の社会に特色を帯びたる教育を施し、独立独歩、自働自活、言行一致の人物を作らんを希望す、是れ吾等が、数多の仁人義士の賛成を得て、去る明治二十五年三月、仙台市内に労働会を設立せし所以なり、之が爲めに、望ある人物にして、学資乏しく修業の便を欠く者も、多く来て学ぶことを得、年若く志を懐いて空しく涙を吞んで片田舎に沈む者の数を減じ、或は家富むも、艱難辛苦の間に人物を修養せむと欲する者は、来て修むることを得、又我が国に実業を重んずる氣風を盛ならしめ、更に学者と実業家との間の調和を計るを得ば、誠に大幸なりと思ふ、最初設立せし時は、会員僅かに六名なりしも、漸々増加して今や九拾名の多きに達せり、朝に星を載きて乳鐘を提げ、夕に月を踏んで新聞を配り、或は味噌醬油を売り、或は牛肉を

鬻ぐ等、種々の艱辛を嘗め、幾分の資を得て、蛍雪の業に孜々たり、今や王師、義戦に捷ち、国家の名声、宇内に高く、我か第二師団は、勲功赫赫の誉を帯びて、凱歌振旅せられし時、我が会は一層の奮発を以て、益々事業を拡張し、牛乳の如きは、新たに北海道より精牛を買ひ入れ、無類善良なる乳を搾り、又新聞事業の如きも、一段の拡張をなし、愈々神速配達を旨とし、更に「芙蓉峯」雑誌を発兌して、聊か微哀を邦家人類の爲めに致さんことを欲す、其他の事業、凡て益々進歩拡張をなせり、希くは世間の仁人義士、我が会の精神に同情を表せられ、多少に係はらず、御購求あらんことを、伏して懇願の至に堪えず、

目下執る所の事業、左の如し

和洋洗濯、牛乳配達、牛肉販売、味噌醬油、石油販売、「芙蓉峯」雑誌、東京及び仙台諸新聞並に雑誌売捌

仙台市南六軒町四番地

明治二十九年春四月

労働会事務所

六九 故金子謹三にかかわる謝辞

(明治二十八年六月二十五日)

明治廿八年六月廿五日、午後続会ヲ同場所ニ開ク、ミラル氏祈禱ス、出席員シユネーダー、モール、ミラル、熊谷、齊藤、押川

シユネーダー氏東北学院基本金ノ報告ヲ為シ、現今基本金八八六・六二五アル旨ヲ告ケリ、之ヲ受クル事ニ決ス

〔中略〕

理事局ハ来学年度ヨリ聘用セント局員一同ノ希望シタル金子氏ノ訃音ニ接シ、且ツ同氏ニ対スル米國クリスチアンノ厚意ヲ謝スル為メ二次ノ謝辞ヲ合衆國リフオムド外国伝道会社ニ呈送スル事ニ決セリ

万物ヲ監視シ万事ヲ整理シ人ノ視望ノ外ニ行視シ玉フ神ノ不可思議ナル摂理ニヨリ金子謹造氏ハ地上ノ劳苦ヲ離レテ天ニ罷ケラレタリ、彼レハ合衆國ペンセルベニア州ランカストル神学部ニ於テポスト卒業生タリ、且ツ東北学院ノ教師タラン事自ラモ期シ又他ニモ期セラレタリシ人ナリシ、依テ東北学院理事局ハ神ガ彼レノ短時期ノ生

涯ニ於テクリスチアンタル確實ノ品格ヲ保チ以テ其感化ヲ他ニ及ボサシメン事ヲ神ニ謝シ并セテ金子氏ハ主ノ用ヲ我等ト共ニ為スベキ時期ノ遡カラントスルニ際シ、己ニ地上ノ人ニアラザルノ訃音ヲ伝へ、我等ニ一方ナラヌ失望ヲ与ヘラレタリト雖ドモ然レドモ更ニ高貴ナル必用ノ生命ニ入りシヲ思考シ、其生涯ノ地上ニ為セルヨリモ、更ニ尊貴ナルヲ信ジテ我等ニ慰藉ヲ与ヘシ事ト及ビ日本ニ於テ主ノ勤務ヲ為サンガ為メニ Christian タル訓練ヲ彼レニ与ヘシハ其幼死ニ依リテ決シテ空シカラサリシヲ以テ、扶助者ノ厚意ニ対シ我等ノ感恩ノ情ヲ表明セン事、又米國ノ友人ガ金子氏ノ記念ヲ永久ニ且ツ継続セシメ、其同國民ニ対スル善業ヲ成就セシメン事ヲ謀レルトノ尽力ヲ喜ベル旨ヲ合衆國リホオムト教会ノ宗教新聞ヲ以テ広布シ、且ツ之ヲ東北学院理事局ノ記録ニ記シ置ク事ニ決ス

〔後略〕

(理事会記録)

七〇 労働会憲法および条規の制定

(明治三十年二月二十六日)

明治三十年二月廿六日午後二時、ホーイ氏宅に於て臨時会を開く、会する者ホーイ、ミロル、ノツス、斎藤、

押川の諸氏とす、斎藤氏の祈禱を以て開会す

英語前回邦語前二回の記録朗読之を可とす

(中略)

労働会ヲ学院理事局ニ譲リ渡シ度旨押川氏ヨリ申出有之シニ付、左ノ如ク決議セリ

理事局ハ労働会一切ノ所有ヲ譲リ受ケル事トシ、労働会負債ノ総額ハ之ヲ理事局ニ引受ケ、弁償スル事ニ決ス、

而シテ押川氏ハ労働会ノ所有品ノ取調書并ニ會計状況取調書ヲ調製スル事ヲ承諾セリ

労働会管理ノ為メ左ノ憲法ヲ採用セリ

東北学院労働会憲法

第一条 名称

東北学院内ニ設立セル労働部ハ之ヲ東北学院労働会ト称ス

第二条 目的

本会ノ目的ハ有望ナル青年ヲシテ東北学院ニ於テキリスト教主義自由教育ヲ受ケシムルニアリ、而シテ会員各自ノ労働ニヨリ学資ノ全額又ハ幾分ノ支持ヲ為スベキ方法ヲ授クルモノトス

第三条 管理

第一項 本会ニ関スル事務一切ノ管理ハ二名ノ指揮ヨリ成ルモノトス、内一名ハ合衆国リフオムト教会日本伝道会社ノ会員タルベシ、此二名ハ東北学院理事局之ヲ定ム、而理事局ハ隨時之ガ否定ヲナスノ権ヲ有ス、右二名ノ中一名ヲ理事トシ一名ヲ會計トス、理事及會計ハ免職セラレカ或ハ理事局其辭職ヲ許可スルマデハ其職ニ從事スベキモノトス

第二項 理事ハ会内学生ノ道德、宗教ノ正規アル秩序的教訓ヲ掌トリ、未信徒ノ悔改ト信徒靈性ノ発達ニ意ヲ用ユベシ

第三項 財政之管理ハ會計之ヲ任ズ

第四項 前項ノ規定ニ從ヒ其任ニ当ル會計ハ、毎年三月、

六月、九月、十二月ノ終ニ於テ計算報告ヲ理事局ニ提出スベシ

第五項 會計ノ提出ニカゝル決算ハ會計検査員会子細ニ

之ヲ点検スベシ、而シテ検査員会ハ報告書ノ未ダ理事局ニ提出セラレザル以前ニ其誤謬ナキ事ヲ証明スベシ

第四条 評議員会

第一項 会内ノ学生ニ自活ノ訓練ヲ与ヘンガ為メ、評議員会テフ者ヲ設ケ、労働会各級生徒ノ内ヨリ各一名ヲ撰ビテ之ニ任ス、凡ソ会員中会規ニ違反スルモノアルトキハ評議員会ニ於テ之ヲ処理ス、而シテ評議員会三分ノ二以上ヲ以テ事ヲ確定スベシ、又凡ソ評議員会ノ定ムル所ノ規定ヲ実施セントストルトキハ予メ会長ノ認可ヲ得ザル可ラズ

第二項 会内ノ学生ハ毎年三月各級生徒ノ内ヨリ二名ノ評議員候補者ヲ指定シ之ヲ会長ニ交付シ、会長ハ其中ヨリ評議員会ノ議員タルベキ者ヲ撰定スベシ

但シ翌年度ハ四月一日ヨリ始ムルモノトス

第五条 条規

本会ニ於ケル道徳及精神上ノ教育ニ関スル適當ナル管理ノ条規ハ会長之ヲ製つく定ス、業務及財政ノ事項ニ関スル適當ナル条規ハ會計ノ製つく定ニ任ズ、總テ此等ノ条規ハ其制定セラレタルヨリ次期ノ理事局会ニ報告スベシ、而シテ理事局ニ於テ或条目ニ対シ正式ニ不同意ヲ表セサル時ハ其各条目ハ有効ナルモノト認ムベシ、学生ノ出入ニ関ス

ル条規ハ理事局之ヲ制定スベシ

第六条 改正

此憲法ハ理事局会ニ於テ隨時之ヲ改正スル事ヲ得、但シ惣員三分ノ二以上ノ同意ヲ要シ且ツ改正条目ノ意見ハ一ケ月前ニ提出シ置クベシ

動議ニヨリ左ノ条規ヲ採用セリ

東北学院労働会条規

入会及退会

一 凡テ本会ニ入会セント欲スルモノハ其旨ヲ会長ニ願ヒ出スベシ、若シ會計ニ於テ財政上ノ障礙ナキトキハ会長ハ便宜ニヨリ入会ヲ許可スベシ

二 会長ハ其必用ヲ認ムルトキハ退会ヲ命ズル事アルベシ、且ツ会員タルノ適否ハ一ニ会長ノ権内ニアルモノタルベシ

三 会員其理由ヲ陳述シ、会長之ヲ正当ト認定シタルトキハ退会ヲ許可スル事アルベシ

四 凡テ入会ヲ許可セラレタル会員ハ本会ノ憲法及条規ヲ熟読、又ハ之ヲ聴キタル上、特ニ備ヘラレタル帳簿ニ左式ニ從ヒ記名調印ス可シ

東北学院労働会の憲法及条規を讀ミ、且つ之ヲ了解仕

候ニ付てハ、之れに同意を表し申候間、在会中は必らず其各条目を遵奉可仕候、勿論会長の御許可なくしてハ妄に退会等致間敷候、仍て如件

年月日 氏名 印

動議により押川氏を労働会会長に選定せり

動議によりエス、エス、シナイダル氏を労働会会計に選定せり

動議により東北学院理事局会計ハ労働会の負債を弁償するに必用なる方法を選定するの全権を委せらる

動議により散会

(理事会記録)

七一 労働会規約の制定

(明治三十年九月十三日)

明治三十年九月十三日午後六時、ホーイ氏宅に於て臨時会開会、会する者ホーイ、ミロル、ノツス、齊藤、押川の諸氏とす、ノツス氏の祈禱を以て開会
邦英記録朗読之を可とす
三十三人の労働会員より毎月五十銭より二円七十五銭ま

での扶助、即ち毎月四十五円の扶助金を請求せるに付、之を書記及労働会会計の協議の上之を決する事に決す

(中略)

労働会規約

- (1) 学生にして会員たる者は各自其労働の報酬として、毎月金二円四十銭を給与せらるゝものとす
 - (2) 一定の時間以外に労働を為すの必要ある時は一時間三銭の割にて其報酬を得べし
 - (3) 会員にして猥に労働せざる時は一時間毎に三銭より少な可らず六銭より多からざる料を払ふべきものとす、但会計の許可を得たる者は其限にあらず
- 物品及器具
- (1) 労働会の所有に係る物品及器具等は会員之を私用する事を得ず
- 私有品
- (1) 衣服及夜具等は会員これを自給すべし
 - (1) 食料及舎費は一ヶ月之を金三円と定む
- 休祭日
- (1) 一月一日(四方拝)、一月三日(元始祭)、二月十一日(紀元節)、十一月三日(天長節)、十二月廿五日(ク

リスマス)を休祭とす

貯金

- (1) 何人を論せず会の職業に従事する者は毎月其所得の百分の五を貯蓄すべし
 - (2) 貯金の処理は会計之を任ず、乃ち会計は貯金の金額を受領し、且其関係したる銀行の定利子を払ふものとす
 - (3) 貯蓄の年月二年に達する時は各自其貯蓄を停止する事を得、但し貯蓄の全額は左に記載する場合の外二年未滿にして各人に渡さるゝことなし
 - (4) 貯蓄金の使用せらるる場合とは、乃ち疾病或は二週間以上労働に従事する能はざる場合を云ふ、斯る場合に於ては各人その貯蓄額を漸次に引出す事を得べし
 - (5) 貯蓄金の惣額(元利共)は預け主が定規の貯蓄を終へ、且會長の許可を得て会の職業と関係を絶す時に至り、其預け主に払渡さるゝものとす
- 前記の規約は之を受くる事に決す
- 働議ワヂにより散会

(理事会記録)

七二 労働会関係理事会記録

七二—1 地所および建物購入の審議

(明治二十九年十一月十八日)

明治廿九年十一月十八日、東三番町七十八番地に於て臨時會開會々する者ホーイ、ミロル、ノツス、齊藤、押川の諸氏、ミロル氏の禱をもて開會す

英語記録前會數回分(九月七日、八日、十一日、十一月三日分)を朗読し之を可とす

(中略)

現今労働会に借用中の地所并建物売物となりしに付而は、労働会は持主の指示する処の期限内に於て他に移轉せざるを得されども、未だ適當なる場所を見当らず、且つ現今會が仕用し居る處は學校又は労働會などの為めには最好の地なるが故に、理事局に於て之を購入せんが為めホーイ氏をして北米合衆國リフトムト教會外國伝道局に信書を送らしむる事を委託せり、且つ此建物は寄附者の目的に適合し公共用にして、且つ宗教及び學校用の為めに所有權を仕用するとは押川氏の断言したる處なれ

ば、請求の条件も亦た自ら明白にして、一私用の為めあらざるや必然なりとす

七二―2 会計調製書および所有品調製書の審議

(明治三十年三月二日)

明治三十年三月二日午後二時、ホーイ氏宅に臨時会を開く、ホーイ、ミロル、ノツス、斉藤、押川の諸氏とす
ミロル氏の祈禱を以て開会

書記邦英両語記録朗読之を可とす

押川氏より提出したる労働会会計調製書を受くる事に決す

押川氏より所有(労働会)品調製書を呈出せり

斉藤氏の動議により次会の文学会に金拾五円を補助する事に決す

〔中略〕

東北学院片平町所有地を適當なる買主あるに付、之に売渡すの権を押川及斉藤の両氏に委任する事に決す

労働会所有品調製書は労働会の負債を弁償するの償に満足なるを承認し、之を受くる事に決す

次の学期より労働会員も他の学生と等しく月謝及書籍料

を払ふべき事に決す

押川及ミロルの両氏を委員とし、有望にして而して月謝及書籍料を払ふ能はざる者のために適當なる方法を案出し、之を理事局会計に告知する事に決す

動議により散会

七二―3 会計報告と会員に対する補助の審議

(明治三十年九月三十日)

明治三十年九月三十日午後七時、ホーイ氏宅に於て臨時会開會々する者ホーイ、ミロル、ノツス、斉藤、押川の諸氏とす、ミロル氏の祈禱を以て開会す

英邦記録朗読之可とす

三十年四、五、六、三ヶ月の会計報告を労働会々計より提出せり、収入惣計一、八七六・二二九 支出惣計一、六三四・七二 となれり、之を受くる事に決す

労働会員にして極貧生の為め教科書備整の必用ある場合には労働会に於て之を購求し、労働会々計の管理に之を置く事、但し其必用ある時は理事局会計をして之を購求せしむる事

〔中略〕

理事局書記をして委員を継続せしめ、労働会員の補助を請求する時は之を考量せしめ、直ちに理事局にて決定する能はざる時は臨時に之を委員にて定め、臨時の補助を為す事に決す

〔後略〕

（理事會記録）

七三 野沢正「東北学院労働會歴史」

（明治三十八年二月十六日）

東北学院労働會歴史

余は個人として労働會の歴史を編纂し、之を労働會の書籍室に献じ聊か鴻恩の万ヶ一に酬へんと、加之今にして其歴史を編まずんば趣味深き涙の歴史も空しく忘却の裡に葬られ押川先生の恩義亦伝ふるに由なしと余はかく決心し早晩之に着手せんと種々熟慮を廻らせり、既にして又思らく、今や創立の日を去ること甚だ遠く加ふるに余は先輩の多くを知らざるを以て史料の蒐集に頗る困難なるべし、如かず之を會員に諮り名義に於て唯會員の事業

となし其他凡ての事は余固より之れに当らんにはと、斯の如くにして余は去る廿六年の晩春之を労働會室長會議に提議し万座の賛同を得、田中会長を編纂委員長に推薦し同年七月此挙を発表し広く史料を求めたり、かくて旨意書を出すこと殆んど百通なりしも回答の榮を得しは僅かに八如何ともなすこと能はざりき、同年十一月東北日本基督教教會役者會あり、會の先輩にして出で、伝道に従事するもの来り列す、余乃ち行て相語り少なからざる史料を得たり、又仙台にある會の先輩及び會と關係を有せしものは悉く之を訪ねて其助勢を仰ぎぬ、不幸にして會には記録と称すべきもの殆んどなく唯本荒町時代の日誌と筆写雜誌『松籟』一冊と、混沌として考ふべからざる會計の帳簿とあるのみ、會員名簿の如きも唯僅かに其一部を存するのみにして二十六年の後半より出入せし會員は之を窺ふに由なし、されど本會十年紀念會の際鈴木庸氏の編纂せし労働會略史と嘗て本會よりの『労働會雜誌』とは余の編纂に多大の史料を供し是等に負ふ所極めて大なり、斯くの如くにして漸く完成したるものは即ち此歴史なり、今や脱稿筆を洗ふて一読し来れば余の理想を去ること頗る遠く文字拙にして行文渋滞趣味ある涙の歴史も無味乾燥となり恩師の精神も亦伝ふること能はず

唯既往の出来事を羅列せる一反故に過ぎず、之を労働会歴史と称するは余りに其名称の尊きを恐る、嗚呼今にして之を思へば却て余一箇の事業として之に従事すべかりしものを、されど余は余のなし能ふ凡てを尽し悉く想像憶測を避け又春秋の筆法を去り出来得る丈け事実を追ふて其最も精確なりと信ずる所を編纂したりと信ず、勿論余は之を以て寸毫の誤謬なしと断言するものにあらず、されど余の探り得たる所を以てすれば、最も確實に近かるべきを信ず、又幸に一層精確の史料を得ば更に訂正するの日あるべし、而して筆を十年紀念会に止めし理由は歴史の結尾に之を明にせり、終りに臨んで此挙に多大の同情を寄せ或は史料を送り或は助力を与へ或は直接に或は間接に少なからざる裨益を供せられし多くの人々に対し茲に謹んで感謝の意を表す。

編纂委員一同に代りて

明治三十八年二月十六日

野沢 正謹誌

東北学院労働会歴史

我が労働会が多く希望と抱負とを齎して五城々下に呱呱の声を挙げし其発端は抑も如何なる由来の存在せしものによ、吾人は之れを創立者の精神に就て索ねざるべ

からざるは勿論の事なれども当時学院の有様と世の学生間の状態とを觀察し来れば其精神のあるところ其希望の存するところ亦少しく知り得べきに庶幾からん乎、

当時我が学院は少しく其緒に就きそめし時なりしと雖も未だ以て今日の如き状態に到らず、従て其出入する学生も亦自ら種々なる事情の間に成育せしもの極めて多く其間如何なる摂理の潜伏せし事にや、遠く学院創立の昔より貧困者割合に多く多忙の中に自ら労働をなし其得たる利益を以て学資となせしものありき、

明治二十三年頃には到りて此風少しく盛んになり、或は学院の掃除をなすものあり或は仙台日本基督教会に働くものあり或は教師の家に行きて小間使をなすものあり或は英語の教授をなすものありき、されど最も成功したるものは牛乳配達にてありき、今日こそ学生は到る所労働をなすもの非常に多けれど其頃仙台にては学院の生徒を除き自活にて勉強をなすもの殆んどなく牛乳配達の如き世の学生には未だ夢想にだも上らざる所なりき、是を以て彼等牛乳配達をなすものには大なる便宜を得しものなり、又其労働のみにて学籍に列なること能はざりしものは月謝を特に免除せられしこともありき、斯くの如く院内多くの学生は其生活に困難をなし世の学生が皆飽食暖

衣の裡に遊惰を事とするに際し具に辛酸を嘗め独立勉学に従事せしものなり、かゝる間にありて押川先生の心中には種々なる計画を運らしつゝありしならん、

以上は是れ唯仙台の状況殊に我が学院内の有様なれど遠く眼を東都の学生間に馳せ以て其状態を観察せんに彼等の間には既に労働を以て学資を得るの方法となせしもの頗る多く或は朝夕新聞を配達し或は街頭に腕車を牽き頗る艱難を極めたりき、而して先生は是等の事も見聞し又先生の教友田村直臣氏は既に東京に自営館てふものを設立し多くの貧者を集めて育英の事業に尽力せられつゝありしを以て又先生胸中の画策に多少の刺戟を与へ我が会設立の動悸（つとこ）を更に強ふせられしものなるべし、

明治二十二年三月先生は心身静養の目的を以て渡米の途に着かれぬ、此行や心身の疲労を養はんが為めなりしと雖も其間亦多小の希望と目的とを有せしなるべし、学生労働問題の如き確かに其研究せんとする一なりしならん、而して彼地にありて学生間の労働は盛んに成効しつゝあるを目撃し其心中に計画しつゝありしところのもの決して架空の事にあらざりしを証せしならん、加之其漫遊によりて独立自主の必要なる事を深く悟り帰朝後此精神を盛んに唱道せられしを見れば欧米の風雲が先生の

精神を通して我会出生の気雲（きうん）を促せしを蓋し亦疑を容れず、

以上は是唯僅かに先生が我会を設立するに至りし外部の源因ならんと覺しきものにして其内部の源因即ち先生の精神に至りては吾等不省（ふしやう）にして到底其全班を窺ふこと能はず、吾等は唯先生の精神の梗概なるべしと思ふ所を述るに過ぎず、而して吾等は後に我会の精神につきて少しく語らんと欲するところあるを以て先生の精神につきては今茲に是を言はず、何となれば我会の精神は即ち是れ先生の精神にして之れを略叙すれば先生の意志の存するところ亦自ら判然たるべければなり、

押川先生が労働会の如きものを設立せんと永き以前よりの画策なるべしと雖も当時の如き日本の社会にありては果して成効すべきやてふ疑問につき頗る心を勞せられしものゝ如し、日本にありてはかゝる組織未だ甚だ稀にして世人は未だ労働の神聖を知らず、独立自治の真意を曉らず、加之労働その物が果して学生の勉学と兩立併行し得べき乎てふ問題は先生に取り決して容易なることに非ず、勿論今日は非常なる成効を来し殆んど其目的の一部を達せしを以て其設立易々たるが如く見ゆれども其今日に至りし経路を観察し来れば先生の苦慮画策実に尋常に

あらざることを知るべし、然れども此事業たるや決して先生一人の事業に非ず其間には実に深き摂理の存するありて神が先生の人格を通じて其聖旨を実現せしめたるものなり、故に先生は来るべき種々なる艱難辛苦誤解失望等を悉く排除し万事を神に任せ其慈顔愛腹の涙の迸るところ神は遂に此所に小さき愛の団体を起し給へぬ、斯の如くにして押川先生の脳裏に画かれし無形の労働会は遂に有形の体をとリ明治二十五年三月十日四囲の山嶺未だ白冠を脱せず躑躅ヶ岡の桜花固く口唇を結び静かに開咲の勢力を養ひつゝあるの時突如として五城々下に其誕生を挙げぬ、其目的とするところ嘗て我が会より発せし労働雜誌上に我が会前塾長川合信水氏が執筆せしところのものを以て吾人の拙筆に代へんとす、其載するところ次の如し。

〔この部分は九五〜九七頁の「労働会の精神」(第一)〜(第四)として記載あるので略〕

と是れ確かに我会の精神其設立の趣旨にして亦押川先生の精神たるべしと信ず、而かも我が会の欲する所如上の四ヶ条のみを以て止まず、其他期する所固より多し、されど吾等は其凡てを語ること能はず、又語るの必要なけ、要之基督教の主義に基き文武の両道を一にして理想

と実行とを相伴はしめ又深く労働の神聖を教へ以て教育の普及を計り自働自活の道を全うするにあり、

吾人の目的とせし所実に前述の如くなりしも吾人が今日見る如き完全なる団体にあらず、之を会と称すれば会と称することを得べしと雖も恰かも之れ動物の原形質時代と其類を同ふし何等定形の状態あるなく極めて混沌たる有様にして歴史家の所謂有史以前の時期てふものなり、故に吾人が今日より之れを見れば殆んど想像以外の事多く其初め労働会てふ名称の如きも当局者及び會員の間に種々議論のありし程にて押川先生が労働会てふ名称の下に創立せしにはあらずして創立後世人之を目して労働会と称し會員亦自ら呼んで労働会となし遂に自づと其名称を用ゆるに到り以て今日に及びしなり、之を今日世に行はるゝ種々の団体に比すれば甚だ笑ふべきに似たれども我会は元來名を立ち名^{ナマ}を以て出生したるものに非ず、故に先づ人目を聳動する如き嚴然たる名称を標榜するものと其轍を異にし創立者の胸中唯其学生を懐ふの赤誠とかゝる教育組織を設立せんとするの志望切にして実の寶なる名称の如きは殆んど其問題に登らざりき、

此の如き有様を以て我が会は生れ創立の時會員の數僅かに六名 村井直喜(土佐) 中坪壽太郎(信濃) 菊地定蔵

(岩代) 狩野里海(越後) 秋葉定蔵(山形) 及び田村綱三郎(伊豫) の六氏はれなり、或は云ふ村井直喜 大友栄蔵(東京) 門脇廣治(土佐) 小山甚一郎(越後) 秋葉定蔵及び谷津善次郎(陸前) の六氏なりと、又ある一説には菊地定蔵 大友栄蔵 谷津善次郎 村井直喜 門脇廣治及び田村綱三郎の六氏なりとも云ふ、吾人は今果して其何れが真なるやを証するに苦しむ、想ふに如何なる人と雖ども之れを知るは殆んど不可能の事なるべし、吾人若し之を確かめんと欲せば如上の人々を悉く一所に集め種々なる審議を経而る後に之を決すべきなり、故に今は唯以上の三説を列挙し暫く其定説を俟つこととせり、塾舎は最初東二番町日本基督教会の長屋門(今は正門南町通に変更し東二番町の方面は垣を廻らせども今日の教会が未だ設立せられざる以前即ち東本願寺の寺院を会堂に使用せし時は其の正門東二番町にありて其門は寺院風の長屋門なりき)を借りて之に住し後ち幾くもなくして会員の一部は国分町十四番地(奥羽新聞社の向辺)に一屋を借りて之に住しぬ、会員は設立の後ち二三日にして更らに二名を増加して八名となり二日後ち農業部のみ北三番丁(木町通より北に入り南側の三軒目)に移りて農業に従事することとなり、此所に移転せし人々は村井直

喜 秋葉定蔵 門脇廣治の三氏なり、東二番町にありし人々は教会構内の茶樹等の雑木を掘り起し或は番(番カ)を以て土石を運び以て一種の工夫的労働に従事せり、後ち数日にして会員亦少しく加はり狩野里海氏総体の監督となり小山甚一郎氏事務員となり会員益々加はりて其数十四五名となり佐々木純一(因幡) 村井直喜 高橋伝五郎(陸奥) の三氏狩野氏を補佐して会内を監督せり、事業の種類は農業新聞雑誌及び牛乳の配達石油売の四種にして石油売には木村清松(越後) 氏牛乳には谷津善次郎 大友栄蔵の諸氏新聞には田崎剛三郎 玉野勝(越後) の諸氏先づ其任に当り農業には已に記せしが如く又別に其指導者として学院の教授農学土鐸木近吉氏を依頼せり、石油は肴町関東屋商店より受売をなし牛乳は土樋安達牛乳店より配達をなせり、後ち少しく小田原佐藤烈之允 花壇早川智寛の両氏の牛乳を配達せしことありしも僅かにして止みぬ、其後乳牛を購入して会内に牛乳部を置きしも安達氏よりは常に便宜と誘導とを与へられ我が会が同氏に負ふ所極めて大なり、新聞雑誌は木文書店の配達をなせしものにして後ち佐勘書店のをも配達せり、又別に木文書店より受売販売をも営み我が会が同書店に負ふ所頗る大なり、此年六月頃に到り、高橋豫晃氏(羽

前)の尽力によりて味噌醬油の販売を開始し北一番町別所温直氏より受売をなせり、又九月には夜学会を開き学院の教室(今日の一年級教室)を借りて之に充て英語漢文数学の三課を教授し、中野秀四郎(羽前)東野政造(羽前)の二氏之を担当し阿部能文氏(羽前)は二氏の友人なるとの故を以て之を補助せられ其他学院の教授シュネーダー、ミラー、藤生金六、唐澤造酒、熊谷駒之介の諸氏も少なからず其助勢を与へられたり、

食料は一ヶ月金二円にして朝は焼塩昼は野菜夕は味噌汁魚類の如きは一週間唯僅かに一回十五名ばかりの会員交るゝ自炊をなし馬糞を拾ひたる手を洗ふて直ちに米をとぎ鋤犁を捨て、直ちに飯を炊き、不器用なる料理を食して敢て不足なく不平なく感謝と希望とに充ちて日を送り、此頃学生にして労働をなすものは絶てこれあらざりしを以て其状態極めて可笑しく歎を肩にして行く様油を売りに歩む状誠に奇妙なりければ市民は之を怪み探偵ならんと云ひ会員が労働に出づる時は十人以上も群をなして之を望見し極めて不審の光景を呈せり、然れども後其実情判明するに到り書生の百姓出来たりとの評判市内に噴々たりき、年寄りたる人の如きは詩吟をなすつゝ馬糞を拾ふ会員に対し『御苦勞様です』と挨拶するものあ

りき、斯の如く一面識もなきものに同情を寄せられ帽を取て礼せらるゝ時は一種異様の感に打れ熱淚滂沱として眼底を濡ふし謂ふべからざる慰藉と勇氣とを生ぜしと云ふ、石油売に一人あり大声を発して石油販売を叫ぶを能はず、已むを得ず自ら其車を曳き後より他の一人をして之を叫ばしめ以て市内に行商をなせり、又一人あり石油の車を引きながら演説々教の稽古をなし通行の人をして何事ならんと驚かしむるなど殆んど抱腹絶倒の到りなりき、而して書生の商業なれば万事に注意足らず其鐘の栓をよくせざりしたため石油大に漏れ出で行くゝ之れを街上に洩出し来往の人に注意せられて赤面せしこともありしといふ、農業部に一人あり犁を枕にして眠る、旬日を経るも耕作上何等の効果あるなく雜草茫茫として獅子も尚潜み得る程なりしが少しも意に介せず日々草中に午睡して鼾声独り高かりき、農業部の家屋は頗る傾廃し畳破れ壁頽れ床中にありながら自由に天文学の研究をなし得たり、降雨の夜は床を布くに殆ど寧所なく、国分町の会員は常に噂して曰く『昨夜北三番町にては如何なりしならん』と、雨夜の破屋亦察するに足らん、食料の計算は今日と其趣を異にし一食を以て其標準となせり、故に一食を減ずれば其食費に於て亦一食の減価なりき、是を以

て或る会員の如きは日々一回づゝ断食をなし之を継続すること一週間位にして食料に残余を生ぜしめ之を其小遣錢になせり、事殆んど滑稽に近しと雖ども当時如何に貧に窮し又如何に洒々落々たりしかを知るに足るべし、此頃の人々は年齢比較的に多かりしが学生の常として菓子果実等を食せんと欲する情切なりしも囊中無一物にして亦如何ともなすこと能はず、二三の人々と相携へて押川先生を訪へ以て其目的を達せんとせり、かくて菓子の出づるまでは或は談じ或は語り或は庭に出でて先生と相撲を試み出づれば則ち之を喫し去りぬ、斯の如く先生身多忙なりしも能く彼等を通し諒々説いて更らに倦むことなく或は彼等と角力して流汗背を濡ふし一切を忘れて会員に接せり、嗚呼先生とホーム恰かも是れ慈母の其愛児に於けるが如く恩愛実に見ふべく衷情真に拘すべきものありしなり、

明治二十六年春、国分町及び東二番町の二ヶ所より会員の一部居を大町一丁目に移し幾くもなくして又伊勢屋横丁一番地に移れり（五月頃なりしならん）是れ蓋し大町に移転せし時其慰勞会に於て讚美歌を奏し祈禱を捧げしを以て其基督教主義なること判明し家主より抗議を受け伊勢屋横丁に移るの止むを得ざりし所以なり、是れより

先き狩野氏既に去て五十嵐良碩氏（越後）代つて監督となれり、されど五十嵐氏は会内に住して其事務に当らしに非ず、唯学院の事務所にありて名義上其職にありしのみなり、而して国分町伊勢屋横丁東二番町の三個所とも各其事務所會計を異にし伊勢屋横丁にては米本富吉氏（長門）及び寺田醇造（越後）伊藤嘉吉（加賀）の両氏国分町にては佐々木純一 秋葉定藏の諸氏相次で事務の任に当り東二番町には会全体の事務を置き此所にて万般の事務を総理し所謂是れ中央政府にてありき、伊勢屋横丁にては記録係を置いて日誌を録し米本 吉村末吉（土佐）の両氏相次で之に当れり、而して明治廿六年六月より翌年十二月に至るまでの日誌は今尚ほ存在す、此年八月に到りて倉長恕氏（因幡）専任事務員として来られ五十嵐氏の後を継げり、氏は事務の才に富み事業大に見るべきものありき、

農業は其効果甚だ少なきを以て一年有餘にして之を廃し新たに小間物業の一を増せり、是れ一種の行商にして或は市内の有志者を訪へ、或は宮城病院に到り以て其物品を販売せり、又牛肉販売を開初し東一番町浅間牛肉店（今は廃業せり）と特約して行商をなせり、是れ市内に於て牛肉行商の嚆矢にして大に其収益を納めしが後ち競争者

出づるに及びて其販路縮小し又元の如くならざりき、凡て是れ書生の従事する商業なりしを以て万事に注意足らず殊に時間の如きも午後三時以後に限られしを以て花客に不便を來たし充分の成效を見ること能はざりき、或は帳簿に販売の記入を忘れ或は粗暴にして物品を破壊し常に損耗をのみ之れ來し今日まで繼續し來たれる商業にしては唯牛乳販売の一あるのみ、以て其商業の如何なりしかを察するに難からざるべし、又学院及日本基督教会の掃除を引受け学院は今日も尚其任に当たれども教会は其後幾くもなくして之を止めたり、此頃の集会の有様を察するに今日の如く一定せる形式あることなく或は屋外に催せることあり、或は宮城野原等に親睦会を開くことありき、祈禱会は各塾舎之を開き司会は會員交るべく之に当たり又毎月一回日本基督教会堂にて三塾舎聯合祈禱会を開けり又別に毎月一回同教会堂に集りて押川会長の講話を聞くことを得たり、

此時に当り會員増加して三十余名となり。

〔後略〕

〔野沢正のこの「東北学院労働会歴史」は全二一七丁に及ぶ一巻の書をなすものであるが、今回、この資料篇に、その最初期の部分

一九丁を、採録した。句読点は原文になく、『東北学院時報』(七八一―八二一)によった。

第四章 国家主義の嵐に抗して

七四 不敬事件に対する押川方義他の意見書

(明治二十四年二月二十七日)

世の所謂不敬事件に関し押川、植村、三並、丸山、巖本の五氏は左の一書を各新聞紙に寄せたり

敢て世の識者に告白す

押川方義	植村正久	三並良	丸山通一	巖本善治
------	------	-----	------	------

第一高等中学校に於て内村鑑三氏に関する事件起りてより以来世評囂々たり。吾輩の良心之を黙々に附せしむへからざるものあり。敢て満天下の識者に告白し併せて其の示教を乞はんと欲す。

一、各小学校に陛下の影像を掲げ、幼少の子弟をして之に向つて、拝礼をなさしめ、勅語を記載せる一片の紙に向つて稽首せしむるか如きは、必ず宗教上の問題として之を論ずべからずとするも、吾輩教育上に於て其何の益あるかを知るに苦しむ、寧ろ一種迷妄の觀念を養ひ卑屈の精神を馴致するの弊あるなきかを疑ふ、また如此き処置を以て皇室の尊榮を維持せんと欲するは頗ぶる策の得たるものに非ざることを信ず。皇上は神なり。之に向つて宗教的礼拝を為すべしと云はゞ是れ人の良心を束縛し奉教の自由を奪はんとするものなり、帝国憲法を蹂躪するものなり吾輩死を以て、之に抗せざるを得ず。然れども影像を敬し、宸筆に礼するは必らずしも以上の意味合にては非るべし。蓋し政治上人君に対するの礼儀として之を為すことなるべし。果して然らば是れ宗教上の問題に非ず。教育社交政治上得失利弊の一問題なるのみ。

一、然れとも基督教徒にありて往々此の事に付き疑惑を抱けるものありて、時に物議を生じたることなきにあら

ず。是れまた其の故なきにしもあらざるなし、皇室と所謂神道とは抑も如何なる關係ありや。彼の神道とは如何なるものなるや賢所御参拝とは如何なるものぞ。毫も宗教の意義を抱含するものに非るか。何ぞ其事の宗教と相類似するの甚だしきや。陸海軍の將校士官兵卒をして靖国神社に参拝せしむるに当り或ひは之を以て西洋諸國の紀念祭と同一視するは当れりとせんか。また之を以て宗教的のことと断言するものあるも今日の場合何を以て之を当らすとするを得んや。日本臣民たるものは時として賢所参拝を仰せ付らるゝことあらん。賢所とは何ぞや。(伊藤伯憲法解釈の英文にはサンクチュアリーの語を用られたり)参拝とは何ぞ毫も宗教的の分子を含ますとすれば可なり。宗教的礼拝の意味を含めるものとすれば、是れ信教自由を認可せる憲法に対し違憲の措置に非ずして何ぞや。徴兵は国民の義務なり、兵士をして神道にて祭れる靖国神社に参拝せしむるは、是れ国民に強ゆるに神道を奉ずるを以てするなり。違憲に非ずして何ぞや。

一、従来基督教徒間には是等の疑惑あり。故に皇上の影像に礼するか如き事あるに臨み、神官の配布する神符の如き心地し、何となく宗教の臭味あるが如く覺えて、之に躊躇したるも、また全く其故なきには非るなり。

事情此の如くなるを以て、左に吾輩所執の主義を告白し併せて満天下有識者の教を請はんことを欲す。

一、日本臣民誰か皇室に忠なることを懐はざらん。誰れかまた之を政治上の君として崇めざる者あらん。此の区域に於て為すの礼式は（得失の議論はさておき）基督教徒として敢て不可とする所に非るなり。

一、果して宗教の分子是等の礼式に存するあらんか。吾輩は一切之に与かることを得ず仮令時ありて謹敬の意を以て其席に列することあらんも、其の礼式を自らすると能ざるなり。

一、今に於て学校陸海軍及び宮廷其他国民全体に関する諸礼式より宗教的の臭味を除去するは皇室の利益にして、帝国憲法の規定せる当然の義務なり。

吾輩は漫然不敬罪なる語を弄して此事を論し去らんとするものに同意すること能はず。敢て微衷のある所を吐露して大方の識者に告ぐ。

（『福音週報』五一号 明治二十四年二月二十七日）

第五章 押川方義一より広く、より遠く

七五 大日本海外教育会の設立

（明治二十七年十二月八日）

海外教育会

海外伝道会なるもの起れりと聞きしに、間も無く大日本基督教徒教育会と云ふに更改せり。而して去る八日其の発表会を開くに当り其の企図又三変して、基督教徒の四文字を廃し、単に大日本海外教育会として、世に公けにせらるゝこととはなりぬ。

斯の如くなりたる以上は、其の目的純然たる教育を施すに在りて、伝道の方便として用ゐらるゝものに非ること明かなり。吾らは公然伝道の機関として教育を朝鮮に布くを不可とするものに非ず。然れども押川本多等諸氏の発企は素より基督教外の人士とも提携して運動するを趣意とし、伝道に関係なしと明言して成立せんとするものなれば、徳義上此の種類の事業に与かるべきに非らざるなり。

然れども文明的の教育は何人の手に於てするも伝道に大関係無しとせず。況んや基督教の精神を抱ける諸氏の教育事業に於てをや。其の方法宜しきに適ひ、当局者其の人を得れば、其の朝鮮伝道に影響を及すこと知るべきのみ。

故に吾らは朝鮮の伝道に意を注ぐの点より、彼の大日本海外教育会の趨勢に注目し、其の設計を精査し、深く其の利害を商量せんと欲す。吾らは基督教徒たる発起人諸氏の精神が其の事業進行の上に彰れ、敢て他の障害を被ぶること無からんを希望す。思ふに大日本海外教育会は広さと深さとを調和せんと欲するの組織なり。人間の一大難事なりと謂はざるべからず。吾らの好む所を遠慮なく言へば、凡そ精神界の事業は、寧ろ狭くして深きの勝れるに如かず。

然れども朝鮮を開導するは日本の責任なり。之を開導せんと欲すれば、健全なる学問を伝へ、靈性を救ふの福音を教えざるべからず。吾らは基督教徒として己れの特有する所のものを朝鮮に伝道し、以て帝国道徳上の責任を果すの偉図に寄附せんと欲するものに非ずや。此の志しは一日も日本基督教徒の胸中を離るべからざるなり。未だ此の事業其の緒に就かぬは残念千万なりと雖ども、今

や朝鮮の教育が基督教徒の発起に由りて着手せられんとするは喜ぶべきことなり。其の目的全く伝道に在りて存せずといへども、吾らは其の着手にして宜しきを得ば、伝道にも非常なる影響あらんを疑はず、大日本海外教育会の前途趨向如何ん。福音新報は俄かに己れの心志を傾けて、全然其の方案に賛成を表すること能はずといへども、其の正しく運び、其の宜しきに進み、其の天下正義の士に結び、其の発起人諸氏の志し着々成就せらるゝを得んがためには応分の力を尽すべく、また適当にして必要なる批評をも試むることを辞せざるべし。

(『福音新報』一九六号 明治二十七年十二月十四日)

七六 大日本海外教育会告白と憲法

(明治二十七年十二月)

大日本海外教育会告白

夫れ国家独立の根柢は国民精神の独立にあり国民開明の基礎は各人教育の発達にあり故に先づ国人世界日進の智識を得文明の学芸を修め道義を明かにし博愛の精神を懐

き天命を畏れて自重嚴莊の氣象を養ふ事懇切なるに非ずんば真誠に長久に邦家の独立を維持せん事は難しとす。今や帝国朝鮮をして真乎独立の基礎を固ふし大に革進する所あらしめんとするに方りては則ち亦大に之が教育を振張し之が精神を脩養せざるべからざる也。抑も東西歴史を別にし随つて文化の態趣を異にす兩々各發達する所あり彼我互ひに特長を有し亦偏失を存す当に相抱着して以て円満完全の美を成すべき也。然るに今や西洋大に東洋に待ち東洋亦大に西洋に得る所あらんとす方さに是れ東西相会して文化一新するの機勢にあらずや。而して大日本帝国此期に際するの天職は極めて光大莊重なり即ち東西の文化を合成し世界の大道を發揮せざる可らず即ち日東第一の聖地より起つて靈化したる新文明を宇内に布及せざる可からず真とに是れ海外に教育を施く可きの使命を負ふものなり。是を以て我儕今方さに朝鮮国現時の狀態に同情を表し其教育の為に懇ろに計画し只管らに該国民の心靈を開導し其国力を涵養し其國粹を啓発し真に善良強健なる一國独立の基礎を育造せん事を期図す。是れ我儕が

今上皇帝の勅宣を奉体し其最とも任ずべきの方面に尽忠する所以なり。乃ち茲に大日本海外教育会の組織を公衆

に披露し先づ朝鮮國に於て事業の開始を為さん事を告白す。冀はくは四方同念の君子惠然として贊同の情を寄せ此会抱負の在る所をして速に成達徹底せしめん事を。

明治二十七年十二月 押川 方義 原田 助

本多 庸一 松村 介石

巖本 善治

大日本海外教育会憲法

第一章 目的

第一条 本会ハ海外ニ教育ヲ施ク事ヲ目的トス

第二章 名称及位地

第二条 本会ハ大日本海外教育会ト称シ本部ヲ東京ニ支部ヲ地方ニ設置ス

第三章 役員

第三条 本会ニ左ノ役員ヲ置ク

会 長 一名 副会長 一名

會計監督 一名 評議員 十名以上

理事 一名 支部幹事 若干名

第四章 役員撰挙法

第四条 役員ノ撰挙ハ左ノ方法ニ依ル

一 評議員ハ会長副会長及ビ會計監督ヲ撰挙ス

二 会長ハ会員中ヨリ評議員ヲ撰挙ス
 三 会長ハ理事及ビ支部幹事ヲ撰任ス

第五章 役員ノ任務

第五條 役員ハ左ノ任務ヲ負担ス

一 会長ハ会務ヲ總理ス

二 副会長ハ会長ヲ補佐シ會長事故アル時之ニ代ハル

三 會計監督ハ本会ノ財政ヲ監督ス

四 評議員ハ会務ノ大綱ヲ議定ス

但シ會長副會長及會計監督ハ評議員会ニ列シ議

定ノ数ニ入ル

五 理事ハ会長ヲ補佐シテ事務ヲ処理ス

六 支部幹事ハ会長ヲ補佐シテ支部ノ事務ヲ処理ス

第六章 役員ノ任期

第六條 役員ノ任期左ノ如シ

一 會長副會長及會計監督ハ 五年

二 評議員ハ 三年

三 理事及支部幹事ハ 不定

第七章 会員

第七條 会員ヲ分チテ左ノ三種トス

一 通常会員

二 特別会員

三 名誉会員

第八章 会員ノ權

第八條 会員ハ左ノ權ヲ保持ス

一 会員ハ役員ニ撰挙セラルト事ヲ得

二 会員ハ評議員会ニ出席シ意見ヲ陳述スル事ヲ得

三 会員ハ会務ノ実況ヲ調査スル事ヲ得

第九章 基本金

第九條 本会ノ基本金ハ其利子ノ外經常費ニ支出スル事

ヲ得ズ

第十章 憲法ノ改正

第十條 本会ノ憲法ハ總會出席会員三分ノ二以上ノ同意

ヲ以テ改正スル事ヲ得

但シ全会員半数以上ノ出席若クハ意見ヲ得ルニア

ラザレバ憲法ヲ改正スル總會ト認ムルヲ得ズ

附 則

第一 本会ハ最初朝鮮国ノ教育ニ従事ス

第二 憲法第四条ニ依レル會長副會長及會計監督ハ初回

ニ限り發起人之ヲ撰挙ス

會 則

第一條 会員及ヒ会友ノ規定左ノ如シ

一 本会ノ目的ヲ賛助シ一年三円以上出金ノ義務ヲ負担スル者ヲ通常會員トス

但シ一時ニ金十五円以上ヲ寄附セル者又ハ五年間會員タリシ者ハ終身會員トス

二 一時ニ金三十円以上ヲ寄附シタル者ヲ特別會員トス

但シ之ヲ三年間ニ分納スルモ差支ナシ

三 特ニ本会ニ功勞アル者ヲ名譽會員トス

四 本会ノ目的ヲ賛助シ応分ノ尽力ヲ為ス者ヲ會友トス

第二条 會員タラント欲スル者ハ住所姓名ヲ本会事務所

ニ通知シ會長ノ承認ヲ經ベシ

但シ會員ニハ會員証ヲ贈附スベシ

第三条 會長ハ會員ニ退会ヲ命スル事ヲ得

第四条 評議會ハ三ヶ月一回以上開議スベシ

第五条 會長必要ト認ムルトキハ評議員會ノ議ヲ經テ總會ヲ開ク事アルベシ

第六条 總テノ會議ノ議長ハ會長之ニ当ル

第七条 本会ノ維持費ハ左ノ三項ヲ以テ之ニ充ツ

一 會費 二 特別寄附金 三 基本金ノ利子

第八条 毎年一回本会ノ事務會計ノ報告ヲナスベシ

第九条 本会ハ何人ヲ問ハズ會員又ハ物品ヲ寄贈セラ

ルハ時ハ之ヲ受ク

第十条 會則ノ改正ハ總會出席會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルヲ要ス

東京麴町區富士見町二丁目三十三番地

大日本海外教育會事務所

(『女学雜誌』四一五号 明治二十八年十月二十五日)

七七 渡韓視察結果報告

(明治二十八年四月)

渡韓視察結果の報告

吾會は先づ朝鮮國に教育を施さんことを欲し曩に本會より視察者を渡韓せしめ親しく實地に視察せしめたる処ろ、吾公使及当事者の尽力により政治上の改革は大率に緒に就き着々進歩の方向に嚮ふことを見る。而して此國民多年の積弊を一掃し其の本源に於て新生命を與へ改革の元氣を人心の根柢に培養し教育によりて該國真誠の啓導革新を行ふことの均しく切要なることを認め一般渡韓

の客が切りに其の憫状を軽侮する所以は即ち教育の大に施さざる可からざる所以なるは勿論、特に東西各邦の運命が日韓両国交際の親疎厚薄の間に懸住することを釈然解理するに於ては弥よ日本帝国仁義の初念を遂行せざる可らずと覚悟せられたり。且夫れ仔細に該国々情の明暗両界を觀察し審びらかに風俗如斯墜落せし因縁を思ひて熟ら人心啓発の秘密に鑑みるときは宛がら金砂の泥土に混じ間ま爍乎として光を発するが如く大に望を属すべきもの尚ほ頗ぶる多きことを確認し弥よ益す朝鮮国教育事業の隆んに起さざる可らざることを鑑識せり。則はち在京城申井上公使を初とし日本人有力家並に朝鮮国当局の人々に面談し親しく之を計りたるに皆な非常に賛成の意を表し之に助力せんことを約束せられたり。時に設計したる教育事業着手の大体は略ぼ左の如し

- 一 京城に模範となるべき日韓学校を設立し追て各地方に及ぼすべき事
- 一 右学校の為に最初日本教師若干名を派遣し韓人と共同尽力すべき事
- 一 学校教育の外に別に方案を運らし併せて一般普通に広く該国民を開導するの道を立つべき事
- 一 右方案の一として新聞雜誌若くは雑書小冊子を発

行する事

- 一 可成多数の日本人有志を渡韓せしめ隆んに交際啓化の道を開くべき事
 - 一 学校教育は大體二様とし一は普通の目的を以て現在に有用なる人物を養成することを旨とし二は高等教育の主意を以て将来大に国宝となるべき者を養成すべき事
 - 一 右の主旨により生徒中若干は日本国に留学せしむべき事
 - 一 右の目的を達せんがために教科書編纂の必用あるに依り当局者の協賛を経該事業に着手すべき目論見の事
 - 一 朝鮮教育実施準備の爲め早速設計者を渡韓せしむる事
- 右諸件は朝鮮現今の状態を熟察し在京城有志の賛成を経て細かに計画し速かに之を実行すべき精神を懷き有望洋々として帰朝したり。
- 右視察の結果に抛り吾会は迅速に其の準備に着手せんが爲に更に世上の有志に訴へ大略左の定則に随かひ賛助義捨を要めんと欲す
- 一 会則に準じ会員たらんことを請ふ事

但し一時に金拾五円を寄附せられたる者又は五年間引続き会員たりし者終身会員とす

二 特別有志となりて金參拾円以上の寄附を請ふ事
但し之を三年間に分納せらるゝとも差支無之事

夫れ朝鮮国独立の為に義戦し生靈を殺し国難を構ふるも尚ほ公道を遂行せんとするは帝國現在の抱負なり。天下挙つて驚嘆し切りに其結果を疑暗しつゝあるに際し克く善後大成の終を遂げ実地に朝鮮国に対する仁義大俠の好結果を示すは独り大日本の名譽と朝鮮を救ひたるのみならず東洋列国及び天下万邦に対して帝國の大抱負を事実の後に証明するものたり若夫れ戦熄み改革創業略ぼ成れるの後に仁義の初念半ばにして衰へ大俠の援助終を全くせずして止まば単に朝鮮国の不幸たるのみならず吾帝國の不名譽なり。惟ふに帝國政府は改革の創業に於て大に施すべき者ありと雖ども長久永遠の事業にして啓化の一般根柢に入らんことを望とする教育事業の如きに於ては蓋し帝國人民たる者の隆んに着手して以て國家の精神を継続すべきものに非ずや。之が為に貿易の途開けて日本商人の続々として該国に入り百般芸術の士瀕々該国に趨かれんとするに後れず真平に改革事業の成就克終を希図する献身的人物が多く渡行して親切に其美を成さん

こと極めて必要なり。吾会尚ほ微々たりと雖ども天下同志の贊助を得て盟つて此の任に当らんことを望む。冀くは四方同念の君子幸ひに微衷を察し吾党が精神遂行の為に敢て援助を賜ふあらんことを。

明治二十八年四月

大日本海外教育会發起人

敬白

東京市麴町区富士見町二丁目三十三番地

大日本海外教育会事務所

(渋沢史料館所蔵)

七八 大日本海外教育会賛成員および会員姓名

(明治二十八年十二月)

大日本海外教育会

賛成員及会員姓名 (イロハ順)

伯爵 井上 馨
伯爵 板垣 退助
伊 沢 修 二
五十嵐 敬 止

石川 和助
 岩淵 謙之助
 入江 祝衛
 井上 藤太郎
 今井 栄吉
 今井 総十郎
 岩崎 総十郎
 今井 茂助
 岩本 久米太郎
 岩谷 よしの
 石山 治三郎
 伊藤 一隆
 伊藤 泰造
 猪又 誉平
 石田 英造
 池田 米男
 岩淵 文右衛門
 伊藤 鑄之助
 磯野 員為
 石田 源吉
 岩谷 幸助
 石沢 末次郎

伊予田 徳次郎
 伊藤 重
 早川 智寛
 橋本 宗之進
 橋本 経光
 長谷川 有造
 林 弘之
 芳賀 重太郎
 秦 孝道
 原 賢次郎
 早坂 貞次
 馬場 民則
 長谷川 忠助
 長谷川 誠造
 原 胤昭
 間 半四郎
 仁平 豊次
 新渡戸 稻造
 丹波 清二郎
 丹波 金十郎
 贊田 剛橘

伯爵
 星野 光太
 星野 亨
 本野 小平
 細野 貞次郎
 星野 久成
 東奥 義塾
 土井 久寿彦
 土居 勝郎
 徳差 藤兵衛
 外川 平八
 富安 普
 戸川 安宅
 徳永 平次
 泊谷 喜八
 徳光 大次郎
 戸田 長八郎
 豊島 三策
 徳富 猪一郎
 大隈 重信
 大脇 元信
 小方 仙之助

子爵
 大石 憲英
 大環 修
 大久保 寅吉
 岡 真吉
 小野田 卓弥
 押川 つね
 岡部 久吉
 大室 障夫
 大井上 輝前
 小倉 格
 岡本 一之助
 大竹 敬助
 大橋 代吉
 尾花 芳重
 奥村 忠太郎
 太田 壮十郎
 岡部 長職
 太田 六四郎
 小野寺 義卿
 大家 与次郎
 小野 宗助

第五章 押川方義一より広く、より遠く

金 鎌 河 川 鹿 神 川 蒲 上 川 加 片 加 勝 渡 分 若 渡 渡 渡 和
 澤 田 合 合 島 田 崎 田 山 口 藤 岡 藤 間 邊 部 生 邊 邊 邊 知
 彦 善 篤 信 秀 乃 敬 金 栄 宇 健 勝 喜 盛 徳 俊 沢 常 牧
 作 三 叙 水 磨 武 三 之 之 兵 吉 弥 六 之 造 治 郎 吉 太

高 高 高 田 田 高 高 田 田 竹 田 大 龍 子 勝
 田 城 橋 代 中 木 橋 沢 村 内 中 工 居 爵 谷 吉 吉 龜 加 上 鎌 勝
 耕 龜 敬 進 義 壬 深 粕 武 清 耕 原 頼 干 田 田 谷 藤 床 田 又
 安 三 太 四 一 太 三 三 治 明 一 太 三 潤 太 助 政 仲 三 昱
 郎

上 村 村 村 檜 中 中 土 筒 对 相 相 高 田 武 田 他 大 高 高 竹
 田 上 松 上 橋 川 野 橋 井 島 馬 馬 山 母 市 村 他 同 高 高 村
 重 勉 龜 春 盛 嘉 武 藤 助 嘉 理 愛 善 幸 健 顯 宗 円 俊 源 権
 良 次 一 太 次 平 營 市 熊 三 郎 蔵 右 三 雄 允 政 次 英 之 六
 郎

谷 山 八 子 栗 熊 栗 楠 工 熊 陸 日 栗 桑 久 野 野 野 浦 鵜 植
 津 川 尾 尾 尾 尾 林 野 原 美 藤 谷 下 田 原 保 村 野 野 野 山 飼 村
 菊 磯 新 庸 五 雄 宗 冬 善 駒 義 下 田 慶 扶 新 崎 民 助 山 助 友 澄
 石 磯 助 三 朔 七 治 次 太 之 義 義 壽 太 桑 一 之 靖 太 三 三
 衛 衛 助 三 朔 七 治 次 太 之 義 義 壽 太 桑 一 之 靖 太 三 三
 門 吉 助 三 朔 七 治 次 太 之 義 義 壽 太 桑 一 之 靖 太 三 三

松井三郎 松岡馨児 松浦保治 榊瀧友吉 松田理三郎 松浦鳳之進 松本誠助 真木重遠 松田順平 榎田常吉 松田喜一郎 増子喜一郎 松田国太郎 益子恵之助 前島密 牧野伸顯 柳田喜兵衛 矢野鏡太郎 八木橋栄吉 山下廉 築瀬仁右衛門

海老名弾正 江原素六 遠藤敬止 遠藤庸治 榎本武揚 小嶋秀一郎 後藤元城 小出龍太郎 古賀公平 後藤嘉右衛門 小西増太郎 小林光茂 後藤顕美 小島官吉 藤沢幾之輔 福原允 福井捨介 深田憲治 深田藤治 福田錠二 福沢定興

子爵

佐藤栄右衛門 斎藤彦三郎 斎藤寅雄 佐野亮 秋山峻 厚谷善平 荒井幸作 荒生治右衛門 青山正光 相見磬 阿波松之助 新井章一 秋山春斎 青山好恵 荒木真弓 秋保親晴 厚池政敏 安藤太郎 寺井純司 寺岡重之助 寺沢精一

佐藤庸男 佐々木純一 桜田顕章 斎藤壬生雄 佐野喜代吉 佐伯陽一 笹森宇一郎 佐藤勝三郎 斎藤直太郎 佐藤和策 榊喜洋芽 佐藤昌介 坂本直寛 山東直砥 佐藤勝治 佐藤信太郎 斎藤廉蔵 佐々木康蔵 佐藤丈輔 佐々木市造

水野義郎	宮部金吾	桐山三四郎	木名瀬宏	木村斧彦	北山長次郎	北山幸次郎	貴山彦作	北山九郎	菊池九郎	北垣国道	北里柴三郎	三枝光太郎	佐藤鉞太郎	佐藤久作	佐藤長二	佐々木栄介	作間万吉	佐藤豊広	佐藤三郎	三瓶正綱
光	樋池喜惣治	芝山幾作	島田操	信太寿之	実相寺利氏	清水正史	庄司鍾三郎	島田三郎	南田泰作	宮島昇	三浦虎彦	美山貫一	三浦宗三郎	宮崎八百吉	宮川経輝	三上久満三	宮本甚兵衛	三沢富之助	三宅雄次郎	子爵三島弥太郎

菅田勇太郎	尺秀三郎	芹川得一	本川源之助	森野左近	本部泰	平間弥五郎	日野貞治	平田文右衛門	平沢幸太郎	日野愛熹	須藤鬼一
			明治二十八年十二月			鈴木味右衛門	杉村濬	鈴木真一	鈴木重遠		
			大日本海外教育会			管波至善					

(渋沢史料館所蔵)

七九 北海道同志教育会旨意書と会則

(明治二十九年一月)

北海道同志教育会旨意書

邦家百年の長計を慮らんと欲せば須らく真正なる教育を隆盛にし人情百川の源流を清め国民全体の智能を啓発せざる可からず夫れ人心能く其性情を導き智能を啓発し

天道を一体たらしむるに於ては万物之が為めに僕従するに至ると雖ども若し其方針を誤らん乎却て庶物の奴隸となり死を草木と同ふするに至る嗚呼今の人を教ふる者豈正襟三省して学道を講ぜざる可けんや抑も一国民を率ひて愛國義侠の民ならしむるも遠望樂天の人たらしむるも或はまた盲目歎情の者たらしむるも失望厭世の徒たらしむも唯々教育の方針如何にあり故に聖賢深く之を憂ひ蓋世の利器を以て政界の争野を避けて教育の險路に徐歩し以て人倫の基を立てたり嗟呼教育なる哉教育なる哉社会の改良国民の教化は独り寺院教会の能くする所にあらざる有為の人物を養成して国家の根底を固め多能の技工を出して社会の形成を助け内鞏外美の文明国を造るは実に真正なる教育に在つて存す

北海の全道面積六千九百十有余方里に過ぎずと雖も四面皆海にて水産物の收獲年を追ふて増加し今や其歳收殆んど壱千万円に垂んとすと加之内に金銀の山あり炭銅の岳多し且つ開発して以て美田と化することを得ば数十年を出ずして道民の歳收億を以て數ふるに至るべし且つ本道は北門の鎖鑰台湾の以て南に備へざる可からざる如く北に備へざる可からず故に早晚一二の師団置かれ軍港開かれ内外の文物大に面目を改め物質的の進歩蓋し刮目し

て觀るべきものあらん然るに茲に我党の献身万慮せざる可からざるのあり何ぞや海陸産業の如き商工事業の如き凡そ有利的事业の如きは最早国民自然の傾向に一任して可なりと雖も人生の北斗にして邦家の生命たる教育の如きは我党の責務本道最急の問題なりとす今や本道は將に綻びんとする蓄の時代にして異日の醜美は今人の方寸に在り是れ徒に看過すべき時に非らず宜しく真正なる教育を隆盛にし以て大功を將來に期す可きの秋なり

本道十一州沃野千里其中或は慈善事業の基本となり或は公共事業の資金となりたるものなきにあらずと雖も固より蒼海の一粟たるに過ぎず余輩北海の天地に俯仰し道民の將來を思ふ毎に其幾分を割き以て国家的事業に用ひんと欲したること久し今や漸く宿望の途に上らんとすると雖ども不肖固より此大任を負ふに足らず偏に天下同志の諸彦に訴へ別紙会則の方法を以て原資金七万円を募集し第一設計に依り先ず一千町歩の学田を拓き次で第二第三の設計を行ひ九年度を持つて三千町歩を得其小作料凡そ年三万円となるを以て十年度より十三年度までに原資金七万円を返却し十五年度に至て普通学校を起し歳入三万円の内二万円を其維持に充て他の壱万円を以て年々学田を増し歳入を加へ向後卅年を期して大学校と成し以て

北海の天地と無窮に存ぜしめ道民千歳の灯台たらしめんとす嗚呼蜉蝣の人生に悠久の事業を試む固より容易の事に非ず然りと雖も神聖にして急要なる事業の必らず天佑あることを確信す伏して希くば大万の諸賢北海今日の形勢を察し道民将来の幸福を祈り相愛同情の涙を垂れよ是れ一は以て北海拓殖の事業を進め他は以て道民智能の啓発を導き国光を将来に發揮する所以なり。

北海道同志教育会々則

- 第一条 本会ハ北海道ニ私立大学校ヲ設立スルヲ以テ目的トス
- 第二条 本会ハ北海道同志教育会ト称ス
- 第三条 本会ハ本部ヲ東京ニ置キ支部ヲ枢要ノ地方ニ置ク
- 第四条 本会ノ目的ヲ達セシカ為メニ北海道ニ恰好ノ土地ヲ撰定シ會員ノ貸出金有志者ノ寄付金及資本主ノ払込金等ヲ以テ別紙設計ヲ実行スルモノトス 但資本主トノ契約ハ別紙書式ニ依ル
- 第五条 学田ハ本会々議ニ於テ撰定シタル者ノ名義ヲ以テ所有セシムルモノトス
- 第六条 本会ノ挙ヲ賛シ無利息ニテ金百五十円以上貸出シタルモノ及ビ特ニ本会ニ功勞アルモノヲ名

譽會員トシ同三十円以上貸出シタルモノヲ特別會員トシ同五円以上ヲ貸出シタルモノヲ通常會員トス

第七条 名譽會員特別會員通常會員ニ各自ノ會員証ヲ贈与スルモノトス

第八条 會員ノ貸出シタル金員ハ十ヶ年後三カ年賦ヲ以テ之ヲ返却スト雖モ會員ノ資格ハ終生失ハサルモノトス

第九条 會員ハ職員ニ撰ハルルノ權又之ヲ撰フノ權ヲ有シ学田或ハ学校ノ利害得失ニ関シ意見書ヲ本会々議ニ提出スルコトヲ得

第十条 會員ノ資格前數条ノ如シト雖モ會長ハ其ノ入会ヲ拒絕シ又會員ヲ除名スル事ヲ得 但其事由ハ之ヲ告ケルノ責ヲ負ハスト雖モ其未入会金ヲ返却セザルモノナルトキハ其會員即時或ハ年賦ヲ以テ返却スヘシ

第十一条 本会ニ左ノ役員ヲ置ク
會長 一名 副會長 一名 評議員 十名以上
會計監査員 二名 會計 二名 支部

長 若干名 支部幹事 若干名 農場監督 一名 農場事務員 若干名

- 第十二条 評議員ハ会員ニ於テ会長副会長会計及農場監督ハ評議員ニ於テ共ニ之ヲ会員中ヨリ撰挙シ会計監査員ハ評議員互撰ヲ以テ之ヲ兼ネ支部長支部幹事ハ会長ヨリ囑託シ農場事務員ハ農場監督ニ於テ挙用スルモノトス
- 第十三条 会長ハ本会ヲ代表シ細則ヲ規定シ会務ヲ總理スルモノトス
- 第十四条 副会長ハ会長ヲ補佐シ会長事故アルトキハ其職務ヲ代理スルモノトス
- 第十五条 評議員ハ本会々議ニ列シ第二十二條ニ規定スル事項ヲ審議評定スルモノトス
- 第十六条 会計監査員ハ本会資金ノ出納計算ヲ監査スルモノトス
- 第十七条 会計ハ本会一切ノ会計ヲ修理スルモノトス
- 第十八条 支部長ハ皆ヲ会長ニ承ケ支部ニ係ル一切ノ事務ヲ処理スルモノトス
- 第十九条 支部幹事ハ所属支部長ノ指揮ニ從ヒ支部ニ係ル事項ヲ処弁スルモノトス
- 第二十条 農場監督ハ本会農場ニ係ル一切ノ事務ヲ經營シ庶務会計ヲ統監スルモノトス
- 第二十一条 農場事務員ハ監督ノ指揮ニ從ヒ係ル事務ヲ処弁スルモノトス
- 第二十二条 評議員ノ任期ハ滿五ヶ年トシ会長副会長会計監査会計農場監督ハ滿七ヶ年トス支部長支部幹事及農場事務員ノ年限ハ別ニ之ヲ定メス
但役員ノ再撰スルコトヲ得
- 第二十三条 會議ハ通常會、臨時會、總會ノ三種トス
- 第二十四条 通常會議ハ一年一回之ヲ開キ左ノ事項ヲ議定スルモノトス
一、資金並ニ學田ニ関スル件
一、會則並ニ學校ニ関スル件
一、會員並ニ職員ニ関スル件
- 第二十五条 臨時會議ハ會長ノ意見又ハ職員四分ノ一以上ノ請求ニヨリ之ヲ開キ臨時緊急ノ事件ヲ議定スルモノトス
- 第二十六条 總會ハ五年毎ニ之ヲ開キ評議員ノ撰挙ヲ行フモノトス
- 第二十七条 會議ハ會長ヲ以テ議長トシ副會長、會計監査員、會計、農場監督及評議員ヲ以テ議員トス
- 第二十八条 會議ハ議員過半数以上アルニアラサレハ決議ヲナス事ヲ得ス
但召集再回ニ至ルモ尚ホ過半数ニ充タサルトキハ

出席員ヲ以テ議定スル事ヲ得

第二十九条 会議ハ会長之ヲ召集スルモノトス

第三十条 会議ノ決議ハ多数ニ依リ可非同数ナルトキ

ハ議長之ヲ決スルモノトス

第三十一条 会計年度ハ毎年一月一日ニ起リ十二月卅一

日ニ終ル

第三十二条 会務ノ要領資金ノ出納ハ毎会計年度ニ於テ

之ヲ報告スルモノトス

第三十三条 前条ノ会則ハ議員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ

得ルニ非ラサレハ改正變更スル事ヲ得ス

附則 初回評議員ニ限り發起人之ヲ推薦シ發起人モ

之ニ加ハルモノトス

明治廿九年一月

評議員

片岡 健吉	田村 顕允	会 長	押川 方義
小崎 弘道	島田 三郎	副会長	本多 庸一
海老名 弾正	江原 素六	会 計	本多 庸一
仁平 豊次	同	農場監督	信太 寿之

〔遠軽町史〕昭和三十二年版)

八〇 押川方義の休暇問題

(明治三十年十一月六日)

明治三十年十一月六日午前八時、ホーイ氏宅に於て臨時会開会、会する者ホーイ、ミロル、ノッス、斎藤、押川の諸氏とす、斎藤氏の祈禱を以て開会英邦記録朗読之を可とす

〔中略〕

今般東北学院長押川方義氏より明治三十一年四月一日より向ふ二ケ年間は日本伝道事業とリフオムトミシヨンとの関接なき他の事業の爲め専ら従事致度旨申出候に付其願意に對し左の如く決議せり

押川方義氏の提議は前記の二年間と雖ども、可成丈かなり東北学院の事業の爲めにも心を用ゆる事と、及同氏が北米合衆国リフオムト教会外国伝道局へ給料の半額を減する事を申出べしとの考量に於て之を允諾する事、且つ此決議案は考思の後ち之を合衆国リフオムト教会外国伝道局へ送附する爲めに先ずリフオムトミツシヨンに報告する事

動議により散会

(理事會記録)

八一 普通科規則改正認可申請書類

(明治三十一年三月十五日)

本院規則入学及在學規定中第二左ノ通改正致候間認可被成下度奉願候也

明治卅一年三月十五日 東北學院長 押川方義 印

宮城県知事 樺山資紀殿

(旧規則)

一 普通学部第一年ニ入学ヲ許ス可キ者ハ高等小学校卒業ノ者カ若クハ左ノ試験ニ及第セルモノトス

日本外史 卷ノ一(素読)

仮名交り作文

初等数学

(新規則)

一 普通学部第一年ニ入学ヲ許スベキ者ハ滿十二年以上

ニシテ高等小学第二年級ヲ修了シタル者カ若クハ左ノ

試験ニ及第セル者トス

一 講読 仮名交り文

一 作文 仮名交り記事文

一 算術 四則

庶第一六七五号

私立東北學院規則中入学及在學規定之内今般改正候旨如別紙届出候間副申候也

明治三十一年三月十五日 仙台市長 遠藤庸治 印

宮城県知事 樺山資雄殿

属 田中弥寿生 印

内務部長 印 第三課長 印 学務係 印

仙台市長へ照会ノ件

案

私立東北學院規則改正届御進達相成候処右ハ知事ノ認可ヲ受クヘキ筋ニ有之候条其旨御伝達相成度別紙相添此段

申進候也

年月日 内務部長

仙台市長宛

(注・明治三十一年三月二十一日付)

庶第二〇三〇号

東北学院規則改正認可願副申

当市私立東北学院規則之内改正之義別紙之通願出候間御認可相成度此段副申候也

明治三十一年三月廿九日 仙台市長 遠藤庸治 印

宮城県知事 樺山資雄殿

内務部長 印 第三課長 印 属 田中弥寿生 印

知事 印 学務係 印 印

参事官 印

東北学院規則改正ノ件

右調査ヲ遂ケ候処不都合無之ト存候間左案ノ通御指令相成可然歟

案

東北学院院长

本年三月十五日附出願其院規則中改正ノ件認可ス

年月日 知事

(注・明治三十一年四月十一日付)

(県庁文書)

八二 私立学校令による届書

(明治三十二年八月三十日)

御 届

今般勅令第三百五十九号私立学校令ニ本キ別紙ノ通り御届申上候也

明治廿二年八月廿日

右

東北学院院长 押川方義代理

幹事 斎藤壬生雄 印

宮城県知事 千頭清臣殿

教 則

明治二十四年七月認可セラル当時予科三年本科四年神学科三年ト定ム (当時ノ規則書相添ヘ候)

一 明治二十八年三月前規則ニ改正ヲ加ヘ予科本科トイフヲ廃シ普通科五学年文科専修部理科専修部各二学年トナス神学部ハ従前ノ通りタリ(当時ノ規則書相添ヘ候)
一 明治三十一年四月十二日規則書中入学及ビ在学第二項普通学部一年ニ入学ヲ許スベキ者ヲ高等小学第二年修

了ノ者カ若クハ左ノ試験ヲ及第セルモノトス

講読 (仮名交リ文)

作文 (仮名交リ記事文)

算術 (四則)

ト改ム

明治三十二年四月理科専修部ヲ廃止ス

同年同月規則書中入学及ビ在学第二項普通学部一年ニ入

学ヲ許スベキ者ヲ高等小学卒業ノ者カ若クハ左ノ試験ニ

及第セルモノトス

講読 (中学漢文読本)

作文 (仮名交リ記事文)

数学 (初等数学)

ト改ム

開申書

今般勅令第三百五十九号第二十条ニヨリ左ノ人名従前ノ

通り本院ニ勤務致候間履歴書相添へ此段開申仕候也

明治卅二年八月卅日

職員

教員

齋藤 壬生雄

ウイリヤム、

デビッド、

シュネーダー

入江 祝衛

布施 淡

福澤 定興

深田 康守

土井 久寿彦

寺澤 精一

石田 祐安

クリストフワ、

加藤 与五郎

出村 悌三郎

ポール、

ゲルハルト、

川合 信水

中村 長之助

右東北学院院长 押川方義代理

幹事 齋藤壬生雄 ㊦

宮城縣知事 千頭清臣殿

校長 押川方義

幹事 齋藤壬生雄

履 歴 書

仙台市東四番町二十二番地寄留

群馬県平民 斎藤壬生雄 ㊦

嘉永五年二月五日生

明治二年ヨリ 旧前橋藩立学校ニ入り漢学修業 前橋藩立
四年マデ 学校

明治十八年九 東京築地一致神学校ニ入り神学 一致神学
月ヨリ廿年十 修業 校

二月マデ
明治廿年十二 山形県山形市ニ基督教伝道ヲナ 山形基督
月ヨリ廿四年 ス 教会

五月マデ
明治廿四年五 北海道函館ニ基督教伝道ヲナス 函館教会
月ヨリ廿六年

五月マデ
明治廿六年五 東北学院ノ幹事タリ 東北学院
月ヨリ現今ニ 至ル

明治廿一年七 仙台日本基督教会ノ牧師タリ 仙台日本
月ヨリ現今ニ 基督教会
至ル

明治廿六年ヨ 東北学院理事員トナル
リ現今ニ至ル

明治廿二年八 東北学院倫理科教授トナル
月ヨリ

右之通ニ候也

右

斎藤壬生雄 ㊦

履 歴 書

北米合衆国ペンシルヴァニア州ランカスター

仙台市東三番丁七拾八番地居住

ウキリヤム、エドウキン、ホーイ

西曆千八百五十八年六月廿一日生

千八百八十三年 合衆国フランクリン、アンド、マーシ
九月 ャル高等学校ニ於ケル日本学生ノ教育
ヲ命ゼラル

千八百八十五年 日本ニ来リ爾後仙台市私立東北学院教
十二月 師トナリ現今尚ホ継続ス

米国ニ於テ発行セルニ雑誌ノ通信員ヲ
依嘱セラル

東京ニ於テ発行スル ゼ、ヂヤパン、
エヴァンヂェリスト雑誌ノ編輯人タリ

右ノ通り相違無之候也

右

明治廿二年八月 ダブルユー、イー、ホーイ ㊦

履歴書

北米合衆国ペンシルヴァニア州ランカスター
仙台市東三番丁七拾八番地居住

ウキリヤム、エドウキン、ホーイ
西曆千八百五十八年六月廿一日生

千八百八十二年 合衆国フランクリン、アンド、マーシ
六月 ヤル高等学校ヲ卒業ス

千八百八十五年 合衆国神学校ヲ卒業ス
五月 以上二学校ノ課程外ニカルデヤ語、シ
リア語、アラビヤ語ヲ学ブ

千八百八十五年 始メテ日本語ヲ学ビ現今尚ホ継続ス
十二月

右ノ通り相違無之候也

明治廿二年八月 右 ダブルユー、イー、ホーイ ㊦

履歴書

北米合衆国ペンシルヴァニア州
仙台市東三番丁七拾八番地居住

デーヴキッド、ポーマン、シュネーダー
西曆千八百五十七年三月二十三日生

自千八百七十三年十月 合衆国公立小学校教師トナル

至千八百七十六年三月

自千八百八十年 合衆国フランクリン、アンド、マーシ
九月 ヤル高等学校英語教授トナル
至千八百八十一年十二月

自千八百八十三年 一教会ヲ牧ス
年六月

至千八百八十七年六月

千八百八十八年 仙台市私立東北学院教師トナリ現今尚
一月 ホ継続ス

右ノ通り相違無之候也

明治三十二年八月 右 デー、ビー、シュネーダー ㊦

履歴書

北米合衆国ペンシルヴァニア州
仙台市東三番丁七拾八番地居住

デーヴキッド、ポーマン、シュネーダー
西曆千八百五十七年三月廿三日生
千八百八十年六月 合衆国フランクリン、アンド、マーシ
月 ヤル高等学校ヲ卒業ス

千八百八十三年 合衆国ランカスター神学校ヲ卒業ス
五月

千八百九十六年

學術研究及ビ教育視察ノ為メ英国オックスフォードニ赴キ後チ伯林大学ノ客生トナリテ六週間滞在シ更ラニハレテ学ノ客生トナリテ五週間滞在セリ其他ライプチツヒ、イエナ、エヂンボロー大学ニ於テモ勉学セリ

千八百八十八年

初メテ日本語ヲ学ビ現今尚ホ継続ス

一月

千八百八十年六月

合衆国フランクリン、アンド、マール高等学校ヨリバチエロル、オヴ、アーツノ学位ヲ受ク

千八百九十九年六月

合衆国フランクリン、アンド、マール高等学校ヨリドクトル、オヴ、デヴィニティーノ学位ヲ受ク

右ノ通り相違無之候也

右

明治三十二年八月

デー、ビー、シユネーダー ㊦

履歴書

埼玉県入間郡川越町六百四拾八番地入江友次郎弟

仙台市東三番丁七拾四番地寄留

生国 磐城国白川郡棚倉藩

埼玉県士族 入江 祝衛

慶応二寅年四月二日生

明治十八年二月 埼玉県松山小学校訓導拜命 埼玉県庁

明治十八年十月 依願同職ヲ免ゼラル 同上

明治十八年 埼玉県大澤小学校訓導拜命 同上

十一月 依願同職ヲ免ゼラル 同上

明治十九年一月 依願同職ヲ免ゼラル 同上

明治十九年一月 埼玉県蒔田小学校訓導拜命 同上

明治二十年三月 依願同職ヲ免ゼラル 同上

自明治二十二年 東京市神田区錦町博言学士イーストレキ設立私立国民英学会 至同二十三年 教師トナル

九月 現今尚ホ継続ス

明治廿六年四月 仙台市私立東北学院教師トナリ

明治十八年六月 埼玉県松山学校費トシテ金拾円 埼玉県庁

寄附セシヲ以テ其賞トシテ木盃 一個下賜セラル

明治二十年三月 埼玉県秩父郡役所建築費トシテ 埼玉県庁

金若干ヲ寄附セシヲ以テ賞状ヲ 賜フ

右ノ通相違無之候也

右

明治三十二年八月

入江 祝衛 ㊦

履 歴 書

埼玉県入間郡川越町六百四拾八番地入江友次郎弟
 仙台市東三番丁七拾四番地寄留

埼玉県士族

生国 磐城国白川郡棚倉藩

入江 祝衛

慶応二寅年四月二日生

明治十二年三月

埼玉県入間郡川越町公立三芳塾小学校
 全科卒業

明治十五年三月

埼玉県入間高麗郡立中学校卒業

明治十八年二月

埼玉県立師範学校卒業

明治二十年四月

東京市神田区錦町私立英吉利法律学校
 (現今ノ法学院)原書科ニ於テ修業

明治二十三年九月

東京市芝区白金明治学院英語神学部ニ
 入り同二十六年四月即チ卒業ノニケ月
 前都合ニヨリ退学

明治二十三年九月

東京市芝区三田豊岡町十五番地独逸人
 エルゼ、ケッペン氏ニ就キ独逸語ヲ学
 習ス

明治三十年一月

第二高等学校医学部生理学実験室ニ於
 テ生理学解剖学其他ノ生物学の実験ヲ
 行フ

自明治二十八年

仙台市元寺小路仏人ヂャツケー氏ニ就
 キ仏蘭西語ヲ学ブ

至同二十九年

十二月

右ノ通り相違無之候也

明治三十二年八月

右
 入江 祝衛 ㊦

履 歴 書

原籍 宮城県本吉郡麻峯村式百六拾六番地

寄留 仙台市外記丁通拾貳番地

士族 布施 淡

明治六年八月拾五日生

明治拾九年

宮城中学校ニ入学

宮城尋常
 中学校

全 貳拾年

尋常中学校第五級修業

全

全 廿參年

東北学院予科一年級ニ入学

東北学院

全 廿五年

同 三年級修業

全

右之通相違無之候也

右

布施 淡 ㊦

履 歴 書

原籍 宮城県本吉郡麻峯村式百六十六番地

寄留 仙台市外記丁通拾貳番地

士族 布施 淡

明治六年八月拾五日生

明治廿六年 東北学院函画科教員属托セラル 東北学院
五月十六日

右之通相違無之候也

右

布施 淡 ㊦

履 歴 書

千葉県士族

福澤 定興 ㊦

慶応元年八月生

明治十三年ヨリ 続豊徳及続簡ニ就キ漢文学修業
十七年マデ

明治十八年ヨリ 二松学舎ニ入学漢文学修業

明治十九年ヨリ 履実学舎ニ於テ英学修業
廿一年マデ

明治二十年ヨリ 根本通明ニ就キ漢文学修業
二十一年マデ

明治廿一年 二松学舎全科卒業

明治廿二年 同舎助教トナル

明治廿三年 同舎塾頭トナル

明治二十六年ヨリ 仙台市東北学院漢文科教授トナル
今日ニ至ル

右之通相違無之候也

右

明治三十二年八月

福澤 定興 ㊦

履 歴 書

千葉県士族

福澤 定興 ㊦

慶応元年八月生

明治二十一年 二松学舎全科卒業証書ヲ受ク
十二月

右之通相違無之候也

右

明治三十二年八月

福澤 定興 ㊦

履 歴 書

東京府士族 深田 康守

嘉永元年六月三日生

明治十年十二月一 任山形県八等属但学務課勤 山形県
務

同十一年六月一 任山形県七等属兼師範学校 同
監事申付候事

同十四年六月一日	任山形県六等属右同断	同
同十四年九月六日	任山形県師範学校三等教諭	同
同十五年一月廿六日	任福島県五等属学務課勤務	福島県
同十五年二月廿七日	当分兼福島県師範学校長申付候事	同
同十七年七月一日	任栃木県四等属	栃木県
同 七月一日	會計主務官勤務	同
同 七月一日	會計課長心得申付候事	同
同十八年三月十二日	任栃木県収税属	同
同十八年八月三日	任埼玉県四等属庶務課勤務	埼玉県
同十九年八月廿八日	任埼玉県属	同
同 一	叙判任官三等第二部兵事課長ヲ命ズ	同
同二十五年三月廿九日	給二級俸	同
同二十五年三月卅一日	非職ヲ命ズ	同
同二十六年一月二十五日	依頼免本官	埼玉県

職務勉励ノ為賞与金下賜セララル事 七回
 寄附献納金ニ関シ木盃ヲ下賜セラレシ事 三回
 寄附金ニ付賞詞ヲ受クル事 六回

履歴書

東京府土族 深田 康守

嘉永元年六月三日生

自安政六年十月 旧会津藩学校ニ於テ和漢学兼書学ヲ学ブ 会津藩

至慶応元年十月 二月

明治六年四月 東京府小学校教員試験ニ及第シ東京府講習所ニ於テ講習ヲ受ク 東京府

同八年七月九日 一等訓導申付候事 酒田県

同九年十一月 一等訓導申付候事 山形県

同二十年ヨリ 文学博士佐藤誠実氏ニ就キ和文研究

同二十七年四月 新瀉県尋常中学校国語科教授ヲ 新瀉県
 属トス

同二十七年九月 東北学院兼宮城女学校和文教教授ニ從事シ今ニ至ル

履歴書

仙台市外記丁十五番地寄留

高知県士族

土井久寿彦

明治四年八月三日生

一、明治十八年七月小学全科卒業

一、同年九月高知中学校二入學、明治廿一年十二月第二級

修業中病氣退學

一、明治廿五年九月東京明治学院二入學同廿七年九月退學

一、同年同月仙台市東北学院歴史及地理教授二聘セラレ現

時ニ至ルマデ教授ニ従事ス

右之通ニ候也

明治卅二年八月十六日

土井久寿彦 ㊦

履 歴 書

群馬県前橋市堀川町十六番地

宮城県仙台市新名懸町十四番地寄留

群馬県士族 寺澤 精一

文久二年十一月生

一、明治十年六月群馬県前橋市厩橋学校ニ於テ小学全科

卒業

一、明治十五年六月群馬県々立中学校ニ於テ中学全科卒

一、明治十五年九月ヨリ同十六年十一月マデ東京大学予

備門ニ於テ其学科修業

一、明治二十三年六月京都市私立同志社学院ニ於テ英語

神学部全科卒業

一、明治二十三年九月群馬県前橋市前橋基督教会ノ牧師

トナル

一、明治二十三年九月群馬県庁ヨリ群馬県々立中学校生

徒教授ヲ依嘱セラル兼テ同校幹事ヲ命ゼラル

一、明治二十四年六月前記前橋教会ノ牧師職ヲ辞ス

一、明治二十五年六月前記中学校教授兼幹事ノ職ヲ辞ス

一、明治二十五年七月岡山県備中高梁町高梁基督教会ノ

牧師トナル

一、明治二十五年九月岡山県備中高梁町私立高梁順正女

学校ノ校長トナル

一、明治二十七年三月前記牧師校長ノ二職ヲ辞シ宮崎県

日向高鍋町基督教会ノ牧師トナル

一、明治二十七年十月高鍋教会ノ牧師職ヲ辞シ宮城県仙

台市私立東北学院神学部及ビ文学部ノ教授トナリ以

テ今日ニ至ル

一、官衙ヨリノ賞罰ハ共ニ受ケタル事ナシ

右之通無相違候也

明治三十二年八月十六日

寺澤 精一 ㊦

履 歴 書

宮城県仙台市北一番丁五十四番地

宮城県土族 石田 祐安

慶応元年三月一日生

一 明治六年仙台南材木町小学校ニ入学同十二年退校

一 同十二年四月宮城中学校ニ入学同十四年六月退校

一 同十年ヨリ同十七年ニ至ル七年間仙台増田有常石澤成

遠ニ就キ漢学修業

一 同十八年五月ヨリ同二十年六月マテ在東京私立東京英

語学校ニ於テ英学専修

一 同二十年九月在東京私立明治学院神学部ニ入学同二十

三年四月卒業

一 同二十三年四月東京橋浸礼教会牧師トナリ同年八月

辞職

一 同廿三年八月ヨリ同廿七年五月マテ和歌山市及ヒ岡山

市ニ在テ伝道ニ従事ス

一 同廿七年七月ヨリ同廿八年九月マテ大阪ニ於テ発行セ

ル東洋基督教雑誌ノ主筆トナリ兼テ著述ニ従事ス

一 同廿八年九月仙台私立東北学院教授トナリ今尚勤続

右之通相違無之候也

明治三十二年八月

石田 祐安 ㊦

履 歴 書

宮城県仙台市北一番丁五十四番地

宮城県土族 石田 祐安

慶応元年三月一日生

一 明治二十三年四月東京私立明治学院神学部卒業

一 賞罰共受ケタル事ナシ

右之通相違無之候也

明治三十二年八月

石田 祐安 ㊦

履 歴 書

北亞米利加合衆國ペンシルヴェニア州

宮城県仙台市南六軒町一番地寄留

クリストフワ、ノツス

西曆千八百六十九年九月生

西曆千八百八十年

マリーランド州ウエストミンスター市

ウエストー、マリーランド、カレ

ジニ入り三年間希臘語拉典語ヲ学ブ

同千八百八十四年

ペンシルヴハニア州ランカスター市

ランクリンマーシャル大学ニ入り四年

ノ修学ノ後最優等ヲ以テ卒業シパチエ

ロールオブアーツノ学位ヲ受ク

同千八百八十八年

現時ペンシルヴハニア州視学官セーフ
エル氏ノ撰抜ニヨリペンシルヴハニア
州クッツタウンノキイーストンスター
ト師範学校ノ物理学植物学ノ教授ニ任
ズ

クリストフワー、ノッス

Christopher Noss

同千八百九十一年

ペンシルヴハニア州ランカスター神学
ニ入り後ニューヨーク市ユニオン神学
校ニ転学ス同時ニコロンビア大学ニテ
理財学ト哲学歴史ヲ修メ再ビランカス
ター神学校ニ入り教会歴史ニ関スル懸
賞文ヲ呈シ同神学校ヨリ百弗ノ賞ヲ受
ク

同千八百九十四年

ランカスター神学校卒業シ神学教師ノ
免許ヲ受ク同年ランカスター大学図書
館整理員ニ任ジ又レフオームド教会伝
道会社ヨリ挙ケラレテ東北学院教授ニ
任ズ

一年間独逸国伯林大学ニ遊学シ基督教
会歴史哲学歴史ヲ修メハーナク教授ノ
教会歴史研究会々員トナル

同千八百九十五年

日本仙台ニ来リ東北学院理事員ニ撰バ
ル

同 年

東北学院基督教倫理学基督教弁証学教
授ニ任ズ
来日以來専ラ日本語研究ニ従事シ略之
ヲ習得ス

右之通相違無之候也

明治三十二年八月十七日

宮城県知事 千頭 清臣殿

履 歴 書

本籍 愛知県三河国碧海郡野田村百八十一番戸

加藤与五郎

明治五年七月生

一 明治廿四年九月京都市私立同志社普通科理学部ニ入
リ高等数学物理学化学動物学学生理学ヲ脩メ同廿五
年六月該部卒業

一 同廿五年九月同社波理須理科学校大学部第二種化学
科ニ入り同廿八年六月該科卒業

一 同廿八年九月ヨリ同廿九年三月迄熊本市外私立九州
私学校ニ在リテ数学物理学化学磁物学ヲ教ヘ同市外私
立熊本女学校ニ在リテ物理学化学磁物学ヲ教フ

一 同廿九年四月ヨリ仙台市私立東北学院ニ在リテ数学
物理学地文学ヲ教ヘ同廿一年九月ヨリ更ニ同市私
立宮城女学校ニテ化学物理ヲ教フ

一 京都市私立同志社波里須理科学校大学部ニ在ルトキ
賞学金ヲ受ク

一 罰ヲ受ケシ事ナシ

右之通り相違無之候也

右

同志社波里須理科学学校教頭 下村孝太郎 印
右加藤与五郎大学部卒業ニ由テ同学部得業生タル事ヲ証
了ス

明治三十二年八月

加藤与五郎 ㊦

明治二十八年六月廿八日

同志社波里須理科学学校長 小崎 弘道 校長印

卒業証書写

右之通りニ御座候也

卒業証

明治三十二年八月

加藤与五郎 ㊦

愛知県平民

第六号

加藤与五郎

履 歴 書

本校大学部第二種化学科ヲ脩メ卒業試問ヲ完シ其業ヲ卒
ヘタリ仍テ之レヲ証ス

主科 無機化学 有機化学 原理想化学 工業化学 衛

生化学 化学史 分析術 化学的物理解

副科 物理学 金石学 地質学 独逸語

教授 バチロル、オブ、サイエンス 下村孝太郎 印

教授 ドクトル、オブ、メデシン 児玉 信嘉 印

教授 栗生 光謙 印

教授 須田勝三郎 印

教授 葉 学 士 小野 瓢郎 印

講師 バチロル、オブ、アート 服部 他助 印

講師 理 学 士 松井元次郎 印

新瀉県越後国北蒲原郡五十公野村字五十公野
宮城県仙台市光禅寺通廿五番地寄留

士族 出村悌三郎

明治六年一月生

明治十三年一月 五十公野小学校ニ入ル

同 十九年一月 五十公野小学校卒業

同 十九年九月 私立新瀉英学校ニ入ル

同 二十年十月 私立北越学館ニ入り英語ヲ以テ普通学
ヲ修ム

同 二十四年四月 新瀉曹洞宗中学林英語教員ニ任ズ

同 二十四年九月 北越学館英語教員ニ任ズ

同 廿五年一月 仙台私立東北学院二入り英語ヲ以テ高等普通学ヲ修ム

同 廿六年六月 東北学院普通科卒業

同 廿六年九月 東北学院英語神学部二入ル

同 廿九年六月 東北学院英語神学部卒業

同 廿九年七月 東北学院英語教授二任ズ

右之通相違無之候也

明治三十二年八月十七日

出村悌三郎 ㊦

履 歴 書

新潟県越後国北蒲原郡五十公野村字五十公野

宮城県仙台市光禪寺通廿五番地寄留

士族 出村悌三郎

明治六年一月生

一 明治二十六年六月東北学院普通科卒業証書ヲ受ク

一 明治二十九年九月東北学院英語神学部卒業証書ヲ受ク

履 歴 書

北米合衆国ペンシルヴァニア州ランカスター市セント、デューク街百三十一番

仙台市東三番丁七拾八番地居住

米人ホーイ方寄寓

ポール、ラムバルト、ゲルハルド

西曆千八百七十三年七月四日生

千八百九十四年

合衆国ペンシルヴァニア州ニュー、ホランド中学校教師ヲ命ゼラル

千八百九十六年

仙台市私立東北学院教師トナリ現今尚ホ継続ス

右ノ通り相違無之候也

右

明治卅二年八月

ピー、エル、ゲルハルド ㊦

履 歴 書

北米合衆国ペンシルヴァニア州ランカスター市セント、デューク街百卅一番

仙台市東三番丁七拾八番地居住

米人ホーイ方寄寓

ポール、ラムバルト、ゲルハルド

西曆千八百七十三年七月四日生

千八百九十四年

合衆国フランクリン、アンド、マージナル高等学校ヲ卒業シテパチエロル、オヴ、アーツノ学位ヲ受ク

六月

千八百九十四年

自千八百九十五年 合衆国ランカスター神学校ニ在学ス

九月

至千八百九十六年

九月

千八百九十七年 始メテ日本語ヲ学ビ現今尚ホ継続ス

一月

千八百九十九年

六月

合衆国フランクリン、アンド、マーシヤル高等学校ヨリマスター、オヴ、アーツノ学位ヲ受ク

右ノ通り相違無之候也

右

明治廿二年八月

ピー、エル、ゲルハルド

㊦

履 歴 書

仙台東二番町三十二番地寄留

山梨県平民 川合 信水

㊦

慶応三年十月廿二日生

明治二十一年 山梨県下峽陽輿論新報ノ記者

七月ヨリ八月 トナル

マデ

峽陽輿論 新報社

明治二十三年 東京女学雑誌ノ記者トナル

十月ヨリ二十

五年十二月マ

女学雑誌 社

明治二十九年 仙台芙蓉峰雑誌ノ主筆記者ト

四月ヨリ三十

一年九月マデ

ナル

明治二十六年 仙台労働会ノ塾長トナル

九月ヨリ三十

年十月マデ

明治三十年九月 仙台東北学院寄宿舎々監トナ

ヨリ現今ニ至ル

明治三十年九月 仙台東北学院作文科教授トナ

ヨリ現今ニ至ル

芙蓉社

労働会

東北学院 寄宿舎

東北学院

履 歴 書

仙台東二番町三十二番地寄留

山梨県平民 川合 信水

㊦

慶応三年十月廿二日生

明治廿九年六月 東北学院邦語神学科卒業

東北学院

履 歴 書

宮城県仙台市南光院丁八番地

士族 中村長之助

明治五年八月生

一 明治十八年四月名古屋市榎堂小学校小学科卒業

一 明治十八年六月より同廿年十月に至るまで愛知県尋常

中学校に在学

一 明治廿年十一月より同年七月に至るまで私立名古屋英
学校に在学

一 明治廿五年六月仙台市私立東北学院英語普通科卒業

一 明治廿八年六月前項東北学院英語神学部卒業

一 明治廿八年九月より同廿二年七月に至るまで英字雑誌
ジャパン、エバンジャリスト編輯に従事す

一 明治卅二年一月より同年六月に至るまで仙台収税管理
局英語教師奉職

一 明治卅二年七月東北学院英語教授に聘せらる

中村長之助 ㊦

(県庁文書)

八三 押川方義の院長継続開申書

(明治三十二年十月三十一日)

庶第六八〇号

私立東北学院校長継続就職ノ儀ニ付開申

私儀現ニ私立東北学院校長ニ有之候処引続当該学校ノ校

長ニ従事致候間私立学校令第二十条ニヨリ此段開申候也

仙台市清水小路七番地

士族 押川 方義 ㊦

明治三十二年十月卅一日

宮城県知事 千頭 清臣殿

履 歴 書

宮城県仙台市南光院丁八番地

士族 中村 長之助

明治五年八月生

一 明治廿五年十二月 明治廿四年十月尾濃震災の節東京

私立赤阪病院医学生として出張治療の褒状を岐阜県知

事小崎利準より領す

履 歴 書

愛媛県士族 押川 方義

嘉永四年十二月生

一 安政六年ヨリ文久三年マデ伊予松山藩儒武知幾右衛

右

門河東喜一郎ニ就キ漢学修業

元治元年ヨリ慶応四年マデ藩立学校明教館へ入学漢学歴史修業側ラ劔鎗馬術及水練修業

慶応四年ヨリ藩立英学校入学

明治二年藩命ニヨリ東京開成校入学

明治四年横浜英学校入学バラ、ブラウン、タムソン、

ルミス、ミラルノ諸氏ニ就キ英学修業

明治七年横浜英学校主幹トナル

明治九年ドクトルホーム師ニ就キ哲学神学ノ二科ヲ

専修ス同十三年業卒リ基督教々師ノ職ニ就ク

明治十三年九月東北及北海道伝道ニ従事ス

明治十五年英学及神学教授ノ為メ学校ヲ仙台市ニ設立シ其校長ニ任セラル後東北学院ト改称ス年俸一千

余円給セラル今尚在職中

明治二十年教育宗教授視察ノ目的ヲ以テ北米合衆国

英国 蕪国 和蘭国 独逸 仏国 瑞西 伊太利

印度支那ヲ漫遊ス同二十二年帰朝

明治十八年山〔形〕県市英学校々長ニ聘セラル同二

十年洋航ノ際退職

明治二十五年仙台市労働会ナルモノヲ設立ス学資ニ

乏キ子弟ヲ教育スル為ニ其会長ニ任セラル今尚在職

中

一 明治二十六年北海道同志教育会々長ニ任セラレ今尚在職中

一 明治二十七年大日本海外教育会設立其会長ニ任セラ

ル後辞シテ副会長ニ任セラル今尚在職中

一 明治二十八年朝鮮国教育視察ノ目的ヲ以テ渡韓同年

帰朝

一 同二十九年朝鮮国京城ニ京城学堂ナル者ヲ設立シ韓

国子弟教育監督ノ任ニ当ル

一 明治三十年北米合衆国ペンシルベニヤ州ランカスト

ル、フランクリンマルシヤル大学ヨリ神学博士ノ号

ヲ贈与セラル辞シテ受ケズ

右之通相違無之候也

右

明治三十二年十月卅一日 押川 方義 ㊦

庶第六八〇号

当市私立東北学院々長押川方義ヨリ別紙継続就職ノ開申

書差出候間相添進達候也

明治三十二年十一月六日

仙台市長 里見 良顕 ㊦

㊦

宮城県知事 千頭 清臣殿

(県庁文書)

八四 押川方義の教況報告

(明治三十三年三月二十八日)

本学年度に於て最著しき出来事は改正条約実施に際し文部省より私立学校令發布相成総て学校に於ては宗教上の儀式及教育を施すを嚴禁したるの怪事を見たる事也、凡て文部省の認可を得て中学校の科程マツを採用したるミツシヨンスクールは非事の狼狽を来したり、己が東北学院は之が為め直接影響を受けし事なしと雖ども亦間接には他の学校と等しく多少の損害を蒙らざるはなかりき、東京にありて在邦各地のミツシヨンスクール聯合運動を開始し屢々文部省に向つて抗議をなし我等の権理を主張したり、夫が為めに文部省は学校令を改正し、又は変更せしむる程の功果は未だ奏し得ざりしと雖ども文部省がミツシヨンスクールに対する取扱上の程度には大なる寛容を与へられしを信ず、且つミツシヨンスクールに在りて文部省が満足するの科程を採定すれば宗教々育に付己が主

義に損害又は妨礙を受くる事厚くして他の諸学校の受くべき権理を得るの傾向あるを知れり、依て己が東北学院に於ても己が主義に妨害なきを程度となし他の学校の共有せる権理を得るの方針を執らん事を希望する也、依て左に今後の方針の一、二を思考せん事とす

一東北学院普通部の教育を中等となし可成備完ならしめ自由的認可を請求する事

一東北学院高等部は英文及英文学を専修せしめ卒業生をして英語及英文教授たるに適當なる資格を与ふる事

一神学部はクリスト論を中心となし専ら其方向に教育をなし、且つ必用なる知識を十分に与ふる方針を執るべき事目下の急務と信ず

一体操場は是非良好のものを購求せざる可らざるを信ず本学年度に於ては内外教師に大變動あり之が為め少なからざる損害を蒙りたる事實は夥多なりとす特にホーイ氏が東北学院の教授を辞して漢国に移住したるが如し、其他教員中に變動を生ぜしは寺沢、石田、土井、加藤、松田〔空白〕の諸氏にして新に聘用したる教員には中村、加藤〔空白〕

本年三月三十日午後第二時三十分第九回卒業式を講堂に挙ぐる事に決す、卒業生普通部にあらず、神学部に二名

の卒業生を出せり

退学生は普通部に〔空白〕、神学部に入學七名あり、退学
者名あり

本学院生徒の總數凡八十若干名、其中労働會員たるもの
若干名あり、入宿生は十五名あり、通學生〔空白〕名あ
り

物理及化学器械取扱者たりし加藤氏転職したるに付今回
入江氏に囑托し十分の取扱をなす事とすべし

書掌の報告も都合により延期致したるを以て現在金を知
るの由なき也

英語神学部に生徒三名あり邦語神学部に生徒三名あり
学院全体の經濟は理事局會計の報告書に詳也

東北学院授業日數及時間に就きては十分の調査を要する
事あるべし

東北学院の教況大略前陳の如し、無限の天父我等導き玉
はん事を

右報告候也

明治三十三年三月二十八日

東北学院院长 押川方義

東北学院理事局長

デー、ビー、シュネーダー殿

八五 本多庸一・巖本善治書簡（シュネーダー宛）

（明治三十三年十二月十二日）

肅啓 押川方義氏渡清軍隊慰問之傍弊会副会長として任
務尽瘁なし被下候処事業伸張之結果年内帰朝せられ候事
難出来事情を生じ候に付錦地東北学院事業之為め不尠不
便を来し候事如何にも遺憾に被感候旨昨日同氏より被申
越弊会に於ても同様深く御氣の毒に感じ候得共目下真に
不得已状態に付尚此上暫時帰仙之猶予を与られ度此儀弊
会よりも懇願不禁候 敬具

明治三十三年十二月十二日

大日本海外教育会

理事 本多 庸一

評議員 巖本 善治

東北学院理事局長

デー、ビー、シュネーダー殿

（渋沢史料館所蔵）

八六 押川方義の辞任

(明治三十四年四月二十四日)

一九〇一年四月廿四日午後七時三十分、臨時理事会

押川院長、シュネーダー博士、齋藤及ノツス出席

押川氏の祈禱を以て開会

(中略)

四、押川氏より過去一年間院長として職務を執るを出来なかつた事情を縷々陳述された。そして近き将来に於てもその職責を果すべき余裕を發見し得ざるを以て学院長の辞任を申出でられた。動議に依り辞任を承認した。押川氏は労働会の監督者としても辞職した。之をも承認した。

五、理事会は押川氏の東北学院に対する過去の勤労に対し深甚なる謝意を記録し、又非凡なる基督者たることを記録することに決す。氏の辞職を許可したるは氏の責任感が当理事会に於て同意せねばならぬ程絶対对他的職務に従事せねばならぬと感ぜられた為である。

六、押川氏の動議に依りシュネーダー博士が学院長に選任せらる。

書記 クリストファー、ノツス

(理事会記録)

八七 押川方義の顧問就任

(明治三十四年四月二十五日)

一九〇一年四月廿五日午後七時三十分(継続会)

出席者前回に同じ、齋藤氏の祈禱を以て開会

(中略)

五、押川氏は学院の創立に関与し、且つ永年院長として勤務せられたるを以て学院の顧問に推戴する事に決す
六、会計に押川氏来校の際は其都度旅費を支払ふべきことを一任することに決す

書記 クリストファー、ノツス

(理事会記録)

第六章 ホーイ「もう一つの出發」

八八 W・E・ホーイの辞任問題

(明治二十六年十一月二十一日)

明治二十六年十一月廿一日、仙台市東三番丁七十五番地ニ於テ議長ホーイ氏ノ招集ニヨリ、齋藤氏ノ祈禱ヲ以テ開會

出席 ホーイ氏、ミラル氏、押川氏、齋藤氏、藤生氏

一 書記末夕朗読ノ済マサル、前会マテノ日本文記録及英語文記録朗読 可トス

一 ホーイ氏ヨリ下ノ如キ辞職書呈出相成タルヲ以テ之ニ付キ議スル事トセリ

拙者儀今般規則ニ從ヒ貴局及東北学院ニ向テ左ノ職ヲ辞セン事を乞フ

一、理事局長

二、学院ノ副院長

三、會計委員

四、学院ノ教授

五、東北学院英書部掌書

過ル八年間拙者ハ能ノ及フ限りノ事ヲ為シ来リ日本ニ於テ基督教主義ノ教育ヲ進メン事ヲ愛スルノ念ハ其深サニ於テモ態度ニ於テモ少シモ変ル事ナシト雖ドモ、過般来拙者ガ東北学院ニ於テ有益ナル時機ニ去リシ事ヲ感スル事愈切ナリ

仍テ拙者ハ此辞職書許可ナラン事ヲ乞フ、且ツ又今晚ヨリ直ニ実施セラレン事ヲ希フ 謹請

明治二十六年十一月廿一日

ダブルユー、イー、ホーイ

東北学院理事局御中

討議ノ末左ノ如ク決議ス

決議 理事局ハダブルユー、イー、ホーイ教師カ東北学院ノ諸職ヲ辞セン事ヲ請求セルハ其理由トスル所重大ナルトスルモ氏カ学院ニ尽ス所ノ有益ナル職務ヲ去ルヨリ起ル所ノ不利益ト比フル時ハ、辞職書ヲ提出スルニ至リタル十分ナル理由ト為スヲ得サルヲ以テ之ヲ拒絶ス
決議 理事局委ハ各自ニ於テ總体ニ於テ東北学院ノ管理ヲ厳密ニ憲法ニヨリテ執行シ、且ツ關係ヲ有スル凡テノ者ノ権利ヲ十分ニ認ム可キ事ヲ茲ニ誓約ス

ミラル氏祝禱閉會

書記 藤生金六記ス
(理事会記録)

八九 押川方義とW・E・ホーイーの辞任問題

(明治二十七年九月十五日)

明治二十七年九月十五日、東三番町七十八番地ニ於テ局長及び副局长、不在ニ付、ミロル氏仮議長トナリ、同氏ノ祈禱ヲ以テ臨時會開會、會スル者 シュネードル、ミラル、齋藤

記録ノ朗読ヲ免ズ

集會ノ目的ハ辞表提出ニツキ之ヲ勸考スル事

東北学院長押川氏、辞表書ヲ提出ス、理事局ハ之ヲ受クル事ヲ拒絶ス

ホーイー氏理事局長、東北学院副院長、會計、学院教授及び掌書タル事ノ辞表ヲ提出ス、因テ左ノ如ク議了セラレタリ

明治二十六年十一月二十一日ノ理事局會議ニ提出シタル辞表書ハ、之ヲ最終ノモノタリトホーイー氏自ラ陳述シタルヲ以テ、次ノ如ク決ス

理事局ハ同氏ノ辞職ヲ厭然トシテ受ケ、其希望ヲ聴キ入ル、事ニ決ス

其一、理事局ハ東北学院ニ対スル同氏ノ功劳ヲ賞シ、之ガ為メニ神ト同氏トニ謝スル事ニ決ス

其二、理事局ハ将来学院ノ為メ、凡テノ好意ヲ表シ、之ガ利益ヲ図ラントノ保証ニツキ、ホーイー氏ニ謝スル事ニ決ス

其三、将来学院ノ為メニ再ビ尊貴ナル事業ヲ復スルノ道ノホーイー氏ノ為メニ開カレン事ヲ理事局ハ熱心忠実ニ神ニ祈ル事ニ決ス

其四、此動議ヲ合衆国リホームド教會日本伝道會社ニ報告シ、其考慮ニ供フル事ニ決ス

ホーイー氏理事局員タル事ノ辞表ヲ提出ス、之ヲ受クル事ニ決セリ

シュネードル氏ヲ臨時理事局會計ニ撰定シ、ホーイー氏ヲシテ他ノ方法ノ定マルマデ會計事務ニ統テ執掌セン事ヲ願フ事ニ決ス

ミロル氏ヲ臨時掌書ニ撰定ス

散會

(理事会記録)

九〇 W・E・ホーイの辞任問題

(明治二十七年九月十八日)

明治二十七年九月十八日、東二番町七十八番地

シュネードル氏宅ニ於テ副局長押川氏ノ招集ニヨリ、齋藤氏ノ祈禱ヲ以テ臨時会開会、出席者シュネードル、ミラル、齋藤、押川

英語前会ノ記録朗読 可トス

局長欠員ニツキ、補員ヲ撰定シ、シュネードル氏ヲ挙グシュネードル氏理事局書記ヲ辞ス、之ヲ受クル事ニ決スミロル氏ヲ撰定シテ理事局書記トナス

熊谷氏ヲ理事局員ニ撰定ス

幹事ヲシテホーイ氏ノ辞職ト理事局ノ之ヲ認可シタル事

ヲ学院ニ広告セシムル事ニ決ス

〔後略〕

臨時書記 押川記

(理事会記録)

九一 W・E・ホーイの辞任問題

(明治二十七年九月二十六日)

明治二十七年九月二十六日、東三番町七十八番地ニ於テ、局長シュネードル氏ノ招集ニヨリ同氏ノ祈禱ヲ以テ臨時会開会、出席シュネーダー、ミラー、齋藤、押川
前回記録ノ朗読ヲ免ズ

〔中略〕

ホーイ氏辞職ノ件ニツキ、理事局ハ之ヲ再考セン事ヲ請願シタル、同氏ノ願書到達シ、理事員ノ前ニ読マル理事局ハホーイ氏ノ辞職ニツキ再考スル事ヲ発議シ、之ヲ可トス

再考ノ動議ハ次回ノ臨時会マデ之ヲ卓上ニ置ク事ニ決ス
動議ニヨリ、次ノ金曜日午後三時マデ散会ス

臨時書記 押川記

(理事会記録)

九二 W・E・ホーイーの辞任問題

(明治二十七年九月二十八日)

明治二十七年九月二十八日、東三番町七十八番地ニ於テ局長シュネードル氏ノ招集ニヨリ、押川氏ノ祈禱ヲ以テ臨時會開會、出席シュネーダー、ミラー、齋藤、押川英語前二回ノ記録朗読、可トス

(中略)

卓上ニ置タルホーイー氏ノ辭職書ヲ再考セン為メニ、卓上ヨリ取り、之ヲ再考スル事ニ決ス、ミロル氏ハ之ニ反對セリ、午後七時マデ理事局ハ散會セリ

ミロル氏理事局ヲ代表シテ祈禱ヲナス

ホーイー氏ノ辭職ヲ受クベキ始メノ動議ハ、復職ヲ許スノ目的ヲ以テ暫ク卓上ニ置ク事ニ決ス

シュネードル氏、理事局長、東北学院副院長、及ビ臨時會計ヲ辞ス

シュネードル氏ノ辞表ハ認可セラル、ミロル氏之ニ反スホーイー氏ノ復職ヲ受クル目的ヲ以テ卓上ニ置カレタル始メノ動議ハ、再ビ取り上ゲラル、ミロル氏之ニ反ス
外国掌書職ヲ除キ、ホーイー氏復職願書ヲ受ケントノ動議

ニ対シ「外国掌書職ヲ除キ」トイフ条件ハ、ミロル氏之ヲ賛成シタレドモ、動議ソレ自身ニ対シテハ、反対ヲナセリ

前記ノ決議ヲ合衆国リホームド教會日本ミツシヨンニ參考ノ為メ報告スル事ニ決ス

動議ニヨリ散會

臨時書記 押川記
(理事會記録)

九三 W・E・ホーイー書簡(キャレンダー宛)

(英文)

(一八九七年五月十九日)

九四 W・E・ホーイー「我らは前進すべきか」XII

(英文)

(一八九九年一月五日)

九五 在日宣教師団會議錄

(英文)

(一八九九年十二月二日)

第三編

LIFE LIGHT LOVE

＝興隆時代＝

1901(明治34)年～1930(昭和5)年

第一章 シュネーダーの院長就任

九六 D・B・シュネーダー書簡(キャンレンダー宛)

[英文]

(二九〇〇年十月四日)

九七 D・B・シュネーダー書簡(キャンレンダー宛)

[英文]

(二九〇一年五月八日)

九八 普通科徴兵猶予認定申請書類

(明治三十四年五月四日)

認定願

本院普通科ヲ徴兵令第十三条ニ関シ官立府県立中学校同等以上ト御認定相成度別紙書類相添此段上申候也

明治三十四年五月四日

仙台市清水小路

東北学院院长 押川 方義 ㊟

文部大臣 松田 正久殿

内務部長 ㊟ 第三課長 勞務係 ㊟

知事 ㊟ 主任 属 半田 卯内 ㊟

視察係

文部大臣へ具申案伺

私立東北学院普通科ニ関シ徴兵令第十三条認定

ノ儀ニ付具申

私立東北学院院长押川方義ヨリ同院普通科ヲ徴兵令第十三条ニ関シ官立府県立中学校ト同等以上ト認定ノ義別冊ノ通願出候処同院ハ去ル明治十九年ノ創立ニ係リ爾来十数年間生徒ノ薰陶ニ任シ其成績大ニ見ルヘキモノ有之直接間接ニ本県教育上裨益スルトコロ少ナカラス随テ中学校ト同等以上ノ教育ヲ施スモノナルコトヲ認メ且其維持方法モ亦確實ナルモノニ候間願意御採納速カニ御認可相成度此段具申候也

知事

文部大臣宛

注意

本件ハ学則変更ニ付其認可ヲ要スヘキモノナレドモ主

務省ニ於テ修正ヲ要スルコトアルトキハ二重ノ手数ヲ要スルニ付認定済ト同時其手續ヲナサシムル見込

添附図面

- 一 学院附近図
- 一 体操場図
- 一 校地校舎平面図
- 一 校舎断面図

〔注・明治三十四年五月六日付〕

本月七日付内三第一九六二号ヲ以テ貴県下私立東北学院普通科徴兵令上等級認定ノ件御進達相成候処別記ノ事項御再調相成度書類返戻此段及照会候也

明治三十四年六月三日

文部省普通学務局長 澤柳政太郎 印
 宮城県知事 小野田元^(熊) 殿

記

- 一 普通科設置ノ目的
- 一 学科課程表中倫理科ハ聖書ノミヲ教授スルコトニ相成居候へ共明治三十二年文部省令第三十四号第二条第三号ノ次第モ有之候ニ付不穩当ト被存候

一 第五条中等小学卒業トハ修業年限何ケ年ノモノナルカ又試験ハ如何ナル程度ニ依リテ施行スルカ及年齢ニ就キテ明記ヲ要ス

一 前項ノ場合ニ於テ施行スル試験科目ハ中学校令施行規則第四十三条ニ依ルヘシ

一 第六条普通科第二等級以上ニ入学ヲ許ス可キモノハ中学校令施行規則第四十四条ニ準シテ定ムルヲ要ス

一 生徒ノ退学ニ関シテハ中学校令施行規則第五十一条ニ依リ規定スヘシ

一 生徒入学資格ヲ若シ中学校ニ準スルモノトスルトキハ授業日数及毎週教授時数少シ

一 学科課程表中本邦歴史ノ教授時数少シ又地理科ニ於テ外国地理ヲ欠ケリ右ハ教授セサル趣旨ナルカ

一 教員中伊藤鐵造ハ免許状ヲ有セス

一 経費及維持ノ方法中収入支出ハ普通科ニ属スル分ノミナリヤ又ハ他ノ学部ヲモ通算シタルモノナリヤ若シ後段ノ如クナラハ普通科ニ属スル分ノ區別ヲ要ス

一 教員中専任ニシテ教授時間ノ至テ少キモノアリ右ハ他ノ職務ニ全ク関係ナキモノナリヤ

〔注・明治三十四年六月三日付〕

知事 ㊤ 内務部長 ㊤ 第三課長 ㊤ 学務係 ㊤

主任 属 半田 卯内 ㊤

視察係 ㊤ ㊤

仙台市東三番丁七十八番地
私立東北学院長
デーヴキッド、ポーマン、シユネーダー ㊤
文部大臣 理学博士 菊地 大麓殿

東北学院へ御通達案伺

東北学院普通科徴兵令認定ノ義上申ニ付進達乃処今般別
記ノ事項再調候様主務省ヨリ申来乃間夫々取調相成可然
書類相添此段及通牒候也

沿革

私立東北学院憲法第二条 目的

宮城県内務部

私立東北学院普通科規則

東北学院宛

目次

別記ハ本紙ニ抛リ騰写ス

第一章 設置ノ目的

(注・明治三十四年六月七日付)

第二章 修業年限

三第六六二九号 明治廿四年
十月十四日 受

第三章 学年、学期、休業及式日

第四章 学科課程及教授時数

第五章 生徒入学及退学

第六章 試験

第七章 授業料及手数料

第八章 懲戒及賠償

第九章 補則

寄宿舎規則

本院普通科ヲ徴兵令第十三条ニ関シ官立府県立中学校同
等以上ト御認定相成度別紙書類相添此段上申候也

明治三十四年十月十四日

本院ノ沿革

明治十九年北米合衆国レホームド、ミツシヨンハ基督教伝道者養成ノ目的ヲ以テ神学予備校ヲ当仙台市ニ設立シ同ミツシヨン宣教師ウキリアム、イー、ホーイ及押川方義ノ兩人ヲシテ専ラ其教育ト管理ノ任ニ当ラシメタリ明治廿三年ニ至リ右予備校最初ノ卒業者アルニ当リ神学校ヲ設立シ翌廿四年ニ至リ右予備校ト神学校トヲ合併シテ東北学院ト称セリ而シテ同院ヲ神学部ト普通学部トノ二部ニ分チ更ニ神学部ヲ英語神学科邦語神学科ノ二科トナシ普通学部ヲ予科三年本科四年トナシ同廿八年ニ至レリ同年六月ニ至リ普通学部ヲ以テ尋常中学ノ程度ニ均フシ更ラニ文科専修部及理科専修部ヲ加ヘ兩専修部トモ各二年ヲ以テ修業年限トナシ爾後神学部文科専修部及尋常中学部等孰レモ変更ナクシテ今日ニ至レリ(同三十一年ニ理科専修部ヲ廃セリ)神学部英語邦語両科ノ卒業生ハ多クハ布教ニ従事シ其他専修部並ニ尋常中学部卒業生ハ或ハ各地方尋常中学校英語教師ノ職ヲ奉ジ或ハ諸官立学校ニ入レリ第二高等学校ヘハ右中学部ヲ卒業シタル後或ハ三年四年ヲ修了シタル後入学試験ニ及第シテ入学ヲ許サレタリシガ三十一年ヨリ私立学校出身者ノ官立学校ヘ入学スルヲ許可セラレザル姿ニ至リテ高等学校入学志願ヲナス能ハザルコトナレリ

マタ本院神学部其他各部ノ卒業生ニシテ目下外国留学中ノモノ十数名アリ本院各部ヲ通ジテ生徒全数二百名ニ達シタルコトアリシカ是レ本院設立以來最多數ノ生徒ナリキ
其他ノ項目ニ就キテハ別項本院規則ノ部其他ニ於テ明示セリ

私立東北学院憲法第二条 目的

第一項 本院ノ目的ハ基督教主義ニ基キ完全ナル普通教育ヲ授クルニアリ

第二項 聖書ニ基キタル基督教ニ従ヒ以テ德育ヲ授クルニアリ

第三項 基督教々師タランコトヲ希望スルモノ若クハ其他ノ職務ニ就カントスル青年ノ為ニ更ニ高等ノ教育ヲ授クルニアリ

私立東北学院普通科規則

第一章 設置ノ目的

第一条 本院普通科ハ中学校令ノ旨趣ニ従ヒ且ツ本院憲法第二条ニ基キ中学校程度ノ教育ヲ為スヲ以テ目的トス

第二章 修業年限

第二条 本院院普通科ノ修業年限ハ五ヶ年トシ之ヲ五学

外国語 (英語)	二	三	一	二	一	二	三	四	二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	
発音読方及会話	書取及習字	作文附文法	訳解	日本歴史	日本地理	算術	植物・動物・鉱物																							
三	二	三	二	三	二	四	二																							
讀方及會話	作文附文法	訳解	全上	全上	全上	幾何	前学年ノ続																							
三	三	五	二	二	二	一	二																							
書取及作文	文法	訳解	全上	複音唱歌	用器画	生理及衛生																								
三	二	五	三	一	一	四																								
會話及文法	文法	訳解	全上	複音唱歌	全上	化学																								
三	二	三	三	一		五																								
會話及作文	修辭	訳解	全上	全上		天文学																								
四	二	四	二	全上	全上	二																								

第五章 生徒入学及退学

第八条 生徒ヲ入学セシムベキ時期ハ学年ノ始ヨリ三十

日以内トス但シ欠員アルトキハ第二学期及第三学期ノ

始ヨリ十日以内ニ臨時入学セシムルコトアルベシ

第九条 第一学年ニ入学ヲ許スベキ者ハ年齢滿十二年以

上ニシテ高等小学校第二学年ノ課程ヲ卒リタル者若ク

ハ之ト同等ノ学力ヲ有シ入学試験ニ合格シタル者タルベシ

第十条 第一学年志願者中高等小学校第二学年ノ課程ヲ

卒リタル者ハ其他ノ志願者ニ先チテ入学ヲ許スコトアルベシ

第十一条 入学志願者ノ数入学ヲ許スベキ人員ニ超過ス

ルトキハ高等小学校第二学年ノ課程ヲ卒ラザル者ニ就キ先ツ予備試験ヲ行ヒ然ル後高等小学校第二学年ノ課程ヲ卒リタル者ト予備試験合格者ト併セテ試験ヲ行ヒ入学者ヲ選抜ス

第十二条 前条入学予備試験ハ国語、算術、日本歴史、

地理ニ就キ同条入学選抜試験ハ国語、算術ニ就キ高等

小学校第二学年ノ程度ニ依リテ之ヲ行フ

第十三条 第二学年以上ニ入学ヲ許スベキ者ハ相当年齢

ニ達シ前各学年ノ課程ヲ卒リタル者ト同等ノ学力ヲ有

スル者タルベシ

但シ前項入学者ノ学力ハ前各学年ノ程度ニ於テ其各学

科目ニ就キ試験ニ依リテ検定ス

第十四条 本学院普通科生徒ニシテ退学シタル者一箇年

以内ニ本学院普通科ニ再入学ヲ志願シタルトキハ試験

ニ依ラズシテ原学年以下ノ学年ニ入学ヲ許可スルコト

アルベシ

第十五条 本学院普通科生徒ニシテ他校ニ転学ヲ志望ス

ル者アルトキハ学院院长ハ正当ノ事由アリト認メタル場

合ニ限り其生徒ノ在学証書及成績表ヲ移転先学校ニ送

附スルモノトス

第十六条 他ノ公私立中学校ノ生徒ニシテ本学院普通科

へ転学ヲ願出ヅル者ハ欠員アル場合ニ限り試験ヲ行ハズシテ同一程度ノ学年ニ編入スベシ

但シ学院院长ニシテ必要アリト認メタル場合ニハ英語ニ

就キ試験ヲ行フコトアルベシ

第十七条 入学志願者ハ入学期日ニ先チ左ノ書式ニ倣ヒ

願書及履歴書ヲ差出スベシ

但シ高等小学校第二学年以上ノ課程ヲ卒リタルモノハ

別ニ其修業証書若クハ卒業証書ノ写ヲ添フベシ

入学 願(用紙美濃紙)

私儀御学院普通科第何学年へ入学志願ニ付御許可相成

度別紙履歴書相添へ此段相願候也

現住所族籍

年月日

氏名

㊦

生年月日

私立東北学院院长 氏名 殿

履歴書(用紙美濃紙)

氏名

一 出生年月日

一 生国地名

一 本籍又ハ寄留現在住所番地

一族籍

一 父兄ノ官位爵若クハ職業

一 何年何月ヨリ何々学校ニ入り若クハ何誰ニ就キ何

年何月何学年卒業若クハ何学科修業或ハ何々学校

ニ転学現今何々学校何学年ニ在リテ修業中等

一 賞 罰

何年何月何所ニ於テ何々ニ付賞若クハ罰ヲ受ケタ

ル等

右之通相違無之候也

右

年 月 日

氏 名 ㊦

第十八条 入学ノ許可ヲ得タル者ハ現ニ仙台市内ニ於テ

一家計ヲ立テ生徒ノ監督ヲナシ得ベキ丁年以上ノ男戸

主ヲ保証人トナシ左ノ書式ニ倣ヒ在学証書ヲ差出スベ

シ

但シ本学院ニ於テ不適當ト認メタル保証人ハ之ヲ変換

セシムル事アルベシ

在学証書(用紙美濃紙)

私儀今般入学御許可相成候ニ付テハ御学院規則等堅ク

相守リ勤学可致候依テ証書差出候也

(原籍)何府県何郡市何町村何番地

(寄留)右 同

何府県華士族平民誰子弟(若クハ戸主)

氏 名 ㊦

生 年 月 日

私立東北学院院长 氏 名 殿

右何誰儀入学御許可相成候ニ付テハ在学中本人ニ関ス

ル一切ノ事件ハ私引受可申依テ保証如斯候也

但シ向後宿処移転或ハ印章相改メ候節ハ速ニ御届ケ可

仕候也

宮城県仙台市何町何番地

何府県華士族平民職業等

年 月 日

保証人 氏 名 ㊦

第十九条 保証人ノ転居改印氏名等ハ其都度本学院ニ届

出ツベシ

第二十条 保証人死亡スルカ又ハ第十八条ノ資格ヲ失ヒ

タルトキハ更ニ相当ノ保証人ヲ定メ第十八条規定ノ証

書ヲ差出スベシ

第二十一条 学院院长ハ左ノ各号ノ一ニ該当スル者ニ退学

ヲ命ズ

一 性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者

二 学力劣等ニシテ成業ノ見込ナシト認メタル者

三 引続キ一箇年以上欠席シタル者

四 正当ノ事由ナクシテ引続キ一箇月以上欠席シタル

者

五 学院院长ノ許可ヲ得ズシテ猥リニ試験ニ欠席シタル

者

第二十二條 生徒退学セントスルトキハ其事由ヲ具シ保

証人連署ノ上退学願書ヲ差出シ学院院长ノ許可ヲ受クベ

シ

但シ退学セントスル者ハ在学中学院ニ対スル一切ノ負

債ハ必ズ之ヲ弁納スベシ

第六章 試験

第二十三條 各学年ノ課程ノ終了又ハ全学科ノ卒業ヲ認

ムルニハ平素ノ学業及試験ノ成績ヲ考查シテ之ヲ定ム

第二十四條 試験ハ分テ学期試験及学年試験トス

第二十五條 学期試験ハ第一期及第二期期末ニ於テ其

学期間ニ履修シタル学科ニ就キ之ヲ行フ

第二十六條 学年試験ハ学年末ニ於テ其学年間ニ履修シ

タル学科ニ就キ之ヲ行フ

第二十七條 学院院长ノ意見ニ依リ修身、国語、外国語、

数学、図画、唱歌、体操ニ就キテハ試験ヲ行ハザルコ

トアルベシ

第二十八條 各学科ノ平常点ハ日常ノ評点ヲ学期末ニ平

均シタルモノトス

第二十九條 各学科ノ学期評点ハ平常評点ニ学期試験評

点ヲ加ヘ之ヲ二除シタルモノトス

但シ第三学期ハ平常評点ヲ以テ学期評点トス

第三十條 各学科ノ学年評点ハ学期評点ノ平均数ヲ二倍

シ之ニ学年試験評点ヲ加ヘ其和ヲ三除シタルモノトス

第三十一條 全科平均評点ハ各学科ノ総評点ヲ学科ノ数

ニテ除シタルモノトス

第三十二條 第二十七條ノ場合ニ於テ試験ヲ行ハザルト

キハ日常評点ヲ以テ学期及学年評点トス

第三十三條 試験ノ評点ハ各一百ヲ以テ定點トス

第三十四條 入学試験ノ評点ハ各科六十點以上ヲ以テ合

格トス

但シ六十點以下四十點以上ノモノニ科目迄若クハ六十

點以下三十點以上ノモノニ科目迄ナルトキハ其学科ニ

就キ再試験ヲ許スコトアルベシ

第三十五條 学年全科平均評点七十二滿タザルカ若クハ

二科目以上六十二滿タザルカ又ハ一科目ニテモ五十二

滿タザル場合ニハ昇級スルコトヲ得ズ

第三十六條 学期及学年試験ノ当日疾病或ハ不得已事故

ニヨリ学院院长ノ許可ヲ得テ欠席シタルモノハ次学期若

クハ次学年ノ始メニ於テ特ニ追試験ヲ行フコトアルベシ

第三十七条 第一学年乃至第四学年ノ学年試験ニ合格シ

タルモノハ左式ノ修業証書ヲ授与ス

修業証書

族籍

氏名

生年月

右者本学院普通科第何学年ノ課程ヲ修了セリ仍テ之ヲ

証ス

年月日

私立東北学院 印

第何号

第三十八条 第五学年ノ学科課程ヲ卒ヘタル者ニハ左式

ノ卒業証書ヲ授与ス

卒業証書

族籍

氏名

生年月

右者本学院普通科ノ業ヲ卒ヘタリ茲ニ之ヲ証ス

年月日

第何号

私立東北学院院长 氏名 印

第七章 授業料及手数料

第三十九条 生徒ハ授業料トシテ一ヶ月金七拾銭ヲ毎月

五日以内ニ当月分ヲ納ムベシ

但シ五日以後出席シタルモノ又ハ新ニ入学シタルモノ

ハ当日之ヲ納ムベシ

第四十条 入学志願者ハ手数料トシテ受験ニ先チ金五拾

銭ヲ納ムベシ

第四十一条 新ニ入学ヲ許可セラレタル者ハ入学金トシ

テ金壹円ヲ即日之ヲ納ムベシ

第八章 懲戒及賠償

第四十二条 本学院ノ規則並ニ諸揭示ニ背キ其他生徒タ

ル本分ニ違ヒタル行為アルモノハ其輕重ニ依リ左ノ罰

科ニ処ス

一 戒飭

訓諭譴責シテ将来ヲ慎マシム

二 謹慎

授業時間後学院内ニ留置シテ悔悟ノ実ヲ表セシム

但シ其時数ハ一日二時間以内其日数ハ七日以内ト

ス

三 停学

一週間以上一ケ年以内出席ヲ停止ス

四 退学

第二十一条ニ依リ処分ス

第四十三条 本学院附属ノ書籍及理化化学器械其他ノ物品ヲ毀損亡失シタル生徒ニハ現品若クハ相当ノ代償ヲ弁償セシム

第九章 補 則 寄宿舎規則

第四十四条 入舎生ハ授業料ノ外ニ食料トシテ毎月金參円九拾銭(物価ノ高低ニ依リテ変更アリ)及ビ室料トシテ金式拾銭ヲ毎月五日迄ニ幹事ニ納ムベシ

但シ定期ニ於テ納付セザルモノハ保証人ヨリ徴収ス

第四十五条 在舎生徒ノ父兄若クハ保証人ノ依頼アルトキハ学資ノ幾分ヲ学院ニ保管シ少年生徒理財ニ慣レザルモノヲシテ金員ヲ浪費スルナカラシムベシ

第四十六条 入舎セント欲スルモノハ其旨ヲ幹事ニ申出テ其許可ヲ得タル上左式ニヨリ入舎証ヲ差出スベシ

入 舎 証(用紙美濃紙)

何誰儀今般入舎御許可相成候ニ付テハ在舎中舎則ヲ遵奉スルハ勿論猥リニ退舎致間敷且ツ本人一身上ニ関スル一切ノ事件ハ保証人ニ於テ引受け決シテ御迷惑相掛

ケ申間敷候依テ保証人連署ノ上入舎証書差出候也

族籍

年月日

何 之 誰

㊦

生 年 月 日

住所族籍

保証人 何 之 誰

㊦

私立東北学院院长 氏 名 殿

第四十七条 生徒ハ行状ニ付キ学院院长ノ訓諭ヲ遵奉シ幹事及舎監ノ指揮ニ従フベシ

第四十八条 在舎生徒ハ起臥出入等規則ニ従ヒ時刻ヲ厳守シ舎監ノ指揮ニ従フベシ

第四十九条 在舎生徒ハ他人来訪ノ節ハ通常応接所ニテ面会スベシ

第五十条 在舎生徒ハ先ツ幹事ノ許可ヲ得ルニ非レバ疾病ノ故ヲ以テ欠課スルヲ得ズ

但シ疾病ニヨリ欠課シタルモノハ欠課中ハ舎監ノ許可ヲ得ルニ非レバ外出スルヲ得ズ

第五十一条 在舎生徒帰舎ノ定刻ニ後ルヽカ又ハ外泊ヲ要スルトキハ其事由ヲ具シ保証人連署ノ上証明書ヲ舎監ニ差出スベシ

第五十二条 在舎生徒舎監若クハ幹事ノ許可ヲ得ズシテ

監ニ差出スベシ

第五十二条 在舎生徒舎監若クハ幹事ノ許可ヲ得ズシテ

猥リニ外泊シ保証人連署ノ上其理由ヲ具シタル証明書
ヲ差出サザルトキハ退舎セシムルコトアルベシ

第五十三条 在舎生徒舎内ノ諸規則又ハ時々ノ告示ヲ遵
奉セズ又ハ不良ノ行状アルモノハ退舎ヲ命ズ

第五十四条 寄宿舎ハ職員時々巡視スルコトアレバ在舎
生徒ハ常ニ之ヲ心得居ルベシ

第五十五条 舎内ノ細則ハ院長ノ許可ヲ得テ生徒ノ撰定
スルモノトス

第五十六条 学院門戸ノ開閉ハ午前六時及午後十時ヲ以
テ定限トス

第五十七条 時限外ハ職員及小使ノ外ハ門鑑ヲ所持スル
ニ非レバ出入スルヲ得ズ

校長履歴

北米合衆国ペンシルヴァニア州

宮城県仙台市東三番丁七拾八番地居住

デーヴキツド、ポーマン、シュネーダー

西曆千八百五拾七年参月式拾参日生

一千八百七拾参年拾月ヨリ北米合衆国ペンシルヴァ
ニヤ州ニ於ケル公立小学校教師トナリ千八百七拾
六年参月マテ継続ス

一 千八百七拾六年九月合衆国ペンシルヴァニア州フ
ランクリン、アンド、マーシヤル、カレージニ入
学千八百八拾年六月同校ヲ卒業ス

一 千八百八拾年九月合衆国ペンシルヴァニア州フラ
ンクリン、アンド、マーシヤル、カレージ予備科
ノ英語教師トナリ千八百八拾壹年拾貳月マテ継続
ス

一 千八百八拾参年五月合衆国ペンシルヴァニア州ラ
ンカスター神学校ヲ卒業ス

一 千八百八拾参年六月合衆国ペンシルヴァニア州マ
リエッタニ於ケル基督教会ノ牧師トナリ千八百八
拾七年六月マテ継続ス

一 千八百八拾七年拾貳月日本国ニ渡来ス

一 千八百八拾八年壹月宮城県仙台市私立東北学院ノ
教師トナリ現今尚ホ継続ス

一 千八百八拾八年壹月初メテ日本語ヲ学ビ現今尚ホ
継続ス

一 千八百九拾六年學術研究及教育視察ノ為メ英国オ
ックスフォード大学ニ赴キ後チ独国ベルリンニ赴
キベルリン大学ノ客生トナリ六週間滞在セリ其他
同国ライプツヒ及イエナ両大学並ニ蘇国エヂン

ボロー大学ニ於テモ勉学セリ
 一 千八百八拾年六月合衆国ペンシルヴァニア州フランクリン、アンド、マーシヤル、カレージヨリバチエロル、オヴ、アーツノ学位ヲ受ク
 一 千八百九拾九年六月合衆国ペンシルヴァニア州フランクリン、アンド、マーシヤル、カレージヨリ

ドクトル、オヴ、デウキニチーノ学位ヲ受ク
 右之通相違無之候也
 右
 デーヴキツト、ポーマン、シユネーダー
 明治参拾四年十月

教員ノ氏名資格分担学科及専任兼任ノ区别

職名	資格	受持学科及時数	専任兼任ノ区别	俸給	氏名	族籍
院長兼教授	英語科教員免許状所有	英語及修身 十二時期	兼本学院院长		デーヴキツト、ポーマン、シユネーダー	米 国
教授		生理、英語 六時期	兼本学院文科	月俸 金五拾円	入江 祝 衛	埼玉県土族
同		漢文作文、東洋史 十五時期	専任	月俸 金四拾円	福澤 定 興	千葉県土族
同		国語 十六時期	同	月俸金式拾参円	深 田 康 守	東京府土族
同	兵式体操科教員 免許状所有	体操 十八時期	同	月俸金式拾四円	伊 藤 鍊 藏	宮城県平民
同	英語科教員免許状所有	英語、修身及唱歌 十一時期	同		キリストファー、ノツス	米 国

第一章 シュネーダーの院長就任

同	教授	左ノ二名ハ当時不在中ノモノトス	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
英語科教員免許状所有			札幌農学校本科卒業	動物、生理、植物科 教員免許状所有		図書科教員免許状所有		英語科教員免許状所有		英語科教員免許状所有			
			博物、物理、化学 十四時期	歴史、地理、天文 十七時期	国語、作文 十一時期	図書 五時期	修身 二時期	英語、唱歌 八時期	英語 十五時期	英語、修身 九時期	修身 六時期	数学 二十七時期	英語 二十一時期
帰米中	米国留学中		同	同	専任	兼宮城県立 第二中学校	兼本学院神学部	同	専任	専任	兼本学院神学部	同	同
			月俸 金六拾円	月俸 金六拾円	月俸 金式拾五円	月俸 金拾五円			月俸 金四拾五円			月俸 金四拾五円	月俸 金四拾五円
ポール、ラムバート、 ゲルハルト	出村 悌三郎		木村 徳藏	森本 厚吉	前田 次郎	小泉 成一	笹尾 糸太郎	アーレン、ケル、 ファウスト	五十嵐 正	ウキリアム、イー、ラズ	梶原 長八郎	田中 四郎	中村 長之助
米 国	新潟県土族		宮城県平民	京都府土族	山形県平民	宮城県平民	山口県平民	米 国	山形県土族	米 国	福島県土族	群馬県平民	愛知県平民

備考 宮城県平民伊藤鎮蔵ハ元宮城県士族秋保鎮蔵ト称セシ所族籍氏名変更セシニヨリ明治二十八年十月二十三日授与サレタル教員免許状ノ書換ヲ請願シ明治三十四年七月十日更ニ教員免許状ヲ授与セラレタリ
木村徳蔵ハ目下教員免許状下附申請中ナリ

一 生徒定員 百七拾人

現在生徒学年及学級員数左ノ如シ

学年	第一学年	第二学年	第三学年	第四学年	第五学年	計
学級	一ノ組	二ノ組	一組	一組	一組	
人員	二五	二五	三〇	三〇	二五	一六〇

卒業生ノ員数及卒業後ノ情况

明治廿四年 二名 本院高等部ニ入学ノ上中学校英語教員一名
基基督教伝道者一名

同 廿五年 三名 基基督教伝道者一名 実業者一名
本院英語教員一名

同 廿六年 三名 官吏二名 米国留学者一名

同 廿七年 十二名 中学校英語教員四名 本院教員一名 米
国留学者三名 伝道者三名 実業者一名

同 廿八年 五名 伝道者二名 中学校英語教員一名
大学生一名

同 廿九年 四名 中学校英語教員一名 死亡者一名
本院神学部へ一名 実業者一名

同 三十年 十三名

中学校英語教員三名 商業学校英語教員一名
巡查教習所英語教員一名 外国語学生一名
憲兵本部通訳一名 大学生一名 慶応義塾
大学一名 伝道者三名 実業者一名

同 廿一年 二名 理科学校生一名 実業者一名

同 廿二年 三名 工業学校生一名 官吏一名
本院高等部へ一名

私立東北学院普通科経費及維持ノ方法

経費ハ大半北米合衆国リホームド、ミツシヨンノ寄附金
及授業料基本金子雑収入ヲ以テ支弁ス若シ不足生ズル
トキハ押川方義、シュネーダーノ両氏ヨリ補助スルモノ
トス

収入ノ部予算

一 金七千五百円 リホームド、ミツシヨンヨリ

一	金千百拾貳円	授業料ヨリ	一	同	卅	年十二月卅一日調査
一	金 七拾五円	基本金利子ヨリ			一	ケ年間収入 九千八百四拾参円九拾九銭
一	金 六拾円	入学金ヨリ				支出 同 額
一	金 五拾円	雑収入ヨリ	一	同	卅	一年十二月卅一日調査
	支出ノ部予算				一	ケ年間収入 壹万参百八拾六円卅五銭五厘
一	金五千百八拾四円	教員給料			支出	九千六百七拾円九拾参銭貳厘
一	金四百貳拾円	諸雇給	一	同	卅	二年十二月卅一日調査
一	金 百貳拾円	備品費			一	ケ年間収入 八千九円拾六銭六厘
一	金 百 円	消耗費				支出 同 額
一	金五百五拾円	図書器械費	一	同	卅	三年収入 八千六百拾九円五拾七銭
一	金 貳百円	雑費			支出	八千貳百五拾六円卅五銭壹厘
一	金 貳百円	管繼費	一	同	卅	四年収入 八百七拾参円
一	金 六百九円	予備費				右收支決算調査表参考ノ為メ相添候也
	私立東北学院毎年収入支出					明治卅四年十月
一	明治廿八年十二月卅一日調査					私立東北学院
	一ケ年間収入 九千貳百円					
	支出 九千百八拾五円					
一	同 廿九年十二月卅一日調査					
	一ケ年間収入 九千貳百七拾七円五拾四銭七厘					
	支出 八千八百五拾参円七拾壹銭六厘					

私立東北学院普通科教科書目

図書名	著訳者氏名	巻冊ノ記号	文部省検定済年月日	発行年月日	発行者氏名
中学国文	小中村義介	巻ノ一―六	明治三十年一月十五日	全 年二月廿一日	吉川 半七
中等国文読本	落合直文	巻ノ一―十	明治三十二年三月九日	明治三十二年一月三十日	明治書院
枕草子	清少納言	巻ノ一―三		明治三十二年一月廿日 第三版	中等学科教授 法研究会
日本文学小史	法研究科教授 研究会	全 一冊			
習字帖	深田康守	自巻ノ一 至巻ノ五			
撰定中学漢文	深井鑑一郎	巻ノ一―十	明治三十一年八月十五日	明治三十二年三月	吉川 半七
十八史略	曾先之	巻ノ一―八			
文章軌範	謝枋得	巻ノ一―六			
孟子					
論語					
イングリッシュ、ラン グエージ、プリマー	斎藤 秀三郎	巻ノ一―二	明治三十三年十月五日	明治三十三年九月三十日	興文社
プラクテカル、イン グリッシュ、レッスン	斎藤 秀三郎	巻ノ一―二		巻ノ一、明治卅三年四月一日 発行 巻ノ二、全年四月廿五日発行	興文社
ナショナルリーダー		巻ノ一―五			
フランクリン氏自序伝		全 一冊			

第一章 シュネーダーの院長就任

算術教科書	地文	世界歴史	新選外国地誌	日本地誌	新編本邦小史	東洋史要	スウキンントン氏世界歴史	スウキンントン氏リーダー	レツスリンズ、イン、イソグリンズ	蜂屋可秀	至第一卷 至第二卷	第一卷 明治三十三年六月二日 第二卷 全年三十四年三月廿三日	明治三十四年三月十五日 第四版	吉岡平助
藤沢利喜太郎	山上万次郎	磯田良	秋山四郎	秋山四郎	高津歙三郎	市村瓊次郎			ロツクウード	シ、エム、ゲーデー	全一冊			
卷ノ上・下	全一冊	全一冊	卷ノ上・下	全一冊	卷ノ上・下	卷ノ上・下	全一冊	卷ノ一―五	全一冊	卷ノ一―三	卷ノ一―八			全一冊
明治三十一年十月十四日		明治二十九年九月二日	明治三十三年二月二十六日	明治三十年三月十二日	明治三十一年七月七日	明治三十三年三月廿三日								
日 卷ノ下・全三十二年七月廿三日	日 卷ノ上・明治三十年七月十三日	明治三十二年四月十五日	明治三十一年三月十八日 全三十三年二月十八日再版	明治三十二年三月十三日 明治三十二年九月二十四日	明治三十年四月五日	明治三十三年三月十二日訂 正再版								
大日本図書株式会社	右同	富山房	白井練一	共益商社	金港堂書籍株式会社	吉川半七								

初等代数学教科書	藤沢 利喜太郎	卷ノ上・下	明治三十二年二月十五日	卷ノ上・明治三十一年三月十六日 卷ノ下・全三十二年九月三十日	右 同
続初等代数学教科書	藤沢 利喜太郎	全一冊	明治三十一年三月十四日	明治三十三年五月二十八日	右 同
初等平面幾何学教科書	菊地 大麓	全一冊	明治三十一年三月十四日	明治三十一年三月十八日	右 同
立体幾何学教科書 <small>(英文)</small>	菊地 大麓	全一冊	明治三十一年三月十四日	明治二十八年三月二日	右 同
初等平面三角法教科書	菊地 大麓	全一冊	明治三十二年五月二十四日	明治三十二年五月廿一日	右 同
スミス代数学	佐久間 文太郎	卷ノ上・下		明治二十三年九月五日 第六版発行ハ 全二十八年十一月一日	吉川 半七
中等生理学教科書	山形 正雄	全一冊	明治二十七年五月四日	明治二十九年七月十五日	金港 堂
中学生理教科書	丘 浅次郎	全一冊		明治三十二年十二月九日	六盟 館
普通植物学教科書	三好 学	全一冊	明治三十年一月廿六日	明治三十九年九月廿七日 訂正第十一版	敬業 社
中等教育動物学	飯島 魁	卷ノ一・二		明治二十四年六月廿七日	右 同
近世植物学教科書	大渡 忠太郎	全一冊	明治三十四年三月十九日	明治三十四年一月十七日	西野 虎吉
近世動物学教科書	丘 浅次郎	全一冊	明治三十四年三月廿三日	明治三十四年二月廿三日	右 同
近世博物学教科書	藤井 健次郎	全一冊	明治三十三年六月七日	明治三十四年一月五日	右 同
近世物理学教科書	中村 清二	全一冊	明治三十三年三月廿七日	明治三十四年二月十日	富山 房
近世化学教科書	大幸 勇吉	全一冊	明治三十二年十月十六日	明治三十三年四月一日	右 同
中等 臨 画	小山 正太郎	卷ノ一・四	明治三十三年三月二十七日	明治三十三年二月十一日	河村 静一郎

〔注・以下添付書類省略〕

学則変更認可願

本学院普通科学則別紙ノ通り変更致度候間御認可相成度
此段申請候也

明治卅四年十月十四日

私立東北学院長 デー、ビー、シュネーダー 印

宮城県知事 小野田元熙殿

第三課長 印 学務係 印

主任 属 宮城寅蔵 印

視察係 印 印

東北学院認定申請書不備訂正方照会ノ件

十月十四日付ヲ以テ東北学院普通科徴兵令認定申請書進
達ノ処本年六月八日付内三第二五〇九号通牒ノ次第モ有
之尚左記ノ事項取調至急進達相成度書類相添此段及照会
候也

年 月 日 宮城県内務部第三課

東北学院宛

追テ本年文部省令第十一号ニ依リ学院名称ニ私立ノ二字
ヲ冠シ開申スベキ筋ニ有之候処未タ該開申無之様ニ候右
ハ至急開申ノ取計相成可然此段共申添候也

左記

- 一 学科課程表中修身ハ口授講義トノミニテ課程明瞭ナ
ラズ又唱歌ノ課程ハ記入ナシ
- 一 伊藤鉄造^(イイ)ノ免許状不有ノ事ヲ該表ニ備考ヲ設ケ記入
セラルベシ
- 一 専任教員ノ教授時間至テ少キモノハ他ノ議務^(ギム)ニ関係
ノ有無前項ニ準ジ記入セラルベシ
- 一 学務ハ勿論其他書籍器具等本年五月四日申請ノ書類
ニ対比スルニ本年六月八日付内三第二五〇九号取調事
項以前ニ於テ変更若クハ増減シタルモノアルヲ認ム果
シテ然ラバ本文ニ副本ヲ添付セラレタシ

(注・明治三十四年十月十九日付)

内務部長(不在) 第三課長 印 学務係 印
知事(不在) 主任 属 宮城寅蔵 印

視察係 印

私立東北学院普通科徴兵令上等级認定ニ関スル件

本件ハ普通学務局長ヨリ再調方申来リ候ニ付指示候処訂
正ノ上進達シ来リ候ヲ以テ左按進達方取計可然哉伺

按

本年六月三日付普通宮城四二号ヲ以テ私立東北学院普通

科徴兵令上等位認定ノ件ニ就キ再調方御照会之処別冊之
通り訂正ノ上申請候ニ付及進達候条可然御取計相成度相
添此段申進候也

年 月 日

知事

普通学務局長宛

(注・明治三十四年十一月二日付)

客年十一月二日丙三第二四〇七号ヲ以テ御進達相成候私
立東北学院普通科徴兵令上等位認定ノ件本日認定相成候
処規則第十六条中「若クハ之ト同等以上ノ学校」ノ十二
字ハ不穩当ニ付削除セシメラレ度依命此段及通牒候也

明治三十五年一月十六日

文部省普通学務局長 沢柳政太郎 ㊦

宮城県知事 小野田元照殿

第三課長 ㊦ 学務係 ㊦ ㊦

主任 属 宮城寅藏 ㊦

視察係 ㊦

東北学院院长へ左按伺

本件処分ヲ要スルハ今回東北学院ハ普通科ヲ徴兵令第十
三条ニヨリ等位認定ニ相成タルモ規則中不備ノ廉別紙削

除方申来リ且ツ本件認定ヲ受ケタル学則ハ未タ私立学校
令ニ依リ変更ノ認可ヲ得ザルモノニ付之ガ処分ヲ要スル
所以ナリ

本月十六日私立東北学院普通科徴兵令上等位認定相成候
ニ就テハ学則中削除スベシ廉其筋通牒ノ次第有之示達ス
ベキ儀有之候条来廿一日正午十二時本県内務部第三課へ
出頭可相成此段申進候也

明治三十五年一月十八日

宮城県内務部

私立東北学院院长宛

内務部長 ㊦ 第三課長 ㊦ 学務係 ㊦ ㊦

知事 ㊦ 主任 属 宮城寅藏 ㊦ ㊦

視察係

私立東北学院普通科学則變更認可ノ件

本件ハ学則ヲ變更シテ徴兵令上ノ等位認定ヲ出願シタル
モノナリ右変更ハ地方長官ノ認可ヲ申請スル御訳ナルモ
其手續ヲナサザルモノナリ然レドモ既ニ本件認可申請ノ
際ハ該変更ヲ認め追認スルモノトシテ其筋ニ進達シタル
ニヨリ認定後ニ於テ法令ノ規定上形式ヲ履行スル必要アリ
本按之通り認可スル所以ナリ尚本認可申請ハ設立者ヨ

り出願スベキモノナルモ院長ハ設立者ヲ兼タルニヨリ設立者ト見做シ他ニ故障ナキヲ認ム按左二伺

私立東北学院設立者

デーヴキツト、ポーマン、シュネーダー

二字削除致候間此段開申候也

三十五年一月二十二日

私立東北学院院长

デーヴキツト、ポーマン、シュネーダー 印

大臣宛

(注・明治三十五年一月二十三日付)

(県庁文書)

内三第二二〇号

明治三十四年十月十四日付其院普通科学則變更申請ノ件認可ス

明治三十四年十一月二日

知事

内三第一九六二号

文部省普通学務局長へ左按伺

本月十六日付文部省文書課丑普甲一五七七号本県私立東北学院普通科規則第十六条中不穩当ノ廉削除セシムベキノ件御通牒之処別紙削除之旨開申候条可然御取計相成度此段申進候也

年月日

知事

宛

(開申書写)

開申書

本院規則第十六条中「若クハ之ト同等以上ノ学校」ノ十

九九 D・B・シュネーダー「仙台教会献堂式」

(英文)

(一九〇一年十月二十日)

一〇〇 D・B・シュネーダー書簡(パソロミユ

一宛)

(英文)

(一九〇二年四月九日)

一〇一 専門学校令による認定申請書類

(明治三十六年十二月二十六日)

本院院専門科文学部及神学部ヲ明治三十六年三月二十六日勅令第六十一号専門学校令ニ依リ御認定相成度別紙書類相添へ此段上申候也

明治三十六年十二月廿六日

私立東北学院長

デーヴキツト、ポーマン、シユネーダー 印

文部大臣 久保田 讓殿

本院院専門科文学部及神学部ヲ明治三十六年三月二十六日勅令第六十一号専門学校令ニ依リ御認定相成度別紙書類相添此段上申候也

明治三十六年十二月二十六日

私立東北学院設立者

デーヴキツト、ポーマン、シユネーダー 印

文部大臣 久保田 讓殿

目次

私立東北学院憲法第二条目的

一 目的

一 名称

一 位置

一 学則

第一章 修業年限

第二章 学科目及学科課程

第三章 学年学期及休業

第四章 入学及退学

第五章 試験

第六章 授業料及手数料

第七章 懲戒及賠償

第八章 服制

第九章 本院院専門科神学部予科

第十章 本院院専門科神学部別科

第十一章 寄宿舎規則

一 本院院専門科生徒定員

一 經費予算

一 教員分任学科表

一 開校年月

一 設立者履歴書

一 敷地建物之図面

私立東北学院憲法第二条目的

第一項 本学院ノ目的ハ基督教主義ニ基キ完全ナル普通

教育ヲ授クルニアリ

第二項 聖書ニ基キタル基督教ニ從ヒ以テ德育ヲ授クル
ニアリ

第三項 基督教々師タランコトヲ希望スルモノ若クハ其
他ノ職務ニ就カントスル青年ノ為メ更ニ高等ノ教育ヲ
授クルニアリ

目的

第一項 本学院専門科文学部ハ専門学校令ノ旨趣ニ從ヒ
且ツ本学院憲法第二条ニ基キ高等普通科ノ學術ヲ授ク
ルヲ以テ目的トナス

第二項 本学院専門科神学部ハ専門学校令ノ旨趣ニ從ヒ
且ツ本学院憲法第二条ニ基キ基督教宣教者ヲ養成スル
ヲ以テ目的トス

名称

本学院専門科ヲ私立東北学院専門科ト称シ之ヲ私立東北

学院専門科文学部及ビ私立東北学院専門科神学部ノ二部
二分ツ

位置

本学院専門科ヲ宮城県仙台市南町通十三番地私立東北学
院内ニ設ク

私立東北学院専門科学則

第一章 修業年限

第一条 本学院専門科ノ修業年限ハ文学部並ニ神学部ト
モ三箇年トシ各学年ヲ一學級トナス

第二章 学科目及学科課程

第二条 本学院専門科文学部及神学部ノ学科目並ニ学科
課程ハ左ノ如シ

私立東北学院専門科文学部学科目

一 修身

二 国語漢文

三 英語

四 歴史

五 哲学

六 体操

但シ本学院専門科文学部ノ生徒ハ左ノ撰修学科目ニ
就キ一週六時期乃至十四時期以内ニ於テ撰採ノ上兼

修スルコトヲ得

撰修学科目

一 聖書及聖書歴史

二 哲学

三 教育学

四 社会学、政治経済学

五 独逸語

六 希臘語

七 羅甸語

八 英語

九 唱歌

私立東北学院専門科神学部学科目

一 新約聖書積義

二 旧約聖書積義

三 新約聖書原文弁

四 旧約聖書原文弁

五 希臘語新約聖書

六 希伯来語

七 聖書緒論

八 聖書神学

九 神学緒論

十 教義学

十一 信条学

十二 比較宗教

十三 弁証論

十四 基督教倫理学

十五 說教学

十六 牧会学

十七 教会歴史

十八 教義歴史

十九 唱歌

二十 体操

希臘語	獨逸語	政治經濟學	社會學	教育學	哲學	聖書
	讀方及會話	經濟學			審哲學美汎學論	聖書聖書歷史
	五	二			五	二
文法及讀方	全上	政治學及	社會學	教育心理學	哲學史	
三	五	二	二	二	四	
	獨逸文學		教育史	教育學	哲學	
	五		六	六	三	

撰修學科目 文學部生ハ六時期乃至十四時期以內ニ於テ左記ノ學科ヲ撰ビ兼修スルコトヲ得

計	體操	哲學	歷史	英語	國語漢文	修身	學科 / 學級	
	兵式	心理學	希臘史及羅馬史	英文及修辭學	國語漢文作文	道德ノ要旨	第一學年	
	三	二	三	八	三	二	定時	
		全上	倫理學	中古史及近世史	全英上文學史	全上	全上	第二學年
	二	二	三	三	八	三	二	定時
	全上		歷史哲學	英文學	漢文	全上	第三學年	
	一六	二	三	八	一	二	定時	

私立東北學院專門科文學部學科課程及教授時數表 (但一定時教授時間ハ四十分トス)

計	唱歌	英語	羅甸語
	複音唱歌	單音唱歌	作文(和文英語)文法
三	一	四	二
	全上	全上	全上
三	一	四	二
	全上	全上	全上
三	一	四	二

私立東北学院專門科神学部学科課程及教授時教表 (但シ一定時教授時間ハ四十分トス)

計	體操	唱歌	希伯來語	希臘語新約聖書	教會歷史	弁証論	神学緒論	聖書緒論	旧約聖書積義	新約聖書積義
三五	二	一	三	三	三	四	一	三	三	二
	全上	全上	說教学	全上	教義学	基督敎倫理学	聖書神学	旧約聖書原文弁	新約聖書原文弁	
三五	二	一	一	三	三	二	三	五	五	
	比較宗教	全上	牧会学	全上	教義歷史	全上	信条学	全上	全上	
三五	三	二	二	一	三	四	三	一	二	三

第三章 学年学期及休業

第三条 学年ハ毎年四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ

終ル

第四条 学年ヲ分チテ左ノ三学期トス

第一学期 四月一日ヨリ八月三十一日迄

第二学期 九月一日ヨリ十二月三十一日迄

第三学期 一月一日ヨリ三月三十一日迄

第五条 学年中定時休業日ハ左ノ如シ

一 日曜日

二 大祭祝日

三 春期休業 四月一日ヨリ全月九日ニ至ル

四 夏期休業 七月十日ヨリ九月十日ニ至ル

五 冬期休業 十二月二十四日ヨリ翌年一月七日ニ至ル

第四章 入学及退学

第六条 生徒ヲ入学セシムベキ時期ハ学年ノ始メヨリ三十日以内トス

但シ欠員アル時ハ第二学期及第三学期ノ始メヨリ十日以内ニ臨時入学セシムルコトアルベシ

第七条 本学院専門科文学部第一学年ニ入学シ得ルモノハ左ノ如シ

一 明治三十五年一月以後ノ私立東北学院普通科卒業者

二 中学校卒業者若クハ明治三十六年文部省令第十四号専門学校入学者檢定規定第八条ニ因リ文部大臣ノ指定シタル学校ノ卒業者若クハ同令ニ依リ試験檢定ニ合格シタル者ニシテ英語試験ニ合格シタル者

第八条 本学院専門科神学部第一学年ニ入学シ得ルモノハ左ノ如シ

一 本学院専門科神学部予科ヲ卒業シタル者（本学院専門科文学部第二学年修業生相当）

二 前条ノ資格ヲ有シ且ツ前項ト同等ノ学力ヲ有スル

者

前項入学者ノ学力ハ凡テ試験ニ依リ之ヲ檢定ス

第九条 入学志願者ノ数入学ヲ許スベキ人員ニ超過スル時ハ試験ニヨリテ之ヲ撰拔ス

第十条 前条入学撰抜試験ハ文学部ニアリテハ国語 漢文 英語 歴史 地理ニ就キ本学院普通科卒業ノ程度ニ於テ之ヲ行ヒ神学部ニアリテハ国語 漢文 英語 希臘語 歴史 心理 倫理 聖書ニ就キ本学院専門科文学部第二学年修業ノ程度ニ於テ之ヲ行フ

第十一条 第二学年以上ニ入学セントスルモノハ先第一学年ニ入学スルニ必要ナル資格ヲ檢定シ尋テ其志願学年以下ノ各学年ノ課目ニ就キ試験ヲ行ヒ入学ノ許否ヲ定ム

第十二条 本学院専門科生徒ニシテ退学シタルモノ一個年以内ニ再入学ヲ志願シタルトキハ試験ニ依ラズシテ原学年以下ノ学年ニ入学ヲ許可スルコトアルベシ

第十三条 本学院専門科生徒ニシテ他校ニ転学ヲ志望スルモノアル時ハ学院院长ハ正當ノ事由アリト認メタル場合ニ限り其生徒ノ在学証明書及成績表ヲ移轉先学校ニ送附スルモノトス

第十四条 他ノ公私立専門学校生徒ニシテ本学院専門科

へ転学ヲ願出ツル者ハ欠員アル場合ニ限り試験ヲ行ハズシテ同一程度ノ学年ニ編入スベシ

但シ学院院长ニシテ必要アリト認メタル場合ニハ英語

若クハ其他ノ学科ニ就キ試験ヲ行フコトアルベシ

(この条は二月九日付で削除 以下各条を繰上ぐと追願)

第十五条 入学志願者ハ入学期日ニ先チ甲号書式ニ従ヒ

入学願書ニ学業履歴書及卒業セシ当該学校長ノ卒業証

明書及品行保証状ヲ添へ差出スベシ

甲号書式(用紙美濃紙)

入学願書

私儀今般御学院専門科何部第何学年へ入学志願ニ付御許可相成度別紙学業履歴書卒業証明書及品行保証状相添へ此段願上候也

本籍何府県何郡市何町村何番地族籍職業

(戸主ニアラザルモノハ其戸主トノ関係)

止宿所

年月日 氏名 ㊦

私立東北学院院长 氏名 殿

生年月日

学業履歴書

氏名

一 出生年月日

一 出生地名

一 本籍又ハ寄留現在住所番地

一 族籍

一 父兄ノ官位爵若クハ職業

一 学業

何年何月ヨリ何学校ニ入り(又ハ何誰ニ就キ)何

年何月何学年修業若クハ卒業或ハ何々々学校ニ転学

現今何学年ニアリテ修業中等

(卒業証書又ハ修業証書アラバ其写ヲ添フベシ)

一 賞罰 何年何月何処ニ於テ何々ニ就キ賞若クハ罰ヲ受ク

等

右之通相違無之候也

右

年月日 氏名 ㊦

第十六条 入学ノ許可ヲ得タルモノハ現ニ仙台市内ニ於

テ家計ヲ立テ生徒ノ監督ヲナシ得ベキ丁年以上ノ男戸

主ヲ保証人トナシ乙号書式ニ倣ヒ在学証書ヲ差出スベ

シ

乙号書式（用紙美濃紙）

在学証書

私儀今般入学御許可相成候ニ付テハ御学院規則等堅ク相
守リ勤学可致候依テ証書差出候也

（原籍）何府県何郡市何町村何番地

（寄留） 右 全

族籍何誰何男、弟（若クハ戸主）

氏 名 ④

生 年 月 日

私立東北学院長 氏 名 殿

右何誰儀入学御許可相成候ニ付テハ在学中本人ニ関スル

一切ノ事件ハ私引受ケ可申依テ保証如此ニ候也

但シ向後宿所移転或ハ印章相改メ候節ハ速カニ御届可

申候

宮城県仙台市何町何番地

族籍職業

年 月 日 保証人 氏 名 ④

第十七条 保証人ノ転居改印改氏名等ハ其都度本学院ニ

届出ツベシ

第十八条 保証人死亡スルカ又ハ第十六条ノ資格ヲ失ヒ

タルトキハ更ニ相当ノ保証人ヲ定メ第十六条規定ノ証
書ヲ差出スベシ

第十九条 学院長ハ左ノ各項ノ一ニ該当スルモノニ退学
ヲ命ズ

一 性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者

二 学力劣等ニシテ成業ノ見込ナシト認メタル者

三 引継キ一ケ年以上欠席シタル者

四 正当ノ事由ナクシテ一ケ月以上欠席シタル者

五 学院長ノ許可ヲ得ズシテ猥リニ試験ニ欠席シタル
者

第二十條 生徒退学セントスルトキハ其事由ヲ具シ保証

人連署ノ上退学願書ヲ差出シ学院長ノ許可ヲ受クベシ

但シ退学セントスルモノハ在学中学院ニ対スル一切

ノ負債ハ必ず之ヲ弁納スベシ

第五章 試験

第二十一条 各学年ノ課程修了又ハ全学科ノ卒業ヲ認ム

ルニハ平素ノ学業及ヒ試験ノ成績ヲ考查シテ之ヲ定ム

第二十二条 試験ヲ分チテ学期試験及学年試験トス

第二十三条 学期試験ハ第一期及第二期期末ニ於テ其

学期間ニ履修シタル学科ニ就キ之ヲ行フ

第二十四条 学年試験ハ学年末ニ於テ其学期間ニ履修シ

タル学科ニ就キ之ヲ行フ

第二十五条 各学科平常点ハ日常ノ評点ヲ学期末ニ平均シタルモノトス

第二十六条 各学科ノ学期評点ハ平常評点ニ学期試験評点ヲ加ヘ之ヲ二除シタルモノトス

第二十七条 各学科ノ学年評点ハ学期評点ノ平均数ヲ二倍シ之ニ学年試験評点ヲ加ヘ其和ヲ三除シタルモノトス

第二十八条 全科平均評点ハ各学科ノ總評点ヲ学科ノ数ニテ除シタルモノトス

第二十九条 試験ノ評点ハ各一百点ヲ以テ定点トス

第三十条 入学試験ノ評点ハ各学科六十点以上ヲ以テ合格トス

但シ六十点以下四十点以上ノモノニ科目マデ若クハ六十点以下三十点以上ノモノニ科目マデナルトキハ其学科ニ就キ再試験ヲ行フコトアルベシ

第三十一条 学年全科平均評点七十二滿タザルカ若クハ二科目以上六十点ニ滿タザルカ又ハ一科目ニテモ五十点ニ滿タザル場合ニハ昇級スルコトヲ得ズ

第三十二条 学期及学年試験ノ当日疾病或ハ不得止事故ニヨリ学院長ノ許可ヲ得テ欠席シタルモノハ次学期若

クハ次学年ノ始メニ於テ特ニ追試験ヲ行フコトアルベシ

第三十三条 第一学年乃至第三学年ノ学年試験ニ合格シタルモノニハ丙号書式ノ修業証書ヲ授与ス

丙号書式

修業証書

族籍

氏名

生年月日

右者本学院専門科何学部第何学年ノ課程ヲ修了セリ仍テ之ヲ証ス

年月日

私立東北学院 印

第何号

第三十四条 規定ノ全科ヲ卒業シタルモノニハ丁号書式ノ卒業証書ヲ授与ス

丁号書式

卒業証書

族籍

校印

氏名

生年月日

右者本学院規定ノ学科ヲ履修シ成規ノ試業ヲ經テ専門科何部(別科若クハ予科)ヲ卒業セリ依テ茲ニ之ヲ証ス

年月日 私立東北学院院长 氏名 ㊦

第何号

第六章 授業料及手数料

第三十五条 生徒ハ授業料トシテ一ヶ月金壹円ヲ毎月五日以内ニ当月分ヲ納ムベシ

但シ五日以後出席シタルモノ又ハ新ニ入学シタルモノハ当日之ヲ納ムベシ

第三十六条 入学志願者ハ手数料トシテ受験ニ先チ金五拾錢ヲ納ムベシ

但シ既納ノ手数料ハ仮令試験ヲ受ケザルモ返付セザルモノトス

第三十七条 新ニ入学ヲ許可セラレタル者ハ入学金トシテ金壹円即日之ヲ納ムベシ

但シ本学院普通科卒業生及専門科神学部予科卒業生ハ之ヲ免除ス

第七章 懲戒及賠償

第三十八条 本学院ノ規則並ニ諸揭示ニ背キ其他生徒タル本分ニ違ヒタル行為アルモノハ其輕重ニ依リ左ノ罰科ニ処ス

一 戒飭

訓諭譴責シテ将来ヲ慎マシム

二 謹慎

授業時間後学院ニ留置シテ悔悟ノ実ヲ表セシム

但シ其時数ハ一日二時間以内其日数ハ七日以内トス

三 停学

一週間以上一ケ年以内出席ヲ停止ス

四 退学

第十九条ニヨリ処分ス

第三十九条 本学院附属ノ書籍及器械器具ヲ毀損亡失シタル生徒ニハ現品若クハ相当ノ代償ヲ弁償セシム

第八章 服制

第四十条 本学院専門科生徒ハ本学院規定ノ制服制帽ヲ着用セザレバ何レノ課業ニモ出席スルヲ許サズ

但シ疾病其他ノ事故ニヨリ和服着用ノ許可ヲ得タルモノハ此限りニアラズ尤モ和服着用ノ際ハ必ス袴ヲ着用スベシ

着用スベシ

第四十一条 制服制帽ハ別表雛形ノ如シ

第四十二条 制服地質ハ随意ナレドモ色合ハ冬期ハ紺色夏期ハ鼠霜降トス

第四十三條 夏服ハ六月一日ヨリ九月三十日マデ冬服ハ

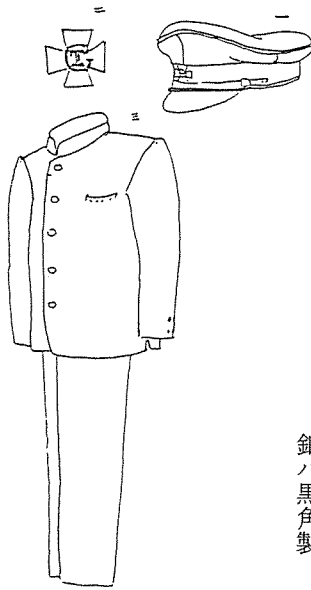
十月一日ヨリ五月三十一日マデ着用スルモノトス

制服制帽雛形

一ハ制帽

二ハ徽章 三ハ制服

釦ハ黒角製



第九章 本学院専門科神学部予科

第四十四條 本学院専門科神学部ニ予科ヲ設ク

第四十五條 本学院専門科神学部予科ハ本学院専門科神

学部入学志願者ノ為メニ其準備ヲ為サシムルヲ以テ目

的トス

第四十六條 本学院専門科神学部予科ノ修業年限ハ二個

年トシ各学年ヲ一学級トナス

第四十七條 本学院専門科神学部予科第一学年ニ入学シ

得ルモノハ本学院専門科科学則第七条ニ因ルモノトス

第四十八條 本学院専門科神学部予科ノ学科目及学科課

程ハ文学部第一学年及第二学年ノ学科目及学科課程ニ

依ルモノトス

第十章 本学院専門科神学部別科

第四十九條 本学院専門科神学部ニ別科ヲ設ク

第五十條 本学院専門科神学部別科ハ本学院専門科神学

部ニ入学シ得ザルモノニシテ基督教ノ宣教ニ従事セン

トスル者ノ為メニ適當ノ教育ヲ授クルヲ以テ目的トス

第五十一條 本学院専門科神学部別科ノ修業年限ハ三個

年トナシ各学年ヲ一学級トス

第五十二條 本学院専門科神学部別科第一学年ニ入学ヲ

許スベキモノハ年齢滿十九年以上ニシテ本学院普通科

卒業ノ程度ニ從ヒ国語 漢文 地理 歴史ニ就キ試験

ヲ行ヒ之ニ合格シタルモノトス

第五十三條 本学院専門科神学部別科ノ学科目並ニ学科

課程ハ左ノ如シ

私立東北学院専門科神学部別科学科目

一 新約聖書釈義

二 旧約聖書釈義

- 三 聖書
- 四 聖書緒論
- 五 聖書神学
- 六 神学緒論
- 七 教義学
- 八 信条学
- 九 比較宗教
- 十 弁証論
- 十一 基督教倫理学
- 十二 説教学
- 十三 牧会学
- 十四 教会歴史
- 十五 聖書歴史及地理
- 十六 地理歴史
- 十七 哲学史
- 十八 教育学的心理学
- 十九 生理学
- 二十 漢文
- 二十一 英語
- 二十二 唱歌
- 二十三 体操

私立東北学院専門科神学部別科学科課程及教授時数表
(但し一定時教授時間八四十分トス)

計	第一学年	第二学年	第三学年	定時
二七	定時	全上	全上	三
	新約聖書積義	全上	全上	三
	聖書	旧約聖書積義	全上	三
	聖書歴史及地理	教会歴史	全上	三
	神学緒論	聖書緒論	信条学	一
	弁証論	聖書神学	牧会学	二
	地理歴史	教義学	全上	三
	教育学的心理学	基督教倫理学	全上	三
	生理学	説教学	全上	一
	漢文	全上	比較宗教	三
	英語	全上	全上	三
	唱歌	全上	全上	一
	体操	全上	全上	二
二七	哲学史			二

第十一章 寄宿舎規則

第五十六条 在舎生徒ハ行状ニツキ学院院长ノ訓諭ヲ遵奉

第五十四条 入舎生ハ授業料ノ外ニ食料トシテ毎月金參

シ幹事及舎監ノ指揮ニ従フベシ

円九拾銭（物価ノ高低ニヨリ變更アリ）ヲ毎月五日迄

第五十七条 在舎生徒ハ起臥出入等規則ニ従ヒ時刻ヲ嚴

ニ幹事ニ納ムベシ

守シ舎監ノ指揮ニ従フベシ

但シ定期ニ於テ納付セザルモノハ保証人ヨリ徴収ス

第五十八条 在舎生徒ハ他人來訪ノ節ハ通常応接所ニテ

第五十五条 入舎セント欲スルモノハ其旨ヲ幹事ニ申出

面会スベシ

テ其許可ヲ得タル上戊号ノ書式ニヨリ入舎証ヲ差出ス

第五十九条 在舎生徒ハ先ツ幹事ノ許可ヲ得ルニアラザ

ベシ

レバ疾病ノ故ヲ以テ欠課スルヲ得ズ

戊号書式（用紙美濃紙）

但シ疾病ニヨリ欠課シタルモノハ欠課中ハ舎監ノ許

入舎証

可ヲ得ルニ非ザレバ外出スルコトヲ得ズ

何誰儀今般入舎御許可相成候ニ付テハ在舎中舎則ヲ遵奉

第六十条 在舎生徒帰舎ノ定刻ニ後ル、カ又ハ外泊ヲ要

スルハ勿論猥リニ退舎致間敷且本人一身上ニ関スル一切

スル時ハ其事由ヲ具シ保証人連署ノ上証明書ヲ舎監ニ

ノ事件ハ保証人ニ於テ引受ケ決シテ御迷惑相掛ケ申間敷

差出スベシ

候依テ保証人連署ノ上入舎証書差出候也

第六十一条 在舎生徒舎監若クハ幹事ノ許可ヲ得ズシテ

族籍

猥リニ外泊シ保証人連署ノ上其理由ヲ具シタル証明書

年月日

氏名

ヲ差出サザル時ハ退舎セシムルコトアルベシ

第六十二条 在舎生徒舎内ノ諸規則又ハ時々ノ告示ヲ遵

奉セズ又ハ不良ノ行状アルモノハ退舎ヲ命ズ

住所族籍

生年月日

第六十三条 寄宿舎ハ職員時々巡視スルコトアレバ在舎

保証人氏名

名

生徒ハ常ニ之ヲ心得居ルベシ

私立東北学院院长 氏名 殿

第六十四条 舎内ノ細則ハ院長ノ許可ヲ得テ生徒ノ撰定

スルモノトス

第六十五条 学院門戸ノ開閉ハ午前六時及ヒ午後十時ヲ

以テ定限トス

第六十六条 時限外ハ職員及小使ノ外ハ門鑑ヲ所持スル

ニ非レバ出入スルヲ得ズ

金 拾八円 試験手数料

金 参拾六円 入学金

金 四拾六円 雑収入

一金 四千七百円 支出総額

内訳

私立東北学院専門科生徒定員

金 参千五百円 教員給

一 私立東北学院専門科文学部 三十六名

金 百八拾円 諸雇給

一 私立東北学院専門科神学部 三十六名

金 百式拾円 消耗費

一 私立東北学院専門科神学部予科

金 四百円 書籍費

一 私立東北学院専門科神学部別科 三十六名

金 式百円 雑費

合計 百八名

金 参百円 予備費

備考 神学部予科ノ生徒定員ハ文学部ノ生徒員数ニ
算入セリ

私立東北学院専門科経費予算

明治三十七年度予算

一金 四千七百円 収入総額

内訳

金 四千参百円 本学院理事局ヨリ寄附

金 参百円 授業料

私立東北学院専門科教員分任学科表

分任学科	専任兼ノ別	職名	氏名
教義学、牧会学、神学緒論、信条学	本院普通科兼任	学院院长兼教授	シュネーダー
漢文	本院普通科兼任	教授	福澤定興
国文学	本院普通科兼任	教授	深田康守
弁証論、教会歴史、倫理学	明治廿六年九月ヨリ全 廿七年九月迄帰米休養中	教授	ノッス
体操	本院普通科兼任	教授	伊藤鐵藏
心理学、英文学	本院普通科兼任	教授	出村悌三郎
英文学	本院普通科兼任	教授	ゲルハルド
英語、英文学	米国エール大学留学中	教授	中村長之助
聖書積義	本院普通科兼任	教授	梶原長八郎
教会歴史、羅甸語、希臘語	本院普通科兼任	教授	フアウスト
論理学、哲学史、教育、独逸語、希伯來語	本院普通科兼任	教授	笹尾桑太郎
独逸語、英語	本院普通科兼任	教授	クツク
経済学、憲法	本院普通科兼任	教授	須藤鬼一
歴史、地理	本院普通科兼任	教授	七種泉三郎
聖書緒論、聖書積義、羅甸語	専任	教授	阿部能文
旧約聖書文学		講師	落合吉之助
社会学		講師	デホレスト
	休職中	教授	ランペ

門〔開〕校年月

明治廿七年一月

〔欄外 二月九日付で施行
年月は、三月一日と追願〕

設立者履歴書

別冊教員認可願ニ添
ヘタルモノニ同ジ

敷地建物之図面

〔当該事項の図面なし〕

拜啓過日御進達相願置候本学院専門科認定願書並ニ教員
認可願副本別冊之通り差上候間何分宜敷御取計被成下度
奉願上候
敬具

明治三十六年十二月廿八日

私立東北学院院长

デー、ビー、シュネーダー 印

宮城県内務部第三課御中

尚年末切迄の際種々御手数相懸け恐縮ニ奉存候得共何分
至急御進達方御取計願上候也

私立東北学院普通科寄宿舎ノ一部ヲ一時

本学院専門科教室ニ使用之件ニ付認可願

今般都合ニ依リ本学院普通科寄宿舎階下丈ヶ当分ノ間本
学院専門科教室ニ使用致度尤モ本学院ハ今回校舎新築之
見込ニテ目下夫々準備中ニ有之且ツ通学生ニ対シテハ嚴
ニ監督ノ方法ヲ講ジ聊カ遺憾ナキヲ期シ居リ候間右特別
ノ御詮議ヲ以テ御認可相成度別紙図面相添此段願上候也
明治三十七年一月十六日

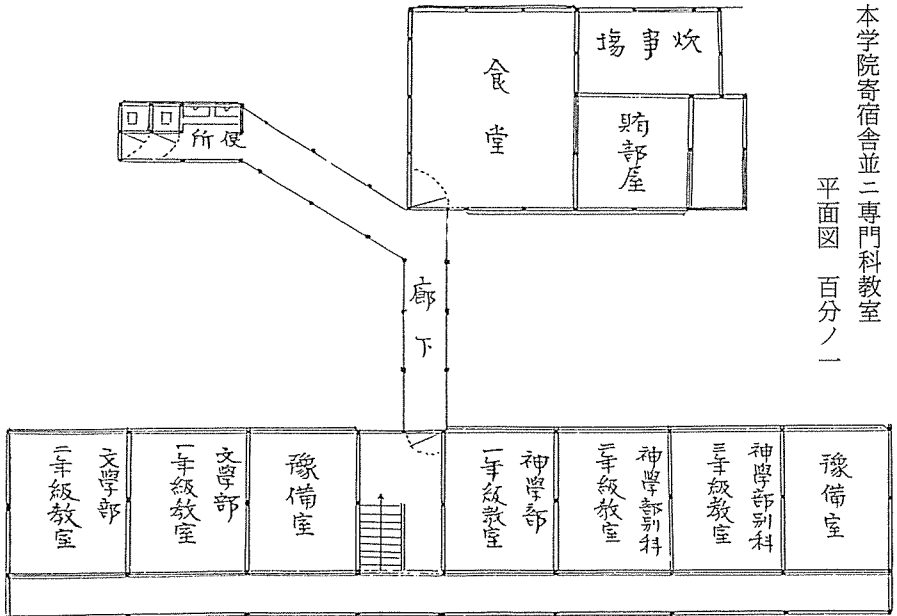
私立東北学院院长

デーヴキツト、ボーマン、シュネーダー 印

文部大臣 久保田 讓殿

本学院寄宿舎並ニ専門科教室

平面図 百分ノ一



備考(一)木造二階建ニシテ階上階下トモ同様ナリ階上ハ寄宿舎階下ハ教室ニ使用ス

但シ間数ハ第一号ヨリ第十四号ニ分チ一室各十畳間ニシテ階上寄宿舎一号ヨリ七号迄各室共内一畳ハ押入ナリ

(二)神学部二年級並ニ三年級及神学部別科一年級並ニ文学部三年級ニハ目下生徒ナキヲ以テ当分教室ノ設ケナシ

(三)階上寄宿舎ハ当分普通科ト之ヲ兼用ス

内務部長 ㊟ 第三課長 ㊟ 課僚係 ㊟ ㊟

主任 属 宮城寅藏 ㊟

一、専門学校設置認可申請

三第四二〇号

一、同教員認可申請

三第四二一号

右検印進達可然欵

専門普通両学務局長へ左案伺

本県私立東北学院従来ノ文科及神学部ヲ専門学校令ニ依リ設置致度旨教員認可申請ヲ添へ申請ニ付別途進達候処右ニ関シテハ客年十一月十三日付専申第一三四三号御通牒ニ基キ同年十二月十九日内三第七八五六号ヲ以テ及質議置候次第モ有之候得共今回申請ニ際シ専門学校令ニ依

リ従来ノ学則ヲ改正候廉有之候得バ尚御取調相成度此段申進候也

年月日

知事

専門学務局長

宛

普通学務局長

追テ本文中ノ質議ニ付テハ相成ルベク速ニ御回答ノ御取計相成度此段申進候也

(注・明治三十七年一月二十二日付)

内務部長 ㊟ 第三課長 ㊟ 課僚係 ㊟ ㊟

知事 ㊟ 主任 属 宮城寅藏 ㊟ ㊟

普通学務局長へ左案伺

本県私立東北学院従来ノ神学部及文科ヲ専門学校令ニ依リ専門学校トシテ別途設置ノ認可出願ノ処従来普通科ノ寄宿舎ヲ右神学部及文科ノ教室及寄宿舎普通科兼用ニ充用致度旨別紙出願ニ付普通科ハ徴兵令上ノ特典ヲ有スルモノニ候得バ校舎ノ設備上ニ関スル必要ノ出願ト認メ及進達候也

年月日

知事

普通学務局長宛

(注・明治三十七年二月二十二日付)

一 経費予算収入ノ中「本学院理事局」ヲ「北米合衆国レフオームド教会外国伝道会社」ト改ム

私立東北学院専門科文学部及神学部ヲ専門学校令ニ依ルノ件曩キニ提出致置候処右ハ該院設立者ヨリ願出ツベキ筋ニ有之候ヲ誤テ私ヨリ提出候ニ付該願書ハ別紙ト引替被下度此段相願候也

明治三十七年二月九日

本学院専門科文学部及神学部ヲ専門学校令ニ依ルノ件曩キニ相願置候処右ニ添付シタル校舎図面中寄宿舎ノ分取落候ニ付別紙差上候間可然御取計相成度此段相願候也
明治三十七年二月九日

私立東北学院院长

私立東北学院設立者

デーヴキツド、ボーマン、シュネーダー 印

デーヴキツド、ボーマン、シュネーダー 印

文部大臣 久保田 讓殿

文部大臣 久保田 讓殿

本学院専門科文学部及神学部ヲ専門学校令ニ依ルノ件曩キニ相願置候処右ニ添付シタル書類中左之通訂正致度候間此段追願候也

明治三十七年二月九日

私立東北学院設立者

デーヴキツド、ボーマン、シュネーダー 印

文部大臣 久保田 讓殿

一 第十四条ヲ削リ以下各条ヲ繰上グ

一 新令ニ依ル施行年月ハ明治三十七年三月一日ト訂

正ス

私立東北学院専門科寄宿舎

平面図百分ノ一

備考(一)木造二階建ニシテ階上階下

共同様ナリ階下ハ当分教室

ニ使用ス

(二)寄宿舎ハ本図面ノ通第一号

ヨリ第七号ニ分チ各室共間

口二間奥行二間半ニシテ各

十畳敷トス内一畳ハ箱戸棚

押入ニシテ便宜其位置ヲ変

更シ得ル仕組ナリ

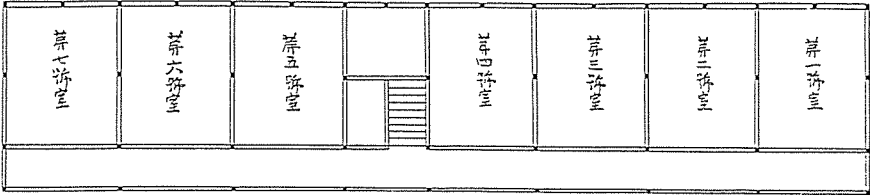
(三)入舎定員ハ一室二名トス

(四)寄宿舎ハ当分普通科ト之ヲ

兼用ス

(五)階下ノ分ハ別紙教場ノ図面

ニ明記シアルヲ以テ略ス



内務部長 ㊦ 第三課長 ㊦ 課係係 ㊦ ㊦

主任 属 宮城寅藏 ㊦ ㊦ ㊦

専門学校設置願ニ対スル追願書

右ハ曩ニ提出シタル願書中訂正ノ出願ナルニ依リ別ニ

都合無之ニ付左案ヲ以テ専門事務局ヘ回送取計可然欵

私立東北学院設立者デーヴキツド、ポーマン、シユネー

ダーヨリ専門学校設置願ニ対スル設置願書教員認可願書

引替ノ件並書類中訂正ヲ要スル件別紙差出候ニ付及回送

候条可然御取計相成度此段申進候也

年 月 日

宮城県

専門事務局宛

(注・明治三十七年二月十日付)

本学院専門科文学部及神学部ヲ専門学校令ニ依ルノ件曩

キニ相願置候処右ニ添付シタル本学院所有地図面中運動

場並ニ新築校舎用地ノ分今回精査致候処別紙図面之通ニ

付御訂正相成度此段追願候也

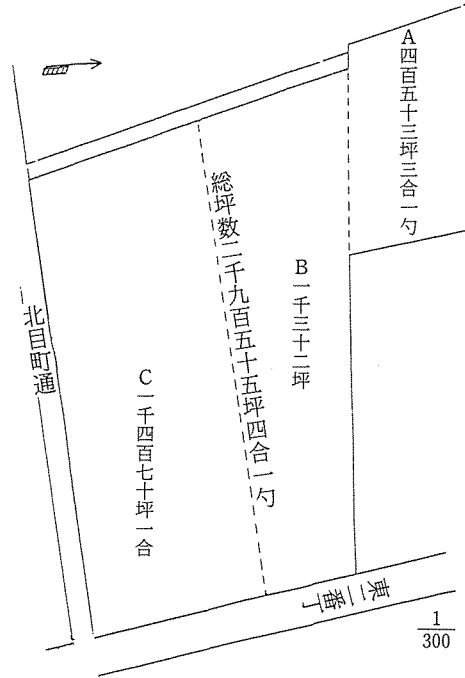
明治三十七年二月十七日

私立東北学院設立者

デーヴキツド、ポーマン、シユネーダー ㊦

文部大臣 久保田 讓殿

私立東北学院所有運動場並ニ新築校舎用地



備考 Cハ現今運動場ニシテABハ新築校舎用地ナリ

文部省
辰専甲一八九号
文書課

本月十二日内三第七〇三号ヲ以テ別紙御送付相成候処東
北学院ノ設立者ハ押川方義ト存候得共其後変更シタル儀
ニ候哉御取調相成度書面一応送付此段及照会候也

明治三十七年二月十九日

文部省専門学務局 印

宮城県御中

内務部長 ㊤ 第三課長 ㊤ 学務係

主任 属 宮城寅藏 ㊤

私立東北学院設立者変更ノ儀ニ付回答案

本月十九日文部省文書課辰専甲一八九号御照会本県私立
東北学院設立者ハ明治二十四年七月本院創設以来押川方
義ナリシ処明治三十四年七月十日デーヴキツド、ポーマ
ン、シュネーダーニ変更ノ旨開申有之同日以後本人ニ変
更シタル儀ニ候条御了知相成度別紙相添此段及回答候也

年 月 日 県名

専門学務局宛

(注・明治三十七年二月二十二日付)

本学院専門科教授並ニ講師別表之通採用致度候間御認可
相成度別紙履歷書相添へ此段相願候也

明治三十七年二月廿六日

私立東北学院設立者

デーヴキツド、ポーマン、シユネーダー ㊦

文部大臣 久保田 讓殿

内務部長 ㊦ 第三課長 ㊦ 課僚係 ㊦ ㊦

知事 ㊦ 主任 属 宮城寅藏 ㊦

私立東北学院専門科認定申請ノ件

本件ハ曩ニ専門学校令ニ依リ設置認可申請中ノモノニ付
左案ヲ以テ進達可然歟

私立東北学院専門科認定申請書進達ニ付副申

本県私立東北学院設立者デーヴキツド、ポーマン、シユ
ネーダーヨリ同院ノ専門科ヲ専門学校令ニ依リ設置ノ儀
曩ニ認可申請ノ処右御認可ノ上ハ徴兵令上ニ関シ等位認
定相成度旨申請ニ付調査スルニ其入学資格ハ中学校ヲ卒
業シタルモノ又ハ専門学校令第五条ノ檢定ニ合格シタル
モノナルニ依リ専門学校設置御認可同時ニ右御認定相成
度此段副申候也

年 月 日

知事

文部大臣宛

〔注・明治三十七年二月二十六日付〕

内務部長 ㊦ 第三課長 ㊦ 課僚係 ㊦ ㊦

知事 ㊦ 主任 属 宮城寅藏 ㊦

私立東北学院専門科敷地変更ノ件

本件ハ追願事由ノ通り相違ナキモノト認ムルニ依リ此儘
捺印進達可然歟

〔注・明治三十七年二月二十六日付〕

文部省

文書課 辰専甲三四二号

私立東北学院ヨリ從來該院普通科ノ寄宿舎ニ使用ノ幾部
ヲ該院専門科ノ教室ニ使用ノ件申出候処右ハ聞置カレ候
又該院専門科教員認可申請ニ対シ七種泉三郎外二名ヲ除
キ認可セラレ候処七種泉三郎ハ帝国大学卒業ノ学士ナル
ヲ以テ認可ヲ受クルヲ要セスランペハ休職者ニ付認可セ
ラルヘキ限ニアラス須藤鬼一ハ履歷書ニテハ経済学憲法
ノ教員タルノ学力ヲ認メ難ク候間須藤鬼一ノ履歷書等御
取調相成度此段申進候也

明治三十七年二月廿七日

文部省専門学務局長

理学博士 松井真吉 ㊦

宮城県知事 田辺輝実殿

追テ東北学院長署名ノ願書ニ通ハ引替御送付致候間本人
へ御下付相成度候也

内務部長 ㊦ 第三課長 ㊦ 課僚係 嶺岸

知事 ㊦ 主任 属 宮城寅蔵 ㊦

私立東北学院専門科設置認可書添書ヲ要セズ設立者へ交

付可然哉

右供聞

(写)

文部省 辰専甲三四二号

文書課

私立東北学院専門科設立者

デーヴキツド、ポーマン、シュネーダー

明治三十六年十二月二十六日及本年二月六日付願私立東

北学院専門科ヲ本年三月一日ヨリ専門学校令ニ依リ設置

ノ件認可ス

明治三十七年二月二十七日

文部大臣 久保田 讓

三第一三四七号

専門学務局へ左按伺

客月二十七日付ヲ以テ私立東北学院専門科設置指令書御
回送相成候処右ニ記載ノ二月六日付願トアルハ当県ヲ經
由シタル事実無之様存候或ハ二月九日付願字則第十四条
削除外式件ノ追願ニ対スルモノ、御指令ニハ無之候哉本
人へハ伝達取計置候得共為念一応及御問合候ニ付御取調
ノ上折返シ御回答相願度此段及照会候也

年月日

専門学務局宛

(注・明治三十七年三月七日付)

内務部長 ㊦ 第三課長 ㊦ 課僚係 嶺岸

知事 ㊦ 主任 属 宮城寅蔵 ㊦

私立学院専門科教室及寄宿舎ニ普通科寄宿舎使用ノ件並
教員採用認可申請ニ対シ左按通牒可然哉相伺候

貴院ニ於テ従来普通科ノ寄宿舎ニ使用ノ幾部ヲ専門科ノ

教室ニ使用ノ件御上申相成候処右ハ聞置カレ候旨其筋申

来候条御了知相成度又専門科教員認可申請ニ対シ七種泉

三郎外式名ヲ除キ認可セラレ候処七種泉三郎ハ帝国大学

卒業ノ学士ナルヲ以テ認可ヲ受クルヲ要セズランペハ休

職者ニ付認可セラルベキ限ニアラズ須藤鬼一ハ履歷書ニテハ經濟學憲法ノ教員タルノ学力ヲ認メ難キ趣ニ候條須藤鬼一ノ履歷尚ホ御取調相成度此段及通牒候也

年 月 日

内務部長

私立東北学院長宛

(注・明治三十七年三月七日付)

文部省
辰宮專一
文書課

三月八日内三第一一三〇号ヲ以テ私立東北学院専門科専門学校令ニ依ル指令文中日付ノ件御照会ノ趣了承右ハ二月九日ノ誤ニ付別紙更ニ御送付致候間御引替ノ上前指令書ハ御返付相成度此段及回答候也

明治三十七年三月十一日

文部省専門学務局 ㊦

宮城県御中

内務部長 ㊦ 第三課長 不在 課僚係 ㊦㊦㊦

主任 属 宮城寅藏 ㊦㊦

専門科指令書引換ノ件

専門科設置認可指令書必要ノ儀有之候間至急提出候様御

取計有之度此段及照会候也

年 月 日

内務部

私立東北学院長宛

理由

本件ハ日付ニ誤記有之其筋へ照会候処引換方申来り候ニ付起案ノ通

備考 指令文中二月六日付トアルハ二月九日付ノ誤記ナルニヨリ訂正ノ件

(注・明治三十七年三月十六日付)

内務部長 ㊦ 第三課長 不在 課僚係

主任 属 宮城寅藏 ㊦

専門学務局へ左按伺

本月十一日文部省文書課辰宮專一號御回答ノ次第二依り本県私立東北学院専門科専門学校令ニ依ル指令書引替ノ上別紙送付候條御査収相成度此段申進候也

年 月 日

宮城県

専門学務局宛

(注・明治三十七年三月十八日)

(県庁文書)

一〇二 専門科徴兵猶予認定申請書

(明治三十七年二月二十日)

本学院専門科文学部及神学部ヲ専門学校令ニ依ルノ件曩
キニ相願置候処右御認定相成候上ハ更ニ徴兵令第十三条
ニ依リ御認定相成度別紙書類相添へ此段相願候也

明治三十七年二月二十日

私立東北学院院长

デーヴキツド、ボーマン、シュネーダー 印

文部大臣 久保田 讓殿

認定願書類目次

- 一 沿革
- 一 私立東北学院憲法第二条目的
- 一 目的
- 一 名称
- 一 位置
- 一 学則
- 一 学院院长履歴書
- 一 教員氏名資格分任学科及専任兼任ノ區別

一 生徒定員

一 現在生徒学年及学級別員数

一 卒業生徒員数及卒業後ノ状況

一 経費予算

一 教科書目録

一 教授用器具器械及標本目録

一 校地校舎及寄宿舎ノ図面

沿革

明治十九年押川方義並ニ北米合衆国レフオームド、ミツ
シヨン宣教師ウイリアム、イー、ホーイノ二人同ミツシ
ヨンニ計リ基督敎伝道者養成ノ目的ヲ以テ神学予備校ヲ
仙台市ニ設立シ明治二十三年ニ至リ右予備校最初ノ卒業
者アルニ当リ神学校ヲ設立シ翌二十四年ニ至リ右予備校
ト神学校トヲ合併シテ東北学院ト称セリ而シテ同院ヲ神
学部ト普通学部トノ二部ニ分チ更ニ神学部ヲ英語神学部
邦語神学部ノ二科トナシ普通学部ヲ予科三年本科四年ト
ナシ全二十八年ニ至レリ全年六月ニ至リ普通学部ヲ尋常
中学ノ程度ニ均フシ更ニ文科専修部理科専修部ヲ加ヘ各
二個年ヲ以テ修業年限トナシ同三十六年四月ニ至リ之ヲ
三個年ニ改メル来神学部文科及普通科等孰レモ変更ナク

シテ今日ニ至レリ理科専修部ハ不幸ニシテ明治三十一年中一旦之ヲ廃セシト雖モ今後之ヲ再興スルノミナラズ更ニ進デ他ノ高等学部ヲモ漸次設立セン事ヲ期ス普通科ハ明治三十五年一月徴兵令第十三条依リ文部大臣ノ認定ヲ受ケ全三十六年九月専門学校入学者検定規定第八条第一号ニヨリ指定ヲ受ク全三十七年三月ヨリ神学部及文科専修部ヲ合セテ私立東北学「院」専門科ト称シ更ニ之ヲ私立東北学院専門科神学部並ニ私立東北学院専門科文学部ノ二部ニ分チ各部共修業年限ヲ三ケ年トナシ専門学校令ニ依リ文部大臣ノ認定出願中

私立東北学院憲法第二条目的

- 第一項 本学院ノ目的ハ基督教主義ニ基キ完全ナル普通教育ヲ授クルニアリ
- 第二項 聖書ニ基キタル基督教ニ従ヒ以テ德育ヲ授クルニアリ
- 第三項 基督教教師タランコトヲ希望スルモノ若クハ其他ノ職務ニ就カントスル青年ノ為メ更ニ高等ノ教育ヲ授クルニアリ

目的

第一項 本学院専門科文学部ハ専門学校令ノ旨趣ニ従ヒ

且ツ本学院憲法第二条ニ基キ高等普通科ノ學術ヲ授クルヲ以テ目的トス

第二項 本学院専門科神学部ハ専門学校令ノ旨趣ニ従ヒ且ツ本学院憲法第二条ニ基キ基督教宣教師ヲ養成スルヲ以テ目的トス

名称

本学院専門科ヲ私立東北学院専門科ト称シ之ヲ私立東北学院専門科文学部及ヒ私立東北学院専門科神学部ノ二部ニ分ツ

位置

本学院専門科ヲ宮城県仙台市南町通十三番地私立東北学院内に設ク

私立東北学院専門科学則

曩キニ差出シ置キタルモノニ同シ
 曩キニ差出シ置キタルモノニ同シ
 学院長履歴書

曩キニ差出シ置キタルモノニ同シ

			卒業生徒員数及卒業後ノ状況			
			卒業生徒総数 八十一名			
			内			
			本科卒業生(文学部第二学年修業生相当)二十五名			
			文科卒業生(文学部第二学年修業生相当) 十六名			
			神学部卒業生 四十名			
			卒業後ノ状況			
			本科卒業生二十五名ノ内訳左ノ如シ			
			一 本学院神学部ニ入り卒業シタルモノ 十四名			
			一 帝国大学文科大学ヲ卒業シ高等師範学校教員在職ノモノ 一名			
			一 米国シカゴ音楽学校ヲ卒業シ帰朝後東京唱歌学校ヲ設立シ校長在職ノモノ 一名			
			一 米国ミゾリーヴアレー大学カンパランド大学エール大学哲学研究科等ヲ卒業シ私立東北学院教授在職ノモノ 一名			
			一 中学校教員在職ノモノ 二名			
			一 官吏在職ノモノ 二名			
			一 東京音楽学校ヲ卒業セシモノ 一名			
			一 死亡 二名			
			二 不明 一名			
			二 文科卒業生十六名ノ内訳左ノ如シ			
			一 本学院神学部ニ入り卒業シタルモノ 五名			
			一 本学院神学部在学ノモノ 二名			
			一 中学校教員在職ノモノ 三名			
			一 官吏在職ノモノ 二名			
			一 実業ニ従事スルモノ 一名			
			一 外国語学校ヲ卒業シ高等学校教員在職ノモノ 一名			
			一 高等工業学校ニ入りタルモノ 一名			
			一 修業中ノモノ 一名			
			三 神学部卒業生四十名ノ内訳左ノ如シ			
			一 基督教宣教ニ従事スルモノ 二十一名			
			但内一名ハ米国ランカスター神学校卒業			
			一 中学校教員在職ノモノ 五名			
			一 本学院教授在職ノモノ 四名			
			但内一名ハ米国カリフォルニア州パシフィック神学校及エール大学研究科卒業			
			一 米国留学中ノモノ 六名			
			一 実業ニ従事スルモノ 一名			
			一 死亡 二名			

一不明

一名

私立東北学院専門科経費予算
 曩キニ差出シ置キタルモノニ同ジ

私立東北学院専門科文学部教科書目

近世史	中古及近世史	古代史	リーディングス、フロム、ゼ、ワヴァリー、ノーヴェルス	レッスンス、イン、イングリッシュ	スタデース、イン、イングリッシュ、リテレチュア	マスターピーセス、オプ、アメリカン、リテレチュア	マスターピーセス、オプ、ブリッツシユ、リテレチュア	荘子	詩経	唐宗八大家文読本	和文教科書	図書名	著訳者氏名	記巻冊ノ 号	文部省 検定済 年月日	発行年月日	発行者氏名	
アダムス	マイヤー	マイヤー	ブレースデル	ロツクワード	スウキンソン						深田康守		全一冊	全一冊				東北学院
全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊				
全千九百〇三年	西曆千九百〇三年	全千九百〇三年	全千八百八十八年	西曆千八百九十九年		西曆千八百九十一年	西曆千八百九十五年											
米国チャールズ、スクリブナーズ、ソンス	米国ギン会社	米国ギン会社	米国リー、アンド、シエパード	米国ギン会社		米国ホートン、ミフリン会社	米国ホートン、ミフリン会社											

私立東北学院専門科神学部教科書目

基督教 会歴史	基督教 倫理学	弁証 論	インス テチュ ー、オ ブ、ク リス チヤ ン、レ リジ ョ	旧約 聖書 神学	新約 聖書 神学	旧約 聖書 緒論	新約 聖書 緒論	エレ メン ツ、オ ブ、ヘ ブリ ユ	メソ ツド、 ア ン ド、マ ニ ユ ア ル	希臘 語新 約全 書	ニ ユ ー、 イ ン ト ロ ダ ク ト リ ー、 ニ ユ ー、 テ ス タ メ ン ト、 グ リ ー キ、 メ ソ ツ ド	旧約 聖書	新約 聖書
フキツ シヤ ー	マー テン セン	ブル ース	ゲル ハ ル ト	ベン ネ ツ ト	ア デ ネ ー	ラ イ ト	ド ツ ツ	ハ ー パ ー	ハ ー パ ー		ワ イ ド ナ ー 共 著		
全一 冊	自一 卷 至三 卷	全一 冊	自一 卷 至二 卷	全一 冊	全一 冊	全一 冊	全一 冊	全一 冊	全一 冊	全一 冊	全一 冊	全一 冊	全一 冊
全千 八百 九十 一年	全千 八百 八十 九年	全千 八百 九十 二年	西曆 千八 百九 十四 年	全千 八百 九十 五年		全千 八百 九十 一年	西曆 千八 百九 十年		西曆 千八 百九 十五 年		西曆 千八 百九 十五 年		
米 国 チ ャ ー ル ス、 ソ ン ス	米 国 テ ー、 ア ン ド、 ク ラ ー ク	米 国 チ ャ ー ル ス、 ソ ン ス	米 国 ア ー ム ス ト ロ ン グ、 ア ン ド、 ソ ン	全	全	全	米 国 ト マ ス、 ホ イ ツ ト カ ー	全	米 国 チ ャ ー ル ス、 ソ ン ス		米 国 チ ャ ー ル ス、 ソ ン ス		

鐵棒	一 台
木馬	一 脚
鞆	一 台
銃	三十 挺
背囊	三十 個
銃劍	三十 挺
革帶	三十 本
彈藥盒	三十 個
棍棒	二 組
フットボール	一 個
指揮刀	一 振

備考 各項記載ノ外当分教授上必要ニ応ジ便宜普通科ノ
分ヲ兼用スルモノトス

一 校地校舎及寄宿舎ノ図面
曩キニ差出シ置キタルモノト同ジキヲ以テ略ス
(県庁文書)

一〇三 D・B・シュネーダー書簡(パーソロミユ

一宛)

[英文]

(一九〇四年四月十四日)

一〇四 社団法人設立認可申請書類

(明治四十一年三月九日)

下名儀社団法人設立ノ件ニ付別紙ノ通願書提出致度候間
可然御取計相成度此段相願候也

私立東北学院設立者

仙台市東三番丁七十八番地

明治四十一年三月九日

デー、ビー、シュネーダー 印

宮城県知事 亀井英三郎殿

社団法人設立許可願

下名儀私立東北学院ヲ民法第三十四条及明治三十二年八月文部省令第三十九号ニ依リ社団法人トシテ設立致度候
ニ付御許可相成度別紙定款及資産ノ総額社員ノ員数等関

係書類相添此段相願候也

明治四十一年三月九日

私立東北学院設立者

仙台市東三番丁七十八番地

デー、ビー、シュネーダー 印

文部大臣男爵 牧野伸顯殿

私立東北学院定款

総則

第一条 本社团ハ民法ノ規定ニ從ヒ主務官庁ノ許可ヲ得テ社团法人トス

第二条 本定款ハ社員三分ノ二ノ同意ニ依リ主務官庁ノ許可ヲ得テ変更スルコトヲ得

第三条 本社团ハ社員四分ノ三ノ同意アルニアラザレハ解散セズ

目的

第四条 本社团ノ目的ハ

- 一、基督教主義ニヨリ完全ナル普通教育ヲ授ケ
- 二、聖書ニ從ヒ基督教ニ基キ以テ德育ヲ授ケ
- 三、基督教教師タラントスルモノ若クハ他ノ職務ヲナサント欲スル青年ノ為メニ更ニ高等ノ教育ヲ授クル

ニアリトス

名称及位置

第五条 本社团ヲ私立東北学院ト称ス

第六条 本社团ノ事務所ヲ仙台市南町通十三番地ニ置ク

資産

第七条 本社团ノ資産ハ現在ノ財産及本社团ノ目的ヲ贊成スル同情者ノ寄附ヨリ成レル動産不動産及此等ノ財産ヨリ生スル収入トス但本社团ノ目的ニ反スル寄附ハ一切之ヲ受ケザルモノトス

第八条 左ノ事項ハ社員三分ノ二ノ決議ニ依リ一、寄附又ハ買収ニ由リ財産ヲ取得スル事

二、本社团ノ目的ヲ成就セン為メニ財産ヲ貸シ又ハ売渡シ或ハ売上金ヲ管理シ又ハ支出スルコト

三、其他財産上ニ關スル一切ノ事項

第九条 本社团ハ基本財産ヲ設置スルコトアルベシ

第十条 本社团解散ノ場合ニ於テハ本社团ト其目的ヲ同フスル一個又ハ二個以上ノ法人ニ其財産ヲ有償又ハ無償ニテ譲渡スルコトヲ得

役員

第十一条 本社团ハ社員中ヨリ理事二名ヲ互選シテ理事會ヲ組織ス

會ヲ組織ス

第十二条 理事ノ任期ハ二ケ年トス但最初ニ選挙セラレ

タル理事ノ内一名ノ任期ヲ一ケ年トシ抽籤ニ依リテ之

ヲ定ム

第十三条 理事ニ欠員ヲ生シタルトキハ社員中ヨリ補員

ヲ選挙シテ未滿ノ任期中在任セシムルモノトス

第十四条 理事会ハ本社団一切ノ事務ヲ処理スルモノト

ス

社員

第十五条 私立東北学院理事局員タルモノハ本社団ノ社

員トス

理事局員タルノ資格ヲ失フトキハ之ト同時ニ本社団社

員タルノ資格ヲ失フモノトス

会議

第十六条 会議ヲ分チテ總會臨時会ノ二トス

總會ハ少クモ毎年一回之ヲ召集ス

臨時会ハ社員二名以上ノ請求アルトキ之ヲ開ク

第十七条 會議ヲ開カントスルトキハ開会五日前ニ會議

及其目的ヲ通知スベシ

予メ通知ヲナサハル事項ト雖ドモ社員三分ノ二ノ同意

アルトキハ通知ヲ為シタルモノト見做ス

第十八条 社員三分ノ二ヲ以テ出席ノ定数トナス

欠席セル社員ハ通信又ハ代理ニ由テ投票スルコトヲ得

資産及社員調書

一 資産総額現金壹千円也

一 社員 八名

左記ノ通

東北学院理事局員ノ氏名住所

仙台市東三番丁七十八番地

デー、ビー、シユネーダー

東京市牛込区横寺町五十番地

押川方義

仙台市光禪寺通五十九番地

ポール、ランバルド、ゲルハート

同市光禪寺通五十一番地

梶原長八郎

同市東三番丁七十八番地

アーレン、ケー、フアウスト

同市末無掃部丁四番地

出村悌三郎

東京市赤坂区氷川町五番地

ゼー、ピー、モール

仙台市東三番丁七番地
笹尾 条太郎

本基督教会ト北米合衆国レフオームド教会外国伝導^{マコ}
局トヲ代表スル当院理事局之ニ任ス

憲法

第五條 理事局

第一條 名稱

大日本宮城県仙台市ニ設立セラレタル当院ヲ東北学院

第一項 理事局ハ同数ヨリ成レル合衆国レフオームド
教会在日本宣教師ト著名ナル日本ノ基督教徒ヲ以テ

ト称ス

組織ス

第二條 目的

当院ノ目的ハ

但日本人理事局員ノ多数ハ日本基督教会會員タルベ
シ

其一、基督教主義ニヨリ完全ナル普通教育ヲ授ケ

第二項 理事局ハ自統体タルベシ

其二、聖書ニ從ヒ基督教ニ基キ以テ德育ヲ授ケ

第三項 理事局員中有害ナリト認定セラル者ハ多数
ノ投票ヲ以テ除名スベシ

其三、基督教教師タラントスルモノ若クハ他ノ職務ヲ

第四項 学院ノ利益ノ為メ功勞アル人ハ之ヲ名誉局員

ナサント欲スル青年ノ為メニ更ニ高等ノ教育ヲ授ク

トナスコトアルベシ

ルニアリトス

第三條 部門

但名誉局員ハ投票ノ權ナシ

当院ヲ左ノ二部ニ分ツ

第五項 局員総員ノ三分ノ二ヲ以テ満数トス

第一 普通科

第六項 憲法ノ修正ニ関スルコトヲ除キ諸ノ議題ハ出

第二 専門部

席員ノ多数ヲ以テ決ス投票同数ナルトキハ局長裁決

専門部ニ文科及神学科ヲ有ス

ノ權ヲ有ス

第四條 管理

第七項 理事局ノ通常年会ハ東北学院ノ卒業週間内ニ

第一項 東北学院ノ管理ハ内外人協同ノ精神ニ基キ日

開クモノトス

第六條 理事局ノ掌務

理事局ノ掌務ハ左ノ如シ

第一項 当院ノ教職員ヲ任免シ之ニ関スル諸般ノ規則ヲ制定シ諸教員ノ担当学科ヲ指定シ毎学年ノ始ニ於テ各級級長及神学委員ヲ任命シ及其他ノ職員及委員ヲ任命スルコト

第二項 教職員及諸雇ノ俸給ヲ定ムルコト

第三項 各部門ノ科程ヲ定ムルコト

第四項 入学出席行状試験評点月謝図書寄宿舎宗教諸式及第二条ニ記載セル本院ノ目的ニ協フ施政ニ関スル諸規則ヲ定ムルコト

第五項 卒業生ニ卒業証書ヲ授与スルコト

第六項 新二部門若クハ科ヲ設クルコト

第七項 当院ノ会計事務ヲ監督スルコト

第八項 貸費生ノ費額ヲ定ムルコト

第九項 当院一切ノ財産ヲ管理シ及当院ニ必要ナル校舎寄宿舎及ヒ其他ノ建物ノ増営ヲ監督スルコト

但シ増営費ノ多分ヲ合衆国レフオームド教会外国伝導局ノ寄附ニ仰グ場合ニハ建物ノ設計及其費額ハ之ヲ該伝導局若クハ該教会在ミツシヨンノ協賛ヲ經ベ

キモノトス

第十項 法人トシテ東北学院ノ所有セル一切ノ財産ヲ

基督教的教育ノ為メニノミ使用スルノ委任ヲ完フスルコト

第七條 理事局役員

第一項 理事局役員ハ局長及一名若クハ数名ノ書記及會計トス

第八條 理事局役員ノ職務

第一項 局長ハ理事局ノ通常及臨時会ノ議長トナリ特ニ北米合衆国レフオームド教会外国伝導局ニ対シテ当院ヲ代表シ且ツ毎年同局ニ報告ヲナスモノトス

第二項 書記ハ理事局一切ノ議事ヲ精密ニ記録スベキモノトス

第三項 會計ハ当院教職員ノ俸給建物土地修繕書籍理化機械貸費及經常費ニ対スル金錢ノ出納ヲ司トリ且會計年簿ヲ作り理事局年会ニ報告スヘキモノトス

會計簿ハ何時ニテモ局員ノ要メニ応シ閲覧ニ供スヘシ

第九條 総務員

当院ノ総務員ハ院長部長及幹事トス

第十條 総務員ノ職務

第一項 院長ハ教授会ノ議長トナリ当院各部ノ規則ヲ

施行シ公衆ニ対シ当院ヲ代表シ凡テ公会ヲ司ドリ当院ノ情況進歩及需要ニ関スル年報ヲ理事局ニ出スモノトス

第二項 部長ハ院長ノ指揮ニ従ヒ左ノ事項ヲ施行スル

モノトス

第一 担任部ノ授業ヲ監督スルコト

第二 院長ヲ補佐シテ規則ヲ施行スルコト

第三 担任部ヲ総管スルコト

第三項 幹事ハ左ノ事項ヲ施行スルモノトス

第一 生徒ノ学籍出席成績ニ関スル諸般ノ事件ヲ管理スルコト

第二 諸官省ニ対スル必要書類ヲ整理スルコト

第三 諸官省ニ対スル報告ヲ掌ルコト

第四 当院ノ庶務ヲ総管スルコト

第十一条 特務員

第一項 掌書ハ理事局ノ規則ニ従ヒ図書室ノ事務ヲ管

掌シ又年報ヲ作りテ理事局ニ提出スルモノトス

第二項 理化室及博物室主管ハ機械及標本ヲ管理シ其

目錄ヲ製シ之ヲ保管シ又年報ヲ製シテ理事局ニ提出

スルモノトス

第十二条 教授会

第一項 教授会ハ院長部長幹事及教授ヨリ成ル嘱托教授講師及助教教授ハ教授会ニ連リテ発言権ヲ有ス但シ投票権ナキモノトス

第二項 毎学年ノ始ニ於テ理事局ハ教授中ヨリ各級ノ

級長ヲ撰定ス級長ハ院長並ニ部長ト生徒トノ間ニ立

チ両者ノ意見ヲ相疎通セシメ且ツ生徒日常ノ操作ヲ

監督シ傍ラ学生ノ学業及操行ニツキ報告スルモノト

ス

第三項 毎学年ノ始ニ於テ理事局ハ専門部教授中ヨリ

数名ヲ撰ビ之ニ院長及部長ヲ加ヒテ神学委員トナス

同委員ハ憲法ニ従ヒ神学科志望者及同科生徒ノ精神

的資格ニ関スル諸件ヲ定メ且ツ入退学及懲罰ノ權ヲ

有スルモノトス

第十三条 教授会ノ掌務

教授会ノ掌務ハ入学ヲ許可シ懲罰ニ関スル重要ナル諸

件ヲ処理シ停学若クハ退学ヲ命シ試験ニ及第セルモノ

ニ卒業証書ヲ与フルコトヲ理事局ニ推薦シ及ビ授業ニ

関スル諸件ヲ定ムルモノトス

第十四条 基本金

東北学院基本金元金ハ基本金トシテノ外決シテ使用ス

ルコトヲ得ス

第十五条 憲法ノ修正

憲法ハ各理事局員ニ三ヶ月以前ノ通知ニヨリ同局年会ニ於テ局員三分ノ二以上ノ投票ヲ以テ之ヲ修正スルコトヲ得但シ基本金ニ関スル条項ハ決シテ変更スルコトヲ得サルモノトス

私立東北学院ヲ社団法人トシテ設立致度趣ヲ以テ別冊設立許可願全院設立者事デ、ビー、シユネーダーヨリ差出候処不都合ノ廉無之様被認候間及進達候也

明治四十一年三月十一日

仙台市長 和達孚嘉 印
宮城県知事 亀井英三郎殿

内務部長 教育課長 課僚 印 印 印
知事 印 主任 属 宮城寅蔵 印

年月日

文部大臣宛

法人設立許可願進達

本県私立東北学院ヲ社団法人トシテ設立致度故ヲ以テ許可出願ノ処右ハ事実ニ於テ不都合無之認メ候ニ付別紙及進達候也

(注・明治四十一年三月十九日付)

内務部長 印 教育課長 印
知事 印 主任 属 宮城寅蔵 印

私立東北学院ニ関シ民法第三十四条ニ依リ社団法人設立許可ノ件

右許可指令書ハ左ノ添書ヲ付シ交付可然欵

(写)

文部大臣官房文書課 申宮専八〇号
社団法人私立東北学院設立者

デ、ビー、シユネーダー

本年三月九日付願社団法人私立東北学院設立ノ件民法第三十四条ニ依リ許可ス

明治四十一年五月一日

文部大臣男爵 牧野伸顕 印

(添書)

年月日

仙台市長宛

内務部長

社団法人設立許可ノ件ニ付通牒

本年三月十一日仙台学第五三五号ヲ以テ御進達相成リタル社団法人私立東北学院設立ノ件別紙ノ通許可相成候ニ

付設立者へ交付方御取計相成度尚右ニ関シテハ明治三十二年八月文部省令第三十九号法人ノ設立及監督ニ関スル規程第三条ノ報告ハ遲滞セザル様予メ御示達相成度為念此段及通牒候也

追テ法人ノ登記ハ法定期間ニ於テ履行スベキ儀ニ付可成速ニ交付候様御取計相成度此段申添候也

理由 規程第三条(抄録)

法人ハ其設立ノ許可ヲ得タルトキハ左ニ掲グル事項ヲ遲滞ナク地方長官ニ報告スベシ

一、定款又ハ寄付行為

二、理事及監事ノ氏名、住所

三、財産目録及社団法人ニ在リテハ社員ノ員数

民法第四十五条(抄録)

法人ハ其設立ノ日ヨリ二週間内ニ事務所ノ所在地ニ於テ登記ヲ為スコトヲ要ス

〃 第四十七条(抄録)

登記スベキ事項ニシテ官庁ノ許可ヲ要スルモノハ其許可書ノ到達シタルトキヨリ登記ノ期間ヲ起算ス

(注・明治四十一年五月五日付)

(県庁文書)

明治四十一年五月十四日院長室(専門部)ニ於テ年会ヲ開ク會員定数ニ充ツ、モール氏開会ノ祈禱ヲナス
院長 モール ゲルハート 笹尾 梶原 出村諸氏出席

(中略)

八、東北学院ヲ社団法人トナスノ願認可セラレタルヲ以テ明治四十一年五月〇日現理事デー、ビー、シュネーダー 押川方義 ポール、ランバート、ゲルハート 梶原長八郎 アルレン、ケー、ファウスト 笹尾糸太郎 出村悌三郎 ゼー、ピー、モールノ八名ヲ以テ東北学院社団ヲ組織スルコトニ決ス
午後五時閉会

書記 出村悌三郎誌

(理事會記録)

一〇五 東北学院二十五年の歴史

(明治四十四年七月十二日)

過去二十五年 母校東北学院の發達史

緒言

今より二十五年前、木町通の片ほとりに、わづか二人

の先生と四、五人の弟子とを有せる一小私塾の姿にてあらはれ出でたる仙台神学校が、今日、市内の中央部に練瓦造の宏壮なる校舎を二つまで構へて為政者の信用もあつく、世間の同情も深く、諸方面に於ける卒業生の成績も良く、三十の教師と四百に垂んたる生徒とを有する盛況を呈するに至れるを見る時は、誰か其の進歩の大なるに驚かざるものあらんや。欲を言へば、望蜀の嘆はなほ多かるべきも、官営にもあらず、営利事業にもあらずして、斯くまで発達し来れるは、先づ以て成功と言はざるべからず。さればとて、其の成功は決して順風に帆を上げて進むが如きものにはあらざりしなり。過去二十五年、その間神の前に流されたる義人の涙そもいくばくなりしか、就中創立者押川ホーイ両師の苦心、また其の後継者シユネーダー師の尽力は、真に何程なりしか、到底誰人にも想像することすら能はざる程なるべし。東北学院の今日ある、実に此の三師の至誠至情が神前に達せる結果なりと言ふのほかなからん。蒔かれたる種子が、空の鳥に啄み去られもせず、荆棘のために蔽がるゝこともなくして、善き地にかたの如く成長するにしても、之を蒔く時の苦心と之を培養する辛労とは、中々並大抵のことはあらざるなり。いま筆を執りて母校発達の歴史を叙せ

んとするに当り、先だつものは唯感謝の涙あるのみ。

一 仙台神学校の創設

東北学院なる名称と共に聯想せらるゝは、其の創立者押川方義、ウイリアム、イー、ホーイの両師なり。押川師は伊予松山の人、明治の初年藩命により出で、東京に学び、のち英学研究のため横浜に転じて、米国宣教師バラ、ブラウン諸氏の薫陶を受くるうち何時しか基督教を信じ遂に意を決して一身を斯道に捧げ、以て愛する日本国を真の救に導かんとするに至れり。其後越後新潟に赴きて伝道に従事すること四年、その間英人パーム氏と寢食を共にし、心交頗る厚く、得る所また尠からざりしが、同氏の勧告と奨励とにより、更に伝道の範圍を拡大せんがため東北の地に移れるは明治十三年の事なりき。爾後二三の同志と共に仙台を中心として宮城山形福島の各地に運動を開始し、燃ゆるが如き熱心を以て伝道に従事し居られしが、如何にかして多くの伝道者を得、また基督教主義によつて青年男女を教育すべき学校を興さんとの希望は常に先生の胸に往来し、切に此事を神に求め居たりしなり。当時先生は就^レれの教派にも属せず、全く独立なりしが伝道の門戸次第に開くるに從ひ、外国宣教師と協力同労の必要あることを切に感じ、之が為め明治十八

年の冬上京し、端なくも米国ゼルマン、レフオームド教会伝道局より派遣せられ、新に来朝せるホーイ先生と会し、双方の意気全く投合し、相提携して共に東北開発に従事することとなれり。ホーイ先生は北米合衆国ペンシルヴァニア州の人、ランキヤスター大学を卒業の後志を立てて将に日本伝道の途に上らんとするの時、一夕友人と種々物語の次に『ホーイ君、君は日本に赴かば、カレヂ又は神学校を建つる心算ならん』と問はれしが、この一言は宛かも豊饒なる土地に種子の落ちたる如きものにして、ホーイ先生の胸中には、此時すでに学校設立の決心確く定まれるなり。而して日本渡航中も船中にて常にミツシヨンスクールを設くることにつき考慮を廻らし居られたりと云ふ。押川先生の希望とは、まことに期せずして相会したるものと云ふを得べし。

両先生の東京に於ける初対面は十八年十二月一日の事にして、翌十九年早春より学校設立の計画に着手せり。此時香味ちか子（今日も尚存命す）といふ一人の寡婦此事を聞き、己が老後のために貯へ置ける銀子十二片を贈りしかば、両先生は之がため激励せられ、先づ伝道者養成所を建つことに決し押川先生は使命を感じて起てる六人の青年を集め、ホーイ先生は之が学資支給を一身に

引受け、木町通に陋屋を賃借して校舎にあていよく、此年を以て開校の運びに至り、仙台神学校と名づく。

二 学制の変遷と校舎の発展

明治十九年六月を以て開校せられたる我が仙台神学校は、一小塾の如きものにして、教ふるものは僅かに押川、ホーイの両先生に過ぎず、学課の如きも只聖書講義と時々精神講話のみにして今日の如く授業時間に一定の制度なく、午後は大抵力を角して心身を練り、元氣旺盛当たるべからざるものありき。後暫くにして東三番丁（現今宮城女学校敷地）に転じ、更に当時仙台教会が礼拝所として新たに買入れたる東二番丁本願寺別院内に移転して授業を継続せり。当時押川先生は伝道の為め屢々各地に旅行し不在勝ちなるに加へ、ホーイ先生は精神過勞の結果健康を害ひ、授業にも支障を生ずることも少なからず一時頓挫の姿なりしが、翌二十年の秋に至り前途に希望の曙光を認めらるゝに至りぬ。そは北米合衆国レフオームド教会外国伝道会社が此神学校に同情を表し一切の経費を寄附することとなり、維持上僅かに後顧の憂を免かるゝに至りたるが故なり。超えて二十一年一月現院長デー、ビー、シュネーダー先生の渡来するあり、之と相前後して藤生金六氏を教授として迎へ、茲に我神学校

は新勢力を加へられ、希望と喜悦を以て幾多の困難と戦ひ次第に発展の緒に就きぬ。間もなく仙台教会に隣りし南町通一帯の敷地を購入し、ジロン、オールド記念寄宿舎を建築し其一部を割きて教室となしたり。此建物は現

第一寄宿舎なり。此頃に至りて生徒の教実に二十有八名に達し教室の狹隘を感じるに至れり。当時邦語にて著述せられたる神学哲学等の書籍も少なく、且つ訳語の如きも一定せるものなく、教授に不便を感じる事多かりしかば授業には、殆ど全部英語を使用したり。此時に至りて学校の体裁稍々整ひ、押川氏校長となられたり。翌二十二年ジエーラス、ピー、モール師山形より移りて教鞭を執ることとなり、他に有力なる日本人の教師数名を加へられ、生徒の數も次第に増加したるが、其内には誤れる動機より入校したるものもあり、不幸中途にして除名処分を受くるもの數名に上りぬ。かゝる悲しき事件の内にも学校は設立者と教師の協力によりて着々進歩を見、二十三年に至りては英語、邦語の兩神学部設けられ、英語神学部には故金成兵助、島貫兵大夫の二名、邦語神学部には佐藤庸男、猪股普平、故橋本経光等編入せられたり。同年現専門部の煉瓦造の校舍建築に着手し翌年完成す。其資金の如きは日本に於ける同情者と外国伝道会社の出

金にかゝるものにして、押川、ホーイの兩先生の苦心奮闘は名状すべからざるものありしなり。かの亭々として高く聳ゆる赤煉瓦の五層楼は、沈黙の内に永く兩師の献身性を語るなり。

全二十四年の七月組織を更へ東北学院と改称し、舊に神学生のみならず、広く生徒を收容し、高等普通学を授くることとなり、予科三年本科四年となし更に神学部三年を置く。九月に至りて新校舍に移りて授業を開始するの運びに至れり。九名の教授と六十八名の生徒とを有する隆盛を見、今やまた昔日の神学校にあらず。

全二十五年八月に新に理事局を組織し学院全般の管理をなすこととなり、押川、ホーイ、シュネーダー、藤生の四先生其局員に挙げられ、而して押川先生院長に就任す。全年十一月十八日盛大なる開院式を挙行す。全二十八年文部省規定の組織に近からしめんが為め、普通科を設け尋常中学校と程度を同ふし、之に文科専修部、理科専修部を加へ各二ヶ年を以て修学年限となす。理科は不幸にして三十一年に至り廃止の止むなきに及びぬ。然れども概観すれば院運次第に発展し来り、前途頗る有望の觀あり。

吾人は茲に筆端を正うして、我学院が遭遇せる数年に

渉る一大困難の時期を述することゝなれり。乃ち外には二十七、八年の日清戦役後私立学校殊に宗教学校の圧迫の影響を蒙るあり、内は押川院長朝鮮指導経営を目的とするの大日本海外教育会を創立し、不在勝なるあり、加之ホーイ先生は健康を害せられ三十二年本院を辞して清国に転任し湖南省宜昌に求進^(新)学堂を興し伝道教育に従はるゝこととなり、更に三十四年に至りては、押川先生亦一身上の都合を以て院長の職を辞して東京に移らる。かくして二大光明を失へる我学院の前途には、暗雲深く閉し頗る憂慮すべきものありしなり。然りと雖も押川先生を起たしめ、ホーイ先生を送り、創立以来十有五年の間優渥なる指導を与へ給へる奇しき撰理の御手は、シュネーダー先生を撰びて院長の椅子に就かしめたり。起業的人物たる押川、ホーイ両先生の後を継がれたる現院長は実に好個の経営的人物なり。創立者の精神をつぎ、熱烈なる信仰と周到なる用意を以て、銳意院運の發展を勉む。今日の隆盛先生に俟つこと亦大なりと云はざるべからず。

全三十五年一月普通科は徴兵令第十三条に依り文部大臣の認定を受け、全三十六年六月専門学校入学者検定規定第八条第一号に依り、文部大臣の指定を受け漸く面目

を一新するに至れり。全三十七年組織を改め二部となし、普通科を分立せしめ、更に文科専修部及神学部を合せて専門科と称し、更に之を文学部並に神学部に分ち各修業年限を三ヶ年となし専門学校令により文部大臣の認可を受け、全年四月徴兵令第十三条に依り全大臣の認定を受ける。全三十八年六月専門科を専門部に文学部及神学部を文科及神学科と改称す。

此頃に至り生徒の數実に三百五十有余名に上り、教員も亦三十名を數ふるの盛況を呈し、従来の校舎並に敷地は甚たしく狭隘を告ぐるに至りたるを以て、旧校舎を去る約二丁東二番丁北目町通角に一大敷地を購入し、三十七年六月を以て普通科新校舎の建築工事に着手し、翌三十八年九月に至り竣工す。中学校程度の学校として壯麗全国に其比を見ず。東北の一偉觀と称する者あるも亦過賞にあらざるべし。

全年十一月二十二日より全二十五日に涉り盛大なる普通科校舎落成式を挙行す。音楽会、大演説会を催し深き印象を市民に与へたり。更に同地内に普通科寄宿舎を建築し翌三十九年四月完成を告ぐ新校舎新寄宿舎は内外人の多大の同情によりて成りしものなりと雖も、此間に於けるシュネーダー院長の苦心実に名状すべからざるもの

ありしなり。

全四十一年本院理事局員を以て組織せる、私立東北学院社団法人設立の件認可せられ本院の財産は該社団に於て之を保管する事となれり。

今日に及びては教授上諸般の設備殆ど間然するところなく、専門科、普通科の両科を通じて三百五十余の生徒孜孜研学に余念なし。創立以来二十五年間に卒業生を出す事実には三百余名亦尠しと云ふべからず。

〔後略〕

（『東北文学』創立滿二十五年記念特別号 明治四十四年七月十二日）

一〇六 創立二十五周年記念式における院長式

辞と本多庸一の講演

（明治四十四年五月十七日）

院長 式 辞

東北学院は初仙台伝道者養成所と云ふ名称を以て明治十九年に当市木町通に設立されました。

其の時から本年度丁度二十五年になりますので此処に

其の創立二十五年記念祝賀会を催す事となりました。本校が此の祝賀会を催す目的は何であるかと申せば是れに依つて、先づ第一に、吾々は本校の過去二十五年の歴史を回顧し、而して、其の歴史が何の辺まで成功を示して居るか、又如何なる点が失敗を警告して居るかを、研究する為で御座います。

第二は、其れに依て本校が過ぐる二十五年の間に爲しました成功に対して、感謝の意を表せんが為で御座います。

此の感謝を先づ第一に総ての善行の内に働き給ふ我が上帝に対して、捧げなければなりません、何故なれば本校の二十五年間の歴史に頭はれて居る高尚なる目的や、篤き愛心や、尊き献身犠牲は皆是れ全能の靈に依つて励まされた結果に外ならないからで御座います。

其の次に、本校は又其の二人の創立者に対して、感謝を表さなければなりません。彼等が本校を設立するに當つては、深かい思慮と、大なる犠牲を払はれたのみならず、彼等は多年本校の爲めに尽瘁せられ、之れに貴とき精神を与へ、其の向ふべき方針を確立せられたのでありますから彼等に対しては殊に感謝に堪へない次第で御座います。本校はまた文部省に対して謹んで謝意を表する

のであります。過る十年間文部省より与へられました多大の便宜と奨励とは我等の誠心より感謝して措く能はざる処で御座います。

次に又、宮城県庁よりは常に深かき同情と厚意を頂いて居ります。是れは本校の誠に感謝に堪へざるところで御座います。

此処にまた本校に対して常に温かい同情を有し援助を惜しまれざる多くの朋友諸氏に対して篤く感謝致します。亜米利加に在る個人及びレフオームド教会の外国伝道局も其の中に入れなければなりません。次に本校は又、現在の教職員並びに曾て本校の為に尽された、多くの忠実なる教職員に対しても感謝を表します。曾て尽して下された職員諸氏の中には已に永眠に就かれた方もあり、又目下外の処に奉職して居られる方もありますが、何れに対しても深かい感謝の記憶を抱いて居ります。終りに臨んで、現に本校に在学中の生徒諸氏並びに曾て在学せられた多くの忠実な校友に対しても感謝を表します。

是れまで本校に籍を有した生徒の数は殆んど二千人であります。其の内には実に世界に恥ぢざる誠実な青年が少くないのであります。是等の青年は真に本校の生命と申すべき者で、吾が校に取つて多大の奨励を与へて居

るので御座います。

若し本校が其の使命の幾分を果す事が出来たとすれば、斯かる校友の誠実があづかつて大に力あつたと断言しなければなりません。

此の祝賀会の第三の目的は更に又新しい決心を固める為で御座います。本校は今迄此の東北地方の為に又全日本の為めに忠実に尽す処あらんとして、已に數百人の青年に対し、成る丈善い教育を与へる様に力めて参りましたけれども、吾々は此の大切な機会を利用して、更に我等の決心を改めたいと思ます。吾々は従来よりも尚ほ一層本校の主義を実現し其の教授法や設備を完全に、其の範圍を広くし、国家の教育制度に一致し、最も實力に富む、最も徳の高い、最も理想や目的の高尚な人物を成る丈け数多く日本の為めに養成したのであります。そして是等の事を今迄よりは一層篤き熱誠、強き努力、一層親密な一致、一層偉大なる規模に依て為し遂げたいので御座います。

此の創立二十五年の祝賀会の目的は即ち是に外ならないので御座いますが、若し此の目的に就て又本校の将来の働きに就て我々が天父の祝福に加へて今此の式に御参列下された方々、其の外多くの朋友諸君の御贊助と御同

情とを蒙る事が出来るならば、其は本校にとつて此上も無い幸で御座います。

本多先生演説大要

司会者、教師諸君並に生徒諸君、及來賓諸君

今日は特別なる御招待を受けて、此の盛なる祝賀会に臨みまして、真に光榮に存ずる処であります。

顧みますれば、今より二十五年の昔即ち、明治十九年の夏、私は郷里弘前を辞して、仙台に参りまして本院創立者なる、押川君と横浜訣別以来の、旧交をあたくめ、且つはホーイ氏と親交を結びました。押川君とは、明治十九年に仙台に於て親しく手を取りて、伝道の労を共に致しました、押川君は元四国の生れで、御客分で御座います、私は東北生れのもので御座います、自分の生れたる、東北第一の都会に來まして、身を委ねて伝道する事が、私に取りて真に愉快の事で御座いました、押川君は私よりも、古い人でありますから、指導を受けて自分の事業を始めました。

扱て東北学院の事を考へまする今日は真に、御芽出度い事である、何事でも、物と云ふものは始めから芽出度いものではない、其の始めには、必ず多くの涙があるも

のです、然し其の涙が、そもくの始めをなすものであります。

私は奥州弘前生れのものでありまして、此処より百里以北の地であります、押川君は此の地に伝道並に教育を始め、高等教育を施さんと云ひ出しました、十九年に参りました頃は、愈々其の盛なる有様を見たいと思ふて、來たのであるが、果して色々計画がありました、而して其れが、段々と事実になりつゝありました、処が豈図らんや、此処に大競争者が現はれました、其れは、外よりではなかつた、同志社の新島君が主唱となりまして、清水小路に、東華学校なるものが設けられました、富田鉄之助君が日本銀行に、千係ある人でありまして、此人が経済界に重きをなして居つて資力を助けたので、中々有力なものでありました、押川君もこれには頗る閉口して居られたが、其学校は見る間に成功したのであります。

同じ順列の中から、一番槍を付けられたので残念至極に感じた、腹の中から吾々は二本差で生れた身であればまことに辛い思ひをした、然し乍ら大体に於て同主義の教育を施すのであるから感情を抑へて出来るだけ賛成した、是れ実に興味ある問題でありました。

今日は廿五年目にして新島君は既に歿し、東華学校も今や無し、而して一番槍を付けられたる東北学院が今日この盛大なる祝賀会を開いたのである、何の悦か是に若かんやである、吾々は真情より喜ばしい、諸君定めし満足でありませう、私は儀式的には局外者であるが樂み溢れて天に謝せざるを得ない、昨日押川君と老書生が二人轡をならべて此処に來り、祝賀会に臨みて祝辞を述べるのは光榮是に優るものがない。

二十五年は長いといへば長いもの、短かいといへば短かい、長いといふ方が責任がある、男一匹生れて廿五歳にもなれば、立派な事業をなす、是れ成功をなすの頃である。

私は近頃伝道界のことを考へて見たが、今は伝道本戦の時機である、即ち奉天戦争の時機である、教育も準備の時にはあらずして、勝敗を決すべきの時機である、明治五年以来色々の政治に由りて、政府も民間も今や疲れて居る、今日ほど切迫した時機はない、そして飛行機が出来たが発動機がまだ出来ないともいふべきであらう、向上的教育はあり。即ち飛行機はある、が然し中々上に向つて飛ばんのだ、如何でありませう、日本の道徳は四十年昔のそれと比べて果して何れほど進んで居るか、直

ちに首肯が出来ない、私は敢て言はん、巾が広くなつたが、厚さが無い、薄くなつた故飛び易いかも知れない、発動機なくして何うして飛べませうか。

文明の病を見て健全の思想を頻りに説く今日、漸く為政家は宗教論を称へ出した、祖先を拝せよ、敬神の念を養へよといふに至つた、政治家が倫理道徳に目を付けて来たのは賀すべきことである、処が今申上げた発動機がなければ不可ぬ、慎独の間に力を養ふことになつて来たのは今日の状態であります。

茲に於てか本学院の今日の成功を祝せざるを得ない、本学院の使命は何ぞや、といふならば言ふまでもなく倫理道徳に発動機を据える目的で存在して居る、或人から見たら飛行機の出来ない中に、発動機が据付けたのだと笑はんも、始めから発動機に眼を付けて居たのである、満堂の生徒諸君は私と同意見でありませう、諸君は此発動機を充分に仕上げて見せて下され、そして何時でも使つて見よといつて貰ひたい、偶には怪我する者もあるであらう、失敗しても構はんよ、交るゝ乗るべしだ。

我帝国臣民の倫理道徳の動力、即ち飛行機の発動機は、健全なる有神思想である、唯一の神に在まして人格を備へ、智慧と力と恩恵に充てる天なる神を信じて、始めて

倫理道德は進歩するのであります。東北学院は此根本精神に着目して其使命を果さんとして居る、基督教には特別な数学も地理学もない、が然し唯其腹の中に此倫理道德の発動機があれば万事が成功するのである、願はくは此発動機を有つて天に向上せられたいのである。(文責記者にあり)

『東北文学』創立滿二十五年紀念特別号 明治四十四年七月十二日

一〇七 創立二十五周年記念感謝会における押

川方義の講演

(明治四十四年五月十八日)

今日は色々、有益なる話を本多君や服部君にきゝまして、東北に身を委ねて伝道するのは貧乏籤を引きあてたものであると云ふ事をきゝましたが何んぞ謀らん自分、此の東北の地をして日本のスコットランドたらしむる覚悟である、決して貧乏くぢとは思はない。大学の予備校であつた開成学館には菊地大麓君などが居たが、自分も生れて来た以上は、どうにかして一度は、西洋に学

んで見度い、それで一年だけは語学を研究しようと横浜に行つたのが、基督教をきいたそもくの始めであつた。成る程、当時の人々の腰に瓢箪をぶら下げたのが西洋人には頗る妙に思はれたであらう然し善悪正邪の精神の旺盛であつたことは世界中で一番早いものである。之れが三百年來の封建の精神の堂々たるものであつた。横浜に来て、西洋の事情を見聞して偉く感じた。時には三国史を読んで諸葛孔明の誠忠に泣いたこともあつたが、成程、今基督教で云ふ様な罪と云ふ様なものは無かつたかも知れない。

そうして居る内に、英語をバラと云ふ人に就て学んだ。自分は如何にもしも泰西文明の真髓を知りたいものであると思ふた。何ふにかして此の所思を貫徹せんと自ら天道に誓を立てた。一片の赤心は確かにあつた。罪と云ふ觀念は旭日の東天に登り来るが如く、益々自己の意識に明かになつて来た。罪を恐るゝのあまり、臆病者になるのが宗教学校の御陰であると云ふたが、臆病者になると否とは論外とし、兎に角罪を恐れると云ふ様になつたのは、実にキリストの心が吾人の心に入つたものである。或る時バラ先生が祈禱の中に、『吾国』と云ふ言葉を聞えた、嗚呼実に彼れの熱誠は、自國語と外國語とを

混同するほどであつた。自分は此の熱誠に動かされ真から心を改めた。彼れの声は自分に對し、ボーロの所謂天来の声だつたのである。自分は天父の僕となるに及び、此所に始めて西洋文明の真髓は此の点に存することであると心の奥底に一種異様のひらめきが輝いた。実に此事こそ、己れを救ひ人をも救ひ得る所のものであると思ふた。斯く決心するまでは随分名譽心もあつたものです。藩中には偉い人が居つた。馬上悠々吾輩の前を通過した時などは自分も天晴軍人となつて大に振つて見たいものであると思ふた。當時を追想すると実に自分はアンピシヤスボーイであつた、今も猶ほアンピシヤスである。

今朝は母の墓参をして来ましたが彼の女は私にとり善良なる人であつた。或時自分は外から空腹で帰つて来て入るや否や、何か呉れと食物をネダツタ、母と云ふのは立派に家名を守る人であつた、父に對しては極めて忠実に務めた人で、実に日本の婦人は斯くまでも謙遜忠実に其の良人に待くまちものであるかと、小供心にも深く、感じた。自分は斯かる母に對し、子供心の頑是なきには母の心も知らないで、空腹のあまり何か呉れと声を立て、ネダツタ。今自分は諸君の前に云ふことを憚るものであるが、自分の家は決して身分の卑しい者ではなかつた。

此の時恰度母は機を織つて居たが母は『坊や此所へ御出で、おまへは御腹が空いた位のことで大声立て、叫ぶとは、何と云ふさもしい心ぢや、御父様のことを忘れてか、御前はそんなさもしい心でどうする家の恥と云ふことを思はぬか』と私を背に負ふて再び織り初めた。嗚呼自分は此の時、母が淳々と説き諭されたこと追懐し、軼た斷腸の思ひに堪えぬものである亦国に居る私の幼い時分に悪者の朋輩が居た、此奴は神に献じた賽錢まで巧に盗むと云ふ奴であつたが、或時此奴は自分をそゝのかして共に悪事をなさんとした、嗚呼若し余の母なかりせば、或は自分も此の悪事に組したかも知れぬが、前述の如き母に教育せられた自分は如何にして此の悪事にくみする事が出来よう、自分は如何なる愛き目に遇はせらるゝとも断じてくみせずと決心し、遂に其の悪事に加らなかつた。家に帰るや始終の事を母に告げた、母は大に喜ばれて、温き手をもて私を抱かれた、其の温き手の今も猶自分の記憶に鮮かである。

自分は斯かる恩愛に満つた母を持つて居たが、吾等の主なるクリストの愛は、此の母の愛をしも捨て去らしむるに至つた。嗚呼如何にクリストの愛の偉大なるかよ。自分は馬屋の草とり、便所や室の掃除をしながらクリス

トの事を学んだ、而して自分はミツシヨンスクールの補助を五ヶ月間だけ受けた。此の時分のことであつた、或る先生が教会建設のとき、ハワイの信者は献金したが、日本の学生は補助を受けて居ながら献金をせぬと云ふことを云はれた、自分は此のことを聞いて非常に恥辱のこゝと、感じ速かに、補助を受くることを拒絶した。此の時は、また伝道心が非常に盛んなものであつたが、此の頃のことと面白い話があつた。其れは、自分も伝道心勃勃として禁ずること能はず、此の旨をブラウン先生に申出た、すると先生は『農夫が苗代に種蒔するとき籠にどつさり種を満たして居るべき筈ぢやが、伝道と云ふのも種蒔きと同じ事ぢや、御前は御前の籠の中に何を持つて居るか、何も持つて居ないで種蒔が出来るものでない、伝道々と云ふけれども、一体御前は御前の籠の中に何を持つて居て何を人に与へるつもりか?』と自分等の逸る心を何時も、斯かる談話を以ていましめられたものであつた。

此のごろ新潟で伝道者に不足を告げて居るが、誰か手伝へに来る人はないかと教会で云ふ人があつた、そこで自分は私をやつて呉れと申出た、自分はどうせ基督のために死なんと決心した身である、新潟に行つて如何なる

迫害に遇はふが、基督のためと思ひば何ともない、此所に神の御心があると、かく堅く心を決した自分は、断然新潟行と定めた。新潟に行て宣教師のパームと云ふ人と会見した。従来自分は傲慢であるから、メツタに人の言を信じない方であつたが、此のスコットランド人なるパーム氏と相見ゆるに及び、實際氏の大人物であることに敬服した、氏が或時予に向つて『どうもこれまで通りの伝道の方法では、或は国民を誤らしむるなきを保し難い、これからの伝道には、余程方法を改良して當らねばなるまいと思ふ』と云ふ事を話されたが実に彼れは、偉い所を見抜いたものであつた。予は此のスコットランド人の行為と言葉とを通じて、益々明かに信者なるものを了解することが出来た。彼れは或る日自分に向つて、『君は伝道のために一身を献ずると云ふ覚悟なら、一つ仙台に行つて見てはどうか』と言はれた。仙台に来てホーイ氏と会見した。支那やハワイなどに就て種々なる事を聞かされた、斯くて在仙中果せる哉パーム氏の云はるゝ様な方針を探らねばならぬと云ふ様な事情に立至つた。

吾国には色々なミツシヨンスクールがあるが皆各々其の主義を異にして居る。然し日本を基督教化せんとして居る点は、其の規を一にして居ると云ふて宜しい、扱て

此日本を基督教化せしむると云ふ事には二つの重大な意味が存する、諸君はよく此の事を各脳裡に印して貰い度いと思ふ、即ち堂々たる基督教本義は何物をも許さぬ、何物をも此の教義を以て教化し行かねばならぬ、が而し諸君帝国の存在には、亦犯すべからざる根本の真理あることを思はねばならぬ、実に此の真理は何物をも得て犯すことを得ざるものである、此の二つのものを調和融合して如意自在にしようとするのは容易の事業では無い、然るに此の容易ならざる事業は伝道者其の者の双肩に掛つて居ることである、実に此の事業は賢者ならでは成就し能はざるものである、諸君よ此の重且つ大なる責任を双肩にのふ諸君よ、伝道者の使命は実に此所に存することを思ふて奮励努力せられんことを希望するのであります。共に俱に協力一致して此の大事業に尽さねばならぬ。

此所に御集りの同窓会諸君!!特に伝道に従事せらるゝ人に言はん。実に此の伝道の事業は易いと云ひば易く、難いと云ひば難い、だが伝道者として誰でも持つて居らねばならぬ句はポーロの言、行である、然し之れは鍛練の結果であります。

或る人の云ふに、基督教は他力宗ぢや、其れ故易いも

のぢやと云ふ。何ぞ知らんや、他力宗ほど困難なもの無い、他力宗は実に、全心全力を尽して而して始めて、完全な神の摂理を俟つものである。諸君が真実に、教育なるものを受けんとならば、須らく他力生徒とならねば、到底も偉い者にはなれない、木戸、大久保の吉田に於ける例を見よ、他力生徒としての好模型である。

伝道者諸君は此の伝道と云ふ貴い事業を成就せんためには、相互に協心努力せねばならぬ。此所に最もいましむべきことは、伝道者御互は、決して御互の蔭口を云ふてはならぬと云ふ事である、伝道の事業は貴いものである、従つて其の事業に係る伝道者は又貴いものである、御互に自重し御互に尊びあはねばならぬのである。匹夫匹婦と雖も、蔭口云ふことは猶且つ卑劣のこととして居るのに況んや伝道と云ふ尊い聖職に在る人が、互に蔭口を云ふ有様では、到底も駄目なことぢや、決して蔭口を言ふてはならぬ、互に相愛し相寄り相扶け、長短相補ふと云ふ様に務めねばならぬ。

己に任じたる僕は、忠且つ善なる僕ぞとは如何に貴き言葉ではないか、どうか心して、赤心より務めて貰ひたいものである。

(中略)

西郷でも、大久保でも、東郷でも誰か宗教心のない者があらうか、彼等は実に立派な己れ以上の或る凡てを信ずると云ふ堅固な信仰を有して居た、現代の政治家にして、西郷や大久保に、及ぶものゝないのは何ふ云ふためであらうか、実に此の信仰を有さぬためである、自分は伊藤公や大隈伯に会ふて、親しく話したことがあるが、余の目から彼等を見るに、彼等は確かに力量と才能とはある、然し残念なことには、此の貴いあるものを有さない。吾人は後を顧みず、前方を望んで進むならば、たとへ失敗することありとも決して、其れは純粹に失敗と称すべきものではない、寧ろ成功的失敗とも称すべきである。

伝道の成功と否とは、己れの心中に一片の赤誠あるとないとに帰する、願はくは諸君!!我國の運命は、未だ決して安定したものではない、益々努力して欲しい。

近頃薨去せられた谷干城氏は、日露開戦当時已に明言して曰はく、『露は軍謀已に誤てり、露は水陸の大軍を旅順浦港に分けて置くが、之れは明かに敗るゝ証拠であると申した。』が扱て事實は立派に之れを証明して居る。人物と云ふものが、国家に尊ぶべき所因のものは、実に此の点に存するのである。国家に貴ぶべきものは物質であ

ると説くものもあるけれども、吾人は偉い人物が、如何に国家に重大なものであるかと云ふことを知るものである。日本は世界の一等国に列し、世界の偉い国となつたが、之れで止むべきでは無い、益々鍛練研磨せぬでは、将来の大成功を期することが出来ない、吾等日本国民としては、なすべきことが非常に多いが、中にも伝道の事業は、吾国民の品性を改良し、道德の標準を高からしむるに於て最も重大なる職である、此の重大なる職業を双肩に担はるゝ諸君、どうか其の職に相応しき様に其の職を恥かしめぬ様、充分の努力あらんことを希望する次第である。云々。(文責記者にあり)

(『東北文学』創立滿二十五年紀念特別号 明治四十四年七月十二日)

第二章 中学部の振興

一〇八 D・B・シュネーダー書簡(カレンダー

宛)

(英文)

(一九〇一年二月八日)

文部大臣 久保田 讓殿

宮城県私立東北学院長
デーヴキツド、ボーマン、シュネーダー 印

明治三十七年三月十四日

普通科仮校舎増築致度最モ明年度中ニハ兼テ計画罷在候
新築校舎建築竣功ノ予定ニ付右仮校舎ヲ来四月十日ヨリ
向フ十八ヶ月間使用致度候間御認可相成度此段奉願候也

一〇九 D・B・シュネーダー「東北学院のため

の訴え」

(英文)

(一九〇三年十月二十九日)

生徒定員変更認可願

従来本学院普通科生徒定員八百七拾人ニシテ之ヲ六学級
(内一学年ハ二学級)ニ分チ居候処今般校舎増築ノ見込
ニ付右定員ヲ貳百五拾人ニ変更シ之ヲ八学級(但シ一学
年ハ三学級ニ学年ハ二学級)ニ分チ度候間御認可相成度
此段願上候也

一一〇 普通科仮校舎増築および定員変更認可

申請書類

(明治三十七年三月十四日)

明治三十七年三月十七日

宮城県私立東北学院長

デーヴキツド、ボーマン、シュネーダー 印

文部大臣 久保田 讓殿

仮校舎増築認可願

今般本学院ニ於テ普通科ヲ拡張ノ見込ニ付本学院所有地
統仙台日本基督教会敷地ノ一部ヲ借受ケ別紙図画ノ通り

私立東北学院普通科生徒定員表

一 現在生徒定員 百七拾人

学年	第一学年	第二学年	第三学年	第四学年	第五学年	計
学級	A組 B組	一組	一組	一組	一組	六学級

一 変更生徒定員 貳百五拾人

学年	第一学年	第二学年	第三学年	第四学年	第五学年	計
学級	A組 B組 C組	A組 B組	一組	一組	一組	八学級

内務部長 ㊦ 第三課長 不在 課僚係 ㊦
 知事 ㊦ 主任 属 宮城寅藏 ㊦ ㊦

私立東北学院生徒定員変更ノ件
 右検印進達可然歟

普通学務局へ左按

本県私立東北学院普通科生徒定員変更ノ儀ニ付認可願別途進達ノ処右ハ同時ニ仮校舍増築認可願差出候得共書類再調ノ廉尽シ訂正中ニ付不日進達可致候条可然御取計置相成度此段申進候也

年月日

宛

宮城県

(注・明治三十七年三月二十三日付)

内務部長 ㊦ 第三課長 不在 課僚係

主任 属 宮城寅藏 ㊦ ㊦

私立東北学院へ左按伺

普通科仮校舍増築認可願御差出相成候処同様ノ願書尚尅通必要ニ付代表者タル院長ヨリ文部大臣宛ニ訂正至急御提出相成度此段及照会候也

年月日

内務部

宛

(注・明治三十七年三月二十三日付)

本月二十三日付内三第一三〇五号ヲ以テ貴県私立東北学院普通科生徒定員変更ノ件御進達相成候処別記ノ事項御調査ノ上御回披相成度此段及照会候也

明治三十七年三月二十八日

文部省普通学務局長 沢柳政太郎 ㊦

宮城県知事 田辺輝実殿

記

- 一 生徒定員変更実施ノ時期
- 二 校舎増築着手及竣成ノ時期
- 三 校舎増築迄使用ノ教室配置図面
- 四 増築校舎ノ図面

内務部長 ㊦ 第三課長 不在 課僚係 ㊦ ㊦

主任 属 宮城寅蔵 ㊦ ㊦

私立東北学院生徒定員変更ニ関スル仮校舎増築
認可申請書進達ノ件

右仮校舎増築認可願ハ檢印進達可然欵

普通学務局へ左按伺

本県私立東北学院普通科生徒定員変更願進達ノ際申進置
候同校仮校舎増築認可願今回別途進達候条御了知ノ上可
然御取計相成度此段申進候也

年 月 日 宮城県

普通学務局宛

(注・明治三十七年三月二十九日付)

拜呈過日者誠ニ失礼仕候其節御話有之候件別紙之通りニ
付何分宜敷御取計相成候度願上候右早速差上べく之処図
面延引之為め甚敷遅仕り誠ニ御申訳無之候自身出頭御願

申上べく筈ニ候得共彼れ是れ取込手放し兼ね候間略儀な
がら紙面御願申上候猶ホ専門科徴兵猶予の儀も新入生
ニ取りてハ重大なる關係有之何れも取急ぎ居り候間宜敷
御了承の上何分至急御取計願上候先ハ願用のみ如此ニ御
座候

敬具

四月四日 五十嵐 正

宮城寅蔵殿

一、本院院普通科生徒定員変更実施ノ時期

明治三十七年四月十一日ヨリ

二、新築校舎建築着手及竣功ノ時期

明治三十七年六月着手明治三十八年九月竣功ノ予定

三、右新築校舎仮図面ハ別紙ノ通

尚愈々決定ノ上ハ更ニ精細ナル図面ヲ差出スベシ

四、右新築校舎竣功迄使用ノ教室配置

先キニ差出シ置キタル願書ニモ記載セシ如ク生徒定
員変更ノ結果一学年ニ於テ一学級二学年ニ於テ一学
級都合ニ学級増加ニ付今般増築セシ仮校舎三教室ノ
中へ適宜配置ノ見込

右御回答申上候也

明治三十七年四月四日

私立東北学院長 デー、ビー、シユネーダー ㊦

第三課長 ㊦ 課僚係

主任 属 宮城寅蔵 ㊦

私立東北学院長へ左按伺

三月十四日付ヲ以テ仮校舎増築認可願御差出ノ処右仮校舎(新築校舎竣功迄使用ノモノ)ノ新築着手ノ時期及竣成ノ時期必要ニ付折返シ御回答相成度此段及照会候也

年月日

第三課

宛

(注・明治三十七年四月五日付)

本院新築校舎竣功迄使用ノ仮校舎工事ハ去ル三月十日着手致来ル十日迄落成ノ見込ニ候間右様御承知相成度此段及御回答候也

四月五日

東北学院 ㊦

宮城県内務部第三課御中

内務部長 第三課長 ㊦ 課僚係 ㊦

主任 属 宮城寅蔵 ㊦

普通学務局長へ左按伺

客月廿八日付ヲ以テ本県私立東北学院普通科生徒定員変更ノ件ニ付御照会ノ処右ハ左記ノ通ニ候条御了知ノ上可然御取計至急御認可相成候様被致御依頼旁此段及回答候也

年月日

知事

普通学務局長宛

記

一、生徒定員変更実施ノ時期

本年四月十一日

一、校舎増築着手及竣成ノ時期

本年六月着手明三十八年九月竣成ノ予定

但増築トアルモ右ハ従来ノ校舎ハ総テ仮校舎ナレバ別紙図面ノ通り全部新築移転スベキ見込

今回生徒定員変更ノ為メ使用スル仮校舎及配置図ハ

客月三十日内三第一四七一号及一四九一号進達図面

ノ通り

一、仮校舎増築着手及竣成ノ時期

着手ハ去ル三月十日ニシテ完成ハ来四月十日ナリ

(注・明治三十七年四月五日付)

内務部長 第三課長 ㊦ 課僚係

主任 属 宮城寅藏 ㊦

私立東北学院普通科生徒定員変更ノ件並仮校舍

増築使用認可ノ件

右指令供閱

本件指令ハ直接学院院长へ添書ヲ要セズ交付取計

可然欵

(写)

文部省 辰宮普四九号
文書課

宮城県私立東北学院院长

デーヴキツド、ポーマン、シユネダー

明治三十七年三月十七日付甲第六六号願其院普通科生徒
定員変更ノ件及同年同月十四日付甲第六七号乙願其院普
通科ニ関スル仮校舍増築使用ノ件認可ス

明治三十七年四月十二日

文部大臣 久保田 譲 ㊦

(県庁文書)

一一一 普通科校舍落成式

(英文) (一九〇五年十一月二十三日)

一一一 1 演説要旨 (W・E・ランペ)

(英文)

一一一 2 記念行事寸描 (J・F・スタイナー)

(英文)

一一一 3 新校舎概要 (P・L・ゲルハート)

(英文)

一一二 D・B・シユネダーの募金活動

(明治三十八年九月五日)

赤子の其慈母を慕ふが如く、吾人の日夜待ち望み居た
るシユネダー博士は、本月二日恙なく帰仙されたり。
在米四ヶ月有余、本国の氣候身に適してか、依然たる温
容血色更にうるはしく、今春送別の時に比して一層健康

を増されたるが如きは、吾人の何よりも喜ばしく思ふ所なり。

博士がアーレンタウン大会の席上に於て、或る其他種々なる機会を利用して、我が日本を一層能く其本国に紹介し、日本——殊に我が東北の伝道教育事業に対する本国人の同情を更に深からしめんがために尽力せられたるは吾人の大に感謝する所なるが、殊に其労を多とすべきは、東北学院新寄宿舎建築費の募集なりとす。在来の寄宿舎が狭隘不完全なるは何人も之を認むる所、其の改設の要は敢て今日に始まるにあらざりしも、昨年新校舎の起工と共に、一刻も忽せにすべからざるの急に迫れり。然れども既に莫大の資金を新築校舎のために米国の同胞に仰ぎて、復た多額の寄附を彼地に募らんことは、事情之を許さず、実に至難の業たり。事殆ど不可能に属すと言ふも敢て過当なりとせず。然るに我がシユネード博士は、一意専心教育の大業を完成せんがため、既に新校舎建築に心血を漑げるの身を以て、また更に寄宿舎新設に関して非常の困難を顧りみず、親しく本国の同胞に訴へんとして、今春四月此地を去られたり。其の愛心、其の義胆、実に何の辞を以て之に加ふべきかを知られざるなり。

聞く、東北学院当局の人々は、博士に約するに、寄宿舎建築のため我が日本に於ても少くも千円金の寄附を集め得んことを以てしたりと。建築費予算の総額は約壹万円なりと聞けり。千円と云へば僅かに其の十分一に過ぎずと雖も、吾人は今日東北基督教会の現状に鑑み、此の約束の非常なる奮発に出でしを認め、当局者の意氣を壯とせざるべからず。斯の如きは、博士の愛心義胆に対し、当に然るべきことなり。吾人は当局者をして此の約を全ふせしめんがため、出来得る限りの力を尽すべきこと勿論にして、これ実に東北に在る吾人同志の責務なることを深く思はざるべからず。

博士は此の約束を本国の同胞に齎して、具に情を告げ、其の同情を喚起して遂に誰人も至難不可能と認めたる事を遂行して此地に帰られたり。東北学院当局の人々は博士の至誠に感じて、今日の東北地方に於る業としては殆ど不可能とも云ふべき程の約束をなせり。吾人同志は博士の言に聴きたる彼地同胞の真情に励まされ、日本人の面目にかけても、其の約束の一日も早く履行され得るやう当局者の後援たらざるべからざるなり。東北地方、しかも其の一局部少数の人々より零碎を集めて千円の額に纏めんとするには、当局者固より相当の成算あるべきも、

吾人同志たるものは、種々の方法を講じ成るべく容易き道によりて事を成就するやう、十分に注意するを要す。

或は団体を作りて一の事業を之がためになすも可なるべく、或は個人として一定の時間を之がために捧ぐるも可なるべし。何れにしても、我が東北地方の伝道及び教育のため一身を犠牲として全心を尽さるゝシユネード博士の今回の労に酬ひんがため、吾人は大に奮発して働らかざるべからざるなり。

今日博士を迎ふるに当り、吾人は同志諸兄姉と共に此一事を深く心に刻せんと欲す。

（『東北教会時報』五三号 明治三十八年九月五日）

一一三 東北学院生徒募集広告

（明治三十七年〜四十五年）

東北学院案内

位置 東北の野、山高く川長し、天地静澄風光明媚、真に人を養ふに足る。其中心古英雄伊達氏の塹城を仙台となす。広袤里余人口七万、優に帝国の一方に雄視す、恰

も蘇都エディンバロの不列顛国に於けるが如し。市の中央赤瓦の五層楼亭々として高く聳え、旭日に映じて五城楼下の偉観を呈するもの、之を我東北学院とす。市の中央と雖、毫も紅塵雜鬧静思精学を妨ぐるが如きの憂あることなし。宮城の野、青葉の山は広瀬の川と共に皆学後の遊に適す。之を遠きに求むれば太平洋の沿岸、閑上、荒浜、蒲生、菖蒲田等何れも半日乃至一日の興に価すべく、更に金華松島の勝に至ては、固に天下の絶景、亦言ふを須るざる也。其他古蹟名勝杖を曳くに足るもの列挙するに遑あらず。大に遊び深く学ばんと欲する青年学生の為に、我学院が有する好地位は、蓋し多く其比を見ざるところ也。

目的 高等教育を授け、完全なる人物を養成するに在り。
学科 本院の学科課程を分ちて、予科本科及神学科となす。而して院運の進歩と共に神学科の外別に高等専門部を置くは、本院の夙に計画する所なり。現時内外の博士学士及教師十八名、精勵教授の任に当り、理化学の為に学室器械及薬品を備へ、体育の為に体操場及器械の設けあり。院内又書籍館あり、夥多精選有用の和漢洋書籍を蔵す。

入学 学年は四月十日に始まり翌年四月九日に終るを以

て、毎年四月五日より十日までを入学の期と定む、但し毎学期の始めに於て臨時入学を許すを例とす。予科一年級に入学を許すべき者は、高等小学卒業の者、若しくは之に準ずる漢学作文及数学の試験に及第したる者とす。予科二年以上は前学年の諸科目につき試験を経て合格したる者とす。

学費 学費は一ヶ月月謝七拾錢食料式円七拾錢（食料は物価の高低によりて変更あるべし）舎費式拾錢とす。入学の際別に束修壹円を要す。

本年九月第二学期の始めに於て各級に入学を許す志願の方は同月八日まで本院事務所に願書を差出すべし
追て入学試験は九月九、十日の両日を以て執行す
規則書入用の向は式錢切手封入申込むべし
明治廿七年六月 仙台 東北学院

（『東北文学』五号 明治二十七年六月十五日）

生徒募集

本年四月当学院普通科文科及び神学部各級に入学を許す志願の向は同月五日迄に履歴書相添へ願書差出すべし

普通科第一年級に入学を許すべきは年齢満十二年以上にして高等小学校第二学年の課程を終りたる者若くは国語算術日本歴史地理に就き之と同程度の入学試験に合格したるものとす入学志願者の数入学を許すべき人員に超過する時は高等小学校第二学年の課程を終らざる者に前記の諸科目に就き予備試験を施し然る後高等小学第二学年の課程を終りたる者と予備試験合格者とを合せ国語算術に就き選抜試験を施し以て入学者を定む普通科第二年以上に入学を許すべきは相当年齢に達し前各学年の程度によれる各学科目の試験に合格したる者とす文科一年級に入学を許すべきは当学院普通科卒業生若くは之と同等の学力ある者とす英語神学部第一年級に入学を許すべきは文科卒業生若くは之と同等の学力ある者邦語神学部第一年級は普通科卒業生若くは之と同等の学力ある者とす

学費は受験料金五拾錢束修金壹円月謝金壹円寄宿料金四円拾錢とす（本月改正）

当学院普通科は徵兵令第十三条により文部大臣の認定を得たるを以て徵兵猶予の特典あり同科卒業生は府県公立中学校の卒業生と等しく高等学校に入学するを得

明治廿五年二月

仙台 東北学院

〔東北教会時報〕一一号 明治三十五年二月
二十七日)

東北学院

普通科 は中学程度にして文部大臣の認定を受け徴兵
猶予及び其他諸官立学校同様の特典を有す

専門科 は神学部、神学部別科、神学部予科、文学部
の四部に別れ専門学校令により文部大臣の認定を受け
別科を除き各部とも徴兵猶予の特典を有す

本院の特色 は自由教育を旨とし形式よりも精神を主
とし専ら生徒の活動自助の方針を執り開発主義を完う
せんとするにあり

生徒募集 四月新学年の初に当り普通科各学年専門科
文学部及び神学部別科に入学生若干名を募集す、志願
者は至急申込むべし、規則書入用の人は郵券二銭を送
るべし

明治四十年二月 仙台市南町通

私立東北学院

〔東北教会時報〕六九号 明治四十年二月二
十五日)

生徒募集(詳細ハ本院ニ承合スベシ)

普通科(資格中学校ニ等シ)

第一学年凡百名 第四学年以下若干名

専門部 文科第一学年 若干名

神学科第一学年 若干名

本院ノ教育 ハ基督教主義ニ基キ智徳並行ヲ旨トシ特

ニ品性ノ陶冶ニ留意ス

普通科並ニ専門部 生徒ハ徴兵令第十三条ニ依リ徴兵

猶予ノ特典ニ与ル事ヲ得

普通科卒業者 ハ高等学校並ニ各種専門学校ニ入学ノ

連絡アリ

普通科卒業者 ハ無試験中学校卒業者ハ選抜試験ノ上

文科第一学年ニ入学スル事ヲ得

出願期日 四月四日迄ニ手数料金五拾銭ヲ添ヘ願出ツ

ベシ

入学試験 普通科第一学年ハ四月七日其他ハ四月六日

(毎日午前八時ヨリ)ヨリ執行ス

試験科目 普通科第一学年ハ講読、作文、習字、算術

ノ四科目其他ハ本院ニ承合スベシ

文部省認可

仙台市東二番丁

私立東北学院

〔東北教会時報〕八二号 明治四十一年三月十五日

文部大臣 認定指定 東北学院生徒募集広告

(在仙台市東二番丁 電話六三四番)

普通科 (資格中学校二同シ)

第一学年凡百名 第四学年以下若干名

専門部 (専門学校二同ジ)

文科第一学年若干名

願書受理 各科共試験前日限

試験 第一学年ハ四月四日其他ハ四月一日何レモ午

前八時ヨリ但 地方ニ於テハ四月一日午前八時ヨリ

試験場 各科共東二番丁本院普通科ニ於テ之ヲ行フ

但普通科第一学年ニ限り左ノ各所ニ於テ執行ス

一 宮城県 遠田郡涌谷小学校内

牡鹿郡石巻新田 石巻日本基督教会内

二 岩手県 (稗貫郡花巻町 花巻小学校内)

伊達郡長岡 長岡基督教育青年会館内

三 福島県 (相馬郡小高町 小高小学校内)又ハ教会内)

若松市 若松日本基督教会内

四 山形県 南村山郡上ノ山町上ノ山日本基督教会内

米沢市 米沢日本基督教会内

五 群馬県 (前橋市 共愛女学校内)

特 典 徴兵猶予ノ特典ヲ有シ高等学校各種専門諸学

校及陸海軍学校へ入学スルヲ得ルハ勿論一年志願兵タ

ルヲ得

本院ニハ二ヶ処ニ寄宿舎ヲ設備シ食費、舎費一切ニテ

一ヶ月六円内外ニテ弁ス、尚授業料式円ノ外ニ校費運

動費等何等ヲモ要セズ

本院ニハ別ニ附屬労働会アリ学資ノ不足ナル者ニ一定

ノ労働ヲナサシメ以テ其ノ幾分ヲ補ハシム、詳細ハ「仙

台市東八番丁東北学院労働会塾長」ニ宛テ三錢郵券ヲ

添へ照会スベシ

試験時間割ハ三月廿七日以後ニ発表ス詳細ハ郵券ヲ添

へ本院事務所ニ照会スベシ

三月五日

私立東北学院

〔東北教会時報〕一三〇号 明治四十五年三

月十五日

一一四 D・B・シュネーダーの在職二十五年祝典

(大正二年五月十六日)

シュネーダー東北学院院长在職廿五年祝典

東北学院教職員、卒業生、在校生一同は同院第廿七回創立記念日の去る十六日紀念式と共に同院長シュネーダー博士の在職廿五年祝典を執行せり、式は五十嵐幹事の司式にて、讚美歌二百廿三番を合唱田中普通科部長の聖書(詩篇第百篇)朗読梶原教授の祈禱あり、次いでシュネーダー院長の紀念式辞ありて、祝典に移り、専門部生徒を代表して角田桂嶽氏、普通科生徒を代表して富永義明氏の祝文朗読次いで五十嵐教授は卒業生を、出村専門部長は教職員を、齋藤壬生雄氏は中会を、モール博士はミツシオンを代表して各院長が過去廿五年間に東北学院の経営に又東北地方の伝道に尽粹せられたる功績を表旌し、モール博士がシュネーダー博士を始めて日本人に紹介したる当時の追懐談は、感極まりて思はず暗涙を浮べしめたり、かくて列席卒業生最古参者たる米澤教会主任猪又普平氏により紀念品を贈呈せり、終りてシュネーダー

ー院長答辞あり校歌合唱、ミラー博士の祝禱にて目出度閉会せり、式後來賓に菓子を饗し其間同窓会員の滑稽演説、米人一同の合唱等あり、歡笑の声堂に溢れたり、又別室にて教職員、同窓生の茶話を催し、院長を招じて歡談し、散会せるは正に十二時なり。

尚午后七時より東一番丁弥生軒に於て祝賀晚餐会を催し、院長一家族を招待して樂しき晚餐を共にせり、出席するもの七十人、笹尾、モール、ミラー、木村、阿部、フアウスト、小山田、山本諸氏の卓上演説あり、殊に笹尾氏のミセス・シュネーダーに対する頌辞は満堂の拍手湧くが如くにて、大喝采を博したり、散会せしは午后八時半。

(『東北教会時報』一四四号 大正二年五月十五日)

一一五 D・B・シュネーダーの略歴と業績

(大正二年五月十五日)

シュネーダー博士在職廿五年を祝す

シュネーダー博士は千八百五十七年三月を以て北米合

衆国ペンシルヴァニア州に生れ、長じて三年間小学校教員となり、千八百七十六年フランクリン、アンド、マーシャル、カレッジに入学、卒業後同校予科教員となり在職一ヶ年余にしてランカスター神学校に入学、千八百八十四年同校を卒業した。

始め同校在学中外国伝道に従事せんと志を立て伝道会社に向て日本に派遣されん事を志願せるも、両親の同意を得る能はざりし為め其素志を実行する能はず卒業後同州マリエツタに於ける一教会の牧師となり四年間熱心に牧会に従事し大に人望を博した。然るに一方に於ては比よりに日本伝道の急務を訴へて其渡来を促し來たるあり、終に志を決し種々両親に説いて同夜其同意を得、新婚の夫人と共に千八百八十七年十二月半に桑港より乗船し、明治廿一年一月一日横浜に到着した。時恰も冬期にして海上穩ならず、流石の博士も出来得可んば帰国せんと希ひし程なりしと云ふ。直に仙台に來り、間もなく山形に於ける英学校の招聘に應じて彼処に教鞭を執り、翌年辞して仙台に歸り、東北学院の前身たる仙台神学校の教授となり、創立者押川ホーイ両氏と共に幹部となり其の経営並に伝道上内外の企画に參し、三十二年ホーイ博士支那転任の後を承けて東北学院副院長となり、更に三

十四年に至り押川氏職を辞するや院長に挙げられ以て今日に至つたのである。廿一年渡來してより休養の爲め歸米せること前後二回、其間も東奔西走学院の發展と伝道の擴張の爲に尽し、其結果として同院普通科校舍と仙台日本基督教会堂とが建築せられたのである。去廿九年中學術研究及教育視察の爲の英國蘇國並に獨國に赴き諸大學に於て暫く研鑽を積まれ、三十二年に至り、フランクリン、アンド、マーシャル、カレッジより神學博士の學位を得られた。

博士は深遠なる學識と熱烈なる信仰と周到なる用意とを以て、教育並に伝道の経営に心血を濺ぎ、着々として効を奏し以て今日の盛運を見るに至つた。博士は曾て婦米中説教の後或人より「君は何んと云ふ外国宣教師より教を受けて信者になられたか」との問を受けたと云ふ奇聞もある位、其容貌一見日本人に近く、其思想に於ても善く日本人の精神を了解し、伝道上に於て將た教育上に於て常に内外人の連鎖となり人の見えざるところに於て非常なる苦心をして居る。博士は一面に於ては春風の如き温顔を以て人に接し又一面に於ては秋霜の如く凛として犯すべからざる厳格を以て人に臨み、同情深く又意志の堅き鉄の如くなるを以て、啻に其子弟に愛慕せらるゝ

のみならず、識徳併び高き好個の紳士として内外人の信望を繋いで居る。博士は一身を神と日本とに献げてより、其最も貴重なる半世（半生）を東北に過した。「日本の為」に、又日本に於て死するは之れ予が願なり」とは博士の誠実なる告白である。夫人亦淑徳に富み博士に対する同情深く、快活にして諸方面に活動し、伝道上大に貢献して居る。希くは優渥なる

天父の恩寵豊に博士並に其家族の上に加はり、日本の為め將た東北の為め永く尽瘁せられんことを。

（『東北教会時報』一四四号 大正二年五月十五日）

一一六 中学部への名称変更

（大正四年六月八日）

大正四年六月八日臨時理事会ヲ院長室ニ開ク

出席者出村、梶原、ゲルハルト、モール、ノッス、田

中ノ諸氏

梶原氏開会ノ祈禱ヲ捧グ

院長ヨリ普通科ヲ中学部ト改称スルノ件ハ文部省ヨリ許

可セラレタル旨報告ス 之ノ報告ヲ受クル事ニ決ス

〔後略〕

（理事会記録）

一一七 仙台大火と中学部校舎の焼失

（大正八年三月二日）

兇暴なる火龍は 遂に東北学院を焼き

更に南に長駆したり

大日横丁東西両側を呑み裏手家屋まで烏有に帰し一方東一番丁（塩倉丁）を南に延びたる火勢と共に一帯の地域を焼野原と化して柳町通に及びたるが東方は廿三番地陸軍少将横田宗太郎氏邸の門塀を残し居宅を焼きて止み向側は柳町通十六番地西隣にて止みたり斯の惨景を呈し居る最中午前四時頃なりしが魔風の遠く南に走る勢に送られて黒煙と火塊とを飛ばせる危険は遂に意外にも東二番丁に巍然たる仙台名物の一なる壮麗なる赤煉瓦洋式建築東北学院中学部の上層楼に天を摩して高く聳立せる尖塔に魔の炎の忽焉として立ち昇るよと見る間に紅蓮は物凄く塔の窓口より吐き出され尖塔の影は全く火炎に包ま

れて黄色の塔と化しアレヨ／＼と叫ぶ間に階上の各房に延火せるものか多くの窓より濛々たる黒煙と舌火を吐きさしも壮麗の学院の校舎も灰燼に名残を留むる無慘さを呈せり同校舎は寄宿舎と共に明治三十八年九月建築費九万円を投じ東北有数の建築物として本邦中等学校無比の校舎たる江湖の讚美を博して竣成せるものにて校舎四百六十坪寄宿舎四十六坪時価五十万円其他内部の器具等を合算して六十万円の大損失を見るに至れりといふが五百余名の在学生徒を今後如何に処置すべきか校舎に相当の応急場所なしとすれば休校の已むなきに至るやも計らざれど卒業生だけは同院専門部の一部校舎を使用し生徒に支障なきやう卒業試験を行ふべしとて即時同院職員は専門部に会合して善後策を熟議せるが幸ひに寄宿生には一名の故障なく無事避難せり

〔河北新報〕 大正八年三月三日

一一八 D・B・シユネーダー書簡(バーソロミュ

一宛)

〔英文〕

(一九一九年三月二日)

一一九 中学部校舎再建築と募金の協議

(大正八年三月十五日)

評議員会記録

大正八年三月十五日午後二時より専門部第三号教室に於て東北学院同窓会評議員会を開く

出席評議員 出村、伊藤、田中、五十嵐、城生、津田、

矢野、須藤

東京支部を代表して小松武治、平山六之助の二氏、在仙同窓会員を代表して菅井文五郎、早坂一郎の二氏列席す

金矢氏は令兄不幸のため、木村氏は病氣のため、いづれも欠席。

出村会長議長席に就き、城生氏の祈禱を以て開会す。

須藤幹事より左の報告をなす。

一、中学部罹災に付き三月三日在仙同窓会員の集合及び

其の決議

二、三月九日に開かれたる東京支部總會の概況及び其の

決議

三、在仙実行委員の協議事項

(右いづれも別項の記事と重複するを以て略す)
シユネーダー院長理事会を代表して評議員会に臨み一場の挨拶をせらる。

次に議事に入りて左の諸項を審議決定す

一、左の各地に支部を設くることに決す

但し其地方若干の会員を委員に依頼して之が実行を期すること。

仙台 大阪 横浜 石巻 福島 岩沼 名古屋

二、東京支部より提出の同窓会規則改正の件は左の如く決定して本年の総会の議に附することとなす。

規則第四条第二項に次の但書を附加す

「但し支部の規則は其の定むるところに由る」

規則第九条を次の如く改正す

「本会々員は会費として年額金壹円を納むるものとす」

三、出村議長より学院当局は校舍再建築に関し左記の三案を立て其の孰れかに決定する方針なる旨の報告ありたるを以てとにかく成るべく速かに仮校舎の建設に着手せられんことを建議するに決す(遅くも九月の第二学期に間に合ふやうにし三四ヶ年間支持し得らるべき仮校舎たるべきこと)。

第一案 柳町通りに面したる西北の一角涌谷氏所有の土

地を購入して敷地を方形ならしめ、校舎及び寄宿舎を元の基礎の上に殆ど原型通りに建設すること。

第二案 西方北目町に面したる土地を購入して敷地を拡大し、校舎を三層建として高等学部中学部を併置することとし六軒丁の土地は寄宿舎及び運動場のために用ゐること。

第三案 仙台市の郊外に広き地面を求め学院全部を其処に集めること。

四、在仙実行委員の協議に基き再建築寄附募集に関し左の如く決定す。

イ、再建築費募集運動は東北学院同窓会の名を以てすること。(募集趣意書は須藤幹事に起草を依頼す)

ロ、募金専務委員を置くこと。

専務委員は現同窓会幹事須藤鬼一氏に依頼す。但し氏は従前通り学院教授の職に居らしめ、向ふ六ヶ月間授業の任を解かれんことを同窓会より学院当局に推薦すること。(六ヶ月後必要に依りて更に延長すべき筈)

ハ、募金の目標を五拾万円と定む。

ニ、同窓会の負担

会員の寄附金を口数に分ち、一口を五円とし、在学

中の会員には一口以上の応募を希望すること。
 学生以外の会員には二口以上の応募を希望すること。

寄附金は二ケ年を期限として数回に亘り払込むことを得。

募金運動は必要により数期に亘ることあるべし。

会員は自己の寄附以外に参拾円以上の寄附募集を引受くること。

ホ、仙台市内の募集は学院父兄会と交渉協力して運動すべきこと。

へ、仙台並に各地に募金委員を置くこと但し人選は会長に一任す。

五、東京支部より小松平山の二氏が齎して学院当局に提出せる社団組織変更の建議及び附帯建議たる理事局現制度変更の件同じく在仙会員代表者菅井氏より提出せる制度変更の件に就きては暫く之を卓上に置き次の評議員会に於て審議することに決す。

午後十一時十分五十嵐氏の祈禱を以て閉会す。——須藤鬼一録す。

* * * * *

評議員会の決議に基き出村会長から理事局に向つて寄附

金募集の趣意書草案を添へて左の件々を申出でた。

一、同窓会は母校の後援として校舎再建築寄附金募集に全力を尽して従事したいから認諾を得たい。

二、幹事須藤鬼一氏を募金専務に挙げたから向ふ六ヶ月間授業の免除を許可して戴きたい。

三、募集の目標を五十万円としたから其の内訳は当局に於て作製して戴きたい。

四、成るべく速かに仮校舎の建築に着手せられるやうに希望する。

これに就いて当局は第一の申出に対しては深厚なる感謝の意を以て認諾を与へ第二の申出も異議なく許可し、第三の申出に対しては内訳を左の如く概算として与へられた。

内訳概算

一金	参拾五万円	本校舎建築及設備
一金	六万円	寄宿舎
一金	五万円	運動諸建築物
一金	四万円	仮校舎

第四の申出たる仮校舎建設の希望に対しては当局の方でもまだ全く決定しては居ないけれども、相当の考もあるから適當の方法を採るとのことであつた。

募金委員は会長から左の諸氏に依頼することになった。

仙台 菅井文五郎氏 早坂 一郎氏

田島 堅固氏 五十嵐 正氏

東京 小松 武治氏

大阪 中村長之助氏

東京大阪は小松中村両氏から更に適当な会員数名を

委員に推薦して戴くこと。

他の地方にも追々と御依頼申すことになる筈。

(『東北学院時報』二十九号 大正八年四月五日)

一一〇 D・B・シュネーダー書簡(バーソロミュ

ー苑)

〔英文〕

(一九一九年三月十八日)

一一一 D・B・シュネーダー「中学部復旧計画

の概要」

(大正十年五月三十日)

中学部復旧計画の概要

シュネーダー

私は本紙記念号の紙面に於て、中学部復旧計画の概要を申し上げ度いと思ひます。工事は本年度から明年度に亘つて続けられるのでありますが、之れに要する経費の予算、及其財源に就いてのあらましを報告いたします。

校舎は矢張り従前の敷地に建築することになりました。従前と申しましても敷地は西の方に少し拡張しましたので、総坪数は現在六千四百〇一坪になつて居ります。出来得べくんばもつと拡げたいと云ふ希望をもつてゐます。新築せらるべき校舎は矢張り旧校舎の土台を用ゐて建築いたしますが、建物の外部を煉瓦にして内部は鉄骨コンクリートにすることにいたしました。外形は掲載した設計図の通り、中央は三層其他の部分は二層屋根は過去の災に顧みて、平かにすることにいたしました。総建坪は四百一十一坪になりますから前校舎よりも少しく大きくなります。

そして各学級には夫れ夫れの教室を備へて、只歴史、地理、博物、及び図画、音楽等の特殊な教室を設ける積りであります。本校舎と離して先きに建築中だった物理化学の教室は、最早仮落成いたしまして目下授業に使用して居ります。

なほ本校舎建築の請負は竹中組にいたさせることに契約を結びました。

又今敷地の西北隅に新築しようとしてゐる中学部の寄宿舎は、百名の生徒を収容し得る位の規模で計画しましたが今使用してゐる仮校舎と衝突するので、其一部分の建築を暫く延期することにいたしました。

いま復旧費及びその財源に関する概要を申し上げますと、

復旧費概算

- 一金 二六〇、〇〇〇円 建築費
- 一金 一二、〇〇〇円 仮校舎建築費
- 一金 三〇、〇〇〇円 敷地拡張費
- 一金 一二、〇〇〇円 理化室建築費補足其他

合計 金參拾壹万四千元也

財源概算

- 一金 八八、〇〇〇円 保険金
- 一金 三〇、〇〇〇円 寄附入金
- 一金 六六、〇〇〇円 寄附予約金
- 一金 一〇〇、〇〇〇円 伝道局寄附金
- 一金 三〇、〇〇〇円 更ニ募集スベキ金額

合計 金參拾壹万四千元也

序に申し上げたいことは専門部の増築のことですが、この建築も甚だ遅れまして残念に思ひます。其原因の一つは物価の騰貴で躊躇したこと、他の一つは向山に敷地を求めようとした事です。實際一年前に若しも工事を始めたとしたならば確かに其費用は現在より五割は高かつたらうと思ひます。敷地の事は吾が学院の将来の発展を想ひ向山に宏敞の地面を見出したので、出来るならば専門部だけでも移転させたい希望から六軒丁の現有地と交換しようとする努力をしましたが遂に成功しませんでした。

勿論六軒丁とても学校の敷地としては得難い秀麗の地ではあり、便利な点から申せば、遙かに向山の比ではありません。私共は六軒丁に専門部を置くことは神の御心と信じて更に一層のよき努力を払ひたいと思ひます。

同時に吾が同窓会員諸君が唯に吾が学院の現在の須要を充さるゝばかりでなく将来の大発展のために、其忠誠なる援助を惜まれないやうに執心に祈ります。我東北学院の発展は、確かに日本の東北に於ける最大事業であることを信じて疑はないものであります。

大正十年五月卅日

『東北学院時報』四三三号 大正十年六月十日

一一二 中学部校舎再建の募金要請

(大正十年十月十五日)

母校のために

出村悌三郎

母校中学部校舎が焼失いたしましたから、最う二年の年月を経過しました。この間わが同窓会は絶えず当局と協力一致して復旧のために出来るだけの苦心と努力とを続けて来ました。幸ひに豊なる天恵と熱心なる内外同情者との援助とにより去る六月に再築の工事に着手いたしました。今では既に二階の窓際まで積み上げましたので、やがて出来る可き新校舎全体の面影を想像することが出来る位までに進んで居ります。

然しながらまだ私共は本当に安心す可き境地にまでは進んで居りません。それは経費の方で苦心せねばならない部分が残されてゐるからであります。そのことに就いては前号に院長の報告されたことによつてよく御承知のことゝ信じます。

あの報告にあつた通り、寄附金の予約全部の払込を得たとしても、猶ほ経費に三万円の不足を告げて居ります。

この三万円は今後の寄附募集によつて是非補充しなければならぬのです。若し母校が会員諸君に対して特別な援助を求める事があるにしても、恐らく今日ぐらゐる急を告ぐることは復とあるまいとさへ思ひます。私共会員が母校の為に尽すのにこの場合は最もよき機会であると信じます。

翻つて同窓会員の寄附状況を見ますと最早や会員総数八百にも垂んとしてゐるのに、現在寄附を申込まれた方は未だその半数にも及びません。金額は多少はともあれこの事実を見ると私共は誠に遺憾に堪へません。

他に対して援助を仰がんとする場合、「先づ隗より始めよ」との古人の言を憶ひ起します。我等同窓会員はこの機に際し一人も残らず、自ら進んで応分の貢献を母校にいたし度いと思ひます。そして来年の秋頃までには熱烈なる私共の精神を籠めた、而も以前に優る堂々たる校舎を立派に築き上げたいものであります。

くれぐれも、予算に示された不足額の充当は、誓つて私共同窓会員の責任といたしたい。願はくばまだ寄附金の申込のない諸君は至急御決定なさるやうにお勧め申します。猶ほ払込は三ヶ年の年賦でも結構です。只管諸君の奮発を祈ります。

〔東北学院時報〕四四号 大正十年十月十五日

一三三 中学部新校舎の竣工

(大正十一年十二月十五日)

中学部新校舎竣成せり

出村悌三郎

三年の間夢寐にも忘れない努力の目標であつた学院中学部校舎の再築工事は愈々完成しました。実に立派に出来上りました。これは全く我が学院に大なる使命を与へ給ひし天父の摂理と、内外篤志家の大なる御同情と、同窓生諸君の熱烈なる愛校的援助の賜でありますので感謝のほかはありません。

新校舎は前者よりは、規模の大きい多くの点に於て改善された、完全な耐火的建物であります。暖房は総べて最新式のスチーム装置であります。既に使用して満足なる結果を得て居ります。而してこれは中学部寄宿舎へも通してありますから、以後再び祝融の災厄にかゝることは全くあるまいと思ひます。内部の設備器具等も大略整ひました。多分本年中には全部完備することと信じます。

過ぐる十月に落成式を挙げる筈でしたが、講堂の腰掛のやうな器具類が出来なかつたため遂に止むを得ず延期することになりました。来春盛大に挙行したいと希望して居ります。

建築費不足額に就きては、先きに時報や手紙を以て報告いたして置きましたが、先月中院長御夫婦の特別な努力によりまして、東京に於て八千円の寄附を得ましたが、結局まだ一万七千円の不足があります。これは本年末か来月早々支払をせねばならぬこととなつてゐます。これに就いて時報や手紙を以て再三諸君に相談いたしましたのでありますが、今度こそは最終の努力をしてこの不足額を捻出したいと希望して居ります。

故に既に御約束の寄附金は来月中に御払込を御願ひ致したい。未だ御約束なき諸君には此際多少に係はらず、母校のために御援助いただきたいと思ひます。さうしてこの不足額を綺麗に片附けたいと思ひます。

私はもう一度この紙上に於て、母校が諸君に訴へて居る声に耳を傾けられんことを希望して已まないのであります。

(『東北学院時報』四八号 大正十二年一月一日)

大正十一年十二月十五日稿

一二四 伊藤玄「我らの新校舎」

〔英文〕

(一九二三年八月)

一二五 D・B・シュネーダー「生命、光明、愛」

(大正十二年四月一日)

生命、光明、愛

シュネーダー

国民として光輝ある日本の将来に貢献せんがためには、こゝに掲げた三つのものを有たなければならぬと思ふ。

第一は生命、私がこゝで曰ふ生命は普通の生命、即ち肉体的の生命ではない。肉体的の生命は、早晚境遇に負けて滅び失せる弱いものであつて、眞の生命ではない。眞の生命は神から来るものである。

イエス、キリストによりて現れた生命である。心の生れ変つた結果の生命である。聖書にある「永遠の生命」である。此永遠の生命によりて世界が眞に新になるのである。此永久の勝利を占める新生命によつて人類は偉大

なる希望を与へられる。正義も愛も奉仕も此新生命に依つて活けるものとなつて来る。人類最大の幸福は、此新生命から湧いて来る此生命を所有し、又与へることは日本国民として、基督者の負ふ重大なる使命の一つである。

又日本の将来に光明の必要がある。即ち智識の光明である。勿論之は今日も著しく輝いては居るけれども、私のこゝで曰ふのは普通の智識ではなく、人生に取りても必要な宇宙の創造者支配者につき、人生の眞の道眞の目的につき又人生の運命についての智識を指すのである。イエス、キリストは「我は世の光明なり、我に従ふ者は暗き中を歩かず、生命の光明を得るなり」と曰はれた。此光明を自己に所有する人格者となり、之を広く世に伝へ、永久に輝くやうに努める必要がある。

第三に将来の国民に取つて欠くべからざるものは「愛」である。ヘンリー、ドラモンドは、「愛」について本を書いた。彼はその本に「世界に於ける最大のもの」といふ標題をつけたが、我等は愛は世界に於いて最大のものであると認めるばかりでなく、又同時に世界最大の要求である事も認めねばならぬ。今日愛の力は眞に乏しく、現代文明の最大の欠陥は愛である。愛の欠乏のために人類は苦しんで居る。愛の精神に満ち溢れて、真心から奉仕

を喜ぶ人物は、日本の将来のため何よりも必要である。
以上述べて来たところの「生命」と「光明」と「愛」とは、将来の日本国民として、是非備へねばならぬ大切な資格である。之を備へるならば、常に国民としてのみならず人類の一人として光輝ある生涯を送ることができらるであらう。

(『神と人』一七号 大正十二年四月一日)

(講演要領筆記文責在記者)

第二章 専門部の振興

一二六 専門部の改組

(大正七年四月九日)

大正七年四月九日午後二時四十分理事会年會第四回(継続)ヲ院長室ニ開ク

サイプル氏開會ノ祈禱ヲ捧グ、

出席者、シユネダー、出村、梶原、サイプル、田中、ゲルハルト、ゾーグ、笹尾ノ諸氏
本院憲法第三条第二項ニ左ノ修正ヲナスベキ通知アリタリ

専門部ハ左ノ各科ヨリナル

文科

師範科

商科

神学科A

神学科B

〔後略〕

(理事会記録)

一二七 師範科卒業生の教員免許申請書類

(大正八年三月十一日)

申請書

昨年四月ヨリ増設シタル本院専門部師範科卒業生ニ対シ明治二十九年文部省令第十二号師範学校中学校高等女学校教員免許規則第十條第一項第一号ニ掲クル学校ノ卒

業生ト同一ノ御取扱ヲ相受ケ度左記ノ事項ヲ具シ此段申
請仕リ候也

大正八年三月十一日

私立東北学院設立者 デー、ビー、シユネーダー

文部大臣 中橋徳五郎殿

左 記

一、試験ヲ須ヒズシテ教員免許状ヲ受クベキ

見込ノ学科目

英語

二、学 則

別紙

三、校地、校舎、寄宿舎図面

別紙

四、教科書及参考書目録

別紙

五、教授器械及標本目録

別紙

六、教員履歴書、受持学科及専任兼任ノ區別

ヲ記シタル調書

別紙

七、一箇年ノ経費收入支出金額及其細目

別紙

追テ御参考マテ本学院卒業者ニシテ英語教育ニ従事ス
ル者、英語教育ニ従事シタルコトアル者ノ名簿ヲ添
付致シ候

二、私立東北学院専門部学則

私立東北学院専門部学則目次

第一章 目的

第二章 学科、修業年限、各科ノ目的、及生徒定員

第三章 学科目及学科課程

第四章 学年、学期、及休業

第五章 入学、退学、及転学

第六章 試験

第七章 授業料及手数料

第八章 懲戒及賠償

第九章 寄宿舎規則

附 則

私立東北学院専門部学則

第一章 目的

第一条 本学院専門部ハ専門学校令ノ趣旨ニ從ヒ且本院

憲法第二条ニ基キ高等教育ヲ授クルヲ以テ目的トス。

第二章 学科、修業年限、各科ノ目的、及生徒定員

第二条 専門部ハ学科ヲ分チテ文科、師範科、商科、神

学科第一部及神学科第二部トス。

第三条 修業年限ハ文科、師範科及商科ハ各四箇年トシ

内壹箇年ヲ予科トス。神学科第一部ハ三箇年、神学科

第二部ハ四箇年トス。

第四条 文科ハ高等ノ學術ヲ授クルヲ以テ目的トシ、兼

ネテ神学科第一部入学志願者ニ其準備ヲナサシム。

師範科ハ中学程度ノ諸学校ノ英語科教員タラントスル

者ニ須要ナル教育ヲ授クルヲ以テ目的トス。

商科ハ商業ニ従事セントスル者ニ須要ナル教育ヲ授ク

ルヲ以テ目的トス。

神学科第一部ハ基督教宣教者ノ養成ヲ以テ目的トス。

神学科第二部ハ基督教宣教者タラントスル者ニシテ神

学科第一部ニ入学シ得ザル者ニ須要ナル教育ヲ授クル

ヲ以テ目的トス。

第五条 専門部ノ生徒定員ハ文科、師範科及商科ハ各百

式拾名、神学科第一部ハ六拾名、神学科第二部ハ八拾

名トス。

第三章 学科目及学科課程

第六条 文科ノ学科目ハ修身、国語及漢文、英語、歴史、

哲学、法制經濟及社会学、科学概論、教育、新聞学、

独逸語、希臘語、及体操トス。

師範科ノ学科目ハ修身、国語及漢文、英語、歴史、哲

学、教育、法制經濟及社会学、言語学、拉典語、及体

操トス。

商科ノ学科目ハ修身、国語及漢文、英語、歴史及地理、

哲学、法制經濟及社会学、商業学、商業算術、財政及

統計、簿記、商業英語、露西亜語、及体操トス。

神学科第一部ノ学科目ハ神学緒論、旧約聖書、新約聖

書、歴史、組織神学、実践神学、及体操トス。

神学科第二部ノ学科目ハ国語及漢文、英語、哲学、神

学緒論、聖書概論、旧約聖書、新約聖書、歴史、組織

神学、実践神学、及体操トス。

第七条 各科各学年ノ学科課程及每週授業時數ハ次表ニ

依ル。

学科目	学年		予 科	定時	本科第一学年	定時	本科第二学年	定時	本科第三学年
	定時	予 科							
文 科 学 科 課 程 及 授 業 時 數 表									
※本学院中学部卒業者及之ト全種ノ学校ノ卒業者ハ之ヲ修ムルニ及バズ									
×随意科目									

第三章 専門部の振興

合計	体操	希臘語	独逸語	新聞学	教育	科学概論	及社制 及社会經 济学	哲学	歴史	英語	国語及漢文	修身
廿二	二									廿一	七	二
	兵式									※和英文會話及讀方・書取・發音 英語英和文法及作文 聖書 一 二 三 四 五	漢国講講 文語義話 三四一一	
四〇	二		五			三	二	四	三	十五	四	二
	全上		×文法及訳解五			科学概論 三	經濟学 二	心理学 一三	古代及中世史 三	英語聖書文学 一 二 六 三	會話及作文 三	全全上上 二二 一一
廿九	二	五	三				四	六	二	十二	三	二
	全上	×文法及古代希臘語拔粹 五	×全上 三				法社会学通論 一三	倫理哲学史 三三	近世史 二	全上 一 五	英文及修辭 二二	全全上上 一二 一一
廿九	二	三	五	二	四		五	四		九	三	二
	全上	×文法及新約希臘語拔粹 三	×独逸文学講読 五	×新聞学 二	×教育史 二二		政治学 二 社会的及道德的事情 三	哲学概論 二二		全全上上 五 一 二 一	全全上上 一二	全全上上 一一

合計	教育	体操	拉典語	言語学	及社制会經济学	哲学	歴史	英語	国語及漢文	修身	学科目 / 学年		師範科学科課程及授業時數表
											定時	予科	
世二		二						廿一	七	二	定時	予科	※本学院中学部卒業者及之ト全種ノ学校ノ卒業者ハ之ヲ修ムルニ及バズ
		兵式 二						※和文英文會話及作文 英語英文聖書 一 二 三 四 五	漢國語 三四	講義 一	予科		
世二		二	二			四	三	十五	四	二	定時	本科第一学年	
		全上 二	文法及訳解 二			論理学 一三	心理学 三	古代史及中世史 英語聖書文学 一 二 六 三	會話及作文 全上 二 二	全上 全上 一一	本科第一学年		
世四	二	二	二		四	三	二	一四	三	二	定時	本科第二学年	
	教育心理学 二	全上 二	全上 二		社会学 一三	倫理学 三	近世史 二	全上 全上 全上 英文文学史 一 二 五 二 二 二	作文及修辭 全上 全上 一一	全上 全上 一一	本科第二学年		
世三	五	二		二	二	三		十四	三	二	定時	本科第三学年	
	教授法 一	教育史 二	教育学 二	言語学 一	政治学 二	哲学史 三		全上 全上 全上 全上 作文 二 八 一 二 一	全上 全上 一一	全上 全上 一一	本科第三学年		

第三章 専門部の振興

商業英語	財政及統計	商業算術	商業	法制及社会学	哲学	地理及歴史	英語	国語及漢文	修身	学科目	学年
										定時	
							廿一	七	二	講義	一
							※和文英訳 英文和訳 英語聖書	漢文語 國語	講義	一	一
四		二		二	四	三	十五	四	二	定時	
商業英語 英習字 タイプライテング		商業算術		經濟原論	論理学 心理学	古代史及中世史	英語聖書 全英上 全英上 商等英文法	會話及作文	全上 全上	全上 全上	本科第一学年
二		二		四	三	五	八	三	二	定時	
全上 二		全上 二		社会学 法學通論	倫理学	近世史 商業地理	全上 全上 英文學	全上 全上	全上 全上	本科第二学年	
二	三		三	七		二	八	三	三	定時	
全上 二	財政及統計		商業	政治学 商法 ×東北ニ於ケル經濟的社会的及道德的事		商業史	全上 全上	英作文	全上 全上	商業道德 全上 全上	本科第三学年

商科学科課程及授業時數表

※本学院中学部卒業者及之ト全種ノ学校ノ卒業者ハ之ヲ修ムルニ及バズ

×随意科目

合計	体操	実践神学	組織神学	歴史	新約聖書	旧約聖書	緒論	学科目	学年
								神学	
廿六	二	三	三	三	六	八	一	定時	第一学年
	兵式 二	讚美歌学 一 宗教心理及宗教教育 二	弁証論 三	教会史 三	概論 三 解積 三	緒論 三 希伯来民族史 二	神学緒論 一		
廿九	二	三	六	六	六	六		定時	第二学年
	全上 二	日曜学校法 一	說教 三 基督教倫理学 三	全教史 三	全上 三	全上 三 ×希伯来語 三			
廿六	二	四	五	三	五	七		定時	第三学年
	全上 二	全上 一 牧会学 一	全上 二 全上 三	全上 三 教理史 三	全上 二 全上 三	全上 二 希伯来宗教史 二	考古学 二		

神学科第一部学科課程及授業時數表

合計	体操	露西亞語	簿記
廿二	二		
	兵式 二		
廿八	二		
	全上 二		
廿七	二	五	一
	全上 二	×文法及会話 五	簿記 一
四〇	二	五	二
	全上 二	×全上 五	全上 二

第三章 専門部の振興

合計	体操	哲学	英語	国語及漢文	実践神学	組織神学	歴史	新約聖書	旧約聖書	緒論	学 科 目	学年
											定時	
卅一	二	四	十三	七						五	第一学年	定時
	兵式	論心理学	訳文解法	漢国文語						聖書概論	第一学年	定時
	二	一三	〇三	三四						五	第一学年	定時
三十	二	三	三	四	三		三	六	五	一	第二学年	定時
	全上	哲学史	全上	全上	宗宗教教育 讚美歌		教会史	解新約聖書 積義	希伯来民族史	神学緒論	第二学年	定時
	二	三	三	二二	一一		三	三三	三二	一	第二学年	定時
三十	二		三		三	六	三	七	六		第三学年	定時
	全上		全上		全說教 日曜学校法	教義論	全上	全緒上論	全緒上論		第三学年	定時
	二		三		一一	三三	三	四三	三三		第三学年	定時
三十	二		二		四	五	四	六	七		第四学年	定時
	全上		全上		全會学	全基 督教倫理	宗教史	全新約聖書	全考古学		第四学年	定時
	二		二		二一一	二二三	二二	三三	二二三		第四学年	定時

神学科第二部学科課程及授業時数表

シ

一、明治三十五年一月以後ノ本学院普通科卒業者及ビ大正五年一月以後ノ本学院中学部卒業者ニシテ聖書ノ試験ニ合格シタル者。

二、中学校卒業者、明治三十六年文部省令第十四号専門学校入学者検定期程第八条ニ依リ文部大臣ノ指定シタル学校ノ卒業者、及ビ全令ニ依リ試験検定ニ合格シタル者ニシテ聖書ノ試験ニ合格シタル者。

前二項ノ資格ヲ有セザル者ニシテ神学研究志望ノ者アルトキハ中学校卒業程度ノ国語漢文、地理歴史、及ビ聖書ニ就キテ試験ヲ課シ、之ニ合格シタル者ヲ撰科生トシテ入学ヲ許可スルコトアルベシ。

第十七条 文科、師範科、及商科ノ本科第一学年以上ニ入学ヲ許可スベキ者ハ各科ノ予科ニ入学シ得ベキ資格ヲ有シ前学年（予科ヲモ含ム）ノ学科課程ヲ卒リタル者ト同等ノ学力ヲ有スル者タルベシ。

第十八条 神学科第一部第二学年以上ニ入学ヲ許可スベキ者ハ神学科第一部第一学年ニ入学シ得ベキ資格ヲ有シ前学年ノ学科課程ヲ卒リタル者ト同等ノ学力ヲ有スル者タルベシ。

神学科第二部第二学年以上ニ入学ヲ許可スベキ者ハ神

学科第二部第一学年ニ入学シ得ベキ資格ヲ有シ前学年ノ学科課程ヲ卒リタル者ト同等ノ学力ヲ有スル者タルベシ。

第十九条 第十七条及第十八条ノ学力ハ試験ニ依リテ之ヲ定ム。

第二十条 生徒ニシテ退学シタル後一ケ年以内ニ再入学ヲ志願シタルトキハ試験ニ依ラズシテ原学年以下ノ学年ニ入学ヲ許可スルコトアルベシ。

第二十一条 生徒ニシテ学科課程相等シキ他ノ専門学校ニ転学ヲ志望スル者アルトキハ正当ノ事由アリト認めタル場合ニ限り其生徒ノ在学証明書及成績表ヲ移転先学校ニ送附スルモノトス。

第二十二条 学科課程相等シキ他ノ専門学校生徒ニシテ正当ノ事由ニ依リ転学ヲ希望スル者アルトキハ相当学年ニ編入スルコトアルベシ。

第二十三条 入学志願者ハ入学期日ニ先チ甲号書式ニ従ヒ入学願書ニ学業履歴書、卒業証明書、及ビ品行保証状ヲ添へ出願スベシ。

甲号書式（用紙大判改良美濃）

入学願書

私儀今般御学院専門部何科予科（或ハ何年）ニ入学志願

二付御許可相成度別紙履歷書、卒業証明書、及び品行保証状相添へ此段奉願上候也

年月日

止宿所

氏名 ㊦

私立東北学院長 氏名 殿

履歷書

一、出生年月日

二、本籍地

三、父兄ノ現住所

四、族籍（戸主何族或ハ平民何某何男）

五、父兄ノ官位勲爵若クハ職業

六、入学志願者ノ学業履歷

七、入学志願者ノ職業履歷

八、賞罰

右之通相違無之候也

年月日

氏名 ㊦

第二十四条 入学ノ許可ヲ得タル者ハ仙台市ニ居住シ独

立ノ生計ヲ営ム成年以上ノ男戸主ニシテ生徒ノ監督ヲ

ナシ得ベキ保証人ヲ立テ、戸籍謄本添付ノ上乙号書式

ノ在学証書ヲ提出スベシ。

乙号書式（用紙大判改良美濃）

在学証書

印紙
貼付

私儀今般入学御許可相成候ニ就テハ御学院規則等堅ク相
守リ勤学可致依テ在学証書差出候也

年月日

何府県何族
氏名

㊦

生年月日

私立東北学院長 氏名 殿

右何某儀入学御許可相成候ニ就テハ在学中本人ニ関スル
一切ノ事件ハ私引受可申依テ保証書如此ニ候也

仙台市 町 番地

族籍職業

保証人 氏名 ㊦

生年月日

第二十五条 保証人ノ転居、改印、改氏名等ハ其都度本

学院ニ届ケ出ツベシ。

第二十六条 保証人死亡スルカ又ハ第二十四条ノ資格喪失シタル場合ハ更ニ相当ノ保証人ヲ定メ第二十四条規定ノ証書ヲ提出スベシ。

第二十七条 生徒ニシテ左ノ各号ノ一ニ該当スル者アルトキハ退学ヲ命ズ

一、性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認めタル者

二、学力劣等ニシテ成業ノ見込ナシト認めタル者

三、引続キ一ケ年以上欠席シタル者

四、正当ノ事由ナクシテ引続キ一ケ月以上欠席シタル者

者

五、学院長ノ許可ヲ得ズシテ妄ニ試験ニ欠席シタル者

六、出席常ナラザル者

第二十八条 生徒退学セントスルトキハ其事由ヲ具シ保証人連署ノ上退学願書ヲ差出シ学院長ノ許可ヲ受クベシ。但退学セントスル者ニシテ在学中学院ヨリ学資ノ貸付ヲ受ケタル者アルトキハ全時ニ之ヲ返還セシムルモノトス。

第六章 試験

第二十九条 各学年ノ課程ノ修了又ハ全学科ノ卒業ヲ認ムルニハ平素ノ学業及試験ノ成績ヲ考查シテ之ヲ定ム。

第三十条 試験ヲ分チテ学期試験及学年試験トス。

第三十一条 学期試験ハ第一学期末及第二学期末ニ於テ其学期間ニ履修シタル学科ニ就キ之ヲ行フ。

第三十二条 学年試験ハ学年末ニ於テ其学期間ニ履修シタル学科ニ就キ之ヲ行フ。

第三十三条 各学科ノ平常評点ハ日課点ヲ学期末ニ於テ平均シタルモノトス。

第三十四条 各学科ノ学期評点ハ平常評点ヲ二倍シ之ニ学期試験ノ評点ヲ加ヘ其和ヲ三除シタルモノトス。但

第三学期ハ平常評点ヲ学期評点トス。

第三十五条 各学科ノ学年評点ハ三学期間ノ学期評点ニ学年試験評点ヲ加ヘ其和ヲ四除シタルモノトス。

第三十六条 総平均評点ハ各学科ノ総評点ヲ学科ノ数ニテ除シタルモノトス。

第三十七条 評点ハ各一百点ヲ以テ満点トス。

第三十八条 入学試験ノ評点ハ各学科六十点以上ヲ以テ合格トス。但六十点以下四十点以上ノモノニ科目マデ若クハ六十点以下三十点以上ノモノニ科目マデハ其学

科ニ就キ再試験ヲ行フコトアルベシ。

第三十九条 学年総平均評点七十点ニ満たザルカ若クハ二科目以上六十点ニ満たザルカ又ハ一科目ニテモ五十

点ニ滿タザル場合ニハ進級スルコトヲ得ズ。

第四十条 学期及学年試験ノ当日疾病或ハ不得止事故ニ依リ学院長ノ許可ヲ得テ欠席シタル者ハ次学期若クハ次学年ノ始ニ於テ特ニ追試験ヲ行フコトアルベシ。

第四十一条 規定ノ課程ヲ卒業シタル者ニハ丙号書式ノ卒業証書ヲ授与ス。

丙号書式

卒業証書

校印

族 籍

氏 名

生年月日

右本学院規定ノ学科ヲ履修シ成規ノ試業ヲ經テ専門部何科(文科、師範科、商科、神学科第一部、神学科第二部)ヲ卒業シタリ仍テ茲ニ之ヲ証ス

年 月 日

私立東北学院院长 氏 名 ㊦

第何号

第七章 授業料及手数料

第四十二条 生徒ハ授業料トシテ年額金貳拾五円ヲ七、

八ノ兩月ヲ除キ毎月五日マデニ金貳円五拾錢宛分納スベシ。但五日以後ニ出席シタル者或ハ新ニ入学シタル

者ハ当日之ヲ納付スベシ。

第四十三条 入学志願者ハ手数料トシテ入学願書ト共ニ金五拾錢ヲ納付スベシ。但既納ノ手数料ハ何等ノ事由アルモ之ヲ還付セズ。

第四十四条 新ニ入学ヲ許可セラレタル者ハ入学金トシテ金壹円ヲ即日納付スベシ。

第四十五条 本学院中学部及専門部各科ノ卒業者ニ限リ前二条ノ料金ヲ免除ス。

第八章 懲戒及賠償

第四十六条 本学院ノ諸規定ニ背キタル者及其他生徒タル本分ニ違ヒタル行為アル者ハ其輕重ニ依リ譴責、謹慎、停学、及放校ノ処分ヲ行フコトアルベシ。

第四十七条 本学院附属ノ図書或ハ器械器具等ヲ毀損亡失シタル生徒ニハ現品若クハ相当代価ヲ以テ之ヲ弁納セシムルコトアルベシ。

第九章 寄宿舎規則

第四十八条 入舎生ハ毎月五日迄所定ノ食料並ニ室料ヲ舎監ニ納付スベシ。但定期ニ納付セザルトキハ保証人ヨリ徴収ス。

第四十九条 入舎セント欲スル者ハ其ノ旨舎監ニ申出デ其ノ許可ヲ得タル上左式ニヨリ入舎証ヲ差出スベシ。

入舎証（用紙大判改良美濃）

何誰儀今般入舎御許可相成候ニ就テハ在舎中舎則ヲ遵守スルハ勿論妄ニ退舎致間敷且ツ本人一身上ニ関スル一切ノ事件ハ保証人ニ於テ引受ケ決シテ御迷惑相掛ケ申間敷候依テ保証人連署ノ上入舎証書差出候也

族籍

年月日

何之誰 ㊦

生年月日

住所 族籍

保証人 何之誰 ㊦

私立東北学院院长 氏名 殿

第五十条 在舎生徒ハ学院院长ノ訓諭ヲ遵奉シ幹事及舎

監之指揮ニ従フベシ。

第五十一条 在舎生徒ハ起臥出入等規則ニ従ヒ時刻ヲ厳

守シ舎監ノ指揮ニ従フベシ。

第五十二条 在舎生徒ハ来訪者アルトキハ通常応接所ニ

於テ面会スベシ。

第五十三条 在舎生徒ハ先ヅ舎監ノ許可ヲ得ルニアラザ

レバ疾病ノ故ヲ以テ欠課スルヲ得ズ。但疾病ニヨリ欠

課シタル者ハ舎監ノ許可ヲ得ルニアラザレバ欠課中外

出スルコトヲ得ズ。

第五十四条 在舎生徒帰舎ノ定刻ニ後ルゝカ又ハ外泊ヲ

要スルトキハ其事由ヲ具シ保証人連署ノ上証明書ヲ舎

監ニ差出スベシ。

第五十五条 在舎生徒ニシテ妄ニ外泊シ保証人連署ノ上

其理由ヲ具シタル証明書ヲ差出サザルトキハ退舎セシ

ムルコトアルベシ。

第五十六条 在舎生徒ニシテ舎内ノ諸規則或ハ時々ノ告

示ヲ遵奉セザルカ又ハ不良ノ行状アルトキハ退舎ヲ命

ズルコトアルベシ。

第五十七条 職員ハ随時寄宿舎ヲ巡視スルコトアルベ

シ。

第五十八条 舎内ノ細則ハ在舎生徒之ヲ撰定シ、院長ノ

許可ヲ受クベシ。

第五十九条 学院門戸ノ開閉ハ午前六時及ビ午後十時ヲ

以テ定限トス。時限外ハ職員及ビ小使ノ外門鑑ヲ所持

スルニ非ザレバ出入スルヲ得ズ。

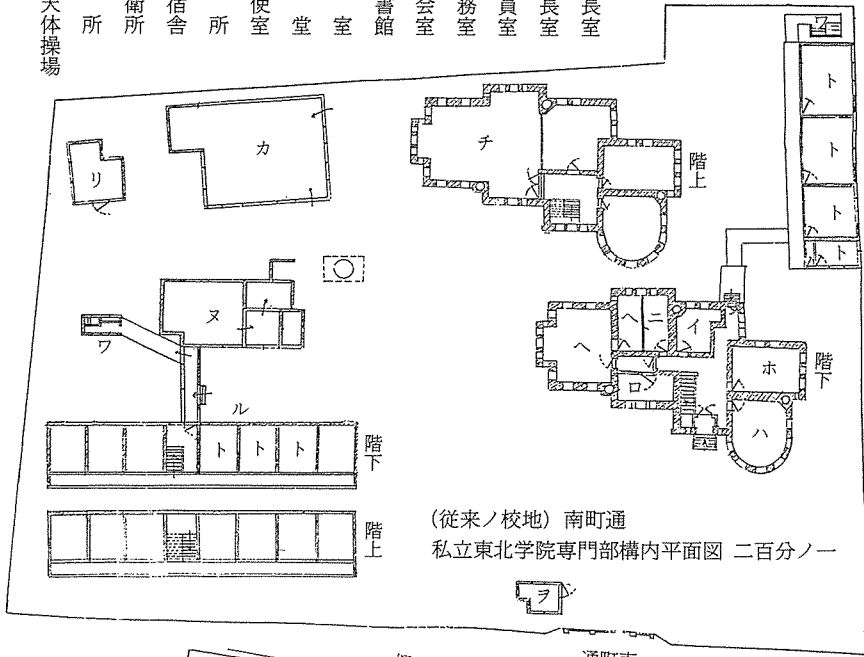
附則

本則施行ノ際在学セル生徒ハ其卒業スルニ至ルマデ仍

従前ノ規定ニ由ル

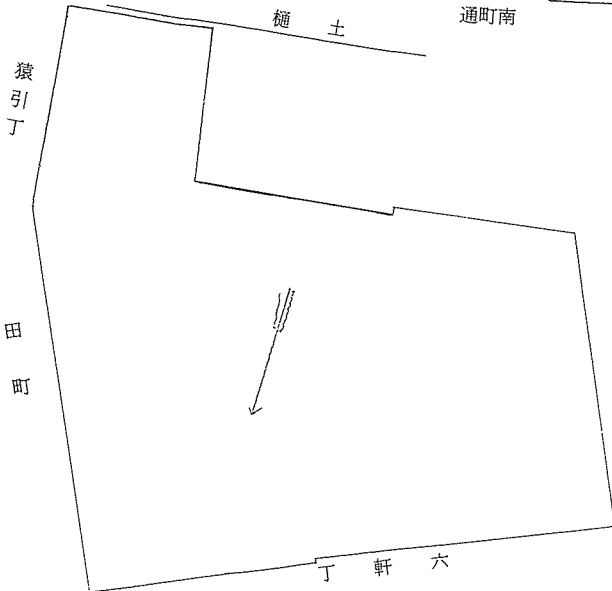
- カ、雨天体操場
- ワ、便所
- ヲ、門衛所
- ル、寄宿舎
- ヌ、賄所
- リ、小使室
- チ、講堂
- ト、教室
- ヘ、図書館
- ホ、集会室
- ニ、事務室
- ハ、教員室
- ロ、部長室
- イ、院長室

三、校地、校舎、寄宿舎図面



(従来ノ校地) 南町通
私立東北学院専門部構内平面図 二百分ノ一

校地総坪数貳十坪



(新ニ購入セル校地)
私立東北学院専門部校地略図
総坪数六千八百四十三坪七合八勺

四、教科書及参考書目録

英					漢	国	学科目	教科書目録
英文学史	英文学	作文及修辭	英文法	会話及作文	文	語	学年	
			一、二 コンサイス、 グラムマー	リツブマン氏 絵単語	史記列伝鈔		徒然草	予科
			フアドレッツ ザ氏 高等英文典	スミス氏 古今物語集 ロンドン・ライフ	孟子鈔		改正高等国文 (保元平治物語、平家物語、源平盛衰記、太平記)	本科第一学年
ハレツク氏 英文学史		テニスン詩集 ロングフェロー詩集	ロツクウツド氏 レツクスズ、イン、 イングリシュ			唐宋八大家文鈔	訂正高等国文 (源氏物語)	本科第二学年
全 上		シエークスピヤ氏 ジユリヤス、シー ザ ヂツケンス氏 エ、テール、オヴ、 ツウ、シチー ヘンリー、ヴァンダ イク文集					改正高等国文 (古事記、祝詞、宣命、 出雲風土記)	本科第三学年

拉 典 語	言 語 学	哲 学	歴 史	語	
				和 文 英 訳	英 文 和 訳
					散 文 読 本 ラム氏 沙 翁 物 語 ス ミ ス 氏 古 今 物 語 集
ダ カ ラ ー 氏 フ ア ー ス ト 、 ブ ツ ク ラ テ		テ ツ チ ナ ー 氏 十 時 彌 氏 新 論 理 学 綱 要	ブ ロ ビ ン ソ ン 氏 欧 州 史 要 第 一		二 十 世 紀 の 論 文 家 第 一 ア ー ウ イ ン グ 氏 ス ケ ツ チ 、 ブ ツ ク
全 上		デ ユ ウ エ ー 氏 倫 理 学	ロ ビ ン ソ ン 氏 ベ ヤ ド 氏 欧 州 史 要 第 二	パ ル グ レ ー ヴ 氏 ゴ ル ド ン 、 ト レ ジ ユ リ 、 オ ヴ 、 サ ン グ ス 、 エ ン ド 、 サ ン レ リ ツ ク ス	エ マ ー ソ ン 氏 代 表 的 人 物 論 マ コ ー レ ー 氏 カ ー ラ イ ト ン 氏 英 雄 崇 拝 論 デ ツ ケ ン ス 氏 テ ニ ス マ ス 、 カ ロ ル イ ノ ツ ク 、 ア ー デ ン ゴ ー ル ド ス ミ ス 氏 デ ザ ー テ ツ ド 、 ヴ イ レ ー ジ パ ル グ レ ー ヴ 氏 ゴ ル ド ン 、 ト レ ジ ユ リ 、 オ ヴ 、 サ ン グ ス 、 エ ン ド 、 サ ン レ リ ツ ク ス
	ス キ ー ト 氏 英 語 の 発 音	ウ エ バ ー 氏 哲 学 史			ジ ヨ ー ジ 、 エ リ オ ット 氏 サ イ ラ ス 、 マ ー ナ シ エ ー ク ス ピ ヤ 氏 マ ク ベ ス パ ル グ レ ー ヴ 氏 ゴ ル ド ン 、 ト レ ジ ユ リ 、 オ ヴ 、 サ ン グ ス 、 エ ン ド 、 サ ン レ リ ツ ク ス ミ ル ト ン 詩 集 抜 萃 ブ ラ ウ ニ ン グ 詩 集 抜 萃

参考書目録 国史大系 古事類苑 有朋堂文庫 近世文芸叢書 帝国文庫、統帝国文庫 国文叢書 国文註釈全書 国語辞典 社会辞彙 国歌大観 古事記伝 国文学歴代選 国文学全史 平安朝編 鎌倉室町時代小説史 近代小説史 列伝体小説史	有朋堂 国書刊行会 博文館 博文館 国学院出版部 上田万年・松井簡治共編 経済社 渡辺文雄・松下大三郎 本居宣長 文学博士 芳賀矢一 文学博士 藤岡作太郎 全 全 水舎不倒	明治文学史 我が国民思想の研究 日本文法論 史記評林 漢書評林 漢籍国字解 史記鱧 漢文大系 四書輯註 孟子論文 蘇批孟子 孟子欄外書 増評八家文読本 点註八家文読本 支那文学史 漢文典 訳文筌蹄	ソルンダイク氏 教育的心理学	ホルン氏 教育学 モンロー氏 教育史
		岩城進太郎 津田左右吉 山田孝雄 早稲田大学出版部 竹添井々著		

操觚字訣

故事熟語大字典

管子纂話

老子

莊子因

荀子箋釈

韓非子解詁

趙註列子

淮南鴻烈解

英文学史

英文学史

英文学史

英文学史

米國文学史

エリザベス朝文学史

ヴィクトリア朝文学史

英國小説作家

英國宗教劇

英國現代戯曲

小説研究

グレート、ブックス

池田芦洲著

ベルンハルド、テン、プリンク

テイヌ

パンコースト

ロング

ロング

デヨーヂ、セイנטツベリー

チエスタトン

ダウソン

カザリン、リー、ベーツ

デツケンソン

ブリッスパーリ

フアーラー

ボーカル、エンド、リテラ
リ、インタープレテシ
ヨン、オヴ、ザ、バイブル

ゼ、オレトリ、エンド、
ポエトリ、オヴ、ザ、バイ
ブル

シエークスピヤ伝

沙翁研究

ウイリヤム、シエークスピヤ研
究

シエークスピヤス、ラン
ドン

シエークスピヤ研究

チャールズ、デツケン
ス

ゼ、イングリシユ、ポエツ
ツ

(叢書)

ライブラリー、オヴ、ザ、
ウオールズ、ベスト、
リテラチュア (叢書)

ハーバード、クラシックス(叢
書)

イングリシユメン、オヴ、
レターズ (叢書)

英文学宝典

オックスフォード詩歌集

カーレ

フアヂナンド、エス、シエンク

サー、シドニー、リー

ハミルトン、ライト、メービー

バーレット、ウエンデル

ヘンリ、ステイヴンソン

ハドソン

チエスタトン

トーマス、ハンフレ、ワード

デヨン、モーレー

ケート、エム、ワレン

アーサー、キラ、カウチ

- | | | | |
|----------------|------------|-----------|-------------------|
| 英語の歴史 | ロンズベリ | 支那ト米國トノ關係 | 佐原研究室編 |
| 新英文典 | スキート | 支那政党史 | 市村讚次郎著 |
| シエークスピヤ文典 | アボット | 東洋史要 | ドグラス著 |
| 高等英文典 | オニアンズ | 歐羅巴ト極東 | ラインシユ著 |
| 現代英語文典 | クルイシシガ | 世界政策 | ランケ著 |
| 英語発音学 | リツプマン | 世界歴史 | ラングロア氏
セイニヨボ氏著 |
| 発音学 | リツプマン | 史学概論 | セイニヨボ氏著 |
| 発音学初歩 | ヘンリ、スキート | 古代文明史 | ケンブリツヂ |
| 英語発音学 | ヘンリ、スキート | 中世及近世文明史 | セイニヨボ氏著 |
| 英語の発音 | ダニエル、ジヨンス | 中世史 | ケンブリツヂ |
| 外国語教授法 | オット、エスペルゼン | 近世史 | ケンブリツヂ |
| オックスフォード英語大辞典 | | 中世及近世史精義 | ハーデング氏著 |
| 大英百科辞典 | | 近世歐洲史 | ファイフェ氏著 |
| スキート氏語原辞典 | | ナポレオン | フルニエ氏著 |
| シエークスピヤ、コンコードン | バートレット | 近世歐羅巴史解説 | ロビンソン氏著 |
| シエークスピヤ、レキシコン | シユミツト | 世界歴史 | ヘルモルト氏著 |
| 支那論 | 内藤虎次郎著 | 西洋歴史 | 箕作元八氏著 |
| 支那正観 | 有賀長雄著 | 西洋史講話 | 齋藤清太郎氏著 |
| 日本平英国乎 | 日高進著 | 西洋歴史地図 | ブツゲル氏著 |
| | | 歴史地図 | ゼエームス氏著 |
| | | 心理学 | ヴント氏著 |
| | | 生理的心理学 | |

心理学	エツピングハウス氏著	哲学史	エルドマン氏
一般及応用心理学	ミュンステルベルヒ氏著	哲学史	エーベルウイツヒ氏
心理学	速見滉氏著	近世哲学史	クノウフィツシヤー氏
心理学綱要	元良博士著	哲学史	ヴィンデルバンド氏
心理学	スタウト氏著	哲学史	テーリー氏
論理学	ジョン、スチュワート、ミル氏著	西洋哲学史	大西博士著
形式的論理学	ジョン、ネビル、ケーネス氏著	アドレセンス	スタンレー、ホール氏
科学ノ原理	ゼボンス氏著	教育問題	全 氏
論理学	ボザンケ氏著	教育原理	ホルトン氏
論理学	グント氏著	教育論	スペンサー氏
論理学	大西博士著	教育哲学	ローゼンクランツ氏
論理学	アリストートル氏著	教育論	パウルゼン氏
論理学	グリーン氏著	教育学	大瀬甚太郎著
論理学批判	シヂウイツグ氏著	実験教育学	乙竹岩造著
論理学	パウルゼン氏著	教育史	モンロー氏
論理学	グント氏著	教育史	グレーヴス氏
論理学原理	モーア氏著	教育史	ペーリター氏
論理学	マツケンジイ氏著	日本教育史	横山達三著
大日本倫理思想発達史	岩沢遵成氏著	教育史	渡辺政盛著
日本倫理彙編		拉典文法	アーレン氏グリノー氏
論理学	大西博士著	拉典字書	ハーパー氏

五、教授器械及標本目録

- 一、生徒用机（腰掛付一人用） 一〇五
 - 一、全（来三月末マデ完成ノ見込ニテ製造中ノモノ） 五〇
 - 一、教員用机（各教場備付） 一〇
 - 一、全（教員室） 一〇
 - 一、教員用椅子（各教場備付） 一〇
 - 一、全（教員室） 一〇
 - 一、黑板（壁ヲ黒ク塗リテ黑板ノ用ニ供スルモノ） 六
 - 一、全 一四
 - 一、白墨箱 一〇
 - 一、腰掛六人用（講堂用） 一二
 - 一、全 四人用（〃） 二一
 - 一、腰掛四人用（図書館用） 一
 - 一、テーブル（〃） 四
 - 一、椅子（〃） 五
 - 一、発音表 一
 - 一、人体図解 一
 - 一、人体模型 一
- 備考 運動用具、地図、及標本等ハ当分中学部ト共用

六、教員履歴書、受持学科及専任兼任ノ区別ヲ記シタル
調書

私立東北学院専門部教員履歴書

履歴書

北米合衆国ペンシルヴァニア州ポーマンズヴィル村
現住所 宮城県仙台市東三番丁七十八番地

デーヴィッド、ポーマン、シユネーター

西曆千八百五十七年三月廿三日生

学業

一、千八百七十六年九月合衆国フランクリン・エンド・マ
ーシャル・カレッジニ入学シ、千八百八十年六月全校卒
業。（バチエラー、オヴ、アーツ）

一、千八百八十年九月合衆国ランキャスター神学校ニ入
学、千八百八十三年五月全校卒業。

一、千八百九十六年ヨリ千八百九十七年二亘リ、独逸ベ
ルリン大学ニ六週間、ハレー大学ニ五週間客生トシテ
聴講シ、ソノ他全国ライプツヒ及イエナ両大学、英
国オックスフォード及エデンポロー両大学ニ於テモ聴
講セリ。

一、千八百九十九年合衆国フランクリン、エンド、マーシ

ヤル、カレツヂヨリ(ドクトル、オヴ、デヴィニテー)ノ
学位ヲ受ク。

職業

一、千八百八十八年(明治廿一年)一月仙台私立東北学
院教授トナリ引キ続キ在職中。

一、明治廿四年七月私立東北学院長トナリ引キ続キ在職
中。

一、全世九年ヨリ全四十年ニ亘リ米国諸大学、英国パプ
リツク、スクールス、独逸ギムナジウムヲ視察調査ス。

賞罰

一、大正五年勲四等ニ叙シ旭日章ヲ授ケラル。

履歴書

本籍地 千葉県印幡郡佐倉町大字宮小路世五番地

士族

現住所 宮城県仙台市長丁八番地

福沢 定興

慶応元年八月一日生

学業

一、明治十九年東京二松学舎ニ入り、全廿一年十二月全
舎全科卒業。

職業

一、明治廿二年二松学舎助教トナル。

一、全廿三年全舎塾頭トナル。

一、全廿六年十月仙台私立東北学院教授トナリ引キ続キ
在職中。

履歴書

本籍地 宮城県仙台市南六軒丁式番地

現住所 全

出村悌三郎

明治六年二月十二日生

学業

一、明治十九年九月私立新瀉英語学校ニ入学。

一、全廿年十月ヨリ全廿四年四月マデ私立北越学館ニ在
学。

一、同廿五年一月仙台市私立東北学院ニ入り、全廿六年
六月本科卒業。

一、全廿六年九月私立東北学院英語神学部ニ入り、全廿
九年六月全部卒業。

一、全世三年九月米国パシヒツク神学校ニ入り、全世四
年五月全校卒業。(パチエラー、オヴ、デヴィニテー)。

一、全世三年九月米国パシヒツク神学校ニ入り、全世四
年五月全校卒業。(パチエラー、オヴ、デヴィニテー)。

一、全世四年九月米国エール大学ニ入り、全世五年六月
全校卒業。(マスター、オヴ、アーツ)。

一、全四十三年九月米国ハーバード大学研究科ニ入り、
全四十五年六月全科卒業。(ドクトル、オヴ、フィロソフ
イー)。

職業

一、明治廿九年七月私立東北学院教授トナリ引き続き在
職中。

一、全世七年私立東北学院専門部長トナリ引き続き在職
中。

履歴書

北米合衆国ペンシルヴァニア州ランキャスター市
セント、ジューク街百三十一番地

現住所 宮城県仙台市南六軒丁六番地

ポール、ラムバード、ゲルハード

西曆千八百七十三年七月四日生

學歷

一、千八百九十四年六月合衆国フランクリン、エンド、マ
ーシャル、カレッヂ卒業。(バチエラー、オヴ、アーツ)
一、千八百九十五年九月ヨリ千八百九十六年六月マデ合

衆国ランキャスター神学校ニ在学。

一、千八百九十九年六月フランクリン、エンド、マーシャ
ル、カレッヂ、ヨリ(マスター、オヴ、アーツ)ノ学位ヲ
受ク。

一、千九百一年九月合衆国ランキャスター神学校ニ再入
学、千九百二年六月全校ヲ卒業。

職業

一、千八百九十七年(明治卅年)一月仙台私立東北学院
教授トナリ引き続き在職中。

履歴書

本籍地 福島県若松市徒士町百三番地 士族

現住所 宮城県仙台市北三番丁二十二番地

梶原長八郎

慶応元年九月十三日生

學歷

一、明治廿一年十一月ヨリ全廿四年八月マデ米国フィラ
デルファイヤ市ライマン氏ニ就キテ地質学研究。

一、全廿四年九月ヨリ廿六年五月マデプリンストン大学

ニ在学。

一、全廿六年九月プリンストン神学校ニ入学全卅年五月

全校卒業。

職業

- 一、明治卅一年十一月ヨリ全卅三年二月マデ福島県若松市ニ於テ基督教ノ伝道ニ従事。
- 一、全卅三年四月仙台市私立東北学院神学部教授トナリ、引キ続キ在職中。

履歴書

本籍地 山口県豊浦郡長府村第三百十八番地

平民

現住所 宮城県仙台市花京院通二三番地

笹尾衆太郎

明治四年二月廿五日生

学業

- 一、明治廿五年六月東京私立明治学院普通学部卒業。
- 一、全廿五年九月米國ニユ一、ヨーク州オーボン神学校ニ入学シ、全廿八年五月全校卒業。
- 一、全廿八年九月ヨリ全廿九年五月マデ米國コロンビヤ大学哲学研究部ニ在学。
- 一、全廿九年十月ヨリ全卅年三月マデ独逸ベルリン大学ニ在学。

- 一、全卅年四月ヨリ全卅一年五月マデ独逸ハレ大学ニ在学。

一、全卅一年十月ヨリ全卅二年八月マデ独逸ボン大学ニ在学。(マギストル、アーチウム。ドクトル、フィロゾフエー)

職業

- 一、明治卅二年八月ヨリ全三十三年八月マデ独逸国教育事情調査ニ従事。

一、全卅三年十月仙台市私立東北学院教授トナリ、引キ続キ在職中。

履歴書

本籍地 新潟県中頸城郡高城村大字南出丸無番戸

現住所 宮城県仙台市空堀丁一四番地

須藤 鬼一

明治二年十月十五日生

学業

- 一、明治廿四年四月仙台市私立東北学院本科ニ入学。
- 一、全廿六年四月私立東北学院邦語神学科ニ転学、全廿八年六月卒業。

職業

一、明治廿三年三月ヨリ全廿七年七月マデ新潟県私立高田
高等女学校教員。

一、全廿二年六月ヨリ全廿四年四月マデ東京高等師範学
校歴史科副手。

一、全廿四年四月ヨリ全廿六年六月マデ愛媛県八幡浜商
業学校教諭。

一、全廿六年七月宮城県私立東北学院教授トナリ、引き
続キ在職中。

履 歴 書

本籍地 宮城県仙台市東七番丁四番地 士族

現住所 全

郡山源四郎

明治五年六月廿八日生

学 業

一、明治廿年二月石川県金沢市私立北陸英和学校ニ入り、
全廿四年六月全校卒業。

一、全廿六年九月私立明治学院普通学部第四年級ニ入学、
全廿七年六月全部卒業。

一、全廿七年九月私立明治学院神学部ニ入学、全廿年全
部卒業。

職 業

一、明治廿五年二月ヨリ全廿六年八月マデ富山県下礪波
小学校訓導。

一、全廿一年三月ヨリ全年十二月マデ島根県立第一尋常
中学校教員。

一、全廿二年三月ヨリ全廿四年九月マデ岐阜県立東濃中
学校教員。

一、全廿五年四月ヨリ全廿七年三月マデ福島県立会津中
学校教員。

一、全廿七年四月ヨリ仙台市私立東北学院普通科教員ト
ナリ引き続キ在職中。

一、全四十三年私立東北学院専門部教授トナリ引き続キ
在職中。

履 歴 書

米国合衆国ペンシルヴァニア州リーハイ郡アレン
タウン

現住所 宮城県仙台市土樋百二五番地

ウイリアム、ジョージ、サイプル

西曆千八百七十七年二月四日生

学 業

一、西曆千八百九十四年合衆国ペンシルヴァニア州アーレンタウン市高等学校卒業後全市ミュレンベルグ、カレッヂニ入学全校ニ於テ三ヶ年修業。

一、全千八百九十七年ペンシルヴァニア州ランキヤスター市フランクリン、エンド、マーシヤル、カレッヂ第四学年ニ入学、千八百九十八年全校卒業(バチエラー、オヴ、アーツ)

一、全千八百九十八年ペンシルヴァニア州ランキヤスター神学校ニ入学、千九百一年全校卒業。(マスター、オヴ、アーツ)

一、全千九百一年メーリーランド州バルテモア市ジョンズ、ホプキンス大学研究科ニ入学、千九百五年マデ希伯来語ヲ専攻シ傍希臘語、セミチツク各語及フィリッピン語ヲ学ブ。(ドクトル、オヴ、フィロソフィー)

一、全千九百一年ヨリ千九百二年マデ、ジョンズ、ホプキンス大学ノ特待生トナリ千九百三年ヨリ千九百四年マデ、ウイリヤム、エス、レーナーノ奨学金ヲ受ク。

職業

一、西曆千九百二年ヨリ千九百三年マデ、メーリーランド州バルテモア市ダイヒマン予備校ニ於テ独逸語、仏蘭西語、羅典語及英語ヲ教授ス。

一、全千九百五年(明治廿八年)九月日本ニ渡来私立東北学院専門部教授トナリ引キ続キ在職中。

履歴書

北米合衆国ペンシルヴァニア州ランキヤスター市
セントジーク街一三一番地
現住所 宮城県仙台市空堀丁四一番地

メーリー、エンマ、ゲルハード

西曆千八百七十八年二月十一日生

学業

一、千八百九十一年九月合衆国ランキヤスター高等女学校ニ入り、千八百九十五年六月全校卒業。

一、千八百九十七年九月合衆国フレデリック女子大学ニ入り、千八百九十九年六月全校卒業。(バチエラー、オヴ、アーツ)。

一、千九百十一年四月ヨリ千九百十二年九月マデ、心理学、英文学、英語教授法ヲ研究ス。

職業

一、千九百二年ヨリ千九百三年マデ合衆国ペンシルヴァニア州ニ於テ小学校教師。

一、千九百三年ヨリ千九百五年マデ合衆国フレデリック

女子大学教授。

一、千九百五年（明治廿八年）十月仙台市私立東北学院教授トナリ、引き続き在職中。

履 歴 書

北米合衆国オハヨー州ウエーン郡マウント、イー
トン

現住所 宮城県仙台市片平丁六九番地

エルマー、ハリー、ゾーグ

西曆千八百八十一年十月十四日生

学 業

一、千八百九十六年九月米国ハイデルベルグ、アキヤデミ
ーニ入り、千八百九十七年六月全校卒業。

二、千八百九十九年九月米国ハイデルベルグ大学ニ入り、
千九百三年六月全校卒業。（バチエラー、オヴ、アーツ）

一、千九百三年九月米国ハイデルベルグ神学校ニ入学、
千九百六年四月全校卒業。

一、千九百十四年九月米国シカゴ大学研究科ニ入学、千
九百十六年五月全科卒業。（ドクトル、オヴ、フィロソフ
イー）。

職 業

一、千九百六年（明治廿九年）十一月仙台市私立東北学

院教授トナリ、引き続き在職中。

履 歴 書

本籍地 石川県江沼郡大聖寺町木呂場十番地

士族

現住所 宮城県仙台市東二番丁三五番地

伊藤 嘉吉

明治七年十月廿四日生

学 歴

一、明治廿六年五月仙台市私立東北学院本科第二学年ニ
入り全廿八年六月卒業。

一、全廿八年九月私立東北学院英語神学部ニ入り、全廿
一年六月全科卒業。

一、大正二年九月米国ハートフォード神学校ニ入り、大
正四年五月全校卒業。（マスター、オヴ、セークレツド、
セオロジー）

職 業

一、明治廿一年十月ヨリ全四十年九月マデ山形市、宮城
県白石町、高知市、及下関市ニ於テ基督教ノ伝道ニ従
事。

一、全四十年十二月宮城県私立東北学院神学科教授トナリ、引キ続キ在職中。

履 歴 書

本籍地 宮城県仙台市東二番丁貳拾番地

戸主平民

現住所 全

津田 郁

明治十三年十月廿八日生

学 業

一、明治卅二年四月私立東北学院普通科第二学年ニ入学全卅七年三月卒業。

一、全卅七年四月私立東北学院専門部文科第一学年ニ入学全四十年三月全科卒業。

職 業

一、全四十年十月ヨリ全年十二月マデ私立東北学院普通科教員。

一、全四十年十二月一年志願兵トシテ歩兵第四聯隊ニ入営。

一、全四十一年十一月被任陸軍歩兵軍曹。

一、全年十二月予備役ニ編入。

一、全四十二年八月被命予備見習士官。

一、全年十一月終末試験ニ及第、召集解除。

一、全四十三年五月被任歩兵少尉、被叙正八位。

一、全年十一月私立東北学院普通科体操科教員トナリ、引キ続キ在職中。

一、大正元年十月私立東北学院専門部体操科教員トナリ、引キ続キ在職中。

履 歴 書

本籍地 愛媛県越智郡今治町大字本町百五十六番

地 平民

現住所 宮城県仙台市北三番丁十一番地

矢野猪三郎

明治七年十一月六日生

学 業

一、明治廿四年九月私立東北学院本科第一学年ニ入学、全二十八年六月卒業。

一、全廿八年九月私立東北学院英語神学部ニ入学、全卅一年六月卒業。

一、全卅八年八月渡米、ユニオン神学校研究科ニ入学、壹箇年間神学研究。

一、明治廿九年九月プリンストン大学ニ入学、全四十一年六月卒業。パチエラー、オヴ、デヴィニター及ビマス
ター、オヴ、アーツ。ノ学位ヲ受ク。

一、全四十一年九月エル大学研究科ニ入学、哲学、心理学、社会学ヲ壹箇年間研究。

一、全四十三年十一月帰朝。

職業

一、明治卅一年十月ヨリ全卅八年四月マデ山形県酒田町及ビ宮城県角田町ニ於テ基督教ノ伝道ニ従事。

一、明治四十四年一月私立東北学院専門部教授ニ就任、引キ続キ奉職中。

履歴書

本籍地 石川県金沢市御歩町三番町十九番地 士族

現住所 宮城県仙台市東八番丁十八番地

渡辺 鼎

明治廿三年九月九日生

学業

一、明治廿六年四月石川県立金沢第一中学校ニ入学、全四十一年三月同校卒業。

一、全四十二年九月第四高等学校大学予科第一部ニ入学、全四十五年七月全科課程卒業。

一、全四十五年七月東京帝国大学文科大学史学科ニ入学、大正四年七月全科卒業。

一、大正四年八月師範学校中学校高等女学校歴史科教員免許状ヲ受ク。

職業

一、大正四年九月私立東北学院専門部歴史科教員ニ就任、引キ続キ在職中。

履歴書

本籍地 静岡県浜名郡浜松市伊場六拾八番地 戸主士族

現住所 仙台市米袋下町二番地

岡部美二一

明治廿二年三月廿二日生

学歴

一、明治廿五年四月静岡県立浜松中学校ニ入学、全四十四年三月全校卒業。

一、全四十一年七月京都第参高等学校一部内類ニ入学、全四十五年七月全校卒業。

一、全四十五年七月東京帝国大学文科国文科二入学、大正四年七月卒業。

一、大正五年四月、国語及漢文科、独逸語科中等教員免許状下附。

職業

一、大正五年四月私立東北学院中学部教員就任引キ続キ在職中。

一、全六年一月全専門部教授就任引キ続キ在職中

履歴書

北米合衆国イリノイス州フォレストン市

現住所 宮城県仙台市光禪寺通五十九番地

フレッド、ボーマン、ニコデマス

西曆千八百八十四年六月十九日生

学業

一、千九百三年（明治廿六年）六月北米合衆国イリノイス州フォレストン市ハイ、スクール卒業。

一、千九百九年六月北米合衆国イリノイス州立大学卒業。バチエラー、オヴ、サイエンスノ学位ヲ受ク。

一、千九百九年（明治四十二年）九月日本国ニ渡来、直ニ日本語ノ研究ヲ始ム。

職業

一、千九百三年イリノイス州フォレストン市ハイ、スクール、ニ於テ半ケ年間音楽ノ教授ヲ担任ス。

一、千九百九年（明治四十二年）九月ヨリ全四十四年九月マデ大阪市北野中学校及私立大倉商業学校ニ於テ英語ヲ教授ス。

一、明治四十四年九月ヨリ大正五年六月マデ台湾總督府台北中学校ニ於テ英語ヲ教授ス。

一、大正五年九月ヨリ私立東北学院中学部英語科教員ニ就任、引キ続キ在職中。

一、大正七年四月ヨリ私立東北学院専門部英語及英文学科教授ニ就任、引キ続キ在職中。

履歴書

本籍地 郡馬県山田郡大間々町百四十二番地 戸

主平民小平長男

現住所 宮城県仙台市北二番丁七十八番地

長沢英一郎

明治廿二年一月三十日生

学業

一、明治四十三年九月受験合格私立立教大学文科本科第

一学年ニ入学。

一、全四十四年二月東京府立第三中学校ニ於テ施行ノ専門学校入学者検定試験ニ合格。

一、大正二年三月立教大学卒業。

一、大正二年九月東京帝国大学文科大学英文科選科ニ入学。

一、全四年仙台第二高等学校ニ於テ施行ノ大学予科卒業
学力検定試験ニ合格。

一、全四年九月東京帝国大学文科大学英文科ニ入学。

一、全五年七月全卒業。

職業

一、大正五年四月ヨリ全六年七月マデ私立明治中学校(東京)英語科教員奉職。

一、全六年九月私立東北学院専門部英語科教員ニ就職、
引キ続キ在職中。

履歴書

本籍地 栃木県那須郡西那須野村百廿六番地 戸

主平民弥三郎三男

現住所 宮城県宮城郡原町字二軒茶屋二番地

田島 堅固

明治十七年五月六日生

学業

一、明治卅一年太田原町尋常高等小学校卒業。

一、全卅三年仙台市私立東北学院普通科ニ入学、全卅八年全科卒業。

一、全卅八年私立東北学院専門部文科第一学年ニ入学、
全四十一年全科第三学年ニテ退学。

一、全四十一年ヨリ四十二年マデ米国南加大学ニ在学。

一、全四十二年ヨリ大正二年マデ太平洋宗教大学、及カリ
フォルニア大学ニ在学、卒業ノ際前者ヨリパチエラー、
オヴ、デヴィニテ、ノ学位ヲ受ク。

一、大正二年ヨリ全三年マデ太平洋宗教大学大学院ニ在
学、マスター、オヴ、セエークレツド、セオロジ、ノ学
位ヲ受ク。

一、全三年ヨリ全四年マデエール大学大学院ニ在学。

職業

一、大正四年ヨリ全六年マデ米国加州リバーサイド市日
本人組合教会牧師。

一、全六年九月仙台市私立東北学院専門部教授ニ就任、
引キ続キ在職中。

履 歴 書

本籍地 宮城県仙台市石名坂六十三番地 戸主

族

現住所 全

下山彦太郎

明治廿八年二月十一日生

学 業

一、明治廿四年四月仙台市南材木町尋常高等小学校二入
り、全四十一年全校高等科第三学年ヲ修了。

一、全四十一年四月宮城県立第一中学校二入学、大正二
年三月全校卒業。

一、大正二年四月宮城県私立東北学院専門部文科二入学、
全五年三月全科卒業。

一、全五年四月ヨリ全七年三月マデ全科専攻生トシテ英
文学ヲ研究ス。

職 業

一、大正七年四月私立東北学院専門部英語科教授ニ就任、
引キ続キ在職中。

履 歴 書

本籍地 茨城県北相馬郡北文間村字長沖廿三番地

現住所 宮城県仙台市堤通百廿三番地

飯塚 陽平

明治六年四月十五日生

学 業

一、明治廿二年九月、東京、京橋、西紺屋町福音会夜学
校二入学、全廿四年七月全校卒業。

一、全廿四年九月、東京、神田、錦町国民英学会二入学、
全廿五年六月全会卒業。

一、全廿五年九月、東京、芝、三田四国町先進学院二入
学、全廿八年六月全院卒業。

職 業

一、明治廿九年七月ヨリ全卅二年四月マデ東京、麴町、四
番丁、イーストレーキ家塾ニテ英語教授。

一、全卅二年五月ヨリ全年十一月マデジャパン、タイムス社
ニテ編輯ニ従事。

一、全卅二年十二月ヨリ全卅二年四月マデ東京正則英語学
校講師。

一、全卅二年四月ヨ全卅五年三月マデ県立長野中学校校
員嘱託。

一、全卅五年四月ヨリ全卅八年三月マデ東京正則英語学
校講師嘱託。

私立東北学院専門部教員調		専任兼任 ノ区別	兼任 学校名	氏名
受持学科	教義学、神学緒論、修身	専任		デューネーダー、 シユネーダー、 福沢定興
	漢文	〃		出村悌三郎
	哲学、心理学、論理学、倫理学、教育、英語	〃		ピエール、ゲルハート
	英語、修辞学、英文学史	〃		梶原長八郎
	新約聖書積義、旧約聖書積義、説教	〃		笹尾条太郎
	哲学、教義学、独逸語	〃		須藤鬼一
	作文、歴史	〃		郡山源四郎
	英語	〃		ダブサリユール、 ジエール、サイプ
	旧約聖書積義、旧約聖書緒論、希伯来語、希臘語、拉典語	〃		エム、イー、ゲルハート
	英語、英文学	〃		イー、エチ、ゾーグ
	新約聖書積義、教会史、希臘語、唱歌、英語	〃		

一、全廿八年四月ヨリ全廿九年三月マデ東京私立中央大
学講師嘱託。

一、全四十一年四月ヨリ全四十三年三月マデ東京私立国
学院大学講師。

一、全四十三年六月ヨリ全四十五年五月マデ満州大連マ
ンチュリヤ、デーリー、ニュース社ニテ編輯ニ従事。

一、大正元年九月ヨリ大正四年八月迄東京正則英語学校
及私立日本大学講師嘱託。

一、全四年八月仙台第二高等学校英語講師嘱託。
一、全七年十月私立東北学院専門部英語科講師嘱託。

一、全年十一月仙台第二高等学校教授就任。

英語、(和文英訳)										
英語										
英語、英文学										
宗教史、基督教倫理学、新約聖書釈義、英語										
英語、英文学										
国語、作文										
歴史										
弁証論、基督教倫理学、哲学、新約聖書釈義、修身										
体操										
聖書歴史、聖書神学、旧約聖書釈義、新約聖書緒論、牧会学										
兼任	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
学校教授										
飯塚陽平	下山彦太郎	エフ、ビー、ニコデマス	田島堅固	長沢英一郎	岡部美二	渡辺	矢野猪三郎	津田郁	伊藤嘉吉	

七、私立東北学院専門部経費予算(大正七年度分)

収入総計金 壹万参千五百参拾八円

内 訳 一〇、三三〇円 米国リフォームド教

会外国伝道局ヨリノ寄附金

二、二五〇 授業料

四五 手数料

四〇五 雑収入

五〇八 繰越金

一三、五三八 合計

支出総計金

壹万参千五百参拾八円
九、六〇〇 教員俸給

内 訳 四八〇 雇員給

四〇〇 傭人給

四〇〇 消耗費

九〇〇 図書費

三〇〇 修繕費

三七〇 体育費

一〇〇 器械費

三〇〇 雑費

六八八 予備費
一三、五三八 合計

(参考) 本学院卒業者ニシテ

英語教育ニ従事スル者

出村 悌三郎 菅原 静
五十嵐 正 寺田 醇造
石塚 敬一 川澤 丑治
藤田 兵太郎 赤星 仙太
栗原 基 紺戸 喬
青柳 新米 横山 時雄
岸波 常蔵 浜名 正
阪野 峻 佐藤 三郎
金矢 武吉 諸石 靖
田島 堅固 下山 彦太郎
中島 栄一 田口 秀雄
木村 久一 三浦 一郎
小笠原 常蔵 鈴木 潔治
三品 鼎 葛岡 常治
安島 八郎
英語教育ニ従事シタルコトアル者

金成 兵助 大場 俊治
島貫 兵太夫 遊佐 敏彦
中村 長之助 菅野 源五郎
永嶋 藤三 大津 久之助
井上 哲郎 山川 丙三郎
前田 次郎 山 里 善美
渡辺 安 鈴木 誠治
伊藤 英樹 高橋 潔
鈴木 庸 小林 建雄
斎藤 昇三 須藤 鬼一
斎藤 正 須藤 鷺郎
野澤 剛 増富 平蔵
出村 剛

知事 ⑩ 内務部 ⑩ 教育課長 ⑩ 課僚 ⑩ 主任属 遠藤 武蔵 ⑩

知事 文部大臣宛

私立学校卒業生ノ教員免許ニ関スル儀ニ付副申

管下私立東北学院専門部師範科卒業生ニ対シ明治二十九年文部省令第十二号師範学校中学校高等女学校教員免許規則第十条第一項第一号ニ掲クル学校ノ卒業生ト同一ノ

御取扱相成度旨設立者デ、ビト、シユネーダーヨリ申請有之候処本校ハ去ル明治十九年ノ創立ニ依リ全三十七年ニ至リ専門部ヲ設置シ卒業生ヲ出シタルコト百十一名ニシテ其ノ過半ハ現ニ教育ニ従事スル等専ラ我国教育界ノ為ニ尽力シ来リシカ時勢ノ進運ト社会ノ要求下ニ鑑ミ兼ネテ戦後ノ経営ニ資センカ為メ昨年四月八日御認可ヲ得テ規模ヲ拡張シ内容ノ改善及設備ノ完成ニ全力ヲ注キ既ニ新校地ノ如キ全部買収ヲ了シ着々工事ノ進捗ヲ図リツヽアル現況ニ有之既往ノ成績ニ徴スルモ不都合ノ廉無之被認候条右御認可相成候様致度別紙進達此段及副申候也

一、専門部設置明治廿七年

一、卒業生百十名既ニ中等教員タル者多シ

一、昨年四月ヨリ規模拡張計画

一、免許状ヲ得ントスル学科ハ英語（師範科卒業生ノミニ対シ）

一、師範科修業年限四年（予科一年本科三年）

一、英語授業時間（一週間ニ）予科・二一、本科一・十五、本科二・十四、本科三・十四、其他国漢教育修身

歴史法制等ヲ授ク

〔注・大正八年三月二十七日付〕

私立東北学院専門部師範科卒業生ニ対シ無試験検定取扱ニ関スル件依命通牒

大正八年三月二十七日教第一四〇三号デ御進達ノ表記ノ件ハ本日別紙ノ通指令ニナリマシタガ右ハ左記事項ヲ条件トシテ詮議ニナツタ次第第二ツキ其旨必ず申請者ニ御示達ヲ乞フ

大正九年九月廿二日

文部省普通学務局長 赤司鷹一郎 ㊟

宮城県知事 森 正隆殿

追テ本件ハ同院設立者トシテ、デト、ビト、シユネーダーヨリ申請アリタルモ同院ハ社団法人私立東北学院ガ設立シテ居ル管デアリマスカラ、便宜、同人ハ右法人ヲ代表シテ申請シタルモノト看做シ同法人ニ指令相成リタル次第二付之亦御含ノ上申請者ニ御伝達相成候

記

一、同院専門部学則第十七条ニ「但シ師範科ニ在リテハ半途入學ヲ許サズ」、同第二十二條ニ「但シ師範科ノ本科ニ在リテハ此ノ限ニ在ラス」ノ但書ヲ加ヘ速ニ之ヲ開申スルコト

文部省高普四四号

社団法人私立東北学院

大正八年三月十一日専発第二二号申請私立東北学院専門部師範科卒業者ニ対シ英語ニ就キ明治三十二年文部省令第二十五号第一条ノ取扱ヲ受クルノ件許可ス

但シ大正十一年三月以後ノ卒業者ニ限ル

大正九年九月二十二日

文部大臣 中橋徳五郎 印

内務部長 教育課長後関 課僚 印 印 印

知事 印 県名 主任 属 藤澤 五郎 印

東北学院院长宛

曩ニ願出ニ相成候貴院専門部師範科卒業者ニ対シ無試験檢定取扱ニ関シ別紙ノ通指令有之候処右ハ左記事項ヲ条件トシテ御詮議相成タル次第ニ有之候条御了承相成度候也

追テ本件ハ貴院設立者トシテハ貴職ヨリ申請有之タルモ貴院ハ社団法人私立東北学院ヲ設立致シ居ル等ニ候間便宜責職ヲ右法人ノ代表者ト看做シテ同法人ニ指令相成リタル次第ニ付之亦御了承相成度旨其筋ヨリ通牒ノ次第

モ有之候条申添候也

記

一、同院専門部学則中第十七条ニ「但シ師範科ニ在リテハ半途入学ヲ許サズ」

同二十二条ニ「但シ師範科ノ本科ニ在リテハ此限ニ在ラス」ノ但書ヲ加ヘ速ニ之ヲ開申スルコト

学則變更願

今般本学院専門部学則中

第六条第三項

商科ノ学科目ハ修身、国語及漢文、英語、歴史及地理、哲学、法制經濟及社会学、商業学、商業算術、財政及統計、簿記、商業英語、露西亜語及体操トス

トアルヲ

商科ノ学科目ハ修身、国語及漢文、英語、歴史、社会学、哲学、法律、商業及經濟及体操トス。ト

第七条 商科学科目課程及授業時数表ヲ朱書ノ通り。

第十二条 文科予科ニ入学シ得ル者左ノ如シ

一、明治三十五年一月以後ノ本学院普通科卒業者及ヒ大正五年以後ノ本学院中学校卒業者。

二、中学校卒業者明治三十六年文部省令第十四号専門

学校入学者検定規程第八条ニ依リ文部大臣ノ指定シタル学校ノ卒業者、及ビ全令ニ依リ試験検定ニ合格シタル者。

トアルヲ

一、中学校卒業者。

二、明治三十六年文部省令第十四号専門学校入学者検定規程第八条ニ依リ文部大臣ノ指定シタル学校ノ卒業者、及ビ全令ニ依リ試験検定ニ合格シタル者。ト

第十三条 師範科予科ニ入学シ得ル者左ノ如シ

一、明治三十五年一月以後ノ本学院普通科卒業者及ビ大正五年一月以後ノ本学院中学部卒業者。

二、中学校卒業者、明治三十六年文部省令第十四号専門学校入学者検定規程第八条ニ依リ文部大臣ノ指定シタル学校ノ卒業者、及ビ全令ニ依リ試験検定ニ合格シタル者。

トアルヲ

一、中学校卒業者。

二、明治三十六年文部省令第十四号専門学校入学者検定規程第八条ニ依リ文部大臣ノ指定シタル学校ノ卒業者、及ビ全令ニ依リ試験検定ニ合格シタル者。ト

第十四条 商科予科ニ入学シ得ル者左ノ如シ

一、明治三十五年一月以後ノ本学院普通科卒業者、及ビ大正五年一月以後ノ本学院中学部卒業者。

二、中学校卒業者、明治三十六年文部省令第十四号専門学校入学者検定規程第八条ニ依リ文部大臣ノ指定シタル学校ノ卒業者、及ビ全令ニ依リ試験検定ニ合格シタル者。

三、甲種商業学校卒業者。

トアルヲ

一、中学校卒業者。

二、明治三十六年文部省令第十四号専門学校入学者検定規程第八条ニ依リ文部大臣ノ指定シタル学校ノ卒業者、及ビ全令ニ依リ試験検定ニ合格シタル者。ト

三、甲種商業学校卒業者。ト

第十六条 神学科第二部第一学年ニ入学シ得ル者左ノ如シ

一、明治三十五年一月以後ノ本学院普通科卒業者及ビ大正五年一月以後ノ本学院中学部卒業者ニシテ聖書ノ試験ニ合格シタル者。

二、中学校卒業者、明治三十六年文部省令第十四号専門学校入学者検定規程第八条ニ依リ文部大臣ノ指定シタル学校ノ卒業者及ビ全令ニ依リ試験検定ニ合格

シタル者ニシテ聖書ノ試験ニ合格シタル者。

前二項ノ資格ヲ有セザル者ニシテ神学研究志望ノ者アルトキハ中学校卒業程度ノ国語、漢文、地理、歴史及ビ聖書ニ就キテ試験ヲ課シ之ニ合格シタル者ヲ撰科生トシテ入学ヲ許可スルコトアルベシ。

トアルヲ

一、中学校卒業者ニシテ聖書ノ試験ニ合格シタル者。

二、明治三十六年文部省令第十四号専門学校入学者檢定規程第八条ニ依リ文部大臣ノ指定シタル学校ノ卒業者及ビ全令ニ依リ試験檢定ニ合格シタル者ニシテ聖書ノ試験ニ合格シタル者。

前二項ノ資格ヲ有セザル者ニシテ神学研究志望ノ者アルトキハ中学校卒業程度ノ国語、漢文、地理、歴史及ビ聖書ニ就キテ試験ヲ課シ之ニ合格シタル者ヲ撰科生トシテ入学ヲ許可スルコトアルベシ。ト

第十七条

文科、師範科及商科ノ本科第一学年以上ニ入学ヲ許可スベキ者ハ各科ノ予科ニ入学シ得ベキ資格ヲ有シ、前学年（予科ヲモ含ム）ノ学科課程ヲ卒リタル者ト同等ノ学力ヲ有スル者タルベシ。

トアルヲ

文科、師範科及商科ノ本科第一学年以上ニ入学ヲ許可スベキ者ハ各科ノ予科ニ入学シ得ベキ資格ヲ有シ、前学年（予科ヲモ含ム）ノ学科課程ヲ卒リタル者ト同等ノ学力ヲ有スル者タルベシ。

但シ師範科ニ在リテハ半途入学ヲ許サズ。ト

第二十二条

学科課程相等シキ他ノ専門学校生徒ニシテ正当ノ事由ニ依リ転学ヲ希望スル者アルトキハ相当学年ニ編入スルコトアルベシ。

トアルヲ

学科課程相等シキ他ノ専門学校生徒ニシテ正当ノ事由ニ依リ転学ヲ希望スル者アルトキハ相当学年ニ編入スルコトアルベシ。但シ師範科ノ本科ニ在リテハ此ノ限りニアラズ。ト

第二十三条

入学志願者ハ入学期日ニ先チ甲号書式ニ従ヒ入学願書ニ学業履歴書、卒業証明書、及ビ品行保証状ヲ添へ出願スベシ。

甲号書式（用紙大判改良美濃）

入学願書

私儀今般御学院専門部何科予科（或ハ何年）ニ入学志

願ニ付御許可相成度別紙履歷書、卒業証明書、及ビ品行保証状相添へ此段奉願上候也

年月日 止宿所

私立東北学院長 氏 名殿 氏 名 ㊦

履歷書

一、出生年月日

二、本籍地

三、父兄ノ現住所

四、族籍（戸主何族或ハ平民何某何男）

五、父兄ノ官位勲爵若クハ職業

六、入学志願者ノ学業履歷

七、入学志願者ノ職業履歷

八、賞罰

右之通相違無之候也

年月日 氏 名 ㊦

トアルヲ、

入学志願者ハ入学期日ニ先チ甲号書式ニ從ヒ入学願書

ニ学業履歷書、卒業証明書、卒業試験点数表及ビ品行

保証状ヲ添へ出願スベシ。

甲号書式（用紙大判改良美濃）

入学願書

私儀今般御学院専門部何科予科（或ハ何年）ニ入学志

願ニ付御許可相成度別紙履歷書、卒業証明書、卒業試

験点数表及ビ品行保証状相添へ此段奉願上候也

年月日 止宿所

私立東北学院長 氏 名殿 氏 名 ㊦

履歷書

一、出生年月日

二、本籍地

三、父兄ノ現住所

四、族籍（戸主何族或ハ平民何某何男）

五、父兄ノ官位勲爵若クハ職業

六、入学志願者ノ学業履歷

七、入学志願者ノ職業履歷

八、賞罰

右之通相違無之候也

年月日 氏 名 ㊦

第三十九条

学年総平均評点七十点ニ滿タザルカ若クハ二科目以上六十点ニ滿タザルカ又ハ一科目ニテモ五十点ニ滿タザル場合ニハ進級スルコトヲ得ズ。

トアルヲ

学年総平均評点六十点ニ滿タザルカ若クハ三科目五十点ニ滿タザルカ又ハ一科目ニテモ四十点ニ滿タザル場合ニハ進級スルコトヲ得ズ。ト

改正ノ上來十一月一日ヨリ実施致シ度候ニ付御認可相成度此段相願候也

大正九年十月二十五日

私立東北学院理事

全
デー、ビー、シユネーダー 印
梶原長八郎 印

文部大臣 中橋徳五郎殿

大正九年十月廿六日

仙台市長 鹿又武三郎 印

宮城県知事 森 正隆殿

別冊之通り東北学院専門部学則變更願其筋ニ御進達之御取計相成度此段相願候也

内務部長 印 課長 印 課僚 印
知事不在 主任 属 大内俊定 印

案

年月日 内務部長

仙台市長宛

客月二十六日付学親第八一号御進達ノ東北学院専門部学則變更願進達相成候処變更ノ部分ヲ明ニスル為現学則ヲ朱書訂正シタルモノニ通提出セシメラレ候様御取計相成度依命此段及照会候也

追テ自今学則變更ニ関スル書類ハ本文同様御取計相成度此段申添候也

(注・大正九年十一月六日付)

内務部長 印 教育課長 印 課僚 印 印
知事不在 主任 属 大内俊定 印

案

東北学院ヨリ現学則ノ朱書訂正提出ニ付左案副申進達相成可然哉

左案

知事

文部大臣宛

学則変更ニ関スル件

管下仙台市私立東北学院ヨリ同院専門部学則変更願別紙提出ニ付取調候処相当ト被認候条御認可相成度此段副申候也

(注・大正九年十二月七日)

内務部長[㊤] 教育課長

課僚[㊤]

主任 属 大内俊定 [㊤]

案

別紙写シ通指令相成候処交付相成可然哉

通知案

内務部長

仙台市長宛

私立東北学院専門部学則変更認可指令書別紙ノ通ニ有之候条御伝達相成候也

記

文部省宮專一〇号

私立東北学院理事

デー、ビー、シュネーダー

梶原長八郎

大正九年十月二十五日付申請私立東北学院専門部学則中変更ノ件認可ス

大正十年一月十三日

文部大臣 中橋徳五郎 [㊤]

(県庁文書)

一二八 D・B・シュネーダー書簡(出村悌三郎宛)

(大正十二年九月三日)

院長来信の一節

震災の報米国に伝はるや否や、シュネーダー院長は「倒さるれども望は失はず。」とローマ字の電文を急送せられた。これを以て見ても今度の震害に就いて如何に院長が学院の上を心痛せられたかが察せられる。

なほそれと共に九月三日附にて早速出村院長代理に宛て書簡を送せられ左はその一節である。

恐るべき震災の報を得て驚愕に耐えません。未だ詳細の事を承知しませんが、定めて筆紙に尽し難き惨害があつたに相違ありません。是が為めに単に都市や当該地方のみならず、全国家が恐るべき損失を被り進運を

阻害せられたるは痛心の至りです。仙台の人畜に被害なく建築物に破損なからんことを祈つて居ます。併し卒業生諸君や学生諸君の中には定めて罹災者がありませう。又近年学院を援助された同情者中に死傷者や被害者があることゝ想はれます。私共は是等の方々に対し衷心より同情を表し又神に祈願を捧ぐるものであります。

米国が全力を尽して同情を表することを希望し、私共も人々に出来得る限りのことをするやうに奨励して居ます。

（『東北学院時報』五二号 大正十二年十月二十五日）

一二九 D・B・シュネーダーの帰朝

（大正十三年十二月十三日）

十二月十三日。米国から帰られた院長夫妻及び令嬢メリーさんの三方を招待して片平丁大観楼で教職員一同で歓迎会をひらいた。席上、院長は彼の地に於ける募金運動の様子日本移民問題に就いて米国政府のとつた方法の

遺憾であること、及び同問題に就いて種々骨を折られたことなどを詳しく物語られた。その話の中でしみじみとした調子で、「仙台に帰つてみればこゝが矢張り私にとつて一番なつかしいホームです。」と述懐せられ、そして居並ぶ五十幾名かの教職員を見渡して「はじめて私が仙台に來た当時の学院のことを回顧すると、今の此盛況はまるで夢ではないかと疑ふ程です」と涙ぐまれてゐられた。

（『東北学院時報』五八号 大正十四年一月二十六日）

一三〇 専門部校地取得と神学部独立の決議

（大正十四年二月五日）

大正十四年二月五日午後二時南六軒丁ゲルハード氏宅ニ於テ開会

出席者 シュネーダー、出村、小平、ザウグ、ネース、

クリーテ、大原、早坂、ニコデマス、ゲル

ハード、五十嵐ノ諸氏

米国リフオームド、ミツシヨン巡回幹事ル

ツプ氏並ニ前理事ノツス、梶原両氏臨席

議 長 シュネーダー氏

開会祈禱 出村氏 五十嵐氏ヲ書記ニ挙グ

一、議長ヨリ新任理事大原、早坂両氏ヲ紹介セラレ夫レヨリ両氏ノ挨拶アリタリ、引キ続キ議長ヨリルツプ氏ヲ紹介セラレ全氏ノ挨拶アリタリ

二、専門部新築候補地トシテシュネーダー氏ヨリ南六軒丁敷地ノ外北方堤町附近、南方南五十人町、及向山橋養学園附近等ヲ挙ゲ詳細ナル報告アリ数時間ニ亘リテ協議ノ上左ノ通り決議ス

神学部並ニ専門部将来ノ發展上出来得ベクンバ此際他ニ広大ナル地面ヲ求ムルコトノ必要ヲ認ムルモ、学院現在ノ状況並ニ市民ニ対シ宗教的感化ヲ及ス便宜上ヨリ考慮シ専門部校舍ヲ南六軒丁ニ建築スルコトニ決ス
五時半一同食事ヲ共ニシ六時卅五分再会

三、専門部校舍敷地続ナル白石広造氏所有地土樋約六百坪、鹿野庸三氏所有地猿曳丁約六百坪買入レノ手續ヲナスコトニ決ス

四、出来得ル丈ケ速ニベースボール、グラウンドヲ買入ルコト、ナシ左ノ委員ヲ挙ゲ適當ノ土地ヲ物色セシムルコトニ決ス

シュネーダー、出村、ニコデマス、五十嵐四氏。

但シ事宜ニヨリ牛舎ノ敷地ヲ処置シ得ル権能ヲ右委員ニ与フルコトニ決ス

五、シュネーダー氏ヨリ専門部校舍ハ左ノ順序ヲ以テ建築ニ着手スベキ旨報告アリ之ヲ受ク

1、校舎 2、寄宿舎 3、講堂

尚ホ講堂ハ成ルベク校舎ト共ニ着手スル様希望シルツプ氏帰米後其回答ニ依リ着手スルコト

六、新築校舎ノ設計ハジエー、エツチ、モルガン氏ニ依頼セル旨建築委員ヨリ報告アリ之ヲ受ク

七、神学科ヲ独立セシメ神学部トナスコトニ決ス

八、右名称変更ニ伴ヒ必要ナル変更ヲ本院憲法ニ加フルコトニ決ス

〔後略〕

(理事会記録)

一三二 D・B・シュネーダーの専門部校舎建築

計画

(大正十四年七月二十五日)

同窓生諸君に

デー、ビー、シュネーグー

今度時報に掲載されたカットは東北学院専門部が是から発展しやうとする将来の設計図であります。将来どんな建物が必要になるかを熟慮しまして、それから各建物並に運動場の位置を定め、総合的設計を作るやう技師に云ひつけました。建物は皆建築の様式や構造の材料を画一にする積りです。それは理想的な一群の建物となり、其処で将来多くの学生が首尾よく且つ幸福に勉強することになるだらうと思ひます。

此設計に従つて第一に建築されるのは、即ち今度着手されるのは「メイン、ビルディング」と記した建物です。今一つのカットが即ちその正面図です。そして之は二階造りで、地下室と屋上がついてゐます、地下室には一大生徒控室、食堂、台所、錠前付生徒用具入及び其の他の現代的な色々の利器が設備され、一階と二階とは捨巻教室と教員室、職員室、応接室及心理学実験室があります。屋上は非常に見はらしがよいので各種の集會や娯樂の為に利用されるやう設計されてあります。構造は鉄筋コンクリートで、出来上つたら美はしい殆ど理想的な校舎になりませう。而かも只今は一般に建築材料が安いから工費も割合に安く行きませう。請負者は仁田組(仁田

富蔵氏)です。

此建物は当分専門部の三科即ち文科、師範科の為に使用することになつてゐます。近き将来に商科の建物が出れば全科は其処に移る筈です。

メイン、ビルディングの外約五十名を收容する寄宿舎をも建てる積りであります。それに、現在のバラックの一部を六軒丁の敷地に移して色々の途に用ひなければなりません。其の上、運動場を拡張するために約六百坪の土地を購入する必要があり、将来の寄宿舎の為に河畔の土地を今買ひ入れて置く必要があります。地均しをしたり垣を作つたりしなければなりません。以上の費目を合算するとアメリカで募集した金額を遙に超過します。即ち支出の項目は大体次の通りになります。

本館(メイン、ビルディング)	式參〇、〇〇〇円
寄宿舎	四〇、〇〇〇円
バラックの移転改築	五、〇〇〇円
地均し	六、〇〇〇円
垣	壹〇、〇〇〇円
白石氏土地	式〇、〇〇〇円
簸内氏土地	式五、〇〇〇円
計	參參六、〇〇〇円

右に対し収入の予算は

アメリカで募集した金額（講堂建

築資金貳万弗を算入せず） 貳参八、〇〇〇円

リフオームドミツシヨン外国伝道

局から寄附される見込の金額 四八、〇〇〇円

計 貳八六、〇〇〇円

差引不足額

五〇、〇〇〇円

此不足額五万円はどうしても日本で寄附を募集したいと思ふのです。講堂建築資金五万弗の募集を完成する為私と家内は手紙に依つてアメリカからもう参万弗を募集しなければなりません。ですから私共の時間は重にその方面に献げなければなりません。その間にどうかして上記の五万円を日本内地で募集したいものだと思います。先日理事会では此不足額を得る為めに努力することに決めました。全局はまづ第一に之を教員及び同窓会に訴へました。幸ひ同窓評議員会並に教職員会では心よく之を承け容れ、今や既に寄附募集の準備をやつてゐます。次に此不足金に第一に多額の寄附をなされた学院教会婦人会に対して深く感謝しなければなりません。全会では六月十三日に専門部仮校舎でバザーを開き、其の純益金貳千貳百五十拾円拾七銭を寄附されたのです。

基督教々育の価値は益々世間に認められて参りました。文部省でも精神教育に益々重きを置いてゐます。去年の秋には畏くも皇后陛下が同志社に行啓せられました。仄聞しますと今年の秋仙台附近で行はれる大演習の際には、摂政宮殿下が我が学院にもお成りになられるさうで御座います。けれども学校の発展に対する責任の範囲もだん／＼発展しまして学院を出られました同窓生の見事な大きな団体の上に及んで参ります。

かうした事情ですから、私は謹んで同窓諸君の全体に対し、此際母校の為に御援助下さることを切に願ひ申します。寄附金額の多寡には拘りません。どうか同窓生諸君が一人も残らず幾分か助けて下さい。そして皆で一団となつて母校を一層高い有為な地位に押し上げるやう大に努力しませう。

（『東北学院時報』六一号 大正十四年七月二十五日）

一三二 出村悌三郎の専門部校舎建設資金募金
要請

(大正十四年七月二十五日)

同窓会員諸君に訴ふ

出村悌三郎

多年の宿願であつた専門部校舎の建築も愈々始めらるゝことになりました。明年の今頃には南六軒丁の山水の美を聚めたる敷地に於て鉄筋コンクリート三層の宏麗堅固なる校舎ができ上るだらうと思つてゐます。茲に於いて初めて我が学院も高等専門の教育を充分に施し得べき設備を基礎づけらるゝことゝなるので、学院の歴史に於て特筆せらるべきことゝ信じます。而して之に要する費額は建築と必要な敷地拡張費とを合して実に約参拾五万円に上るのであります。その中約参拾万円は今回院長が米國に於て募集せられたのであります。当時我中学位復興のために全力を挙げて募金をなしたるの後をうけ内外共に寄附金を得ることは非常なる困難の事情があつたに拘らず院長は再び七十の老軀を提げて、東奔西走し、懸命の努力をせられて、上記の金額を募集し得られたの

であります。其の苦心を御察しするに余りあると共に其の御尽力に対しては無限の感謝を捧げざるを得ません。

新校舎の建築に就いては当局者最善の努力をなして費用の許す範囲内に於て最も堅牢なる又設備の宜しきを得たる、又将来の発展を予期しての設計をいたしましたので、其れには如何にしても参拾五万円、即ち院長の募集せられた額より更に五万円の多きを要するのであります。此額を如何にして捻出すべきか。これに就き院長及び当局者は日夜焦慮苦心して居れたのであります。

この時に我同窓会は我学院に於ける初めての拡張事業でもあり、且つ院長が最善を尽して最早其他に道なきに苦しみつゝある場合にあたり、決して坐視すべきでないことを痛感いたしましたので、直ちに評議会にはかり上記の金額を同窓会の手によつて募集することに決議いたしましたことは、前号所報の通りで已に熟知せられて居らるゝことゝ信じます。学院理事会は深くこの挙に賛成せられ、理事会自らも之に加はり、学院の名義を以て寄附金を募集することゝなりました。併しながら實際上の責任は同窓会が之を負担する覚悟であります。

募金に就いては広く之を天下に求むるといふことは未だ其の時機でもなく、又其必要を見ないと云ふので此度

は専ら同窓会員及び学生の父兄並びに特別関係者に計りてその中から募集するのが最も時宜に協ふことゝ信じたのであります。

今や経済界は不振を極め、各自又余裕なきのとき此の責任を負ふの苦痛は深く察する所であります。我千三百有余の会員諸君各奮発せられて母校発展の第一期計画に応分の貢献を惜まるゝことなく更に父兄諸氏の熱誠ある援助とを賜はらば上記の金額を募集し得んことは然迄難事ではあるまいと信ずるところであります。

寄附金額は必ずしも額の多きのみを望むものではありません。要は千三百有余の同窓会員諸君が一人も漏れなく応分の御寄附を願ひたいのであります。かくて我専門部の新校舎は精神的にも物質的にも我同窓会員の生命の打籠められたものとしたのであります。

如上の目的を以て寄附金額の如きも最低一口金五円と定めたのであります。これならば学生にても充分なし得らるゝ額と信じたからであります。払込期間は一ケ年乃至二ケ年として其期間に誤りなく御払込を願ひたいのであります。支部の在る処は支部長の尽力により所属の会員諸君の寄附額を纏めて戴く考ですが支部のない所には各個人的に御願いたします。

此の募金運動は最う既に開始いたしました。小生は過日校用を帯びて九州福岡に参りました帰途神戸大阪京都横浜の各地に於ける支部を訪問いたしました。各支部には熱心に歓迎して下されました。そして各支部共に衷心より此挙に賛同せられ大阪支部の如きは席上直ちに寄附金を約束せられました。其他の支部も全様の処置をとることを約束せられました。又東京支部には近々特別なる集会を催され院長が親しく此の事情を訴へられることになつて居ります。仙台支部には已に其部署を定め、着々運動を開始して居ります。石巻、岩沼等の支部には不日同窓会の監部の訪問を以て運動を始める計画であります。

また学院に関係厚き婦人会は此挙を助くるために過日バザーを開き純益二千三百有余円を提供せられました。学院の現教職員諸氏は各自寄附を申出でられ、茲に約四千円の額を得ました。

全国各地に健在せらるゝ会員諸君にも此際特別なる努力を以て我等に衷心よりの同情と援助とを賜はらんことを熱望いたします。そして諸兄の犠牲によりて我専門部校舎がその計画通りに完成されんことを祈つて止まない次第であります。

〔東北学院時報〕六一号 大正十四年七月二十五日)

一三三 専門部校舎の定礎式

(大正十四年十一月三日)

専門部校舎定礎式

十一月三日体育デー午前八時より学院各部教職員生徒一同中学部講堂に会し聯合礼拝を行ひ、院長より運動に關する一場の訓話ありて八時半式を閉づ。それより一同直ちに南六軒丁に赴き九時より出村部長司会の下に次の順序によりて専門部校舎の定礎式を挙ぐ。

- 一、讚美歌 (三九七) 会衆 一同
- 二、祈 禱 郡山 科長
- 三、専門部敷地獲得並に校舎建築に至るまでの歴史及埋蔵すべき品目の朗読 (別項) 出村 部長
- 四、定礎式 院 長
- 五、演 説 畑井 博士
- 六、工事監督者並に請負者の紹介 (別項) 会衆 一同
- 七、讚美歌 (二二五)

八、頌榮及祝禱 サイブル博士

九、記念絵葉書分配 以上

式は極めて内輪に行ひ、且つ十月廿五日の 東宮殿下行啓の佳き日に挙行せんとした予定の期日を変更した咄嗟の間に今日の日取りが決つたので一般の案内を発しませんが、ミセス、シユネーダーを初め市内の教役者及び同窓の方々も参加して下さいまして割合に盛に行はれました。殊に目度いのは還曆祝の爲め来仙せられた、早坂哲郎氏が悉く同窓生なる令息一郎博士を初め二郎、三郎、四郎及平山の諸君と一家打ち連れ出席せられたことでした。

郡山科長の祈禱も出村部長の演説及朗読も院長の式辞も悉く基督こそ新校舎の礎たれてふ趣旨の現はれてしたが、畑井博士の演説は先づ博士在学当時の懐旧から説き起して今日の此盛況を觀るに至つたのは東北学院の使命とする精神的教育が次第に其価値を認められて来たからだと断じ、益々之を高調するやう奨励せられ更に此建物の資金を募らんが爲に帰米中の院長夫妻が如何に苦心慘澹せられしか折柄米国に出張してその實際を親しく目撃された当時の情況を紹介し、此建物は実に院長夫妻の血と涙の結晶であることを私共はいつまでも記憶したいと

希望し、又米国は金満家の多い国だが此資金は決して富豪の余財から得たものでなく、篤信家の淨財から基督教主義の教育を施す目的の為に喜捨されたものだといふことをも記憶されたいと述べて此建物の如何に尊重すべきものであるかを警告し終りに今日の盛典を祝して降壇せられました。

頌栄の後一同に記念の絵ハガキと中学部校舎の前で全校教職員生徒一同が撮つた写真の絵ハガキを分配して十時半に散会した。

○埋蔵物の目録

- 一、旧新約聖書
- 一、讚美歌
- 一、東北学院一覽
- 一、英文東北学院一覽
- 一、東北学院専門部敷地獲得並に校舎建築の爲なされたる努力の歴史
- 一、敷地沿革
- 一、工事設計者 監督者及請負者氏名
- 一、通貨一錢 十錢 五十錢
- 一、新聞及雜誌 河北新報 新東北 仙台日々新聞 東華新聞及時事新報 東北学院時報 神と人及福音

新報

○前項専門部敷地獲得並に校舎建築ノ爲ニ為サレタル努力ノ歴史(左記)

東北学院専門部ノ敷地ヲ得且ツ校舎ヲ建築スルノ必要ハ殆ト二十年間痛切ニ感ゼラレレカ爲ニ種々ノ決議ハナサレ合衆国レフオームド教会ノ外国伝道局ニ対シテ数度ノ請願モ試ミラレタリ

大正四年ニシユネーダー院長並ニ同夫人ガ休養ノ爲ニ米国ニ帰省スルヤ此必要ニ応スル爲ニ募金ニ着手セリ。兩人ハ努力ノ結果上記ノ目的ノ爲ニ二四万五千弗ヲ募集シ得タリ。此募金ノ約半額ハ遠藤庸治、岡百世、岡精一、東郷佐一郎ノ数氏ヨリ専門部敷地トシテ約六千二百八十坪ヲ買収ノ爲ニ費サレタリ。而シテ合衆国レフオームド教会外國伝道局ハミス、ブラツトセウ所有地ト称ヘラレタル九百八十坪ノ土地ヲ買収シテ上記ノ敷地ニ加ヘタリ。募金ノ残額ヲ以テ一校舎ヲ建築センコトハ吾人ノ希望ナリシカ会々欧州ノ大戦乱起リ物価ノ騰貴其他ノ理由ニヨリ建築工事ヲ始ムルコト殆ト不可能ノコトナレリ。

然ルニ大正八年三月二日ニ起リタル仙台大火ニヨリ類焼セル中学部校舎再建ノ爲ニ其ノ残額ヲ流用セサルヲ得

サル状態ニ陥リ専門部校舎建築ノ途茲ニ杜絶セントスルニ至ル。

大正十二年ヨリ全十三年ニ亘リ院長並ニ夫人再ヒ帰米シ専門部校舎建築費ヲ得ンカ為再度ノ募金運動ヲ始メ現金並ニ約束ニ依リ茲ニ二十万弗ノ金額ヲ募集セリ。此内七万五千弗ハ各五千弗ヲ寄附セル十五名ノ篤志家ニヨリ与ヘラレタルモノニシテ其ノ姓名次ノ如シ

デー、ウエリングトン、デートトリツク

ジョージ、エー、ウツド

エモリー、エル、コブレンツ

ジョン、ケー、バウマン

ジェー、ビー、フリツカー夫人及ニ令嬢

マーテン、エル、ルーテニツク

ルイス、エー、マイラン夫妻

メーリ、イー、ケーリ夫人

ジャコブ、ジェー、フアウス夫妻

グレース、チャーチ、ビツツブルグ市

エリザベス、カーク、パトリツク嬢

ジョン、エチ、ニツスリー夫妻

ジョン、エル、ゲルバー夫妻

ダブリユー、エル、グラツトフエルター夫妻

クリントン、エヌ、マイヤース

大正十三年十二月東北学院理事局ハデー、ビー、シユネーダー、出村悌三郎、五十嵐正、エフ、ビー、ニコデマス四氏ヲ挙ケテ建築委員ニ任ス

大正十四年二月ジェー、エチ、モルガン氏本校舎建築技師ニ囑託ス

此本校舎ハ南六軒丁ニ建築サルベキ計画中ノ七建築物ノ最初ノモノナリ将来建築サルベキ他ノ建築物ノ最初ノモノナリ将来建築サルベキ建築物ハ講堂図書館並ニ事務館商科校舎其他ノ校舎ナリ

全年七月四日仁田寅蔵氏ト金十四万六千四百八十五円ヲ以テ本校舎建築請負ヲ契約シ直ニ工事ニ着手セリ工事ハ大正十五年六月ノ終リニ竣工セントス。

本校舎ノ定礎式ハ大正十四年十一月三日之ヲ挙行ス

○工事設計者、監督者及請負者

一、設計者 ジェー、エチ、モルガン

一、監督者 エフ、ビー、ニコデマス

武井俊通

鈴木潤治

一、請負者

請負人 仁田寅蔵

現場監督 山口 嘉右衛門

全 長岡 兼三

全 小野 昌三

大工棟梁 本田 三次郎

蔦土工 佐藤 寅治

石 工 高橋 勘左衛門

鉄 筋 山田 文作

左 官 今野 保造

建 具 岸崎 政治

ペンキ 古澤 清二

（『東北学院時報』六三号 大正十四年十二月十日）

一三四 創立四十周年記念式並びに専門部校舎落成式

（大正十五年十月十六日）

創立四十年記念式並に専門部校舎落成式

昨年来屢予報し、夏休み前に執行順序案を掲載し全時に職員中より夫々委員を挙げて準備した四十年記念式並

に献堂式（落成式）は愈々十月十六日から四日間に亘つて挙行することになった。

第二学期始から準備に取り掛つたのだが、建築の方は授業に差支ない程度に竣工したけれども跡始末グラウンド、下水、柵等まだ工事中なので、建築委員を兼ねた式の総務部たるべき学校当局の繁忙は申す迄もなし、各準備委員も皆本職の傍之に当つてゐるので、期日が近づくに従つて忙しさと混雑さが愈々加つて来た。それにアメリカからのお客様を先頭にお客様やら講師やら支那から関西から東京から北海道からと追々に到着した予定の通り記念式並に落成式は新校舎の屋上階上——広瀬の清流脚下を洗ひ、青葉の連丘西南を囲ぐり、北方遠く七ツ森に対し、東方遙に太平洋を望む風光絶佳な屋上で之を開くつもりで、テントを張り器具を運び準備漸く整つたのに噫何事ぞ。夜来の降雨は当日の朝に至りて益々繁く気温さへ俄に下つて冷氣、湿気、泥濘、かうした天気可惜この晴れの日たるべき一日を継続したのだ。愁訟し慨嘆する暇もあらず、突嗟の間に会場は変更せられ、電話係は之を八方に通報するのに九時から十二時迄掛りつ切りだ。ピラを張つたり、会場の準備をしたり、教職員生徒総がかりで奮闘の結果予定の時間を廿分遅らした丈で差

支なき迄に準備が出来た。即ち中学部講堂で式を挙げる
ことになつたのである。

午前は九時から学校並に同窓だけで内輪の式を挙げた
が、それは厳肅な印象深いものであつた。先づ院長は信
仰と祈禱を以つて学院を創め、四十年後の今日親しく此
処に臨席せられた二人の創立者に対して凡てに代つて謝
辞を陳べ、又過去四十年間外国伝道局を経て我学院に多
大の補助を与へられた米国リフオームド教員に感謝の
辞を呈した。次いで創立者押川、ホイー両先生の熱烈な
演説があつた。吾々が再び両先生の声咳に接すること
を得たのは稀有の特権だつた。約壱千の会衆が声を合せ
て心から「ジーサス、アイ、リヴ、ツ、ジー」や校歌を
歌つたのは誠に勇ましかつた。それから吉田龜太郎先生
外数人の感謝祈禱があつて、霧時過ぎに式を閉ぢた。

午後は一時半の代りに二時から一般の式を挙げた。豪
雨と悪路と式場の変更にも拘らず来賓は陸續として殺到
し、専門部及神学部生徒の為に保留したギャラリーを除
けば講堂は殆ど立錐の余地もなかつた。院長が学校の沿
革を述べ出村部長が工事の経過を報告した。後北海道帝
大総長佐藤博士並に明治学院総理田川大吉郎先生の演説
があつた。共に四十年前に信仰を以て創められた学院の

業績を推奨し、前途に横はる一層大なる将来に対して
吾々を鼓舞奨励するものであつた。それから文部大臣、
宮城県知事、仙台市長、第二師団長、東北帝大総長、二
高校長、高工校長、商業会議所会頭、県会議長、両創立
者、米国リフオームド教会外国伝道局長、全婦人伝道会
長、宮城女学校長、日本ミツシヨン代表者、日本基督教
大会議長、東北中会議長、同窓会代表者、生徒総代の祝
辞朗読或は演説があつた。時既に六時を過ぎたので折角
寄贈せられた後項の如き多数の祝辞祝電は遺憾ながらそ
の披露を他の機会に譲り、(天長祝節に披露した)全校一
同の盛なる校歌合唱を以て会を閉ぢた。

(『東北学院時報』六九号 大正十五年十二月
十日)

一三五 D・B・シュネーダー「東北学院沿革」

(大正十五年十月十六日)

東北学院沿革

院長

明治拾三年秋、押川方義先生新潟より来り、初めて此

地に基督教の伝道を開く。其後数年間仙台市を中心として東北の各地に盛に伝道し、伝道の門戸漸く開くるに及び、切に伝道者養成の必要を感じるに至れり。拾八年の秋仙台市に基督教主義の学校を設立せんとする目的を以て、押川先生が上京したる際、偶々米国より渡来せるリフオームド教会宣教師ホーイ先生に邂逅し、互に伝道上の抱負を披瀝せられ、両先生大に共鳴する処あり、相携へて帰仙せり。超えて拾九年伝道者養成の目的を以て仙台市木町通り（現今大病院地内）に小やかなる一民家を借り受け、仙台神学校を設立せり。是実に我東北学院の濫觴なり。

是より先、押川先生の教化に依りて基督信者となりし香味ちか姉と云ふ一寡婦ありき。姉は老後死亡の際に備へんが為銀十二枚を秘蔵せしが、押川、ホーイ両先生神学校を設立せんとせるを聞くや之を全部其為に喜捨せり。両先生之に依りて大に力を得、前記借家を教室兼寄宿舎として六名の生徒を收容し、直ちに授業を開始せり。両先生自ら教授たり又経営者たりその苦心や蓋し想像外のものありしならん。

其後東三番丁（宮城女学校敷地内）の借家に移り、間もなく又仙台教会が礼拝所として買求めたる東二番丁南

町通角の本願寺別院内に移転せり。二十年の秋アメリカリフオームド教会伝道局の同情に依りて以後年々一定の寄附金を送らるゝ事となれり。二十一年一月デー、ビー、シユネーダー氏教授に就任。幾程もなく仙台教会の隣接地南町通りの敷地を買ひ入れ、ジョン、オールト記念寄宿舎を建築してその一部分を教室に充用せり。此建物並に敷地はホーイ先生夫妻が夫人の亡父の記念として献ぜしものなり。二十三年煉瓦造校舎（神学部校舎）の建築に着手し、翌二十四年竣工せり。二十四年夏、組織を変更して東北学院と改称し、只に神学生のみならず一般の生徒をも之を收容して高等普通学を教授する事をなせり。二十五年、理事局を組織して之に学院全般の管理を委託し、全会は押川先生を院長にホーイ先生を副院長に推挙せり。十一月盛大なる祝賀式を催せしが当時の生徒数は百名なりき。二十八年更に組織を変更して文部省規定の組織に近接せしめんが為普通科を設け、修業年限を五ケ年としてその程度を尋常中学校と等しくせり。此の他修業年限二ケ年の理科専門部と文科専門部を置きたれど理科は三十一年に廃止せり。

校運次第に旺盛に赴き前途頗る有望なりしが、日清戦争の後俄かに形勢一変して、私立学校は一般に不利の地

位に立ち、殊に所謂ミツシヨン、スクールは甚しき打撃を蒙り、生徒数を一時著しく減少せり。剩へホイイ先生は喘息に罹り保健上已を得ずして三十三年に支那に転任し、越えて三十四年には押川先生も亦一身上の不得止都合に依つて院長の職を辞し、斯くて創立者が相前後して本院を去るに至れり。是に於てシュネーダー氏院長となる。

其後南町通の敷地狭小を告ぐるに至り、東二番丁北目町通角に約三千五百坪の敷地を購入して新に普通科校舎並に寄宿舎を建築せり。而して校舎は廿八年、寄宿舎は三十九年に竣工せり。四十一年、私立東北学院社団法人を設立し、該社団に於て本院財産の全部を管理することとなれり。大正四年普通科を中学部と改称の件認可せらる。七年専門部の学則を変更して修養年限三ヶ年の神学科第一部と四ヶ年の神学科第二部と、予科一ヶ年本科三ヶ年の文科、師範科及び商科の五学科を設置す。八年三月二日中学部校舎並に寄宿舎類焼。九年九月師範科卒業生は英語科中等教員無試験検定の取扱を受くるの件認可せらる。十年中学部寄宿舎再築工事の一部落成。十一年中学部校舎再築工事落成九月より新校舎に於て授業を開始し、全時に専門部文科、師範科及び商科を中学部校

舎に移し、専門部校舎は神学科の専用となる。十四年七月南六軒丁に専門部校舎の新築工事を始む。同年九月専門部の組織を変更して神学科を独立せしめ之を神学部と称し全校を神学部専門部及中学部の三部に分つ。十五年六月商科卒業生は商業英語、商事要項、簿記の三科目に就きて実業学校教員無試験検定の取扱を受くるの件認可さる。全年九月専門部校舎新築落成せるを以て第二学期より新校舎にて授業を始む。

専門部敷地より一部分は元の仙台市長遠藤庸治氏より買ひ受けたるものなるが、全氏はそれが教育事業の為に使用せらるゝと云ふ理由により喜んで譲渡せり。現在校舎の立てるあたりは全氏の所有地なりき。

纏つて過去四十年間の歴史を回顧すれば、吾等先づ第一に両創立者の高遠なる目的と献身犠牲の精神とを認めざるを得ず。而して今日此処に両先生が共に親しく臨席せられたるは吾等の最も光榮とする所なり。次に多年外国伝道局の手を経て寄与せられしアメリカフオームド教会の援助を感謝せざるを得ず。而して該伝道局長クライツ博士は今日の式に臨まんが為特に米国より渡来せられしなり。更に吾等は毎年間文部省、県庁及び市役所より蒙りたる誘掖指導の恩を此際深く感謝するものなり。

最後に仙台市民を始め、其他各地に於ける友人の深厚なる同情と後援とを深謝せざるを得ず。中学部校舍類焼並にその復旧の際に於ては深甚なる同情と多額の寄附金を得たり。而して今度此専門部校舍を新築するに当り、再び非常なる同情を表せられ、財界不況の際にも不拘、単に市内並に東北地方のみならず、関東関西の方面よりも多大の寄附金を寄贈せられたり。如斯甚大なる同情と援助とに対し吾等は此際衷心より感謝する者なり。

過去四十年の間学院の最大の目的となせる処のものは、基督教の力に依りて正しき人物、立派なる人物を養成する事なりき。将来と雖も此目的は変ぜざるべし。近來多くの友人より寄与されし著大の援助と、今日大方の臨場を忝うせる光栄とに鼓舞奨励せられ一層の熱心をして此の目的を達せんが為奮闘努力するは方に我学院の使命なりと信ず。

古より今日に至るまで如何なる時代にありても善良なる人物を要求せざる時代は無かりき。されど今日程斯かる要求の急を告ぐる時代は世界の歴史上其比を見ざる処なり。世界は今や最も多く善人を要求せり。幾分なりとも世界のかゝる要求に応ぜんとするは我学院の特別なる使命なりと確信す。而してかゝる重責を果さんか為に、

我学院は大方各位の不変の同情と後援とを希望して止まず。

(『東北学院時報』六十九号 大正十五年十二月十日)

一三六 創立四十周年記念祝賀晩餐会

(大正十五年十月十六日)

祝賀晩餐会

式が終つて玄関に出て見ると外は最う真暗に暮れてしまつて、雨が冷たくびしょ／＼と降りしきつて居た。これから南六軒丁の新校舎で晩餐会が開かれるのだ。雨の内を勇敢にテクツタ者も大分あつたが多くは腕車かタクシーを駆つた。皆疲れてはゐるが此の空前の盛典に各自緊張し切つて居た。

晩餐会のはじまる前新校舎職員室に於て献堂式を挙行了。予定時間よりも前の式がながびいたので式は勢ひ短縮せられたが莊重な式であつた。

それより一同講堂に設けられた大晩餐会の食卓に就いた。

院長シユネーダー博士夫妻、創立者押川先生、ホーイ博士夫妻、レフオームド教会外国伝道局長クライツ博士夫妻、同教会婦人外国伝道会長アネワルト夫人、同教会育児院長モール博士及び令嬢を主賓とし、現旧教職員、同窓会員宣教師等約二百三十名の出席者があり頗る盛んな会合であつた。食事は主としてカルトンの調理になるものだつたが、其際用ゐた食パンは在京の金子、大泉両君の好意によれる「永藤のパン」菓子及びコーヒ―は院長夫人を煩はしたものの、果物は鈴木重久君の農園の産物であつたので、一層美味を増した。食後先づ同窓生の紹介があつたが当夜出席の第一回卒業生は大河原教会主任猪股蒼平君、第二回は須藤鬼一君、第三回は出村悌三郎君、第四回は五十嵐正、土田熊治、藤田兵太郎の三君、第五回は矢野猪三郎、吉田菊太郎、伊藤嘉吉の三君、第七回は木山喜代五郎君等では等初期の卒業生と押川、ホーイの両創立者及び殆んど四十年間学院の爲めに尽瘁さるゝ現院長とが一堂に会し、創立以来四十年間に結べる多数の学院の良果が共に食卓を囲めることゝ感謝喜悅の氣が堂に満ちて居た。最遠距離から態々来会されたのは出雲の郡は製糸工場に教育主任を勤めらるゝ鹿股文三郎君で、次は神戸関西学院教授岸波常蔵君、次は大阪

英語教授藤田兵太郎君等であり、東京からは須藤、平山、小平、金子、菊池等の諸君が出席された。東北と云ひながら往復に最も不便な宮古港から菅井喜七君が来会されたのは特記すべきものである。かく新旧の同窓の友が相会する機会を与へられたわけでも此回の記念祝賀会は有意義なものであるが、クラスメートでも互に境遇を異にする為め相会する機稀であつたものが今回久し振りで再会した人々も少なくなかつた。前記鹿股文三郎君と鈴木重久君とは同期でしかも労働会に在つて寢食を共にした人々だつたが、数十年目に来仙した鹿股君の体格容貌の著しく変りたる為め、鈴木君が最初同君に会した時之を認識せず、他の人々から云はれて漸く「君は鹿股君か？」と奇声を発した珍談もある。盛岡の成田良太君と須賀川の鈴木小助君とは共に明治三十七年の卒業生だが多分暫らく相会せらるゝ機会がなかつたらうと思はるゝが、相並んで食を共にせらるゝ状は如何にもなつかしげに見えた。当夜は晚餐会に引続き同窓会總會を開く順序だつたので多くの来会者諸君の高論を拝聴する時を得なかつたのは甚だ遺憾であるが、単に数百の兄弟に面接し、恩師等と同じ電燈の下で食を共にしたのみでも、云ふべからざるインスピレーションであり、学院の精神が一層

深く強く胸底に育まるゝを覚えた。(伊藤生)

〔『東北学院時報』六十九号 大正十五年十二月十日〕

一三七 D・B・シュネーダー「東北学院創立四十周年」

〔英文〕 (一九二六年十月十六日)

一三八 創立四十周年記念映画の募金

(大正十五年十二月十日)

母校創立四拾年記念活動写真寄附の概

今回母校創立四拾年記念祝賀会及び専門部新校舎落成式が極めて盛大に挙行されました事は、同窓生各位の熱心なる祈禱と熾烈なる愛校心の発露の賜と茲に厚く感謝致します。

此祝典に際し、我同窓会は母校の光輝ある歴史を永く記憶に留め母校及び在米国の同情後援者に対する感謝の微衷を表さんが為めに最も適當なる贈物の一つとして、

創立者並にシュネーダー院長の温容、整備せる母校の実況を活動写真に撮影して贈呈致す事になりました。

此の議は本年春の修学旅行団が上京して在京同窓会員諸君の歓迎を受けた際、其席上に於て提議されたもので、それが本年九月の東京支部秋期大会で満場一致の賛成を得、支部の手で着々手順が運ばれたのであります。

本来此の計画は全国同窓生諸君の御承認と御後援とを得て進める積りでありましたが、時日切迫の爲め、御相談申上げる余裕がなかつたので、一と先づ東京支部の御活躍に俟つて撮影を了する事と致し、東京支部に於ては総予算約金壹千四百円(作製フィルム二本として)の内差当り原版撮影に要する実費金五百円を東京在住の同窓会員中より寄附を仰ぐ事とし、平山東京支部長並に最上幹事の活動を煩はして左記の諸氏より頭書の寄附を得ました。

一金貳拾円也	橋本義助君
一金五拾円也	菅野利兵衛君
一金拾五円也	橋本寛敏君
一金拾円也	柳沢淳君
一金拾円也	山根篤君
一金八円也	川中道君

一金五拾円也 菅 沼 広 助君
一金五拾円也 三 上 秀 雄君

計 貳百拾參円也

此の不況の際これ丈の御寄附を快諾せられたる前記諸氏の愛校心に激励せられ、東京支部の幹部は大に発奮し、長野県下諏訪に独立のプロダクション、スズキ映画製作所を經營せらるゝ同窓生鈴木三郎君と協議の結果、同氏の献身的快諾を得て、愈々記念式日たる十月十六日より二十日までに大略左の撮影を終わりました。

- 1、神学部校舎及び寄宿舎全景
- 2、中学部校舎及び寄宿舎全景
- 3、専門部校舎全景
- 4、校旗(大寫)
- 5、TG章(大寫)
- 6、創立者 押川方義、ホーイ、シュネーダー三先生 同道にて神学校舎に入る光景
- 7、神学部昇降口に於ける三創立者の英姿
- 8、中学部正門前通行中の三創立者の英姿
- 9、中学部正面玄関前に於けるホーイ博士(大寫)
- 10、米國レホームド教会外国伝道局長クライツ博士夫妻(大寫)

11、クライツ博士の講演

12、専門部新築記念園遊会実況

13、中学部記念運動会実況

14、専門部柔道選手及び優勝旗

15、全上優勝旗(大寫)

16、中学部野球選手及び優勝カップ

17、記念式当日の文部大臣其他祝辭

18、全上祝電

19、院長邸庭園に於ける院長夫妻家族及びクライツ博士の団体

20、其他

此の挙は実に我が学院の歴史的映画であり、母校の現在を物語る縮図であると共に、創立者押川先生ホーイ先生並にシュネーダー院長に捧ぐる同窓生よりの思慕の花輪であると思ひます。本年十月十六日に開かれた同窓会總會に於ては此壮挙を同窓会の事業と為し、全国の同窓生各位に御賛同を請ひ其の完成を期する事に満場一致賛成可決せられました。所要経費金壹千四百円なるを以て、一口金參円以上と云ふ事に願ひ度いのですが各自経済的立場を異にして居る事でもありますから、右御含みの上応分の御送金を御願ひ致します。

一、募集金額 金壹千四百円也

一、応募一口の金額 なるべく三円以上

一、送金先 仙台市東二番丁東北学院同窓会振替口座

仙台八八三番 (同封の振替用紙御使用被下度)

一、申込締切期日 大正十五年十二月末日限り

一、申込と領収書の報告 学院時報紙上に報告し別に

領収証を発行せず。

以上の通り決めましたから、同窓各位に於かれても奮つて御賛成の上、此の事業完成の為に極力御援助下さる様切望致します。

猶、右写真の発起計画及び撮影の為に献身的努力を払はれ、最後まで奮闘せられたる東京支部長平山六之助君、早坂二郎君、幹事最上勇君、鈴木三郎君に感謝の意を表します。

大正十五年十月

仙台市東二番丁

東北学院同窓会長

出村 悌三郎

会員諸兄各位

(『東北学院時報』六九号 大正十五年十二月

十日)

一三九 ハウスキーパー記念社交館の建設

(昭和三年三月二日)

ハウスキーパー氏記念社交館

シユネーダー院長

合衆国ペンシルヴァニア州フィラデルフィヤ市にヘンリー、エム、ハウスキーパーと云ふ人が住んで居ります。此人は少年時代から敬虔な生涯を送つて参りました。即ち日常生活に於て忠実だつたと同時に、眞の基督者的生活を営みました。教会の一会員として常に活動的で又忠実でした。彼は妻を娶つて眞の基督的家庭を作りました。かくて時を経るに従ひ、勤勉と儉約とに依り家業が榮え、多少の財産を作りました。けれども氏はその富を自分の物とは思はないで神に奉仕する為、神から委託されたものだと考へました。氏は孤児の特別なる友となり、彼等の救助の為に多大の金を寄附し、且つ永年の間有名な孤児院の理事の一員となつてゐました。彼は又内外ミツシヨンの事業に深く興味を感じ、多年の間その為に惜しみなく寄附をしました。氏は人格の高い人、又万人の友として深く尊敬されるやうになりました。

今より約十五年前に、彼の妻即ちサラ、エー、ハウスキーパー夫人が永眠せられました。氏はいたく其の死を悲しみました。氏自身の健康も亦幾分か弱くなつたので、氏は遂に実業界を隠退しました。約十三年前にミセス、シユネーダーが氏を訪問しまして東北学院の話を致しました序でに、教員生徒並に同窓生が互に相会合して社交を修める場所の必要なことを語りました。此要求が非常に氏の心を動かしまして、氏は亡られた奥さんの記念にその会館の建築の爲金五千弗即ち一万円を寄附することに決心なさいました。然るに其後間もなくアメリカが欧州大戦に参加し、少しく後れて私共の中学部校舎が類焼しました。兎角するうちに建築費が暴騰しまして、遂に建築不可能になつたのであります。四年前にミセス、シユネーダーが帰米した時再び氏を訪問しました。其時氏は双眼失明を失ひ、身体亦衰弱しまして病床に引き籠つて居ました。けれども信仰は一層強く神の事業に対する氏の興味は少しも衰へませんでした。氏は社交館が建築されなかつたことを非常に残念がられ、もう五千弗を寄附すれば建築するのに充分かどうかを尋ねました。多分充分でせうとミセス、シユネーダーが申しますと早速今五千弗を寄附することに決心しました。けれども日本に

歸つて、建築費の概算を積らせて見ると、一万弗でもなほ充分でないことが分りました。そこで此事実を氏に報告しますと、ハウスキーパー氏は更に二千五百弗を追加して寄附の総額を一万二千五百弗にしました。

かうして財政上の準備が調つたので、東北学院理事会はエフ、ビー、ニコデマス、出村悌三郎、五十嵐正及デー、ビー、シユネーダーの四氏を建築委員に任命しました。横浜のジー、エチ、モルガン氏が全部設計しまして同窓生高沢善左工門氏と工事の請負を契約しました。かくて昭和二年六月十五日に愈々建築に着手し、全日地割式を行ひ、翌七月十二日に定礎式を行ひました。そして助手雲野香右工門氏及エフ、ビ、ニコデマス教授監督の下に工事が進行しました。昭和三年三月二日工事が竣成しまして請負者と学校との間に受渡しが済んだので御座います。

此建物の請負金額は二万六千六百三十五円で、暖房電燈給水の設備費と窓枠及金物代を合算すると更に一万一千六百八十八円六十二銭に上り、それに工費の増額と建築技師並監督者の謝礼を加へると総額二万九千三百二十六円七十銭に達するのであります。それでハウスキーパー氏の寄附金丈けでは充分に器具を設備することが出来

ません。けれども幸ひ同窓生及其他の学校の同情者が親切にさうした目的の為に寄附してくれてゐますので、追々調ひませう。

斯の如くにして私共は、今篤信の老人、ヘンリ、エム、ハウスキーパー氏に深い感謝の念を抱きながら氏の愛妻故サラ、エ、ハウスキーパー夫人の記念として此建物を全能の神に奉仕する為、又東北学院の教職員生徒同窓生並に友人の社交を修める為、神に献げる特権を得たので御座います。(昭和三、三)

〔東北学院時報〕七六号 昭和三年五月一日

一四〇 ハウスキーパー記念社交館献堂式

〔英文〕 (一九二八年三月三日)

一四一 A・R・バーソロミュー「H・M・ハウスキーパー長老への弔辞」

〔英文〕 (一九三〇年六月十五日)

一四二 財団法人への組織変更認可申請書類

(昭和三年八月二十三日)

東北学院院长 デー、ビー、シユネーダー 印

小菅豊次郎殿

拝啓

今般本学院組織変更ノ上從來ノ社団法人ヲ財団法人トナシ不日定款其他ヲ主務省ニ進達ノ都合ニ候モ其以前書類等ノ御校閲ヲ御願致シ度ニ付可然御指示相成度此段及御願候也

追而法人事務御取扱ノ御芳名伺度は亦御願申上候

〔注・昭和三年八月二十三日付〕

東北学院院长 デー、ビー、シユネーダー 印

小菅豊次郎殿

拝啓

過般御願申上候本学院財団法人ニ変更ノ件別紙ノ通り作製致候間御校閲方可然御願申上候尚ホ近日中本省ニ出頭種々御指示ヲ仰ギ度所存候故何日頃御都合宜シキヤ甚ダ恐縮ノ次第二候ヘドモ御一報方重ネテ及御願候也

(注・昭和三年九月一日付)

東北学院専門部 出村悌三郎

文部属 小菅豊次郎殿

拜啓 過般来御願申上候本院社団変更ノ儀ニツキ来ル十四日(金)朝出頭種々御意見ヲ承り度候間何分トモ御指示相成度此段御願申上候也

(注・昭和三年九月一日付)

昭和三年十月廿四日午後三時廿五分院長宅ニ於テ定期理事会ヲ開ク

出席員 シユネーダー、ミラー、フェスパーマン、ゲルハード、ニコデマス、サイプル、出村、阿部、五十嵐ノ諸氏

議長 シユネーダー氏
開会祈禱 ミラー氏

一、学院当局者ヨリ提出サレタル東北学院財団法人寄附行為ニツキ逐条審議ヲナシ左記ノ通り決定ス

東北学院財団法人寄附行為

第一章 名称及位置

第一条 本財団を東北学院財団法人と称す

第二条 本財団の事務所を仙台市南六軒丁四番地に置く

第二章 目的

第三条 本財団の目的は

- 一、基督教主義に従ひ完全なる普通教育を施すにあり
- 二、聖書に含める基督教に基き徳育を施すにあり
- 三、将来基督教々師たらんとする者或は其他の職業に従事せんとする者に充分なる高等教育を施すにあり

第三章 理事及理事会

第四条 本財団の理事は十二名とす。其半数は福音主義教会の会員なる日本人基督教者たるべく他の半数は合衆国リフオームド教会日本宣教師団たるべし

第五条 日本人理事の半数は東北学院同窓会の推挙したる者より宣教師理事の半数は合衆国リフオームド教会日本宣教師団の推挙したる者より理事会之を選出し其他の理事は直接理事会之を選出すべし、学院院长は職掌上当然理事たるものとす。但理事の選出は凡て理事会員の過半数の同意に依るべし

第六条 同窓会の推挙したる理事の中少くも三分の二は日本基督教会々員たるべく、日本人理事全員の過半数亦同教会々員たるべし

第七条 理事の任期は四ケ年とす。任期は一月一日に始り十二月三十一日に終る

第八条 理事は理事会を組織す。理事会は本財団一切の事業を処理するものとす

第九条 理事会には理事の互選に依りて理事長一名、書記二名、会計一名を置く

第十条 理事長、書記及会計は理事会の決議に従ひ本財団一切の事務を処理するものとす

第十一条 理事会は定期理事会及臨時理事会の二種とす。定期理事会は毎年三月、九月及十二月の三回之を開き臨時理事会は随時之を開く。而して理事三名以上の請求ある時には必ず之を開くことを要す

第十二条 理事会の開会は五日前に各理事に之を通知し併せて其の審議事項をも通告すべし。但理事全員の三分の二以上の同意ある時は予告なき事項に就いても審議することを得

第十三条 理事会は理事三分の二以上の出席あるに非ざれば議決するを得ず

第四章 資産

第十四条 本財団の資産は左記のものより成る

一、本寄附行為に添付の資産目録に記載せる現在の資

産

二、本財団の目的に賛成の有志者より寄附せらるべき動産及不動産。但本財団の目的に反する条件を付したる寄附は一切受領せざるものとす

三、基本金、授業料及其他の財源より生ずる収入

第十五条 理事会は理事三分の二以上の同意に依り

一、寄附或は買収に依りて本財団の為に財産を取得し
二、本財団の目的を達成せんが為め財産を賃貸或は売却し其賃貸料或は売却代金を投資或は消費することを得。但基本金の元本は如何なる事情の下にありても基本金としての外之を使用するを得ず

第十六条 本財団を解散する場合には理事全員の三分の二以上の同意に依り左記二項の一に依りて其資産を処分すべし

一、本寄附行為第三条に準じ基督教主義の教育を施すことを目的とする一個若くは数個の法人に譲与すること

二、前項に相当するものなき時は最初本財団に寄附したる個人若くは団体或は其継承者に寄附の割合に従つて分配すること。但合衆国リフォームド教会よりの寄附に関しては同教会外国伝道局を寄附者と見做

す

第五章 補則

第十七条 本財団は特に其目的の為に開かれたる理事会に於て理事全員の四分の三以上の同意に依り主務官庁の許可を得て之を解散することを得

第十八条 本寄附行為は理事会開会の三ヶ月前に各理事に通知し理事全員の三分の二以上の同意に依り主務官庁の許可を経て之を変更することを得。但第三条及第十五条二の但書は之を変更するを得ず

附則

本寄附行為が主務官庁の許可を得たる後最初の理事は左記十二名とす

デー、ピー、シユネーダー。ピー、エル、ゲルハード。エフ、ビー、ニコデマス。エフ、エル、フェスパーマン。ダブリユー、ジー、サイプル。エチ、ケー、ミラー。出村悌三郎。五十嵐 正。畑井新喜司。大原 八郎。阿部 豊吉。鈴木 義男。但左記四名は昭和四年十二月三十一日を以て満期としピー、エル、ゲルハード。エチ、ケー、ミラー。五十嵐 正。畑井新喜司。左記四名は昭和六年十二月三十一日を以て満期とす。

エフ、エル、フェスパーマン。ダブリユー、ジー、サイプル。出村悌三郎。鈴木 義男。

以上

六時廿五分ゲルハード氏ノ祈ヲ以テ八時迄散会

午後八時廿分出村氏ノ祈ヲ以テ再会ス

出席員 阿部氏ノ外全部出席

二、東北学院規程ニツキ逐条審議ヲナシ左記ノ通り決定、

三月總會ニ提出スルコトニ決ス

東北学院規程

經 営

第一条 本学院ノ經營ハ東北学院財団法人寄附行為ニ從ヒ全財団理事会之ニ当ルモノトス

理事会ノ職掌

第二条 東北学院財団法人理事会ノ職掌ハ次ノ如シ

一、院長、部長及其他ノ職員ノ任免。但院長ノ任免ハ理事全員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ要シ、部長ノ任免ハ出席理事ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ要ス

二、教員及講師ノ任免

三、職員、教員及講師ノ俸給及報酬ノ決定

四、各部並ニ各科ノ学科課程ノ決定

五、部又ハ科ノ設置若クハ廃止

六、本学院ノ制度並ニ管理ニ関スル諸規程ノ制定

七、卒業証書ノ授与

八、本学院会計一切ノ処理及予算ノ編成

九、本学院ノ資産全部ノ保管並ニ本学院ニ必要ナル凡

テノ建物ノ造営。

但建築ニ要スル資金ノ大部分ガ合衆国リフオームド

教会外国伝道局ヨリ供給サル、限り全局或ハ全教会

日本宣教師団ニ依リテ認可サレタル設計及価格ニ從

ツテ之ヲ建築スルモノトス

十、毎年十二月ノ定期理事会ニ於テ八名ノ常置委員ヲ

互選スルコト

十一、常置委員会ハ次回定期理事会開会マデ延期スル

コトヲ得ザルト共ニ臨時理事会ヲ召集スルマデニ重

要ナラザル事務ヲ処理スルモノトス

本委員会ノ定足数ハ六名トス

学 制

第三条 本学院ヲ次ノ三部ニ分ツ

一、 中学部

二、 専門部

三、 神学部

専門部ニハ次ノ三科ヲ置ク

一、 文科

二、 師範科

三、 商科

神学部ニハ次ノ二科ヲ置ク

一、 第一科

二、 第二科

職 員

第四条 本学院ニハ次ノ職員ヲ置ク、院長、部長、科長、

院長秘書、教務係、生徒監、校医、舎監、司書主管、

會計及書記

職員ノ職掌

第五條

一、 院長ハ本学院ノ校務ヲ總理シ、校務ヲ統督シ、公

会ヲ司リ公衆ニ対シテ本学院ヲ代表シ、理事会並ニ

合衆国リフオームド教会外国伝道局ニ対シテ本学院

ノ現状並ニ需要ニ関スル年報ヲ作製スベシ

二、 部長ハ院長指揮ノ下ニ担任部ヲ直接ニ管理シ、教

務ニ関シテ院長ノ顧問トナリ、授業ヲ監督シ、秩序

ヲ維持シ、一般訓育ニ関スル事項ヲ処理スベシ

三、 科長ハ部長ヲ助ケテ担任科ノ教務ヲ処理シ特ニ該

科ノ能率ヲ高メ發展ヲ計ルコトニ注意スベシ

四、會計ハ授業料及其他ノ金銭ヲ受領シ、諸支払ヲナ

シ、校舎校地ヲ直接ニ管理シ、理事会々計ニ月報ヲ

提出スベシ

五、其他ノ職員ハ夫々理事会ノ規定シタル担任務ニ

従事シ、所要ノ記録ヲ保存シ、所要ノ報告ヲ作製ス

ベシ

第六条 院長及各部々長ヲ以テ総務員会ヲ組織シ本学院

全般ニ亘ル一切ノ事項ヲ処理スベシ、予算ノ編成、修

正及ビ其他資産ニ関スル重要ナル事項ノ審議ニハ理事

会々計モ其一員トシテ之ニ参加スベシ

教員

第七条 本学院ノ教員ヲ分チテ専任教員及ビ講師トス

教員会並ニ其職掌

第八条

一、各部教員会ハ院長、当該部長当該所属専任教員ヲ

以テ之ヲ組織ス。講師並ニ他部所属教員ハ員外員ト

ルベシ

二、教員会ハ生徒ノ入学ヲ許可シ、生徒ノ試験採点及

ビ及落ニ関スル事項ヲ処理シ、授業ニ関スル事項ヲ

決定シ、重要ナル訓育上ノ事項ニ関シテ生徒ニ停学

又ハ放校ヲ命スルコトヲ発案シ又所要ノ試験ニ合格

シタル生徒ニ対シテ卒業証書ノ授与方ヲ理事会ニ推

薦スベシ

主任教員、校外生徒監及組主任

第九条 理事会ハ每学年始ニ所要ノ主任教員及校外生徒

監ヲ任命スベシ

第十条 院長ハ每学年始ニ教員中ヨリ各学級ニ組主任ヲ

任命シ担任級生徒ノ学業並ニ操行ヲ直接監督セシムベ

シ

宗教委員会

第十一条 院長ハ每学年始ニ本学院ノ宗教生活ニ関スル

常置委員ヲ任命スベシ、宗教委員会ハ院長、部長、専

任聖書科教員、学院教会牧師及特ニ院長ノ任命シタル

其他ノ教職員ヲ以テ組織シ、本学院教職員並ニ生徒ノ

宗教生活並ニ宗教活動ノ向上發達ヲ計ルル其職掌トス

規則ノ變更

第十二条 本規程ハ理事会開会ノ三ヶ月前之ヲ各理事ニ

通知シ、理事全員ノ三分ノ二以上ノ同意ニ依リ定期理

事会ニ於テ之ヲ變更スルコトヲ得。(昭和三、十、廿四

日)

書記 五十嵐

(理事會記錄)

設立者變更願

今般東北学院専門部及東北学院中学部設立者社団法人私立東北学院ヲ解散シ新ニ財団法人東北学院ヲ設立シ之カ維持経営ヲ為サントスルヲ以テ法人設立許可ト同時ニ設立者變更致度候間御認可相成度此段申請候也

昭和三年十一月五日

私立東北学院理事

デー、ビー、シユネーダー 印

文部大臣 勝田主計殿

昭和四年五月二十七日提案

学務課長 印

専門学務局長 印

次官 印

普通学務局長 印

設立者變更ノ件

案ノ一

東北学院専門部設立者

社団法人 私立東北学院

昭和三年十一月五日申請設立者變更ノ件認可ス

年月日

案ノ二

東北学院中学部設立者

社団法人 私立東北学院

昭和三年十一月五日申請設立者變更ノ件認可ス

年月日

(備考) 社団法人私立東北学院解散シ新ニ財団法人東北

学院ヲ設立シ東北学院専門部及東北学院中学部ヲ經

営セントスルモノナリ

(国立公文書館所蔵)

一四三 現役將校配属の通達

(昭和四年六月三日)

昭和四年六月三日

文部次官 栗屋 謙 印

東北学院長殿

現役將校ヲ配属スヘキ学校ニ関スル件

今後新ニ現役將校ヲ配属セントスル学校ハ其ノ配属方内

定後所管師団長ヨリ差遣シタル将校ト配属上必要ナル打合ヲ実地ニ行ハシムル様致シ度ニ付所管師団長ヨリ此ノ点ニ関シ協議有之タル節ハ右御了知ノ上右差遣将校ニ対シ可然便宜ヲ与ヘラルル様御取計相成度

(理事會記録)

一四四 リフォームド教会に対する感謝決議

(昭和四年四月二十四日)

四月廿四日午後四時十分東三番丁院長宅ニ於テ繼續會ヲ開ク

出席員 シユネーダー、フエスパーマン、ミラー、出村、

ゲルハード、サイプル、ニコデマス、鈴木、五十

嵐ノ諸氏

議 長 シユネーダー氏

開会祈禱 ゲルハード氏

六一、シユネーダー院長ハ今回重要ナル使命ヲ帯ビ近々帰米サルヽニツキ、リフォームド教会大会ニ対シ該教会ガ過去数十年間本院ノ教育事業ニ対シ深厚ナル同情ト援助トヲ与ヘラレタルコトニツキ衷心ヨリ感謝ノ意ヲ表シ併セテ将来モ変ラザル後援ヲ与ヘラレンコトヲ

祈ル旨ノ決議ヲナシ之ヲ院長ニ托シテ大会ニ送ルコトニ決ス

右決議案起草委員トシテ出村悌三郎氏ヲ挙グ

(後略)

一四五 財団法人の認可報告

(昭和四年九月十九日)

昭和四年九月十九日午後四時廿分南六軒丁ゲルハード氏宅ニ於テ本院社団臨時總會ヲ開ク

出席員 畑井、土田、ゲルハード、ニコデマス、サイプ

ル、出村、阿部、フエスパーマン、五十嵐ノ諸氏

議 長 出村氏

開会祈禱 土田氏

一、兼テ出願中ナリシ財団法人東北学院設立ノ件去八月

卅一日附ヲ以テ文部大臣ヨリ許可セラレタル旨出村氏

ヨリ報告アリ之ヲ受クルコトニ決ス

二、財団法人東北学院設立ノ件許可セラレタルニ依リ去

昭和三年六月四日ノ決議ニ基キ本社団ヲ解散スルコト

二決ス

三、従来本社団ニ属セル財産ハ全部之ヲ財団法人東北学院ニ寄附スルコトニ決ス

四時四十五分記録ヲ朗読シ之ヲ承認シタル上五十嵐氏ノ祈ヲ以テ閉会ス

書記 五十嵐
(理事会記録)

一四六 財団法人役員の選任

(昭和四年九月十九日)

昭和四年九月十九日午後四時四十三分南六軒丁ゲルハ
ード氏宅ニ於テ財団法人東北学院定期理事会ヲ開ク

出席員 出村、サイプル、ニコデマス、フェスパーマン、

阿部、土田、畑井、ゲルハード、五十嵐ノ諸氏

議 長 出村氏

開会祈禱 五十嵐氏

一、選挙ノ結果 シユネーダー氏理事長ニ当選ス

二、選挙ノ結果 サイプル、五十嵐正両氏書記ニ当選ス

三、選挙ノ結果 ニコデマス氏会計ニ当選ス

四、兼テ出願中ナリシ本院専門部ヲ東北学院ト改称シ其

中ニ高等学部並ニ神学部設置ノ件本月九日附ヲ以テ文
部大臣ノ認可ヲ得タル旨出村氏ヨリ報告アリ之ヲ受ク
(後略)

(理事会記録)

一四七 D・B・シユネーダー「神の国とは何ぞ」

(昭和五年六月八日)

神の国とは何ぞ

シユネーダー院長

六月八日午後二時中学部講堂に開催せられし仙台地方神の國
運動宣言大会に於ける演説の筆録。(筆責在鈴木)

基督がその弟子達に教へ給うた所謂主の祈の第二の祈
願は「御国の来らんことを」であつた。又山上の垂訓に
於て「先づ神の國とその義を求めよ」と弟子達に命じて
居られる。

又四福音書に記されてある通り伝道の御生涯を通じて
基督は屢神の國の事を話され且つ又復活から昇天に至る
迄の四十日間に於てすら「屢彼等に現はれて神の國の事
を語り給うた」と記されてある。

以上の記事から見ても神の国の観念は基督の理想と教訓の最も重要な要素でもあることが明かである。然らば神の国とは何ぞ。神の国とは何を云ふのであるか。キングダム」即ち王国なる言葉が使用される所から或人は之を政治的観念であると思はれるかも知れぬ。けれどもイエスはピラトの前で「我国は此世のものに非ず」と仰せられた。此故に神の国には政治的意義のないことが明かである。寧ろそれは精神的のもので、基督は「神の国は汝等のうちに在るなり」と仰せられた。パウロも亦「神の国は飲食に非ず、義と平和と聖霊によれる喜びとにあるなり」と云つてゐる。實際基督並に使徒等の言葉から「神の国」とは一大精神的理想であつて、それは此世に於ても益々充分に実現せられ、彼世に於ては遂に完全に実現せらるべきものであると云ふ意味であることが明かである。即ち神の前に立つても、人間同士の間にも於ても、完全なる人間の義の行はれる状態を指すのである。又神に対して、人間同士の間にあつても、完全なる愛の行はれる状態を云ふのである。

併ながら神の国は一大理想であると云ふだけに止まらない。若しそれが単に理想だけに過ぎないならば、それは空想で永久に実現される時がないのである。コリント

前書にパウロは「神の国は言に非ず、力にあればなり」と云うてゐる。神の国は単なる理想だけに止まらない。

その中には自らそれを実現する力が含まれてゐるのである。実現する力とは一体何であるか？基督は昇天される直ぐ前に其の弟子等に対し「聖霊汝等の上に臨む時、汝等力を受けん」と仰せられた。そしてペンテコステの日に聖霊彼等の上に注がれた時、弟子達は實際其の力を受けたのである。ペンテコステの日に即ち千九百年以前の今日新なる霊の力が此世に降り、爾來此力が義と愛の神の国の理想の実現の爲めに不絶働いてゐるのである。即ち個々の人に作用して彼等を生れ更らせ教会を通しても作用し社会のうちにも国際間にも人種間にも作用してゐる。人類の眞の靈的救済と進歩とは悉くこの神の聖霊の力の働きによるのである。

此故に仙台市に於ける神の国運動宣言大会は誠に難有い出来事である。吾々基督者側に於ては一層充分に吾々の心と生活とを聖霊の力の感化に委ね、かくて一層よき基督の証人たらんとする努力である。之と全時に基督者ならぬ多くの人々に神の国の理想を示し、彼等を新なる力即ち聖霊の力に接触せしめんとする努力なのである。

此故に私は此重要な出来事に対し最も深厚なる祝意

を表すると同時に三年間に亘る此運動の結果、聖靈の奇しき力に依つて仙台市に於ける神の国の理想の実現が真に且つ大に進展せんことを最も熱心に祈る者である。(六月八日)

(『東北学院時報』八九号 昭和五年七月八日)

一四八 D・B・シュネーダーの高等学部礼拝堂 建築計画

(昭和五年十一月三十日)

礼拝堂に就いて

院長

十一月三日明治節の式典終了後多くの教職員生徒が、今度増築される高等学部礼拝堂の敷地に集合した。そして敬虔な興味を以つて新礼拝堂の地割式に参加したのであります。それは真面目な式でした。かくて母校発展の道程に新なる前進の第一歩を印したのであります。

礼拝堂の建築技師は老練の米国建築家ジェー、エチ、モルガン氏で高等学部の校舎を設計したのも同氏でした。色々なる事情がありまして設計図と仕様書の準備が

大変遅れました。けれども今や準備万端調ひましたので、去月廿四日に工費総額拾壹万四千參百円で東京の石井組と工事請負の契約をなし無事調印を了へました。石井組は東北帝国大学の大部分の建物を建築した信用のある店であります。

礼拝堂は校舎と同様鉄筋コンクリート造秋保石張地階付二階建であります。工事の監督はニコデマス教授と元の体操教師鎌田国為氏です。竣工期は多分明年の晩秋でせう。工費の大部分はペンシルバニア州ピッツバーグ市のミス、イー、エイ、ラハウザーと云ふ一米国婦人の寄附で御座います。

礼拝堂落成の後は高等学部の毎朝の礼拝を此処で行ひ、又学院教会の日曜礼拝に之を使用する筈です。内部は全然教会風の構造で、大パイプ、オルガンが備へ付けられます。それは荘嚴な物に仕上りそして東北学院の靈的使命を成就するのに大なる資けとなるでせう。

(『東北学院時報』九一号 昭和五年十一月三十日)

一四九 D・B・シュネーダー「東北学院礼拝堂
定礎式」

(昭和六年七月十九日)

東北学院礼拝堂定礎式

シュネーダー

七月十九日(日曜)午後三時から高等学部構内で礼拝堂の定礎式が挙行された。時既に高等学部並神学部は夏期休暇に入り、中学部亦試験最中なので、学生の臨場する者至つて少なかつたが、教職員、教会員、宣教師及建築関係者等百名以上の来会者あり、特に支那から高山に避暑中のホーイ夫人並に令嬢及び折柄来仙中の朝鮮崇実大学長マツクーン博士の参加せられたのは嬉しかつた。定刻に至り今し据ゑられんとする礎石を背に司会者のテーブルを置き之を中心にして会衆が半円形を作つた。先づ讚美歌第三九七を一同で歌ひ、司会者出村部長の聖書朗読、赤石牧師の祈禱の後、院長の式辞あり、序いて五十嵐部長別項の記録を朗読し、愈々院長の手に依つて定礎の式を行ひ、式禱を以つて之を閉じた。次に有志の聖歌合唱あり次に一同頌栄、終りにマツクーン博士の祝

禱を以つて、全プログラムを終了した。

それより三々五々打ち連れだつて建築中の堂の内外を觀覽し、高等学部生徒食堂で煎餅をかぢりながら番茶に喉を潤し、五時頃喜びと希望に充ちて散会した。

此の日正午頃より曇り初め小雨さへ降つて来たので、野天の拳式どうかと案じたが、幸ひ式中雨も止んで蒸し暑かつたが無事に終つた。

因みに礼拝堂は鉄骨鉄筋コンクリート造りで、外部は高等学部校舎同様秋保産長峰石張りである。ただ校舎の石張は最下部人造石だが今度のそれは茨城産の花崗石である。所謂式はこの花崗石の礎石に長さ六寸巾並に深さ四寸位の鉛函を納め、箱中には別項目録の品を入れて蓋し、その上にトロを流して第二の石を積み重ねたものである。而して礎石の外部表面即ち側面には佐藤辰衛先生の筆にて中部に名称即ち東北学院礼拝堂、上部に年月を横書し、下部に院長自身の手にて西暦年月を記し、之を熟練の石工が精細に刻み込んだ。

五十嵐部長の朗読された記録は第一、納入品の目録。

第二、名称及び用途。第三、ミス、ローハウザー及同家族略歴。第四、ローハウザー記念東北学院礼拝堂建築資金に就いて、である。即ち

○第一、目錄

一、名称及び用途。二、東北学院沿革。三、東北学院教会沿革。四、財団法人東北学院理事氏名。五、東北学院総務員氏名。六、東北学院各部教職員氏名。七、東北学院各部生徒氏名。八、本建築関係者氏名。九、ミス、ローハウザー及同家族略歴(和英)。十、ローハウザー記念東北学院礼拝堂建築資金募集について(和英)。十一、旧新約聖書。十二、讚美歌。十三、昭和五年度日本基督教学年鑑及東北中会記録。十四、昭和六年度東北学院教会々員名簿。十五、昭和五年度東北学院同窓会々員名簿。十六、昭和五年度東北学院一覽。十七、昭和六年度東北学院中学部一覽。十八、財団法人東北学院寄附行為並に規程(和英)。十九、昭和六年七月十六日発行福音新報。廿、全十五日発行神の国新聞。廿一、全二日発行聖園時報及東北学院時報。廿二、全年六月廿日及七月廿日発行学院教壇。廿三、全七月十九日発行河北新報及仙台日日新聞。廿四、通貨、五十錢、十錢、五錢及一錢貨幣。以上

○第二、名称及用途

本建物は東北学院礼拝堂と称し、東北学院並に東北学院教会の爲め礼拝の場所として使用せらる可きものである。

○第三、ミス、ローハウザー及全家族略歴

ミス、ローハウザーの祖父フレデリック、エー、ローハウザー教師はリフォームド教会開拓者たる教役者の一人なりき。彼は一七八三年を以てペンシルヴァニア州ヨーク郡に生れ、廿六歳にして按手礼を領し教師に任職せらる。爾来メーリランド州ペンシルヴァニア州及オハヨ州に於て約五十年の永きに亘りて伝道並に牧会に尽瘁せり。

其の人となり誠実、謙遜、忠実にして成功せる基督の福音の説教者なりき。特に青年を基督教的に薫化する点に於て成功せり。彼は八十三の高齡に達し、ピッツバーグ市に於ける令息ジョージ、エフ、ローハウザー君即ちミス、エラ、エー、ローハウザーの父君の宅に於て逝去せり。其の場所は即ちミス、ローハウザーの現住所の附近にあり。

ミス、ローハウザーの両親たるジョージ、フレデリック、ローハウザー君並にイザベラ夫人は共に、敬虔篤実なるリフォームド教会員にしてペンシルヴァニア州ピッツバーグ市に於けるグレース教会の創立者となり、ローハウザー君は全教会最初の長老に挙げられたり。

ジョージ、エフ、ローハウザー君並にイザベラ夫人の

令息にしてミス、ローハウザーの令兄たるジョージ、ジ
ー、ローハウザー君は医師となり其の業に成功し、ピツ
ツバーグ市に於いて或地所を購入せしが、後年其の地価
大に騰貴せり。彼は臨終に際し遺言して該地面を令妹ミ
ス、エラ、エー、ローハウザーに譲与せり。

近年に至りミス、ローハウザーは令兄よりの遺産の一
部を売却して慈善事業に多額の寄附をなすことを得た
り。ミス、ローハウザーは多額の金員を所有するにも不
拘極めて簡易なる生活を営み、其の居宅の如き甚だ質素
にして日常の生活は主に彼女自身之を弁じ其の習慣甚だ
儉約なり。

彼女は自身の為めに生活せずして専ら主の為教会の為
めの生活を営みつゝあり。彼女は其の祖父の如く誠に質
素にして謙遜、而かも其の精進と慈善行為とは寔に敬服
すべきものあり。願はくば此の世に於ける彼女の生涯の
為めに讚美神にあらんことを。(シユネーダー)

○第四、ローハウザー記念東北学院礼拝堂建築資金
に就いて

一九二九年(昭和四年)私共夫婦がアメリカに行つて
ゐた時、私共は東北学院の為に礼拝を行ふ場所を建てる
資金の募集を企てました。予而ペンシルヴァニア州のピ

ツツバーグ市のエラー、エー、ローハウザー嬢が基督教
の為めによく寄附する方であることを知り且つ此前の時
にも可なりの寄附金と共に若し出来るならば今後も寄附
すると云ふ約束を得てゐましたので、私共夫婦は全年九
月六日にピツツバーグ市マリエ街六〇四三番地の御宅に
令嬢を訪ねました。日本基督教的事業の発達と東北学院
並に東北学院教会の為に礼拝堂の必要なる所以をお話し
ました処、令嬢はさうした建物を建てるには一体どの位
かゝると聞かれました。約五万弗かゝると申しました
処嬢はその位銀行に預金があるかどうか分らないから数
日後にまた来て頂き度いと申されました。六日後に即ち
九月十二日に私共は再び訪問しました。二、三の雑談を
交はした後、嬢は「さう／＼小切手を上るのです」と
て私共に五万弗の小切手を下さいました。私共はピツク
リしました。私共が幾年か祈り且つ求めていた建物が今
此大なる慈善行為に依つて実現されることになつたので
あります。私共は感極つて言葉が出ませんでした。やう
／＼にして嬢に御礼を述べ膝まづいて神に感謝し且つ此
金を間違なく用ひることが出来るやう神の導きと助を祈
りました。之は外国伝道の為に献げられた金としてはリ
フォームド教会始つて以来最も多額の寄附金でした。此

喜びは単に私共に限られませんでした。外国伝道局にとつてもリフォームド教会全体に亘つても大した喜びでした。そして仙台に於ても勿論大なる喜びがあつたので御座います。金は直ちに合衆国リフォームド教会外国伝道局幹事エー、アール、バーソロミュー氏に渡ししました。全局の手に依り現に建築中の此建物に対し必要に應じて支払をなされてゐるので御座います。(鈴木市治郎記)

〔『東北学院時報』九六号 昭和六年九月十日〕

一五〇 D・B・シュネーダー「ラーハウザー記

念礼拝堂献堂式」

〔英文〕

(一九三二年三月十九日)

第四章 神学部と東北伝道

一五一 清水東四郎「東北中会史」

(明治十八年〜大正八年)

東北中会史

第一章 東北中会の成立

明治十八年春(四月?)中会を組織するために押川方義、吉田亀太郎、斎藤昌国(以上仙台)、片山彦五郎、菅田勇太郎(以上岩沼)、渋谷恂一郎(古川)、丹野佐一郎(石巻)等と東京、横浜から来仙したノツクス、バラ、マコーレー、ホーイの四名が協議を凝らし中会を創設して、仙台中会と称したのが東北中会組織の嚆矢である。今年十一月二十日東京市京橋区木挽町東京厚生館で開かれた、第三回日本基督教大会に於いて仙台、岩沼、石巻、古川の四教会に北部中会所属の函館教会を転属させ五教会をもつて中会を組織することが認可されて、仙台中会と称して来たものを宮城中会と改称し大会公認のもとに中会の組織を完備するようになった。

厚生館で開かれた第三回大会では、従来の西部中会を鎮西中会に、中部中会を浪花中会、東部中会を第一東京中会、北部中会を第二東京中会とそれぞれ改称し、それに新たに宮城中会を加えて五個の中会をもつて大会を組織することとなつた。これらの中会は、概ね年二回若しくは一回各地方に会合し、規定の事務を執り、大会は第五回までは二年毎に開催されることになつた。

(注)大会の開催は明治十四年十一月二日から四日まで北部、中部、西部の三中会をもつて新栄橋教会で開催され、議長には奥野昌綱、書記に安川亨が選任されて大会事務を執行した。

第二回は明治十六年十一月十三日から十五日まで、同じく新栄橋教会で開催され議長にはギドウ・フルベツキ、書記は安川亨が再選された。

第三回は前述のように、京橋の東京厚生館で開催、議長に大儀見元一郎、書記は安川亨が三選された。

仙台日本基督教会歴史には、明治十九年春、初めて宮城中会を開くとあるがこれは誤りであろう。理由としては(日本基督教会略史―山本秀煌―)に十八年十一月仙台中会を宮城中会と改称したという記事があるからである。以上の事から第一回中会は明治十八年春仙台に於い

て開催されたとするのが正しいと思われる。当時仙台教会は国分町二丁目古木某の宇を借りて移るとあるので開催場所は多分国分町であつたと思われる。日時は春とあるだけなので判明しないが四月と推定してよいであろう。

(注)東北中会の開催回数、中会記録によると明治三十七年に始めて第二十一回と明記してあり、最初の明治十八年から十年目に当るから、毎年一回開催したとすれば二十回になる可きで二十一回とあるところから何れかの年に二回開催されたと見るべきであろう。恐らく、明治十八年春仙台で第一回仙台中会を開き、同年十一月大会の際第二回仙台中会を再び開いて、宮城中会と改称する決議をしたものと考えるのが至当のようである。

第二章 中会の開催並びに議長、書記の選任

前述のように明治十八年春第一回仙台中会を開き、同十一月第三回大会期間中に第二回中会を開いて、名称を宮城中会と改めたが第三回、第四回、及び第七回は資料が全く得られないので、その詳細を知る術もないのは遺憾である。第八回中会は明治二十四年十月十五日仙台中会に於いて開かれ、前年度の議長は斎藤壬生雄であつた。

第八回中会では三浦徹が議長に選ばれ、書記は藤生金六、松田順平の両氏に依頼した。翌二十五年九月二十日第九回中会は同じく仙台教会で開催、三浦宗三郎を議長に選任、三浦徹を無任期の書記とした。第十回中会は明治二十六年三月一日仙台、同年八月二十五日から二十九日まで五日間北海道函館教会で開催、斎藤壬生雄を議長に選んだ。爾来毎年ほゞ四、五月頃を期して各地を廻つて会場とし、議長の選挙、諸報告、議事の討論、中会に属する諸案件を処理して来た。また臨時中会は規定に従い要求のある場合で開いた。

明治三十五年十月岩沼教会で開いた第十九回中会では、北海道中会が新設されたので函館教会を宮城中会から北海道中会に転属させることを可決した。更に大正八年四月二十四日福島教会で開かれた第三十六回中会では、宮城中会を東北中会と改称することとなり、宮城中会時代は三十六年間をもつて終り、東北中会の名のもとにその教務を継承することゝなつた。

書記の任期については、前述のように第十五回中会は三浦徹を無任期書記として選任し、第十八回中会まで四ヶ年書記を継続したが明治三十五年四月仙台教会で開かれた第十九回中会で佐々木純一が選任、爾来十四年間歴

任したが、大正五年四月米沢教会で開かれた第三十三回中会に於いて書記の任期を二ヶ年とし伊藤嘉吉を選任、大正七年四月仙台教会で開かれた第三十五回中会に於いて再び書記を無任期とし伊藤嘉吉を選任した。

〔後略〕

〔日本基督教会東北中会史〕

一五二 宮城中会伝道委員規則

(明治二十一年十二月十日)

日本基督一致教会宮城中会伝道委員規則

第一条 組 成

第一款 選挙 中会伝道委員ハ六名トシ内外人ヨリ半数宛投票ヲ以テ選挙ス可シ

第二款 任期 満二年トシ毎年春期ノ中会ニ於テ其半数ヲ改選ス可シ

第三款 欠席 若シ委員中委員ニ於テ十分ト見認ムル所ノ理由ナクシテ三次引続キ定期会及ビ期間ノ臨時会ニ欠席スル者アレハ之ヲ辞職ト見做ス可シ

第四款 補員 中会閉鎖中ニ欠員ヲ生スル時ハ委員ハ其

補員ヲ選舉スルノ権アリ但其補員ハ次ノ中会ニ至ルマテ事務ヲ負担スル者トス

第二条 役員

第一款 役員左ノ如シ

委員長 一名

記者 二名(内外国人各一名)

會計 二名(内外国人各一名)

第二款 任期 役員ハ毎年春期中会后ノ定期会ニ於テ改選スベシ

第三款 職掌

(一)委員長 委員長ハ凡テ委員会ノ議長トナリ議事ヲ整頓スベシ又可否同数ナル時ハ自ラ之ヲ決スベシ

(二)記者 記者ハ凡ノ集会ヲ総員ニ通知シ又和英両文ヲ以テ凡テ集会ニ於テ決議シタル所ヲ遺漏ナク筆記シ請求スル者アル時ハ之ヲ朗読シ又和英両文ノ記録ニ差違ナカラシメン為メニ各集会后必ズ両記録ニ対照シ又三次引続キ定期会及ビ其間ノ臨時会ニ欠席シタル者アル時ハ直ニ之ヲ報告シ又中会ニ提出スベキ年報ヲ起草シ委員会ノ認可ヲ受ク可シ

(三)會計 ハ凡テ大会伝道局ヨリ金銀ヲ受ケ取り委員会ノ指揮ニ從テ之ヲ支出シ其収支ヲ綿密ニ出納簿ニ登

記シ凡テ受取証ヲ保存シ定期会毎ニ出納ノ概略ヲ口述シ毎年秋期中会前ノ定期会ニ於テ出納明細表ヲ作り委員会ノ認可ヲ受クヘシ又委員中出納簿ヲ閲覧セシム事ヲ求ムル者アル時ハ必ズ其求ニ応ズ可シ

第四款 會計検査委員 毎年秋期中会前ノ定期会前ニ於テ之ヲ立テ會計ノ帳簿ヲ検査セシム可シ

第五款 事務委員 時宜ニヨリ事務委員数名ヲ選舉シテ急務ヲ弁理セシムル事ヲ得可シ

第三条 集會

第一款 定期 定期会ハ毎月第四土曜日午後七時トス

第二款 臨時 委員三名以上請求スルカ若クハ委員長ニ於テ必要ト見認ムル時ハ臨時会ヲ開クヲ得可シ但シ臨時会ヲ開ク時ハ少クモ三日前ニ其要旨及ヒ時

日場所ヲ各委員ニ通知ス可シ

第三款 満數 総員中集会スル者三人ニ至レハ議事ヲ決定スル事ヲ得

第四条 事務

第一款 凡テ該委員ニ於テ依頼スル所ノ伝道者ハ通常中会ノ准允タル可シ

但至急ヲ要スルトキハ臨時伝道委員ノ見込ヲ以テ之ヲ依頼シ置キ最近ノ中会ニ於テ之カ准允ノ試験ヲナサ

シムル事アル可シ

第二款 凡テ伝道者ヲ依頼又謝絶スル時ハ出席委員三分

ノ二以上ノ同意ヲ要ス

第五条

此規則ハ定期会ニ於テ出席員三分ノ二以上ノ同意ヲ得テ
停止シ又改正スル事ヲ得可シ

(宮城中会記録)

一五三 押川方義の伝道方策

(明治二十七年十月二日)

宮城中会定期中会記録

明治廿七年十月二日(第一火曜日)午後三時(前会ノ決議ハ午前九時ナリシガ満数ニ至ラズシテ止ヲ得ズ午後三時ト為レリ)前中会ノ決議ニ從ヒ仙台教会々々堂ニ定期中会ヲ開ク

(中略)

押川氏之ニ追加シテ曰ハク

抑々我伝道局ノ事務タルヤ内外協同、又其經濟上ノ事ヲ考レバ一ト三ノ割合、内外同數ノ委員ヨリ成リ以テ今日

マデ舉行シタリキ、然ルニ本年東京ニ開設セル大会ニ於テ之ヲ廢シ各中会ニ於テ夫々伝道セシムル事ト為レリ、固ヨリ此廢止ハ不和分争等アリテ然リシニハアラズ却テ其精神ヲ新ニシ其進歩ヲ速ナラシメンガ為ノミ、然レバ吾人ハ更ニ一層奮発、大二期スル所アラザルベカラズ我中会ノ区域ハ其面積大ニ、人口多ク、又費用ヲ要スル事モ他ニ優ルモノアリ、東京ノ第一、第二中会ノ如キ其区域甚タ広シト言ハズ且又巧ニ人ヲ融通セシムルノ便利アリ、是ノ如クナルガ故ニ今日マデハ第一、第二ガ割合ニ多額ノ伝道金ヲ出タシテ他ノ少額ナル所ヲ補ヒタルノ實アリキ、然シ今度各中会ニテ自ラ負担スル事ニ為リタレバ今日マデノ姿ナリシナランニハ困難ヲ免ルベ能ハズ、今日マデ我委員ニテ出ダシタルモノハ毎月百二十円ナレバ他中会ヨリ出ダシタル資金ヲ注入セザルニ於テ委員等ハ兵糧攻ノ姿ト為ルベシ、委員等ハ常々焦慮シテ忠實ニ其事務ヲ為シタレドモ實ニ大困難ヲ加ハザルヲ得ズ、教会ハ何レモ余裕アルニアラズ、而シテ時ハ日清ノ關係アリテ實ニ余裕ヲ欠クノ恐アリ、此時退テ守ルハ我伝道会ノ一恥辱ナリ、吾人ハ更ニ進ミテ伝道ノ任ニ當ラザルヲ得ズ、是レ大ニ諸士ノ尽力ヲ乞ハザルベカラザル所也、前ニモ言ハンガ如ク今日マデノ儘ニテハ毎月百二

十円ヲ要スル上ニ北海道ノ如キ大ニ拡張セザルヲ得ザルモノアリ資金ハ増加コソスベケレ決シテ減ズル能ハザル也、玆ニ於テ委員等ハ仙台附近ノ地ヲ「ゼルマン」リフアームト「ミシヨン」ニ任セタルモノアリ、是レ此「ミシヨン」ノ人々ハ東北学院ニ関係アル人々ニシテ遠方ニ十分働クヲ得サレバ也、然レバ我伝道局ハ殊ニ北海道ノ如キ地ニカヲ注ガザルベカラズ、我局員ノ働ニ対シテ「ゼルマン」リフアームト「ミシヨン」ハ頗ル好意ヲ表シ毎月金九十二円宛ヲ寄附スルノ約ヲ得、已ニ二ヶ月間ノ寄附金ヲ得タリ、然レバ是迄ノ如ク百二十円ノ働ヲ為サントスルニモ尚ホ毎月廿八円ノ寄附金ヲ要ス、然レドモ九十二円ノ寄附金ニテ安ンズベカラザルハ固ヨリ尚又伝道区域ヲ拡張セントスルノ望アレバ弥々諸士ノ奮起セン事ヲ望ミテ止マザル也、願ハクハ「ダチリフアームド」又ハ「プレスビテリアン」等ノ「ミシヨン」ニ於テモ我働ヲ助ケラレン事ヲ、然シ「ミシヨン」ハ「ミシヨン」ノ働アレバ同情ヲ表スル能ハズトナラバ黙シテ止マンノミ

諸士モ已ニ知ラル、如ク北海道ハ働クベキ所頗ル多シ目下已ニ着手シタルモノハ彼方此方ニポツ／＼トミルベキ姿也、働クベキ所多クシテ此ポツ／＼タルハ畢竟兵站部ノ不備ニ帰セザルベカラズ、又我中会ヨリ他ノ「ミシヨン」

ニ此事ヲ慮ズハ中会ノ糺ナリ
諸士此問題ヲ研究セラレヨ

一、真木氏動議 今夜七時ヨリ真木氏ノ司会ニテ有志者ノ祈禱会ヲ開キ中会ハ明朝八時マテ散会

一、美露氏ノ祈禱ニテ散ズ

(宮城中会記録)

一五四 宮城中会の独立伝道決議

(明治三十年四月二十日)

宮城中会記録摘要

(一)明治廿年四月廿日午前九時定期宮城中会を仙台日本基督教会堂に開く前期議長藤生氏欠席に付押川氏仮議長となり讚美歌二百廿六番を唱し哥羅西書第一章を朗読し次で祈禱讚美歌(百〇一番)の後仮議長説教す

[中略]

(三十)「ミシヨン」への交渉委員石田氏より「ミシヨン」は更に交渉を受けることを断然拒絕せりとの報告あり之を受くるに決す

(廿二)押川氏動議 当中会伝道局か従来受来りし「ミシヨ

ンよりの伝道金は向ふ一ケ年を期して之を謝絶することとせん

右満場一致を以て可決す

(廿二) 押川氏動議 従来中会直轄の諸講義所は一旦中会の管轄を解き而して更に中会管下に入らんとするものは向ふ一ケ年以内に之を出願して中会の許可を受くること 可決

(廿三) 押川氏動議 右の決議により中会か任せし各宣教師は自今必要なきものとなりたるにより今回中会の閉会ととも悉く其任を解くこと 可決

(廿四) 午後六時議長の祈禱を以て明日午前八時まで散会
(廿五) 廿二日午前八時讚美歌百四四を唱し三浦氏の祈禱を以て開会す

(廿六) 押川氏動議 昨日の決議の精神をミシヨンへ通知せんかため議長外一名を委員として通知書を起草せしめ至急に之を議場に提出せしむること 可決

(廿七) 議長の名により押川氏右委員の一人に挙らる
(廿八) 押川氏動議 昨日の決議を執行し将来の事を計画せしめんかために五名の委員を挙て之に全権を委任すること 可決

[中略]

(四十七) 起草委員よりゼルマンリフオームドミシヨンへの通知文脱稿の上提出あり審議の末之を送附すること
に決す

[中略]

(五十二) 押川氏動議 中会は中会伝道の独立を成就せんかため中会員特に中会伝道委員は専ら力を此方向に用ゆべきことを告白す 可決

(宮城中会記録)

一五五 「仙台教会内の紛擾」

(大正十年)

仙台教会内の紛擾

[前略]

佐藤詮牧師を失つた仙台教会はこの萩原信行に目をつけ、シュネーダーや同窓生を通じて、彼を再び母教会に帰るよう懇望した。それに恩師押川のすすめもあつたので中央に止まる足場も出来かけた所を思い切つて東北の重鎮たる仙台教会牧師として赴任したのである。時は明治四十五年である。

萩原は恩師の押川精神を受け継いで、「日本魂を知らずして日本伝道は不可」とする信念に立つて、経済面での独立は勿論、その他に於いても外国ミッシヨンの伝道方法を好まない。然るに押川方義の去つた後の仙台教会の実情は上述の通り、二十数年間の長きに亘つて、牧者の位置が安定することなく、学院の附属教会の如き観をなしていたのである。第一教会員の大半は東北学院または宮城女学校の関係者で占めている。また教会活動で極めて有力な活動をなしている婦人会の活動はミセス・シュネーダーが自分の手で育てあげたもので、市内名流婦人を交えて活発強力なはたらきをつづけている。また教会で行われる洗礼式のごときもシュネーダーまたは学院神学部教授が授洗者となる場合が多く、受洗者は学院関係のものが多数を占める有様で、萩原牧師は教会の主宰者として手を下す範囲は自然と制限をうけるわけである。

かくて、愛国的伝道者をもつて自任する硬骨漢萩原信行は、一箇の独立教会の牧師として、その責任を果して行くうえに、己れの頭上に、払いがたい重圧のあるのに反発を感じざるを得なかつた。

牧師不信任問題 第一次世界大戦後の日本は一挙に世

界最強国の間に伍するに至り、益々日本の優越感と自負心を強め、内政外交すべての面に日本中心主義をうち出していった。

かくて、この国家的大勢は、キリスト教界の中へも自然と浸透して来て、日本主義的キリスト教を唱える人々は、国家主義の時流に押し流されつゝも、自らはわが意を得たものゝように感じとり、ミッシヨンからは次第に手を分つ方向に流されていった。

仙台教会内に於いてもその例にもれず、萩原信行は教会の主宰者たる絶対的立場を確立しようとして、仙台教会が創立の始めに於いて純然たる独立教会である歴史的事実のうえに立つて、一切の学院的あるいはミッシヨンのな伝統を排除しようとする態度をとるに至つた。これに対してシュネーダーを中心とする所謂学院派は、その偏狭と頑迷とを憂えて、これを放置せば教会の本質的動力を枯渇させ、沈滞させ遂には教会の機能を喪失するのではないかとの憂慮を深めていった。

萩原牧師の主張を具体的に示せば「仙台教会」は、最初から仙台市民を教化の対象として創立されたものである。その目的は今日でも変つていない。その何よりの証拠は大正三年五月財団法人設立の際に、その寄附行為第

一条の規定にも

「本法人の目的は基督教の健全なる発達を図り、仙台をはじめ汎く日本の教化に力を尽し進んで東洋の教化に翼賛せんがために組織せられたる仙台日本基督教会のためにその礼拝執行の事業に要する土地建物及び設備品を所有し之を管理し並に必要な資産を供給するにあり。」

とあり、教会の目的は法的にも明らかであるとして、ミッシェン派を評して「それは日本を忘れし心なり、独立自給の魂を失えることとなり、市民を顧みざらんとせしことなり」と責めたてて、仙台教会をミッシェンまたは学院の附属教会化されることから守り、創立当初の如く一般人のため独立教会としての機能を復元せねばならないと主張するのである。

大正十年前後の頃から、この軋礫が次第に表面化して、所謂学院派の人々は萩原牧師に辞任勧告を図る勧告文を会員間に廻して記名調印を求め、大正十年二月十九日、大村、郡山、五十嵐、宮本の四氏、が代表者となり萩原牧師にこれを示して辞職を勧告した。然るに萩原牧師は頑として之を拒絶した。その夜更に青年血気の教員三品の菅井、早坂の三人が萩原牧師を訪ねて重ねて辞

職を勧告した。

その後この抗争が一層露骨に進展したが、その五月十七日仙台教会創立満四十年祝会が開催され東京からは創立者押川方義、創立の協力者吉田亀太郎の来会などあり、この問題にも触れたのであるが、解決の見込みなく、紛糾をつゞけ、遂に大正十二年まで続き、同二月二十五日（日曜）の礼拝後急に臨時総会を召集し、牧師の辞職勧告に対して会員の賛否投票によつて決することとなつた。

然るに投票の結果、辞職を可とするもの八十五票、不可とするもの九十六票の数が表われて、勧告派は意外の苦杯を喫した。

かくて所謂学院派の中心であるシュネーダー夫妻の失望は大きなものであつた。シュネーダーは、その後しばらく熟慮熟禱を重ねたが東北学院の教育事業を推進するためには、また学院教職員、その他の学院関係者の宗教生活を教化発展させるためには、どうしても学院直属の教会が必要であるとの結論に達した。即ち仙台教会とは分離して別に新しい教会を起すべく決意し、学院教職員及び学院関係の信徒を糾合して、学院の講堂を用いて日曜礼拝をまもることとし、新教会の組織を企てた。

東北学院教会の歴史（赤石義明）東北学院教会が最

初の礼拝を守つたのは、大正十二年五月六日の日曜日であつた。この日午前十時、東北学院中学部講堂西側の片隅に僅か十八名の者が集まつて、極めてささやかではあつたが、心からなる礼拝を共にしたのである。その時出席した人々は明らかに憶えていないが、多分、シュネーダー院長夫妻、早坂一郎、出村悌三郎、今井信太郎、笹尾糸太郎、出村剛、五十嵐正、津久井善四郎、紺戸喬、石川金司、津田郁、三品鼎、阿部従二、園田実、内藤隆行、布施とよせ、ザウグの諸君であつたかと記憶している。

何故これらの人々が相集まつて礼拝を共にしなければならなかつたのか。それについては、色々複雑な事情があつたらしいが、私としては、直接そうしたことに参与してゐなかつたので詳しいことは知らない。私がその前年の夏米国留学から帰朝して、母校神学部に教鞭をとることゝなつた時には、既に東北学院教会設立の機運は熟してゐたようである。そこへ偶々私が神学部の実践神学教授として赴任したことが、東北学院教会牧師としての責任をもとることに神が私を導き給うたのである、とこゝろ私は考えたのである。

それはとにかくとして、私の理解している範囲では、

東北学院教会設立の根本的な理由は、東北学院という基督教主義教育機関が、若しもその目的を達成しようとおもうならばその背後に、特に深い関係と使命を持つ教会が必要欠くべからざるものであるということにあつた。斯うした考えは、特にシュネーダー院長に於ては頗る強硬であつたようである。結局、之に共鳴した人々が相集まつて、東北学院教会設立を計画したのであるというて差支えないと思う。

斯様な動機から、設立者達はこのことを東北中会に具申し、正規の手続を経て東北学院教会を設立されたいと申請したのである。

〔後略〕

（『東北学院七十年史』）

一五六 東北学院伝道教会の設立願

（大正十二年五月三日）

大正十二年五月三日午前九時、仙台教会会堂に於て開催

第一 開会

伊藤嘉吉氏司会、一同讚美歌第二百七十三番を歌ひ、

芳賀甚吉氏使徒行伝第三章一より十までを朗読し、佐羽内哲三氏の祈禱あり。議長秋保親晴氏説教し、中会部内の伝道を振興するには先づ教職に在る者自身が、自己の聖職に対して大なる自覚を有すべき事を力説せらる。後伊藤氏祈禱を捧げ、一同再び讚美歌第四百四十四番を歌ひて開会す。

〔中略〕

(三)東北学院教職員有志者十六名より伝道教会設立願出あり、城生、小林、前田三氏を委員として之に全権を与へ、更に事情を調査して満足なる結果を得たる上設立式を挙行せしむることに決す。

〔後略〕

(東北中会記録)

一五七 東北学院伝道教会の設立承認

(大正十三年五月八日)

千九百廿四年五月八日午前九時、福島日本基督教会会堂に於て開催。

〔中略〕

(三)東北学院(城生安治)

小林、前田、城生の三委員先づ東北学院教会創立者総代出村悌三郎氏と会見して中会の意旨を伝達し、学院教会は教職員、生徒、及び其家族の爲めに設立せらるるものなれば、其会員たるものは是等の人々に限るべきものなれども、万止むを得ざる少数の学院関係者の入会するは例外と見るべき事と了解し、千九百二十三年五月十三日東北学院中学部講堂に於て規則に従ひ、設立式を執行せり。尚設立に際し、市内各教会との関係上、特殊の事情もあれば、学院教会に属すべき会員に就て特に出村氏と覚書を交換し、且つ特別入会者に対する注意を与へ置きたり。又設立式場に於ても総て入会者ある場合は中会当局と協議し、中会直轄の特殊伝道教会として中会と円満なる関係を保つべきものなる事を言明し置きたり。

正 午 芳賀甚吉氏の祈にて散会

午後一時半 清水東四郎氏の祈にて再開

午前に引続き東北学院伝道教会の件に付き討議し、遂に設立委員の報告を承認し、尚議長指名三名の委員を挙げて東北学院伝道教会の将来に関し教会の責任者と商議せしむる事に決す。

委員 城生安治 土田熊治 小林亀太郎 三氏

〔後略〕

(東北中会記録)

一五八 「東北学院教会建設式」

(大正十五年二月五日)

東北学院教会建設式

東北学院教会は大正十二年五月伝道教会として中会によつて建設せられしものなるが、此後凡ての方面に於いて順調なる発達を遂げ昨年十一月臨時東北中会に於いて独立自給の教会たる認可を受けた。去る二月五日午後六時半より東北学院中学部講堂に於いて、中会によつて挙げられたる委員、城生、伊藤の両教師及び鈴木重久君の手にて臨時總會並びに建設式を最も厳肅に挙行せり。始めに臨時總會を開き新教会の役員として、長老十名、執事八名を選挙し、直ちに任職式を執行し、引続き、建設式に移りて、城生委員長の宣言勸告、各方面代表者の祝辞終りに教会代表者の答辞ありて午後九時閉会せり。当日は多数の会員来賓の出席あり極めて盛会なりき独立

せる学院教会が創立当初よりの使命に向つて奮闘せられ、学院内の宗教生活の向上と充実に貢献し、ひいては仙台市及び広く東北伝道の一大新勢力とならんことを切望して止まず。(出村剛)

(『東北学院時報』六五号 大正十五年三月五日)

一五九 東北学院教会の独立性に関する中会審議

(昭和八年四月二十六日)

第一 開会

第五十回東北中会は千九百三十三年四月二十六日午後二時半、宮城県石巻市山城町石巻伝道教会々堂に開会さる。渡辺書記司会のもとに、一同聖歌第四百四番を歌ひ、東六番丁教会長老浜名正氏聖書コロサイ書第一章を朗読し、教師諏訪修治氏祈禱す。議長丹忠氏ロマ書第一章第一節より第十七節までを題詞となし、『教会建設の精神』と題して説教し、終りて祈禱す。一同聖歌第三百七十八番を歌ひて開会す。

〔中略〕

第三十六 東北学院教会に関する調査委員報告

(渡辺良亮君)

東北学院教会は特殊教会なるを以て独立教会と認むること能はず。

右報告す。

東北中会常置委員会

田口 泰輔君 動議 第一項『東北学院教会は特殊教会なり』と受入れ、第二項『之を独立教会と認むること能はず』を審議する事。

赤石 義明君 賛成 仍つて

丹議長、之を議題として審議せしむ。

討論中、丹議長、更に午后二時迄時間延長を議場に諮る。

梅津 吉之助君 賛成 可決。

討論に入り、調査委員の報告を受入れ、東北学院教会は特殊教会の故を以て独立教会と認めざることとの西淵確君の動議、萩原信行君の賛成ありて可決。

〔後略〕

(東北中会記録)

第五章 押川方義のその後

一六〇 院長辞任後の活動

(明治三十四年)

朝鮮の利権問題 押川方義が東北学院長を辞して仙台を去つたのは明治三十四年、年齢五十一才である。時恰も日清戦争の後をうけて、近代日本が隆々として東洋に躍進をはじめた時である。朝鮮問題、支那問題、滿蒙問題等の押川の覇気をそゝる問題は激増していた。当時の押川は朝鮮の教育事業の外にも内外多般に亘る各種の事業に関係した。そのために世上からきびしい批判も被つた。その中注目すべきものを挙げれば第一に朝鮮に於ける利権問題がある。日露戦争の当時である。同志の嚴本善治、松本武平等と画策して韓国皇帝に説き日韓共存の立場から、埋立、堤防、塩田、水運、石油、煙草、牧場、等十三件について莫大な利権を獲得し、光武九年(明治三十八年)一月十七日付の勅書まで得たのであつたが、その後、日本政府との間の手続不備のため林権助公使等の

反対にあい画餅に帰した。その後大正時代に入つて政客の間にも交友し、就中侯爵大隈重信と親交を結んだ。當時大隈は一時政界を下野し早稲田の一隅に育英事業を起すの傍ら、持ちまへの長広舌を揮つていた。押川、大隈の二人は氣宇の雄大な豪傑肌である点に於いて、大演説家である点に於いて、また二人とも野にあつて英才を教育し、志を伸べんとしたこと等で肝胆大いに相照らすところがあつたのであろう。

(『東北学院七十年史』)

一六一 渡瀬常吉書簡(押川方義宛)

(明治三十八年二月三日)

拝啓仕候御安着奉祝候昨日公使訪問仕候(尤も度々訪問せしも不在等にて不得面念)処大兄の御来京に就き何の為めの御来京なりしか要領を得ず旧来の学校の推持は困難なれば宜しく頼むと云ひながら他に新学校の設立とはチト受取難しなど予想の通り小生に小言致され候も其の奥そこ迄で反対の積りにては無之少々出し抜かれの氣味もあり大兄の方にてフランクリーに最初より御相談なか

りしとの事が何だかむかつき小生に鋭鋒を向けられし事と存候も此れは普通の事にて別段言ふにも足らずと存候尤も公使并に書記官と李容詡氏の間は不相変円満ならず殊に今回金貨制など確立せんとする際何だか李氏が公使を欺きしとかにて公使は真赤になり居候由の噂さも有之候得は此兩人の調和は随分骨折れ可申存候尤も公使も李容詡を利用せんとの下心は充分と察し申候巖本君の計画も悉に相出来候やに伺ひ大慶に御座候松本氏に御序に宜しく御伝言被下度候当方不相変候間御休意被下度候久し振りにて拝眉を得愉快此の事に存候らひしもまだく御話し相残り候心地致居候先つは右迄如此事御座候

勿々不一

二月三日

渡瀬常吉

押川方義殿

華族学校の事は其の後当地の新聞にも相出で(多分韓側より)菊池方では喜び居候一般の氣受は宜しかるべく是非々々大隈洪沢氏等充分御引受の事希望いたし候也

(洪沢史料館所蔵)

一六二 渋沢栄一書簡（押川方義宛）

（明治三十八年十一月二十一日）

丹波国綾部町

川合信水様

東京牛込横寺町 押川方義

消印 明治四十二年十一月十三日

益御清適奉賀候然共過日御評決相成候京城学堂を韓国政
府へ寄附致候義ニ付其筋へ進達すへき書面之原案ハ既ニ
御手許ニて御取調相成候上大隈伯之御一覽御願被成候哉
其後韓国第一銀行支店之者より問合も有之且一旦決定い
たし候上ハ可成速ニ相連申度と存候間早々書面御調成御
示被下度候

此段一書申上度勿々拝具

十一月廿一日

渋沢栄一

押川方義様

（渋沢史料館所蔵）

一六三 押川方義書簡（川合信水宛）

（明治四十二年十一月十三日）

一六四 東京同窓会の動向

（明治四十四年一月六日）

東京に於ける東北学院同窓会

二〇一 十一月十三日（封書、毛筆）

此度シユネーダー院長の上京せられたると、田中普通部

先日波多野君来訪あり数分間談話致し候已に帰社相成
候と存じ候同氏は質朴なれども亦頗る有力の方たるを認
め申候 本月二日女子御分婉母子御健全の趣向よりなり
大精神の血統を国家に遺し候事は結局は国家の重宝たり
愛兄自愛せよ国家益々多事ならんとす大志を抱きて未だ
志ならず碌々たりと雖も遂に碌々たらざるべし当務御尽
粹万禱仕候遠からざる将来に又々御上京待望仕候 拝復

十一月十三日

押川方義

川合信水愛兄

（『押川方義・川合信水両先生往復書翰集』）

長の米国より帰朝せられたるを機とし、同窓生の新年会を開きたり。時は一月六日の午後三時よりにて、場所は神田の青年会館なり会合せし者左の如し。

シユネーダー、田中四郎、押川方義、萩原信行、大谷省三、石黒宏亮、小林秀雄、小林穆、崎山比佐衛、鷺嶋副三、津田欣平、奥山丸乙、木村久一、齋藤仁吉、浜田祐、伊藤七司、高部多美(旧宮代)、小野彦治、大橋五郎、野沢正、天野司、佐藤稠松、船田三郎、榊原政雄、小川吉鷹、有川治助、佐藤恒祐、小松武治(以上廿八名)

昨秋開きし時よりも数名少なき理由は新年の休課にて学生の旅行中なる者多ければなり。

小松氏開会の辞を述べ、次に田中氏及びシユネーダー院長の演説あり食卓に就きて後に押川先生は母校廿五年記念祭の挙行せらるゝに就ては各出身者夫々基金を贈る事とする事、及び出来る丈記念祭当日は都合して多数出席せん事を希望すと云ふ旨を語られ、次で宣教師の事業として現下為すべき事は日米間の融和を計らん為め多年学びたる日本の国語を詳細に且つ確実に報導するに在りと述べらる。各自名乗り合ひ更らに廿五年記念祭に対して在京同窓生会は押川、ホーイ、シユネーダー三院長の引

延ばし写真を贈ることに決し、即座に予約金の募集を為したり。更らに欠席会員中よりも募りたる上此事の遂行を謀る事となせり。尚ほ押川先生の勧告は是非次回に於て其議を纏めん考なり。

同窓会員と云ふも凡て卒業生たるにあらず、然れども其母校を思ふの同情と熱誠とに於ては決して卒業生に劣らぬ人となり、何れも母校の同窓会と連絡を結ばん事を希望し居れり、次回は三月頃開かんとの見込なり、幹事改撰の結果佐藤稠松(萬朝報記者) 船田三郎(慶応大学教師)奥山丸乙(高等工業生徒) 当撰せり。(小松武治氏報)

(『東北教会時報』一一七号 明治四十四年二月十五日)

一六五 孫文歡迎会

(大正二年二月二十三日)

孫逸仙氏歡迎会

基督教會、青年會及び鐵道青年會の有志は、去る廿三日午後二時神田青年會館に於て目下來遊中の孫文氏を歡迎した。

入口には緑門を造つて、歡迎孫先生と大書せる額を掲げ、万国旗は堂の外に張り廻はされた。来会者は四百名ばかりで、支那青年も少なからず来会し、数名の外国宣教師も見えた。山本邦之助氏の司会にて、小松武治氏聖書を朗読し、杉原成義氏祈禱を捧げ、山本氏開会の辞を述べ佐藤千代子の独唱ありて、小崎弘道、根本正、丸山伝太郎、押川方義の諸氏熱心なる歡迎の辞を述べ、かくて孫氏は泰氏の通訳にて堂々たる一場の演説をなし、更に胡瑛氏は丸山氏の通訳にて簡單なる挨拶をなした。星野光多氏の祝禱もて散会し、別室にて立食の饗応があつた。然し孫氏は他に約束があるので好意を謝しつゝ、辞し去つた。其の演説の大意を左に掲げる。

「今日基督教の諸君と一堂に会して親しく相見るを得るは実に余の光栄とする所である。余は先程より諸名士の高説を聞き感慨に堪へぬ。抑も今日世界の大勢を見れば各方面に種々なる進歩を為しつゝあるが、世界の人の最も希望する所は蓋し世界の平和である。基督が生まれたまふた日に如何なることが宣揚せられたか、即ち世界の平和であつた。而して我支那の古聖賢の教へたる所も矢張り人間の希望の第一は平和であると云ふことであつた。唯基督教のみでない、又支那の古聖賢のみでない。

今日の道徳家科学者哲学者法律家の希望する所も亦平和と云ふことである。今日の文明は一日千里の勢を以て進んで行く。以前の文明は申すまでもない、近く欧州大陸の文明が浸々として米國に移り、米國より日本に來り、將に東洋に漲らんとし居る。而して東洋に於て文明の発達に後れて居るものは我國である。扱て此の平和の希望を如何にして実現し得るか、平等と云ふ思想が一国の一部分にでも欠て居るならば六ヶ敷のである。而して今日の我國は其の思想がまだ不充分にして世界の進歩を妨害する様な氣味がある。此の如き現象を見れば今日支那を改革するは唯支那を改革するのみでない、實に世界の平和と進歩を図るが最後の目的である。支那の歴史を見れば古より人多く土地広く欧米各國がまだ野蠻の境遇に在る時早く既に文明に達したのである、然るに今日却て世界の文明に後て居るは誠に遺憾である。余の信ずる所に由れば支那は世界の中最も平和な民族である。而して其の証明と云ふべきは今回の革命を見ても明かである。各國は社会的政治的革命に於て血を流したること多くあるも、我國は幸に戦争の時期を短くし得たのである。今日の大勢上平和の妨害となる様な我國を改革するは世界的平和を促すの途である。我國民は前に言へる如く戦争に

反対する平和的民族である。然るに世界の文明は進んだが、戦争は未だ廃せられて居らぬ。最近五年間に於て未だ戦争の止んだ時がない。戦争は世界の平和の上に真の利益はない、武力を以て正当防衛を為すは平和を保つ一の方法であるかも知れぬが止むを得ざる方法である。世界の文明は何処より生せしや亜細亜より生せしにあらざや。世界将来の文明の目的は平和であるとすれば、此の平和に対する責任も亦此の亜細亜の人が負はねばならぬ。されば我国の革命は決して野心より出でたるにあらざ、他国を侵略せんと欲するものにもあらず、誠意正心国内の進歩と幸福を謀り、而して各国と共に平和の恩恵に預からんと欲する者である。宗教の事も以前は我国信教の自由なく唯其保証となるものは各国との条約ありしのみなりしが、今や宗教慈善教育等の発達の機会を与ふる様になつた。我々は本国の改革をしたが未だ世界の平和を計ることが出来ぬ。それにはどうしても世界の各国と提携せねばならぬ、而して其中に最も近きは日本である。盖し世界の中に立場を有する人種は二ある。黄色人種と白哲人種とである。世界将来の文明を図るものは此二人種の責任である。白哲人種の国は数多く利害関係錯雑して未だ之を解決するに至らぬ。然るに黄色人種は

我国と貴国とばかりで、此の二国が能く聯合することが出来るならば東洋に平和を維持することは容易であると信ずる。今日貴国及び我国が共に立つて世界の平和を保つ力がある。此の目的を達することが出来る。今日兩國団結して亜細亜の平和と文明との為に計るならば、啻に黄色人種のみならず、白哲人種も之を歓迎せぬ訳にはゆかぬ。此機会に際し、両国人にて此の精神を以て、世界の希望する文明に達する様に努力したいものである。」

（『福音新報』九二二号 大正二年二月二十七日）

一六六 押川方義書簡（川合信水宛）

（大正二年五月十六日）

二六八 五月十六日（封書、毛筆）

丹波綾部町

川合信水様

東京大森八景坂 押川方義

消印 大正二年五月十六日

十三日御投函の御状正に落掌御別条なく御働きの段欣喜の至に奉存候貴工場火災後は何かと御多忙万察仕候為

めに君の御上京期も多少相後れ候趣残念に奉存候得共是又致方なし然るに小生事本年七月は数週間の予定にて鉾山調査の爲め少々遠方へ出掛け候筈に相成居候間遅くも六月末迄には御出京相叶候はゞ至極の都合に御座候扱今回御申越相成候榊原家の不幸同情に不堪候次第に存候花井子も去る十一日遂に永眠に就けりとの事小生は去る十二日夜其事を承知せる位にて病中の事一切承知致不申候て訃音に接し大に驚き候次第に御座候病中の事情は政治郎より君に御報道仕候通りに有之候爾來小生も出来得る限り助言など相加え今後の方針誤なからしめんと希望に御座候政雄よりは大連へ来るべく申来居候由に候近々何れかに決定可相成筈に候人生は結局悲境を経ざれば究極地に到達するを得ず即ち幸も不幸にあらず不幸も亦決して悲観すべからざるものあり要は終局の生運を悟得するにあるのみに御座候今や邦家は益多事なり対西施東の方策未だ其宜しきを得ず憂国の情禁じ難きものあり日夜痛慮罷在候天の時と地の利とは已に到りて目前にあり人の和に到りて為政者未だ其人を得ざるが爲に成到せしめ得ざるのみ願くは無限の生命此間に絶大の働作を爲し給へ

榊原の住所左に申上候

小石川区林町四〇音楽館榊原弥生

五月十六日

方義

川合信水兄

(『押川方義・川合信水両先生往復書翰集』)

一六七 三矢次郎書簡(押川方義宛)

(大正二年十二月八日)

向寒之砌益々御清穆奉大賀候此度御手紙に依り講幹事野口東一に相談仕候百五十円丈受け取り電報為替にて百十円御送金申上候間既に御落掌之事と奉存候尚三円八十四銭差上べき分ハ本日中為替にて御送付申上候左に精算仕り候間御覽被下度奉存候

売買代金 千五百円

金 六百六十七円 私の頂き分

〃 三十円 売買証明料

〃 四円五十銭 保有証明料

〃 二円八十六銭 六百八十円送料

〃 十銭 書留料

〃 一円七十銭 電為替料

六百八十円

過日の送金

丹波国綾部町

依而ハ差上可き分三円八十四錢ハ本日御送り申上候

川合信水様 至急親展

右之通りにて先生の方との解決ハ仕り候講も方二、三人

(御不在ならば御出張先へ御転送を乞ふ)

にて完決たる由に付然る上にて私の分ハ受取る手筈ニ御

東京芝公園十号ノ三 押川方義

座候間年内にハ勿論全部完了する事と奉存候何卒御安心

消印 大正五年四月一日

被下度奉存候

実に永々の間不容易御世話様に相成謹而御礼申上候尚教

育会との関係者の方々へ何卒先生より可然御礼申上被下

度奉願上候

私の病氣ハ近来殆んど全快仕り候間残る生涯を潔く送り

度心かけ申居り候先生も追々御年を召させられ折柄時候

も寒さに向い候間御自愛被遊度奉祈候先ハ右マデ

十二月八日

拝具

押川先生

三矢拝

(渋沢史料館所蔵)

川合信水様

四月一日

押川方義

(『押川方義・川合信水両先生往復書翰集』)

一六八 押川方義書簡(川合信水宛)

(大正五年四月一日)

三九九 四月一日(封書、毛筆代筆)

一六九 押川方義書簡（川合信水宛）

（大正六年十一月一日）

五〇一 十一月一日（封書、毛筆）

丹波国綾部町

川合信水様 至急必親展

東京芝公園十号ノ三 押川方義

消印 大正六年十一月一日

爾来益々御勤勉奉賀候扱両三日前一寸御通知申上候件
昨日早稲田侯より案内あり往談候処先月三十日 皇后陛下に拝調の折郡是会社の成績に關し親しく奏聞に達し又
現今将来の一大難問題たる資本主と労働者間に惹起すべき事項の重大事たる事も御説明申上げ郡是製糸会社は
其事に付精神上大成功を為せしものにて我国工場の模範ともなるべく其精神と行動とを推して他をも之れに則と
らしめば世界中未解決の難問題にも一種の解決を与ふるものたれば今回行啓の御砌には篤と御觀察被遊適宜御諭旨をも下し賜はらば上は 君徳の鴻恩に感泣して奉公の念愈々堅くなるべく又他会社に対しても大なる奨励なるべしとの意を言上に及び候処 陛下にも大に御喜び遊ば

され且つ製糸工場も観るは今回が始めてなれば楽しんで臨
察し忠言もヨク銘すべしと宣給へりとの内示有之候間御
含み迄に御内通仕候大森京都府知事も其席に在りて侯爵
の言上を側聞し大に感泣致居候由に御座候下田歌子女史
も必らず同一事項を奏上したる事と存候得共未だ其情報
は得不得申候 此事たる単に貴会社の光栄のみにはあらず
我が國が此世界的難問題を解決し範を各国に示すを得ば
一には日本文明の真価を世界に知らしむると同時に國光
は自ら発揚すべく世界万衆の幸福を来らすべく君の所謂
真平和も亦実現するの時機到達するやも不可知何れ本月
中旬御上京を待ち各工場大改良の方策に關し御相談仕べ
く候右不取敢御内報迄勿々敬具

十一月一日

押川方義

川合信水君

令息より喜ぶべき一通の書状来れり余は満心の欣をも
て其を受納したることを君より御伝達願上候

世に知られずして 天父の喜び玉ふ一事業を成就すべ
き時は漸次に近づきつゝあり豈感奮せずして可ならんや
に御座候御恵送被下候松茸及栗の実それ〴〵相届き申候
片山氏へ御礼達願上候

大隈〇〇両氏よりの奏上は近頃友人が貴社を目撃せる

実況如斯云々其友人は決して観察に誤りなきは勿論虚偽の報道を為すが如き人物にあらざれば、陛下が諭旨を玉ふも事実相違なければ云々と申上候筈にて単に小生一個の意見として彼等を勧誘したるにて貴会社の方は一人も此事項は知られざる方針を執り候事故御含み置願上候貴社が運動したと誤認されては残念故に今日迄は諸事好都合に運びしも何時悪魔の邪魔が這入るかも知れず候も其時は又其時の事已に世に勝てる我等なれば変事も別に懼るゝに足らず

今回 陛下に奉呈せらるべき会社情況概要様のもの脱稿相成らば一部写御送り被下度候又貴社の沿革史（先日御郵送の物）及人名簿二、三部御送りを乞ふ

（『押川方義・川合信水両先生往復書翰集』）

一七〇 押川方義の葬儀

（昭和三年一月十四日）

押川先生の葬儀

押川方義先生の葬儀は去一月十四日午後一時より東京青山三丁目青山斎場に於て執行された。吉田亀太郎氏司

会の下に、一同讚美歌第二百六十四を歌ひ、聖書朗読並に祈禱の後萩原信行氏履歴を朗読し、川合信水氏の説教、シユネーダー、松村介石両氏の弔詞を兼ねたる感話あり、頌栄第四百六十二を歌ひ、シユネーダー氏の祝禱を以て式を終り、親戚総代横田秀明氏の挨拶があつた。会葬者約三百名。二時半より三時半までは一般会葬者数百名の告別式があつた。尚ほ本院よりシユネーダー、出村悌三郎、伊藤嘉吉、矢野猪三郎、五十嵐正の諸氏外各部生徒代表者六名会葬した。

（『東北学院時報』七五号 昭和三年三月一日）

一七一 押川方義追悼式

（昭和三年一月二十八日）

押川先生追悼式

（昭和三年一月廿八日午前十時廿分）

（中学部講堂）

- 一、讚美歌 二四九 司会者 五十嵐 正
- 二、聖書 哥後四章 伊藤 嘉吉
- 三、祈禱 矢野猪三郎

四、讚美歌 二六四

五、履歴 出村悌三郎

六、説教 シユネーダー

七、祈禱 五十嵐 正

八、讚美歌 四六〇

九、祝禱 シユネーダー

十一時四十五分閉会、尚ほ集會者は教職員生徒並に同窓生のみにして満堂であつた。

(『東北学院時報』七五号 昭和三年三月一日)

一七二 D・B・シユネーダーの押川方義追悼式

式辞

(昭和三年一月二十八日)

押川先生の偉業を憶ふ(追悼式式辞)

シユネーダー院長

「万世の王、即ち朽ちず見えざる一人の神に限りなく貴きと栄えあらんことを」テモテ前書一章十七節

私共の敬愛する創立者故押川方義先生は仙台から遠く離れた四国に生れ、其処に育つたのであります。不思議

な神の御摂理の下に生れ、故郷から一人の外国人の先生の許に導かれました。其の先生の所で初めて此世の救主イエス、キリストに依つて現はされた神の愛を聞いたので御座います。先生は単に神の愛を聞いた丈けでなく、外国人の先生、即ちブラオン博士の日常生活のうちに神の愛を実際に見たのであります。押川先生は此世を去られる迄ブラオン先生を尊敬して居られました。神の愛を聞きまた見ましたので、先生のお心が啓け、そして神の聖霊が先生に新なる生命の賜物と力を与へ、かくて先生は基督者になつたので御座います。

先生が基督者になつたと云ふ報が郷里に伝はつた時先生のお父さんは非常に不面目に感じて甚しく怒りました。早速先生をお国許に呼び返しました。先生は帰国することが実に死活の問題であることを少しも知らないで急いで還つたので御座います。先生と養父母との間に一週間も激しい論争が続きました。先生は依然として明確に「私は基督を棄る訳に参りません」と申しました。終に先生の実母もお出でになりました。そして先生にその信仰を棄てる様幾時間もくかき口説き、遂に先生の前に突つ伏して涙を流しながら「どうかお母さんを可愛想だと思つてお母さんや一族の者を此不面目から救つて呉

れ」と願ひました。先生もさすがに直ぐにはお答へする訳に参りませんでした。それは多感の先生にとつて如何程辛らかつたか殆ど想像することが出来ません。先生は切に神に祈りました。そして遂には「どうしても基督者の信仰に堅く立たなければなりません。私は主なる神と救主なる基督を棄て去る様な赦し難い罪を犯すよりは寧ろどんな苦痛でも忍びます。死をも忍びます」と申しました。お母さんは深く感動させられました。もはやわが子を強ひることが出来ませんでした。生みのお母さんと先生の奥さんとお二人でお父さんに先生の生命を助けて下さいと願ひました。お父さんも遂にお手打を止めて勘当したので御座います。

先生は横浜に戻りました。そして其処で懇切なる歓迎を受けました。先生の強固な信仰は学友に深い感銘を与へました。先生御自身も亦福音の宣伝に一命を献げようと決心しました。そしてそうした目的を以て新に勉強を初めたので御座います。先生は一学期間だけ補助を受けましたが、其の後は労働して学資を自弁しました。四ヶ年目の了りに新潟から教役者の招聘がありました。当時新潟は迫害の最も烈しい処で、前の教師は居たゝまらな

人だも進んで行かうとする者がありませんでした。或日曜日（マツ）の晩の祈禱会で、ブライオン博士は此招聘を特に祈禱の題に選びました。祈禱の最中に押川先生はスツクと立ち上つて「私が参ります、神が私に命じました。」と申しました。かくて先生は横浜から新潟まで深い雪の中を寒い風に吹かれて遙々と歩いて行つたので御座います。

先生の新潟に於ける四ヶ年の事業は極めて豪壮なものでした。猛烈な反対と迫害と危険の中に立つて殆ど每晚説教しました。新潟市内丈けでありません。二十里も三十里も離れた附近の小都會にも転戦しました。或時先生の生命を断つて耶教（マツ）を一掃しようとする陰謀が企てられました。けれども先生は不思議な方法で免れました。最後に新潟市に大火が起り教会や附属建物をはじめ凡そ基督教事業に関係のある一切の物が悉く焼けてしまひました。是より先き先生は仙台の事を色々聞いて居られて、明治十一年には実地に仙台地方を視察されたので御座います。新潟の大火は恰も先生にとつて仙台に移れと云ふ神の啓示の様に思はれたのでした。

明治十二年（マツ）に先生は愈々奥様と御一緒に吉田亀太郎氏を伴ひ仙台市に御出でになつたので御座います。之は東北の精神界の歴史にとつて特筆すべき出来事でした。け

れども此仙台の地でも初めは事業が随分困難でした。新潟では大勢の人々が先生の説教を聞きに来て呉れましたけれども、此処ではただの一人も大きらひなヤソの説教を聞かうとする者がありませんでした。加之、誰も説教所として家を貸して呉れる者がありませんでした。先生は非常に苦心しました。かうするうちに先生は腸チブスに犯されました。三ヶ月の間病床に引き籠りました。其の間に先生は最愛の令嬢を失ひ、二重の苦しみを嘗めたので御座います。けれども先生の神に対する信仰は益々立派なもので御座いました。御病氣中先生は始終枕頭に掛けられた日本地図を眺めて此美はしい国の救はれんことを祈り且つ之に対する将来の事業を画策しました。一方に於ては又神が不思議な方法で先生の病苦を伝道の門戸を開く手段に用ひ給ひました。即ち主治医が先生の神に対する平静な信仰と絶対的信頼とに深く感動して自ら信者となつたのでした。そして此主治医に依つて門戸が開かれ、先生が御恢復なされた時には国分町に説教所として立派な家を借りる事が出来、又多くの人々が説教を聴きに参りました。

明治十四年五月一日にはもう信者が多くなつて教会が組織されました。教会は益々発展しました。そして明治

十九年には絶好の大機会が参りました。即ち東二番丁と南町通との角に位し二番丁から南光院丁までの地域を占むる東本願寺が売物に出たのであります。先生と教会員は之を買ひ取ることに決心しました。それはエライ苦心でした。けれども非常な努力と大なる犠牲とに依つてその困難を征服しました。寺は直ちに教会として使用される様に改造されて其処に十二年間基督者の礼拝が行はれました同時に庫裡は数年間東北学院の教室として使用されたのであります。さうした間にも先生と吉田先生とは附近の各地に転々奮戦しました。そして岩沼、古川、石巻、登米、角田、中村、山形、函館等の都会にも集會が組織されたので御座います。

此時代に今一つの出来事が起りました。基督教事業が進歩発展するにつれて押川先生は痛切に教役者を教育する学校の必要を感じ始めたので御座います。明治十八年に先生はさうした学校の創立に協力するやうな宣教師を捜す為めに上京しました。同時に先生は女子教育を始めるとも感じてました。神の摂理に依りまして偶然にも先生と同じ希望を抱いて丁度米國から渡来した計りの極めて熱烈な一人の青年宣教師に邂逅しました。その青年宣教師は実にウイリアム、ホーイ先生で御座いまし

た。ホーイ先生は直ちに仙台に参りました。そして押川先生と協力して明治十九年に今大病院院の一部になつてゐる木町通りの借家で、七名の生徒を以て仙台神学校、即ち只今の東北学院を創立したので御座います。之は実に難有ことで御座いました。

最初から此学校のうちに神の靈が頭はれてゐました。創立者は二人共熱心と祈禱と犠牲の精神に充ちてゐました。彼等は偉大なる希望に感激してゐました。学校はその高貴なる事業に於て年々進歩しました。押川先生的人格は東北地方は勿論、北海道、新潟、四国等遠隔の各地から生徒を引きつけました。之等の学生は熱心に燃えてゐました。その祈禱に力のあるのが之等の学生の特徴でした。さうした間にホーイ先生の熱心な努力に依つて校舎が与へられました。それは現在の神学部寄宿舎でした。其後神学部の煉瓦造が建築され、同時に学校の範圍を拡張して神学生丈けでなく普通の青年学生をも收容することになりました。けれども先生は是よりも先に労働会を創立しました。労働会には二重の目的があつて、第一は金のない有為の青年を援助して基督教々育を受けさせることを、第二は独立自営の精神を養はせることでした。此第二の精神が先に横浜で先生を導き補助を断つて自営

自活させたので御座います。

全く此時代には伝道界に於ても学校に依つても労働会を通じても実にすばらしい英雄的事業が行はれました。そしてすべてその中心は先生の偉大なる英雄的精神で御座いました。当時の先生の精神的感化力は東北学院の上にも仙台並に東北地方に於ける神の事業の上にも偉大なる貢献をなされたのであります。否、その御精神は今なほ之等の事業の上に偉大なる刺戟となつてゐるのであります。

併ながら押川先生は次第に先生の使命が単に東北丈けに限らないで活動の範圍がもつと広いと感ぜられるようになつて来ました。即ち先生は海外教育会を組織して朝鮮に京城学堂を創立し、又東京に偉大なる基督教事業を計画しました。更に日清戦争の間には支那に対して非常に興味を感じる様になりました。先生は日本の多くの知名の人々と交はりました。そして明治三十四年にかうしたより大なる事業の為に充分の時間を献げ得る様、東北学院長を辞任されたので御座います。後に先生の理想を一層有効に国民に徹底させる為に、先生は政治界に這入られ、郷里の愛媛県から選出されて二度代議士になつたので御座います。

先生が東北学院長を辞任されてから御永眠になる迄の廿七年間に就いて今一つ申上げなければならぬことが御座います。それはその廿七年間を通して少しも変ることなく後任院長に対して誠実だつたと云ふことで御座います。先生は本当の友人でした。絶えず奨励して下さいました。到底云ひ表すことが出来ないぐらゐ親切を為して下さいました。

今より一年少し前に先生は突然重病に犯されました。御病氣は随分永引きました。御病氣中先生は此世並に彼世に関して色々重要な問題を考へる時間を有たれました。そして結局先生の最後の最大希望は再び全快して今一度東北の地に行き、イエス、キリストの福音を宣伝すること御座いました。暫くの間先生のかうした希望が成就されさうに見えたので御座います。先生は追々快方に向つて居られました。私が最後にお目にかゝつたのは御永眠なさる一ヶ月前でしたが、その時先生は懇懇に私を玄関まで送つて下さいました。

然るに本月十日の晩頭著なる先生の御生涯が突然終りを告げたので御座います。令息清さんの手を執り先生の忠実なる門弟並に友人吉田先生の熱心なる祈禱を聞きながら彼の世に移られたので御座います。

押川先生の死に依つて再び非常な力を以て東北学院創立当初の高貴なる目的が私共の心に喚び起されるので御座います。私共は再び此学院が依つて以つて創立された燃える様な熱心、真面目な祈禱、偉大なる犠牲を想ひ起すので御座います。私共の心に両創立者の心を占領した偉大なる希望の幻がマザークと浮んで来るのであります。そして此当初の充満した熱心を継承し、創立者の様に祈り、彼等の様な犠牲を献げ、かくて東北学院が益々創立当初の高貴なる目的を実現し、偉大なる創立者の胸底に靈感を与へた大希望を成就する為に全力を尽して努力することが今日の私共の最大の急務であると思ふので御座います。

教職員、生徒並に同窓生諸君、どうか東北学院の偉大なる栄えある使命の為に新に私共自身を神に供へて下さい。かやうにして私共は押川方義並にウイリアム、イー、ホーイ両先生を永久に記念したいと思ふので御座います。

(昭和三年一月二十八日於中学部講堂)

(『東北学院時報』七五号 昭和三年三月一日)

一七三 A・R・バーソロミューの押川方義への

追憶文

〔英文〕

(一九二八年四月)

一七六 D・B・シュネーダー「日本はアメリカ

にとって脅威か」

〔英文〕

(一九一五年十二月十六日)

第六章 宣教師の時代

—福音の種を日本へ

一七四 D・B・シュネーダー「合衆国改革派教

会の日本伝道」

〔英文〕

(一九〇一年二月四日)

一七五 D・B・シュネーダーによる日本伝道好

機到来の訴え

〔英文〕

(一九〇五年八月十二日)

一七七 合衆国改革派教会全国総会外国伝道局

報告

〔英文〕

(一九二六年)

一七七—1 日本伝道における過去二十五年間の進展

比較表

〔英文〕

一七七—2 外国伝道活動における本国の進展を示す

表

〔英文〕

一七八 W・E・ランペ「過去四十年間の外国伝
道の目的と方法」
〔英文〕 (一九二七年)

一七九 合衆国改革派教会日本派遣宣教師一覽
〔英文〕 (一八七九年～一九二六年)

第四編

我は福音を恥とせず

— 苦難時代 —

1931(昭和6)年～1947(昭和22)年

第一章 自立への努力

一八〇 五十嵐正「商科の事件に就いて」

(大正十五年三月五日)

商科の事件に就いて

五十嵐「正」

先般専門部商科に起つた事件に就ては同窓生諸君御一同に非常な疑懼と憂慮とを相かけ、誠にお気の毒の至りに堪へず、本当に済みませんでした。左に其大体の経緯を述べて御参考に供し度いと思ひます。

事の起りは、去る十二月十七日理事会の總會に於て、予算其他の關係上、専門部商科の社会学正教授を廃し、講師を以て之に代ふるの件議決になりました。夫れは一は経費節減の必要と、一は担任時間の均衡を計らうが爲でした。同専門部の教授にして或人は一週十四五時間乃至十六七時間を担任して居るのに、或人は八時間に過ぎないと云ふ有様である。最も学科の性質上、其配合均等と計りは云つて居られぬことは勿論であるが、成るべく

均衡を保ち度いと云ふのが理事会の希望であつた。其処で社会学担任教授たる岩間巖氏に対して、篤と事情を打ち明け、来学年から他に転任して貰へまいかと相談をしたのである。岩間氏は学院の内情を聞き、之を諒とし、屑く来学年から他に転任すべき旨承諾された。然るに岩間氏の同僚間には、同氏解職に就ては学院当局の声明するところ以外に何か理由が存するであらうとの猜疑を抱く人々あり、兎に角一応当局の反省を促し、能ふべくんば同氏の転任を取消され度いと有志者一同は郡山、山川、園田の三氏を代表者として院長迄申出られたのである。茲に於て、理事会は招集せられ、慎重に審議を重ねたが、甚だ遺憾乍ら、学院の内情は前回の決議を翻し兼ねると云ふことに決し、其赴きを曩きの代表者に回答したのである。此前後から商科生徒の間に動揺あり、生徒大会を開き、出村部長に対し、岩間教授解職の理由につき質問書を提出した。出村部長は理事会に計りたる上、口頭を以て之に答へたるに、生徒は之に満足せず更に第二の質問書を提出した。同時に印刷物を父兄、卒業生、教員、有志家等の間に配付した。又一方諸新聞紙は相次いで右に関する記事を掲載し、内外相応じて有らぬことまで誇張して宣伝される様になつた。而して生徒側からは第一、

岩間教授の復職、第二、内藤科長の勇退、第三、理事会の改造と三ヶ条の請願を当局に向けて提出した。其理由とするところは、岩間教授は学究的人格者である故に留任せしめよ。内藤科長は部下の解職せらるゝに際して何等尽力せず却て献策せる形跡あるは不人情なり、且つ同氏平素の教授振りには不満の点尠からず、又科長として其職を尽ざるもの多とし同氏の人格に迄言及して勇退を促し、尚ほ進んで理事会を改造し教授会の権限を拡張し、各教授をして理事の選挙並に被選挙にも参与せしめよ。然らざれば各科の事情を知悉して機宜の処置を採らしむることが出来ぬと主張した。之に対して理事会は審議中であつたが、専門部教員会(文、師、商合併)よりは岩間教授復職の件と内藤教授の商科長勇退に関する請願があつた。茲に於てか、事態漸く複雑となり、理事会は其処置に苦んだが畑井新喜司氏は同窓会員の一人として学院当局並に生徒間に立ち極力調停の勞をとらるることになり、生徒側は曩に提出した請願全部を撤回し、無条件にて畑井氏に一任し、学院側も亦同氏の取計に任せた。畑井氏は熟慮の上夫々斡旋されたる結果、理事会に於ては社会学正教授を廃し、講師を以てするの件は特別の状況に鑑み其遂行を延期することに決したが、更に岩間氏並

に内藤氏から自発的に辞表を提出されたので両氏共本学年限りにて受入れることに決し、尚ほ両氏の将来については出来得るだけ尽力することに決定した。生徒側も畑井氏の尽力に対し、満足の意を表し、旬日に亘りて纏れられる問題を兎も角決せられ、茲に一段落を告げた訳である。

願れば教授並に生徒側の取りたる態度は愛校の精神から出発せることは明かであるが、最初は岩間教授の復職問題から始つて内藤教授の問題に転換し、余勢理事会問題に向つた観がある。商科の教授並に生徒が、愛校の精神に立脚せるは諒とするが、学院の歴史、伝統的精神、理事会の組織等につき未だ充分に知悉せざる結果、今回の如き恨事が起つたのではなからうか。殊に生徒側の運動が、余りに黒人染みて、外部に向ての宣伝方法など所謂労働爭議其俛の観ありしは世人をして背後に何もか存するに非るかとの疑念を抱かしむるものあつたのは遺憾であつた。兎に角雨降つて地固るの諺の如く之を機として互に了解し合ひ相提携し、校運の発展に向つて奮進したいものである。

〔『東北学院時報』六五号 大正十五年三月五日〕

一八一 神学部騒擾に関する中会審議

(大正十五年五月六日)

千九百二十六年五月六日午前九時、福島教会会堂に於て開会。

(中略)

第十九 笹尾 出村両教師取調の建議案

東北学院神学部生徒野地清外三名の発表せる宣言及び陳情書その文中に東北中会所属神学教師笹尾糸太郎同神学教師出村剛両氏に関する事項あり。事件の真相如何なるものなるや宜しく委員を挙げて之を調査せしむべし。提出者伊藤佐亮、賛成者芳賀甚吉外一名。少数否決。

(後略)

(東北中会記録)

一八二 D・B・シュネーダー「基督教主義学校の危機に際して東北学院の使命を惟ふ」

(昭和六年一月二十四日)

基督教主義学校の危機に際して

東北学院の使命を惟ふ

一月廿四日夜三部合併臨時教員会に於ける院長の演説の概要であります。文責筆者にあり。(鈴木市治郎)

一

私は基督教学校に働く同労者として皆さんに御集りを願つたのである。一緒に集つて頂いた直接の起因は第一に只今は一年の始であると云ふ事実で、新年は一年の計画を樹てるのによい時だからである。第二の理由は今年米国から三人、英国から一人、日本から四人、都合八人からなる委員に依つて日本に於ける中等程度以上の凡ての基督教々育の綿密周到なる調査が行はれることになつてゐると云ふ事実である。

日本からは明治学院前総理井深梶之助博士と同志社大学総長大工原銀太郎博士と立教大学長杉浦貞二郎博士と東京女子大学長安井哲子女史とがその委員になる筈であ

る。而してその調査の目的は基督教々育の過去と現在を極めて周密に研究し、其の結果第一に学校其者並に内外に於ける其の關係者に対して重要な推奨をなし、次に若し出来るならば学校を一層堅固なる財政的基礎の上に置く様尽力しやうとするのである。

去る十一月横浜で開かれた基督教々育同盟總會でも此調査に関する全般の問題に就いて慎重に審議されたのである。斯うした事実から私共自身の学校、即ち東北学院の将来に就いて一緒に考へて頂くことは特に時宜に適つてゐると思ふのである。

二

東北学院の最高使命は日本に基督教會を建設する為に貢献しそれに依つて地上に正義と愛の神の國を実現する為に働くことである。而して之は凡ての基督教学校に共通の使命であることは申す迄もない。之より大なる使命はないのである。けれども之と同時に日本の基督教学校には一大國家的使命のあることが益々明瞭になつて来たのである。而して其の使命と申すのは國家の将来に優秀なる人格教育を寄与することである。徳川時代にはサムライの子弟に対する一種特別の教育があつて、其の主な特色は厳格なる立派な人格教育であつた。私は日本の

今日あるのはさうした教育に云ひ尽せぬ程多く負うてゐると信ずるものである。全世界を驚倒させてゐる明治維新以来の日本の目覚しい進歩は主として此サムライ教育の力に由るものである。然るに此種の教育は既に／＼廃棄されてゐる。過去数十年の間物質科学にのみ基く純粹の世俗的教育だけで國家的要求が充分に充されると考へられてゐた。然るに近年それが間違ひだつたことが益々痛切に感ぜられる様になつたのである。暫く以前に宗教局は内務省から文部省に移管された。又近年文部省が教育上に宗教の力を用ひることを益々奨励してゐることは私共の皆知る処である。数年以前に私は非常な經驗を経験したことがある。それは私が東京府立一中の川田校長を訪問したことがある。色々談話を交へた後氏は突然に而かも非常に力をこめて話し初めた。昔は学科課程の大部分が人格教育の為に献げられてゐたが今日は中学の学科課程三十幾時間の中唯一時間丈がそれに当てられてゐる。之が政治家や実業家や其他の職業に従事する人々が滔々として腐敗墮落し國家を危くする所以であると申された。又先達の日本基督教聯盟總會で文部省の西山宗教局長は次の様に述べられた。思想上經濟上容易ならぬ事態を来してゐる今日、如何にして之に処すべきかは吾々

の最も腐心してゐる処である。此難関を切抜ける為には宗教の力に俟たねばならぬ。

維新当時我国は三百年の永い鎖国の為に物質文明が甚だ遅れをとつてゐた結果、政府は精神科学の方面を顧みる邊がなく、物質文明の発展に対する制度を布き、専ら其の方面に力を尽した。然るに今日は最早や精神科学を除外して物質科学にのみ頼ることは不可能になつた。故に一國の制度上にも大に考慮しなければならぬ。

我国の一部の人々は物質文明は西洋の文化であり、精神文明は東洋の特長であると云うてゐた。けれども今や精神文明の方は退歩し衰弱して来た。国民は大に目醒めて今日の難局を打開する為に宗教的信念に依つて起たなければならぬ。

基督教は我邦に渡来後日尚浅きに不拘宣伝教化の任に當られた人々の犠牲的努力に依つて僅か七十年の間に大なる発展を遂げた。而して多くは智識のある教養の高い人々が信奉せる丈其の感化力も亦重大性を帯びてゐる。

我国今日の危機に際し宗教の力即ち宗教家の人格の力に依つて国民全体の教化を企てられんことを希望して止まない次第である。」と。

之を要するに今日我日本に於ては一層有効なる人格教

育に對し一大國家的要求があるのである。而して政府当局者は人格教育の成功には宗教が根本であることを承認してゐる。

斯の如きは自づから東北学院には独特の一大使命があることを明かにするものではないだろうか。私共は此処に帝國の將來の運命に関する驚く可き事業の幻影を見る事が出来ないだろうか？ 私共は私共の如き比較的貧弱な学校が果して日本の將來に重大なる貢獻をなし得るか否かと或は疑つたり、或は落胆したりしたくないのである。イエスは十二の使徒に「汝等は地の塩なり」と云ひ、又「汝等は世の光なり」と云はれた。私共は断じて遲疑逡巡してはならない。私共は目を開いて私共の前に横たはる偉大にして神聖なる私共の使命の幻影を見なくてはならない。私共は大胆に確實に基督敎学校が其使命に於て、官公立学校に優ることを信じたいのである。

三

我が東北学院が現に人格教育を高調し且つ過去に於ても同様だつたことは真である。而して神の導きと創立者の力に依つて私共が過去四十五年間日本の福祉の為に人格教育の貢獻をなし得たことは感謝すべき大事実である。けれども私は日本の基督教々育の歴史が今や方に危

機に臨んでゐると信ずるのである。過去廿年間に日本に於いては凡ゆる程度の又凡ゆる種類の教育が驚く可き長足の進歩を遂げてゐる。世界中孰れの国にも教育が斯かる短期間に斯く急激の進歩を成し遂げた処がない。従つて教育界に於ける競争は頗る劇しくなつて来てゐる。斯うした時勢の推移につれて疑もなく基督教学校の地位は以前程顕著でなくなつて来た。加之、今や高等教育に生産過剰を来し基督教学校は其の不利なる結果から悩んでゐる。剩へ引き続く財界の不況は事態を益々險悪にしてゐる。斯くて私は基督教学校にとつて伸るか反るかの時が来たと思ふのである。一段高く向上するか、さもなければ一步後に落ちる時が来たと思ふのである。之今晚私が東北学院の使命を一層充分実現するよう共に決心を新にせんが為に同労者諸君の御集りを願つた次第である。私共の使命は優秀なる智育と共に高尚なる、否最も高尚なる人格教育を施すことである。私共は昔養賢堂(仙台藩校)で与へられた人格教育に劣らぬ、否其よりも遙に優れた人格教育を施さなければならぬ。東洋を指導すべき日本は最上至高の人格教育を要するのである。而して私共は基督教学育のみが之を与へ得ると恭しく信ずるのである。

四

併ながら如何にして之を實行することが出来るか？之実に私共に対する一大挑戦である。果して實行出来るや否や？ 勿論多くの不利なる点がある。資金は始終充分でない。校舎や設備も理想的ではない。収容する生徒は必ずしも良家の子弟のみではない。その素質も亦第一等ではないのである。如之、教員に対しては何等の外的刺戟がない。即ち栄達の機会もなければ位階勲等の報賞もなく、社会的賞讃もない。而かもなほ私共は一層向上発展することが出来ると私は堅く信ずるのである。何となれば其は日本に対する神の聖志だからである。然らば如何にして其が實行されるだらうか。より多くの校舎、よりよき設備、より多くの基本金、よりよき環境等の物質的援助は或は与へられぬかも知れぬ。或は与へられるかも知らない。けれども私共には唯だ一つの賜物がある。私共の有ち得る一つの力がある。而して之は如何なる外的事情境遇も私共から之を奪ふことの出来ぬ物である。即ち神的熱心と決心の賜物である。唯この一つの途しかないことは寧ろ得ではないかと思ふのである。何となれば根本的には他の何物にもたよらず唯基督教的熱誠に依つてのみ真に青年を基督教的に薫化することが出来る。

務にずべらで本気にならぬならば若し其の宗教生活に冷淡で無頓着ならば又若し学校の根本的に全然無関心で興味がなければ、一時間或は二時間の聖書講義や、一時間の講話や、毎朝十五分間の礼拝がよしそれが有益で必要であつても其れだけでは決して生徒を薫化して基督教的人格を作り上げるに足らぬのである。之に反して、若し教員が一致聯合して嚴重に先づ其の手近かの校務を忠実に果し、又其の宗教生活を忠実に実行し、又生徒の宗教生活と学校の基督教の使命に深く注意するならば、其の一致聯合の感化力には實際生徒は抵抗することが出来ぬのである。生徒は寧ろさうした教員達を得た事を深く喜び永く感謝するだらうと思ふのである。此故に私の同労者諸君私共は真面目に考へて見度いのである。基督は最後の偉大なる祈禱の中に「彼等の為に我は己を潔めわかつ」(ヨハネ伝一七章一九)と云はれた。「彼等の為に」です。此同じ精神で即ち彼等生徒の為に私共は私共自身を聖別したい。彼等の為に凡ゆる正義を成就し、凡ゆる校務を忠実に履行し、凡ゆる欠点から私共自身を潔め、私共自身の宗教生活を啓発して私共の生涯を基督に似たる愛を以て燦然と輝やかしたいと思ふのである。如此にして私共は単に教育家の事業を成す許りでなく、眞の教

育家となるのである。予言者ダニエルは「穎悟者(教師)は空の光輝の如く輝かんまた多くの人を義に導ける者は星の如くなりて永遠にいたらん」(ダニエル書十二章三)と記してゐる。

第五、眞の基督教学校は其の教員が衷心から互に協力し、殊に中心的責任者と協力し、又凡ての事に協力し、殊に宗教的活動に相協力する学校である。協力の精神は基督教の大切なる部分である。基督教の愛の最も大切な頭はれの一つである。校内に此精神が欠けてゐて各々が自分自身の意見と習癖とに従ふならば生徒に及ぼす基督教の感化力は必ずや微弱である。之に反して基督教学校に於ける同労者が学校の基督教の理想の実現の為に誠実に熱心に相協力する学校にあつては彼等は必ずしも不變的に生徒の人格を形作る事が出来るのである。かゝる場合にこそ学校は日本に対する又神の国に対する崇高なるその使命を果す為に順潮に威勢よく前進することが出来るのである。

六

以上述べたことは眞の基督教の熱誠の精神が其れ自身を顕現せねばならぬ方法である。之が成否は私共に対する亦凡ての基督教学校に対する一大挑戦である。勿論基

督教学校の改善に有益なる其他の凡てのことが実施されなければならぬ。けれども若し基督敎学校が先づ此熱誠の大精神を以つて基督敎々育現在の危機に直面することが出るならば毫も怖るゝに及ばない。国民の信任と尊敬を失つて落伍する代りに益々其れを高めて向上發展すると思ふ。基督敎学校は国家的生活の中に恒久的地位を占めて益々偉大にして有益なる勢力になると思ふのである。

我が東北学院は多分他の基督敎学校の或者よりは幾分か建物の設備もよく資金も亦幾分か豊かに供給されてゐるかも知れない。入学志願者率も亦最高の部に属し基督敎者卒業生の率も亦高い方である。けれども凡ての基督敎学校に与へられた警鐘は私共にも亦響いてゐるのである。私共も此際伸るか反るかしなければならぬ。即ち一段高く向上するか、否者衰微しなければならぬのである。私共は基督敎学校の真の理想からまだく遙に遠いのである。私共の人格教育は完全どころの騒ぎではない。神は日本の為、此世に於ける神の国の為更にく努力するやう私共を招いてゐるのである。私共は心を留めて此召命を聴かうではありませんか。私共は私共が今後単に基督者の名丈けでなく、本当の強い基督者の人格を備へた

幾百幾千の青年を送り出さうとする将来に對つて嚴肅に計画しやうではありませんか。神よ希くば我儕を助けて之を實行せしめ給はん事を。アーメン。

（『東北学院時報』九三号附録 昭和六年三月一日）

一八三 高等学部生徒同盟休校に関する文部省との往復文書

（昭和六年九月十八日）

発専一六四号

昭和六年九月十八日

文部省専門学務局長 赤間 信義 印

東北学院院长 デー、ビー、シュネーダー殿

本日ノ新聞紙ニ依レハ貴校高等学部生徒同盟休校ニ関スル記事アリタルモ其ノ真相並学校当局ノ採リタル処置至急御報告相成度

発専一六四号

昭和六年十月十三日

文部省専門学務局長 赤間 信義 印

東北学院院长 デー、ビー、シュネーダー殿

高等学部生徒同盟休校二関スル件

去月十八日発專一六四号照会標記ノ件ニ付テハ其ノ後何等ノ報告無之モ至急今日迄ノ経過御報告相成度追而今後ノ状勢ニ付テモ逐次御報告相成度

高学発第二六五号

昭和六年拾月廿六日

東北学院院长 デー、ビー、シュネーダー印

文部省専門学務局長 赤間 信義殿

高等学部生徒同盟休校二関スル件

標記ノ件別紙ノ通及報告候也

七月十三日 角田教授解職通知

仙台日本基督教会牧師萩原信行並ニ北四番丁日本基督教会牧師小林龜太郎ニ氏来院角田教授解職ノ理由ヲ聴取

由照会

七月廿一日 北四番丁教会小会ヨリ「書留」ニテ解職理

由照会

廿三日 右回答

八月八日 全上小会ヨリ「口頭説明ノミニテハ信シ難キ

故照会シタル処重ネテ相違ナキ旨書面ニ接シ驚ク」
「基督教ノ立場ヨリ此問題ノ解決ヲ計ルカラ承知セラレタシ」ト挨拶状到達

八月廿七日 東北中会ヨリ八月六日付北四番丁教会小会ヨリ全中会宛書面添付角田教授解職ノ理由顛末ノ詳細ヲ照会セラル

廿八日 右回答

九月十二日(土) ラジオ河北新報ニュース「東北学院参百ノ学生動揺ス」ト放送ス

全月十三日(日) 河北新報紙上右ノ記事掲載(注・事実殆ト相違、ナホ全紙記者ニシテ「ラジオ、ニュース」

係ハ学校ニ好意ヲモタヌ全寮生ニシテ前記仙台日本基督教会々員ナリ)

全日 午後院長宅、部長宅ニ「書留配達証明」二通ゾ、到達即チ一ハ「願書」ニシテ商科生一全ヨリ「我等ノ納得出来ル様角田教授退職ノ理由至急書面ヲ以テ明示サレタシ」。他ハ「質問書」ニシテ高等学部基督教育青年会ヨリ「角田教授ハ辞職シタト発表サレタガ、聞ケバ免職ノ由、ソノ理由ヲ至急書面ヲ以テ返事サレタシ」

其ノ後引キ続キ学校内外ニ流言蜚語ヲ聞クノデ学校

当局ハ

九月十六日(水) 礼拝後院長ヨリ生徒一全ニ対シ「角田教授退職理由」ヲ説明シタ。生徒一全其ノ儘退出シヤウトシタ時生徒中ノ数人一令ヲ発シ全生徒ヲ引止メタ。始メ生徒ノ代表部長室ニ来リ相談シタキ事アル故十分間授業時間ヲ貰ヒタシト云ツタ。併シソレガ一時間トナリ、二時間トナリ、ソノ都度代表者ヲ部長室ニ送り勢止ヲ得ザルノ故ヲ以テ延期ヲ請求シタ。三時期過グル頃命令ヲ以テ第四時期ヨリ必ズ授業ヲ開始スル事ニシ、稍遅レタケレドモ一全教室ニ入りテ業ヲ受ケ、午後ノ第五時期及第六時期ハ平常通り授業シタ。

九月十七日(木) 礼拝後院長ハ数言ヲ以テ前日ノ説明ヲ補ツタ。生徒ハ再ビ講堂ニ残り、代表者ヲ部長室ニ遣ハシ「生徒大会ヲ開キタキニツキ授業時間ヲ貰ヒタシ」ト請求シタ。此時初メテ生徒大会ヲ開クト云ツタ。ソコデ時間ヲ制限シ生徒監ヲ付シテ之ヲ許可シタ。併シ許可シタ時間ガ延長シ、ソノ都度延期ヲ申込シテ来タ。其ノ間一方ニ於テハ生徒全体ヲ講堂ニ所謂缶詰メニシテ激励シ且ツ警戒シ、他方ニ於テハ初メ九名ノ代表者院長室ニ来リテ「解職問題又ハ

理事会ノ権能」等ニ関シテ交々質問シ、院長及部長ガ之ニ答ヘレバ委員之ヲ筆録シタ。然ルニ間モナク他ノ代表即チ基督教青年会員数名来リ特ニ部長ニ質問アリトテ院長、部長ヲ単独ニ引離シ夫々別室ニ於テ前全様檢事ノ訊問ノ如ク一問一答悉ク之ヲ筆録シタ。

斯クテ委員講堂ニ引キ上ゲ部長又室外ニ出デ、院長独リ自室ニ在リタル時正午頃学生代表三名来リ二通ノ決議文ヲ突キ付ケ即答ヲ求メタ。一ハ「角田教授解職理由ノ説明ニ対シテ当局ノ誠意ヲ認ムル能ハズ、院長、部長ノ自決ヲ求ム」他ハ「角田氏ノ解職ニ関シ理事員全部ノ不信任ヲ決議ス」トアリ、前者ハ院長、部長宛テ後者ハ院長宛デアアル。院長ハ即答スル訳ニ行カヌ、出村部長頓テ帰ルベケレバソレ迄待テト云ツタ。「然ラバ院長ハ即答出来ヌモノト見做シテヨキカ」ト駄目ヲ押し、偶側ニ在リタル院長秘書ニ出村部長ヘノ伝達方ヲ依頼シテ立チ去ツタ。頓テ(十二時廿分頃)部長帰リタルヲ以テ之ヲ伝達シタ。一覽ノ上院長部長相談シ、即刻回答スル事ニシテ委員ノ来室ヲ求メタレド来ラズ、再三促シタレド遂ニ来ラズ。止ヲ得ズ「別紙ハ受理スベキ性質ノモ

ノニ非ザルヲ以テ返還ス」トノ回答ヲ付シ、生徒監ヲシテ前記委員ニ手交セシメ、全時二午後ヨリ(第五時期)授業スベキ旨伝ヘタ。定刻各教授夫々教室ニ至リタレド不相変講堂ニアリテ一名モ教室ニ出席セズ、遂ニ同盟休業ノ状態ニ這入ツタノデアル。

(学校ノ処置) 依ツテ学校ハ午后三時ヨリ臨時教員会ヲ開キ、右ノ事態ニ鑑ミ此際休業ヲ宣シテ生徒ノ反省ヲ求ムルニ如カズトナシ翌十八日ヨリ廿七日マデ十日間ノ休業ヲ議決シタ。直ニ父兄保証人ニ対シテ臨時休業ノ通知ヲ発スルト全時二右ノイキサツヲ報告旁相談シタイカラ廿日午後三時來校スル様ニ案内シタ。

九月二十日(日) 午後三時父兄保証人会ヲ開ク。一応学校側ヨリノ報告ヲ聞キタル後、動議ニヨリ梅津氏ヲ座長ニ推シ父兄保証人大会ヲ開ク。此時同窓会側ヨリ全窓会仙台支部各種団体ヨリノ代表者ニ依リテ調停委員十名選出サレテ居ルガ父兄側ニ差支ナクバ協力シタイト申込ミ結局父兄側ヨリ十名、全窓側ヨリ五名ノ調停委員ヲ選定シテ事実ノ真相ヲ取り調べル事カラ解決ニ至ルマデ一切ヲ委任スル事ナリ、梅津喜一、鈴木憲太及全窓側ノ鈴木重久三氏ヲ委員選

定委員ニ挙ゲテ散会シタ。

選定委員ハ其ノ夜直チニ院長室ヲ協議ノ上高等学部各科ノ生徒数ニ応ジテ委員ノ数ヲ定メ文科ヨリ一名、師範科ヨリ四名、商科ヨリ五名及全窓側ヨリ五名ノ委員ヲ選定シテ即夜各委員並ニ其ノ他ノ父兄保証人全部ニ通知シタ。

九月二十二日(火) 午后四時ヨリ高等学部ニ第一回委員会ヲ開イテ打合せシタ。

全 廿三日(水) 午後三時ヨリ生徒側代表五名ト会見シタ。先ツ懇談的ニ生徒側ヨリ発表セル声明書ニ基キ委員側カラ学生代表ニ質問シタ。代表ハ声明書中「基督教青年会発表ノモノ」ハ生徒一同ニハ何等ノ關係ナキ事ヲ言明シタ。委員長ハ生徒代表ノ答ニ基キテ一々懇諭シ、最後ニ「只今マデノ質問事項ノ内容トイヒ、十七日ノ声明書、廿日ノ青年会ノ声明書、廿一日ノ手紙等ノ實際ニツイテ見ルニ何レモ冒頭ハ立派ナレドソノ結尾ニ至ツテハ苟モ教育アル者ノ敢テナシ得ザル言辞ヲ弄シテキル。諸君ノ出発ガ道德的健全性ヲ欠イテキル証拠ダ。更ニ反省熟慮ノ上教授会全窓会等ト相提携シ相協力シテ学院ノ改善ニ当ルベキダト思フ。其ノ時ニハ父兄側モ及バズナガラ、

必要ナラバ、助力ヲ惜マナイ。今回ノ行動八角ヲ矯メントシテ牛ヲ殺スヤウナ事ニナリハシナイカ。諸君ノ返事ヲ聞キタイ」ト云ツタ。生徒代表ハ一旦別室ニ退キ相談ノ上「我等ハ飽マデ初志ヲ貫徹スル事ニ邁進シタイト思ヒマス。即チ院長部長ノ退職デア

ル。ハ学生全体ノ意志ダカラ父兄、全窓ニ之ヲ伝ヘルノガ我等ノ任務デアアル。我等各個人ノ意見ハ申上ゲラレナイ。委員長ノ話ハヨク解ツタ、生徒全体ニ之ヲ伝達スル。」然ラバ理解シタル代表ヨリ学生全体ニヨク伝言セラレタイ。サスレバ生徒全体モ理解スルト思フ。而シテソノ返答ハ明後日聞カウ」承知シマシタ」ト云ツテ会見了ル。時ニ午后十時。

九月廿五日(金) 午後三時第二回会見ヲ行フ。学生代表九名、委員側ヨリ三名デ会見。代表「学生全体ハ目的貫徹ノタメ最後マデ戦フ」旨答へ「交渉具体案」ナルモノヲ提出シタ。内容ニツイテ委員ヨリ質問シタガ屢答弁ガ出来ナイ。其ノ理由ハ材料ヲ各方面ヨリ蒐集シタモノデ代表ハソノ内容ニ就イテハ与リ知ラヌト云フ。依ツテ委員側ノ調査セル処ヲ開陳シテ学生側ノ誤解ナランコトヲ論シタ。且ツ第一回会見ノ結果ガ未ダ学生全体ニ徹底シテ居ラヌ様子が見エ

タノデ、必ず学生全体ニ伝ヘナホ慎重熟慮ノ上回答セラレヨト云ツテ別レタ。

九月廿七日(日) 午後三時ヨリ第三回会見学生代表五名委員二名。学生代表「廿六日学生大会ヲ開キ今迄ノ経過ヲ報告シタ。各自各様ノ意見統出取捨ニ困難シタガ、共通ノ要求ト思フトコロヲ代表ガ責任ヲ以テ摘出シタモノハ「一、出村部長ノ即刻退職 二、院長ハ昭和七年三月限退職 三、礼拝及洗礼ハ自由ノコト 四、理事局員ノ改選(一週間以内ニ行へ)、全盟休校ハ悪イコトヲ認メタカラ今迄ノ要求ヲ撤回シ改メテ右ノ要求ヲ提出スル」ト云ツタ。委員「併シ依然トシテ事実上盟休ニ依ツテ目的ヲ貫徹セントシテキルノダカラ非ヲ認メタコトニハナラヌ。故ニ其ノ旨学生全体ニ傳達シ無条件デ盟休ヲ解キ帰校セラレヨ。学校ノ休業モ今日限りデアアル。併シ全体ニ伝ヘ再考ヲ促ス為ニハナホ時日ヲ要スベケレバ、委員側ヨリ更ニ二十日間休業ヲ願ヒ出ルコトニスル。期限ハ付セザレド可成早ク学生全体ト相談ノ上返事セラレタイ」会見ハ了ツタ。委員長ヨリ学校当局ニ熟慮反省ノ時日ヲ与ヘルタメ十日間ノ休業ヲ願ヒ出デ学

校ハ之ヲ承諾シテ父兄ニ通知シタ。

九月三十日(水) 学生ハ突如「十月一日市内第一ホールニ於テ盟休真相発表公開演説会」ヲ開ク旨ポスターヲ掲ゲビラヲ散布ス。

十月一日(木) 第四回会見、学生代表五名、委員三名。

代表「前回提出ノ要求四ヶ条ハドウシテモ撤回スル事ガ出来ヌ、委員ガ責任ヲ以テ引受ケテクレルナラバ一切ヲ拳ゲテオ任セシ、一同帰校スル」ト最後の回答ヲ齎シタ。委員「其ノ要求項目ノイヅレモ委員トシテサヘ承認スル事出来ヌモノダガ、何レ相談ノ上何等カノ回答ラスル」ト云ツテ別レタ。因ニ真相発表公開演説会ハ十月六日マデ延期スル旨発表セラレタ。

委員会ハ殆ト調停ノ余地ナク、学生ガ無条件復帰ヲ肯ゼヌユエ、父兄保証人会ヲ開キ、経過報告ノ上更ニ善後策ヲ相談スル事ニ決シタ。

十月三日(土) 午後一時、父兄保証人会ヲ開ク。結局委員全部継続今一応尽力スル事ニ決シタ。

十月五日(月) 午後七時ヨリ講堂ニ学生ノ大半、父兄保証人ノ一部集会。委員長ヨリ第一回学生代表ト会見以来ノ経過ヲ詳述シ、其間得タル感想ノ二三ヲツケ加ヘ二時間余ニ亙リテ懇々無条件帰校スヘキ事ヲ勸

メタ。学生ノ大部分ハ略理解シタ様子ダツタガ引キ続キ学生大会ヲ開キ数名ノ学生ノ熱狂的演説アリ之ニ煽ラレテ生徒ノ感情再ビ興奮シ遂ニ帰復^{キョフク}ノ意志ヲ表明セシムル事ガ出来ズ、十二時ニ至リテ得ルトコロナク散会シタ。

十月六日(火) 午後七時ヨリ委員ハ父兄保証人全部ノ集会ヲ求メ、最後ノ報告ヲナシタ。即チ学校当局ノ意向ト学生側ノ要求ヲ述べ、今ヤ全ク調停ノ余地ナキヲ以テ委員ヲ辞退シタイト述べタ。父兄ノ数名交々立ツテ此上ハ父兄各自ガ夫々ソノ子弟ヲ訓諭シ一日モ早ク登校セシムベキデ、父兄ノ訓諭ヲモ聞キ入レヌ者ハ父兄ノ手デ退学セシムルノ外ナイト云フ動議成立賛成者多数拍手ヲ以テ之ヲ迎ヘタ。委員長多数ト認め、ソノ事ニ申合セタ。

十月七日(水) 学校ハ委員長ノ報告ニ依リ、別紙陳謝用紙封入書状ヲ父兄保証人ニ発送シ併セテ更ニ五日間ノ臨時休業ヲ通知シタ。

十月十三日(月) 学生全部陳謝状ヲ提出シ、完全ニ授業ヲ受ケタ。

全 十四日(火) 礼拝後委員(学生)ヨリ生徒全体ニ対シ、吾々ハ陳謝シテ帰校シタノデアアルカラ熱心ニ真

面目ニ勉強スベキデアル。学校トシテ改革ヲ要スベキ点ニツイテハ今後合法的手段ニ依ツテ目的を達成スベク、ソノ実行委員トシテ各級ヨリ二名宛ノ新委員ヲ選出セラレタシ。ト宣ベタ。(新委員選出、旧学生委員全部解消ノ由) 引キ続キ静穩ニ勉学シツヽアリ。

昭和六年十月二十六日

以上

右御依頼旁此段貴意を得候

敬具

昭和六年十月七日

東北学院長 デー、ビー、シュネーダー 印

父兄保証人殿

二伸 来る十一日まで休業し、十二日より授業可致候間

左様御承知被下度候

科 年

今回の行動は生徒の自分に違ひたるものなることを自覚し茲に陳謝の意を表明仕り候

昭和六年十月 日

東北学院長 デー、ビー、シュネーダー殿

学專五六九号

昭和六年十一月五日

文部省専門学務局長 赤間 信義 印

東北学院長 デー、ビー、シュネーダー殿

臨時休校善後処置ニ関スル件

去月二十六日高学発第二六五号ヲ以テ高等学部生徒同盟

休校解決ニ至ル迄ノ経過御報告相成タル処猶臨時休校善

後処置ニ関シ授業補充ノ計画御報告相成度

拜啓陳者此度の不祥事に就いては色々御迷惑相掛け誠に御申訳無御座候 父兄保証人会より推挙せられたる委員各位の一方ならぬ御尽力と二旬に亘る休業の結果生徒も略学校の事情諒解相成候事と存じ候へども不幸にして未だ円満なる解決を見るに至らざるは誠に遺憾に存じ候併し事情此上遷延するをゆるさず止を得ず最後の手段を執らざるを得ざることに相成候 就いては甚だ恐入候へども何卒別紙の趣旨を充分生徒が納得する様御懇諭被成下度願上候 而して生徒が了解相成候は之に記名調印せしめ来る十一日まで郵便或は其の他の安全なる方法に依り本院高等学部事務所に提出せしめらるゝ様御高配願上候 全日迄提出せざる生徒は不得止退学を命ずること致し候間予め左様御諒承被下度候

高学発第二七五号

昭和六年十一月拾九日

東北学院長 印

文部省専門学務局長 赤間 信義殿

臨時休校善後処置ニ関スル件

昭和六年十一月五日学專五六九号ヲ以テ標記ノ件ニ関シ御通牒ノ処補充計画具体的方法ニ関シテハ廿八日迄御報告可致候ニツキ此段及報告候也

高学発第二七九号

昭和六年十一月廿七日

東北学院長 デービーシュネーダー 印

文部省専門学務局長 赤間 信義殿

臨時休校善後処置ニ関スル件

昭和六年十一月五日学專五六九号ニ依ル標記ノ件左記計画ニ依リ昭和六年十一月卅日(月)ヨリ施行ノ上昭和七年三月迄補充致スベキニツキ此段及報告候也

記

(一) 休校期間及実休校日数並補充スベキ日数

一、休校期間 廿三日間 自昭和六年九月十八日

至 全 年十月 十日

一、実休校日数 十九日 前記廿三日間中日曜三日

祭日一日ヲ除キタル日数

一、要補充日数 十九日 前記十九日中月曜三日。火曜

三日。水曜三日。木曜二日。

金曜四日、土曜四日。合計十

九日。

(二) 補充計画

一、従来野外演習ヲ二日間ニ渡リ施行セルモ本年度ニ限り一日短縮ノ上之ヲ授業ニ充当ス

一、従来創立記念日ヲ二日間ニ渡リ施行セルモ本年度ニ限り一日短縮ノ上之ヲ授業ニ充当ス

一、従来各学期試験ハ六日間ニ施行セルモ本年度ニ限り三日間短縮ノ上授業ニ充当ス

一、冬季休業ヲ二日間短縮ノ上之ヲ授業ニ充当ス

一、従来学期初メニ始業式ヲ挙行ノ上当日ヲ該学期ノ組長選挙其他ニ充当セルヲ本年度ニ限り之ヲ廃止ノ上授業ニ充当ス

一、学年試験ヲ例年ヨリ二日乃至三日間遅延ノ上之ヲ授業ニ充当ス

業ニ充当ス

一、残ル八日間ハ学科ノ進度如何ヲ斟酌ノ上毎週二時間乃至四時間ノ補充授業ヲナス

以上

一八四 D・B・シュネーダー書簡(バーソロミユ

一宛)

〔英文〕

(一九三一年十月八日)

一八五 D・B・シュネーダー書簡(バーソロミユ

一宛)

〔英文〕

(一九三二年十月十六日)

一八六 東北学院基本金募集趣意書

(昭和九年五月)

東北学院基本金募集趣意書

創立と経過

我が東北学院は、明治十九年に精神教育を目的として創立せられたるもので、爾来今日まで四十有八年を経過致しました。開校当初は、学生の数僅に六名に過ぎなかつたのでありますが、年と共に発展し、現在では一千名の多きに上りました。現在本学院の組織は、神学部、高

等学部(文科、師範科、商科)、中学部の三部に分れて居り、卒業生を出すこと三千名に達し、聊か邦家の為めに貢献し得たと信ずるに足るものあるは、窃かに欣快とするところであります。之れ偏に天父の啓導と、大方諸彦の御同情に依るものと感謝に堪へない次第であります。

財政の状態

本学院は、時勢の進運に伴ひ、着々内容を充実し、以て世の期待に副はんことを期し、益々進歩発展に努力して居ります。而して現在の經常費は年額約拾参万円を要し、米国リフオームド教会外国伝道局の援助に負ふところ甚大なるものがあります。然るに、近来米国一般財界の不況と社会趨勢の変遷に伴ひ、淨財の寄附意の如くならず、其結果本学院に対する本年度補助額は大削減を加へらるゝの止むなきに至りました。従て本学院財政の困難は実に容易ならぬものがあります。

元来、本学院の経営は、自給の道を講ずべきが当然なので、出来得る丈け速に此目的を達成し、且つ前途に対して抱懐する諸般の施設を遂行する為め、基本金の必要を痛感するに至りました。

基本金募集

本学院は茲に鑑み、近く迎へんとする創立五十周年記

念事業として、基本金壹百万円募集の計画を樹てました。而して、此れを広く内外の同情者に訴へ、極力其の目的を達成せんことを期して居る次第であります。

本学院は、夙に人格中心の教育を標榜して起てる東北唯一の基督敎主義専門学校並に中等学校であります。過去世紀に亘る此光輝ある歴史を有する本学院をして永遠に存続せしめ、益々其使命に向つて邁進せしめんが為め、切に大方諸彦の御協力と御後援とを依頼する次第であります。希くば、本学院の微衷を諒とせられ、奮て御寄附を賜はらんことを祈ります。

昭和九年五月

財団法人 東北学院

〔『東北学院時報』一一三号 昭和九年六月三十日〕

一八七 東北学院基本金募集への協力

(昭和九年七月)

東北学院基金募集に就きて

東北学院は明治十九年人格主義の教育を目的として仙

台に設立せられてより約半世紀の長きに亘り特色ある教育を施し幾多の人材を養成し国家の教育に貢献せること甚大なるものあり。

殊に北日本に於ける精神文化の開發に資すること顯著なるものにして其功績觀るべきもの尠からず今や其校舍と設備とは完成に近く校運日に盛にして全国私立学校中の白眉たらんとす。其中学部は頗る完備してよく県下の中等教育を補ひ其神学部は東北精神界を開拓すべき宗教家を養成する機関として伝統的の名声を有し而して其高等学部は福島以北奥羽五県の官公私立を通じて高等師範と高等商業の教育を施す唯一の男子専門学校として其東北振興に対する重大なる使命を有するものなり。従来同学院は米国に於ける篤志家の寄附金によつて経営維持せられ来りしものなるに今や世界一般の不振殊に米国の近年稀なる不況の爲めに其財源に支障を来し淨財の寄附また意の如くならず爲めに学院の財政漸く困難ならんとするに至れりと聞く。

現院長シユネーダー氏は学院の二大創立者押川方義ウキリヤム・イー・ホーイ氏の後を継ぎ一世に高き徳望と非凡なる経綸の才とを以て枯居経営献身的努力をなして学院を今日の大に到らしめたり。

氏は真の愛日家にして日本の青年を教育する傍ら常に米国人に対して日本の真精神を闡明し其理解を促し以て国際の親善に勉めたること蓋し一再にして止まらず。このこと畏くも天聴に達し再度まで叙勲の榮譽を担はれたり。

今や院長は学院財政の危機を見て其の責任を感じ奮然立て基金の募集に着手し以て其財政の基礎を安定ならしめ且其施設を益々完全ならしめんことを企て八十に近き老軀を提げて此難局の衝に当らんことを決心せらる。実に其志や貴く其行や壮なりと謂ふべし之を援助することは一は以て五十年の功績多き歴史を有する東北学院を永遠に存立せしめ益々其東北に対する使命を果さしむる所以にして一は又我国を熱愛する外国の志士に酬ゆる道なりと信ず。故に我等は此拳に対して满腔の敬意と同情を表するものなり。希くは天下の諸賢此趣を汲み、其援助を惜み玉はざらんことを。依て之を誌す。

昭和九年七月

伯爵 伊達 興宗 男爵 伊達 宗経 赤木 朝治

渋谷徳三郎 菅原 通敬 藤沢幾之輔

本多光太郎 阿刀田令造 新保 徳壽

佐藤亀八郎 伊丹栄三郎 梅津 喜一

〔東北学院時報〕一一五号 昭和九年九月三十日

一八八 D・B・シュネーダー書簡（キャッセルマ

ン宛）

〔英文〕（一九三四年十二月三十一日）

一八九 新東北中会運動の決議

（昭和十三年七月八日）

千九百三十八年七月八日午後一時三十分、仙台市東六番丁日本基督教会々堂に於て、牧師梅津吉之助、渡辺良亮、丹忠、長老小幡時治、佐藤義郎、伊藤佐亮、六氏の請求に依り、左記諸件に関し臨時東北中会を開く。

一、新中会建設運動に対する態度表明の件

一、教師長谷部俊一郎氏、教師試補千葉次郎氏を戒

規に附する件

一、協調に関する意志表示の件

第一開 会

第一章 自立への努力

小林議長着席、渡辺書記司会、讚美歌第五十四番を歌ひ、長老佐藤義郎君聖書コリント前書第十章一―一二二節を朗読し、牧師丹忠君祈禱を捧げ、議長小林龜太郎君一場の挨拶をなし、開会す。

第二 臨時中会成立

渡辺書記、出席議員の氏名点呼をなし、定数に満ちたるを以て、小林議長、中会の成立を宣す。

正議員 三十六名(牧師二十一名、長老十三名、
宣教々師二名)

員外議員 四十二名(牧師十四名、教師試補二十五

名、伝道教会委員三名)

合計 七十八名

正議員 (三十六名)

牧師及長老(二十一名及十三名)

山形	渡邊良亮君	本木清助君
荒町	角田桂嶽君	小幡時治君
東六	川島專助君	佐藤義郎君
福島	城生安治君	……………
岩沼	宮内俊三君	菅井伊佐蔵君
仙台	萩原信行君	伊藤佐亮君
(教会)	(牧師)	(長老)

若松	丹忠君	……………
酒田	今野順二君	村上專市郎君
北四	小林龜太郎君	小原武頭君
青森	中山真平君	……………
石巻	齋藤一君	及川鶴治君
米沢	梅津吉之助君	……………
盛岡	土田熊治君	……………
喜多方	深瀬忠蔵君	……………
大曲	荒井源三郎君	……………
宮一城	赤石義明君	五十嵐正君
鶴岡	小川永水君	……………
白石	……………	高橋重太郎君
古川	……………	尾花勇君
長岡	後藤金治郎君	……………
新庄	本宮幸四郎君	遠藤修司君
二戸	宍戸七彌君	……………
宣教々師(二名)	佐々木慶治郎君	……………
笹原	……………	……………
周君	小笠原政繁君	……………
員外議員(四十二名)	……………	……………
矢野猪三郎君	出村剛君	田口泰輔君

諏訪修治君 大和吉五郎君 館岡 剛君
 室井長治君 蓬田吉次郎君 結城国義君
 長谷部俊一郎君 稲垣好雄君 坂内美喜君
 佐藤善助君 丹波源一郎君
 教師試補(二十五名)

坂野大龍君 羽生義三郎君 佐々木安治君
 佐藤貞一君 遠藤甚四郎君 馬場慶一郎君
 近藤助四郎君 赤城英夫君 千葉太次郎君
 小林壽雄君 小針大四郎君 井関磯美君
 遠藤 栄君 松尾真平君 増田新一郎君
 横坂勝夫君 古山金作君 小野寺泰司君
 佐藤 喬君 千葉大二君 千葉俊太郎君
 今泉三郎君 小関敬之輔君 櫻井重秀君
 藤井喜八君

伝道教会委員(三名)

福田 忠吉君(大河原) 山吉たか子君(置 賜)
 岩間 直治君(亘 理)

第三 新中会建設運動に対する態度表明の件

渡辺書記、新中会建設運動に対する常置委員会決議を
 朗読す。

新中会建設運動に関する決議

昭和十三年六月二十一日附を以て発表せられたる新中
 会建設運動は中会の一致平和を素すものと認めらるゝ
 が故に之に対し反対の意志を表明することゝす。

右決議文の説明にあたり、小笠原政繁、長谷部俊一郎両
 氏連名を以て発せられたる新中会への勧誘状を参考とし
 て議場に配布し、左の如く常置委員会の意向を表示せり。
 本運動は既存の中会に対し、該中会所属の教職、長老
 達が抗争を策し、過般の定期中会が決議せる所を覆して
 ミツシヨンとの提携協力を謀り、その新中会建設の理由
 として地域的事由を挙ぐるも實際に於て何ら根拠なく、
 明らかに其の動機不純にして、其の手段非合法的なるを
 示すものなり。従つて日本基督教會憲法規則の精神に悖
 り、延いては中会及各個教会の一致平和を素すものと認
 めらるゝものなり。吾等は、今日の如き祖国重大なる時
 期に当り、宗教団体が斯くの如き分離運動を起して自ら
 物質的に又精神的に浪費する所多からしむるが如きは到
 底忍び得ぬ所なるを以て之に反対の意志を表はすものな
 り。

議長は右常置委員会決議を以て議場に諮る。之に対し
 て中山真平君は長谷部、小笠原両氏等の運動と新中会建

設運動との直接関係なき旨を主張し、赤石義明君は斯る文書を基礎とせず實際責任者なる委員長土田熊治君に事実を聴くべしと希望し、議長、之を許すも土田君起たず、五十嵐正君は、此の文書は本件の議題とすべき性質のものに非ず、撤回すべしと要求せり。渡辺書記は、長谷部、小笠原両氏等の発表せる運動との関係有無如何に拘はらず、事実、中会部内に新中会建設運動のあることは否定し難し、仍つて常置委員会は本文書を参考として之に反対するものなり、と答ふ。次いで五十嵐正君より本文書を撤回すべしとの動議出で、賛成者あつて動議成立せるも採決の結果、賛成者十名、少数否決さる。別に宮内俊三君より動議提出あり、即ち

現在、我が国の情勢に鑑み、東北中会を分割するが如き運動は不適當と認め、中会は之に反対の意志を表はす。

城生安治君の賛成ありて動議成立す。之に対し、赤石義明君は本運動は目下進行中のものにして、之を取り上げて議題とすべきものと認め難しとて該動議に反対す。渡辺書記は、本運動の為に特に小会を開きたる教会のあることを指摘し、その事実性を認め得べしと述ぶ。

採決の結果、賛成者二十五名、反対者十名、宮内君の動

議は大多数を以て可決す。

第四 教師長谷部俊一郎氏、教師試補千葉次郎氏を戒規に附する件

渡辺書記、本件に関する常置委員会決議を朗読、説明す。

常置委員会決議

日本基督教会規則第十九条第三款に従ひ、長谷部俊一郎、千葉次郎二氏を第五款に示されたる免職に附すべきものとす。

理由

第五十五回定期中会の協力廃止決議を無視し、整理委員の方策提示を俟たずして非合法的手段を以て、ミツシヨンの提携聯絡を図り、中会に反抗的運動を起さんがために中会を誹謗せる不穩煽激なる文書を發して同志を糾合し、殊に中会機構を無視して、三回に亘る常置委員会よりの召集を拒否したるが如きは、両氏が教職に任ぜられたる際になしたる誓約に背きたるものと認めざるを得ず。

城生安治君より、常置委員会が三回に亘りて本人等質問せんとしたるを拒否したる事実に就いて具体的説明を求むる所あり、渡辺書記、詳細なる説明をなす。

矢野猪三郎君より、両君が採りたる不当なる行動、並に文書中に用ゐたる不穩なる字句に就ての説明を求むる所あり、之に対し渡辺書記は本人等の名に於て発表せられたる、ミツシヨンとの提携勧誘状、ミツシヨンへの補助請願書、大会への提出したる諸願書等を朗読、説明す。其の他、五十嵐正君、遠藤修司君等より質問、希望あり、渡辺書記、小林議長之に応ふ。

次いで城生安治君は討論を省くべきことを希望して左の動議を提出せり。

中会は長谷部俊一郎、千葉太次郎両氏の反省を求め、甚深なる陳謝の意を表すべきことを促し、若し反省なき時は中会常置委員会の適當なる処置に委す。

伊藤佐亮君の賛成ありて動議成立す。採決の結果、賛成者二十名、可決す。

第五 協調に関する意志表示の件

渡辺書記、過般定期中会に於けるミツシヨンとの協力廃止決議の後、該問題に関し中会当局が大会代表者と折衝せる顛末を報告し、両者間の覚書を発表し、該覚書に基いて研究協議の結果作成せる協調に関する常置委員会の決議文を朗読す。

常置委員会決議

東北中会对エバンゼリカル、リフオームド教会日本ミツシヨンとの協力關係は昭和十三年四月二十日の定期中会に於て廃棄せられたり。

仍つて爾後東北中会と協調を希望する宣教師団に対しては日本基督教会大会の協調原則に準拠して中会が決定する所の協調規約を承認せしむべきものとす。

之が説明と同時に渡辺書記より、本臨時中会開会の数時間前に日本ミツシヨン書記アンケニー氏より、同ミツシヨンが「日本基督教会大会制定の協調原則に拠るも東北中会と協調をなす意志なし」との通告文を受理せりと報告をなし、東北中会常置委員会は大会制定の協調原則に拠つての協調を希望する宣教師団（東北中会の実状に則しては主としてエバンゼリカル、リフオームド教会日本ミツシヨンを考慮に入るべきもの）に対しては之に応ずる用意あるも、エバンゼリカル、リフオームド教会日本ミツシヨンは大会制定の協調原則に拠るも東北中会と協調するの意志なき事明白となれり、と附言せり。

之に対し、荒井源三郎君、赤石義明君、出村剛君等の質問あり、小林議長及渡辺書記之に応答し、本常置委員会決議に於て、第五十五回東北中会の協力廃止決議は大会制定の協調原則を無視するものゝ如く誤認せらるゝ惧れ

あるを以て之れに対する態度を明らかにしたるものなることを述ぶ。

城生安治君より、事理明白なるを以て敢て討議の必要無かるべしとて常置委員会決議を受容るゝ事の動議提出あり、川島專助君の賛成あつて採決したるに、賛成者二十七名、大多数の賛成を以て可決す。

第六 東六番丁教会に対する謝辞の件

小林議長、中会を代表して謝辞を述べ、東六番丁教会長老佐藤義郎氏之に応ふ。

第七 記録確定の件

慣例に依り常置委員会に委任することに決す。

第八 閉 会

城生安治君の閉会の動議あり、賛成多数可決す。

一同讚美歌第二百七十九番を歌ひ、牧師川島專助君の祝禱を以て閉会す。時に午後四時三十五分。

右 東北中会議長 小林龜太郎

同 書記 渡辺 良亮

(東北中会記録)

一九〇 出村悌三郎「母校の経済的独立に就いて」

(昭和十五年十一月一日)

母校の経済的独立に就いて

院長 出村悌三郎

聖戦第三周年に達した本年は恰も皇紀二千六百年に當り、又教育勅語渙発五十周年にも相当する等種々なる意味に於て記念せらるべき年であります、最近に於て外には日独伊三国の結盟を見、内には大政翼賛会の完成あり、我国史上空前の輝しき重大事が決行せられたのであります。従つて之が国内的には政治行政の上に或は経済教育文化等の上にも大改革の行はるべきは当然の成行きであります。

斯かる内外の情勢の中に立つて我々の母校東北学院も五十年來提携し来りたる米國ミツシヨンの補助を絶つて、茲に経済的独立を断行すべき時機に到達しました事は既に新聞紙等により各位の御承知の如くであります。

経済的独立は固より我々の予期しなかつた所のものでは無いけれども、今日にして顧るならば其の時機の見極め

と之が準備とに於ては未だ欠くる所多かつたと謂はざるを得ないのであります。

然し乍ら此の事たるや現下の内外情勢に鑑み、其の欲すると欲せざると拘はらず是非断行せねばならぬ問題と成り来つたのであります。学校当局に於ては之が対策に就いて日夜苦心、案を練つたのであります。又一方院長部長を中心として両学部及び両学部父兄会、同窓会等の代表者より成る企画委員会を作成し愈々具体的なる対策を定め之を実行に移すべく準備を急いで居ります。

何れ詳細は他日を期し茲にはこの一事を申述べるだけに止めますが同窓生各位に於かせられても、母校今日の立場を諒せられ此の画期的重大事にあたりて学院百年の大計樹立に対して満腔の御同情と御尽力とを賜らんことを御願ひして止まない次第であります。

〔『東北学院時報』改三号 昭和十五年十一月一日〕

一九一 東北学院維持会の成立

(昭和十五年十一月七日)

東北学院維持会生る

昨年末母校が独立自治の大方針を自立、財団の改組に着手同時に同窓会は前後の協議の結果全幅的に此れを支援する事に決し、右趣旨の徹底を計つた事は前号所報の通りである。昨年十一月七日、母校当局、教職員父兄、本部役員を以て独立自給準備委員会が組織せられ熟議の結果東北学院維持会が組織せられ、事務所を南六軒丁東北学院内に置き、会計に東北学院財団の会計が当り、庶務に三品同窓会主事、会員係に津田月浦の両同窓会幹事が各分掌する事となり、各地支部と呼応して活動に着手したのである。十二月十日更に一般的(同窓会員)に母校の現状報告旁々維持会の趣旨を訴へたのである。

各支部は支部として独自の立場より「我々の学院を守れ」とそれ〴〵活動中であり、学院知友の方々よりしても非常な激励を受けてある、とりわけ遠く故国を離れ聖戦参加の同窓諸君へは其の労苦を思ひ且つ銃後の責任として御知らせしなかつたのに伝へ聞かれたものか、わざ

く、母校の前途を思ふ誠情の手紙をよせられ感謝感激以外なものもない。

日尚浅きにも不拘今日(二月一日現在)までの会員数は延べ人員五百五十一名に達してゐる。会員芳名其の他は次号まで御許し頂きたい。

(『東北学院時報』改五号 昭和十六年三月一日)

第二章 創立五十周年

一九二二 D・B・シユネーダー書簡(キャツセルマ

ン宛)

(英文)

(一九三四年六月二十七日)

一九三三 E・H・ゾーグのシユネーダー院長辞任

に関する報告

(英文)

(一九三四年十月三十一日)

一九四〇 創立五十周年祝賀会におけるD・B・シ

ユネーダーの演説

(昭和十一年五月十一日)

嗚呼吾等の東北学院

デー、ビー、シユネーダー

(五月十一日創立五十周年祝賀式に於ける前院長の演

説であります 文責記者)

同窓生、同僚教職員並に学院三学部の生徒諸君、此大祝賀式の日に諸君の前に起つて我等の東北学院に就いて聊かお話することは実に何とも云へぬ大なる特権であり、又喜びで御座います。

我等の学院は五十年前に七人の生徒と二人の先生とを以つて始められたのであります。そして只今は千六百十六人の生徒と百四人の教職員とがあるのであります。基

督教々育事業の半世紀の歴史は私共の後に去つて二千七百七十六人の青年が卒業生として我等の学院を出たのであります。而かもその他の多くの方が卒業はしませんが、学院を我等の母校と思つてゐるのであります。之は全く輝やかしい成功では御座いませぬか。けれども之だけではありません。此めでたい日に特に我等の学院の歴史とその将来の使命の中心となつてゐるものに私共の心を集注する事が私共にとつて更に大切で御座います。創立者押川、ホーイ両先生の胸中を占領してゐたものは多数を得んとする欲望ではありませんでした。それは寧ろ日本を救ふ、殊にその東北を救ふ指導者の養成に対する熱望で御座いました。両先生が今大病院の敷地になつてゐる木町通りの一民家に小やかな学校を創立した時、東北の伝道と東北の救済とはその直接の目的でありその心中の幻で御座いました。換言して之を広く申せば我等の学院の使命は始めも今もいつまでも基督教々育を施す事ではなければなりません。即ち或は直接伝道事業に従事する者に或は基督の為、地上に於ける義と愛の基督の王国の為、個人並に社会を感化し得る其の他の事業に従事する者に、その準備として基督教々育を施す事でありませぬ。此使命を果す為に我等の学院が創立されたので

御座います。此使命を果す為に我が香味ちか夫人が最初の寄附金銀十二枚を提供したのであります。此使命を果す為に創立者押川、ホーイの両先生が苦心し又困難を忍んだので御座います。此使命を果す為に学校が次第に建設されたのであります。此使命を果す為に過去五十年間或は土地購入の為に或は校舍建築の為に或は経費補給の為に数百万円の寄附を受けたので御座います。

而して此寄附金は多額の寄附者も幾らかありましたけれども、その大部分は遙か海の彼方のアメリカに在る幾多の善男善女並にその児童からすら年々寄附されてゐる零碎寄附金つゞによるものであります。又此使命達成の為に多くの祈りが献げられ又日本並にアメリカの故人並に現存者の多くの教師と校友とに依つて多大の犠牲が払はれたので御座います。此故に生徒数及教員数の増加や卒業者数の多寡や校地校舎の形に於ける物質的發展を考へる前に、私共は又我等の学院が過去五十年間にどの位の程度までその創立並に存立の真使命即ち精神的使命を成就したかに就いても考へなければなりません。如何なる程度まで我等の学院は此基督教々育を施す事に成功しましたでせうか？私共は神の前に恭しく私共が相当程度まで成功したと云ふ事が出来ると信ずる者で御座います。統計

の示すところに依りますと、過去五十年間に我等の学院は日本に於ける男子基督教学校の多分どれよりも高い率を以て基督者なる卒業生を世の中に出して居ります。そして又卒業生は彼等が受洗して出ても、しないで卒業しても一般にその生活に立派な品性と高い理想を表はして居ります。彼等は社会と国家に作用してゐる新らしい発酵素となつて居ります。彼等は地上に正義と仁愛の神の国を来す為に眞の貢献をなしつつあるのであります。而して我等の学院は基督教学校の最高理想を充分実現する上に幾多の甚だ至らぬ点のあつた事は事実でありますけれども、なほ私は神に対して深い感謝の念を以て過去五十年間の歴史を顧みる事が出来ると信ずる者で御座います。東北学院は基督教学校として日本の同種の学校の間に高いレコードを作り、そして地上に神の国を実現する為に眞の力となつて居るので御座います。

併ながら今日此大祝賀式の日に当り私共は唯過去を顧みるだけでなく将来を望まなければなりません。創立者押川、ホーイ両先生が五十年前に我等の学院の歴史の前半世紀の始めに起つた如く私共は今その後半世の初頭に立つてゐるのであります。而して私共の凡ての者が即ち隠退しようとしてゐる老院長と新院長に選挙された敬愛

する出村博士、理事会員多年忠実に勤められた長老教員と強くて忠実な職員既に半白になられた方もある同窓会員、神学部、高等学部並に中学部を合せて千名以上の在校生此記憶すべき一大団体が此神聖な場所に集つてゐる時私共の心の動向は果して何で御座いませうか、私共は今何を考へなければならぬでせうか、私共の幻は果して何で御座いませうか、そして何を私共は決心しなければならぬでせうか。

一、先づ第一に私共は一般基督教々育の意義と目的とを再考して新らしく之を理解しなければなりません。基督教々育とは何であるか、又その目的は何でありませうか？

基督教々育とは基督中心の教育であります。それは先づ第一に基督教精神に於て又出来るだけ基督的人に依つて各種の学科目を教授する事でありませう。且つその教授は学科目中心でなく生徒中心でなければなりません。換言すれば、教員の中心的目的は単に担任学科目を満足すべき方法で教授する計りでなく、寧ろその中心的関心は生徒その者であり、生徒の智的発達と靈的進歩でなければなりません。

生徒に対する愛生徒と個人的に親密になる事、生徒の

将来の眞の幸福と成功とに対する関心、之等が基督教学校の教育の顯著な特色でなければなりません。けれどもその上に又基督教的眞理の明確なる教授と此眞理を生徒が明確に自発的に受け入れるまでそして神を信じ、又彼等の救主彼等の主としてイエス・キリストを信ずる信仰にまで換言すれば一変した生涯にまで彼等を導く為の確實なる努力がなければなりません。次に基督教々育の目的は二重になつて居ります。その第一の直接の目的は生徒自身の現世的幸福と永久的幸福であります。即ち彼等が此世に於て眞の人生を営みそして最も眞の意味に於て成功する事及び永遠の世界に於て永久的幸福を実現する事が第一の目的であります。基督教々育の第二の目的は社会の爲国家の爲世界の爲に優れた人物基督に肖たる人格者を養成する事であります。之は原則に於ては昔の武士道教育と酷似して居ります。即ちその支配的動機が単に彼等の肉体的欲望の満足でもなく金銭地位名誉等に対する利己的欲望の満足でもなく寧ろ同胞を愛し、国家を愛し人類を愛し、同胞の爲に犠牲となる教育ある人々将来の社会的指導者国宝となるべき人々—如斯人物の養成が基督教々育の輝やかしき第二の目的で御座います。

而して基督教々育が如斯人物の養成に成功すればする程それは社会の爲に国家の爲に又人類の爲に眞の根本的の幸福となるのであります。それは如何なる国家に於ても最も強き救済力となります。基督教々育の正義と仁慈の理想は凡ての家庭的並に國際的諸問題の解決と諸困難の克服に最も効果的な最も永久的な根本となります。此故に基督教々育の重要な事は申すまでもありません。之は如何なる国家に於ても人類の幸福の爲に根本的に大切であります。基督教々育は力弱く意義また微かに見えるかも知れません。その学校は小さく効果少く見えるかも知れません。けれどもそれが眞の基督教々育である限り根本的に有効で根本的に重要で御座います。それは世の中の最も根本的な要求に關つて居ります。

二、私共は将来を幻に描かなければなりません。先づ第一に学院の将来は過去に於けるよりも一層重要で御座いませう。凡ての基督教々育はそれが過去に於てあつたより将来に於て一層重要なものになりませう。と申すのは基督教々育の感化に対する世の中の要求は一層大きく一層烈しくなるからであります。道德的腐敗と精神的当惑とに赴く傾向が益々旺になりませう。人類の社会的經濟的政治的國家的並に國際的諸問題は一層複雑になり、一

層險悪になりませう。此故に私共は我等学院の事業と影響とが過去五十年間に於けるよりも一層根本的に必要になり重要になる将来を見透さなければなりません。学院より出づるが如き種類の人物は将来の社会生活と国家生活に層一層重要なものになるのであります。同時に今一つの事を申し上げなければなりません。東北学院の将来は亦多分過去に於けるよりも一層困難になりませう、成程過去に於ても色々克服すべき困難と問題とが御座いました。けれども将来は一層多くなるでせう。学校の物質的設備は未だ充分に実現されておません。財政的基礎は未だ充分に確立しません。他の学校との競争は益々烈しくなりませう。生徒数の増加に依つて私が只今述べたやうな真の意味に於いての真の基督教々育を施す事が益々困難になりませう。又其の時特色を失つて他の私立学校と等しくならうとする傾向がないでせうか？そして若しあるとすれば、それはその味を失つた塩のようなものとなるでせう。之等は私共が学院の歴史の後半世紀に入らんとする今日断乎として對抗するのが最も適当と思はれる真の困難であり真の危険であります。

三、此故に私共は今日大なる又厳肅なる挑戦に直面しているの御座います。即ち私共教職員生徒並に同窓生は

今日此の場で、大決心を以つて我等が学院の歴史の後半世紀に臨むよう挑戦されてゐるのであります。お互に此挑戦に注意を払ひ、神を信ずる信仰を以て胜利的学院の幻を私共の眼前に高く揚げやうぢやありませんか。お互に生徒自身の此世並に彼世に於ける幸福の為に、日本の為に又人類の為に私共の生徒に対して真の基督教々育を施す事に益々成功ある後半世紀を幻に描かうぢやありませんか。より大なるより善きより力強き東北学院を幻に見ようぢやありませんか。而して私共の眼前に此幻を見つめながらお互に此幻の実現の為に一大決心を致したいもので御座います。

どうぞお互に新なる信仰と新なる献身犠牲の精神を以て、又新なる献身犠牲の精神を以てやつて見たいと思ふので御座います。感謝礼拝を以て五十年祝賀式を始めた事は誠に適当な事で御座いました。そして聖前礼拝を以て終りを告げる事は更に適当な事だと思ひます。願はくは本当に此大事業の為にお互に新に聖別したいと思ふので御座います。

（『東北学院時報』一二六号 昭和十一年七月一日）

一九五〇 創立五十周年記念行事とD・B・シユネ

ーダーの説教「我は福音を恥とせず」

(昭和十一年五月十日)

創立五十周年記念の行事日程

昭和十一年

五月十日(日) 感謝礼拝、創立者墓前祭。

〃 十一日(月) 記念式、謝恩会、表彰式、提灯行列。

〃 十二日(火) 追悼会、講演会、同窓大会、教職員同窓会員合同晩餐会。

〃 十三日(水) 学校開放、展覧会、文芸大会。

〃 十四日(木) 記念音楽会。

〃 十五日(金) 記念運動会。

〃 十六日(土) 新院長就任式、新院長披露会(正午、教職員、同窓生父兄会役員、午後五時より特別招待来賓)

〃 十七日(日) 聖別礼拝。

記念行事の概況

第一日目、五月十日(日曜)

(イ) 早天祈禱会、午前六時より南六軒丁高等学部校舎

屋上にて

司会者 出村 剛

讚美歌(五四)

一 同 剛

聖書朗読

出村 剛

祈 禱

同 剛

讚美歌(三二八)

一 同 剛

奨 励

矢野猪三郎

讚美歌(三二八)

祈 禱

会集者数名

頌 栄

祝 禱

以上

夜来の雨は名残なく晴れ渡り、この記念行事をその冒頭から祝するかのようである。

高等学部校舎の屋上に会するもの百二十余名満場敬虔の会に満たされて進められた。奨励者矢野猪三郎は、創立者押川方義の熱烈なる愛国精神と独立不羈の燃えるような伝道的熱情を偲び、シユネーダー院長の多年に亘る拮据経営の苦心と、磐石のような信仰確信を称賛し、更に学院の将来及び新院長の上にゆたかなる祝福をいのりつつ会を終った。時に午前七時半である。

(ロ) 感謝礼拝(同日午前十時より、南六軒丁礼拝堂にて)

オルガン前奏 司会者 赤石 義明
黒沼幸四郎

頌 栄(五六六)

礼拝招致 詩篇第百篇

祈 禱

主の祈

聖 歌 みいつあれ(グノー作) 聖 歌 隊

聖書朗読 詩篇第百三篇

礼拝祈禱

讚美歌(五四)

説 教 「過去五十年を顧みて」 シュネーダー

奏 楽 献金の歌

頌 栄(五六九)

祝 禱 シュネーダー

奏 楽

以 上

この記念礼拝は十時より十時四十分まで、N・H・Kを通じて全国中継放送を行い、シュネーダーの院長として最後の説教を全国的に伝えた。

五十年の尊敬する体験より出でた教訓は言々句々聴者の肺腑を浄化し、殊に学院の存在とその意義を広く天下に呼びかけ世人の認識に訴えたが、老院長にも有終の美を完了されたこの上なき恵に感ぜられた。

なおこの説教の概要は東京ビクター会社の録音盤に吹込まれ「われは福音を恥とせず」と題し、広く有志の人に頒布された。その全文は左記のようである。

「我は福音を恥とせず、この福音はすべて信ずる者に救を得さする神の力たればなり」(ロマ書一章十六節)、今日の我国のクリスト教事業はもつと大きなビジョンを用いもつと大胆である事が必要であると思います。今日私共は半世紀前の人々が夢想だもしなかつた程立派な物質文明の中に住んで居ります。そして物質文明の蕩々たる潮流は、前にある凡ゆるものを一掃して突進して居ります。同時に人間の知識は、未曾有の進歩を遂げて居ります。見るもの聴くこと、尽く驚異そのものであります。古のローマの文化の燦然たる有様に似て居ります。然して、この光輝ある進歩発達に直面して、私共クリスト者はクリスト者としての信仰や使命について話す時にいくらか躊躇したり弁解的になったりする危険に陥つて居ます。けれども、使徒パウロは福音を恥としませんでした。

彼は、ローマの司ペリクレッスの前に立つてすら、堂々と所信を語り、遂にペリクレッスを戦慄させたと使徒行伝に記してあります。成程、今日の世の中は開けて居ります。驚くべきものであります。けれども其れが恐るべき根本的な欠乏に悩んで居る事もまた大いなる事実であります。そして、その欠乏して居るもの必要なものを一言で申せば、それは救であります。世の中は今日程救の必要にさし迫つて居た時はありませんでした。救とは肉欲の欲望と利己的欲望の力から、又闘争から又、腐敗と滅亡から解放される事であります。同時にまた他面に於いては、人類に新たな生命と新たな永久的希望を与へる事であります。そして此の新たな生命とこの新たな希望を与へ得る唯一の力はイエス・クリストの福音であります。故に、今日の人々にこの神の力を宣伝する事を躊躇したり、無気力になつたりする事は、私共にとつて単に間違ひであるばかりでなく、実は罪であります。神と人とに対する罪であります。更に、日本に於ける私共の今日のクリスト教事業に於いて、私共はややもすれば私共の目的や範圍を余りに狭ばめる傾きがあります。例えば、私共が一年間に数名の会員を私共の教会に増加する事が出来るか、或いは我々の教会が年々いくらか宛

自給独立に進む事が出来るならば、それで満足しようとする傾きがあります。けれどもこれだけでは満足されるところではありません。

押川先生は全日本の救を幻に見乍ら働きました。新島先生も本多先生もそうでした。熊本バンドや札幌バンドもそうでありました。それ故に彼等は皆大担不敵であつたのであります。勿論個人個人の魂も彼等にとつては無限に貴いものでありました。けれども、各個人の救を通して彼等は又新日本の建設の爲めに勢よく働いたのであります。今日私共に対する神の証明も亦同じであります。私共は全日本の救を幻に見乍ら活動しなくてはなりません。いな私共の幻はこれを日本以外に迄拡張しなければなりません。今や如何なる国家でも単独では立つて行く事が困難であります。全世界は凡べての国家が救われない限り如何なる国家でも本当に永久的に救われない程、互に相關連して居ります。文字通り四海は同胞であります。私共に対する神の召命は、救を得させる神の力たる、そして唯一の力たるこの福音を宣伝する爲めに勢よく働く事で御座います。恥としないで。絶対的に信心をもつて働く事で御座います。

一九六 出村悌三郎の院長就任挨拶

(昭和十一年五月十六日)

就任に際して所懐を述べ

出村悌三郎

(五月十六日院長就任式に於ける出村新院長の挨拶で

あります。文責記者)

敬愛する東北学院理事事務局同僚、学生諸君並に来賓各位、本日不肖私の為めに就任式の盛典を挙げ下さいましたることを衷心より感謝致します。

今を距ること五十年前、押川、ホーイの両先生が市内の木町通りの一倭屋を賃借し六人の学生を以つて創められたる学校が成長して今日は宏壮なる校舎広き敷地、善い設備を有し千有余の学生と百有余の教職員を持ち過去五十年間に三千に近き卒業生を出し、日本の精神文化に貢献すること頗る大に、今は北日本に於ける一大私学となりたることを思ひ廻らす時に驚異の念に打たれざるを得ませぬ。之れは驚くべき成長であります。我学院のうち天から与へられた生命がなかつたならば、此成長を見ることは出来ないと思ひます。さるにしても此の生命

を守り育み給へる天父の恩寵と、之を培ひ育てたる創立者の努力と之が援助を吝まなかつた多くの後援者の同情に對しては、如何なる感謝も充分と云ふことは出来ません。私は就任の御挨拶を申上ぐるに当り、我学院創立者の一人たる押川方義先生を動かして此の偉業を創めしめたる先生の精神の二方面に付いて申上ぐることを御許し下さるやう御願ひ致します。先生の二方面は一見其根源を異にして居るやうですが、実は二のものが渾然たる一の精神となりて其活動に異彩を放たしめたものであります。

而て其二方面の一は純福音的活動でありました。先生年若くして神を信じ、基督を救主と仰ぎ深い体験に依りて十字架の教を除きては魂の救はるべき道と力のないことを覺り、其独子を賜ふ程に世を愛し給へる天父の御慈愛を我國の同胞に宣べ伝ふることを畢世の使命と感ぜられました。先生が横浜に於ける数年の修業時代を終るか終らぬかの明治の初年当時非常の要求がありたるに拘らず其危険を恐れて誰人も行かんとするものなき、新潟の地に伝道する為め先生は決死の覚悟を以つて敢然と其地に行かれました。非常なる困難と迫害と危険の中に先生は四年間伝道せられ、其後仙台に來られてからも大なる

困難の中に奮闘努力福音の宣伝に勉められ、伝道の門戸を開き此地に於ける基督教会の基礎を置かれました。先生は伝道者を養成する必要を感じ、偶先生と同じ希望を抱いて当時米国から渡来された許りの極めて熱烈なる青年宣教師にして実に信仰の英雄とも云ふべきウイリヤム、イー、ホーイ先生と協力して伝道者養成の機関として仙台神学校を創立せられました。これが東北学院の前身であります。即ち先生は基督の忠実なる僕として我国同胞の魂を救はんが為めに身命を捧げて働かれました。これが先生の活動の動機でありました。

而も先生は又一面に於ては熱烈なる愛国者であり、真の意味に於ける忠君愛国の人でありました。先生は赤誠を以つて皇室を尊崇し談之れに及ぶ時は常に肅然矜を正して語られるのが常でありました。先生常に憂国の精神に溢れ談国家の問題に及ぶ時には先生熱涙の滂沱たるものを見たのであります。学院が嘗つて創立二十五年の記念式を挙げたる時先生親しく其席に臨まれ一場の演説をせられました。其演説中に「日本には古来国家の道德あり、上に聡明叡智の陛下あり、民望に先んじて憲政を布き権利と自由を与へ給ひ近くは途に餓季なからんことを思召され内帑を割き、未だ富豪の実行せざる例を示し給

うた。苟も至仁至慈なる天皇陛下の聖旨を奉じ其膝下に伏して之を補佐し奉るべきは日本男子として忠良なる国民として造次にも顛沛にも忘るべからざることである。」と述べられ、また先生は日本をして世界に於ける最善最大最強の国たらしむると云ふことを標語として居られたことなど、以て先生の志のある処を知ることが出来ます。惟ふに先生は深い東洋意識を以つて基督の教を解釈されて居られたやうであります。先生はよく日本人の精神でなければ恐らくは理解することの出来ない基督の精神の一面を知り又体験されて居つたように見える。思ふに先生の魂のうちには三千年來我民族のうちに流れてゐる最もよき国民意識が基督の靈に化せられて美はしき光を発したるものでありませう。兎に角先生にありては、神に對し基督に對する忠誠と、陛下に對し國家に對する赤誠とが渾然融合調和して殆んど其の区別を見ない程であつたのであります。即純福音的精神と愛国心の完全なる結合であります。さればこそ伝道者養成の神学校を擴張して一般に有ゆる方面の人間を教育する我東北学院を起すに至つたのであります。何故ならば真に國家を愛するものは正義を愛し、正義を行ひ眞の愛を以て犠牲的奉仕をなす、國民を作らねばならぬ。蓋し國家の価値は其國民

が正義を愛する程度に依つて定まるからであります。而も正義を愛する国民を作ることは人格教育に依らねばならぬ、精神主義の教育に待たねばならぬのであります。

押川先生が愛国の精神から人格主義の教育を為さんとする東北学院を創立されたのは当然の帰結でなければなりません。而も其の人格主義の教育は先生の体験に基く基督の教に依るに非ざれば、成就されないことを確信されて居つたのであります。茲に於てか先生には宗教家としての人類の魂を救はんとする大希望と愛国者としての信念に基いた宗教主義に依りて真の日本人を作り上げんとせられたる精神が全一となりて動いて居つたことが明らかであります。多少其表現こそ異なれ之れと同じ精神を以つて犠牲的の奉仕をなされたのは前に述べたホーイ先生であります。惜むらくは先生は病の爲めに日本を去つて支那に行き其処に東北学院に等しき学校を建て、彼国の青年を指導されましたが、病を得て帰米の途に就かれたる途中太平洋上にて永眠せられ、真に英雄的なる殉教者の最後を遂げられました。

次院長シユネーダー先生は我が学院の二大創立者の後を継ぎ一に高き徳望と非凡なる経綸の世才とを以つて五十年間拮据経営献身的努力をなし、以て学院を今日の大

に到らしめたることは余りによく知られたる事実であります。此機に偉大なる前任者の後を継ぎ不肖私が院長の大任を命ぜられましたことは誠に身に余る光榮であります。

抑も先任者に依り残されたる此の事業を継承し之を総攬し之を發展せしむる新院長の任務は実に容易ならざるものと信じます。之を思ひ之を惟ふときには其の任重く道遠く己れ又其器に非ざることを痛感するものであります。が、我学院の現状を考へ、当局及先輩の信任に感激し又母校に対する責任を思ふときに殆んど己の無力菲才を省みるに暇あらざるを感じ余生を捧げて粉骨碎身母校に奉仕するの決心をなした次第であります。

然らば汝は如何なることをなさんとするかと問わるゝならば、私は言下に我学院の主義精神を徹底的に覚識し且又之を實行せんと欲する覚悟であると御答へする積りであります。抑も我学院の主義方針は何であるかと申しまするならば私の信ずる処は基督の精神に依つて教育することであると思ひます。基督の精神とは一言で言へば敬神愛人であります。「汝心を尽し意を尽し主なる汝の神を愛し又己の如く隣人を愛すべし」との誡めであります。更に之を説明致しまするならば、我々は天地の主魂の王な

る神に対し絶対の忠誠で励むの生活をなし人類同胞を人格者として尊敬し、且愛し之が益を謀るの精神、言換へれば人類愛に燃ゆる気高い精神であります。此の二大精神は万世を貫く大道でありまして人間の人間たる所以の尊貴は茲にあると信じます。之れが基督の精神であり又此精神を養ひ之を基調として生活する人を作らんとするのが又学院の教育主義であります。勿論此の二大精神が実生活に於て如何に現はるべきかと云ふことは時代に依り社会の状態に依りて種々なる形式と表現を取らねばならぬことは言ふ迄もないのであります。」

故に我々は此二大精神を飽まで培ひ今日の時代に処して適切なる之れが実現を銘々の生活の上に来さんことを努力しなければなりません。之れは空粗なる理想無力なる主張に過ぎぬかのやうに見えまするが、実はこれこそ千古の真理であつて二十世紀の人類が漸く其意義を了解しかつて居ると言つても可いのであります。我々が能く之を我々の生活に取り入れるならば、そこに驚くべき力の源泉を見出すであらうと信じます。

此二大精神の示す処のものは永遠の真理であつて、時処を超越したるものであるが、之を時間的のものとなし歴史に編み込んで現実となすことは正に神が各国民、各

民族、各個人に与へ給うた仕事であつてその仕事が果さるゝ時には二大精神は其歴史と国民性に依り、又絶えず変化する環境と絶えず生成発展する生命に依りて種々なる形態をなすものであることは前に申上げたる如くであります。併しながら此二大精神を生命として居るものには到る処可ならざるなく、それ自身に充実せる生命の力を以つて万難を克服して進み行くものであることは我等の固く信ずる処であります。

而も此の二大源泉から出づる力が今日我国にとつて如何に必要であり、又教育上の主義として如何に価値あるものであるかは今日我国の状況に照らして明かであると思ひます。

今日我国に力強く主張されて居るのは日本精神運動であります。此運動の目的は言ふ迄もなく種々なる外来思想の影響の結果として今日我国の混沌たる思想界に対して人心の向ふべき帰趣を明かにし、不安動揺の世界に在りて世道人心の弛緩墮落に対して、生活の指導原理を供給し、更らに進んで国民を打つて一丸となし以て我大和民族の大発展を謀らんとする為めであるのであります。而も斯如き国民生活の指導原理を三千年來我國民の生命とし来たつた日本精神に於て発見したのであります。先

づ第一に我国には世界無比なる国体があり、万国に卓越せる国民性があり、其産物である日本独特の精神文化がある。之等は世界の何れに対しても恥しからぬものであるのみならず、之れ実に日本人の血であり肉であり又生命であるから、之をさし置いて、他に我等の指導原理とすべきものがないと云ふことに気がついたのであります。されば我々は我等の持てる此の貴きものにつき一層自覚と反省を加へ益々之を普及發達せしめ、之を意識的に助長せねばならぬ。即ち日本精神の涵養振作を以つて国民生活の基調となし、又之を以つて教育の神髓とせねばならぬこととなるのであります。斯如き運動は我国民が段々自覚に向つての進歩と見、且又天が我國民を動かして一大進歩飛躍をなさしめ給ふ不思議なる摂理と信じ満腔の賛同を表するのみならず、又之に対して飽まで共鳴し協力せねばならぬことは言ふ迄もありません。尚之について私は聊か卑見を附加へたいと思ひます。抑々日本精神は単に昔はかうであつたと云ふ者のみではなく、歴史的に生成發展し來つたもので日本民族性の偉大なる同化力が世界から有ゆる精神的養分を吸収して、以つて今日の大に至りたるもの、即ち日本の惟神の道に儒教や仏教が加へられ、どれだけ偉大なる貢献をしたかと云ふ

ことは日本の文化史を細かに研究するまでもなく明かなる処であります。今日我々は動もすれば外来思想と云ふものを玉石混淆に之を排斥せんとするは癡に懲りて膾を吹くの愚に等しいものと思ひます。最近の日本歴史に於ても外国の精神文明がよい影響を与へたことを忘れてはなりません。殊に公平に之を言へば基督教が我国の精神生活に如何に大なる貢献をしたか、又將來せねばならぬかと云ふことは心ある人の注意せねばならぬ処であります。更に又我々の所謂日本精神と云ふものは一部は現実であるが、一部は理想であつてこれから先限りなく發展して行くべき未完成のものであります。この点に於て我々基督教の教を奉じ基督教主義の教育をなさんとするものが大に考慮せねばならぬものがあると思ひます。即ち今日我国の精神運動の基調となつて居る日本精神はどこ迄も之を涵養し且つ之を教育方針に取り入れなければならぬのであります。それには基督教の教を真に日本のものとなし、之を国民性と融合せしめなければならぬことであります。又一方我々は眞の愛國者たらんが爲めに基督者は如何なる善きものを日本精神の中に入るべきかの問題を有して居ります。我々は神に対しては如何にして永遠変らざる神の御旨を現在の我祖國に於て

成就すべきか、即ち先きに申し上げたる基督の二大精神を我国今日の精神運動に対して如何なる表現をなさしむべきかの問題であります。此の解決を実際に行はんとすることは我等が主張する人格主義の教育であります。

故に我等の主張する教育は決して日本精神と戻ることなきのみならず、真の意味に於て之を完成するものと信じます。即ち我等の主張は日本精神の信念に更に確固たる基礎を与へるものであります。其一つは絶対神に対する信仰又は国家の使命に関する確信人類愛の再認識等であり、又日本の国民性にも他民族に対して優越を誇るべき長所美点があると同時に、拙劣な短所弱点がない訳ではない。之等は基督の教に依つて大に匡正せられ大成せらるのであります。即ち人格の觀念個性の価値罪惡に対する深刻なる意識などがそれであります。ことに近来我国教育に於ては従來の智育偏重の弊が認められて、今後は人格教育を高調せねばならぬとされて居ります。

併ながら此の人格教育は言ふべくして中々容易なことではないのであります。先づ第一に人格とは何んぞや、と云ふ時には恐らくは其内容につき明確充実せる觀念を有つのが困難であります。随つて其の人格を養成する目標や方法も瞭然と把握されぬのではなからうかと思ふ。斯

る時に私は人格教育を行ふ前に、先づ教育者たるものが人格の内容実理想なりを充分知らねばならぬと思ひます。而して我々は之を基督教人生觀の上より之を洞察し、併せて我國民性の歴史的事実にと照らし合せて以つて豊富にして充実せる人格の觀念を明かにし熱烈なる信念を以つて之が養成を行はんことを任務とせねばならぬと信じます。

過日発表になりました文教刷新の目標につき特別委員會の答申書を読みました但其御趣意は先づ国体の明徴と教育勅語の徹底的遵奉を根幹とし、更に有用の人材育成必須の知識把握体育の普及徹底校外教育の尊重振作は徳化に俟つべきこと科学研究施設の六項目に分けて述べられて居りますが、誠に今日我国に必要な教育の要旨を指摘して余す所なき提案であると信じます。

只如何にして之を実現するかと云ふことは各教育者に与へられたる課題と信じます。我等は我等の信ずる処の方法を用ひて之を実現したいと思ひます。例へば日本皇室の三大特徴と見るべき皇室に対する絶対の忠誠義務や職務のために身命を賭する犠牲心情深く情義に厚き真心、之等は必ずしも宗教に依らずば養ひ得られないとは言はれませんが、併ながら宗教的信念に依れる教育に依

つて之等を更に堅固にし、更に崇高なるものと為し得るとは我等の信仰であります。斯如くにして我学院は特色ある教育に依りて我国に叫ばれてゐる人格教育の爲めに大なる貢献をなさんとする覚悟を有して居ります。

今日我々は我学院が半世紀に亘りて爲したる神と国家に対する奉仕の歴史を追想し之れを感謝せんとするものであります。

之れは我等の喜びであり特権であります。併ながら我等は唯徒らに過去の追想に耽ることを以つて満足するものではありませぬ。寧ろ我々は刻々にきざみ行く現在に注目し更に将来の使命に対する計画につき思を凝らし正に行ふべき革新を断行し、今後のより光輝ある五十年の歴史を作ることに専心せねばならぬと信じます。希くば昊天の変らせ給ふことなき御指導と、大方諸君の御鞭撻に依り又同僚諸君の協力を依りて此重大なる我等の使命を果さんことを祈るものであります。以上聊か私の信念を披瀝致しまして御挨拶と致したいと思ひます。

（『東北学院時報』一二六号 昭和十一年七月一日）

一九七 D・B・シュネーダー書簡（キャツセルマ

ン宛）

〔英文〕

（一九三六年六月三十日）

一九八 創立五十一年周年記念式における出村悌

三郎の式辞

（昭和十二年五月十三日）

母校創立五十一年周年を迎へて

院長 出村悌三郎

東北学院の創立五十一年周年を迎へ之が記念式を挙ぐるに当り我等の偉大なる創立者故押川、ホーイの両先生と、今尚健在で海の彼方に学院の為に祈り且つ働かる、シュネーダー先生に対して満腔の敬意を表し度いと思ひます。此の三方は正に東北学院と云ふ重い鼎の三足であります。全日本国民を率ゐて聖なる神の前に跪かしめんことを期された押川先生の雄大なる精神と、愛と犠牲の活模範となつて青年を教育し、基督に似たる人格を作り上げんとせられたホーイ先生の熱烈なる心情とは実に学院

創立の魂でありました。而して此魂に肉を附け骨を与へ東北学院と云ふ一個の活ける存在を作り上げたのがシュネーダー先生の至誠と努力とでありました。以上のものは実に我が東北学院の生命であり力であつて、此処に学びたる三千有余の同窓生の働きのうちに苟も健気なもの美しきもの、貴きものがあると思へば、それは皆此精神に陶冶された結果であると思はねばなりません。是実に我学院創立の精神であり又永久不変の我等が指導精神であると信じます。

昨年の今頃我々は学院の創立五十周年を迎へ一同の協力によりて盛大なる記念式を挙げ過去半世紀に亘る光輝ある歴史を顧み神と国家とに対してなせる奉仕の跡形を想ひ回らし大なる感謝を捧げたのであります。而して其の時に我等一同は期せずして念を将来に馳せ、今後過去に勝る五十年の歴史を作り上げる為に努力すべきを誓つたのであります。而して其の決心を以て其の時以来既に新なる五十年の道程に向つて出発したのであります、今日は方はその第一年の歴史のページを書き終つたのであります。今翻つて過去一ケ年を顧みる時に我々の感想は果して如何なるものがあるのでありませうか。我々は先づ天の佑助と奨励と友の援助と協力とに対して感謝せ

ねばなりません。また聊かにも学院の改善と更生の爲に成し遂げたことがあると思へば之亦深く感謝せねばならぬことでもあります。而して全然それがなかつたとは思ひませんけれども、世人も我等も予期した処に対して、又我等自ら作つた処のプランに対して、實際成し遂げたことの如何に貧弱であるかを思ふ時に忸怩たらざるを得ないのであります。

茲に我々は深く考えさせられるのであります。抑も我等が思ふほど成し遂げ得なかつたことは我々の識見の足ざる為か、我々の認識の不足の為か、或は又計画の疎漏、用意の不充分に依るか、或は之を実行する熱意と努力とに欠くる処ありしか、或は又客観的状況の不利に依るか、之等の点について深く反省熟慮しなければならぬと思ふのであります。併ながら私は決して失望落胆する者ではありません。寧ろ決心を新にして飽まで所期の目的に執着し、過去の経験に依つてよりよき実現の方法を考へ、以て学院本来の使命達成の一路を邁進せんとする者であります。

今日学校に在つて教育を受けつゝある者にも亦社会人にも精神上の重大事項として呼び懸けられてゐる問題は日本精神であります。朝野の指導者は我々に日本精神を

徹底的に認識把握せしむべく其の闡明に大童になつてゐます。併ながら本当の問題は日本精神を唯充分に認識することが大切なのではありません。単に認識すると云ふこと丈けなら何もさう大騒ぎする程のことでもないと思ひます。例へば日本精神の一つの顕現として滅私奉公と云ふ様なこと即ち私を棄て、公の為に尽すと云ふこと、自分一個の利益を後にして団体若くは社会若くは全体の利益を先にすると云ふ様なこと、之は我國民の歴史に照し又國民の高い意識に徴して誰でも自覚する処であるが問題は唯之を認識する丈けでなく、如何にして此精神を元來利己的で經濟的で享樂的な人間の實生活に活かして行くか、如何にして之を實際生活の指導力となし推進力とならしむべきかと云ふことにあるのであります。そこで實際的修養の問題が起るのであります、遺憾ながら今日の傾向は真面目にさうした修養を心懸ける者が、表面は兎に角眞実には至つて乏しいと思ふのであります。從て学校に於ても學生に向つて一人／＼の更生などを説いてもそれがどれ丈け聞き入れられるかが問題であります。併私は此難事を是非共諸君に要求しなければならぬと感ずる者であります。而して之が難事である訳は諸君が眞に更生を願はぬことが其の一つ、更に其の方法につ

いて一向眞暗であると云ふことがその一つであります。私は其の方法について余り説明を加へないで端的にその事だけを申上げて見度いと思ひます。

諸君は如何にしてその下劣なる精神を除かんとするか、如何にして止まる所を知らぬ利己主義を克服せんとするか、如何にして真面目なる努力を怠る心に打ち勝たんとするか、如何にして残忍酷薄なる心を棄て、より深き好意と深切とを持ち得る様になることが出来るか。それは他に道がない、ただ諸君が眞剣に之を希ひ眞剣にかくなる様に神の助けを祈り求むることより他に道がないのである。至誠神に通ずるとは我々東洋人のよく知る処である。私は天地の主なる神、宇宙の絶對者は我等が一生懸命の祈りを聞くものと信じます。己れの利益を求め、己の幸福を希ひ、或は唯己れの病の癒されんことを願つて之を神に迫まるが如きはインチキ宗教のなす処で神が果してそうした禱を聞き入れるか否かは私の知る処ではない。ただ己の罪を悔い聖なる神の心に協ふ心の持主とならんことを熱心に希願する祈りには響の物に應ずるが如く必ず感応があると私は確信する。人間の心には靈性がある。この靈性が目醒めて天地の大靈に接触せんとする時恰も電氣の陰陽が互に相引くの如く誤りなき働きが

起るのである。古への聖賢、宗教家予言者を始め平凡なる信者の靈の活躍と魂の更生とは皆此処から發生するのであります。基督教では之を聖靈の賜物と云うて居ります。聖靈の働きに就いては諸君が真面目な聖書の研究に依つて会得せられんことを希望する。併私はこの働きは基督教信者のみに限られてゐるとは思はない。私は諸君のうち誰人でも真劍に此の働きを受けんと願ふ者には神は必ず等しく此賜物を惜しみ給ふことがないと断言します。

繰り返へして私は申します。如何なる修養でも此祈、熱誠こめたる此祈、聞かれるまで止めない此祈が伴はなければ何等の効果をも齎らしません。併ながら此祈を有つ真劍な修養は必ず諸君を更生させると信ずるものであります。私は先に如何なる場合にも失望しないと申上げましたのは此の力の源を教へられ且つたとひ聊かながらもその經驗を有つてゐるからであります。学院の前途は悠久であり、其の使命は重大であります。併ながら常に其の前途に光明を仰ぎ、使命が必ず達成されると信ずる理由は天地の主なる神が我等の祈願に感応し、我等に無限の力を供給されると云ふ信仰があるからであります。我々は之が亦創立者の精神であり、且つ創立者が我々に

遺された大なる賜物であると信ずる者であります。

(本稿は創立記念式の式辞であります。文責在筆者、鈴木記)

(『東北学院時報』一三二号 昭和十二年七月一日)

一九九 出村悌三郎「国民精神総動員に就いて」

(昭和十二年十月十三日)

国民精神総動員に就いて

出村悌三郎

(本稿は過般行はれたる国民精神総動員の際出村院長が生徒に対してなされたる講演の一部であります。文責記者、鈴木市治郎)

我日本帝国は今日の重大なる時局に際し茲に国民精神総動員と称する一大国民運動を起し官民一体となつて相協力し以て時艱を克服し、愈皇運を扶翼し奉らんとしてゐるのであります。

而して国民精神総動員の実施方針は何であるかと申しますならば第一に挙国一致尽忠報国の精神を鞏固にし事

態が如何に展開し時局が如何に長期に亙るも堅忍持久あらゆる困難を克服して所期の目的を貫徹すべき国民の決意を固めること、第二は国民の此決意を実践に依つて具現せしむることでありませう。

而して其の實踐事項は現下の時局に対処する為にいろいろあるのでありますが、要するに如上の方針に基き日本精神の発揚に依る挙国一致の体現並に非常時財政経済に対する挙国的協力の実行を主とするのであります。

此運動の第一歩として今度全国的に一斉に開始されたことは戊申詔書を賜はつた今十三日から向ふ一週間を国民精神総動員強調週間と定め我等国民が真剣に斯の事考へ、充分に其の覚悟をきめ、是から先幾年に亙つても其の目的を貫徹せねば止まぬと云ふ精神を振り起さうとするのであります。そして其の第一日目の題目を時局生活の日と定め国民一斉に之に就いて考へることになつてゐるのであります。

然らば時局生活の日とはどう云ふことでありませうか。私は之は先づ第一に我々が時局を深く認識して之にふさはしき生活を送る様考へねばならぬこと、解してゐます。

我々は今日非常時局の下に置かれてゐる、隣邦支那と

大戦争をやつてゐる、この事は誰でもよく解つてゐます。併我々日本国民は之につき更に深い本當に正しい認識と信念とを有たねばならぬと思ふのであります。

抑も今次の事変は如何なる所から来たものでありませうか、それは畏くも第七十二回特別議會に賜はりたる、天皇陛下の御優詔に明かであるやう、もとく我國は隣邦支那と相提携して共存共栄を計り以て東亜の平和を確立する為に過去幾十年間同一方針を以て努力して来たのであります。支那は我真意を解せず、之を曲解し誤解して偏見に捕はれ多年抗日毎日を其の国是と定め、教育の根本方針となし、社会の指導精神として事毎に我國を侮辱し、我國民を迫害し、我權益を蹂躪し遂には東亜の平和を擾乱せんとする共産主義のソビエツトと結托して我國の存立をさへ危くせんとするに至つたので隠忍に隠忍を重ねた我國も最早や奮起せざるを得なくなつたのである、自衛の為に立たざるを得ぬ様になつたのである。之が今日の事態であります。而かも最初戦争の火ぶたを切つたのは支那であつたことを記憶せねばなりません。事此処に到りましては若しも我國が退嬰主義を執り、消極政策に甘んずるならば我國の前途は果してどうなることでありませう。實に國家の興亡存廢の分るゝ所であり

ます。況や之は世界平和の脅威者に対する聖戦でもあるのであります。茲に於てか我国は敢然立ち、此頑迷なる隣邦支那を膺懲して徹底的反省を促すの外どうにも道がなくなつたのであります。之が今日の事変であります。

今や我皇軍は連戦連勝向ふ処敵なく流石頑迷なる支那も漸く其の迷夢を醒さんとしつゝあるに至つたかに見えるのであります。我が國が之が為に払ひつゝある犠牲は実に莫大なるものがあります。

毎日之が為に流される忠勇義烈なる我將兵の血汐と之が為に捧げられる生命とは何程でありませうか。又之が為に費さるゝ戦費は実に一日一千万円を超えてゐると聞いて居ります。而してそれがどれ程我國の經濟に影響を及ぼしてゐるか計り知るべからざるものがあるのであります。是実に容易ならぬ困難であります。而して之が今後幾年続くか分からぬのであります。勿論最後の勝利は我々の疑はぬ処であります。其処に到るまでの過程は如何なるものでありませうか？支那は飽まで長期抗日を豪語して居ります。我々もその覚悟をしてゐなければなりません。即ち事態が如何に進展し、如何に長期に互るとも堅忍持久あらゆる困苦を克服せねばならぬ所以であります。

加之、四圍の状況は決して樂觀を許さないものがあるのであります。我國の真意を理解し真に同情を有する世界の強国もありますけれども、一方支那の逆宣伝に惑はされ、或は自己の利益に幻惑されて日本を侵略国であると宣告し、之に対して何等かの処置をとらんとする大国もあるのであります。更にソビエツトの如きは公然支那と提携して我國を敵視してゐるのであります。

如上の事態を考ふる時に今日の時局は更に容易ならぬものがあるのであります。我等は唯に戦勝の喜びに浸つて我國現下の状況を忘れてはなりません、今日我國の立つている危機を忘れてはならぬ。我等は実に非常の覚悟を有つて之にふさわしき生活を実行せねばならぬのであります。

抑も彼等は誤つて我國を侵略国と云つてゐるが、私は単なる侵略国ならばそれはたいした問題でないと信ずる者であります。由来侵略国は自己の利益の為に他國を侵略するのであるから不利益と思へば忽ち中止する丈である。然るに我國は天の大使命の為、東洋の平和確立の爲戦つてゐるのである。恐るべき大事業をやり始めたのである。非常な犠牲を払つて聖戦に従事してゐるのである。之は我國民に課せられた天の一大試練であります。我國

民は果して之れにパスするや否や、果して此事業を成し遂げるや否や、私はどんな艱難や苦痛を忍んでも必ず之を成し遂げねばならぬと信ずる者であります。故に今日此時局に当りて我々凡ての者が皆その心持ちになり協力一致時局生活を営まねばならぬと信ずる者であります。

我々は今は学生の身分でありますが矢張りかうした覚悟を持つてゐなければなりません。而して先づ第一に我々は此非常時に処する学生としての本分を尽さねばなりません。我々は我々の本分である勉強を飽まで真面目に為さなければなりません。又此非常時に適応せる訓練を行ひ規律を厳守する様心がけねばなりません。かくて心身の鍛練を一日も忽せにしてはなりません。之が非常時にふさはしい我々学生の時局生活であると信ずるのであります。

之を以て今日より初まる我國民精神總動員強調週間第一日目の題目時局生活の日の説明と致します。

〔東北学院時報〕一三四号 昭和十二年十一月三十日

二〇〇 D・B・シュネーダーの逝去

(昭和十三年十月五日)

〔前略〕

この年の十月一日、学校の執務室から帰宅の途上、シュネーダー博士は極度の胸部疼痛を覚えた。それは心臓発作の始まりであつた。夕刻までには博士は危篤に陥る。続く五日間というものは博士は激痛に苛まれ、ついに昏睡状態となつた。病床には医師たちが付き切りであつたが、そのうちには博士の長年の友人で、大学病院長であつた有名な熊谷博士も含まれていた。病気の知らせが伝わりと共に、見舞客の流れが引きも切らぬ有様であつた。彼らは何かの役に立つことを願ひ求めた。長い間、彼と労苦を共にした教職員たちが別れの手を握るために馳けつけた。マーガレットの言葉を借りれば、「彼らがパパの苦痛にゆがむ顔を目にするとき、彼ら自身の顔にも真実で深い悲しみの情が読み取られた」。こうした緊張の日々の間、ミセス・シュネーダーは、時としては不安のためほとんど我を忘れそうになりながらも、柱石のように勇気を保ち続け、来訪者ひとりびとりに謝意を表わすことを

忘れなかつた。十月五日、ついに静かな死が博士を訪れたが、博士の宮中席次のゆえに、逝去の報は普通の人のように直ちになされることなく、政府の公式発表によらなければならなかつた。それが外交礼式であつた。

〔後略〕

〔『シユネーダー博士の生涯』〕

二〇三 出村悌三郎「神学部合同問題に就いて」

（昭和十一年十一月一日）

神学部合同問題に就いて

出村悌三郎

第二章 強まる非常時体制

二〇一 E・H・ゾーグ書簡（キャッセルマン宛）

〔英文〕

（一九三五年一月二十二日）

二〇二 D・B・シユネーダーの神学部合同に對する見解

〔英文〕

（一九三五年）

多年我が国の伝道並に教育の為に尽瘁して来た米国各派の伝道局が、時勢の推移と経済上の変動と殊に我が国最近の異常なる躍進とに鑑み、主として日本の伝道は最早や日本教会に一任すべきであるという意見から、漸次我が国の宣教事業から手を引きつゝある事は我等の知る所である。

然るに我がリフオームド教会では、日本に於ける伝道事業の重要性を認め、必要のある限り事業を継続する事を決議した。併しながら、米国に於ける各派合同の趨勢と、リフオームド教会自体の財政状況を考へ、一般来出来るだけ経費の節減を計らんが為、重複したるが如き事業や、節約せらるべき冗費について調査討論を行つて来たのである。

昨年キャッセルマン氏が来朝の際、神学部合同問題について調査し、各方面の意見を徴し、殊に我が学院理事

會員並に神学部当局の意見に傾聴した。そして帰米後、出来るだけ我々の意見のある処を詳細に説明して、伝道局の諒解を求める様尽力することを約束せられた。

然るに、本年三月十一日附キヤツセルマン氏(伝道局幹事)よりミツシヨン代表ザウグ博士に宛て、大体次の如き手紙が到達した。即ち

東北学院神学部と東京の日本神学校との合同問題は極めて慎重に考究された。シユネーダー博士並にザウグ博士より具申せられた合同の得失に関する意見書をも読んで、此の問題討議の為、その梗概を提出し、又東北学院神学部内外の現状に関し意見書を發表した。本幹事は同時に東京日本神学校の組織及び将来の計画に関し、又同校々長との会見内容に関しても詳細に述べた。然るに今般伝道局は満場一致を以つて次の件を可決した。

「現在は東北学院神学部が日本基督教教会所屬日本神学校と合同するを以つて賢明にして機宜に適應する時期なりとす」而して、本幹事は本件に関する伝道局の態度をミツシヨンに説明し、且つミツシヨンより東北学院理事局に対し、同局が時機を見て可成近き将来に於いて東京の日本神学校と合同する事を考慮する様懇請すべき事を要

求せられた。

此の決議については、伝道局は其の全般に互り極めて慎重に考究したもので、余はミツシヨン會議に於いてシユネーダー博士が讀まれた声明書の全文を読み、又貴下が過日余に寄せられた二頁に亘る利害得失論とを讀了した。依つて伝道局は事実上ミツシヨン會議で論ぜられた全般に通曉したのである。而かも此の決議が通過したのには色々の理由があつたのであるが、以下の如きは其の重なるものであろう。

(A) 本伝道局は、日本の教会は可成近き将来に於いて自治自力で伝道をなすべきものである。而して此の目標は「教会」が自己の教役者を養成し且つ維持することに依つて達成せられる。神学教育を「日本教会」の手に置く事は此の目標に到着する須要なる一段階であると信ずる。

(B) 教会自体がその神学教育と公式關係を保持し、やがてその完全なる支配をなすべきである。之は此地に於いて既に真なり、依つて日本に於いても亦然るべしと信ず。

(C) 東北学院神学部の維持經營には現在相当の経費がかゝつてゐる。若し之が東京の日本神学校と合同すれ

ばそれによつて多大の節約をなすことが出来る。之については我々の財政状態に関する過日の通信を参照せられたい。(過日キヤツセルマン氏の通信に今年一月と二月はアメリカの此冬の悪天候の爲伝道局の収入にも大打撃を蒙り其結果此二ヶ月間に約六千ドルの不足を成したとあるのを意味するのである)此決議は合同に關して東北学院理事局が充分考慮するやう同局に示唆すべきことをミツシヨンに要求するもので命令ではない。本伝道局の決議(Decision)である。

是に於いて我が東北学院理事会は、事学院の将来に関する重大問題なので先般來該方面の意見を聴取参酌し、内外の情勢に鑑み、理事各自も亦沈思熟慮の上理事会を開く事三回、遂に左記の如き決論に到達した次第である。

昭和十一年七月廿一日臨時理事会記録

一、本学院神学部ト日本神学校トノ合同問題ニ付キ先ニ挙ゲラレタル調査委員ハ右両校ノ合同ヲ可ト認ム其ノ理由ハ大体左記ニ依ル

- 一、本学院目下ノ財政状態並ニ米國ニ於ケル財界ノ状況ヨリ考慮シ両者ノ合同ハ止ムヲ得ザルモノト認ム
- 二、此ノ際両者ノ合同ニ依リテ本学院本来ノ目的タル伝道者ノ養成ハヨリ有効ニ其ノ目的ヲ達成シ得ルモ

ノト認ム

(『東北学院時報』一二八号 昭和十一年十一月一日)

二〇四 神学部近況

(昭和十二年一月一日)

堀江 榮

○一月一日 午前九時より中学部講堂に於て拝賀式を挙行す。

○同十一日 部長校務を帯び東京に出張す。

○同十三日 教授会午後一時より開かる。

○同十四日 組合教会牧師額賀鹿之助氏の訪問をうく。

○同二十日 中村教会牧師稲垣氏來校せらる。「ヨハネ福音書の浄書」せられたるものを持参。教職員並本科生一同に披露せらる。

○同二十二日 雪中行軍のため八木山方面を経て長町教会を訪問。昼食を共にす。神学部最後の雪中行軍なり。

○同二十五日 前浪江教会牧師蓬田氏の來訪をうく。

○同二十九日 神戸日本基督教教会牧師馬場久成氏の力あ

る説教。午前八時より高等学部礼拝堂に於てあり午後一時より神学部教員室にてオールクリスチャンへの奨励、続いて札幌日本基督教教会牧師小野村林蔵氏の激励をうく。

○同三十日 午前九時より神学部教員室に於て馬場久成氏より「宗教々育に関する」講演あり。後自由懇談す。

○二月九日、教授会を開き左の決議をなす。

一、卒業試験 三月一日―六日

(本科生は同期日に学年試験施行)

一、予科試験 三月十二日―十九日

一、卒業式 三月十一日午後二時

○同十一日 午前十一時半より中学部に於て紀元節の式典を行ふ。引続き建國行進に参加す。

○同十二日 午前十一時より向山黒門下に於て卒業生送別会開催。

○三月六日 神学部分散会を催す。

一、聖餐式 正午 礼拝堂に於て

二、会食 教授生徒一同教員室に於て

三、分散の挨拶 出村院長より分散の挨拶あり、本科三年櫻井重秀君生徒を代表して答詞をなす。式後記念撮影をなしたり。(写真参照第一頁)

○同十一日 午後二時より礼拝堂に於て神学部、高等学部、中学部の卒業式をなす。

○同十五日 佐藤喬牧師来校せらる。

○同二十日 中学部教員佐藤栄蔵氏夫人の御葬儀宮城日本基督教会に於て行はる。

○同二十三日 教授会を午前十時より開く。

○同二十五日 日本神学校へ成績表、在籍簿、推薦書を郵送す。

○同二十九日、三十日、三十一日 神学部内一切のものにつき整理をなしたり。

○四月一日 図書の引継ぎを完了す。

○同二日 高等学部内への移転を完了す。

(『東北学院時報』一三二号 昭和十二年五月一日)

二〇五 高等学部学則変更認可申請書

(昭和十二年二月五日)

高学発第二三三号

昭和拾貳年貳月五日

東北学院設立者

財団法人東北学院團

文部大臣 林銑十郎殿

学則変更ノ儀ニツキ認可申請

今般本学院学則中第二条第五條第六條第七條變更並ニ第三章(第五十三條以下第九十五條迄)削除ノ上昭和十二年(新入生(昭和十二年四月入学者)ヨリ実施致度候條御認可被成下度左記書類ヲ具シ此段及申請候也

〔中略〕

学則變更理由書

一、東北地方ハ財力ニ乏シク四ヶ年ノ長期教育ヲ子弟ニ施スニ難ク修業年限ヲ三ヶ年トシ子弟教育ニ資セントスルニアリ

一、授業時数ノ増加ニ依リ三ヶ年制度トナシ現行四ヶ年制ニ劣ラザル効果ヲ挙ゲ得ル事

一、他ノ専門学校ト同一程度タラシメ以テ志願者ノ不利ヲ省カントスルニ有リ

一、神学部ハ昭和十二年四月以降之ヲ廃止ス

従来本院神学部ニ於ケル教育ハ統制上東京日本神学校ニ合併ノ上施行スルヲ時宜ニ適シタルモノト認ムルニ

依り之ヲ廃止ス

学則變更條項

今般本学院学則中

第二条 東北学院ニ高等学部神学部ヲ置ク トアルヲ

第二条 東北学院ニ高等学部ヲ置ク ト

第五条 高等学部各科ノ修業年限ヲ四ヶ年トス トアルヲ

第五条 高等学部各科ノ修業年限ヲ三ヶ年トス ト

第六条 高等学部生徒定員ハ文科第一部六十四名文科第

二部百廿名商科三百廿六名トス トアルヲ

第六条 高等学部生徒定員ハ文科第一部四十五名文科第

二部六十名商科四百十五名トス ト

第七条 高等学部各科各学年ノ学科課程及授業時数ハ次

表ニ依ル トアルヲ

第七条 高等学部各科各学年ノ学科課程及授業時数ハ次

表ニ依ル ト

決議書

財団法人東北学院理事会ハ昭和十一年七月廿一日

一、東北学院学則中第二条第五條第六條第七條變更ノ件

一、第三章(第五十三條ヨリ第九十五條ニ至ル)全部削除

ノ件
ヲ決議ス

昭和十二年二月五日

財団法人東北学院

理事長イー、エツチ、ザウグ 印

二〇六 中学部生徒定員変更認可申請書類

(昭和十四年一月三十一日)

中学発第二九二号

昭和十四年三月三十一日

東北学院中学部設立者

財団法人東北学院理事長

イー、エツチ、ザウグ 印

文部大臣男爵 荒木貞夫殿

生徒定員変更ノ儀ニツキ認可申請

今般本学院中学部生徒定員ヲ一千名(従来六百名)ニ変更ノ上昭和十四年度新入生(昭和十四年四月入学者)ヨリ実施致度候条御認可被成下度左記書類ヲ具シ此段及申請候也

(中略)

生徒定員変更理由書

本学院中学部入学志願者八年々増加シ募集人員ニ対シ三倍乃至四倍ニ達スル状況ニシテ、是等多数志願者ノ希望ヲ比較的多ク満タシ一ハ入学難ノ緩和ヲ図リ一ハ中等教育ノ普及発達ニ貢献セントスルニ有リ。

授業料算定基礎表(自昭和十四年度 至同十八年度)

年度別	金額	内	訳
昭和十四年度	四、三〇〇円	一人年額 五五円	新制度者 二〇〇人 旧制度者 五八人
全 十五年度	四七、五〇〇円	全	新制度者 四〇〇人 旧制度者 四〇〇人
全 十六年度	五〇、八七五円	全	新制度者 六〇〇人 旧制度者 三三〇人
全 十七年度	五三、八〇〇円	全	新制度者 八〇〇人 旧制度者 一七三人
全 十八年度	五五、〇〇〇円	全	新制度者 一、〇〇〇人 旧制度者 —

生徒数並予定数調(自昭和十四年度 至同十八年度)

備考	第五学年		第四学年		第三学年		第二学年		第一学年		年度別
	全	額	全	額	全	額	全	額	全	額	
	全	一、二四〇人	全	一、三九〇人	全	一、五三〇人	旧制度者 一七二〇人	新入者 二、〇〇〇人	全	昭和十四年度	
	全	一、三九〇人	全	一、五三〇人	旧制度者 一七二〇人	新入者 二、〇〇〇人	十四年度入学者 二、〇〇〇人	全	十五年年度		
	全	一、五三〇人	全	一、七二〇人	旧制度者 二、〇〇〇人	十四年度入学者 二、〇〇〇人	十五年入学者 二、〇〇〇人	全	十六年度		
	全	一、七二〇人	旧制度者 一、七二〇人	十四年度入学者 二、〇〇〇人	十五年入学者 二、〇〇〇人	十六年度入学者 二、〇〇〇人	全	十七年度			
	全	一、七二〇人	全	一、七二〇人	全	一、七二〇人	全	十八年度			

現在生徒数調

学年別	A組		B組		C組		計
	全	額	全	額	全	額	
第一学年	全	五七〇人	全	五八〇人	全	五七〇人	一、七二〇人
第二学年	全	四五〇人	全	五三〇人	全	五五〇人	一、五三〇人
第三学年	全	五一〇人	全	四五〇人	全	四三〇人	一、三九〇人
第四学年	全	五〇〇人	全	三七〇人	全	三七〇人	一、二四〇人
第五学年	全	四九〇人	全	三七〇人	全	三五〇人	一、二一〇人

最近五ヶ年間に於ケル入学志願者数。入学者数表

年度別	種目		
	入学志願者数	入学者数	入学歩合
昭和九年度	五九四	一五一	〇・二五
同 十年度	五三〇	一五三	〇・二九
同 十一年度	五八二	一五五	〇・二六
同 十二年度	五八一	一八一	〇・三一
同 十三年度	五一七	一七二	〇・三三

第三章 強まる非常時体制

生徒定員増減表（朱書ハ新制度者数墨書ハ旧制度者数）

年度別	学年別	第一学年	第二学年	第三学年	第四学年	第五学年	計	備考
昭和十四年度		二〇〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	六八〇	新制度者 二〇〇 旧制度者 四八〇
同 十五年度		二〇〇	二〇〇	一一〇	一一〇	一一〇	七六〇	新制度者 四〇〇 旧制度者 三六〇
同 十六年度		二〇〇	二〇〇	二〇〇	一一〇	一一〇	八四〇	新制度者 六〇〇 旧制度者 二四〇
同 十七年度		二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	一一〇	九二〇	新制度者 八二〇 旧制度者 一〇〇
同 十八年度		二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	一、〇〇〇	新制度者 一、〇〇〇 旧制度者 〇

増加人員表（自昭和十四年度 至同十八年度）

年度別	種目	新制度ニ依ル募集人員	旧制度ニ依ル募集人員	増加人員	増加人員ニ依ル増加額
昭和十四年度		二〇〇	二二〇	八〇	四、五六〇円 授業料四、四〇〇円 入学金 一六〇〇円
同 十五年度		二〇〇	二二〇	一六〇	八、九六〇円 授業料八、八〇〇円 入学金 一六〇〇円
同 十六年度		二〇〇	二二〇	二四〇	一三、三六〇円 授業料 一三、二〇〇円 入学金 一六〇〇円
同 十七年度		二〇〇	二二〇	三二〇	一七、七六〇円 授業料 一七、六〇〇円 入学金 一六〇〇円
同 十八年度		二〇〇	二二〇	四〇〇	二二、一六〇円 授業料 二二、〇〇〇円 入学金 一六〇〇円
計		一、〇〇〇	六〇〇	四〇〇	二二、八〇〇円

宮普一号

私立東北学院中学部設立者

財団法人東北学院

昭和十四年一月三十一日申請生徒定員変更ノ件認可ス

昭和十四年三月四日

文部大臣 男爵 荒木貞夫 印

教第三四九四号

昭和十四年三月八日

宮城県学務部長 印

私立東北学院中学部設立者

財団法人東北学院理事長殿

生徒定員変更ノ件通牒

予テ申請中ノ標記ノ件今回別途認可相成候処校舍ノ増改
築ニ就テハ既定計画ニ基キ万遺憾ナキヲ期スル様文部省
普通学務局長ヨリ通牒ノ次第モ有之二付蔽ニ励行相成度

二〇七 高等学部勤勞奉仕の報告

(昭和十四年九月十六日)

勤勞奉仕報告

高等学部乗馬部 梅 良雄

自 八月二日 至 八月十一日

於 北海道札幌市外真駒内庁立種畜場

時!!興亜の声しきりに国民は東亜新秩序の建設といふ一大命題が課せられ、国民の凡ては此の国家的大事業に向つて経済的、文化的政治的思想的等凡ゆる部面に於ける一元的統制と共に其等各部面との緊密なる聯関を保ちつゝ此の光輝ある目標の達成に一路邁進しつゝある際、国家が我々青年生徒の自覚と奮起を要求するも当然のことであらう。

今夏学校の休暇は鍛錬を主眼とするといふ指令あり、外には全国から選ばれた青年が滿支に勤勞報國隊として繰出すあり、内は統後の各種勤勞作業に従事するあり各地に微笑ましい勤勞風景が現出したが我が乗馬部も部員同志の勤勞作業に従事せんとの希望と抱負とに燃え部長、鈴木、三品、月浦各先生の非常なる御尽力により場

所北海道庁立真駒内種畜場 参加部員は梅、池田、若生、内ヶ崎、菊地、先輩菅原氏と決定した。場長は中学部先輩中城氏、渡道前文書を以て従来入場せる学生が相当不成績なる為こゝ数年学生の入場勤労に従事するを拒絶して居たが故に単なる遊山気分避暑気分て来ては困る事、其他事細かに御注意あつたので決して御期待に背かない様覚悟す。

七月三十一日夜、一行六名、鈴木先生他学友に見送られ、一路車は我等の希望を乗せて走る。翌八月一日夜アカシヤの並木に迎へられ札幌の土を踏み、ついで市外なる目的地の下宿に落付く。翌二日は午前五時というに元氣よく起床、愈々今日からやるぞと思ふと腹の底から力が湧き上つてくるやうだ。定刻六時には種畜場本部に集合耕作の方に従事する事になり主任の指図で先づ玉蜀黍畠の除草にかゝる。玉蜀黍の根本を切らないやうに除草機を手際よく使ふのにはなかく神経を使ふ。限らないと思はれるやうな長い一畝の除草が終る頃中城場長わざ／＼現場に来られ御訓示に接し、我等はたゞ本分を全うすべきを誓ふ。午前九時から十五分間、正午から一時間、午後三時から十五分休憩がある。毎日午前六時から七時迄心をゆるめる事なく労働に従事、風呂に飛込んで塵と

汗とにまみれた体を洗ひ、足腰をのぼした時流石に疲れを感じる。作業は第一日の如き除草或は麥の乾燥或は二頭立の馬車に山の如く乾草を積み、これを運搬倉庫への詰込、お手のものゝ耕馬の手入、多くは慣れぬ仕事に平常我々の練習以上に亦学校で行ふ勤労作業以上に労働力を消耗する事甚だし。疲労も三、四日目頃頂点に達し其後は漸次恢復好調子となる。斯くして十一日迄十日間額に汗し、炎天にさらされ、黒くなりつゝ労働の神聖を味ふ。氣候は稍大陸的朝夕の涼味は格別、日中は流石に暑いが涼風吹き凌ぎ易いものがある。風変りな赤塗りの牛舎群れ遊ぶ牛馬緑なす農作物やポプラの並木、トラピストの女を思はず様な働き人、若い者にとつては相当ロマチツクな衝動にかられる。我々は従来の学生の轍を踏まないやう兎に角十日間一切の感傷を捨て働いた。将来とも我が乗馬部員が如斯経験を是非積れる事を切望したのが為に一層責任を感じてやつた訳だ。来年我々の後輩が再び此の地を訪れ我々の果し得なかつた総てを充して呉れるだろう。幸に一行中二年内ヶ崎、菊地の参加は彼等にとり最も刺戟となり激励の泉となる事と信ずる。乗馬部最初の企てたる十日間の勤労作業、省て誠に得がたい経験であつた。粗食と思つたものが何ものにもかへがた

い美食となり充分に体を養つて呉れる。土を愛し家蓄を愛する生活、それは人間をしてより堅実なものにしてくれる。そしてそれを対象とする人々に接して、その純にして労働を楽しむ尊い姿、自然にさからはず、自然にとけこんであるその姿、本当の人間の姿に打たれる。斯如き生活に於て我等はあの有名なミレーの「晩鐘」の絵がまたとない身近いものに感ぜられた。あれが人間の偽りのない純な自然の姿である。それは大地の恵み、自然の愛に対する静かなる感激の場面である。土に還り土に親しむことこれを除外して青年の体位の向上、堅固なる身心を希望するは木によつて魚を求むるにも等しい。

すがくしい早朝の大気を胸一杯に吸入し、明日の希望と理想に燃え乍ら或は新しい国家の躍進を念じつゝしつかり大地に踏付け、今や山際より躍り出さんとする旭日の燦然たる光を拝する時、天地に漲る生気を全身に感ずると俱に、神国日本の全貌を見出し得るであらう、其処にこれから将来するであらう凡ての複雑難苦な問題を解決する微妙なるキイポイントを完全に把握する力が内存するのである。

堅固なる精神と頑健なる肉体あつてこそ教育も始めて充分の効果を齎すものである事は当然の事実である。ま

して我等青年に課せられた東亜新秩序建設の大事業はかゝる両条件の所有者たる人材を要求して居るのではなからうか。我等は全く始めから終りまで親しみ睦び愉快にそして実際一日一日を感謝の中に送つた事を誇りとする。願くは此の氣持を今後とも長く各方面に生かしたい。

終りに場長中城氏の何から何までの御心遣ひ、御出張という日に不拘遠く放牧地へ遠乗させてくれた御心情或は突然の訪問を心よく迎へて呉れた函館の佐藤支部長、函館駅の大森先輩により不案内な我等の旅行上如何程か便宜を与へられた事か、その御親切さては旭川の三浦、郡山両先輩の親身も及ばざる御取扱身にしみてうれしく御礼の言葉も無い。先輩ならではの感深く、学校当局は勿論部員一同にも一々其の様を報じて感謝の念をもちつゞけて居る事を附記して筆を擱く。(九月十六日)

(『東北学院時報』一四五号 昭和十四年十月一日)

二〇八 出村悌三郎「宮城県当局の基督教主義学校に対する要望」

(昭和十五年七月二十六日)

宮城県当局の基督教主義学校に対する要望

出村悌三郎

県の教育課より予め通牒あり、先月十八日学院中学部視察の爲め松浦学務部長、是技県視学、鈴木属を随ひ中学部に来院せらる。松浦部長来任以来初めての視察なりし故、学院の創立、歴史伝統等につき説明を申し上げ且つ現在の状況につき一通り報告をした。学務部長は校内設備其他につき視察をされ、次ぎに各教室の授業を參觀しました。聖書の授業を觀られ、使用して居つた聖書教科書に特別の注意を払はれた様であつた。參觀終り院長室にて学院教育の一般方針や、非常時局に於ける特別の指導等につき種々質問あり、之に対して学院が現在行ひつゝあることを報告した。其折聖書の授業に用ゐつゝある教科書は文部省の検定を経たものか、或は認可を得たものかとの問に対して中学校の教科目には聖書などはなき故に文部省の検定などは勿論ないが、此教科書は中等程度

の基督教主義学校や、日曜学校の爲めに基督教教育同盟の編纂したるものにして、勿論文部省の承認を得て全国の基督教主義指定学校の多数が、重に参考用として使用して居るもので、普通の中学校教科書とは其趣を異にして居るものであることを答へたるに了解して歸られた。

吾々との話はそれきりであつた。其翌日学務部長は宮城女学校を視察され、同様のことに注意されたと云ふことを聞いた。其後間もなく東京諸新聞の地方版に於て、県当局の談として、基督教主義学校は文部省の法規を無視し非常時局にそぐはぬ教育をして居る。且其指導精神に誤りがあるから宮城県では率先して之が是正を計らんとしてをる等等と書き立てた。余は其記事の余りに事実と相違して居るのでこれが世間に対して誤解を起さしめ、殊に学校関係者に対する悪影響の大ならむことを憂ひ、県当局は果して其様な発表をなされたかを質したるに対し、県では其様な発表をしたのではない。あの記事は記者の主観を混じて居ることが多いので、これは県にも学校にも相当迷惑を及ぼしたと思ふ。併し県として監督の責任上あることにつきては文部当局の指令を仰ぎ、其指令に基づいて県としての善処をする積りで其事が決定次第基督教主義諸学校の首脳者と懇談を遂げ万事を円満妥当

的に処理したいと思うてをるから其時まで待つて呉れとのことであつた。先月二十六日に此問題につき協議したから学務部長室に参集せよとの通牒を受けたるを以て、余は同日其処に出頭した。県側では松浦学務部長、金内教育課長、是技県視学の三人で、我々は宮城女学院のクリーテ校長、尚綱女学校の高橋校長、仙台高等女学校長代理と余の四名であつた。金内教育課長はこの集りを開くに至つた訳と、県が基督教主義学校に要望して居ることを卒直に述べられた。其談の要は左の如きものである。

此度学務部長が基督教主義の学校を視察し、又其結果として本日此懇談会を開くに至りたるは何も新規な事態が発生して其緊急処置を講ずる必要が起つたと云ふのではない。之は云はば昨午文部省が全国的に綜合視察を行ひ之に基いて適切な処置をなさしむべく各学校の注意を喚起した。其善後策の継続であるので、前に文部省は県に対して綜合視察の結果を纏め公立学校、私立学校、女学校夫れに必要なる注意を与ふべきこと、又基督教主義学校に対しては必要なる注意を与ふべきことを指令された。学務部長は之に基いて視察をなし、且文部省の意向を問はれたことが新聞紙上で種々なる誤伝を起して各

方面に悪影響が起りさうであるから、此問題を成るべく早く片付けて無益の訛伝を除くと云ふことが一つと、それに此際県庁側の要望を卒直に伝へて非常時局下にある我国の教育に協力されたい。然らば県の要望する所は何かと云へば夫れには三個条ある。先づ一般方針から云へば我国に於けるあらゆる学校の教育目的の中心点は皇國民の練成と云ふことである。従つて基督教主義学校も之を中心とせねばならぬ。宗教の信念を以て教育を行ふことは特殊学校の権利であり、使命であるだろうが、宗教を宗教の爲めにするのでなく、学校教育としては宗教も矢張り皇國民練成と云ふ第一の目的の手段とせねばならぬ。此方針に基いて県は基督教主義学校に要望する三個条の第一は学校が宗教的礼拝をする前には必ず国歌斉唱、宮城遙拝等を行ふこと。第二は未だ実行せざる学校があるならば御真影を奉戴すべきこと。第三は聖書は之を教ふるは差支ないが之を修身科のうちに入れず、修身は皇國民養成の最も大切な科目であるから専ら國民道徳を教ふべきこと、而して聖書は課外として教ふべきこと、出来得べくんは随意科とすること、併しそれは絶対に必要でないがたゞ科外として正科と区別する必要がある。以上三個条は必ず之を實行して貰ひたい。要はかく

の如きことは法規とか強制命令と云ふ様なことでなく、自肅自発的に国体の明徴、日本精神の昂揚を目指して、宗教学校の本来の使命の全せられんことを望むと云ふことでありました。之に対して余はかく答へて置いた。学校教育の目的が皇国民練成にあることの御方針は我学院の心から共鳴賛同する所で、国体の明徴日本精神の昂揚は我学院の造次にも顛沛にも忘れざることである。之を實現する方法として宗教的信念によらんとするのであるが、決して其本末を顛倒することはないつもりである。従つて県の要望さるゝことは吾々には已に既に悉く実行してをることである。例へば礼拝前に於ける宮城遙拜の如きは毎日之を行つて居る。御眞影奉戴の如きは全国の基督教主義学校に率先して之を戴いて居る。従来は奉安室に安置し奉りたる御眞影は今回更に新に奉安殿を建立することになつて已に之に着手して居る。若し夫れ聖書の授業は以前に文部省の示唆に従ひ修身科のうちにに入れて置けとのことで修身科の一部として教授し来りたるので、今度之を引放して聖書として教ふることは寧ろ素志であつたから、何等の異論はなく之を正課とせず科外として教ふるとも何も差支えなく唯随意科とするときは生徒の不規律を来す原因となるからそれは随意科とは

なし難し。要するに県の要望せらるゝ事は我学院にとりて一として新しき事ではなく已に実行し来りたる所である旨を告げ県側の了解を得たのであつた。

(『東北学院時報』改二号 昭和十五年九月一日)

二〇九 昭和十五年度東北学院学事報告

(昭和十六年五月十九日)

〔前略〕

一、学生生徒

本学部生徒ヲ十三學級ニ編成(商科各學年各三學級、文科第一、二部各二學級)シ各學年修身國民道德等ノ課業ヲ授ケ國體ノ本義ヲ認識セシムル外、國民精神總動員下ニ於ケル覚悟ヲ自覚セシメ尽忠報國ノ念ヲ涵養シ以テ生徒ノ本分ヲ全カラシメン事ヲ期ス

其他時々名士ノ講演講話等ニ依リ時局ノ認識、思想上ノ善導ヲ計リ之ガ徹底実行ヲ図ランガ為メ生徒主事生徒監等ニ依リ在校中並ニ放課後ノ行動等ヲ監督指導セシム各教科長各学科担任教員協力ノ上徹底改善ニ意ヲ注

ギ生徒各自モ亦相互精勵研讀ニ努力シ居ルヲ以テ其ノ
進歩顯著ナルヲ認ム

学友会ヲ改組シ報国団ヲ設ケ鍛練部、国防部、文化部、
生活部ヲ設置

鍛練部ニ

柔道班、剣道班、弓道班、野球班、蹴球班、ラグビ

ー班、庭球班、競技班、山岳班、体育班

国防部ニ

射撃班、馬術班、滑航空班、銃後班、防空班、

文化部ニ

興亜班、修養班、商研班、英語研究班、写真班、書

道班、広告研究班、史学研究班、音楽班、新聞雜誌

班、弁論班

生活部ニ

尚風班、厚生班

ヲ設ケ學術的方面並精神的方面ノ研究ニ依リ夫々研讀
努力、斯道上ノ向上發展及国策ニ順応發達ヲ図ル

〔後略〕

二二〇 同窓生戦没者の慰霊祭

(昭和十六年十一月八日)

本院出身戦死陣歿者 慰霊祭(第二回)

十一月八日午后二時より礼拝堂に於て第二回出身者慰
霊祭を行つた。会場狭隘のため生徒は高等学部の一二年
其他は両学部共各学級より二名宛の代表者を参列せし
め、遺族、教職員及生徒の順に着席正面に英霊の写真を
安置しその下に供物、壇上、壇下に各老対の菊花を供へ
清楚な裝飾に相応しき極めて質素な併し最も誠実な祭祀
を行つた。式の次第は

一、宮城遙拜

二、君が代斉唱

三、讚美歌 四九三

四、聖書朗読 詩篇九〇

五、祈禱

六、奏樂

七、追悼の辞 学院長(前項)

八、黙禱

九、遺族挨拶

十、主催者挨拶

式後院長室で茶菓を呈し、供物を分配して四時過ぎ散会。遺族各位が或は石巻或は栗原郡相当遠い処から来会せられたのは誠にありがたかつたが多忙の際準備其他不行届の点が多かつた事と恐縮してゐる。ただ晩秋の好天氣に恵まれたのはせめてもの心やりで英靈の加護と秘かに感謝してゐる。尚此度祀られた英靈は左記の通りである。

矢本平治、丹野重雄、石堂輝雄、遊佐勝夫、菊地正一、佐藤良雄、守屋三郎、佐伯義雄、皆川潤、室本六郎、大竹治、佐藤親治郎、川島孝一、永澤金六、新沼初蔵、井上六郎、小野萬助、齋藤清香、小松芳雄、加藤彌男(昇天順)

祭 詞

惟レハ今事変ノ勃発以来茲ニ星霜四年有余我カ勇武ナル皇軍將兵ハ海ニ陸ニ将タ空ニ勇戦奮闘縦横ニ長驅シ或ハ北ニ或ハ南ニ戦ツテ捷タサレナク攻メテ抜カサルナク常ニ赫々タル戦果ヲ取メ来リタルハ固ヨリ大御稜威ノ然ラシムル所ナレトモ又我カ忠勇ナル將士ノ奮闘ニヨル賜ニシテ銃後国民ノ齋シク感謝ニ堪ヘサル所ナリ
然リト雖モ光榮ノ存スル所常ニ苦難犠牲ノ伴フアリ不

幸此ノ間ニ於テ国難ニ殉セラレタル幾多ノ英靈ニ思ヒ至レハ轉タ哀悼ノ念禁スル能ハサルモノアリ

曩ニ我等ハ昭和十三年十一月十二日本院出身戦死陣歿ノ英靈故陸軍大尉熊谷儀蔵君外七柱ノ慰靈祭ヲ営ミ聯カ其ノ忠魂ヲ弔フ所アリシカ本日再ヒ茲ニ奠ヲ設ケ故丹野重雄君、菊地正一君、矢本平治君、石堂輝雄君、遊佐勝夫君、守屋三郎君、佐伯義雄君、佐藤良雄君、皆川潤君、佐藤新次郎君、大竹治君、室本六郎君、永澤金六君、新沼初蔵君、川島孝一君、井上六郎君、小野萬助君、小松芳雄君、齋藤清香君、加藤彌男君ノ二十柱ノ忠靈ヲ迎ヘ恭シク其ノ忠烈ヲ偲ヒ其ノ勲功ヲ敬仰シ謹ミテ満腔ノ哀悼ヲ捧ケントス

顧フニ英靈夙ニ聖旨ヲ畏ミ大君ノ御楯ニ任シ征野ノ山河ニ身ヲ委ネシヨリ櫛風沐雨幾日月誓ツテ骨肉後顧ノ憂ヲ忘レ只管困苦欠乏ニ耐ヘ或時ハ縹渺タル江水ヲ涉リ或時ハ嵯峨タル峻險ニ攀チ或ハ朔北ノ野ヲ征シ瘴熱ノ地ニ戦ヒ砲煙ヲ浴ヒ彈雨ヲ冒シ一意専心任務ノ完遂ニ死力ヲ致シ遂ニ人事ノ限リヲ尽クシテ天命ニ殉セシモノナリ嗚呼壯烈鬼神ヲ泣カシムルモノト謂フヘキナリ

人世ニ生レテ誰カ父母ナカラン誰カ兄弟ナカラン誰カ夫婦ナカラン水漬ク屍草生ス屍ハ固ヨリ期スル所天意ノ

溟々又測ルヘカラスト雖モ思ヒ一タヒ此処ニ至ラハ誰カ
無量ノ感ニ咽ハサルモノ有ラン誰カ哀悼ノ情滂沱タラサ
ルヲ得ン

遮莫レ今ヤ護国ノ神トナリ遙カニ天翔リ吾等ノ上ニミ
ソナハシ給フ屍ヲ馬革ニ包ムハ武夫ノ本懐トスル所況ン
ヤ忠孝一本ハ我カ国道義ノ根本ニシテ君ニ仕ヘテ尽忠ノ
大義ヲ全ウセルハ其ノ家門ニ移シテハ必ス純情ノ孝子タ
ルニ背カサルヲヤ

今ヤ諸君ノ忠誠武烈ニ依リ興亜ノ聖業着々トシテ其ノ
成果ヲ挙ゲ完遂ノ日亦期シテ俟ツヘキモノ有リト雖モ而
モ未タ是カ有終ノ美ヲ遂ケタルニハ非ス加フルニ複雑多
岐ナル国際情勢ハ前途猶ホ幾多ノ波瀾ヲ孕ミテ恰モ皇國
隆替ノ関頭ニ立ツノ概アリ此ノ時ニ際シ山野錦ヲ彩ル秋
冷ノ候ヲ選ヒ本院出身戦死陣歿ノ英靈ヲ祭り其ノ忠魂ニ
鑑ミ其ノ遺烈ヲ継キ一億同胞ノ結束ヲ固クシ前線銃後相
戒メ大東亜建設ノ大業達成ニ邁進セントス

希クハ諸英靈永ク靖國ノ神ト鎮マリ国家百代ニ廟食シ
国民ノ龜鑑ト仰カレ祖国ノ嚮フ所国民ノ趨ク所ヲ明カニ
照鑒シ賜ハラントトラ

昭和十六年十一月八日

東北学院院长 出村悌三郎

〔『東北学院時報』改九号 昭和十六年十二月
一日〕

第四章 存廢の危機に立つて

二二一 兵式教練と東北学院

(大正十四年五月十日)

兵式教練と我が学院

時事問題だが決して可否の議論を云ふのでは無い。国
家が要求する此問題である以上我々の学校でも喜んで実
施しなければ、在学生も卒業生も實際に不利益を被るの
だから、其処から考へても実施せねばならぬだろう。こ
の問題に付いて東京の基督教々育者(青山学院、明治学
院、その様な基督教主義の学校の理事者)石川、鶴崎、阿
部、都留、杉浦、田川、水蘆、藪内等の諸氏が、二月十

四日午後三時から。文部省督学官矢野貫城氏を招じて色々懇談の結果、明かになつた条項として左の様なことを「基督教聯盟三月号」に出して居る。吾人の心すべきことと思ふから、茲に転載して我が学院の生徒及同窓諸君に、一応見て頂くことにした。

一、新設の学科は「兵式教練」と称し「軍事教育」と言はず。普通に軍事教育と称するは文部省の考ではない。

二、兵式教練を強制するのは官公立中学校師範学校及び徴兵猶予の認定ある私立中学校、猶予の認定なき学校は自由、又専門学校も自由。

三、此の教練を課した学校の卒業者に対しては現役年月を左の通り短縮する。

(イ)中学校出身は一年、(ロ)専門学校は十ヶ月、(ハ)師範学校は五ヶ月

四、教練時間は一週二時間位の予定、尤も一年に一度四日乃至五日間の野外演習を行ふ教科書として「野外要務令」を用ふ。

五、学校に配属せしむべき士官は中等学校へは尉官、専門学校へは佐官を派遣する様になる。それらの佐尉官は寧ろ陸軍に於て中流以上の人物で、青年の思想を理解する人達であるらしい。尚陸軍側では二年乃至三年

位にして更迭せしむる意向らしいとのこと。

六、兵式教練の課目は文部省と陸軍省と打合はす管爰に甚だ面倒なのは採点である。若し之を教練の教官即ち陸軍側の意見に一任して了ふと或は面白からざる結果を来す事はないか、若し学生にして兵式教練を忌避するやうなことがあるか、又は教官の覚え芽出度ない者があると、其の学生のうち点数は自然悪いと想像される。其の得点が及第点に達しないと兵式教練一科のため遂に落第の浮き目を見ることになる。そんなことで、は困るから適当な方法を講ぜねばならぬと云ふので、目下の所では兵式教練の得点が非常に悪い者には、陸軍現役年限短縮の特権を与へないことにし、他の学科が悪くない限り卒業せしむることになつて居る。

此の外に二項目あるけれどもそれは学校長の権限に付けるものなので、学生生徒には直接関係がないから此処には略すことにする。尚附言して曰く「懇談の結果として兎に角この企ては、其の趣意その方法に於て、必ずしも軍国主義的のものとは思へない。ただ之が實際の如何は、今後の経過に徴するの外はないのであるから、できるだけ文部当局の苦心を諒とし其の趣意を実現するに至らんことを望む」云々とある。以上の項目中吾々は第三項、

第六項に尤も注意をせねばならぬと思ふ。

(『東北学院時報』六〇号 大正十四年五月十日)

二二二 高等学部東亜研究会『会報』序文

(昭和十四年二月二十八日)

序

亜細亜の黎明！民族覚醒の鐘は鳴り、幾久しく眠れる東亜民族の和衷協同は喚起された。日本民族は目をあげて亜細亜を見、自己を反省し、そして世界を批判した。作為と偽瞞と不正は歴史の嚴肅さの前には儚なくも泡影と化し、永遠に栄えるものは日本民族の創造的仁愛である。

荒寥たる亜細亜民族の惨状を見よ。搾取と破壊は東亜同胞の血を吸ひて熄まず。而も尚彼未だ之を悟るを知らぬ。皇国日本の大慈悲、心は遂に世界の混乱怒濤の真只中に、憐むべき彼が頭上に破邪顕正の聖剣を振つた。東亜十億民生の安居樂業こそ建国精神八紘一字の大理想の顯現である。今や東亜新秩序建設の歴史必然的使命を担へる日本民族には一刻の偷安も一瞬の逡巡も許されぬ。道

は一つ、在るは唯前進のみ。前途如何に荆棘多くとも道は開かれねばならぬ。

我等は茲に祖国日本の先駆となりて、蹶起せんとす。友よ！俱に邁進せん新東亜の建設に。

興亜三年二月

東北学院高等学部東亜研究会

(『会報』一号 昭和十四年二月二十八日)

二二三 出村剛「御親閲拝受の光栄に浴して」

(昭和十四年五月二十二日)

御親閲拝受の光栄に浴して

出村 剛

現役将校学校配属令制定十五周年を記念する学生生徒三万五千の御親閲式は初夏の空爽かに風薫る五月二十二日午前十時畏くも天皇陛下の御親臨を仰ぎ、事変下に入意義深く挙行された。吾校は第五集團第一大隊第二十中队に隸属され、八谷弘中隊長の指揮に従ひ、二十一日午前五時三十四分上野着、同午前十時一先づ駅前宿舎に休み、諸般の準備にかゝる。やがて一同明日の式に参列す

るため予行演習を行ふことになり、日比谷公園に参集した。各郷土部隊は揃ひの国防色に凛々しく各校校旗を先頭に堂々分列行進し、宮城前広場に集合、午後四時演習終了し、式後光栄に輝く御親閲拝受章授与式があり校旗の頭上に燦として附しこの日の榮譽を永久に残した。その後各校職員生徒各一名宛の代表は神田一橋共立講堂に於ける記念講演会に出席し板垣陸相、荒木文部大臣の講演をきゝ感激にみちつゝ帰路に就き同夜は何れも早く就床光栄の日を前に安らかな夢路に入る。明くれば二十一日。今日こそは光栄の日である。一同早朝より服装万事些細の点まで落ちなく準備し前日同様に日比谷公園に参集す。伝統の校旗を捧げた旗手を先頭に山高唱、モーニングの教諭、軍服の教官、さらに生徒九名が一校十二名宛一列縦隊に並び勇壮なる軍楽隊の裡に歩武堂堂薫風そよぐ宮城広場に初夏の陽光を受け午前九時式場に入り、肅然と陛下の臨御を待ち奉つた。やがて天皇旗燦として陛下には御乗馬白雪に召され出御遊ばされ軍楽隊の吹奏する「君が代」の奏楽裡に式場玉座に御著あらせられた。この時総指揮官の命にて大集団は喇叭啾唳としてひゞき軍楽隊の勇壮なる行進曲に順次行動を起し我が校の誇りを面上に輝かして歩武堂々と行進し畏くも陛下の御傍を

頭右して一同玉座に対し奉り尽忠の赤誠を誓つた。この間約四十分陛下には終始御起立拳手の礼を給はつた。この感激は永へに忘れ能はぬことである。かくて天機いと麗はしく宮城に還御遊ばされた。吾々一同陛下の馬上の御姿の二重橋上に於ける神々しい御様子を拝し奉り滅私奉公一死報国の念に打たれぬものはなかつた。やがて午後一時我が部隊は市内を行進し明治神宮に参拝して捧銃を以て敬礼明治大帝の御前に赤心をこめて祈願し奉つた。参拝を終へた後一同再び宿舍に帰り、午後十一時五十五分上野発にて出発、翌二十三日午前九時仙台着母校教職員生徒一同の出迎へを受け一同御親閲拝受章に對し敬礼の後うやくしく之を奉納した。この晴の光栄に對して吾々一同深く心に期する処あり以て陛下の御恩の万分の一に報ひ奉るべき決心をいよく強めたのである。尚中学部よりの名譽の参列者は出村剛部長、鈴谷一男、生徒は五年生千葉豊壽以下九名である。(高等学部は母校近事参照)

（『東北学院時報』一四四号 昭和十四年七月一日）

二二四 配属将校質問事件

(昭和十五年五月十七日)

東北学院配属将校の基督教神観に関する質問問題

仙台市南六軒丁所在東北学院(日本基督教教会所属)配属将校歩兵大佐安達保蔵は、本年五月十七日同学院高等学部文科三年生に対して、「基督と天皇陛下とはどちらが偉いか。」との質問を行ひ多少問題を醸せる模様なるが、其の状況左の如し。

(イ) 配属将校の質問 五月十七日安達配属将校は自己の担任教練を高等学部文科三年生に対し授業(当日雨天の為室内にて授業)中、同学生等の思想動向を打診せんとして先づ基督教信仰者及受洗者を尋ねたるに数名あり、次で之等数名の学生個人を指名して順次「基督と天皇陛下とはどちらが偉いか。」との質問を発したるに、右学生等は質問の意外にして且出題者の真意に疑問を抱き孰れも「本問題は余りにも重大に付書面答申にせられたし。」との答を為したる模様なり。

(ロ) 学生の態度 右質問を受けたる学生等は「斯る質問を發して吾々を試さんとするは輕卒且非常識なり。」と

て著しく反感を抱きたるものの如く、反撥的に欧州の戦局及時局問題に関して別記の如き質問を發し、又それに対する配属将校の答をも「何等明答を与へ得ず。」との揶揄的態度を示せる模様にして、その為双方昂奮して不快なる授業に終れり。

別記

学生 「スカンヂナヴィヤに於ける連合軍の敗戦は如何なるためか」

大佐 「よく知つて居ない」

学生 「蘭印問題に対する有田外相の声明は各国に対してどの程度の効果があつたと思ふ」

大佐 「良かつたと思ふ」

学生 「政府で謂ふ新東亜の建設と云ふ意味に就ては、大体抽象的な言葉では知つて居るが、未だ判然とは解せないから具体的に説明を乞ふ」

大佐 「神ながらの道で進んで行くべきであつて、勿論小亜細亜全部が含まれると思ふ」

(イ) 学院当局の対策 本問題を知得せる学院当局は、問題の表面化を憂慮し密かに穩便終熄策を講ずる所ありたるが、本問題に関し同院高等学部学生主事佐々久は別記の如き言動を為せり。

別記

去る十七日金曜日のことであつたと記憶して居る安達さんから「キリストと天皇陛下とどちらが偉いか」と質問したので学生からも当時話があつた。

学校としても余り表面の問題とせず此の際態度を判然として置きたい考へもあつたので安達さんを始め学生に対し、キリスト教と云ふものを明確にするため院長から話をして貰ふことにした筈だ。大体事変下に於けるミツシヨンスクールに対しては当局としては大部注目して居る様であるが、然しそれ程に心配するには及ぶまいと思ふ。昨年の五月末来県された文部省の督学官の一行に加はつて来られた長島中佐等も、今回質問された安達さんと同じ様な質問をされたが、当時は学生の一人が去就に迷つた行動もあつた為大部思ひ切つて叱られて了つた。

然し自分は質問が大体に於て不親切だと思ふ。それでも「キリストと天皇何れを第一義として考へべきであるか」とでも聞かれるならば、学生もすぐ判ることでもあり迷ふものもなからうと思ふが、大体問題として論ずべからざることを問題として質問されるのだから、キリスト教育を受けて居る本校の学生等には或は

此の点判然としないものもないとも限るまいと思ふ。

斯くした質問は現下国体明徴を叫ばれる場合どうかと思ふ。大体色々の意味に天皇を引合にすることは或意味に於ては至尊の尊厳にも関することに成り、又同時に軍の諸公を始め今日国家主義者に依つてのみ徒らに天皇天皇と口にされることは何だか自分ばかりの天皇であるかの様にも聞かれ、又聞くものをして却つて反感を抱かしむることになるのではないかと思ふ。併し今の場合何んと云つても軍の連中と喧嘩をした処で致方のない御治世だから御気嫌を取つて居る方が一番賢明な策と心得て居るが、併し乍ら余りにも単純な考へを持つて居るのだと思ふ。聞く処に依れば昨年矢張り一中の小平校長等も長島中佐から「本校の教育は余り詰め込め主義で不可ん」と散々講評を受けた。それでその講評迄良かったが終つて同校長が答辞を述べた処其の答辞の中の言葉尻を捉へて満座の中で訂正させられたと云ふことを聞いて居るが、實際今の軍人さんには負けるより仕方がないと云ふより外はない。或は文教の刷新を目的とするものか、其の真意の奈辺にあるか判らぬが、兎に角私立学校に対する態度等は殊に酷いものがある。兎に角今日の場合一概に耶蘇教を

排斥の出来ないことは大体軍としても判つて居ることであろうと思ふ。それは対支政策から言つても直ちに神ながらの道では行き進む訳には行かない実情にあると云ふことは既に周知の事実であろう。此の意味からもし矢張り政策としてはキリスト教や仏教を利用と云つては語弊があるが、兎に角乗ぜられることのない様に警戒しつゝ利用すべきであつて、只一本調子に物を考へて行動することは徒らに国民に対し不満を抱かしむることになるのではないかと思ふ。兎に角配属将校の遣つて居ることが総て軍の指導でやつて居るとすれば別問題だが、何れにしても思想的に及ぼす影響も尠なくないので学校としては慎重にやつて居る積りである。

(『特高資料による戦時下のキリスト教運動』二)

二一五 E・H・ゾーグの辞任

(昭和十五年九月二十日)

ザウグ先生の辞任について

ザウグ先生は此度理事長並に高等学部長を辞任せら

れたが、その御挨拶のうちに大要次の如くお述べになられた。

私は過去十二年間慶学院の主要な地位を占むるに相応しい能力と資格とを具備して居らぬを感じ数回辞任を申出でたが院長は遂に聴き届けられなかつた。

今度最近世界の情勢変化と時代の新精神とに鑑み学院将来の幸福の為に日本人部長を戴くのが賢明である事が益々明かになつたので私は再び辞任を懇願した。遂に九月廿日に院長並に理事会より聴許されたのである。私の辞任は決して教職員或は生徒側に対する不満から起つたものでない、寧ろ反対で、私は在任中始終教職員並に生徒諸君から心からなる協力を受け、その好意は私の一生忘得ぬ処で衷心から感謝する処である。

私の将来に就いてはたとひ当局者たる地位を占めないでも、他の方面に於て学院の為に奉仕する事の出来る事を希望してゐる。或は私に対して米國に帰る準備をして居るのではないか、と尋ねられる方もあるが只今の処さやうな考は持つて居ない。勿論、本國政府から命令されるならば、私は服従しなければなりません。

私の願は生涯の終まで日本に留り度いのである。そして第二の故郷たる日本に止まり得る限り学院の為にわが

最善を尽す積りである。而して我が学院を模範的学園たらしむる為に御協力し共に努力したいと思ひます。

(『東北学院時報』改四号 昭和十六年一月一日)

二二六 文科生徒募集停止認可申請書類

(昭和十六年一月十一日)

文科生徒募集停止ニ関スル認可申請

今般別紙ノ理由ニ依リ文科第一部及文科第二部ノ生徒募集ヲ停止致シ度候ニ付御認可相成度此段及申請候也

昭和十六年一月十一日

財団法人東北学院

理事長 出村悌三郎 印

文部大臣 橋田邦彦殿

文科生徒募集停止理由書

(一) 年々応募者数ノ減少ヲ来シ定員ニ滿タズ從ツテ比較的素質ノ低下ヲ来ス傾向アルヲ免レズ

年度別	科別	定員	応募者数	入学者数	備考
昭和十三年度	文科第一部 全 第二部	六四〇	二一八	一一四	
全 十四年度	文科第一部 全 第二部	六四五	二二二	一一五	
全 十五年度	文科第一部 全 第二部	六四五	一一七	一一三	

(二) 是ニ要スル経費ハ之ヲ単ニ教員給ト授業料ノミノ對比ヲ以テスルモ現在生徒一人当り年額百九十八円ノ不足ヲ生ズ即チ

教員給 一八、九一八円

生徒数 六八人

授業料 五、四四〇円

不足額 一三、四七八円

学則変更理由書

国家ノ新体制ニ即応シテ欧米依存ノ旧套ヲ脱シ独立自給ヲ為サントシ今般米国リフオームド教会外国伝道局ノ寄附金年額六万余円ノ寄附ヲ謝絶セリ。依ツテ之ヲ補填セシメ一方ニ於テハ経費ノ合理的節約ヲ計リ、他面ニ於テハ極力収入ノ増加ヲ企図センガタメ学校当局ハ同窓会ノ幹部ト協力シテ先般来自給期成会ヲ組織シ、主トシ

テ同窓生ノ間ヨリ維持会員ヲ募集シテ将来ニ備ヘ、同時ニ学校側ニ於テモ銳意当面ノ対策ニツキ考究中ナリ。今般授業料ノ増額ヲ立案シ直チニ之ヲ実施セントスルモノナリ。

又別紙文科生徒募集停止ノ理由ニ依リ昭和十六年度ヨリ文科生徒募集ヲ停止セントス、而シテ同科現在生徒全部卒業ノ後同科ヲ廃止セントスル意向ヲ以テ文科ニ収容スベキ定員ヲ商科ニ振り替ヘ入学セシメ商科定員増加ニ関スル認可申請ハ文科廃止後更メテ商科定員確定ノ上之ヲ提出スルコトトシ、不敢取昭和十六年度予算ニハ商科ニ實際収容シ得ル人員ヲ基準トシテ授業料収入ヲ計上セリ。

尚文科廃止ニ到ルマデ教員給ヲ現在ノ儘ニシ、其ノ間経費ノ不足額ハ先ニ寄附ヲ受ケタル、シユネーダー記念図書館建築資金ヨリ流用シ主トシテ文科廃止後ニ於ケル經常費ノ剰余金ヲ以テ逐次之ヲ償還セントス。而シテ文科廃止後ハ学校収入ト前記維持会会費ノミヲ以テスルモ年額千数百円ノ剰余ヲ生ズル見込ミナリ。

宮専七号

財団法人東北学院

昭和十六年一月十一日附高学発第六号申請学則中変更ノ件認可ス

昭和十六年三月二十八日

文部大臣 橋田邦彦 印

二二七 商科第二部設置認可申請書類

(昭和十六年十二月五日)

学則変更認可申請

今般本学院学則ノ一部ヲ変更ノ上昭和十七年度ヨリ実施致シ度候ニ付御認可相成度左記書類相添ヘ此段及申請候也

昭和十六年十二月五日

東北学院設立者

財団法人東北学院

理事長 出村悌三郎 印

文部大臣 橋田 邦彦殿

(中略)

東北学院設立者

学則変更ノ趣意

東北学院ハ先ニ国家ノ新体制ニ即応シ欧米依存ヲ脱却シテ独立自給ヲ宣言セリ其際既ニ述べタル如ク元來東北学院ハ日米両国人協力ノ下ニ創設セラレタル学校ナレドソノ目的ハ当初ヨリ忠良ニシテ有用ナル日本国民ヲ養成シ日本文化ノ發展ニ寄与スル処アラントセシハ過去半世紀ノ歴史ニ徴シテモ明カナリ、サレド其財政的方面ニ於テハ遺憾ナガラ從來敢トシテ米國ニ依存シ昨年度迄年額六万余円ノ補助金ヲ受領セリ

今之ヲ謝絶シテ自給独立セントス

勢ヒ一方ニ於テ經費ノ合理的節約ヲ計ルト同時ニ他方ニ於テハ凡ユル方法ヲ講ジテ収入ノ増加ヲ計リ以テ独立ノ基礎ヲ強固ニセザル可ラズ然ルニ事變以來物価ノ昂騰ハ經費ノ節減ヲ益々困難ナラシメ人件費ノ如キハ一面ニ於テ合理的節約ヲ計ルト同時ニ他ニ於テハ全般的優遇ノ途ヲ講ゼザルヲ得ザル情勢ニアリ

即チ学院ノ機構ニ變更ヲ加ヘテ学校収入ノ増加ヲ計ルト同時ニ時勢ノ要求ニ順応シテ次ノ如キ積極的対策ヲ講ゼントシ之ニ対応シテ學則ヲ變更セントスルモノナリ。

第一 月謝ノ値上ゲ(中学部月額五円ヲ五円拾錢、高等学部年額八拾円ヲ百円)(実施)

第二 高等学部文科第一部、同第二部共十六年度ヨリ当

分募集停止(実施)

第三 高等学部商科第二部ヲ附設シ夜間授業ヲナサントス

第四 高等学部各科ノ定員變更(文科ノ定員ヲ次第二減少シテ代リニ商科ノ定員ヲ増加シ結局商科ノミニテ五百四十名ニ變更セントス)

第五 中学部ニ第二部ヲ附設シ夜間授業ヲナサントス

(外ニ同窓会ヲ主トシテ学校父兄会一致協力シテ維持会ヲ組織シ會員募集中)

商科第二部ヲ新設シ夜間授業ヲナス理由

イ、社会的要求

仙台市内に公私立合セテ八個ノ中学ト一師範学校ト五個ノ甲種実業学校トアリ、之等ノ卒業生中上級学校ニ入ラントシテ得ズヤムヲ得ズシテ市内ニ就職スルモノ多ク又事局柄国策ニ副ハントシテ自発的ニ直チニ就職シ職域ニ於イテ忠実ニ奉公シツゝ一層能率ヲ高メンガ為メ向学ノ念切ナル者モ少シトセズ 然ルニ市内ニハ中等程度ニ於テハ既ニ市立夜間中学及夜間女学校アリ、又夜間商業夜間工業及其他ノ所謂青年学校アレド未ダ専門学校程度ノ整備セル学校ナシ高等実務学校アレド未ダ専門学校令ニ依リテ認可セラルゝ程度ニ到ラ

ズ從テ卒業生ニ何等ノ特典ナク真ノ篤学者以外正規ノ課程ヲ修了スル者ナキ実情ナリ。

即チ向学ノ熱アリ且ツ充分ノ素質ヲ有チナガラ雄志ヲ押ヘテ昼間業務ニ従事スル多クノ中等学校卒業者ニ対シ勉学ノ機会ヲ与ヘ以テ一人ニテモ多ク国家ノ為健康ナル中堅の国民有能ナル指導者の人材ヲ供給セントスルモノナリ。

ロ、学校ノ經濟的事情

単ナル定員増加ニ依ツテ得ル増収ノ外横ニ増員スル代リ縦ニ増員スルコトニ依ツテ一層經費ヲ節約シ以テ收入ノ増加ヲ計ラントスルモノナリ即チ

第一校地校舎ノ利用 一学級ノ定員同一ナルヲ以テ昼間夜間同一教室ヲ利用スルノヲ得

第二燃料及電燈料ヲ増加スルノミニシテ其他ノ備品並ニ消耗品ハ共同使用並ニ共同購入等ニヨリ昼間ノ約三分ノ一ノ費用ニテ充分ナルベシ

第三担当時間數ヲ増加シテ俸給ヲ増額セントスル校是ニ基キ同一学年ノ各組ニ同一講義ヲナサシメ第一組ノ講義ニ対シテハ基本的俸給ヲ支給シ第二組以下ノ講義ニ対シテハソノ約半額ヲ支給セントス 即チ夜間部完成ノ際ニ於ケルソノ俸給費ハ昼間ノソレノ約半額ニテ

充分ナルベシ

(注) 昼間三学級夜間二学級トシ昼間授業一週一時間月十二円ヲ基本的俸給額トセバ昼間一時間三組ニテ十二円十六円十六円ニ二十四円トナリ夜間一時間二組ニテ六円十六円ニ十二円トナル

教第二四二号

昭和十七年二月十日

文部大臣 橋田 邦彦殿 宮城県知事 林 信夫 印

東北学院高等学部学則變更ノ件

東北学院設立者財団法人東北学院理事長ヨリ標記ニ付別紙ノ通認可申請有之候処右ハ中等学校卒業者ニシテ有為ノ材ヲ抱キ向学ノ志ニ燃エナガラ学資其ノ他ノ事情ヨリシテ昼間授業ヲ行フ上級学校ニ進学シ得サル者ノタメニ商科第二部ヲ新設シ夜間授業ヲ行ヒ之等向学ノ士ニ対シテ勉学ノ機会ヲ与ヘ以テ中堅の有能指導者ノ養成ヲ為スト共ニ同校ノ外国依存ヲ脱シテ独立計画ヲナシタル其一助ト為サントスルモノナル処当地方トシテハ夜間授業ヲ行フ此ノ種専門学校ハ必要ト認メラルルモ未ダ其ノ設置ナク遺憾トスル所ニ有之亦同校ノ事情ヨリシテ今回ノ

計画ハ適當ノ措置ト認メラレ候ニ付至急御認可相成度

宮專六号

昭和十七年三月二十九日起案

私立専門学校学則変更認可ノ件案

東北学院設立者

財団法人 東北学院

昭和十六年十二月五日付申請学則変更ノ件認可ス

昭和十七年三月三十一日

文部大臣

備考

一、学則変更ノ要点

高等学部商科第二部ヲ付設シ夜間授業ヲナサントスル

ニ在リ(昭和十七年四月ヨリ実施)

二、変更ノ条項

第三条中「商科ヲ分チテ商科及商科第二部トス」ヲ加

フ

第四条第三項中「及商科第二部」ヲ加フ

第四条第四項中ニ但書「但シ商科ハ夜間授業トス」ヲ

加フ

第五条中「商科第二部参百名トス」ヲ加フ

第七条 学科課程及授業時数表(商科第二部ノ分)追加
ス

第三十四条 商科第二部ノ授業料年額八十円ヲ規定追
加ス、年三回ニ分納トス

三、認可申請ノ理由

一 従来米國ヨリノ補助金ヲ離脱シ自給独立セントス
ルコト

二 東北地方ニ於テ未ダ夜間授業ヲ行フ専門学校ノ設
置ナキヲ以テ此際社会ノ要望ニ応ヘ幾多向学ノ士ニ
対シテ勉学ノ機会ヲ与ヘ国家有為ノ人材ヲ養成セン
トスルニ在ルコト

四、第二部ニ必要ナル施設

校地ト校舎ハ商科昼間部ノモノヲ其ノ儘利用シ得
教員ハ商科昼間部教員ヲ以テ充当スルモノトス

基本金ハ漸次増額ノ予定ナルコト、後援会ヨリ寄附ア
ル見込ナリ

五、意見

本件ハ申請ノ理由、施設ノ状況及予算計画上ヨリ見テ
認可差支ナキモノト認ム

(国立公文書館所蔵)

二二八 第二中学部設置認可申請書類

(昭和十六年十二月三十日)

昭和十六年十二月三十日

財団法人東北学院

理事長 出村悌三郎

宮城県知事 林 信夫殿

私立学校設立認可申請

一、目的 中学校令ノ趣旨ニ從ヒ且ツ財団法人東北学院

寄附行為第三条ニ基キ主トシテ昼間業務ニ従事スル男子ニ対シ夜間ニ於テ中学校程度ノ教育ヲ施スヲ以テ目的トス

(寄附行為第三条本財団ノ目的ハ教育ニ関スル勅語ノ聖旨ヲ奉体シテ普通教育並ニ高等専門教育ヲ施シ基督教ノ精神ヲ容レテ人格ヲ陶冶シ以テ国家有用ノ人材ヲ養成スルニアリ)

二、名称 東北学院第二中学部ト称ス

三、位置 仙台市東二番丁四十番地

四、学則 別紙ノ通り

五、経費及維持方法 月謝其他ノ学校収入及基本金ノ利子ニ依ル

六、校地校舎ノ図面 添附

右設立ノ上昭和十七年四月一日ヨリ開校致シ度候間御認可相成度左記参考書類相添へ此段及申請候也

決議録

昭和十六年三月十四日午前九時十分片平丁六九ザウグ氏宅ニ於テ定期理事会ヲ開ク

出席理事 出村悌三郎、出村剛、土田熊治、阿部豊吉、アンケニー、ゲルハード、リガレー、ザウグ、八氏、理事総数十二名

議長 出村悌三郎

協議事項

一、高等学部並ニ中学部ニ夜学部開設ノ件

開設スルコトニ決シ、所要ノ交渉並ニ手續ヲ学校当局ニ一任スルコトニ可決

右記録ヲ朗読、之ヲ承認ノ上閉会

昭和十六年三月十四日

財団法人東北学院

理事長 出村悌三郎 印

財団法人東北学院理事

書記 出村 剛 印

東北学院第二中学部ヲ新設シ夜間教授ヲナス理由
イ 社会的要求

既ニ函南中学(市立夜間中学校)アリテ好成绩ヲ収メ
ツ、アレド入学志願者数逐年増加シテソノ半数ヲダモ
収容シ得ザル状況ナリ且同校ノ位置市ノ北部ニ偏在ス
ルニ反シ当学院中学部ハ市ノ中央ヨリ稍南部ニアリ函
南中学校ノ定員百名ニ対シ志願者数次ノ如シ。

昭和十一年度 九七、同十二年度 九二、同十三年度 一
五五、同十四年度 二五〇、同十五年度 二九三、本
年度 三九二

ロ 学校ノ經濟的事情

単ナル定員増加ニ依リテ生ズル増収ノ外横ニ増員スル
代リ縦ニ増員スルノニ依ツテ一層經費ヲ節約シ以テ収
入ノ増加ヲ計ラントスルモノナリ。即チ

第一、校地校舎ノ利用

一 学級ノ定員同一ナルヲ以テ昼間夜間同一教室ヲ利用
スルコトヲ得。

第二、燃料及電燈費ヲ増加スルノミニシテ其他ノ備品及
消耗品ハ共同使用並ニ共同購買等ニ依リ昼間ノ約三分

ノ一ノ費用ニテ充分ナルベシ。

第三、担当時数ヲ増加シテ俸給ヲ増額セントスル方針ニ
基キ同一学年ノ各組ニ殆ト同一講義ヲナサシメ第一回
ノ講義ニ対シテハ本学院ニテ定メタル基本的俸給ヲ支
給シ第二回月以後(乙組以下)ノ授業ニ対シテハ其約半
額ヲ支給スルモノトセバ夜間部完成ノ際ソノ俸給費ハ
昼間ノソレノ約半額ニテ充分ナルベシ。
即チ基本的俸給ヲ支給スベキ時間ヲ六時間担任セシメ
テ組以下ハソノ教員ノ能力ト健康ノ如何ニ依リテ更ニ
十二時間乃至十八時間担当セシムルモノトス。

教第二四一号

昭和十七年二月十日

宮城県学務部長 印

財団法人東北学院理事長殿

夜間中学設置ニ関スル件通牒

標記ノ件別途認可相成候処開校後迄ニ学校長ヲ定メ認可
申請スルト共ニ設備ニ付テハ可成急速ニ処理シ授業ニ支
障ヲ来サシメサル様御配慮相成度尚将来名称、位置、生
徒定員、入学科及授業料額並学則ノ改正ヲ為サントスル
トキハ其ノ都度知事ノ認可ヲ受クル様御取扱相成度

指令第二四一号

財団法人東北学院

昭和十六年十二月三十日申請東北学院第二中学部設置ノ
件認可ス

昭和十七年二月十日

宮城県知事 林 信夫 印

二一九 第二中学部の新設

(昭和十七年十月十日)

第二中学部新設さる

大東亜の大道洋々と前途に開け、世界の朝ぼらけ燦たる
戦捷の春酣の四月、母校学院に今回新たに第二中学部の
誕生を見たるは邦家の為誠に喜ばしき限りと茲に会員各
位と共に母校一段の飛躍に対し慶祝に存ずる次第であり
ます。

国家総力をあげて聖業翼賛に邁進しつゝあるの現今、資
力と時間とに恵まれぬ幾多不遇の青年子弟、取りわけ聖
戦完遂に欠くべからざる重要部門の一翼を荷ふ幾多の産

業戦士達へさしのべられた導きの光としての我が第二中
学部誕生こそ真の肇国の精神を体し皇国の歴史的大使
命を自覚せる教育報国の大理想実現に他ならぬと存ずる
次第であります。心身共に健全なる青少年は国家興隆の
原動力であり国防力の源泉たるは今更言をまたざる事で
あります。

思ふに母校は創立の初めにおいて既に恵まれざる子弟、
而して向学心に燃ゆる意志強固なる青少年達の正しき指
導者たり、また若き彼等の魂の宿舍としてたつべき大い
なる目的の下に開設されてより以来、政界に或は実業界
に幾多有為の士を社会に送り出し育英界に貢献し来たれ
るは他校に見ぬ美風なりと会員たる我々一同誠にほこら
かに感じ居る次第であります。今次大東亜戦争が建設戦
たるを惟ふ時、内においては思想経済産業戦の戦士とし
ての銃後国民育成に、出でては万里の波濤を開拓し大東
亜諸民族の真の指導者たるの教養識見ある青年の育成、
即ち国策に合致せる興亜教育の徹底を目標に開校せられ
たる第二中学部の前途こそは正に洋々たるものがあると
信ずるのであります。会員各位におかせられても何分の
御後援を賜はり度く紙面を借りてお願い申し上げます。
浅学菲才その器にあらざる不肖をまかへり見ず第二中学

部長の大役を引きうけ今更に其の任に堪へざらん事を恐れる次第であります、何卒会員各位の倍旧の御指導と御鞭撻を切に御願ひ申上げる次第であります。

安部 朔記

〔『東北学院時報』改一一号 昭和十七年十月十日〕

二二〇 A・M・アンケニー書簡(クララ・バーン宛)

〔英文〕

(一九四二年八月八日)

二二二 問題になった東北学院の三L標語

(昭和十七年九月九日)

目障りな米英標語

問題になった東北学院の玄関

「僕等は未来の健兵」と学徒が執銃訓練に汗する校庭、その校庭の正面玄関に掲げられた三つのL「LIFE. LIGHT. LOVE」―自由主義華やかなりし頃の米英標語

が中堅学徒を育てる学園の玄関に堂々のさばつてゐる、一昨年ミツシヨン・スクールの教育内容検討に米英思想の掃蕩を図つた宮城県学務課ではかゝる見落しに断乎撤去のメスを加へることになり調査に着手した、仙台市の中央東北学院中学部の表玄関に掲げられてゐる「三つのL」に就き同学院小泉部長と一問一答

〔問〕「三つのL」は学校の信条か

〔答〕「三つのL」は御承知のやうに外国教育界の信条だ、前院長シユネーダー博士以来学院の精神の一つとして踏襲してゐる

〔問〕それについて何か考へてゐないか

〔答〕前の院長が外国人だけに彫りつけたものだ、日本語にすればライフは健康、ライトは智、ラブは愛といふわけで英語にこだはる必要はあるまい

〔問〕このまゝ放つて置くといふ意味か

〔答〕此の信条をわかり易くしたいとは思つてゐる、犠牲献身といふのが学院のモットーだが、「三つのL」も日本語に訳せばさうなるんだし卒業生はそれを実践してゐると思ふ

〔問〕まだあれを如何するといつた気持は無いのか

〔答〕吾々の一存でも出来ぬ問題だ、卒業生とも相談し

て決めたいと思ふが此方から取り壊し方を積極的に持ち出した事は無い

右につき多田学務部長は語る

一昨年のミツシヨン・スクール改革以来そんな事は全部一掃されたものと思つてゐた。三つのLを掲げておく等とは以ての外だ、日本人なら誰しも不快を感じることを思ふ、嚴重取締りたい

〔河北新報〕 昭和十七年九月九日

二二三 学徒勤労働員に関する文部省布達

(昭和十八年七月六日)

発総一五一号

昭和十八年七月六日

文部次官

東北学院長殿

学徒戦時動員体制確立要綱実施ニ関スル件

大東亜戦争ノ現段階ニ対処シ教育錬成内容ノ一環トシテ学徒ノ戦時動員体制ヲ確立シ学徒ヲシテ有事即応ノ態勢ヲラシムルト共ニ又之ガ勤労働員ヲ強化シテ学徒尽忠ノ

至誠ヲ傾ケ其ノ総力ヲ戦力増強ニ結集セシムル為曩ニ六月二十五日別紙ノ通学徒戦時動員体制確立要綱閣議決定ヲ見タル処時局ノ推移ニ深ク省察スルトキ学徒ヲシテ將來ノ軍務ニ備ヘ国防能力ノ増強ヲ図ラシムルト共ニ必要ニ当リテハ直接国土防衛ニ全面的ニ協力セシメ或ハ学徒ヲシテ挺身国家緊要ノ業務ニ従事セシメ其ノ心身ノ錬成ヲ全カラシムルコト極メテ緊切ナリ。

本省ニ於テハ本要綱ニ基ク有事即応態勢ノ確立、勤労働員ノ強化ニ関シ実施上必要ナル具体的方法、措置並ニ基準等ニ付鋭意之ガ準備中ニシテ決定次第速ニ通牒可致予定ナルモ本年六月二十四日付発体一四三号食糧増産急対策実施ニ伴フ青少年学徒勤労働員ニ関スル件其ノ他現ニ計画又ハ実施中ニ係ル各種勤勞作業等モ有之ベキニ付本要綱ニ依リ得ルモノニ付テハ不取敢本要綱ノ趣旨ニ則リ実施セラレ度、尚左記事項ニ関シテ之ガ実施上充分御留意ノ上萬遺憾無キヲ期セラレ度此段依命通牒ス

記

一、学徒動員ハ飽ク迄教育錬成内容ノ一環トシテ実施スルモノナレバ単ナル勞力提供ニ終ルガ如キコトナキ様
特ニ指導スルコト

二、学校教職員ニ対シテハ前項ノ趣旨ヲ十分徹底セシメ

卒先垂範学徒ト一体トナリ本動員ノ真精神ヲ發揚セシムルコト

三、本要綱ノ実施ニ関シテハ形式ニ捉ハレズ専ラ其ノ実績ヲ重視シテ之ヲ実施セシムルコト

四、勤勞動員ニ依リ涵養セラレタル良習ハ日常ノ家事ニ付テモ之ヲ実践セシムル如ク指導スルコト

五、学徒ノ養護ニ一層周到ナル注意ヲ払フコト

六、都道府県勤勞報國隊指導本部トノ連繫ヲ密ニシ本要綱ノ実施ヲ円滑ナラシムルコト

学徒戰時動員体制確立要綱

(一八、六、二五 閣議決定)

第一方針

大東亜戦争ノ現段階ニ対処シ教育鍊成内容ノ一環トシテ学徒ノ戰時動員体制ヲ確立シ学徒ヲシテ有事即応ノ態勢タラシムルト共ニ之ガ勤勞動員ヲ強化シテ学徒尽忠ノ至誠ヲ傾ケ其ノ総力ヲ戦力増強ニ結集セシメントス

第二要領

一、有事即応態勢ノ確立

学徒ヲシテ将来ノ軍務ニ備ヘ国防能力ノ増強ヲ図ラ

シムルト共ニ必要ニ当リテハ直接国土防衛ニ全面的ニ協力セシムルモノトシ之ガ為概ネ左記各項ノ方途ヲ講ズ

(一) 学校報國団ノ隊組織ヲ直ニ国土防衛ニ有効ニ動員シ得ル如ク強化ス

(二) 「戰時学徒体育訓練実施要綱」ニ基ク体育訓練ヲ強化シ特ニ大学、高等専門學校、中等學校第三学年程度以上ノ男子学徒ニ付戰技訓練ヲ徹底ス

(三) 前項ノ学徒ニ付航空、海洋、機甲、馬事、通信等ノ特技訓練ノ強化ヲ図ル為学徒ノ適性登録制度ヲ確立シ本人ノ適性ニ從ヒ特技訓練ヲ実施ス

(四) 基本訓練種目、戰技訓練種目及特技訓練種目ニ付中等學校ヨリ大学ニ至ル訓練教程ヲ綜合的且各學校ノ段階ニ適應スル如ク制定シ以テ訓練ノ適正ト徹底ヲ図ル

(五) 学徒全員ニ対スル防空訓練ヲ徹底スルト共ニ防空勤務補助員トシテノ訓練ヲ強化スルモノトシテ二特技隊及特別警備隊トシテノ訓練ヲ強化ス

(六) 中等學校以上ノ女子学徒ニ対シ看護其ノ他保健衛生ニ関スル訓練ヲ強化シ必要ニ際シ戰時救護ニ従事セシムルモノトシ之ガ為必要ナル施設ヲ整備

二、勤労働員ノ強化

ス

- 学徒ヲシテ挺身国家緊要ノ業務ニ従事セシメ其ノ心身ノ練成ヲ全カラシムルモノトシ左記各項ニ依リ食糧増産、国防施設建設、緊要物資生産、輸送力増強等ニ其ノ重点ヲ指向シ之ガ積極強力ナル物員ヲ図ル
- (一) 勤労働員ハ国民動員ノ要請ニ即応シ学校ノ種類程度ニ応ズル作業種目ノ適正ナル選択ニ依リ作業効率ノ向上、作業量ノ増嵩ヲ図ル
- (二) 勤労働員ノ期間ハ学校ノ種類程度ト作業種目ヲ勘案ノ上国家ノ要請ニ即応セシム
- (三) 作業ト学校トノ臨時且分散的ナル關係ヲ可及的改メカメテ之ヲ常時且集注的ナラシム
- (四) 勤労働業ノ対象タル事業ノ管理者ニ対シ学徒勤勞作業ノ意義ヲ徹底セシムルト共ニ学徒ニ対シ事業ノ性質ヲ十分理解セシメ尚学校当事者ト事業管理者トノ緊密ナル連繫ニ依リ作業場ニ於ケル学徒ノ取扱ヲ一層適正ナラシム
- (五) 員数及期間ガ相当多数且長期ニ亘ル学徒ノ動員ニ付テハ学校移駐ノ考ヘ方等ニ依リ之ヲ実施セシム
- (六) 学徒ノ養護ニ一層周到ナル注意ヲ払ヒ作業ノ種類性質ニ即応スル学徒ノ配置ヲ行ヒ作業ニ因ル傷痍其ノ他ノ事故ノ予防救護ニ遺憾ナカラシム
- (七) 食糧増産作業ニ付テハ食糧増産応急対策(閣議決定)ニ即応シ従来実施シ来レル農耕応援作業等ヲ強化スルノ外左記各項ノ方途ヲ講ズ
- (イ) 耕作廃止畑、伐木跡地、河川敷、工場建築予定地等空闲地ニ付極力学校直営ノ学校報国農場ヲ創設セシメ米、麦、大豆、馬鈴薯、甘藷等ヲ栽培セシム
- (ロ) 既設ノ学校報国農場其ノ他ノ附属農園ニ付テハ米、麦、大豆、馬鈴薯、甘藷等ヲ栽培セシメ学校附属ノ農業実習地及一般学校用地ニ付テモ主要食糧及雜穀ヲ栽培セシム
- (ハ) 收穫物ノ運搬、害虫駆除、除草、緑肥刈取等ニ付学校ノ種類、程度、所在地等ヲ勘案シ特定ノ学校ヲシテ可及的ノ一定地域ノ作業ヲ担当セシメ以テ学校ト作業地トノ緊結ヲ図ル
- (ニ) 可耕荒地、開墾可能地ノ簡易開墾、湿地埋立、排水施設ノ整備、耕地整理、牧野改良等ニ付テハ一校又ハ数校ヲ特定シテカメテ一貫作業ヲ目途ト

シテ之ガ完成ニ協力セシム

(ハ) 各種ノ工場事業場等ニ於ケル勤労働員ニ付テハ

特ニ左記各項ヲモ考慮シ之ガ実行ヲ取メシム

(イ) 学校ノ種類、程度及土地ノ情態ヲ勘案シ適当ナ

ル計画ヲ得タル場合ハ通年常時循環シテ計画的ニ

一定要員ヲ出勤セシム

(ロ) 学徒ノ専門技能ハカメテ之ヲ活用ス

(ハ) 学校ノ実習場等ニ於テモ工場ト連繋ヲ密ニシ其

ノ依託作業ニ従事セシム

(九) 女子ニ在リテハ前各項ニ依ルノ外特ニ中等学校

以上ノ学校ニ付工場地域、農村等ニ簡易又ハ季節

的幼稚園保育所及共同炊事場ヲ設置セシメ又ハ他

ノ経営スル斯種施設ニ於テ保育等ニ従事セシム

二二三 学校報国隊出勤令書の発令

(昭和十八年七月十一日)

地体四七六号

昭和十八年七月二十三日

文部省体育局長 印

厚生省勤勞局長 印

東北学院長殿

学校報国隊出勤令書発令ニ関スル件

標記ノ件ニ関シ別紙ノ通学校報国隊出勤令書発令相成タ

ルニ付至急御措置相成度

学校報国隊出勤令書

東北学院長

右ノ者左ノ事項ニ依リ学校報国隊ヲ出勤シ之ニ依ル協力

ニ関シ必要ナル措置ヲ為スベシ

隊ノ名稱	隊長ニ関スル事項	隊ノ出頭スベキ日時及場所	協力申請者		協業ノ所在地及名稱	作業指導者ノ職氏名	協業ノ内容	支給経費	災害、疾病、死亡等ニ対スル扶助ノ内容	宿舎、保護、衛生、救護施設	其ノ他参考トスル事項
			氏名	住所							
隊ノ名稱	東北学院報國隊		協力セシムベキ員数	男 二〇〇人							
隊長ニ関スル事項	院長ニ於テ適宜選定スルコト		詮衡ノ範	概テ毎日協力セシムベキ人員ニ滿ソル機編成スルコト							
隊ノ出頭スベキ日時及場所		昭和十八年七月一九日午前八時	宮城県柴田郡第一海軍火薬廠								
協力申請者											
氏名											
住所											
協業ノ所在地及名稱											
作業指導者ノ職氏名											
協業ノ内容											
支給経費											
災害、疾病、死亡等ニ対スル扶助ノ内容											
宿舎、保護、衛生、救護施設											
其ノ他参考トスル事項											

昭和十八年七月十一日

文部大臣 印
厚生大臣 印

二二四 航空工業専門学校設置認可申請書類

(昭和十九年二月二十九日)

専門学校設置認可申請

専門学校令ニ依リ東北学院航空工業専門学校ヲ設置致度候条御認可相成度公私立専門学校規程第一条ニ依リ別紙書類ヲ具シ此段及申請候也

昭和拾九年二月二十九日

財団法人 東北学院

理事長 出村悌三郎 印

文部大臣子爵 岡部長景殿

設置理由

当財団ハ先ニ発表セラレタル政府ノ教育ニ関スル非常措置方策ノ精神ニ則リ高等商業部ノ諸施設ヲ挙ゲテ決戦兵器タル航空機ノ生産關係並ニ整備關係ノ技術者養成機關ニ轉換シ一ハ以テ現時我ガ国、最大急要ニ応ヘ一ハ以テ

皇国将来ノ大使命達成ニ貢献セントス

設置要項

一、目的

本校ハ専門学校令ノ定ムルトコロニ依リ航空工業ニ従事スヘキ者ニ高等ノ學術技芸ヲ授ケ国家有用ノ人物ヲ鍊成スルヲ以テ目的トス

二、名称

東北学院航空工業専門学校

三、位置

仙台市南六軒丁一番地

四、修業年限

参年

五、毎年入学セシムベキ生徒定員(一学級五〇名)

航空機科 一〇〇名

発動機科 五〇名

計 一五〇名

六、学則

別紙ノ通

七、校地

九、一一七坪(三町〇反三畝二十七步)

財団法人東北学院所有ニシテ高等商業部用

八、校舎

建坪 八八六坪

延坪 一、六〇八坪

財団法人東北学院所有ニシテ高等商業部用

九、開校年月

昭和十九年四月

十、経費及維持ノ方法

基本財産収入、授業料其ノ他ノ収入ヲ以テ支弁ス

十一、基本金

三二四、一六三円九〇銭(別紙財産目録参照)

十二、学費

授業料 二二〇円

入学検定料 一〇円

入学料 一〇円

十三、教員組織

別紙ノ通

地質、水質及附近ノ状況調

一、地質

長方形、混砂真土

二、水質

水道

三、附近ノ状況

北、街道ヲハサンデ仙台台高等工業学校ニ対シ、東西、民家ニ接シ、南モ亦四千坪ノ屋外運動場及ビ街道ヲ距テテ民家ニ連ナレド所謂屋敷町ニテ至極閑静ナリ

設立者ノ履歴

財団法人東北学院ハ明治十九年憂国ノ志士押川方義氏ノ創立ニ係リ爾来五十八年ノ歴史ヲ閱ミス、其ノ間五千余名ノ卒業生ヲ出シ現在ハ専門学校ニ依ル高等商業部ト中等学校令ニ依ル東北学院中学校トヲ維持経営ス、現在理事会ハ十二名ノ理事ニ依ツテ組織セラル。(財団法人東北学院寄附行為参照)

(写)

申込書

一金 五拾参万円也

但 東北学院航空専門学校設備資金

右支弁方ヲ承諾致シ候也

昭和十九年二月 日

東京都大森区南千束町七二番地

萱場 資郎 ㊦

財団法人東北学院理事会 御中

定期理事会

昭和十八年十月廿一日午后三時財団事務所ニ於テ定期理事会ヲ開ク出席理事出村悌三郎、萱場資郎、杉山元治郎、小泉要太郎、伊勢武、阿部豊吉、津田郁、小山田正直、出村剛ノ九名、理事総員十二名

議長 出村悌三郎

一、国民儀礼

二、諸報告

三、決議

東北学院ハ国内態勢強化ニ伴フ学制改革案ニ順応シ自今理工科教育ニ力ヲ注ギ全力ヲ挙ゲテ戦力増強ニ貢献センコトヲ期ス、ソノ実施方策トシテ先ツ東北学院ハ航空工業専門学校ヲ設置ス、ソノ委員トシテ理事全員同窓会主事並幹事及同窓会員タル代議士諸氏ヲ挙グルコトニ決ス右記録朗読之ヲ承認ス午后六時二十分閉会

昭和十八年十月二十一日

書記理事 出村 剛

議長理事 出村悌三郎

定期理事会

昭和十八年十二月三十日午前九時四十五分財団事務所ニ

於テ定期理事会ヲ開ク

出席理事 出村悌三郎、杉山元治郎、一力次郎、阿部豊

吉、萱場資郎、伊勢武、本間正雄、小山田正直、津田郁、

出村剛ノ十名 総員十二名

議長 出村悌三郎

一、国民儀礼

二、報告及協議

(イ)前理事会ニ於テ議決サレタル東北学院航空工業専門学
校設置ニ関シテ行ヒタル諸方面トノ折衝経過ニツキ詳

細ナル報告アリ

之ヲ承認ス

(ロ)同校設置ニ必要ナル諸経費ヲ有志ノ寄附ニ俟ツコト、
シ財団ハ出来得ル丈ケ資金ヲ調達支出スル方針ヲトル

コトニ決ス

(ハ)高等商業部ハ現在生ガ卒業シ若クハ適當ニ処置セラ
ル、マデ存続スルコトニ決ス

(ニ)財団法人東北学院寄附行為中左記ノ一部ヲ変更スルノ
件

次期理事会ニ於テ審議スルコトニ決ス

記

第四条 前条ノ目的ヲ達成スル為、専門学校令ノ趣旨ニ

從フ東北学院……トアルヲ「専門学校令ニ依ル東北
学院航空工業専門学校」……ト変更

第五条 ……其ノ中少クモ九名ハ……トアルヲ「七
名」ト変更

右記録朗読之ヲ承認ノ上午後二時閉会

昭和十八年十二月三十日

書記理事 出村 剛

議長理事 出村悌三郎

学校長任用ニ関スル認可申請

宮城音五郎ヲ東北学院航空工業専門学校長ニ任用致シタ
ク候ニ付御認可相成度別紙本人履歷書相添へ此段及申請
候也

昭和十九年二月廿九日

財団法人東北学院

理事長 出村悌三郎 印

文部大臣子爵 岡部 長景殿

宮專四号

東北学院航空工業専門学校設立者

財団法人東北学院

昭和十九年二月二十九日附申請宮城音五郎ヲ校長ト定ムルノ件認可ス

昭和十九年三月十五日

文部大臣子爵 岡部 長景 印

宮專四号

財団法人東北学院

昭和十九年二月二十九日附申請東北学院航空工業専門学校ヲ専門学校令ニ依リ設置スルノ件認可ス

昭和十九年三月十五日

文部大臣子爵 岡部 長景 印

宮專四号

昭和十九年三月十五日

文部省専門教育局長 印

財団法人東北学院理事長殿

入学者募集停止ニ関スル件通牒

今般東北学院航空工業専門学校設置認可相成タルニ依リ東北学院(高等商業部)ニ付テハ昭和十九年度以降其ノ入学募集ヲ停止シ在籍者無キニ至リタルトキハ之ヲ廃止スベキモノナルニ付御了知相成度此段及通牒

宮專四号

昭和十九年三月十五日

文部省専門教育局長 印

財団法人東北学院理事長殿

東北学院航空工業専門学校設置ノ件

昭和十九年二月二十九日附申請標記ノ件本日別途指令相成タル処右ハ左記事項ヲ履行スルコトヲ条件トシテ詮議相成タル次第ニ付御了知ノ上之ガ実現ニ万遺憾無キヲ期セラレ度

記

教員組織、設備等ノ充実ニ付テハ計画通り其ノ実現ニ遺憾無キヲ期スルコト

一、前号ノ条件ニ違反シタル場合又ハ文部大臣其ノ必要アリト認ムル場合ニ於テハ学科及入学定員ノ全部又ハ一部ニ付学科ノ転換廃止又ハ募集ノ停止ヲ命ズルコトアルベキコト

二二五 航空工業専門学校設立趣意書

(昭和十九年三月)

東北学院航空工業専門学校設立趣意書

一、東北学院ノ沿革及本校設立趣旨

財団法人東北学院ハ明治十九年愛国ノ士押川方義氏ノ創立ニ係リ爾來五十八年ノ歴史ヲ閲ス、其教育ノ趣旨トスル処ハ国体ノ本義ニ立脚シ尽忠、高潔、献身犠牲ノ愛国者ヲ養成スルニアリ、現在専門学校令ニ依ル東北学院高等商業部ト中等学校令ニ依ル東北学院中学校トヲ維持經營シ在校生二千余名ヲ有ス、高等商業部ハ敷地七千坪校舎一千五百坪ノ宏壯ナル近代建築ニシテ完備セル教場施設ヲ有ス。

然ルニ、大東亞戰勃発以來此所ニ二年、祖国ノ急愈々重大ヲ加フルノ秋、本学院ハ殉国ノ精神ニ則リ、高等商業部ノ諸施設ヲ挙ゲテ決戦兵器タル航空機ノ特ニ生産關係並ニ整備關係技術者ヲ教育養成シ、一ハ以テ現時我が国最重要教育国策ニ答へ、一ハ以テ皇国将来ノ大使命達成ニ貢献センコトヲ期スル次第ナリ。
二、本校ノ特質

イ東北学院ハ東北帝国大学工学部航空科及仙台高等工業学校ニ隣接シ、其ノ人的及実験、教育設備借用ノ援助ヲ受ケ得ラル、諒解アル事

ロ熊谷東北帝国大学総長、宮城工学部長及ビ航空学科諸教授及鶴見仙台高等工業学校長ハ共ニ本校ノ設立ニ對シ積極的ニ援助セラレ且ツ市当局モ熱心ニ之ヲ支持セラレ居ルコト

ハ株式会社萱場製作所仙台製造所ハ特殊飛行機ノ設計及ビ生産ヲ実施中ナル処同社ハ監督官庁ノ同意ヲ得ラルレバ工場ノ一部ヲ実習用トシテ供用及ビ便宜取計フベキ旨ノ意志表示ヲナシ居ル事

三、教育方針教員及學則一般

イ教育方針
教育勅語ノ聖旨ヲ奉体シ尽忠、高潔、献身犠牲ノ殉国者の風格ノ精神教育ヲ施ス

大学ガ基礎學理ニ重点ヲ置クニ對シ本校ハ航空機及航空諸兵器ノ生産技術ノ修得ヲ主眼トシ基礎學理ヲ従トス

ロ教職員

- 一 校長 東北帝国大学工学部長
工学博士 宮城 音五郎

工業材料	電気工学	材料力学	化学	物理学	力学	数学	外国語	体操	軍事教練	修身	學科	學年			
												第一學期	第二學期	第三學期	
二		二	二	三	一	四	四	二	二	一		第一學年每週教授時數	二	二	二
												第二學年每週教授時數			
												第三學期			
												第一學期			
	二					四	四	二	二	一		第二學年每週教授時數			
												第二學期			
												第三學期			
												第一學期			
												第二學期			
												第三學期			

四、學科目

- 一 教授
 - 普通學科 教授四名、助教授二名、助手三名
 - 專門學科 教授五名、助教授二名、助手五名
 - 生徒実習 技術職員 十五名
 - 事務職員 三名
- 八學則一般
 - 一 修業年限 三ケ年
- 一 教授科目
 - 1 第一、第二學年、普通及專門學科並ニ実習
 - 2 第三學年 実機製作設計及整備
- 一 收容人員 每年百名
- 一 入学資格 中等學校令ニ依ル中学四年修了者又ハ同等資格ヲ有スル者ヲ詮衡試験ニ依リ入学セシム

第四章 存廃の危機に立って

計	工場管理法	法制及経済	校外実習	航空機整備法	航空機設計及製図	工作実習	化学実験	物理実験	数学演習	航空計器	航空兵器	推進器	原動機設計法	原動機工作法	航空原動機	機構学	熱力学	機体設計法	機体工作法	機体構造及強度	飛行力学	空気力学	
四八						四	四	四	四							二	二				三		二
四八						四	四	四	四							二	二					三	二
四八						四	四	四	四							二	二					三	二
四八				八	一〇	四				二	二	二				三							二
四八				八	一〇	四				二	二	二				三							二
四八				八	一〇	四				二	二	二				三							二
五二	二	二		八	八	四				二	二		四	四					四	四			
五二	二	二		八	八	四				二	二		四	四					四	四			
五二	二	二		八	八	四				二	二		四	四					四	四			

「備考」

校外実習及び野外演習ハ休業期間又ハ適當ナル時期ニ課スモノトス。

五、現有施設及び新規設備概要

イ 現有施設

一、位 置 仙台市南六軒丁一番地

一、敷 地 七 千 坪

一、運 動 場 四 千 坪

一、校 舎 延 約一千五百坪

内 訳

1 本 校 舎 鉄筋コンクリート三階建延

2 講 堂 〃 〃 五七〇坪

3 校 舎 木 造 〃 〃 二〇〇坪

4 附 属 建 物 〃 〃 三六〇坪

一、高等商業学校生徒八百二十名ヲ收容教育スル施

設及教職員ヲ有ス

ハ

口 新規設備概要

一、機 体 五 機

一、発 動 機 五 台

一、航 空 計 器 一 式

一、兵 器 一 揃

一、電 氣 兵 器 一 揃

一、精密測定器具 一 式

一、木工場設備 一 式

一、化学実験用器具 一 式

一、物理 〃 〃 一 式

一、製 図 用 具 三〇〇組

一、旋 回 用 具 五 台

一、フ ラ イ ス 盤 一 台

一、ド リ ン グ 機 二 台

一、グ ラ イ ン ダ ー 一 台

一、プ レ ー ス 二 台

一、エ ヤ ー ハ ン マ ー 一 台

一、熱 処 理 装 置 一 揃

一、鑄 物 設 備 一 揃

一、材 料 試 験 機 一 揃

株式会社萱場製作所仙台製造所ハ本校ヨリ約一籽ノ

距離ニアリ特殊飛行機ヲ製造致シ居ル由ニツキ軍ノ

御承認ヲ得ラルレバ同所ニ依頼シテ機体及び部品ノ

製作組立整備実習ノ援助ヲ得度希望ナリ。

六、予 算

(イ) 設備費 金百五十拾参万円

内 訳

校舎及校地 金百万円 現存校舎校地充当

新規設備 金五十拾参万円 財団自己資金及寄

附金ニ依ル

(ロ) 經常費 (完成年度ニ於ケル) 金五十拾五万円

収入ノ部

月謝及実習費 金拾万五千元

維持会補助 金四万五千元

支出ノ部

諸 経 費 金五十拾五万円

二二六 萱場資郎「航空工業専門学校設立の秘史」

(昭和四十六年七月・八月)

東北学院航空工業専門学校設立の秘史

元理事 萱 場 資 郎

既に御承知の通り、創立85周年記念式典において感謝状を贈られた元理事萱場資郎氏の御挨拶は、第二次世界大戦中危機に瀕した東北学院についてであり、特

に感慨深いものでありましたので、原稿をお願いし、掲載させて頂きました。

私は只今ご紹介にあずかりました萱場資郎でございます。

本日のめでたい85周年記念式典にあたり、はからずも理事長から、昭和19年東北学院航空工業専門学校創設に協力し、永年本学院理事と同窓会東京支部長をつとめたということで感謝状を授与されました事、誠に光栄に存じ、喜んで拝受致します。ありがとうございます。

この85年間、創立者の押川先生・ホーイ先生を始めシユネーダー院長並びに歴代の院長、別けて戦後の大拡張期に際し、小田院長を中軸とし各理事長及び教職員各位の異常なご努力により、大学部を新設し、今日の大東北学院を築きあげ、毎年数千の有能な人材を輩出されるに到りましたこと、同窓の一人として誠に感謝に堪えない次第であります。

本日は、先ごろ月浦理事長・小田院長からご要望がありましたので28年前の昭和18年、陸軍から廃校と接收を内示され、学院の歴史に中断の憂き目を見ようとしたとき、私は理事の一人として、出村悌三郎院長や、その他の方々と協力して東北学院航空工業専門学校を設立し、

廃校、接收を免がれたあらしを、当時の私のこの手帖により、参考のため申し述べておきたいと思ひます。

本論に入ります前、私の経歴を申し上げます。私は仙台市荒井に生れ、大正5年中学部を出、本年73才になります。

私共中学3年の時の大正3年、第一次世界大戦が勃発し、隣人愛と人道平和を説く欧米のクリスト教国が有史以来の大残虐戦を始めました。中学4・5年の時の英文和訳はヴェルダン戦の戦況だったのです。この大戦は4年3ヶ月続き、一千二百万の死傷者を出して大正7年秋、終息しました。大戦が終ると、国際連盟が世界平和維持機構として生れましたが、主唱国の米國を始め、不参加國が多く、列強は虎視眈眈、第二次世界大戦必至の情勢がみなぎっていました。

この戦訓から、私は大國の暴力の前には、宗教も道徳も国際条約さえも無力であり、弱点を暴露した時に、好むと好まざるとに係わらず、襲われるものであることを学びとりました。永い世界史も之を示しています。このため、中学4・5年の2年間、私はどう生くべきかについて悩み続けました。私は生来、機械類の考案が無性に好きでありました。そこで一つ、この趣味を生かしたい。

二つ、全人類の義務たる世界平和達成に貢献したい。三つ、第二次世界大戦に備えて日本を守らねばならない。四つ、北大のクラーク博士の“Boys, be ambitious”に思ひ切り応えて見たい。五つ、己の名利を圖つてはならない。この五つの条件を満足させるべく考えぬいたあげく、逆説的に理想的な兵器を發明し、世を乱さんとする者への降魔の利劍たらしめようと決心したのです。今の核武装下の大戦抑止策と同じ考え方であります。これは神の摂理であり、自分の生存の目的もそこに見出し出していたのです。

早稲田に籍を置き、課外の兵器学を批判的に勉強しました。その結果いろいろの兵器の發明が生れ、陸軍技術本部を皮切りに海軍大学校、海軍艦政本部で「将来の陸軍兵器」、「将来の海軍兵器」について講演させられ、その結果無理矢理に海軍艦政本部で新兵器の研究設計を仰せつかることとなりました。一番力を入れたのは、航空母艦の発着艦設備と、着艦する飛行機の改善です。

昭和2年漸く海軍を辞し、直ちに海軍の援助で萱場製作所を設立しました。造り始めたのは設計技術的にむずかしい飛行機の油圧脚や、母艦の着航制動装置、カタパルトなどです。

私は創業早々社憲をつくりました。曰く「本社は宇宙の秘をさぐり、独創的発明によるご奉公をはかると共に、世界全人類の道徳的恒久平和の達成に寄与するを以て目的となす」とあります。営利経営ではないのです。

昭和5年からは、陸軍の注文も増え、工場もだんだん拡張され、昭和20年には全国に9工場、従業員数も一万六千五百名。学院同窓生も3人の重役を始め、三、四十名は居った事と思います。

昭和16年、日本が真珠湾に不意打攻撃をしかけた時、卑怯だとして私は去就に悩みましたが、平和主義者の人々から「陛下の開戦の詔勅が出た以上、そんな感傷にひたるべきではない。敗けないために全力をあげて生産に励むのだ」と訓され、爾来みんなと共に全力奮励努力したつもりであります。祖国防衛の夢は、はかなく破れました。現在の萱場工業は、伝統の油圧技術を主とした平和産業に従事し、従業員数四千五百名、資本金36億円の中型会社で、私は相談役をしております。

さて本論に入りますが、仙台に工場を設けたのは昭和15年で、永年に亘る県や市の誘致に根まけして、長町にあった広い紡績工場跡を買い取って作業を始めたのです。仙台工場の従業員も二千五百名おり、製品はここに

写真でご覧に入れるカヤバオートジャイロやその他の兵器を作っていました。このカヤバオートジャイロが、はからずも東北学院航空工業専門学校誕生の母体となったのです。このオートジャイロは、現在のヘリコプターの前身で、日本で作っていたのは萱場の仙台工場のみです。その頃、毎日のように霞目飛行場を発進して松島・閑上・青葉山方面を三角飛行して、訓練を行なっていましたから思い出される方も多かろうと思います。このオートジャイロは普通の飛行機より遙かに難かしい技術的要素を持つているので航空工学を学ぶ学生にとつては設計、製造、整備の点で申し分のない教材となった事と思います。現在の東北学院大学工学部の濫觴（はじまり）にもなった事と思えますので、この一型、二型オートジャイロの四つ切り写真を寄贈しますから惠存願えれば幸いに存じます。

さて、昭和18年、日本の敗戦の兆しが顕著になった10月18日、出村悌二郎院長は非常に青ざめたお顔で御上京、私に東北軍管区司令官から「東北学院は時局柄、不要不急の教育機関である。よつて今年限り廃校を命じ、校舎は軍において接收す」との命令をうけた。どうしたらよいかとの相談を受けました。そこで私はとつさに「それ

なら時局柄、緊急必要な航空学科に転進したらどうでしょうか、幸い私共の仙台工場では飛行機を造っているし、私の友人が陸軍航空本部で教育部長をしていますから、この教育部長と文部省に頼み、全力をあげて廃校と校舎の接収を中止して頂くよう頑張りましょう」と、二人で文部省と航空本部に参り協力方を懇願しました。両者とも驚いており、転進の具体案を持って来てほしいとの事でありました。10月21日、学院本部で緊急理事会が開かれ、いろいろ論議がありました。次の私の決議案が最後に可決されました。

決議 「東北学院は政府の意図に従い、高等商業部を縮減し、進んで航空工業専門学校を設置し、全力をあげて戦力発揮に貢献せん事を期す。

実施方策 1、東北大学工学部教授を東北学院航空工業専門学校長にお迎えし、その他の航空学科教授陣を極力兼任教授にお願いする事。
2、萱場製作所仙台製造所のオートジャイロに生産工場を、新設航空工業専門学校学生の実習場としてあらゆる便宜を図る事。

『東北学院時報』二六一号 昭和四十六年七月二十八日

3、この理事会決議を至急、東北軍管区司令官、文部省、陸軍航空本部、陸軍技術本部、東北大学総長、宮城工学部長、県知事、内政部長に伝え、之が実現に関し積極的援助をお願いする事」

10月22日、前日決定した理事会決議を各方面に伝えて援助を請うべく出村院長等は軍管区司令官、県知事や内政部長に面会し、了解を求めた。私は単独で熊谷岱蔵東北大学総長を、院長代理として自宅に訪れ懇願した。熊谷総長は文部省がよいと言えば結構です。協力しようと言われた。又、宮城首五郎工学部長(後の宮城県知事)も熊谷総長がよいと言われれば協力しようと言われた時は実に嬉しかったのである。

なぜ私が単独で訪れたかといえば、熊谷総長は内科学の泰斗であり、私は二度も入院し直接診療して頂いたことと、私の叔父の次郎が熊谷先生の愛弟子で、いつも身辺で代診していたのでよく存じあげていたのである。また、宮城工学部長は機械工学科の泰斗で、18年初頭から熊谷総長のお許しを得て、わが社の顧問にお願いしていた関係もあり、また19年3月末で停年退職されることも聞いていたのである。

この外、東北大学工学部航空学科の成瀬・佐藤・小日方の三教授も私共の仙台工場の顧問にお願ひしていた。

これ等官立大学の教授を民間会社の顧問にお願ひする事は、太平洋戦争開始以来、産学協力して、戦力増強を図る意味で文部省も認めていたのである。

この日の午後、出村院長は正式に熊谷総長、宮城工学部長を訪れ快諾を得られた。なお、私は帰京後直ちに陸軍航空本部教育部長隈部正美少将を訪れ、理事会の決議を示し協力を懇請した。隈部少将と私とは、彼が参謀本部航空科長当時、参謀本部第一部長石原莞爾中将の命で、昭和10年と12年の2回に亘り、ソ満国境地帯を2週間づつ行動を共にして以来の懇友なのである。隈部少将は快諾され、自分が東北軍管区司令官と連絡をとり、その上、仙台に向いて廃校と接收解除につとめましようといわれた。

11月4日、この日熊谷総長は上京された。その前、独自で宮城工学部長と三浦事務官に命じて作製させた、東北学院航空工業専門学校の実施計画書を持参されたのである。これを文部省専門教育局長永井浩氏に示され、この実施計画書通り学院を転進させるので廃校や校舎接收を取止めてもらいたいといわれた。永井局長はこの計画

書を読まれて、「了解しました。極力努めます。」といわれたそうである。この事は早速熊谷総長から私に電話でお知らせあつたので、私はただちに、之を院長に打電し6日上京するよう申し入れた。

11月6日、この日、私は築地の料亭小松に熊谷総長、隈部陸軍少将、文部省の永井専門教育局長、出村院長、伊達興宗顧問をお招きして六者会談を開いた。

この席で、隈部少将から「東北学院航空工業専門学校の設立と運営につき、陸軍航空本部と陸軍技術本部は出来るだけ面倒を見るつもりでありますから、文部省も設立認可と運営につき協力してもらいたい。また、私は近く東北学院と萱場仙台工場を訪れ、その上、東北軍管区司令官に会つて廃校と校舎の接收解除を申し入れるつもりであります」とのべられ、続いて永井局長は「承知しました」と挨拶された。

11月27日、この日私は隈部少将と同行して来仙、東北学院で院長の歓迎を受けて視察、ついで萱場のオートロジヤイロ生産工場等を視察、このあと東海林東北軍管区司令官に会われた。ここで隈部少将は「陸軍航空本部及び陸軍技術本部は東北学院航空工業専門学校の設立と運営の面倒を見るつもりです。また、萱場の仙台工場は、オ

トジャイロの生産工場を挙げて学生の実習にあらゆる便宜をはかる方針でありますから、東北学院の廃校と校舎の接収はやめてもらいたい」旨を述べられ、なお、前記の熊谷総長が造らせた計画書を手渡した。これに対し、東海林中将は「わかりました。出村院長もお出になり、文部省からも話があり、また、貴官がわざわざ航空本部の意志を伝えるに來られたので、廃校と接収通知を取消させましよう」と改めてこの件を確認されたのである。

その夜、隈部少将を主賓とし、熊谷総長、宮城工學部長、出村院長と私とで心からなる嬉しい祝宴を開くことができた。

12月30日、この日の理事会に宮城音五郎博士は勲章で着飾った正装で理事会に出席され、正式に東北学院航空工業専門学校長に就任する挨拶を述べられた後、航專運営の実施案を示された。主な内容は機体科50名・発動機科50名・製作科50名の一五〇名を募集すること。設備資金として32万円、1年分の経費10万円・計42万円を用意されたいとの申出があった。私は設備資金の内訳を見ると、これらの施設は全部、萱場の仙台工場にあったし、機械工場としても東北第一の設備を持っているので、32万円は要らない筈である。また、経費10万円は12月16日

既に私が出資してあるので不要の旨を明らかにしたので宮城校長もこれを了承された。

昭和19年1月21日、この日の理事会で宮城校長は学院航專の入学試験日を3月23・24・25の3日間行なうこと、試験科目は歴史・英語・数学・物理とし、入学式を4月26日とすることを決めました。なお、当日の入学者は一五五名でありました。

また、これとは別に、私は、学生達の関心を出来るだけ空に向けさせたいと考えて、グライダーを二機学校に寄贈いたしました。今日のように進歩したグライダーではなかつたが、それでも有志の研究グループがあつて盛んに研究活動をしておつたので、大いに喜ばれました。

また、19年9月13日、東北学院募金会を発足させ、新橋の第一ホテルの一室を事務所借りうけ専任者をおいて募金活動を開始したことなどを思い出される。

しかるに、その頃、太平洋戦争は日に日に不利におちいり、19年の末には日本本土空襲がはじまり、文科系の大学・専門学校は学生募集の停止を命ぜられる有さまで、東北学院高等学部は、航空工業専門学校の設置によって、辛うじて命脈を保つたのであつた。が、それも束の間、20年8月15日の終戦に及んで、国の戦時体制は全く崩壊

し、教育体制も一変してしまった。

かくて、20年12月5日の学院理事会は、今までの航空工業専門学校を「東北学院工業専門学校」と改称し、学習科目から航空関係を除くことが決定されたが、つづいて21年4月、「東北学院専門学校」の設置によって、学院本来の文科系の専門学校に復帰したので、工業専門学校は22年3月限り廃止の運命に見まわれた。あれほどまでの努力も一場の夢の感もしないわけではないが、しかし、後年専門学校が大学に発展し、37年4月、広大な多賀城キャンプに工学部となって復活する、有力な潜在的原動力になったのであるまいかと、いささか自負する節もな いではありません。

（『東北学院時報』二六二号 昭和四十六年八月二十八日）

二二七 仙台空襲と「当直日誌」

（昭和二十年七月九日・十日）

七月九日 宿直（月） 晴 志子田喜吉
巡視 午后八時、全九時四十分

警戒警報后九時四十分頃発令十時二十分解除
七月十日 日直（火） 晴 米谷 満定

東北帝大工学部会計伊藤氏宮城先生面会ニ来リシモ御不在（一時半頃）明十一日法文科教室ニ於テ特攻幹ノ試験施行ノ予定ナルモ空襲ヲ受ケタルニツキ延期ニナルニアラズヤト問合セニ高商科三年下村、岡本、航専二年渡辺和来校津田一郎先生ニ御訊ニスル様申置ケリ、江馬誠也（航専生）昨夜モ本朝モ逸早く駆ツケ母校ノ安否ヲ氣使フ、航専二年佐藤重典特攻幹試験ニツキ問合セニ来ル上記ノ手續ヲ取ル高商三年二部鈴木久吉試験答案提出セリ午後一時半出村院長出校執務後御退出尚答案ハ津田一郎先生ニ御依頼セリ、通信局員鑑板借用ニ来ル使用後直チニ返還セリ（当直日誌）

二二八 東北学院の戦災

（昭和二十年七月十日）

東北学院の被災 学院ではじめて防空警備の措置をはじめたのは、昭和十六年十月十三日の夜が嚆矢である。

その頃北九州のあたりに国籍不明の飛行機が現われたことがしばしば報ぜられ、日本軍は中国に手をやいて南部仏印に進駐し内では東条内閣が出現しようとしていた頃である。即ち従来一人であった宿直の職員を二人に増しなお生徒十名宛を夜の九時まで、残して警戒に当らせた。勿論市中でも各々隣組や町内防護団が組織されて、パケツおくりの練習などが奨励され、各学校でもポンプを整備したり防空防火の予備演習をたびたび行つて訓練していた。

然し七月十日の敵機襲来の際にはそれらの方法は何の役にも立たなかつた。身をもつて避難するのが精いつばいのことであつた。

中学部での損害は旧寄宿舎を改造した四教室宛の校舎二棟、剣道場、柔道場、作業教室、理科教室二階建二棟社交館等木造建築物全部を焼失し、なお耐火煉瓦造の本校舎も窓から火が入り講堂、玄関、事務室、三階音楽室等の内部木質の部分の部分を焼きつくした。

昭和二十年七月十日戦災焼失建物明細表
(中学校の部)

用途	構造	建坪	延坪
普通教室	木造トタン葺平家建	一五・〇〇坪	一五・〇〇坪
同	木造セメント瓦葺平家建	一八・三五	一八・三五
同	木造便利瓦葺二階建	二〇・〇〇	四〇・〇〇
理科教室	木造トタン葺二階建	三〇・〇〇	三〇・〇〇
同	木造トタン葺平家建	三〇・〇〇	三〇・〇〇
剣道場	同	三・七五	三・七五
柔道場	同	三・七五	三・七五
作業教室	同	三・七五	三・七五
雨天体操場	同	六・〇〇	六・〇〇
兵器室	同	一三・〇〇	一三・〇〇
舎監住宅	同	二六・〇〇	二六・〇〇
小使住宅	木造便利瓦葺平家建	一〇・〇〇	一〇・〇〇
社交館	木造スレート葺二階建	三〇・〇〇坪	七七・〇〇坪
合計	一二棟	五三・〇〇坪	六五・〇〇坪

(専門学校の部)

用途	構造	建坪	延坪
校舎	木造トタン葺平家建	四〇・〇〇坪	四〇・〇〇坪
同	木造セメント瓦葺平家建	五〇・〇〇	五〇・〇〇
同	木造スレート葺二階建	一三〇・〇〇	一四〇・〇〇
教室及科長室	木造トタン葺平家建	六〇・〇〇	六〇・〇〇
兵器庫並雨天体操場	同	一〇五・〇〇	一〇五・〇〇
教官室	同	六〇・〇〇	六〇・〇〇
生徒監宅	同	三〇・〇〇	三〇・〇〇
校友会部庫	木造セメント葺平家建	三〇・〇〇	三〇・〇〇
院長住宅	木造瓦葺平家建	五三・五〇	五三・五〇
合計		三九〇・五〇坪	四二〇・五〇坪

(『東北学院七十年史』)

第五章 戦後の苦難

二二九 航空工業専門学校の名称および学則変更認可申請書類

(昭和二十年八月二十三日)

昭和二十年八月二十三日

東北学院航空工業専門学校長

宮城音五郎

文部省専門教育局長

関口 勲殿

拝啓

陳は今後の教育其他に関する指令連絡のため本日貴省より小出教学官一行東北帝大に來られ同学幹部並に在仙高等専門学校の参集を求められたる御示旨に基づき本校の名称を東北学院航空工業専門学校より東北学院工業専門学校に改め同時に学科別並に生徒収容定員を左の通り定むるを適切と考へ早速本日より其れを實行致し候に付御認可相成度猶ほ本件は小出教学官の諒

解決に付念のため申添候

記

敬具

名称 東北学院工業専門学校

学科名及生徒収容定員

機械科 八〇

電気科 四〇

工業経営科 八〇

名称及学則變更認可申請

東北学院航空工業専門学校ノ名称ヲ別紙ノ通り變更致シ
度候ニ付御認可相成度此段及申請候也

昭和廿年九月二十日

東北学院航空工業専門学校設立者

財団法人東北学院理事長 杉山元治郎 印

文部大臣 前田 多門殿

理由書

政府ノ新政策ニ遵ヒ当校従来ノ目的ヲ一擲シテ新ニ平和
的世界文化ノ建設ニ貢献セシムルタメニ必要ナル人材ヲ
養成セントスソノ名実相適セシメンガ為メ校名ヲ改メ之
ニ伴フ学則ヲモ變更セントスルモノナリ而シテ現在生徒
ハ左記ノ通り処置セントス

生徒数調

航空機科 製産工業科 機械 建築 計

一学年生 一一〇名 一学年生 五六 五六 一一二名

二学年生 九〇名 二学年生 四九 四九 九八名

発動機科 工業経営科

一学年生 五〇名 一学年生 四八名

二学年生 五〇名 二学年生 四二名

一、名称變更

現在ノ名称 東北学院航空工業専門学校

變更後ノ名称 東北学院工業専門学校

二、学則變更

第二条 第四条及第六条ヲ左ノ通りニ改ム

第二条 本校ニ左ノ学科ヲ置ク

製産工業科 機械分科

建築分科

工業経営科

第四条 毎年本校ニ入学セシムル生徒ノ定員左ノ如

シ

製産工業科

工業経営科

機械分科 七〇名

建築分科 七〇名

工業経営科 六〇名

第六条 学科目及毎週授業時数左ノ如シ(省略)

三、変更ノ実施期日 認可ノ指令ヲ得次第

理事会決議ノ写

一、東北学院航空工業専門学校ハ東北学院工業専門学校

ト改称ス(寄附行為第四条 規程第四条)

二、航空機科及発動機科ヲ廃止ス(学則第四条)

三、製産工業科及工業経営科ヲ特設シ更ニ前者ヲ機械分

科ト建築分科ノ二分科ニ分ツ

各科ノ定員ハ夫々左記ノ通りトス(学則第二条及第四条)

製産工業科

機械分科 七〇名

建築分科 七〇名

工業経営科

六〇名

右決議ス

昭和廿年九月十八日

理事

阿部 豊吉

宮城 音五郎

出村 剛

一力 次郎

諸石 靖

杉山 元治郎

伊勢 武

本間 正雄

津田 郁

小山田 正直

鈴木 義男

右ハ原本ト相違ナキコトヲ証ス

理事長 杉山元治郎 印

寄附行為中変更認可申請

本法人ノ寄附行為中別紙ノ通り変更致シ度候条御認可相成度此段及申請候也

昭和廿年九月廿日

財団法人東北学院理事長

杉山元治郎 印

文部大臣 前田 多門殿

理由書

新政策ニ從ヒ平和的世界文化建設ノタメ貢獻シ得ル人材ヲ養成センガタメ寄附行為中ノ一部ヲ変更セントス

変更ノ条項

現行規程

第四条 前条ノ目的ヲ達成スル為専門学校令ニ依ル東

北学院航空工業専門学校及中等学校令ニ依ル東北

学院中学校ヲ維持經營ス

規程第四条第二項

東北学院航空工業専門学校及東北学院中学校ノ規

程ハ夫々別ニ之ヲ定ム

改正規程

第四条 前条ノ目的ヲ達成スル為専門学校令ニ依ル東

北学院工業専門学校及中等学校令ニ依ル東北学院

中学校ヲ維持經營ス

規程第四条第二項

東北学院工業専門学校及東北学院中学校ノ規程ハ

夫々別ニ之ヲ定ム

理事会決議ノ写

一、東北学院航空工業専門学校ハ東北学院工業専門学校

ト改称ス(寄附行為第四条 規程第四条)

二、航空機科及発動機科ヲ廃止ス(学則第四条)

三、製産工業科及工業経営科ヲ特設シ更ニ前者ヲ機械分

科ト建築分科ノ二分科ニ分ツ

各科ノ定員ハ夫々左記ノ通りトス(学則第二条及第四条)

製産工業科 機械分科 七〇名

工業経営科 建築分科 七〇名

右決議ス 六〇名

昭和廿年九月十五日

理事 阿部 豊 吉

宮城 音五郎

出村 剛

一力 次郎

諸石 靖

杉山 元治郎

伊勢 武

本間 正雄

津田 郁

小山田 正直

鈴木 義男

萱場 資郎

右ハ原本ト相違ナキコトヲ証ス

理事長 杉山元治郎

印

昭和二十年十月五日

文部省専門教育局監理課長

山崎 高

東北学院航空工業専門学校長 宮城音五郎殿

昭和二十年八月二十三日附学工発第二〇九号ヲ以テ学校

名及学科名変更ニ関シ専門教育局長宛御申越有之候処右

ハ左記ノ点御留意ノ上更メテ申請相成様致度此段貴意候

記

一、申請書ハ学校名及学則変更認可申請トシ理事長ヨリ

文部大臣宛トセラレ度コト

二、現在入学定員ハ計一五〇名ナルニ付之ガ増加及原学

科ト著シク内容ヲ異ニスル学科名ノ変更ハ今次措置ガ

終戦ニ伴フ臨時応急的ナルモノナル点ニ鑑ミ認めラレ

ザルコト

三、電気科ハ設備ノ如何ニヨリ卒業後技術者トシテノ資

格ヲ左右セラレル等ノ関係モアリ御再考相煩度

尚航空機科、発動機科ノ両科ハ機械科トスルヲ適當ト

認め右様他学校ニ指導シ居レリ為念

四、右申請ニ当リテハ理事会決議録ヲ添附セラレ度コ

ト

宮專一三号

東北学院航空工業専門学校設立者

財団法人東北学院

昭和二十年九月二十日附申請校名変更ノ件認可ス

昭和二十年十二月四日

文部大臣 前田 多門 印

宮專一三号

昭和二十年十二月四日

文部省学校教育局長 印

財団法人東北学院院长殿

昭和二十年九月二十日附ヲ以テ申請有之タル校名変更並

ニ学則改正ノ件中校名変更ノ件ハ別紙ノ通り認可相成タ

ル処学則改正ノ件ハ御再考相成度書類一応却下ス

地学二四号

東北学院航空工業専門学校設立者

財団法人東北学院

昭和二十年九月二十日附申請寄附行為中変更ノ件認可ス

昭和二十年十二月四日

文部大臣 前田 多門 印

教第一八一三号

昭和二十年十二月十三日

宮城県内政部長 印

財団法人東北学院長殿

名称並学則変更ニ関スル件

東北学院航空工業専門学校ノ名称学則及寄附行為変更ノ件進達中ノ処名称及寄附行為ノ変更ハ夫夫別紙ノ通認可相成候モ学則ノ変更ハ再考相成度趣ヲ以テ一応却下セラレタルニ付御了知相成度

二三〇 専門学校設置認可申請書類

(昭和二十一年二月十六日)

専門学校設置認可申請

専門学校令ニ依リ東北学院専門学校ヲ設置致度候条御認可相成度公私立専門学校規程第一条ニ依リ別紙書類ヲ具シ此段及申請候也

昭和廿一年二月十六日

財団法人東北学院

理事長 杉山元治郎 印

文部大臣 安倍 能成殿

設置趣意書

東北学院ハ創立当初ヨリ宗教的信念ノ啓発ト人格ノ教養トヲ以テ教育ノ重要ナル一要素ナリト信ジ多年之ガタメニ努力セリ。勿論時代ノ変遷ニ伴ヒ幾度カソノ組織ト方法トノ変化ヲ見タレド根本的ニハ終始一貫円満ナル人格ノ修養ト優秀ナル智識ノ授与トヲソノ目的トセリ。今ヤ我国ノ情勢ハ急転直下未會有ノ危機ニ直面ス即チ数年来急激ナル国情ノ変遷ニツレテ幾度カソノ組織ヲ変更シタル我校モ之ヲ復旧シテ更ニ創立ノ精神ヲ一層強化シ以テ平和の世界文化ノ建設ニ貢献シ得ル人物ノ養成ヲ計ラントス

茲ニ再ビ東北学院ノ組織ヲ改メ東北学院工業専門学校ヲ廃止シテ新ニ英文科ト経済科トヲ設置シ学院本来ノ目的達成ニ精進努力セントスル所以ナリ

設置要項

一、目的

本校ハ専門学校令ノ定ムルトコロニ依リ実業及教育ニ従事スベキ者ニ須要ナル高等ノ學術ヲ授ケ社会ニ有用ナル人物ヲ養成スルヲ以テ目的トス

二、名称 東北学院専門学校

三、位置 仙台市南六軒丁一番地

四、修業年限 参年

五、毎年入学セシムベキ生徒定員

英文科 一〇〇名

英文科第二部 五〇名

経済科 一五〇名

経済科第二部 一〇〇名

六、学則 別紙ノ通り

七、校地 三町〇反三畝二七步

八、校舎

建坪 五一九坪

延坪 一、二二一坪

財団法人東北学院所有ニシテ工専校用。因ニ工専校

ハ現在生ヲ限り募集ヲ停止シ現在生卒業ノ後ハ廃止

シテ校地、校舎ハ悉ク新設学校ノ用ニ供スル予定ナ

リ

九、開校年月 昭和二十一年四月

十、経費及維持ノ方法

基本財産収入、授業料及其ノ他ノ収入ヲ以テ支弁ス

十一、基本金

参式四、参参壹円七九銭(別紙財産目録参照)

十二、学費

授業料 三五〇、〇〇〇 (二部)

入学検定料 二〇、〇〇〇 (二部)

入学料 一五、〇〇〇 (二部)

十三、教員組織(別紙ノ通り)

(注・設置要項中六、十一、十三省略)

宮学一四号

財団法人東北学院

昭和二十一年二月十六日附申請東北学院専門学校ヲ専門

学校令ニ依リ設置ノ件認可ス

昭和二十一年三月三十日

文部大臣 安倍 能成 印

二二二 寄附行為変更認可申請書類

(昭和二十一年二月十六日)

寄附行為変更認可申請

本法人ノ寄附行為中別紙ノ通り変更致シ度候条御認可相成度此段及申請候也

昭和廿一年二月十六日

財団法人東北学院

理事長 杉山元治郎 印

文部大臣 安部 能成殿

一、変更ノ简章 第三条、第四条及第五条 左記ノ通り

第三条「本財団ノ目的ハ教育ニ関スル勅語ノ聖旨ヲ奉

体シテ普通教育並ニ高等専門教育ヲ施シ以テ国家

有用ノ人材ヲ養成スルニアリ」トアルヲ

第三条「本財団ノ目的ハ基督教ニ基キテ德育ヲ施シ普

通教育並ニ高等専門教育ヲ施スニアリ」ト

第四条「前条ノ目的ヲ達成スル為専門学校令ニ依ル東

北学院工業専門学校及中等学校令ニ依ル東北学院

中学校ヲ維持経営ス」トアルヲ

第四条「前条ノ目的ヲ達成スル為専門学校令ニ依ル東

北学院工業専門学校、東北学院専門学校及中等学

校令ニ依ル東北学院中学校ヲ維持経営ス」ト

第五条「本財団ノ理事ハ十二名トス其ノ中少クモ七名

ハ日本基督教団ニ属スル教会ノ会員タルベシ」ト

アルヲ

第五条「本財団ノ理事ハ十二名トス其ノ中少クモ八名

ハ日本基督教団ニ属スル教会ノ会員タルベシ」ト

二、理由書 国家ノ新情勢ニ対応シ平和的世界文化建設

ノタメニ貢献シ得ル人材ノ養成ヲナサントシ学校

ノ組織ヲ変更センガ為必要ナル一部分ヲ変更スル

モノナリ

添付書類

決議録写

現行寄附行為(旧)

改正寄附行為(新)

理事会決議録ノ写

一、東北学院専門学校設置ノ件

二、東北学院工業専門学校廃止ノ件

三、寄附行為中一部変更ニ関スル件

右決議ス

昭和廿年十二月二日

理事 阿部 豊吉

宮城 音五郎

出村 音剛

一力 次郎

諸石 靖
杉山 元治郎

伊勢 武

本間 正雄

津田 郁

小山田 正直

鈴木 義男

萱場 資郎

右八原本ト相違ナキコトヲ証ス

理事長 杉山元治郎 印

(注・添付書類中現行、改正寄附行為省略)

宮学一四号

財団法人東北学院

昭和二十一年二月十六日附申請寄附行為中変更ノ件認可ス

昭和二十一年三月三十日

文部大臣 安倍 能成

本膳本八原本ト相違ナキコトヲ認証ス

昭和二十一年三月三十日

文部省 印

二二二 高等商業部廃止認可申請書

(昭和二十一年三月七日)

専門学校廃止認可申請

先ニ東北学院航空工業専門学校設置御認可相成候ニ付東北学院(高等商業部)ハ昭和十九年度以降入学志願者ノ募集ヲ停止中ノ処今般復員学生ノ外在籍者ナキニ至リタルニツキ本年度限り(三月三十一日)廃止致シ度候間御認可相成度左記ヲ具シ此段及申請候也

昭和二十一年三月七日

財団法人東北学院

理事長 杉山元治郎 印

文部大臣 安倍 能成殿

記

一、理 由 新ニ東北学院専門学校設置ノ為

一、復員者ノ処分 新設東北学院専門学校経済科ニ編入

一、理事会決議録写

理事会決議録写

一、東北学院専門学校設置ノ件

二、東北学院工業専門学校廃止ノ件。本年度限り募集中

止、在籍者ナキニ至リ次第廃止ス

三、東北学院廃止ノ件

右決議ス

昭和二十年十二月十日

理事

右ハ原本ト相違ナキコトヲ証ス

阿部 豊吉

宮城 音五郎

出村 剛

一力 次郎

諸石 靖

杉山 元治郎

伊勢 武

本間 正雄

津田 郁

小山田 正直

鈴木 義男

萱場 資郎

理事長 杉山元治郎

印

二三三 工業専門学校生徒募集中止認可申請書

類

(昭和二十一年三月七日)

募集中止ニ関スル認可申請

先ニ教育ノ非常措置ニ対応センガ為従来ノ学校組織ヲ一
変シテ本校ニ転換セシガ今ヤソノ要ナキニ至リタルヲ以
テ再ビ改組シテ新ニ専門学校ヲ設置シ本校ハ在籍者ナキ
ニ至リ次第廃止スル意向ヲ以テ本年度限り(三月三十一
日)生徒ノ募集ヲ中止致シ度候間御認可相成度左記相添
へ此段及申請候也

昭和二十一年三月七日

東北学院工業専門学校設立者

財団法人東北学院

理事長 杉山元治郎

印

文部大臣 安倍 能成殿

理事会決議録写

一、東北学院専門学校設置ノ件

二、東北学院工業専門学校廃止ノ件。本年度限り募集中

止、在籍者ナキニ至リ次第廃止ス

三、東北学院廃止ノ件

右決議ス

昭和二十年十二月十日

理事 阿部 豊吉

宮城 音五郎

出村 剛

一力 次郎

諸石 靖

杉山 元治郎

伊勢 武

本間 正雄

津田 郁

小山田 正直

鈴木 義男

萱場 資郎

右ハ原本ト相違ナキコトヲ証ス

理事長 杉山元治郎

印

宮学一四号

財団法人東北学院

昭和二十一年三月七日附申請東北学院廃止並ニ東北学院
工業専門学校生徒募集中止ノ件認可ス

昭和二十一年三月三十日

文部大臣 安倍 能成 印

二三四 専門学校学級増加認可申請書

(昭和二十一年三月十二日)

学級増加認可申請

東北学院工業専門学校生徒ニシテ東北学院専門学校経済
科第一学年ニ転学ヲ志望スル者多数有之候ニ付昭和二十
一年度ニ限り同科一年ヲ一学級増加致シ度候間御認可相
成度左記ヲ具シ此段及申請候也

昭和二十一年三月十二日

財団法人東北学院

理事長 杉山元治郎 印

文部大臣 安倍 能成殿

記

一、理由 戦災ノ結果食料及居所ノ事情ニ依リ首都遊学
希望者中地方分散ノ止ナキ者尠カラズト信ズ。此

際当校ハ組織ノ変更ヲ周知セシムル方法ヲ講ズル
必要アリ。而シテ開校第一年度ニ於テ定員ノ約半
数ダケヲ收容シ得ルニスギヌトセバ学校ノ信用ニ
関シ将来ノ発展ニモ支障ヲ来ス恐レナシトセズ。
当年丈一学級増加ヲ請願スル所以ナリ。

一、転科希望者

一五一名

一、教室ノ設備

講堂地階室

一四五坪

シュネーダー記念館

四〇坪

二三五 八木山土地問題記録

(昭和二十一年五月〜二十四年三月)

(昭和二十一年)五月二日 午後四時 専門校校長室
一、八木山六十八万坪ヲ紅久ヨリ学院ノ所有ニ移譲スル
ノ件

別記ノ通り契約書ヲ両者間ニ交換スルコト

〔後略〕

(理事会記録)

(昭和二十二年)七月四日 専門校校長室 午前十時

〔中略〕

引続き出村氏ヨリ

一、八木山問題ノ報告 寄附ノ形ニテ譲り受ケアトデ謝
礼ヲ出スコト

〔後略〕

(理事会記録)

(昭和二十三年)三月十五日 午前十時

〔中略〕

一、八木山問題

既ニ六十八万坪買収案ハ放棄、必要量ノ五万坪案ヲ檢
討シタリ、右案モ現在ノ財政状態トシテハ中々、二加
フルニ八木山ヲ買収スルヨリモ校舍近隣ヲ買収シタ方
可ナラントノ意見モ出デ四月初旬ノ臨時理事会迄懸案

〔後略〕

(理事会記録)

(昭和二十三年)五月十一日 午前十時 院長室

〔中略〕

一、八木山問題ハ全部譲渡シテ貰フコトニ決ス

(理事会記録)

〔昭和二十三年〕十一月十三日(木) 午後三時

〔中略〕

一、八木山買入の件

調査方を津田大石氏に

津田氏より市長に面会水道の件は心配なし、小作人の問題は農林技師より説明を聞き六ケシイとの事、価格の件は不明。長町根岸一番地時価の二百六十倍、五十四万円と評価す、勸業銀行の評価は坪三円乃至四円位との事、尚ヨイトコロ十坪位可ならんとの事、(1)毛上を含み、(2)耕作権の完全移転を条件として。尚文書にて八木家へ返事をするにす。

(理事会記録)

昭和二十四年三月二十九日 午前十時開会 院長室に於て

〔中略〕

八木山土地買収について

八木家より寄附は受けるも、学院の経理財政に余裕を生じた際には必ず相当の謝礼を尽すこと、遅くも十年

以内には御礼実現せん、兎に角学院の第二段発展のため敷地としては非八木山は確保して置きたし、右八木家との交渉委員に本間、大石理事に依頼す。

〔後略〕

(理事会記録)

二二六 創立六十周年記念式における出村剛の

式辞と記念行事日程

(昭和二十一年九月十三日)

〔出村 剛〕

母校創立六十周年記念日を迎えて私共は新たに、創立者の人格を景仰し、学院創立の精神に対する認識を深めさらに、創立の当初から今日に至る六十年間に於ける学院の変遷発展の経路を回顧し、天父の豊なる恩寵と創立者並びに歴代の教職員、同窓先輩、内外の後援者の献身的努力に対し、心からなる感謝を捧げるものである。

私共が校祖と呼んで居る創立者押川・ホーイ両先生と、両先生の事業を継承せられたシユネーダー先生の三先生は各々独自の人格的特色を有つて居られた。憂国の志士

型の押川先生、熱烈な信仰の人ホーイ先生、慈父の如き温情の人シユネーダー先生と、互に特色はあるが、基督教の信念が三先生の人格の根柢をなして居ることに於いては共通するものがある。基督教的人格の三様の表現と観てよいであろう。かかる偉大な人格者を校祖として敬慕し得ることは我学院の誇りである。

学院創立の動機と精神については敢て多言を費す迄も無く、甚だ明瞭である。そもそも押川先生が、明治五年に横浜に於いて受洗、伝道に献身せられた動機は即ち学院創立の動機精神であつた。学院が仙台神学校と称して創設せられた事実によつても伺い知られる如く、基督の福音の宣伝者を養成し、また、彼等によつて、基督の救を体験した再生、新生の基督者を得るることによつて、祖国日本を真に偉大な国家たらしめんとする愛国的熱願こそ学院創立の精神であつた。今日の我学院に、創立者のかかる精神が如何程迄に生きて働きつつあるかを静かに反省吟味すべきである。創立者の抱いて居た宗教的、愛国的熱願が皆無とはいわずとも、ともすれば、第二、第三義的のものとなりつつありはせぬか。然らば他の公立学校と何の選ぶ所があるろう。味を失ひたる塩は用無き存在として外にすてられるべき運命を有たねばなるま

い。さて、学院六十年の歴史を回顧すれば、それは、決して順風満帆の如きものではない。幾多大小の苦難と障害とに充ちたものであり、これらと悪戦苦闘し、よくこれらを克服した血涙の努力の歴史である。今ここに、それらの苦難を列挙する違は無いが、特に創立後間も無い時代の困難は想像に余りあるものがあつたと聞く。学院創立の前後、明治十五年から二十年代の初めの数年は我が国が欧化思想から次第に国家主義、国粹主義、保守主義に転じつつあつた反動期であつた。二十二年の憲法発布、二十三年の教育勅語煥発を機として、この傾向は激化し、ひいては、基督教に対する排撃が盛んになり、加うるに、基督教会内部の神学的新旧思想の衝突あり、基督教会と同主義教育の一大危機が到来した。此の間に於ける押川先生が毅然としてその信念を曲げられなかつた一例として、先生が、両陛下の御真影奉拝問題について、「郵便報知」に寄せられた一文を引用すれば、「各小学校に陛下の尊影を掲げ幼少の子弟をして之に向い拝礼をさしめ勅語を記したる一片の紙に向つて稽首せしめるが如きは必ずしもこれ宗教上の問題として論ずべからざるも、我輩教育上に於て其の如何の利益あるかを知るに苦しむ。皇上は神なり、之に向つて宗教的拝礼をなすべしと言わば我

輩死を以て之れに抗せざるを得ず」と、思い切つた大胆な言葉を述べて居らるるところに先生の悲壮な決意を見るのである。国体と基督教衝突問題は益々尖鋭化し、遂には、教育と宗教の衝突論にまで発展し、政府は明治三十二年に、学校に於ける宗教的儀式と聖書教育とを禁止するに至つた。基督教主義学校にとつてまさに致命的打撃といふべきものであつた。しかしながら、我学院は経営の大困難をも意とせず、基督教主義教育を継続したのである。これは学院の遭遇した危機克服の一例である。

国家、社会の情勢、傾向の変動、推移を洞察し、時代の要求に応ずる如き制度、組織、方法、の変更を断行するに吝でなかつたが教育上の根本的主義、精神に至つては、終始一貫未だ節を屈した例を残さなかつた諸先輩の節操に対して、私共は深甚な敬意と感謝とを捧ぐるものである。

母校の過去を追想して感謝を捧ぐることは大いなる喜悅ではあるが、今は唯徒に過去の追憶にのみ耽るべき時ではない。過去数年に亘つて抑制と弾圧とに苦しみつたあつた基督教主義学校には今や一陽来復の観がある。学院の教育的使命達成にとつては絶好の機会が恵まれてゐる。此際私共は先ず、謙虚な精神をもつて反省し、冷静

な科学的態度をもつて、批判のメスを振り、学院の過去と現在の姿とを検討し、周到、精緻な用意の下、雄大な理想と抱負とをもつて、学院明日の計画を立案する責任を有する。次ぎの新しき五十年、六十年後の学院のあるべき姿を幻に画くことこそ、この記念日に於ける務である。学院六十年の歴史の中には少なからざる過誤が行われ、今日に於ても種々なる欠陥が認められることを卒直に容認すると共に、これらを、是正、改善することに努力しようではないか。かかる態度によつてのみ進歩、発展が期せられるのであらう。

押川先生が予言者の明をもつて予見、唱道せられた教育的使命と主義、精神とは、今日の我国に於て、奇しくも、最も必要、適切なものとなつて来た。敗戦日本の甚だしく頹廢した国民の道義を昂揚、純化し、新日本の国是となつた民主主義を確立し、平和国家を建設して、新日本の世界的使命を達成するためには、厳正、高潔な道義観を有し、真正な民主主義の唯一の基礎である魂の尊貴を信じて各個人の人格観念を確立し、そして、神の国の理想を抱いて、その到来を熟願し、人類愛を力説する基督教信念を描いて、その力の源泉を何処に求め得べきか。かかる信念に燃え、かかる新日本建設の大業に献身

する日本人を育成する学院の教育的使命の達成に向つて協力一致、勇往邁進せんとの決意を固くすることによつて、初めて、六十周年記念は私共にとつて、真に意義あり、価値あるものとなるであらう。学院の将来に、天父の祐助を祈り、使命完遂の誓を新たに、この拙文を終る。

記念行事日程

九月十三日(日) 記念礼拝並に記念式

同 十四日(月)

記念講演会

講師 大内 兵衛 (東大教授)

〃 斎藤 勇 (東大教授)

記念文芸講演会(夜)

講師 日野 士朗 (文芸評論家)

〃 桑原 武夫 (文芸評論家)

同 十五日(火) 記念音楽会

同 十六日(水) 記念弁論大会(県下各中等学校)

同 十七日(木)

記念演劇大会「太陽の子」学生演劇部

於東北大学講堂

同 十八日(金) 記念運動会

その他十三日より毎日学校校舎を公開し、写真展、絵画展、模擬店等を催して賑わつた。
(「東北学院七十年史」)

二三七 工業専門学校在学生の措置に関する認可申請書

(昭和二十一年九月二十六日)

昭和二十一年九月二十六日

財団法人東北学院理事長 杉山元治郎 叩

文部大臣 田中耕太郎殿

東北学院専門学校新設ニ際シ東北学院工業専門

学校在学生ノ臨時措置ニ関スル認可申請

本年四月東北学院専門学校新設ニ際シ東北学院工業専門学校在学中ノ学生ニ対シ次ノ措置ヲ執リタリ 即チ工専校ハ昭和二十二年三月限り廃止スルコトシ二十一年度ハ生徒募集ヲ中止シテ三学年ノミヲ残置スル事トセリ斯テ父兄ノ同意ヲ得テ在学生中一年修了者ハ志望ニ依リ理科系同等学校ニ転校スルカ或ハ新設校第一学年ニ転科セシメ二学年修了者ハ三学年ニ進級セシムル事ヲ原則トシ

尚希望者ニハ理科系同等学校ニ転校セシムルト共ニ新設校ヘノ転科ヲモ許ス事トセリ 而シテ転校指定校ヲ横浜市関東学院工専校ト定ム然ルニ前者(第一学年修了者)ノ大部分ハ新設校第一学年ニ転科ヲ希望シタルヲ以テ本年度限り一学年生ノ定員ヲ増加シテ之ヲ収容スル事トシ後者(第二学年修了者)ノ過半数モ亦食糧、宿舍及父兄ノ経済的事情等ニ依リ転校ヨリハ寧ロ進級又ハ転科ヲ志望シタルヲ以テ工専校ニ第三学年一学級ヲ残シ応急臨時措置トシテ新設校ニ第二学年ヲ設ケテ之ヲ収容シ重点的ニ第二学年ノ学科課程ヲ四月ヨリ八月マデニ修了セシメ九月ヨリ学年末マデニ第二学年ノ課程ヲ修了セシメ明年度(二十二年四月)ヨリ第三学年正規ノ課程ヲ履修セシムル事トシ即刻之ヲ実施セリ

右ノ措置ニ基ク生徒ノ現況次ノ如シ

工専一年 修了者	英文科	東北学院専門学校(一年)	他工専校	退学者	計
	経済科				
一九一七	英文科(部)				
二	経済科(部)				
三					
四					
四三					
一八八					

右御承認相成度此段及申請候也

工専二年 修了者	英文科	東北学院専門学校(二年)	工専三年 進級	他工専校	退学者	計
	経済科					
二二						
四三						
四八						
五						
二一						
一三九						

二三八 院長制復活の審議

(昭和二十一年十月十五日)

昭和廿一年十月十五日

臨時理事会 午前十時 財団事務所ニテ

(中略)

津田氏ヨリ院長制ヲ復活ノ必要ナキヤトノ提案アリ 又同氏ヨリ復興案ニ就キ説明アリ コレニツキ常置委員ニ機構等ノコトヲ一任ス

(後略)

常置委員会 昭和二十一年十二月廿六日 四時校長室

(中略)

一、時代ノ情勢ニ鑑ミ院長ヲ置クノ件

〔後略〕

(理事会記録)

二二九 審議会と事業局の設置

(昭和二十二年一月十一日)

昭和二十二年一月十一日午後一時ヨリ財団事務所ニ於テ
定期理事会開催

〔中略〕

審議会及事業局規定

財団法人東北学院理事会ハ其経営スル東北学院将来ノ方
策ヲ立テ之レニ伴フ補充ヲ計リ特ニ罹災復興ノ急速実現
ヲ期スルタメ審議会及事業局ヲ設ク

一、審議会

本会ハ理事会ノ諮問ニ応ジ主トシテ左記事項ニツキ審
議調査ヲ行ヒ其ノ具体案ヲ作成ノ上答申スルモノトス

審議事項

- 一、東北学院振興方針拡充企画及実施
- 二、建築及設備ノ充実

三、罹災復興並ニ之レニ伴フ諸事業

四、資金ノ調達

組織

本会ハ左記ニヨリ組織ス

イ、理事会委員

ロ、学校長 科・課長 教務主任

ハ、事業局長

ニ、父兄会代表

ホ、同窓会役員 常置委員及支部長

ヘ、有志者

本会ニ会長(理事長之レニ当ル)副会長(一名理事ヨリ)常
置委員(学校長 科長 会計)書記(事業局長之レニ当ル)
ヲ置ク

二、事業局

一、本局ハ審議会ノ答申ニ基キ理事会ノ決定事項ノ実
施並ニ運営ヲナス

二、本局ニ局長及職員若干名ヲ置ク

三、本局会計ハ財団会計之レニ当ル

(昭和廿二年一月定ム)

(理事会記録)

二四〇 『東北文学』の再刊

(昭和二十二年二月二十日)

再刊の辞

敗戦の苦悩は正に神の我々に与へ賜うた最大の試練となつた。この厳しい現実を直視して、文化国家の建設に精魂を傾むけるのが我々青少年の使命と言はれる。いふまでもなく、文化国家の建設こそ日本にのこされた唯一の方向だが、牛を馬にのりかへるやうな便乗主義であつてはならぬ。便乗主義こそ、日本の政治であり、悲しいならはしであつた。即ち数百年の封建制から近世の夜明けを経ずに直ちに先進諸国の模倣に走つた点に大いなる誤りがあつた。

王制復古と叫ばれた明治維新も実は幕府制にかはる藩閥政府の封建制の連続に他ならなかつたのである。

かくして所謂近代日本の八十年は敗戦と共に崩れぬき、今や真の近世の夜明が訪れてきた。われらの使命は既に戦争への道ではなく明けわたらんとする日本の黎明を如何に光輝あらしむるかといふことにある。勿論、後世の史上に特筆さるべきこの大事業は一朝一夕にしてな

るものではない。あくまでヒューマニズムに根ざした新しい日本、高い文化と教養にみちみちた日本をつくりあげるには前途に幾多の悪条件がよこたはつてゐるけれども、あの中世の暗黒からルネッサンスが誕生したことに想到し、苦難の道をのりこえよう。パスカルの「人間は葦の如く弱い、だが考える葦」であることを自覚しつゝ、やがては真理の探求に学問の独立に。

たえて廃刊されてゐたわが「東北文学」も再刊される。長い伝統と香り高い宗教理想とによつて培はれ来たつたこの雑誌が学院生の思想的象徴として、今後その内容にます／＼若々しいロマンテズムとリアリズムをもり上げ、学院将来への遙かなる道しるべたらしめたいと熱願するものである。

(『東北文学』創立六十周年記念号 昭和二十二年二月二十日)

二四一 月浦利雄「よりよい学院」

(昭和二十二年二月二十日)

よりよい学院

—創立六十週年を迎えて—

月浦 利雄

敗戦ポツダム宣言の受諾、新憲法の公布と過去三千年の我が国の歴史に於て未だ経験したこともない大きな變動に我々は遭遇したのである。一切の過去をばすつかり忘れ去つて此処に凡てが新しい発足をしなければならぬ時代となつた。このやうな時に我が学院は創立滿六十週年を迎へることになつたのである。誠に感慨無量である。国家にとつても学校にとつてもこの特記すべき年に当り、不肖私が図らずもこの六十年栄ある伝統を有する母校学院中学校の校長の職を前出村剛校長より受け継いだのである。思へば実に身に余る重い責任を感じる次第である。只管天父の豊かなる御恵みと同窓生諸君並びに教職員生徒諸君の協力によつてこの大事業を成し遂げるより外に道はないと思ふ。此の度六十週年記念号を刊行するに当り何か書くようにとの委員からのお話があつたので日頃念じて居る希望の一端を述べさして貰つた次第である。

それはよりよい学院にしたいと云ふ希望である。言葉は簡單明瞭だが内容はなかく複雑である。如何なる内容のものがよりよい学院であるか種々と皆と一緒に考へ

て見たいと思ふ。今日の如き時代に当り如何なる人物を養成しなければならぬとか教育方針はどうあらねばならぬとか現代の生徒は如何なる心構へが大切であるとか今更説くには及ばないと思ふ。

諸君はよく承知してある筈である。私は最も平易に又最も具体的に否最も端的によりよい学院とはどんな学院かを述べてみたいと思ふ。卒業生も教職員も自分の子弟を喜んで、進んで入学させたいと思ふ学院、在校生諸君がその弟を是非入れたいと思ふ学院である。このような学院にならなければよりよい学院となつたとは云はれない。自分の子弟を入れるのに躊躇したり否嫌つたりするやうな学校であらしめてはいけない。然し只一方的に卒業生や教職員に対して子弟を学院に送れと求むることは決して妥当だとは云はれない。悪い学校にしておいて只子弟を送れと要求することは要求する方が無理である。然し又よくなるまでは子弟を入れぬよくなつたら入れると云ふのは泳げるやうになつたら水に入れる、云ふのと同じで、これでは何時まで経つてもよく、つこはない。先づ子弟を入学させてそして努力をすゝことである。自分の子弟を入れて居ればこそ学校に対する関心も深くなつて来る。力の入れ方も真剣になつて来るのでは

あるまいか。これが最上のよりよい学院を作る方法であると信ずる。卒業生教職員在校生一丸となつて協力するところによりよい学院が生れると信ずる創立百周年の頃を夢見つゝ筆を擱く。

(『東北文学』創立六十周年記念号 昭和二十二年二月二十日)

二四二 工業専門学校廃止認可申請書類

(昭和二十二年三月二十八日)

工業専門学校廃止認可申請

先ニ東北学院専門学校設置御認可相成候ニ付東北学院工業専門学校ハ昭和二十一年度入学生ノ募集ヲ停止シタル所今般在籍者ナキニ至リタルニ付本年度(三月三十一日)限り廃止致度候間御認可相成度此段及申請候也

昭和二十二年三月二十八日

財団法人東北学院

理事長 杉山元治郎 印

文部大臣 高橋誠一郎殿

理由

昭和二十一年度東北学院専門学校設置ニ伴ヒ工業専門学校生徒募集ヲ停止シ第一学年及第二学年修了者中希望者ハ東北学院専門学校ニ転科又ハ他工専校ニ転校セシメ工専校第三学年ノミヲ残置シタルモノニシテ本年三月全員卒業シ在籍者ナキヲ至リタルタメ

理事会決議録

一、東北学院専門学校設置ノ件

二、東北学院工業専門学校廃止ノ件

本年度限り募集中止在籍者ナキニ至リ次第廃止ス

右決議ス

昭和二十年十二月十日

理事 阿部 豊吉

全 宮城 音五郎

全 出村 剛

全 一力 次郎

全 諸石 靖

全 杉山 元治郎

全 伊勢 武

全 本間 正雄

全 津田 郁

全 小山田 正直

全 鈴木義男
全 萱場資郎

右原本ト相違ナキ事ヲ認証ス

昭和二十二年三月二十八日

財団法人東北学院

理事長 杉山元治郎 印

宮学一〇号

財団法人東北学院

昭和二十二年三月二十八日附をもつて申請の東北学院工業専門学校廃止のことはこれを認可する

昭和二十二年三月三十一日

文部大臣 高橋誠一郎 印

二四三 基督教教育調査報告

(昭和二十三年十一月十日)

昭和二十三年十一月

基督教教育調査

東北学院

基督教教育調査事項

一、学校ノ現状ニ関スル調査(昭和二十三年十一月十日現在)

(A) 建築物

第五章 戦後の苦難

		専門学校ノ部									
合		九、教師住宅	八、記念館	七、研究室	六、研究室	五、校舎	四、校舎	三、校舎	二、講堂	一、本館	建
計		木造瓦葺二階建	木造平家建	木造平家建瓦葺	木造二階建 亜鉛鍍鉄板葺	木造平家建 天然スレート葺	木造二階建瓦葺	木造平家建 亜鉛鍍鉄板葺	鉄筋コンクリート造 地下一階地上二階建	鉄筋コンクリート造 三階建	物及様式
		二一階階計	一階	一階	二一階階計	一階	渡廊下一階 校舎二階 校舎一階	渡廊下一階 校舎一階	渡廊下一階 中二階 地一階	塔三二一 屋階階階計	建坪
		一七三九・八七〇〇〇〇	一五五三・〇〇〇〇	一〇五三・五〇〇〇	一〇五一・三四五二	八一〇〇〇〇	一七九七・八八五〇〇〇	九一八九・〇〇〇〇	四九一八・八八五〇〇〇	五七〇〇・一八八五〇〇	備考
							復旧				

中学校ノ部

一、本館	煉瓦壁体三階建 一部半地下式	地階 一階 二階 三階	八七・六五九 三九二・三三九 三二九・九〇一 五三三・五二七 八六三・四二六	復旧
二、附属 小使室	木造平家建 天然スレート葺	一階 渡廊下及洗場 計	一一二・〇〇〇 一一三・二二五 二二五・二二五	復旧
三、便所	木造平家建杉皮葺	一階	一七・五〇〇	仮設
合計			九〇六・一七六	

(B) 施設

寄宿舎(収容人員数) 百八名 着工中

実験室(室数) ナシ 罹災

図書館(蔵書部数) 四万三千八百九十七冊
(和書二一、一三九冊・洋書二三、四四九冊・

外雜誌類二、二四六冊)

体育場建坪 ナシ 罹災

会堂建坪 百八十六坪 延坪四百八十一坪

敷地坪数 合計 二万二千二百七十六坪

内訳 専門学 校(南六軒丁) 九、一一七坪

高等学校中学校(東二番丁) 六、三八二坪

寄宿舎(東九番丁) 二、一〇五坪

(C) 教職員

旧院長住宅地(土 樋) 七五二坪
修養道場(宮城郡高山)三、九二〇坪

専門学校				
専任教師数	二八	二一	一部一人二対	五四・〇七
兼任教師数	一七	四	シ二部同	二〇・三
教務職員数	三	二	〃〃	五九・六
宣教師数	九			一一九・三

(E) 財政状態

	中学校	高等学校	専門学校	合計
学校収入	一、四四三、八二八	一、八七一、九三六	五、〇九九、九九〇	八、四一五、七五四
同窓会収入	〇	〇	〇	〇
後援会収入	〇	〇	五〇〇、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇
一般有志寄附	〇	〇	〇	〇

	収入	生徒数	対比
中学校	一、四四三、八二八	五二〇	二・七七六
高等学校	一、九四五、一九六	七四〇	二・六二八
専門学校	五、〇九九、九九〇	一、四〇〇	三・六四二

全経常費収入年額ト学生数トノ対比(学生一人当り何程)

中学校	高等学校	基督者数	専任教師ト生徒数ノ比
六	三	一五	夜一人ニ対シ 三一・〇三
三	三	六	〃〃 七九・四
宣教師	六		
教務職員	三		
兼任教師	一三		
専任教師	三〇		

(D) 各教室ニ於ケル学生ノ平均数
 中・高等学校 六〇・七
 同 二部 五五・二
 専門学校
 英文科 四五・五
 経済科 一一三・五
 同 二部
 英文科 五七・〇
 経済科 一一九・〇

管理機関
 法人種別 財団法人
 理事会 理事員数 一二名(内基督者一〇名)
 評議員会 ナシ

入学許可数(百分比)

専門	学校		計	比	中学校入学許可数		高等学校入学許可数	
	男	女			許可数	比	許可数	比
英文科	一〇三	一二	一一五	〇・六五	一六二	三三・八%	二二三	八一・六%
英文科二部	七三	四	七七	〇・六二				
経済科	二二〇	四	二二四	〇・五一				
経済科二部	一二三	一	一二四	〇・四				
計	五一九	二一	五四〇	〇・五四八	一六二	三三・八%	二二三	八一・六%

在学生総数

専門	学校		計	備考	中学校	高等学校	備考
	男	女					
一九四〇	四四八		四四八	高等学部	九七四		△印 夜間二部
一九四三	五五一		五五一	高等商業部	一七七八		
一九四八	九六二	三一	九九三	専門学校	五五三	△四七九	

級別人員表

専門	学校	備考	中学校	高等学校	備考
英文科	四五・五	同上二部	五七・〇		六九・〇
経済科	一一三・五	同上二部	一九・〇		五三・二
					五五・二

授業料（一人年額）

	専門学校				中学校	高等学校	同二部
	一学年	二・三学年	二部一学年	同二・三学年			
四・五月	四一六円 <small>(年二五〇〇)</small>	三三六円 <small>(二〇〇〇)</small>	三八〇円 <small>(二〇〇〇)</small>	二六〇円 <small>(一六〇〇)</small>	四〇八月 <small>月二五〇</small>	八五〇円 <small>月七〇</small>	六〇〇円 <small>月二〇</small>
六・九月	八三四 <small>(年二五〇〇)</small>	八三四 <small>(二五〇〇)</small>	七七〇 <small>(二五〇〇)</small>	七七〇 <small>(二五〇〇)</small>	九〇三月 <small>月二五〇</small>	一、七五〇 <small>月二五〇</small>	一、六一〇 <small>月三〇</small>
十・三月	二、一〇〇 <small>(四、一〇〇)</small>	二、一〇〇 <small>(四、一〇〇)</small>	二、〇〇〇 <small>(四、〇〇〇)</small>	二、〇〇〇 <small>(四、〇〇〇)</small>			
計	三、三三〇	三、二七〇	三、一五〇	三、〇三〇	三、五〇〇	二、六〇〇	二、二二〇

卒業生総数

卒業生総数 第一回卒業以来 計六、六四四名

(G) 基督教の感化

○ 学校ノ牧師又ハ宗教主任ノ有無

○ 宗教主任専門学校一名中学校高等学校一名ヲ置ク

○ 会堂礼拝出席

○ 中学校高等学校専門学校共礼拝必修

○ 聖書研究課程ノ状況

○ 中学校一年 旧約、二年 基督伝、三年 使徒行伝

○ 高等学校一年 ポーロ書翰、二年 新約概論 三年 旧約概論

○ 専門学校各科共每週一時間必修科目トシ

一年 基督教理ノ一般ニツイテ、二年 ポーロ書翰研究、三年 基督教倫理

○ 課外宗教活動ノ状況

○ 中・高等学校ニ在リテハ青年会百九十名ヲ有シ每週一

回早天祈禱会ヲ催ウシ毎回出席約百五十名アリ又每週

一回聖書研究会ヲ開ク、尚夏季休暇ニハ五日間夏季海

浜学校ヲ催ウシ修養ヲナス

○ 専門学校ニ在リテハY・M・C・A及ビ市内学生聯合

会ハ毎月曜日祈禱会及ビ日本語並ビニ英語聖書研究会

ヲ催ウス又夏季ニハ海浜学校ヲ催ウシ修養ヲナス

○ 教職員中基督者の比率

中・高等学校 四四・一%、専門学校 七〇%

○ 学生中基督者ノ実数

中・高等学校 二三〇名 二二・二%、

専門学校 二五二名 二五・九%

○ 卒業生ノタメ宗教指導

東北学院文化協会講演会及ビ宗教部ニヨル諸集会ヲ催

ウシ尚本校内ニ在ル南六軒丁教会ノ諸集会ニ卒業生多

数出席シ研究修養ヲナス

○ 学校ノ感化ヲ及ボス範圍……学生ノ家庭分布地域

中・高等学校生徒九〇%ハ仙台市内在住者デアル

専門学校ハ宮城県下ヲ始メ東北六県新潟北海道其ノ他

ニ及ブ

南六軒丁教会礼拝ニハ父兄ノ多数出席シツゝアリ又其

ノ他ノ教会ニモ父兄ノ出席アリ

二、一般的根本方針ニ関スル調査

(A) 学校ノ協同若シクハ合同ノ可能性又ハ希望アリヤ

有

ソノ損失 ナシ

ソノ利益 経営上ノ合理化 重複セル科目整理ニヨル

強化

(B) スカル協同又ハ合同ノ支障ハ何ナルヤ

学校ノ歴史の社会的地位カ

卒業生ノ支持又ハ勢力ニヨルカ

右何レニモアラズ

(C) ミツシヨンノ支持ヲ繼續スベキ妥当ノ理由ハ何ナル

ヤ

現在情勢ニ於テ徹底セル宗教々育ノ必要上授業料ノミ

ニヨル経営ハ不可能ナルノミナラズ戦災学校ニテ経済

上復旧拡充ノタメ且ツ外人教師ノ授助ヲ必要トスル故

支持繼續ヲ望ム

(D) 企画中ノ基督教大学トノ関係如何

基督教ノ面目ニカケテモ理想的最優秀ノ大学並ニ大学

院ノ設置ヲ望ムト共ニ地方ノ各大学ヨリノ出身者ヲ優

先的ニ収容ヲ望ム

(E) 近接地域ニ他ノ基督教学校ガアルカ 有

宮城学院、尚綱女学校、白百合学園(中・高等女学校)

(F) 是等学校ト科程ニ於テ異ナルモノアルカ 有

宮城学院ハ女子教育ニシテ音楽、国語、英文、家事科

ヲ課程トシ、尚綱女学校ハ家事、英語、保育、体育ヲ

課程トシ、本校ハ男女共学ニシテ英文、経済ヲ課程ト

ス、尚四校トモ中・高等学校ハ總テ基督教ヲ旨トシ普通学ノ課程ヲ実施シ男女共学制ヲトラズ

(G) 課外教育ノプログラムニ於テ異ナルモノアルカ有商業講習文化協会地方出張講演農林研究ヲ行ウ

(H) 企画中ノ国際基督教大学(二年制)研究科トヲ設クル場合)ソレトノ關係ヲ如何ニ考エルカ

本校卒業生ヲ特ニ優先的ニ入学指導ヲ願イタイ又理科系ヲ希望スルモノニ対シテモ亦同ジ

三、新教育制度ノ下ニ於ケル情況變化ノ対策ニ関スル調査

(A) 暫定的ニ当分専門学校トシテ繼續サル、ヤ繼續セズ

(B) 新制大学(四年制)ニ昇格ノ計画ナリヤ
新制大学設置認可申請中ニシテ昇格ノ計画ナリ

(C) 二年制ノ大学ニツキ考慮サレシヤ
考慮セズ

(D) 高校附設ノ専攻科ヲ置ク計画アリヤ
計画セズ

四、新制大学(二年制又ハ四年制)ニ昇格ノタメ必要ナル

経費調査

(A) 要請サレル教師増員数 昭和二十四年度 五名

経費六〇〇、〇〇〇円

(B) 要請サレル教室ノ増加数ト其経費

別紙第五項目参照

(C) 要請サレル図書ノ設備 昭和二十四年度

経費 六五〇、〇〇〇円

(D) 要請サレル其他ノ施設ト其経費

別紙第五項目参照

五、復興計画ニ関スル調査(昭和二十三年十一月十日調査)

(A) 戦災ニヨル被害(昭和二十年七月十日罹災)

(イ) 建築物

		罹災地		建築物		罹災前建坪数		罹災坪数		罹災程度		備考											
本館	接統地	中学校	仙台市東二番丁四〇	全	柳町通二五ノ一	全	剣道場	全	柔道場	全	作業場	社交館	小使住宅	物置	理化教室	全	雨天体操場	銃器庫	第二教員室	便所	全	本館	
鉄筋コンクリート造煉瓦張二階建	全	全	木造スレート葺平家	全	全	木造トタン葺平家	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	
八六三・四二六	七二四・一	一〇	一五	七・五	一四	六〇	五〇	五〇	六	六	八九	三〇・六	四〇	七二	一三二	一三二坪	一三二坪	全焼					
内部	内部全焼	復旧																					

罹災地	建物用途	構造	罹災前建坪数	罹災坪数	罹災程度	備考
仙台市南六軒丁一	教室	木造建セメント瓦葺平家	二〇五坪	一二四坪	66%焼失	復旧
	寄宿舎及住宅	木造建亜鉛葺平家				
	学生集会所		七一	七一	全焼	
	倉庫		三六	三六	〃	
	雨天体操場		一〇五	一〇五	〃	
	生徒昇降口		一二	一二	〃	
	事務室		八	八	〃	
	渡り廊下		二一・二五	二一・二五	〃	
			四五八・二五	三七七・二五		

備考

1 復旧ニ要スル見積額別表参照

2 戦災物件中左記ノモノハ現況下評価困難ニツキ品

目ニノミ止ム

(1) 専門学校

a 校地周辺ノ鉄柵(金アミ)三百間

b 校舎階段鉄製ノ手スリ

c 礼拝堂シャンデリア十二個(一個ノ重量半トン)

銀イブシ鉄製品

(2) 中学校

d 暖房用ラジイター二十個

a 校地周辺ノ鉄柵五百間

b 校舎階段鉄製ノ手スリ

c 暖房用ラジイター二十個

(ロ) 諸設備

合計	計	其ノ他	図書	教材教具類	家具類	専門学校	計	其ノ他	図書	教材教具類	家具類	中学校	被害設備ノ種類	員数	被害程度	時価	備考
		二、四八五	五〇〇	ナシ	ナシ	一、九八五		八、二二三		四、五〇〇	二、五六〇	一、一六三					
									〃	〃	焼失						
		一六、五九〇、〇〇〇	一、一九〇、〇〇〇			一、〇九〇、〇〇〇		一五、四〇〇、〇〇〇	七〇〇、〇〇〇	六七五、〇〇〇	一一、〇〇〇、〇〇〇	三、〇二五、〇〇〇円					

(B) 既ニ復旧シタル建物ノ復旧費及其ノ坪数

専門学校ノ部

名称	構造	面積	仮・半永久・永久ノ別	工事費	備考
校舎及渡廊下	木造二階建瓦葺	一七九・〇〇	半永久建物	一、四五四、八四〇・二四	復旧新築済
寄宿舎	木造二階建 一部平家建瓦葺	四八四・三〇	半永久建物	八、一八〇、〇〇〇・〇〇	着工中
合計				九、六三四、八四〇・二四	

中学校ノ部

名称	構造	面積	仮・半永久建物	工事費	備考
本館	鉄筋コンクリート造 煉瓦壁体三階建 一部半地下式	八六三・四二六	永久建物	二、二五九、七五五・九四	復旧内部修築済
附属小使室及 渡廊下足洗場	木造平家建天然スレ ート葺	二五・二五	半永久建物	一一〇、〇〇〇・〇〇	復旧新築済
便所	木造平家建杉皮葺	一七・五〇	仮建築	五二、五〇〇・〇〇	復旧新築済
小計				二、四二二、二五五・九四	
校舎	木造二階建瓦葺	一七三・〇〇	半永久建物	二、八〇〇、〇〇〇・〇〇	着工中
合計				五、二二二、二五五・九四	

復旧費支弁ノ方法

備考

国内ノ資金 有志、父兄、同窓ノ寄附金

昭和二十三年十月末日迄ノ状況別紙ノ通り

外国資金 米国本部ヨリノ援助資金

借入金 文部省低利借入金

(C) 購入セントスル敷地ノ位置並ニ其ノ価格

区分	所在	買収坪数	単価	価格	備考
高等学校中学校	仙台市東二番丁	二、〇三六坪	五〇〇〇千	一〇、一八〇、〇〇〇円	都市計画被買収約二千坪 建築物移転モ含ム
専門学校	仙台市南六軒丁	一、八六九	五〇〇〇	九、三四五、〇〇〇	建築物移転モ含ム
計	計	三、九〇五		一九、五二五、〇〇〇	
小学校	仙台市土樋	一、三〇〇	四〇〇〇	五、二〇〇、〇〇〇	建築物移転費モ含ム 土樋校地七百坪隣地
八木山	仙台市長町越路	六八〇、〇〇〇		三、〇〇〇、〇〇〇	原野山林地形ニシテ適地 約五万坪
計	計	六八一、三〇〇		八、二〇〇、〇〇〇	
合計	合計	六八五、二〇五		二七、七二五、〇〇〇	

(D) 現在ノ復興計画ト将来ノ拡張計画トノ関係

(イ) 現在マデノ復旧ニ対スル外国補助ノ要請額

(昭和二十三年二月提出)

復旧費 五千六十七万五千元

昭和二十三年度ヨリ三ヶ年継続事業費

拡張費総額 五千六百九十七万六千五百円

(ロ) 学校ノ堅実ナル存立ニ必要ナル復興並ニ拡張ノ計

画案

(ハ) 建造物ニ対スル企画トソノ費額

復興並ニ拡張計画ノ建造物ニ対スル企画ト其ノ費

額

備考 資金部面ハ別紙参照

専門学校ノ部(大学設置ニ伴ウ企画)

建築物種別	建物面積延坪	仮建築		半永久建築		永久建築		備考
		国内資金	外国資金	国内資金	外国資金	国内資金	外国資金	
校舍(録音講義室(木造瓦葺二階建))	二七二・〇〇			五、四〇〇,〇〇〇円				復旧計画
屋内運動場(木造瓦葺平家建)	二二八・〇〇			六、六〇〇,〇〇〇				同
附属建物(木造瓦葺平家)便所	二五・〇〇			六、五〇〇				同
渡廊下	二七・五〇			二、〇〇〇				同
研究室(木造瓦葺二階建)	一六五・〇〇			三、四〇〇,〇〇〇				拡張計画
図書館(石造二階建)	二七二・〇〇				八、一〇〇,〇〇〇円			同
寄宿舎(木造二階建一部平家)	四八四・三〇			八、一八〇,〇〇〇				着工中
合計				三、六七五、〇〇〇				

高等学校・中学校ノ部(大講堂及神学教室ハ大学ト共同スルモノトス)

大講堂(鉄骨木造)	七七二・〇〇					一、六三〇,〇〇〇円		拡張計画
附属家(木造)	三二一・〇〇			六、四〇〇,〇〇〇円				同
校舎(木造二階建)	一七三・〇〇			二、八〇〇,〇〇〇				着工中
科学教室(木造二階建)	三五八・〇〇			七、一〇〇,〇〇〇				復旧計画
屋内運動場(木造平家建)	二二二・二〇			六、六六六、〇〇〇				復旧計画
便所(木造平家建)	三三・五〇			八、三七、五〇〇				同
渡廊下(木造平家建)	六五・〇〇			六、五〇〇,〇〇〇				同
合計				三、八〇五、〇〇〇				

小学校之部

本校舎	木造式階建	三四〇坪	六、八〇〇、〇〇〇円	新規拡張計画
科学教室	木造平家建	六〇坪	一、五〇〇、〇〇〇	全
講堂及控室	木造式階建	五〇八坪	一、一〇〇、〇〇〇	全
附属建物	木造平家建	七八・五坪	一、一七七、五〇〇	全
計			二〇、四七七、五〇〇	

半永久建築

八木山総合運動場之部

半永久建築

附属寄宿舎	木造式階建	二〇〇坪	四、五〇〇、〇〇〇	新規拡張計画
教職員住宅	木造平家建	三三〇坪	六、六〇〇、〇〇〇	一戸一六・五坪 二〇戸分
計			一一、一〇〇、〇〇〇	

復興並ニ拡張ニ伴フ諸設備ト其ノ費額
 専門学校之部

科目	種別	校舎	屋内運動場	附属建物	研究室	図書館	寄宿舎	小計
家具類	机二〇〇 テーブル一 一三〇 〇〇〇				テーブル二二戸棚一 四五〇、〇〇〇	書棚 テーブル一式 一〇〇〇、〇〇〇	ベトナム食糧貯蔵庫 四八六、〇〇〇 テラ化基地	二、〇六六、〇〇〇
教材教具類					五、〇〇〇、〇〇〇			五、〇〇〇、〇〇〇
電気水道		三〇〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇	工事請負金ニ含ム	一、〇五〇、〇〇〇
暖房		七ヶ所 一五〇、〇〇〇		二ヶ所 四〇、〇〇〇	二十一ヶ所 四二〇、〇〇〇	三ヶ所 六〇、〇〇〇	四十二ヶ所 八四〇、〇〇〇	一、五一〇、〇〇〇
高等学校・中学校之部								
大講堂	ベンチ四〇〇〇							二、〇〇〇、〇〇〇
校舎	机三〇〇 一五〇、〇〇〇						工事請負金ニ含ム	二ヶ所 一〇〇、〇〇〇
科学教室	机一〇〇 三、〇〇〇、〇〇〇 実験台八 其他							六ヶ所 一二〇、〇〇〇
屋内運動場								五ヶ所 一〇〇、〇〇〇
便所								二〇〇、〇〇〇
渡り廊下								五、〇〇〇
小計								五、五六〇、〇〇〇
								二、〇〇〇、〇〇〇
								三二〇、〇〇〇

小学校之部

校舎	机六〇〇 テーブル二二 三六〇、〇〇〇		二二〇、〇〇〇	六ヶ所	二二〇、〇〇〇
科学教室	机五〇 テーブル其他 五〇〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇	三五〇、〇〇〇	二ヶ所	四〇、〇〇〇
講堂及控室	ベンチ三〇 五〇〇、〇〇〇		二二〇、〇〇〇	二ヶ所	一〇〇、〇〇〇
附属建物			五、〇〇〇	二ヶ所	四〇、〇〇〇
小計	一、三六〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇	七五五、〇〇〇		三〇〇、〇〇〇

八木山綜合運動場之部

附属寄宿舎	食卓 ベンチ其他一式 二〇〇、〇〇〇		三〇〇、〇〇〇	六ヶ所	一一〇、〇〇〇
住宅			一五〇、〇〇〇		
小計	二〇〇、〇〇〇		四五〇、〇〇〇		一一〇、〇〇〇
合計	八、七七六、〇〇〇	二六、五〇〇、〇〇〇	七、八一五、〇〇〇		二、二五〇、〇〇〇

(E) 各年度予算

別紙参照

(F) 今後ニ於ケル国内資金獲得ニ対スル計画案

昭和二十四年四月ヨリ従来ノ復旧拡充後援会ノ充実ヲ計リ会費ヲ一ケ年一千円トシ一千名ノ会員ヲ募集シ最低老百万円ノ資金ヲ獲得ス

有志会員 一〇〇名

父兄会員 六〇〇名

同窓会員 三〇〇名

資金獲得ノタメ特別校債ノ発行、校地校舎ノ利用、事業ノ経営、集会等企画シタルモ東北ノ現下ノ事情及特異性ニ鑑ミ当分実行ヲ見合セアリ。

外国援助資金要請額

計	一九四九年 (昭和二十四年度)			一九五〇年 (昭和二十五年度)		
	収入	支出	赤字	収入	支出	赤字
財団本部	一五、〇〇〇	二八三、六〇〇	二六八、六〇〇	一五、〇〇〇	二八三、六〇〇	二六八、六〇〇
大 学	二、九二八、〇〇〇	五、四四六、七八八	二、五一八、七八八	四、九一一、〇〇〇	七、二九五、二四四	二、三八四、二四四
専門学校	四、四九〇、五〇〇	五、三三八、七五二	八三八、二五二	二、三九六、〇〇〇	二、七八〇、六三〇	三八四、六三〇
高等学校	三、一六三、六五六	四、三三七、九二二	一、一七四、二六六	二、三六六、四七二	四、一五三、六五〇	一、七八七、一七八
中学校	一、三二四、五六〇	一、九一五、五八〇	六〇一、〇二〇	一、四六八、八八〇	二、〇八七、八五二	六八八、九七二
計	一一、九二一、七二六	一七、三二二、六四二	五、四〇〇、九二六	一一、一五七、三五二	一六、六〇〇、九七六	五、四四三、六二四

附記 専門学校ハ一九五〇年度限り廃校予定

計	一九五一年 (昭和二十六年)			一九五二年 (昭和二十七年)		
	収入	支出	赤字	収入	支出	赤字
財団本部	一五、〇〇〇	二八三、六〇〇	二六八、六〇〇	一五、〇〇〇	二八三、六〇〇	二六八、六〇〇
大 学	六、八四五、〇〇〇	九、三九六、二二八	二、五五一、二二八	八、七三〇、〇〇〇	一一、一五八、二六八	二、四二八、二六八
高等学校	二、九四八、二三二	三、八七四、二四二	九二六、〇一〇	二、四二八、二二〇	三、八七四、二四二	一、四五六、一二二
中学校	一、四六八、八八〇	二、〇八七、八五二	六八八、九七二	一、四六八、八八〇	二、〇八七、八五二	六八八、九七二
計	一一、二七七、一一二	一五、六四一、九二二	四、三六四、八〇〇	一一、六三三、〇〇〇	一七、四〇三、九六一	四、七七二、九六一

第五編

エホバを畏るゝは知識の本なり

＝復興時代＝

1948(昭和23)年～1958(昭和33)年

第一章 新しい内外協力

二四七 シュネーダー記念図書館建築資金募集 趣意書

(昭和二十四年七月二十三日)

二四四 A・M・アンケニー書簡(クララ・バーン宛)

(英文) (一九四七年三月二日)

シュネーダー先生記念図書館建築資金募集
趣意書

二四五 福音・改革派教会全国総会国際伝道局報 告(日本関係)

(英文) (一九四七年七月九日〜十六日)

二四六 福音・改革派教会全国総会国際伝道局報 告(日本関係)

(英文) (一九五〇年六月二十一日〜二十八日)

吾が東北学院は、明治十九年、押川・ホーイの両先生により創立せられ、爾来六十四年シュネーダー・出村各院長の経綸を経て今日に至り、今や全国屈指の私学として独特の地歩を占めるに至りました。特に本年四月、新に東北学院大学文経学部を創設いたしましたことは各位の御承知の通りであります。本院はこれによつて益々本来の基督教主義の人格教育を昂揚し、広く内外の新知識を網羅して、新日本教育界のために、目覚ましき貢献を所期しつつ、鋭意画策を重ねている次第であります。

然し乍ら、本院今日の成果は、一朝にして成れるものではありません。即ち創立者の高邁なる識見とこれを継承した各院長の経営の努力と、これに加えるに内外多数の後援者諸彦の絶えざる援助等の集積によつて、はじめ成された所のものであります。

就中、故シュネーダー先生は、院長在職の年数に於いても、又顕著なる功績に於ても、殆ど本院歴史の大半を彩られたと称しても、敢えて過言ではないのであります。現在本院の有する堅牢なる建造物をはじめ、その他有形無形の所謂学院的なるものの存在は、皆先生の恩恵を被らないものは無いのであります。その中でも図書館建設に関して先生の費された努力は、吾々の決して忘れてはならないところであります。

抑々、図書館に対する先生の関心は明治二十一年、来朝の昔に始まり、その後生涯を通じて図書館建設の希望を抱き、努力を続けられたのでありますが、屢次不測の障害に妨げられ、遂にその実現の時を得ずして終られたことは、如何にも遺憾に堪えぬ所であります。生前、先生の座右にせられた所の、学院発展計画の図面の中にこの図書館の配置が重要な部分を占めてあるのを見ても、如何にこの施設を重要視せられたかを窺い得るのであります。

昭和十一年、先生夫妻は静養のため最後の帰米をなされましたが、その米国滞在中の期間を、此の図書館建設資金募集のために用ひられ、夫妻相携えて言葉通りの老軀を提げて各地に懸命の遊説をなされたことは、今もな

お人々の記憶に鮮かな所であります。その結果米国篤志の人々より一万三千弗(邦価四百六十八万円)を募集せられたのであります。其後米国ミッションは先生の遺志を忘れず、彼の熾烈なる大戦中にも完全に此れが保管の責を尽され、且つ若干の利子をさえ添えられたることは真に感謝に言葉なき所であります。又先生の晩年、院長職隠退の際、同窓生の間には、先生の記念胸像の計画が進められた時にも、先生はこれを固辞せられ、寧ろその努力を図書館建設のために尽されんことを希望せられたのであります。これを以てしても先生の平素を知る興味ある一つのエピソードとして、一層の感激を覚えるのであります。

今や我が国は終戦後約五ヶ年を経過し、新日本復興の曙光を漸く認め得らるるに至りました。本院も亦この機に先だち、諸般の施設を完備し、益々校運の進展を図らねばなりません。而して、此の多年の懸案たる図書館建設の宿望を達成すべき好機も、今日を措いてはこれを求むることは出来ないであります。加之、今回大学昇格の際にも、主務省より圖書の充実の指摘をうけたのであります。

本院理事会は、以上の事実を鑑み、慎重審議の結果、

此の度『シュネーダー先生記念図書館』建設の件を決議し、その建築建坪六百五十五坪、総額五千万円を計上いたしました。これに依つて恩師の「生ける胸像」とも称すべき、最も完備せる記念図書館を、昭和二十五年中に起工の上、三ヶ年間に於て完成し、一は恩師の遺志に応え、同時に学徒の向学心を鼓舞し、新日本文化建設に任ずる有為の人材養成の資に供したく、心より念願する次第であります。

恰もこの時、在米ミセス・ゲルハードより故ポール・ゲルハード遺愛の蔵書御寄附の篤志を寄せられ、同先生記念文庫の併設も期待されることになりました。即ち現在所蔵の図書数（外国書二五、八七〇冊・邦書二五、五一四冊）に併せて、一層の意義と光彩とを添える所以であり、御好意に対し厚く謝意を表します。

而して、この建設費予算額五千万円の中、一千万円は広く有志者、本院関係者並に同窓会各位の御寄附に仰ぎ四千万円は之れを国外有志及同情者に訴え、格別なる御協力を懇願致すことになりました。若しまた、此の機会に各位の御奮発により、国外に向つても、吾々の文化事業に対する熱意の程を示す機会ともなるならば幸いこの上もないことであります。

願くは、各位の優渥なる御協賛と応分の御援助とに預り、是非とも所期計画を完遂せしめらるる様、御協力と激励とを賜わりたく、失礼ながら趣意書を以て偏に御願ひ申し上げます。

昭和二十四年七月二十三日

シュネーダー先生記念図書館資金募集委員長

東北学院院长 出村 剛

发起人 佐々木家寿治、岡崎栄松、一力次郎、松坂

信亮、吉井桃磨呂、鈴木義男、庄司一郎、

高橋 啓、小山田正直、三沢房太郎、小林

軍太郎、阿部豊吉、小平国雄、本間正雄、

大石栄一、茂木徳郎、本間良雄、高橋 潔、

小林与兵衛、山田 弘、富田 稔、小野小

二郎、鈴木正護、成瀬 高、伊東 良、菅

原公平、島香晋平、中山真平、角田熙載、

佐藤清治、稲垣哲馬、笠原徳多、小田忠夫、

月浦利雄、アンケニ、ゲルハード、三浦

運五郎、津田 郁、三品 鼎、児玉省三、

五十嵐正躬、館岡 剛、大森純雄、鈴谷一

男、横山敏夫。

尚、実行委員として次の数氏が當つた。

小田忠夫、月浦利雄、阿部欣二、津田 郁、
三品 鼎、佐久間六、和泉幸一郎、花輪庄
三郎、館岡 剛、五十嵐正躬、樋口光平、
佐藤三太郎、相沢近勇、島崎金弥。

(『東北学院七十年史』)

二四八 大学諸施設の献堂式

(昭和二十五年五月十日)

献堂式を挙げた新建築物

一、寄宿舎。

場所は東九番丁五十六番地孝勝寺の裏、政岡の墓や櫛ケ岡公園に近く、もと労働会の牛乳部と農業部のあつた跡である。建物は三棟の寮舎と、一棟の本館とよりなり四棟ともに、木造二階造、本館階下は舎監室大食堂で、二階は集会用広間大小二室と客室二室、寮舎は室数三十六室、百名の寮生を収容している。全部寝台式で最も近代的で明朗な設備を施してある。工費約一千五十万円、なお本館階上客室は畳敷の日本間で東向き採光のよい心地よい室ですから学院関係の方々に

御来仙の折は遠慮なく御利用下さい。その中南六軒丁大学構内に同窓会用の社交室をつくる計画をしていますから、そうなるで一層便利になります。

一、総合大講義室。

場所は南六軒丁学院大学構内の最東端に当り、木造二階造り、四百名を容れる階段式の大講義室で、更に背面に階上に二室、階下に四室の五十名を入れる小教室が附属してゐる。工費約八百六十四万円。

一、教授研究室。

場所は矢張り南六軒丁学院大学構内の最西端で運動場の西奥に当る。木造二階造りで研究室二十室、小会議室、階上階下に各々一室宛。及び事務室一、宿直室一、等より成り採光のよい、近代風の建物である。工費五百七十六万円。

(『東北学院時報』一六四号 昭和二十五年七月十日)

二四九 シュネーダー記念図書館の建設計画

(昭和二十六年十二月五日)

シュネーダー記念図書館の着工について

三品 鼎

建築立案当初には廿六年創立記念日に着工の予定で凡ての計画が進められて来たが昨年下半年よりの資材の値上りで当初の設計通りに施工する事は覚束なくなつた。

専門家も加えた建築委員会が度々開かれ種々協議はしたものの、予算を増額するかそれとも設計を変更する以外に途がない。前者は到底望み得ない事がわかつて、いよく後者を選ぶ事となつた。仮令当初のものより規模を縮小しても記念図書館として相応しいものであり且つ出来得る限り近代的な要素を取入れると言う方針で山下寿郎設計事務所に依頼したのが今春であつた。六月中に一通りの設計が出来上つた。それでも予算上から少なからず無理がある。

種々検討したあげく部分的ではあるが再度の設計変更となり今日に至つた次第である。これならばと言う設計が出来上つたそうだが時恰も冬期に入るのでこの間を利

用し、広く委員を挙げ念には念を入れ各方面の要望に添え得らるゝものとして明春起工する事となつた。大方各位の御諒解を乞う次第である。

資金の状況は米国よりはミツシヨン本部の七万五千ドル、シュネーダー先生御生前御集めになつた一万四千ドル、篤志家や在米同窓よりの一千二百八十一ドル、以上邦貨にして約三千三百万円が先月末までに送金されている。此の分では予定の額に達するに間もあるまいと信ずる。一方国内資金に就ては別項の通りで前途なお相当困難が予想せらるゝが我々としては一日も早く目標額一千万円募集を完遂し、一は米国篤志家の好意に応え一は五十年の生涯を捧げ母校の今日あらしめたシュネーダー先生の恩に報いたいものである。

何卒して御激励賜わるよう熱望して止まない。

(『東北学院時報』一六八号 昭和二十六年十二月五日)

二五〇 シュネーダー記念図書館の落成式

(昭和二十八年十月十七日)

シュネーダー記念図書館落成式

十月十七日午後二時、大学礼拝堂に於て図書館落成開館式が挙げられた。

一 奏楽、二 聖書朗読並に祈禱、館岡剛。三 工事経過報告、津田郁。四 式辞、鈴木義男。五 挨拶、小田忠夫。六 祝辞、一力次郎、小松武治、ゲツプハルト、七 祝禱、クリーテ。八 謝辞、月浦利雄。司会、三品鼎

右の順序で厳肅簡素な式を終り別室に於て来会者一同でお茶の会を催した。遠方の来賓には鈴木義男、杉山元治郎、クリーテ、ゲルハート夫妻、小平国雄、小松武治その他一力次郎、アンケニー夫人、小山田正直、大石栄一等の諸氏であつた。

なお、鈴木理事長は概要次の如く図書館建設の意義について述べられた。

明治の中葉から大正、昭和の中期までにこの学院に学んだもの、及び仙台、東北の市民、また国民諸君は、永久にシュネーダーの名を忘れないであらう。東北学院の

礎石をおいた人は、押川、ホーイの両先生であります、これを育てあげ今日あらしめたのは、実にデー・ビー・シュネーダー先生であつた。

先生ほど日本と日本人を愛し、東北の青年を愛し、学院ボーイスを愛したものはなかつた。それは基督教の精神に基づき、国境を超えた崇高な人類愛の精神であつた。先生の精神はその数千の教え子によつて、現に日本に顕揚されつゝある。

然し先生逝いて年已に久しい。先生の徳と精神とを如実に思い起すことは次第に困難となるであらう。のみならず先生の図書館建設の念願は終生まで持ち続けられ、特に院長退職後は晩年の余力をこの目的にのみ集中されたことも周知の通りである。

そこで東北学院の存する限り、こゝに学ぶものをして、先生の徳と精神とを忘れしめず、その感化を永久に被らしめたいために、この一大記念塔を建設するに至つた次第であります。

図書館工事概要

一、構造

鉄筋コンクリート造、五階建延、四八三坪九合 館長

室、事務室、閲覧室、ゲルハート記念室、研究室、書庫、休憩室、その他

二、設計

山下寿郎設計事務所仙台支社

三、建物工事

大木建設株式会社

電気工事

大阪電気商会仙台支社

給排水工事

岡設備工業株式会社

四、総工費

三千七百四十五万円

五、起工式

一九五二年(昭二十七年)五月十四日着工

六、定礎式

一九五三年(昭二十八年)二月二十八日

七、献堂式

(大学講義室併て)一九五三年(昭二十八年)五月十四日

日

八、落成式

一九五三年(昭二十八年)十月十七日

〔『東北学院時報』一七三号 昭和二十八年十一月三十日〕

二五一 図書館壁飾「エホバを畏るゝは知識の本なり」の完成

(昭和三十年五月九日)

昭和三十年五月九日午後五時 東北学院大学において開会

(中略)

10 図書館玄関正面に壁飾を完成した この費用一〇

六、六〇〇円

字句

エホバを畏るゝは

知識の本なり

箴言一の七

筆者 津田 郁氏

〔後略〕

(理事会記録)

第二章 新学制による出発

二五二 大学昇格への審議

(昭和二十二年二月七日)

大学昇格委員会

二月七日(土)午後一時 於 教員室

校長 小田、三浦(運)、和泉、児玉、石川、情野、佐藤、

松木、岩崎、谷口、二関、大森

小田氏案ノ紹介ノミアリタリ

追而研究ノ上再会ノコト

- (1) 教授陣営ノ拡充
- (2) 研究設備ノ充実
 - (1) 図書館制度
 - (イ) 中、専、大、別個ノ図書館
 - (ロ) 大学図ヲ中央図トシテソノ他ヲ分室トスル
 - (イ) 教授ノ研究室ノ問題
 - (ロ) 東北経済研究所ノ設置
- (3) 研究室ノ整備
 - (イ) 教授ノ研究室ノ問題
 - (ロ) 東北経済研究所ノ設置
- (4) 教授会ニ強力ナル権限ヲ附与スルノ問題
- (5) 学校ノ制度ノ問題
 - (イ) 教務課ノ制度
 - (ロ) 訓育係ノ制度
 - (ハ) 英文科、経済科ノ別ノ問題
(講座制度)
- (6) 新入生ニ関スル件
 - (イ) 入学受験料 二〇〇円 理事会
 - (ロ) 入学金 五〇〇円 も承認
 - (ハ) 授業料
 - 新入生ハ二、五〇〇円 理事会
 - 旧生ハソノマヽ 承認
- (7) 学校經常費ノ不足分ニツイテハ外国教会ノ援助ヲ俟ツ様ニスルコトノ方進ニシテ外国教会側モ「ミツシヨンスクール」ノ自主権ヲ認メナガラ賛意ヲ表シテ
キル
- (8) 慰問品ノ件
年四回来ル
- (9) 図書館ノ件
携出券不正行使ニツイテハ閲覧停止

追而精細ハ圖書委員会デ決メル
教授会開催ノ日時ニ関スル件

土曜日、時間ハ其ノ都度適宜

(教授会記録)

二五三 中学校学則

(昭和二十二年四月一日)

東北学院中学校学則

目次

- 一、総則
- 二、修業年限
- 三、学年、学期及び休業日
- 四、教科課程及び授業時数
- 五、就学、欠席、休学、出席停止及び転学
- 六、褒賞及び懲戒
- 七、課程の修了及び卒業
- 八、授業料及び入学料
- 九、服制及び生徒心得

第一章 総則

第一条 本校は東北学院中学校と称する

第二条 本校は基督教主義に則り小学校に於ける教育の基礎の上に心身の発達に應じて中等普通教育を施すことを目的とする

第二章 修業年限

第三条 本校の修業年限は三ヶ年とする

第三章 学年、学期及び休業日

第四条 各学年は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る

第五条 学年を分けて三学期とする 第一学期は四月一日より八月三十一日に至り第二学期は九月一日より十二月三十一日に至り第三学期は翌年一月一日より三月三十一日に至る

第六条 休業日は左の通りとする

一、日曜日

一、祝日

一、本校創立記念日

一、春季休業 三月二十一日より同三十一日まで

一、夏季休業 七月二十一日より八月三十一日まで

一、冬季休業 十二月二十六日より翌年一月五日まで

一、クリスマス 十二月二十五日

第四章 教科課程及び授業時数

第七条 教科課程及び毎週授業時数は左表の通りとする

教科課程

第三学年	第二学年	第一学年	必須科目			選択科目	総計
			聖書科	国語科	習字科		
1	1	1	5	4	1		
			1	1			
4	4	5	1	1			
			5	4	4		
4	4	4	2	2	2		
1	1	1	1	1	1		
3	3	3	6	6	6		
1	1	1					
33	33	33					

第五章 就学、欠席、休学、出席停止及び転学

第八条 就学の時期は学年の始めより三十日以内とする

第十一条 病気のため一ヶ月以上修業し能はぬと思はれる者は医師の診断書を添え保護者連署の休学の願書を出し学校長の許可を得なければならぬ

第九条 本校に就学を希望する者に対しては選抜考査を行うことがある

第十二条 伝染病にかゝり若しくはその恐れある生徒

第十条 病気又はやむを得ぬ事由のため欠席する者

第十二条 伝染病にかゝり若しくはその恐れある生徒

又は性行不良であつて他の生徒の教育に妨げがあると認める生徒があるときはその保護者に対して生徒の出席停止を命ぜつることがある

第十三条 他校に転校を志望する者がある場合校長は

正当の事由を認めたとときには学籍簿の謄本を転学先の校長に送付する

第十四条 他の中学校から転学を願出でる者は欠員ある場合に限り同一学年に転入を許可するこ

とがある

第十五条 入学又は転学を許可された者は誓約書及び

在学証書を指定の期日までに提出しなければならぬ 用紙は本校から交付する

第六章 褒賞及び懲戒

第十六条 学業操行共に優秀な者及び特別の善行あり

他の模範となる生徒は之を褒賞する

第十七条 生徒たるの本分に背いた者はその軽重により懲戒する

第十八条 懲戒は戒飭及び出席停止とする

第七章 課程の修了及び卒業

第十九条 各学年の課程の修了又は卒業は平素の成績

を考査して之を定める

第二十条 全課程を修了したと認められた者には卒業証書を授与する

を授与する

第八章 授業料及び入学料

第二十一条 本校生徒の授業料は一ヶ月金 円とする

第二十二条 入学を志願する者は入学考査料として金 円を納入しなければならない

円を納入しなければならない

第二十三条 入学を許可された者は入学料金 円を納入しなければならない

入しなければならない

第二十四条 授業料の納期は毎月十五日までとする但し

既納の授業料は如何なる理由があつても之を還付しない

第二十五条 休学中と雖も授業料は納付しなければならない

ない

第九章 服制及び生徒心得

第二十六条 生徒の服制及び日常の心得は学校長が定める

る

〔注・この学則は昭和二十六年十二月十八日提出「補助金申請書」の添付書〕

二五四 高等学校および大学設立準備委員の選

任

(昭和二十二年五月二日)

〔昭和二十二年〕五月二日 午後四時 専門校 校長室

〔中略〕

高等学校大学設立準備委員トシテ左ノ諸氏ヲ、才願ス
ルコト

杉山元治郎、鈴木義男、小平国雄、庄司一郎、吉井桃
麿呂、クリーテ、アンケニー、阿部豊吉、高橋正雄、
中村重夫、一力次郎、千葉三郎、岡崎栄松、出村 剛、
小田忠夫、津田 郁、月浦利雄

以上十七氏

(理事会記録)

二五五 宮城学院との合併問題

(昭和二十三年三月十五日)

定期理事会 (昭和二十三年) 三月十五日午前十時

〔中略〕

一、大学昇格問題

宮城学院トノ合併可能ナリトセバ昇格実現ノ可能性ア
ルモ宮城学院ハ合併ヲ好マズ殊ニ最近巷間頻リニ合併
問題ヲ取り上ゲツゝアルニ刺ゲキサレツゝアリ、就テ
ハ直接東北学院側ヨリ、合併問題ヲ持チカケルノ妥当
ナラザルヲ懸念ノ上來月初旬臨時理事会開催前ニアン
ケニー理事ノ名ヲ以テ宮城東北ノ両理事者ヲアンケニ
ー氏宅ニ招請ノ上協調懇談ノコト

〔後略〕

(理事会記録)

二五六 高等学校設置認可申請書類

(昭和二十三年三月二十五日)

第六九号

昭和二十三年三月二十五日

東北学院高等学校

設立者財団法人東北学院

理事長 鈴木 義 男

宮城県知事 千葉 三郎殿

今般学校教育法に抛り左記の通り東北学院高等学校を設
置したいから御認可の御取計せられたく申請します

記

一、目的

本校は教育令の定むるところに依り高等普通学科を
授け社会に有用な人物を養成するを以て目的とする

二、名称

東北学院高等学校

三、位置

仙台市東二番丁四〇番地

四、学則

別紙添付

五、生徒定員 昭和二十三年度

第一部

五二〇名

第二部 夜間授業

三二五名

六、敷地建物の図面及其所有の区別

校地 六、三八二坪

東二番丁四〇、北目町四八、北目町通二一、

柳町通一五の一 連続地

校舎 建坪 二七六坪 延坪 四七〇坪

所有者 財団法人東北学院の所有にして当分中学

校と共用使用する

図面 別紙添付

七、開校年月日

昭和二十三年四月 日

八、経営及維持の方法

基本財産収入、授業料及其他の収入を以て支弁する

九、収支予算書

別紙添付

十、設立者 財団法人東北学院の履歴

別紙添付

十一、財団法人東北学院寄付行為

別紙添付

十二、財産目録

別紙添付

十三、資産登記簿抄本

別紙添付

十四、校長就任届

別紙添付

第二章 新学制による出発

校 長	職 名	教職員組織表
主 事	員 数	
教 諭		
講 師		
書 記		
計		
	備 考	
一		
一		
七		
二		
六		
三		
八		

学 年	組 数	生 徒 数	備 考
第一学年	四	二〇〇	第二部
第二学年	二	八〇	
第三学年	一	四五	全
計	七	三二五	

学 年	組 数	生 徒 数	備 考
第一学年	四	二四〇	第一部
第二学年	四	二二〇	全
第三学年	一	六〇	全
計	九	五二〇	

十五、学級編成表

昭和二十三年年度

体 育	全	全	全	全	全	全	全	外 国 語	全	全	全	社 会	全	全	全	全	国 語	聖 書	学 科 目
教 諭	全	全	全	全	全	教 諭	校 長	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	教 諭	職 名
未 定	清 水 浩	阿 部 三 郎	茂 庭 夫	飯 塚 雄	五十 正 躬	横 山 敏 夫	月 浦 利 雄	丹 野 安 直	笠 谷 一 夫	松 山 国 夫	安 藤 安	阿 部 重 雄	大 泉 幸 男	後 藤 久 郎	森 達 孝	伊 達 孝	赤 城 泰	氏 名	

学科目並に担当者調

書道	全数	外国語	全	全	全	全	理科	全	全	全	数学会	社会	図画	全	音楽	
講師	全講師	教諭	全	全	全	全	教諭	全	全	全	教諭	教諭	教諭	全	講師	
宮崎進	高橋剛男	菊地正	樋口光平	宗方司	吉川邦夫	長谷芳美	村井洪一	高橋清久	大泉敬二郎	北村秀夫	柿崎豊治	鈴谷一男	菊地一民	栗野耿介	中山新子	石川他家

附記	教室配当表																	
	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	本館	校舎別	室名	坪数	使用区分	備考
第二部教室五室は中学校教室を共用	全	特別教室	特別教室	全	全	全	全	全	全	全	全	全	普通教室	室名	坪数	使用区分	備考	体育
	全	七	七	一四	一八	二〇	一四	一四	二〇	二〇	一八	一八	普通教室	坪数	使用区分	備考	門岡幸八郎	
	七八〇	七	一〇	一四	一八	二〇	一四	一四	二〇	二〇	一八	一八	普通教室	坪数	使用区分	備考	門岡幸八郎	
	七八〇	七	一〇	一四	一八	二〇	一四	一四	二〇	二〇	一八	一八	普通教室	坪数	使用区分	備考	門岡幸八郎	
	七八〇	七	一〇	一四	一八	二〇	一四	一四	二〇	二〇	一八	一八	普通教室	坪数	使用区分	備考	門岡幸八郎	
	七八〇	七	一〇	一四	一八	二〇	一四	一四	二〇	二〇	一八	一八	普通教室	坪数	使用区分	備考	門岡幸八郎	
	七八〇	七	一〇	一四	一八	二〇	一四	一四	二〇	二〇	一八	一八	普通教室	坪数	使用区分	備考	門岡幸八郎	
	七八〇	七	一〇	一四	一八	二〇	一四	一四	二〇	二〇	一八	一八	普通教室	坪数	使用区分	備考	門岡幸八郎	
	七八〇	七	一〇	一四	一八	二〇	一四	一四	二〇	二〇	一八	一八	普通教室	坪数	使用区分	備考	門岡幸八郎	

十六、恒久基準予定表

(1) 本校には普通科のみを設ける

(2) 生徒定員

三六〇名 第二部 三二〇名

(3) 学級編成

学年	組数	第二部組数	備考
第一学年	三	二	
第二学年	三	二	
第三学年	三	二	
第四学年	九	八	
計			

(4) 同時に授業を受ける一学級の定員は四十名とする

(5) 教諭の数は $\frac{360 \times 32}{40 \times 15} = 19.2$

第二部 $\frac{320 \times 24}{40 \times 15} = 12.9$
以上とする

(6) 事務員の数は三名、第二部は一名とする
設備

左に掲げる施設に対しては常に改善する

校長室。会議室。教員室。事務室。普通教室。

音楽室。講堂。体育室。医務室。休養室

新に設置予定のもの

理科教室。実験室。標本室。準備室。図画兼書

道教室。教員研究室。

東北学院高等学校学則目次

一、総 則

二、修業年限

三、学年、学期及休業日

四、教科課程及授業時数

五、入学、退学、転学、休学及在学

六、褒賞及懲戒

七、課程の終了及卒業の認定

八、授業料及入学料

九、服制及生徒心得

第一章 総 則

第一条 本校は東北学院高等学校と称する

第二条 本校は基督教主義に則り中学校における教

育の基礎の上に、心身の発達にに応じて高等普通教育を施すことを目的とする

第二章 修業年限

第三条 本校の修業年限は三ヶ年とする

但し第二部(夜間課程)の修業年限は四年とする

第三章 学年、学期及休業日

第四条 各学年は四月一日に始り翌年三月三十一日に終る

第五条 学年を分ちて三学期とする第一学期は四月一日より八月三十一日に至り第二学期は九月一日より十二月三十一日に至り第三学期は翌年一月一日より三月三十一日に至る
休業日は左の通りとする

一、日曜日

一、大祭祝日

一、本校創立記念日

一、春季休業 三月二十日より全三十一日まで

一、夏季休業 七月二十日より八月三十一日まで

一、冬季休業 十二月二十五日より翌年一月十五日まで

第四章 教科課程及授業時数

第七条 教科課程及毎週授業時数は左表の通りとする

(一)授業時間は六十分とする)

第二章 新学制による出発

		一年級	二年級	三年級	通年	週時	総時間	授業形態		
七十二単位教科	必修	聖書	1	1	1	3	9	固定学級による		
		国語	3	3	3	9	27			
		社会	5	/		5	15			
		体育	3			3	3		9	27
	選択	国語	2	2	2	6	18			
		社会	東史	/		/	/		/	
			西史							
			人文							5
		会数	時事	/		/	/		/	
			解一							
		学理	幾何	5 (解一)	5	/			10	30
			解二							
		科	物理	/		/	/		/	
			化学							
生物	5		5					10		30
地学	/		/	/	/	/				
外語(英語)							5	5	10	30
小計		29	29	14	72	216				
七十二単位外教科	選択	社会	東史	/		/	/	/	講座式(同一学年)	
			西文							
			人文							
		会数	時事	/		/	/	/		
			幾何							
		学理	解二	/		/	/	/		
			解一							15
		外語	英語	/		/	/	/		
			独語							
			物理							
	科	化学	/		/	/	/			
		生物								
		地学								
	漢文	2	2	2	6	18				
図画										
工作										
音楽	6	6	6	18	54	講座式(超学年)				
書道										
小計		2-6	2-6	17-21	21-33	63-99				
合計		31-35	31-35	31-35	91-103	279-315				

高等学校教科課程

第五章 入学、退学、転学、休学及在学

第八条 入学の時期は学年の始めより三十日以内とする

第九条 本校に入学を許可される者は左の各号の一に該当し且身体検査に合格した者とする

一、中学校卒業者

二、外国に於て学校教育における九年の課程を修了した者

三、文部大臣の指定した者

四、その他本校において中学校を卒業した者

五、その他本校において中学校を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者

六、入学志願者に対して人物考査を行うことがある

第十条 入学志願者は左の書類に入学検定料を添えて学校長に願出でなければならぬ

一、入学願

二、履歴書

三、病氣又は已むを得ぬ事由の為欠席する者は其の事由及日時を詳記して三日以内に届出でなければならぬ

四、病氣のため一ヶ月以上修業し能はぬと思は

れる者は医師の診断書を添え保証人連署の願書を出し校長の許可を得なければならぬ

第十二条 病氣又は已むを得ぬ事由の為欠席する者は其の事由及日時を詳記して三日以内に届出でなければならぬ

第十三条 病氣のため一ヶ月以上修業し能はぬと思はれる者は医師の診断書を添え保証人連署の願書を出し校長の許可を得なければならぬ

第十四条 病氣又は已むを得ぬ事故のため退学せんとする者はその事由を記し保証人連署にて願出でなければならぬ

第十五条 左の各号の一に該当するときは退学を命ずる

一、品行不良で改悛の見込がないと認められた者

二、学力劣等で成業の見込がないと認められた者

三、正当の理由がなくて出席常でない者

四、授業料の納付を怠り督促を受けても之を納入せぬ者

第十八条 他の高等学校から転学を願出する者は欠員ある場合に限り同一程度の学年に編入することがある

とがある

第十九条 入学又は転学の許可を得た者は保証人連署の上誓約書を指定の期日まで提出しなければならぬ 用紙は本校から交付する

保証人は父兄又は一家計を立て生徒の身分に關し一切を引受けるに足る仙台市在住者に限る

第二十条 褒賞及懲戒

第二十一条 学業操行共に優秀な者及特別の善行あり他の模範となる生徒は之を褒賞する

第二十二章 生徒たる本分に背いた者は其の軽重に依り懲戒する

第二十三条 懲戒は戒飭、停学及放校とする

第二十四条 各学年の課程の修了又は卒業を認めるには平素の学業成績及び操行を考查して之を定める

第二十五条 三学年間に八十五単位若くはそれ以上を履

第二十六章 卒業證書を授与する

第二十七条 習した者は本校の課程を修了した者と認め卒業證書を授与する

第八章 授業料及入学料

第二十六条 本校生徒の授業料は一ヶ月金壹百七拾円とする 但し第二部は壹百貳拾円とする

第二十七条 授業料の納期は毎月七日以内とする 既納の授業料は如何なる事由あるも之を還付しない

第二十八条 入学を志願する者より入学考查料として金百円 第二部金五拾円を徴収する

第二十九条 但転学及再入学は之を入学と看做す 入学を許可された者は入学料金參百円を納入しなければならぬ 但第二部に於ては金百円とする

第三十条 休学中と雖も授業料は納付しなければならぬ

第九章 制服及生徒心得

第三十一条 生徒の制服及日常の心得は学校長が之を定める

(注・「記」中九以下の別紙添付書類省略)

第三十二条 入学の方法は学校長が定める

第三十三条 三学年間に八十五単位若くはそれ以上を履

第三十四条 卒業證書を授与する

第三十五条 習した者は本校の課程を修了した者と認め卒業證書を授与する

第三十六条 本校生徒の授業料は一ヶ月金壹百七拾円とする 但し第二部は壹百貳拾円とする

第三十七条 授業料の納期は毎月七日以内とする 既納の授業料は如何なる事由あるも之を還付しない

第三十八条 入学を志願する者より入学考查料として金百円 第二部金五拾円を徴収する

第三十九条 但転学及再入学は之を入学と看做す 入学を許可された者は入学料金參百円を納入しなければならぬ 但第二部に於ては金百円とする

第四十条 休学中と雖も授業料は納付しなければならぬ

第四十一条 生徒の制服及日常の心得は学校長が之を定める

(注・「記」中九以下の別紙添付書類省略)

第四十二条 入学の方法は学校長が定める

第四十三条 三学年間に八十五単位若くはそれ以上を履

第四十四条 卒業證書を授与する

第四十五条 習した者は本校の課程を修了した者と認め卒業證書を授与する

第四十六条 本校生徒の授業料は一ヶ月金壹百七拾円とする 但し第二部は壹百貳拾円とする

第四十七条 授業料の納期は毎月七日以内とする 既納の授業料は如何なる事由あるも之を還付しない

第四十八条 入学を志願する者より入学考查料として金百円 第二部金五拾円を徴収する

第四十九条 但転学及再入学は之を入学と看做す 入学を許可された者は入学料金參百円を納入しなければならぬ 但第二部に於ては金百円とする

第五十条 休学中と雖も授業料は納付しなければならぬ

第五十一条 生徒の制服及日常の心得は学校長が之を定める

(注・「記」中九以下の別紙添付書類省略)

指令第三五二号

財団法人東北学院

理事長 鈴木義男

昭和二十三年三月二十五日申請財団法人東北学院高等

学校設置を認可する。

昭和二十三年四月九日

宮城県知事 千葉三郎 叩

二五七 大学設置認可申請書類

(昭和二十三年七月二十日)

大学設置認可申請書

此の度学校教育法第四条によつて東北学院大学を設置したいと思ひますから御認可下さるよう別紙書類を添えて申請いたします

昭和二十三年七月二十日

設置者

財団法人東北学院理事長 鈴木義男 叩

文部大臣 森戸辰男 殿

書類目次

- 一、東北学院大学設置要項
- 二、学則
- 三、校地 (図面添付)
- 四、校舎等建物 (図面添付)
- 五、図書、標本、機械、器具等施設
- 六、学部及学科別学科目又は講座
- 七、履修方法及学位授与
- 八、学部及学科別学生収容定員
- 九、教員組織
- 十、設置者に関する調
- 十一、資産
- 十二、維持経営の方法
- 十三、現在経営している学校の現況
- 十四、将来の計画

第一 東北学院大学設置要項

一、目的

本大学は基督教による人格教育を基礎として広く知識を授けると共に深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的、及び応用的能力を展開させ、もつて世界文化

の創造と人類の福祉に寄与することを目的とする

二、名称 東北学院大学

三、位置 宮城県仙台市南六軒丁老番地

四、校地 総坪数 一一、九七四坪

五、校舎等建物現在総坪数一、五〇一坪 新築計画坪数

一、四七七坪 計二、九七八坪

六、図書、標本、機械、器具等施設概要

図書 一般教育図書四、〇五〇冊、専門図書三七、

五六〇冊、雑誌、報告、紀要一三、八〇〇冊、計五

五、四一〇冊

標本、機械、器具、標本(商品学等)三五〇点、機械器

具(二三四点、計五八四点)

七、学部及び学科の組織並びに附属施設

本大学に文学部及商経学部を置く 文学部を分けて英

文学科第一部及英文学科第二部とし、商経学部を分け

て経済学科第一部及経済学科第二部とする。文学部英

文学科は主として英米語を専攻するが更に学生の将来

の志望によつて四類に分け第三年目の始に英米語学、

文学を専攻しようとする者は第一類(英米文学コース)

教職に就こうとする者は第二類(教職コース)神学を専

攻しようとする者は第三類(神学コース)実務に就こう

とする者は第四類(実務コース)に分れる。商経学部経済学科に於ては主として経済学を専攻しコースの区別はない。

但し商経学部学生中将来教職に就こうとする者は別に定める規定に従つて教職教養科目を選択履修しなければならぬ。尚附属施設として教授研究室、附属図書館、アメリカ文化研究所及東北経済研究所を置く。

八、学部及び学科別、学科目又は講座概要

(一)、一般教養科目(かっこ内の数字は単位数を示す)

文学部

(1) 人文科学関係

基督教(二)哲学概論(二)心理学(二)倫理学(二)世界思想

史(一)歴史(二)文学(一)英語(四)独逸語(八)仏蘭西語(八)

(2) 社会科学関係

法学(二)政治学(二)経済学(二)社会学(二)統計学(二)

(3) 自然科学関係

自然科学概論(四)数学(四)物理学(四)天文学(四)生物学(四)

地学(四)人類学(四)

商経学部

(1) 人文科学関係

基督教(二)哲学概論(二)心理学(二)倫理学(二)世界思想

- 史(一)歴史(二)文学(一)英語(八)独逸語(八)仏蘭西語(八)
- (2) 社会科学関係
 法学(一)経済学(一)社会学(一)統計学(一)
- (3) 自然科学関係
 自然科学概論(一)数学(四)物理学(四)生物学(四)化学(四)
- (一)、専門科目
 文学部英文学科
- (1) 外国語学部
 英語講読(三)英語音声学(六)英語会話(六)英文法(三)英作文(三)英語演説法(一)英語史(四)言語学(四)修辞学(四)ギリシャ語(一)ラテン語(四)英語発音教授法(四)
- (2) 文学部門
 英米文学講読(三)英文学(四)米文学(四)英米近代劇(二)シエクスピリア(一)エッセイ(一)英文学史(四)米文学史(四)英米文学論(四)日本文学史(一)基督教文学(一)
- (3) 神学部門
 基督教学(一)神学緒論(四)旧約緒論(四)教会史(四)宗教史(四)宗教心理学(四)宗教教育(一)新約緒論(四)
- (4) 経済学部門
 経済学(四)貨幣金融論(四)
- (5) 商業学部門
- 商業学(一)簿記学(一)英文簿記(一)外国貿易(一)商業英語通信(四)産業心理学(一)
- (6) 法学部門
 憲法(一)民法(一)商法(一)労働法(一)
- (7) 新聞学部門
 新聞学原論(四)新聞経営論(四)新聞編集論(四)外国新聞講読(四)
- (8) 自然科学部門
 自然科学(四)数学(四)
- (9) 美術、音楽部門
 美術概論(八)音楽(八)音楽史(六)
- (10) 実習
 タイプライティング(四)速記術(一)
- (11) 卒業論文(一)
- 商経学部経済学科
- (1) 公民法部門
 憲法(四)労働法(四)民法(八)商法(三)
- (2) 経済部門
 経済原論(六)経済学史(四)経済史(四)貨幣金融論(四)経済統計学(四)経済地理(四)外国書講読(八)国際経済論(四)
- (3) 政策部門

經濟政策一部(四)經濟政策二部(四)

(4) 財政学部門

財政学(四)

(5) 商学部門

商業数学(四)保険学(四)商業英語通信(四)

(6) 経営学部門

経営経済学(四)

(7) 会計学部門

会计学一部(六)会计学二部(六)

(8) 新聞学部門

新聞学(四)

(9) 神学部門

神学(四)

(三)、教職教養科目(各部共通)

教育心理(四)教育行政法(一)各科教授論(四)学校衛生(一)

教育実習(六)教育哲学(四)教育史(四)教育社会学(四)

(四)、体育科目(各部共通)

体育学概論(一)保健教育(一)実技(二)

九、履修方法及び学位授与概要

(1) 前の二年間に主として一般教養科目を後の二年間

に主として専門科目を履修せしめる方法をとる。

(2) 学士号は一般教養科目、専門科目及び体育科目を

合せて、文学部英文学科(第一部、第二部)に於ては

三十二科目百二十四単位(但し教職に就こうとする

者は三十四科目百二十四単位)以上、商経学部経済学

科に於ては三十五科目百二十四単位(但し、教職に就

こうとする者は四十二科目百四十四単位)以上を履

修した者に与えられる。

文学部英文学科

商経学部経済学科

文学士

経済学士

十、職員組織概要

職名	専任	兼任	員計	備考	学長	教授	助教授	助手	講師	事務職員	雇員	校医
					一	三〇	一五	四		一〇	一〇	二
					六				三〇			
						三六	一五	四	三〇		一〇	二
					専任中七名は米国人					司書三名を含む		

十一、学部及び学科別学生定員

学部別	学科別	第一年度				第二年度				第三年度				第四年度				計
		英文学科第一部	英文学科第二部	経済学科第一部	経済学科第二部	英文学科第一部	英文学科第二部	経済学科第一部	経済学科第二部	英文学科第一部	英文学科第二部	経済学科第一部	経済学科第二部	英文学科第一部	英文学科第二部	経済学科第一部	経済学科第二部	
文学部	英文学科第一部	一〇〇	五〇	一五〇	一〇〇	五〇	一五〇	一〇〇	五〇	一五〇	一〇〇	五〇	一五〇	一〇〇	五〇	一五〇	四〇〇	
文学部	英文学科第二部	一〇〇	五〇	一五〇	一〇〇	五〇	一五〇	一〇〇	五〇	一五〇	一〇〇	五〇	一五〇	一〇〇	五〇	一五〇	四〇〇	
商経学部	経済学科第一部	一〇〇	五〇	一五〇	一〇〇	五〇	一五〇	一〇〇	五〇	一五〇	一〇〇	五〇	一五〇	一〇〇	五〇	一五〇	四〇〇	
商経学部	経済学科第二部	一〇〇	五〇	一五〇	一〇〇	五〇	一五〇	一〇〇	五〇	一五〇	一〇〇	五〇	一五〇	一〇〇	五〇	一五〇	四〇〇	
計		四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	一、六〇〇					

十二、設置者 財団法人東北学院

十三、維持経営の方法概要

授業料、寄附金等の収入を以て支弁経営するも収入
金不足の場合は財団交付金を以て補う。

予算概要

科 目	二十四年度	二十五年度	二十六年 度	二十七年 度
一、授業料その他の収入	一、八六八、〇〇〇	三、三〇五、〇〇〇	四、七〇五、五〇〇	六、〇七四、〇〇〇
二、寄 附 金	五五〇、〇〇〇	五五〇、〇〇〇	五五〇、〇〇〇	五五〇、〇〇〇
三、財 団 交 付 金	一、〇九七、二七〇	八六〇、七〇〇	七三七、四三〇	五九四、八〇〇
・ 収 入 合 計	三、五一五、二七〇	四、七一一、七〇〇	五、九九二、九三〇	七、二一八、八〇〇
一、人 件 費	二、一一二、〇〇〇	二、九六六、四〇〇	三、八四二、四〇〇	四、七五九、二〇〇
二、其 の 他	一、四〇三、二七〇	一、七四九、三〇〇	二、一五〇、五三〇	二、四五九、六〇〇
支 出 合 計	三、五一五、二七〇	四、七一一、七〇〇	五、九九二、九三〇	七、二一八、八〇〇

十四、大学開設の時期 昭和二十四年四月一日

第八 学部及学科別学生収容定員

一、学部及学科別学生収容定員

学部	学科	入学収容定員	
		第一学年	第二学年
文学部	英文学科第一部	一〇〇	
	英文学科第二部	五〇	
小計		一五〇	
商経学部	経済学科第一部	一五〇	
	経済学科第二部	一〇〇	
小計		二五〇	
合計		四〇〇	

二、学部別総学生収容定員

学部	学科	入学収容定員				計	備考
		第一学年	第二学年	第三学年	第四学年		
文学部	英文学科第一部	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	四〇〇	
	英文学科第二部	五〇	五〇	五〇	五〇	二〇〇	
小計		一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	六〇〇	
商経学部	経済学科第一部	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	六〇〇	
	経済学科第二部	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	四〇〇	
小計		二五〇	二五〇	二五〇	二五〇	一、〇〇〇	
合計		四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	一、六〇〇	

三、専門科目別学生収容定員

学 部	学 科	専門科目又は講座収容人員		備 考
		専 門 科 目	又 は 講 座	
文 学 部	英文学科第一部	一〇〇		
	英文学科第二部	五〇		
小 計		一五〇		
商 経 学 部	経済学科第一部	一五〇		
	経済学科第二部	一〇〇		
小 計		二五〇		
合 計		四〇〇		

(注・書類目次第二二七、第九以下省略)

校学二三〇号

昭和二十四年三月二十五日

財団法人 東北学院理事長 殿

文部省学校教育局長 印

御取計願いたい。

校学二三〇号

財団法人 東北学院

大学設置認可について

昭和二十三年七月三十日付をもつて申請の標記のことに
 ついては別紙指令の通り認可になったから、右御了承の
 上指令に示された条件の実施について万遺漏のないよう

昭和二十三年七月二十日をもつて申請の学校教育法によ
 る大学東北学院大学設置のことは、大学設置委員会の答
 申に基き次のように認可する。

昭和二十四年三月二十五日

文部大臣 高 瀬 莊太郎 印

一、位 置 宮城県仙台市南六軒丁一番地

二、学部学科 文経学部 英文学科、経済学科

三、開設学年 第一学年

四、開設時期 昭和二十四年四月

五、設置条件

(一) 一般教養自然科学系学科の実験室、器具機械を大

学開設後一年以内に整備すること。

(二) 一般教養自然科学関係図書を充実すること。

(三) 図書閲覧室を拡充すること。

(四) 学部学科を文経学部英文学科、経済学科とするこ

と。

(五) 学年進行に伴い、経済学科専任教授助教を補充

すること。

(六) 以上の事項についてはその実施につき報告を徴

し、又必要ある場合は委員会として实地視察を行う。

尚教員組織については、その充実に至るまでは本委

員会に協議しなければならない。

二五八 大学学則

(昭和二十四年四月一日)

東北学院大学学則

第一章 目的

第二章 学部構成

第三章 修業年限及び学生定員

第四章 学年、学期及び休業日

第五章 入学、休学、復学、転科、転学、退学及び保

証人

第六章 学科課程

第七章 履修方法及び課程修了の認定

第八章 卒業証書授与及び学士称号

第九章 授業料、受験手数料及び入学金

第十章 聴講生及び外国学生

第十一章 賞罰及び賠償

第十二章 職員組織

第十三章 教授会

第十四章 研究施設

第十五章 寄宿舎

附 則

第一章 目 的

第一条 本大学は基督教による人格教育を基礎として広く知識を授けると共に深く専門の学芸を教授研究し知的、道徳的及び応用的能力を展開させもつて世界文化の創造と人類の福祉に寄与することを目的とする。

第二章 学部構成

第二条 本大学に文経学部を置く。
文経学部を分けて英文学科及び経済学科とする。

第三章 修業年限及び学生定員

第三条 本大学の修業年限は各学年とも四年とする。但し特別の事情あるときは四年以上八年まで在学することが出来る。

第四条 第一学年に入学を許可する学生の定員を左の通り定める。

一、文経学部 英文学科 百 名
二、文経学部 経済学科 百五十名

第四章 学年、学期及び休業日

第五条 学年は毎年四月に始まり翌年三月三十一日に終る。

第六条 学年を分けて左の二学期とする。

一、第一学期 四月一日より十月十三日まで

二、第二学期 十月十四日より三月三十一日まで

第七条 学年中の定期休業日を左の通り定める。

一、日曜日

二、祝 日

三、春季休業日 三月十一日より四月七日まで

四、夏季休業日 七月八日より八月三十一日まで

五、冬季休業日 十二月二十二日より一月六日まで

六、本大学創立記念日

七、その他国家の定めた休日

第五章 入学、休学、復学、転科、転学、退学及び保証人

第八条 入学は毎年一回でその時期は学年の始めか

ら三十日以内とする。

第九條 第一学年に入学し得るものは左の各号の一

に該当する者でなければならぬ。

一、高等学校卒業者

二、通常の課程に依り十二年の学校教育を

修了した者、但し通常の課程以外の課

程によりこれに相当する学校教育を修

了した者を含む

三、外国に於て学校教育に於ける十二年の

課程を修了した者

四、文部大臣の指定した者

五、その他大学に於て高等学校を卒業した

者と同等以上の学力があると認めたる者

第十條 第二学年以上に編入を許可すべき者は前条

の定める何れか一に該当し、且つ前学年の

学科課程を卒えた者と同等以上の学力を有

する者に限る。

第十一條 病氣その他の事由によつて休学の願出があ

るときは正当の事由があると認められる時

に限り許可する。但し休学期間は一年を超

えることが出来ない。

第十二條 本大学の学科の一から他の学科に転科を志

願する者があるときは正当の事由があると

認められる時に限り許可する。但し必要あ

る時は試験を課することがある。

第十三條 学科課程の等しい他の大学に転学を志望す

る者ある時は正当の事由があると認められ

る時に限り許可する。

第十四條 学科課程の等しい他の大学に在学する者で

本大学に転入学を志願する者がある時は正

当の事由があると認められる時に限り相当学

年に編入を許可する。但し必要ある時は学

力を検定することがある。

第十五條 本大学を退学しようとする者はその理由を

具して保証人連署の上退学願を提出しなけ

ればならない。

第十六條 本大学を退学せんとする願出があつた時は

正当の事由があると認められる時に限り許

可する。

第十七條 本大学を退学後一年以内に復学を志願する

者がある時は正当の事由があると認められ

る時に限り試験によらないで原学年以下の

第十八条

学年に編入学を許可することがある。
本大学学生が左の各号の一に該当するとき
は退学を命ずることがある。

一、性行不良で改善の見込がないと認めら
れる者

二、学力劣等で成業の見込がないと認めら
れる者

三、引続き一年以上欠席した者

四、出席が不規則な者

五、授業料その他の納付金の納付の義務を
怠った者

第十九条

入学を許可された者は仙台市内に居住し独
立の生計を営む成年以上の者で学生の監督
をなすことの出来る者一名を保証人に立て
て別に定める所式に従つて在学証書を提出
しなければならない。

第二十条

保証人の転居、改印、改氏名などはその都
度届出でなければならぬ。

第二十一条

保証人が死亡したとき又は第十九条に定め
る資格を失った時乃至は何等かの事由で保
証人に変更が生じたときは更に之に代るべ

第六章 学科課程

き者を保証人に定め第十九条に定める在学
証書を提出しなければならない。

第二十二條

本大学に左の学科目を置く。(かつこの数
字は単位数を示す)

一、一般教養科目

文経学部英文学科

基督教学(二)哲学概論(二)心理学(二)倫理学

(二)世界思想史(一)歴史(二)文学(一)英語(四)独

逸語(八)仏蘭西語(八)法学(二)政治学(二)経済

学(二)社会学(二)統計学(二)自然科学概論(四)

数学(四)物理学(四)天文学(四)生物学(四)地学

(四)人類学(四)

文経学部経済学科

基督教学(二)哲学概論(二)心理学(二)倫理学

(二)世界思想史(一)歴史(二)文学(一)英語(八)独

逸語(八)仏蘭西語(八)法学(二)経済学(二)社会

学(二)統計学(二)自然科学概論(二)数学(四)物

理学(四)生物学(四)化学(四)

二、専門科目

文経学部英文学科

英語講読(三)英米文学講読(四)英語音声学
 (六)英語會話(六)英文法(三)英作文(三)英文学
 (六)英米近代劇(二)米文学(四)シェイクスピア
 (二)エッセイ(二)英語演説法(二)英語発音教授法(四)英語史(四)英文学史(四)米文学史(四)言語学(四)修辞学(四)英米文学論(四)基督教学(二)神学緒論(四)旧約緒論(四)新約緒論(四)教会史(四)宗教史(四)宗教心理学(四)宗教教育(二)ギリシャ語(二)ラテン語(四)簿記学(二)外国貿易(二)商業英語通信(四)民法(二)商法(二)憲法(二)労働法(二)商業学(二)経済学(二)貨幣金融論(四)タイプライティング(四)英文簿記(二)速記術(二)産業心理学(二)自然科学(四)数学(四)日本文学史(二)美術概論(八)音楽(八)音学史(六)基督教文学(二)新聞学概論(四)新聞経営論(四)新聞編集論(四)外国新聞講読(四)

文經学部経済学科

経済原論(六)経済史(四)経済政策一部(四)経済政策二部(四)経済地理(四)貨幣金融論(四)経済学史(四)経済統計学(四)国際経済論(四)

財政学(四)会計学一部(六)会計学二部(六)経営経済学(四)保険学(四)商業数学(四)憲法(四)民法一部(四)民法二部(四)商法一部(六)商法二部(六)労働法(四)外国書講読(八)商業英語通信(四)新聞学(四)神学(四)

三、教職教養科目(各学科共通)

教育心理(四)教育行政法(一)各科教授論(四)学校衛生(一)教育実習(六)教育哲学(四)教育史(四)教育社会学(四)

四、体育科目(各学科共通)

体育学概論(一)保健教育(一)実技(二)

第二十三条 前条の学科目の配当及び授業時間数の配当は教授会に於て定める。

第七章 履修方法及び課程修了の方法

第二十四条 前期二学年に主として一般教養科目を後期二年間に主として専門科目を履修するものとする。

第二十五条 本大学を卒業し学士と称することを得るためには次条乃至第二十九条に定めるところに従つて文經学部英文学科に於ては三十二科目百二十四単位(但し教職に就こうとす

第二十六条

る者は三十四科目百二十四単位以上文経学部経済学科に於ては三十五科目百二十四単位(但し教職に就こうとする者は四十二科目百四十四単位)以上を履修しなければならない。

一般教養科目に属する学科目及び単位を左の通り定め各学年共十四科目四十単位以上を選択履修しなければならない。(かつこの数字は単位数を示す)

文経学部英文学科

一、人文科学関係

左の学科目中から九科目二十四単位以上を選択履修すること。

基督教学(二)哲学概論(二)心理学(二)倫理学

(二)世界思想史(一)歴史(二)文学(一)英語(四)独逸

語(八)仏蘭西語(八)

二、社会科学関係

左の学科目中から二科目四単位以上を選択履修すること。

法学(二)政治学(二)経済学(二)社会学(二)統計

学(二)

三、自然科学関係

左の学科目中から三科目十二単位以上を選択履修すること。

自然科学概論(四)数学(四)物理学(四)天文学

(四)生物学(四)地学(四)人類学(四)

文経学部経済学科

一、人文科学関係

左の学科目中から九科目二十八単位以上を選択履修すること。

基督教学(二)哲学概論(二)倫理学(二)世界思

想史(一)歴史(二)文学(一)英語(八)独逸語(八)

蘭西語(八)心理学(二)

二、社会科学関係

左の学科目中から二科目四単位以上を選択履修すること。

法学(二)経済学(二)社会学(二)統計学(二)

三、自然科学関係

左の学科目中から三科目八単位以上を選択履修すること。

自然科学概論(二)数学(四)物理学(四)生物学

(四)化学(四)

第二十七条

専門科目に属する学科目及び単位は左によつて履修しなければならない。

一、文経学部英文学科

必修科目必修選択科目職業科目又は自由選択科目に属する学科目中から十五科目八十単位以上を履修すること。(但し論文を含む)

(1) 必修科目

英語講読(占)英語会話(二)英米文学講読(二)英語音声学(二)

(2) 必修選択科目

左の学科目中から二十単位以上を履修すること。

英語会話(四)英語音声学(四)英文法(占)英作文(占)英文学(六)英米近代劇(二)米文学(四)シ
エイクスピイヤ(二)エッセイ(二)英語演説
法(二)英語発音教授法(四)

(3) 職業科目

左の各類中何れかの一類に属する学科目中から五科目二十単位以上を選択履修すること。但し第二類は七科目二十

単位以上とする。

第一類

英語史(四)英文学史(四)米文学史(四)言語学(四)英米文学論(四)修辞学(四)

第二類

第二十八条に規定する教職教養科目

第三類

神学緒論(四)旧約緒論(四)新約緒論(四)教会史(四)宗教史(四)宗教心理学(四)宗教教育(二)ギリシヤ語(二)

第四類

簿記学(二)外国貿易(二)商業英語通信(四)民法(二)商法(二)憲法(二)労働法(二)商業学(二)タイプライティング(四)英文簿記(二)速記術(二)産業心理学(二)

(4) 自由選択科目

必修科目、必修選択科目及び職業科目の履修単位が十五科目八十単位に満たない場合は左の学科中から選択履修すること。

自然科学(四)数学(四)日本文学史(二)ラテン

語(四)基督教(二)音楽(八)音楽史(六)基督教

文学(二)経済学(四)貨幣金融論(四)新聞学原
論(四)新聞経営論(四)新聞編集論(四)外国新
聞講読(四)美術概論(八)

(5) 卒業論文(二)

二、文経学部経済学科

左の科目中から十七科目八十単位以上を
選択履修すること。

経済原論(六)経済史(四)経済政策一部(四)経
済政策二部(四)経済地理(四)貨幣金融論(四)

経済学史(四)経済統計学(四)国際経済論(四)
財政学(四)会计学一部(六)会计学二部(六)経

営経済学(四)保険学(四)商業数学(四)憲法(四)
民法一部(四)民法二部(四)商法一部(六)商法

二部(六)労働法(四)外国書講読(八)商業英語
通信(四)新聞学(四)神学(四)

第二十八条 将来教職に就こうとする者は左に定める学
科目中から二十単位以上を選択履修しなけ
ればならない。

教育心理(四)教育行政法(一)各科教授論(四)
学校衛生(一)教育実習(六)教育哲学(四)教育

史(四)教育社会学(四)

第二十九条 体育科目は各学科共必修とし左によつて三
科目四単位を履修しなければならない。

体育学概論(一)保健教育(一)実技(二)

第三十条 学生は履修する学科目を毎学年の始めに選
んで学長に届出でその許可を受けなければ
ならない。変更の際も亦同様である。

第三十一条 他学科の学科目の聴講を希望する者は当該
科目担任教授の承認を得て学長に願出でそ
の許可を受けなければならない。

第三十二条 学生は許可された学科目に限り試験を受け
ることが出来る。

第三十三条 各学科目の修了及び全課程の卒業を認める
には平素の学業と試験とを以て定める。但
し文経学部英文学科の学生に対しては卒業
論文の成績を斟酌する。

第三十四条 卒業論文の研究題目及び研究計画は第四年
目の始めに学長に届出でなければならな
い。

第三十五条 試験は原則として各学期毎に行う。但し学
科目によつては学年末に一回行うことがあ

る。

第三十六条 病氣その他已むを得ない事由のため試験に

応ずることが出来ない者に対しては毎年五月

月特に追試験を行うことがある。

第三十七条 試験の成績は秀、優、良、可、不可の五等

を以て表し可以上を合格とする。

第八章 卒業証書授与

第三十八条 本大学所定の学科目及び単位の全部を履修

し且つ試験に合格した者には別に定める書

式に従い卒業証書を授与する。

第三十九条 本大学を卒業した者は左によつて学士の称

号を用うることが出来る。

文経学部 英文文学科 文学士

文経学部 経済学科 経済学士

第九章 授業料、受験手数料及び入学金

第四十条 授業料は年額八千円とし之を左の二期に分

けて納付する。

一、第一期 四月 五千円

二、第二期 十月 三千円

第四十一条 入学志願者は入学願書と共に受験手数料金

一千円を納付しなければならない。

第四十二条 新に入学又は編入学を許可せられた者は入

学金二千円を納付しなければならない。

第四十三条 前三条に規定する納付金は何等の事由があ

つても返還しない。

第十章 聴講生及び外国学生

第四十四条 本大学所定の学科目中一科目又は数科目の

聴講を出願する者があるときは学年の始め

から三十日以内に限り学力検定の上聴講生

として聴講を許可することがある。

第四十五条 聴講生の聴講料は別に之を定める。

第四十六条 外国人で本邦当該駐在公使館の紹介を以て

入学を希望する者があるときは正規の試験

によらないで学力検定の上特別生として入

学を許可することがある。

第四十七条 特別生の取扱については別に定める規定に

よる外はすべて本科生に関する規定を準用

する。

第十一章 賞罰及び賠償

第四十八条 品行方正で学業成績が特に優秀な者は次年

間特待生とすることがある。

第四十九条 特待生からはその学年間授業料を徴収しな

い。

第五十条 特待生が学生たるの本分に背いた行為をし

たときはその資格を失うものとする。

第五十一条 本大学の諸規定に違反し学生たるの本分に

背いた行為をした者にはその軽重によつて

懲戒を行う。

一、謹 責

二、謹 慎

三、停 学

四、退 学

第五十二条 本大学附属の図書機械又は器具を毀損又は

亡失した者に対しては現品若しくは相当代

価を以て賠償させることがある。

第十二章 職員組織

第五十三条 本大学に左の職員を置く。

一、学 長 一名

二、学 部 長 一名(教授をして兼任

せしめる)

三、教 授 三六名(内六名は兼任

七名は外国人)

四、助 教 授 一五名

五、助 手 四名

六、講 師 三〇名

七、事務職員 二〇名

八、校 医 二名

第五十四条 学長は大学一般の事務を監督し所属職員を

統率する。

学部長は学長を補佐し所属学部の事務を監

督し所属職員を指揮する。

教授及び講師は学生を教授しその研究を指

揮する。

助教授は教授を輔けて授業を行う。

助手は教授又は助教授の指揮を承けて學術

に関する職務に従事する。

事務職員は学長の命を承けて事務に従事す

る。

校医は学生の保健衛生を掌る。

第十三章 教授 会

第五十五条 本大学に教授会を置く。

第五十六条 教授会は各学科所属の教授助教を以て組

織する。但し学長は必要ありと認めるとき

は講師を列席させることが出来る。

第五十七条 教授会は次の事項を審議する。

一、学則の改廃に関する事項

二、学生の入学、休学、復学、転学並びに卒業に関する事項

三、学科課程に関する事項

四、試験に関する事項

五、学生の賞罰並びに賠償に関する事項

六、その他学長の諮問した事項

第五十八条 教授会は学長が召集してその議長となる。

但し学長事故あるときは学長は代理者を指命する。

第五十九条 教授会は教授及び助教授の定員数の三分の

二の出席を以て開会し出席者数の過半数で議決する。但し公務による不在者は定員数から除くことが出来る。

第六十条 教授会に附議しようとする事項あるときはその事由を具し文書を以て学長に申請することが出来る。

第六十一条 教授会の議案は少くとも会議開催三日前に

通知することを原則とする。

第十四章 研究施設

第六十二条 本大学に研究施設として附属図書館、研究室、アメリカ文化研究所並びに東北経済研

究所を置く。

第六十三条 前条に掲げる研究施設に関する規定は別に

之を定める。

第十五章 寄宿舎

第六十四条 本大学に寄宿舎を置く。

寄宿舎に関する規則は別に之を定める。

附則

本学則は昭和二十四年四月一日から実施する。

二五九 短期大学部設置の審議

(昭和二十四年九月二十一日)

昭和二十四年九月二十一日 理事会 院長室に於て

(中略)

議題

一、短期大学設置の件 及寄附行為第四条変更の件

英文科及経済科とし修業年限二年夜間授業とする

小田学長より詳細説明満場一致可決す

〔後略〕

(理事会記録)

二六〇 短期大学部設置認可申請書類

(昭和二十四年十月十三日)

第二十四号

短期大学設置認可申請書

此の度学校教育法第四条によつて東北学院大学短期大学部を設置したいと思ひますから御認可下さるよう別紙書類を添えて申請いたします

昭和二十四年十月十三日

設置者 財団法人東北学院

理事長 鈴木義男

文部大臣 高瀬 荘太郎 殿

書類目次

- 一、東北学院大学短期大学部設置要項
- 二、学則
- 三、校地(図面添付)

四、校舎等建物(図面添付)

五、図書、標本、機械、器具等施設

六、学科又は専攻部門別学科目

七、履修方法

八、学科又は専攻部門別学生収容定員

九、教員組織

十、設置者に関する調

十一、資産

十二、維持経営の方法

十三、現在設置している学校の現況

十四、将来の計画

十五、併設の場合の調

第一 東北学院大学短期大学部設置要項

一、目的及び使命

本大学は基督教による人格教育を基礎として広く智識を授けると共に實際的な専門教育を施し良き社会人を育成することを目的とする。

二、名称 東北学院大学短期大学部

三、位置 宮城県仙台市南六軒丁一番地

四、校地 総坪数 一一、九七四坪

五、校舎等建物

現在総坪数一、五〇一坪、工事中四三〇坪、新築改築計画坪数九二八坪 計二、八五九坪

六、図書、標本、機械、器具等施設概要

図書 一般教育図書四、二九九冊 専門図書四六、

〇五一冊 雑誌等一四、九五〇冊

計六五、三〇〇冊

標本(商品学用等)三五〇点 機械器具一五八点 計

五〇八点

七、学科又は専門部門の組織並に附属施設

本大学部に英文学科及び経済学科を置き夜間授業とする。尚附属施設として附属図書館、アメリカ文化研究所及び東北経済研究所を置く。

八、学科又は専攻部門別学科目概要

(一) 一般教養科目 各科共通(かつこ内の数字は単

位数を示す)

(1) 人文関係

基督教学(四)哲学概論(二)倫理学(二)歴史(四)文学(二)英

語(四)

(2) 社会科学関係

経済学(二)社会学(二)法学(四)心理学(二)

(3) 自然科学関係

数学(二)統計学(二)生物学(二)自然科学概論(二)

(二) 専門科目

英文学科

英語講読(六)英語会話(四)英語音声学(四)英文法(四)英

作文(四)英文学史(四)言語学(二)修辞学(二)英文学(四)米

文学(四)基督教文学(四)独逸語(四)

経済学科

経済原論(四)経済史(四)貨幣金融論(四)経済政策一部

(四)外国貿易論(二)経済地理(四)財政学(四)会计学(四)経

営経済学(四)保険学(四)憲法(四)民法(四)商法(四)労働法

(二) 新聞学(二)英語会話(二)

(三) 体育

体育学概論(一)実技(一)

九、履修方法

一学年に主として一般教養科目を二学年に主として専門科目を履修せしめる。

本大学を卒業するには二年以上在学して各学科共一般教養科目は二十単位以上専門科目は英文学科にあつては三十二単位以上経済学科にあつては、三十八単位以上合計六十単位及び各学科共体育二単位を履

第二章 新学制による出発

計	経済学科	英文学科	学科別
二五〇	一五〇	一〇〇	第一学年
二五〇	一五〇	一〇〇	第二学年
五〇〇	三〇〇	二〇〇	計

十一、学科又は専門部門別学生定員

計	校 雇 司 書 講 助 教 学	医 員 書 記 師 授 授 長	一 二 一 一 一 一	二 三 〇 一 一 一	三 〇 一 一 一 一	一 一 一 一 一 一	職 名	人	
								専任	兼任
一六								計	備 考
三六								員	
五二									

十、職員組織概要
修しななければならない。

十二、設置者 財団法人東北学院

十三、維持経営の方法概要

授業料、寄附金等の収入を以て支弁経営するも収入金不足の場合は財団交付金を以て補う。

予算概要

科 目	昭和二十五年 度	昭和二十六年 度
一、授業料其の他の収入	四、五二〇、〇〇〇円	四、二二三、二〇〇円
二、寄 附 金		
三、財 団 交 付 金		二〇八、四〇〇円
収 入 合 計	四、五二〇、〇〇〇円	四、四三一、六〇〇円
一、人 件 費	三、〇八六、一二〇円	三、〇三六、一二〇円
二、其 の 他	一、四三三、八八〇円	一、三九五、四八〇円
支 出 合 計	四、五二〇、〇〇〇円	四、四三一、六〇〇円

十四、大学開設の時期 昭和二十五年四月一日

十五、併設の場合

東北学院大学に併設する東北学院専門学校第二部（夜間）を東北学院大学短期大学部（夜間）に改組するもので夜間授業の関係校舎設備等の利用については競合することなし。

教員組織は主要科目に専任を配し既設の大学からは時間に余裕ある者を兼務させて大学の授業研究に支障ないように考慮している。

第二 東北学院大学短期大学部学則

第一章 目的

第二章 学科構成

第三章 修業年限及び学生定員

第四章 学年、学期及び休業日

第五章 入学、休学、復学、転科、転学、退学及び保証人

第六章 学科課程

第七章 履修方法及び課程修了の方法

第八章 卒業証書授与

第九章 授業料、受験手数料及び入学金

第十章 聴講生及び外国学生

第十一章 賞罰及び賠償

第十二章 職員組織

第十三章 教授会

第十四章 研究施設

第十五章 寄宿舎

附 則

第一章 目的

第一条 本大学は基督教による人格教育を基礎として広く智識を授けると共に實際的な専門教育を施し良き社会人を育成することを目的とする。

第二章 学科構成

第二条 本大学に英文学科及び経済学科を置き夜間授業とする。

第三章 修業年限及び学生定員

第三条 本大学の修業年限は各学科共二年とする。

第四条 第一学年に入学を許可する学生の定員を左の通り定める。

一、英文学科 百 名

一、経済学科 百五十名

第四章 学年、学期及び休業日

第五条 学年は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。

第六条 学年を分けて左の二学期とする。

一、第一学期 四月一日より十月十三日まで

二、第二学期 十月十四日より三月三十一日まで

第七条 学年中の定期休業日を左の通り定める。

一、日曜日

二、祝 日

三、春季休業日 三月十一日より四月七日まで

四、夏季休業日 七月八日より八月三十一日まで

五、冬季休業日 十二月二十二日より翌年一月六日まで

六、本大学創立記念日

七、其の他国家の定めた休日

第五章 入学、休学、復学、転科、転学、退学及保証人

第十一条 病氣其の他の事由によつて休学の願出があるときは正当の事由があると認められるときに限り許可する。但し休学期間は一年を

第八条 入学は毎年一回で其の時期は学年の始めから三十日以内とする。

超えることが出来ない。

第九条 第一学年に入学し得る者は左の各号の一に該当する者でなければならぬ。

第十二条 本大学の学科の一から他の学科に転科を志願する者があるときは正当の事由があると認められるときに限り許可する。但し必要あるときは試験を課することがある。

一、高等学校卒業者

二、通常の課程に依り十二年の学校教育を修了した者

第十三条 学科課程の等しい他の大学に転学を志望する者あるときは正当の事由があると認められるときに限り許可する。

程により之に相当する学校教育を修了した者を含む

三、外国に於て学校教育に於ける十二年の課程を修了した者

第十四条 学科課程の等しい他の大学に在学する者で本大学に転入学を志願する者あるときは正当の事由があると認められる時に限り相当

四、文部大臣の指定した者

五、其の他本大学に於て高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者

第十五条 本大学を退学しようとする者は其の理由を具して保証人連署の上退学願を提出しなければならぬ。

第十条 第二学年に編入を許可すべき者は前条の定める何れか一に該当し且つ前学年の学科課程を卒えた者と同等以上の学力を有する者に限る。

第十六条 本大学を退学せんとする願出があつたときは正当の事由があると認められるときに限

に限る。

り許可する。

第十七条

本大学を退学後一年以内に復学を志願する者があるときは正当の事由があると認められるときに限り試験によらないで原学年以下の学年に編入学を許可することがある。

第十八条

本大学々生が左の各号の一に該当するときは退学を命ずることがある。

- 一、 性行不良で改善の見込がないと認められる者
- 二、 学力劣等で成業の見込がないと認められる者

三、 引続き一年以上欠席した者

四、 出席が不規則な者

第十九条

入学を許可された者は仙台市内に居住し独立の生計を営む成年以上の者で学生の監督をなすことの出来る者一名を保証人に立て、別に定める書式に従つて在学証書を提出しなければならない。

第二十条

保証人の転居、改印、改氏名などは其の都度届出でなければならない。

第二十一条

保証人が死亡したとき又は第十九条に定める資格を失つたとき乃至は何等かの事由で保証人に変更が生じたときは更に之に代るべき者を保証人に定め第十九条に定める在学証書を提出しなければならない。

第六章 学科課程

第二十二條

本大学に左の学科目を置く。(かつこの数字は単位数を示す)

- 一、 一般教養科目 (英文学科、経済学科共通)

- 基督教学(四)哲学概論(二)倫理学(二)歴史(四)文学(二)英語(四)経済学(二)社会学(二)法学(四)心理学(二)数学(二)統計学(二)生物学(二)自然科学概論(二)

二、 専門科目

- 英文学科
- 英語講読(六)英語會話(四)英語音声学(四)英文法(四)英作文(四)英文学史(四)言語学(二)修辞学(二)英文学(四)米文学(四)基督教文学(四)独逸語(四)経済学科

經濟原論(四)經濟史(四)貨幣金融論(四)經濟

政策一部(四)外國貿易論(二)經濟地理(四)財

政學(四)會計學(四)經營經濟學(四)保險學(四)

憲法(四)民法(四)商法(四)労働法(二)新聞學(二)

英語會話(二)

三、体育科目(各学科共通)

体育學概論(一)実技(一)

第二十三条 前条の学科目の配当及び授業時間数の配当

は教授會に於て定める。

第七章 履修方法及び課程修了の方法

第二十四条 一学年に主として一般教養科目を二学年に

主として専門科目を履修するものとする。

第二十五条 本大学の卒業資格は二年以上在學して各学

科共第二十六条第二十七条に定めるところ

により六十単位以上及び第二十八条の定め

るところにより体育二単位を履修しなければ

ならない。

第二十六条 一般教養科目に属する学科目及び単位は各

学科共左の三系列の關係科目にわたつてそ

れぞれ四単位以上合計二十単位以上を履修

しなければならない。(かつこの数字は單

位数を示し×は必修を示す)

英文学科

一、人文關係

×基督教學(四)哲學概論(二)倫理學(二)×歷

史(四)文學(四)×英語(四)

二、社会科学關係

經濟學(二)社會學(二)×法學(四)心理學(二)

三、自然科学關係

×數學(二)統計學(二)生物學(二)×自然科学

概論(二)

第二十七条

専門科目に属する学科目及び単位は左によ

つて履修しなければならない。

一、英文学科

左の学科目の中から三十二単位以上を履

修すること。(かつこの数字は單位數

を示し×印は必修を示す)

×英語講讀(六)×英語會話(四)×英語音聲

學(四)×英文法(四)×英作文(四)×英文學史

(四)×言語學(二)×修辭學(二)×英文學(四)×米文

學(四)基督教文學(四)獨逸語(四)

二、經濟學科

左の学科目中から三十八単位以上を履修すること。(かつこ内の数字は単位数を示し×印は必修を示す)

×経済原論(四)×経済史(四)×貨幣金融論(四)×経済政策一部(四)×外国貿易論(二)×経済地理(四)×財政学(四)×会计学(四)×経営経済学(四)×保険学(四)×憲法(四)×民法(四)×商法学(四)×労働法(二)×新聞学(二)×英語会話(二)

第二十八条 体育科目は各学科共左の二単位を履修しなければならぬ。

体育学概論(一)実技(一)

第二十九条 学生は履修する学科目を毎学年の始めを選んで学長に届出で其の許可を受けなければならない。変更の際も亦同様である。

第三十条 他学科の学科目の聴講を希望する者は当該科目担任教授の承認を得て学長に願ひ出で其の許可を受けなければならない。

第三十一条 学生は許可された学科目に限り試験を受けることが出来る。

第三十二条 各学科目の修了及び全課程の卒業を認めるには平素の学業と試験とを以て定める。

第三十三条 試験は原則として各学期毎に行う。但し学科目によつては学年末に一回行うことがある。

第三十四条 病氣其の他已むを得ない事由のため試験に應ずることが出来ない者に対しては毎年五月特に追試験を行うことがある。

第三十五条 試験の成績は秀、優、良、可、不可の五等を以て表し可以上を合格とする。

第八章 卒業証書授与

第三十六条 本大学所定の学科目及び単位の全部を履修し且つ試験に合格した者には別に定める書式に従い卒業証書を授与する。

第九章 授業料、受験手数料及び入学金

第三十七条 授業料は年額七千二百円とし之を左の二期に分けて納付する。

一、第一期 四月 四千元
二、第二期 十月 三千二百円

第三十八条 入学志願者は入学願書と共に受験手数料金一千円を納付しなければならない。

第三十九条 新に入学又は編入学を許可せられた者は入学金二千円を納付しなければならない。

第四十条 前三条に規定する納付金は何等の事由があつても返還しない。

第十章 聴講生及び外国学生

第四十一条 本大学所定の学科目中一科目又は教科目の聴講を出願する者があるときは学年の始めから三十日以内に限り学力検定の上聴講生として聴講を許可することがある。

第四十二条 聴講生の聴講料は別に之を定める。

第四十三条 外国人で本邦当該駐在公館の紹介を以て入学を希望する者あるときは正規の試験によらないで学力検定の上特別生として入学を許可することがある。

第四十四条 特別生の取扱については別に定める規定による外はすべて本科生に関する規定を準用する。

第十一章 賞罰及び賠償

第四十五条 品行方正で学業成績が特に優秀な者は次年間特待生とすることがある。

第四十六条 特待生からは其の学年間授業料を徴収しない。

第四十七条 特待生が学生たるの本分に背いた行為をし

たときは其の資格を失うものとする。

第四十八条 本大学の諸規定に違反し学生たるの本分に背いた行為をした者には其の軽重によつて懲戒を行う。

一、 譴責

二、 謹慎

三、 停学

四、 退学

第四十九条 本大学附属の図書、機械又は器具を毀損又は亡失した者に対しては現品若くは相当代価を以て賠償させることがある。

第十二章 職員組織

第五十条 本大学に左の職員を置く。

一、 学長 一名

二、 教授 三〇名

三、 助教授 一名

四、 講師 一〇名

五、 書記 七名(含司書)

六、 傭員 一名

七、 校医 二名

第五十一条 学長は大学一般の事務を監督し所属職員を

統率する。

教授及び講師は学生を教授し其の研究を指導する。

助教授は教授を輔けて授業を行う。

助手は教授又は助教授の指揮を承けて學術に関する職務に従事する。

事務職員は学長の命を承けて事務に従事する。

校医は学生の保健衛生を掌る。

第十三章 教授会

第五十二条 本大学に教授会を置く。

第五十三条 教授会は各学科所属の教授、助教授を以て組織する。但し、学長は必要ありと認めるときは講師を列席させることが出来る。

第五十四条 教授会は次の事項を審議する。

- 一、学則の改廃に関する事項
- 二、学生の入学、休学、復学、転学並に卒業に関する事項
- 三、学科課程に関する事項
- 四、試験に関する事項
- 五、学生の賞罰並に賠償に関する事項

六、其の他学長の諮問した事項

第五十五条 教授会は学長が召集して其の議長となる。

但し学長事故あるときは学長は代理者を指命する。

第五十六条 教授会は教授及び助教授の定員数の三分の

二の出席を以て開会し出席者数の過半数で議決する。

但し公務による不在者は定員数から除くことが出来る。

第五十七条 教授会に附議しようとする事項あるときは

其の事由を具し文書を以て学長に申請することが出来る。

第五十八条 教授会の議案は少くとも会議開催三日前に

通知することを原則とする。

第十四章 研究施設

第五十九条 本大学に研究施設として附属図書館、研究

室、アメリカ文化研究所並に東北経済研究所を置く。

第六十条 前条に掲げる研究施設に関する規定は別に

之を定める。

第十五章 寄宿舎

第六十一条 本大学に寄宿舎を置く。

寄宿舎に関する規則は別に之を定める。

附 則

本学則は昭和二十五年四月一日から実施する。

(注・書類目次中三以下省略)

校管第九十四号

昭和二十五年三月十四日

東北学院大学短期大学部設置申請者

財団法人 東北学院理事長 殿

文部省管理局長 久保田 藤 麿 印

昭和二十四年十月十五日付で申請のあつた東北学院大学短期大学部設置のことは、別紙認可指令書のように認可になりましたので、その運営ならびに設置認可条件の履行については、遺漏のないようお取り計らい願います。

校管第九十四号

東北学院大学短期大学部設置者

財団法人 東北学院

昭和二十四年十月十五日付で申請の東北学院大学短期大学部設置のことは、大学設置審議会の答申に基いて、

学校教育法第四条により、次のように認可します。

昭和二十五年三月十四日

文部大臣 高 瀬 荘太郎 印

記

- 一、名 称 東北学院大学短期大学部
- 二、位 置 宮城県仙台市南六軒町一番地
- 三、学 科 英文科第二部、経済科第二部
- 四、修業年限 二年以上
- 五、開設学年 第一学年 第二学年
- 六、開設時期 昭和二十五年
- 七、設置認可条件

- (1) 自然科学関係の実験実習施設設備の充実をはかること。
- (2) 実験実習諸施設及び器具機械標本等については、昼間の授業を行う学部との利用関係を考慮して必要な拡充整備を行うこと。
- (3) 夜間授業を行う学科については一年後において教員組織、学科履修方法諸設備につき報告を求め又必要ある場合には実地視察を行い、その実績に照して変更を求めることがある。
- (4) 新に学科又は専攻を変更しようとする場合は、当

分の間大学設置審議会に協議すること。

(5) 教員組織については、それが充実されるまで当分の間大学設置審議会に協議すること。

(6) 短期大学の目的使命を達成するため二年以内に必要な整備拡充を行つて、大学としての完成を期すること。

なお、以上の事項については、その実施につき報告を求め、また必要がある場合には、大学設置審議会の審査に附するものとする。

二六一 出村剛「現代思想の批判と我らの主張」

(昭和十年五月二十一日)

現代思想の批判と我らの主張

出村 剛

今夕の懇談会で、発題者の一人として御話し致し度いと思ひましたことは、既に今日午後の小野村牧師のよく準備せられた力強い御講演によつて論じ尽くされ、また只今は今村牧師によつても充分に話しくされたことでもありますから、私はいたづらに蛇足を副へるやうなもの

でありませんが、両氏の御話と重複しないやうな部分丈けを飛びくりに述べさせて頂くつもりであります。

私も両君と同じやうに、基督教会の立場からして、ナシヨナリズムが現下の最も大切な注意すべき思想であると信ずるものであります。このナシヨナリズムが世界的にまた日本で、如何なる原因によつて興隆したか、またそのナシヨナリズムとは如何なる性質のものであるかといふやうな問題に関しては、小野村、今村両君の御説の通りであると申す丈けに止めまして、主として、我等のそれに対する態度、方策といふ方面を考へて見度いと思ひます。

まづこのナシヨナリズムなるものは全く一時的な、反動的な性質のものであらうか、それとも永続性を有つものであらうかを問はねばならない。人によつてその見る処を異にするであらうが、私は決して一時的の流行に止まらない永続的性質のものとして考へて居る。

まづ、世界の今日の文化の程度が、民族、国家、国民といふやうな秩序の上に立たねばならぬものである。これらを超越した世界主義とでもいふべきものでは實際の世界では、今日ではダメであるといふ事は、国際連盟やソビエトロシアの代表する国際主義の悲惨な失敗がも

つとも雄弁に証明して居るのではあるまいか。さらに世界の文化発達過程といふよりも、もつと根本的に考へて見て、国家、民族といふやうなものは、今日、弁証法的神学者の或る人々が、新たに、神学的な基礎づけを試みて、私共に多大の暗示を与へて居るやうに、民族、国家といふものは、人間生活の意義、目的の完成のために、根本的に必要な、神意に基く、創造の秩序として、是認せられ、肯定せらるべきものであらう。

現実の生活に於いて、我等は、ある民族、ある国家の一員として生きて居るのである。

日本に於けるナシヨナリズムのもつとも顕著な指導者の一人である大川周明氏の言を藉りて云へば「世界いづれの処に、英人にも、仏人にも、日本人にもあらぬ単なる人間ありや、人は皆ないづれかの国民である。宛かも桜にあらず、梅に非ず、牡丹に非ざる花があるか云々」と。人なる我等はある民族、ある国民である宿命をもつて生れ来て居るのである。扱て、かくの如く民族、国家の存在の事実と、意義と価値とが是認、肯定せらるゝ時には、民族主義、国家主義、国民主義なるものは自然的に生じて来ることをも是認せねばなるまい。民族と国家とは必然的にその優越性を自覚、認識し、その勢力範囲

を他の民族、国家に対して、拡大せんとするし、また、対内的には民族、国家の統一強化の為に、ナシヨナリズムを主張するであらう。それ故に我等の態度は、ナシヨナリズムの否定、攻撃でなくて、真の、正しきナシヨナリズムの高調、ナシヨナリズムの指導是正を志すべきである。正しき、是認せらるべきナシヨナリズムとは、しからは如何なるものであるべきか、まづ第一に、各民族、国民がその優越を意識して居る各々の特殊の能力、その生み出だした文化的所産等を、神よりの、天与の賜物として感謝の精神を抱くことが必要である。この民族的国民的特異性といふものをば、地上に於ける神意、聖旨の実現の機会、手段であると自覚、自重し、それを擁護、完成する必掛けでなくてはならぬ。このデイバイン、ギフトの意識に立脚しない民族、国民意識はいたづらに傲慢不遜なナシヨナリズムとするのである。同時に各民族は各国民は、他民族他国民の神から与へられて有つて居る賜物を認識するに吝かであつてはならぬ。他の有てる賜を認め、己が有たぬものを自覚する謙讓の精神を抱くことが必要である、この謙讓の欠乏から、ナシヨナリズムに附物である独善主義、排他主義、シヨビーニズムが生れて来るのである。

「何れの民族かゞ選民をもつて任じ、オーケストラのダイレクターなりと錯覚するは、ナシヨナリズムの邪道なり。自らの民族が神をダイレクターとするオーケストラの重要な楽手たり、自らの文化がその重要な曲目たらんとする謙讓を有する限り、ナシヨナリズムは是認さるべし、」と北吟吉氏の云つて居ることは至言である。

民族、国民がその優越性の自負心から他の民族国民の特殊な賜物と使命とを忘却するところに、誤れるナシヨナリズムが結果することを我等は大いに警醒し、反省せねばならぬ。世界平和の攪乱者となり、人類平和共衆の理想に背くが如きナシヨナリズムとならざることを警戒する要がある。

第二に、対内的な意味に於けるナシヨナリズムの是正として、ナシヨナリズムの落入り易い誘惑であるフアツシヨの弾圧に注意せねばならぬ。集团的利益の爲の統一、統制の美名の下になさるゝ圧制と雖無批判に正当化してはならない。従来行き過ぎた自由主義、個人主義の訂正としては役立つものゝ、一方また大なる危険の伴ふことを忘れてはならない。

われらは飽く迄、個人、個性の尊貴を、一個の人格、魂の価値を力説強調する使命をもつて居る。

第三に、基督教は、民族、国家に、民族的國家的生活、努力の最後の目標、ゴールを提供すべき筈である。神意に基く秩序である民族、国家が、その天与の賜物をもつて寄与貢獻すべき究極の目的は何であるべきか。「神の国」「神の都」の如き宗教的理想のみが、協調、協力的な、平和主義的なナシヨナリズムを生むものである事を強調すべき任務を我等は痛感する。

第四に、民族、国家に関する徹底した理論を基督教思想の主張に立脚して建設する事の急務を感ずる。特に日本の如く、特殊な国体観を中心としてナシヨナリズムの指導に當つては、特にこの点に深い注意を払はねばなるまい。ドイツの弁証法的神学者等が今日試みつゝある、新国家倫理建設への努力から、私共は学ぶべき多くのものを与へられるが、日本の神学界はまた、特殊の貢献をこの方面になさねばならぬ使命を有つて居る。

第五に、私共は、多くの無知と誤解とに基く、基督教とナシヨナリズムとの必然的な矛盾、衝突に対する両方の側に於ける、故無き懸念と恐怖とを除去する爲めの啓蒙的な仕事をも閑却してはならない。基督教の精神と正しい、真のナシヨナリズムの決して相容れざるもので無いことを示さねばならぬ。真の基督者は真のナシヨナリ

ストで、必然的にあり得る故を、理論と史的事実とによつて証明し得るのである。

最後に、一般的のナシヨナリズムに刺戟せられて、基督教会内部にもナシヨナリスチックな基督教(日本的基督教の如き)の主張が漸く盛んになつて来たが、これについて、私共は、いたづらに時代思潮に迎合し、強ひて国民の趣味、思想、伝統に阿り、基督教の本質的なものを蓋ひ、晦まさんとする如き、変態的、又エ的基督教を説くやうなことをつゝしまねばならぬ。

ナシヨナリズムに対する基督者の態度、方策について他に考ふべき幾多の問題が起つて居るであらうが、限られた時間内に於いてその悉くを尽すことは不可能である。要するに、ナシヨナリズムに対する我等の根本的態度は、いたづらに挑戦的、攻撃的態度に出でずたゞ否定し、反駁するに止まらず、むしろ、指導是正を志し、正しきナシヨナリズムの確立に努力することである。しかし、我等は十字架と復活の福音には、その至難事を果し得る力のひそんで居ることを確信するものである。

実に、今日は、蛇の如く慧く、鴿の如く素直でなければならぬ時代である。小異をあげて、いたづらに争ふの愚をさげたい。しかしながら、もし一度我等の信仰の中

心が脅かされるゝおそれあるとき、我等は死をもつてキリストに対する忠誠を示し、キリストの牙城を死守するの覚悟をあらはさねばならぬことは云ふ迄もあるまい。

我等は、かゝる不幸なることの起らざるを信じ、またしかあるやうに祈り度いものである。ドイツに於ける基督教会と誤てるナシヨナリズムとの争をたゞ対岸の火事視することなく、勇敢な闘争を、教会のために続けつゝある信仰の勇者の勝利のために祈り度いものである。

(『東山莊講演集』)

二六二 月浦利雄の出村剛への思い出

(昭和二十四年十二月)

出村先生の思ひ出

月浦 利雄

出村先生は考へてみると何時も学院の非常時とでも云い度いやうな時期に何か枢要な地位につかれたように思われる。あまり目立ちもせず、何時も地味な立場にあられたやうであつた。学院から神学部がなくなつた時確か出村先生が部長であつたと記憶している。正に学院の難局であつた。その後中学部長になられた時も田口部長が

急逝せられて後任者に困つていた際に後輩の後を継いで部長になられたのであつた。又高等学部でザウグ部長が外人の故を以て部長を辞することになつた時に、この時もやはり理事会は出村先生を起用して高等学部長たらしめた。次いで高等学部は文科を廃して商科一本になり名稱も亦高等商業部となつた時も商業とか経済とかにはちつとも縁もゆかりもない神学出の先生が部長になられて至極円滑に運営された。二度目の中学部長になられた時も小泉部長から津田校長を経て後任難の折であつた。この時は専門学校の方は宮城音五郎先生にお任せして中学校に移られたのであつた。その後終戦となり三度高等学部長即ち専門学部長になられ続いて院長にまでなられたのである。このように振りかへつてみると先生は何時も学院が人事の問題で困り抜いていた時救いの神みたいに出現したと云ふ風にも見ることが出来る。このようなどころにも先生の人柄が偲げられると思ふ。誰からも嫌われない性格であつたことを示していると思う。つまりどんなところへ持ち出してもよい人物であつたと云うこともなる。

学校では誰かやつている中はその人にやらせて置くが誰も適任者なくやり手がなくて困つている場合引張り出

されてその難局を收拾する立場に置かれたのが先生であつたとも見られる。云はば先生は何時もリリーフの形で出られたようにも考へられる。先生に対して失礼な言ひ分かも知れぬが結果からみてそう思はれる。常にリリーフ投手として立たれていたように思はれるが最後の院長の場合は何処からみても主戦投手としての充分な貫禄と実力とを兼ね備えてプレートに立たれいざこれからと云うところで云はば前半戦が終るか終らぬ中に倒れたと云う感が深い。先生の今後の御奮闘を心から願つていただけに学院の大発展の途上に先生を喪つたことは何と云つても遺憾の極みであり、その死を悼む心の切なるものがある。

然し先生は今や一切を終つて天父のもとに帰られた。我々はこの世の評価と賞讃とにかゝわることなく総てを知る神に任せて安かなる憩を心から祈らう。必ずや先生は何時も我々に励ましを与へる生の力の一源泉となることゝ信じて疑はないものである。

『東北文学』出村院長追悼号 昭和二十四年十二月)

二六三 出村悌三郎の葬儀

(昭和二十五年一月二十一日)

出村悌三郎先生を悼む

元東北学院長出村悌三郎先生略歴

一、先生は明治六年二月十二日新潟県北蒲原郡五十公野村に生れました。父君の名は総太郎母君はとき、而して先生はその三男であります。因みに長兄の保之助氏は、前院長の出村剛先生の父君に当るわけになります。父君総太郎氏は新発田藩、溝口家の祐筆を務め漢学の師範でありました。

一、明治十九年九月先生は郷里を出て、私立新潟英語学校に入学しました。母君を失はれたのもこの年で先生時に年十四才であります。

一、翌明治二十年十月私立北越学館に入学せられ、ここに約四年間、二十四年まで在学せられました。

一、翌年明治二十五年一月、志を立てて遠く仙台に出でられ私立東北学院本科三年に転学せられました。

当時吾が学院は、これより六年前即ち明治十九年に「仙台神学校」の名の下に僅かに六名の生徒を以て創めら

れたのでありますが、創立者押川先生の徳を慕いて集り来る者次第に加はり、この前年即ち明治二十四年には南町通りに赤煉瓦造の校舎が築造せられ「仙台神学校」の校名を「東北学院」と改称したのであります。殊に新潟の地は押川先生の前任地の関係より先生の名を慕い来り学ぶ者がありました。吾が出村先生もその一人でありました。

一、同二十六年六月第三回本科卒業生として卒業されましたが、卒業生僅かに三名でありました。

続いて同年九月英語神学科に進学せられましたが、この年に父君総太郎氏を失はれました。即ち先生は二十才の年であります。

一、神学科に在学三年の間押川先生、ホーイ先生、シユナーダー先生より具さに薫陶を受け同二十九年六月神学科等三回卒業生四名中優秀なる成績を以て卒業せられ続いて母校に教鞭を執られたのであります。

一、越えて明治三十三年、米国に赴き同年九月パシヒツク神学校に入学翌三十四年五月卒業パチエラー、オブ、デビニティーの称号を得られました。

一、同年九月更にエール大学に学び翌三十五年六月卒業。マスター、オブ、アーツの称号を得られました。

一、帰朝後再び母校に教鞭を執りましたが当時母校に於てはその前年即ち明治三十四年に押川先生の後を承けてシユネーダー院長に改まり次いでその翌々年明治三十七年に至り大いに学制を拡張し、中学校令に依る普通科五ヶ年及び専門学校令による文科、神学科を置き先生は専門部長に就かれました。

一、明治四十三年九月再び志を起して渡米ハーバード大学研究科に入り研鑽二年を経て明治四十五年六月ドクトル、オブ、ヒロソヒーの学位を得て帰朝引続き母校にありて専門部長の前職をつゞけられたのであります。

一、斯くして吾が東北学院は年と共に発展し来り、その経営組織の上にも学校制度の上にも、数次の改革が行はれました。即ち社団法人より財団法人に改まり理事局の設置となり普通科は中学部となり中学校となり一方専門部は高等学部となり神学科、文科、師範科、商科の設置を見ました。

一方この間に於て大正八年、中学部校舎の焼失、同十一年再築竣工、同十五年高等学部校舎建築、越えて昭和七年礼拝堂建築等、校運伸張のうちにも多事多端の重要期間でありましたが、シユネーダー院長の補佐役

として画策盡瘁せられた出村先生の功績は大なるものがあります。

一、又かくの如き劇務の傍、大正十二年四月より昭和十二年三月に至る十四年間に、東北帝国大学法文学部講師として基督教々理史の講義を担当せられました。

一、昭和十一年五月シユネーダー院長辞任の後を承け東北学院長に就任せられましたが、当時世界の国際情勢は日を遂うて險悪を加へ、遂に第二次世界大戦に突入するに至りましたが、吾が学院も創立以来の難局に直面したのでありますが先生には深慮遠謀宜しきを得てさしもの難関を突破し来りました。

一、昭和二十年三月、老齡を以て院長を辞任せられました。此の間神学部、専門部教授として八年間、専門部長、高等学部長として三十二年間、院長として九年間、即ち明治二十九年母校に職を奉じてよりこの年に至るまで在職約四十九年間であります。

一、なおその傍、東北学院同窓会長として明治三十六年より院長辞任に至るまで四十二年間同窓会の中、心として指導の任に当られました。

一、昭和二十年七月十日戦災に罹りましたが其れより先き一時岩手県に疎開し終戦後間もなく仙台に帰られ同

二十三年夫人小りく姉に先だたれました。

その後、老衰年々に加わり、ひたすら静養に務められたしたが遂に旧臘二十六日午後七時^{ころえん}溘焉として逝去せられました。

享年七十七才でありました。

一、家庭の人としての先生は、大正五年徳山小りく姉と結婚はじめて家庭を営まれた時に先生四十三才であります。この晩婚の理由は、健康上、勉学上などの理由に加えて御兄弟の遺族に対する経済上のお世話の責任感なども大きな理由であつたと思われまゝ。

小りく夫人の亡くなられたのは前述の如くであります。がその間に四女を挙げられました。皆先生の美点をうけられ聡明貞淑であります。長女ミヲ子さんは已に菊地家に嫁がれ現在盛岡市にお住いであります次女総子さんは東北大学研究室に勤務、三女妙子さんは仙台市役所に勤務、お二人共父君の許にあり最後まで孝養をつくされました。先生は晩年視力全く衰へ毎日の起き臥しにもお気の毒に見えましたがお嬢さん方の御孝養には如何にも満足げに喜ばれて居りました。

四女絢子さんは不幸昭和十四年に死去せられました。個人としての先生は哲学宗教等専門の造詣に至つては

申すに及ばず、その他弓術をよくし花卉草木を愛し書、画、骨董の鑑賞の如きに至るまで、いづれの方面にも一頭地を抜いて居られました。これらの高い深いそして幅のゆたかな人格が黙々の中にこれに相應はしい雲囲気をかもし出して理想的な家庭を作られました。唯一つここにお気の毒に堪えない事は戦時中、疎開した三千冊に余る蔵書が盗難にかかり先生の晩年に於ける唯一の楽しみを奪い去られたことでありました。

要するに先生の如きは個人的にも社会的にも、その生活の深さに於て東北学院の生んだ最も異彩ある人材として永く後進の人々から敬慕せらるることを信じます。

（『東北学院時報』一六四号 昭和二十五年七月十日）

二六四 A・アンケニーの院長就任内諾

（昭和二十五年二月四日）

昭和二十五年二月四日 理事会 院長室に於て

〔中略〕

三、後任院長の件

後任院長としてアンケニー氏に就任方懇請中の処今般内諾を受けたることにつき理事長より説明

満場一致 可決

(理事会記録)

二六五 A・アンケニーの院長就任挨拶

(昭和二十五年五月十日)

我らは進みゆく

—キリスト教的品性を持つて—

アルフレッド、アンケニー

「時にエホバ、モーゼにいひたまひけるは汝なんぞ我に呼はるやイスラエルのひとびとに言て進みゆかしめよ」(出エザプト記十四章十五節)

私は東北学院の理事会が私をこの大きな学校の院長に選ぶという、全く思いがけないことをして、私の誕生日を、而も、その当日の夜に、祝つてくれたことを感謝して居るものである。又私は、理事会のとつた処置の正しさに對して多くの卒業生や校友達が表明してくれた信頼に對

しても、深く感謝して居るものである。

然しながら、私にとつては、これは単に重大な責任であるばかりでなく、それが突然のことでもあり、又私としては未知の仕事の世界へ飛込のだという気持から、私は天の父なる神に向つて、その御導と御力を仰ぎ求めるものである。

昔、イスラエルの人々がエザプトから脱出したいと思つていたことがある。然し眼前にはどうしても越すことの出来ない難関があり、どうにもならなかつた。このイスラエルの子等の経験の物語を読むと同様にその難関を越し難いと思つていた統率者モーゼに對し、驚くべき上よりの助言のあつたことが記されている。即ち、「ひとびとに言て進みゆかしめよ」である。

進みゆく、即ち前進すると言ふことは変化を意味することなのである。そして変化は大抵の人々には、非常に困難なことである。我々の教育制度には幾つかの大きな変化があつた。多くの人々はこの変化を好まぬと言ひ又多分他の人々ではこの様な変化に無言の抗議をした人々もあつたことであらう。この変化は良いことであらうか。

ともあれ、それを良いことであると考えて、前進するということ、即ち、この新しい制度に我々の最善の思慮

と計画とを与え、それを成功させるために最善の努力を払いながら前進するということは、最善のことではないのであろうか。さもなければ、我々は廻転仕掛の車の中にいるねずみの様なものになり走ることとは走つても何の思慮も計画も無いから、幾ら走つても何処へも行くことは出来ないのである。我々のこの学部における色々な変化にしてもこれは正に一つの困難な試練である。新しい制度を成功させるためには、教授法の変化や教室定員の大きさの変化や、また学生生活は不断に学習研究せねばならなくなるといふことや、先生方はおびただしく多くの仕事を一生懸命にしなければならなくなる、という様なことなど、この様な変化が必要なのである。これらの変化は勿論我々が学校と共に進み行きながら、我々共に成遂げることが出来るのである。前進にとつて協力こそは欠くべからざるものである。モーゼとイスラエルの子等の物語の中において、モーゼが始めて前進の不可能なことを感じた時、

モーゼは「汝らおそる勿れ、立てエホバが今日汝等の為になし給はん所の救を見よ」(出エジプト記十四章十三節)と言つたのであるが、その時エホバはモーゼに、「ひとびとに言て進みゆかしめよ」(同十五章)と

言つたのである。モーゼだけは、「行け」と言つたのではない。又少数の人々にだけでもない。全ての人間にである。

東北学院の院長ひとりでは進みゆくことは出来ない。少数の教職員や学生生徒、父兄だけと共にでもない。我々は皆相共に前進しなければならぬのである。即ち相共にである。各々勝手に行くのではなく、全ての人が相共になのである。

使徒パウロはピリピの教会の人々に書き送つて、

「なんぢ念を同じうし、愛を同じうし、心を合せ、思ふことを一つにして、我が喜びを充たしめよ。何事にまれ、徒党また虚栄のために為な、おのおの謙遜をもて互に人を己に勝れりとせよ。己が事のみを顧みず、人の事をも顧みよ」(ピリピ書第二章二十四節)と言つてゐる。

これこそは我々が今日前に掲げなければならぬ理想である。この様な協力の精神は、我々が喜んで、而も、親密な精神を持ちつつ、ますます努力して行かなければならぬという靈感を覚えしめることであろう。

我が学院の最高の目的はキリスト教的品性をつくりだすことである。その目的を達成するために、我々クリスチ

ヤンたるものはまずキリストの如くなる様に心がけようではないか。イエスがこの世に来られたのは、我々に生命を得させんがためであり、又その生命を豊かなるものにせんがためであつた。

我が学院の教職員、学生生徒、その他全ての人々にとつてこの豊かなる生命以外の何物も我等の目あてとすべきものはないのである。

我々はしばしば学院スピリットということを目にする。学院精神とは何であるか。それは学院の学生生徒、並びに卒業生の身の処し方である。即ち、我が学院に対する忠誠心、正直にして高潔なる品性、職業や業務に就ては信頼を受けること、などである。この精神の基盤は、学生生徒の時代に学院から受けるキリスト教の影響である。

私は諸君が、先生方も、学生生徒諸君も、職員も皆、この影響に心と精神を常に開いて頂きたいと念うものである。何となれば、それは真の成功と真の偉大さへの数えがたい程の可能性を持つているものであるからである。

使徒パウロの言葉の様に「標準(めあて)を指して進み、神のキリスト・イエスに由りて上に召したまふ召にかかはる褒美を得んとて之を追求む」(ピリピ書三章十四

節)であり、又「ただ我等はその至れる所に随ひて歩むべし」(同十六節)である。

さて、学院は次の事柄で世に知られなければならない。即ち、

一、高いキリスト教的目的を持つてゐること。

二、学問的水準を持つてゐること。

三、教職員が楽しく勤勉であること。

四、校庭や建物、教室が清潔で魅力があること。

五、学生生徒の団体は清潔な娯楽と清潔な運動競技を樂しむと共に真剣に教育を求めているということ。

六、役員、教職員、学生生徒団体、学院の後援者たちには和気あいあいの精神がしん透してゐること。

などである。

我々は大きな学校ではなく、より一層良い学校になりたのである。ある哲学者は、教育の目的は学者を作ることではなくて人間を作ることである、と言つた。この目的のために、我々是我々の最善の努力を誓うものである。而して、諸君の親密な協力を得て、愛する東北学院をして前進せしめたいものである。

(一九五〇・五・一〇、東北学院長就任式に当りて)

(『東北学院時報』一六四号 昭和二十五年七

月十日)

二六六 A・アンケニー「東北学院卒業生に贈る」

(昭和二十六年三月)

東北学院卒業生に贈る

アルフレッド・アンケニー

北米ニューヨーク州ブルックリン市の病床から遙かに卒業式を暇に描きながら寄せられたメツセージで、これが最後の遺言となつた。

本日この卒業式に、直接出席して、我が学院を出られる若い卒業生諸君に対し、親しく私の意中を申述べることの出来ないことを深く残念に思つて居ります。然し、先づ第一に私は諸君が今や学業を了えられたことを御喜び申上げます、而してその修められたる学業によつて、必ずや人生の前途に横たわる諸問題をます／＼有効に処理なさることが出来るものと思ひます。また、今日この日は諸君にとつてのみならず、御父兄にとつても、教師

にとつても、正しく晴の喜びの日でありますことゝ信じます。

次に諸君は本学院に学ばれてその教育のありかたの中に発見なさつたものは、一般と異なる処の要素であると思ひますが、それは諸君の人生に於て特に価値あるものとなる様希求してやまないものであります。

東北学院は元來神の國の發展を目的として創立せられたものであります。

神の國とは何でありませう。それは、世の支配者等が専ら之に熱心する如きものでありませうか。否、この神の國とは、神はまさしく、我等人類を愛し給う父であると示し給うた、キリスト・イエスが我等に説き教えられたる処の靈の王国であります。然るが故に、人類は全て神の子であり、互に家族の一員として相愛すべきものであると、キリストは我等に教えておられます。

汝人にせられんと欲することを人にもかくなせ、という掟が完全に守られるならば邪悪と戦争は、この世から消え失せるであります。この掟はなかなか従ふことの難きものであります。

幸福なる世界秩序への安易なる方法がこれまで数多く鼓唱されて参りましたが、それらは、その目的に達せん

がために用いた暴力的にして利己的なる手段の故に全ては成功いたしませんでした。

世界の疾病を癒すものは道徳的、又霊的正義でありま
す。己れ自身の意志によつては成功することは出来ない
けれども、神、我等の心の中にいまし給うならば我等は
しかと大地をふまえることが出来るのであります。聖バ
ウロは、我は我を強くなし給うものによりて全てのこと
をなし得るなり、と言つて居ります。

日本人は常に困難なる道を選ぶを以て讀むべき態度で
あるとした。本日、若き卒業生諸君に対する私のすゝめ
は、私の祈りは、諸君が日々の生活や活動の中にあつて、
道徳的勇氣と、正義と兄弟相睦み慈しむ心を持つという
困難なる道を選び、祈りによつて神の助を受け、この世
に於ける神の国発展の指導者となられんことでありま
す。

（『東北学院時報』一六六号 昭和二十六年五
月一日）

二六七 A・アンケニーの埋骨式

（昭和二十六年十一月二十五日）

前院長アルフレット、アンケニー先生の埋骨式

小田 忠夫

昨年八月病後静養のため渡米の上、夫人マーガレット
女史の令妹クラ、女史（故シユネーグー先生の第三女）
の許に於て、ひたすら静養中であつた前院長アンケニー
先生は、夫人の手厚い看護に見守られつゝも、去る二月
二十六日六十四才の寿齡を以て米國ニューヨーク州、ブ
ルクリン市で永眠せられた事は既報の如くであります
が、其後去る十一月一日、御遺骨がマーガレット夫人と
共に仙台市光禪寺通の自邸にお帰りになつた。夫人の御
意志では、已に本葬は米國に於て執行済なので、仙台で
は埋骨式だけに止め、然も成るべく簡素に執り行い、墓
地は故人の遺言により当市北山墓地のシユネーグー家の
墓域内に埋葬したいとの御趣旨に基づき去る十一月二十
五日午後二時、東北学院葬をもつて埋骨式を執り行つた。
会葬者約三百名。

埋骨式執行順序

一、讚美歌(三三五)

一 同

一、聖句朗読

赤城 泰

一、聖書朗読(ロマ書八章一六—一八。二八。三一—三五。三七—三九)

右 同

一、祈 禱

右 同

一、讚美歌(二七五)

一 同

一、追悼感話 東北学院代表

小田 忠夫

一、日本基督教団代表

渡辺 良亮

一、宮城学院代表

西山 貞

一、ミツシヨン代表

シツプル

一、祈 禱

シツプル

一、埋 骨

シツプル

一、頌 栄(五六八)

一 同

一、祈 禱

クリーテ

一、遺族挨拶

ミセス・アンケニー

一、会葬御礼 東北学院院长

小田 忠夫

なお夫人はミツシヨン関係の動きを続けられる筈にて、寂しさの中にもご元気で出になります。

(『東北学院時報』一六八号 昭和二十六年十一月五日)

二月五日)

二六八 学校法人寄附行為の審議

(昭和二十五年十二月十九日)

定期理事会 昭和二十五年十二月十九日 大学に於て

(中略)

二、議 題

1 私立学校法によつて従来の財団法人東北学院を学校

法人東北学院に組織変更のため寄附行為変更の件

前回までの理事会で審議した草案中更らに逐条審議

する

第五条(役員)中監事の定員を三人とする

第十七条(評議員)中の定員を左の通りとする

一、この法人の職員のうちから選任されるもの六人

二、この法人の設置する学校を卒業した者のうちから選任された者 当分欠

三、この法人の前身者が設置した学校を卒業した者のうちから選任された者 一〇人

四、院長、大学長、校長 三人

五、会計理事 一人

六、この法人に係のある学識経験者 六人

六、この法人に係のある学識経験者 六人

2

その他原案通り可決

学校法人役員及び評議員選任の件

(理事)

院長

大学長

高等学校長

評議員会選出

全

全

全
学識経験者

全

全

全 (会計)

全 (ボード代表)

(監事)

三人

黒澤孝平 (四年)

清水広成 (四年)

本間正雄 (四年)

(評議員)

十二人

アルフレッド・アンケニー (四年)

小田忠夫 (四年)

月浦利雄 (四年)

小山田正直 (四年)

大石栄一 (四年)

阿部豊吉 (二年)

橋本重郎 (二年)

杉山元治郎 (二年)

鈴木義男 (二年)

小平国雄 (二年)

津田郁 (四年)

ルカール・ダニエ (二年)

黒澤孝平 (四年)

清水広成 (四年)

本間正雄 (四年)

二十六人

院長

大学長

高等学校長

会計理事

職員(大学)

〃

〃

〃 (中・高)

〃

〃

同窓生

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

アルフレッド・アンケニー (四年)

小田忠夫 (〃)

月浦利雄 (〃)

津田郁 (〃)

阿部欣二 (〃)

和泉幸二郎 (〃)

二関敬 (二年)

五十嵐正躬 (四年)

横山敏夫 (二年)

茂庭鉄夫 (〃)

阿部豊吉 (四年)

大石栄一 (〃)

小山田正直 (〃)

橋本重郎 (二年)

三品鼎 (四年)

本郷勇 (〃)

亀山耕司 (二年)

三沢房太郎 (〃)

秋保孝次 (〃)

小林与兵衛 (〃)

学識経験者

島香直次郎

佐藤寅夫

渡邊良亮

一力次郎

松坂信亮

藤崎三郎助

以上可決

3 学校法人之組織変更申請に添付すべき二十六、二十

七年度収支予算の件

原案 承認可決

〔後略〕

(理事会記録)

次回評
議会で
決定す
ること

文部大臣 天野 貞 祐 殿

鈴木 義 男 叩

財団法人東北学院の学校法人東北学院への組織変更認可申請書

財団法人東北学院の組織を変更して学校法人東北学院となりたく私立学校法附則第三項及び私立学校法規則第二項の規定により組織変更の認可の御取計いせられたく申請します

添付書類

一、学校法人東北学院寄附行為

二、財団法人東北学院寄附行為

三、理事会決議録

四、財産目録

五、不動産その他重要な財産の権利の所属についての登記所の登記簿本及び銀行会社等の証明書

六、不動産その他主なる財産の価格評価書

七、設立後二年の事業計画及びこれに伴う予算書

八、役員の内任承諾書、履歴書、身分証明書及び教職適格確認書写

二六九 学校法人への組織変更認可申請書類

(昭和二十五年十二月二十五日)

第三〇号

昭和二十五年十二月二十五日

仙台市南六軒丁一

財団法人東北学院理事長

九、役員のうち各役員についてその配偶者又は三親等以内の親族が一人をこえて含まれていないことを証する書類

一〇、学校法人の設置する学校の学則

一一、財団法人の登記簿謄本

学校法人東北学院寄附行為

第一章 総 則

(名 称)

第一条 この法人は学校法人東北学院と称する

(事務所の所在地)

第二条 この法人はその事務所を仙台市南六軒丁一番地に置く

(目的)

第三条 この法人は基督教に基いて徳育を施し又教育基本法及び学校教育法に従い中学教育、

高等教育、大学教育を施すことを目的とする

(設置する学校)

第四条 この法人は前条に規定する目的を達成するため左に掲げる学校を設置する

一、東北学院中学校

二、東北学院高等学校

三、東北学院大学短期大学部

四、東北学院大学

第二章 役員

(役員)

第五条 この法人の役員の定数は左の通りとする

但し理事のうち少くとも八名は日本基督教団に属する教会の会員とする

一、理事 十二人

一、監事 三人

(理事長)

第六条 理事のうち一人は理事の互選により理事長となる

(常務理事)

第七条 理事長を除く理事のうち四人は理事の互選により常務理事となる

(理事の選任)

第八条 院長、大学長、校長は理事となる

2 評議員のうちから選任される理事は四人とし評議員会で六人推挙した者のうちから理

事会で選任する

3 前二項の規定により選任された理事以外の理事はこの法人に関係ある学識経験者のうちから前二項の規定により選任された理事の過半数の議決により選任する

(監事の選任)

第九條 監事は評議員会の意見を聞いて理事会で選任する

(役員任期)

第十條 役員(不在職中理事となる者を除く、この条中以下同じ)の任期は四年とする 但し欠員を生じた場合の補欠の役員任期は前任者の残任期間とする

2 役員は再選されることを妨げない

3 役員はその任期満了の後でも後任者が選任されるまではなおその職務を行う

(役員補充)

第十一條 この法人の理事又は監事のうちその定数の五分の一をこえるものが欠けたときは一月以内に補充しなければならない

(理事の代表権の制限)

第十二條 理事長及び常務理事以外の理事はすべて学校法人の業務についてこの学校法人を代表しない

しない

(理事長の職務の代理又は代行)

第十三條

理事長に事故があるとき又は理事長が欠けたときは理事長のあらかじめ指名した他の理事が順次に理事長の職務を代理し又は理事長の職務を行う

(理事会)

第十四條

この法人の業務の決定は理事会において行う

2 理事会は理事全員をもって組織する

3 理事会は毎年二回(五月、十二月)定時に理事長が招集する 但し理事長が必要と認めるときは臨時にこれを招集する

4 理事長は理事総数の二分の一以上から会議に附議すべき事項を示して理事会の招集を請求された場合にはその請求のあつた日から七日以内にこれを招集しなければならない

5 理事会の議長は理事長とする

第十五条 (理事会の成立の定足数及び議決の方法)
理事会は理事総数の三分の二以上の出席がなければ議事を開き議決することができない

い

2 理事会の議事は法令に特別の規定ある場合並びに第十六条、第二十八条、第三十一条、第三十二条及び第三十三条に規定する場合を除く外理事の過半数で決し可否同数のときは議長の決定するところによる

3 前項の場合には議長は理事として議決に加わることができない

(業務決定の特例)

第十六条 左に掲げる事項については理事総数の三分

の二以上の議決がなければならない

一、予算、借入金(当該年度内の収入をもつて償還する一時の借入金を除く)基本

財産の処分、運用財産中の不動産及び

積立金の処分並びに不動産の買受に関

する事項

二、予算外の新たな義務の負担又は権利の

放棄に関する事項

第三章 評議員会

(評議員会)

第十七条 評議員会は左に掲げる評議員をもって組織する

する

一、この法人の職員(この法人の設置する学校の教員その他の職員を含む)のうちから選任される者 六人

二、この法人の設置する学校(この法人の前身者が設置した学校を含む)を卒業した者で年齢二十五年以上の者のうちから選任された者 一〇人

三、院長、大学長、校長 三人

四、会計に関する常務を掌る理事 一人

五、この法人に係のある学識経験者 六人

六、前項第一号、第二号、第五号の評議員の三分の二は日本基督教団に属する教会の会員とする

3 前項第一号、第三号、第四号に規定する評議員は職員、院長、大学長、校長、会計理事の地位を退いたときは評議員の職を失う

ものとする

(評議員の選任)

第十八条 前条第一項第一号、第二号に規定する評議員は理事会において選任する

2 前条第一項第五号に規定する評議員は前条第一項第一号から第四号までの規定により選任された評議員の過半数の議決をもって選任する

2

前条第一項第五号に規定する評議員は前条第一項第一号から第四号までの規定により選任された評議員の過半数の議決をもって選任する

第二十二條

2 定例会は毎年一月及び五月に招集する
3 臨時会は理事長が必要と認めるとき及び私立学校法第四十一条第五項に規定する請求があつたときに招集する
(諮問事項)
左に掲げる事項については理事長においてあらかじめ評議員会の意見を聞かなければならない

選任する

(任期)

第十九条 評議員(第十七条第一項第三号及び第四号に規定する者を除く、この条中以下同じ)の任期は四年とする 但し欠員を生じた場合の補欠の評議員の任期は前任者の残任期間とする

2

評議員は再任されることができる

3 評議員はその任期満了の後でも後任者が選任されるまではなおその職務を行う(議長)

間とする

2

評議員は再任されることができる

3 評議員はその任期満了の後でも後任者が選任されるまではなおその職務を行う(議長)

(議長)

第二十条 評議員会の議長は評議員の互選とする

(会議)

第二十一条 評議員会の会議は定例及び臨時会とする

一、予算、借入金(当該年度内の収入をもつて償還する一時の借入金を除く)及び重要な資産の処分に関する事項
二、合併
三、寄附行為の変更及び寄附行為の施行規則に関する事項
四、私立学校法第五十条第一項第一号及び第三号に掲げる事由による解散
五、残余財産の処分に関する事項
六、運用財産のうち不動産及び積立金の管理に関する事項
七、寄附金の募集に関する事項
八、剰余金の処分に関する事項

九、その他この法人の業務に関する重要事

項

第四章 資産及び会計

(資産)

第二十三条

この法人の資産は左の通りとする

一、別紙財産目録記載の財産

二、授業料 入学金 試験料

三、資産から生ずる果実

四、寄附金

五、その他の収入

(財産の区分)

第二十四条

この法人の資産はこれを分けて基本財産、

運用財産の二種とする

2

基本財産、運用財産の区分は私立学校法施行規則第三条第二項の規定による区分に従

い別紙財産目録にそれぞれ記載する財産及び

将来それぞれの財産に編入される財産を

もって構成する

3

寄附金品については寄附者の指定がある場合

にはその指定に従って基本財産、運用財

産に編入する

第二十五条

(財産処分の制限)

基本財産並びに運用財産中の不動産及び積

立金はこれを処分してはならない 但しこ

の法人の事業遂行上やむを得ない事由があ

るときはその一部に限りこれを処分するこ

とができる

(運用財産たる積立金の保管)

第二十六条

運用財産のうち積立金は確実な有価証券を

購入するか確実な信託銀行に信託するか又

は郵便貯金若しくは定期預金とするかして

理事長が保管する

(経費の支弁)

第二十七条

この法人の事業の遂行に要する経費は運用

財産中不動産及び積立金から生ずる果実、

授業料、入学金、試験料その他運用財産(不

動産及び積立金を除く)をもつて支弁する

(予算)

第二十八条

予算は毎会計年度開始前に理事長において

編成し理事三分の二以上の同意がなければ

ならない

(決算)

第二十九条

この法人の決算は毎会計年度終了後二ヶ月以内に作成しこれにつき監事の意見を求めるものとする

2 理事長において決算を評議員会に報告する場合には監事の意見を添えなければならぬ

3 決算において剰余金があるときはその一部若しくは全部を基本財産に繰り入れ若しくは運用財産中積立金に編入し又は次会計年度に繰り越すものとする

(財産目録、貸借対照表等)

第三十条 財産目録、貸借対照表、収支計算表、事業報告書は会計年度終了後二ヶ月以内に作成しこれらについて監事の意見を求めるものとする

第五章 解散

(解散)

第三十一条 この法人の私立学校法第五十条第一項第一号の事由による解散は理事総数の三分の二

以上の同意がなければならぬ

2 前項の事由による解散は文部大臣の認可を

受けなければその効力を生じない

3 この法人の私立学校法第五十条第一項第三号の事由による解散は理事総数の三分の二以上の同意がなければならぬ

4 前項の事由による解散は文部大臣の認定を受けなければその効力を生じない

(残余財産の帰属者)

第三十二条

この法人が解散(合併及び破産による解散を除く)した場合における残余財産の帰属すべきものは他の学校法人その他教育の事業を行うもののうちから理事総数の三分の二以上の同意を得て理事会において選定する

第六章 寄附行為の変更

(寄附行為の変更)

第三十三条 この法人の寄附行為を変更するには理事総数の三分の二以上の議決を経なければならぬ

2 寄附行為の変更は文部大臣の認可を受けなければその効力を生じない

第七章 公告の方法その他

第三十四条 この法人の公告は東北学院大学前掲示場に
 掲示して行う

(施行規則)

第三十五条 この寄附行為の施行規則は理事会において
 定める

附 則

1 この法人は第四条に掲げる学校の外当分の
 間学校教育法第九十八条の規定による東北
 学院専門学校を存置する

2 この寄附行為改正の当初に選任された理事
 及び評議員の任期は第十条第一項及び第十
 九条第一項の規定にかかわらず二年又は四
 年とし各人の任期については理事会及び評
 議員会において定める

3 この法人組織変更当初の役員は次の通りと
 する

理事	杉	山	元治郎
理事	鈴木	義男	
理事	小平	国雄	
理事	カール・ダニエル・クリーネ		

理事 アルフレッド・アンケニー

理事 小田 忠 夫

理事 月 浦 利 雄

理事 阿 部 豊 吉

理事 大 石 栄 一

理事 小 山 田 正 直

理事 橋 本 重 郎

理事 津 田 重 郁

理事 清 水 広 成

理事 黒 澤 孝 平

監事 本 間 正 雄

理事会決議録

昭和二十五年十二月十九日午後四時より東北学院大学に
 於て開会 理事定員十二名中 九名出席

小田忠夫理事議長となる

議題一、

私立学校法によって従来の財団法人東北学院を学校

法人東北学院に組織変更のため寄附行為変更の件

満場一致可決す

右決議し記録朗読一同之を承認して午後八時閉会す

昭和二十五年十二月十九日

議長	理事	小田忠夫	㊟
署名者	理事	大石栄一	㊟
署名者	理事	月浦利雄	㊟

右原本と相違ない事を証明する

昭和二十五年十二月二十日

財団法人東北学院

理事長 鈴木義男 ㊟

〔注・添付書類中二、四以下省略〕

校管第二二六号

財団法人東北学院

昭和二十五年十二月二十五日付で申請のあつた財団法人東北学院の学校法人東北学院への組織変更を、私立学校法附則第三項によつて、認可します。

昭和二十六年二月二十七日

文部大臣 天野貞祐 ㊟

二七〇 短期大学部法科第二部設置の審議

(昭和二十六年九月十五日)

昭和二十六年九月十五日

午後三時東北学院大学に於て開会

〔中略〕

三、短期大学部に法科設置の件

一般からの要望が多いので二十七年から設置したい教授陣容は現在法科系の教授と東北大学と裁判所の方々の援助を求めれば支障ない見込である
経費の面では収支の採算がとれる予定

定員 一〇〇名とする

決議 可決

〔後略〕

(理事会記録)

二七一 短期大学部法科第二部増設認可申請書類

(昭和二十六年十月十日)

学院第二〇号

短期大学学科増設認可申請書

この度東北学院大学短期大学部(英文科第二部、経済科第二部)に法科第二部を増設したいと思ひますから学校教育法第四条及び私立学校法第五条によつて御認可下さるよう別紙書類を添えて申請いたします

昭和二十六年十月十日

設置者

学校法人東北学院理事長 鈴木 義男

文部大臣 天野 貞祐 殿

書類目次

- 一、東北学院大学短期大学部法科第二部増設要項
- 二、学 則
- 三、校 地(図面添付)
- 四、校舎等建物(図面添付)

五、図書、標本、機械、器具等施設

六、学科又は専攻部門別学科目又は講座

七、履修方法

八、学科又は専攻部門別学生定員

九、職員組織

十、設置者に関する調

十一、資 産

十二、維持経営の方法

十三、現在設置している学校の現況

十四、将来の計画

第一 東北学院大学短期大学部法科第二部増設要項

一、目的及び使命

本大学は基督教による人格教育を基礎として広く知識を授けると共に実際のな専門教育を施し良き社会人を育成することを目的とする

二、名 称 東北学院大学短期大学部法科第二部(既設の科、英文科第二部、経済科第二部)

三、位 置 宮城県仙台市南六軒丁一番地

四、校 地 総坪数(共用) 一一、九七四坪

五、校舎等建物 現在総坪数(共用) 二、二八五坪

六、図書、標本、機械、器具等施設概要

図書 一般教育図書 三〇、八三二冊

専門図書 二一、七五五冊

雑誌等 一六、七四五冊

計 六九、四三二冊

標本 八四三点 機械器具 三、五五四点

備考 東北学院大学と共用であるが同大学は昼間授業、短期大学部は夜間授業で競合することが

ない

七、学科又は専攻部門の組織並びに附属施設

本短期大学部に英文科第二部、経済科第二部、法科

第二部を置き夜間授業とする 尚附属施設として附

属図書館、アメリカ文化研究所、基督教研究所及び

東北経済研究所を置く

八、学科又は専攻部門別学科目の概要

(一) 一般教育科目、各科共通 (かっこ内の数字は単

位数を示し×印は必修を示す)

(1) 人文関係科目

基督教学(×二) 哲学概論(四) 倫理学(四) 歴史(四) 文

学(四) 英語(×四)

(2) 社会科学関係科目

経済学(四) 社会学(四) 法学(含憲法)(四) 心理学(四)

(3) 自然科学関係科目

数学(四) 化学(二) 生物(二) 統計(四)

(二) 専門科目(法科)

(1) 専攻科目

行政法(四) 民法一部(×六) 民法二部(二) 商法(×

四) 商法二部(四) 民事訴訟法(四) 破産法(二) 刑法(×

四) 刑事訴訟法(四) 労働法(四) 国際法(四)

(2) 自由選択科目

経済原論(四) 金融論(四) 財政学(四) 経営学(四) 税務会

計(二) 新聞学(四) 哲学(二) 人文地理(二) 西洋史(二)

(三) 教職課程(各科共通) 本教職課程は既に委員会

の審査を経て公認された

青年心理学(三) 教育心理(三) 教育原理(三) 教科教育

法(三) 教育実習(三)

(四) 体育科目(各科共通)

体育学概論(一) 実技(一)

九、履修方法概要

(1) 第一年次に主として一般教育科目を第二年次に主

として専門科目を履修するものとする

(2) 本大学の卒業資格は二年以上在学して左によつて

六十二単位以上を履修しなければならない

(イ) 一般教育科目、人文関係科目、社会科学関係科目、自然科学関係科目中から各一科目以上合計二十単位以上を履修しなければならない

(ロ) 専門科目、専攻科目、自由選択科目中から三十単位以上を履修しなければならないが専攻科目中から二十四単位以上を履修することが望ましい
尚教職に就こうとする者は教育職員免許法施行規則並びに別に定めあるところに従って修得しなければならない

十、職員組織（法科）

職名	人		員		備考
	専任	兼任	兼任	計	
学長	六	一		一	
教授	一〇	七		一三	
助教授	一			一〇	
講師			一	一五	
書記		三		五	
司書		二		二	
雇員		一		一	
校医	九	二	一	二	
計	二九	一一	四	四九	

十一、学科又は専門部門別入学者定員

計	第一年次		第二年次		計	備考
	英文科	一〇〇	一〇〇	一〇〇		
経済科	一五〇	一五〇	一五〇	三〇〇		
法科	一〇〇	一〇〇	一〇〇	二〇〇		
英語別科	五〇	五〇	五〇	一〇〇		
商経別科	一〇〇	一〇〇	一〇〇	二〇〇		
計	五〇〇	三五〇	八五〇			

十二、設置者 学校法人東北学院

十三、維持経営の方法概要

授業料、寄附金等の収入をもって支弁経営するも
収入金不足の場合は本部交付金をもって補う

昭和二十七年予算概要

一、授業料その他の収入 七、二五八、五〇〇円

二、寄附金 なし

三、本部交付金 なし

収入計 七、二五八、五〇〇円

一、人件費 五、四七七、六〇〇円

二、物件費その他 一、七八〇、九〇〇円

支出計 七、二五八、五〇〇円

十四、短期大学部法科増設の時期

昭和二十七年四月一日

十五、開設学年

第一年次

(注・書類目次中二以下省略)

校管第七五六号

昭和二十七年二月二十日

学校法人 東北学院理事長 殿

文部事務次官 日 高 第四郎 印

東北学院大学短期大学部学科増設について

昭和二十六年十月十日付で申請のあつた東北学院大学短期大学部学科増設のことは、大学設置審議会に協議しましたところ、下記のように増設してさしつかえないことになりましたので、その運営および増設条件の履行については、遺漏のないようお取り計らい願います。

記

(1) 増設学科 法科第二部

(2) 増設学科の修業年限 二年をこえる

(3) 増設学科の開設年次 第一年次

(4) 増設学科の開設時期 昭和二十七年

(5) 学科増設の条件

(1) 専任教員を充実すること。

(2) 法科関係の専門図書を充実すること。

(3) 新に学科(含専攻)を増設し、または既設の学科(含専攻)等を変更しようとする場合は、当分の間大学設置審議会に協議すること。

置審議会に協議すること。

(4) 教員組織については、これが充実にいたるまで、

当分の間大学設置審議会に協議すること。

(5) 実験実習諸施設及び機械器具標本等については、学部との関係を考慮して、必要な整備拡充を行うこと。

以上短期大学の目的使命を達成するため、必要な整備拡充を行つて、二年以内に短期大学としての完成を期すること。

なお、教員組織、学科履修方法、諸施設、設備その他につき報告を求め、また必要のある場合には大学設置審議会として審査し、変更を求めることがある。

二七二 小田忠夫「新学年えの出発に際して」

(昭和二十八年五月五日)

新学年えの出発に際して

小田忠夫

新しい学年えの発足とともに目近に創立第六十八回の記念日を望んでおります。

押川方義先生の本院創立の目的は、本院の徽章がよくそれを象徴しているように、基督教精神を根本義とする教育によつて革新的な文化を東北の野にうち樹てようと

されたのであります。

シユネーダー先生はこの創立の精神を承け継ぎ、その教育の方針として徳育、智育、体育の三点に重点を求め、教育機関の組織としては、下は幼稚園から小中高及び大学に至るまでの一貫した体系を備える希望をもつて、一生をこのために献身された事も周知の事実であります。

その後代々の院長もこの線に沿つて努力せられました。が、時勢の激変と戦争とに際会して、未曾有の苦難の途を辿つたのであります。

終戦後、平和の回復とともに本院本来の使命を再び強く推し出だし内外皆様の御援助によりまず第一に多年のシユネーダー先生の宿望であつた大学昇格の実現を見、去る三月已に第一回卒業生を世に送つたのであります。

本年度からは中学校、高等学校の一層の発展を図るために、各二校の独立を強化し、校長を始め教員の配属も改めました。即ち従来の中学高等学校に於ける兼任校長制を更えて、月浦校長を高等学校長に、新に五十嵐先生を中学校長に任命いたし、礼拝の行事も各別箇に執行し、礼拝の精神をも一層徹底せしめたい方針であります。従つて中学校に独立の校舎を与える為に、東二番丁の敷地にもう一つの建物を造るべく目下準備中であります。さ

て智徳体の調和のとれた教育と前申しましたが、智育の重要機関として、シユネーダー先生が生涯を通して熱望された、その図書館が記念館として殆ど完成に近づいたことは、内外の御援助を賜つた皆様並に在校教職員学生一同とともに非常な喜びであり、感謝感激であります。

この研究と思索の場所、謂はば智育の道場である記念図書館が、徳育の道場である禮拜堂と大学本館を真中に左右相並んで聳え立つ喜びに加えて、もう一つの新しい喜びは、総合グラウンドのための広大な土地が新たに求められたことでもあります。

従来本院の教育は智徳体の三拍子を唱えながら、体育のための施設にまでは手が届き兼ねた憾みがあつたのでありますが、今度幸いにも先輩同窓各位の御奔走により、仙石線多賀城駅の近くに約一万坪の国有地の払下が許可されました。三四年後には其処に最も近代的に装備した総合グラウンドが設けられ、旺盛な青年学生のスポーツ精神の發揮と技量練磨の道場となる見透しが確實になつて来ました。

南六軒丁の大学構内には新に完成する図書館及び二階建の講義室を加えると鉄筋コンクリートの建物が四つと、木造モルタルの建物五つ合計九つの校舎がひしめい

ていますし、中学、高等学校の方も、都市計画のため東二番丁通が拡張され、校庭とともにも校舎までが削りとられるというような場合で益々運動場の狹隘を痛感している際なので、運動場新設の喜びは一層大きいのであります。

学生の数も昼夜あわせて約三千を越える大きい学園になりましたのでスタッフの充実も必要であります。若く元気な人々に学院スピリットが反映するに都合のよい人的組織をつくり上げるにはまだ相当の年月が必要とされています。今年は大学の方に四人の助手を採用しました。

何れも当専門学校を出て、東北大学を卒えた方々でそれ／＼の専門部内の先生がたの御推薦に基いてとりましたから、必しも同族婚とばかりはいえませんが御承知おき願います。

徳育の方面、即ち精神教育に於いては、昨年度から市内教会の牧師の方々の御協力を得て、毎週交替に学院禮拜の司会とお話を依頼して、好結果を得て居ります。またクリスト教研究所が設けられて、三年目になりますが、まだそのスタッフが充実しないので活動がにぶいのであります。何れ今年秋あたりからもつと活発に仕事をやりたいと思つています。

学園の規模が拡大するにつれ案ぜられることは建学の精神であるクリスト教的性格のうすれることでありますが、今年度は中、高、大学を一括してその点を反省し以て設立の精神の顕揚に努力するつもりであります。

以上学園のなすべき仕事はまだ未だ未完成ではありませんが、着々と進んでいることは事実であります。これに精進する職員の厚生問題もゆるがせに出来ませんが、今度新たに「東北学院奉仕退職賜金制度」の確立によつてこれも一段と前進したことで、誠に有難いことであります。

この五月の創立記念日には図書館の開館式を行う予定でありましたが、書庫の乾燥の程度も不十分なため、書籍保存の見地から開館式は移転の完了した夏の休暇後にとり行うことゝ予定いたしました。その節は改めて御案内いたしますがどうぞ御参列下さるようお願いいたします。

(『東北学院時報』一七二号 昭和二十八年五月五日)

二七三 月浦利雄「高等学校の昨今」

(昭和三十年五月一日)

高等学校の昨今

月浦利雄

創立七十年を祝う年を迎えて感興新なるものがある。私は創立二十五年を祝うたその翌年、当時の普通科に入學してその祝賀の余香を拝し、その後四十年五十年の両度の祝典をば教員として迎え、この度又々七十年のお祝を共にする光栄に与かることになつた。誠に感慨無量なるものがある。四十年の時の押川ホーイ両先生の壇上のお姿、特にキリスト教青年会の会堂を改造して六軒丁に移して講義室にしてあつたあの祝賀会場に於ける両先生のおはなし、五十年の時の院長としての最後のシユネーダー先生の倅など彷彿として眼前に浮んで来るのを禁じ得ない。今や学院初代以来の恩師達は殆どこの世には在さない。恐らくこの度の七十年の祝典に参列さるゝ古い同窓の皆様方は隔世の感をいだかるゝ事であろう。私は今、昔シユネーダー先生が居られた中学部の院長室に、然かも机の位置も同じところに腰をおろして正面の壁に

は先生の肖像と、その下には昔の中学部校舎、左方にもとのなつかしの寄宿舎の写真のついでである一葉の写真を掲げられてあるところに坐して、この追想に耽つている。サイカチの木が写真の真中に立つてほんとうにウツソウたる姿を表はしている。古い友人でもおいと呼んで出て来さうな写真である。私のようなものでも、もう学院にこの校庭のクローバーの上上空を眺めながらねころんだのは四十数年の昔である。仙台も変り、学院も変つたのも無理はない。

学院高校の上級学校への入学の成績は今年は大変よかつたと皆さんから喜ばれている。これも七十年記念に因んで愉快な連想となるであろう。卒業生百四十四名の中から学院大学へ五十二名、東北大学へは三十六名(七十九名受験して)東京大学へ二名、東京商大へ二名、都立大へ一名、慶応へ六名、立教二名、明大工二名、福島医二名、東北薬大二名、福島経、弘前大、神戸商大、法政、中央、拓大、日本医、日本歯、東京薬大、国学院大、明治学院、関東学院、立命館大、酪農短大等各一名、来年の受験を待つもの二十二名という好結果を収めた。これに昨年度の浪人組もこれに劣らぬ成績を示して、東京大学二名、東北大学十名、山形大、小樽経、新潟大、東京水産大、

神戸商船大、早大、法政、岩手医大、東京医大等計二十名合格して、本当に万丈の気焰を挙げた。従つて在校生も大いに気をよくして張り切つている。現在三年生は三学級で百五十一名、二年も三組で百六十九名、一年は四組で二百二十二名、計五百四十二名となつている。来年再来年と高校も中学校からの進学者の関係上、五組編成に成ることになつている。

全国的な現象として大学入学に関しては、年毎に浪人組が何処の学校でも現役の二倍三倍の合格者を出しているのに、一人我学院は断然現役が多数合格する事は喜ばしい限りである。

〔東北学院時報〕一七六号 昭和三十年五月一日

第二章 小田忠夫の院長就任

二七四 第一回市民クリスマス会の開催

(昭和二十五年十二月二十日)

十二月二十日 午後五時本学主催、同窓会並仙台市役所
観光協会後援のもとに、第一回市民クリスマス会が開か
れた。同窓会を中心として会するもの約六百、本学々
生による「キャンドルサービス」赤城先生の説教、観
光協会長岡崎栄松氏の祝辞、東北、宮城両学院聖歌隊
による「救世主」の合唱等あり、敬虔な市民と共に世
界の平和を祈念して同七時意義深く終了した。

(『東北学院時報』一六五号 昭和二十六年二
月十五日)

二七五 神学部予科新設他の協議

(昭和二十六年三月五日)

昭和二十六年三月五日 院長室に於て

(中略)

阿部理事

神学部予科の新設を希望す

中学部の募集人員増加を希望す

月浦理事

神学部予科の新設は可なるも実際問題として当院の予
科に入学の希望者なく他の神学校に直行する公算大な
り

小田理事

事業局の建物に基督教研究所を開設の上将来の神学部
開設に備えん

(後略)

(理事会記録)

二七六 小田忠夫の院長選任

(昭和二十六年四月二十五日)

臨時理事会

昭和二十六年四月二十五日午後五時 東北学院大学に於て開会

〔中略〕

議題 四、院長選任の件

満場一致小田忠夫氏を院長に選任し大学長を兼任せしめることに可決

尚就任式は五月十五日創立記念日に行うこと

〔後略〕

(理事会記録)

二七七 小田忠夫の大学将来計画

(昭和二十六年五月一日)

大学の計画について

小田忠夫

東北学院大学は創設されて、本年で満三年目になり、愈々教養課目本位から専門課程へと進むことになりました。

学院大学の性格を決定するために、一意内容充実につとめていますが、何をおいてもライブラリーの建設こそ今年度の第一の課題であり、一同このために国内の募金とアメリカの寄附を仰ぎ少くとも今年度中にこれを着工したいと考えています。総工費五千万円の中十一万ドルは米国から一千万円は国内からと考えていますが、その調達は容易でなくひとえに各位の御協力に俟たざるを得ません。朝鮮ブームのための建築費の値あがりは少くとも今年前半期中の着手を困難にするのではないかと案じられています。何れにしてもこの目的は貫徹したいと存じます。

学院大学の第二の課題はクリスト教学科の設置準備であります。このための前提としてこの四月からクリスト教研究所を設置して、そこで特殊の教育課程をしくことに決定いたしました。同研究所は在来のアメリカ文化研究所と東北経済研究所と併せてブラットショー館の一室に置かれ、愈々本格的なクリスト教学科の復活をめざして活動を開始するつもりであります。五月乃至六月の何

れかの日にその開所式をば村田明治学院長の特別講演をもつて行うつもりでいます。これによつて東北地方におけるクリスト教育の中心を再びわが学院の手におさめたい念願でいます。何とぞ御協力と御支援を願います。

第三の課題は今年から教職課程がおかれることになりましたので、その為に必要とされる心理学の実験設備の完成であります。僅かではあります。予算を定められましたので実施することになり、この為の将来の講義担当者として同窓の佐藤君が東北大学を卒えて新に助手として迎えられました。

以上思いついたまゝを記した次第ですが、尚ほ図書館は今度和泉先生が館長となられ、少し計画的に図書を集めて着手されることになっていきます。何とぞ各位の御協力を切望いたします。

（『東北学院時報』一六六号 昭和二十六年五月一日）

二七八 小田忠夫の院長就任挨拶

（昭和二十六年五月十五日）

就任の御挨拶

小田忠夫

敬愛する来賓各位、並びに東北学院理事、同僚、学生徒諸君。この度本院理事会の推挙により不肖私が東北学院院長の重責をお引き承けいたすことになりました。それについて、今日本院創立第六十六回記念日の意義深い日を卜して、斯くも盛大な就任の式を挙げて下さいましたことは、私の生涯中の記念すべき光栄として衷心よりの感謝を申し上げます。同時に、永い歴史と光輝ある伝統を有する母校本院に対して、一層の親愛の情と、限りなき責任とを痛感せずには居られないのであります。

さて本院の高遠崇高な建学の理想については、先刻この壇上から鈴木理事長の創立記念式の御式辞の中で、誠に感銘深く委曲をつくしてのお話を拝聴いたしました。

また創立者押川先生を創め、シュネーダー先生や、その他代々の各院長諸先生のすぐれた御人格、経営の御苦心、及びその残された尊敬すべき数多くの業績等を伺います

につけても翻つて己れの浅学不徳に思い及ぶ時に、内心ひそかに忸怩たらざるを得ないものがあります。然し乍ら一方母校に対する恩義の上から、また先輩各位から寄せられた御信任に対する感激の情からいたしました。この際他を顧みるの違もなくお引き承けいたしました。この上は全幅の心ばせを尽し、力の限りを尽すことによつてこの重責を果しつゝ、愛する母校本院のために何も何かを貢献したい奉仕の覚悟を定めた次第であります。何卒満場の各位皆様の御厚意と御援助とを改めて御願ひ申上げます。

今日の私の感懐といたしましては、大要前述の趣旨で尽きるのでありますが、更に時間をゆるしていたゞくならば、先ずこれについて第一に思い当ることは聖書のコリント前書の中でパウロの述べた次の言であります。

「人宜しく我らをキリストの役者また神の奥義を掌る家司のごとく思うべし。さて家司に求むべきは忠実ならんことなり。」

私の如き者がパウロの如き偉大なる役者又は家司などには到底比較すべくもありません。然しこゝで家司について求められている所の「忠実に仕事をする」という点では私にとつても必ずしも不可能ではなさそうに考えら

れるのであります。従つて私は就任第一の心がまえとして、先ずこの言葉を将来のすべての行動の前提として服膺して行きたいと切に思うのであります。

次に学院の学生教育について申すならばその根本方針は申すまでもなく福音主義の上に立つ所のクリスト教的教養を体する人材の養成におかねばなりません。従つてこのためには真の意味に於ける独立自尊の精神の涵養をはかつて、従来の伝統をますます發揮するように努力せねばなりません。われわれは神の義に従うことによつて色々の現世的束縛から脱して、こゝに真の意味での自由と平等の人格とをもつものであります。而してこの自由の精神と平等の人格とこそは現代最も強く要望せられてゐる民主主義の核心をなすものであります。これはクリスト教的倫理観を前提として初めて確固たる地盤を認められるものであります。これをはなれて民主主義や自由主義は少くともわれわれの学園にあつては到底考えられないのであります。

個人の尊厳や、自由なる精神と云うのは必ず以上の基礎の上に立たねばならないものであります。この意味で学院教育の目標は、人格の尊厳を自覚せしめることにありとも云い得るのであり、又学院が日本の民主社会確立

のために果すべき役割も亦こゝに存するのではないかと思うのであります。

「キリストは自由を得させん為に我等を釈き放ちたまへり。されば堅くたちて再び奴隸の軛につながるな」、「兄弟よ汝らの召されたるは自由を与えられんためなり。たゞその自由を肉に従う折となさず反つて愛をもて互に事えよ」というガラテヤ人に贈つたパウロの言はキリスト教的自由の精神の拠り所を示されたものであると思ふのであります。

近代日本の社会を顧るならば明治維新の際に於て永い時代に亘る封建的束縛から解放され、個人の人格と自由は著しく伸長せられ高められました。明治から昭和にかけての近代的国家としての目覚しい発展はこの維新解放によつて生じた新しい社会の力に依つてなされたのであります。然し乍ら明治維新の解放は主として形の上或は制度上の解放に止まり、その精神的部面に至つては依然払拭し尽されない封建的残滓が残されていたのであります。そこから再び独善絶対主義的悪夢を誘発して、ついに国土を焦土と化するような大失態に陥れたのであります。

戦後の新日本は、第二の維新の上に立つ日本であつて、

単に制度上の解放のみに止まらず、更に精神の内部から真の精神の自由と人格の尊厳とが確立せられなければなりません。

さて以上のように述べたからと云つて、わが学院の教育方針は知性方面の教育を軽視するというのでは決してありません。東北学院は中学校から高等学校、大学と連る所のわが国学校法規に定められた諸規程に副うて学術上の教育と研究とをも目的としている機関であります。

故に前述のような人格教育を偏重するの余り、知性教育に對する熱意を低下せしめるような弊に陥つてはならないのは勿論であります。学園というものゝ性質から見てもその特色の中に、知育的な方面、即ち学問研究に對する成績に於ても常に高い水準を保持する努力を緩めてはならないのであります。寧ろ換言するならば、本當の意味のよき智識こそ優れた人格を構成する重要な素因を成すものだとも云うても決して誤りではないと思ふのであります。知性と徳性とを背反せしめることなく、最も進歩的な勝れた知能と、高い精神的な人格とが均衡の取れた人間性全体に着眼した教育でありたいと念願するのであります。

以上申述べました徳育と智育の問題は何れも精神方面

の教育についてありましたが、これと共に体育の問題があります。世上やゝもすると基督教主義の立場に立つものは、精神的方面を強調する所から肉体に関する方面を等閑にしたり、甚だしきは肉体上の事を罪悪視するが如き弊に陥り易い傾向も見うけられます。これは勿論誤れるの甚だしきものでありまして、聖書にも肉体は靈魂の宿る宮殿であると説かれてあります。何程立派な精神と雖もこれを実行する為には必ず肉体の力を必要とします。故に靈魂の宮殿たる肉体を清潔に保ち、精神実行の具としての肉体の健全を図ることは最も基督教に叶う所以でなければなりません。神はその愛する一人子たるイエスをこの世に遣わされた時にも、肉体を具えた所謂受肉化身の神の子として遣わされたのであります。肉体と精神との関係は恰も車の両輪に於けるが如く鳥の双翼の如くでなければなりません。特に戦後の日本人の体位の低下、道徳心の弛緩、青年の意気の萎靡等の著しく目に立つ現時にあつては一層靈肉両面の均衡のとれた教育を高調しなければなりません。別けても中学校、高等学校の発育盛りの生徒に対しては特別な留意と工夫との必要を痛感するのであります。

最後に現代日本国民の教育は徳育、智育、体育の何れ

の点よりするも、わが東北学院の存立の使命が如何に重大であるかを痛感せずには居られません。

希くは神の御恩寵と満堂各位の御援助とに依つて益々本院の発展を図り、院長の重責を果してゆきたいと存する次第であります。(五・一五 於就任式)

〔東北学院時報〕一六七号 昭和二十六年九月二十日)

二七九 ロバート・ゲルハートの送別会

(昭和二十六年七月二十三日)

ゲルハード先生御一家を送る

わが学院英語育ての親ポール・ゲルハード博士夫妻は戦前賜暇休養で帰米のまゝ日毎につのる日米関係の悪化に胸をいためつつやがて待望の終戦の暁には、もはや停年となり、再び仙台の地を踏まれず思いを学院に残して突然彼の地で永眠されたのが四年前のこと。仙台で行われた追悼会の記憶もあざやかに、真夏のことであつた。

父博士の遺志を継いだ長男ロバート氏は戦時中彼地で学位を獲得し、終戦後間もない廢墟の仙台に最初の外人教

師として再びわが学院の教壇に立たれたのであつた。またその後母堂は全生涯を東北学院の育英事業に献身された夫博士に協力したゆかりの地、今や愛子の教鞭をとる懐しの学院ボーイズの住む仙台を見んものと昨年六月御来仙戦後のつかれたわれらに力と光と慰めを与え変りない愛をそゝいで居られたが今回ロバート氏夫妻が賜暇休養を機に一同帰米されることゝなつた。老夫人は今や喜寿をむかえられ再度の御来仙は望み難くかつロバート氏は来春より国際基督教大学に転ぜられる予定とのこと。そこでかねて故博士並に御一家から学恩を受けた有志相語らい御出発一週間後にせまつた七月二十三日謝恩送別会を開くことゝなつた。

時あたかも丑の日の前日として文字通りうなぎのぼりの酷暑にもめげず南六軒丁の母校に來集したものの四十六名。いづれも初老どものOBばかり。昔の花が咲いて自分こそは老先生に一番可愛がられたと勝手な手前味噌御自慢も邪気がなくてほゝえましい。特製のおすしに仙台の味をかみしめる主賓、心ばかりの贈物を悦ぶ御三人。夕やみせまる頃有志の歌、故博士の愛歌三〇四番等の合唱につき、旅路平安の祈りをさゝげ、夜のとばりとともに名残つきせぬ会の幕はとぎされた。

ちなみに本会こそは度重なる御一家の送別会の文字通り最後のものでも且つもつともなごやかで明るい集いであつたことを会集者一同慶びとしたことであつた。最後に係としての私の手落から案内状発送もれや返送郵便物などが折角の会に御來駕願えなかつた同窓諸氏には謹んでお詫び申し上げます。
(山浦拓造記)

〔東北学院時報〕一六七号 昭和二十六年九月二十日

二八〇 神学科増設の決議

(昭和二十六年九月十五日)

常置委員会 昭和二十六年九月十五日
午後三時東北学院大学に於て開会

〔中略〕

議題

二、大学に神学科設置の件

本院創立の精神により又教会方面等の要望もあるの
で二十七年から設置したい 定員 二十名
前期二年間は一般教養、後期二年は専門教育を行う

ことになるが教授陣容は将来東京神学大学からも応援をうければ教育上支障なく経営出来る見込である
但し収支の面では赤字であるが大学全体から「カバ
ー」出来る

決議 可決

〔後略〕

(理事会記録)

文部大臣 天野貞祐殿

鈴木義男

理事会決議録

昭和二十六年九月十五日午後三時より東北学院大学において開会

出席理事 十名(定員十二名中一名欠員)

理事長鈴木義男議長となる

議題一、東北学院大学に神学科設置の件

議題二、東北学院大学短期大学部に法科設置の件

右満場一致可決し記録朗読一同これを承認して午後八時閉会す

昭和二十六年九月十五日

議長理事長 鈴木義男 ㊟

理事 小田忠夫 ㊟

同 大石榮一 ㊟

右原本と相違ないことを証明する

昭和二十六年十月五日

学校法人東北学院理事長 鈴木義男 ㊟

学院第一九号

大文学科増設認可申請書

この度東北学院大学文経学部(英文学科、経済学科)に神学科を増設したいと思えますから学校教育法第四条及び私立学校法第五条によって御認可下さるよう別紙書類を添えて申請いたします

昭和二十六年十月十日

設置者

学校法人東北学院理事長

書類目次

- 一、東北学院大学文経学部神学科増設要項
 - 二、学則
 - 三、校地(図面添付)
 - 四、校舎等建物(図面添付)
 - 五、図書、標本、機械、器具等施設
 - 六、学部及び学科別学科目又は講座
 - 七、履修方法
 - 八、学部及び学科別学生定員
 - 九、職員組織
 - 十、設置者に関する調
 - 十一、資産
 - 十二、維持経営の方法
 - 十三、現在設置している学校の現況
 - 十四、将来の計画
- 第一、東北学院大学文経学部神学科増設要項
- 一、目的及び使命
- 本大学は基督教による人格教育を基礎として広く知識を授けると共に深く専門の学芸を教授研究し知的、道徳的及び応用的能力を展開させもって世界文

化の創造と人類の福祉に寄与することを目的とする

- 二、名称 東北学院大学文経学部神学科
(既設の学部学科 文経学部英文学科
文経学部経済学科)
 - 三、位置 宮城県仙台市南六軒丁一番地
 - 四、校地 総坪数 一一、九七四坪(共用)
 - 五、校舎等建物 現在総坪数 二、二八五坪(共用)
 - 六、図書、標本、機械、器具等施設概要
- | | | |
|----|--------|---------|
| 図書 | 一般教育図書 | 三〇、八三二冊 |
| | 専門図書 | 二一、七五五冊 |
| | 雑誌等 | 一六、七四五冊 |
| 計 | | 六九、四三二冊 |
- 標本 八四三冊
- 機械、器具 三、五五四点
- 備考 校地校舎図書標本その他は短期大学部と共用であるが本大学は昼間授業短期大学部は夜間授業で競合することがない
- 七、学科又は専攻部門の組織並びに附属施設
- 本大学文学部に、英文学科、経済学科、神学科の三科を置き昼間授業とする 尚附属施設として附属図書館、アメリカ文化研究所、基督教研究所及び東北

経済研究所を置く

八、学科又は専攻部門別学科目の概要

(一) 一般教育科目(各学科共通)(かっこ内の数字は単位数を示し×印は必修を示す)

(1) 人文関係科目

哲学(四)倫理学(四)基督教教学(×四)文学(四)音楽(四)美術(四)歴史(四)

(2) 社会科学関係科目

法学(含憲法)(四)政治学(四)経済学(四)社会学(四)地理学(四)心理学(四)

(3) 自然科学関係科目

数学(四)物理学(四)化学(四)生物学(四)自然科学概論(四)統計学(四)

(二) 専門科目(神学科)

(1) 外国語(独逸語、フランス語は何れか選択必修)

英語 I(×八) 英語 II(×四) 独逸語(×八) フランス語(×八)

(2) 専攻科目

新約聖書概論(×四) 旧約聖書概論(四) 新約聖書釈義(×四) 旧約聖書釈義(四) 新約聖書神学(×四) 旧約聖書神学(四) 教会史(×四) 教理史(×四) イスラ

(3) 自由選択科目

エル民族史(四) 初代基督教時代史(四) 組織神学(×四) 神学演習(×四) 基督教倫理学(四) 基督教社会学(四) 説教学(四) 牧会学(四) 宗教教育(四) 社会事業学(四)

(三) 教職教養科目(各学科共通)

教育心理学(四) 青年心理学(四) 教育原理(四) 教科教育法(四) 教育実習(四) 教育史(四) 教育社会学(四) 教育行政法(四) 教育哲学(四)

(四) 体育科目(各学科共通)

体育概論(一) 保健教育(一) 実技(二)

九、履修方法概要

(1) 前期二年次間に主として一般教育科目を後期二年次間に主として専門科目を履修するものとする

(2) 本大学の卒業資格は四年以上在学して左によつて一二四単位以上を履修しなければならない

(イ) 一般教育科目 人文科学関係、社会科学関係、

自然科学関係科目の三系列中から一系列三科目一二単位以上、合計三六単位以上を履

職名	人員				備考
	専任	兼担	兼任	計	
学長	一	一		一	
教授	六	二	三	一〇	
助教授	五	七		一二	
講師	三	二		五	
司書	二			二	
雇員	二			二	
計	二九	二四	二三	七六	

十、職員組織 (神学科)

B 専攻科目 専攻科目中から六四単位以上を履

A 外国語 英語一二単位は必修とする外独逸語、フランス語のいずれか一科目八単位は選択必修とする

(ロ) 専門科目 外国語、専攻科目、自由選択科目中から左によって八四単位以上を履修しなければならない

(3) 体育 講義二単位実技二単位は必修とする
 尚教職に就こうとする者は教育職員免許法施行規則並びに別に定めるところに従って単位を修得しなければならない
 C 自由選択科目 各人の能力に応じ適宜履修するものとする
 修するものとする

十一、学科又は専門部門別入学者定員

区 分	第一、二年次				計
	第一年度	第二年度	第三年度	第四年度	
文経学部 英文学科	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	四〇〇
同 経済学科	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	六〇〇
同 神学科	二〇	二〇	二〇	二〇	八〇
計	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	一、〇八〇

十二、設置者 学校法人東北学院

十三、維持経営の方法概要

授業料、寄附金等の収入をもつて支弁経営するも収入金不足の場合は本部交付金をもつて補う

昭和二十七年予算概要（經常費）

一、授業料その他の収入 一一、一五二、〇〇〇円

二、寄附金（後援会） 五〇〇、〇〇〇円

三、本部交付金 二、一〇〇、〇〇〇円

収入合計 一三、七五二、〇〇〇円

一、人件費 一〇、〇三九、一〇〇円

二、物件費その他 三、七一二、九〇〇円

支出合計 一三、七五二、〇〇〇円

十四、文経学部神学科増設の時期 昭和二十七年四月

十五日、開設学年

一日

第一年度

〔注・書類目次中二、以下省略〕

二八二 神学科増設取下げの決議

（昭和二十六年十一月二十四日）

臨時理事会

昭和二十六年十一月二十四日 午後四時 東北学院大学

に於て開会

〔中略〕

報告（小田理事）

二、前回の決議によつて大学に神学科、短大に法科を増

設する件について文部大臣に認可申請を出したので

十一月十五日に大学設置審査委員会と文部省から実

地調査員が来校された

(中略)

議題一、大学に神学科増設の認可申請取下げの件

(小田理事)九月十五日の理事会で大学に神学科設置の件を

可決し十月十日付で文部大臣宛学科学科増設申請中

の処都合により増設を見合せることにしたい

決議 増設を見合せること

(後略)

(理事会記録)

二八三 神学科増設認可申請取下げ書

(昭和二十六年十一月二十六日)

学院第二八号

昭和二十六年十一月二十六日

学校法人東北学院理事長 鈴木義男

文部大臣 天野貞祐 殿

大学学科学科増設認可申請取下げについて

昭和二十六年十月十日付にて首題について申請中のとこ

ろ別紙添付理事会決議録写の通り本年は増設見合せるこ

とに致しましたから可然御取計い下さるやう御願ひ申上

げます

理事会決議録

昭和二十六年十一月二十四日午後四時東北学院大学に於

て開会

出席理事 小田忠夫 津田 郁 橋本重郎 大石栄一

阿部豊吉 小平国雄 小山田正直 クリーテ

欠席理事 鈴木義男 杉山元治郎 月浦利雄(欠員一名)

小田理事議長となる

議題一、東北学院大学に神学科増設認可申請取下げの件

九月十五日の理事会で大学に神学科設置の件を

可決し十月十日付で文部大臣宛学科学科増設認可申

請中の処都合により増設を見合せることにする

右満場一致可決し記録朗読之を承認して午後七時三十分

閉会す

昭和二十六年十一月二十四日

議長 理事 小田 忠 夫
 理事 小山田 正直
 同 津 田 郁

右原本と相違ないことを証明する
 昭和二十六年十一月二十六日

学校法人東北学院

理事長 鈴木 義 男

二八四 花輪庄三郎『東北学院七十周年史』編纂
 の委嘱をうけて」

(昭和二十六年十二月五日)

「東北学院七十周年史」編纂の委嘱をうけて

花輪庄三郎

東北学院というものゝ実体——その伝統的な性質——
 を実証的に示そうとするならば、それは東北学院という
 ものゝ歴史を以てするより他に途はあるまい。凡そのこ
 と一定の過程を辿つた時、必ず過去の経験を反省しよう
 とする。それは強ち過去の経験えの執着からばかりでは
 ない。過去を識ることに依つて今日の自覚を深め、更に

将来えの新しい指向を定める力を得ようとするのが寧ろ
 主要な要求となつて現われるのである。

東北学院は来るべき昭和三十年を以て創立第七十周年
 に達するという。明治十九年の創立当初に立つて考える
 ならばよくも遙かな旅を辿つたものとも謂えよう。その
 七十周年を記念するものゝ一として、今度「東北学院七
 十周年史」を作るといふ、真に機宜を得た企であること
 は疑いない。他校の場合を見ても大抵の所には、三十年
 史乃至五十年史ぐらゐはあるのが例である。わが学院が
 今回はじめてこの編纂に着手するというのは寧ろ遅きに
 失した憾みをさえ感ずるのである。

その昔、押川先生が烈々たる国士的な使命観を抱いて
 仙台神学校を興された創業の時代、これに次いで学院の
 歴史の大半を占めるシュネーダー院長の守成興隆の時
 代、更に出村悌三郎院長の難航の時代、同じく出村副院
 長の難航から復興えの転換時代、而してアンケニー及び
 小田両院長の現時に至るまで、代を重ねること六代、そ
 れに創立以前の所謂胎動の時代を加えるならば、約一世
 紀に亘る年数であろう。その間わが学院の辿り来つた紆
 余曲折を仔細に反省するならば、必ずや複雑多端な意義
 と興味とを発見するに違いない。

明治維新以来の日本に於ける政治思想、宗教思想、教育思想等を直接背景として、保守主義と進歩主義、国粹主義と自由主義等の錯雜消長に伴い、学院経営上に加わる試練も一通りのものとは謂えまい。その中にあつて幾多の困難を克服しつゝ、創立者の高邁なる理想を承け継ぎ人格主義の教育の牙城を守りつゞけて来たことは、一は天恵に感謝すると共に歴代院長をはじめ多数旧現教職員、同窓生及び内外後援者の協力の賜であることも銘記せねばならない。また今日の日本の教育基本法の冒頭に教育の目的を規程して「教育は人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として真理と正義を愛し個人の価値を尊び、勤労と責任を重んじ云々」と定めてあるのと、わが学院が七十年來守り続けた、創立の精神でもあり、永遠の理想でもある所謂学院精神なるものと照し合せて、時というものの齎す偉力にも驚かざるを得ない。

来るべき七十年迄には卒業生の数は一万数千名に達するであろう。固よりこれを以て学院の全部ではない。否却つてその前途にこそ輝しいわが学院の将来が期待されるのであらう。従つて今回企てつゝある七十年年史は過去先人達の業績を発揚しこれに鑑みると共に永久に進

展して止まぬ学院将来の指向を示す指針となるべきものでなければなるまい。

右の史家は彼のその史観を述べて「あきらけき鏡にあへばすぎにしも今ゆく末のことも見えけり」と詠んでゐる。

今度計画中の学院七十年年史も願わくばあきらけき「鏡」であり「鑑」でありたい。七十年間の学院の姿をそのまゝに、歪みなく、そして偶像化することなく、また単なる記録に止まらず生命の通つた姿として写し出す所のものでありたい。而もそれによつて「すぎにし」影を偲ぶと共に「今ゆく末」の唯一の指針となるべきものでありたいと切に念願する次第である。

今回私が七十年年史編纂の委嘱をうけたことは、学院の中にのみ一生を送つて来た私としては本望の上も無い仕事であり、老の思い出これに過ぐるものはないと思つてる。さりながら、さてその任の重さと事の困難さとを想い、自分の微力非才に想い及ぶとき、一種の「たじろぎ」を感じざるを得ないものもある。何卒内外の同窓の各位、別して先輩故老の各先生方の御懇情と御援助とを得てこの任を果したいと切に念願して止まない次第であります。

就いては前述の如き意味においてその資料となる文書、書翰、伝記、写真等はもとより、故人に関する断片的な挿話、或は個性の片鱗を示す逸話、逸事、或は時代の雰囲気を窺うに足る逸事の如きものまで、御懇切な御指導に預りたく、また時を得て御高話拜聴のため御訪問いたしたいので、その際は何卒宜しく御教示をこゝろから御願ひ申しあげます。

（『東北学院時報』一六八号 昭和二十六年十一月五日）

二八五 七十年史編纂の計画

（昭和二十九年三月二十七日）

常置委員会

昭和二十九年三月二十七日午後三時東北学院大学において開会

〔中略〕

4 明年創立七十年の記念行事を行うが事業の一部として七十年史編纂のため五〇〇〇頁位として印刷費は五〇〇部で二十七万円、一、〇〇〇部で四十五万円、

その他の費用を見込み四十七万九千円を要する 尚これがため委員として理事中から阿部、大石両氏を学校側から小田、津田、三品、阿部欣二、二関、月浦、五十嵐の諸氏に委嘱した

〔後略〕

（理事会記録）

二八六 創立七十年記念行事の協議

（昭和二十九年十月二日）

常置委員会

昭和二十九年十月二日午後四時三十分から東北学院大学において

〔中略〕

議長 行事委員として小田、阿部欣二、二関、星宮、

月浦、五十嵐、津田郁、三品、大石、阿部豊吉の十氏に委嘱して九月二十八日に第一回会合を開き別紙の様な申合せをしたが原案として協議した

宮城学院からの申入れによれば十月に記念式を

開きたいとのことであるが本院としては色々の都合上五月に開きたいので本日の議題として提案した

決議 計画通り五月に実施すること、しボードに招待

状を出すこと

〔後略〕

(理事会記録)

二八七 小田忠夫「創立七十年に鑑みつつ」

(昭和三十年五月一日)

創立七十年に鑑みつつ

小田忠夫

今年をもつてわが東北学院は創立七十回の記念を迎えることになりました。「人生七十古来稀なり。」といわれている通りで、学園にとつても必しも短い年月ではありませんでした。この間幾多の風雪を凌いで今日の喜ばしい日を迎えるに至りました御恩寵を皆様とともに感謝いたします。

願ひますと、わが学院創立の明治十九年という年は条

約改正を目標とする一連の欧化政策が遂行され、キリスト教の伝道にも極めて希望のある年であります。当時伊藤内閣の下で「外相井上氏が条約改正に従事、何事も外人の反感を招くをさげ、キリスト教の普及を望むの意を示し、関係者が之を公使領事に語り、公使領事が宣教師を奨励し、宣教師が内地の牧師及び信徒と共に布教につとめ活動頗る盛なり」と三宅雪嶺が同時代史に述べている通り、キリスト教主義学園は独りわが学院のみでなく、全国各地に設立されています。

然し乍ら明治政府が条約改正の方便としてとつたプロ・キリスト教政策も間もなく転換の兆を示し、明治二十三年頃より欽定憲法発布とともに、反動的色彩を濃化して来ました。外来宗教と見られるキリスト教の苦境期は漸く始まり、キリスト教学校もキリスト者も相当いじめつけられています。内村鑑三先生が第一高等学校を逐われたのもこの時代でありました。仙台に在つた同志社系統の東華学校の閉鎖されたのも明治二十五年三月でありました。

キリスト教主義学園に学ぶ学生数の激減は経営の面にも影響したことはいうまでもありませんでした。就中それは明治三十二年文部大臣訓令第十二号なるものによつ

て頂点に達した観がありました。それによると、法令の

規定ある学校においては宗教教育を施し、又は宗教の儀式を行うことを禁止するものであります。明治の官僚政府は神の前に人格の平等を説き、ヒュマニズムの基調たる隣人愛の信仰を伝えるクリスト教主義学園を抹殺するにも等しい処置をとつたのであります。われらの先輩はこれに抗して一切のこの世的特権を失つても、その主義に徹したのであります。今はこのような嵐は止んではいますが、何時また吹き出さぬことでもありますまい。全体主義的諸国家に今見られる同一現象を想う時、わたし達は決して安心してはいられません。信仰と希望と愛の三つの上に立つて、あくまで神の城を守り抜く必要のあるはいうまでもありませんが、然しわたし達の祖国をそのような嵐に再び捲き込まれぬように神から与えられた大切な自由を守りぬきたいものであります。

このような時代を切り抜けて初代院長の押川先生からシユネーダー先生がバトンを受けつがれたのは明治三十四年でありました。明治・大正・昭和に亘る約三十六年に及ぶシユネーダー先生の教化と経営はわが学院を盤石の上におきました。太平洋戦争の受難期にも相当以上の苦難を味いましたが、その結果は真に自主的に経営する

の決心を固めさせてくれました。

天の試練のように見えたこの戦争後、敗戦の上に立つ民主国家として、祖国はともかくも立ち上りましたが、残念ながらその背骨であるクリスト教精神が極めて稀薄でありました。

クリスト教主義学園は、この祖国になくならぬ魂の道場として奮い立つたのであります。われわれはこの物質的支柱を神の恩寵の一部として拝受して、一路復興を進めてまいりました。しかも力足らず、なお充分とは申されませんが御覧の通りの現状に到達しました。

今わが学院は中・高・大学・短大を含めて、学生・生徒総数五千五百人、職員数百五十人を擁し、東北・北海道のように物の乏しく、人の少い地域にあつては確に私学の雄に値するものとして恥しくないと考えられるようになりました。市の区画整理によつて東二番丁の校地が若干減少しましたが、然し新に多賀城に獲た土地を加えての校地面積は、終戦直後の二万二千二百七十六坪から、現在は三万七千二十七坪に増加し、校舎の延坪は、大学では七棟千五百二十六坪から、二十四棟三千百二十七坪に増加しました。中学・高等学校でも四棟五百坪のものが、六棟千七百二十六坪に、大学附属寄宿舎も二棟二百

六十三坪から八棟七百三十七坪にと増加しました。これ偏にアメリカにおける信徒の皆様、並に国内同窓及び職員学生の献身的援助と努力に依つたものであることを述べねばなりません。

かくて今後われらに課された義務はこれらの援助に答えるためのクリスト教主義教育の徹底化にあると思われるのであります。

いう迄もなく私学に対する民主日本の措置はまことに貧困であります。われらはこれについても尚お幾多の問題をもつています。学生・生徒の教室外の活動に対する諸設備、例えば室内体操はじめ各種の近代的な運動施設、並びに大学における研究諸施設の拡充等なすべきものは沢山あります。然しこれも漸を逐うて計画化し、来るべき年をこれらの問題解決に捧げねばならないだろうと思えます。

何とぞ御恩寵の豊かに、この学園とこれにつらなるものの上にあらんことを皆様とともに祈りたいものであります。

(『東北学院時報』一七六号 昭和三十年五月一日)

二八八 中学・高等学校の施設建築資金計画

(昭和三十年五月九日)

昭和三十年五月九日午後五時東北学院大学において開会

(中略)

報告 続き

2 中高体育館建築計画について

中高体育館の建築資金についてはボードからの援助金がないのでP・T・A・が主体となつて四ヶ年計画で募金をすることになり本年一月から開始し本年中には五〇〇万円位集める予定で私学振興会からの借入金とで支弁することとして本年着工したい

(中略)

4

二十八年度に建築した中学校々舎の建築費はボードから二万五千弗の援助があつて支払を済ませた

二十九年度に建築した九教室分の契約金は 一、六

〇六万円でその内 五〇〇万円は私学振興会からの

借入金で支払つたが 一、一〇六万円の未払があり

外大学校舎の未払金を合せ大木組に 二、〇〇六万

円の未払金がある

〔後略〕

〔理事会記録〕

二八九 創立七十年記念式における鈴木義男の

式辞

（昭和三十年五月十日）

鈴木理事長式辞

〔鈴木義男〕

学校法人東北学院は此処に創立七十年を迎えたのであります。人生は七十古来稀なりと申しますが、長かるべき学校の歴史に於いて、七十年の歴史は必ずしも古いと申す事は出来ませんが、創立時代に学んだ人々の孫が今、本院に学んでいる事を思います時、其の伝統を誇らずには居られないのであります。而も七十年前押川、ホーイ両先生によつて木町通りに一陋屋を借りうけわずか六人の志を抱いた青年を集めて、寺小屋式の教育を施し居つた事をききます往時を回想しますれば、其の後敷地を拡張し、増築につぐ増築をもつてし、教職員は充実致し、中学、高等学校、大学と完備して卒業生は一万数千名に

なんなんとして、現に学んでいる学生・生徒は五千五百名を数えるに至つた今日の東北学院を見ます時、これもとより天父の御恩寵の然らしむるところ、又中興の祖とも言うべきシユネーダー先生、その他歴代の院長理事、アメリカのミツシヨン、主にある兄弟姉妹の精進の結果である事は勿論でありますが、又内外の同情者、理解者、旧教職員、同窓、父兄並びに本日御来臨の来賓各位や現在の教職員諸氏の暖かい御援助の賜でありまして、理事会を代表しまして厚く感謝するものであります。数多くの国立・公立の諸学校の中に処して特に色々の困難と戦い乍ら、先輩が創立し、私共がこれを継承して居ります所以のものは特色ある人材を国家の各方面に供給したいと念願するのに外ならないのであります。学院存立の意義はただに学問、智識、技術を授けるだけでなく、進んで信念を与え、毀誉褒貶に迷う事なく、自己の利益を思う事なく隣人の為、村の為、町の為、国家の為地の塩となり、世の光となつて生きて行く、人格を作るのにあるのであります。そして学院の生んだ多くの卒業生を見る時、ほぼ其の使命を果しつつあるように思うのであります。これは決して自画自讃でない積りであります。私共は今更のように神の御恩寵の厚い事を感謝すると共に

益々此の聖業を続けて行く事を祈るものであります。我
国の教育制度所謂学制が整備した結果と致しまして、学
校は其の教育に於て画一性を強いられ、個々の学校の特
性がある事に於て画一性は遺憾な事であり、人間に個
性があるように学校に個性があつてよく、又個性なかる
べからずであります。それを出来るだけ保存し、育成し
たいと言ふのが私共の念願であります。制度の画一は外
形でありまして、魂の教育はこれに反しないのでありま
す。学院の伝統は學術・技芸・スポーツ等の教授と共に
常に魂をはぐくむところにあります。真の人間を作る、
これが教育の最高目標でなければならぬと信じます。

此の目的を見失われない限り学院存立の意義は永遠であ
ります。教育は国家にとつても最高の真摯な仕事であり
ますが、其恩恵は国立・公立に厚くして私共に甚だ薄い
事を遺憾に存じます。これは制度を改めるべきでありま
すが、其の代り一面、官憲の干渉から開放されて居る特
長があります。それ故にこそ我等の伝統を維持する事が
出来るのであります。私共は凡ゆる物質的財政的困難と
戦い乍ら、この特色ある教育機関を永遠に育成して行く
事を決意する次第であります。あらためて内外の暖かい
御援助と御鞭達を懇請致すものであります。此処に創立

七十年を無事経過致しました事を神に感謝し、更に今後
益々内容外観を整備充実致しまして、其の生命を無窮に
継続せしめます事を誓ひまして式辞と致します。

(『東北学院七十年史』)

二九〇 創立七十年記念行事

(昭和三十年五月十日)

記念行事日程表

種 目	開 会 時	会 場 及 び 備 考
<p>五月十日(火)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○早天祈禱会 ○中学校記念式 ○高等学校記念式 ○記念式(主学院) ○同窓会委員懇談会 <p>五月十一日(水)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○永眠教職員追悼会 ○同窓会総会 ○校祖墓前祭 ○サツカー対抗記念試合 ○祝賀提灯行列 ○祝賀アトラクション <p>五月十二日(木)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○記念大運動会とバザー (高等学校) ○弁論演劇映画の集 (中学校) 	<p>午前六時 午前八時 午前九時 午前十時半 十日午後より</p> <p>午後一時 午後二時 午後三時 午後四時 午後五時半より 午後七時</p> <p>午前八時半より 午前八時より</p>	<p>大学礼拝堂 東一番丁講堂 同 大学礼拝堂 松島</p> <p>大学礼拝堂 大学会議室 北山墓地 大学・高校対抗 南六軒丁—東一番丁—公会堂 市公会堂</p> <p>大学グラウンド 東一番丁校庭 講堂 研究発表合併開催</p> <p>大学屋上(雨天、礼拝堂) 大学グラウンド 午後二時 仮装行列</p>

<p>○自然科学公開実験 ○記念音楽会 五月十三日(金) ○東北地区大学弁論大会 ○美術展覧会 ○写真、生花展覧会 ○中学校英語音楽 宗教講演と映画 ○高等学校理科実験公開 レコードコンサート・展示会 ○映画会 ○学術講演会 五月十四日(土) ○北日本高校弁論大会 ○茶会 ○立明招待バスケット試合 ○大学演劇公演会 ○中・高運動会 五月十五日(日) ○感謝礼拝 ○記念野球試合 ○後夜祭</p>	<p>同 午後六時 午前九時 同 同 午前八時より 同 午後一時 午後五時 午前九時 同 午後四時 同 一時―六時 午前八時 午前十時 午後一時 午後七時</p>	<p>東一番丁自然科学実験室 仙台市公会堂(有料公開) 大学礼拝堂 仙台駅前、丸光ギャラリー 三日間開催 東一番丁、東殖二階ホール 中・高等学校講堂 東二番丁、中高各教室 研究発表公開 労働会館 昼夜二回(有料公開) 大学礼拝堂 東大経済学部教授 有沢広巳氏 大学礼拝堂 瑞鳳寺内 瑞新軒 県庁前 レジャーセンター(有料公開) 仙台市公会堂 昼夜二回 (有料公開) 東二番丁 中高グラウンド 南六軒丁 礼拝堂 大学グラウンド 評定河原グラウンド 釜石ノンプロ招待 試合(有料公開) 大学グラウンド</p>
--	---	--

早天祈禱会 創立七十年記念式は多彩な記念行事を伴つて、五月十日（火）午前六時の早天祈禱会から始められた。会場は南六軒丁の大学本館の屋上、朝靄にけむる市街を眼下に、遠く仙台平野を一眸に望む屋上に会するもの約百名、学校法人関係、教職員、同窓生、学生代表等、朝じめりする新緑の氣に胸を張つて榮ある記念式の序幕が上げられた。

屋上には母校の創立七十年を記念するために在米同窓生有志から贈られた記念鐘が新しく備えつけられ、うち鳴らす鐘の音から記念行事が開始された。

早天祈禱会順序

- 一、讚美歌 二三 司会 赤城 泰
- 二、聖書 エペソ書 一 同

第三章 一四—二一

- 三、祈禱 竹井 一夫
- 四、讚美歌 二九八 水野 和夫
- 五、奨励 杉山 元治郎
- 六、祈禱 杉山 元治郎
- 七、頌栄 五四五 一 同
- 八、祝禱 館岡 剛

記念式典 早天祈禱で始められた記念祭は同十日（火）午前十時から、南六軒丁の本院礼拝堂に於いて、今回行事の中心式典である創立七十年記念式に移つた。但し中学校から大学までの全学院の学生生徒をこの一堂にては収容しきれないので、前項日程表に示すように中学校、高校では別にそれぞれの記念式を挙行した。而して高等学校では木村茂樹（大正五年中卒、日本銀行監事）、中学校では津田輝夫（大正十四年中卒、山下設計事務所仙台支店社長）の有益な記念講演が行われた。

礼拝堂に於ける式は大学を中心とした全学院の代表的式典で新旧学校関係者（学校法人、教職員、学生代表、父兄会役員同窓生等）招待席の列席者は文部省及び私学団体関係者、県及び市関係者市内官庁関係者、市内会社、銀行、報道関係者、基督教学校関係者、教会関係者、満堂溢るばかりの盛況であつた。式の順序は次の通りである。

記念式順序

五月十日(火) 午前十時三十分—正午 於礼拝堂

司会 阿部 欣二

一、奏楽 瀨 或 美久藤

二、讚美歌 六六 一 同

三、聖書 ヨハネ伝一章二九—三四 館 岡 剛

四、祈禱 右 同

五、式辞 理事長 鈴木 義男
院長 小田 忠夫

六、校歌 五節 一 同

七、祝辞 文部大臣 松村謙三、宮城県知事 宮城音五郎
仙台市長 岡崎栄松、日本私立大学連盟会長
大浜信泉、基督教々育同盟総主事 矢野貫城
宮城学院長 西山貞、エヴァンジェリカル・
アンド・リフォームド教会外国伝道局代表 ル
ープライト、日本基督教団総会議長代理 秋
保孝次、東北学院同窓生代表衆議院副議長
杉山元治郎

八、表彰 理事長 鈴木 義男

九、表彰者代表謝辞

一〇、頌栄 五四—

一一、祝禱

一二、挨拶

一三、後奏

なお、右に於いて名譽の表彰を受けたものは次の通りである。

○勤続教職員

四十五年 津田 郁 四十二年 三品 鼎

三十三年 和泉幸一郎 三十二年 大泉 小平

三十年 月浦 利雄 二十九年 志子田喜吉

二十八年 鈴谷 一男 二十五年 シップル

十七年 渡辺 平蔵

○感謝状(理事として三期)

阿部豊吉、小平国雄、鈴木義男

○感謝状(後援者として)

一力次郎、萱場資郎、中村重夫

(東北学院七十年史)

二九一 W・E・ホーイと出村悌三郎の記念碑建立
立計画

(昭和三十年十二月五日)

ホーイ、出村両先生の記念碑建立

学院創立者であり初代院長であつた押川方義をはじめ、シユネーダー、出村剛、アンケニー等歴代院長諸先生の墓はそれぞれ御遺族の方々で、北山基督教共同墓地に建てられていますが、創立者の一人でもあり初代副院長であつたホーイ先生と第三代目院長の出村悌三郎先生の墓だけはいろいろな事情で未だ建立の機を得ずにありました。これにつき同窓生有志の間に時々話合がありました。したが今年は創立七十年にも当つていますので最近愈々話が具体化して実行に移ることになりました。但し両先生の墓は已に各々故郷の地に建立されてありますので、仙台に建つのは記念碑ということになります。尤も出村先生の場合は仙台にも分骨されました。

以上のようなわけで先般同窓有志の人々が次ぎの如き申合せをいたしました。

一、建立発起委員(順不同)

小田忠夫(委員長)、月浦利雄、五十嵐正躬、二関敬、三品鼎、鈴谷一男、松山国夫、黒沢孝平、津田郁、阿部豊吉、小山田正直、大石栄一、和泉幸一郎、三沢房太郎、児玉省三、花輪庄三郎

二、資金廿万円程度(一基金額)

三、場所 北山基督教共同墓地

四、竣工期日 昭和三十一年五月十五日(創立記念日)

なお、資金は公募はいたしません。が篤志による御寄附は感謝をもつてお受けいたします。

(『東北学院時報』一七八号 昭和三十年十二月五日)

二九二 献鐘式の举行

(昭和三十年十二月十七日)

献鐘式举行

予て在米同窓生有志から寄贈を受けていた聖鐘の献鐘式を同窓会主催で教職員学生参加の下に十二月十七日午後三時大学屋上で荘厳に行つた。

(『東北学院時報』一七九号 昭和三十一年五

月一日)

二九三 W・E・ホーイと出村悌三郎の記念碑建

碑式

(昭和三十一年四月十五日)

W・E・ホーイ 出村悌三郎両先生の建碑式

かねて同窓有志者の発起により、故ホーイ、出村両先生の墓碑建立の計画を進めていたことは、本紙前号の記載でも御承知のことでありますが、その後予想以上の御賛成を得て、工事も完成したので去る四月十五日、建碑式を挙行した。最初の予定では五月十五日の学院創立記念日に建碑式を挙げる計画の所、小田院長のアメリカ行きが早められた関係上、予定より一ヶ月早く挙行された。式はホーイ先生の令嬢、ガートルード・ブランシユ・ホーイ(宮城学院教授)及び出村悌三郎先生の長女菊地ミヲ子、次女松本総子夫妻、四女出村妙子、その他小さいお孫さんたち列席のもとに来会者約二百名で、次の次第で行われた。

建碑式

昭和三十一年四月十五日午後一時、於北山基督教墓地

司会者 館岡 剛

一、讚美歌 六七

二、聖書 ヨハネ伝十四章一—六

三、祈禱

四、建碑式辞

五、讚美歌 四九九 並に遺族の献花

六、頌栄 五三九

七、祝禱

小田忠夫

式後学院大学会議室で遺族を中心に、有志者の追悼茶話会を催し、栗原基氏のホーイ先生追憶談、秋保孝蔵氏の出村先生追憶談などあつて散会した。

なお墓碑の文字は秋保孝蔵氏の揮毫である。

左は当日の式辞の大意である。——略、ホーイ先生が合衆国リフオームド教会日本派遣の第三番目の宣教師として初めて来朝されたのは、今から七十一年前、明治十八年十二月一日横浜着、当時二十八才の独身の青年宣教師であつた。押川方義先生と協力して仙台神学校を起したのはその数ヶ月後であつた。最初の一年数ヶ月間の学費校経営費はホーイ先生の献身的な犠牲によつて維持された。その他ジョン・オールト記念館を初め、初期学院の

建設にはホーイ夫妻の犠牲に負うところ極めて多い。然るに残念なことには、先生の健康上の問題は永く仙台の地に止まることをゆるさず在仙十四年の後、明治三十三年副院長を辞して支那に赴いたのである。時に先生は四十三才であつた。

支那では湖南省岳州市外に求神学堂^(新)を起して教育及び伝道に尽すこと約二十五年、然るに昭和二年勃発した内乱のため米國に遁れ帰る途中、太平洋上の船中に於いて召天された。享年七十才であつた。

出村悌三郎先生は、ホーイ先生から親しく薰陶をうけ、初期学院に学び、学院に働き、シユネーダー院長を援け、その後を承けて三代目院長を継ぎ、その全生涯を学院に捧げられた。その中でも忘れ難いことは、学院七十年の歴史の中でも最も困難な時代であつた太平洋戦争時代を担当され、独力自營の窮境に耐えつゝ、よく東北学院百年の大計をあやまらなかつたことは、後進の吾々として最も感謝せねばならぬことである。先生は昭和二十年院長を辞し、同二十四年十二月二十六日、仙台中杉山通の自宅で七十七才の天寿を全うされた。

ホーイ先生は、故国ペンシルバニヤ州の御郷里に、出村先生は新潟県北蒲郡の御郷里に、それぞれ埋葬され、

出村先生は仙台にも分骨されたが、戦後の混乱等の事情のために、遺憾ながらその機を得ないでおつた所、今回学院創立七十年を期して、同窓生有志者の発起で両先生を記念する墓碑建立の議を起しました所、幸いにも多数各位の御賛同と御援助をいたゞき、今日建碑式を挙げ得たことは各位とともに誠に本懐の至りである。

両先生の墓碑は甚だ質素なもので御遺族の方々のお心には副いかねるかも知れないが、学院と深いゆかりをもつ多くの先輩達の眠るこの丘上に、歴代院長の墓碑が揃つたことは誠に意義の深いことであり、学院教育上にも極めて望ましいことゝ考え、各位とともに本望の至りに存するのである。

終りに今回の企に御賛同下され、多大の御援助を寄せて下さつた各位に対し、衷心より御礼を申し、また態々御列席下された御遺族の方々にも厚く御礼を申し上げます云々。

(『東北学院時報』一七九号 昭和三十一年五月一日)

二九四 小田忠夫「母校『東北学院』につらなるもの」

(昭和三十一年十二月一日)

母校「東北学院」につらなるもの

小田忠夫

一九五六年のクリスマスを祝するに際し、とりわけ真の平和が世界人類のうえに完成されるよう、皆さまともにお祈りいたします。

原子科学の発達は自然科学的という進歩の観念を終止させ、今や真の意味の神の国が求められる時代に到達したと謂われています。然しそれにも拘らず人智の浅はかさから世界の一部にはいままなお闘争の叫びが起っており、今こそわれわれは人類を自らの破壊より救い給えと祈り且つそのために努力しなければなりません。

さて御承知の通り私は去る五月渡米いたし、東北学院に対する過去七十年に亘る援助に答礼の趣旨をもつて、アメリカにあるエバンゼリカル・リフォーームド・ミツシヨンの理事会に出席し、親しく彼の地の同信の人々に挨拶を申述べて参りました。

神の国実現のためにエキュメニカルの運動を真実に求めている彼の地のクリスチャンの代表者たちは、私の今回の訪問を心から喜んでくれ、今後とも相提携して神の御用を果すようにと私を励ましてくれました。その上に同教派が海外において関係する最大の施設である東北学院のためにというので、この際特に学生寄宿舎を一つ改めて贈ろうとの口約を添えて下さいました。「与うるは受くるよりも幸いなり」とは申せ、真実変らぬ御誠意に対して、感謝に堪えないところであります。それについても私どもの敬愛する友人ウイリヤムズ先生がミツシヨン・ボードのアツソシエート・セクレタリーとして彼の地にあり、好意ある斡旋の労をとつて下さることは感謝の至りであります。

さて、われらの学園の創立精神であるクリスト教が、わが日本に於いて現在占めてるところの力は依然として微弱であることを認めなければなりません。この事實は宣教百年目を三年後に控えての教勢としては遺憾と謂わざるを得ません。然し翻つて広くクリスト教の世界伝播の歴史的事実を徴して考えるならば、日本のクリスト教が他の一切の権力を借りることなしに兎も角もこゝまで伸長して来た事實は一既に悲観すべきものとは限りませ

ん。明治以来日本のクリスト教界の先人達が献身的な努力を傾けて、人格の尊厳と自由なる人權の尊重を唱え、民主社会実現のためにその根柢に培つて来た業績は相当に高く評価されて然るべきものと思います。就中、日本に於ける社会正義実現の運動は一にまずクリスト教徒によつて説かれ、各種の社会厚生施設の大部分はクリスト教の力によつて実現されたことが明かに看取されるのであります。現在も日本の青年に多大の魅力となつてゐる各種の社会運動は、実にクリスト教によつて先駆されたものであります。西洋文明が輸入されて以来約百年間、その文化の根幹をなすクリスト教が幾多の権力の迫害にあいながら、或は地上の偶像の圧迫を被りながらも、日本全土の上に四十万に余る改心者を起し、百有余のクリスト教主義の学校をつくつたのであります。

明治以来欧米文化の摂取にあつては、その根柢である筈のクリスト教を無視して、結果である果実のみを得て用をすませようとした皮相な見解の誤りであつたことは言うまでもありません。明治、大正、昭和の三代に亘る物質文明は表面いかにも栄えたかのように見えたが、その見せかけの文化は如何に他愛もなく崩れたかはずでに周知の事実であります。

敗戦後日本人は一時このことに気づいたようにも見えましたが、然し喉もと過ぎれば熱さを忘れるが如く近頃は再びクリスト教に対する関心が減じたようだと歎かれています。

この東北をしてイギリスのスコットランドたらしめようとの偉大なる幻の下に創設されたわが東北学院は七十年を経過した今日、一万をこえる同窓生をもつています。われわれ同窓生はこの大いなる幻の下に生みだされた兄弟であります。そして私どもの先輩がこの国に残した偉大なる事業の後継者たるはいうまでもありません。

私どもは如何なる分野にあつてもイエス・クリストの教を守り育てる義務を持つものではありますまいか。その意味においてクリスト教学校はクリストの体である教会への裾野をなすものと考えられます。この広い裾野の上に建てられてこそ日本の教会は強固なる基礎と発展があるものと思ひます。ねがわくは同窓の皆様クリスマスを祝うに当り今一度学園創立の精神をふりかえらうではありませんか。そして同窓生は何らかの形でクリスト教の発展に寄与する責任をとりたいものと思ひます。アメリカの後援者のいづくエキユメニカルの運動は之によつて日本においても強い協力者を見出すであります。

〔『東北学院時報』一八〇号 昭和三十一年十一月一日〕

二九五 学校と教会との伝道協力懇談会

(昭和三十三年三月十四日)

伝道の協力に関する懇談会

教会と学校との協力を一層緊密にし東北伝道を促進する為め東北学院同窓牧師と学校関係教授との懇談会が三月十四日日本学に於て持たれた。同窓牧師側より、芦名直道(新庄教会牧師)秋保孝蔵、千葉大二(大河原教会牧師)深瀬忠蔵(福島教会牧師)中山真平(青森長島教会牧師)小笠原政繁(長町教会牧師)桜井重秀(一関教会牧師)戸枝義明(東一番丁教会牧師)梅津吉之助(山形六日町教会牧師)学校側より、小田忠夫学長、阿部欣二、館岡剛、二関敬、情野鉄雄、花輪庄三郎、小笠原政敏、佐藤秀臣、ウイリアムズ、茂泉昭男の諸先生が出席された。学長より「かねて願われていた、教会と学校の伝道上の懇談会が実現したのは嬉しい。東北に於ける伝道に於て学校の特殊性を生かし教団の線を維持し乍ら宣教の線を拡張してゆく

ために、東北の特殊性を考慮しつつ、教会と学校は一層強い協力態勢をとつてゆかねばならぬと思う。基督教学校は今日本来の面目に立帰つて学問の分野と同時に宣教の線をより強化してゆかねばならぬと反省するが、一層の御協力と御高見を得たい」という意味の挨拶があり、直ちに懇談に入った。懇談は十時から二時まで行われたが、神学部、基督教研究所、神学講座、東北経済の研究、等々の次々と問題が提出され活発な意見の交換があつた。「東北伝道の反省、現場の問題、将来の方向をつかまえる為めに東北宣教の歴史を問題史的に研究してもらいたい。その為めに基督教研究所がすぐにも活動を始めることがのぞましく、諸種の研究と問題を話し合う場所をそこに設けることが急務である」と、基督教研究所設置活動の要望の声が特に強かつた。又、夏に行われている基督教講座については「教団の認定を合せてやつたらどうか。それをむしろ地方に広げる形で開くようにしたらどうか。教会を会場にして伝道的な講座を地方民対象にしてもらい度い。その場合地方の牧師が研究員の一員になつたらどうか」などの話し合いがあつた。最後に花輪先生より「東北学院七十年史は完成に近い。その中で大正の末期から昭和にかけて牧界と学院神学部の間に対立が出

来ている。この辺の問題の核心的な原因は、わかっているようにわかりにくい。生きた資料をいただき度い」という七十年史編集についての御願いがあつたり。近來にないうち解けたよい集りであつた。尚この様な会合を度々開き教会と学校の協力を促進しようという声が強^く、教会、学校関係問題協議会連絡委員として芦名、小笠原(政敏)教授、桜井、千葉の諸氏がえらばれ連絡にあたることになつた。

(『東北学院時報』一八三号 昭和三十三年五月五日)

二九六 アセンブリー・ホールの献堂式

(昭和三十三年九月二十九日)

アツセンブリー・ホール献堂式

昨年十一月九日に起工以來約十ヶ月を費し、去る九月二十九日献堂式を行い「東北学院アツセンブリー・ホール」と命名した。

総建坪、六五六坪

総工費、四、八五〇万円

設計監理、山下寿郎設計事務所仙台支店

施工者、大木建設株式会社仙台支店

体育設備、バスケットボール三面、バトミントン八面、

卓球三面、吊環二組、移動式鉄棒二組、低鉄棒一二段、

チェスウエート二組、クライミンググロップ五本、ボクシング一組、その他体操器具一式

その他、照明設備、衛生設備消火設備等完全な近代的施設を備え、東北、北海道にその例を見ぬ全国有数の総合体育館の偉客を誇示している。なお集会の場合には三千数百名を容れるに足り、これに相当した大ステージを備えている。

(『東北学院時報』一八四号 昭和三十三年十月五日)

二九七 花輪庄三郎の『東北学院七十年史』執筆

後記

(昭和三十四年七月二十日)

執筆後記

本書執筆の委嘱をうけたのは昭和二十六年五月であり

ました。さて史学専攻の経験もない私が、それをお承けするについては少なからずためらわざるを得ませんでした。

然し顧みれば、自分は明治四十二年東北学院普通科一年生として入学し、大正七年中学部教員として奉職以来今日に至るまで、四十有余年を学院の中に生きて来たこととあります。従つて母校創立七十年の大半に亘る沿革の有様は、かつて目のあたり経験した事柄に属するわけでありませぬ。かたがた自分の現在おかれている身辺の事情などを考え合わせると、責任に堪え得るや否やは疑問としながらも、敢えてお引きうけないわけにはいきませんでした。

最初の腹案では、創立七十年記念式の間行われる昭和三十年までには未だ四年間の余裕がある。まず資料蒐集に全力をあげよう。資料さえ纏めればあとの一年間位で一氣に書きあげる目図でありました。

さて始めてみると、教壇は退いたものの、本務の同窓会の仕事があり、わずかながら短大別科の授業も担当する。戦後の混乱から完整されていない同窓会員名簿(約五百頁)も記念式まで作らねばならず、短大学生一人の助手を相手に氣ばかりあせつても、執筆に専念する時間の余

裕はなかなかありません。

とこうしている中に四年先きに見越していた記念式が目前に迫つて来るといふ羽目に追い込まれてしまいました。然し幸いにも資料の大部分は先輩各位の御協力を得て集め得たし、また写真の大部分はシュネーダー先生の旧保存のもの、学院図書館保管のもの等で大方整備が出来ており、編纂の全貌についての構想も大体は出来たので、いわば窮余の策ではあったが、本誌の方は暫く後にまわして、早速その別冊として所謂目で見ると七十年史「東北学院創立七十年写真誌」を作り、創立記念式に間に合わせることになったのであります。

かくてその後もひき続き本誌の執筆に努力いたしましたのであります。前記のようなわけで進捗意にまかせず難航をつづけました。

記述の方針としては、よく見うける教務日誌の羅列のような方法を避けて、学院創立の精神を根本的な支柱として、時と所の基点を明確にし、原因結果の筋目をたどり、明治以来のキリスト教の情勢と日本教育政策の変遷を背景に、この二潮流がからみ合う中に、東北学院がいかに成長発展を遂げて来たかを現わしたいと努力いたしました。

今般漸く脱稿にまで漕ぎつけて見て、予想外の日数と紙数を費したことに驚きました。或は不要な筆を用い過ぎたのではあるまいかと恐縮いたしております。

〔後略〕

（『東北学院七十年史』）

第六編

地のきわみまでも

＝ 発展時代 ＝

1959(昭和34)年以後

第一章 土樋キャンパス

二九八 アメリカ文化研究所規則

(昭和二十五年十月)

東北学院大学アメリカ文化研究所規則

(昭和廿五年十月制定)

第一条 本所は東北学院大学アメリカ文化研究所と称する。

第二条 本所は東北学院大学(仙台市南六軒丁一番地)に附設する。

第三条 本所はアメリカ文化の研究をなし、日米相互の理解、認識を深め、世界文化の進展に寄与することを目的とする。

第四条 本所は前条の目的を遂行するため左の事業を行う。

一、アメリカ文化の調査・研究・紹介

二、我が国に於けるアメリカに関する事項の調査・

研究・紹介

三、定期刊行物(研究報告・所報)の発行・文献資料

の蒐集・研究会・講習会・展示会等の随時開催

四、教授の交換・留学生の斡旋・アメリカ文化関係

刊行物及び情報の交換並びに翻訳其の他アメリカ

諸学会・大学・文化団体又は個人との連絡

五、其の他本所に於て必要と認められた一切の事項

第五条 本所に次の四部を置く。

第一部 政治・外交・法律・経済・商業

第二部 宗教・教育・哲学・歴史・社会学・新聞学

第三部 語学・文学

第四部 自然科学

右各部に所員互選による委員一名以上を置く。委員の任期は一年とする。

第六条 本所に左の職員を置く。

所長 所員より一名

所員 本大学の教授・助教授・専任講師より若干名

研究員 学外者にして適当と認められた者若干名

助手 若干名

研究生 若干名

書記 若干名

所員には本学に於て講義を担当しない教授・助教

授・専任講師を任命する事がある。

第七条 本所の経費は所費・基金・寄附金・本所事業収入によつて支弁する。

第八条 本所の重要事項については総会に於て決する。

定時総会は年一回開き、其の他必要に応じて臨時總會を開く。

第九条 前条に定める以外の事務に関する事項は委員会に於て決する。委員会は所長及び各部委員を以て構成し、委員長には所長を充てる。

(『アメリカ文化研究所報』一号 昭和二十五年十一月十五日)

二九九 三部門協議会の発足

(昭和三十二年十一月)

三部門協議会

従来一本になつて開かれていた教員会を三部門即ち一般教育、英文学、経済学の三つに分けて協議会として開催することに定め、それに関する規約文を制定した。そしてその上に教授会がひらかれて学内のすべてについて

学長の諮問に應ずることに決定し、十一月より発足した。

(『東北学院時報』一八二号 昭和三十三年二月八日)

三〇〇 文経学部第二部増設認可書

(昭和三十四年三月二十日)

校大第一〇四号

昭和三十四年三月二十日

学校法人 東北学院理事長殿

文部省大学学術局長 緒方 信一 叩

大学学部増設について(通知)

昭和三十三年九月二十日付で申請のあつた東北学院大学学部増設のことは、別紙のとおり認可になりましたので遺漏のないよう実施願います。

校大第一〇四号

学校法人 東北学院

昭和三十三年九月二十日付第二十号で申請のあつた東

北学院大学学部増設のことは、下記のとおり認可します。

昭和三十四年三月二十日

文部大臣 橋本 龍伍 印

記

一、増設学部 文経学部第二部

入学定員 総定員

英文学科 一〇〇名 四〇〇名

経済学科 一五〇名 六〇〇名

二、位 置 仙台市南六軒丁一番地

三、修業年限 四年以上

四、開設年次 第一年次

五、開設時期 昭和三十四年度

六、留意事項

(1) 大学の教員組織についてはオートノミーの精神をかたく守ること。

(2) 第二部専用の研究室の新築予定は急速に実現すること。

(3) 経済学の専門図書を更に充実すること。

七、共通条件

(1) 新たに学科(専攻を含む。)を増設し、又は既設の学部学科(専攻を含む。)、学生定員を変更しよう

とする場合は、当分の間文部大臣に協議すること。

(2) 教員組織については、これが充実にいたるまで、当分の間文部大臣に協議すること。

(3) 実験実習施設および機械器具標本等については、第一部の学部学科との関係を考慮して、必要な整備を行うこと。

以上大学の目的使命を達成するため、必要な整備を行うこと。

なお、教員組織、学科履修方法、施設、設備その他について報告を求め、必要がある場合には、文部大臣として審査し、変更を求めることがある。

備考 東北学院大学短期大学部は昭和三十四年度から学生募集を停止し、在学生の卒業をまつて廃止すること。

三〇一 短期大学部廃止認可書

(昭和三十五年五月三十一日)

校大第一三四号

昭和三十五年五月三十一日

学校法人 東北学院理事長殿

文部省大学学術局長 小林 行雄 叩

東北学院大学短期大学の廃止について(通知)

昭和三十五年四月九日付け学大発六号で申請のあつたこのことについては、別紙認可書のとおり認可になりましたので、通知します。

校大第一三四号

学校法人 東北学院

昭和三十五年四月九日付け学大発六号で申請のあつた

東北学院大学短期大学部を昭和三十五年三月三十一日限り廃止することは、認可します。

昭和三十五年五月三十一日

文部大臣 松田竹千代 叩

三〇二 文学専攻科設置認可書

(昭和三十六年三月三十一日)

校大第九三号

昭和三十六年三月三十一日

学校法人 東北学院理事長殿

文部省大学学術局長 小林 行雄 叩

大学専攻科専攻の設置について(通知)

東北学院大学専攻科専攻設置のことは、下記のとおり設置してさしつかえないことになりました。よつてその運営については、遺漏のないようお取り計らい願います。

記

一、専攻科および専攻 入学定員

文学専攻科 英文学専攻 一〇名

二、修業年限 一年

三、開設時期 昭和三十六年度

三〇三 鈴木義男への追悼文

(昭和三十八年十一月五日)

鈴木義男先生のご永眠を悼む

昭和三十八年八月二十五日、東京の聖路加病院で同窓の友、橋本寛敏病院長に看取られながら、鈴木義男東北学院理事長は永眠された。行年六十九才であった。

鈴木先生は、明治二十七年一月福島県白河市に呱呱の

声をあげられた。白河の地名は古くから奥州みちのくの関門として知られ、また東北地方を河北と呼んだことでもわかるように、東北地方での最南の地点にある。鈴木先生は小学校を出られると、郷里の中学校をさしおき、東京とは逆方向の仙台の東北学院を選んで入学された。その理由は、先生の御両親が熱心なキリスト教信仰家で、東北学院の教育方針に深い理解をもたれ、また、院長シユネーダ先生の人格を敬慕しておられたことによつたものである。

かくて、鈴木先生は、その中学時代を時の東北学院普通科に学ばれたが、その間当時の労働会に入り、中学一年のころから新聞配達や牛乳配達などの労働をしながら勉強をされた。しかも学業成績きわめて優秀で、特に文章や弁論に卓越していられた。

学院中学校卒業後、第二高等学校を経て、東京帝国大学法学部に進み、同学部卒業の翌年には文部省より派遣されて欧米に留学、帰国後東北帝国大学教授となられた。

鈴木先生のご生涯における広範な活動の領域は、大体三つに分けることができる。その一は、学者、教育家としての活動、その二は、法曹界における活動、その三は、政治家としての活動である。

学者、教育者としての鈴木先生は、大学卒業後、大正八年東京帝国大学法律学科助手をつとめるかたわら、東京女子大学教授を兼ね、その後前述したように文部省在外研究員として留学、帰国後東北帝国大学教授となられ、その後、政法大学教授、専修大学教授、青山学院大学教授などの経歴を有され、昭和二十六年には同志社大学より法学博士の学位をうけられた。また、昭和四年母校東北学院の理事になられ、その後ひきつづき長くその任をつがれ、昭和二十四年には杉山氏の後任として財団法人東北学院理事長となられ、二十六年三月学校法人東北学院組織のさいつづいて理事長となられた。

法曹界に入られたのは昭和六年五月のことで、かの有名な帝人事件の弁護にたずさわり、その弁論をもって無罪をかちとられ、後数々の思想問題事犯の弁護をひきうけ、日本の良心の自由、言論の自由のために、時のファッショとたたかわれた。

政治家としては、昭和二十年十一月、日本社会党の結成に参画し、中央執行委員に選任された。昭和二十一年四月には郷里福島県から出馬、衆議院議員に当選せられたのをはじめ前後七回当選し、その間、衆議院帝国憲法改正委員理事となり、民主主義新憲法の制定に努力し、

また、日本最初の社会党内閣成立の際には、司法大臣に就任して、民主主義確立のために大きな功績を残された。その後、昭和三十五年一月には民主社会党の結党にあたり、統制委員長に就任された。衆議院議員の間、議院より派遣されて、列国議会同盟に出席すること二度であった。永眠に際してこのような功績に対し、正三位、勲一等、瑞宝章を授与され、かつ祭葬料を賜わった。

故鈴木先生の葬式は民主社会党主催の党葬として、八月三十一日午後一時から、青山学院大学チャペルで行われた。この日は、豪雨と暴風気味の荒れ模様であったが、葬列参列者約千五百名、チャペルにあふれんばかりであった。清瀬衆院議長をはじめ、最高裁長官、民主社会党党首西尾氏など、また、自民党議員など、政界、法曹界の人々が多数参列した。学校法人東北学院からは、小田院長、月浦中学校・高等学校校長、佐藤秀臣大学教務課長が出席し、小田院長が弔辞を捧げた。

九月十四日、学校法人東北学院と同窓会は、大学礼拝堂で、故鈴木先生のための追悼式を催した。

東京から鈴木未亡人とそのご遺族の方々が出席され、鈴木先生のご友人、同窓会員、教職員、学生など約七百名が、故鈴木先生に哀悼の意を表するために集まった。

式場には、白と黄の菊が飾られ、その清らかな菊花に埋まるように、ややうつむき加減の故人の遺影が安置され、参列者に気楽に話しかけそうな故人の生前の面影をしのべていた。

仙台市長町教会の小笠原政繁名誉牧師が、「われらの国籍は天にあり」という説教を行なったが、ありし日、鈴木先生と長い間の親交を重ねられた小笠原師による故人のエピソードと、今日に綿々と伝わる学院スピリットの原型を思わせる鈴木先生のご生涯は、参列者に深い感動と決意を促した。

追悼式後、午後三時から、押川記念会館で阿部学監の司会の下、故鈴木義男先生の「思い出の会」がとり行われ、この席上、親戚を代表して鈴木義臣氏が謝辞を述べられた。

なお、追悼式中の故鈴木義男先生のご略歴については、月浦先生が、また、追悼式辞については小田院長が述べられた。

（『東北学院時報』一九五号 昭和三十八年十一月五日）

三〇四 諸施設の建築状況

(昭和三十八年十一月五日)

建築工事の近況

文経学部の部

創立七十五周年記念事業の一環として、かねて企画されていたが、文経学部分離の手續きの必要上、急に、建築工事が具体化し、現在つぎのような新築、改築、増築を促進中である。

(一) これまでの自然科学教室をとり払い、その場所に、地下一階地上五階の一部鉄骨、鉄筋コンクリート造りの建築物をつくる。その坪数千二百九十坪、工費は暖房、給排水工事、電気工事費などを含めて約一億五千万円の見込みである。

この建築物には、地下に五百人収容講義室一、地上の階には、百十名収容講義室四、八十名講義室七、五十名収容演習室六、二十名収容演習室三をつくり、これら講義室、演習室のほかに、心理学研究室、オーディオ・ビジュアル・センター、教員控室、事務室、応接室、医務室、用務員室、ボイラー室、電気室など配

置される。

建設は九月着工、来年三月末竣工の予定。

(二) 五階建て図書館書庫百八十五坪を新築校舎隣りに増築する。

(三) 新築校舎建設のため取り払われた自然科学教室のうち、化学教室は、昨年四月買収した旧手島氏所有地内のブロック建て(百二十坪)を改築する。また従来の自然科学教室建築物を、化学教室の横に運搬して、生物学教室にあてる。

竣工見込みは、十月初旬で、後期授業には差支えない。

工学部の部

(学生数増加を見越して、現在、礼拝堂増築(約百二十坪)、教室増築(約百坪)、渡り廊下(約二十坪)の工事が進められ、竣工見込みは十二月末。同時に、研究室および学生部室の改築もおこなわれている。総工費千二百万円。

(『東北学院時報』一九五号 昭和三十八年十一月五日)

三〇五 文経学部の分離・独立構想

(昭和三十八年十一月五日)

これまでの文経単独学部を、かねて望まれていたように、文学部と経済学部の二学部に分離独立するため、文部省にこの九月末日までに、設置認可申請書を提出することとなった。これが認可の期日は未定であるが、認可されると本大学は、昼間の文学部、経済学部、工学部と、第二部の文学部、経済学部という大世帯となり、念願の総合大学への第一歩となるだろう。

文学部、経済学部の開設予定は昭和三十九年四月一日で、学生募集人員は、文学部英文学科百名、キリスト教学科十名、史学科三十名、経済学部経済学科百五十名、経営学科百五十名、工学部(機械・電気・応用物理の各学科あわせて)百六十名、第二部文学部英文学科五十名、経済学部経済学科百五十名、計六百名となる予定である。この学部分離問題にともない、講義室、演習室、研究室の増設、新設が目論まれている。

また、新規講座開設の関係上、新任教授・助教教授十数名が教員団に加わる予定である。

このほか、英文学科に大学院(修士コース)を設置する案も考えられており、さらに、法学部も近い将来に設置される構想もねられている。

(『東北学院時報』一九五号 昭和三十八年十一月五日)

三〇六 文学部・経済学部設置認可書

(昭和三十九年一月二十五日)

校大第五八号

昭和三十九年一月二十五日

学校法人 東北学院理事長殿

文部省大学学術局長 小林 行雄 印

学部の設置について(通知)

昭和三十八年九月二十日付けで申請の東北学院大学文学部一部および二部ならびに経済学部一部および二部の設置は、別紙のとおり認可になりましたが、下記の事項に留意の上、その実施に遺漏のないように願います。

なお、今後、学科の設置、学生定員の変更等を行なう

場合には、昭和三十六年八月二十一日付け文大庶第四三
 一号および昭和三十六年九月一日付け文大第五三五号
 通達により届出または協議願います。

記

一、この認可は、年次計画による充実を前提としている
 ので、施設、設備、教員組織等に関する年次計画は、
 申請どおり確実に履行すること。

なお、その履行状況については、完成にいたるまで、
 毎年度、別途通知により、報告書を提出すること。

二、経済学科に交通論の専任教員を増強すること。また、
 商学科に商業史、商業政策の専任教員（少くとも助教
 授）を急速に補強すること。

三、建築中の建物を予定どおり完成すること。

四、老朽の校舎ごとに研究室を予定どおり整備すること。

五、図書は、系統的にさらに増強すること。

六、文経学部一部、二部は昭和三十八年度限り学生の募
 集を停止し、在学生の卒業をまつて廃止すること。

校大第五八号

学校法人 東北学院

昭和三十八年九月二十日付けで申請の東北学院大学文

学部一部および二部ならびに経済学部一部および二部の
 設置を、下記のように認可します。

昭和三十九年一月二十五日

文部大臣 灘尾 弘吉 印

記

一、名 称 東北学院大学

二、位 置 宮城県仙台市南六軒丁一番地

三、学部学科

入学定員 収容定員

文学部一部 英文学科 一〇〇人 四〇〇人

基督教学科 一〇 四〇

史学 科 三〇 一二〇

文学部二部 英文学科 五〇 二〇〇

経済学部一部 経済学科 一五〇 六〇〇

商学 科 一五〇 六〇〇

経済学部二部 経済学科 一五〇 六〇〇

四、修業年限 四年

五、開設年次 第一次

六、開設時期 昭和三十九年四月一日

三〇七 大学院設置・増設認可書

昭和三十九年三月三十一日

文部大臣 灘尾 弘吉 印

三〇七―1 英語英文学専攻 修士課程

(昭和三十九年三月三十一日)

記

校大第一五三号

昭和三十九年三月三十一日

学校法人 東北学院理事長殿

文部省大学学術局長 小林 行雄 印

大学院設置について(通知)

昭和三十八年十一月三十日付けで申請の東北学院大学大学院設置は、別紙のように認可になりましたが、下記の事項に留意の上その実施に遺漏のないようお願いします。

記

一、中堅教員および助手を増員すること。

校大第一五三号

学校法人 東北学院

昭和三十八年十一月三十日付けで申請の東北学院大学大学院の設置を、下記のように認可します。

昭和三十九年三月三十一日

文部大臣 灘尾 弘吉 印

一、名 称 東北学院大学大学院

二、位 置 仙台市南六軒丁一

三、研究科専攻および課程ならびに学生定員

文学研究科 入学定員 収容定員

英語英文学専攻 修士課程 一〇人 二〇人

四、修業年限 二年

五、開設年次 第一年次

六、認可条件

新たに博士課程、研究科および専攻を増設しようとする場合は、文部大臣に協議すること。

三〇七―2 財政金融専攻 修士課程

(昭和四十年三月二十七日)

校大第三七六号

昭和四十年三月二十七日

学校法人 東北学院理事長殿

文部省大学学術局長 杉江 清 印

大学院の研究科の増設について(通知)

昭和三十九年十一月二十一日付けで申請の東北学院大
学大学院の研究科の増設は、別紙のとおり承認されまし
たが、下記の事項に留意のうえ、その実施に遺漏のない
よう願います。

記

- 一、中堅の専任教員を増強すること。
- 二、専門図書(とくに最近の内外図書)を系統的に整備増
強すること。

校大第三七六号

学校法人 東北学院

昭和三十九年十一月二十一日付けで申請の東北学院大
学大学院の研究科の増設を、下記のように承認する。

昭和四十年三月二十七日

文部大臣 愛知 揆一 印

記

- 一、研究科、専攻および課程ならびに学生定員

経済学研究科

入学定員 収容定員

財政金融専攻 修士課程

五人 一〇人

- 二、修業年限 二年

三、授与する学位の種類 経済学修士

四、開設年次 第一年次

五、開設時期 昭和四十年四月一日

三〇七—3

英語英文学専攻 博士課程

応用物理学専攻 修士課程

(昭和四十一年三月二十八日)

校大第三〇六号

昭和四十一年三月二十八日

学校法人 東北学院理事長殿

文部省大学学術局長 杉江 清 印

大学院の研究科および課程の増設について(通知)

昭和四十年十一月二十九日付で申請の東北学院大学大
学院の研究科および課程の増設は、別紙のとおり承認さ
れましたが、下記の事項に留意のうえ、その実施に遺漏
のないよう願います。

記

- 工学研究科関係

一、学生研究室は、実験設置を備えた耐火建築にする
こと。

- 二、工学関係の図書を増強し、系統的に整理すること。
- 三、研究費を増額すること。

○ 文学研究科関係

- 一、教員ならびに大学院学生の研究室を整備すること。
- 二、英語英文学関係の図書を系統的に整備すること。
- 三、研究費を増額すること。
- 四、中堅教員および助手を補充すること。

校大第三〇六号

学校法人 東北学院

昭和四十年十一月二十九日付けで申請の東北学院大学大学院の研究科および課程の増設を下記のように承認する。

昭和四十一年三月二十八日

文部大臣 中村 梅吉 ㊤

記

一、研究科、専攻および課程ならびに学生定員

文学研究科	入学定員	収容定員
-------	------	------

英語英文学専攻	博士課程	三人	九人
---------	------	----	----

工学研究科

応用物理学専攻	修士課程	五人	一〇人
---------	------	----	-----

- 二、修業年限 修士課程 二年
博士課程 三年

三、授与する学位の種類 文学研究科は、文学博士

四、開設年次 修士課程第一年次 工学研究科は、工学修士

博士課程第一年次

五、開設時期 昭和四十一年四月一日

三〇七—4 経済学専攻 修士課程

(昭和四十二年三月二十九日)

校大第二五七号

昭和四十二年三月二十九日

学校法人 東北学院理事長殿

文部省大学学術局長 天城 勲 ㊤

大学院の専攻の増設について(通知)

昭和四十一年十一月二十九日付けで申請の東北学院大学大学院の専攻の増設は、別紙のとおり承認されましたが、下記の事項に留意のうえ、その実施に遺漏のないようお願いいたします。

記

- 一、財政学担当の専任教授をすみやかに補充すること。
- 二、教員の待遇改善について配慮すること。
- 三、経済学研究科財政金融専攻は、昭和四十一年度限り学生募集を停止し、在学生の修了をまって廃止すること。

校大第二五七号

学校法人 東北学院

昭和四十一年十一月二十九日付けで申請の東北学院大学大学院の専攻の増設を下記のように承認する。

昭和四十二年三月二十九日

文部大臣 劔木 亨弘 印

記

一、研究科、専攻および課程ならびに学生定員

入学定員 収容定員

経済学研究科 経済学専攻 修士課程 五人 一〇人

二、修業年限 二年

三、授与する学位の種類 経済学修士

四、開設時期および開設年次

昭和四十二年四月一日 第一年次

三〇七―5 経済学専攻 博士課程

応用物理学専攻 博士課程

(昭和四十三年三月三十日)

校大第一九三号

昭和四十三年三月三十日

学校法人 東北学院理事長殿

文部省大学学術局長 宮地 茂 印

大学院の課程の増設について(通知)

昭和四十二年十一月二十八日付けで申請の東北学院大

学大学院の課程の増設は、別紙のとおり承認されましたのでお知らせします。

校大第一九三号

学校法人 東北学院

昭和四十二年十一月二十八日付けで申請の東北学院大学大学院の課程の増設を下記のように承認する。

昭和四十三年三月三十日

文部大臣 灘尾 弘吉 印

記

一、研究科、専攻および課程ならびに学生定員

入学定員 収容定員

大学院の専攻の増設は、別紙のとおり承認されましたが、下記の事項に留意のうえ、その実施に遺漏のないよう願います。

経済学研究科 経済学専攻 博士課程 二人 六人
工学研究科 応用物理学専攻 〃 二人 六人

記

二、修業年限 三年

一、泉町地区の校地については、全体計画をたてて教育にふさわしい環境となるよう整備すること。

三、授与する学位の種類

経済学研究科は経済学博士

二、電気工学専攻に若手中堅の教員を早急に補充すること。

工学研究科は工学博士

四、開設時期および開設年次

博士課程 昭和四十三年四月一日 第一年次

校大第一五三号

学校法人 東北学院

三〇七―6 機械工学専攻 修士課程

電気工学専攻 修士課程

昭和四十五年十一月三十日付けで申請の東北学院大学院の専攻の増設を下記のように承認する。

(昭和四十六年三月三十一日)

昭和四十六年三月三十一日

文部大臣 坂田 道太 印

校大第一五三号

記

昭和四十六年三月三十一日

一、研究科、専攻および課程ならびに学生定員

学校法人 東北学院理事長殿

入学定員 収容定員

文部省大学学術局長 村山 松雄 印

工学研究科 機械工学専攻 修士課程 五人 一〇人

大学院の専攻の増設について(通知)

電気工学専攻 修士課程 五人 一〇人

昭和四十五年十一月三十日付けで申請の東北学院大学

二、修業年限 二年

三、授与する学位の種類 工学修士
四、開設時期および開設年次

修士課程 昭和四十六年四月一日 第一年次

三〇七—7 機械工学専攻 博士課程

電気工学専攻 博士課程

(昭和四十九年三月二十八日)

校大第一一—号

昭和四十九年三月二十八日

学校法人 東北学院理事長殿

文部省大学学術局長 木田 宏 叩

東北学院大学院工学研究科の課程の増設に

ついて(通知)

昭和四十八年十一月三十日付けで協議の東北学院大学院工学研究科の課程の増設は、別紙のとおり承認されましたが、下記の事項に留意の上、その実施に遺漏のないよう願います。

記

助教授クラスの中堅教員を増員すること。

校大第一一—号

学校法人 東北学院

昭和四十八年十一月三十日付けで協議の東北学院大学院工学研究科の課程の増設を下記のように承認する。

昭和四十九年三月二十八日

文部大臣 奥野 誠亮 叩

記

一、研究科、専攻及び課程並びに学生定員

入学定員 収容定員

工学研究科 機械工学専攻 博士課程 二人 六人

電気工学専攻 博士課程 二人 六人

二、修業年限 三年

三、授与する学位の種類 工学博士

四、開設時期及び開設年次

修士課程 昭和四十九年四月一日 第一年次

三〇七—8 法律学専攻 修士課程

(昭和五十年三月二十五日)

校大第一の二八号

昭和五十年三月二十五日

学校法人 東北学院理事長殿

文部省大学局長 井内慶次郎 印

東北学院大学院の研究科の増設について(通知)

昭和四十九年十一月三十日付けで協議の東北学院大学院の研究科の増設は、別紙のとおり承認されましたが、下記の事項に留意の上、その実施に遺漏のないよう願います。

記

- 一、増築中の校舎は予定どおり完成すること。
- 二、資料室及び図書室は、図書の増冊に対応できるように配慮すること。

校大第一の二八号

学校法人 東北学院

昭和四十九年十一月三十日付けで協議の東北学院大学院の研究科の増設を下記のように承認する。

昭和五十年三月二十五日

文部大臣 永井 道雄 印

記

一、研究科、専攻及び課程並びに学生定員

入学定員 収容定員

法学研究科法律学専攻 修士課程 一〇人 二〇人

二、修業年限 二年

三、授与する学位の種類 法学修士

四、開設時期及び開設年次

修士課程 昭和五十年四月一日 第一年次

三〇七―9 法律学専攻 博士課程(後期)

(昭和五十四年三月三十日)

校大第一の三〇号

昭和五十四年三月三十日

学校法人 東北学院理事長殿

文部省大学局長 佐野文一郎 印

東北学院大学院法学研究科の課程の増設について(通知)

昭和五十三年十一月三十日付けで協議のあつたこのことについては、別紙のとおり承認されましたが、下記の事項に留意の上、その実施に遺漏のないよう願います。

記

一、刑事法関係の専任教員を充実するとともに前期課程

においては、外国法、比較法、その他基礎法学関係の授業科目を開設することが望ましい。

二、研究費、図書費の増額に努めるとともに、学術図書（特に新刊書）を更に増強すること。

三、泉地区の運動場を計画どおり整備すること。

四、基礎となる学部及び既設他学部の入学定員を守ること。

校大第一の三〇号

学校法人 東北学院

昭和五十三年十一月三十日付で協議の東北学院大学院法学研究科の課程の増設を、下記のように承認します。

昭和五十四年三月三十日

文部大臣 内藤誉三郎 印

記

一、研究科、専攻及び課程並びに学生定員

入学定員 収容定員

法学研究科法律学専攻博士課程（後期）二人 六人

二、修業年限 五年

三、授与する学位の種類 法学博士

四、開設時期及び開設年次

昭和五十四年四月一日 博士課程（後期）第一次

三〇八 星宮啓「昨年度の学生運動を顧みて」

（昭和三十九年五月十五日）

昨年度の学生運動を顧みて

学生部長 星宮 啓

昨年度における本学の学生運動が幾度かマスコミに取り上げられたため、同窓の方々の関心を呼びあるいは憂えられた方も少なくないと存じますので、経過の概要と所見とを述べてご報告とさせていただきます。

一 経過の概要

注目をひいた昨年度の学生運動の経過をたどると、幾つかの関連した問題がからみ合っており、七十五周年記念事業募金寄付、課外活動規程、新入生学費値上げ、学生処罰、警察権介入等は何れも切り離せない問題であるが、何れも莫大な紙数を要するので、今回は寄付金問題についてほんの概略を記するに止めたい。

(1) 紛争の発端 六月から九月迄

五月十八日開催の父兄後援会総会で七十五周年記念事業募金に四年間に総額一億円余の寄付することが満場一致で決議され、学校から各家庭に募金趣意書が送られたあと、「寄付金の強制納入反対」を唱え出したグループが先頭に立ち、熊谷学生委員長召集の学生総会(六月二十一日開催)に同趣旨の提案をして賛成多数を得た。しかし投票数が過半数に達せず流案となった。その後反対決議をしたグループは十三に達した。合同協議会(学校代表と学生代表との協議機関)の議を経て寄付金問題の公聴会が開催され、会計理事、父兄後援会幹事、募金事務局長および学生部長等との間に全員納入の根拠等について質疑応答があった。(六月二十九日)その後熊谷委員長よりの質問(同時に要求であること確認)に答え七月二十日の合同協議会の席上、熊谷委員長に対して今後の反対運動に對しては責任をもって終止符を打つことを確約しつつ、要求を全面的に受け入れた。すなわち一家庭一口でよいこと。貧困家庭には分納、延納を認めること。寄付納付書は授業料割符と別々にすることを認め実施を約し各家庭にも通知したので、この問題は一応解決したかに見える。

(2) 運動の再燃と沈滞 十月より十二月迄

後期授業の開始と同時に事務の窓口では学生会との約束と違つて強制と受け取られる寄付金納入割符によつて約一週間窓口納入が行われた。ここで寄付金反対運動は激しく再燃し公開質問状の揭示要求として現われた。納入割符を改めて印刷し前回の申合わせに添いつつ文書をもって全学生に回答を出し誤解を解くようにした。(十月十六日)

定例の常任委員長改選期となり寄付金反対を標榜する高橋(道)君が当選。(十一月五日)新委員会は選挙スローガンに添い合同協議会で寄付金撤回を要望、第二回公開質問状が出されたのでこれに對して全学生に回答した。(十一月十四日)

新学生会常任委員長召集の定期学生総会は組織的PRにも拘らず定数不足で流会となり、運動方針の承認も得られぬまま、すこぶる氣勢が落ち一般学生の関心と支持の程度がうかがわれた。(十一月二十六日)

(3) 最後の盛り上りと行き過ぎ 一月より二月

冬休み中に事務の窓口より公布された新入学生募集要項中、学納金の項に七十五周年記念事業費の転記されていることから再び当局不信の声が挙がり、グループ討論会開催の要請があつた。しかし試験前の故に拒否され、

代案として公聴会が開催されることとなった。(一月十七日)このとき職員の前止を聞かずマイクを使用して公聴会参加を呼びかけ、翌日寄付反対署名運動に協力するよう礼拝時間に食い込みながら前止をきかずマイクを使つて呼びかけた。

学校では公聴会席上の質問に対して文書をもつて回答(一月二十日)するとともに、授業、礼拝の妨害等の行き過ぎを指摘、一方父兄を介して学生に自重を要望した。翌二十一日緊急全体会議(全教職員の会議)を開催、「処罰に値するも、よく話し合つてから決定するように」申し合せがあつたので、学生個別に関係教授と話し合う。高橋委員長召集の臨時学生総会を開催、寄付問題、新入生学費値上げ問題、課外活動規程撤廃問題について決議し、学長宛要請があり、このときより新聞紙上にこの種記事が載り市民の注意をひいた。

(4) 学生責任者処罰問題とその解決へ。

行き過ぎた学生運動の指導者の処分について学校側で協議していることが、学生側を刺激し抗議集会が開かれた。教授会も処分を慎重にするよう申し合わせ、引続き有志教授(十三名)が抗議集会代表学生と熱心に話し合う。(二月六日)、一方同窓会の鶏頭会有志も、前後三夜

に亘つて解決に努力され(横山、森、木名瀬、柴田、東見、稲垣、今野の諸氏)父兄も説得と調停に努力されたが、完全な諒解に達せぬまま二月十三日の教授会において正式に処罰を決定、処罰学生と一般学生の動搖を考慮して「試験終了後に発表するよう」申し合せたところ、学生処罰をきめたとして学長と面会を強要して乗用車阻止の事故起る。同夜補導委員会(二名欠)の責任において処罰線上げ発表を決め直ちに発表した。学生有志は翌二月十四日より正午の休憩時間中に処罰抗議集会を続けた。学校では「二月二十日試験終了後、報道関係者の出席も要請して、一般学生に対して従来の交渉経過、処分問題について説明会を開催し、互いにすっきりした心境で卒業生を送りたいから、試験中は抗議集会を中止するよう」掲示をもつて呼び掛けた。(二月十五日)学生は二月二十日に抗議の市中デモの実施を市警当局に届け出た。父兄有志、西村教授の斡旋(二月十六日)もあり話し合いが煮つまつたところで、父兄有志立会いで学生代表と学生部長との交渉に入り、二、三の疑義を質したあと学生は処分を受け入れ、今までの一切の關係掲示を撤去、市中デモ中止、説明会の中止を申し合わせ漸く解決を見たのである。

回答文書参照

回答一、十月十六日付

回答二、十一月十四日付

回答三、一月二十日付

二 反省と所見

(1) 学生会幹部の諸君に対して

学生会幹部が今次学生運動の渦中であつて自ら体得したものの、あるいは冷静になつて反省して得たものは少くないと思うが、誤つた敗北感に打ちのめされないで欲しいと思う。正しいと信ずることはどこまでも堂々と主張すべきだ。しかし正しい目的ならば正しい方法手段によつてその目的を達成して欲しいと思う。「自分達が正しかったけれども権力の弾圧の下に敗れた」と考えたり、宣伝したりすることは誤りであると思う。

私はむしろ学生会幹部が一般学生の前に敗れたと考えるべきだと思う。一般学生が何故ついて行かなかつたか？ 学校の事務的大まかさに乗じて揚げ足とりと形式論理一点張り、ヒューマンイズムに則つた筋金が入つていなかつたのではないか。「真に困つている学生のためにやつてゐるのではなくて、学校当局を権力機関と規定し、不信感を裏付けとした階級意識の昂揚と自己組織の拡大

をはかる手段として、寄付金問題を取り上げたのではないか」といつた半ば無意識的な疑惑があつたのではないか。若し余力のある父兄への二口以上の寄付の呼び掛けや奨学資金の増大などの具体的な方策があれば大義名分も立ち、最後まで支持を失わなかつたであらう。少なくとも私は個人として全く敬意を払ふ気にはなれなかつた。

(2) 一般学生に対して

この種学生運動に対して各自が自主的な意見を持ちながら組織に対して立ち向う勇気が欠けてはいないだろうか、行き過ぎが繰り返えされてからやつと二、三の批判(揭示)が現われたにすぎない。「こんなに騒いで結局自分達に何かプラスされたのか」といつたことがつぶやかれただけであつた。アジテーションやプロパガンダに弱いのは一般市民と変らない。もつとインテリとして現象面に流されない、しっかりと批判力をもつて欲しいと思う。この経験を反省して他の大学に例のない「デイスカッション専用掲示板」も出来たことであるから、大いに主張し、反論をし、フェアに討論を進めて、あらゆる独善を互いに排しながら前進して欲しいと切望する次第である。

(3) 学校当局としての反省

(A) 四年前に本学は恥ずべき学生を生み出した。われわれはその二人の学生だけを責めないで、全教職員が学生補導全般の在り方を反省して四年に亘って計画を実施してきた、その第四年目に今回の事故が起つたのである。これに意味を見出したい。特定の学生の政治理念や外部組織の操作等にのみ責めを帰するような安易な責任逃れをすべきではないと考える。政治意識の高い学生に共通するものはあらゆる権力に対する不信感であろう。キリスト教主義大学としては懐柔や迎合による事勿れ主義に墮することなく、根気強い話し合いを通じて、知性に訴え、深く心情に触れながら、不信感をとり除く努力を回避すべきではないと思う。

今回の処分は学園の秩序を保つ上から真にやむを得ない処置であつたことは、教授会における無記名投票の数字によく現われているが、これを最終的結論とは考えていない。教育の一ステップであるに過ぎないと思う。

(B) 学生の中には戦後の家庭教育、学校教育の欠陥のせい、忍耐力が欠けていて、自由は主張するが裏付けである責任を負わされると不満を覚え、素質と環境によつて三つの横道に外れる者がでてくる。「虚無」か、「享

楽」か、「革命」かの道である。「虚無」はノイローゼや自殺へと進んで行く。(ただし昨年は一人もいない)「享楽」は金銭に心を奪われて破廉恥罪への誘惑をうける。

「革命」的情熱の赴くところ力の信奉者となり、エリート意識過剰から不法行為への誘惑を受ける。過去において第一と第二の脇道に外れた者の数は発表する勇氣はない。今回の問題は第三の脇道にふみ外した例が、いささか現象面に現われたにすぎないと見ている。既に教室の内で、グループの集会に、キャンプに、サークル活動に先生方が学生との接触を通じて、重荷をいとわず指導されてきたことに敬意を払うべきであつて不足をかこつものではない。ただこの補導における協力と組織化の面でもっと前向きの姿勢がないものかと祈りに似た願いを持つてゐる。

(C) 本学の事務機構も大世帯になるとともに、脱皮しなければならぬ段階にきているのではないか。個人の熱意も必要だがやはり組織でやる体制に切り換える時期にきているのではないか。今度の問題は具体的には事務処理の欠陥をつかれたにすぎないのであるからだ。一時を糊塗することなく、便宜主義を成算し、知性の批判に耐えるようにして欲しいと思う。単に对学生の問題では

はないからである。对学生の利害に関する件については学生部長の承認事項となったことも一つの前進だと思ふ。

三 結び

今度の事故は誠に遺憾な出来事で、同窓の方々にご心配をかけたことに直接の責任者として申しわけないと思つていきます。経過を簡単に述べ所見を率直に述べさせていただきます。このような問題をよい反省の糧として、母校が形の上だけではなしに創立者の意図したヴィジョンに沿う発展を祈りながら拙ない筆をとらせていただいた次第であります。何かとご助言を賜われれば幸甚と存じます。

なお、本学のようなキリスト教大学における学生の行き方が甚だしく不可解に覚えられる方は、定評あるICUや関西学院大学などに昨年どのような学生運動が起こり、どのように指導されたかをお調べになればご参考になることと存じます。

(『東北学院時報』一九七号 昭和三十九年五月十五日)

三〇九 杉山元治郎の追悼式

(昭和三十九年十月三十一日)

杉山元治郎先生追悼式

元東北学院理事長杉山元治郎先生の追悼式が昭和三十九年十月三十一日午後二時から、本学大学礼拝堂で、大学グリークラブの連中が、故人の愛唱讃美歌一四三番を歌う中で執り行なわれた。

仙台広瀬河畔教会名誉牧師秋保孝次師の「杉山元治郎先生を追悼して」という説教と、月浦校長の故人略歴、また小田院長の式辞が読みあげられた。式辞の概要は次のようであった。

「先生は仏教信仰者のお宅に生れたにもかかわらず、キリスト教に入信なされ福音伝道の志をたてられた。友人賀川豊彦氏から東北学院の学風をきき及び、明治三十八年来仙し、翌年神学部別科に入学なさつたのである。ここに学院と杉山先生の結合が生れたといわれる。

その後幾多の苦勞の末、農民階層に福音を伝道することを目的とされ、一方農民福音学校のかたわら伝道活動に携わられた。のち、独学で歯科医検定試験に合格され

た。

先生は、早くから農民運動、無産政党を手がけられ、さらに、政党人として衆議院議員に当選すること前後九回、そのうち昭和三十年から同三十三年まで衆議院副議長に推され、社会党では長老的人格者として「ミニエール僧正」の別名で尊敬された。

母校のためには昭和十九年以降前後十六年、ご永眠に至るまで理事または理事長として経営の重任を担われた。昨年には、ベルリンで開かれたアカデミー指導者会議に国賓として招かれ、帰国後日本クリスチャン・アカデミー創設に力を尽くされ、その功勞により駐日西独大使を通じて大功勞十字星章を贈られた。

政治家として、農民運動の先駆けとして、はたまた、真摯なキリスト教徒としての杉山先生のご遺徳を偲んで、み霊の永久のご平安とご遺族のうえにご恩寵の豊かにありますように祈りあげます。」

なお新任理事長として同窓会東京支部長山根篤先生があたりられることになった。

（『東北学院時報』一九九号 昭和四十年二月五日）

三一〇 法学部設置認可書

（昭和四十年一月二十五日）

校大第二八一号

昭和四十年一月二十五日

学校法人 東北学院理事長殿

文部省大学学術局長 杉江 清 印

大学の学部設置について（通知）

昭和三十九年九月二十九日付けで申請の東北学院大学法学部の設置は、別紙のとおり認可になりましたが、下記の事項に留意のうえ、その実施に遺漏のないように願います。

なお、今後、学科の設置、学生定員の変更等を行なう場合には、昭和三十六年八月二十一日付け文大庶第四三一号および昭和三十六年九月一日付け文大第五三五号通達により、届出または協議を行なってください。

記

一、施設、設備、教員組織等に関する年次計画の履行状況については、完成にいたるまで、毎年度、別途通知により、報告書を提出すること。

なお、上記年次計画に重大な変更を加えようとするときは、あらかじめ、文部大臣の承認を受けなければならない。

二、南六軒丁地区の敷地が狭いので、専門課程の教育を多賀城地区において実施することが望ましい。

三、公法関係の専門図書を増強すること。

四、学術雑誌は、バックナンバーを系統的に増強すること。

校大第二八一号

学校法人 東北学院

昭和三十九年九月二十九日付けで申請の東北学院大学法学部の設置を、下記のように認可する。

ついでに、施設、設備、教員組織等に関する年次計画は、申請どおり確実に履行されたい。

昭和四十年一月二十五日

文部大臣 愛知 揆一 印

記

一、名 称 東北学院大学法学部

二、位 置 宮城県仙台市南六軒丁一番地

三、学部学科

入学定員 収容定員

法学部法律学科 一五〇人 六〇〇人

四、修業年限 四年

五、開設年次 第一年次

六、開設時期 昭和四十年四月一日

三一一 山根篤の理事長就任

(昭和四十年二月五日)

新理事長紹介

杉山元治郎先生の後をついで、わが東北学院の理事長になられました、山根篤先生をお紹介いたします。

山根篤先生は、大正二年東北学院普通科をトップで卒業、その後第二高等学校に入学、ここで弁論部をリードされた。当時氏の弁論の面での令名は高く、二高卒業後東京帝国大学法学部に入学した。東大を優秀な成績で卒業されてから、永く岩田宙造法律事務所に入護士として参加した。山根先生は、その前年に卒業された故鈴木義男先生と親交あつく、ともに法曹界にあって名をとどろかした。

母校東北学院に対する山根先生の奉仕は大きいものがあり、理事や、同窓会の東京支部長の責をはたされた。次のような理事長就任の挨拶が山根先生より届いておりますから、ご紹介いたします。

「本学院理事長杉山元治郎先生が十月十一日急逝されました後を受けて、私に理事長になるようにとの、お話がありました。凡俗非才である私は、人格識見高邁であられた杉山先生の後任として責を全うし得ないことを深く恐れるばかりでなく、健康上のこともあり、固く、辞退いたしましたのでありますが、小田先生、月浦先生より特に就任についてご説得があり、長年にわたって、名理事長として母校のため献身的努力を惜まれなかつた鈴木義男先生は私の一年先輩であつたこと、杉山先生が急逝されたこと、それに天国にいますシュネーダー先生は昨日も今日も母校の上を配慮せられていられるであろうことを想い、微力ながら就任することといたしました次第であります。私は昨年鈴木先生の後を受けて同窓会東京支部長となつた関係で、理事の一員に列したのでありますが、未だ日も浅く、母校の経営について十分の知識と理解とを持つているといひ得ません。しかしながら、当面の事業として、現在推進されている創立七十五周年記念事業

は最も重要でありますので、幸い理事の方々はつねづね畏敬している先輩、同窓でありますから、小田、月浦両先生を始め諸先生と相協力し、同窓各位のご支援を得て、その完遂を期したい所存であります。

茲に同窓各位の特別のご支援とご鞭撻とを重ねてお願い申上げて、就任のご挨拶といたします。」

（『東北学院時報』一九九号 昭和四十年二月五日）

三二二 星宮啓「最近の学生運動について」

（昭和四十二年一月二十八日）

最近の学生運動について

学生部長 星宮 啓

昨年は、春には早大で、年末には明大で、学費値上げに反対して授業放棄や施設占拠などを派手に行なつたため、世間の注目を集めました。が、授業料値上、寮あるいは学生会館の管理問題等について紛争を起した大学は五十有余に達しました。わが学院の父兄や同窓の方々にも、その懸念があらうかと思うので、最近の学生運動の傾向

について参考までに私見を述べてみたいと筆をとりました。

× × ×

はじめに何故このように学生運動が激しい形で続発しているかを考えてみますと、次の諸点があげられるのではないかと思えます。

第一にこの数年來、大学進学者が急激に増加してまいりましたので、各大学とも態勢を整えて受入れたものの、施設の不備や教師との接触が手薄となり、その結果マイクの講義に接しますと多量生産ムードとして受取り、不満に思う学生がでてまいります。大学生としてのエリート意識や期待を多く持つ者ほどその度合いも強いわけですが、このような不満は多かれ少なかれ一般学生に広く潜在しているものと思われまます。

第二には昨年マスコミが大学問題を一斉に取上げました、種々の問題点が指摘されました。特に私立の大学においては用地買収や施設拡充をもって、利潤を追求する一般企業的意図であるかのような印象を与えたので、この面からの潜在的不信感も見逃がし得ない点だと思えます。

第三に学生の根強い要求として、自治権の拡大があり

ます。これは自主性を尊重する新教育制度の成果とも見られますが、「学問尊重の故に学内において享ける自由あるいは自治」には当然の裏付けである。「学問尊重の場にふさわしい責任」のあることを指摘されるときに、これを「抑圧」と感じ、「抑圧は実力によっても払いのけるべきもの」と考える学生が漸次多くなりつつあることも見逃がし得ない点であると思えます。最も遺憾なことは、このような不信感に根ざして闘争態勢を整え、大衆の圧力によって会館管理や、学費値上等に関してある程度の成果をあげている大学が少くない事実なのであります。

第四には学生間の左翼全国組織として互いに反発する三つの組織の影響をあげることができまます。彼等はいち早く闘争目標を見つけだし、互いに主動権を奪い合い、よしや暴走して失敗に帰してもイデオロギー的同志の獲得という中間目的を達成することができると信じて、現にその成果をあげている実情であります。

学費値上げの場合の例でいえば、「独占資本のたくらむ産学協同路線を政府が文教政策として受入れ、私立大学がこれに協力して中堅労働者をつくりあげるため、大量入学を許し、施設拡充のため投資をなし、企業としての利潤を獲得するために学費値上をする。これは教育の機

会均等を破ることにもなる。よつて値上案の白紙撤回を要求する。このような論理で、不満と不信ムードの潜在する一般学生に対してアツピールするわけです。

第五に無視できないことは学生側の掲げる大義名分としての「当局の不信行為」と称するものであります。ちよつとした言動、一時のがれの口約束などが意外に大きな「名分」となる場合が少くないようであります。

× ×

一般学生運動の概要をこのように見てまいりますとき、本学の学生諸君といえどもかかる動向に無縁ではあり得ないわけです。本学におきましては、無謀な企てをする可能性のある者はごく一部の学生に限られますし、全学生から民主的に選ばれた代表の常任委員長も各委員もみな良識もあり、如何なる反対意見を抱いていても、すべて話し合つて解決しようとする熱意にあふれていきますから、学生がルールに沿うて民主的手続を踏み、学校当局もまた誠意をもつて処するならば、紛争はあり得ないと存じます。しかしながら、前に述べましたような不満と不信感が深く、かつ、広く浸透していることも否定できません。従つて一方的な宣伝の如何によつては誤解が深まり、無益なトラブルを惹起しないとも限りません

ので、私どもの考え方を申し述べ理解と協力とをお願いしたいと存じます。

先づ第一に改めて申すまでもないことですが、本学の理事会は利潤を得る仕組になつておりませんし、そのような人もいません。この明白な事実すら知られていないので誤解されるのです。利潤追求の企業としての認識が誤りであることを正さねばなりません。本学の施設拡充資金は大半は借入ですが、学生が入学時に納入する施設費のほか、母校を愛する同窓生各位の寄付金（一億数千万円）もあてられます。ただ、何といつても時価十数億にのぼる土地建物の大部分が、八十年にわたり米国信者より献げられた零細な献金の積み重ねられたものであることを忘れることはできません。（利子で換算すれば毎年一億余の援助を意味します。そのほか毎年の経常費も人的援助も一切受入れるだけです。）ただ「東北の地にキリスト教精神をもつて奉仕する人材を養成するため」に捧げられたものなのです。私どもはこの際このような聖なる期待に沿うているか否かを省みることが大切と存じます。

第二には学生の中には「目的を正しと信ずれば手段を選ばなくてもよい」と考えがちな者がいることで、かつ

て、東大で矢内原学長が「目的は手段を聖化しない」ことを強く訴えましたが、大学なのでそこから真に正しく良いことであるならば、必ず多数の同調者が得られる筈です。民主的ルールに則って正々堂々と事を運ぶことが学生らしい行き方といえましよう。ただし、学生の直感的心情は必ずしも論理的説得によつてのみでは解きほぐれ難い面もありますので、私どもが忍耐と情愛をもつて補う心構えも大切と存じております。

第三に教師側についてであります。学生との接触が問題である以上コンパ、ピクニック、グループ討論会、キャンプ等への参加など、あらゆる機会に学生との接触や話し合いを持つことが望まれる次第です。もつとも、効率的に工夫しませんと、学問の自由を時間の面から奪うことにもなりかねませんが、認識を新たにして協力態勢を整えることが肝要と存じます。

第四に学校当局においても、学生数に応じた憩いの場、部室、食堂、体育施設等の整備や既存施設の効果的活用をはかること、学費値上に見合った奨学資金、予算の増額等を真剣に取上げ実施すべきだと思ひます。

更に私学に共通した問題として、国家の財政援助、育英会奨学金の増額、私学学費負担の父兄への免税措置等

を強力に推し進めるべきだと思ひます。

以上を要約致しますと、学生の諸々の要望に関しては「民主的、かつ、公正な手続を守りながら、教師・学生間の人格的ふれ合いを重んずる」従来よりの基本方針を忠実に守りながら、着実に計画を立てて実施するよう最善をつくすことにほかなりません。

本学における来年度入学者の学費値上問題については、一月下旬予算案がきまり次第、教授会に諒承を得たのち、当局から学生に対して説明される由であります。誠意をもつて話し合うならば、必ずや円満に解決できることと信じて疑いません。

以上学生運動に関する私見を述べさせていただきます。協力をお願い申し上げる次第であります。

（『東北学院時報』二〇六号 昭和四十二年一月二十八日）

三二三 小田忠夫「学費改定に関する所信」

(昭和四十三年二月二十二日)

学費改定に関する所信

東北学院大学長 小田 忠夫

この度の学費改定問題に関する紛争について、皆様にご迷惑をおかけしては、まことに慚愧に堪えません。

今回の昭和四十三年度入学者の学費改定は、現時の大学教育情勢の中において、真に止むを得ない措置であつて、経営の局にある理事会において、十分検討を尽した結果に出たものであります。

東北学院の創立の理想は、人格教育を中心に行っている、伝統的に少数教育主義を堅持してまいりました。教育の理想には、今日といえども変りはありませんが、教育実施の方法においては、戦後の教育情勢は一変してまいりました。

その情勢の中に、本学院大学も六つの学部と三つの大学院をもつ総合大学の域に伸展して来たのであります。

しかし、戦後の大学生進学激増も、すでに、その頂点

に達し、やがては減少の傾向を迎る状況にあります。よつて本大学は、四十年程度かららもつぱら学園の内容の充実強化の段階に入る計画を立てたのであります。

その第一は、学問、研究の向上を図ること。すなわち、(イ)図書館等の研究施設の整備充実。(ロ)教育研究の指導者増員。(ハ)大学院研究科増設。(ニ)海外留学制度の強化。等であり、

その第二は、教職員厚生制度の改善。(イ)教職員給与の改善(人事院勧告に準じて)。(ロ)教職員職務担当の時間数の勘案、

その第三は、学生厚生施設の強化。(イ)給費制度の拡充、(ロ)セミナーハウスの増設、(ハ)学生食堂改善、(ニ)総合グラウンド建設、学生の休養・レクリエーションの場の整備等であります。

以上のような計画を向う三年間に完成し、マスプロ教育の欠陥を補ない、人格形成の教育が実践できるよう意図しているのであります。これがために今回の学費改定を立案したのであります。

現在、多くの大学においてこの種の紛争が起つていますが、いづれも共通した問題点をもち、しかも深刻なものを抱えているのでありますが、本大学の場合は、最も

低額であることも御諒解いただきたいのであります。

（『東北学院時報』二二〇号 昭和四十三年二月二十二日）

十一日限り廃止することは認可する。

昭和四十四年三月三十一日

文部大臣 坂田 道太 印

三一四 文経学部および同第二部廃止認可書

（昭和四十四年三月三十一日）

三一五 アーサイナス大学との国際教育交流協

定

（昭和五十七年六月二十五日）

校大第三四号

昭和四十四年三月三十一日

学校法人 東北学院理事長殿

東北学院大学・アーサイナス大学国際教育

交流協定

文部省大学学術局長 村山 松雄 印
大学の学部の廃止について（通知）

昭和四十四年三月八日付けで申請のあつた東北学院大
学文経学部および文経学部第二部の廃止は別紙のとおり
認可になりましたので通知します。

校大第三四号

学校法人 東北学院

昭和四十四年三月八日付けで申請のあつた東北学院大
学文経学部および文経学部第二部を昭和四十四年三月三

日本国仙台市の東北学院大学（以下TGUと称す）と
アメリカ合衆国ペンシルバニア州カレッジヴィルのアー
サイナス大学（以下アーサイナスと称す）とは、次に規
定する条項に基づきここに国際教育交流の協定を締結す
る。

1 この国際教育交流の基本的な目的は、アカデミック
な相互主義に基づき、両大学の相互の利益のために、
学生および教授の交流を推進するものである。

2 両大学の学生は、それぞれの大学における所定のプ
ログラムから日本研究およびアメリカ研究についての

学問的利益を受けることができる。

3 TGUとアーサイナスとは、それぞれの教育・研究の発展と向上のために、この国際教育交流を通して相互に協力する。

4 国際教育交流の諸計画の詳細については、両大学の相互の同意に基づいて定め、具体的に明確化する。

一九八二年六月二十五日

東北学院大学

学長 情野 鉄雄

アーサイナス大学

学長 リチャード・P・リクター

三二六 フランクリン・アンド・マーシャル大学

との国際教育交流協定

(昭和六十一年五月十五日)

東北学院大学・フランクリン アンド マー

シャル大学国際教育交流協定

日本国仙台市の東北学院大学（以下TGUと称す）と
アメリカ合衆国ペンシルヴェニア州ランキャスターのフ

ランクリン・アンド・マーシャル大学（以下F&Mと称す）とは、次に規定する条項に基づきここに国際教育交流の協定を締結する。

1 この国際教育交流の基本的な目的は、アカデミックな相互主義に基づき、両大学の相互の利益のために、教授および学生の交流を推進するものである。

2 F&Mの教授および学生は、TGUにおける所定のプログラム（日本研究講座）から学問的利益を受けることができる。

3 TGUとF&Mとは、それぞれの教育・研究の発展と向上のために、この国際教育交流を通して相互に協力する。

4 国際教育交流の諸計画の詳細については、両大学の相互の同意に基づいて別に定め、具体的に明確化する。

一九八六年五月十五日

東北学院大学

学長 情野 鉄雄

フランクリン・アンド・マーシャル大学

学長 ジェイムズ・L・パウウェル

第二章 多賀城キャンパス

三二七 小田忠夫「母校の現況と展望」

(昭和三十二年十二月八日)

母校の現況と展望

小田 忠夫

一九五七年を顧れば、第一にわが学院は五百余の大学卒業生と二百に近い高校生を世に送りました。彼らの中には在学中にクリスト教の信仰に入つた人々も少なくはありませんが、大多数は信者ではありませんでした。然しこれらの卒業生も総てはクリスト教精神に培かわれて、この日本の風土の中に香り高いイエスの教を散布していることの事実は確かに認めてよいことと思います。

新入生も大学、中、高とも多数の応募者から選ばれて入学した人々で現在学生、生徒の総数は六千名にほんなんとしています。

また今年各地の同窓会の集りも活潑に行われましたが、特に名古屋、横浜、旭川、八戸、会津若松、新潟、

釜石の七ヶ所に支部の復活又は新設を見たことは母校の基盤の強化をものがたるものとして御同慶にたえません。これにより戦後十二年目でやつと念願していた遠い各地の同窓諸先輩にお目にかかれたことは欣快この上もありません。

学園内の人事について見ますと今年はアメリカとの往来が頻繁に行われました。大学から二関、星宮、館岡の諸教授、赤城助教、吉川助手が相ついで渡米し、それぞれの領域で有益な研鑽を遂げることが出来ました。これ他に前年中から滞米中の清水、樋渡、須田の諸君を加えると九名の関係者が、ミツシヨン・ボードのあるアメリカの地をふんだわけであります。

加うるにアメリカ宣教師の先生方がウイリアムズ夫妻、ワイリック夫妻、ヘンリー夫妻の六人が新に加わりましたので、シツプル、セアル、アンケニーの先生方も大喜びです。これにより学園内の英語陣が一段と強化されることで実に頼もしい限りであります。

また、大学は今年で発足以来九年目にあたり、文部省から定められた設置条件の総てが充足出来たので、教員任用の自主性を認められることになりました。このことは今後大学の運営の上に大きなプラスとなることは疑い

ありません。

更に大学はこの機会に学生諸君待望の体育館の建設にとりかかりましたが、これが完成すれば来るべき七十五周年には記念式に参加の全員を一堂に容れることも可能となることと思えます。

学院の中核体である東二番丁のあの校舎は、市の道路拡張により愈々三十三年三月末までに、その三分の一を除去される運命に立ち至りました。これが対策として柳町よりに四階建八教室の新校舎が完成される予定で現に工事を急いでいます。故シユネーダー先生御努力の結晶である建物の一部が壊されることは何とも言いがたい苦痛を感じますが、これも市街地計画という地頭には勝てません。切りとられる建物の補償金の問題については同窓の諸君から特別の援助をうけたことは誠に感謝にたえません。

戦後の学園の内容整備についてはアメリカの御援助が極めて大きかったのは言うまでもありません。しかも尚、今年に至り今後の五ヶ年プランを出せとの御好意の表明がありましたので、私達はこの為のプランとして三十三年以降の計画を内外協力会の手を経て提出いたしました。一方また最近米軍の引揚に伴い多賀城キャンプの土

地払下の問題が起つたので、理事会の決議によりその払下の申入れを行っています。

何れ仙塩地帯の工業計画と相俟つて理工科系の学部の増設という方向にも進みたいと希望をかけている次第であります。

三年つづきの豊作の地帯における今年のクリスマスや新年のお祝は相変らず賑かに行われるでしょうが、私達クリスト教学園にある者は例年の通り愛情と希望のうちに平和の聖子の誕生祭を祝いたいと思つています。

同窓の皆様の御家庭でもどうぞよきクリスマスを祝われますよう心から祈りあげます。

(『東北学院時報』一八二号 昭和三十三年二月八日)

三一八 多賀城校地の払下げ申請書

(昭和三十三年二月五日)

昭和三十三年二月五日

東北財務局長殿

仙台市南六軒丁一

学校法人 東北学院理事長

鈴木 義男 印

国有財産売却申請書

宮城県多賀城町（旧多賀城海軍工廠）所在の下記国有財産を売却願いたく関係書類を添付の上申請いたします

記

一、売却を受けようとする財産

所 在 宮城県多賀城町

旧口座名 多賀城海軍工廠（多賀城住宅地区）

区分、数量

土地 五〇、〇〇〇坪以上

二、売却希望価格

御指示通り（国有財産特別措置法第三条の規定に

よる減額）

三、売却を受けようとする理由

別紙の通り

四、売払代金の納入方法及び時期

当局の示す期間内の分割払とする

五、その他

添付書類

一、施設年次計画

二、資金計画

三、自己資金造成計画

四、外国資金による施設

五、多賀城旧海軍工廠（住宅地）利用計画配置図面

六、学校基準に基づく校地、運動場と現況

七、学校基準による所要面積

八、校地（園地、実習地）運動場の基準

九、東北学院高等学校生徒募集についての請願

一〇、短大制度改善について

一一、東北学院志願者入学者調

一二、東北学院学生、生徒数

一三、普通国有地（多賀城笠神）払下げ土地利用状況

一四、学校法人東北学院の現況

一五、学校教育法第一条により認可せられたる学校の証明書

一六、理事会決議録写

一七、学校法人東北学院寄附行為

一八、学校法人東北学院寄附行為施行規則

一九、東北学院中学校学則

二〇、東北学院高等学校学則

二一、東北学院大学短期大学部学則

二二、東北学院大学学則

二三、昭和三十三年度東北学院經常費収支予算書

二四、昭和三十一年度東北学院収支決算書

二五、学校法人東北学院昭和三十一年度事業報告書

旧多賀城海軍工廠(多賀城住宅地区)売却を

受けようとする理由

東北学院は明治十九年キリスト教主義の学校として発
足以来七十四年の歴史を有しその間幾多変遷を経たるも
現在中学校、高等学校、高等学校二部、大学と一聯の教
育体系を整え中学校九五九名、高等学校九〇五名、高等
学校二部五〇八名、短期大学は英文・経済・法科の三科
に一、二〇七名、大学は英文学科、経済学科の二学科に
二、六五三名、合計六、二二二名の学生、生徒を擁しこ
れに関与する専任の教職員は実に二二〇名に達する大学
園を形成するに至つたのであります。

中学校、高等学校、高等学校二部は東二番丁に四、七
三一坪の校地と延二、〇六三坪の校舎を有し、大学及び
短期大学は南六軒丁に九、八六九坪の校地と延四、〇一
九坪の校舎、研究室、図書館、体育館等あり殆ど空地な

き現状で、大学の運動場は幸い先年多賀城笠神に国有地
の売却をうけ、これを全面的に利用いたしています。

然し乍ら現状においても学校の基準に照らすとき(第
6号表参照)極めて狭隘であり、将来の発展に対応する施
設を講ずること不可能で少くとも五万坪以上の校地を必
要としこれを仙台附近に求めることは不可能でありま
す。

幸い今回多賀城海軍工廠返還せられたるにつきこの際
下記計画に基づく用地として五万坪以上の売却を受けた
のであります。

記

利用計画

一、第二高等学校新設 一三、五〇〇坪

二、中学校、高等学校運動場 一〇、〇〇〇坪

三、商・工高等学校新設 二九、二五〇坪

(将来短期大学改正せられる専門大学にせんとする)

四、大学教養部移転 一一、四〇〇坪

五、中学校、小学校、幼稚園敷地 一三、一三〇坪

(多賀城住宅地区が発展してこれが必要を生じたる
とき設置)

合 計 七七、二八〇坪

学校基準から算定したる場合七七、二八〇坪を要するも約五〇、〇〇〇坪以上あればこれを総合的に利用することが出来る。

なお理工科大学の新設いたしたきも相当多数の資金を要し短期間には設置困難であります。

理工系の人材養成については政府においても相当の援助を考究中であり又先般ミツシヨンボード議長ブランボ―博士の日本視察報告によると日本の現状においては理工科大学の育成に対しては相当の資金、設備の援助を要することを力説している点を考察するとき、これが時期到来も期待し得られこの場合東北、北海道のキリスト教主義学校においては本院がマークせられ多賀城地区周辺が東北開発、仙塩開発と併せ最も適当と思料せられるので一応前記施設を講じ置きたいのであります。

次に各施設毎の事由

一、第二高等学校新設

東北学院高等学校は現在東二番丁校舎に九〇〇余名の学生を収容しているが高等学校第一学年は東北学院中学校卒業者がそのまま進学するので他中学校からの入学の余地なく仙台市の中学校卒業者で高等学校に進

学出来ぬ者約三〇〇名と推定せられこれらの生徒は再び中学校に席を置くか大河原、岩沼等周辺の高等学校に入学して汽車通学をしている現状でこのため別紙の通り市内中学校長会から学級増加の請願あるも現在の校地では校舎の増築の余地なく多賀城に第二高等学校を新設して世の要望に即応いたしたい。

二、中学校、高等学校校運動場

戦前東二番丁の中学校は校地六、三八二坪に延八六八坪の校舎で約一、〇〇〇名の生徒を収容して経営していたが、戦後の学制改革によつて中学校及び高等学校に改組し現在中学校九五九名、高等学校九〇五名を収容して授業をしています。

然し乍ら終戦後の都市計画により校地六、三八二坪の中一、六五一坪が接収せられ現在、四、七三一坪に縮少し更に八六八坪の校舎も東二番丁道路拡張のため二七五坪が除去せられることになりました。校舎は生徒を収容するに足るよう五棟一、四〇七坪増築して現在延二、六〇三坪の校舎等を有し授業上支障なく運営しています。以上のような実情で運動場に使用出来る空地は僅かに一、八〇〇坪程度で学校基準に照らし余

りに狹隘で他に求める外ないが仙台市内にては不可能で多賀城海軍工廠地に一〇、〇〇〇坪程度を確保したい。

三、商工高等学校新設

商業高等学校建設については数年前から塩釜、多賀城地区から要望ありこれが設置計画中のところ諸種の事情で実現しかねていたが理工科系の人材養成の急務なるに鑑み、商・工併置の高等学校を設置いたしたい。

なお、目下短期大学制度の改革は政府において審議中で、特に技術系の短期大学は職業高等学校と連絡する二年又は三年の専門教育即ち五年又は六年の専門大学(仮称)にせられる見込みで、この際その前提としても設置しておきたい。

将来仙塩開発、東北開発の進行に伴い技術系の人材は必然的に要請せられるのでこの線に沿い早急に人材を養成いたしたい。

四、大学教養部移転

六軒丁の大学は、文経学部英文学科、経済学科の二学科に二、六五三名の学生を収容しているが、大学基

準に徴するに文科系は一、二〇〇名の学生に対し校舎(附属建物を除く)一、九〇〇坪の校舎を必要とし、現在建物三〇棟延三、三六三坪中直接校舎に使用している建坪は二、〇〇〇坪に過ぎず増築せんとしてもその余地なく、又現在の建物を高層にすることも不可能で大学の一年、二年を他に移転する以外ない。

五、中学校、小学校、幼稚園

仙塩開発に伴い多賀城地区が住宅地として発展する場合、必ず子弟の教育機関と関連してくるがこれは年次計画によらずその必要を生じたときに設置するため一応確保いたしたい。

施設年次計画

施設年次計画は次表の通りであるが、これが規模等は必要度により多少の変更は予想せられるも、概ねこの計画によつて実施する方針である。特に第二中学校、小学校、幼稚園等は住宅地の発展に順応するもので、又米國から理工科大学の援助ある場合等は更に計画を検討する場合も生ずることがある。

施設年次計画

区分 年次	施設	構造	坪	工費
三四年	第二高等学校新設 一学年定員 一五〇名 九学級収容 四五〇名	鉄筋コンクリート 二階建	五〇〇坪	二七、五〇〇、〇〇〇円
三五年 ～	商工高等学校新設 商業科一学年定員一〇〇名 六学級収容 三〇〇名 工業科一学年定員一五〇名 九学級収容 四五〇名 工業科諸施設	鉄筋コンクリート 二階建 木造平家(特種教室) 鉄筋コンクリート 二階建 木造平家(特種教室)	一八〇坪 一五〇坪 二七〇坪 六〇〇坪	四八、〇〇〇、〇〇〇円
三六年 ～	大学教養部移転	鉄筋コンクリート 三階建	一、三〇〇坪	七八、〇〇〇、〇〇〇円
四〇年	諸施設 第二中学校 一学年定員 一五〇名 九学級収容 四五〇名 小学校 一学年定員 八〇名 一、二学級収容四八〇名 幼稚園 二学級 八〇名	鉄筋コンクリート 二階建 鉄筋コンクリート 二階建 木造平家	五〇〇坪 五〇〇坪 一二〇坪	八、〇〇〇、〇〇〇円 二七、五〇〇、〇〇〇円 五、〇〇〇、〇〇〇円
計			四、一二〇坪	一三三、五〇〇、〇〇〇円

備考 当初三十四年に大学移転を計画したるも別表9の通り仙台市中学校校長会から高等学校学級増加の要望もありこれを第一に着し三十五年～四十年に大学移転と商工高等学校の新設を行う計画である。

資金計画

土地代金及び学校建築、施設費は一般経常費から分離して臨時費の特別会計をもつてこれを経理するもので、建築施設資金については米國ミツシヨン本部から所要経費の三分の二の援助を受け得られ三分の一は自己資金（主として新入学者よりの施設費寄附）を充当し一時資金は私学振興会及び七十七銀行の借入により実施する。

資金計画は次表の通り

なお、戦後本院において米國ミツシヨン本部から援助を受け施設したる建物二、四七二坪工費一、六、九〇五・五六八円に対し九七、三三六・八〇二円の援助金あり、戦後の復興と発展に多大の恩恵をうけたのであります。

理事会決議録写

一、期日、場所 昭和三十三年十二月二十日午後三時

於院長室

一、出席者 理事十二名中八名出席

出席 小平國雄、大石栄一、小田忠夫、

シツプル、阿部豊吉、五十嵐正躬、

月浦利雄、小山田正直

欠席 鈴木義男、杉山元治郎、橋本重郎、

ループライイト

理事長鈴木義男欠席につき小田忠夫議長となる。

一、附議事項

1、多賀城旧海軍工廠(多賀城住宅地)土地売払い申請について

議長 本件については先般の理事会において一応東北学院将来の施設計画に基いてその適否を調査することの諒解を得て調査いたしたところ該土地の将来の発展環境等適切なるにつき計画実施上五万坪以上の土地及び必要な物件の売払いについて東北財務局に申請いたしたい旨諮りたるに一同中学校、高等学校、大学共に校地狭隘なる現状で将来の施設実施上この際売払い申請を適当とし賛成 金額その他の条件等は常置理事会に一任することに可決 五時閉会

右理事会決議録の通り相違ないことを証明する。

昭和三十三年一月三十一日

学校法人東北学院理事長 鈴木 義男 印

(注・添付書類中二〇・十五・十七以下省略)

三一九 多賀城校地の構想計画

(昭和三十三年七月八日)

学院大多賀城に理科系大を設置

旧米軍住宅地を利用

財務局に払下げ申請出す

東北学院大は多賀城町に理科系の選科大学を設置する計画をたて、このほど多賀城町留ヶ谷の旧アメリカ軍住宅跡三万坪の払下げを東北財務局に申請した。同大は東北にミッシヨン系の理科大学がないのでかねてから理科大学の設置を計画していた。それがキリスト教学校教育同盟会と内外協力会から資金援助を得ることになり多賀城町に設置することを決めたもの。

予定地は仙石線多賀城駅から徒歩約五分の留ヶ谷にある旧アメリカ軍住宅地で、敷地五万坪の小高い丘。旧アメリカン・スクールや住宅がそのまま残され、電灯施設から給水施設まで完備している。同地は米軍から返還後、すでに国家公務員合宿舎、陸上自衛隊単独宿舎、多賀城町役場その他に払下げられているが、同大が希望して

いる地帯には競願者はなく払下げには有利な条件にある。このため町当局でも、「ほぼ学院大に払下げられることは間違いない」とみており、すでに正門前の地帯ではその実現に備えて地代も値上りをみせているという。これが実現すれば多賀城町は大代旧海軍工廠の工場地帯のほか、新しく大学をもつことになり、工場と大学の町として大いに発展できると地元では大いに期待している。

▽小田学長の話〓予算は完成までに五億円ぐらいかかるが、すでに地代として十万ドルの援助を得たので払下げを申請した。理科系大学のほか、中、高校と将来は大学ジュニア課程の分校にも使いたい構想だ。

▽東北財務局林原管財部長の話〓仙塩総合開発の面からも、工場誘致ばかりでなく、大学設置の目的は理想的だ。計画を検討したうえ、国有財産審議会東北部会にかける予定だ。

▽賀川町長の話〓ほかに競願者がいないというので学院大に払下げられることは間違いないだろう。町としてもいまから受入れ要領を進めるつもりだ。

(『河北新報』 昭和三十三年七月八日)

三二〇 小田忠夫「学院教育の現実と希望」

(昭和三十五年五月七日)

学院教育の現実と希望

小田 忠夫

宣教二世紀に入る一九六〇年は東北学院にとつては創立七十四周年にあたつています。この年われらは多年望んでいた校地拡張予定地多賀城の米軍キャンプ跡の五万坪の払下がほぼ確定したことは何としても喜びにたえない。現在の旧市内にある敷地は大学にとつても高中校にとつても充分ではない。といつて私立は経営上の立場から市外への移転は困難とされている。にも拘らず現状をもつて満足されないのととりあえず仙塩地区の将来の発展を考えて白羽の矢をこの地に立てた所おかたの好意によつて確定を見たことは感謝にたえない。

キリスト教精神にたつ総合学園をつくることは夢のように思われるかもしれないが、キリスト教学校教育同盟の会合において東北でも理科系学部をつくつてはとの要望があり、東北学院の使命としてそんなことも考える段階ではあるまいか。

周知の様に現代は電子工業、原子力産業、石油化学を中心とする第二次の技術革命が進められている。それは十八世紀に行われた第一次の技術革命が社会に及ぼした影響同様否それ以上の問題をふくんでいる。

機械が人間の手に代つた変化が十八世紀のそれとすると、現在の変化は機械が人間の頭脳にかわらんとするものの如くである。人間の肉体労働の比率が減じて、神経を使う割合が増加してくる。労働時間は減じて、その疲労度は必ずしも弱くはならない。このことは職場における労働の内部構造の変化をもたらし、現在のような労働問題は進行中の技術革命の受けとり方いかんに関連することはというまでもない。昔は雇主は使用人をかえることは出来てもその人の職をかえることは出来なかつた。

ところが今は生産過程に熟練工の必要がなくなつたので中年の工員でも途中からその職や技術を新しく学ばねばならなくなつた。工員の個性が失せて何人ともとりかえうることになつた。工員は従つて雇主との関係よりも労働組合の一員としての意識だけで生きられるようになった。

こんな職場における変化は必然に労務管理の重要さと、更に産業調査委員の必要度を大いに高めざるを得な

い。産業の高度化したアメリカはイギリスよりも、イギリスは更に日本よりも多くの管理、調査、経営の要員に対する需要が多いのである。日本は労働問題についてヨーロッパの十九世紀的段階との批評をきくのはけだし産業発展段階のおくれを物語るものであろう。

産業界の変化に伴いその職員の教育もまた単純ではなくなつた。戦後における学制改革は一般教養の豊かな専門的教育をうけた人材の育成が眼目である。敗戦後のあわただしい改革であつたためか新制は実施以来十年もへて尚お充分に目的は達せられていないとの評をうけている。文部省は今その再検討をはかつていくようだが、不完全な部分を除去して完成にもつて行くことこそ大切で、その他のことに余りにせつちかな改革は考えものである。何れにせよ技術の革新に伴う職場内部の変化は所謂ヒューマン・リレーションの確立を最も大事な仕事としている。こんな仕事に携る管理職たる大学出身者はいうまでもなく第一にヒウマニズムの精神豊かな人材でなければならぬ。その上に神と人とに愛せられる信仰の持ち主であれば更に好ましい人材といえるであろう。大学は一般教養豊かな専門家を教育する為の場としてまだまだ改善の方向に進まねばならぬことはいうまでもない

が、単純な技術家丈を造る方向にむけられてはならない人間の豊かな人材こそ必要なのだ。その意味でキリスト教系大学に理科系、技術系の学部の増設は誠に願わしいことである。然しその為には莫大な資金と人材を要することはいうまでもあるまい。その上にわれらは現にある学園丈でもなすべき改革が沢山残つている。その意味で夢は持ちながらも、現実を無視しては危険である。ともあれ土地の入手を機に総合学園への理想実現の為に、つと具体的な計画をたてる時期ではあるまいか。

（『東北学院時報』一八七号 昭和三十五年五月七日）

三二一 小田忠夫 「年末年始に際して」

（昭和三十六年十二月十日）

年末年始に際して

小田 忠夫

謹んで聖子の御降誕を祝ひ、神の栄光と御経綸が地の果にまで及び真の平和が実現されるよう心から祈ります。

今年は創立七十五周年の記念として、多くの企画がなされましたが、とりわけ同窓の有志諸君によつてなされた老ゲルハード先生の御招待計画が予期以上の成果と感謝をもつて終つたことは、誠に御同慶の至りに存じます。その上先生からは図書資金として若干のドルの御寄付をうけアメリカのボードに預けられてあり、主として英文学関係の文献の購入にあてられる予定であります。なほその時の醸金の残額の寄付をうけチャイムを屋上に備えつけました。これは以前在米同窓の奇贈になつた鐘に代つて、毎朝の礼拝と夜間学部の始業時に敬虔な讚美歌を奏でるのでたいそう有難いことであります。かくて在米同窓寄贈の鐘は一応の使命を果して、蔵王のT・Gヒュツテに置かれて山岳人のために役立てられることになりました。在米の同窓各位の御厚意に対して改めて感謝申し上げます。数年間に亘り雨の日も風の日も屋上に上つて鐘をならしてくれて礼拝に奉仕されたY・M・C・Aの学生諸君にも心から御礼をいたしたいと思ひます。

次に記念事業として更に三つのことが理事会で議定されました。一はかねて懸案中の工学部を増設することであり、二は東二番丁に高校・中学生を含めて収容の出来

る礼拝堂の建設であります。三はもし可能ならば東北学院高校榴岡分校の独立化がこれであります。

工学部の増設については目下文部省へ認可申請中であり、もし実現すれば一九六二年四月より開学の運びにもつてゆきたいと思ひます。このための財源の一部を同窓の協力で仰げたらとの希望をもつています。今のところ高中礼拝堂をも含めて一億位を二万有余の同窓並に父兄の協力資金によつて実現したい所存であります。何れ正式には同窓会・父兄会の役員会で相談がなされる筈であります。榴岡分校は開設以来ようやく三年目で、明一九六二年三月に第一回の卒業生を出す予定であります故、この機会に独立校として発足したい希望で、日夜教職員の祈りと努力がつづけられています。

キリスト教学園に自然科学系学部を増設する理由は色々ありますが、日本の建設と発展にキリスト教信仰に基づく立派な技術人の育成を第一に念願としています。これによつて更に自然科学系の教員の養成と東北という低開発地域にふさわしい技術者を育成することであります。何とぞ、けわしい前途を踏みこえて進むためにも皆様の御加禱を祈り上げます。

終りに戦前私達は柔剣道のために野間氏の寄付によつて建てられた立派な道場をもつており、これによつて名実ともに東北におけるスポーツ界をリードして来たことは周知の通りであります。戦後この道場は大学の自然科学研究室に改装されたために、新たな道場の再建築が望まれていましたが、今年やつとその一部が柔道場として実現され、十月二十九日先輩諸氏を迎えて、道場開きを行いました。

矢張り戦前の野間道場の趣意を継承して「野間清治記念東北学院大学道場」と命名しました。これにつづいて第二期工事として剣道場を建設して名実ともに野間道場再現を図るつもりであります。

なお、最近の特報の一つは去る十一月七日、月浦利雄中高校長は多年教育に尽したる功績により文部大臣の表彰をうけられたことであります。本院就任三十六年間の顕著な功労にむくいられたものであり、本学院にとつての名誉として御同慶の至りであります。

わが同窓諸賢の間から近ごろ、大臣賞、各種褒章の受章者が続々とあらわれて来たことは、母校建学精神と、これによる同窓生の社会的貢献の実証として、慶祝に堪えない所であります。

最後に敬愛する同窓諸兄弟にはご平安のうちに旧年を送り、希望ある新年を迎えられるようお祈りいたします。

(『東北学院時報』一九一号 昭和三十六年十二月十日)

三三二 工学部増設認可書

(昭和三十七年二月十七日)

校大第五七号

昭和三十七年二月十七日

学校法人 東北学院理事長殿

文部省大学学術局長 小林 行雄 印

大学学部の増設について(通知)

昭和三十六年九月三十日付けで申請のあつた東北学院大学学部増設のことは、別紙のとおり認可になりましたが、下記の事項に留意の上その実施に遺漏のないよう願います。

記

一、建築中の建物は予定計画どおり完成すること。

二、図書、學術雜誌および機械器具類は計画どおり増強整備すること。

校大第五七号

学校法人 東北学院

昭和三十六年九月三十日付けで申請のあつた東北学院
大学学部増設のことは、下記のとおり認可します。

昭和三十七年二月十七日

文部大臣 荒木萬壽夫 印

記

一、増設学部

工学部

機械工学科

電気工学科

応用物理学科

二、位 置

三、修業年限

四、開設年次

五、開設時期

入学定員 総定員

五〇人 二〇〇人

五〇人 二〇〇人

六〇人 二四〇人

四年

第一次

昭和三十七年度

三三三 工学部新設趣意書

(昭和三十七年二月)

東北学院大学工学部新設趣意書

学部学科 (昭和三十七年四月新設)

東北学院大学工学部

機械工学科

電気工学科

校 地

宮城県宮城郡多賀城町留ヶ谷 (三三三、七〇七坪)

(仙台駅から国電二十分・多賀城駅から徒歩五分)

校 舎

鉄筋コンクリート三階建一部一階建

延一、三〇〇坪

木造モルタル平家 (教室、実験室)

木造平家 (実習室)

第二期工事鉄筋コンクリート三階建予定

四〇〇坪

一、〇〇〇坪
東北学院は明治十九年押川方義、ウイリアム・イー・

ホーイ両氏によつて創立され昨年創立七十五周年を迎え、これが記念事業として本年四月工学部を新設発足することにになりました。創立以来幾多時代の変遷によつて種々困難に遭遇しましたが先駆者によつて培われた基督教主義に基く人格教育の伝統を正しく継承して今日に至つてます。この間二万数千名の卒業生を輩出し社会の各層に顕著な活動をしています。戦後教育制度の改正によつて大学、高等学校、中学校と一連の教育体系を整え現在在学生、生徒五千数百名を抱擁して東北地方における私学として重きをなしています。しかしながら戦争末期に一時工業専門学校を設置しましたが、戦後文科系に転換したため現在大学は英文、経済の二学科の文科系のみであり今日、日本の現状から科学技術者の養成が急務とされ、特に東北地方は着々開発計画が進められている時に私立の理工系大学がなく又国立理工系大学の卒業者は殆んど中央に就職して地元に残留する者が皆無の状況であります。

この際本学において工学部を新設して基督教の精神を基盤として思想的に穩健な技術者を養成することは東北地方の工業振興に寄与すること多く、又現下の情勢に則応するものと信ずるものであります。なお、本学は米國

伝道局の援助によつて多数の米國人教師が派遣されておるため実社会に出て役立つ英語教育にも一層の努力をいたしたいと存じます。

工学部新設の最も困難なことは優秀な教員組織であります。幸い東北大学の全面的支援と協力を得て充実した教授陣容を得たことは誠に喜びとするところであります。

設備に関しては大学完成時、昭和四十年までに年次計画によつて整備する方針であります。

なお、校地は多賀城所在國有地の払下げをうけ目下校舎等建築中ではありますが、多賀城は仙台塩釜間の国道筋に沿い国電仙石線の多賀城駅があり仙台から約二十分極めて交通の便に恵まれた地であります。又この附近一帯は工場誘致帯で既に日立、ソニー、東北電機製造、福岡製紙、多賀城製鋼、東洋刃物、仙台鑄工等十数社建設されており、今後益々発展途上にあり、又隣接地塩釜には東北電力火力発電所、その他工業系の会社多く学生の実験、実習に至便、又相互技術研究提携を行う等、所謂産学協同の線に沿い、実際に技術を体得する特色ある大学にいたしたく念願するものであります。

更に将来建設工学科、工業経営学科等社会の要請に

じこれを増設し、地方発展に貢献いたしたく存じます。

なお、本校地は戦後駐留軍が住宅地として使用し、後に施設等そのまゝ返還されたもので、これ等の住宅は現在公務員、自衛隊、多賀城附近の会社の住宅となり、戸数二百余戸、又附近には町役場、農業協同組合等あり、町の中心をなして民家五百余戸存しています。

地元からの幼稚園設置の強い要望に応え、本年四月から町役場向い園地七〇〇坪、園舎一五八坪、八十名の園児を収容して基督教の精神に基いて幼児を保育し適当な環境を与え、その心身の発達を助成しようとするものがあります。

〔注・昭和三十七年二月〕

三三四 小田忠夫「年末年始の所感」

(昭和三十七年十二月八日)

年末年始の所感

小田 忠夫

一九六二年のクリスマスを平安のうちに迎え得ましたことは、ご同慶に堪えません。

キユーバをめぐる米ソの対立は時代おくれな強国意識が、いかに人類社会に迷惑と危険を与えるものであるかを如実に示したものであるといえましょう。

「彼はもろもろの国の間にさばきを行ない、多くの民のために、仲裁にたたれる。こうして彼らはその剣を打ちかえて鋤として、その槍を打ちかえて鎌とし、国は国にむかつて剣をあげず、彼らはもはや戦のことを学ばない」という預言者イザヤの言葉が、一日も早く地上に実現されるよう祈りつづけますよう。

さて、母校東北学院の一年の歩みを顧みて最も大きな力点となつたものは申すまでもなく創立七十五周年記念事業計画の遂行でありました。これは東北学院としては、かつてなかつたほどの大規模のものであり、本学院百年の計にとり極めて重要な発展契機を意味するものであることは申すまでもなく、従つて所要資金の調達には、全学院の総力をあげて当らねばならないので、同窓の諸兄には是非とも一大協力をお願い申し上げます。

その中核的事業である工学部はすでにご承知のように第一年度の学生を容れて、授業を開始しております。学科は機械工学科(定員五十名)電気工学科(定員五十名)応用物理学科(定員六十名)であります。なお学院伝統

の精神教育を重んじ、基督教学のため二名の新任講師を配しております。校地全面積は約三万四千坪、既設木造建築物約千四百坪に改修を施して開学しましたが、新三千三百坪の鉄筋コンクリート造の校舎がこの程落成し、新校舎使用の日も近づいています。

初年度は、官庁方面の認可手続等にひまどつて、でだしが立ちおくれた憾みがあつたので、二年目のためには今から学生募集計画をすすめ、地方受験地も新たに押川先生以来のゆかりの地である新潟にも設ける準備をすすめ、同地方の同窓生の後援をお願いしています。

今年は財界不況の影響をうけてどこでも卒業生の就職がにぶつている状況ではありますが、本学の場合は幸いにも先輩諸兄の援助をうけ、その後をつぐにふさわしい後輩が続々と一流企業に進出しているので頼もしい限りで、就職担当面では更に一段の努力を払っています。

つぎに、人事面の変化では、故シユネーダー先生の第二番目の令嬢であられるミセス・アンケニーが停年に達せられたので、アメリカに帰国されたことがあります。すなわちシユネーダー先生の血縁の方が仙台にいなくなつたわけで何とも名残おしいことでありました。ご本人も、生れ故郷の仙台を去ることは、忍び得ない愛着をお

感じのようでありましたが、幸いにも故アンケニー先生の令弟夫妻が、わざわざアメリカからお迎えに来られたので、その親切に励まされ、宮中からは勲五等の瑞宝章をいただいて、元気で横浜阜頭から発つて行かれました。その他、ウイリアムス宣教師夫妻も、過去五年間の宣教活動のあとの二年間を、母国休養のため帰米されました。世界宣教の一翼として重要地である日本の伝道に尽されたこれらの多くの宣教師の方々の上に、ご恩寵の限りなくありますようお願いいたします。

終りに昨年ご来日のミス・ゲルハード先生は帰国後も元気でおられました所、ごく最近入院手術をうけたとの報に接し、一時案じられました。再びご健康を回復し元気に立ち返られたので、同窓の皆様にくれぐれも宜しくとのことでありました。

終りに皆様、心身とも健かにてよき新年を迎えられるよう心からお祈りいたします。

『東北学院時報』一九三三号 昭和三十七年十一月八日

三二五 隣接国有地の取得

(昭和五十五年六月十二日)

多賀城校地に隣接国有地払い下げ

工学部体育館・図書館・礼拝堂建設に向けて

ゴースイン

このほど、長年の懸案であつた多賀城市都市計画に伴う多賀城キャンパスの換地問題が解決、隣接する国有地が本学院に払い下げられた。これにより、工学部待望の体育館、図書館、礼拝堂の建設が順次具体化されることになる。

工学部は、昭和三十七年に多賀城市に設置されて以来、研究教育環境等の充実と整備が続けられ、着実に成長、発展を遂げてきた。しかし、研究教育条件のより一層の充実のため、体育館、図書館、礼拝堂建設という大きな課題が残されていたが、昭和四十一年に建設省から告示された「多賀城市都市計画街路高崎大代線」に、工学部敷地内のプールを中心とする巾員一六メートルの道路等九、二二四平方メートルがこの事業区域に含まれてい

るため、本学の施設計画の遂行上に大きな影響を受けていた。

このため本学は、多賀城市の都市計画事業への協力要請に対して代替用地を条件とし、東北財務局長宛に工学部校地に隣接する国有地の払い下げを要望してきた。五十四年十一月二十九日、東北財務局長の諮問を受けた国有財産東北地方審議会は、用地処分を適当とする答申を出し、本学への払い下げが決定した。今年の五月十七日に大蔵大臣宛に「普通財産売払申請書」を提出して、六月十二日に国有財産売買契約を締結した。払い下げられた国有地は工学部一、二号館の西側に位置する一角で、一三、五七五・九九平方メートルの広さを有する。

新しい校地の取得に伴い、本学では、売払いの条件として申請書に添付した事業計画及び利用計画に定める期日までに工事を完了して使用しなければならぬ。指定期日は、体育館が五十六年十月三十一日、図書館が五十七年十一月三十日、礼拝堂は五十八年十一月三十日となっている。

本学院では、これらの建物は、工学部の研究教育に欠くことのできないものであり、学生、教職員がこぞって待ち望んできたものだけに、この大事業の完遂を目ざし

全力を傾けており、体育館については九月中に着工の予定である。

（『東北学院時報』三六五号 昭和五十五年七月十五日）

三二六 工学部体育館の献堂式

（昭和五十六年十月十七日）

端正なスポーツの殿堂

十七日に喜びの定礎式・献堂式

多賀城キャンパスの北西部に、昨年の十一月以来建設中だった工学部体育館が完成、十月十二日（月）に引渡しが行なわれた。秋の本格的なスポーツシーズンを迎え、待望の体育施設に学生たちの熱い期待が集まっている。

工学部の体育館建設は長年の懸案であった。昭和四十七年に建設省から告示された「多賀城市都市計画街路高崎大代線」に校地が包含されているため、工学部の施設計画遂行に大きな影響を受け、体育館建設は延び延びに

なっていた。昨年六月、ようやく換地問題が解決を見、道路に含まれる校地の代替地として、キャンパス北西部に隣接する国有地が本学に払い下げられ、同地内に体育館建設が進められていた。

完成した体育館は、土樋キャンパスのアセンブリー・ホールとほぼ同じ広さ、体育授業や体育の課外活動にはもとより、講演会場・集会場などとして多目的に使用できる。建物の構造は鉄骨鉄筋コンクリート造り二階建、延床面積二五八八・二二平方メートルを有す。一階は、バスケットボールコート二面を取れるアリーナ（二五六二平方メートル）、ステージ（二二九平方メートル）、トレーニング室、男・女ロッカー室（男子百人、女子三十人）、男女の洗面所とシャワー室、事務室、放送機械室、器具庫二室。二階は、教員室、測定室、研修室二室、ギャラリー兼観覧席となっている。

設計監理が株式会社山下設計仙台支社、請負は大木建設株式会社仙台支店、工事費は約四億六千三百万円。

体育館の定礎式ならびに献堂式は十七日（土）午前十一時から現地で行なわれる。同日午後一時からはこちらおとしとして、大学女子バレーボール界の名門である日本女子体育大学と筑波大学を招いての記念試合が行な

われる。

また、同時に行なわれていた払い下げ地全区域の整地等の開発工事は既に終了、工学部図書館・礼拝堂の建設へ向けての準備も整い、近く図書館建設工事に着手する予定になっている。

（『東北学院時報』三七八号 昭和五十六年十月十五日）

三二七 工学部図書館の献堂式

（昭和五十七年十一月十八日）

開館は来年五月の予定

工学部の研究教育の中核として

工学部キャンパス内に、昨年十一月から工事中であった図書館工学部分館が、このほど予定通り完成した。十一月十八日（木）に定礎式ならびに献堂式が執り行なわれる。開館は来年五月、工学部の研究教育の中核として、大きな期待をもってオープンが待たれている。

今日の大学図書館には、研究・教育の中核的機関として、情報資料の収集とその迅速な提供サービス、また利用しやすく落ちついた雰囲気の間覧施設などが必須の条件として要求されている。しかしこれまで工学部では、三号館の二階に図書室を設置した状態で推移し、近年の図書増加分については一階や別室に小分けして収蔵するなど、不備な面が多かったと言わざるをえない。土樋キャンパスのシュネーダー記念図書館とほぼ同じ広さのこの近代的な図書館工学部分館の完成によって、長年の懸案であった工学部図書館施設の問題は一挙に解決されることになる。新図書館は、これから建物の乾燥期間を経たあと、後期試験の終了を待って、図書資料等の移動搬入や諸準備が進められ、遅くとも来年五月一日には開館する予定になっている。

完成した図書館分館は、体育館の南隣りにあり、敷地面積一三、五七五平方メートル、地上二階の鉄筋コンクリート造り、延床面積二、七七六平方メートル。一階には、閲覧室（一〇八席）および書庫、第一研修室（一八席）、事務室および分館長室、複写室、作業室が配置され、新聞閲覧コーナーおよびラウンジ、休憩室のスペースも広く取っている。さらに電気室や機械室があり、男女手

洗所各二カ所のほか、工学部では初めての身障者用洗所も設けられた。二階は、閲覧室（一七三席）および書庫、教職員・院生のための閲覧室（三二席）、第二研修室（一八席）、視聴覚室（四二席）・視聴覚準備室、会議室（五〇席）、休憩コーナー、男女手洗所となっている。

図書館サービスの主要をなす閲覧室は、研究や勉学のために機能的な利用と快適な居住性が考慮されている。閲覧室および書庫は開架式で、一、二階が内階段で続いておりワンフロアの利便性がある。室内は重厚でシンブルな六人掛の閲覧机、ゆとりある空間、外部からふんだんに取り入れた自然光と照明の組み合わせなどにより、落ちついた雰囲気をかもし出している。書庫には約二〇万冊の収蔵が可能である（現在の蔵書数は約六万四千冊）。

設計監理が株式会社山下設計仙台支社、施工は大木建設株式会社仙台支店、工事費は約四億七千万円。

待望久しい図書館工学部分館は優れた設備内容をもってここに完成した。開館までに、その機能を発揮させるべく運営方法等が十分に検討されていく。今後の図書資料の整備・充実も含めて、工学部の研究・教育の向上に中核的な役割を担う図書館工学部分館への期待は大き

い。

（『東北学院時報』三九〇号 昭和五十七年十一月十五日）

三二八 工学部礼拝堂の献堂式

（昭和五十八年十月十四日）

一千人収容の重厚な姿

キャンパスの新しいシンボルに

工学部キャンパス内に千人収容の新礼拝堂がこのほど完成、十月十四日（金）に喜びの定礎式ならびに献堂式が執り行なわれた。工学部の毎朝の礼拝は十七日（月）から新しい礼拝堂で行なわれる。

定礎式は午前十一時から、本学院関係者および工事関係者が出席して行なわれた。引き続き献堂式が新礼拝堂で挙行され、本学聖歌隊により聖歌「いざ我ら主の御前に」が捧げられた。児玉省三理事長は式辞の中で、「礼拝堂は東北学院の教育の中核となる建物であります。新

礼拝堂の完成は東北学院建学の精神を新たに思い起こさせ、東北学院第二世紀に向かって、その常によつて立つべき教育の根本を指し示すものであります」と述べた。

工学部は設置以来早くも二十年余、この間、機械工学・電気工学・応用物理学・土木工学の四学科に大学院博士課程を設置するまでに至り、教育研究体制の整備と教育内容の充実が図られてきた。一方、施設面も逐次新営改修が進められてきたが、多賀城市の都市計画による街路がキャンパス内を横断する不運に遭遇し、工学部に必要欠くべからざる施設計画も順調に進行させることができなくなり止むをえず延期されてきた。本学はこの代替地を数年来強く要求した結果、昭和五十五年ようやく代替地として隣接する国有地を取得、待望していた一連の事業計画に着手することができた。一昨年に体育館、昨年は図書館が建設され、この新礼拝堂の完成により、工学部念願の三大事業は予定通り完遂された。ドーム型の特徴ある礼拝堂は、遠くからも望見され、工学部キャンパスのシンボリックな建物となっている。

工学部新礼拝堂は、鉄骨鉄筋コンクリート造り二階建て、建築面積九九九平方メートル、延床面積は一、二二三平方メートル。一階が礼拝堂・機器調整室・控え室・

エントランスホール・宗教副部長室・説教者控え室・会議室二室・男女手洗い所、二階は礼拝堂二階席・ホールで、礼拝堂の席数は一階七三四、二階二六六の一、〇〇〇席となっている。設計監理が株式会社山下設計仙台支社、施工は戸田建設株式会社仙台支店、工事費は三億九千五十万円。別途設備としてエレクoonが備えられている。

（『東北学院時報』四〇〇号 昭和五十八年十月十五日）

三二九 幼稚園設置認可書

（昭和三十七年二月二十日）

総第一八〇号

昭和三十七年二月二十日

学校法人 東北学院理事長 鈴木 義男殿

宮城県総務部長 印

私立幼稚園の設置について（通知）

昭和三十七年二月七日付けで申請あつた東北学院幼稚

園の設置について別紙指令のとおり認可されました。

宮城県指令第八五五号

仙台市南六軒丁一番地

学校法人 東北学院

昭和三十七年二月七日付けで申請あつた東北学院幼稚園の設置を学校教育法第四条の規定により認可する。

昭和三十七年二月二十日

宮城県知事 三浦 義男 印

三三〇 幼稚園新園舎の献堂式

(昭和六十年十二月十日)

育つ芽を伸ばす場

幼児のキリスト教教育を充実

本学院創立百周年記念事業の一環として七月から建築が進められていた新しい幼稚園園舎が完成した。施設・設備も充実され、自然条件にも恵まれた新園舎は、幼児教育の恰好な実践の場として期待がもたれている。

新しい幼稚園園舎の定礎式ならびに献堂式は、十二月十日午前十一時から多賀城キャンパス西側の現地において、来賓、本学院関係者と工事関係者など約八十人が出席して執り行なわれた。

はじめに児玉省三理事長によって定礎が行なわれた。ひき続き献堂式で、児玉理事長は幼稚園の歴史と転地・新築の経緯を説明され、「本日ここに幼稚園舎竣工の日を迎え献堂式をとり行うことになりました。まさに本学院創立百周年を思うとき、その意義まことに深く、喜びに堪えないところでございます。現今、幼稚園教育は、幼児をとりまく環境の変化、子供の発達状況の変化、家庭の教育機能の低下などの諸条件の変化に伴い、多くの課題に直面しているであります。これからのわが国の重要な担い手である幼児たちの人間形成は、つまるところ日々の教育実践の場でどのような教育が展開されるにかにかかっていると思えます。本幼稚園は地域に密接な結びつきを持ちながら、真の意味において子供を自立させてくれる幼稚園として、堅実な幼児教育を行いたいと念願いたしておるのであります。子供自らが育つための場として、子供の育つ芽を大事にし、それをまちがいにく伸ばしていく環境構成への努力を続けながら、幼児教育の

充実に邁進いたしたい所存であります。」と式辞を述べた。工事概要の説明があり、情野鉄雄院長から工事関係者へ感謝状が贈られたあと、年長組園児が可愛らしい合唱を披露した。

完成した園舎は鉄筋コンクリート造平家建、延床面積七九八・二二平方メートルで、保育室六室、音楽教室、厨房、会議室、職員室(保健コーナーを含む)、プレイルーム、便所、倉庫などとなっている。屋根は青、外壁は白で統一され、入口には子供たちが天に向かって伸びるようにすくすく成長してほしいという願いを表したシンボルトワーが建てられた。またプレイルームには童話「星の王子さま」をイメージ化したステンドグラスが輝いている。運動場の周囲にはブランコやシーソーなどの遊具、林の傾斜地にはすべり台も設けられた。総工費一億六千七百七十万円、設計監理が株式会社山下設計仙台支社、施工は戸田建設株式会社仙台支店。

園児たちは十六日から新園舎に登園し、二十日には楽しいクリスマス礼拝が行われる。

なお、新園舎の住所は多賀城市高崎三丁目七番七号。

(『東北学院時報』四二四号 昭和六十年十二月十五日)

第二章 中学・高等学校および 榴ヶ岡高等学校

三三一 月浦利雄「榴ヶ岡分校設置」

(昭和三十四年四月)

榴ヶ岡分校設置

月浦 利雄

急に話がきまつて榴ヶ岡校舎が誕生したわけです。多賀城敷地が旧地主など現われて国会の問題にまで発展し遅延の形になつたので財務局の厚意によつて榴ヶ岡元四聯隊兵舎あとに、駐留軍使用の二棟を借り受けて発足したのであります。

何分にも日時が切迫しているし県への届出などの関係から、一先ず二番丁の延長、つまり学級増加の形で許可を得て三学級一三五名の定員で小じんまりと徹底した教育をしようと言う院長の決意の下に、厳正な入学試験で志願者八六五名、実受験者五〇七名から以上の通り一三五名(一学級四五名)が入学許可され、成績も百点満点

に換算して平均七八点から五七点程度の者が合格と云うことになった。入学式の当日も生徒並びに父兄各位に申上げたのだが、野球で云うなら第二軍選手の観なきにもあらずだが一同緊張に緊張を重ね、もう始業一ヶ月にもなつたが、欠席するもの殆どなく出席率も百パーセント、九九・九パーセント。一組だけが、盲腸などで休んだ生徒があつたので、九九パーセント余と云う状況で、校長は私が兼務と云うことになりましたが、主事として田口誠一先生（田口泰輔先生の長男）学院中学校―二高―東北大出身）物理担当、英語は須田稔先生（最近米国留学より帰校）学院中学校―学院大出身）、数学半沢義己先生（学院中より臨教出身）、国語は終戦後から勤務の大泉幸男先生（広島高師出身）、保健体育も終戦後直ちに赴任された達崎勝雄先生（日体出身）それに宗教主任として今春神学大学出身の出村彰先生（出村剛先生の長男）以上六名が専任で、事務長としては師範科出身の清水哲郎先生（石巻高校教頭より飯野中学校長であつたが、我等の懇望により退職して就任）他の学科は講師の先生をお願ひして東二番丁の本校に優るとも劣らぬ成績を挙げんかなと、張り切つています。

本校の方は高校生徒数一三一一名、夜間第二部は五五

八名、中学校九七一名になつています。教員数は、中学校合わせて六三名、講師は一七名、外人教師二名、事務職員七名。

本年度の上級校入学については、別項教務よりの報告がありますので省略いたしますが、東京大には毎年少くも一名は合格しているようですし、東北大に関しては二、三年前の合格者数の半数強位ですが、それでも宮城県内高校の中では一高、二高、第一女子高の次の第四位、全東北六県ではベストテンの中の第八位と云うことになつて居ります。

赤煉瓦の方は全部中学校で使用、柳町通り寄りの鉄筋コンクリートは高校教室その間にある木造二階建を所謂アドミニストレーションビルディングとして、下は事務室、特別教室とし、階上は教務室校長室教員室として体育館のところが正門となり元の正門は登校、下校時にのみ通用門としました。赤煉瓦の中の元の事務室は、医務室に院長室、教員室は教室と模様換えいたしました。

（『東北学院時報』一八五号 昭和三十四年五月十日）

三三二 月浦利雄「新学年を迎えて」

(昭和三十九年五月十五日)

新学年を迎えて

月浦 利雄

三月四月は学校にとつては盆と正月が一緒に来たようなもので忙しいことおびたしい。生徒はまだしも先生方にとつて、特に学院中高の先生方にとつては本当に寸暇もないといつて過言ではない。二月の半ばに既に高校三年の卒業を終えて三月一日の卒業式、今年は三月一日が日曜だったので二月二十九日に卒業式それも同じ日に二番丁高校と榴ヶ岡高校と第二部夜間部の高校つまり三つの卒業式から忙しさが始まり、在校生の終業式は三月二十四日これも三つでなく四つ（中学校の終業式も加えたから）。中学校卒業式は四月に入つて七日、始業式の前日高校の入学式と中学の卒業式を一緒にして便宜的な行事を行なうことに数年前から変更して行なつてゐる。卒業式入学式を別の日に行つても役者はすっかり同じで一寸変なもので数年前から実行しているわけです。

院長は大学のそれぞれの卒業式入学式も取り行なうわ

けだから忙しいこと想像以上でしょう。入学試験も中学校入試に中学二年、高校一、二年の編入試験、榴ヶ岡高校の入試、第二部高校の入試など入学試験と名のつくもの、これまた四つ。先生方まさに忙しいことおびたしい。それに新学年の始業式もこれは中高合併で合わせて三つ。やつと始業式も終つて新学期をスタートしたかに思われるや五月十五日創立記念日の祝賀運動会の準備、六月父兄会の用意、七月は一学期末試験その外に父兄会前に一学期前期すなわち中間試験を行つてこの結果について父兄会の折に生徒の卒業成績の結果報告をするといつた工合でこのように書いてみると先生方も仲々ひまがないものです。

さて今年の入学試験の概要を御報告いたします。全国的な傾向でこの間も日本全国のキリスト教主義学校の集りで問題となつたが、中学校入学志望者数は激減の傾向があります。昨年までは中学校三百名募集に対して志願者数は六百名五百名とあつたのに、本年はわずかに三百二名と減つたのです。勿論これは小学校における児童数の減少にも原因がありますが必ずしもそのみでは御座りません。これはミッション・スクール全体に対しての由々しい問題であります。宗教教育の立場からどうして

も低学年からの教育が望ましいのでありまして高校から宗教教育を始めるということになりますと効果がなかなか望み薄すとなるのは当然です。でき得ることならば八十有余の日本全国のミッシヨン・スクールにおいて一斉に幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学と一貫教育の実が挙げられるならば、これこそ理想的だと思ふ次第です。が、現実はまだでこれとは正反対、しかしこれには経済的な面からみて、何とも致し方ないわけなのです。が何処の学園でも大学のみ膨張拡大しつつあるというのが現状です。中学校への入学志望者の減少は誠に重大な問題であります。しかしこの間の中央における会合で私はこの対策としては「対策はむづかしい。否残念だがないでしょう。つまり学校をよくすること以外にないでしょう。やはり世間の期待にそのような成績をあげる以外に方策はないじゃないか」と、その対策に対しては破壊的な意見ですまなかつたが事実それ以外に対策はなしと思ふのです。中央では兎に角専門対策委員会なるものを組織してその対策に当るようになったのですが本当に困った問題だと思ふのであります。

榴ヶ岡高校に関しては全国的な私立学校入学金問題などで新聞紙上を賑わしている問題をよそに三月下旬凡て

の公立私立高校入試の結果の発表後、悠々と入試を行なっております。本年も志願者総数一千三百七十八名内四百六十四名実際受験そして百四十二名合格となつておりまして仙台では一高、二高の次に市内の中学では評価しているようです。つまり昨年から発足した県立の第三高より上に評価されていることは田口主事以下教職員各位並びに生徒諸君のたゆみなき過去丸五年間の努力の賜と感謝いたしておる次第です。二番丁高校の方は高校一年は公募していませんので学院中学校よりの進学者全部を收容し、わずか十名内外だけ公募しない補欠入学の形式で榴ヶ岡受験者の中から編入試験で入学さしている現状です。

二番丁並びに榴ヶ岡高校よりの、学院大学を始めとして官公私立大学への合格者数は別表（略）のとおりであります。今年に残念ながら東北大学入学に関しては昨年度の半数にも達せぬ不覚を取りましたが明年度においては必ず挽回し得るものと期待しております。

（『東北学院時報』一九七号 昭和三十九年五月十五日）

三三三 月浦利雄「年頭に当りて」

(昭和四十四年一月十五日)

年頭に当りて

東北学院中学校・高等学校長 月浦 利雄

一九七〇年を前にしての六九年は何となく物騒な思いのする年である。世界に渉る学生運動の波は恐らく絶頂に達する年であるように思われる。その波は関西より関東に更に東北に、そして高校にまでも及ぶような感じもないではない。平静であるよう祈る心は我一人ではあるまい。さて、我が東北学院中・高校の明年度の課題は何というても寄宿舎建設の問題を取り上げねばならぬでしょう。同窓会の会館建築の問題と合わせて、柳町通り、元の聖愛幼稚園二百三十坪の敷地に鉄筋コンクリート四階の建物をたて、下二階に同窓会、上二階を寄宿舎に使用する計画で、だいたいこういう案に従って計画をすずめるということが、この間の同窓会総会でも決定したようであるから、専らこれに基いて話をすずめて行きたいと思っている。

御承知の通り、中学・高校共に全国的に生徒数は減つ

て、今や小学校での一つのクラスの生徒数は四十名以下という状態であるので、なかなか募集する人員どおり集めるということは困難になって来た現状で、寄宿舎を設けて他県並びに仙台市以外の入学者を迎えねばならぬ状態になっていきますので、各地の同窓生諸君の御子弟を母校に送つて下さるよう、特に切望する次第であります。

高校の方も漸減時期に入り、ここ数年の中にはやはり困難期に到達すること明かな事実で、延いては数年後には大学にまで推し及ぶという時代になるだろうと思えます。精神教育の立場から考えましても、中学校というのは最も大事な時代で、年々私立の中学校が廃校になって行くのを見るにつけても、あらゆる努力を払ってわが学院中学校を存続させねばならぬと思つている次第であります。

榴ヶ岡高校の明年における課題は、開校満十ヶ年になりますのでどうしても独立校として再出発させねばならない時期に達していると思えます。仙台市の小学校、中学校生徒の動静を見ますと、黒松団地を控えた七北田方面の急激な人口増加の現象にかんがみ、校地十万坪に及ぶ学院の所有地七北田泉町の敷地を利用して榴ヶ岡校舎を同地に移す話が持ち上がり、本大学寄宿舎の建つてい

隣接のところ約一万坪の土地を地ならしてそこに榴ヶ岡校舎を移すことに大体的方針がきまり、理事会の決定をまつて早急にその段取りに入ろうと準備中でありませぬ。

これらの施設は、一応、東北学院創立八十五周年の記念事業の一環としての計画とも見られ、関係者いづれも大いに張り切っているようであります。

新年に当り、わが学院今後のビジョンの一端を申し上げ、ごあいさつに代える次第であります。

(『東北学院時報』二二二号 昭和四十四年一月十五日)

三三四 月浦利雄「年頭所感」

(昭和四十五年十二月二十八日)

年頭所感

東北学院理事長
東北学院中・高校長 月浦 利雄

年頭所感を編集係からもとめられたが本学創立八十五周年を迎えての年頭となると、やはり学校と最も縁の深

いシュネーダー先生に関することを書いた方が一番適当だろうと思つた。私がアメリカに行つた時、フライデルファイアにあつたミツシヨンの事務所で、ミツシヨンとわが学院との古い往復文書を調べていた時、シュネーダー院長のミツシヨンに対し送つた年報を見つけた。読んでいる中に次のような文章に出くわした。文章そのままは今覚えていないが、They (これは学院の卒業生) are Christian in their thinking and living. という一節である。Christiansではなくchristian (形容詞)なのです。

意味は、卒業生の方々は大部分は思想的にも生き方や物の考えかたにおいて、キリスト教的である。即ちキリスト教的な人生観なのである。たとえ受洗した立派なクリスチャンになつていなくともという内容なのです。

私はこの一節を読んで本当に涙がこぼれて、「ああ、先生！すまないです。こんなにもご心配かけていたのですか。」と深く頭を垂れた。そのわけはミツシヨンには宮城女学校の(現在の宮城学院)ワイドナー先生や或はフアウスト(その当時の校長の名前)先生からも年報が来ており、それによれば宮城女学校の受洗者の数は毎年恐らく何百名であつたでしょう。ところがわが学院では一年間の受洗者の数、僅か三十名とか四十名とかではなかつ

たかと思う。それでシュネーダー先生は、いろいろ考えた末、They are christian in their thinking and living. と書かれたのではないかとその時私は考えた。

私はそれ以来これを学院精神教育の信条としていた。

高校では現在毎年三十数名位の信者しか出してないが、しかもこれは校長の私の力ではなくて、宗教主任水野和夫、竹井一夫両先生などの骨折りのおかげであると思っている。今も昔もかわりはなく信者を作るといふことはなかなか大変なことである。伝道と教育の学校であるから、今以て伝道も大事なことはない。小田院長が終戦後アメリカに行かれた留守の間に、キリスト教学校教育同盟の各学校代表者会議があり、私は院長代理として出席したことがあった。その当時万を以て数える学生数を有する同志社・青山学院大学・関西学院大学等の代表者に、多数学生になってもキリスト教精神を学生に徹底させることが出来るかと質問したところ、当時の同志社大学総長の犬塚節治先生が、「キリスト教精神はどうか分らぬが、新島精神は充分に伝えることが出来る。」と答えられた事を思い出すが、学校の創立精神というものが、現在のような多くの私立大学特にミッションスクールにおいて見られるように院長なり学長なりを公

選にするということになると、私はその学校の伝統とか精神とか歴史とかというものが失なわれはしまいかと心配するものである。

シュネーダー先生は我々に『世のため人のためになる人間になって欲しい』とよくいわれた。献身犠牲の精神を噛みくだいていえば、世のため人のためになるということになると思う。シュネーダー先生のいわれたキリスト教精神も、世のため人のためになる人間になることに外ならぬと思う。シュネーダー先生の御尊父が Schneider の一を抜いて Schneider となされたという。文字通り滅私奉公の精神こそ先生の精神だった。

（『東北学院時報』二五四号 昭和四十五年十月二十八日）

三三五 月浦利雄「榴ヶ岡高校のヴィジョンと構想」

（昭和四十六年一月二十八日）

榴ヶ岡高校のヴィジョンと構想

校長 月浦 利雄

榴ヶ岡校舎が設置されてから、満十一年の年月が経過しようとしています。これまで何度か校舎の建築が計画されながら、諸種の条件が満たされず実現のはこびに到りませんでした。

昨秋、理事会において、創立八十五周年の記念事業の一つとして、榴ヶ岡校舎を独立校にし、榴ヶ岡高校として、泉町にある東北学院用地十万坪の一部に建設することに決定し、一万五千坪の校地の整備が完了したことは、榴ヶ岡校舎に学ぶ生徒とその父兄は勿論、教職員、卒業生の喜びこれに過ぎるものではありません。

然しながら、校舎の新築にともない最も重要な問題として、そこに於て為さるべき教育の内容の整備充実が、地理的・域社会的・都市発展的諸条件との関連の中に考慮されねばなりません。勿論東北学院の創立の精神と、教育の理念と目的とは、八十五年の歴史と伝統と相まつて磐石不動のものでありますが、そこに集う生徒と、その教育を担当する教職員がその精神を充分に理解し、創立者の抱いた理想と、それを受継いで来た者のえがいたヴィジョンとを今の時代に如何に具現し、それに生きるかが新らしく打建てられる学校の価値を決定するものがあります。過去十一年の榴ヶ岡校舎の特色と伝統とはあ

りますが、新らしい地に、新らしい校舎をもつときこそは建学の精神を再確認し、それにもとづいた、理想的内容が取り入れられるのに最もよい機会であろうと考えられます。

たまたま昭和四十八年度から、高等学校の教育課程が改められようとしております。この機に当たり私学、特にキリスト教学校の特色を鮮明にし、時代と社会とが求めている人格の形成を目ざすことは意義の深いことであるります。

キリスト教精神に基づいた、正しい生活の信条と信念とに燃え、自覚と自負心プライドとに目覚めた、輝く目をもった生き生きとした青年こそは、今の日本に最も必要なのではないでしょうか。こうした若人達が都会の澁んだ空気から逃れ、澄み切った青空の下で、新鮮な空気と、明るい太陽のもとに育ぐまれてこそはじめて、世の光ともなり地の塩ともなり得るのだと思われれます。

「新らしい革袋に、新らしい葡萄酒」をモットーに、この新天地を与えて下さった御恩寵に感謝し、その御付託に応えて着実な努力を積み重ねてゆかなければならぬと信じています。

その為に「先ず教育の設計をなし、その教育が生かさ

れるような校舎の施設と設備が設計されなければならぬ」という方針のもとに生徒一人一人の能力を生かし、それを伸ばす教育でなければなりません。従つてそうした現場の教師の研究と経験と更に生徒の希望とが取り入れられた新しい教育構想にもとづいた校舎のレイアウトと校地利用のプランとが提出され、目下専門家の手によつて設計が進められつつあり、教育現場との打合わせと委員会の審議を経て、理事会に提出されようとしています。

一方新高校としての必要なる準備が平行して進められており、順調に進めば三月の私学審議会を経て、四月独立も可能であるとの見通しのもとに、榴ヶ岡校舎の父兄後援会である奨学会に於ては、既に、泉町の校地を、つじの一大名所にするため、昨年十月から、醸金を開始しております。

第一期工事の開始を四月とし、第一次の予算を約一億五千万円、約半年の工期をもつて完工されれば、年内の移転と、第二期工事への計画が進められるものと思われまゝ。なお三沢財務理事の語るところによると、総経費は四億円近くになるとのことであります。

『東北学院時報』二五五号 昭和四十六年一

月二十八日)

三三六 榴ヶ岡高等学校設置認可申請書類

(昭和四十六年十一月二十五日)

東北学院第六二号

昭和四十六年十一月二十五日

宮城県知事 山本壮一郎殿

仙台市土樋一丁目三番一号

学校法人 東北学院理事長 月浦 利雄

東北学院榴ヶ岡高等学校設置認可申請書

このたび東北学院榴ヶ岡高等学校を設置いたしたく学校教育法第四条及び同施行規則第三条の規定によつて関係書類を添えて申請いたします。

一、設置趣意書附環境説明

明治十九年の創立にかかる学校法人東北学院は現在幼稚園、中学校、高等学校および大学の教育を実施しております。

東北学院高等学校は昭和二十三年四月学制改革によ

り旧制中学校を廃止し設置したものであり定員九〇〇人をもつて教育を実施して参りましたが、昭和三十四年四月中学校校長会よりの要望もあり、仙台市五輪一丁目に定員四〇五名の榴ヶ岡校舎を増設したものであります。

この榴ヶ岡校舎は当時遊休施設であつた国有財産（元陸軍兵舎）である土地一、〇二〇平方メートル、建物七七八平方メートルの施設を借り受け現在に至つております。上記借用地は仙台都市計画上の道路拡張予定地および緑地帯に指定されている関係上、下げも受けられず、又本建築も認められないので施設も年々老朽化し危険校舎であります。

よつて、学校法人東北学院は泉市市名坂字天神沢にある所有地三一六、二九三平方メートルの土地に移転計画をたて一部を整地し、目下校舎の建築工事を進めております。

この場所は仙台市一番町所在の東北学院高等学校の北方約十キロメートルに位置するものであり、昭和四十七年四月一日以降独立高等学校として設置することを決定したものであります。

泉市は昭和四十六年十一月一日に市制を施行された

もので人口約三万五千人を数え仙台市のベットタウンとして急速に発展しつつあります。

泉市および隣接の富谷町（人口約五千人）には目下公私立の高等学校は皆無であるため、市当局より早くから設置方を要望されて居つたのであります。

この土地は各団地にかこまれた高台に位置し、東隣りに白百合短期大学があり、教育の場としては絶好の環境にあります。

又将来の増設も容易であり、全学の総合グラウンドおよび附属設備も計画中であります。

二、設置要項

(1) 目的

本校は基督教主義に則り中学校における教育の基礎の上に心身の発達に応じて高等普通教育を施すことを目的とする。

(2) 名称

東北学院榴ヶ岡高等学校

(3) 位置

宮城県泉市市名坂字天神沢九番一

(4) 学則

別紙のとおり

(5) 経費および維持の方法

授業料 一年次 月額 生徒一人につき

五、九〇〇円

二年次 〃 〃 六、九〇〇円

三年次 〃 〃 七、四〇〇円

入学金 毎年度 入学者生徒一人につき

三〇、〇〇〇円

施設負担金 〃 〃 一〇、〇〇〇円

各種負担金 〃 月額 生徒一人につき

五二〇円

入学受験料 受験者一人につき

寄附金 入学時に生徒一人につき

五、〇〇〇円

全生徒より毎月一人につき

五〇〇円

以上の学納金並びに地方公共団体補助金その他の収入(証明書発行手数料、受入利息配当および雑収

入)により維持経営する。

(6) 学校開設の時期

昭和四十七年四月一日

三、施設の概要

(1) 校地の総面積 四七、一四〇㎡(二四、二六〇坪)

内訳

校舎敷地 三、一二五㎡(九四五坪)

運動場屋外 一二、八九一・五七㎡

その他 三一、一二三・四三㎡(九、四一五坪)

所有者

所在地 仙台市土樋一丁目三番一号

氏名 学校法人 東北学院

(2) 校舎の総面積 五、七〇七・二七㎡(一、七二六坪)

構造

鉄筋コンクリート造 三階建塔屋一階陸屋根

内訳

普通教室

計

九室 六二二㎡(二八五坪)

九室 六二二㎡(二八五坪)

(二八五坪)

特別教室		
社会科学教室、準備室	二室	八一・七二 (二四坪七五)
化学実験室、準備室	二室	一七四・一五 (五二坪六七)
地学実験室、準備室	三室	一七二・四一 (五二坪四四)
物理実験室、準備室	二室	一七四・一五 (五二坪六七)
生物実験室、準備室	二室	一三八・五八 (四二坪九一)
音楽教室	二室	一三六・〇〇 (四二坪一四)
美術教室、準備室	二室	一三六・〇〇 (四二坪一四)
視覚教室、準備室	二室	二〇四・〇〇 (六一坪七〇)
LL教室、準備室	二室	一三六・〇〇 (四二坪一四)
計	一九室	一、三五三・m ² (四〇九坪二八)
校長室	一室	二六・〇四 (八坪〇〇)
事務室	一室	二六・二五 (七坪九四)
教員室	三室	一一一・六九 (三三坪七八)
会議室(小礼拝室共用)	一室	五四・三八 (一六坪四五)

図書室(事務室を含む) 二室 一一七・五〇
(三八坪五六)

保健衛生室、休憩室 二室 四八・一三
(一四坪五六)

体育館 五室 一一、〇〇〇・〇〇
(三三三坪七五)

カウンセリング室、標本室 一室 一一〇・八三
(三三坪五二)

その他 二室 二、一三七・四四
(六四六坪五八)

校舎所有者

所在地 仙台市土樋二丁目三番一号

氏名 学校法人 東北学院

(3) その他の施設

し尿浄化槽設置 二二〇人槽

所有者

所在地 仙台市土樋二丁目三番一号

氏名 学校法人 東北学院

(4) 飲料水

泉市上水道を利用する。

四、学級編成表

課程別	第一学年		第二学年		第三学年	
	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数
全日制	三	一三五	三	一三五	三	一三五
普通科	三	一三五	三	一三五	三	一三五
計	三	一三五	三	一三五	三	一三五

(別紙)

東北学院榴ヶ岡高等学校学則

目次

- 一、総則
- 二、修業年限
- 三、学年、学期および休業日
- 四、教科課程および授業時数
- 五、入学、退学、転学、休学および在学
- 六、褒賞および懲戒
- 七、課程の修了および卒業の認定
- 八、授業料および入学科
- 九、服制および生徒心得

付則

第一章 総則

第一条 本校は東北学院榴ヶ岡高等学校と称する

第二条 本校は基督教主義に則り中学校における教育の基礎の上に心身の発達に応じて高等普通教育を施すことを目的とする

第二章 修業年限および定員

第三条 本校の修業年限は三ヶ年とする 収容定員各学年一三五名

第三章 学年、学期および休業

第四条 各学年は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る

第五条 学年を分けて三学期とする 第一学期は四月一日より八月三十一日に至り等二学期は九月一日より十二月三十一日に至り第三学期は翌年一月一日より三月三十一日に至る 休業日は左の通りとする

第六条

一、日曜日

一、祝日

一、本校創立記念日 五月十五日
 一、春季休業 四月一日から同七日まで
 一、夏季休業 七月二十一日から八月二

位 単 の 目 科 ・ 科 教

三 年	二 年	一 年	単 位 数	標 準	科 目	教 科
3	3	3		7	国 語	現 代
	3	4		5	I 乙 古	典 義
4				3	II //	社 会
	2			2	社 会	倫 理
				2	社 会	政 治
1	2			3	史 本 日	社 会
2	2			4	(B)史 界 世	社 会
		4		4	(B)理 地	数 学
		6		5	II //	数 学
8	6			5	B II //	数 学
				5	III //	数 学
3	2			5	理 物	理 学
2	3			4	学 化	理 学
		4		4	物 生	地 理
		2		2	学 地	地 理
	1	1		2	I 音	芸 術
	1	1		2	I 美	芸 術
8	7	7		15	B 語 英	外 語
2	3	3		11	体 保	聖 徳
1	1	1		3	書 聖	聖 徳
34	36	36		93	計 小	計 算
1	1	1		3	及 会 R H	生 活
35	37	37		96	計 合	計 算

高等学校教科課程

- 第七 条 学 科 課 程 及 び 毎 週 授 業 時 数 は 左 表 の と お り と す る (一 授 業 時 間 は 五 十 分 と す る)
- 第 四 章 教 科 課 程 お よ び 授 業 時 数
- 一、ク リ ス マ ス 十 二 月 二 十 四 日 一 日 まで
- 一、学 年 末 休 業 三 月 二 十 五 日 か ら 同 三 十 一 日 まで
- 一、冬 季 休 業 十 二 月 二 十 五 日 か ら 翌 年 一 月 七 日 まで
- 十 四 日 まで

学 数 年 三

III	B II	I 数	
4	2	2	工 理
	4	4	系 文 立 国
国 2 英 2	2	2	系 文 立 私

第五章 入学、退学、転学、休学および在学

第八条 入学の時期は学年の始めより三十日以内とする

第九条 本校に入学を許可される者は左の各号の一に該当し且つ学力検査および身体検査に合格した者とする

一、中学校卒業者

二、外国に於て学校教育に於ける九年の課程を修了した者

三、文部大臣の指定した者

第十条 四、その他本校に於て中学校を卒業した者と同等以上の学力があると認めたる者

第十一条 入学志願者に対して人物考査を行なうことがある

第十二条 入学志願者は出身校長を経て左の書類に入学検定料を添えて学校長に願い出でなければならぬ

一、入学願

二、調査書

第十三条 病氣又はやむを得ない事由のため欠席する者はその事由及び日時を詳記して三日以内

に届け出でなければならない

第十四条 病氣のため一ヶ月以上修業しあたわぬと思われる者は医師の診断書を添え保証人連署の願書を出し学校長の許可を得なければならない

第十五条 病氣又はやむを得ぬ事故のため退学せんとする者はその事由を記し保証人連署にて願出でなければならない

第十六条 左の各号の一に該当するときは退学を命ずる

一、性行不良で改悛の見込がないと認めたる者

二、学力劣等で成業の見込がないと認めたる者

三、正当の理由がなくて出席が常でない者

第十七条 四、授業料の納付を怠り督促を受けても之を納入せぬ者

第十八条 本校生徒にして退学後一ケ年以内に再入学を志願するときは同一学年以下の学年に限り入学を許可することができる

第十九条 他校に転校を志望する者で正当の事由ありと認めたる場合にはその生徒の在学証明書に指導要録(写)及び必要書類を転学先の学校

長に送付する

第十八条 他の高等学校から転学を願出する者は欠員の

ある場合に限り同一程度の学年に転・編入
することがある

第十九条 入学又は転学の許可を得た者は保証人連署

の上誓約書に戸籍抄本又は住民票抄本その
他必要書類および所定の入学金を添え指定
の期日までに学校長あて提出納入しなけれ
ばならない

用紙は本校から交付する

第二十条 保証人は父兄又は一家計を立て生徒の身分

に關し一切を引受けるに足る仙台市在住者
に限る

第六章 褒賞および懲戒

第二十一条 学業操行共に優秀な者及び特別の善行あり

他の模範となる生徒は之を褒賞する

第二十二条 生徒たる本分に背いた者はその軽重により

懲戒する

第二十三条 懲戒は出席停止戒飭停学および放校とする

第七章 課程の修了および卒業の認定

第二十四条 各学年の課程の修了又は卒業を認めるには

平素の学業成績及び操行を審査して之を定

める 審査の方法は学校長が定める

第二十五条 三学年に八十五単位若しくはそれ以上を履
修した者は本校の課程を修了した者と認め

卒業証書を授与する

第八章 授業料および入学料

第二十六条 本校生徒の授業料は一ヶ月金五、九〇〇円
とする

第二十七条 授業料の納期は毎月七日以内とする 既納

の授業料は如何なる事由あるも之を還付し

ない

第二十八条 入学を志願する者より入学考査料として金

五、〇〇〇円を徴収する

第二十九条 入学を許可された者は入学料金三〇、〇〇

〇円を納入しなければならない

第三十条 休学中といえども授業料は納付しなければ

ならない

第九章 服制および生徒心得

第三十一条 生徒の服制及び日常の心得は学校長が之を

定める

付 則

本学則は昭和四十七年四月一日から実施する

宮城県指令第一三六〇二号

仙台市土樋一丁目三番一号

学校法人 東北学院

昭和四十六年十一月二十五日付けで申請あつた東北学院榴ケ岡高等学校の設置については、学校教育法（昭和二十二年法律第二六号）第四条の規定により認可する。

昭和四十七年二月一日

宮城県知事 山木壮一郎 印

三三七 榴ケ岡高等学校校舎定礎式

（昭和四十七年八月二十三日）

榴ケ岡高等学校新校舎定礎式行なわる

昨年十二月以来工事を急いできた東北学院榴ケ岡高等学校の新校舎がこの程完成し、去る八月二十三日にその定礎式が挙行された。

式典には宮城県および地元泉市より来賓を迎え、学校・工事関係者、全在校生が参列し、学校のよりよき発

展を祈った。

小笠原宗教主任の聖書朗読、祈禱について月浦理事長の式辞、小田院長の挨拶があり、正面玄関口右側の壁の中に聖書、讚美歌、学則、教職員名簿、この日の新聞数種、百円までの硬貨などを入れた銅製のケースを収め、その上に定礎と刻んだ御影石を置いて定礎式を終了した。

この度完成したのは、管理棟、普通教室九、特別教室三、図書室、食堂などで、体育館は十一月の完成をめざして現在建築中である。

これで東北学院榴ケ岡高等学校は名実共に独立の高校として新発足することになった。学校関係者の喜びもひとしおであり、月浦理事長は、「本日より四百五十有余名の生徒が八十六年の伝統ある東北学院の建学の精神に則り、勉学と身心の鍛練に精進することになった」との式辞を述べられた。

榴ケ岡高校の泉市への移転は、同市にとっても非常に歓迎すべきものであったようで、式後の懇談会の席上、鈴木市長は祝辞の中で「移転の約束を果していただいて心から感謝している。泉市の人口は現在四万三千六百人であるが、教育施設を充実して学園都市として発展した

い。これからは私学への援助も考えたい」と話された。最後に五十嵐校長は、「与えられたものへの有難いという感謝の気持を常に持つような生徒を育てることを心懸けたい」との教育方針を述べられた。

学校はこの日二期の始業式をあげ、翌日から新しい教室で授業が行なわれることになった。

生徒達の感想も「すばらしい」とのひとことであった。

（『東北学院時報』二七四号 昭和四十七年八月二十八日）

三三八 小田忠夫の月浦利雄に対する弔辞

（昭和四十八年七月二十二日）

弔 辞

東北学院院长・東北学院同窓会長 小田 忠夫

本日、ここに測らずも、故東北学院理事長月浦利雄先生のご葬儀に列し、東北学院教職員ならびに同窓生一同に代り、恭しく哀悼のまごころを申述べねばならないことに立ち至りましたことは、ご遺族の皆様とともに悲しみの極みであります。

さて、月浦先生の過去七十有余年のご生涯を顧みまして、一言にして言い現わすならば、それはまことに間隙のない、すぐれた精神力に充たされ、張りつめたご一生であられたと申し上げたいと思います。

先生は、石巻のご出身であります。幼少年の時代にご両親を失われました。この不幸な出来ごとを立派に克服して来られたところに、すでに先生の精神力の並々ならぬものが見出されるのであります。先生は仙台に出て、東北学院に学ばれ、同中学部及び専門部師範科を卒業されたのであります。師範科では第一回目の卒業であり、而も先生ただ一人の卒業生でありました。すなわち、その在学四年間、同期生としては他に無く、月浦先生ただ一人のために授業がつづけられたのであります。学校側の嘱望が大きいだけに、本人の責任感が重大であったことが察せられるのであります。

専門部師範科卒業後、三年間は朝鮮及び東京において、中等教育に従事されましたが、大正十四年四月母校東北学院中学部教諭に就任されたのが母校に教鞭をとられた始まりで、爾来実に四十八年間母校東北学院にあつていろいろな立場において、まことに忠実勤勉はちきれるような精神力をもって献身されたのであります。但し、こ

の間大正十五年四月から昭和四年三月までの三年間東京遊学のことがありました。これも東京帝国大学英文選科在学期間は、中学部教諭現職のまま賜暇休暇となつておりまして、この一事をもつて見るも先生の将来に対する学院当局の嘱望の大きかったことを察することが出来るのであります。

月浦先生の学院における全生涯のご活躍は、大別して戦前と戦後の二つに分けられると思います。その戦前は中学部及び専門部の英語の教師として、明快な英語学者として、天衣無縫の教授ぶりを発揮されました。

戦後においては、東北学院中学校長、同高等学校長、財団法人東北学院理事として、戦後の学園の復興より総合大学の現況に至るまでの教育内容の充実、施設の拡充整備に至るまで院長の半身として積極果断の敏腕を発揮されたのであります。中でも榴ヶ岡高等学校開設の基礎固めからその独立に導いたのは全く月浦先生の力に負うところでありました。

昭和四十四年四月、中・高校長の職にありながら、学校法人東北学院理事長の重責を担われ、満身の熱意を傾むけて、多端な責務に当って来られたのであります。

これより先、昭和三十五年頃より糖尿病に罹り、時に

大病院及び日赤病院等に入院し、治療につとめられましたが、病勢は容易に衰えず、一進一退をつづけて来ましたが最近に至り、病勢次第に昂進し、去る七月十二日脳卒中を併発し、同十九日、当市五橋二丁目の日赤病院において、しずかに七十四才のご生涯を閉じられました。まことに痛惜哀悼の至りであり、わが東北学院にとりては償うことの出来ない一大恨事であります。

なお、先生の教育界に尽されたご功績は単に東北学院のみに止まらず更に、宮城県教育委員、日本私立中学校・高等学校連合会理事、宮城県私立中学校・高等学校連盟会長として、多年に亘り私立学校の振興に寄与されたことも大いに頭揚さるべきものがあります。昭和四十三年十一月三日文化の日に勲四等旭日小綬章を受けられたことは故なしとしないのであります。

先生のご性格は頭脳明敏、進取果断の精神に富み、規律と秩序の厳守につとめられたところに特色がありました。その一面人と交りて情誼に厚く思いやりが深く、学生、生徒にのぞんでも思いきった厳しさの半面に常にやさしい温情をもつてすることを忘れませんでした。その先生の感化力が学生、生徒に与えた影響力は非常に甚大なものがあり、数万にのぼる卒業生からはあたかも慈父

に對するがごとき尊敬と敬慕の情を寄せられていました。まことに先生の東北学院発展に對するご功績、教育者としての名声は永く学院史上に伝えられ後続の人々にその範を垂れることを信じて疑いません。

東北学院の現状は、なお、多端の域にあります。この時に當つて、先生を天にお帰えしすることは、わたくしどもにとつて償ふことの出来ない損失ではありますけれども、人間生死の大事は測るべからざる天意の存する所と信じ、あたかも凱旋の將軍をその故国に送るような思いで月浦先生の英魂を天父のみもとにお送りしたいと思います。

終りにご遺族ご一同のうえに天よりの豊かなお慰めがありますようお願いのりして、いささか弔辞といたします。

(『東北学院時報』二八六号 昭和四十八年八月二十八日)

三三九 二関敬「新年のご挨拶」

(昭和四十九年一月二十八日)

新年のご挨拶

東北学院中学高等学校長 二関 敬

昭和四十九年の新春を迎え教職員、ご父兄、在校生並びに同窓生の皆様と共に、東北学院創立以来八十八年間の長きに亙る神のご恩寵とご加護とを感謝し、併せて、母校東北学院の将来の発展を心から祈願する次第であります。

さて、東北学院中学・高等学校は現在中学校五五七名、高等学校一二一三名、高等学校二部(定時制学校)一七三名の三部門、計一九四三名の生徒諸君が、八五名の専任教職員の熱心な指導によつて六年間の「中高一貫教育」を志向する教育理念の下に日夜勉強にいそしんでおります。

「中高一貫教育」につきましては、わが国においては終戦後教育上の一つの課題として論議されて参りましたが、数年前からこの問題が再び脚光を浴び、特に中央教育審議会の答申の中にもその重要課題の一つとしてとり

あげられるに及んで、文部省におきましてもその研究調査に着手するに至り、この調査研究を「日本私立中学高等学校連合会」に委嘱いたしましたのは去る昭和四十七年九月のことであります。この委嘱されました研究テーマは「中高一貫教育における指導の実際とその効果について」でありましたが、特に「長期にわたる生徒と教員との人間関係が、生徒の人間形成や知的発達に及ぼす影響の得失について」というテーマが重点的なものでありました。

私立学校がこの「中高一貫教育」の問題に真剣に取り組み始めましたのは、終戦直後の混乱期を脱して、ようやく国民生活の安定に曙光を見出し始めた昭和二十四、五年の頃でありますので、今から約二十数年前のことです。あります。当時いわゆる六三制と呼ばれたアメリカ方式の新教育制度の導入に伴って、公立中等学校は全国一斉に新制高等学校に移行しましたが、当時全国の私立中等学校の大部分は純粹に全人教育という教育理念と各校それぞれその建学の精神に基いて「中高一貫教育」こそ有為な人材の育成に不可欠な教育制度であるとの確信から、学校経営上の数々の犠牲を度外視して、敢えて義務教育段階の中学校と然らざる高等学校とを併設したのであり

ます。

わが東北学院におきましても、昭和二十二年中学校、翌二十三年高等学校の併設に踏み切ったのであります。そして現在では東北学院大学の設置に伴い、中学校から高等学校を経て大学教育までの一貫教育の理想を実現しております。

併しながら、義務教育段階としての中学校と然らざる高等学校との併設については、制度上の複雑さとか或いは私立学校への志願者の激減などからくる経営上の諸問題のため、全国の私立中学校、特に私立男子中学校は漸次姿を消さざるを得なかったのであります。

この事は昭和四十七年度における統計を見てもお解りのように、全国に私立高等学校七一〇校、私立中学高等学校併設校五四八校に対し、私立中学校は僅か一九校を数えるにすぎない現状であります。しかも、私立中学高等学校併設校五四八校のうち、中学校が生徒数激減のため休校の止むなきに至っているものが八六校を数え、他方、山形・福井・長野・岐阜・鳥取・徳島の六県には私立中学高等学校併設校は一枚も存在しないという実情であります。幸い東北学院は過去八十有余年の長い伝統に支えられて、ここ二、三年来中学校志願者数は漸増の傾

向にあり、現在宮城県内唯一の私立男子中学校としての使命を果しております。

「中高一貫教育」の長所と短所につきましては識者の間に種々論議されております。例えば、その短所として指摘されております点を要約しますと、

第一、高等学校第一学年において公立中学校からの新入生を受け入れる高校においては、併設中学校出身者との進捗調整をどのように解決すべきか、その具体案の作成と実施上の困難があること。

第二、同一の人的、物的環境の下に六年間という可なり長期に亘って在学するために、とかく墮性に陥ったり、清新の氣を失ったりする可能性があり、そのために良い素質を十分に伸ばし得ない憾みがあること。

第三、高校への進学が無試験となつている高校の場合においては、刺激が薄らぐに従つて勉学意欲が後退し、いわゆる「中だるみ」の現象が生ずる傾向があること。

第四、無駄のない教育課程が場合によつては却つて生徒に対し過重となり、理解が不十分なるままに進度を追う傾向となり、学年が進むに従つて生徒間の学力差が拡大する傾向が顕著となることなどが挙げられております。

右の様な批判に対しては、私共は率直にこれに耳を傾

けるにやぶさかではありませんが、併し、右の様な短所に対して遙かに重要な長所を見出すことが出来ると思ひます。その長所と申しますのは、年来主張されておりますように、

第一、六ヶ年という可成り長期に亘る教育によつて本校の建学の精神である聖書に基づく人格形成の場としての伝統ある校風によりよくなじませることができること。

第二、有効適切な一貫教育のプログラムによつて、教育内容を整理し、無駄な重複を避け、能率的且つ合理的な指導を行なうことができること。

第三、高等学校進学のための無駄な受験準備教育が不要となり、年令的にみて人間形成途上の重要な時期を全人教育に向けることができ、また、他面クラブ活動や学校行事に意欲的に参加することができ、明朗なびのびとした学校生活を送ることができ、

などの点であります。そして、これらのことを通じて社会に対する奉仕の精神と隣人との協力性、母校に対する愛校心の涵養、有能で個性豊かな信頼される社会人の育成に寄与することができると思ひます。

私学は今日、教育上また経営上種々な困難に遭遇しております。この重大な時に当り、我々教職員一同は一致

団結して、神がわが東北学院に托された崇高な使命と責任とを自覚し、万難を排して諸々の悪条件を克服しつつ邁進する覚悟でございますので、ご父兄各位並びに同窓生諸兄弟の温かいご指導とご鞭撻とを衷心よりお願いする次第であります。

（『東北学院時報』二九一号 昭和四十九年一月二十八日）

三四〇 田口誠一「校長に就任して」

（昭和五十二年五月二十八日）

校長に就任して

中学高等学校長 田口 誠一

此の度はからずも長い伝統と栄光に輝く我が東北学院中学校の校長としての選任を受け、責任の重さを痛感しておりますが日頃考えておりますことの一端を述べて御挨拶いたします。

第一に良い環境を作ること。「教育は人である」とよく言われますが、山口県萩の松下村塾など今訪ねてみましてもこれといって別に何もありません。いかなれば良き

師と良き弟子との固い精神的結束があつたということでしょう。たしかに良き友、よき師、よき家庭とそれらの正しい関係の保たれることが教育の場での中心にならなければならぬのです。然し、同時に、施設、設備の充実に十分意を用いなければなりません。当面、既設の分の改善整備を行うと共に、できるだけ早い時期に全東北学院の総合計画と長期展望とに立つて、必要な物が遅滞なく与えられることを願つてやみません。

第二は学校である限り、学校は勉強する所、生涯のよき土台を築くべき所となります。生徒は真面目に、正直に、忍耐強く、注意を集中して平易な事から積み重ね、日々の生活を規則正しく進めてゆくよう努力しなければなりません。良い意味で、他校生に負けない迫力と気力を必要とします。学問に励むことが即ち、人格形成や陶冶に大切な意味を持ちます。真剣味を欠く所、目標を忘れる所に、怠学があり、非行が生れ、三無主義（無関心、無気力、無責任）などという、自分の二本脚で立てない者が生れてまいります。また、教える側の教師も、自分の教える学科に本当に精通していなければならぬのではないか、というのは、その知的内容そのものだけでなく、その確実さ、あいまいさ、困難さ、さらにそのよ

うな専門の知識に人生の全体を縮図のように宿らせるその人間的な能力が要求されるからであります。こうみたくると、知育はそのまま徳育であり、また体育でもあり得ると思われれます。特に高校の就学率が九〇パーセントを越えるようになり、生徒の質の多様化が叫ばれる今日、この要求はまことに切実であります。

第三には、我々の心の拠り所をどこにおくかということです。人は独りで生きられるものでなく、誰でも何かに拠りかかり、心の支えとして生きているものです。ある人はお金に、自分の健康や若さに、または、学問業績に、或る人は名誉に権力に、親に子に頼っており、これが人間の姿なのです。然し最終的に人間の拠り頼めるものは何でありましょうか。「自分はこれをとられたら死んだ方がよい、といったものを捨ててごらん下さい。そこに残るもの、それが宗教に通ずるものである」とパスカルは言ったそうであります。私達がこの学校に学ぶ間も卒業してからも、終生忘れてはならないもの、また追いつめ考え直してゆかなければならないものは、人間が何に頼つたらよいか、ということでしょう。「たとえ人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になるうか。」(マタイ一六・二六)とイエスは申されまし

た。私達は、最後に頼むにたるものが何であるかをとにも勉強し求めてゆきたいと念願するものであります。

最後に一言申します。今日ぐらい私立学校、特に私達のようなキリスト教主義学校の存立の意義が問われている時はありません。公立校の補助手段としての学校でなく、他に率先独立してその真価が認められ、同窓各位はもとより、社会一般の皆様からも進んでその子弟が送りこまれ、一同声高らかに、「世の光 わがほこり いざほめよや友よ もろごえあわせて 我等の学院」と歌う日を招来したいものであります。

(『東北学院時報』三三〇号 昭和五十二年五月二十八日)

三三一 田口誠一「高校二部の閉校に際して」

(昭和五十八年二月十五日)

高校二部の閉校に際して

中学・高等学校長 田口 誠一

我等が東北学院高等学校第二部は、昭和十七年、旧制度の中学校に二部(夜学校)として開設され、戦後新制

高校に引き継がれ、その間四十一年の歳月を経て今日に及んでいます。明治から大正にかけての、東北学院労働会の精神を伝承する所、まさしく勤労青年のための学校として尊い使命を果たして来ました。特に戦中から戦後暫くの時期は、世をあげて多くの困難の中に在り、衣食住すべてが乏しく物質面では多く苦しみの連続でありながら、精神面では神の愛に支えられ、良きものに満たされて、勉学の熱意に燃え、意気旺んなものがありました。この三月で総勢二、五四〇人の卒業生を世に送り出すこととなりますが、何れも社会有為の器として、至る所で学院精神を遺憾なく発揚しております。

昭和五〇年の頃より、世の趨勢の赴く所、入学者層の変化、数の激減を見るようになり、「働きつつ学ぶ者の学校」としての使命に終止符を打たねばならぬ時を迎えるに至りました。省みて感無量なるものを覚えます。五十四年度入学生を最後とし、このあと募集停止の決定を見ました。

戦後、月浦利雄校長と共に、主事として長く二部教育充実発展のため尽瘁された樋口光平先生の御名を忘れることはできません。先生の後半生のすべては我等が二部のために捧げつくされました。校長二関敬先生、主事今

野正先生を経て、三代目主事の青柳先生は、二部最後の大きな責任を背負って来られました。が、意義ある閉校の時を目前に天に召されましたこと惜しみて余りあります。心よりの平安を祈ります。またここに、同窓各位による二部T.G会記念事業実行委員会の土川昭平委員長以下皆さんの献身的奉仕と同窓生諸兄弟の絶大な協力にはただ頭の下がる思いです。学校に贈られる二部の記念碑は永くその歴史を語り続けるでしょうし、二部の存在の意義はむしろ今後、これら同窓の皆さんの歩みの中に生き、育つてゆくものと確信します。

最後に、二部閉校のための諸計画、その実務のために日夜労を惜しまず協力いただいた宗教主任水野和夫先生、菅野公道先生、大本善主先生、および関係諸先生方に心からの敬意と感謝を捧げます。

（『東北学院時報』三九三号 昭和五十八年二月十五日）

第四章 創立百周年

三四二 小田忠夫「百周年を迎えるにあたり建学の精神の発揚を」

(昭和五十六年一月十五日)

百周年を迎えるにあたり

建学の精神の発揚を

東北学院長・東北学院大学長 小田 忠夫

一九八一年は東北学院の創立九十五周年を記念する年であり、おめでとうと心から申しあげます。約六万をこえる同窓生諸氏ならびにご父兄各位のご健康と神のご恩寵の豊かにあらんことを月並ですがお祈りいたします。

過日、学内で創立百周年の記念事業委員会が発足しました。その際、建学の精神の発揚のために、さらに一段の努力が必要であるが、具体的には何が必要かということについて話し合った次第です。

まず宣教師諸君からは、もう一度古い学院の伝統であった学内でのノースモーキングを計れとの申し出があ

り、私も大賛成ですがいかがでしょう。かつて文学部長の故小林淳男先生が東北大学から本学院に転じて来られた時、学院の専任として禁煙を覚悟して来たのに、院長室にはタバコ盆まであるのには驚いたと、私に話されたことを思い出した次第です。酒、タバコの害が毎日の新聞記事に種々の暗いニュースを供している時に、ピューリタニズムの原点にかえることは言うまでもなくシュネーダー先生の遺志を生かす道の一つと思います。

国際化時代に健全で高潔な人格の青年を養成する学院として、学問教養の豊かな若人の学び舎として土樋（旧六軒丁）だけでは狭いということで泉市に理想に近い体育施設を造りました。しかも尚相当の余地がありますので、教養部門の総合移転を実現してはと考えている次第です。これによって前期二年を郊外にある新地で過ごし、土樋キャンパスは後期二年と大学院の生活の場として使ってはどうかでしょうか。

これを実現するには創立百周年に当たると一九八六年まではかかると思います。このための諸施設として校舎、礼拝堂、図書館、国際交流会館等の建設が必要であり、大略百億円位はかかると思われます。もちろんこのために、地下鉄の完成もありましようから交通についての心

配はありますまいが、物価値上りを考えると、相当準備金を要すると思います。これは貧困な私学の一つに属するわが学院としては、同窓ならびにご父兄の協力に仰がねばなりません。

これによつて、大学院と専門課程は歴史ある旧六軒丁で行ない、しかも余裕のある校舎を使つて高齢化時代を迎えての教育の場ともなし得れば、百年の計としても意義あるものとなると思います。

(『東北学院時報』三七〇号 昭和五十六年一月十五日)

三四三 創立百周年記念行事準備諸規程

三四三一 東北学院創立百周年記念行事準備事務局規程

(昭和五十六年六月一日)

(準備事務室の設置と名称)

第一条 創立百周年記念行事の準備を円滑に行うため臨時に創立百周年記念行事準備事務局(以下「準備事務局」といふ)を置く。

二 設置場所は土樋キャンパス本館内に置く。

(業務)

第二条 準備事務局は次の業務を行う。

(1) 創立百周年記念行事計画の運営委員会、準備委員会に関する事項

(2) 創立百周年記念行事に関する広報

(3) 創立百周年記念行事に関する意見の受付および整理

(4) 資料の収集、保管、調査

(5) 前各号のほか創立百周年記念行事に関する準備業務

(準備事務局の構成)

第三条 準備事務局は次の者をもつて組織する。

(1) 室長 一名

(2) 事務職員 若干名

二 前項に掲げる者のほか、必要に応じて関係各課の職員に協力を求めることが出来る。

(職務)

第四条 室長は準備事務局の業務を総括する。

二 事務職員は準備事務局の業務に従事し、必要に応じて

じ別に定める準備委員会のプロジェクトチームの業務遂行に協力する。

附 則

この規程は昭和五十六年六月一日から適用する。

三四三―2 東北学院創立百周年記念行事準備委員会

規程

(昭和五十六年七月一日)

第一条 本学院は創立百周年の記念諸行事を計画、実行するにあたりその万全を期するため運営委員会の諮問機関として東北学院創立百周年記念行事準備委員会(以下「準備委員会」という)を置く。

第二条 準備委員会の設置期間は昭和五十六年七月一日から記念行事終了時までとする。

第三条 準備委員会は次の委員をもって組織する。

(1) 委員長、副学長(総務担当)

(2) 副委員長、副学長(財務担当)、副学長(学務担当)、

文学部長、経済学部長、法学部長、工学部長、教養部長、二部長、中学高校長、榴ヶ岡高校長、幼稚園長

(3) 委員、副学長(総務担当)が必要に応じ推薦し、理事長がこれを委嘱する。

第四条 委員長は会務を総括し、その会議を招集して議長となる。

二 副委員長は委員長を補佐し、委員長に事故あるときはその職務を代行する。

第五条 準備委員会は記念行事について協議し、協議事項を運営委員会に報告する。

第六条 準備委員会は本学院関係者の意見が反映されるよう関係諸機関に意見を求めることがある。

第七条 準備委員会の事務は百周年記念行事準備事務室がこれにあたる。

附 則

この規程は昭和五十六年七月一日から適用する。

三四三―3 東北学院創立百周年記念行事運営委員会

規程

(昭和五十六年九月一日)

第一条 本学院は創立百周年の記念諸行事を計画、実行するにあたりその万全を期するため理事会の諮問機関

として東北学院創立百周年記念行事運営委員会（以下「運営委員会」という）を置く。

第二条 運営委員会の設置期間は昭和五十六年九月一日から記念行事終了時までとする。

第三条 運営委員会は次の役職者をもって組織する。

(1) 院長、学長

(2) 副学長（総務担当）、副学長（財務担当）、副学長（学務担当）

(3) 文学部長、経済学部長、法学部長、工学部長、教養部長、宗教部長、二部長、教務部長、学生部長、就職部長、図書館長、中学高校長、榴ヶ岡高校長、幼稚園長

第四条 運営委員会委員長には院長がこれにあたり、その職務は会務を総括し、会議を招集して議長となる。

第五条 運営委員会は創立百周年記念行事について審議し理事会に答申する。

二 運営委員会の諮問機関として東北学院創立百周年記念行事準備委員会を置き、同委員会規程は別に定める。

第六条 運営委員会の事務は百周年記念行事準備事務局がこれにあたる。

附 則

この規程は昭和五十六年九月一日から適用する。

三四四 創立百周年記念行事の準備開始

（昭和五十六年十一月十五日）

一世紀の節目に英知結集

各委員会にて計画の検討に着手

わが東北学院は、明治十九年に仙台神学校として開校してから九十五年、来る昭和六十一年をもって創立百周年を迎えることになる。この記念すべき年を迎えるにあたり、改めて建学の精神を自覚し、それに基づく研究・教育の一層の発展・充実を期するため、このほど、東北学院創立百周年記念行事運営委員会、同準備委員会が組織された。本学院創立百周年に向けての準備もいよいよ本格的にスタートすることになった。

本年六月、まず「東北学院創立百周年記念行事準備事務局」（室長・大河内雅夫総務課長〔兼務〕）が本館二階

に設置された。九月には「東北学院創立百周年記念行事運営委員会」が、小田忠夫院長を委員長に、大学の副学長・学部長・部長、中学高校長、榴ヶ岡高校長、幼稚園長で組織された。その規程第一条には「本学院は創立百周年の記念行事を計画、実行するにあたり、その万全を期するため、理事会の諮問機関として東北学院創立百周年記念行事運営委員会を置く。」と定めている。

また、運営委員会の諮問機関として「東北学院創立百周年記念行事準備委員会」(委員長・情野鉄雄副学長)が設置された。同委員会では会合を重ねた結果、記念行事の計画を推進するために専門委員会を設けることとし、このほど次の四つの委員会が発足した。()内は委員長

○ 総務委員会 (情野鉄雄副学長)
式典その他に関する部門

○ 財務委員会 (児玉省三副学長)
財務に関する部門

○ 年史編集委員会 (小笠原政敏宗教部長)
百年史刊行に関する部門

○ 記念行事委員会 (倉松功学生部長)
記念行事事業の実施に関する部門

それぞれの委員会では、本学院各校の教職員に委員・幹

事等を委嘱し、具体的な検討に入ることになった。

創立百周年を記念する一大行事を、真に意義のあるものとし、次の世紀への飛躍台とするためには、広く学内外の参加・協力を得ることが不可欠な条件であり、全教職員が英知が結集されなければならない。準備委員会では目下、記念行事の企画にあたり、全教職員および本学院関係者の積極的な意見を求めるためにアンケート調査を実施すべく準備を進めている。創立百周年を五年後にひかえた本学院の気運は一層の盛り上がりを見せてきた。

(『東北学院時報』三七九号 昭和五十六年十一月十五日)

三四五 情野鉄雄の小田忠夫に対する弔辞

(昭和五十七年三月二十七日)

弔 辞

葬儀委員長・東北学院大学長代行 情野 鉄雄

去る三月十三日、こつぜんとして御許に召された東北学院理事長、院長、大学長、同窓会長、故小田忠夫先生

の葬儀を、ここに執り行なうに至りましたことは、まことに哀惜の情に耐えません。

小田先生は、二十数代続いた神官の御家庭に生をうけられました。そして晩年に至るまで、その御郷里雄勝の法印神樂に愛着を有しておられました。しかし、御摂理によって、東北学院中部に学ばれ、伊藤嘉吉牧師、特に、梶原長八郎牧師の御指導を通して、聖書の真理に接し、旧制第二高等学校時代に受洗、キリスト者の道を歩まれることになりました。

東京帝国大学時代、先生は特に矢内原忠雄先生と大内兵衛先生に師事されました。このお二人の先生は、日本の現代史においてキリスト教とマルクシズムというまったく異なる思想的基盤に立ちながら、お互いに尊敬し合われた著名な社会科学者であります。このお二人の先生を、小田先生が生涯師と仰がれたことに先生の信仰と思想の軌跡を解く一つの鍵があるように思われます。小田先生が新人会に入会され、いわゆる労農派の周辺におられながら、賀川豊彦を尊敬していた所以もそこにあるかと存じます。

さて、小田先生は、大正十四年東大御卒業後、昭和十一年京城大学に御赴任なされるまで、後藤新平の主宰す

る東京市政調査会の研究員にられました。この会において、元NHK会長前田多門氏や都市問題の元老ともいうべき田辺重義氏の知遇を得るとともに、小田先生の御生涯の中で最も多産な研究生生活を送っておられます。特に、一九三二、三、四年、昭和七、八、九年、即ちヒトラー政権登場直前と直後の激動のドイツ、ベルリン大学における留学によって、ワイマール共和国の民主主義体制の崩壊を目撃され、自由と民主主義の大切さを身をもって体験されました。その体験の学問的成果が、帰国後半年余りで出版された労作『ナチスの経済政策』であります。京城大学時代は、御専門の財政学の角度からする論文を数多く発表され、その中の一つ「日本統治下における朝鮮の財政制度」は博士論文となっております。

本学院にとって最も重要なのは、この朝鮮時代の小田先生の御交友が、本学院大学の歩みに貢献するところ甚だ大であったことであります。そのことは、本学に新制大学が設立された時の安倍能成文部大臣、津曲元本学法学部教授、財政学の鈴木武雄、同三宅鹿之助両教授らのお名前をあげるによっても明らかであります。その他、小田先生の学院中部、旧制二高、東京大学時代の御学友が、いかに多く本大学の研究と教育に寄与された

か計り知れませぬ。

ところで、本学が、今日、幼稚園から中、高等学校、四学部の大学を有する一大総合学園に発展するに至るまでの道は、決して平坦なものではございませぬでした。学部増設とそれに伴うキリスト教主義大学としての教育、研究体制の確立、校地取得、施設・設備の整備・拡充等々、小田先生に仕えてそのご労苦を身近に見て参つた者の一人として、感無量なものがございます。特に、大学紛争における学園の異常事態と、その後の学園の経営、運営における小田先生が示されたキリスト教精神による教育理念の堅持と高潔な御人格に裏付けされた毅然たる態度とは、長く学院史に記録されるべきものと思ひます。

小田先生が、学長として三十三年、院長として三十一年、理事長として九年、東北学院に対する主の御委託に答えようとなされたその御歩みを、今詳かに語ることは出来ませんが、わが国は勿論世界的にも有数の長期にわたる大学長であり、学園長であつたことは紛れもない事実であります。衆望を担つて学園の長としてかくも長く在任された理由の一つは、小田先生が、小事に拘泥せず、大局を見極め、信念をもつて事に対処された点にあつた

と思ひます。その小田先生が、御逝去前に、後事を私どもに託した後、「これで安心した」と申されたことの重みを、今改めて噛みしめております。本学院は創立百周年を目前にしております。礼拝を中心に、本学院のあらゆる営みにキリスト教精神を一層顕在化し、キリスト教的教育と人材の育成に、また學術研究において、全国的にも有数の学園として発展するよう、協力一致して進むことを決意するものであります。

小田先生の信仰は、日頃の学校礼拝の奨励からも理解されるように、朴訥ともいふべき単純、純真なものであります。先生は御臨終の際、主の祈りを唱え、微笑みながら召された御由であります。み国への凱旋と称すべく、また、まことに善かつ忠なるキリストの使しもの御生涯に相応しいものであつたと思ひます。

最後に、御奥様をはじめ、御遺族御一同様の上に豊かな上よりの御慰めをお祈り致します。

（『東北学院時報』三八四号 昭和五十七年四月十五日）

三四六 情野鉄雄の院長就任式

(昭和五十七年五月十五日)

院長就任式を挙行

院長挨拶 建学の精神が不易の指導原理

東北学院創立九十六周年の記念日を迎えた五月十五日(土)、創立記念式兼院長就任式ならびに墓前礼拝が執り行なわれ、参列者一同改めて本学院創立の精神を自覚するとともに、新院長の就任を祝った。

創立九十六周年記念式は、故小田忠夫院長のあとを受け継いだ情野鉄雄新院長(第七代)の就任式を兼ねて、午前九時三十分から大学礼拝堂で挙行され、来賓、役員、同窓生、教職員、学生・生徒代表が参列した。

院長就任式が行なわれるのは三十一年振り。三校祖の肖像を前に小笠原政敏宗教部長の司式、斎藤秀夫常務理事立ち会いで、児玉省三理事長から情野院長に「校鍵」が授けられた。

就任の儀の後、児玉理事長が挨拶を述べ、新院長就任の経過を説明して情野院長を紹介、「東北学院の起源は、わずか六名の生徒と二名の教師で始まっているのであ

り、家族主義の理念が自然のうちに生まれ出たのであります。今日の母校は、その規模において昔とは比較にならないほどの膨張をとげてまいりましたが、この伝統的な遺風はどこまでも継続発展させていきたいものです。

今後、温かい同情と親愛の情をもつて、大家族である我々の学校の親としての院長を助け、学院発展のために協力されるように要望いたします。」と、教職員、学生・生徒に呼びかけるとともに、来賓各位のご援助を懇請された。

情野院長は、「三校祖の高邁な建学の精神、その後にく歴代院長の優れたご人格と赫々(かくかく)たる御業績等を想起するとき、わが身の至らぬこと、及ばぬことをつくづくと思ひ知らされる次第であります。しかしながらただ今、校鍵のご伝達ありがとうございました。かくなる上は、東北学院の眞の創立者であられる天の父なる御神のご指導とご援助を仰ぎたてまつるとともに、満堂の皆様のご鞭撻とご協力を切にお願い申し上げます。かくして私は、伝統の建学の精神を変わることなき指導原理とし、時代のいかなる風にも耐え、思想の波をも切り抜けて、創立百周年を超えて主イエスの国とともに、永久に栄えることのできる東北学院たらしめるよう、心を尽くし精神を尽く

す覚悟でございます。」と就任の挨拶、ひき続いて創立記念式の式辞を述べた。

（『東北学院時報』三八五号 昭和五十七年五月十五日）

三四七 創立百周年記念行事の具体化

（昭和五十七年九月十五日）

建学の原点に帰り新しい百年を展望

来る昭和六十一年をもって創立百周年を迎える本学院では、昨年、東北学院創立百周年記念行事運営委員会、同準備委員会が組織され、創立百周年記念行事の準備に着手した。その後、審議を重ねた結果、この秋からはいよいよ具体的な検討に移る予定である。

東北学院創立百周年記念行事準備委員会は、昨年末、衆知を結集して活気ある充実した記念行事と世紀の事業に相応しい企画を立てるため、本学院全教職員および関係者を対象とした「東北学院百周年記念行事に関するア

ンケート」を実施した。専門委員会の一つである百年史編集委員会では、編集主任の出村彰文学部教授を北米に派遣するなど、資料の調査・収集に努めてきた。

ところが、百周年に向けての動きも本格化した矢先の去る三月、理事長・院長・学長・同窓会長の小田忠夫先生が急逝、運営委員会委員長として百周年記念行事に熱意を込められていた先生だけに、本事業にとつても大きな痛手となった。しかし、故小田先生の遺徳に報いるためにも記念行事を成功させなければならないと、運営委員会委員長に情野鉄雄院長、準備委員会委員長に児玉省三副学長があたり、審議を重ねて来た。

六月十七日に開かれた第五回準備委員会では、先のアンケートの結果が報告された。総務・百年史編集・記念行事の各専門委員会は、アンケートに寄せられた要望や意見を参考に、今秋からそれぞれ具体的な企画立案に入る予定で、来年の創立記念日までに費用の概算が提出されることになる。また、百年史編集委員からは、百年史編集の基本方針・目標・資料収集方針等が報告された。

「東北学院百周年記念行事に関するアンケート」に寄せられた記念行事ならびに事業の内容は次のとおり。

- (1) 教育環境の整備充実 (2) 研究環境の整備充実 (3) 教育研究スタッフの充実 (4) 記念式典 (5) 「目で見る百年史」作成 (6) 研究所の統合整備 (7) 記念講演・映画・演劇および音楽会の開催 (8) 大学の一部分の泉校地への移転 (9) 留学制度の充実(院生・学生・生徒の留学、海外からの受け入れ) (10) 図書館の拡充整備 (11) 回顧展示会 (12) 東北の総合的研究 (13) 生涯教育等公開講座の設置 (14) 情報センターの設置 (15) 記念祝賀会およびパレード (16) 小学校の併設を含む総合学園の建設 (17) スポーツの招待試合 (18) ゼミセンターの設置 (19) 記念映画・レコード(記念祝歌)の製作 (20) 記念学会誘致
- (21) 記念祝賀運動会 その他多くの意見が寄せられた。

(『東北学院時報』三八八号 昭和五十七年九月十五日)

三四八 情野鉄雄「新年のごあいさつ」

(昭和六十年一月十五日)

新年のごあいさつ

院長・学長 情野 鉄雄

皆さん、新年おめでとうございます。東北学院も来年は創立百周年を迎えますので、今年は記念事業や行事の具体化を進め、皆様にも逐次お知らせできるようお願いしております。

そのうち最も大きなことは、土樋キャンパスにある大学の一部を泉キャンパスに移そうとする計画であります。昭和五十六年の創立記念式の式辞の中で、当時の院長・学長の小田先生は将来への抱負として、学内の諸手続を経て、教養部を泉校地に移したいと述べられました。しかし、これは機なお熟せず、先生のご生存中には果たすことができませんでした。

おもえば東北学院大学は昭和二十四年文経学部として発足以来三十六年、その間に文学部・経済学部に分離するとともに多賀城市に工学部を開設し、さらに法学部をも加え、文・経両学部には二部を併置してきました。これに伴い、教職員・学生の数も増加し、校地も増大いたしました。遺憾ながら、この校地が、中心校地である土樋に求めることができず、一つは多賀城市にあり、他は泉市にあるのです。文・経・法学部と二部のある土樋キャンパスが狭隘であるために、これまで学部増設や大学院の拡充等を申請する度に、文部省より指摘され、特に

泉校地の可及的速やかなる効果的利用を勧められ、申請認可の条件ともなり、毎年のように実施の有無の問い合わせが来るのであります。しかし泉校地が総合運動場として完成し、校舎を建築するための整地ができているとはいえ、現在のような交通事情では実行困難であることが訴えて待つてもらつて来ました。他方、仙台市の地下鉄工事もやがて完成を見ますので、その時は泉校地への交通事情もはるかによくなりますから、土樋からの一部移転を計画すべき時が到来いたしました。土樋は学生が千名以下の時に専門学校の校地と定められ、大学昇格後もほぼそのまま今日に至り八千の学生を容れるには狭すぎます。昭和六十一年創立百周年を迎える頃にこの移転を実施して、長年の宿案を達成いたしましたものであります。

移転案としては、まず教養部を移したい。そうなれば、土樋キャンパスの学生は一部については将来二分の一になるので、入学希望者が特に多い学部・学科の定員増をいたしたい。このためには特に教員の増員を必要とするが、教育・研究の質的向上につながることであり、是非実施いたしたい。

以上のことが可能であれば、次に泉キャンパスに新し

く教養学部を開設いたしたい。これを成功させることは更に困難を伴うかも知れないけれども、教養部移転を契機として本大学の基礎をさらに固め、より総合的な大学として地域社会の要望に応えたいと思ひます。現在の教養部所属の教員は新学部にも所属することになるでしょう。これらの事業遂行のための財政的見とおしもつけております。

土樋キャンパスからの一部移転は何時かは行なわなければならぬのであります。時あたかも高校卒業生の急増期に当たり、定員増や学部増設は比較的实施の易しい時期になります。本大学としてはいよいよ建学の精神に立脚しつつ、教育的使命を果たすべく努めてまいりたいのであります。

この事業を推進していただくために四十六名よりなる諮問委員会を発足させ、できる限り多くの方々のご協力をいただいでて原案をより完全なものとし、最終的に決定を下したものです。これは特に文経法学部の学生諸君とも深い関係をもつことでありますので、代表の諸君とよく話し合つて、推進いたしたいと願つております。

皆様のご協力を切望いたします。

『東北学院時報』四一四号 昭和六十年一月

十五日)

三四九 創立百周年記念行事概要

(昭和六十年五月十五日)

創立百周年まであと一年

記念行事の概要が決定

このほど、東北学院創立百周年記念行事の概要が決定した。百周年を一年後にひかえて、いよいよ行事の具体的な作業が本格化することになった。

各委員会等の行事の内容は次のとおり。

総務委員会

昭和六十一年五月十五日の本学院創立百周年記念日の記念式を中心に、早天祈禱会、校祖墓前礼拝、永眠者追悼礼拝(遺族午餐会を含む)、記念祝賀会(来賓・教職員)の二回)、記念品作製、展示会、「ホイイ伝」の発刊が決定した。各行事の実施にあたり、その内容について綿密な検討を進めるべき段階に移った。

百年史編集委員会

「百年史」の通史篇と資料篇、「写真誌」を発行するこ

ととし、^レ建学の原点に立ち帰り、新しい百年への展望を得る」という基本的な編集方針のもと、着々と作業が進められている。

写真誌については、既に写真の選定は完了、最終的なレイアウトの段階に入っており、来年三月末日の刊行が予定されている。通史篇と資料篇については、創立百周年の数年後を目標に、今後具体的な計画が検討されることになる。

記念行事委員会

「創立百周年を機に、本学院の存在を確かめ、将来に向かって教育と研究の使命を自覚し、東北・北海道の諸文化の発展に寄与すること」を目的に、著名人を招いての大講演会とシンポジウム、学内者による地方文化講演会の実施が決定された。

また、世界的な奏者を迎えてのパイプオルガン演奏会、NHK交響楽団演奏会(宮城学院と共催)、記念映画の製作、タイム・カプセルの埋設(創立二百周年時開封)が実施される。このほか、スポーツの招待試合として硬式野球・サッカー・バスケットボール・バレーボール・柔道・剣道が予定されているが、招待チーム等の関係で流動的な面もある。

その他

これら各委員会での行事の他、「文経法学会記念論集」、「工学会記念論集」の出版が決定されたことは特筆されよう。

また、中学高等学校は講演会・運動会・少年サッカー・剣道大会・音楽鑑賞、榴ヶ岡高等学校が講演会・学校祭・運動会・泉地区中学校招待球技大会・記念論集の発行、幼稚園では講演会・運動会が、それぞれ記念行事として計画されている。

（『東北学院時報』四一八号 昭和六十年五月十五日）

三五〇 創立百周年記念式における理事長児玉省三の挨拶

（昭和六十一年五月十五日）

本日はご多忙の中、文部大臣をはじめ、多数のご来賓および教職員諸賢のご臨席を賜り、東北学院創立百周年記念式典を挙行する運びとなりましたことは、本院にとりまして最高の榮譽であり、私の最も欣快とする所であ

ります。ここに謹んで感謝の意を表する次第であります。

本院は明治十九年、押川・ホーイ両先生により、伝道者養成を目的とする仙台神学校として設立されました。生徒は僅か六人でした。五年後、さらに内容を拡張し、校名も現在の東北学院と改称いたしました。その後も、日本の学制改変に伴い、幾多の変遷をたどりながら今日を迎えたのであります。現在、大学は文・経・法・工の四学部と二部を擁し、各学部の上には大学院が設置されており、二つの高等学校と中学校を合わせると、学生・生徒総数は一万五千人にも上り、同窓生は実に八万を数える大きな学園に発展いたしました。百年の昔、押川・ホーイ両先生によって播かれた一粒の種が、芽を出し、その枝を張る大樹に成長したことに對し、私共はまず、これを育て・導きたもう神に感謝しなければなりません。

一口に百年と申しますが、本院の歩んで参りましたこの百年はまさに激動の一世紀であつて、決して平坦な道ではありませんでした。そもそも、本院の施設・設備は創立の始めから、アメリカのドイツ改革派教会外国伝道局の補助金と、同信のキリスト信徒の祈りのこもった献金によって建てられたもので、当時の仙台には例を見な

い壮麗を誇つたものでした。それが大正八年三月の仙台大火で一朝にして廃墟に帰したのですが、第二代院長シユネーダー博士は同窓生らの緊密な協力を得て、三年後には再建されました。その後本院は順調に発展を続け、昭和元年には専門部校舎が完成、昭和七年には敬虔なキリスト信者ラーハウザー女史の浄財によつて、この記念礼拝堂が与えられたのであります。

しかるに、昭和二十年七月、戦災により中学校は木造建築物のみならず、煉瓦造りの校舎も焼失し、専門部も甚だしい損害を蒙つたのであります。このように二十数年の間に二度にわたつて大きな災害を受け、その度に物心両面の困窮は計り知れないものがありました。内外の教友、後援者の支援によつてこの試練に耐えて来たのであります。

困難は外面的・物的な面に留まりませんでした。創設以来、東北伝道の中心となつて五十年にわたり歴史と伝統を育んだ神学部は、戦争直前、ミッション・ボードの補助金削減による財政悪化のため、関係者の哀惜のうちに廃止のやむなきに至り、東京の日本神学校と合同する形でその歴史を閉じたのであります。さらに、太平洋戦争中、戦火が激しくなるに及んで、文科系学校としての

学院の歩みは日増しに困難の度を加え、学校の存立そのものまでも脅かされるに至りましたが、航空工業専門学校の設置によつて、辛うじて廃校を免れたのであります。

戦後は新しい教育理念に則つて学院もその制度を整え、新制の中学校、高等学校、大学を設置し、発展の礎を据えたのであります。爾来、大学・中高ともに研究・教育条件の整備・拡充を計つてきたのであります。大学に関しては、従来の土樋校地ではその狭さのゆえにいかんともなしがたく、新たな飛躍を求めて、泉校地に文・経・法の教養部の移転と学部の新設の計画を立てている次第であります。

いま、こうして百年の歴史を顧みますとき、今日の隆盛をもたらしたのは、それぞれの時代の先人諸氏が、国家・社会の情勢の変化に対処しながらも、本院教育の根本にあるキリスト教主義教育については、終始一貫その節を曲げなかつた不撓不屈の努力と信仰に他ならないことを思わざるをえません。ここに幾多の困難を経て本院の建学の精神を守り通した先人諸氏のご労苦に対し深甚なる謝意を表すると共に、このようにして培われた伝統を後世に伝えて行く責務の大きさを痛感する次第であります。

この時に当り、理事会は百周年記念事業として大学をはじめ高校、幼稚園などの施設を整備し、二十一世紀に十分対応できる研究・教育体制を整え、国際感覚のすぐれた人材を養成して、いささかなりとも社会の要請に応えたいと念願し、ただいまその実現に微力を尽くしているところであります。幸い、地元の方々から深いご理解を頂き、また財界をはじめ、各界各位のご好意あふれるご支援を賜っておりますことに、この席をお借りして、心より感謝申し上げます。

のちほど、長きにわたって物心両面のご援助を頂いて参りましたアメリカの教会を代表するグレゴリー、ノーサップの両先生、過去二十年間、本院の国際交流に多大のご協力を頂いている姉妹校アーサイナス大学学長のリクター先生、さらに創立以来、本院に派遣された十七人の宣教師の母校フランクリン・アンド・マーシャル大学学長パウエル先生の四人に、敬意と感謝をこめて名誉博士号を贈呈し、また長年の間、本院の発展に尽力された法人役員、名誉教授の方々、そして本院神学部を卒業し、牧会伝道に生涯を捧げてこられた牧師先生がたを表彰させて頂くことになっております。長い間、ほんとうにありがとうございました。

本院の第二世紀を迎えて、私共一同キリスト教信仰に燃え、キリスト教教育の使命達成のため、建学の原点に立ち帰り、次の時代に向かって一路前進する決意を新たにいたしたいと存じます。本日ご臨席の各位におかれましても、今後いつそのご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

三五一 創立百周年記念式における院長情野鉄雄の式辞

(昭和六十一年五月十五日)

この度、東北学院創立百周年記念式典を催しましたところ、多数のご来賓のご臨席をいただきましたことを厚く御礼申し上げます。特に、ご来賓として、創立者・初代院長押川方義先生のお孫様、もう一人の創立者、副院長ウィリアム・E・ホーイ先生のお孫様がたもご参列下さいましたことを、ご参集の皆様がたにもお知らせ申し上げます。共々にひとしお大きな御慶びを頂きたく存ずる次第でございます。

さらに、本学院よりも数年早く同じく押川先生によつ

て創立された県下の諸教会を代表される方々、また創立以来、物心両面にわたって本学院に援助を惜しまれなかつたアメリカの教会を代表する方々、同じ教会から生まれた姉妹校の兩大学の学長、加えてわざわざこの日のために日本旅行の企画を立てられ、本日この席においてのアメリカの同信の方々など、多数の海外からのお客様もお迎えできましたことは、私たちにとりましてもまことに大きな喜びでございます。この席をお借りして、厚く御礼申し上げます。

東北学院は百年前に、六人の生徒と押川・ホーイの兩先生によつて始められたのでありますが、創立五十年の一九三六年（昭和十一年）には一〇一六人の学生・生徒と一〇四人の教職員となり、更に五十年を経た今日では、学生・生徒・園児の数は一万五千人を超え、専任教職員も七百人を数えるに至りました。さらに卒業生の総数は、創立当時の仙台市の人口六万をはるかにしのぐ八万を数えております。身近な例で申し上げますと、宮城県および仙台市の職員総数はそれぞれ六千人を超えるよしであります。本学院の同窓生はその十パーセントを越しているとうかがっております。また、別の例で申し上げますと、創立者押川先生は伝道説教の会場などで、身の危

険を感じられることも再々であつたと伝えられておりますが、それと較べ、先週開かれた各地での文化講演会では、私たちは歓迎をお受けすることこそあつても、もはや迫害などは思いも寄らない時代となりました。『地の塩、世の光』としての同窓生各位の百年にわたる活躍の成果に他なりません。

このような過去の歴史と現況を背景に、東北学院の將來にわたる使命に思いをいたすことこそ、このめでたい日に与えられている私どもの課題かと存じます。創立者押川・ホーイ兩先生はもとより、私どもが学院中興の祖として敬愛する第二代院長シュネーダー先生の胸中にあつたのは、わが日本を救い、ことに東北を救う指導者を養成しようとする熱い祈りと望みでありました。すなわち、伝道と教育による東北の発展と救済が、先生がたの心から片時も離れることのない悲願でした。東北学院の使命であるキリスト教教育とは、あるいは直接にキリスト伝道のわざに携わるにせよ、あるいは地上における神の義と愛の実現のためこの世で奉仕するにせよ、若き日に天と地の創造者なる神を覚え、その生涯を神と人に献げる人材の育成に他なりません。東北学院はそのために創立されたのであります。

この目的を達成するためには、多くの方々の献身と献金とが必要でした。今に伝わる香味チカ女史の捧げた銀貨十二枚の物語は申すまでもなく、ホーイ先生ご夫妻の文字通り身銭を切つての学院経営のご労苦、シュネーダー先生ご夫妻が日本およびアメリカの友人たちの間で募金のために重ねられた辛苦の数々など、改めて申し上げますまでもないところであります。今は大学院校舎となりましたが、旧シュネーダー記念図書館のごときも、第二次世界大戦の悲劇を挟みながら、日本とアメリカの信仰による協力の目に見える象徴でありました。今や北山のキリスト教墓地に眠られるこれら先人たちの信仰は、今なお私たちに語りかけてやまないであります。そしてそれはすべて、本学院に課せられているキリスト教教育の使命達成のために他なりません。戦後、特に第六代院長小田忠夫先生は戦争による災害からの復旧・再建に全力を傾けられ、わが国の経済発展に伴う地域社会の本学院に対する要望にも応えて、今日の大をなすまでに至りましたが、建学の精神の堅持にはことさらなる意を用いられ、いささかなりとも揺らぐことなきを計られた点、私ども常々感謝と敬意を深くいたしている次第であります。

東北学院は創立百年を期し、昨年は旧シュネーダー記念図書館を大学院に改装したほか、幼稚園舎を新築し、本年四月には創立者押川方義先生の記念碑をご生誕の地松山市に建立する幸いに恵まれました。また、十年前にシュネーダー先生の伝記を書かれた本学メンセンディク教授の筆になる英文のホーイ先生の伝記を、出村彰教授による翻訳と共に刊行いたしました。

さらに『東北学院の一〇〇年』と題する写真誌も完成し、本日記念品の一部としてご高覧を願っております。また、中学・高等学校の新体育館の建設なども計画いたしておりますが、何と申しましても、最大の記念事業は泉校地への教養部の移転と、同校地での教養学部の新設であります。仙台市地下鉄の完成による交通事情の好転を機に、是非とも実現して、土樋校地の環境・施設の改善にも資したいと念じている次第でございます。

現在の東北学院の規模は、三校祖時代の小規模な行き届いた人格教育という観点から見ますと、あるいはなお多くが望まれるかとも存じますが、戦後の日本における教育の大衆化への強い願望をおもんばかり、さらには大規模化によって、押川先生以来望まれて参りました経営の自立も達成を見たことを思いますと、必ずしも否定的

側面のみとは申せないのであります。それよりもはるかに危険なのは、学院の世俗化の誘惑であります。そのためにも、創立以来守ってきた学校礼拝を中心とするキリスト教主義教育の根幹を少しも変えることなく、今後とも固く保持して参るつもりであります。また、現在の経営規模を保ちつつも、なお少人数教育の利点・長所を取り入れる努力を重ねるべく、教職員諸賢の研究・努力を期待いたしておる次第であります。

三校祖は実に愛国心に満ちておられました。それは今でも尊いものと思われまします。私たちもこの精神を純化し、真の意味での愛国心の涵養を計るにおろそかであつてはならないと確信いたします。しかも、同時に、私たちはわが国の歴史上前例のない国際化の時代を迎えております。すでに小田前院長は二十五年前に工学部を新設するに当たつて、「海外での要望にも応えられるよう、英語のできるクリスチャン・エンジニアを養成したい」との念願を抱いておられました。

このような要望はますます増大することと思われましますし、それに応える国際的責務もいよいよ大きいことと承知いたしております。しかし、それと共に、百年前にアメリカの青年たちが、競つて海を渡り、伝道の熱意に燃

えて日本にやつて来たように、私たちの卒業生も使命感に燃え立つて、地の極みまでも出て行く準備ともなる教育を本学院としても遂行して参りたいものであります。

このように私どもは、東北学院を今後とも長く育成・発展せしめるべく微力を傾けておる次第でございます。ここに改めて、内外よりのいつそうの暖かいご援助とご鞭撻をお願い申し上げます。本日、ここに創立百周年を迎えるに至りましたことを天の父なる神に感謝し、その御導きのもと、今後ともますます内容・外觀を整備・充実して、本学院建学の精神を後代に伝えるべく最善を尽くすことをお誓いいたしまして、式辞といたします。

三五一 創立百周年記念行事

(昭和六十一年五月九日)

百周年展示会

五月九日(金)―十八日(日) 藤崎デパート本館六階

名称「東北学院展―LIFE LIGHT LOVE―」
文化講演会

五月九日(金) 一八・三〇(三会場同時開催)

盛岡会場 岩手県自治会館

講師 高橋 正雄 (経済学部教授)

「日本と世界、この一〇〇年」

土戸 清 (文学部教授)

「現代教育の問題と東北学院」

山形会場 山交ビル七階

講師 佐藤 謙三 (経済学部長)

「戦後の日本経済、そして今」

出村 彰 (文学部教授)

「現代教育の問題と東北学院」

福島会場 福島市民会館

講師 鈴木ハツヨ (法学部教授)

「婚姻と家族、その危機と未来」

倉松 功 (文学部教授)

「現代教育の問題と東北学院」

記念講演会

五月十二日(月) 一八・三〇 電力ホール

講師 永井 道雄 (元文部大臣)

「世界史の中の日本の教育」

パイプオルガン演奏会

五月十三日(火) 一八・三〇 大学礼拝堂

演奏者 ヨハネス・ゲツファート

西ドイツ・ボン市クロイツ教会オルガニ

スト、カントル

西ドイツ・デュッセルドルフ市ロベルト

シューマン音楽学校講師

曲目 J・S・バッハ「前奏曲とフーガ変ホ長調」

G・F・ヘンデル「オルガン協奏曲へ長調」

W・A・モーツァルト「幻想曲へ短調」

J・ゲツファート「即興演奏」

C・フランク「交響的大曲」

早天祈禱会

五月十四日(水) 七・〇〇 中・高礼拝堂

次第 司式者 清水 浩三

前奏 奏楽者 渡辺 直道

讚美歌 二三四番A 一 同

聖書 コリント人への第一の手紙 第三章六節〜一一節 清水 浩三

祈禱 同 右

説教 「育て給う神に栄光を」

日本基督教団大河原教会牧師 千葉 大二

President Richard P. Richter

Ursinus College

Collegeville, Pennsylvania

President James L. Powell

Franklin and Marshall College

Lancaster, Pennsylvania

祝 禱

宗教部長 小笠原政敏

後 奏

功勞表彰者

(一) 役員として通算二十年(五期)以上在任者

本間 正雄(理事・監事として四十三年在任)

(二) 評議員として通算二十年(五期)以上在任者

岡 大門(二十一年在任)

大槻 七郎(二十一年在任)

洞口 茂(二十一年在任)

(三) 名誉教授 永井 健三(前工学部長)

(四) 牧会功勞者

赤石 義明(引退牧師・大正3年神学部卒)

野地 清(引退牧師・大正8年中学部卒)

成瀬 高(引退牧師・大正11年神学部卒)

菊地 賢治(引退牧師・大正12年神学部卒)

丹波源一郎(引退牧師・大正14年神学部卒)

深瀬 忠藏(引退牧師・昭和4年神学部卒)

木村喜代助(単立向山キリスト教会・

昭和6年神学部卒)

佐々木慶治郎(日本基督教団二戸教会・

祝 辞

文部大臣 海部 俊樹

宮城県知事 山本壮一郎

米国合同教会代表 ポール・R・グレゴリー

日本私立大学連盟代表

キリスト教学校教育同盟代表 大木金次郎

青山学院理事長・院長

米国アーサイナス大学学長

リチャード・P・リクター

東北学院同窓会代表 大槻 七郎

表彰 「功勞者表彰」 院長 情野 鉄雄

校歌斉唱 「永年勤続教職員表彰」 一 同

頌 栄 五四一番 一 同

昭和6年神学部卒)

本宮幸四郎(日本基督教団大平伝道所・

昭和6年神学部卒)

横坂 勝夫(引退牧師・昭和6年神学部卒)

今泉 三郎(日本基督教団八戸小中野教会・

昭和11年神学部卒)

千葉 大二(日本基督教団大河原教会・

昭和11年神学部卒)

小関敬之輔(日本基督教団白石教会・

昭和12年神学部卒)

桜井 重秀(引退牧師・昭和12年神学部卒)

村田 武(引退牧師・昭和13年神学部卒)

中山 年道(日本基督教団松原教会・

昭和15年神学部卒)

井関 守司(引退牧師・昭和16年神学部卒)

(五) 宣教師

ウイリアム・C・メンセンディク

(二十四年在任)

カール・F・シュワイツァー

(三十五年在任)

金山 文子(大学職員)

五十嵐英夫(榴ヶ岡高校教諭)

氏家 啓夫(中学高校教諭)

記念祝賀会

五月十五日(木)二・〇〇(来賓対象)

一七・〇〇(教職員対象)

大学九十周年記念館

次 第(来賓対象)

挨拶

院長 情野 鉄雄

祝 辞

日本私学振興財団理事長 清水 司

仙台市長 石井 亨

祝 宴 乾 杯

東北学院同窓会代表 近藤 龍一

祝 宴 乾 杯

謝 辞

懇 談

謝 辞

理事 斎藤 秀夫

次 第(教職員対象)

挨拶

司会者 板垣 嘉弘

祝 宴 乾 杯

院長 情野 鉄雄

祝 宴 乾 杯

中学・高等学校長 田口 誠一

永年勤続表彰者(二十五年勤続)

永年勤続表彰者(二十五年勤続)

懇談

榴ヶ岡高等学校長 清水 浩三

次第

開会の祈禱

司会者 四津 隆一

永眠者追悼礼拝

ウィリアム・C・メンセンディク

五月十六日(金)一〇・〇〇 大学礼拝堂

挨拶

院長 情野 鉄雄

次第

司式者 宗教部長 小笠原政敏

遺族代表挨拶

押川 昌一

奏楽者

伊澤 長俊

会食 祈禱

赤沢 昭三

前奏

一 同

懇談

讚美歌 二八〇番

一 同

閉会の挨拶

板垣 嘉弘

聖書 エペソ人への手紙

NHK交響楽団演奏会(宮城学院との共催)

五月十九日(月) 一八・三〇

第一章三節〜一四節 小笠原政敏

祈禱

同 右

宮城県民会館大ホール

説教 「聖霊による証印」

指揮者 森 正

前日本基督教団福島伊達教会牧師

ピアノ独奏者 浅野 繁

祈禱

本宮幸四郎

独唱者 渡部ジュディス、布田 庸子

追悼の辞

同 右

合唱団 佐々木正利、小野 浩資

頌栄 五四一番

理事長 児玉 省三

プロB 東北学院大学グリーククラブ・グリークラ

祝禱

一 同

宮城学院女子大学在学学生・卒業生

後奏

本宮幸四郎

曲目 J・ブラームス「大学祝典序曲」

遺族午餐会

F・リスト「ピアノ協奏曲

五月十六日(金) 一二・〇〇 東北学院同窓会館

第一番 愛ホ長調

W・A・モーツァルト

「ミサ曲ハ短調」

シンポジウム

九月二十五日(木) 一八・〇〇 電力ホール

テーマ 「二十一世紀に向けて——新東北創造論」

コーディネーター 草柳 大蔵(評論家)

パネリスト 梅原 猛(文部省国際日本文化研究

センター創設準備室長)

神津カンナ(エッセイスト)

佐藤利三郎(東北学院大学工学部長)

スポーツの招待試合

バスケットボール(大学・高校合同開催)

五月十日(土) 一三・〇〇

宮城県スポーツセンター

招待校 明治大学、京北高校

サッカー(大学・高校合同開催)

五月十八日(日) 一二・四五

宮城県宮陸上競技場

招待校 筑波大学、帝京高校

バレーボール

六月二十二日(日) 一二・〇〇

仙台市体育館

招待校 筑波大学

日ソ対抗男子仙台大会(主管)

硬式野球(大学・高校合同開催)

六月二十八日(土) 一三・〇〇 県営宮城球場

二十九日(日) 八・三〇

招待校 慶応義塾大学、青山学院大学

早稲田実業学校

剣道(第二十三回全日本基督教関係大学剣道大会

主管)

十月二十六日(日) 八・三〇 宮城県武道館

参加大学 十四校

創立者押川方義記念碑建立

四月二十一日(月) 一一・〇〇

松山東雲学園(愛媛県松山市)

碑銘「東北学院創立者押川方義先生記念碑」

献碑式次第

司会 法人本部室長 板垣 嘉弘

讚美歌 二八六番 一 同

聖書朗読 マタイによる福音書

第二十八章一六節〜二〇節 出村 彰

祈禱 同 右

式辞 理事長 児玉 省三

讚美歌 二三四番A 並びに遺族の献花

頌栄 五四一番 一 同

祝禱 出村 彰

「ホーイ伝」の発刊(五月十五日発行)

和文 『ウィリアム・ホーイ伝

——苦闘の生涯と東北学院の創立』

英文 *Not Without Struggle. The Story of Wil-*

liam E. Hoy and the Beginnings of Tohoku

Gakuen

「写真誌」の発刊(五月十五日発行)

名称 『東北学院の一〇〇年』

「百年史」の発刊

構成 通史篇(一九八九年五月十五日発刊)

資料篇(一九九〇年五月十五日発刊)

各論篇(一九九一年三月発刊予定)

記念論集の発行

文経法学会(三月一日発行)

「英語英文学」第七十七号、「教会と神学」

第十七号、「歴史学・地理学」第十六号、「経

済学」第百号、「法学」第二十八号、「一

般教育」第八十二号

工学会(二月二十八日発行)

「工学部研究報告」第二十卷第二号

記念レコードの制作(四月完成)

曲目 A面「君がいたから青春だった」

(百周年イメージ・ソング)

B面「素敵な人」

作詞者 藤 公之介

作曲者・歌 さとう宗幸

テレビ特別番組の制作・放映

五月十七日(土) 一五・〇〇〜一六・〇〇

仙台放送にて

タイトル「東北学院の一〇〇年」

記念映画の制作(一九八七年三月完成)

タイトル「東北学院の一〇〇年」(二十六分)

記念行事記録VTRの制作 (一九八七年十月完成)

タイトル「LIFE LIGHT LOVE」(四十七分)

タイムカプセルの埋設 (一九八七年三月二十九日)

場所 大学泉キャンパス定礎碑地下

収納物

一、「聖書」

二、「讚美歌」

三、法人関係資料

「東北学院規程集」「東北学院報」「東北学院時報」

「東北学院役員・教職員名簿」

四、大学関係資料

「大学院生並びに同窓生名簿」「出身県別在学生一

覧」「大学院要覧」「大学要覧」「学科課程表」「学

生証」「学生手帳」「学生生活」「学校案内」「徽章

」「卒業証書」「後援会資料」

五、中学校・高等学校関係資料

「教職員生徒名簿」「学校要覧」「身分証明書」「生

徒手帳」「進路資料」「学校案内」「徽章」「卒業証

書」

六、榴ヶ岡高等学校関係資料

「教職員生徒住所録」「学校要覧」「身分証明書」

「生徒手帳」「ガイドブックQ and A」「進学の手

引」「学校案内」「徽章」「卒業証書」

七、幼稚園関係資料

「園児名簿」「入園案内」「入園の心得」「保育証書」

「卒園アルバム」「新園舎スナップ写真」

八、同窓会関係資料

「会員名簿」「同窓会便覧」「TG旗」「ネクタイ

」「ネクタイピン」

九、一〇〇周年記念行事関係資料

「記念式典次第」「早天祈禱会・校祖墓前礼拝次第」

「永眠者追悼礼拝・遺族午餐会次第」「東北学院役

員・教職員永眠者追悼名簿」「各種記念行事ポスタ

ー」「各種記念行事パンフレット」「記念行事実施

要領」「記念行事日程表」「記念品(仙台平のテ

ブルセンター)」「東北学院の一〇〇年」「ウィリア

ム・ホーイ伝」「われら地の塩(河北新報社編)」

「記念映画フィルム」「記念行事記録写真アルバ

ム」「記念絵葉書」「記念レコード」「記念テレフォ

ンカード」「記念キーホルダー」

十、仙台市および周辺地域関係資料

「みやぎ県政だより」「仙台市政だより」「いずみ

市政だより」「たがじょう市政だより」「仙塩広域

都市計画総括図」「仙台都市計画総括図」「仙台都

市圏十七市町村の世帯数及び人口」「河北年鑑」「旬

刊東北経済」「統計時報」「市勢要覧・仙台」「教育

要覧・仙台」「仙台市基本構想」「仙台市都市景観

基本計画」「グラフせんだい」「政令指定都市推進

パンフレット」「一〇〇万人の地下鉄」「仙台市観光パンフレット」「仙台市絵葉書」「仙台ホテルのメニュー」

十一、新聞

「河北新報」「朝日新聞」「毎日新聞」「読売新聞」「サンケイ」「日本経済新聞」「日経産業新聞」「日経流通新聞」「日刊工業新聞」「日本証券新聞」「株式新聞」「建設新聞」「報知新聞」「日刊スポーツ」「The Japan Times」「Asahi Weekly」「Asahi Evening News」「The Daily Yomiuri」

(注・新聞は昭和六十一年五月十五日発行のもの、資料は昭和六十一年度のもの)

中学・高等学校記念行事

講演会 五月 八日(木) 一一・三〇 中・高礼拝堂
講師 石田 允之

(ソニー株式会社教育開発準備室部長)

「英国の教育と日本の教育」

運動会 五月十三日(火) 九・三〇 泉総合運動場
記念式 五月十五日(木) 八・二〇 中・高礼拝堂
記念講演 赤城 泰(遺愛学院院長)
「LIFE LIGHT LOVE」

次第

司会 宗方 司

前奏

渡邊 直道

讚美歌 二三四番A

一 同

聖書 ローマ人への手紙

第一章八節〜一七節

樋口 誠

祈禱

同 右

録音 シューネーダー院長

「我は福音を恥とせず」

校長式辞

田口 誠一

祝辞

岩手 勇喜

感謝状贈呈

田口 誠一

講師紹介

同 右

講演 「LIFE LIGHT LOVE」

遺愛学院院長 赤城 泰

校歌 一、二節

頌栄 五四二番

祝禱

竹井 一夫

後奏

感謝状受領者

岡 大門(奨学会)

月浦 テイ(月浦奨学会)

石垣芳之助(郡山英語賞)

高橋 正伍(月浦賞(6カ年皆勤))

岡部 衛(校医)

佐藤 良助(校医)

大越 高光(校医)

加賀 大助(剣道部師範)

星 智章(硬式野球部OB会長)

木皿 茂義(硬式野球部監督)

音楽会(岸田智史・倉橋ルイ子コンサート)

九月五日(金) 一三・〇〇 宮城県民会館

サッカー大会

十月十日(金) 九・〇〇 泉総合運動場

県内十二の少年サッカーチーム参加

招待校 真岡中学校(栃木県)

第五回TG剣友会少年剣道大会

十一月九日(日) 九・〇〇 宮城県武道館

県内外三十九チーム参加

招待校 秋田商業高校、山形南高校

仙台育英高校

榴ヶ岡高等学校記念行事

講演会 五月十二日(月) 一三・三〇 榴ヶ岡高礼拝堂

講師 佐藤利三郎(工学部長)

「電気と私」

運動会

五月十三日(火) 九・三〇 榴ヶ岡高運動場

記念式

五月十五日(木) 八・四〇 榴ヶ岡高礼拝堂

記念講演 ロバート・W・ノーザップ

(日本・北米教会協力協議会総幹事)

「全世界に宣べよ」

次第 司会 出村 彰

前奏 渡辺 悦子

讚美歌 二〇八番 一 同

主の祈り 一 同

聖書朗読 マルコによる福音書

第六章六節〜一三節b 出村 彰

祈禱 同 右

校長挨拶ならびに講師紹介 清水 浩三

講演「全世界に宣べよ」

日本・北米教会協力協議会総幹事

ロバート・W・ノーザップ

校歌 一、二節 一 同

頌栄 五四一番 一 同

祝 禱 ロバート・W・ノーザップ

後 奏

講師 長岡 輝子（演出家・女優）

「私の受けた家庭教育」

運動会 十月十日（金） 九・三〇 大学工学部グラウンド

講演会

五月二十三日（金） 一三・〇〇 榴ヶ岡高礼拝堂

講師 石田 允之

（ソニー株式会社教育開発準備室部長）

「英国の教育と日本の教育」

泉市中学校招待卓球大会

六月二十一日（土） 一三・〇〇 榴ヶ岡高体育館

市内八中学校参加

第十八回榴祭 七月五日（土）～六日（日） 榴ヶ岡高

テーマ 「快・汗・満・喫」

泉市中学校招待男子バスケット大会

八月四日（月）～五日（火） 榴ヶ岡高体育館

市内十中学校参加

記念論集の発行（一九八七年二月二十五日発行）

名 称 『榴ヶ岡高の思い出 一 その二十七年』

幼稚園記念行事

講演会 五月二十一日（水） 一四・三〇

大学工学部礼拝堂

(214)

preparation for the future leaders in our Christian schools and churches if the indigenous Church is to be strong enough to weather the conflicting ideological currents. The Board has therefore joined with other member boards of the Interboard Committee in bringing carefully screened outstanding Christian students and pastors from Japan to the U. S. for graduate study. At present six students are being sponsored by our Board in as many institutions. Two additional candidates have been approved for the academic year of 1950-51.

Priority Personnel Needs

Despite the increased training being given many Japanese nationals for the Christian enterprise, as stated above, the need for additional highly qualified missionaries is still urgent. A recent report of a special committee on "Survey of Personnel Needs" appointed by our Sendai mission group presents a staggering "order" for missionary personnel—a number to replace veteran servants of the Church now approaching the retirement age:

Evangelistic personnel: Single man or woman educationist for Morioka. *Ou District:* two couples (full-term). *Tohoku District:* two couples (full-term). *North Japan College:* one full-term English teacher; three short-term English teachers. *Miyagi College:* two full-term English teachers; three short-term English teachers; one full-term teacher of theory and piano; one full-term teacher of voice.

The annual budget estimate for the next triennium is \$158,873.82.

Gerard H. Gebhardt,
Secretary for Japan.

*(Blue Book for the General Synod of
the Evangelical and Reformed Church, June 21—28, 1950)*

the abundant opportunity for evangelism afforded through Christian education. Dr. Hansen writes that all of this year's graduates of Miyagi will be baptized Christians. The greatest difficulty lies in finding sufficient adult Christian sponsors for the many students accepting Christianity, a requirement of the Japanese Church. As for Bible teaching, Dr. Robert H. Gerhard, of North Japan College, reports: "I meet six different groups for Bible study each week and could meet many more interested in Christianity if there were time."

The International Christian University

When these lines are read the financial campaign in the U. S. and Canada for ten million dollars to establish this international, interdenominational university on a graduate level in Japan will be under way. The project has been called "the *greatest cooperative Christian undertaking of all time!*" Three years ago the enterprise was still only an "idea." Since then the Japan International Christian University Foundation has been organized and incorporated under the laws of the State of New York, the University Committee in Japan has raised over 154 million yen and has purchased the 350-acre site at Mitaka on which several substantial buildings already are being converted into major University units. Remarkable progress is being made in the setting up of the University standards and curricula and in the selection of the international faculty. The first department of the University will be a Graduate School of Education, to supply the great demand for adequately trained teachers, particularly for our Christian schools.

The Mission Boards have jointly subscribed \$1,600,000 toward this project and our own Church should proudly bear its share of the financial program in grateful remembrance of our sainted missionary, Dr. David B. Schneder, president of North Japan College, who was one of the two earliest proponents of such a Christian University in Japan, forty years ago! No one gave more time, thought and energetic support to the "dream" than did our own Dr. Schneder and this fact is recognized in the opening pages of the "case book" used in the present campaign for I. C. U. Should the campaign here fail of the total goal the results in Japan, particularly to the cause of Protestant Christianity, will be little short of disastrous. *We dare not fail to give Japan this Christian University!*

Overseas Scholarship Students

The present strategy of the Christian Mission in Japan demands the best possible

continue their schooling, many of them toward the ministry. During the Christmas and New Year holidays a group of our Sendai missionary teachers visited the Sendai Christian Children's Home. Miss Margaret Garner reports: "*The children were obviously clothed mostly by Church World Service—skirts, shoes, socks, dresses, suits, all had the stamp of being 'American' on them. This is one place where I know that the things you send for relief are really used and appreciated.*" Our missionaries plead for our Church folks to continue to send packages of clothing—particularly woolen garments—food, sugar, soaps, vitamins, chocolate, and English New Testaments (Revised Version), marked "gift," and sent to their Japanese addresses only (NOT to APO addresses).

Our Sendai Schools

When the last triennial report on Japan was prepared our Christian schools at Sendai were struggling to provide classroom and dormitory space for swollen enrollments. All but two of Miyagi's nine buildings had been destroyed by the American bombing of Sendai July 9-10, 1945, while North Japan College suffered a similar destruction. During the past triennium the following major reconstruction program has been authorized by the Board with funds provided by our Commission on World Service:

North Japan College: Natural Science Building, \$35,000.00; Dormitory, \$20,000.00; Lecture Hall, \$24,000.00; Study Hall, \$16,000.00; major repairs on other buildings, \$5,000.00.

Miyagi College: Recitation Hall (future senior high school building), \$50,000.00; two two-story dormitories, \$15,000.00; Junior High School Building, \$20,000.00; major repairs on other buildings, \$5,000.00.

While additional construction funds will still be needed at both schools, particularly to meet the greatly increased enrollments and the requirements of the full four-year college status recently acquired, the restoration of the above buildings has been of incalculable encouragement to trustees, faculty and students.

Statistics for our two Sendai schools for 1949 were: *North Japan College:* enrollment, 2,702 (including college, senior and junior high schools, day and night classes); teachers, 72; student fees, \$46,237.00; mission support, \$8,000.00. *Miyagi College:* enrollment 1,587 (college, 346; senior high school, 567; junior high school, 674); teachers, 77; student fees, \$29,432.00; mission support, \$5,555.00.

The personal reports of our missionary teachers at Sendai uniformly testify to

ary families with small children to remain in certain areas. The Gregorys are now stationed at Morioka, studying the Japanese language and at the same time directing evangelistic work in this district.

Rev. C. William Mensendiek and Mr. and Mrs. Richard L. Lammers expect to prepare for evangelistic service in Japan upon completion of their present three-year terms of teaching. Rev. Armin H. Kroehler, an appointee of the Board now pursuing a fellowship at the University of Zurich, Switzerland, and his fiancée, Miss Evelyn Schroer, expect to enter evangelistic work in Japan after their marriage this summer. While many additional evangelistic missionaries are undoubtedly needed if we are to win Japan to Christ during these days of unparalleled opportunity, the wisest strategy for the future calls for specially gifted and experienced missionary leaders to provide more adequate training in evangelism for the hundreds of Japanese Christian pastors eager to carry the Gospel to "every creature" in Japan.

Dr. and Mrs. Carl D. Kriete serve as our "liaison" in Tokyo, where Dr. Kriete fills important posts under the Council of Cooperation's School Section, in the Christian education program and as vice-chairman of the Board of Trustees of the new International Christian University. The Board has authorized the construction of a new and adequate residence for our missionaries in Tokyo.

Reconstruction and Relief

A truly remarkable amount of reconstruction, rehabilitation and relief has been accomplished in Japan during the past triennium. Much of the reconstruction of war-destroyed and damaged churches has been done cooperatively with funds pooled by the Board until today 171 war-damaged Protestant churches have been rebuilt, costing \$241,666, in foreign grants. The Board of International Missions rejoices in the share it has had in this general reconstruction of Christian institutions in Japan, funds for which have been made possible by the generous response of members of the E. and R. Church to the continuing appeals of our Commission on World Service.

From this same source have come the funds for the *relief* of full-time Christian workers in Japan as administered by Church World Service to pastors, teachers, social workers, etc. A particular form of relief which has been widely effective and deeply appreciated has been the scholarship assistance provided through the Interboard Committee for the children of our Christian pastors, enabling them to

well as to establish new congregations in "virgin" territory.

Personnel

Three years ago, when the report of the Board on Japan for the General Synod was prepared, only four E. and R. missionaries, the Ankeney and Krietes, were on the field with five additional missionaries expected to return to their posts by the summer of 1947. Today 20 missionaries are actually in Japan while Dr. and Mrs. Carl D. Kriete and Rev. and Mrs. W. Carl Nugent are temporarily in the U. S. on health furloughs. The sending of these 24 missionaries has entailed unbelievable shipping and housing problems, reacquiring our missionary residences in Sendai which had been "requisitioned" by the Occupational Forces, and the expensive trans-ocean shipment of scores of tons of food and furniture without which our missionaries could scarcely have existed. Obviously it has cost the Board as much to send and maintain these 24 Japan missionaries during the past triennium as was required for double that number ten years ago !

Educational Personnel: Teaching at North Japan College, Sendai, are Dr. and Mrs. Robert H. Gerhard, Mr. and Mrs. Carl S. Sipple, Rev. C. William Mensendiek, Miss Gertrude B. Hoy and Mr. and Mrs. Richard L. Lammers. Dr. Kate I. Hansen, Miss Lydia A. Lindsey, Mrs. Ella N. Nicodemus, Miss Margaret A. Garner, Miss Betty J. Hoffine, Miss Martha M. Rayne, Miss Audrey A. Youngen and Miss Elinor Zipf serve on the faculty of Miyagi College. Miss Hoy and Miss Zipf are temporary transferees from our China Mission, while Misses Garner, Hoffine, Rayne and Youngen are short-term appointees of the Board who arrived at Sendai last September. Mr. Lammers and Mr. Mensendiek are also under three-year appointment.

Evangelistic Personnel: Rev. and Mrs. Alfred Ankeney are assigned to Sendai as "evangelistic" missionaries but their responsibilities for the financial and property interests of our work since their return to the field in 1946, have left little time or energy for evangelistic contacts. Just recently the Board of Trustees of North Japan College elected Mr. Ankeney acting president of the college and the Board approved his accepting the office until a successor to the late Ko Demura is found. President Demura died Septemeber 27, 1949, after a brief illness.

Rev. and Mrs. Paul R. Gregory, former China missionaries, were transferred by the Board to our Japan field a year ago after having first gone to Japan on a temporary basis when the political upheaval in China made it unsafe for mission-

246. 福音・改革派教会全国總會國際伝道局報告(日本關係)(1950年6月21日~28日)

JAPAN

The Christian Church has been fully alerted to the fact that in no other land and at no other period since the first century has the opportunity for Christianity been as abundant and ubiquitous and at the same time *urgent* as in Japan today. Dr. William C. Kerr, veteran missionary-statesman to the Orient, epitomizes the challenge of the "New Japan" in a sentence in his recent book, *Japan Begins Again*. "Christianity has its *supreme* and possibly *last chance* to win thin nation!" says this author. Recent visitors to Japan, including John R. Mott and E. Stanley Jones, all agree that in Japan "there are no doors—the whole house is down!" The same doors are "open," however, to the competing challenge of Communism, Nationalism and an insidious sordid secularism and unless Christian forces move swiftly and with adequate personnel, equipment, strategy and funds, the "day of opportunity" will pass and the Church once more will have failed of its "manifest destiny!"

Three Years' Progress

The United Strategy.—In 1947 the Interboard Committee for Christian work in Japan, with offices in New York, and the Council of Cooperation, in Tokyo, were in the "dream" stage with many major steps in organization still to be perfected. Today the joint accomplishments of these two agencies, representing ten cooperating foreign mission boards of eight major denominations in the U. S. and Canada and an even larger number of Communions in Japan, have been such that no suggestion of "going back" to the old separatist strategy could hope to gain more than minimal support. Evidences of the substantial nature of the union effected in Japan are to be found in the purchase of a permanent national Protestant headquarters building in Tokyo; the purchase of a new campus and the erection of new buildings for the Union Theological Seminary at Tokyo, with adequate support assured for the three other seminaries which train ministers for the Church of Christ, the launching of the work of the Cooperative Evangelistic Committee of the Council of Cooperation, which is really a "Home Missions" Committee of the Council, to insure the conservation of existing congregations in justifiable areas as

in Japan late in February, 1947.

Dr. and Mrs. Robert Gerhard will sail March 25, after having faced the regular travel difficulties encountered in going to Japan today. Dr. Kate I. Hansen, Miss Lydia Lindsey and Miss Eleanor Porter, now on furlough, expect to be on the campus of Miyagi for the school term which opens in July.

Requests have been received from Dr. Kriete and Japanese Christian co-workers for former missionaries to return for evangelistic as well as for educational work at the earliest possible time.

The following missionaries are on furlough in the United States: Miss Mary E. Gerhard and Mr. and Mrs. Carl S. Sipple; on leave of absence: Mrs. F. B. Nicodemus and Rev. and Mrs. W. Carl Nugent; under appointment: Rev. and Mrs. Alfred V. Kurz.

The Outlook for the Future

It is natural that some change should be taking place in the attitude of the public toward the military occupation. On the whole, however, the attitude is remarkably favorable. Certainly there is a widespread feeling that the former militaristic program of the Japanese nation was wrong and that a new way of life must be found.

Dr. Luman J. Shafer writes that the Japanese are "considerably confused by the new order of things. They do not know how to use freedom and they do not yet understand the meaning of democracy. The government is still in the hands of people trained in the old bureaucratic order and it will take some time, in the nature of the case, to develop new leaders who will understand what it is all about. . . . It is a race between liberal democracy and communism.

"Attendance on shrines is about ten per cent of normal. . . . Buddhism is in confusion. Now that government pressure is off, Buddhism has split up into some eighty divisions and there is little public interest in this religion."

There is a great spiritual vacuum in Japan today. Christianity has an unparalleled opportunity to fill this emptiness.

The estimated annual budget for the next triennium is \$62,585.00.

Dobbs F. Ehlman,
Secretary for Japan.

*(Blue Book for the General Synod of
the Evangelical and Reformed Church, July 9—16, 1947)*

Property Damage

The property loss sustained by our Japan Mission was very heavy. The great air raid carried out by American B-29 bombers during the night of July 9-10, 1945, left much of Sendai in ruins. "Unfortunately that part of the city in which North Japan College and Miyagi College are located was hardest hit. Of Miyagi nine buildings, but two still stand. They are the new auditorium and the college department building. North Japan college, too, has but two buildings intact—the splendid Rahausser Memorial Chapel and the administration building—besides one frame building nearby. The large Boy's Middle School has been burned and only the shell remains. A number of our churches in Sendai, too, fell victim to this great bombing raid, as did also missionary residences and the homes of many of our Christian people."

The Kanda Church in Tokyo was destroyed as well as church property in Aomori and in many other Japanese cities. Worship services are being held in many instances under great handicaps and hardships.

After his first trip to Sendai in July, Dr. Kriete wrote: "Mr. Nishiyama has gone on quite aggressively putting the school into shape, and has already enough class rooms prepared for his entire school of 1,580. This has enabled Miyagi College to be the first institution to restore its equipment partially and has given him considerable prestige in the community. I think there is no other school which has so quickly set itself up for its work. This has cost a great deal of money of course. . . . The cost of this rebuilding has run into nearly one and a half million yen, whatever that may mean. You can figure it out at the rate of 15 to 1, the official rate, but that gives you no idea of the actual lack of value of the yen." Part of this money was gotten through acting quickly in order to get insurance before it was frozen by the government. Much money was either loaned or given to the school.

Missionaries Soon to Return

Dr. and Mrs. Kriete, now in Tokyo, will probably soon return to Sendai in order to have more close association with our educational and evangelistic work in that city. During the autumn of 1946, the Rev. and Mrs. Alfred Ankeney spent weeks in trying to get steamship booking as well as to meet all of the requirements for military clearance for entrance into Japan. In addition to this, the license requirements for taking an adequate supply of food had to be met. They arrived

and nearly 500 churches have been destroyed. Some good-sized cities are without a single place of worship and the countryside is today as before almost without Christian institutions, for the Japanese Church never really penetrated to country villages. The minister is weary and harassed by financial problems. A survey made of 694 ministers in the summer of 1946 yielded the following results: The average living cost amounted to ¥757.19 per month; against this the average salary paid by the Church came to ¥157.18, the average outside income obtained by teaching work for SCAP, etc., was ¥267.27, leaving an average monthly deficit of ¥332.74. . . . It is perfectly clear that, while these men are working to make a living, they are not carrying on their church work, except at an absolute minimum, and consequently, the Church is not making the impact on the situation that is demanded.”

But there is much that is encouraging. Christian and non-Christian people alike are convinced that the old religions cannot meet the present situation creatively. Members of the Imperial Household are studying the Bible, in one case under the direction of a Christian pastor. The military authorities agree that real democracy cannot be taught apart from the principles of the Christian faith. There is a wistful interest in Christianity among the masses of the people. Although some churches are poorly attended, others are full to overflowing.

The first missionaries to return to Japan consisted of a group of six representing the Japan Committee of the Foreign Missions Conference. As a part of this Commission of Six, Dr. Carl D. Kriete returned last June to be joined by Mrs. Kriete in the autumn. Much of Dr. Kriete's time has been given to cooperative work with other Christian forces in Japan, endeavoring to consolidate Christian resources and efforts in meeting the colossal needs for spiritual and material rehabilitation. Dr. Kriete writes, “As time goes on the demands on each of us become heavier, and there are more and more problems to discuss together.”

At present the Christian forces in Japan are considering the establishment of a Christian University in Japan to be located at Tokyo under the cooperation of the Foreign Missions Conference and the Federal Council of Churches, “including an immediate campaign for funds totalling not less than \$5,000,000 nor more than \$15,000,000 for the support of the proposed institution in its initial stages.” Trained national leaders in both the natural and social sciences as well as in liberal arts courses are needed, and a high grade of university education is necessary to supply this Christian leadership.

triotis by this war, we are fully conscious of the new meaning of the Cross pressing upon us. Whereby we have determined for the reconstruction of New Japan, founded upon the Cross of Jesus, to look forward to a day of a moral world order to be realized on this earth.

“We pray that the All Japan Christian Convention being held on this day of Pentecost may become the dawn of a new day for the forward movement of our churches and the revival of faith.

“Through the consolidation of all Christian forces in Japan, and taking upon ourselves the burden and agony of our war-stricken fellow compatriots, we have firmly resolved to give ourselves in service to them by sharing their hunger, their bewilderment and their sorrow, and to give them hope, faith and love in Christ.

“Therefore we hereby inaugurate a three-year nation-wide evangelistic campaign for the reconstruction of New Japan, and solemnly resolve and declare:

“First, to Christianize Japan based upon the Cross of Christ.

“Second, to do our uttermost to save eighty million compatriots from the menace of impending starvation.”

Of the 829 Protestant missionaries in Japan in 1936, 587 were from the United States. It was through our military might that the first atomic bomb was dropped at Hiroshima, August 6, 1945. It is, therefore, on the Christian forces within our own land today that the main responsibility rests to go to the assistance of the Church in Japan.

Present Conditions

Dr. Luman J. Shafer has recently written, after visiting Japan, that “the churches in America need to come to the aid of the Church in Japan on a much larger scale than has hitherto been contemplated. Funds for the evangelistic campaign are coming in very slowly in Japan and this program should be aided with American funds. The Kyodan (Church of Christ in Japan) building is in a disgraceful state of repair which cannot be remedied locally for some time. The Kyodan itself closed the year with a deficit of ¥100,000 and we will need to help here, also, if the Church is to continue to function. But more important than all else is the relief of the ministers. The General Secretary of the Kyodan estimates that ¥100,000 would be needed monthly to enable the ministers to give up outside employment and confine themselves to church work. This is basic to all else.

“There are today 189,000 Protestant Christians. Congregations are dispersed

the crew right after breakfast and got our shots from a pair of Red Cross man who came aboard. Both our vaccinations “took” and the typhus shots gave us the usual nasty reaction during the next 36 hours. We would have been happier without them, but this is typhus season and small pox is still to be found here and there so it is well to be on the safe side.

We had a wild bumpy ride to Tokyo over roads packed with holes and lined on each side with stretches of bombed out areas. In fact, most of the areas are bombed out. In Tokyo we were taken to one of the 3 “mission billets,” in each of which several couples are living. The house in which we are was a missionary residence which we had last visited as dinner guests. At that time it was nicely decorated. Now there is an odd assemblage of furniture, the bathroom is useless, electricity feeble, water supply a trickle. In the dining room, which is also the living room and serves as a family gathering place, there is a little stove in which is burned whatever can be scratched together. The bed rooms are icy cold. We are finding out how hard it is to keep clean and respectable when facilities are scarce and life rigorous. The army of occupation burns quantities of electricity and uses gallons of water freely, hence, the rest of the city suffers. All the lost buildings and homes are [以下、原稿欠落]

245. 福音・改革派教会全国總會國際伝道局報告(日本關係)(1947年7月9日~16日)

JAPAN

Many important events have taken place in Japan since the American occupation in August, 1945. Perhaps nothing is more significant, from a Christian point of view, than a declaration of faith made by the *All Japan Christian Convention* held at Aoyama Gakuin in Tokyo, June 6, 1946. Out of a free will, this Assembly made the following pronouncement of repentance and dedication:

“We, the people of Japan, feel deeply responsible for this great war just ended. Especially we, who profess the Gospel of Peace, do hereby express our profound reflection, confession and repentance. We believe, however, our Heavenly Father of infinite love and forgiveness will grant us sufficient grace to find a new way of life and the revival of faith.

“Confronting the immediate and unspeakable suffering and loss of our compa-

6100 tons, which would have been just fine on a smooth ocean. But it was February, and we went through a sort of purgatory of seasickness, thankful nevertheless that we could be together in a nice cabin with our own washing & toilet facilities. On the President Line boats, men and women are separated and herded into large common rooms where they travel like cattle. So we really traveled in luxury, and felt we could have been much more miserable than we were. There was a pleasant little Chinese steward who brought us our meals. After the first three days we were able to keep food down if we stayed on our backs; altogether we were up and dressed only four days out of the 16 we spent on board ! Fortunately the last three days of the voyage were pretty calm.

Finally on the early morning of Feb. 26 we looked out of the porthole and saw lights on the horizon. There were the shores of Japan ! We got up soon, dressed and finished packing and got our breakfast before the ship drew alongside the pier. There is no way of describing what a weary, dreary sight Yokohama was; heavy clouds hung low over the city, and the buildings that remain looked as grey and gloomy as the sky. On the pier there was one covered ware house, but only walls remained of other buildings. About the bay you could see a good many freighters flying different flags; here and there a derelict proked a few spars above the surface of the water.

It wasn't long before our boat began to unload. First the luggage came out and Alfred went down to see that all ours was assembled and put under the ware house roof temporarily. Swarming on the pier were Japanese dock hands dressed in the most nondescript of clothing—remnants of anything and everything, but mostly khaki color. Their hair was too long for lack of money to get it cut, no doubt, and stuck out in fringes under their caps. These miserable individuals were operating the little baggage trucks and 〔以下、一行欠落〕

Krietes thought our boat did not arrive till noon, so it was not till after lunch that they and Mr. Bovenkirk arrived to greet us. It was mighty good to see them again. Krietes both look well, though perhaps a little thin. They had come in a jeep and had a "weapon's carrier" with them into which our luggage could be loaded.

The steward brought out coffee for us while we chatted; then after taking care of certain custom's formalities, etc. we got away. I mustn't forget to tell you that we both had to be vaccinated and have typhus shots again, since the interim period designated by the army is only 60 days instead of six months. So we lined up with

Alfie out of prison to the internment camp. Oh God, after six months of fears and heartaches ! We had one more half day at home. We had no money to give Hisa & Nobu, so we tried to give them our goods. Even this was severely limited. We had to leave them, after unspeakably faithful and loyal service, not properly rewarded. This is what made us feel the worst.

On June 6 our whole mission (except for Miss Porter,) and three Dominican priests, left Sendai in the company of 5 police, for Yokohama. We could not find out why Miss Porter was left behind, but all our efforts to get her out failed. We were prisoners of war, and helpless. Left behind were the nuns, who had been returned to their convents, and still in the internment camp were the priests, the British couple, Miss Porter and Miss Alken (Baptist). We think they will be on the next boat.

After 10 days at Yokohama in the Bund hotel and a week aboard, we sailed on June 25. The Asama Maru was our boat. The trip now seems endless and we are sick of the ocean. Lorenzo Margues was a happy change and so will also be Rio. And now darlings, in the hope of seeing you comparatively soon, I will close this narrative. Pray that we may be brought in safety to America's shores. Our love to all, and most especially to you, dear ones.

Peg

P. S. We were taken out to Kitayama at our request to visit pama's graves before leaving. Clara, my sweet, please send a copy of this letter to my folks and to Dr. Casselman, if we should not make hot.

Alf.

Aug. 10, 1942 Made a dramatic entry into Rio harbor this A.M. at dawn and sunrise Magnificent !

244. A. M. アンケニー書簡(クララ・バーン宛 1947年3月2日)

March 2, 1947.

Dearest Ones,

Here we are at last in Japan, after all the months of uncertainty and work. It seems almost incredible ! We left San Francisco on Feb. 9 on a nice little boat of

our homes. However, at about 10 A.M. on Dec. 9, two policemen came to take us away somewhere. We were instructed to get a few clothes and bedding ready. Need I tell you with what a lost and helpless feeling we tried to think of things to take, not being told where we were going. I also packed a suitcase for poor Alfie. The evening before we had been ordered to send him bedding, and were told we could see him his meals. Toward late afternoon, the 2 policemen led Miss Porter and me away, leaving Onobusan and Omiosan weeping at the front door. O Hisa had been ordered to the police station with all the other foreigners' cooks and she received heaven only knows what terrifying grilling, for when I saw her next she looked as if she had been put through a wringer.

Well, we walked three squares to the Catholic Bishop's residence which had been selected as the internment camp, and there, almost within sight of home, we spent the next six months. We were put into a room with four other women, made our beds on mattresses on the floor, organized our lives so that things moved on as well as could be expected. There were 55 of us; the members of our mission, a British pair connected with the university, and the remainder were Canadian Dominican priests, nuns and lay brothers, Good Shepherd nuns, and Ursuline nuns. The lay sisters among the nuns did the cooking and we parceled out the other work among all of us. We had to bring cooking utensil, dishes, furniture etc. from the convents and from our homes. During the first three days the house was full except for people and bedding ! We ate fruit and bread & butter that we had brought along. Our servants were allowed to come on Saturdays to bring clean laundry, but we were not allowed any kind of communication with any friend and as the police sat close when the servants came, they could only occasionally give us news.

They kept Alfred entirely incommunicado but sometimes O Hisa saw him by chance when she took his meals to him.

Suddenly, at the end of May the Swiss representative came to Sendai and told me that we were scheduled for evacuation on first boat. I said we had not intended to evacuate, but he said Alfie would probably be kept in prison "for the duration" if we did not leave. As our money had run out for Alfie's food, I did not feel like facing this prospect. In addition, it seems we had no choice, for all the wheels moved toward our leaving regardless of our ideas. In fact, the very day the Swiss r. came, I had been told by one police to prepare to go home to get ready for leaving. They gave me 2 hot days to put things in order; still I was not finished (as you may imagine) and I felt at the end of my string. On June 3 they brought

the letters.

Now we are at last approaching Rio and thinking that perhaps an airmail letter would reach you before we do, I take a rusty pen in hand. To try to tell you of all the emotions and experiences we have had would of course be impossible in a letter, but I thought we might give you a skeleton idea of what has happened for after all, little as we like to admit it, there are at least two weeks of hazardous ocean to traverse before we may clasp each other again. It brings the tears to my eyes to think of the joy of that meeting for we little imagined that we should see each other again for several years. The message that you sent to us through the Red Cross never reached us, due, I am sure, to the obstructionism of the authorities in Sendai.

Well, darlings, here we are upon our way to America with a lost home and almost all of our earthly possessions behind us. Probably we shall never see them again. For the material possession we have little regret, but for all the broken associations with loved friends, our hearts are full of tears. Has there been a more tragic moment in our lives than when the train pulled out of Sendai station, leaving behind us on the platform a little group of brave friends who had dared to come to see us off—our good as gold servants, the dear Abes, Mrs. Fuse, Mrs. Nanjo etc. ! Even now I can't think of it with composure.

My little ones, when war broke out our dear Sendai suddenly became for us a strange and fearsome place. It was like one of those theatre stages that can sink down out of sight with all its properties, into another platform, all fitted out, rises to take its place. We were cut off from all communication. When we see you we will tell you the details, but briefly, this is what happened. On the morning of Dec. 8 we had some intimations by way of O Hisa's radio that a serious event had taken place. Alfred, however, went off to the office as usual, while I stayed in bed because of a cold. Somehow we did not feel that the news was real. But soon things began to pop. At about 9 o'clock six or seven men arrived to search our apt. and they carried away practically all the contents of Alfred's and my desks, and lots of other papers. Meanwhile at the office Alfred was arrested and taken to jail on charges of espionage ! This was so ridiculous that it would have been funny if it had not been so serious. At noon the searchers left our house, but a couple of police stayed till six and then went away, leaving us alone at last to talk things over. By us, I mean the servants and Miss Porter, whose apt. had also been gone through. We had been given the impression that we would be allowed to stay in

(198)

strategically located outside of the great population centers, to remain.

Such regions often have their own particular characteristics, and Christian ministers trained in their environments, and understanding their characteristics, will have advantage over others.

The presence of theological schools in some central cities of each of these regions will go far to make such a city an influential Christian center for that region.

A wise distribution of such Christian centers is far better than the concentration of everything in one center.

The outlying schools might be small in numbers but also a small number has its advantages as well as its disadvantages.

The removal of the seminary from its location in Sendai and the merging of it with the theological seminary in Tokyo would:

1. Weaken the whole evangelistic work in Tohoku.
2. Weaken the remaining part of the Tohoku Gakuin as a Christian institution of learning.
3. Weaken Sendai as a Christian center.
4. Weaken the interest of the Reformed Church in our whole educational work for young men in Sendai.

It would almost certainly remove Dr. Zaugg from our work in Sendai, and Dr. Zaugg is a necessary man to the future of North Japan College.

THE ADVANTAGES OF SUCH REMOVAL

A financial saving.

It would enhance interdenominational comity and good-will.

The prospect of going to a comparatively large school in Tokyo to study theology would make an appeal to our Middle School students that our own seminary does not.

220. A. M. アンケニー書簡(クララ・バーン宛 1942年8月8日)

August 8, 1942.

Imagine our joy upon arriving at Lorenzo Margues to receive letters from the Aunts and from Betty and we had a great feast. I must confess that we wept over

Christian leaders and teachers in Japan.

5. It would have the encouragement of numbers.
6. There would be more opportunities for student self-help.
7. It would save the Reformed Church about ¥25,000 a year.
8. It would bring a new impetus to the work of all the protestant churches in Japan.
9. It would help to restore confidence and support of Christian educational work in Japan on the part of its foreign supporters or patrons.
10. It would bring better trained men and new blood into our evangelistic work.
11. A few of our theological teachers would be released for other work, especially for work in the evangelistic field.
12. In a large institution specialized training could be given in such subjects and lines of work as religious education and social service.
13. It might help the spirit of independence in the churches of Sendai and vicinity. They would not depend so much upon the seminary for help. Lay workers would have to be trained, and this would be a good thing for these churches.
14. It would put the control of theological education in the hands of the nationals. We have no Japanese trained to take charge of our seminary.
15. The Sendai Nihon Kirisuto Kyokai could give themselves more whole-heartedly to their Christian work, instead of spending so much time and effort in attacking our seminary.

The above advantages would accrue, of course, only on condition that the new seminary would do a high grade of work.

202. D. B. シュネーダーの神学部合同に対する見解(1935年)

DR. SCHNEDER'S REASONS FOR NOT DESIRING THE UNION OF THE TOHOKU GAKUIN SEMINARY WITH THE UNION SEMINARY IN TOKYO

It is not wise that all future ministers of the Protestant Church should spend their six or more years of preparation amid the environments of very large cities.

It is much better to allow such seminaries (as North Japan College), as are

DISADVANTAGES OF SUCH A UNION PROJECT:

1. Loss of the prestige and influence of the Seminary in Sendai.
2. Loss of interest on the part of some of the members of the Reformed Church. However, if the new institution is self-supporting, this interest would not be so necessary.
3. Loss of the help of theological teachers and students in the churches of Sendai and vicinity.
4. Loss of the influence of the Seminary in the other departments of the Tohoku Gakuin. This, however, might be made up by having several full-time teachers of Bible and religion in those departments.
5. Difficulty of getting graduates of the new seminary to come to the Tohoku.
6. Temptation of students sent from the Tohoku to remain in the south. However, if Beneficiary Aid Fund is established, their return to the Tohoku could be made conditional.
7. Difficulty of workers trained in the south to adapt themselves to the life and spirit of the Tohoku.
8. The unity in our Evangelistic Work might be endangered, if such unity exists.
9. The control of our theological education would pass out of the hands of the Mission and Tohoku Gakuin. However, we might have representation on the Board of Trustees of the new institution.
10. The *raison d'être* of the Tohoku Gakuin would be gone. However, is this not rather a narrow conception of the scope and function of Christian education in Japan ?
11. The graduates of the new institution would have no feeling of loyalty to the Tohoku Gakuin, unless they were graduates of our Middle School or College Department.
12. The size of an institution does not necessarily insure superior quality of work.

ADVANTAGES OF SUCH A UNION PROJECT:

1. It would have a larger library.
2. It would develop a larger vision on the part of its students.
3. It would be a means of strengthening denominational comity and union. It would help to destroy our present sectionalism and sectarianism, and would be a witness to the unity of the Christian forces in eastern Japan.
4. It would bring students into closer contact with the strongest and best equipped

question, depending upon what arguments one chooses to consider important. I myself have gone on the assumption that the action of the Mission was acceptable to the Board in America and that the matter was settled so far as we were concerned. But do you want us to take up the question again? I am not anxious to do so, but would be willing if the Board in America thinks we should give the matter further consideration, or itself is inclined to favor the union project. As the matter now stands, I believe the Mission would merely reiterate its previous action.

Sometime ago the alumni of the school asked me to have my picture taken. I have an extra copy which I am enclosing. That's the way the old man looks today.

Sincerely yours,

E. H. Zaugg

A UNION THEOLOGICAL SEMINARY ?

Let us go on the assumption that a union of the following Theological Seminaries would be feasible: Aoyama, Kwanto, Lutheran, Nihon, and Tohoku. The new seminary to be located in Tokyo, either in close proximity to a Christian College that has good prospects of becoming a University, or in a separate location, or on a proposed site for a Christian University, if or when such an institution is established.

Each constituent body would be expected to make its proportionate contribution to the equipment and maintenance of the institution. Our part might possibly be somewhat as follows: From the sale of the Seminary property on Tamon-dori, which should amount to at least ¥150,000.00, invest ¥75,000 or ¥100,000 as an endowment to support two chairs, ¥25,000 to ¥30,000 for a dormitory for students from the Tohoku, and the remainder in a Beneficiary Fund to be administered by our Joint Evangelistic Board. It ought to be understood that in the new institution courses on the polity, history, and theology of the Nihon Kirisuto Kyokai should be given, and also special studies on rural problems and methods of work. Our theological library could be divided, books not owned by the other seminaries could be given to the new seminary, the duplicates could be used in our college library. No further support of the institution should be expected from the Reformed Church.

(194)

able ship we have ever been on, and everybody kind to us.

Last, but not least, *the sea is calm*,—to the great joy of especially Mrs. Schneder.

Well, we deserve it all only too poorly, but it is a great joy to know that such appreciation could be manifested of just straight forward Christian service day by day, throughout the years. It speaks well for these people.

Yours fraternally,

D. B. Schneder

201. E. H. ゾーグ書簡(キャッセルマン宛 1935年1月22日)

Sendai, Japan, Jan. 22nd, 1935.

Dear Dr. Casselman:— The papers which were presented at the Conference on Theological Training at Newark and which you kindly sent me, arrived about a week ago. I have gone through them all. I gave several to Miss Hansen to read—those which dealt particularly with the training of Bible Women. And the Japanese teachers in our Theological Department have read those that deal with the kind of ministers needed and with the question of two union seminaries for Japan. I am sending them on today to Rev. Keller, as you requested.

I am not quite sure as to what interpretation we should put upon your sending us this material. This is the second or third time that material of this nature has been sent us from the Board, and I am somewhat at a loss to know whether the intention is to have us take up again the question of uniting our seminary with a union institution such as is recommended in these papers. You will recall that, after the Laymen's Inquiry Report came out, our Mission took action unfavorable to the union project and recommending the continuance of the seminary here in Sendai. At that time, largely to clarify my own thinking on the subject, I jotted down the advantages and disadvantages of such a union project as they presented themselves to my mind. I gave a copy to Dr. Schneder to read, and he must have taken the matter quite seriously, for he then wrote out quite a long statement in favor of retaining the seminary here. It was chiefly on the basis of this statement that the Mission took its action. I did not distribute my notes to the members of the Mission, though two or three asked to see them (I am sending a copy of both statements to you).

I think you will see that a very good case can be made out on both sides of the

gathering. We do not know the outcome yet, but something worthwhile seems certain to result.

On my return to Sendai everything was tense with the pressure of endless preparation yet to be made to start, together with the pressure of calls that had to be made and the farewell meetings that had to be attended. Almost every noon and every evening gradually came to be filled up. On June 6th, I was called to the Prefectural Office, and there received from the Governor the Imperial Decoration of the Third Order of the Rising Sun. It is the same decoration that old Dr. Verbeck and Dr. Greene received. Next on the same day Mrs. Schneder and I went to the Farewell gotten up by the city and the Prefecture. It was a gathering of about three hundred of the leading people of the city—Governor, Mayor, other officials, the heads of all the leading schools, from the university down, school patrons, business men and friends, and also a number of Sendai missionaries. The distinctive feature of the meeting was the genuineness of feeling manifested, Genuine gratitude, and genuine love and esteem. It was all deeply gratifying.

Presents given, by the city, by the school patrons, by alumni, and by many other friends were so many as to be embarrassing.

Near the end I appeared at Chapel services of each Department of the school and gave teachers and students a parting message.

At last the day of departure came—June 19th, at 12:45 p.m. There was a vast throng out to bid us farewell,—our own over one thousand students, and about as many more from the city. It made a strange feeling creep over us. What had we done to merit such affection and esteem ?

In Tokyo we made a number of calls and accepted a number of invitations. The alumni farewell was the largest of our school ever held in Tokyo. The day before sailing we were invited to luncheon by the Mayor of Tokyo in his own house. Presents were again brought to us in large numbers. On the same day I had an interview with Premier Hirota.

On leaving Tokyo on the day of sailing a number of people were again out to see us off. Then at Yokohama as we boarded our steamer there was again a large throng out to bid us farewell, from near, and some also from far. Among them was the Mayor of Tokyo—Tokyo, now the second largest city—and his wife. Also Countess Date and her son.

Then, after the ship had started, we were told that we were transferred from second class to first-class, so now we are sailing first class on the most comfort-

Respectfully yours,

E. H. Zaugg

Chairman of the Informal Meeting of
the Board of Trustees of N. J. C.

197. D. B. シュネーダー書簡(キャッセルマン宛 1936年6月30日)

On board Tatsuta-Marui, June 30, 1936.

Dear Dr. Casselman:— I have not written to you for a long time. Almost day and night, up to our departure from Yokohama five days ago, we were kept busy. Even after starting I have been writing, writing, answering messages and thanking people for kindnesses. Only today do I feel that now I can begin to give attention to the country ahead of us instead of the country behind us.

Well, without boasting at all, I can say that the past fifty days have been wonderful. Beginning with our Fiftieth Anniversary Celebration, the Thanksgiving Service, with which the celebration began on May 10th, was broadcasted, and was hailed with delight by alumni and other friends from as far as Formosa, Korea and Manchuria, and from all over Japan proper. Throughout the celebration everything went well. And the attendance, especially of older alumni, was very gratifying. Lots of "old boys" were happy together once more. The city people and patrons of the institution attended in large numbers. The governor of the Prefecture attended four different ceremonies and functions. At one of the exhibits and bazars it is said that over ten thousand people passed in and out during the day. Then my own retirement, and Dr. Demura's inauguration constituted a solemn ceremony, and, finally, the Consecration Service on May 17th, was most impressive.

Altogether, far beyond my expectation, I believe that new interest and new determination was aroused in behalf of the institution on the part of Alumni, Patrons, the General Public, Officers, Faculties and Students.

After the Celebration I and Dr. Demura made another trip to Osaka to work for Endowment. Due to the extraordinary activity of two men who hail from North Japan a banquet was gotten up to introduce our Movement. Out of about one hundred invited, about twenty-five came; but those twenty-five men were the cream of the business men of that large commercial city. It was remarkable

burdens of his office. The informal meeting then came to a close.

In the afternoon at the formal meeting of the Board the following action was taken:

“Dr. Schneder having presented his resignation as President of the Tohoku Gakuin, it was voted to accept it to go into effect at the time of the celebration of the fiftieth anniversary, May 1936. With deep appreciation of Dr. Schneder’s past service, the Board feels the keenest regret that it must take this action at present, but does so with the hope that Dr. Schneder may devote his time and energy to work among the alumni.”

It was voted that Dr. Teizaburo Demura be elected as Acting President until Dr. Schneder’s resignation goes into effect and that the time of putting this arrangement into effect be left to the mutual convenience of Drs. Schneder and Demura.”

Now while the appointment of a president of the school, according to its charter, is entirely within the jurisdiction of the Board of Trustees, we feel that, in view of the fact that the Board of Foreign Missions is granting such a large subsidy each year to the school, the informal consent of the Board of Foreign Missions would be quite in order and greatly appreciated. The Japanese members in particular expressed themselves to this effect. So we would like to have the Board’s approval of Dr. Demura’s appointment as president.

Dr. Demura has his weak points, as everyone has, but we sincerely feel that he is the only one among the workers here, both Japanese and missionary, who can acceptably fill the position. He has a bright mind and a special knowledge of the technique of education. He has had many years of experience in the work of our school, and he knows better than anyone else the inside affairs of its administration. An alumnus himself, he has been the president of the alumni association for many years. He is an earnest Christian and church worker, an elder in the school church. His personal life is above reproach. His loyalty and devotion to the best interests of the school can not be questioned. His recent pledge of ¥500 out of a meager salary to the Endowment Fund of the school, as well as previous gifts of similar amounts, attests to his self-sacrificing spirit. We bespeak therefore for him the hearty cooperation of the Board of Foreign Missions, and we here on the field will try to help and support him in every way possible.

Sorry that this report has become so long, but I felt that the Board ought to be put in possession of this information, and that, if possible, your informal approval of our action should be secured.

great kindness to Dr. Schneder if he could be relieved from the heavy responsibilities of the presidency as soon as possible, but that on the other hand it would be anything but courteous to accept the resignation only a year before the celebration of 50th anniversary. The Japanese members in particular said that if the resignation were accepted now so soon before the 50th anniversary, the alumni of the school would certainly regard the action of the Board as inconsiderate. So the plan was adopted of appointing an Acting President now who should assume full responsibility for the management of the school, even though Dr. Schneder was still on the field, and who should become the permanent successor of Dr. Schneder after the 50th anniversary, Dr. Schneder to devote his time and efforts to work among the alumni and to the promotion of the Endowment Fund Campaign until the 50th anniversary when his resignation should go into effect.

The next question that came up then was as to who should be appointed Acting President. Some time was devoted to the discussion of the question as to whether he should be a missionary or a Japanese, but the Board seemed to be unanimously agreed that it should be a Japanese. But when it came to decide what Japanese should be selected, the Board would take no action before Dr. Schneder's wishes in the matter were consulted. (This is in accord with Japanese custom whenever a man lays down his office). So Rev. Kodaira and I were appointed a committee to consult Dr. Schneder on the matter. Dr. Schneder at first hesitated to say anything, merely venturing to state that he knew of no one outside of the Board of Trustees who was available or qualified for the position. But he would mention no name until we informed him that the Board had agreed that a Japanese should be appointed. Then he at once suggested the name of Dr. Demura as the one in his estimation who would be best fitted for the office. In so doing he did not want to dictate to the Board in any way; he wished the Board to feel free to choose whomsoever it thought best. When we returned with this information, the Board at once unanimously agreed to recommend Dr. Demura for appointment as Acting President, with the understanding that after the 50th anniversary he was to become Dr. Schneder's successor. That no more time was taken for discussing this point was due very largely to the fact that the majority of us had for years been looking forward to Dr. Demura's appointment as a natural thing.

After this the Board informally agreed that a missionary should be appointed as president of the Board of Trustees, and there was some talk of establishing a business office in the school so as to relieve Dr. Demura of some of the financial

that the Reformed Church would continue to support the school as it hitherto had done, and that we need not fear a lessening in the interest of the people in America toward the school so long as we had a large number of missionaries on the teaching staff. Dr. Hatai suggested that, if a Japanese were made president of the school, a missionary might be appointed president of the Board of Trustees, thus keeping up the contact with the church in America.

We noticed that the Japanese seemed to be very deeply concerned about the question as to whether a missionary or a Japanese should be chosen as Dr. Schneder's successor. I expressed myself as being in favor of the appointment of a Japanese if a suitable man for the position could be found, because, in view of the nationalistic feelings here at present and the extreme difficulty which a foreigner newly elected to the position would have in exercising authority over the students and Japanese teachers, it would be practically impossible for a missionary to act as the head of the school. At least his task would be tremendously difficult, and he would be working under a serious handicap simply because he was a foreigner. There was no dissenting voice to this sentiment, and the Japanese present seemed to be greatly relieved. Dr. Hatai added that the tendency recently has been for the Mission schools in Japan to appoint Japanese principals whenever possible.

On Sept. 13th the informal meeting of the Board of Trustees was held at 10:00 a.m. at the home of Dr. Schneder. Because of the personal nature of the item of business Dr. Schneder absented himself from the room. I was asked to serve as chairman of the meeting. The first question that came up was the reason or reasons for Dr. Schneder's resignation at this time, and Dr. Schneder was called in to give the Board this information. The Japanese members especially could not understand why Dr. Schneder did not wait until the 50th anniversary in 1936 before he resigned. Dr. Schneder then stated several reasons for his resignation, reasons which I need not repeat as he has doubtless written them to you also. One reason in particular which he gave was a statement which he had made to the Tokyo alumni several years ago when he was asked to continue his time of service, to the effect that he would continue as president of the school for two more years. In view of the fact that these two years had now elapsed, he felt that he should keep his promise made at that time.

The Board then informally discussed the question as to the time when the resignation should take effect. There was a general feeling that it would be a

written.

Dr. Schneder presented his resignation as president of North Japan College to the Board of Trustees at a meeting held in June of this year. The Board did not wish to act on such an important matter in haste, so it was decided to postpone action until the September meeting of the Board. It was also felt that a freer expression of the minds of the members of the Board could be obtained if the matter could be discussed at an informal meeting of the Board. Such an informal session was arranged for to take place just preceding our regular meeting on September 13th.

But a few days before this meeting several of the Japanese members of the Board, evidently desiring to find out the general attitude of the missionaries regarding the matter, called a meeting at the home of Dr. Hatai, at which Dr. Gerhard, Dr. Seiple, Dr. Demura, Prof. Igarashi, Dr. Hatai, and I were present. Dr. Hatai took the lead in the discussion. He said that they wanted to know two things in particular: first, whether Dr. Schneder really wanted to resign at this time, and secondly, whether in case a Japanese were appointed president the friends of the school in America would lose interest and perhaps discontinue their subsidy to the school.

To the first question we replied that several years ago when Dr. Schneder reached the retiring age and was asked to continue his service for several years longer, he had already spoken of his failing powers and of the fact that those whom he had in mind as possible successors to himself were advancing in age and should not be kept waiting much longer. It was perhaps chiefly for this reason, we thought, that he was resigning at present. We mentioned also the fact that Dr. Schneder always acted with deliberation, and so had doubtless come to the conclusion after much thought that this was the best time for him to resign. We could hardly conceive of his resignation as being a mere gesture. However, in view of the fact that Dr. Schneder had always been ready to serve whenever needed, we were of the opinion that if asked to serve a year or two longer, he might not refuse. It was agreed to ask Dr. Schneder directly at the informal meeting of the Board as to the reasons why he felt constrained to resign at this time.

As to the second question, we gave assurance to the Japanese present that, if the Board of Trustees decided that it was best to appoint a Japanese as president of the school, one who would maintain the Christian purpose of the school, and the matter were explained to the Board and to the churches in America, we believed

During their stay, at a meeting of the Board of Trustees of North Japan College I presented my resignation as president, in accordance with what I wrote you some months ago. The Board decided to postpone action until September, in order to have time to study the problem. There is a desire to have me continue until the Fiftieth Anniversary celebration in May, 1936, is over, so that the Endowment Fund Campaign may not be disturbed by a change in administration. The Endowment Fund Campaign, by the way, is being pushed. Though the times are not favorable, the people—alumni and others—are very friendly to the effort. It will be a hard pull, but we hope to succeed. The other day the Prime Minister promised a contribution. I and Deans Demura and Igarashi are planning to spend a good part of the summer campaigning.

Mrs. Schneder has been suffering a good deal with rheumatic pains, but is gradually improving. I myself often feel tired, but otherwise I seem all right. There has been a good deal of sickness in the Mission recently. We have our hard problems day by day, but we are wrestling with them with God's help.

With gratitude to God that He has placed you where you are, and with kindest regards,

Yours fraternally,

D. B. Schneder

193. E. H. ゾーグのシュネーダー院長辞任に関する報告(1934年10月31日)

REPORT ON DR. SCHNEDER'S RESIGNATION AS PRESIDENT OF
NORTH JAPAN COLLEGE AND PROVISION FOR THE FUTURE

Sendai, Japan, Oct. 31st, 1934.

To the Members of the Board of Foreign Missions of the Reformed Church in the U. S.,

Dear Brethren:— Dr. Schneder has already written you in regard to this matter, but there were certain phases of the proceedings with which he was unacquainted, because he was not present at the meetings. So I feel that a supplementary report should be made particularly to inform the Board of Foreign Missions as to the attitude of the Japanese members of the Board of Trustees toward the question. I am writing this with the consent of Dr. Schneder, and he has read what is here

1935, and especially sorry that at our recent Mission meeting we had to put in a request for the part of our total request which the Board thought it could not grant. I hope the Board can grant it without going back or breaking its program. But if not, perhaps, at least North Japan College could bear the strain.

What I want you to feel is that we *do* appreciate your and the Board's labor and sacrifice. We know that all are doing their utmost, and the Board's interests and ours are identical.

And now for the New year I pray God, that He may sustain you in health and in faith and courage. What a blessing it is that you were there, ready to take up the burden so wisely and vigorously, when Dr. Bartholomew laid it down.

Yours in Christ,

D. B. Schneder

192. D. B. シュネーダー書簡(キャッセルマン宛 1934年6月27日)

Sendai, Japan, June 27, 1934.

Dear Dr. Casselman:— Although my writing is infrequent, I am constantly mindful, and deeply appreciative, of your strenuous and heroic efforts to bring our Foreign Mission cause through its crisis, and leading it to a better day. I often speak of your encouraging attitude and earnest efforts to our Japanese co-workers. I pray that you may be preserved in health and spared long for the great task.

I also want to thank you, in behalf of Mrs. Schneder and myself for what you have so beautifully written about Mary, both in the "Messenger" and in the "Outlook of Missions." It is a comfort to us indeed, and it is a matter of deep thankfulness to God that her last illness and death are being used of God to still carry forward the work that she had to lay down so soon.

The visit of the David Millers is just over. They sailed a few days ago. Although they extended their stay beyond the original plan, we could have done still better by them, if their time had been still longer. But they got a pretty fair impression of the work, and will be in a position to do good service in the Home Church. Our people here were benefitted by their visit. In our schools their presence helped to make concrete the help that comes from the Christian people of America.

185. D. B. シュネーダー書簡(バーソロミュー宛 1931年10月16日)

Sendai, Japan, Oct. 16, 1931.

Dear Dr. Bartholomew:— I have just today learned that translations have gone to America of a very scurrilous letter that has been circulated about me here in Sendai and elsewhere. In all probability you have received a copy. As I wrote you before, our students and those backing them have gone to the utmost extremes in this school trouble. Of course the letter is practically all lies and slander, and numbers of people of the city say they are ashamed to look me in the face. It has been a bitter experience indeed; but we must forgive and trust and hope.

I am now able to report that we shall try to manage to get along next year with the amount of appropriation named in the mission minutes for North Japan College.

With kindest regards, I remain

Yours fraternally,

D. B. Schneder

188. D. B. シュネーダー書簡(キャッセルマン宛 1934年12月31日)

Kamakura, Japan, December 31, 1934.

Dear Brother Casselman:— This is New Year's Eve, but before the New Year dawns I want to write you my last letter of the year. I am here at Kamakura for a few days of very much needed rest.

The year 1934! It has been a hard year. First, for me and my dear ones, the departure from earth of our Loved One. Also for our Mission and for our schools and evangelistic work it has been a year of trials beyond precedent. I have not written all to you. And now the dangerous illness of our Dr. Noss!

But also with you and the Board it has been a hard year, how hard we can only surmise. How thankful I am that your health has held out, and how thankful I am for your wise, business-like, but positive and determined, attitude toward the future of the work of God in Japan and China. It is God that is needed here above all other things.

I am exceedingly sorry that we had to burden you with increased requests for

by calling special speakers. They wanted only their own kind, some of them being anti-church men; and the religious work of the College has in consequence seriously suffered in recent years. In the Seminary even a worse situation developed. Mr. Kakuda's followers impugned the orthodoxy of most of the professors, and carried on a propaganda among other students, and in general became more and more troublesome, so that the situation became almost intolerable. Finally, although we have come to realize that our College Church is our most powerful means of carrying out the religious purpose of North Japan College, and have been working hard for its success, Mr. Kakuda, in spite of repeated requests to the contrary, has more and more withdrawn himself from it, and has tried to undermine it by drawing away others also, both teachers and students, and getting them into another church with which he has been affiliating himself. In addition, it is a known fact that, while being a professor in the school and drawing his salary from it, he has been cultivating friendship with certain pastors and evangelists who have in recent years been antagonistic to the school, and now stand up for him.

School strikes, unfortunately, are not uncommon in Japan. Most schools for boys and young men, both government schools and Christian and other private schools, have had them. In recent years they have been made much worse through Communistic influences. But though they are common, they are exceedingly regrettable. They are harmful in every way. And in a Christian school, they are doubly harmful. A sad event indeed has come upon us. We foresaw its possibility when we took the action in reference to Mr. Kakuda. But we believed, and still believe, that it would have been still worse for the future of the institution to retain in it a trouble-maker.

This is a long letter, perhaps too long at this time when you are in the midst of great trouble of your own, which is at the same time our trouble also. But I thought it might be well for you to have this information for reference. We shall do our best, and we have many very loyal friends here in Sendai.

With earnest prayers for you and the Board in this time of stress, I remain

Yours fraternally,

D. B. Schneder

P. S. Oct. 12th. The school trouble is about settled, and lessons were resumed today with nearly all the students present.

D. B. S.

for some years been antagonistic to the school; by Mr. Kakuda himself; and by a layman, a close friend of Mr. Kakuda, who is given to going to violent extremes, and who has been openly and brazenly instigating and leading the students. The demands formulated by the students have been four in number: 1. The resignation of the president; 2. the resignation of Dean Demura; 3. the dissolution of the Board of Trustees and the formation of a new board within a week; 4. optional chapel attendance. The new Board of Trustees is to have student and professors' representation on it. There was no direct demand for the reinstatement of Mr. Kakuda, but that no doubt has been the main ulterior aim. The stand of both Board of Trustees and Faculty is to accede to none of these four demands.

The methods employed have been the strike methods familiar all over the world. It is clear that only a very small proportion of students were interested in the movement at first, but the rest were whipped into line and kept in line by the usual methods.

It has been gratifying that throughout the trouble the great majority of the patrons, practically all the alumni heard from, and the bulk of interested city people, have stood loyally by the school, and have deeply deprecated the occurrence of the trouble. The prefectural authorities here in Sendai and the Department of Education in Tokyo have repeatedly urged the school never to yield.

Mr. Kakuda himself, though formerly a Baptist, is a graduate of our Seminary. After some years of service in the Baptist denomination he went to America and studied for several years at Princeton and Harvard. At Princeton he became an ardent disciple of Prof. Machen. After his return to Japan he taught for several years in the College Department of the Baptist school in Yokohama. After the earthquake disaster of 1923 he was not continued there, and became a teacher in a country middle school in Yamagata prefecture. From there we called him six years ago to become teacher of the Bible in our College Department, he being given some work also in the Seminary. He is an ingratiating personality. But he has a tinge of abnormality about him, and has shown himself as given to scheming, with apparently the satisfaction of his own personal ambitions, as his ultimate object. While at first he did not manifest any extreme views in our institution, he gradually began to instil into such students as became his special followers an extreme, narrow and belligerent fundamentalism. His followers in the College became exceedingly critical of the school and its officers as being unsound in faith, and hindered the efforts of the authorities to further the religious life of the school

(Reading, Pa.), Business Administration.

*(Fifty Years of Foreign Missions of the Reformed Church
in the United States 1877—1927, pp. 93—99)*

184. D. B. シュネーダー書簡(バーソロミュー宛 1931年10月8日)

Sendai, Japan, Oct. 8, 1931.

Dear Dr. Bartholomew:— Mission Meeting is now over. It has been the longest and most strenuous mission meeting within my recollection. The feeling throughout was harmonious.

There are two items of action about which I want to write.

The first is about *next year's appropriation* for North Japan College. It is not quite certain yet that we can make a full ten per cent cut in the salaries of our teachers; we have to go somewhat by what is done in other schools. Also we are not yet certain of our income from tuition in our College Department, owing to the uncertainty of the outcome of our present trouble. But we shall do our best to stand by the figures named in the Budget.

The second item is about *myself as president of North Japan College*. I have been looking forward with eagerness to the time when I could, in accordance with the retiring rule of the Board, lay down the heavy burden. Yet if the Board decides to accede to the requests that are going to you from the faculties and alumni of the school, I will promise to consider the question in the light of what seems to be duty. But at most it can not be for long.

The school trouble, about which I wrote to you before, still continues. It is confined, however, to the College Department. There was a beginning of trouble in the Seminary, but the majority of the students stood up against it. But as to the College trouble, we, together with a committee of parents and alumni, have been wrestling with the situation to the utmost of our ability. School work has been suspended for seventeen days, and will be suspended for two days more. The prospects are that work can be resumed on the 12th.

The trouble was occasioned by the dismissal by our Board of Trustees of a Mr. Kakuda, as I wrote you before. The start of the trouble was made by a group of his special followers among the students, but openly abetted and backed by several city pastors with whom Mr. Kakuda has been in intimate relation, and who have

- 1921 Prof. George S. Noss, Sendai, Japan, Bowdoin College, Educational.
- 1921 Mrs. Marie M. Noss *nee* Geissinger, Stroudsburg, Pa.
- 1921 Miss Helen I. Weed, Mus. B., Iowa City, Ia., University of Kansas, Educational.
- 1921 Miss Gertrude E. Pamperrien, Cleveland, Ohio, Business Administration. Resigned, 1926.
- 1921 Miss Alliene S. DeChant, Abilene, Kansas, Hood College, Educational, Short-term teacher.
- 1922 Rev. Gilbert W. Schroer, New Knoxville, O., Mission House College, Mission House Theological Seminary, Kennedy School of Missions, Evangelistic.
- 1922 Mrs. Cornelia L. Schroer *nee* Rodeheffer, St. Marys, O., Heidelberg University.
- 1922 Mr. Ralph L. Holland, Upper Lehigh, Pa., Franklin and Marshall College, Educational. Resigned, 1923.
- 1922 Miss L. Aurelia Bolliger, Wilkes-Barre, Pa., Heidelberg University, University of Wisconsin, Educational.
- 1923 Miss Mary V. Hoffheins, Martinsburg, W. Va., Hood College, Peabody Institute, Educational, Short-term teacher.
- 1924 Miss Louise V. Bolliger, Wilkes-Barre, Pa., University of Wisconsin, Educational. Died at Sendai, Japan, February 19, 1925.
- 1924 Prof. David D. Baker, Clyde, O., Heidelberg University, McCormick Theological Seminary, Educational.
- 1923 Miss Helen E. Otte, Piqua, O., Heidelberg University, Educational. Married to Prof. David D. Baker, 1925.
- 1924 Miss Edith H. Huesing, Lafayette, Ind., Purdue University, Educational.
- 1924 Miss Katherine B. DeChant, Harrisburg, Pa., Hood College, Educational.
- 1925 Miss Elizabeth Suess, Karlsruhe, Germany, University of Wisconsin, Educational.
- 1925 Prof. Francis W. Weida, Manhattan, Kans., Gambier College, Educational, Short-term teacher.
- 1926 Miss Henrietta S. Cook, Sendai, Japan, Heidelberg University, Educational.
- 1926 Miss Heloise L. Wilson, Osage City, Kans., Chicago Musical College, Educational, Short-term teacher.
- 1926 Mrs. Laura B. Swartz, Elmsport, Pa., Inter-State Commercial College

- 1916 Miss Lola E. Lindsey, Coffeyville, Kan., University of Kansas, Educational, Short-term teacher.
- 1916 Miss Elsie Seymour, Cleveland, O., Western Reserve University, Educational, Short-term teacher.
- 1917 Prof. Oscar M. Stoudt, Quakertown, Pa., Franklin and Marshall College, Educational.
- 1917 Mrs. Alma M. Stoudt *nee* Rinker, Philadelphia, Pa.
- 1917 Mr. Isaac J. Fisher, Tehuacana, Texas, Heidelberg University, Business Administration. Resigned, 1923.
- 1918 Rev. Dewees F. Singley, Nuremburg, Pa., Ursinus College, Central Theological Seminary, Evangelistic. Resigned, 1925.
- 1918 Mrs. Ada Singley, *nee* Schlichter, Conshohocken, Pa., Ursinus College.
- 1918 Miss Mary E. Schneder, Sendai, Japan, Hood College, Mt. Holyoke College, Educational.
- 1918 Miss Mary A. Vornholt, Magley, Ind., Wisconsin State Normal School, Educational. Died in Sendai, Japan, March 2, 1920.
- 1919 Rev. Frank L. Fesperman, Salisbury, N. C., Catawba College, Central Theological Seminary, Evangelistic.
- 1919 Mrs. Maye Fesperman *nee* Fisher, Concord, N. C., Catawba College.
- 1919 Prof. Arthur D. Smith, M.A., Bedford, Pa., Franklin and Marshall College, Columbia University, Educational.
- 1921 Mrs. Ruth M. Smith *nee* Kuenzel, New Bremen, O., Oberlin Kindergarten Training School.
- 1919 Miss Rosina E. Black, Akron, O., Heidelberg University, Kennedy School of Missions, Educational. Resigned, 1921.
- 1919 Miss Elizabeth C. Zetty, Perkasio, Pa., Allentown College for Women, Kennedy School of Missions, Educational. Resigned, 1922.
- 1920 Miss Catherine L. Nau, Canton, O., University of Pittsburgh, Educational, Short-term teacher.
- 1920 Rev. W. Carl Nugent, Altoona, Pa., Franklin and Marshall College, Theological Seminary (Lancaster), Evangelistic.
- 1920 Mrs. Pearl A. Nugent *nee* Graul, Mt. Pleasant, Pa., Bucknell University.
- 1920 Rev. I. George Nace, Marburg, Pa., Franklin and Marshall College, Theological Seminary (Lancaster), Evangelistic.
- 1920 Mrs. Mary R. Nace *nee* Keifer, Greenville, Pa., Hood College.

- 1906 Mrs. Nina Zaugg *nee* Cantieny, Lima, O.
- 1907 Miss Kate I. Hansen, Mus. B., Logan, Kansas, University of Kansas, Educational.
- 1907 Miss Lydia A. Lindsey, M. A., Cherryvale, Kansas, University of Kansas, Educational.
- 1909 Miss Clara Mosser, Myerstown, Pa., Reading High School, Educational. Resigned, 1911.
- 1909 Rev. Herbert H. Casselman, Fostoria, O., Heidelberg University, Heidelberg Theological Seminary, Business Administration. Resigned, 1914.
- 1909 Mrs. Ada Casselman *nee* Abbott, Old Fort, O.
- 1911 Rev. Carl D. Kriete, Ft. Wayne, Ind., Heidelberg University, Central Theological Seminary, Evangelistic.
- 1911 Mrs. Bess R. Kriete *nee* Martin, Tiffin, O., Heidelberg University.
- 1911 Miss Ollie A. Brick, Galion, O., Heidelberg University, Evangelistic. Resigned, 1922.
- 1911 Miss Margaret J. Leader, Saegerstown, Pa., Hood College, Educational. Resigned, 1916.
- 1911 Miss Anna Gertrude Schulz, near Dayton, O., Heidelberg University, Educational. Resigned, 1914.
- 1913 Rev. Ezra H. Guinther, New Winchester, O., Heidelberg University, McCormick Theological Seminary, Evangelistic and Business Administration. Resigned, 1926.
- 1913 Mrs. Ethel Guinther *nee* Tustison, near Bucyrus, O. Died at Tiffin, Ohio, August 23, 1922.
- 1923 Mrs. Anna B. Guinther *nee* Gabig, Chicago, Ill.
- 1914 Rev. Alfred Ankeney, Xenia, O., Heidelberg University, Central Theological Seminary, Union Theological Seminary, Evangelistic.
- 1923 Mrs. Anna Margaret Ankeney *nee* Schneder, Sendai, Japan, Oberlin College.
- 1915 Rev. Paul F. Schaffner, Hummelstown, Pa., Franklin and Marshall College, Theological Seminary (Lancaster), Evangelistic. Died in hospital at Tokyo, Japan, March 29, 1925.
- 1915 Mrs. Sarah S. Schaffner *nee* Swords, Lancaster, Pa.
- 1916 Prof. F. B. Nicodemus, Forrester, Ill., University of Illinois, Educational.
- 1916 Mrs. Ella C. Nicodemus *nee* Neubauer, Highland, Ill.

- 1897 Miss Lillie M. Rohrbaugh, Columbiana, O., Heidelberg College, Educational. Resigned, 1900.
- 1900 Rev. William E. Lampe, Ph. D., Frederick, Md., Princeton University, Theological Seminary (Lancaster), Evangelistic. Resigned, 1911. Secretary Laymen's Missionary Movement, and United Missionary and Stewardship Committee; Executive Secretary of the Executive Committee of General Synod.
- 1900 Mrs. Anna L. Lampe *nee* Thomas, Boonsboro, Md.
- 1900 Miss Sadie Lea Weidner, Hereford, Pa. Educational. Resigned, 1913.
- 1900 Miss Lucy M. Powell, Cochran, Pa. Resigned, 1909.
- 1900 Rev. Allen K. Faust, Ph. D., Bernville, Pa., Franklin and Marshall College, Theological Seminary (Lancaster), University of Pennsylvania, Educational.
- 1900 Mrs. Christine E. Faust *nee* Vollmer, Lancaster, Pa. Died in Japan, July 10, 1901.
- 1903 Mrs. Mary E. Faust *nee* Marden, Piermont, N. H., Keystone State Normal School.
- 1901 Miss B. Catherine Pifer, Paradise, Pa., Allentown College for Women, Evangelistic.
- 1902 Rev. J. Monroe Stick, Glenville, Pa., Ursinus College, Ursinus School of Theology, Business Administration. Resigned, 1909.
- 1902 Mrs. Estie P. Stick *nee* Fair, Glen Rock, Pa., Albright College.
- 1902 Rev. Herman H. Cook, New Knoxville, O., Mission House College, Mission House Theological Seminary, Evangelistic. Died in Tokyo, April 7, 1916.
- 1902 Mrs. Emma Cook *nee* Fledderjohann, New Knoxville, O.
- 1905 Rev. William G. Seiple, Ph. D., Allentown, Pa., Muhlenberg College, Franklin and Marshall College, Theological Seminary (Lancaster), Johns Hopkins University, Educational.
- 1905 Mrs. Florence I. Seiple *nee* Lehman, Baltimore, Md., Peabody Institute.
- 1905 Miss Mary E. Gerhard, New Holland, Pa., Hood College, Educational.
- 1905 Rev. Jesse F. Steiner, Millerstown, O., Heidelberg University, Heidelberg Theological Seminary, Educational. Resigned, 1913.
- 1905 Mrs. Ruth P. Steiner *nee* Schwartz, Tokyo, Japan, Syracuse University.
- 1906 Rev. Elmer H. Zaugg, Ph. D., Mt. Eaton, O., Heidelberg University, Heidelberg Theological Seminary, University of Chicago, Educational.

- 1885 Rev. William E. Hoy, D. D., LL. D., Mifflinburg, Pa., Franklin and Marshall College, Theological Seminary (Lancaster), Educational. Dr. and Mrs. Hoy transferred to the China Mission, 1899.
- 1886 Miss Mary B. Ault, Mechanicsburg, Pa., Keystone State Normal School, Educational. Married to Dr. William E. Hoy, in Japan, December 27, 1887.
- 1886 Miss Elizabeth R. Poorbaugh, Berlin, Pa., York High School, Educational. Resigned, 1893. Married to Rev. Cyrus Cort, D. D. Died, 1927.
- 1887 Rev. David B. Schneder, D. D., LL. D., Bowmansville, Pa., Franklin and Marshall College, Theological Seminary (Lancaster), Educational.
- 1887 Mrs. Anna M. Schneder *nee* Schoenberger, Reading, Pa.
- 1888 Miss Emma F. Poorbaugh, Berlin, Pa., Berlin High School, Educational. Resigned, 1893.
- 1891 Miss Mary C. Hollowell, Chambersburg, Pa., Wilson College, Educational. Resigned, 1900.
- 1892 Rev. Henry K. Miller, D. D., Lebanon, Pa., Franklin and Marshall College, Union Theological Seminary, Evangelistic.
- 1898 Mrs. Sarah S. Miller *nee* Sprague, Hartford, Conn. Prior to her marriage on April 12, 1898, she was a member of the Protestant Episcopal Mission in Japan for 10 years.
- 1894 Miss Lena Zurfluh, Fraubrunnen, Switzerland, Heidelberg University, Educational. Resigned, 1909.
- 1894 Rev. Sylvanus S. Snyder, Columbiana, O., Wooster University, Heidelberg Theological Seminary, Evangelistic. Transferred to the China Mission, 1905.
- 1894 Mrs. M. Alice Snyder *nee* Souder, Landisburg, Pa.
- 1895 Rev. Christopher Noss, D. D., Huntington, Ind., Franklin and Marshall College, Theological Seminary (Lancaster), University of Berlin, Evangelistic.
- 1895 Mrs. Laura B. Noss *nee* Boyer, Aquashicola, Pa. Died in America, February 26, 1907.
- 1910 Mrs. Carolyn B. Noss *nee* Day, Westchester, Conn., Mt. Holyoke College.
- 1897 Rev. Paul L. Gerhard, Pd. D., New Holland, Pa., Franklin and Marshall College, Theological Seminary (Lancaster), Educational.
- 1902 Mrs. L. Blanche Gerhard *nee* Ault, Littlestown, Pa., Allentown College for Women.

He believes that the missionary *is* the message in character and in act. He has sought for well-rounded missionaries equipped in every way. He has encouraged them in the study of the language on the field and in further study while at home on furlough of those subjects that will help them to do better work on their return to the field.

If there are two candidates who seem equally well qualified in all other respects, and one of them is a musician while the other is not, the musician is always chosen. There are probably no other mission fields in the world where the value of good music is seen to better advantage than on our fields. The churches in the fields where our missionaries are at work will profit greatly from this.

Dr. Bartholomew has been a firm believer in the co-operation of the missionaries with the Christians on the field. He has been a strong advocate of united missionary work. He has worked in an almost superhuman way to establish strong educational institutions and thoroughly equip them. He has done all his work with the one purpose of building up the Kingdom of God in our mission fields.

*(Fifty Years of Foreign Missions of the Reformed Church
in the United States 1877—1927, pp. 142—161)*

179. 合衆国改革派教会日本派遣宣教師一覽 (1879年~1926年)

MISSIONARIES IN JAPAN

- 1879 Rev. Ambrose D. Gring, Shrewsbury, Pa., Franklin and Marshall College, Yale Divinity School, Evangelistic. Resigned, 1889.
- 1879 Mrs. Hattie L. Gring *nee* McLean, Chambersburg, Pa.
- 1883 Rev. Jairus P. Moore, D. D., Perkasia, Pa., Franklin and Marshall College, Heidelberg Theological Seminary, Evangelistic and Educational. Retired, 1924.
- 1883 Mrs. Annie Moore *nee* Arnold, Lancaster, Pa. Died in hospital at Biltmore, N. C., December, 1910.
- 1913 Mrs. Anna D. Moore, *nee* Thompson, Readington, N. J. Prior to her marriage to Dr. Moore, in February 1913, she was for 25 years a teacher of English in Ferris Seminary, Tokyo, under the Reformed Church in America. Died in Sendai, Japan, December 9, 1922.

is a difference between Christ and Christianity. They are possibly more keen than are we in our distinction. They say that they respect and are willing to accept Jesus Christ, but they want little or nothing to do with our Western creeds, our Western churches and our Western civilization. The missionaries have nothing to do with government or with the political affairs of the country where they work, and never meddle in national affairs. They are, however, always sympathetic with the best aspirations of the people, and with whatever tends to their welfare. In the last analysis Japan must be evangelized by the Japanese and China by the Chinese. Our missionaries have been and are doing well to assume and exemplify the attitude of co-workers and helpers.

From the start and until the end of the work that is done by representatives of our Church as foreign missionaries, evangelism has been and will continue to be the center and the key to the whole enterprise. Our Reformed Church, largely due to the wisdom and the spirit of our Secretary, Dr. Bartholomew, has regarded and still regards all our work, whether called evangelistic or educational, medical, industrial or social, as evangelistic work. As Dr. Noss has said, "In Japan education is intensive evangelism, and evangelism is extensive education." All of the departments of the work are parts of a single united whole, with only one definite object in view, the permanent establishment of the Kingdom of God in the lands to which our missionaries go. Educational institutions are not so much needed in the mission field today to simply give a Christian education, but they are vital and necessary to ground the newly-won Christians in the Christian faith so that they are able to give a reason for the faith that is within them; they are necessary to train up a Christian ministry and laity to have charge of the indigenous church; they are necessary to implant in the hearts and minds of the youth of both sexes those principles and ideals that will lead to the ultimate Christianization of every land. Medical missions are not so necessary to heal a few sick people, important and Christlike though that may be; to give medical relief to all the people of a great land like China would be only a temporary measure. Christian medical missionary work is intended to plant in the Chinese people those principles of life which will bear fruitage in those sympathies and ministries in China which now bless every Christian land.

Dr. Bartholomew has been in fullest sympathy with our work as it has developed; indeed, as it stands today it is what it is largely because of his guidance. He has had more than all others combined to do with the selection of the missionaries.

they live. The history of the relations of the United States with Japan and with China is a long story which is not praise-worthy in all details. It is difficult for missionaries going from one land to another to preach that God is our Father and that all men are brothers while their own country, by its official actions, contradicts these fundamental truths of Christianity.

Our mission work began in China the year before the Boxer outbreak. At that time the Chinese seemed determined to drive out the foreigners and uproot Christianity. In China today there is intense feeling against foreign nations, particularly because of extra-territoriality and discriminations against the Chinese people. Our missionaries have been true servants of Christ in trying to show the Chinese that our God is the Father of all and Jesus Christ is the Brother of all men, no matter what the nations themselves may do.

Our brief review has revealed the truth that the forms of missionary work are varied, but that all have the one central aim of bringing men to know Jesus Christ whom to know aright is life eternal. The work in Japan and in China is now well under way, and of course methods as well as conditions today are different from a generation ago. The work has reached a new stage and besides the two nations have made tremendous progress. Only a few decades ago China was referred to as the sleeping giant; today she is wide awake. Thousands of missionaries have been at work, and several hundred thousand Chinese have shown their faith in Jesus as Lord. Mesopotamia, with its age-long history, is a modern land.

While the aims, and in many respects the methods, or forms, of work have not changed materially during the last forty years, there has gradually come an increased recognition of the fact that the propagation of Christianity in Japan and in China must not only be *with* the Japanese and Chinese, but in increasing measure also be done *by* them. The pastors and evangelists of all our churches and preaching places are Japanese or Chinese, the missionaries being their counselors, guides and friends. Already twenty years ago our evangelistic work was put under a joint committee of Japanese and missionaries, equal in numbers and in authority. The boards in charge of our educational institutions in Japan have, from the beginning, included Japanese members. In China, too, as the work has developed, the Chinese have been given more and more responsibility and authority in the work conducted by the Mission. There are evidences and expressions, and even outbreaks, of nationalism which, although political, have a very important bearing upon missionary work. The peoples in these mission lands are insisting that there

was maintained for a number of years in connection with North Japan College. A printing press and a book store—a dairy and other kinds of activity were conducted by and for the students. In China at both our stations, we are giving the Chinese help and instruction along agricultural lines. There are various forms of industrial work among the women. All of this industrial work in both countries is important as part of the whole missionary plan.

The missionaries of our Reformed Church seem to have had more than their share of work to do along philanthropic and social service lines. At the close of the Russo-Japanese war there was a failure of the rice crop in North Japan and our missionaries took an active part in the work of relief. When the new crops came in and the most acute distress was over, there were still many hundreds of Japanese children without visible means of support. We co-operated with other denominations in founding an orphanage which was the first in all of North Japan—a witness to the fact that Jesus loves the little children and cares for their bodies as well as their souls. There have been many periods of distress due to famine in the parts of China where our missionaries live. Time and again they have been compelled, or rather they have felt it to be their duty and privilege, to turn aside at least in part from their other work to minister to those in distress. Following the ravages of war they have shown Christian sympathy to thousands in need and have ministered to them. Our missionaries in Japan have noted the large number of deaths due to tuberculosis and have been leaders in the anti-tuberculosis crusade; one of our missionaries has published a book and written a number of magazine articles on the subject.

When our Saviour was born the angels sang “Glory to God in the highest and on earth peace, good will among men.” Our missionaries have been ambassadors of peace and good will many, many times when relations have been strained between the nations. There have been periods of anti-foreign reaction in both Japan and China. These have been largely the fault of the Western nations. Our recent Exclusion Law has stung the racial pride of the Japanese, but our missionaries have helped them to see the distinction between real Christianity and this political act of our country.

Missionaries are representatives of Jesus Christ and not of any earthly government. The Board and the Church do not expect them to take part in political movements in the lands to which they go. They must be loyal to their own government, and sympathetic with the government of the people among which

Eastview Schools for Boys and the Girls' School are most important factors in all the work of that Station.

Our work Mesopotamia is almost exclusively educational. We have at Baghdad a school for boys and a school for girls, and both have excellent prospects.

There is sickness, suffering and distress in every land. Our Master went about doing good, healing the sick and cleansing the lepers. Medical missionaries have accordingly gone to almost every land as part of the missionary forces. There were a few medical missionaries of other denominations in the early missionary days in Japan, but the Japanese made such rapid progress in medicine that by the time our Church started in Japan it was hardly necessary to send out any medical missionaries. The situation has been and is quite different in China. If Christ were there today in the flesh He would spend much of His time in healing the sick and relieving the suffering. Two-thirds of all the people in China are born, live their lives (sometimes in great suffering) and pass from this world without having received any real medical attention or help. Our missionaries were appealed to for help almost immediately after their arrival. Dispensaries and hospitals have been opened, and tens of thousands of Chinese have been ministered to. For many years this arm of our work received altogether inadequate attention and support. Dr. Bartholomew said some years ago that "our medical work in China has never been given a fair chance to exert its full influence for Christ. It is amazing that our workers have been able to achieve the results they did under the crippled conditions."

While the evangelistic, educational and medical departments are the chief forms of foreign missionary endeavor, there must be additional agencies and methods of work. A Christian literature must be created. One of the first things done by the early missionaries, even before the arrival of any of our own Church, was to translate the Bible into Japanese and Chinese. Pamphlets and tracts on Christian subjects were written in the vernacular or translated from the English and other languages. Church papers were started, Sunday School lesson helps were prepared, and sermons and other Christian articles have been printed in the newspapers as part of a campaign of newspaper evangelism. Our own missionaries have taken a very important and prominent part in all features of literary missionary work in both Japan and China.

Our representatives have carried on certain forms of industrial work. Particularly with a view to helping the students to support themselves, an industrial home

churches, while education secures the permanence of the institutions that evangelism calls into existence. Education forges the weapons of offense and defense that evangelism wields against heathenism and skepticism.”

Great changes are taking place today in the life of the world. These great social, physical, moral and national changes have all originated in the thoughts and beliefs of men. Ideas and ideals produce fundamental changes in religious belief and result in sweeping revolutions that produce a new social order. Correct thinking and correct beliefs dominate men and nations. Missionaries need not give much thought to the results and ultimate changes that will take place. Their approach must be to the mind, the heart, and the conscience of their pupils by giving them a true Christian education.

Japan turned her face in the direction of a modern educational system, which included the best the West has to give, when the Emperor Mutsuhito in his coronation oath in 1868 declared that “knowledge and enlightenment shall be sought throughout the world.” In one generation Japan has developed an educational system that is not surpassed in any other country. Christian missions have contributed largely to this development, especially along the lines of education for women. The whole missionary body has insisted that mere education, either elementary or higher, apart from Christianity, with no promptings of Christian morality, no infusion of Christian truth, and no lessons in Christian living, is not in itself an effective instrument of social regeneration. This ideal has been upheld in all of our Reformed mission schools, and it has been applied in part by the Japanese themselves in the schools under government control. Our missionaries have been active in educational circles, and have exerted influence that has helped put the modern educational system upon a high intellectual and moral plane. Our North Japan College and our Miyagi College are known not only in North Japan but over the Empire. The standards of these two institutions have been an inspiration and help to all who are interested in the cause of education and the best welfare of the Japanese people.

Our missionaries in China have organized their work along practically the same lines and have produced practically the same results as in Japan. The small school started in Yochow City has grown into Huping Christian College at Lakeside. A number of day schools in the districts are part of the “Lakeside Schools.” The Ziemer Memorial Girls’ School exerts a great influence. At Shenchow, schools for boys and girls were opened almost at the beginning of our missionary work. The

several scores of organized congregations which have not yet reached the stage of self-support, and we are assisting at many more "preaching places" scattered all over the Tohoku. All of our missionaries located at Tokyo, Yamagata, Wakamatsu, Akita, and Morioka, as well as several of those living at Sendai, devote themselves to what is called evangelistic work as such. These missionaries preach on Sunday and during the week deliver lectures on Christianity to large and small audiences; they teach Bible classes, distribute portions of the Scripture and Christian tracts; they spend many hours with individuals teaching them the truths of the Gospel and the way of the Christian life; they assist in the Sunday Schools; they co-operate with the Japanese pastors and evangelists and Bible women, and by their preaching and teaching, their walk and their conversation, seek to lead others to Christ and to build up the Church.

In China a street chapel was opened as soon as our first missionaries were able to preach in Chinese. Evangelistic work among the women and Sunday Schools for the children were also started. The evangelistic work is along almost the same lines as in Japan. Being younger, there are naturally not so many churches or outstations, but there are four organized churches and thirty-four other preaching places.

As they become Christians, the Japanese and Chinese are taught that it is their duty to help win others to Christ. Indeed, these peoples are more willing and ready to do all in their power to win others than is the average Christian in America. They recognize that they should do everything possible to bring their congregation to self-support at the earliest day, and in accordance with their means they give far more liberally than do our own people.

Our educational work in Japan, in China and in Mesopotamia was begun without any conscious effort on our own part. Indeed, the work seemed to be awaiting us. Some denominations began missionary work in Japan and China, and confined their efforts almost exclusively to what has been technically called evangelistic work, but soon discovered that to make their work effective and permanent it was necessary to open schools. Sooner or later, every denomination has come to this view. Christianity puts more emphasis upon education than any other religion in ancient or in modern times. Christian ideas regarding God, man, and human relationships compel the highest use of the intellect and the fullest development of our reasoning powers. It has been well said that "evangelism has to do with the present generation and education with the next. Evangelism gathers men into

From its inception, our Board has encouraged all outgoing missionaries to learn the language of the country to which they go. Indeed, the Board has not only given all possible help, but has insisted that the missionary himself make every effort to acquire the language. In both Japan and China our missionaries have stood out as those who have exceptional facility in the use of the languages. They have not only learned the language themselves, but by publication of books and in other ways have been of inestimable help to the missionaries of other denominations, to those in government service and to others.

Our first missionaries gave themselves almost altogether to what is commonly called evangelistic work—the preaching of the Gospel, teaching Bible classes and leading inquirers to Christ. The first seven years were spent in this way in Yokohama and Tokyo. Evangelistic work has been continued in the City of Tokyo and in the neighboring province of Saitama by our missionaries who have resided at the Capital.

When the invitation was received, in December 1885, to open work at Sendai and in the Tohoku, our missionaries for a time co-operated with the Japanese in evangelistic work. Reverends Masayoshi Oshikawa and William E. Hoy were both very desirous of an educational institution, but the Board directed Mr. Hoy to spend his labors primarily in evangelistic work, with the understanding, however, that if favoring conditions seemed to require it, the Board would approve his adding teaching to evangelistic labor. In a year or two the educational work was begun which has developed into our two large colleges at Sendai, the Tohoku Gakuin or North Japan College for men and the Miyagi Jo Gakko, the College for women. The work of evangelism and that of education have been conducted side by side. A majority of the missionaries have devoted themselves primarily to the educational work, but all of them have the evangelistic spirit and give much time to assist in evangelistic work. It may be well to note here that in the earlier stages of the modern foreign missionary movement, before our own Reformed foreign missionary work had gotten well under way, too exclusive emphasis had been laid on the spiritual experience of the individual. The larger, wider scope of the foreign missionary enterprise, as already outlined, made educational institutions necessary.

The chief aim of our work in Japan is to assist the Japanese in building up the Church of Christ in Japan. We have aided in the development of a number of congregations which have become self-supporting. We are also helping support

establish the Reformed Church in foreign lands. The converts to Christianity are not members of the Reformed Church but of the Church of Jesus Christ. It is well that the Reformed Church has come to understand that we are not trying to extend the Reformed Church in the Orient. We are therefore less impatient regarding results in the way of increasing numbers of converts. This makes all the difference in the world, too, as far as the missionary himself and his work are concerned. Christianity must not be something "foreign" and the missionary must not work with a feeling of superiority of race or of antecedents. He is not working *for* the Japanese or for the Reformed Church, but he is working *with* the Japanese in bringing men and women to know Jesus Christ. We do preach to them the truths of Christianity as understood and interpreted by the Reformed Church, but we do not desire to have them become members of the "German Reformed Church in Japan" or of the "Reformed Church in the United States in Japan" or in China or in Mesopotamia. From its beginning our work in Japan has been identified with "The Church of Christ in Japan," which is the largest body of Protestant Christians in that country. In China the Christian congregations which have grown up in connection with our work are part of "The Church of Christ in China." We do not as yet have any congregations in Mesopotamia, but there our work is an integral part of the United Mission in Mesopotamia.

The real value of the work of Foreign Missions depends upon its aim and motives, which determine the methods. The policies of the foreign mission work of the Reformed Church have been largely shaped by the one man, Dr. Allen R. Bartholomew, who has been our Secretary continuously for twenty-five years. The departments of the work and the types of missionaries sent out have been largely determined by him as the Secretary for twenty-five years and as a member of the Board for forty years. There have been changes of policy through the years, and there has been much adaptation, for world conditions have changed and the work of foreign missions is a live and growing enterprise.

All foreign missionary work must begin, continue and end with the preaching of the Gospel, but our Master, Jesus Christ, himself preached, taught and healed, and He sent out His disciples to preach, teach and heal. No hard and fast distinctions should be drawn here. Preaching should have as its aim to win men to Christ, and to build them up in faith and knowledge of Him. That is also one of the primary purposes of mission schools. Healing the sick is a means of leading men to know the great Physician, the healer of the soul as well as of the body.

Salvation must be personal and individual. Souls must be won one by one, but every individual is a member of society and his becoming a Christian has a profound significance to his relatives and friends and all with whom he comes in contact. He cannot become a Christian without a sense of responsibility to help win these others. Moreover, his own walk and profession will be full of hardship if his environment is hostile, or even only unsympathetic. Unless the life of the whole community is influenced by Christianity the newly-born Christian may not grow in his Christian life and there is danger that after a time he will "lose his faith." The plan of Foreign Missions, therefore, must include not only the single individual but all individuals. Society as a whole must be transformed and made Christian. Groups of believers must be banded together in local churches and these congregations united into a Christian Church.

The Reformed Church, through one of its ministers, did Foreign Missionary work in the Turkish Empire beginning eighty-five years ago. We also indirectly helped establish some foreign missionary work in India. Our own distinctive work, however, began about fifty years ago in Japan. A little more than twenty-five years ago we sent our first missionaries to China. Our chief work has been carried on in those two countries. We have made a beginning in Mesopotamia, although the work there is only a few years old.

Japan and China are two of the oldest countries in the world. They have ancient and advanced political, intellectual and religious civilizations. Mesopotamia has a long and challenging history. It is easy to see that missionary work in these three countries is quite different from that in any part of Africa and in almost any other foreign mission field. To some it seems presumptuous for the people of so young a nation as America to offer to the peoples of these ancient civilizations a religion which is so much younger than Buddhism, Confucianism and Shintoism. Japan has adopted and adapted the best of our Western civilization, and today has universal education, an omnipresent daily press, a cosmopolitan literature and a national self-confidence. She is proud and fully acquainted with the shortcomings of the people who call themselves Christians and offer the Japanese their religion. Western nations have not always treated the Japanese and Chinese fairly. Christian missionaries themselves have made many mistakes.

While the work of Foreign Missions is intended to lead individuals to Jesus Christ, to establish an indigenous church, and to help organize and establish the forces of righteousness so as to subdue the forces of evil, it is not the purpose to

(166)

1925	348,002	570,828.36	1.640	7,602.45	578,430.81	8
		<hr/>		<hr/>	<hr/>	
		\$ 5,075,555.73		\$152,152.70	\$5,227,708.43	

*(Acts and Proceedings of the General Synod of the Reformed Church
in the United States, May 26, 1926)*

178. W. E. ランペ 「過去四十年間の外国伝道の目的と方法」 (1927 年)

THE PURPOSES AND METHODS OF FOREIGN MISSIONS
THESE LAST FORTY YEARS

Rev. William E. Lampe, Ph. D.,
Executive Secretary of the General Synod

The purpose of Foreign Mission work is to complete the “evangelization of the world.” That the parts of the world now Christian, or at least evangelized, are to evangelize the rest of the world, is the meaning of “Foreign Missions.”

The “evangelization of the world” means to give the “good news” of salvation through Jesus Christ to every person living. To be more specific, it means the giving of the message of salvation through Christ to every man, woman and child so clearly and so fully that he or she shall be able intelligently to accept Jesus Christ as Saviour and Lord and become His true disciple.

In recent years attention has been called to the fact that the task of Foreign Missions is not complete with evangelization. There must follow the “Christianization” of a country or community. In every land there must be established an indigenous Christian Church—one that is self-supporting, self-propagating and self-governing. This native church must be helped until it is firmly established and prepared to evangelize and Christianize the people not yet reached. At the same time that the work of “evangelization” is being done with the help of foreign missionaries, there must be set in motion those forces which will transform the life of the people so that it shall ultimately become Christian. It may therefore be properly said that no foreign missionaries will be needed after the evangelization of a country has been accomplished.

177—2 外国伝道活動における本国の進展を示す表

STATEMENT SHOWING PROGRESS AT HOME IN THE WORK OF
FOREIGN MISSIONS FROM 1900—1925

Year	Communi- cants	Contributions from Living Givers	Per Capita Gift of Living Givers	Bequests	Total Contri- butions	Mission- aries Sent Out
1900	239,930	\$29,084.66	\$.125	\$4,345.66	\$33,430.32	5
1901	242,831	34,726.30	.143	5,032.89	39,759.19	1
1902	248,929	51,470.21	.267	3,160.37	54,630.58	5
1903	255,408	66,055.79	.258	95.00	66,150.79	1
1904	255,880	66,518.99	.259	1,947.50	68,466.49	1
1905	263,954	83,817.23	.313	1,515.00	85,332.23	4
1906	279,164	77,722.91	.278	8,848.16	86,571.07	7
1907	284,433	92,634.62	.325	2,021.34	94,655.96	4
1908	289,328	93,934.68	.324	3,959.31	97,893.99	3
1909	293,836	93,877.22	.319	12,866.50	106,743.72	2
1910	297,116	86,852.77	.292	3,612.26	90,465.03	2
1911	297,829	94,616.26	.317	2,783.16	97,399.42	7
1912	300,952	121,204.22	.403	5,084.60	126,288.82	—
1913	306,337	134,078.29	.437	2,816.64	136,894.93	3
1914	312,660	128,552.53	.411	5,509.05	134,061.58	5
1915	320,459	207,099.74	.646	4,761.05	211,860.79	1
1916	326,112	171,388.22	.525	3,291.89	174,680.11	3
1917	328,508	201,461.01	.613	3,545.00	205,006.01	8
1918	330,155	211,458.26	.640	9,925.75	221,384.01	3
1919	330,064	270,775.68	.820	4,917.52	275,693.20	7
1920	329,937	352,798.65	1.069	7,972.95	360,771.60	11
1921	331,369	471,880.31	1.424	8,480.46	480,360.77	8
1922	334,617	422,934.40	1.264	13,227.38	436,161.78	16
1923	341,693	459,679.40	1.345	3,704.03	463,383.43	5
1924	342,206	480,105.02	1.403	21,126.78	501,231.80	9

177. 合衆国改革派教会全国總會外国伝道局報告 (1926年)

177-1 日本伝道における過去二十五年間の進展比較表

〔前略〕

As this year completes the first quarter of the Twentieth Century, it might be of interest, and of encouragement also, to compare some of the above figures with those for the year 1900. We can thus note in a way what progress we have made during the past 25 years.

	1900	Today	Increase
American Missionaries	22	54	145%
Japanese Workers	78	207	162%
Total Force	100	261	161%
Native Evangelistic Workers	36	51	42%
Native workers in North Japan College	16	60	275%
Native Workers in Miyagi College	13	36	177%
Women Evangelists	13	12	Loss 7%
Kindergartners	0	17	Infinite %
Churches and Preaching Places	61	84	38%
Communicants	2,003	4,571	128%
Sunday Schools	40	97	142%
Sunday School Teachers	135	316	134%
Sunday School Teachers and Pupils	1,223	7,517	514%
Native Contributions for Church Work	\$ 2,350	\$ 17,386	640%
Kindergartens	0	9	Infinite %
Kindergarten Pupils	0	244	Infinite %
Miyagi College Enrollment	86	444	416%
North Japan College Enrollment	142	815	474%
Miyagi College, income from fees, etc.	\$ 850	\$ 7,950	835%
North Japan College, income from fees, etc. \$	450	\$ 17,500	3788%
Total Property Valuation	\$ 25,000	\$ 1,250,000	4900%

and several other large cities. But Japan does not insist on unlimited immigration privileges. Her statesmen are well aware that a large influx of her people into America would inevitably create trouble, and America is the last country in the world with which Japan desires trouble. The ancient feeling of friendship for America is far too deep for that. The Japanese government is willing of its own accord to restrict immigration to any extent that may be desired.

And in reference to the items of dissatisfaction that do exist, there is no reason to believe that Japan has any thought whatever of going to war. She hopes that the questions at issue may be satisfactorily settled by diplomatic effort, and pending such settlement, she has shown herself willing to be indefinitely patient. She has much confidence in the justice and good will of the American government. Even on the extreme supposition of any other attitude, her economic condition would not permit war. Moreover, she would ruin her trade with America, which is her best customer. Lastly, anything like an invasion of the Pacific Coast across a five-thousand-mile stretch of ocean would be an impossibility.

This, I believe, is a fair and reliable statement of the attitude of Japan. Moreover, it is a question whether America, especially as a Christian nation, can any longer consistently, on the mere ground of race difference, debar the people of Japan from citizenship, or stand for discriminatory legislation. The place to which Japan has risen among the nations and the training in civilization which she gives her subjects, entitle her to the full "most favored nation" treatment; and in order that America now in the solemn day of her world-opportunity, may continue to be the helpful friend and teacher of the Land of the Rising Sun, it is eminently opportune that she exemplify now as never before the principles of brotherhood and good will in her dealings with the peoples of the Far East.

(The Messenger, December 16, 1915)

If all would do this, it would give Japan all it needs, wipe out the Foreign Mission Board's debt and leave a large sum in the Board's treasury as a security fund such as other Boards have. Would this cripple other interests? No; it would help them.

Brethren of the ministry, elders, deacons, people, will you take up the watchword: ONE DOLLAR A MEMBER TO SAVE JAPAN? One dollar a member as a special effort. It will be a great, grand act for the Reformed Church, an act that will set an example to inspire other Christian bodies to broaden their efforts for Japan also. Dear friends in the Home Church, you have sent me to Japan as your missionary. I have accepted the responsibility in its full significance. I have devoted my life, my all, to the salvation of Japan. My co-laborers can say the same. Now that the harvest has wonderfully ripened before our eyes, and we feel ourselves, insufficient for the task of reaping, will you turn a deaf ear to our cry? Will you not help? The question is not, Can you? but, Will you? God put it into your hearts to say a happy, hearty YES.

Yours in faith,

D. B. Schneder

On the way across the continent.

August 12th, 1905.

(*The Messenger*, August 31, 1905)

176. D. B. シュネーダー 「日本はアメリカにとって脅威か」(1915年12月16日)

IS JAPAN A MENACE TO AMERICA?

REV. D. B. SCHNEDER, D. D.

In the battle for "preparedness" that will be fought during this session of Congress, the possibility of danger to America not only from its east side, but also from its west side will in all probability be frequently referred to. Even hitherto for many months there has been more or less questioning as to Japan's attitude toward the United States. What ground is there for such questioning?

There is no denying of the fact that Japan is dissatisfied with the discriminating legislation against her nationals in California, and also more fundamentally with the fact that her people are denied the right of naturalization in the United States. Japan, moreover, has her jingoists and her irresponsible mob element in Tokyo

power, Japan's need of salvation, all speak one word:

Japan must be Christianized.

JAPAN MUST BE CHRISTIANIZED.

JAPAN MUST BE CHRISTIANIZED.

And the time to go forward is *now*. The Spirit of God has worked in Japan the last few years in a wonderful way. The present war has brought on a crisis, and will mark a new epoch in the history of Asia. The time is now.

But as ever the question arises, What then? If these things are so, what then? It is a significant coincidence that this great Christian opportunity has come when Christian America, the nation nearest the heart of Japan, is wealthier than ever before, very wealthy, the wealthiest country on earth. The Church in America is just in a position to do easily all that God calls for to bring Japan into the kingdom. She has the consecrated men and women; she has the means. Does it not look as if it were God's working that this great opportunity in Japan and this great financial and spiritual ability in America have come together? Can we not hear the voice of God saying to his people? (Yes, we are His people), "Go forward and win Japan for Christ now."

The Reformed Church needs to note two things:

1. The missionary work of the Reformed Church in Japan is not one of indefinite enlargement. Certain definite things are needed—the full equipment of North Japan College, three or four more missionaries, the equipment of four more out-stations, the erection of five or six good churches or chapels, and a few other things of minor cost. If these are supplied the work can then go on, probably to the end, sustained only by the regular income of the Foreign Mission Board.

2. But these things are needed, and they are needed now. Our opportunity in Japan, one of the greatest in the history of missions, will not last forever. Tomorrow it may have passed from us. God says *now*.

How can the need be met? Often people say: "It is all very true what you say about Japan, but we must not cripple our home work—home missions, colleges, Orphans' Homes, etc." Right. But has there ever been a time in America when people consumed more in little self-indulgences, innocent in themselves, than now? People now thoughtlessly spend a dollar where our forefathers hesitated to spend ten cents. Cannot the good people of the Reformed Church in this time of times, by a little blessed self-denial just this year, lay at least one dollar upon God's altar for the salvation of Japan with her 45,000,000 souls? Just one dollar to save Japan!

by all means locate a man as soon as possible. As has been frequently said before, the people of the northern island are specially open to missionary effort, and the island is perhaps the most promising portion of all Japan for Christian missions.

This, in brief outline, is the situation that confronts us in Japan to-day. We feel the responsibility of it pressing upon us daily with increasing weight. Souls are perishing that might be and ought to be saved. Opportunities are passing by never to return. A nation is awake to the light,—for how long we do not know.

We lay this statement before you with the prayer that you give it earnest consideration. It seems to us that in this new century missionary work should be undertaken with new faith and new vigor. The burden of the unsaved world should rest upon every Christian heart. By the help of God the present century should not close upon large unchristian nations. Will the Reformed Church do her share of the great work ?

D. B. Schneder, Chairman.

(*The Messenger*, March 21, 1901)

175. D. B. シュネーダーによる日本伝道好機到来の訴え (1905年8月12日)

A FAREWELL WORD

Dear people of the Reformed Church:— I have spent three months in America, and have now turned my face again toward my field of labor. I came to America first and foremost to lead the Reformed Church to open her eyes to the new opportunity for Christian missions in Japan. All other objects I had in view were merely secondary to this one great object. I was given the privilege of addressing General Synod, some important reunions of Reformed people, and a number of leading congregations. I have been encouraged to believe that the message has in a measure been understood and felt.

But I realize that there is only a beginning. My words have been too weak. No human words are strong enough to depict the greatness of the Church's opportunity and responsibility in the Far East now. Only the Spirit of God can make plain to His people what is looming up on the Church's horizon. But I want to take this farewell occasion to say with all the ardor of my soul that the opportunity *is* great; the responsibility *is* weighty. God's leading of Japan, Japan's becoming a world-

first of all there is our large work throughout the prefecture, enough to engage all of one man's time now, and when we have more theological graduates to locate, it will take still more time. Then in this city of 80,000 inhabitants there are great opportunities and responsibilities. Although there are a considerable number of missionaries here, there is no one who devotes his main strength to the city, and as a consequence, Christianity has not yet laid deep hold upon the permanent resident element. Yet there are unlimited opportunities for work among this very class of people. With our large new church building, our Miyamachi chapel, and our other preaching-places in the city, together with our force of theological students who need practical training, there is surely a loud call for a suitable man to give himself entirely to this promising work. Moreover, in Sendai there are now over 3,000 students, and the number is constantly increasing. In the course of some years a university is also to be located here. These students of to-day will be the moulders of the people's thoughts and beliefs to-morrow. Can not the Reformed Church furnish a man who will plant himself down in the midst of this vast student population and become a power among them for Christ and the Church? It is something that ought to be done at every large student center in the empire, for certainly these centers are "strategic points" in the evangelization of this land.

As for the work elsewhere, there must of course be at least one man for Tokyo. The work there is in a promising condition. Many people are ready to hear, and the Christians and seekers who drift to the capital from our schools and churches in the north must be taken care of.

As to the other points we are, with one exception, simply repeating the plan outlined by the council of missions, and for which we are held responsible by that body. The coast side of Fukushima Prefecture is a large field, unoccupied by any missionary, and in which there is almost no work except our own. The remainder of the prefecture consists of two large and far-famed valleys, but there is only one resident missionary in the whole region. In the large prefecture of Yamagata there is work for many missionaries. Many large towns are untouched. Yet there is no one there now, and when Bro. and Mrs. Miller return to that field they should by all means be joined by another family. Yamagata is one of the regions where our mission is most directly and heavily responsible. The prefecture of Akita is also almost unoccupied. There is one Protestant missionary family located there. But this is far from being enough. The capital, Akita, is a large and influential town. We must look forward to placing one family there. Lastly, in Hokkaido we should

and elsewhere, and to a man they are loyal to their *alma mater* and can be trusted to help it. The religious spirit of the school is good. Baptisms are more frequent than for years past. Among our Japanese teachers there are at least four who are all that can be desired, both intellectually and in active Christian zeal. In April the number of theological students will increase again, and in a few years we shall probably have our six theological classes (three English and three vernacular) going again. This will require the work of at least three foreign professors. Moreover, to do good work both for our candidates for the ministry and for others we need to lengthen our literary course by one year. This will require one additional professor of English. When it is considered that perhaps the most valuable feature of a missionary teacher's work in Japan is the exercise of his personal influence upon the lives of the students, something for which a man must have some spare time, it can easily be seen that the above number of men is by no means too large.

In reference to the Girls' School it is to be noted that many of the girls in our school now belong to the most substantial families of the city and surrounding country. And the majority of them become Christians before they graduate, and they take their Christianity back with them into their homes, or into the new homes in which they become wives and mothers. There is no way in which Christianity strikes root into the heart of Japanese society more directly and effectually than through the Mission Girls' School. Moreover, the doors of the girls' homes are ever wide open to the foreign lady teachers, and there is no end to their opportunities for direct work. But in order to take advantage of these golden opportunities, and at the same time do their regular work in the school, the ladies need time to acquire the language and time to visit. Otherwise these many opportunities must go by default, as is the case in the main now.

The need of a man to attend to the business of the mission is very real to us. The transaction of business in Japan is tedious, and especially to attend to it in a Christian spirit requires much time, patience and tact. To have one man for this work, who can then become proficient in it, is better than to keep distributing the work around among a number of members of the mission, all of whom are too busy to attend to such work properly and with the highest degree of economy. It is not good policy to require us all "to serve tables."

Two men in addition for evangelistic work in Sendai and vicinity may seem too many. There are quite a number of missionaries of other denominations here. But

situation. First of all, let us state that we do not go upon the presumption that Japan is to be Christianized by foreigners; we have always held and we still hold that this must be done mainly by the Japanese themselves. But for a generation or two the missionaries will be needed to give push, guidance and inspiration to the work. The personal influence of those who have centuries of Christianity behind them is needed. Then, in the second place, a word as to the urgency of the work in Japan. Years ago, when the pro-foreign feeling was at its height the cry was; There is a crisis in Japan; missionary forces must take advantage of the situation at once, or it will be forever too late. Later on, however, this cry gave way to the view that Japan can be won only by a slow and patient process, and that there is no more need of haste here than in any other country. But we believe that the latter view is just as extreme as the former. We believe that there are "times and seasons," and that if you but review for a moment the events of the past few years in Japan and the Far East you must come to the conclusion that there is unusual urgency in Japan. It can not be otherwise. Five years ago we would not have outlined the above program. To-day we feel deeply convinced that it is what the Reformed Church ought to do. Things are moving forward very rapidly here. The Japan of to-day is not the Japan of three years ago. Profound changes in feeling and moral sentiment have taken place. The Christian leaven has entered society to a remarkable extent, and Christian teaching is welcomed with remarkable openness. There are those who are wont to say that Japan has become puffed up with conceit over her recent advances. But our observations do not bear out this view. Rather do we find that the people have become open-minded learners as they have never been before. Moreover, there is truth in the saying that "Japan is the key to the Orient." Japan's influence in the East is bound to be very great. We believe, therefore, that missionaries should be sent to Japan now. Ten men sent now will accomplish more than twenty men scattered along through several generations.

Coming to particulars, first, as to the Tohoku Gakuin. The number of students is now not large, owing mainly to government discrimination; but the school is by no means hopeless. Just now we are applying for exemption from military conscription, and in our application to the central government we have the active and sympathetic support of the governor, school inspector, mayor, and other officials. The school is widely known as prominent Christian school. We are beginning to have a history. Our alumni are scattered over this northern region

salvation of the Japanese people.

(*The Outlook of Missions*, Vol. XX, No.4, April, 1928)

174. D. B. シュネーダー「合衆国改革派教会の日本伝道」(1901年2月4日)

JAPAN MISSIONS OF THE REFORMED CHURCH
IN THE UNITED STATES

A REVIEW, FORECAST AND STATEMENT OF NEEDS

Sendai, Japan, Feb. 4th, 1901.

To the Board of Commissioners for Foreign Missions of the Reformed Church in the United States:

Dear Brethren:— We, the members of the Japan Mission, feel it to be our duty at this time to make to you the following statement of the needs of our work as these confront us at the present stage:

For Sendai and Miyagi Prefecture we need: Three regular theological professors for the Tohoku Gakuin, two professors of English for the Tohoku Gakuin, four ladies constantly on the field, for the Girls' School, one business man, two men for evangelistic work in the city and throughout the prefecture.

For the outlying work: One man for Tokyo, one man for Fukushima Prefecture along the east coast, one man for the central part of Fukushima Prefecture, two men for Yamagata Prefecture, one man for Akita Prefecture, one man for Hokkaido.

This makes a total of nineteen missionaries. There are now under appointment eleven persons. But to make allowance for furloughs and other circumstances, at the lowest figure, ten more missionaries are needed for the Japan work. Could these be appointed immediately, it would be an immense advantage. They should by all means be sent within the next five years.

Besides this a new building or two will be needed for the Tohoku Gakuin, and one or two more for the Girl's School. Besides a number of houses for the missionaries must be erected.

This is a large program, and it may seem extravagant to you. But when you come to look at facts closely you will, we think, consider it entirely justified by the

evening choral service, 'Alleluia.' This was the happiest Easter Day of my life. Rev. Masayoshi Oshikawa was with me."

Here is a brief story of how he was led to accept the Christian faith. He, in company with eight young men from the Province of Iyo, was sent to Tokyo by the feudal lord, where they might pursue a special course of study in the Imperial English College at Tokyo and thereby qualify themselves for their future life-work. After three years in this institution, it became evident that they could not there acquire a thorough and practical knowledge of the English language. Mr. Oshikawa, with another young man, came to Yokohama for the study of English with the Rev. James Ballagh, D. D., a missionary of the Reformed Church in America. His past training had given him an unfavorable impression of the Christian religion. He did not like the Christians. The teachings of his parents and the attitude of his country towards this new religion made him dread and hate it. Although he despised Christianity with all his heart, yet the idea of our civilization had laid hold of his mind to such an extent that he could not help asking the question: "How could such an evil religion produce such a superior civilization?" It was an act of Providence that brought the young Oshikawa into the Mission School and under the persuasive influence of a very earnest, devout and faithful missionary. Dr. Ballagh was a man mighty in prayer. His daily communion with God in the presence of the students was fragrant with zeal and love for the people of Japan. One day this man of God set apart an hour for special prayer. At the close of this prayer meeting, he said to the students, "If any one of you desires to become a Christian, let him place a card with his name on the table". The next morning he found the names on nine students on the table, thereby expressing their desire to be baptized into Christ. The name of Oshikawa was among the number. His simple faith in the Saviour of men made him willing to surrender himself to Christ. He felt the power of prayer in his soul. To him Christ was God. He often told me that he was led to Christ through the constraining influence of the prayers of the missionary.

During his stay in our home, I was urged by friends to write the story of his life, and I did so, in the book entitled, "Won by Prayer." Some day I may find time to write more fully about his eleven months' stay in America, the favorable impressions he made upon our pastors and members, and the untold influence our Church had upon his future life-work. He was one of the prophets of the Lord in Japan, and the power of his messages must be still at work in the outworking of the

and proved a rich blessing, it was the visit of Mr. Oshikawa. Well, he came and it was only natural for him to come direct to Pottsville, the then home of the Secretary of the Board.

Upon his arrival in San Francisco, Mr. Oshikawa spent about one week "visiting the Churches, calling on many pastors and seeing places of interest." (I quote his own words.) He tarried a few hours at our "wonderful Niagara Falls," and from thence he came to Harrisburg, April 10th, where he went to the home of Elder Rudolph F. Kelker, the venerable treasurer of the Board. After a few hours at the capitol city of the good old Keystone State, he took the train for Pottsville, arriving at 6:00 P. M. Imagine the feelings in my heart as I went to the station to meet this brother! I bade him a warm welcome, and then I took him to our home, where he abode for several months. If ever my Christian life was on trial, it was during the first few weeks of his sojourn with us. It was his first real introduction to a Christian home in America. Could we make him feel at home in our home? This was the one burden upon our hearts. Mrs. Bartholomew proved herself a genuine hostess in every time of need. Our children, Ruth, Joseph and Mary, were too young to realize what the presence of our welcome visitor meant to them, but as I recall, they supplied a great deal of merriment.

After the evening meal, as was our custom, we had family prayers. I read a Scripture Lesson and as a mark of esteem I invited our guest to offer the prayer. He did so, but, ere we knelt, he told me he would have to pray in Japanese. I replied that would be all right. Eloquent, indeed, was the voice of this man of God and my heart was drawn to the throne of God even though the prayer was spoken in an unknown tongue. We spent the evening in most helpful conversation. I could see that he was ill at ease in the use of the English language, but we tried in every way to make him feel at home. He occupied a room next to my study and we were in daily fellowship for weeks and months. Only the Recording Angel in heaven would be able to reveal the thoughts of our minds and the aspirations of our hearts. It was a veritable school of instruction for me, and possibly also to my friend.

That he was our guest for so long a time was due to the fact that he was eager to acquaint himself with our customs and language. While he had studied English, he was not very fluent in the use of it. During all this period I had a fine opportunity to read the character of the man. It may be appropriate at this season of the Church Year to quote an entry from my diary of pulpit ministrations on April 22, 1889: "Easter. Additions, 50; communicants, 238; alms, \$60. In the

the organ, for altar window, and for other necessary purposes. Miss Mary E. Gerhard, missionary, and her two sisters contributed the altar, pulpit and other chancel furniture in memory of their sainted father, the Rev. D. W. Gerhard, D. D., and in honor of their revered mother. Finally, honor is due also to those on the field who gave themselves with unsparing devotion to the arduous work of superintending the construction. On the evening after the dedication there were cabled to Miss Rahausser the words, "Rahausser Memorial Church dedicated. Praise God."

(*The Outlook of Missions*, Vol. XXIV, No.5, May, 1932)

173. A. R. パーソロミューの押川方義への追憶文 (1928年4月)

THE VISIT OF MR. OSHIKAWA TO AMERICA

How vivid is the memory when an old friend passes away to glory ! The news of the death of the Hon. Masayoshi Oshikawa in Tokyo recalls many experiences, during his visit to America in the year 1889, that I feel sure the present generation will thank me for recording. He was one of the first Japanese with whom I came into intimate contact. And how strange and mysterious this meeting came about ! I had been serving as a member and Secretary of the Board of Foreign Missions for almost two years when one afternoon, April 10th, I was notified by telegram of the coming of Mr. Oshikawa to Pottsville. If I were to relate the discussions that had taken place in the meeting of the Executive Committee regarding his proposed visit, my great surprise in receiving the telegram might easily be understood. Our missionaries were of one mind that the coming of this earnest Japanese Christian among our people would be a blessing to him and to all of us, but certain members of the Board did not share in this opinion, chiefly on account of lack of funds. The result was that the President, Dr. Clement Z. Weiser, was authorized to send a cablegram to our Missionary Hoy, at Sendai, using the words, "*Don't send Oshikawa. Will write. Weiser.*" Behold, when the message reached the other side of the Pacific, the word "*Don't*" was omitted, and the missionaries immediately got busy and made plans for Mr. Oshikawa to come to America. I have often said that I believe the hand of God was on the finger of the transmitter who sent the cablegram, for if ever the visit of a Japanese to this country was providential

a solemn, impressive ceremony, attended by nearly a thousand people. Students, professors, members of the College congregation, and many others from Sendai and vicinity, gathered for the occasion. Rev. K. Mori, of Yokohama, one of the veteran pastors of the Church of Christ in Japan, preached the sermon. The act of dedication was performed by President Schneder. Beautiful music was rendered by the choir, led by Prof. LeGalley, of the College, with Mrs. C. D. Kriete at the organ. The president of Tohoku Classis, the Mayor of the city, and others made addresses of congratulation. It was an occasion never to be forgotten by all who witnessed it.

On the day following the dedication (Sunday) the College congregation worshipped in the new building for the first time. In the evening a memorable musical service was held, at which nearly twelve hundred people were present. Part of the program was broadcast by the Sendai Broadcasting Station.

The building is of reinforced concrete faced with a local stone, and is collegiate gothic in style. Besides the main auditorium, with a gallery in the rear and one in each transept, it has eight basement rooms for Sunday School and Christian Endeavor uses. The seating capacity of the main auditorium is normally about eleven hundred, though more can be easily accommodated. The Möller organ, the first pipe organ in North Japan, gift of eighteen American friends, is a great addition to the building. The memorial window above the altar, representing the Ascension, is the gift of two daughters of the late Elder J. B. Fricker, of Reading, Pa.

Without doubt a great contribution has been made to the Christian cause in North Japan through the erection of this building. It will first of all make its deep impress upon the spiritual life of North Japan College itself. Generation after generation of boys and young men passing through the institution will be influenced for God and the Christian life through it. But its influence will extend far beyond the confines of the school itself. It has already caught the attention of the people of the city and of people far beyond it. It will stand as an abiding witness for Christ and His Kingdom in this land.

All honor therefore is due to Miss Ella A. Rahauser, devoted daughter and granddaughter of sainted forebears, whose lives had already brought honor to the Rahauser name in the Reformed Church. She has done a great deed, whose influence will be felt down through generations to come.

Honor is due also to others who made sacrificial gifts for interior equipment, for

to the beautiful character of his life's companion, who was Sarah A. Frick. Such an example of a great sacrificial gift should inspire others to similar acts.

You will bear with me for a moment when I refer to the special meeting of General Synod at Altoona, in March, 1919, at which time Elder Housekeeper was present, as also five new missionaries who were ready to go to Japan and China, but the Board was lacking in funds to send them. Pledges were taken, and my beloved brother was one of the first to respond. Owing to serious illness I could not attend. A few days after his return home, he wrote, "Will confirm my pledge by enclosing my check for \$100, which is the amount I mentioned at Altoona. Yes, it was a great meeting and I think if we had your presence with your enthusiasm the purse strings might have opened still further. There was certainly an outpouring of the Spirit of God which opened the hearts of the people."

My friend and brother Housekeeper was a man of few words but rich in good works. He was a model Christian, a gentleman of the old school, kind and faithful, good and useful. He was quiet in demeanor, modest in apparel, and gracious in dealing with his fellowmen. As a consistent churchman he may be held up as a worthy pattern to the youth in our day.

Trinity Church has never had a more regular attendant at all its services. Though in later years, when sight was failing, he had to depend on the guiding hand of a devoted daughter, yet he could be found in his place at church and Bible School. He will be an abiding presence in this sanctuary, and his influence will remain as a lasting benediction to the coming generations.

To all of us who mourn the loss of this faithful servant of God and dear brother in Christ, may the prayer of our lips ever be, "Lord, grant us grace to leave behind us as sweet and precious and perpetual a memory."

(The Outlook of Missions, Vol. XXII, No.7, July, 1930)

150. D. B. シュネーダー 「ラーハウザー記念礼拝堂献堂式」(1932年3月19日)

DEDICATION OF RAHAUSER MEMORIAL CHURCH

BY REV. D. B. SCHNEDER, D. D.

The dedication of the Rahausser Memorial Church, the great gift of Miss Ella A. Rahausser of Pittsburgh to North Japan College, took place on March 19th. It was

My dear Friends:

No one need extol, in your presence, the life, character, and labors of Elder Henry M. Housekeeper, whom you have all loved so long and lost awhile. There is an absence of a face in this sanctuary that was dear to you; there is a silence to a voice that was music to your ears. Everyone knew him. Everybody loved him. There was a personal magnetism, an inborn kindliness and a passionate sympathy that drew and held men to him. He had a simple faith, unswerving, enthusiastic, and in the strength of it he lived and died for his Redeemer. No task was too great for his willing soul to perform. He gladly spent and was spent that men might know the way that they must take to dwell with God.

For a full period of thirty years I have lived in very close fellowship with this friend of God. He found a warm place in my heart, and I know I had a warm place in his. We were often in each other's presence, and he was always an inspiration to me. He was ever ready with a warm welcome whether we met at his home, in this church, or on the street. Few members could be more loyal than he to the Reformed Church. No one took a deeper interest in all her Boards and institutions.

Father Housekeeper, and it is appropriate on this Father's Day to call him by that endearing name. Father Housekeeper was more to Trinity congregation and to our Church than voice can utter or pen can record. He did not develop his giving along a single line of benevolence. His contributions were as numerous as the appeals for help. Whenever he heard the cry of need, he felt his compassion rise. He was a full-orbed Christian. His name appears on many Boards of the Church, and his wise counsel and financial aid have proven a rich blessing. As I recall the many notable gifts to Missions, Home and Foreign, to educational and benevolent institutions, and to this congregation, I am ready to acclaim him as a shining example of a steward of God, who gave away in his life time as much, if not more, than he left to his loved ones. "More for others than for self" finds a living illustration in his life.

Our sainted brother enjoys the distinction of having been the second largest contributor in our Church to the cause of Foreign Missions. The work in Japan was dear to his heart, especially North Japan College, so dear to Dr. and Mrs. D. B. Schneder. Secretaries and missionaries could approach him and dear Mrs. Housekeeper in full confidence that in them they had warm, sympathetic, and helpful supporters.

The Housekeeper Memorial Social Hall at Sendai, Japan, stands as monument

140. ハウスキーパー記念社交館献堂式 (1928年3月3日)

THE HOUSEKEEPER SOCIAL HALL

Some years ago the need for a building, in connection with North Japan College for the social life of teachers and students, was brought to the attention of Mr. and Mrs. Henry M. Housekeeper of Philadelphia. These dear friends have ever been prompt in giving help to all worthy causes in the Church, and this need at once struck a responsive chord in their liberal hearts. They gave the original amount necessary for this building years ago, but, due to delays over which no one had any control, the cost of labor and material greatly increased and the kind donor was willing to give the generous sum of \$12,500, the largest contribution ever given by any one person to the Japan work of the Reformed Church.

The building is now completed, and stands as a memorial to the beautiful life of the sainted Sarah A. Housekeeper. Most impressive dedicatory services were held on March 3rd, in the presence of a large and grateful gathering of teachers, students, alumni and friends of the institution. It is a two-story stucco structure. It consists of a large dining room, a double kitchen and keeper's quarters on the first floor; and one large and three small meeting-rooms on the second floor. The upstairs rooms are to be used in the Japanese way of sitting on cushions on the floor. Surely this building comes as a blessing from God, who will bless the man who gave the gift that made the Social Hall possible. Such an example of a great sacrificial gift should inspire others to similar acts.

(*The Outlook of Missions*, Vol. XX, No.5, May, 1928)

141. A. R. バーツロミュー「H. M. ハウスキーパー長老への弔辞」

(1930年6月15日)

A TRIBUTE TO ELDER HENRY M. HOUSEKEEPER

BY REV. ALLEN R. BARTHOLOMEW, D. D.

(At the Memorial Service Held in Trinity Reformed Church, Philadelphia, Trinity Sunday, June 15, 1930)

OF THE FOLLOWING FIFTEEN CONTRIBUTORS:

- Mr. D. Wellington Dietrich, Philadelphia, Pa.
Mr. and Mrs. George A. Wood, Chambersburg, Pa.
Emory L. Coblentz, Esq., Middletown, Md.
Mr. John K. Bowman, Harrisburg, Pa.
Mrs. Jacob B. Fricker and Two Daughters, Reading, Pa., in Memory of Mr.
Jacob B. Fricker.
Mr. and Mrs. Martin L. Ruetenik, Cleveland, Ohio.
Mr. and Mrs. Louis A. Meyran, Pittsburgh, Pa.
Mr. and Mrs. Jacob J. Fouse, Akron, O.
Grace Reformed Church, Pittsburgh, Pa., under the Leadership of the Woman's
Missionary Society, Mrs. D. M. Kinzer, Pres.
Miss Elizabeth Kirkpatrick, Lone Tree, Ia.
Mr. and Mrs. Jacob H. Nissley, Manheim, Pa., in Memory of Madalon H.
Nissley.
Mr. and Mrs. John L. Gerber, York, Pa.
Mr. and Mrs. William L. Glatfelter, Spring Grove, Pa.
Mr. and Mrs. Clinton N. Myers, Hanover, Pa.
Mrs. Mary E. Keeley, Spring City, Pa.

A SACRIFICE ACCEPTABLE,
WELL-PLEASING TO GOD

1 9 2 6

All praise to the fifteen donors who have brought glory to God's name and luster to the history of our Reformed Church. God bless them for their sacrifice.

The building has been erected at a very moderate cost. A large government college building, a wooden structure, just erected in this city, cost much more per cubic foot. Great praise is due to an excellent American architect, Mr. Jay H. Morgan, and more still to Prof. F. B. Nicodemus of our Japan Mission, without whose intelligent and unwearied oversight this building could not have been erected.

Sendai, Japan

(The Christian World, No.52, December 25, 1926)

On Monday the new building was thrown open to visitors. The college boys had made great preparation for their entertainment. Thousands viewed the building, or loitered on the roof admiring the wonderful outlook, or patronized the boys' bazar and enjoyed their entertainment.

The last day, Tuesday, was taken up with field sports on the campus of the new Middle School. Races, contests and stunts of every description were enjoyed by a large concourse. At the end there were three great banzais—one for North Japan College, another for its past, still another and the heartiest one, for its future. The last event was an evening entertainment in the Middle School Chapel, partly literary and partly musical. The students, almost without any systematic teaching, have developed in music to a remarkable degree.

These were memorable days. Now, with hearts filled with gratitude and hope and high resolve, the teachers and students of the institution look toward a future still greater than the past, and fraught with that Spirit of God which will at last make all things new.

The New North Japan College Building

A monument has been reared in Sendai, Japan, to the Christian liberality of fifteen members in our Reformed Church. It is the new North Japan College Building. There, on the brow of a hill overlooking the Hirose River and the beautiful hills beyond, is a solid building. Its foundations are so strong and its construction so perfect that no earthquake will probably ever damage it or fire ever destroy it. It is also a beautiful building, collegiate Gothic in style. Its exterior is faced with a light grey native stone which makes it look almost white. Its interior is nicely finished and furnished, and equipped with modern appointments for educational purposes. This structure will likely stand for many centuries, a cherished scholastic home to many generations of young men ever inspiring them to higher ideals and a nobler life.

Moreover it will for years to come give name and fame to this institution of the Reformed Church in Japan, and thus help the onward movement of God's Kingdom in this land. At the top of the beautiful stairway of the main entrance is affixed to the wall a bronze tablet bearing the following inscription:

THIS TABLET IS PLACED HERE IN GRATEFUL AND PERPETUAL
COMMEMORATION OF THE CHRISTIAN LIBERALITY

for the celebration.

In the forenoon a private celebration for the school and alumni only was held. It was a solemn, impressive occasion. The president voiced the gratitude felt by all toward the two founders, both present in person, forty years after starting the institution in faith and prayer; gratitude also toward the people of the Reformed Church through the Board of Foreign Missions, represented by its President, Dr. C. E. Creitz, for the large help given the institution during the past forty years. Then both founders, Hoy and Oshikawa, spoke most earnestly. It was a rare privilege to hear their voices once more. The school hymn, "Jesus, I live to Thee," and the College song were heartily sung by the one thousand students, teachers and alumni present, and there were a number of thanksgiving prayers.

In the afternoon came the public ceremony. In spite of pouring rain the people came, filling the hall to capacity, excepting the gallery reserved for the College and Seminary students. A large number of the city's leading people were present, and some came from far. A history of the institution and a report on the new building were followed by addresses that were full of encouragement and inspiration for the greater future that lies before this work of faith begun forty years ago. It was a long program, but the interest of the people continued to the end.

After the ceremony a smaller company of about a hundred professors, alumni, friends, the two founders, and the guests from America proceeded to the new college building, and there in a large room the act of dedication was performed.

This was followed by the alumni banquet held in the temporary college auditorium, about 200 alumni being present. It was a lively, happy occasion at which old friendships were renewed, and new aspiration for the future of *Alma Mater* were fostered.

The next day, Sunday, began with an impressive early morning prayer-meeting in the Seminary Chapel. At ten o'clock came the commemorative church service. An eloquent sermon by Dr. Creitz on "Making All Things New" was followed by the baptism of seven students, and two wives of professors. This was followed by a solemn observance of the Holy Communion. In the afternoon at a public meeting in the Middle School Chapel there were three strong addresses on Christian education. In the evening there was held a consecration meeting—a consecration to the future mission of North Japan College. Powerful appeals were made by Rev. Kodaira of Kanda Church, Tokyo, Dr. Hoy, and by Rev. K. Yoshida who has spent over forty years in preaching the gospel.

137. D. B. シュネーダー 「東北学院創立四十周年」 (1926年10月16日)

FOUR DECADES IN NORTH JAPAN COLLEGE
PRESIDENT D. B. SCHNEDER, LL. D.

Wide-spread interest centered in the 40th anniversary of North Japan College and the dedication of the new college building on October 16th. The Hon. M. Oshikawa, one of the founders, came from Tokyo. Dr. Hoy, the other founder, accompanied by Mrs. Hoy, came from China. Dr. C. E. Creitz, President of the Board of Foreign Missions, and Mrs. Creitz came from America; also Mrs. L. L. Anewalt, President of the Woman's Missionary Society of General Synod, and Dr. Moore and his two daughters.

One speaker was President Sato of the Hokkaido Imperial University, a staunch Christian for fifty years; another was President Tagawa of the Presbyterian and Dutch Reformed College at Tokyo, an ex-member of parliament, and for a number of years Vice-Mayor of Tokyo. Congratulatory addresses were delivered by the governor of Miyagi Prefecture; the mayor of Sendai City; General Inouye, Commander of the Second Army Division, and for six years Japanese military attache in Washington; President Ogawa of the Imperial University in Sendai, and many others.

Messages of congratulation came from the Minister of Education; the Governor-General of Korea; Count Date of Tokyo; three former governors of Miyagi Prefecture; the president of the National Christian Educational Association; the China Mission; practically all of the educational institutions of the Reformed Church in the United States; Dr. A. R. Bartholomew, President of General Synod, Field Secretary Rupp, and many benefactors, friends and alumni of the institution.

It was hoped that the celebration could be held on the asphalt roof of the new college building, which commands such a marvellous view of Sendai and the surrounding hills and mountains together with a glimpse of the Pacific. Tenting was put up and all preparations made, but on the morning of the great day, it rained—a cold, chilly, heavy rain that continued all day. There was no time for lamentation. Quickly all plans had to be changed, and the telephone wires were kept hot notifying people of the change. Teachers and students worked bravely, and at the appointed time all was in order. The Middle School Chapel was in place

The building stands in the heart of the city like a strong castle from where the soldiers of Christ will be sent out to conquer the world. Above the main entrance the significant words, "Life, Light, Love," are engraved. And, on entering into it, the first impression we got was its cleanness.

Our new building was built on the old foundation, four or five recitation rooms being increased, and both the chapel and the waiting room being enlarged. The roofs, made of reinforced concrete, are entirely flat and have the handrails. The window frames are made of iron. So we shall have no anxiety for fire any more hereafter.

The plaster of the ceilings and the upper parts of walls are as white as Dr. Schneder's hair, and the lower parts of the walls are painted light yellow. Recitation rooms are provided with the green boards.

All rooms are perfect in taking light and well ventilated, and especially perfect in heating system, being heated by steam.

Thus we are studying in the new building which, perhaps, is the most perfect Middle School building in Japan.

When we think of this great privilege we are unable to be ungrateful. And, again, when we think of the wishes of both our President and many sympathetic friends, we are constrained to make our best efforts to become very strong men, filled with life, light and love, so that we may fulfil their wishes.

Oh! We are given our great President, Dr. Schneder, and good many sympathizers who are thinking deeply for us always. And now the splendid building was given to us again.

Our Tohoku Gakuin is becoming famous year after year. We must make this fame higher and greater day by day and make our Gakuin the best school in Japan as Dr. Schneder told us the other day.

(The Outlook of Missions, Vol. XV. No.8, August, 1923)

124. 伊藤 玄 「我らの新校舎」 (1923年8月)

OUR NEW BUILDING

By Haruka Ito

(Winner of Heckerman Prize Essay Contest)

Early in the morning of the 2nd of March, 1919, there broke out a great fire in Sendai, and destroyed our former building together with many other houses.

That building was built in the heart of Sendai, in 1905, as the fruit of the efforts of many persons, and had some 30 rooms and a large waiting room and the chapel.

The students in our class spent one year in that building. Dr. Schneder loved the building very much and always took great care of it.

The day after the fire the school met specially in the Higashi Nibancho Church. And in the meeting I saw our president feeling as if his own body had been wounded. He made a fervent speech and prayed with tears, and several persons joined him in prayer.

The sight was beyond my power of expression and so long as I live I shall never be able to forget it.

After this sad event we studied in the several different buildings for a term, and then in the barracks for 3 years, the morning service being held in the Higashi Nibancho Church. During these years our incessant hope and prayer were to see the new building erected very soon.

When the old building was burnt up, the losses amounted to 500,000 *yen*, and so much had to be collected to have our new building completed.

It was our hope that most of the expenses will be paid out of the contributions of the Japanese.

We heard that one-third of the building fund came from America, and the rest was collected in Japan, through the most earnest efforts of Dr. and Mrs. Schneder and alumni. We were also told that even those who are not rich enough to give their children higher education made very generous gifts.

We, hearing these facts, cannot help thinking that our new building is one of the holiest edifices in the world.

September 9, 1922, was a memorable day for us. On that day we entered the holy new building for the first time and began the work of the Second Term.

perhaps within the range of possibility that 50,000 *yen* may be raised. The alumni have set a much higher figure, and it *may* be possible to reach it. There is very wide-spread sympathy. The manifestations of regret have been wonderful. There have already been manifested remarkable cases of sacrifice. One of our teachers who has for years been struggling with debt on account of an abnormally large household, has pledged 100 *yen*, to be saved through self-denial. Our oldest evangelist, who lives alone and cooks for himself, promised 50 *yen*. A sick woman, the mother of one of our students, dragged herself to our home on the day after the fire, and though not rich, promised 1,000 *yen*, which is already paid.

But at the very best we have to look to the home church for a large sum. With this in view the Mission voted to ask the Board to call myself and Mrs. Schneder (or either) home to help raise the money. I myself do not see how I can leave the work here. The work of the school will have to be carried on under the most trying conditions, and I shall be needed. Also in the planning of the buildings and in everything else my presence will be required. Mrs. Schneder, though it will be a bitter undertaking for her, is willing to go.

If at all possible, I hope we may be able to do more than the minimum. The school stands as the central Christian force in North Japan, and the plans we now make should be adequate for at least a long time to come. The Japanese friends of the school long for this, and the Mission takes the same view.

It is hard for me to write this letter. The greatest burden of my life is upon me at the age of sixty-two, and the burden is not lessened by the fact that it falls heavily upon others also.

The details of the fire are well given in a letter that Mrs. Schneder wrote for the church papers.

Yours fraternally,

D. B. Schneder

\$172,500.

This plan in many ways would be best, provided there would be a good place to move to. For years I have had this matter in mind, and have looked at many places, but have never been able to find a really good site for such an institution as ours. There are many magnificent sites around Sendai, but they are all too inconvenient or too far away. And when the Mission committee and some of our Board members went over the ground once more a few days ago, they too saw the difficulty. Moreover, the expense would be very great, even though the land would be comparatively cheap. If we went outside it would be essential to get a large plot in order to have room to expand and in order to protect ourselves from undesirable surroundings. Fencing, grading, building professors' residences, etc., would cost much extra. Of course all that is mentioned in our estimates would be not absolutely necessary, at least at first, and also the troublesome land question would be at an end. Moreover it would separate our buildings from the Girls' School buildings, and thus lessen the fire menace.

The above is a description of the three plans. From the cost of each one, about 85,000 *yen* (\$42,500) insurance money can be deducted. We insured for 90,000 *yen*, but the company estimates the debris at about 5,000 *yen*. We could ask the Board to give us the choice between the three, allowing us to take any one according to circumstances. Even though the majority of people here prefer the second plan, it may after all prove impossible to get the additional land. Or some good way may open up to us to go outside altogether. Or we may after all decide that the first plan is preferable. I hope the Board will give us this choice, and also the privilege of modifying somewhat any plan we adopt, since it all had to be done very hastily.

The big problem is the money. This we realize in all its stern reality. We realize that the Board is at least not now in a position to vote anything out of its treasury. What money is needed therefore must be solicited. Fortunately the alumni and other friends of the school realize that the time is past when all the help needed should come from America; they realize that they too have a responsibility. The Alumni Association is therefore now making plans to raise a large amount from the graduates and their friends. Every graduate is to become both a contributor and a solicitor. The Patrons' Association is also at work. The students too have begun to act. Then I think Mrs. Schneder and I must put our shoulders to the wheel again. It is utterly impossible to foretell how much can be raised, but it is

This plan has great favor among the Japanese friends of the school and also in the Mission, unless we can move out of the city altogether. It is now comparatively easy to buy the remaining 3000 tsubo in the middle school block, because the land is all burnt over and in many cases the owners find it unprofitable to rebuild on account of the high price of lumber. The city authorities are willing to help us to buy at reasonable prices.

This plan would enable us to put all our school buildings, excepting the Seminary, on this one plot. This would give us great advantage in administering the school successfully, and in maintaining its unity and strength. The school would stand in a conspicuous part of the city and would have a rapidly growing influence. The reason why we propose a three-story building is that this is the most economical way of getting the room we want. The foundation are amply strong for three-story building, and if made it three-story we would put on a flat roof, which would be much safer in case of fire. If built three-story, we could accommodate the college too, though of course a separate building might be more satisfactory. Or, if later we wanted to turn the whole into the seven years' course institution above mentioned, the building would accommodate it, with perhaps a small addition.

Then on the Rokkenchō Lots recently bought we could put the dormitories and emphasize the dormitory life of the institution. This would be a great gain. It would go far to make the school a power. Most parents living at a distance who send their sons to us want them to live in our dormitories. And the dormitories situated at that beautiful place would become very popular with the students, and we could do our most effective religious work there. It would be an ideal arrangement.

(3) Move to the edge of the city, build Middle School and College buildings, dormitories and residences.

Middle School building	\$ 80,000.
College building	70,000.
Dormitories	50,000.
Land	37,500.
Residences, Heating Plant, etc.	12,500.
	\$250,000.
Minus Nibanchō and Rokkenchō lots sale and College building money	77,500.

Minus money for College building (already collected).....	20,000.
	\$ 100,000.

This plan contemplates simply going on again according to the original plan, except that the chapel be enlarged and a little additional land be bought. This has the advantage of being the least expensive plan, at least for the time being, and we did not fail to let this consideration weigh very heavily.

However, the disadvantage we always felt about this plan was that it scatters the school too much, the Middle School being about 10 minutes walking from the Seminary, and the College about 20 minutes from the Middle School.

This is inconvenient, and under these circumstances it will be difficult to administer the school well, difficult to preserve its unity and esprit du corps, and the extra expense involved in reduplicating libraries, etc. will not be small. But it was the only way open to us before. We tried to get land nearer, but failed. Now however the way is open for us to change the plan. There is also an additional consideration created by the recent drastic revision of the higher educational system of Japan. According to this system it is possible that the middle schools may become less important institutions in the future than they have been in the past, and that in the course of some years our middle school plant, if built on the old very strong foundations, might become unnecessarily large, while the College buildings would be too small and on too little ground. The ideal school according to the new plan is a seven years' course institution, a lower course of four year, taking the place of the present Middle School, and a higher course of three years, and such a school could be accommodated entirely in such a building as we propose.

(2) Buy the whole Middle School block, build a three-story building on the same foundation, except enlarge the chapel, and use this building at least for the time being for the college work also. Put the dormitory on Rokkenchō.

Main building	\$ 120,000.
Dormitory	15,000.
Land	22,500.
	\$ 157,500.
Minus money for College building(already collected).....	20,000.
	\$ 137,500.

120. D. B. シュネーダー書簡 (バーソロミュー宛 1919年3月18日)

Sendai, March 18, 1919.

Dear Dr. Bartholomew:— The days that have passed since I wrote you briefly about our calamity have been busy and trying. While our disaster has been upon us like a dreadful nightmare by day and by night, we have been at the same time pressed on every side with the problems of the present and the future. In it all too we have been oppressed with the thought of the added burden to the heavy load that our Board of Foreign Missions is already carrying.

But whether we will or not, we as representatives of Christ in a non-Christian land must show ourselves possessed of faith and courage. We must take up the burden anew, overwhelming as it looks. Our Board of Directors has had meeting after meeting and canvassed the situation in all its phases, and finally presented two plans to the Mission, asking for permission to choose between them. The Mission agreed to this, but expressed preference for the second one; in addition the Mission urged us to think very seriously once more of the advisability of moving out of the city altogether, and starting a new plant on a large site, where also the danger from fire would be less. This last the Board of Directors did. A committee appointed by the Mission (Drs. Faust and Noss and Prof. Nicodemus) in company with three members of the Board of Directors went out and looked at several sites, and then discussed the question very fully at a meeting of the Board. The result was that to the two plans originally proposed a third was added. These three plans are now being transmitted to the Board with the request that our Board be given the choice between them according to circumstances, and that the reply be given by cable.

(1) Rebuild Middle School and dormitory on the present site, purchase the Wakuya lot and some additional land, and build the College building on Rokken-chō.

Middle School building, including enlargement of chapel and erection of buildings for athletics	\$ 80,000.
Dormitory	15,000.
Additional land	5,000.
College building	20,000.
	\$ 120,000.

118. D. B. シュネーダー書簡 (パーソロミュウ宛 1919年3月2日)

Sendai, Mar. 2, 1919.

Dear Dr. Bartholomew:— An unspeakable calamity has befallen us. Last night a terrible gale was blowing, and about half past two o'clock we heard the fire bells, and on looking we found a large blaze not far away, and already many sparks were being blown on to our and the Girls' School buildings. The wind was from the northwest. Our Seminary and church buildings were quite near, but not in the path of the wind as it blew from the fire. But our Middle School and Dormitory caught the full force of the danger. The sparks were like a fiery rain, and soon a small building near our dormitory caught, but it was put out by our students. Then the roof of the dormitory caught, the wind driving the fire under the slate; but that was put out also by our boys at the risk of their lives. Then the roof of the main building caught but was put out with the aid of chemical fire-extinguishers. By that time a fire engine had arrived and we felt relieved. But then the roof of the rear of the chapel part of the main building caught just near the very top, and before anything could be done, the gale had given the blaze such headway, that all hope disappeared. The fire spread over the chapel roof very quickly, and before long the whole building was on fire. The dormitory followed in quick succession. Very little of the school furniture was saved, and the dormitory boys lost practically all their belongings.

The Girls' School dormitory and the new building were in imminent danger, but finally escaped. It is said that some five hundred houses burned, among them being the post office and other large buildings. The greatest loss was that of our Middle School building. That beautiful building is now a mass of ruins. Much sympathy is being expressed. We must hope that in some way it will work together for good. It is the greatest calamity that has come into my life. But we must not lose heart. We have no plans yet. Insurance \$45,000.

Yours fraternally,

D. B. Schneder

are heated by hot air furnaces in the cellar. Electric light fixtures were put in the chapel, halls and some of the rooms. The woodwork is finished in dark oak stain, and the plaster is gray. In the rooms, halls and chapel—all through the building—there is plenty of sunshine and light.

The building is excellently planned throughout. The covered entrance at the front of the building makes it possible in rainy weather for visitors to alight from their *jinrikishas* in the dry. The steps from the level of the ground to the level of the first floor are within the building, so that *geta* (shoes) can be left inside the building. On the first floor on either side of the entrance are the reception room, offices, etc. The chapel is in the middle arm of the E, the entrance to the chapel being directly opposite the front door and reached by a short flight of stairs.

The cost of the building alone is about *yen* 52,000.00 (\$26,000.00). Furnishings, grading, fencing and lot, putting in of electric light, heaters, etc., cost about *yen* 9,000 (\$4,500) more, making the total about *yen* 61,000, or a little more than \$30,000.

Mr. George de Lalande, a German, of Yokohama, was the architect, and Mr. Chujiro Seki, under the direction of Dr. Schneder, was in charge of the work. The Building Committee consisted of Rev. B. Schneder, D. D., Prof. K. Sasao, Rev. J. M. Stick and Prof. T. Igarashi. During Dr. Schneder's absence on furlough in America and at other times, Rev. William E. Lampe gave valuable assistance.

The building is splendidly suited for the purpose for which it has been erected and already there is a marked improvement in the tone and life of the school. Only those of us who taught in the crowded, inconvenient and unsuitable quarters used during the past, and who have now the privilege of teaching in the new building can fully appreciate its value to our work.

The building is one of the best in Japan, and is likely to be a model for other schools in the future. With its splendid building, with a strong faculty, with nearly 300 earnest students, and with a host of friends in America and Japan, North Japan College stands at the beginning of the brightest chapters in its history. Now as never before the school needs the hearty support and earnest prayers of all its friends.

(*The Messenger*, February 1, 1906)

111-3 新校舎概要 (P. L. ゲルハート)

THE NEW BUILDING
BY PROF. PAUL LAMBERT GERHARD

When, in 1886, Tohoku Gakuin, or North Japan College, as it is now known in English, was begun by Revs. M. Oshikawa and W. E. Hoy, it started with two teachers, and seven students. Year by year the school has grown, until now there is a faculty of twenty-seven professors and 290 students are enrolled.

At first the school was simply a Bible training school. Now the school is divided into a middle school department and a higher department, the latter consisting of a three-years' literary course, open to graduates of the middle school department; an English theological course, open to graduates of the second year of the literary course, and a Japanese theological course.

Until the present all the classes of all the courses have met in very crowded quarters in the recitation hall erected in 1891 for the theological department, and in temporary frame buildings. The building just completed will now be used by the middle school department, while the higher department will be very comfortable in the old building.

The new recitation hall is a fine large building 228 feet long; brick veneer, with granite trimmings. In shape it is somewhat like the letter E, except that the middle arm is longer than the end arms. It is two stories high, except the center, which is three stories and is surmounted by a tower. The building is one of the most beautiful in the city.

In addition to a president's room, a dean's room, a teachers' room, a reception room and an office, the building contains a chapel seating 700 persons, two museums, a library, a gymnasium and fourteen class rooms. Of the class rooms four are used for English, two for Japanese, one for Chinese, one for history and geography, one for physics and chemistry, one for national history, two for mathematics, one for drawing, and one, larger than the rest, for Bible and music. The rooms will accommodate 432 students.

The building stands in a campus of about three acres. It faces toward the south, and all the recitation rooms, except two, have southern exposure. The rooms are furnished with comfortable seats and good slate blackboards, are well lighted and

bined other features with the running. In one race sealed envelopes containing a mathematical problem were placed on the ground a quarter of the way around the course. The contestants raced to the envelopes, solved the problem, and the first one to cross the goal line with the correct answer won the prize. In the Anglo-Japanese Alliance race, the contestants had to dress themselves while running in a mixed Japanese-foreign costume. Scattered along the course were the different articles of dress, consisting of the Japanese "hakama" or skirt, an English coat, one English shoe and one Japanese "ashida" or high rain clog, and a broad-brimmed Japanese hat. Another popular race was one in which various obstacles were placed along the way, such as nets on the ground, under which the runners had to creep; barrels and sacks to crawl through, and many ropes to jump over, before they could reach the goal. In still another race they had to pick up a Japanese lantern, light it and carry it across the goal line without getting it blown out. Such a race as this last by no means always goes to the swift.

Another entertaining feature of the program was what the students called the "social procession." A number of them, dressed up in different costumes and headed by the band, marched around the campus. It is certainly true that the Japanese are good imitators. The boys, whether they were dressed as foreign ladies, Shinto priests, American Indians, or country women with babies tied on their backs, acted their part well, and won great applause from the large crowd which was present.

The enterprise of the students is shown in the fact that they put up a tent on the campus and edited a paper appropriate to the occasion in both Japanese and English. Every little while an edition, containing information about, and comments upon, the races, was struck off and distributed among the people.

All these things, while entertaining to us, have their serious side, also, because they reveal unto us the possibilities of the Japanese young men and show us what a power for righteousness they will be in the coming years.

Dr. J. H. De Forest, who represented the foreign missionary community of Sendai. In his opinion there was much cause for congratulation, but that such speakers as those of to-day, representing different interests should be congratulating a school founded on Christianity is in itself cause for congratulation. Probably this is the first time in the history of Japan that such speakers offered congratulations on such an occasion. They did so because they have confidence in the school.

111—2 記念行事寸描 (J. F. スタイナー)

THE LIGHTER SIDE
BY REV. JESSE F. STEINER

In all college affairs, the loyal support of the students is necessary if everything is to be a success. We must not forget, then, to give due credit to our students, who entered so heartily into the spirit of all the exercises of the week. The decoration of the building and the grounds was turned over to the members of the different classes, who certainly acquitted themselves well. For three days they worked hard, and at the end of that time our school presented quite a festive appearance. Deserving of special mention was the magnificent triumphal arch, constructed of evergreens over the entrance to the grounds. The first year class painted hundreds of flags of all the nations, and stretched them on long lines from the tower of the building to various parts of the campus. On the whole, the decorations were more elaborate than one usually sees on similar occasions in America, and showed plainly the artistic tastes and ability of the Japanese boys.

Very interesting to us new missionaries was the lantern procession of students, professors and alumni, held on the evening of the dedication day. Nearly three hundred were in line, each one carrying a Japanese lantern, on which was inscribed the emblem of our school. Crowds of people lined the streets to see the long procession march by, and, as they heard the students sing the college song and yell lustily "Tohoku Gakuin Banzai," they must have been impressed with the fact that our Christian school is by no means a small affair.

But most interesting of all, to the students at least, was the athletic meet held on Saturday. The principal events were the foot races of various kinds, held on a circular race course, which had been laid out on the campus. A few of the races were straight running contests, but those which aroused the most interest com-

Christian school, he said that six years ago, when the attempt was made to disrupt Christian schools, he had openly and actively opposed the government. This fearless Christian statesman, whose name was one of the three presented to the Emperor for choice as speaker of Parliament, said amidst applause that Japan and the Japanese Government had learned that there is no clash between religion and education, that Christianity does not make a man ignorant, and that Japan has nothing to lose, but much to gain from Christianity.

Mr. Ebara then spoke some kindly words of counsel to teachers and students, admonishing them that Christian schools should be better than other schools. One of the causes of victory in the late war had been that the Emperor during these two years had lived a life of seriousness. The young men of the Tohoku Gakuin should look on life seriously, should honor the truth, believe the truth and if need be die for the truth.

There were ten congratulatory addresses. The Minister of Education sent from Tokyo as his representative Inspector of Education Haritsuka to offer congratulations. Count Date said that the school had done well for many years, and he hoped that it would continue its good work for Sendai, for the northeast and for the nation. Governor Tanabe spoke in high terms of the spirit of the school, and said that he could hardly find words to express his gratitude that Sendai has such an institution. General Yamanouchi said that while the victory over Russia was due largely to the virtue of the Emperor, it was due in no small part to education. The Mayor of Sendai City, Hon. C. Hayakawa, hopes that the school is entering upon a new era of prosperity and will in the future do even better work than in the past.

Advantage was taken of the opportunity by President Nakagawa, of the Government College, to thank American friends for their help to Japan and to give expression to the warm feeling the Japanese hold toward America. Immediately afterward President Kawada, of the First Middle School of Sendai, spoke very appreciatively of the help Americans had been to the cause of education in Japan. Professor Nakamura, one of the first graduates and now a teacher in the school, spoke of the debt of gratitude he and the other alumni owe to the school, and they will henceforth work more earnestly for their *Alma Mater*. A high tribute was paid President Schneder by Rev. Mr. Saito, who is president of Miyagi Classis of the Church of Christ in Japan. His prayer is that Christ may indeed be the cornerstone of the building and of the education imparted therein. The last speaker was

111. 普通科校舎落成式 (1905年11月23日)

111-1 演説要旨 (W. E. ランペ)

THE ADDRESSES
BY REV. WILLIAM E. LAMPE

A deep impression was made upon Sendai by the exercises connected with the dedication of the new building. Both of the leading dailies had excellent cuts of the building; some who could not attend nevertheless received invitations, and others in other ways had their attention called to the dedication, but it is probably safe to say that the deepest and most lasting impression was made by the addresses on the afternoon of the formal dedication service.

There were two formal addresses, one by Dr. Moore, one of the Board of Directors of North Japan College, and the oldest member of our mission, and the other by Hon. S. Ebara, a member of Parliament and one of the leading statesmen of Japan.

Dr. Moore said that the aim of the school is the same as that of other institutions of like grade; that the Tohoku Gakuin aims to be first class and up to date in every respect. The training, however, differs from that of other schools in the one regard that here everything is done from the Christian standpoint. While instruction is given in every branch of learning the moral and spiritual development of young men is kept ever in mind. That this is a Christian school should be no objection, for New Japan needs such an institution and such education. Dr. Moore then made a plea that this Christian school might always have the patronage of the community and of the country and the sympathy of all those who have at heart the best training of young men.

It is not always wise to speak so openly and so strongly of Christianity before such an audience, and some were feeling that perhaps Dr. Moore had gone too far, but when Mr. Ebara rose to speak he began in almost the first sentence to speak of Christianity and its relation to education in Japan. He congratulated the school upon the completion of the fine new building and, as a Japanese, expressed gratitude that foreigners had given impetus to the education of the young men and women of Japan. In speaking of the attitude of the Department of Education to

few of the most recent examples of how it works? Day before yesterday I was told that one of our former Christian professors has just been appointed president of the government middle school of the capital of Fukushima province, where we have a large part of our evangelistic work. Yesterday I heard that one of our former students, a Christian, has been appointed dean of the same school, and on the same day I met one of our influential Christians from there, who said that he was working to get in one of our former graduates as professor of the English language. That important school will no longer have an anti-Christian bias, and its students will no longer be strangers to Christian ideas. This afternoon a young fellow who has been one of the brightest students in a government school came to enter our school to study for the ministry. For a year he has led a remarkably fine Christian life, reminding one of Harbaugh's "Youth in Earnest." This evening the brightest student in one of our upper classes came to me to talk about the problems of sin, freedom and the true aim of human life. Because of deep personal interest in them he has been thinking about and studying themes of this kind for over a year. Can such a young man ever go back to what he was before? Let us remember that beyond the immediate duty of leading individuals to salvation lies the greater undertaking of enrolling this nation among "the kingdoms of our Lord and His Christ." We are confronted with a task that has not been accomplished for a thousand years, but we have the unspeakable privilege of seeing distinct signs of coming success. Toward this end there is no stronger human influence at work here in North Japan than the school for which I am pleading.

Since this movement was started on the 26th of May last the stream of contributions to the needed fund has not ceased to flow. Will not many friends, old and young, help to keep up the stream and swell it to such proportions as will start the Tohoku Gakuin on a new career of usefulness throughout the generations to come?

Yours in faith

D. B. Schneder

Sendai, Japan.

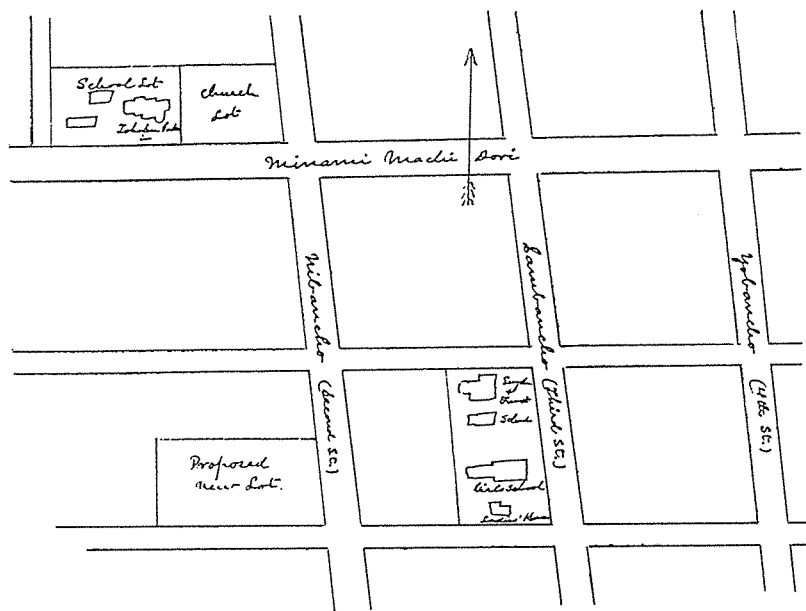
(*The Messenger*, October 29, 1903)

better the school has made very gratifying gains not only in numbers, but also in reputation and stability. Our recitation rooms, many of them much too poor for use, are overcrowded, and during the past two years we have turned nearly two hundred applicants away.

But the outlook for the needed new buildings has not seemed hopeful. The rebuilding of the Girls' School, and the urgent needs of the China Mission, seemed to stand in the way of early relief for the Tohoku Gakuin. To add to the difficulty, an officer of the educational department, who visited the school last May, informed us that unless we can come up to requirements and get government recognition for the Literary Course and the Theological Department by next April these departments of the school, according to regulation, must close up. The needs of the school had often been made an object of prayer before, but now prayer was redoubled, until there came what seemed to be a divine command to go forward, and there appeared to be no better place to begin than right here. I at once laid the matter before the students, and they are responding with the enthusiasm of earnest youth. They are giving money and they are praying. Then the teachers met and by hearty grasp of the hand pledged their whole-souled interest, support and co-operation. Later a movement was started among the graduates, and now the matter is being presented to the believers of the various churches and preaching places. Many prayers are being offered, and the interest is widespread. The offerings will not be large, yet not small either, from the Saviour's standpoint. Also the present movement will bear fruit later on in greater effort toward self-support and in deeper interest in this Christian school for young men. It is a movement that has been inspired of God; it has been blessed of God, and it will be blessed. The \$25,000 needed will come.

Dear friends, we ask you to join in this movement. If you could see the opportunities and the working of the leaven, as we see them, you would consider it a privilege to help. Private appeals have already gone to friends in the home church, and the answers that have come give assurance that the movement cannot fail. The greatest surprise has come from where? From China, from the remarkable and beloved fellow-laborer in the gospel, Brother Hoy.

Why should there be a strong Christian college and seminary in North Japan? Because young men become really regenerated over here, really permeated with Christian thought and life, and because through them Christianity must work itself as a leaven into the thought and life of the people as a whole. Shall I give you a



109. D. B. シュネーター「東北学院のための訴え」(1903年10月29日)

AN APPEAL FOR NORTH JAPAN COLLEGE

Dear Friends in the Home Church:

The esteemed secretary of the Foreign Mission Board has already, in a recent letter, brought the needs of this institution to your attention. Please permit me to add an appeal direct from the field—from the heart of this school itself. The need of the Tohoku Gakuin, or North Japan College, for additional buildings, has been before the Church for a long time. As early as 1895 Dr. Hoy, while on furlough in America, started a movement to meet this need. However, the amount actually realized from that movement was only \$4,000, and the work was not pushed later on because the conditions that confronted the school had become unfavorable.

But things are different now. Public opinion has become distinctly hospitable toward Christian effort. The government has already granted us important privileges, and seems disposed to grant still more, provided we can meet reasonable conditions in the matter of equipment. In consequence of these changes for the

the school down may work more and more earnestly, and that the graduates may follow, the principles of the school and take good care of their future; and I hope that some time this school may develop into a private university.

(Signed)

Teruzane Tanabe,
Governor of Miyagi Ken."

The governor is an old and careful man, and says nothing hastily, so that what is given above is what he means.

We have built a few temporary recitation rooms so that from now we shall have about 240 students. There were 4 Theological and 12 General Course graduates this time. To-day the Mission acted on some plans drawn up by the Board of Directors for a new building. By next mail I think I can send you the plans. We must build frame, something for which I am sorry. Brick would run way beyond our amount.

With kindest regards,
Yours fraternally,

D. B. Schneder

108. D. B. シュネーダー書簡 (キャレンダー宛 1901年2月8日)

Sendai, Japan, Feb. 8th, 1901.

Dear Dr. Callender:— It occurs to me that a little more information about the lot we think of purchasing would be of advantage in considering the question.

The whole lot is 90,000 sq. ft. large. It is pleasantly located along a pretty wide and open street, near the center of the city, and has a wide outlook. One part has a good-sized Japanese house on it; the other only a few shanties. I can not get a map of the city before mailing time, but I will inclose a drawing which may give you some idea of the relative location of the place.

Yours very sincerely,

D. B. Schneder

fact that most of the teachers are graduates of the school, and love their *alma mater*. Their loyalty toward the school is to be ascribed to the same cause. Effectiveness in teaching and superintendence is the natural result of the smallness of the number of students. The school has reason to rejoice in, and be proud of, having a good president. His sweetness and uprightness of character have magnetic power. A short interview reveals him to be an excellent educator. I believe that the first and second features I have mentioned are due mainly to his personal influence. Finally the most difficult thing about private schools is their finances. But the Tohoku Gakuin is not in trouble about this matter.

What I have mentioned are the most striking features about the Tohoku Gakuin. I heard that the school is intending to enlarge its sphere and rise higher this year. It is my conviction that it will surpass government schools in the near future.’”

I really hesitate to send the above to you, and if you were not in the midst of your great effort for Japan, I could not think of sending you at least a part of what is in the interview. But as it will probably help, I feel that it ought to reach you somehow. Coming from an official of the Department of Education, which until recently was so hostile toward Christian schools, it means much. Usually these officials are very close-mouthed and cautious, but this one was convinced. Both I and others in the school are conscious enough of our own weakness and of the difficulties the school will yet have to meet not to be unduly elected.

The end of it all is that last evening this same official did the unusual thing of sending me a telegram stating that the military conscription privilege had been granted. This now gives our school in all its departments full standing before the government, and our students can finish their courses without interruption on account of military service. It is a most important thing for our work, and I feel very thankful that God in his providence has led us thus far.

At our commencement on March 31st the governor read the following carefully prepared address:

“In attending the graduation ceremony of this school today I desire to express my deep confidence and trust in the school as a school whose graduates will increase year by year and will gradually, as comparatively perfect men, take their places in society. Especially is it a cause for gratitude that the head of this school being an American is devoting himself to education in this country.

Moreover, recently by receiving recognition as a Special School the standing of the school has been advanced a step. I pray that all the teachers from the head of

103. D. B. シュネーダー書簡 (パーソロミュー宛 1904年4月14日)

Sendai, Japan, Apr. 14, 1904.

Dear Dr. Bartholomew:— On the 28th of February the Department of Education granted the Tohoku Gakuin recognition for its Literary and Theological Courses. This recognition gives these departments the right to exist and at the same time confers upon them a standing in the educational system of the country which will be helpful.

The favour still to be gotten from the Department of Education was the military conscription postponement privilege. We applied for the privilege in February, but it was hinted to me at the Department that there might be difficulty in granting it because of the existence of war. However, an official was sent to inspect the school, and, after giving us a thorough inspection, he gave a very favorable report of the school to a reporter of one of the leading Sendai newspapers. I send you a copy of the paper and also a translation of the article. I do not wish you to publish the reference to myself, but I give the whole article to you because it may be of service to you in your addresses during the great effort to be made for Japan in June in the way of showing the actual standing of the school. I send it, however, only with the understanding that what is said about me is not to be published. The article is as follows: "Mr. Haritsuka, the Educational Inspector from the Department of Education who came to Sendai to inspect the condition of education in this *Ken*(province) told the writer the following: "The object of my coming is to visit the private schools which have applied to the Department of Education for privilege, and also to ascertain what effect the reduction of appropriations will have on education. Yesterday I visited the Tohoku Gakuin. I think it is a very promising school. I can not but congratulate Sendai upon having such a good school. Let me point out what seem to me to be prominent features of the school.

1. The mutual intimacy and spirit of co-operation among the teachers.
2. The spirit of loyalty on the part of the teachers toward the school.
3. The effectiveness of the teaching and superintendence on account of the smallness of the number of students.
4. It has an excellent man for president.
5. Its financial stability.

The mutual intimacy and spirit of co-operation among the teachers is due to the

May the Holy Spirit do a mighty work through this Synod of Baltimore for the extension of Christ's kingdom in Japan and China.

Yours in faith,

D. B. Schneder

Sendai, April 9th, 1902.

Dear Dr. Bartholomew:— I have written you what I feel very deeply, in a separate letter, hoping that you may be able to use it in some way. I want to say that I am very greatly encouraged by your election to the secretaryship. I do not believe that in the whole church a better man could have been found. In the discharge of the heavy responsibility that has fallen upon you, you have my abiding confidence. You must now visit the fields, and arrange to spend a considerable time.

The prompt and generous action of the Board in reference to the Girls' School cheers the hearts of us all. The event has been a heavy blow, but it looks as if God would use this visitation to lead the church toward a higher plans of missionary activity. It has been an occurrence that has had its good lessons for us here also. It is an important question now how to build; but it is certain that a more suitable building can be put up than the old one was. One of the difficulties is the high price of land.

We are glad that Dr. Moore will return to the field. He will revive the Tokyo work. However, he will not be able to relieve us so much here in Sendai. A man to be of much help here must be steadily and continuously in the traces. It is much to be regretted that a business man could not be found. With the present amount of business, and much building in prospect in the near future, we almost become faint-hearted sometimes.

With kind regards from us both to Mrs. Bartholomew and yourself, I am

Yours fraternally,

D. B. Schneder

ulars later on. We are grateful to God, and the whole Reformed Church may well feel grateful, that her foreign work has a church building that will constitute so large an element of strength as this, with the blessing of God, surely will.

D. B. Schneder

(*The Messenger*, November 28, 1901)

100. D. B. シュネーダー書簡 (パーソロミュー宛 1902年4月9日)

78 Higashi Sambancho, Sendai, April 9th, 1902.

Dear Dr. Bartholomew:— We are only now realizing how big an obstacle to the progress of the Tohoku Gakuin has been removed through the securing of the military conscription privilege. The new school year is just beginning, and 190 young men applied for admission. 131 have actually taken the entrance examination. Only about 75 can be admitted. Some more could be admitted if they could pass the examinations for the higher classes, which are not yet full; but our standard is high, and students from schools of similar grade can not enter corresponding classes in our school. But in a few years the upper classes will be full too. There is no doubt that from now on our applicants will exceed our capacity.

The school has won high respect, and its place as a strong factor in the Christianization of North Japan is firmly established. But I ask most earnestly that the Board and General Synod at its coming session look upon the need of additional buildings for the school as an *immediate need*. We have only three suitable recitation rooms for our ten classes; the rest are miserable make-shifts. Many of our students from now on must live in outside boarding-houses, whose influences for evil will in many cases outweigh the school's influence for good. We need \$ 15000 now for new recitation buildings and dormitories. Later on we shall need about \$ 6000 for a separate building for the Literary Course. The former amount we need now if present opportunities are to be saved to the work of the Reformed Church in Japan. Will the General Synod do something large, definite, commensurate with the needs, for her two educational institutions in Japan? That, in my judgment, is the most important practical foreign missionary question that will come before the Synod. The evangelistic influence will extend out from these schools. Ten days ago seven young men well equipped in mind and heart to preach the Gospel, went out from the Tohoku Gakuin. Girls are going out from the Girls' School to help in the same work.

hung in the tower in memory of dear Mrs. Faust, by her friends in Lancaster, Pa. The largest contribution to the building fund was made by the Board of Commissioners for Foreign Missions from the bequest of the late Jesse Oberly and a plate over the entrance to the audience room bears the inscription : "In memory of Jesse Oberly, from whose Liberal Bequest for Foreign Missions Two Thousand Dollars were appropriated for the Erection of this Church." The window behind the pulpit is inscribed to Rev. Masayoshi Oshikawa, founder of the Sendai Church. The large south window is inscribed : "In honor of Rev. Benjamin Bausman, D.D., by St. Paul's Reformed Church, Reading, Pa." The large north window has the inscription : "Presented by the Second Reformed Church, Reading, Pa., Rev. S. R. Bridenbaugh, D.D., Pastor." All the other windows are special gifts and are marked as follows :

Miyagi Jo Gakko, (two windows); Ladies' Sewing Circle of Sendai Church, (two windows); Sunday-school of the Sendai Nihon Kirisuto Kyokwai, (two windows); Center Church Mission Band, (two windows); Infant Class, Salem Reformed Church, Harrisburg, Pa.; William Bowman's Class, Salem Reformed Church, Harrisburg, Pa.; Main Sunday-school, Salem Reformed Church, Harrisburg, Pa.; Conquest Mission Band, Reading, Pa.; T. D. Bauscher, Reading, Pa.; A. Beekman Bergen, Tarrytown, N. Y.; Thornville, Ohio, Congregation, Rev. C. M. Rohrbaugh, Pastor; In honor of Rev. Samuel A. Leinbach, by Bern Congregation; B. and L. Kuss, Rochester, N. Y.; Rev. and Mrs. Christopher Noss; Rev. and Mrs. William E. Hoy, Yochow, China; John and Lena Zurfluh; Professor Paul Lambert Gerhard.

As is generally known, the old Buddhist temple has been rebuilt as a neat and convenient parsonage, the greater part of the cost being borne by the Houck sisters, members of the Evangelical Reformed Church, Frederick, Md. The lot on which the buildings stand is at the northwest corner of the intersection of two of the best streets in the city, no better location could be found. The size of the lot is 210 feet by 222 feet. The length of the church is east and west along the southern side of the lot. The parsonage is on the north side. The ground with the temple included was purchased fifteen years ago for 63 *sen per tsubo* (36 square feet), now the ground alone is worth 15 *yen per tsubo*, or over 23 times as much. Altogether it is a fine church property. The Tohoku Gakuin property adjoins it on the west side. These buildings make a fine appearance, and will be a center of influence for the whole work in north Japan.

Mrs. Schneder, who has worked much for this building, will give further partic-

look and wonder. Some simple-hearted Christians from the country said that they thought that heaven must be something like that. The members of the congregation were very happy. After the years of labor and anxiety the feeling that was uppermost was not one of regret or disappointment; on the contrary, it was a feeling of satisfaction that in the providence of God a good and wise thing had been done. In view of the past years it was indeed a coronation day. We believe that God will dwell in this house, and that it will be used by His Spirit to bring many unto life.

The building consists of a strong wooden frame encased by a brick wall. This makes it practically earthquake proof. It is in the shape of a Roman cross, and is 89½ feet long by 47 feet wide at the widest point. The height of the steeple is 90 feet. The roof is covered with slate. The window glass is of very light blue and very light yellow tints. The inside is beautifully finished in pine, and is divided into a main audience room and a Sunday-school room, there being a curtain between them. At the Sunday-school end there is a small gallery, and besides there are eight small rooms that can be used as class rooms, four of which can be thrown into the main room when desired. The comfortable seating capacity is about 525, though as many as 600 or more can find room. The architect was a German by the name of Richard Seel, a man of much experience and ability in his profession. The building gives the impression of proportion, architectural correctness and beauty.

Many large and generous gifts were made for our new house of worship which cannot all be enumerated here, but which are not forgotten by those most interested. A number of special gifts were also made that associate the building with friends both Japanese and American. The pulpit was formerly the pulpit of St. Stephen's Church, Reading, (Mrs. Schneder's home church), and before that the altar of St. Paul's Reformed Church, Reading. The pulpit Bible is a gift in memory of the former wife of the pastor. The altar, made of beautiful keiyaki [*sic*] wood, is the gift of the three children of Mr. Fred. Kelker, Harrisburg, Pa. The baptismal font was provided by the Mission Band of Salem Reformed Church, Harrisburg, Pa. The fine reed organ, especially constructed for use in churches and Sunday-schools, was the generous gift of the First Reformed Church, Reading, Pa. The large curtain separating the two rooms was presented by St. John's Reformed Church, Shamokin, Pa. A large contribution toward the furnace in the cellar was made by Mr. and Mrs. Bergen, of Tarrytown, N.Y., members of the Dutch Reformed Church. Perhaps the most beautiful gift of all is the sweet-toned bell

(120)

With kindest regards,

Yours very sincerely, D. B. Schneder

P. S. At our meeting this evening I was asked to state to you that we have purchased one of the lots contemplated for the Tohoku Gakuin. The lot is large enough to meet government requirements, but not large enough for additional buildings, and we therefore want to buy the additional one as soon as possible, as prices are going up. The lot purchased is 1500 *tsubo*, or about an acre and a quarter. The cost is *yen* 4750, or \$2375. That amount ought to be in hand by July 1st, as from that time on we must pay interest if we can not make the payment. I have already written to Dr. Lemberger.

D. B. Schneder

99. D. B. シュネーダー「仙台教会献堂式」(1901年10月20日)

DEDICATION OF THE SENDAI CHURCH

October 20th, 1901, will probably long be looked back to as an important event in the history of Christian work in north Japan. It was the day of the dedication of the new Sendai church. After years of effort this building at last reached completion, and was solemnly set apart to the worship of God on the above mentioned date. It was a beautiful day, and by nine o'clock, the time appointed for the services to begin, the church was already filled by an audience which consisted of the members of the church, invited members of churches of other denominations, people from country churches, unbelievers who are seekers after the truth, and a number of prominent citizens of Sendai. The service began with the chanting of the Te Deum, by an excellent choir under the leadership of Rev. Mr. Faust and Mrs. Snyder, the general musical arrangement being in charge of Miss Weidner. The services were in charge of Rev. Mr. Saito, pastor of the church, who performed the dedication act. The order of service was that of the Directory of Worship. Rev. K. Ibuka, president of the Meiji Gakuin, of Tokyo, preached the sermon from John 4: 20-24. It was a masterly discourse. The hymns and chants were beautifully sung. A brief report of the building operations was read and grateful mention was made of the many gifts received from friends in America. After the service of more than two hours' duration was over many remained to

D. B. Schneder

97. D. B. シュネーダー書簡(キャンレンダー宛 1901年5月8日)

Sendai, Japan, May 8th, 1901.

Dear Dr. Callender:— I inclose a letter about Bro. Oshikawa, but before sending it will read it at a special meeting of the Mission this evening. He is left now without any means of support, and I feel anxious about him. One might say that it serves him right for not sticking to his work. But I believe that he feels sincerely impelled to try to do work of a broad and general character; to influence the centers of power and to shape general tendencies, in favor of the Kingdom of Christ. If I had the money I would gladly give him his living and let him do what he likes, for I would trust him to work for Christ anywhere, directly or indirectly. He may be able to get his support from the school in Peking, but he would certainly have more influence if he were not dependent upon the people there for his support. Before leaving Sendai he paid 115yen toward the church building, which amount he had promised; but he must have borrowed the money to do it with. Yet he left the city in cheerfulness and hearty love for the work, and us workers.

I was elected president in his stead, none of our younger Japanese being yet considered seasoned sufficiently. But I prefer to be free from duties of administration, and wish to hold the office only until either Bro. Oshikawa returns or some other person can be entrusted with it.

The two schools are in flourishing condition now. The Tohoku Gakuin admitted 62 new students, and the Miyagi Jo Gakko 30. Ground has been purchased for a gymnastic field for the Tohoku Gakuin. Just last evening I received a letter from Dr. MacLean, of Pacific Theological Seminary, about Mr. Demura. I inclose it. You may care to publish it, or parts of it. That a graduate of our theological school should enter the senior class of an American Seminary of high standing and graduate with such honor is certainly very gratifying to us, Mr. Demura, as you will remember, was supported by the Catawissa congregation, and after graduating taught English and History in our school for several years.

I do hope the Board will be relieved of financial embarrassment. Why can not our church be thoroughly loyal to General Synod? Bros. Hoy and Cromer are now in Hunan. We often think of them.

(118)

8. That a Committee of three, including the Senior member of the Mission, be appointed to prepare a course of study in the Japanese language, the same to be submitted to the Mission. The Chairman appointed Mr. Miller and Mr. Noss to this Committee.

Adjourned with the benediction.

Christopher Noss, Secretary.

96. D. B. シュネーダー書簡(キャレンダー宛 1900年10月4日)

Sendai, Japan, Oct. 4, 1900.

Dear Dr. Callender:— At a recent meeting of the Mission I was appointed to make a statement to you as secretary of the Foreign Board concerning the attitude of the Mission toward the question of establishing a Christian University in Japan.

1. The attitude of the Mission is in a general way favorable. It is believed that such an institution would not only send out many Christian young men who would become a leavening power among these people, but it would give private Christian education in this country a standing and an importance which it otherwise could not have. Thus it would help to deliver the nation from the tyranny of a totally religionless educational system.

2. It is the opinion of the Mission, however, that the direct management of the institution can not be successfully conducted by a Board living in America, but must be entrusted to a Board whose members are resident in Japan, some of them being foreigners and some Japanese. This does not, however, preclude the plan of having a Board in America that may have ultimate authority on fundamental questions.

3. The Mission suggests that in connection with the proposed university, provision be made for the higher education of women. Coeducation in the strict sense would not be practicable, but a Women's Department or Annex should be established.

Of course the Mission realizes the immense difficulties of successfully establishing and conducting such a university. A very large sum of money will be needed to start with. The Imperial University of Tokyo, according to good authority, is not far behind the best universities of America and Europe, and the proposed Christian University should be equal to it in the facilities it affords.

Respectfully submitted,

2. The Committee appointed to prepare a minute on the occasion of Rev. W. E. Hoy's withdrawal from the field, Rev. Miller and Dr. Schneder, reported as follows:

"Whereas our brother and colleague in the foreign missionary service, Rev. W. E. Hoy, in obedience to what he believes to be a divine call, and to the direction of our Board of Foreign Missions, has severed his connection with the Japan Mission of the Reformed Church in the United States in order to engage in missionary work in China, be it

Resolved, that we hereby testify to Mr. Hoy's zeal and fidelity in service, in spite of much suffering and many hindrances, while associated with us;

Resolved, that, appreciating the difficulties of the new work upon which he has entered, we commend him and his self-sacrificing wife and their young children to the care and direction of our Lord and Master, praying that the loss sustained by the Japan Mission through the withdrawal of this family may redound to the greater advantage of our Church's new Mission in China."

These resolutions were unanimously approved.

3. Dr. Schneder, for the Building Committee of the Nibancho Church made a statement to the effect that while the amount now in hand, 11,000 Yen, is sufficient to pay for all the work now under contract, including floors and inside wood-work, 3,000 Yen more would be required for the plastering, doors, windows, furniture, etc. The Mission then adopted the following:

"Whereas the native Christians of the Nibancho Church have obligated themselves to raise in Japan One Thousand Yen (\$500.-gold) additional, be it

Resolved, that the Board be requested to appropriate another \$500.- for the new Church and further to grant Mrs. Schneder permission to raise \$500.- more among friends in America whom she has already interested in the Nibancho Church."

4. It was further noted that Dr. Schneder be allowed to overdraw his appropriation for house-repair for the purpose of repainting his house.

5. That the Treasurer's Report and the Evangelistic Report with Statistic be prepared at the time of the Semi-annual meeting in January; the other reports, in June, as before.

6. That the Secretary be instructed to inquire of the Board of Foreign Missions when the next estimates should be submitted.

7. That the Rev. H. K. and Mrs. Miller be instructed to return to America on furlough about the end of January or the first of February.

those people who have not the immediate missionary environment to strengthen them, when a minister discourages at a time when encouragement would set going forces that would reach unto heaven ?

In view of the millions of China, I will write from time to time what I saw and heard and experienced, and let no one hinder the work of God. If there is a God and a Christ, the all powerful Saviour of men, I say unto each and every one in the Reformed Church: Beware how you speak, write or act. There is a poison of spiritual death in indifference or in discouragement when God calls. I shall never forget how a certain elder groaned in spirit when he spoke to me along these lines. Ah, do we believe in God and have we faith to hear the call of God ? Speak, thou, O Lord.

Strong as I am in the conviction that God calls you and me to China, I cannot do otherwise than write and speak to that end. Should circumstances prevent my going, I shall be ready to see you send someone else. The first great thing is to start the mission in earnest.

I have more letters to write in this series, and I pray God to bless us in this new enterprise. We *can* do this additional work. The only question is, *will you* ?

Sincerely yours,

W. E. Hoy

(*The Messenger*, January 5, 1899)

95. 在日宣教師団会議録(1899年12月2日)

49 Niizakadori, Sendai, 4 p.m. 2nd Dec. 1899.

A special meeting of the Mission was called by the Vice President, Dr. Schneder, at the residence of Rev. S. S. Snyder. There were present: Dr. Schneder, Rev. Miller, Miss Zurfluh, Rev. Snyder, Prof. Gerhard, Miss Rohrbaugh, and Noss. Rev. Snyder led in prayer.

The Secretary read the proceedings of the Board at its last meeting in Harrisburg, September 12 & 13.

At this point Rev. Snyder withdrew from the meeting.

1. It was Resolved that Rev. S. S. Snyder be asked to prepare "a full and detailed statement of the difficulties which called for his retirement from the Tohoku Gakuin," the same to be submitted to the Mission at its next semi-annual meeting and forwarded to the Board.

hand of God; how I struggled against the idea of parting from my work in Japan; how the thought of long years of weary labor in China, perhaps, without much tangible fruit, made me groan in spirit; how on my return to Japan the far prettier scenery and the far cleaner habits of the people, caused me to shudder at what might be before us if we were to go to China. These experiences I can only hint at. Nor is it a pleasure to write out this series of letters, with the possibility of being only misunderstood. In the fear and love of God I am writing this call to China. Though you cannot appreciate the force of my own personal call, I am fully persuaded, that neither death, nor life, nor angels, nor principalities, nor powers, nor things present, nor things to come, nor height, nor depth, nor any other creature, can shake me in the conviction that God is using me, weak as I am, to call you to greater effort for China. It is not an idle boast but a solemn sense of duty, when I say that you *can* open a Mission in China; for my own experience teaches me what *can* be done, with God, and a will to do, to help one. Yea, in the name of God, I refer you to the Moravians, the Southern Presbyterian Church, and the Salvation Army, for examples. Were you, dear friends, as earnest in Foreign Missions as you reasonably ought to be, you could not only start a new mission in China, but you could also do noble things for Africa. Would to God that I had the ability to tell you in a forcible way the things that are possible to us if we "follow His steps." Oh, if instead of the chronic *no*, you would come out in "His steps" and be about your Father's business.

Let us not look backward but forward. There is a goodly inheritance of blessed service before us as a Church, if we will only do our best. If all our ministers could join in the effort to advance in our Foreign Mission work, and inform themselves, and fill themselves until their very presence would suggest new things, what could we not do? If all our elders and deacons would become flames of zeal for the coming of Christ to His own, what victories could not we achieve? If all our members, our children, our Sunday-school workers would say, "We, too, must have a reasonable part in the evangelization of the world," what a harvest of souls could we not reap both at home and in many other countries of the world?

By my own experience I call upon all our ministers to beware how they write or speak their fears of taking an advance step. God only knows how some articles in our church papers in the past, and some spoken words from the lips of pastors so chilled my own soul that I needed the stronger faith and warmer heart of my wife to let loose again the genial currents of a brighter spirit. How must it be with

it would be a great wrong to send his family into such a field. We cannot appreciate the force of a call which would send the mother and children into a place of danger, at a time when the services of Mr. and Mrs. Hoy can scarcely be dispensed with in their present field, where they can labor in comparative safety."

That I do not wish to weaken the cause of Christ in Japan, I surely need not affirm. The mission has full sympathy with and confidence in my motives, and a resolution to that effect has been sent to the Board. "Not less of Japan, but more of China," is my motto. Service unto the Lord.

"We believe it would be a great wrong to send his family into such a field." Does Jesus say that? Do those noble missionary families in China whose history of persecution, fiery trials and persevering obedience is everywhere known, say that? Do those families whom I met in China, at the very gates of "the hostile section," and who went back with love and faith to the homes from which they had been driven by thousands of howling men, say that? Do those women and children who have been held by a murderous mob before their own burning homes with the dire threats of being hurled into the flames, say that? Aye, the missionary force in the world is made of sterner stuff than to shrink from possible danger, when they are convinced in their own minds and hearts that God has called them. Thank God that I was never tempted to run away from duty by any missionaries that I met in China. They are not made that way.

"We cannot appreciate the force of a call which would send the mother and children into a place of such danger." Mrs. Hoy appreciates the call. Willie, Gertrude and Mabel, our oldest little ones, have opened their hearts to a wider love, and talk about Papa's call to China. They say they can help to teach the Chinese better things, and that they are not afraid of bad men. Is not this from God?

As to the force of the call, I cannot expect you, Reformed friends, to feel as I do. I have ever loved Japan, and I have ever been true to Japan, and I shall never forget her best interests; but the call to China is the strongest spiritual experience of my life. It were a shallow and unworthy call indeed, should I base it upon mere physical health. How I read the Bible through, while in China, to see the consecutive plan of God for the salvation and blessing of all men; how I prayed, sometimes by the hour, for more light on the subject; how the sin, the poverty and the superstitions of the great mass of people in China, appealed to my heart; how the force of circumstances over which I had no control whatever, led me to see the

glad to say that the costs will not exceed \$ 200 Gold, and we have more than enough money on hand to cover that amount.

The men who have caused us so much trouble in our evangelistic work seem to be coming to their senses. A committee appointed by the classis and consisting of Rev. M. Oshikawa, chairman, and three of our Tohoku Gakuin Faculty, and one elder, drew up a letter to be sent to all the preaching places. In this document they reflected on the Mission in general and on me in particular. They intimated that as we refuse all to do as they wished we lacked the spirit of Christ, and did not strive to promote the Gospel of salvation, of the Brotherhood of man, and of love. The letter also contained the statement that the Mission is a nuisance. In private Rev. M. Oshikawa says that we do not represent the Church at home, that the Japanese evangelists have as much right to dispose of our money as our Mission has. The letter, however, has not been sent yet, and it likely will not be. Better sense may prevail.

It is absurd to think that the four most prominent Japanese men in the Tōhoku Gakuin should rise up to oppose our methods of evangelistic work because we do not give them the control. These men must come to their senses or leave our work, or else *we* shall have to go out. I believe they will soon see in full the foolish stand they have taken.

Gertrude has a great deal of fever the last few days, and we apprehend brain trouble. With love to all,

Sincerely yours,

W. E. Hoy

94. W. E. ホーイ 「我らは前進すべきか」 XII (1899年1月5日)

SHALL WE GO FORWARD XII

“Christ also suffered for us, leaving us an example, that we should follow His steps.”

A writer in *The Reformed Church Messenger* of July 7, 1898, in his article, “Shall We Have a Mission in China?” expresses many thoughts with which I must differ. I have neither time nor inclination to enter into a detailed refutation; but one statement I cannot pass by in silence. It is this, “If as Brother Hoy’s letters indicate, the most available and proper field for our church is the hostile section of China, it appears to us that he is not an available man for the field. We believe

safe. Refusal must mean death and even obedience might incur the same fate. Nervous as I naturally would be under such circumstances, it took me some time to work the safe combination. During this ordeal I expected to be cut down any moment. After the door was opened the robbers soon helped themselves to the 7,000 Yen—partly building fund and partly Mission funds—which I had placed there in various sums from time to time, as at that time there was a general scare about the banks in Japan. The men left without doing me any harm. Then, there I sat for hours before the safe. Words fail me to describe my feelings. For years I had toiled so hard and sacrificed so much for our School and now in a moment all hope was gone! What would the Mission say? What would the Board be able to do? What effect would this loss have upon the Church at home? And so on. At last I cried out, “O Lord, put the burden on me. Put the burden on me. The work must not suffer. I will bear the burden.” Thus for nearly seven years I have labored on, and it has not been without its blessing. For some time I have realized the blessing of unreserved service to God.

As my wife, several dear friends, and now the Board, assure me that it is not right for me to go on alone in this matter, I reluctantly give these facts.

As to the exact sum to cover it all in Gold I can hardly answer accurately. At the time exchange averaged about .80. This would make the 7,000 Yen \$ 5,600 Gold. But that does not express the real amount I have used to gradually reduce the sum, because since that time exchange has varied very much—once falling to .47. For some time it has been .51 to .53. Just now it is .50. So the 7,000 Yen just now would mean only \$ 3,500 Gold. I have worked off all but about 2,000 Yen, or as exchange runs about \$ 1,000 Gold.

Your offer to help me and to reimburse me is certainly very kind, but, dear Doctor, if these facts should bring any obstacle whatever to the income and work of the Board, I had much rather toil on alone. The effect may be injurious to the cause, if you make this affair public; for without discriminating, people may cry out, “O the Japanese are not to be trusted,” especially in the light of the Dōshisha, and of our own present troubles in the evangelistic work. Consider first the good of the cause. I am not afraid to tread the wine-press alone. I see the end of it all. Be sure that the work as now constituted will be carried on, before you think of me.

(*The Messenger*, September 30, 1897)

[以下、掲載されなかった部分]

In regard to repairs to our buildings on account of earthquake damages, I am

gradual development of our course of study. We have, today, Preparatory, College, and Theological Seminary.

The Tokoku Gakuin has now a well selected library, a very fair beginning indeed, mainly the gift of two members of the Mission, as the Hon. Rudolph J. Kelker Memorial Library.

The new Tohoku Gakuin building was erected in the fall of 1890 and in the spring and summer of 1891.

Miss Lizzie R. Poorbaugh and Miss Mary B. Ault arrived in July, 1886. The Miyagi Jogakko was organized in September, 1886.

Our present buildings on the Sambancho lot were erected in the spring, summer and fall of 1888.

Commensurate with our growth in educational work has been the development of our evangelistic work. We occupy a large territory and have already entered many important cities. Here I refer you to our latest statistics.

Dear Doctor, this is a hurried sketch—I could not find time to do more, I am to rest, but somehow my correspondence and family matters keep me busy as a bee. I believe, however, that my new environments will do me much good, physically, mentally & spiritually.

Yours sincerely,

W. E. Hoy

93. W. E. ホーイ書簡(キャレンダー宛 1897年5月19日)

Sendai, Japan, May 19, 1897.

Dear Doctor Callender:— Your sympathetic letter of April 22nd reached me early this morning. I wish I might remain silent. Of the Mission, Mrs. Hoy, Bro. Schneder, Bro. Gerhard, Dr. Moore and Bro. Snyder, are the only ones, I think, who are aware of my misfortune; and in America but a few confidential friends bear the matter on their minds. Mrs. Hoy was the first to be told of the affair, and this not till February, 1896. The facts are few, but they remain burned deep into my mind.

In October, 1890, one day, late at night, I heard the familiar call, “*Yūbin*”—mail—at the front door. As usual, without a thought of danger, I went to the door. There stood three masked men, each with the deadly Japanese sword thrust into close proximity with my head and breast. They demanded access to the Mission

these young men—some thirty, if I remember correctly—an hour a day. I soon came to see the opportunity of building up a good boys' school, and I began to write about the matter to our Board; but I received no encouragement. Dr. Johnston even rebuked me for writing too hopeful a letter on that subject. Bro. Oshikawa and I met frequently to discuss the matter and to pray over it—many a time did I arise at night to seek help and wisdom from God. One day Mr. Oshikawa came to my house and brought me the 12 pieces of silver—the story of which you know very well—and with tears in his eyes told me that our prayers were beginning to be answered. I shall never forget the simple joy and the awful holiness of that hour. It was told that there were six young [men] ready to come and be trained as preachers of the gospel. The Spirit of God was upon me and I then and there solemnly promised Mr. Oshikawa to support those young men for one year. To meet these claims upon my meager purse I had to devise the most rigid economy and the most systematic self-denial. I took God into partnership. I talked as freely with God as I may speak with you. He entered into all my projects. I thought and acted *as if God were a member of my household*; setting apart so much for God and so much for me. It was often my lot to go half hungry, to wear patched and insufficient clothing and to have to throw my clothing over my bed at night to keep warm. We met in a poor Japanese house in the most solitary part of Sendai and could afford no stove the first winter, having only a small charcoal fire to warm our fingers. With all these deprivations, however, this was the happiest school year of my life. We were all fully conscious that important and far-reaching foundations were being laid, and we thanked God for the work of the present and the hope of the future.

At the end of the first year the Board came to my relief and assumed the support of this school of the prophets. In the fall of 1887 the school met for several months in a small Japanese hut where my residence now stands—78 Higashi Sambancho. Then we removed to the old temple which now serves as the place of worship for the Sendai Congregation. In Aug. 1888, I purchased the main part of the present grounds of the Tohoku Gakuin and erected thereon the Rev. John Ault Memorial Hall. Early in December we moved into this and remained here till Sept. 18, 1891, when the present building of the Tohoku Gakuin was finished. In Aug. 1890, I purchased additional ground for the Tohoku Gakuin.

January 1, 1888, Rev. D. B. Schneder was sent out to become a professor in our School. He has had ever since the most important part and influence in the

It is his time then. He needs a vacation five times more than I do. Let him come home next spring. He deserves a rest more than I do. He is five times a better man than I am.

Yours most sincerely,

W. E. Hoy

62. W. E. ホーイ書簡(カレンダー宛 1895年1月11日)

Carlisle, Pa., Jan. 11, 1895.

Dear Doctor Callender:— I will here most cheerfully give you a short outline of our Mission movements in Sendai, leaving it entirely to your own good judgment to use what you may see fit and to omit any part or all if you so choose.

It may not be out of place to note that for several years previous to my arrival on the field Bro. Oshikawa was constantly praying for a good boys' school and also one for girls. Nor did he forget to ask God for help in the large evangelistic field of the North. The several Missions of the Union Council were asked to send men to Sendai, but there seemed to be no way of answering Bro. Oshikawa's appeals. During those several years of praying and seeking for men on the part of Rev. M. Oshikawa, the good Lord of the harvest was preparing our Church, our Board and our Mission for that important field. God set to work forces in America and forces in Japan. The second day after my arrival in Japan I was introduced to Bro. Oshikawa in the parlor of a Dutch Reformed missionary residing at No. 29 Tsukiji, Tokyo. He at once appealed to me to come to his field in and around Sendai. Rev. James Ballagh, of the Dutch Reformed mission, and Rev. A. D. Gring also asked me whether I was willing to go to Sendai and start it "*alone.*" I said at once that I felt that the Lord had called me to Sendai and that I would go at once with Mr. Gring to see the place. So within a week of my arrival in Japan, I was walking the streets of Sendai. I saw the opportunity of the hour and not a shadow of a doubt ever entered my mind as to my divine call to Sendai. Returning to Tokyo, I soon purchased all necessary furniture to go to housekeeping in Sendai. On the 13th of January, 1886, I moved into my first Japanese home, a happy young man, conscious of having an important mission to fill in Sendai, and painfully aware of weakness and unfitness. Immediately a number of young men gathered about me, some for instruction in the Bible and others for the little English they might learn from me. For relaxation from the severer task of studying the Japanese language, I taught

at that. I have learned to take life and work with the minimum of worry. It is worry that kills men, not hard work. I eat well, sleep well, rest well, work well, and by the grace of God try to live well. I feel no necessity whatever of a vacation. I can't go home now; so I want my family to return to me this fall, as I wrote before.

The Japan Evangelist is not going to be a financial failure. Do you for a moment suppose I rushed in blindly like a fool where angels might fear to tread? Did not my eight years of rigid self-denial and of *success* in the Tohoku Gakuin give me a good foundation upon which to build with caution and proper forethought? I started with a proper knowledge of the ups and downs of life and work, and to-day I have no reason whatever to feel regret at what I have undertaken or to be discouraged at the prospects. You are discouraged, you and Mr. Fierver, looking at the matter from the standpoint of our own Church. Know you not that *The Japan Evangelist* is patronized by 23 denominations? The magazine has friends in Nova Scotia, Canada, England, U. S. A., China and Japan. *It is not going to be a financial failure. Your reiterated fears will not be realized.* The monthly income of the magazine is steadily increasing. You do us great injustice with your doubts and fears and your advice to give up rather than not to be able to go home now. The magazine will be self-supporting very soon; then, of course, I must work to get even on the amount invested in sending out thousands of sample copies the first year. All this needs my own personal supervision.

After having endorsed the magazines, the Board owes me a fair chance; and on this fair chance, in the highest sense of manhood, I must kindly but firmly insist. I know what ground I am tilling. Your doubts and fears do me great injustice. I thought my faithful service of nearly nine years had inspired confidence in me on your part; but it seems I am surely mistaken.

For God's sake let me do my work in life as God has now taught me, along the lines of educations, evangelistic and journalistic work. My duty is clear. Conscience keeps me here. I try to obey God and to take care of my body. I know I will disappoint many friends in not going home on this furlough; but on the highest points of conscience I will allow no one to come between me and my God. I love my friends, yea *love* them all more and more in the Lord Jesus Christ. Life is short. Life is earnest. Life means consecrated work. Life is short. We shall all soon meet in Heaven. Don't worry about me.

Will not the Board kindly grant Rev. D. B. Schneder a furlough from next spring.

so sincere that they would rather die than bring disgrace upon Japan or upon the Emperor by any impurity of thought, word or deed. And these Christian students will sing the National Hymn as earnestly and honestly as any one else ever did or can. They will give the National Salute as nobly as any one else ever did or can. In the spirit and beauty of holiness they will serve their country as valiantly as any Japanese, Roman, Greek, Englishman or American ever did. They will be men among the Japanese, for the Japanese and with the Japanese.

In the establishment of this Christian institution of learning, we have entered the life, the hope, the promise, the progress of a country as dear to myself as my own beloved America. By being faithful to the Christian principles of our work, we shall not be taking from, but adding to the material as well as the intellectual and spiritual wealth of this country. In the spirit of service and of helpfulness, we hope to grow in influence. In the life, work and character of our students we look for a perennial source of scholarship, of patriotism and of Christian endeavor.

* My country.

† Singing girls.

(*The Missionary Guardian*, Vol.III, No.4, April 1893)

61. W. E. ホーイ書簡(キャレンダー宛 1894年9月29日)

Sendai, Japan, Sept. 29, 1894.

Dear Doctor Callender:— You will rejoice with us in the fact that by the prevailing grace of God there has come to pass a perfect understanding between Rev. M. Oshikawa and myself. *I go back to the Tohoku Gakuin*. Thank God! His love still dwells in our hearts. We look to Him to guide us in the future. My Japanese friends, as well as our mission, have been very kind to me in this severe ordeal. Thank God! We have all learned a good lesson. The Father in His infinite love and pity does not allow His weak children to dwell long apart. Christ today seems much more real to me than ever before. Yes, I go back to my old, old love—the Tohoku Gakuin.

Now I wish to speak plainly about *The Japan Evangelist*. Please do not be offended if I speak to the point. You write to Mrs. Hoy that I am overworking. System and the eternal fitness of regularity enable me to do what I am doing. I am now in excellent health; am heavier than ever—and it is all solid healthy flesh

cognize them in a larger unity. This new unit of thought is again to be differentiated and integrated. This process we seek to continue until the unfolding mind of the student comprehends all material things in the unity of Cosmos, and further on, in the unity of a rational system under the government of God in Christ Jesus our Lord.

These are some of the special provinces of Tōhoku Gakuin. But more than this broad and liberal culture, more than is included in every faculty, more than can be accomplished in merely traversing many fields of knowledge, we seek in every student *The Man*, the eternal thought that animates his being. Yea, we seek to develop that germ of innate truth which lies lodged in the human heart and comes to view in speech and action; truth as it is embodied in the constitution of man. True education is the making of the man, the formation of pure character in the spirit and beauty of holiness; that every thought may be clean; every imagination, white as the soul of a child; every purpose entertained in manliness; every desire, noble and elevating; every achievement attained in helpfulness, helpfulness and harmony. Not the storing of wealth, not the conquest of nature only, not the gaining of pre-eminence in society as such can be the end of our work. But the perfection of every student's being, and the advancement of society in purity of life and work. Let every student be clean in thought, speech and deed. Let every student walk in righteousness and holiness. Let every student be true to Japan and to his beloved Emperor by being a man, and by being a man he will realize the perfection of his being in Jesus of Nazareth. Then will he serve the best interests of "*Waga Kuni.*"* Then will Japan become what she dearly loves and seeks after.

And in the making of the man, patriotism is a vital point. The highest patriotism is in the service of a man to his country and his ruler in the spirit of beauty and holiness. Not in loud speeches, not in gluttony and drunkenness, not in company with the lowest class of geisha,† not in the harlot house, not by the side of a concubine, not in the pursuit of sensual pleasures may we look for the best types of patriotism. An unclean man is physically, intellectually and morally incapacitated to realize the best form and contents of the virtue of patriotism. Patriotism is rooted in a genuine self-respect and in personal holiness.

In love of Japan, in love of the human race, we pursue, therefore, the high and holy purpose of making men of our students, and by the spontaneous force of the very character formed within them by the grace of Jesus Christ to make them patriots,—patriots sincere in their devotion to their country and to their Emperor,

In conjunction with scientific culture, we pay heed to the cultivation of the æsthetic feeling. A sense of the beautiful and ideal is needful in the making of the man. In nature and in art and in life we strive to point out the holy relations and uses of the Perfect. Every bud and flower, every leaf and plant, every hill and mountain, every river and lake, every ray of light, every musical sound, every classic example of painting and sculpture and architecture, every beautiful sentiment in literature, every perfect poem, every vital beauty in human conduct, every manifestation of thought in the universe must become sacred in its daily application to the practical needs and end of a liberal education. We realize the truth, that

“The fairest things are fair for nought,
 Unless our eyes in seeing,
 See hidden in the thing, the thought
 That animates its being.”

To see, to understand, to use the best forms and contents of the beautiful in nature, in art and life,—this is one of the guiding principles in our educational work.

We seek also to bring our students into vital contact with all that is best in the history of the human race. Let the learner be inspired by all the great, the good, the noble in all ages and in all countries, and he will grow in sympathy with and appreciation of the best systems of thought and conduct; and his earliest impulse to be up and doing will be but the fulfillment of a promise and a prophecy uttered by every earnest soul that thirsteth after knowledge.

By the judicious use of philosophy we aim to supplement the training of the senses which science guarantees, to widen and sharpen the intellect, give precision to language and accuracy to thought, develop fundamental ideas, and impart a healthful and delightful activity to the will. The external reality of the object of the simplest sensuous perception, the fundamental forms and powers of consciousness, the contents of thought and feeling, the relations and adaptations and activities of the will, are all to be duly recognized and emphasized in our system of education. The mind must learn to contemplate truth, not only in its concrete and outward expression, but also in its abstract and spiritual relations. True education must free the intellect from the merely concrete side of truth. There are deeper relations than those of external things; there are general laws and principles which the mind must also learn to grasp before it can be fully free. All human thought consists of apprehension, differentiation and comprehension. When two or more objects have been apprehended and discriminated, the mind proceeds to

Thus we have built; and thus we are determined to continue, in faith, in prayer, in communion with God, in service of Jesus Christ, in service to the Japanese. If we fail to do this the best friends of this institution need not care how soon it perishes down to its foundation stone. When Christian voices cease to be heard, and Christian influences to prevail in these halls let the hand of destruction pull down every beam and every brick into the dust. Then let the hissing serpent come and make its home in the ruins, and do its deadly work upon the hand that may so much as touch the last signs of a miserable failure.

Our educational principles are distinctively Christian. But this is not to say that we are out of touch or sympathy with the progress of the age in which we live and labor. We feel, as all thoughtful men must, the marvelous advance in scientific discovery for which our age is justly celebrated. We ourselves, in our daily lives and duties, in our food and clothing, in our social environments, in all the riches that nature has yet yielded up to us, enjoy the enlarged application of new principles in the production and distribution of the things which satisfy human wants, or minister to the well-being of man. The evidences and the fruit of man's triumph over nature and of mind's victory over matter, we recognize in the comforts, the amusements, the improvements of man wrought out by the supreme patience of human skill and genius. In his external material life, also in his internal intellectual life, man has advanced in knowledge and experience. In the unfolding of the historical life of the human race, new and surprising results are produced in the forces of nature. It is little wonder, therefore, that our educational means and methods should also have felt the influence of the spirit of progress. Every point of advantage gained by the enlargement of knowledge affects the development of man's spiritual life as well as his relation to nature. Every enlargement of knowledge is related to the unfolding of mind, the making of the man in the fulness of his powers. Every acquisition of truth in the relation between mind and matter must work out its results in the proper adjustment of human relations.

Yes; we of the Tōhoku Gakuin value science. We welcome all she has to teach or to give us. We are grateful for the comforts and blessings and advantages with which she surrounds us. We clasp hands with her, and search the things in the heavens, the things in the sea, the things on the earth, the things under the earth, the things outside of man, the things in and of man, and prize all the abiding principles of mind and matter.

57. 東北学院開院式におけるW. E. ホーイの演説(1892年11月18日)

AN ADDRESS

By Rev. W. E. Hoy at the Kaikōshiki (Formal Opening)
of the Tōhoku Gakuin, November 18, 1892.

Pericles, the Athenian orator, before he went out to address the people, prayed to the gods that nothing might go out of his mouth but what might be to the purpose. In a like spirit I hope, Ladies and Gentlemen, to speak to the point, using little time and less words.

We celebrate this day *not* with feelings of doubt or uncertainty. After six years of continued struggle with poverty, we stand to-day in the blessed possession of success, evident even to the senses of the most thoughtless. We began this educational work six years ago with six students in a poor little hut in the northwestern part of Sendai. Without name, without money, without help, but with hearts full of hope and souls aglow with faith in God and in the possibilities of our work, we set our faces resolutely towards the future. I rejoice to say that these students, now nearly two hundred of them, and these grounds and buildings are all the fruits of a persistent spirit of faith. Had I time I could demonstrate to you with mathematical precision, giving dates and numbers and places and names, the fact that the beginning, the life, the growth, the increasing prosperity and influence of this institution are the tangible evidences of God's answer to prayer. These very bricks might speak of this truth as it has been manifested in our own experience by day and by night. In the love of Japan, in the love of souls, in the love of God, in the service of Jesus Christ, who is Himself the essence of love and in the service of the Japanese, did we inaugurate the Tōhoku Gakuin.

By faith in Jesus Christ as the Saviour of the world and as the centre and norm of the highest civilization possible to the world in general and to Japan in particular, by prayer to God as the Creator, Upholder and Supreme Governor of the universe, were the foundations of this institution laid in the obscure work of our beginnings six years ago. Along with the seeds of human learning we sought also to plant the infinitely more important truth of man's worth as created in the image of God.

erection of a fine brick building, containing recitation rooms, a library and chapel, was begun in 1890, and completed the following year. The school was thoroughly reorganized, and its former name, "Sendai Theological Seminary," was changed to "Tohoku Gakuin." Additional recitation rooms, for the use of preparatory students, and a gymnasium have been put up during the present year. Now the school provides a preparatory course of three, a collegiate of four and a theological of three years. The theological department has a Japanese and an English course, each three years in length.

Tohoku Gakuin is now in a position to do effective work. It has a large number of students and a respectable teaching force. But even thus, it is felt that the ideal set before us is yet a great way off. The teachers are pretty severely taxed with work, and the different parts of the curriculum are not yet so well adjusted and balanced as we hope it will be in the course of time. Much as has been done, more yet remains to be done. As soon as the Reformed Church at home is ready to move forward in this work, and furnishes the necessary means, the Board of Directors will be only too glad to lengthen their cords and strengthen their stakes. Our Mission now has a school of which it can be justly proud. It is a credit to the community and to the Church which it represents. We are deeply grateful to Almighty God for prospering His work in this part of His vineyard. To Him be the glory. It must not be forgotten, however, that God works through means, and I have no hesitation whatever in saying that the presence of this noble institution in Sendai is largely the fruit of the self-denials and self-sacrifices of the men who were on the field before I came. Much as the offering of the Church at home contributed to the establishment of the school, it certainly would not be what it is now, humanly speaking, if it had not been for the liberal offerings of a few of the foreign missionaries. The aggregate amount of money contributed by these persons, whose whole heart is in the work, amounts to thousands of dollars. Besides this, the amount of worry and anxiety incident to carrying out their plans, cannot be reduced to donations of money. But it was all a free-will offering, and the promoters of the enterprise rejoice in the abundant success which crowns their earnest and sincere efforts. The question that now remains to be answered in a practical way is, Will the Reformed Church supplement both its own and its servants' work by furnishing the means for expansion? Japan is ripe for the harvest. Now put in the sickle.

(*The Messenger*, February 16, 1893)

entertainment were indulged in and *bento* was distributed. Revs. Oshikawa and Schneder delivered addresses.

(*The Messenger*, February 9, 1893)

FORMAL OPENING OF THE TOHOKU GAKUIN — II
BY REV. H. K. MILLER

Before closing this account of the dedication of the Tohoku Gakuin, a few words by way of historical reference may not be out of place here. When Rev. W. E. Hoy came to Japan in 1885, evangelistic work in Sendai and vicinity had been begun and prosecuted on a large scale by Rev. M. Oshikawa. The necessity of training natives for the work of the Gospel ministry became so urgent that the opening of a school for young men was determined upon by these two brethren. The faith of the founders was encouraged by a noteworthy incident. "An aged widow came forward bearing in her hand twelve pieces of silver, which she had laid by for use in case of sickness or death, but which she now cheerfully gave for the founding of the school." In the Fall of 1886 the school opened with six students. Its home was "a dingy old house in the outskirts of Sendai." The whole expense for the first year was borne by one of the founders. With some propriety the new interest might have been said to belong to the Peripatetics, for it removed its quarters from one place to another until in the course of its wanderings it lighted upon a place where was a Buddhist Temple. This building had been purchased by the Sendai Christians, and several back rooms were given up for the use of the school, which under the blessing of God grew and thrived, receiving additions to its teaching force and accessions of students.

It might here be stated that this Buddhist temple is still standing, but it has been remodelled and is now used by the Nibancho church. Here the Gospel is now preached every Sunday. Many of the students belonging to the Tohoku Gakuin and the Girl's School worship here regularly. Not infrequently the foreign missionaries here preach the word of reconciliation.

In 1889 the school found a new home in the John Ault Memorial Hall, which had been erected by Rev. and Mrs. Hoy. This building was used both as a dormitory and as a recitation hall. By this time a seven years' course of study had been laid out. But the Memorial Hall soon became too small for the growing school. The number of students and teachers required larger quarters. Accordingly the

delightful activity to the will. But more than this broad and liberal culture, more than is included in the discipline of every faculty, more than can be accomplished in merely traversing many fields of knowledge, we seek in every student *the man*, the eternal thought that animates his being. Yea, we seek to develop that germ of innate truth which lies lodged in the human heart and comes to view in speech and action, truth as it is embodied in the constitution of man. True education is the making of the man, the formation of pure character in the spirit and beauty of holiness; that every thought may be clean, every imagination as white as the soul of a child, every purpose entertained in manliness, every desire noble and elevating, every achievement attained in helpfulness, hopefulness and harmony. Not the storing up of wealth, not the conquest of nature only, not the gaining of pre-eminence in society as such, can be the end of our work, but the perfection of every student's being and the advancement of society in purity of life and work. In the making of the man, patriotism is a vital point. The highest patriotism is in the service of a man to his country in the spirit and beauty of holiness. An unclean man is physically, intellectually and morally incapacitated to realize the best form and contents of patriotism. In love of Japan, in love of the human race, we pursue, therefore, the high and holy purpose of making men of our students, and by the force of the character formed within them, by the grace of Jesus Christ to make them patriots, sincere in their devotion to their country and to their Emperor, so sincere that they would rather die than bring disgrace upon either. In the life, work and character of our students we look for a perennial source of scholarship, patriotism and of Christian endeavor.

The Governor of Miyagi Ken, the province of which Sendai is the capital, was invited to be present and deliver an address. For some reason he could not attend, but sent a letter, which was read to the audience by one of the native teachers.

Mr. Y. Yendo, Mayor of Sendai, delivered the last address, in which he spoke in warm commendation of the school.

After the benediction, the guests retired to their respective rooms, where they were served with *bento* or lunch. Each received a box of rice mixed with beans, and a box of various Japanese delicacies. This lunch was not eaten in the school, but taken home by the guests.

Owing to the limited capacity of the chapel, it was impossible to have the students present at the afternoon services. But that they might not be slighted, a meeting was held in the evening for their special benefit. Various forms of

hammering with a wooden mallet, for Japanese bells have no clappers) gives notice that it is the time for the ball to open. In designated order the guests now form a procession and march up-stairs into the chapel, where ushers assign them seats. Rev. M. Oshikawa presided over the exercises and delivered an address in Japanese.

A ringing address was also delivered by Rev. W. E. Hoy, the vice-president of the school. Thoroughly Christian in tone, and distinctly and emphatically asserting the evangelical mission and character of the school, the earnest words spoken by him whose heart is wrapped up in the success of the Gakuin, cannot fail in having a wholesome effect. "By faith in Jesus Christ as the Saviour of the world, and as the center and norm of the highest civilization possible to the world in general and to Japan in particular, by prayer to God as the Creator, Upholder and Supreme Governor of the universe, were the foundations of this institution laid in the obscure work of our beginnings six years ago. Along with the seeds of human learning, we sought also to plant the infinitely more important truth of man's worth as created in the image of God.

"Thus we have built; and thus we are determined to continue, in faith, in prayer, in communion with God, in service to Jesus Christ, in service to the Japanese. If we fail to do this, the best friends of this institution need not care how soon it perishes down to its foundation stone. When Christian voices cease to be heard and Christian influences to prevail in these halls, let the hand of destruction pull down every beam and every brick into the dust. Then let the hissing serpent come and make its home in the ruins and do its deadly work upon the hand that may so much as touch the last signs of a miserable failure."

While the education principles are distinctively Christian, that does not mean any lack of sympathy with progress of the age in which we live and labor, or any indifference to scientific investigation. On the contrary we thoroughly believe in scientific investigation, and are deeply grateful for all the comforts and conveniences which result from the triumph of mind over matter, and welcome anything of truth which science has to teach or give us. We also pay heed to the cultivation of the æsthetic feeling. Then, too, we seek to bring our students into vital contact with all that is best in the history of the human race. Further, by the judicious use of philosophy, we aim to supplement the training of the senses, which science guarantees, to widen and sharpen the intellect, give precision to language and accuracy to thought, develop fundamental ideas, and impart a healthful and

style, on the above mentioned date. For a number of days previous to the celebration, the students were busily engaged in providing decorations. They worked hard, and right well did they succeed in putting the new school building and campus in gay holiday attire. The tower of the building was turned into an astronomical observatory. On the very top was mounted a large bamboo telescope, through which visitors could see the celestial luminaries almost as well as with the naked eye. Below, inside of the tower, the walls were covered with well-executed astronomical charts drawn by the students. Flapping in the breezes, way up above the telescope, were the flags of various nations while red Japanese lanterns were strung in long lines from the corners of the tower to the ground, and dangled from the branches of the trees. At the entrance to the campus stood a beautiful evergreen arch touched off with persimmons and surmounted with a motto in Chinese characters. The various recitation rooms were decorated in orthodox Japanese fashion. Flowers and mottoes presented themselves everywhere. In one room those who could read only English were told that "God is love," while the student of the classical languages deciphered the Greek words for "I am the way, the truth and the life." At the head of the stairs an English motto, trimmed along its borders with evergreen and yellow chrysanthemums, in a single word bade the invited guests a cordial "Welcome."

Finally the preparations were completed and the long expected Friday afternoon arrived. The exercises were to begin at two o'clock, but the Japanese were not very much in a hurry, so that it was half-past three before everybody was ready. Now let the reader imagine himself to be one of the Japanese invited guests. He is taken in his *jirikisha* up to the door of the new building. After alighting he has his wooden shoes checked, and steps up to the table just back of the doorway, where stand a number of students assisting the *kanji*, or school functionary or factotum, who attends to the red tape. The guest makes a profound bow to the *kanji*, sucks in his breath, presents his invitation, receives in exchange for it a program and several other papers, makes another bow more or less profound, and is shown into the recitation rooms. Here he remains until all the guests have arrived. If he feels so disposed he can smoke while waiting. There is no objection to being comfortable. If the guest is a married man and brings his wife, he parts company with her at the school. The women are assigned to the room occupied by the foreign guests.

Now it is half-past three, and the ringing of the college bell (or rather its

seeking a new man, to go out in the near future as an additional teacher. To send out this new man, to maintain him while he is laboring there, the Church is called upon to furnish the means. This question will arise in the minds of some who know the condition of the Board's finances. If the expenses could not be met before, how can they be met after they have been increased by the addition of one more missionary family? I reply by saying, Let those who have given to Foreign Missions, give more; and those who have given nothing, give something. This is the only way it can be done.

I have faith in the people that they will contribute enough to meet the demands of our growing work in Japan, provided, the ministers will interest themselves, properly present the subject, and give the people a *fair opportunity*.

The question of *ability* is a vanishing factor, and the question of *willingness*, will be, so soon as our membership fully understand the work, with its needs and demands, and are reminded of their duty in reference to it.

Our school is in a most flourishing condition, having by this time over one hundred students. Our evangelistic work is more than holding its own. A new congregation (self-supporting) was recently organized in the Sendai district. At Yamagata, and other of our outlying stations, souls are born into the kingdom, and members added to the Church. Such is the intelligence that comes to me from Japan to cheer my heart as it should the hearts of all who love the Lord Jesus Christ, and who pray for the coming of His kingdom.

J. P. Moore

(*The Messenger*, May 19, 1892)

56. H. K. ミラー 「東北学院開校式」(1892年11月18日)

KAIKOSHIKI OF THE TOHOKU GAKUIN — I

"*The Formal Opening of the North Eastern Institution*," at Sendai, Japan, as described by Rev. H. K. Miller.

Friday, November 18th, 1892, was a red-letter day, an epoch, in the history of the School. Good work had been done in the new building which adorns the principal street of Sendai, without a formal opening, but still a dedication service was required by the eternal fitness of things. Accordingly, after elaborate preparations on the part of teachers and students, the school received its send-off in becoming

The Seminary building will soon be under roof. Some parts are already covered. Everything can be completed by the latter part of August.

Bro. Moore received his cablegram to "*come in June*" yesterday. It may be impossible for him to start before the fall. We are glad that you have granted this request.

Yours in faith,

W. E. Hoy

51. J. P. モール 「新しいわが神学校校舎」(1892年5月19日)

OUR NEW SEMINARY BUILDING IN JAPAN

The "*Tōhoku Gakuin*" is the new name for our Sendai Theological Seminary. *Tōhoku* means east-north, or as we say, north-east; and *Gaku-in*, means "learning-house." "science-hall. Taking the two together, the name of our school indicates the learning-house (school) of the North-east (of Japan).

And a very suitable name it is, since the Tōhoku Gakuin, is the only *Christian* Boy's School north of Tokio on the east, and of Kanazawa, on the west coast of Japan. It has, therefore, a right to its name, and also, to its existence. It is the same school it was before, only with its course more extensive and thorough, and admitting students, Christians, and I think, non-Christians, who wish to obtain a Christian education; for no other is given within its walls.

Its chief object continues as before, to prepare competent and well approved young men for the work of the holy ministry. At the same time others, not candidates for the ministry, will get such a training as will fit them for the active duties of life in other callings, Christian *lay* workers, teachers, professors, intelligent God-fearing business men, whose services are as indispensable to the Christian Church in Japan, as they are in America. Located in a city of sixty thousand people, and being the only Christian school in a part of the empire with many millions of souls, its sphere of usefulness and influence has become an assured fact; its utility as a Theological Seminary and a general school where literature and science are taught from a Christian standpoint, is not questioned.

It is for this school, so favorably located, hitherto so successful in its operations, and with the brightest prospects for the future, that the Board of Missions is

this in anger. I simply want a better understanding and a little more just consideration. I do not flatter myself that the Mission could not go on without me. I am but a weak vessel; and, if you wish to smash me, you will find very little oil spilled on the ground. If I am growing so disagreeable to the Board as to elicit numerous resolutions to “insist on complying with the original proposition,” when no intimation of not so complying has been given, you had better, perhaps, either convert me to your methods or else ask me to resign. Rest assured, dear Doctor, that I mean to do my duty to the Seminary as long as you own or can own me as your servant; and if “our minds adverse” and “our different spirits” ever separate us, I will never do you or the Seminary the least bit of harm. This precious School of the Prophets has my very heart’s blood and I would never, *never* destroy one ray of her growing hope of great usefulness. An institution like the Sendai Theological Seminary is more than one man, and will increase with the years, though men may come and men may go.

I used to pray that God would give me something to do that no one else could or would do; and in these five years of intense struggle and heavy burdens I have found the answer. In this period I have had the infinite pleasure (this is private) of contributing at least *Five Thousand Dollars* to the Sendai Theological Seminary for various uses and purposes. I am not a man of wealth. I have started out with the gospel of giving *first* to the Lord and providing for my wants *secondly*. The results are simply marvelous. If I remember correctly I received this idea from one of the Wesleys. It is sweetly practical and works wonders as to results. The usual methods of providing first for self and secondly or thirdly of still more remotely for God, would land me in unbelief. I had on this point the greatest trial of faith. The Lord must either come first in *all* things or else we have practically no place for God. I have no use for sentimental or doctrinal Christianity in my own life. Either God first and self second; or self first and bitter atheism for me. If I believe in Christ, I must also believe Him. The usual interpretation put on Christ’s words in relation to giving is a trick of the Devil, and is for me the temptation of all temptations. But I cannot hope to convert any one to my view of Christ’s injunction in methods of giving. I simply state *what I have found best for my own faith and peace*. I do not feel strong enough to preach, when the mere practice of my gospel in Christ brings me naught but misunderstanding from others. I know from the very best evidence that a member of the Board has said that my practice is “a sin.”

sick, to be burned, are like the silent and fear producing ghosts of the night.

(*The Messenger*, April 24, 1890)

46. W. E. ホーイ書簡(キャレンダー宛 1891年5月2日)

75 Higashi Sambancho, Sendai, Japan, May 2, 1891.

Dear Doctor Callender:— I must go on with the Seminary building. To stop now would involve a heavy loss to me. Nor can I interpret your action except in the light that you doubt me. I never, *never* intimated that I was going to end in bad faith. The reason I put the question—“what the Board intends to do, and *when?*”—was suggested, as my letter stated, by the sanguine expressions of Rev. A. R. Bartholomew and Mr. Jos. L. Lemberger. The mission interpreted their assurances even more hopefully than I did. I therefore, simply wanted to know what I had to do in a business point of view. The temptation to be false to my original proposition was *never* suggested to me even by the Devil. The condition that I made recently of remaining in your service by stating that you must send us our appropriations according to contract or accept my resignation, was an entirely different matter. The Seminary in all its aspects, material, intellectual, spiritual, is clearer than ever to me; and I can honestly say that I have never wavered. When I wrote recently to Mr. Lemberger that the Silver troubles brought me additional burdens and that “I hardly know what to do, if you can not send me some funds,” I did not say or determine to cast up things in despair. *And now I will by the help of God go on.*

I most respectfully ask the Board to strike from your books those *unjust and unkind* actions relative to the Seminary building and myself. From the very beginning of my *hard*, HARD, HARD work of building up this Seminary on my own private contributions, instead of common Christian love I have received nothing but a series of adverse and doubtful resolutions. But I need not repeat the past. At first I was unsophisticated enough to hope for sympathy from the Board, but after the bitter correspondence relative to the John Ault Memorial Hall I ceased to look for anything of the kind,—and the Board has not yet explained why they questioned my reasons of giving the John Ault Hall to the Japanese. I am not sick of our work, but God knows that I am weary of these *unkind, unjust and thoughtless* resolutions. If the Board cannot put implicit faith in me, let the statement be made in a straight forward way and not couched in evasive resolutions. I do not write

expenses on the other, with Oshikawa as president of the school. Delighted with this splendid offer we held out the inducement that another family would be sent beside Bro. Moore, since we had been informed by our Secretary that others would come if they had the money to send them.

When this contract was concluded under these most auspicious circumstances, we all rejoiced over the favorable answer to our prayers. Providence had provided for us in Yamagata even more than we lost in Sendai, viz., a young men's school, with large financial co-operation, with Christian teachers, Bro. Oshikawa as President, and which we had fondly hoped would serve as an academic department to our Training School in Sendai, at all events become branches of our larger union collegiate and theological institutions in Tokyo.

When I came to America I brought the contract with me to have the Board ratify it, which they cheerfully did. Bro. Moore was asked to take charge of the school, and during the short stay of two years succeeded admirably. Failure on our part to send another man and wife to Yamagata resulted in the discouragement of those interested in the school, and as a natural consequence could not abide by their promises. The loss of this important interest to our mission is sincerely regretted by us all.

In July, 1886, Miss Poorbaugh and Miss Ault arrived for the purpose of opening a girls' school in Sendai. After a few weeks stay in Tokyo with us, looking over some of the mission schools and buying furniture for their home in Sendai, I accompanied them to Sendai, and remained six weeks. During that time I did all I could to get the ladies comfortably settled. I then gave them their first lessons in Japanese, and did cheerfully whatever I saw could be done to make them at home. I rented a Japanese house for them, in which they, in due time, opened their girls' school for the first time. I shall never forget the very pleasant summer vacation doing the above work, I spent with Bro. Hoy and the ladies, my only regret being that I was compelled to be away from my family, which was then in Tokyo, during the terrible scourge of the cholera which carried off three and four hundred people daily in Tokyo alone.

Soon after my arrival home, myself and family were seized with this dreadful disease, and for one whole week or more, we despaired of our lives, which only God in His merciful providence spared to us. The remembrance of the Japanese policemen, with their air-tight carts (over which floated a small yellow flag, the signal of infectious disease), to bear away our clothing and bedding we used while

those who expected to become helpers in our work in a more private way, and thus to continue to secure residence in Sendai, and at the same time to aid our Christian helpers.

But Bro. Oshikawa and myself felt that we needed something more than Brother Hoy's private instruction, or training school, in the North, to give our mission prominence and position, which the American Board Mission were seeking and obtaining through their branch boys' school. We needed something to get the young men interested in us, and if we did not have a school of our own, these young men would naturally drift to other schools.

The subject of opening a large school for boys and young men grew in importance as we became better acquainted with the needs of the field in the North.

In the fall of 1886, while on a visit to Sendai, Bro. Oshikawa and myself and Bro. Hoy, discussed the school question again, with some of our evangelists, and we were all of one mind that a school like that of the American Board in Sendai was made all the more a necessity for us since their coming to Sendai. But it was evident that Sendai could not support two schools of that character and any school opened by us must be away Sendai. It was also evident that we, as a small mission, could hope to establish such a school ONLY by the hearty financial co-operation of the Japanese people. We might reasonably hope to supply the foreign teachers, provided they supplied the buildings and money to defray all other expenses connected therewith.

Having discussed the question, I urged Bro. Oshikawa to proceed to Yamagata, a city of 20,000 inhabitants, just 45 miles west of Sendai, I had visited this place six years before on a missionary tour with a Methodist brother, and knew it to be an excellent field. Bro. Oshikawa also was partial to this place, having influential acquaintances here.

The visit of Bro. Oshikawa to Yamagata resulted in an invitation from the Governor of Yamagata to us, by telegram, to meet him and the Vice-President of the Provincial Assembly, etc., in Tokyo, to consult about the founding of a boys' school in Yamagata. We were all in Sendai at the time, attending a meeting of Classis. After the Classis adjourned we all went to Tokyo to attend the Synod of the Union Church, and to meet the Yamagata authorities. The result of our meeting was a three year contract between the Governor of Yamagata and myself, as the President of the Mission, providing for the salary of our foreign teacher, 1,500 yen and a house, on the one hand, and for school buildings and running

and was therefore obliged to rent another. Fortunately, a new, better, and larger house was then just being finished, and into this he was glad to move.

According to Treaty stipulations, no foreigner, be he missionary or not, is allowed to reside outside of Treaty Ports, and Concessions, unless *actually* or *nominally* employed by the Government or by an individual Japanese. Bro. Hoy, because of this law, was obliged to teach in Sendai, and accordingly opened a boys' school.

In February Dr. D. C. Green, pioneer missionary of the American Board, and Rev. J. H. DeForest, came to my house, to consult about our Sendai work. They stated that a year before, their Mission contemplated opening work in Sendai, and that but a few days ago they received a cablegram from the Board in America, saying that two first class men had been appointed for the work in Sendai, and that in addition to this, they had, through Mr. Neeshima, the President of their College in Kiyoto, an offer of co-operation to the amount of \$ 5,000 to establish a *branch school* in Sendai. I informed them, that we had gone to Sendai without a knowledge of their contemplated plans of going there, to open a boys' and girls' school in connection with the churches, and expected financial co-operation from the people through Bro. Oshikawa.

The result of this visit and considerable correspondence between myself and their mission, was, that they accepted the offer of \$ 5,000, and opened in Sendai a branch boys' school. They (the mission) were to supply the foreign teachers, without pay from the Japanese, and the people were to put up the buildings and defray the running expenses. They invited us to take part in the school, through Bro. Hoy, but I took the ground that so long as we were ecclesiastically separated, it would hardly be wise to unite in school work.

The establishment of the American Board's school in Sendai put a stop to our school, which Bro. Hoy had charge of. This was thought wise, to avoid anything like rivalry, and also to avoid the injury we would receive by contact with this larger school. While we welcomed the coming of this school of the American Board to Sendai, under the circumstances, with such splendid co-operation and influence of the greatest Christian educator in Japan, Rev. Neeshima, yet it frustrated all our plans of a boys' school, with financial co-operation, in Sendai. Bro. Oshikawa was much discouraged by it, and so were others, but it was a good occasion to rejoice in the successes of others.

Bro. Hoy was now advised to turn his attention to teaching our evangelists, or

following Monday afternoon Bro. Hoy and myself steamed out the Bay on our way to Sendai.

(*The Messenger*, April 17, 1890)

Continued.

In Sendai we met some [of] the Evangelists and Christians, but Bro. Oshikawa was not at home. We looked over the field and were pleased, and tried to secure a suitable home for Bro. Hoy, I acting as his interpreter and spokesman. We were both much pleased with the city, and before coming away succeeded in renting a small Japanese home.

Bro. Hoy returned with me to Tokyo, and stayed with me a number of weeks, during which time, with our assistance, he prepared to move into his house in Sendai.

Early in January the Council of the Union Church met. This Council is composed of all the foreign missionaries belonging to the Union Church, and meets annually, or more frequently, to hear the yearly report of the work of the various stations, made up into a general report of the whole Union Church, which is afterwards printed and sent out to the church at home and elsewhere. At this Council also all matters pertaining to the interests of the Union are discussed and passed upon. At this meeting of the Council above referred to, the Council recommended that as the Sendai work had come into the Union Church the (German) Reformed Mission take the work under its care, provided, that the Reformed Mission unite with the Union Church of Christ in Japan. At that time we had not yet formally united with the Union, but we had received permission through our Board from General Synod, some months before, to do so. At this same meeting the Southern Presbyterian Mission was recommended to take charge of a field in the southern part of Japan, which they also did.

Some time in January Bro. Hoy with his household goods and preparations for housekeeping, bravely left for Sendai. I saw him off in a vessel which left Yokohama for Sendai, and never shall forget how pleased I was at seeing him go so cheerfully. It was a sacrifice for me not to go along, but family and other duties made it clear that my duty lay in Tokyo, where the Lord had first led me.

When Bro. Hoy arrived in Sendai with his household goods, he discovered that his little Japanese house was too small to receive his small amount of furniture,

to begin a mission in Japan, and wished him to select a field for them to begin their mission. He then informed me that he would like to know soon, whether we would take hold of Sendai, and in case we did not, he would have no hesitancy in recommending the Southern Presbyterian Mission to begin work in Sendai. But he would do so only in case we refused to take it.

I assured him that we would take hold of the work there, and that inasmuch as Bro. Hoy and the ladies were already under appointment, I felt sure that our Board and Church would respond to the needs of Sendai, and would be glad to do so. The new interest that would be awakened by such an addition to our work would not only be enough to supply Sendai, but enable us to enlarge our work in Tokyo also. This is usually the policy followed by other missions, to stimulate the churches at home, to enlarge their old work.

Although Bro. Ballagh strongly urged our taking hold of Sendai, he nevertheless, discouraged our project of giving up our own house at the beginning of winter, to move into a Japanese house, with our impaired health and little children, 250 miles north of Tokyo. He felt that it would be risking too much, and tried to persuade us out of it, saying that our place was in Tokyo. He suggested that Bro. and Mrs. Moore, however, who were then living in the city, and having no children, already engaged in teaching, might be better able to go.

After a consultation with Bro. Moore at his home with Bro. Ballagh, I came home feeling that it was my duty to go, and that I would run the risk of a winter's exposure, with my wife and little ones, in a Japanese house. We both felt that we must secure Sendai for our church. We then announced our intention to our friends in other missions, received nothing but discouragement in return, saying that it was too great a risk at that season of the year to take my family away from foreign physicians into a Japanese house.

While we were debating the question of going, or not going, a few weeks later, about the 1st of December, Bro. Hoy arrived at my house. The next day at the dinner table, after a short conversation, he said, very significantly, "Well, Brother Gring, where shall I go?" I replied that it was not for me to tell him where he should go, or what he should do, for we were all on an equal footing out here. But I will tell you what an opportunity we have now in Sendai, and then went on to say what I have above written. When I had finished, he at once responded, "Bro. Gring, I feel called to Sendai." I remarked that I was pleased to hear it, and that I believed that nowhere in Japan could he be more useful than in Sendai. On the

would answer it to the best of my ability. It was on this occasion that I prayed with all the ardor of my soul, that God would move the heart of the Reformed Church in the United States to enlarge her interests in Japan, by answering this call. John Knox, when he agonized in prayer, "Oh God, give me Scotland or I die," could not have prayed more fervently for Scotland, than I did for Sendai and the Reformed church. I shall never cease to feel the influence of this occasion. I was impressed with the fact that the call from Sendai must be answered by the church at home, by sending men and women from home.

Sometime in October of the same year, the Synod of the "Union Church of Christ in Japan" convened as a representative body in Tokyo. Here I again met Bro. Oshikawa, and one or two of the evangelists from Sendai and neighborhood, supported by the Dutch Reformed Mission. At this Synod, Bro. Oshikawa, the evangelists and one or two laymen, abandoned their independent position and publicly and formally joined the Union church. I was present when this wise step was taken on the part of these Japanese brethren. I was greatly rejoiced that my prayer was being answered, and felt that the way was opening for us as a mission to enter that promising field. The Congregationalists had repeatedly made overtures to Bro. Oshikawa to unite with them, and gave him strong inducements. But Brother Oshikawa's former connection with the Dutch Mission, and his friendly personal association with Bro. Ballagh and others in the Union Church, with the prospects of having us to come to his assistance, led him into the Union Church, where he rightly belongs. This Union Church is now composed of the Presbyterian Missions (North and South), and Dutch and German Reformed Missions, and is the largest church now in Japan.

The way being now opened for us to take hold of Sendai, as far as the place was concerned, Mrs. Gring and myself at once discussed the propriety of renting our house, and putting our work in Tokyo and neighborhood, with the assistance of Japanese, under the care of Bro. Moore. This we intended to do only for the time being, simply to hold the field until Bro. Hoy and the ladies arrived, who had been already, in April previous, appointed to come. While we were seriously discussing the propriety of such a course, Bro. Ballagh called at my house and informed us more especially as to the present needs of Sendai. He had just been to Sendai, and was again impressed with the importance of some one of the Union Church going there at once. He also informed me of his correspondence with the Secretary of the Southern Presbyterian Board, which was, that fall, sending out ten young men

is a large field yet still unoccupied to a very large extent and we could also receive financial aid from the people there. Whereupon also, he further remarked that Bro. Oshikawa, the principal Japanese minister in Sendai, was now in Tokyo, and if I wished he would at once take me across the city, where he was stopping, and make me acquainted with him. As soon as I signified my readiness to accompany him, we started off afoot on our way across the city.

We found Bro. Oshikawa in, and in a few moments he was at the door, and there and then I was, for the first time, made acquainted with him.

Our conversation, in Japanese, at once turned upon the needs of Sendai, and he strongly urged me to use my influence with our Mission Board, to locate our boys' and girls' school in Sendai. We were then having a boys' school at Nihon Bashi. I asked him in reply whether the people in Sendai would co-operate with us in establishing schools there in case we decided to come. He assured me they would, and would be glad to do so, if we came. I informed him that as we had so recently come to Japan, our mission was, as yet, financially and numerically weak, and could not, therefore, be expected to begin two schools at the same time, *unless we received considerable financial co-operation from the citizens of Sendai*. He thought there would be little or no trouble on that score, and that our mission would be asked only to furnish the foreign teachers, while they, the citizens, would put up the buildings, and defray the running expenses of the schools.

Bro. Oshikawa was then one of a number of young men who declared themselves independent of all missions, and sought to raise up independent self-supporting Japanese churches. On leaving him, I gave him to understand, that as we had concluded to join hands with the Union Church of Christ in Japan, his position as an independent minister would make it difficult for us to come to Sendai, so long as he continued in that position. He nevertheless urged me to consider the matter, and seemed very anxious to have us come. I told him I would consider the matter, said good bye, and was off.

Soon after this, by permission of the Board, I was compelled to remove Mrs. Gring and children to the mountains, on account of sickness. The call from Sendai was much upon my heart and constantly in mind. I felt that it was more than the Macedonian cry that came to Paul in a vision of the night, it was real and personal, a viva voce call of a living man, "Come up and help us."

So continually did this call keep sounding in my ears, that I determined, on one occasion, when alone with Christ in the solitary fastness of the mountains, that I

44. A. D. グリング「我々は如何にして仙台と山形を宣教の拠点とするに至ったか」(1890年4月)

HOW WE CAME TO HAVE SENDAI AND
YAMAGATA AS MISSION POINTS

In Two Parts

BY REV. A. D. GRING

On a beautiful sunny afternoon, during the month of April, in the spring of 1885, I took my hat from the rack in the hall and set out for an hour's walk. Mrs. Gring was lying ill on the second story, and my trio of little boys were imprisoned by measles, with a Japanese nurse, in the nursery below. Bro. and Mrs. Moore had gone to the mountains for several weeks on account of sickness, and I myself considerably worn by the continuous weight of responsibility resting upon me.

I had not proceeded far on my walk when I met my dear friend and brother, Mr. Ballagh, of the Dutch Reformed Mission. We met on the lawn belonging to the Union Theological Seminary. We sat down on the ledge of the veranda of the theological students' resting-rooms, in the warm sunlight, and began to talk. I do not now recall the subject on which we started, but I remember very distinctly that our conversation drifted to the subject nearest our hearts, viz., our mission work.

In the course of conversation, I happened to remark, that as our Board had heard and reported favorably on the appeal of Mrs. Gring in 1884, to send out two lady teachers for the purpose of founding a girls' school, I was looking about for a suitable site in Tokyo, and would be glad to receive any suggestions his long experience in Japan might enable him to give. I wish to remark here, that it was ever my custom, while in Japan, to secure the judgment of my senior co-laborer before undertaking a step involving responsibility.

Bro. Ballagh, acting upon my request, at once replied that he had a suggestion to offer.

He said he had just returned from a trip to Sendai and the North, and that while at Sendai, he was profoundly impressed with the need of foreign missionaries there. Now my suggestion is, that you put your girls' school in Sendai, for there

establishment of formal relations between the school and the Miyagi Chukwai, that is the Classis of Northern Japan. At its spring meeting the Chukwai had appointed a committee consisting of two missionaries and two native brethren to draw up a constitution for the school. This committee had spent many hours during the summer in prayerfully considering what the school should be in order to meet the needs of the field, and in preparing a constitution. The results of their deliberations they laid before the Chukwai at its fall meeting. The feeling of the Chukwai, as expressed at that meeting, was unanimously and heartily in favor of the school.

The proposed constitution was adopted, and the school thus became an organic part of the "United Church of Christ in Japan." The constitution provides that the school shall be under the management of a Board of Directors consisting of eight members, four missionaries and four Japanese. The former are to be elected by the Mission, and the latter by the Chukwai. The members of the Board were immediately elected.

The Board of Directors met soon after the meeting of the Chukwai, and put into full effect the newly adopted constitution. The constitution provides for a careful and business-like expenditure of all moneys. All new students are put on probation for at least four months, during which time they must support themselves. After that time if they cannot continue to support themselves they are required to obligate themselves by competent security to engage in the service of the church for at least five years, or to refund the money they receive. It is arranged that the Japanese churches shall gradually assume more and more of the financial responsibility. The time when they can assume the full financial burden is of course probably a long distance in the future; but it is understood by all that that is the aim toward which all are to strive, and a commendable effort has already been made in that direction. The giving, moreover, is all very cheerful. The relation between the school and the Japanese Christians is very close. The Sendai "Shingakko" (Theological School) is an object of much interest and earnest prayer, yes, and of warm love to the Christians of Northern Japan. The school has become a centre of influence and an inspiration to the Christian work of this part of the empire. Yours truly,

D. B. Schneder

(*The Messenger*, March 20, 1890)

the regular course. Believing that we were under divine guidance in making this change of plan, we took renewed courage to go forward. Yours sincerely,

D. B. Schneder

(*The Messenger*, February 20, 1890)

Third Article.

Upon the basis of this reorganization we began the Fall Term of 1888. We reclassified our old students, all of whom according to the new curriculum, were obliged to spend some time still on the preparatory course. We also received a good accession of new students. The recitations of the school were now held in several old rooms attached to the Buddhist temple which our Sendai congregation had purchased, and is now using as its place of worship. The lodging and boarding places of the students had to be found in various parts of the city wherever cheap rates could be obtained. Long before this we recognized the fact that the school, in order to do a good and successful work, needed proper buildings,—a home. We had appealed to the Foreign Board for a building, but, much as they desired to grant our request, they felt that the state of the treasury and the rate of income would not permit them to do so. Here then we were, with an increased number of students about us, showing renewed earnestness and zeal, and with a sense of the growing favor with which the school was meeting among the native Christians, but without any grounds of hope as to when we should be supplied with the needed building accommodations. In this extremity of need, Brother Hoy and his wife impelled by a spirit of genuine and noble self-sacrifice, purchased a beautiful lot and placed on it the then needed building, naming it in memory of Mrs. Hoy's sainted father: "The John Ault Memorial Building." It is a two-story building, 95 feet in length by 18 feet in width. It is built in Japanese style and is intended for use as a dormitory. Besides the main building there are also several smaller buildings, such as kitchen, dining-room, etc. With grateful hearts we entered the new building at the opening of the winter term, in January, 1889. Since that time we have been using it for recitation and chapel, as well as for dormitory purposes. The students are now all together, are under the watchful care of their teachers, incite each other to study, meet daily among themselves for prayer, and are influenced by an earnest school and religious atmosphere.

Another event of importance that occurred during the fall of 1888 was the

their work. It was felt that superficially the growing prevalence of scepticism in Japan made it necessary that teachers and preachers of Christianity should not be deficiently taught men. As a step toward this, the study of English had already been introduced, so that the students might by and by learn to read English books, Christian and philosophical literature in Japanese being as yet very scarce.

At the beginning of the year 1888 it was my privilege also to become one of the teachers in this struggling but earnest school. We began work in January. We taught the Bible, Theology, Catechism, Church History and English, giving considerable time to the last named branch. Still the work was not perfectly satisfactory. Our idea then was to give a course of about three years. But we began to see that in this space of time we could not do thorough work either in the theological branches or in English. Most of the theological branches we were obliged to teach by interpreters, which is a slow and unsatisfactory process. We, therefore, felt called upon to choose between sending out young men who were but half prepared for the demands of the work on the one hand, and extending the course on the other.

We chose the latter alternative. The warm interest manifested in the school by the Church at home, as well as the earnest desire of the Japanese friends of the school, justified us, we believed, in extending the course. It is true, we hesitated long before taking the step. We feared the additional expense. But it came almost to the question at last of extending the course or discontinuing altogether. During the vacation that intervened between June and September, 1888, we gave much thought and earnest prayer to the situation before us. We earnestly endeavored to determine what the Lord needed of us in the existing crisis of the up-building of his kingdom in Japan. Largely influenced by the wisdom and experience of Bro. Oshikawa, we reorganized the school upon the basis of a seven years' course and three years to be given to a preparatory course and three years to be given to the theological study proper. The preparatory course includes sufficient English to enable the students to pursue their theological studies mainly in English. It includes mathematics, the natural sciences, political economy, logic, psychology and ethics. The theological course includes, with the exception of Greek and Hebrew, all the branches generally taught in American theological schools. Although we thought best not to include Hebrew and Greek as regular studies, there are already two of our students who have taken up Greek as a private study, and others may follow, so that possibly by and by we may add at least Greek to

money to support it. To establish another school of like character was therefore neither feasible nor necessary. Then the plan of taking some young men and training them for evangelistic work presented itself as a work which would likely be more fruitful of good results than any other kind of school work. Also, the need for such a school seemed greatest, for the necessity of a good strong force of native evangelists was already strongly felt. Brother Oshikawa knew of certain young men who desired to prepare themselves for evangelistic work. Six of these he invited to come in June, 1886, and the work of the Sendai Theological Training School was begun. What the future of the school should be was not definitely outlined in the minds of Brothers Hoy and Oshikawa. They simply desired to follow the leadings of providence. Yours sincerely,

D. B. Schneder

(*The Messenger*, February 6, 1890)

Second Article.

The scene of the first labors of the school was an old dilapidated little Japanese house on the outskirts of the city. The roof was laid over with stones to keep the wind from blowing off the shingles. Here the work of the first year was done. Brothers Oshikawa and Hoy taught. Several new students were added during the year. Bro. Hoy out of his own funds supported all of them during the first year. After the first year's work was over the students went out and spent their vacation in preaching the Gospel they had learned to love, and their efforts were blessed with some twenty converts. In September study was resumed. But two things made themselves strongly felt at this time. One was that more help was needed in order to carry forward the work satisfactorily. Bro. Oshikawa, on account of the pressure of many other duties, was obliged to be frequently absent from the school, and the conscientious performance of his duty toward the school, together with his study of the language, began to weigh heavily on Bro. Hoy. It was on this account that the Mission on the field united with Bro. Gring and the Board in America in so earnestly urging, after my appointment, the early departure of myself to join Bro. Hoy. As will be remembered, too, Bro. Hoy actually did break down in health, and the work of the school was suspended for a few months. Another thing that impressed itself more and more upon the minds of Bros. Hoy and Oshikawa was the need of evangelists who were not superficially, but thoroughly, trained for

important work of your missionaries in Japan.

WHAT COMPRISES THE UNION.

A few weeks after the arrival of brother Hoy in Japan the Mission (the word "Mission" is used to designate the missionaries of any particular denomination taken collectively or as an organization), then consisting of Revs. Gring, Moore and Hoy, entered into the Union for "Evangelistic Work" now existing and which had previously been formed by the American Presbyterian Mission, the Dutch Reformed Mission, the Southern Presbyterian Mission entered with ours. The principal feature of this union is the requirement that all converts gained by the several Missions shall belong to "The United Church of Christ in Japan," the object of which is of course that only one denomination may grow out of the labors of these several Missions, instead of five. Other features of the union are to the effect that harmony of views and action shall be cultivated as far as possible, but that each Mission shall have generally its own territory, and also the right to impress its own doctrine and life upon its converts, as far as it feels conscientiously bound to do so. In this way all the denominations represented work together, yet none is deprived of its freedom, and the doctrine, cultus and genius of each one enters as a factor into the general whole.

SENDAI OUR FIELD.

The union having been entered by our Mission, it was thought desirable that the northern part of the empire, with Sendai as a center, should be our field. A strong call just came from there, and brother Hoy had just arrived and was looking for a proper field of labor. In recognition of the fact that educational work is one of the main-stays of evangelistic work, the Mission was also encouraged to open a school for boys and young men. Accordingly Brother Hoy came to Sendai about the beginning of the year 1886. He found the work of evangelization already well begun. Rev. Oshikawa had preceded him by a number of years, and had already established a large congregation of believers. In Rev. Oshikawa, Brother Hoy soon found a friend from whom he derived much sympathy and inspiration as well as valuable counsel for the work in which they now unitedly engaged.

THE SENDAI SCHOOL.

Soon the question of opening a school presented itself. But what kind of a school should it be? The American Board Missionaries had already determined to start a large Boys' School in Sendai, having four missionary teachers and a number of good Japanese teachers ready to man it, and a donated lot and a large sum of

permission for the Treasurer of the Mission to erect the Seminary building, at his own personal responsibility, learning the way open, however, for future contributions from the church towards the Seminary building fund. I see my way clear to do this. Then, if the continued contributions of the church do not cover the cost of the building, I will bear the deficiency as my contribution to the Seminary. If I have to pay part, or pay even all, such payment is to be considered a contribution. I do this cheerfully, and earnestly pray and hope the Board will grant this request of the Mission. As for the financial responsibility, I do not stand alone; for there is help of which I have been asked not to speak by name. *Let my name also be unknown.*

Let us work on cheerfully and hopefully. The life of the Mission, as we unanimously take it, is in the Seminary; and by the help of God and man (*sic*), we mean to work with the best that is in us and of us.

I have written today to each member of the Board concerning these matters.

Please let me know the will of the Board, whatever it may be, by cablegram, and charge the costs to my account. And let us know as soon as possible; for I must have time to make preparation.

This offer is made in good faith, with the best interests of our Mission at heart. May the Lord help us.

Yours most fraternally,

W. E. Hoy

43. D. B. シュネーダー「仙台神学校—その起源、発展、そして現況」

(1890年2月～3月)

THE SENDAI THEOLOGICAL SCHOOL — ITS ORIGIN,
GROWTH AND PRESENT CONDITION

First Article.

Dear Brethren of the Home Church:—The many of you who are remembering the Sendai Theological Training School in your prayers and by your contributions may perhaps be interested in a more extended account of the school than has yet been given at any time. Such an account, therefore, I venture to lay before you, hoping that the results of it may be the creation of a still deeper interest in this

The fall term of the Sendai Theological Seminary has opened with the fairest hopes. New students have come from all parts of Japan. The Union Church of Christ in Japan trusts our school, and there are more applicants than we can accommodate. The John Ault Memorial Building is full. As you know, we must use five of the rooms for library, chapel and recitation purposes.

We need the new building now. Will you not help us to build early in 1890? Just a little from each one of you will do the work. It is only the denial of the luxuries of one day that we ask of each one of you. A simple denial of some kind for only a single day from each one of you would in the aggregate raise more funds than we ask for this new building. Think of this. Reading this to-day, act to-morrow in united effort with your friends. One day's united resolve and denial would do great things. I know whereof I speak. It is little, very little we ask of each one of you; but to our school it would in the simple process of addition amount to much. Resolve to give that little now. If you postpone the resolution, your power of decision will grow weaker with every hour.

Now, give this little now. Will you not be as willing and cheerful in your giving as our dear native brethren?

Yours most hopefully,

W. E. Hoy

Sendai, Japan, Sept. 23, 1889.

(*The Messenger*, November 6, 1889)

42. W. E. ホーイ書簡(パーソロミュー宛 1889年12月18日)

75 Higashi Sambancho, Sendai, Japan, Dec. 18, 1889.

Dear Bro. Bartholomew:— Here please notice that this letter takes the place of the one which I wrote on the 7th inst. After mutual consultation my plans have been improved. Please destroy the one bearing date Dec. 7, 1889.

Last evening the Mission held a most earnest and harmonious meeting, to discuss the pressure that is upon us with regard to the erection of a suitable Seminary building at a cost of from \$ 4,000 to \$ 5,000. We are of one mind that our work in all its bearings calls for the erection of this building in 1890. By the grace of God we have come to a point of progress in our beloved service where delay might being [*sic*] failure. The Mission asks most urgently for the necessary building fund. If the Church does not now furnish the means, the Mission begs

(78)

Educational and Evangelistic work in the north of Japan. An able scholar, an eloquent preacher, and a humble believer, is the verdict of all who know him. The state of his health has been such for several years that he was unable to do full work. He has come to our country to sojourn amongst us for about one year. We are confident that his visit to America will afford his own people a better conception of the power of Christianity in the family, the state and the church. He has a three-fold purpose in view.

1st. To regain his physical strength for his future life work. 2d. To imbibe the spirit of our Christian institutions. 3d. To raise funds for the Seminary building and church edifice at Sendai. May the Lord grant him the first; may the institutions bestow the second; may the Church provide the last.

A. R. BARTHOLOMEW

Pottsville, Pa.

(*The Messenger*, September 11, 1889)

41. W. E. ホーイ書簡(改革派教会の教友宛 1889年9月23日)

SENDAI THEOLOGICAL SEMINARY

Dear Reformed Friends:— It is with joy and gratitude that I report continued contributions for the proposed new Seminary Building from God's poor. The native Christians, most of them poor, come with their cheerful offerings. What a noble lesson they teach us. Five, ten, twenty, fifty *cents* from a poor Japanese Christian—but, before I can finish this sentence, you may think this sum small; yet in most cases it is a worthy offering. Some give as much as *two dollars*. If you all would give in the same proportion, the Reformed Mission in Japan could be permanently founded; and, besides, our Board would have the means to open work in China, India, Africa, and elsewhere. Think of this.

Pray for your Mission in Japan. Pray for each of us. Pray for the Girls' School, so dear to us all. Pray for evangelistic work. And *pray for the Sendai Theological Seminary*. But remember that prayer without a deed or a gift is no prayer. No able-bodied man, woman, or child can pray without either a deed or a gift. A merely audible prayer has no effect in the kingdom of God. Its only effect is that produced by certain vibration attending the voice. *Prayer; deeds; and gifts*. In this light God will answer prayer.

Oshikawa was the fifth of seven children. On the eighth day after his birth he was dedicated to the family god. The mother early instilled into his mind the necessity of being true and earnest in his life. At the age of seven he went to a private school, where he was taught writing and reading. He was an apt pupil and always seemed to be a leader among his companions. At the age of eleven, as was the law under the feudal system, he was adopted by another family, thus receiving the name of Oshikawa. His family name was Hashimoto. For seven years he lived in the same family with his betrothed wife, whom he married when he was eighteen years old. The story and history of the marriage contract made by the parents, and other arrangements for the prospective union are very interesting and novel.

About one year after his marriage he was sent to Tokio by the Feudal lord of the province, to pursue a special course of study in the Imperial English College. Dissatisfied with the advantages of the institution in acquiring a practical knowledge of the English language, he came at the request of his prince to Yokohama began the study of English in a Mission school under the Rev. James Ballagh. The past training of Oshikawa had given him an unfavorable opinion of the Christian religion. He did not like the Christians and felt that Christianity was the devil-religion. Though he despised the new religion with all his heart, yet the high standard of our civilization laid hold of his mind, and he could not help (but) ask the question, "How could such an evil religion produce such a superior civilization?" With these peculiar notions of Christianity perplexing his mind it was providential that he entered a Mission school where he could see and hear that he was entirely mistaken. The study of the Bible for an hour each day was a part of the course of instruction. The only interest he had in the sacred book was to acquire through it the English language. In a very singular way at a prayer-meeting service, he was led to profess his faith in Jesus. At this time were only six known Christians in the whole empire. He had hardly been baptized before word came from his parents, "Come home." He was now in peril of his life. The parents besought him to give up his new religion, but he continued steadfast in his Christian confidence. Unwilling to follow their request, he was ordered to leave home. He returned to Yokohama penniless, where he was kindly cared for by the missionaries. After four years of study he received a call from Niigata to become a helper to Dr. Palm. After laboring faithfully for a few years, he removed to the large city of Sendai, where for thirteen years he has been a worker for the Lord. He is now pastor of a large congregation in Sendai, and the Bishop of our

The next great necessity is good Girls' Schools. All heathen countries place woman in an inferior position. Only Christian countries place them in their proper sphere, as helpmeets for man. Woman whose silent influence for good is one of the most powerful factors to purify the moral atmosphere. This can do its proper work only under Christian education. Japanese women have the virtues of meekness, chastity, obedience, and love, and are intelligent. In general, they are eager and earnest to educate their children. Now Christian ladies are beginning to do work for the general public good. But the great need is geater and better education for women in Japan. No nation can be said to be truly civilized so long as the ladies are not acceded a proper education. Hence is room for the benevolence of any able and philanthropically disposed Christian heart. Here is a wide field for good. After the full preparation, let us fight in the field of battle in Japan with the infidels, the great enemy in West on one hand, and with Buddhism, the great and old religion in East, on another, and beat them with the sword of the Lord, and show, before the world, the power and glory of Christianity. The Holy Name of Jahobah shall be praised.

In conclusion, as a Japanese, having the good of my own country at heart, I take this occasion heartily to thank all people who have felt so kindly toward us, and have extended to us a helping hand, and hope that no effort will be relaxed until the banner of King Emmanuel will wave over every part of Japan.

40. A. R. パーソロミュー 「押川方義小伝」(1889年9月11日)

REV. MASAYOSHI OSHIKAWA

Too much can not be written about this good man. A full and correct sketch of his life and labors will soon appear in a book, which we hope will find its way into every family of our Church. The profits shall go towards the new Sendai Seminary building, and the interest which the biography will awaken can not be estimated.

Rev. Oshikawa was born at Matsuyama, Iyo, in the Southern part of Japan, December 15th, 1850. His parents were members of the *Samurai* class which for many centuries monopolized the arms, polite learning, patriotism and intellect of Japan. His father was a Conservative, and in a quarrel with a Reformer, the strong love of country prompted him to take his own life with the sword.

preparatory schools. Give us the best and most possible theological teachers; and Girls' Schools also." The work of these institutions can readily be seen, to lie at the foundation of quick and sure success. In order to show that this is the better way, allow me to state a few things in confirmation of this assertion. The names of different denominations are not unknown to Japanese ears, such as Reformed, Presbyterian, Congregationalist, Methodist, Baptists, Episcopalians, Evangelicals, Lutherans, Quakers, Christians, Greeks, and Roman Catholics etc. The most powerful are the Icchi Church. This is the Reformed and Presbyterian united, and the Kumiai Church, the Congregationalists. The cause of the greater success of these, is to be attributed to their schools. It can be plainly seen by all who are acquainted with the facts that the centre of influence in each of these denominations is the school. Of the Icchi or United Church, the school first at Yokohama, Japan, then removed to Tokio. Of the Kumiai or Congregationalists, the school at Kumamoto and in Kioto. The other denominations are not as prosperous as these, because they had not good schools. The Roman Catholics who will not permit any authority to pass from the priest to the native evangelistic workers, not having a good school, are not making much headway.

From these facts it appears very clearly that the establishment of these educational institutions is plainly necessary for the success of the evangelistic work in Japan. In the future [以下、原稿 1 ページ欠落]

[The Buddhism] has many followers. It is the greatest and oldest religion in East. It is fully developed in Japan. Many of its devotees are not only schooled in their own philosophy but also in European Literature. To meet all these, nothing short of a well-educated ministry will answer.

This shows us the reason that the best possible Theological Seminary is needed.

Beside this, we need the preparatory school. We need the sacred influences to be thrown around young men in their earlier training. The inducements for simply worldly callings are many, unless these can be persuaded to follow a conviction of duty, they will not enter the ministry for the church. We need men whose attainments and talents fit them for the highest grades of society. Our church members in Japan are mostly young men. If these graduate in a government school, it is difficult to induce them to enter into a Theological Seminary. It is therefore highly important that we have strictly Christian schools to prepare young men for the Theological Seminary. If we have not such schools, we are forced to take of any those who are less perfectly prepared.

missionaries and assistants together brought about very marked effects under the direction of the Lord.

At this time we have not yet a fully organized, or completed theological schools, but only imperfect ones, or as a department in the Mission School. Neither were the Girls' Schools very well established and developed. Those which attended the Girls' School were not yet of the more influential, but of the poorer classes. This brings us to the point of transition to the third period.

This period brings to us the fuller establishment and development of Theological Seminaries and Girls' Schools. Together with this also the Japanese talent was more fully brought out and prepared for the work of the Church. Now the relation of the missionaries to the Japanese ministers becomes somewhat changed. Now the pastorates, the proclamation of the Gospel, and in great part, the superintending, and to some extent, instructing of Christian schools, devolves upon the Japanese ministers. Hence the direct work of the missionary in behalf of the people is no more so loudly called for, but his work is felt more necessary and useful in teaching and preparing Japanese ministers. This period presents the opportunity for the Christianization of the whole nation. This is the time of readiness for the people to open their eyes, and to turn from darkness unto light, and from the power of Satan unto God. I thank God that this is the present favorable state in Japan for the presentation of the Gospel.

Now the Japanese ministers are pastors, evangelists, and to some extent teachers. Dr. Knox in his article in "The missionary Review of the World" says: "In councils, committees, synods, and boards, Japanese are in the lead." I do not wish to be understood that I mean to undervalue the work of missionaries far from it but I wish to state what I conceive to be the best way to proceed with the missionary work in Japan. That plan which brings about the largest and most effective result with the smallest outlay of means, and in the shortest time, should be considered the best. As we read it in the papers, the common sound is "Come." "Send." "The gate for evangelization is open." and "There are many places for the work of the missionaries." It is true and I hope that this may be practicable.

If you have enough men and means, this might be practicable. But since men and means are limited, we ought to take more into consideration, and since Japanese talent can be made ready to be utilized for this purpose. Hence, if I am asked which would be the best plan to pursue to evangelize Japan, I would not hesitate to answer; "Establish or develop the best Theological Seminaries, with necessary

advanced Christians were active and energetic like unto the brave soldiers on the field of battle. They were ready to sacrifice their honor, time, and money, even their lives, and esteem a glory to suffer martyrdom if need be. Even the teachers themselves were often stimulated by seeing the faith of these students. Their progress in knowledge was wonderful. The knowledge of the Lord is the beginning of wisdom. Their moral susceptibilities were very great to imitate and follow readily the pure nature of Christ. They ripened fast from studentship to scholarship. They are the ground on which the seeds of the truth fell, and shall bring forth fruits some hundredfold, some sixtyfold, some thirtyfold. They can understand English and read English books on Christian Theology and Philosophy, and are fluent speakers in their own language. As this preparation was going forward in the schools, the nation, at large, also begins to move in the direction of Christian civilization. The people begin to loose confidence in their old religion. Because they are unconsciously influenced by their environment. The progress of the country called forth leading and discriminating men who labor very hard for all progressive movements. These are active in establishing educational institutions, the stimulus of which is felt in politics, traffic, agriculture, intercommunication, and military circles. This awakens the people to inquiry as to the causes which underlie civilization, and makes them eager for knowledge, and leads them to admire the institutions of Christian countries, and people. In consequence, they become eager to hear any one from these civilized countries. They are struggling for something which they never did possess.

This opens the gate for farther evangelization and the beginning of the second period. The foreign missionary is no more the exclusive worker, but the Japanese assistant appears by his side. The assistant now goes about from places to places preaching the Gospel, teaching the church, visiting the sick, comforting the afflicted, strengthening the weak, distributing Testaments, and helping in the Mission School work. By the help of the assistants, the religious books are translated. These assistants are, at this time, to a great extent the pastors of the churches.

They are indeed not yet fully developed in spiritual things. They give such as they have received. They have not yet much experimental knowledge. They are yet not prepared for totally self-sustaining work but must needs be still under the directions of the missionaries. This is the time which rejoiced the churches, here and everywhere, to hear of comparatively numerous conversions. Thus the

Christian church, Japan is escaping the hands of heathenism, for which she is truly grateful, and would glad to do any kindness in return.

I observe three stages in the evangelization of my own country. First, the crude and imperfect stage. During this time, the responsibility of the work depends entirely upon the foreign missionaries. They alone are the evangelists, pastors and teachers. There were now no Japanese to assist them. The missionaries were obliged to sow the seeds of the Gospel upon unwilling ears. It devolved upon them to prepare the soil for the reception of the Gospel. They were more or less despised, reviled and hated by the ignorant heathen people. But by their perseverance, and the grace of God, they succeeded in making some few converts, who, however, could understand very little of anything of Christian doctrine. The work therefore of instructing and edifying in the faith also fell to the missionaries. During this period, very few of the higher and more intelligent classes were willing to listen to the Gospel. The most of the converts were from the more ignorant class. We can easily see that, being organized into congregations, the churches, in general, then were weak, and imperfect in mind and spirit. Their Christian influence and power was not much more than nominal. In one word, the missionary could not find the way to reach to the better classes on account of several hindrances.

In order, therefore, to bring about a greater and better outcome, some better plan must be found. This led the missionaries to the necessity of founding the Mission School; the teaching and managing of these schools was again altogether dependent on the missionaries. They were obliged to exercise much patience to instruct these comparatively more ignorant, rude, but promising students. Those missionaries who are able to lead forward the students to a higher standard of personal consecration to Christ, and prepare them for successful warfare, were the successful ones. Those who could not do so were relatively a failure. Because the future evangelization depended more upon the Japanese who could reach the people more readily and effectively than the foreign missionaries, we are very happy and ready to say that we had such successful missionaries and teachers in the Mission School.

The students who were thus trained and influenced, were not slow to confess their positive faith and determination to the work of the Lord. They were destined to be the future evangelists for the propagation of the Gospel. They were also destined to be important factors for the future work of the Church. These more

a modest sum.

Brother Oshikawa is one of the ablest and most eloquent preachers in Japan. His preaching has reached, and, by the grace of God, converted more souls than that of any other minister in Japan. In him lie yet many hopes for the speedy conversion of the north of Japan.

Let us erect this memorial building to his honor and as a mark of love and appreciation. He is one of God's noblemen. And now may the Sendai widow's faith work on. Yours,

W. E. Hoy

(*The Messenger*, December 12, 1888)

39. ドイツ改革派教会全国総会における押川方義の演説(1889年8月28日)

A VIEW OF THE PAST AND PRESENT WORK
OF EVANGELIZATION OF JAPAN

Any warrior who goes to battle must know, beforehand with certainty, the strength or weakness, as well as the number of his enemies. He ought to know the weapons wherewith they fight. He should be acquainted with their situation and tactics.

If, without such knowledge, any one would attack an enemy, he would be looked upon as unwise and foolhardy. No one would, under such leadership, be expected to come out victorious.

The work of evangelization is a conflict with adverse forces. We must know the circumstances, and condition of the field, that we may find a proper plan of warfare for it. Recently I came to the United States of America, and am observing the civilization of the largest and highest country under heaven, especially the Christian Churches.

The enterprise of this large and civilized country surprised me much. Particularly do I admire the earnestness and grandeur of the Foreign Missionary work. I therefore wish to express my opinion on the plan for Japanese evangelization, and offer it for the consideration of all concerned.

It is not necessary to dwell on the fact that Japan has received great kindness, directly and indirectly, from America, and was thereby greatly influenced in her civilization. It was to Japan a light in darkness. By reason of the work of the

brings it to pass that an additional gift of a good lot and building is brought to the use of the Training School. The widow's faith bears fruit again six hundred fold. The word of God is in this—the creative word of the “beginning” of all things. The widow in her faith, did better than she knew. Her trembling fingers touched hidden springs of love. Hearts have been made active. And now, dear friends, may I not ask you to follow the example of the godly widow of Ohio, who hearing of the Sendai widow, sent our treasurer, Father Kelker, a goodly sum of money—increasing the Sendai widow's gift many fold; yea I repeat, may I not ask you all to remember our Theological Training School? This school began in faith; it is growing in faith; and may not its fruits be multiplied by your faith?

No one need argue the necessity and extended usefulness of such a school. You all know what our schools of the prophets are doing for the Reformed Church at home. Think of this earnestly.

The lot and building recently donated for the use of the Theological Training School, have been placed in the sacred trust of a Japanese Board of Trustees, to be held in the interests of the native Church. The time has come when Japanese Christians should be encouraged to prepare for self-support in all the branches of Christian work. Can you not help them in this? I have a thought.

LET ME EXPLAIN.

The lot and building for the Training School are now Japanese Christian property. The building is erected for dormitories. Some of the rooms must be used now for recitation rooms. In at least two years these recitation rooms will be needed for dormitories for the young men. Another building for recitation halls, chapel and library, will therefore soon be needed. How can this want be met? The answer is found in the question, What will *you do* or *give* for the erection of the recitation rooms, library and chapel? Let this also, like the dormitory building be a memorial building. Let it commemorate the early struggles and recent success of Brother Oshikawa in and around Sendai. And let it be the property of the native Christian Church. The Christians are willing, I am told, to do what they can in the way of contributions for this second building. Let us go forward in faith, hopefully and cheerfully. Let the Theological Training School be strengthened and become the property of the Japanese Christian Church. We can do nothing better than to give our Japanese brethren a firm foothold in their progressive and promising country.

May we not hope for a contribution of five thousand dollars from you? This is

(69)

To Servants' Wages	58.41
To Light & Fuel	32.67
To Repairs, Furniture & Apparatus	67.85

\$ 2458.72

Cr.

U.S.Gold.

June 7, 1890	By Remittance from B.C.F.M.R.F.C.U.S.A.	\$ 500.00
Sept. 2,	" "	225.00
Oct. 31,	" "	100.00
" "	" "	175.00
Feb. 6, 1891	" "	121.25
March 9,	" "	400.00
" 17,	" "	475.00
" 31,	" "	100.00
" "	" "	351.06
	By Rent of Chapel	4.25
	By Sale of Books	7.16

\$ 2458.72

35. W. E. ホーイ書簡(改革派教会の教友宛 1888年10月14日)

A CALL TO THE LIBERAL

Sendai, Japan, October 14, 1888.

Dear Reformed Friends:— Our blessed Lord has promised unto the least exercise of faith a great growth and usefulness. Think of the grain of mustard seed. It is thus I love to think of the origin of our Theological Training School. You remember, no doubt, the Sendai widow who came forward with her twelve pieces of silver. She came in faith and asked that young men be trained for the ministry of our Saviour. Brother Oshikawa and I were encouraged in our plans and purposes. Six young men came forward as candidates for the ministry. Christ prompted him who supported them for one year, thus increasing the widow's gift a hundred fold. Then enterprising Sunday-schools and missionary societies assumed the support of these students. Again was the widow's gift increased—multiplied a hundred fold. The life of faith blossoms and yields fruit. The Lord

(68)

" "	89.91
<hr/>	
	\$ 818.00

<Fiscal Year June 1, 1889 — May 31, 1890>

Dr.

	U.S.Gold.
To Support of Students in Sendai	\$ 657.50
" " " " " Tokyo	97.20
To Teachers' Salaries	675.60
To Books	64.45
To Fuel & Light	23.25
<hr/>	
	\$ 1518.00

Cr.

	U.S.Gold.
June 28, 1889 By Mission Remittance	\$ 75.00
Aug. 21, " " "	200.00
Sept. 20, " " "	200.00
Nov. 19, " " "	275.00
Dec. 9, " " "	375.00
" " By Rev. J. P. Moore's Contribution	18.00
March 9, 1890 By Mission Remittance	187.50
27, " " "	162.15
" " "	22.85
" " "	2.50
<hr/>	
	\$ 1518.00

<Fiscal Year June 1, 1890 — May 31, 1891>

Dr.

	U.S.Gold.
To Expenses above Approximate Report last year	\$ 153.07
To Beneficiary Aid	1054.55
To Teachers' Salaries	906.32
To Books	185.85

<Fiscal Year June 1, 1887 — May 31, 1888>

Dr.

	U.S.Gold.
To Support of Sendai Students	\$ 355.58
" " " Tokio "	43.43
To Books	34.00
To Assistant Teacher	56.72
To Stove & Fuel	18.92
To Photographs of Students	7.03
To Freight on Organ	<u>18.60</u>
	\$ 534.28
Balance	<u>278.09</u>
	\$ 812.37

Cr.

	U.S.Gold.
June 24, 1887 By Remittance from B.C.F.M.R.C.U.S.A.	\$ 200.00
Aug. 23, " " " " " " " "	200.00
Dec. 13, " " " " " " "	200.00
Dec. 27, By Rev. J. P. Moore's Contribution	4.80
March 8, 1888 By Remittance from B.C.F.M.R.C.U.S.A.	200.00
March 26, By Rev. J. P. Moore's Contribution	<u>7.57</u>
	\$ 812.37

<Fiscal Year June 1, 1888 — May 31, 1889>

Dr.

	U.S.Gold.
To All Expenses	<u>\$ 818.00</u>
	\$ 818.00

Cr.

	U.S.Gold.
June 1, 1888 By Balance	\$ 278.09
By Rev. J. P. Moore's Contribution	18.00
Several Dates By Remittances	432.00

(66)

On motion the male members of the Mission, with Rev. W. E. Hoy as chairman, were appointed a committee to draw up a constitution and by-laws for the use of the Mission.

On motion Rev. Oshikawa was given an opportunity to address the Mission on the pressing demands of the Yamagata School.

On hearing Rev. Oshikawa's remarks, the Mission instructed the President and the Secretary to prepare, with the assistance of Rev. Oshikawa, a supplementary letter to our appeal for a new family for Yamagata, setting forth the true nature and merits of Boy's School work in missionary operations.

Rev. D. B. Schneder and Rev. W. E. Hoy were instructed by the Mission to assist Rev. J. P. Moore in the Yamagata School, teaching alternately three of four weeks at a time and beginning on the 1st of April next for the spring term of 1888.

The Mission ordered the Treasurer to pay yen fifty (\$50 Mexicans) as a contribution to the Bancho Chapel (Rev. J. P. Moore's first congregation).

Adjournment with benediction.

W. E. Hoy, Secretary resigned.

34. 仙台神学校会計収支書(1886年~1891年)

SENDAI THEOLOGICAL SEMINARY IN ACCOUNT
WITH W. E. HOY, TREAS.

<Fiscal Year June 1, 1886 — May 31, 1887>

Dr.

	Mexicans.
To Support of 6 Students One Year	\$ 390.00
To Amount paid for Books, etc.	32.00
	<hr/>
	\$ 422.00

Cr.

	Mexicans.
<u>By Contribution made by "A Friend"</u>	<u>\$ 422.00</u>
	\$ 422.00

of women in heathen lands by the women in Christian lands. Woman is the ministering angel to carry the glad tidings of salvation to the poor mothers and daughters who dwell in heathen ignorance.

Many women are already in the field and many more, thank God, are ready to go. How full of meaning the sentence: "Missions for women and women for missions, is the rule, the latest supplement to the missionary work."

CLOSING WORDS.

DEARLY BELOVED:— In concluding these fragmentary remarks, I desire to call to your remembrance the words of the Lord to the Apostle Paul: "Be not afraid, but speak and hold not thy peace; For I am with thee, and no man shall set on thee to hurt thee; for I have much [*sic*] people in this city."

With the divine promise in your minds, the power of the Gospel in your hearts, the help of the Lord in your lives and the great success of the past, do not faint nor falter in your labors of love.

I entreat you, in the name of the Lord and in the presence of His people, be full of courage, zeal and cheer. Put on the whole armor of God and cease not in your efforts to spread the Gospel in Japan,

"Till every heart be won,
To worship in the light."

The Lord be with you. Amen.

(*The Messenger*, February 15, 1888)

33. 在日宣教師団会議録(1888年1月5日)

27 Katahirachō, Sendai, Japan, January 5, 1888.

Meeting called to order by Pres. J. P. Moore. Devotional exercises. Reading of minutes of previous meeting. On motion Rev. D. B. Schneder was received as a member of the Mission in full and regular standing.

I. Resolved, that Messrs. Takahashi, Hayashi, Matsuda, Hashimoto, Shimanuki, Tamura, Abe, Nishihori, Hayasaka, be received as beneficiary students under the care of the Mission; that they be required to give pledges to continue for five years in the ministry of the United Church of Christ in Japan; and that they furnish financial security in the name of some responsible person.

On motion Rev. W. E. Hoy's resignation as secretary of the Mission was accepted. Rev. D. B. Schneder was then elected secretary.

Jesus Christ. It will be your duty to *enlighten* the minds of the Japanese with the knowledge of the truth. You will find a serious drawback in your work from the fact that many people do not care to hear the Gospel. But do not grow weary in well-doing. Cast the bread of life upon the waters, and you shall find it, though it be after many days.

If you will examine sacred history, you will find that apparently the most hopeless cases have become the strongest defenders of the faith. The brightest trophies of salvation and the greatest miracles of grace, were found among the "chief of sinners." Do not give up a man because he is indifferent to the claims of religion. Keep on preaching the Gospel, and by the grace of God, you will succeed.

Endeavor to *warm* the heart as well as to enlighten the mind. I know that the angel of the Lord will take a "coal of fire" from off the altar and with it touch your lips, so that you may preach:

"As though you should never preach again

And as a dying man to dying men."

Train your converts to *work* for Christ. Teach them to live the truth and to do something for the truth.

It will be your solemn duty to preach the *Gospel*, and "rightly divide the word of truth." A loaf of bread will do me no good unless it is broken into pieces. Just so with the Gospel—it must be broken into pieces so that the hungry soul may eat thereof and live thereby.

The *cross* of Jesus should have a place in your sermons and addresses. Let the heathen know that there is a cross for every one who will confess the name of the Lord Jesus.

ENCOURAGING THE MISSIONARY'S WIFE.

MY DEAR SISTER:— I have also a few words for you. It is plain that your future life will be vastly different from your past life. I tenderly sympathize with you in the trials and denials which will beset your pathway. You will find it a constant comfort in the day of trouble to call upon the Lord and to cast your burdens upon Him, for He will sustain you. Be a helpmeet to your worthy husband in his arduous labors, and the God of missions will give you richly all things to enjoy.

WOMAN HAS MADE THIS THE MISSIONARY CENTURY. The history of the world tells of no time when woman occupied such a prominent position in the moral sphere. Within a few years, much attention has been paid to the condition

labors. So long as the loving heart of the Reformed Church continues to beat, you need not worry about your daily bread. I can assure you the Board will fulfill its part of the contract.

Now what manner of man ought you to be? The fact is, not every one is good enough to preach the Gospel to the heathen. The people of Japan especially demand the very best men the Church has at her disposal. Many a man could succeed at Pottsville, who would be a failure in Sendai. I know, some say "Any man is good enough for the heathen." If this be true, it is very strange that the Holy Ghost chose the two best preachers of Antioch to be *foreign* missionaries. It was the Spirit of the Lord, who said, "Separate me Barnabas and Saul for the work."

REQUISITES FOR SUCCESS.

What are a few of the qualifications of a foreign missionary? He must be a *live* Christian—a *burning* as well as a shining light. He must be full of love and zeal for souls—a live coal from off the altar of God. Men who have no enthusiasm have no place among the spiritually cold and dead heathen. To quote the language of a recent writer: "The constant contact with the mass of spiritual death will cool and freeze any but the most ardent souls.

"There is no substitute for this enthusiasm, and no prospect of much success without it. Vain ambition may inspire for a time, and may even seem to succeed, but it consumes the soul and dies out in ashes, while the divine fire, fed by the oil of grace, burns on while life lasts."

He must be *Christlike* in his life. Heathen people will detect a hollow hypocrite. They can tell whether a man has been with Jesus and has learnt of Him. The meek and lowly spirit of the Master must pervade the walk as well as the talk of the missionary. If he can say with a sincere heart "Those things which ye have *seen in me do*," he will be able to win souls for Jesus.

Some people imagine, that the mere going forth as a missionary into heathen lands will keep the heart alive in grace. This is a fatal mistake. No other person is in greater danger of spiritual shipwreck. I beseech you, my dear brother, cling to Christ; be fervent in spirit; serving the Lord; "having your conversation honest among the gentiles; that, whereas they speak against you as evil doers, they may by your good works, which they shall behold, glorify God in the day of visitation."

THE WORK OF AN EVANGELIST.

I need not tell you that you are sent forth to preach the everlasting Gospel of

of progress will bury out of sight.

THE IMPULSE TO WORK.

What a sad spectacle, a soul in sin, away from God, and without hope in the world! The feelings of our common humanity should compel us to "rescue the perishing" and to snatch them in pity from death and the grave, but how much more *the constraining love of Christ*? Those of you who know that there are millions of precious souls away from Jesus, how inconsistent, how cruel, to *say* nothing, and *do* nothing for their gracious return to the fold of God. Do you wait for a special commission from the Lord or a Board of Missions before you will help to convert the poor heathen who bow down to dumb, helpless idols? When Andrew went and told Simon, "We have found the Messiah," *he* had no special license to do it. The love and joy of his own soul became his passport to go, and find and bring Simon to Jesus. The beams of the Sun of righteousness began to warm his heart, so that he could not help but speak of Christ to him.

MY CHRISTIAN FRIENDS, if your souls are ablaze with the loving fire of Jesus, you cannot help but speak for Jesus.

COULD BUT WOULD NOT.

I rejoice, that many in our dear Zion do labor for the conversion of the heathen. There are many more who could, but they will not. They plead for the Home Mission work. They say, "first convert the heathen at your own door." There is one instance in the Acts of the Apostles which should forever silence the anti-Foreign Mission advocates. I refer to the call of Philip. Let me read it: "And the angel of the Lord spake unto Philip saying, arise and go toward the south, unto the way that goeth down from Jerusalem to Gaza, which is desert." Philip was a successful preacher in Samaria, and there were many thousands of impenitent souls in that country, but the Lord bade him "arise and go into a desert." *What for?* Why to lead *one* anxious seeker after the truth into the full light of the Gospel. If I knew of no other proof, that single incident would be a sufficient argument to my mind that I must obey the plain command: "*Go into all the world and preach the Gospel to every creature.*" Let us thank the Lord for what our people have done, are doing, and will do for the mission cause in Japan.

REMARKS TO THE MISSIONARY.

DEAR BROTHER SCHNEDER:— I trust these thoughts will be a comfort to your heart to-night. You can enter the foreign field in the hope that the constant prayers and liberal alms of a kind and well-meaning people, will attend your

in the history of our Foreign mission-work. Angels and saints witness this farewell service with wonder and delight. We read in the Word of God, "There is joy in heaven over *one* sinner that repents, believes and lives." What then, must be the rapture in the heavenly world, when a herald of the Gospel departs to preach repentance for sin and faith in the Lord Jesus, and thereby turn *many* unto righteousness.

GLAD AND SAD SERVICE.

In this service, feelings of gladness and sadness commingle. Gladness, in as much as another light will shine for Jesus in the darkness of sin, and another voice will proclaim the good tidings of salvation. Sadness, because this dear brother will bid farewell to home and friends and native land.

OUR ANSWER TO THEIR CALL.

About six months ago our little band of faithful workers in Japan earnestly plead for another helper. The Board heard their cry and made it known to the Church. In response to that call, good brother Schneder said: "Here am I, send me."

Our Church has shown much zeal and fidelity for the spread of the Gospel in the Empire of Japan. There is no nation, at this moment, in the wide, wide world that bids so fair to accept the religion of Jesus Christ. It is well that we do follow the leadings of the Spirit, and labor for the salvation of that interesting and promising people.

THE MISSIONARY CENTURY.

There is no doubt about it, *this* is the missionary century of the ages. The Church of Christ is the great missionary society in the world. Every Christian is a herald of the Cross, a light in the darkness of sin and a co-laborer with God. The final command of the Great Founder of Christianity is written in letters of light on the Christian's path of duty: "Go ye into all the world and preach the Gospel to every creature." The denomination that fails to engage in the work of Foreign missions, neglects a plain duty, and may well ask the serious question, "How shall we escape?" There *is* no escape, "but a fearful looking for of judgment." The absence of the desire to spread the Gospel implies spiritual paralysis, if not spiritual death. Is there any ray of hope that a people are the heirs of salvation, who harden their hearts, deafen their ears, seal their lips, bury their talents, and refuse to give as the Lord prospers them for the restoration of the poor heathen unto the joys of salvation? Verily, a church of this description, the chariot wheels

opportunities for usefulness among the girls of this part of Japan. Give them buildings, give them school apparatus, give them all they need. It pays. This work for woman pays. The angels in heaven rejoice over the souls born from on high and sing praises in which I hear that this work pays. Jesus—whom you love and whom you serve, for service is love—said long, long ago, that it pays. Do you think it pays? Will you pay into the treasury of the Lord? Will you?

Every day one sees, and sees with pain, new channels of usefulness opening. There are not enough of us to enter. When will there be more? There are more Reformed brethren willing to come to Japan. I have received letters to that effect. Shall they have the privilege of coming? Will you send them? Who will refuse to hear the voice of God and the pleadings of souls? Who?

Would that my pen might reach your hearts. There is a glowing fire there, I know. If I could only dip my pen into that same holy fire of divine love, I might write burning words in behalf of the many souls around us here. The best to be done now is *to pray, and to believe, and to act.*

You have Bro. Gring with you now. He can tell you more, and will, than I can. Face to face, speak with the Brother who eight years ago left home for Japan in living faith. Face to face, hear our cause pleaded. Face to face, receive a new understanding of things as they are in our work. Face to face, lift your hearts together to the Father above. Face to face, he as a reward of joy for his labors, you as a source of new life, receive the missionary benediction from the Lord, Himself the first missionary.

Yours, with hope,

William E. Hoy

(*The Messenger*, August 24, 1887)

32. D. B. シュネーダー夫妻壮行の辞(1887年10月25日)

INTERESTING SERVICES.

The Charge of Rev. A. R. Bartholomew, Secretary of Board of Foreign Missions, at the Farewell Service to Rev. D. B. Schneder, at Sunbury, Pa.—By Request of the Missionary.

Dear Fathers and Brethren:— The sending forth of Rev. David B. Schneder, as a missionary of the Cross among the people of Japan, will furnish a new chapter

delighted with the thought of telling to others what they have learned of Jesus; for in all my instructions I have prayerfully kept before their minds the personal Jesus.

This work grew up simply from a seed of faith dropped one year ago into my mind and heart during a conversation with Bro. Oshikawa. The one year's growth has put forth more than buds. There has been fruit—good, ripe, substantial fruitage of immortal souls; for these seven young men, in addition to their studies and recitations, have led some twenty souls to Jesus. *Do American students likewise ?*

These young men are earnest and two of them are deeply spiritual. It does one good to know and teach them all. They are not perfect. You and I are not without spot. In a poor old hut we met together for our daily work. During the winter months the wind whistled through the dilapidated structure, and seemed to play lightly with the words that cost many an hour of prayer and serious meditation.

We had no stove. One small fire box, or *hibachi*, with a few glowing coals of charcoal was the only source of heat; but we made the best of it, and cheerfully said to one another that our work must keep us warm. And here we are, exceedingly delighted with what the year has given us.

The names and ages of these seven young men are as follows:—

Matsuta, 23; Hayasaka, 24; Nishihori, 32; Hashimoto, 23; Abe, 20; Tamura, 19; Shimanuki, 20.

Mr. Hayasaka has a wife and two children. The others are unmarried.

The Lord has blessed this little school, and I have faith that He will continue to be gracious unto it. It sprang up in His name. May it not grow on? Do you want it continued? Arrangements have been made by our Board to continue it. Will you assist?

Yesterday morning I also attended the closing exercises of the Girls' school. No doubt Miss Poorbaugh and Miss Ault will write you all about these matters; but I want to add that when I saw the small rooms into which teachers, pupils and visitors crowded, I grew honestly indignant at the thought that perhaps the ladies will have to teach another year in buildings of this kind. *Let it not be so.*

Miss Poorbaugh and Miss Ault have done a work of which you can all speak praises. Send your best praises in *gold* to Hon. R. F. Kelker, treasurer, Harrisburg, Pa. *Golden* words of commendation will please and encourage the ladies more than any others, and will contain more of the Gospel, too. I know you are interested in the noble work of these two young women for woman. Give them all the possible

special appeal to the Church? Give our people a new love, give them the evangelization of this teeming North. Oh! brethren, you know not how we suffer for these people. Within the last ten days we have received four earnest appeals in behalf of neighboring cities to send preachers or help to support evangelists. Things are real, things are earnest, things are intensely spiritual. For myself, I can endure the nervous strain of ten or twelve hours of daily study far better than the anguish of soul that it costs us to say no to these people. They come for bread and we have not so much as a stone to give them. Brethren, help us; let the people know it and help us; if you can't help us, for God's sake pray for us that we be delivered from this spiritual pressure, for it weareth and weigheth heavily upon us. Let the love that is in you come to our material assistance. Stand in our place in the presence of these six millions of souls—souls erring and dying, souls dark and perishing,—and you will wonder why our cry of love is not even stronger. Blame us not for our spirit. It is part of our missionary being. God calleth, men call, will you help us to obey? Will you?

We are full of hope, and bless Almighty God for signal blessings. Our evangelist in Fukushima, who was my first teacher of Japanese, reports six baptisms as his first fruits. That city is a day's journey from Sendai.

Our Ladies are comfortably fixed in Sendai. They are well and happy. They are Ladies of sterling worth.

We pray that in all things the Board and we may be as one man in the Lord's work. God forbid that little differences or misunderstandings should betray us into ungodly passion in our most holy cause.

Bro. Gring says he will answer your personal letters by next mail.

Very respectfully,

W. E. Hoy, Sec.

31. W. E. ホーイ書簡(改革派教会の教友宛 1887年7月1日)

Sendai, Japan, July 1, 1887.

Dear Reformed Friends:— Yesterday Rev. Oshikawa, Bro. J. P. Moore and I went out to our little training-school for evangelists, and made some farewell remarks to our seven students. The young men are going out during the summer months, from place to place, to preach the plain and saving truths of the Gospel of Christ. They studied well during the past year, made fair progress, and are now

the Treas. pays for his draft but what we get for our gold in Yokohama. As to the drafts being in demand in Yokohama we don't know. We deal with the bank, the safest place. We recommend sending blank drafts to be filled up here, by which plan we secure the advantage of the price of gold at the time we sell our drafts here.

As a personal matter, I will state that by not attending to this Exchange I have already lost ten dollars.

The Mission did not feel authorized to take action concerning the Girls supported by certain Societies. The matter must be adjusted by those most directly concerned.

In view of the fact that all our missionary efforts are tending northward, we cannot possibly keep up the school at Nihon Bashi, Tokio, which is simply a day school of very little consequence to our interests.

In regard to the Evangelistic Training School in Sendai, we need no arguments to convince the Board. The School is a necessity and is in fact a reality. Since May four young men have been studying for evangelistic work under Bro. Hoy's directions; two more will soon join the class. These six young men are provided for privately by some foreigner within the limits of Japan. He does not wish his name to be made known. It is the sense of the mission that in the fall Bro. Hoy begin a course of lectures to these young men. This will not interfere with his linguistic studies. It is thought that by an allowance of \$ 100 only from the Board, the usefulness of this little school might be materially extended. You must not understand that a school of this kind will interfere with our evangelistic work. In other missions such schools are their right arm.

The Mission feels it but proper to have this last resolution on communications to the papers, warmly seconded.

We are all anxious that Bro. Moore come to Sendai. You were perfectly right in directing his removal. It accords with our judgment and meets the hearty approval of our brethren in the Union. We have written a kind and urgent letter to him, urging him to come; and we pray that he may come willingly and cheerfully.

We are arranging our work in Tokio and vicinity so as to enable to apply as much as possible the \$ 500, granted us, to our new fields in the North. We are all of one mind in this and have a painful sense that \$ 500 are not enough. Can't you give us \$ 700 more? Can't you? Won't you? If you can't, won't you make a

first two missionaries families be according to the documents legally drawn up, concerning which there seems to be some mistake in the appropriations recently reported for Rev. A. D. Gring and Rev. J. P. Moore. Why confine the medical appropriations for missionary families within the same sum as that granted to single missionaries? Does not this need correction?

On motion the Mission made the financial estimates of the new Lady missionaries.

Motion for adjournment. Prayer and benediction by the Pres.

Explanations.

It is the sense of the mission that it is not altogether wise to confine us so strictly to given items in our estimates. I write to my friend at a distance of eight thousand miles for shoe and boot money. After a delay of several months he sends me twelve dollars, *five* for *shoes* and *seven* for *boots* as I desired in my request. I go to the store with the instructions that none of the shoe money must in any case be applied for boot purposes, and the boot money dare not be converted into shoe money. I find that the interval of several months has produced a decided change of affairs. The price of the shoes has gone up and that of boots has fallen. Shoes sell for six dollars and boots have been reduced to six dollars. I buy the boots and have one dollar left. I cannot buy the shoes *unless I become personally responsible for the extra dollar* for which no human foresight could have made estimated provision. Please think on this. Again, if you allow me or any member of the mission, say \$ 400, \$ 100 for this, \$ 100 for that, and \$ 200 for another purpose; where is the harm and where the lack of business principles if by a happy turn in circumstances or by a system of economy I save ten dollars from each item and apply it to a holy purpose whereby immortal souls may be blessed, provided I apply it to some item within our business relations and give you credit for it? Why can't you trust the honor of the mission to make the best use of any surplus in any item? *Why?* we ask plainly and humbly. As to the matter of *Exchange*, the older missionaries offer the following explanation:—As to the Drafts sent us and the loss sustained by this mode of conveying money, we have the following explanations to make: In taking our Drafts to the Bank, we were allowed so much for them, the price of gold when they were bought in America. The day we sold them here the price of gold was higher in New York than the day the drafts were bought and the difference between the two prices of gold was the loss we sustained. It is not what

On motion the communication from the Secretary of the Board was considered item by item.

On motion the Secretary was instructed to make some suggestions to the Board in regard to itemized estimates and ask that for the present fiscal year any surplus from any given item may be applied to cover any deficiency in another.

The Sec. was instructed to explain the matter of "*Exchange*." To the items of "*Money sent*," "*Accounts and Estimates*," and "*Theological Students*" we heartily accede.

On motion the item of "*Girls Educated*" was referred to the Missionaries and the Societies conceived, for adjustment.

II. Resolved, that the School at Nihon Bashi, Tokio, be closed, and that the money, as subject to the Board, and the energy necessary to sustain it be applied where they will be of more real service to our evangelistic interests.

On motion the Mission expressed an acceptance of the will of the Board in regard to the matter of teaching—that no missionary teach as teacher only.

III. Resolved, that in the spirit of the Board's instructions as touching the school for young men in Sendai we deem it of the highest importance that in order to firmly establish our evangelistic work in the North, we urge the Board to proceed at once with the force on hand to begin in a humble way an English Biblical Training School for the training of young men as pastors and evangelists under our direction.

On motion the items of "*Missionary Work*" and "*Revenue*" were received.

IV. Resolved, that we as a Mission accede to the reiterated request of the Board with regard to communications to the Church papers; provided that all corrections, revisions, expurgations and suppressions be reported to the writers of said letters, and valid reasons be given for such changes or suppressions; and that all letters be sent on to the papers specified as soon as possible.

On motion the Mission expressed an opinion that Bro. J. P. Moore and wife, in view of the Board's repeated direction and in view of the larger field for usefulness here, be urged to move to Sendai early this fall.

It is the painful sense of the entire mission that the sum of \$ 500 for evangelistic work is too small, and we beg for \$ 700 more.

It is the sense of the mission that medical appropriations should adhere to the original contracts—Those of the last three missionaries being fixed by a specified sum in the articles of agreement and thus avoiding misunderstandings; those of the

(54)

Many hundredfold increasing, see the offering she has brought,
In the treasury of the Saviour, swells into a goodly sum—
Sacred money is sure leaven—Father, let Thy Kingdom come.

Hers the living, hers the giving, in the fruition of the Word,—
Grapes from grapes and figs from figs,—full life which cometh from the Lord.
Flesh is flesh and spirit spirit: born of God, the kindred mind,
In the season of its promise, blossoms after its own kind.

* A Japanese night lamp.

† Old Japanese coin.

(*The Japan Evangelist*, Vol. I, No. 3, February 1894)

30. W. E. ホーイ書簡(ジョンストン宛 1886年7月30日)

63 Kami Naka no Machi, Sendai, Japan, July 30, 1886.

To the Secretary of the Board of Commissioners for Foreign Missions of the Reformed Church in the United States of America.

Dear Doctor Johnston:— Early last week Bro. Moore wrote us that he was on his way to Sendai, to have a meeting with us for the discussion of important matters contained in your official communication to us. Bro. Gring then duly called a meeting. Bro. Moore not arriving, the meeting was twice postponed. Then at last Bro. Moore wrote us that he was detained by illness and could not attend our meeting. He however sent us a letter bearing on the official communication.

Yesterday, July 29, we held our first Mission meeting in Sendai at the home of our lately arrived Sisters, No 35 Higashi Yobancho, Sendai, Japan. We held two sessions—one in the morning and one in the afternoon.

I hereby send you a transcript of the minutes, and shall follow with necessary explanations.

Meeting opened with devotional exercises. Reading of minutes of previous meeting. Reading of communications—one from the Sec. of the Board and one from Bro. J. P. Moore.

I. Resolved, that the President of the Mission be requested to write a descriptive letter of the North of Japan to the Board and to the Church papers, setting forth the urgent needs of this new and promising field.

Songs of hope and adoration from her heart and voice alone,
 Through her asking and her getting, through her loving and her yearning,
 By abiding inspiration into psalms of life are turning.

Now her newer life is budding, even in her evening hour,
 Seed of grace in soil of sorrow, yielding finest fruit and flower.
 Active service for the Master, who for her redemption wrought,
 In the fullness of her gladness is her daily end and thought.

But her strength is soon exhausted; pain the strongest soul can bind;
 Scenes of things she prayed and hoped for, half unfinished glide behind.
 White and ready stands the harvest; what the reaping where none reap?
 Mightier hands than hers are folded, listless as in careless sleep.

While the holy work grows dearer, helpless drops her willing hand;
 But her grateful mind is hopeful for the people of her land.
 What can she in will or purpose for the coming kingdom do?
 What is praying without doing? what the giving of a *bu*?[†]

Soon she brings her household treasure, all the family chest doth hold,
 But one dozen silver pieces, each a silver *bu* of old.
 Small and simple is her giving, yet what truth it comprehends!
 'Tis the praying and the doing, 'tis the giving Christ commends.

“These are mine, and these I offer, though their value is not much;
 They are old—my husband owned them—and I give them now as such.
 Multiplied by richer treasure from the hands that well can share,
 Let them be for training reapers for God’s harvest far and fair.”

Deep as depths of willing spirit, shines her love of souls within:
 Bright as suns are, pure as faith-star, breaking through the clouds of sin,
 Far and farther gleams its radiance, like the beacon lights of old,
 Till the story of her giving to my countrymen is told.

Parents, children, men and women, learn the lesson she has taught,

(52)

The fair structure of affection, leaving but its blackened frame;
What to him are love and duty ? They are as an empty name;
Mother—God—Home—Heaven—Spirit—but he knows not whence he came.

In the anguish of her spirit, in the bitterness of night,
Thoughts come stinging; hopes lie shattered by the *andon's* * sickly light.
Dreams of food and raiment fading, sense of shame is running deep
To the fountain of all weeping, melting off her hold on sleep.

Wild and weird the shadows creeping, fast the fitful phantoms fleeting;
Visions through the dimness sweeping,—out of nothing comes no greeting;
O the burden of these moments ! O her loneliness of grief !
Is for her no respite ready ? Is there none to give relief ?

Yet a little while she lingers in this weary round of care,
Times are hard and men are harder, and her burden she must bear,
Toiling long and waiting longer, tired of unequal strife,
Faltering in the growing struggle to preserve her simple life.

Night is night and yields to morning and the blessedness of day,
O the glory of the dawning and the splendor of the day !
Idol-worship is forsaken for the Dayspring from on high,
Peaceful coming of the Master, gentle footsteps falling nigh !

She the heavy laden widow, she the weary and the meek,
She for whom domestic trials wrought their lines upon her cheek,
With her suffering and her sorrow, kneeling at the Healer's feet,
Hears command of restoration, listens to evangel sweet.

Hers, in full and gracious measure, is the promise of the Lord;
Font of hidden gladness springing till the Spirit is outpoured;
Grace receiving, sins forgiven, and for her all things made new,
Out of error into wisdom, from the false into the true !

Like seraphic anthems swelling full around the Father's throne,

each, four dollars and twenty cents in all. And this from one of the poorest of God's "little ones."

I have purchased nine of these old coins. They are beautiful. I want to possess them for their tender spiritual associations. Some day, if the opportunity presents itself, I will send you a few.

O strong soul! thy hope hath made thee mighty. The light of thy life shall quicken many hearts beyond the seas. Multiplied^{*} many hundredfold by hands energized by the penetrative power of thy example, thy gift shall be a brilliant setting to the diamond of thy faith. From the great and good of our Father's people, from those who bear a cup of cold water to the thirsty and fainting, from all lovers of righteousness will arise the question,—What if a great part of the world be saved by the mites of the poor?^{*} And history offers a great poem of praise, past, present, future, fact and prophecy about to be fact; man's deeds and Christ's commendation and promise. Yours,

W. E. H.

* We have already sold one of these pieces for five dollars.

* I know a young Japanese Christian who gives three-fourths of his wages as telegraph operator to church purposes.

(*The Messenger*, July 28, 1886)

28. W. E. ホーイの詩「12枚の銀貨」(1894年2月)

TWELVE PIECES OF SILVER

In a low and lonely dwelling, where no touch of wealth has been,
Where the wrinkled hand of sorrow in its palsied form is seen,
Lives a widow of this city, toils a woman for her meat,
Well contented if her larder gives the smallest fish to eat.

Pain of poverty is doubled when her fallen, hardened son,
Homeward staggers from his revels, as his wasted day is done;
Proud and thoughtless, mean and idle, worthless as the wine he drinks,
To the level of his choosing by a natural law he sinks.

Hot, his poisoned blood consumeth, with an angry, fiery flame,

Union College and Seminary, Tsukiji, Tokio.

And this goes in as the report of my first half year of missionary work in Japan. I have very little to show as fruit, but I trust that my presence here has set to work a few forces that shall eventually make for righteousness.

Yours with hope,

W. E. Hoy

(*The Messenger*, June 23, 1886)

27. W. E. ホーイ書簡(ジョンストン宛 1886年6月4日)

Sendai, Japan, June 4th, 1886.

Dear Doctor Johnston:— “The short and simple annals of the poor,” frequently abound in the good things of pure wisdom, and in lessons of life worthy of serious meditation. Some little flowers by the wayside have more honey than the lily or the rose in the gardens of the princes of the world.

There dwells in an humble hut a certain poor widow of Sendai. Her husband died a few years ago. She lives in the barest penury, and is burdened by a drunken son.

The shadows of poverty and desolation might well be driven into her heart; yet she is patient. A few years ago she found the Lord and Saviour Jesus Christ, and now through all the clouds of her domestic troubles, she hears the voice of the Father. Day by day she goes on in the path of Christian joy, content if haply she may find enough to eat. Poor,—and the readers of *The Messenger* and of *The Christian World* do not know what *poor* means in Japan,—poor and abused by the son, she never loses her faith in her Master. Her love of God and of souls in its glow reminds one of the “Apostolic days.” This godly woman longs for the spread of the gospel throughout the length and breadth of her dear country. Hearing of our school projects and desiring to aid the cause of raising up young men for God’s work among her people, she comes forward quietly and makes an offering of twelve old Japanese silver quarters which she had held in private and secret treasure for many years.

The Japanese clergyman of whom I wrote in my first Sendai letter has taken charge of this contribution and will use it for the intended purpose when the proper time comes. We took the ancient money to a native banker to ascertain the full value, for it is at a premium now. These pieces of silver are worth thirty-five cents

establishing a Christian institution of learning for young men in Sendai. This organization is to assume all financial responsibilities for grounds and building, apparatus, native teachers, current expenses, with the hope that *we* will furnish two or three foreign teachers.

The Governor and Vice-Governor of Sendai Ken[*sic*] are interested; in fact, the latter was the first to speak on the matter, and the former has sent for me several times to interview me. And just here let me add that the Governor is deeply interested in educational work for women.

Shall we go forward and help a people so willing to help themselves? All Christian schools in Japan are doing a great work, educating young men, and training many of them for the gospel ministry. The offer given us is an unusual one, and appeals to me with much force. Looking at it calmly, in the midst of the circumstances, I am willing to put myself on record as favoring this spontaneous movement; and meditating on the best missionary work of the past, the phases of the present and the outlook for the future, I come to the conclusion that the best work for permanency and promise is to educate young men for the ministry. Japan must be thoroughly evangelized, man to man, home to home, ken to ken, by Japan; and the best way to spread this labor is to train the young for the grave responsibility. I write thus not from a five months' experience of Japan, for that could have no force, but from what is told me repeatedly by the older and more experienced missionaries, and by the ablest native pastors.

For all work that we may thus do, we shall receive full denominational recognition and credit.

Four young men of considerable education wish to study theology now. They have been Christians for a number of years. If we go into this school they will be ours. At any rate I am going to support one myself as my contribution to the cause of foreign missions.

It is well that this question has come before our missions at this point of my missionary life; for it is highly imperative that I should set before me a definite aim and purpose to rule my life and outline my conduct. Your decision—I pray it be to the best interests, not only of our present status as a mission, but also of the future of Christianity in Japan, so far as we shall have to do with it—will be an important starting-point for me.

School work will not necessarily exclude one from evangelistic work. Some of the most popular and influential foreign preachers in Japan are professors in the

(48)

estimates then we would ask a contingent fund determined by the Mission and approved by the Board was to meet all exigencies. Our estimates to these must be considerably higher. Our last estimates were made out on the lowest scale, and we fear they will be short.

9. *District between Tokio and Sendai.* We shall be delighted to take the spiritual charge of the millions between Tokio & Sendai, provided the church sends us sufficient help.

10. *Support of Theological Students in Sendai.* Here are three or four young men who desire to be partially supported while preparing themselves for Evangelistic work in our Theo. Seminary. They ask only the small sum of \$4.50 per month. Will the Board be willing to include this request in our estimates previously submitted, in as much as this has come up since. It will be evident to the Board that it is to our advantage to take these men rather than to have others take them. Our hope lies in well trained young men and women. By Order of Mission President,

A. D. Gring

25. W. E. ホーイ書簡(ジョンストン宛 1886年4月30日)

63 Kami Naka no Machi, Sendai Ku,
Miyagi Ken, Japan, April 30, 1886.

Dear Dr. Johnston:— I am daily engaged in a systematic study of the Japanese language. My progress is encouraging. There are difficulties before me, however. These call for persevering study. Well, I am not afraid of work. This language can be acquired, and I mean to be master of it if life and health be granted me.

My line of work is defining itself almost as if the Lord were walking with me daily and saying unto me—Here lies your duty, this is to be the mission of your life, and now comes the question,—Shall my work be educational specifically ?

You have already been informed of the call for school work which has come to us, and it only remains for me to say that this is growing stronger.

A number of Japanese have urged me to write out a course of *Christian* study for young men. The answer to this request is a detailed outline of a ten years' course: two years preparatory, four years academic, four years elective, either collegiate or theological.

A movement is on foot to organize a company of natives for the purpose of

to hold on to what we have in the Capital, since our success here will do much by way of influence in Sendai. We would rather urge the Board to renewed energy to sustain both places. It may require considerable energy at first, but where once done, it need not be done over.

4. *Bro. Moore's Removal to Sendai.* According to previous arrangement it is suggested that I myself proceed to Sendai to assist in getting things underway. This was part of our plan, and this we deem wise. I shall therefore proceed to Sendai alone first, and then return, meet the Ladies, and after the necessary arrangements, proceed to Sendai with Mrs. Gring, children, and Ladies to spend the summer, in getting ready for the opening of the work in the fall. We must go away some where, and we much prefer to go where we can be of use, while at the same we may be benefited bodily. We are tired of mountain trip simply to rest, with great expense. We will do all we can to have the ladies comfortably and pleasantly fixed. Japanese houses are so cheap in Sendai that they will have no difficulty in having one of their own in due course. The ladies nor the Board need not have the least uneasiness about their stay in Sendai. We will have every thing arranged for. We are delighted that they are coming so soon, and we bespeak for them a warm Christian reception on the part of the people in Sendai. We pray for their safe arrival.

5. *Communications.* We are willing that all letters of a strictly missionary or business nature be submitted to the Board according to request: but on the other hand, we claim the privilege of writing social or descriptive letters directly to the Papers. Of course we shall carefully distinguish between the two. Our purpose on this request is that our letters will go direct to the papers, alternately to the *World & Messenger*.

6. *Resolution on Returning Missionaries.* The Resolution touching this point adopted by the Mission and have mitted to the Board was reasonable and we think should meet with the approval of the Board, since it is a privilege granted by all Boards to their Missions. The experience of the older Boards has proven it to be unwise to remain too long on the field.

7. *On Concentration.* We are with the Board on the opinion that we be careful to concentrate our work as much as possible, and that only such places be opened, as can be afterwards nurtured regularly. The great need now is nurturing institution, such as are proposed for Sendai.

8. *Estimates.* If the Board means that we are absolutely not to go beyond the

(The Messenger, June 2, 1886)

24. 在日宣教師団會議錄(1886年4月12日)

April 12, 1886.

To the Secretary of the Board of Commissioners for Foreign Missions of the Ref. Church in U.S.

Dear Doctor:— As President of the mission, I have sent the Board's Resolutions to Sendai to get Bro. Hoy's mind on each resolution and then with Bro. Hoy's letter before us. Bro. Moore and myself have the following to transmit.

1. *The Union.* We have been made exceedingly happy to learn that the Board led by the Holy Spirit gave its consent for us to unite with the United Church of Christ in Japan. The members of the Union who have from the beginning looked upon us as belonging to them historically, were delighted to hear your decision on the matter. The native church too have expressed themselves as much pleased with the move. The day after receiving the intelligence I conveyed in person the fact to the Council of the Union then meeting, and received by them a most hearty minute framed by a committee appointed for the purpose. Bro. Moore was present also, and we and they felt that we had taken the position God opened for us to occupy. The advisability of such a step was so very apparent that it formed a part of the burden of my prayer for the last several years. I feel that the answer from the Board is an answer to my prayer. I am looking for a blessing upon our work as proof of His divine approbation,—the Sendai opening and its success being that blessing. The good effects will reach across the waters, and go far towards bringing about a union at home, so needful for the true success of home missions. Thank you for your consent.

2. *Mission Organization.* In this connection we express ourselves as highly gratified that the Board has accepted the mission organization. We are confident, that to all intents and purpose, it will take the place of a Classis. The ladies when they arrive, will be welcomed into the organization as regularly appointed missionaries.

3. *Bro. Hoy's Removal to Sendai.* Here too we desire to express our satisfaction in the Board's acquiescence in the removal of Bro. Hoy to Sendai. But as to the advisability of removing our whole force there the Mission is of opinion that it would not be wise. Our work here will in a measure be cost to us. Our desire is

departing glories of a magnificent worship are the shroud of a dead religion. Sparkling drops of heaven's dew hang upon the grass over the graves, and there is born the thought of the tears of weary hearts despairing in a darkness of faith. Tens of thousands worshipped here, died in the city below, were carried up here and buried without a single ray of hope. The wind moans through the tree-tops. An old priest, with a staff in his hand, walks up to me; turns his sunken eyes full upon my face; shows a sign of surprise; turns away; bends his head in meditation for ten minutes or more; raises himself, as if conscious of a returning dignity and power; trembles in all his body; points impatiently to the black ruins of a lifeless and loveless worship, and to the countless graves; trembles still more deeply and sighs; returns to his miserable hut close by; and what passes through his mind I know not, nor may I ever know. Perhaps his despair and the decay of his religion are breaking his heart. I know he is unhappy.

I cannot speak to him, but I can pray. I kneel upon a Christless grave and pour out my soul before the throne of high Heaven in behalf of the old man and for the city at the foot of these hills. The past, with the greater portion of its history unwritten in these resting places, looks dark; and its shadows weep over me and chill my soul. O what must have been the life, what must have been the death, what must have been the burial of those whose dust is numbered here! With the cold touch of the hopeless past upon my spirit, I plead for the present and future of the people of Sendai. Here among the dead, alone with God, I plead for more missionary love and zeal in our church at home; here among the dead, whose earthly condition was but an environment of sin and horrible lust, I beg for more workmen to labor among the living of this city.

The dead speak not. But the living raise their voices unto us. A new missionary can do little at first. He must study the language and the people. He must learn to labor and to wait. Meanwhile his soul is on fire; *and vital fires feed on living fuel*. The times are ripe. Why are there not more men here preparing for the great work? We need them.

By the grace of God we shall soon have two Reformed schools in Sendai—one for boys and one for girls. What are we going to do for them? The time is past for delay in any missionary movements in Japan. The very pressure of historical force demands speedy action. God and man are at work. Hopefully yours,

W. E. Hoy

63 Kami Naka no Machi, Sendai, Japan.

(44)

16. That a missionary church is a church of love—love to God and love to man.
17. That a church of love has a full treasury for the Lord's work.

18. That the Reformed Church in the United States has a great opportunity for love.

19. That the Lord waits for an early response.

20. That the God of an opened way and of an appealing call stands ready to bless an open heart, a responsive soul and a willing hand.

Letters come to us from friends in America, from the east and the west of the Church, asking, What can we do for you in Japan? Nothing, my friends, nothing. But you can do much, you can do all, *for God and His work in Japan*, by filling our treasury to overflowing. Tokio and Sendai ask that liberal gifts be given by you. Send your contributions to Hon. R. F. Kelker, Harrisburg, Pa.

The missionary call of the day is not the mere enthusiasm of hopeful missionaries. It is as real as the voice of a friend in conversation with you. It comes from men and women, boys and girls, in real life. It is a cry from life for life in God.

Dear friends, readers of *The Messenger* and of *The Christian World*; yes, readers of *God's Word*; will you not at once show your love of God and of man? Can't you send us men and women to do a work that God has given us? Yours with hope of speedy things,

W. E. Hoy

P. S. Since the penning of this letter I have had a long conversation with leading men of Sendai. The whole matter of their talk was concerning Christian schools for young men and women. We have a work to do.

My health is good. I am growing heavier. Hard work seems to be a good tonic.

Little by little I am gaining some knowledge of the language. Even here there is no room for discouragement.

W. E. H.

(*The Messenger*, May 5, 1886)

23. W. E. ホーイ書簡(フィッシャー宛 1886年4月8日)

Sendai, Japan, April 8th, 1886.

Dear Brother Fisher:— On these hills, in sight of my study, are three cities of the dead. For three centuries Death has been erecting dwelling-places for his own. In the midst of them stand the rotting temples of Masamuni[sic], the local hero and god of Sendai. We hear no voices from the graves, and the altars are deserted and silent. The tomb repeats the process of dust to dust, and the fading beauties and

22. W. E. ホーイ書簡(ジョンストン宛 1886年3月26日)

Sendai, Japan, March 26, 1886.

Dear Dr. Johnston:— For two or three years I have seen or heard in various places and from different sources these words concerning contemplated movements of our Church in Foreign Missions: “As soon as in the providence of God the way may be opened.” They may have had their meaning in their day. In the fullness of these times they are empty. Why? Let us answer in twenty propositions.

1. That the word *way* was used to embrace the activity of God rather than that of man; yea, in some instances, to hide a sinful indifference to the loving life of the Gospel, by looking for all missionary energy and enterprise to come from God alone.

2. That God’s Spirit is active.

3. That He has opened the way.

4. That “the way” does not include men and money and human exertion.

5. That he who loves God and souls will not desire to have *the way* embrace all necessary activity.

6. That it is slothful and sinful to refuse to enter the open way.

7. That we as a Church enlisted in the high and holy cause of Foreign Missions have received a new call to a work of love in Sendai, Japan; to send out from this point evangelists into new places; and to engage in educational work both for young men and for young women, that trained reapers may be raised up for the great white harvest.

8. That there is an urgent demand for our young ladies now under appointment.

9. *That we need more men to-day.*

10. That we must act promptly and with all love, if we would obey the latest call of God and of man.

11. That the Japanese are up and doing, and ask for help in spiritual matters.

12. That the spirit of their new national life does not brook tardiness.

13. That at this point of Japanese history it is wise to be as progressive in missions as the government is in toleration and in improvement.

14. That the open way shown us is a mark of God’s love and favor.

15. That a Church which gladly enters the open way is a missionary church.

the noise of the leaping streams. The birds on that lofty pine are trying the sweetest notes of their living art. The placid lake. I envy that fisherman in his boat and this boy on the rock. And all this comes to you as you sit there and study the pictures that cover the whole side of the room. On the other side of the *karakami*, looking from my bedroom, you see a grove of palms and a river. The *karakami* on the first floor present plants of different kinds.

Much that has been said of this room applies also to the rest. When evening comes cook will close up the house. Along the outer edge of the verandas he will slide the *amados*. These are frames six by three feet and covered with thin boards. Three by six for *shoji*, *amado*, *karakami*, and *tatami*. A *tatami* is a floor mat, made of rice straw tightly bound together and covered on the upper surface with matting; each piece is two inches thick, the edges being generally neatly bound with black cloth. Foreigners spread a cheap carpet over these. I have done so for warmth.

On stepping out on the veranda, you will notice that beyond the main roof, which is constructed of three successive layers of boards, small shingles and heavy tiles of burnt clay, extends a "summer roof" of woven rushes. This additional roof, made for the purpose of keeping the house cool in summer, is six feet wide and rests on long poles set on the ground.

I cannot tell you more now. You have seen that my home is bright, convenient, comfortable. It is beautiful but not imposing, being simple and cheap; it is perhaps not a home such as one would select in America, but then, again, it is so much like a large playhouse that one feels he has found a place where perpetual childhood abides. And the Japanese are child-like in many of their gentle, touching manners. And here he is wont to dream, as children do, of the days to come. His fancy plays with the beings of another world, just as the child-imagination was trained by the child-heart to do in days of yore; and sees a ladder reaching far away out of all his cares and troubles, beholds a ladder set up on earth, and the top of it reaching to heaven; and behold the angels of God ascending and descending on it.

Yours in the Lord,

W. E. Hoy

(*The Messenger*, March 31, 1886)

On the first floor are two rooms of corresponding sizes. The addition built to this house is divided into three rooms, which cook and his wife call, and this in truly native simplicity, their home. So you will understand there is ample space here, and yet I have seen these rooms well filled by callers and by my pupils in English, who love to see how an American lives.

On the south and west sides of this study are *shojis*. I forgot that you may not exactly know what a *shoji* is. How is one made? The carpenter takes four pieces of wood, two of them being six and two of them three feet long, and all one inch square. Then he makes a frame three by six. Set this upright. Eight inches from below a cross piece is inserted, and the open space at the bottom thus bounded is covered with very thin boards. The large space above is subdivided into smaller spaces of three by six inches by fitting in nicely prepared thin sticks one eighth inch thick and one half inch wide, and long enough to reach from side to side and from top to bottom of this upper open space. Now the workman is ready to paste on the transparent rice paper so common in Japan.

On the north side is a solid unbroken wall of stout timbers, stones and mud. Don't you like that light blue tint on the face of the wall? That large *kakemono*, no Japanese home is complete without a *kakemono*, it belongs to the house and is part of it, according to custom and thought in Sendai, as really as is the roof. With its white border, black surface and graceful Chinese characters, it is considered quite artistic. It contains in its beauty the history of a celebrated man of old Sendai. The Japanese *kakemonos* are prepared pretty much like maps. They are constructed of good strong material, silk or paper, upon which are printed pictures, mottoes, poems, or history, as taste or demand may dictate. They are furnished with rollers at each end, are hung in the same manner in which we arrange maps, and, like maps, vary in size. And the book-case filled with books which I purchased at Lancaster takes me back to many scenes and incidents in student life.

What are those frames on the west side? They are *karakami*. I will explain. A frame three by six feet is covered with good thick paper, on which are printed scenes taken from life—human, animal and vegetable. The edges, which are simply the wooden frame exposed to view, are beautifully lacquered in a way known only to the Japanese. You notice that these *karakami* have one grand design. How magnificent the view presented! A bold mountain scene. Towering peaks, softer ranges of hills, open valleys. Here a waterfall. What a feeling of rest that Japanese cottage gives, nestled there just at the foot of the fall. One can hear

rows of beautiful plants and trees. The enclosed grounds are divided by partitions of rushes closely woven together to a thickness of two inches. Here and there are gates—gates to the confusion of the visitor who wonders which path he is to take. To the south of the house are eight pear trees trained in fanciful shapes upon a large frame of bamboo work—a natural growth touched by the will of man and made to conform to it. And a few yards west of this are low pines trimmed into five different forms. This will do for the grounds. Come, the glow of the fireside invites us in.

Japanese houses, that is, houses that belong entirely to the old native style of architecture, are all of one story. Mine, built last December, only two months ago, has been erected a little after a new fashion that is obtaining in this country. It has two stories, but otherwise it is purely Japanese, save that a few of the *shojis* have several panes of glass, an attempt at a foreign window.

Let us observe my order of entrance. First I open this lattice work by sliding back a small frame of the same construction. This a second “needle’s eye.” Stoop, Doctor, stoop. You might injure your head. Safe—are we not? Were I to turn back this slide and put in that iron pin, no one could open from without. Here we stand on a floor of cement three by six feet. Don’t forget to look at the raised platform before you. Here I will sit down and take off my shoes and put them in this case to my left. I never go into a house now with my shoes on. I am too much of a Japanese to have the “rudeness and uncleanness” of entering a human abode with feet shod. Now let us go upstairs. Take care, those steps are pretty much like a ladder. Ah! I was certain you would fall. Try again. This time you have succeeded. See, this railing extends around three sides of the house. Between this and the *shojis* of the house proper is a veranda three feet wide, also running along three sides of the building. You will find the same general plan on the first floor. We pass along the east and south sides and come to my study. How shall we enter? I slide this *shoji* along that groove, and the passage is free. Enter thou and be my guest. Sit down in that large easy chair which was presented to me by a number of my Mifflinburg friends, and I will tell you all about my house and home in Japan. There, cook offers you a cup of tea. In Japan you must do as the Japanese do—drink tea. Do you like it? Not at first, perhaps, but in a few weeks, I think, you will relish it.

The main structure has four rooms, which I occupy. This study is fifteen by fifteen, nine high. The room adjoining, my bedroom, is twelve by fifteen, nine high.

work of foreign missions.

Sendai has become the heart of my hopes, and it will be, I trust, the hearth and home of my best missionary affections.

Yours in the Lord,

Wm. E. Hoy

Heartily endorsed by A. D. Gring; J. P. Moore.

(*The Messenger*, January 27, 1886)

21. W. E. ホーイ書簡(ジョンストン宛 1886年2月16日)

Sendai, Japan, Feb. 16, 1886.

Dear Doctor Johnston:— Let us go westward on *O Machi*, Great Street. I want to take you to the house I call home. We have come to the foot of the street. Here is a gentle hill. There is the river and over it *O Hashi*, Great Bridge. I will not name the river. The words would burden your tongue. The meaning is, The river flowing over a bed of sand. That is poetical and reminds me of a Greek poet who, in describing a fair maiden's hair, likened the flowing locks to a mountain stream dashing over a bed of golden sand and pebbles of silver. The Japanese love the beautiful in nature.

But now we must turn to the right down *Kami naku*(sic) *no Machi*, Upper Middle Street. Entering upon this street, we pass through a house about two hundred and fifty feet long. This is an old *daimio* house, which in olden times belonged to a nobleman, but is now partly a residence and partly a storehouse. It stands right over the street, and formerly there used to be gates here—great gates of wood and iron. It is the only house of the kind remaining in Sendai. At the gable ends and over the street entrance you will see large images of fish at play, carved in wood, painted and gilded.

Going down the street a distance of three hundred yards, we turn to the left and find that our way leads to the river just a little ahead of us. We see a new house in an enclosure of one tenth of an acre. That is *home*. Let us stand here and look at the surroundings. You will notice that the grounds are enclosed by a wall eight feet high. How are we to enter? Yonder is a large gate firmly fastened from the inside. Into this gate a smaller one is framed. Through this small one we pass and think of the "needle's eye;" in fact, it is often claimed to be the genuine historical and scriptural gateway so named. This also at night is secured from within. Once in we feel that everything looks to security and safety. Just inside the walls are

backed by a few influential government officers, beseech me to make my home with them. They want foreign influence, education and example; yes, thank God, they ask for the Gospel. Their desire is to have Christian agencies at work in their beautiful city. They would like to have a girls' seminary. There is no question but that Sendai is the most promising field, and the most urgent one, in Japan for female education, Yokohama and Tokio being already well supplied. Bros. Gring and Moore, and all the experienced missionaries testify to this. The citizens beg that Miss Poorbaugh and Miss Ault be sent to them soon. I have seen and heard them pray for this. *Will God answer ?* If only our Reformed people at home could realize the intensity of the new purpose at work in the hearts of these people, how willingly and lovingly they would pronounce in very truth the words, "It is more blessed to give than to receive !" It is a happy and a holy privilege before God to love and help such a desire framed upon the lips of native Christians and echoed by the pleading voices of those still in spiritual darkness. Lovest thou God ? Wilt thou also love these people ?

I am making arrangements to locate in Sendai. I could not do otherwise. The call comes to me with a divine force that I cannot withstand. The Lord has plainly opened my way. Besides the spiritual aspect, Sendai appealed to me by the fact that it is a most favorable place for the study of the language. One is thrown into direct communication and intercourse with the natives. In Tokio new missionaries associate mostly with English and American people. Then, too, one can live more cheaply in Sendai than in Tokio. Property is cheap, and good, comfortable houses rent for four yen (\$3.35) per month. A new center of work will also greatly strengthen our mission. It is my purpose to study the language so as to prepare myself for evangelistic work. I want to engage in teaching English, looking forward to the Bible and our Catechism. A boy's school may probably grow out of this. A number of bright boys and young men are eagerly awaiting my return to Sendai. One young Christian wishes me to direct his theological studies. January 14th is the date upon which Bros. Gring and Moore and I have decided for my return to Sendai.

All the missionaries that I have thus far met are unanimous in the opinion that I can do the greatest good in Sendai. The leadings of Almighty God are so evident in this that they are at once seen and believed by all. The voice of the Father calleth now even more forcibly than in that memorable moment of my life's history when I for the first time publicly announced my consecration to the cause and

(*The Messenger*, January 6, 1886)

20. W. E. ホーイ書簡(ジョンストン宛 1885年12月18日)

Tokio, Japan, Dec. 18, 1885.

Dear Dr. Johnston:— Soon after my arrival in Japan the question of my future location and work was brought before me in a striking manner. It was this,— Should I go to Sendai or remain in Tokio? To answer it intelligently and definitely, Bro. Gring and I, with the hearty approval of Bro. Moore, went to Sendai last week and “spied out the land.” What was the result of our examination?

Sendai is a city two hundred and fifty miles north of Tokio. It is the heart of an important and hopeful section of country just feeling the influence of a new life—the tremblings of beginnings, great in prophetic force and assurance; something that tells of the young manhood, strong, vigorous, courageous, that is born from within. This city, for the place it occupies in the present flow of progress and for its wonderful promise of becoming a great influence in the imperial government, is called “the Tokio of the North,” —“the center of the six millions of the seven northern kens.” The population of Sendai is 60,000. The surrounding ken or province has 600,000 inhabitants. The climate is colder than that of Tokio. For the preservation of health and strength Sendai is certainly far preferable to Tokio.

The people of Sendai are still largely in their native simplicity. There are only five foreigners in the city. Just as you may see in the early stages of the day’s dawn great promise of what is to be, so here in the faint light that is appearing one may find the confidence of the near future that is to make these people brighter and better. The Baptists and Methodists have recently opened evangelistic work here, based on the educational system. A few years ago a Japanese evangelist began preaching Christ in this city and has now a congregation of one hundred and thirty members. The third day after my landing on the shores of Japan this native pastor called on me at Tokio and asked me to come to his help. He organized his people irrespectively of denominational lines, but has within the last three weeks joined the Union Church of Japan. The Christians of Sendai are praying that the Lord send me to their place to preach the glad tidings to those who have not yet called on the name of God. Those who do not embrace Christianity beg me to come. Christians and heathen ask for the bread of life. The citizens in general,

19. W. E. ホーイ書簡(ジョンストン宛 1885年12月4日)

FOREIGN MISSIONS

The Church will be pleased to read the intelligence conveyed in the following letter. Other letters from Japan have been received in which we learn of the wonderful success of our mission. Surely the Lord has been good to us in opening such a door of promise. Let us as a Church highly esteem our privileges, and be incited to discharge our whole duty.

T. S. Johnston, Secretary.

Tokio, Japan, Dec. 4, 1885.

Dear Doctor Johnston:— With a deep feeling of gratitude to God for His abiding presence and providence on my long journey to Japan, I rejoice to announce my safe arrival in this land of my choice and mission. The ride across the continent and the voyage over the sea were both pleasant and instructive. From the moment I passed beyond the threshold of my father's house and home up to the present, my health has been good, and my spirit hopeful and happy. I escaped all attacks of seasickness.

I landed at Yokohama on the first day of December, at 4 P. M. Rev. F. C. Kline, of the M. P. Mission, Yokohama, in accordance with a previous arrangement with our missionaries, met me on board the Gaelic. He kindly took charge of me and my trunks. We telegraphed to Bros. Gring and Moore. They then came down to Yokohama in the evening and met me at Brother Kline's. At half past ten we started for Tokio and reached that city a little after eleven. We proceeded to Bro. Gring's and met the ladies, Mrs. Gring and Mrs. Moore. And a joyous band we were indeed. For the last few days I have been resting and adapting myself to new scenes and to a new life.

Our missionaries are well, and hard at work. They are earning a decided and deserved success.

At this early period I cannot write more fully. By the next mail I shall write further particulars. "Bless the Lord, O my soul, and all that is within me, bless His holy name." Yours in the Lord,

Wm. E. Hoy

When you had finished your preparatory studies in the Theological Seminary, the Classis of West Susquehanna examined you, licensed you and directed your ordination. In many of our congregations you have lately presented yourself and your work. Having full confidence in you as the missionary to Japan, our pastors and people unite in earnest prayers for your safety of journey and for God's blessing upon your work.

Through the congregation and Classis you are also a son of this Synod. On the floor of this Synod you have now been ordained by a committee of West Susquehanna Classis, and your special work has been committed to you by the Board of Foreign Missions; and the Synod to-night, assuring you of prayers and sympathy, of love and aid, bids you God-speed.

This ordination and farewell service, my dear brother, has been solemn and impressive, it is true, but not sad. Much rather, it has been joyful and inspiring. This is one of the happiest hours of my life. This is one of the happiest hours in the life of your family who so joyfully gave you to Christ in your childhood, and who now so cheerfully give you to His ministry in your manhood.

While we congratulate you upon your going, we rejoice in the honor that our third missionary to Japan goes from this congregation, from this Classis, from this Synod.

Therefore, in the name of all who love you, in the name of all who pray for you, in the name of all who lovingly will follow you upon your long journey, I bid you farewell.

The Lord bless thee and keep thee. The Lord make His face shine upon thee and be gracious unto thee. The Lord lift up His countenance upon thee and give thee peace. In the name of the Father and of the Son and of Holy Ghost. Amen.

These interesting and solemn services were concluded at a late hour, with the singing of a hymn and the pronouncing of the benediction by Rev. T. R. Dietz.

A large congregation was present and great interest was manifested in these unusual services, and that particularly because of the young brother's peculiar relation to the congregation and the community. He certainly starts out on his self-denying work with the prayers and good wishes of all.

F.

(The Messenger, October 28, 1885)

fault. I shall speak them because my whole heart is in the cause. Some of you are doing what you can in the cause of foreign missions, and some of you are not. If the duty is not fully performed, whose is the condemnation? Is the fault altogether with your people? You know how to answer honestly before God and before men. Cannot we have more faith in God and in our people? Is there not room for more and deeper personal consecration to Christ's work?

We are growing stronger in God from year to year as we are learning to do more mission work at home and abroad. We serve the Saviour with a new and sanctified purpose. Pastors and people show that they are in earnest in their love of God and in their love of man. There is hope in this.

I have faith in God. I have faith in His work. I have faith in my work. What if hardships be in store for me? Believe in God, and work on. What if political revolutions in Japan, of which Dr. Johnston warned me, confront me? Believe in God, and work on. What if I be denied at home among these people? Believe in God, and work on.

Let us have faith. Let there be personal consecration to God's work wherever it may be found.

A true woman's soul of England has sung the purpose of my life in a well known hymn beginning:

"Tell it out among the heathen that the Lord is King!" etc.

Rev. A. C. Whitmer, as pastor of the congregation, then, with much feeling delivered the following words of farewell to the missionary:

My Dear Brother:— You have now been set apart to the holy ministry, and you have received the solemn charge and service of foreign mission work. To this ordination and installation service it has seemed proper to add also a farewell word.

You are soon to sail for your foreign home, and we want in this public way to bid you God-speed.

This congregation, the Classis of West Susquehanna, the Synod of the United States, join in this tender act.

In this congregation you were born, baptized, nurtured, confirmed; and from this body as a tender boy nine years ago, you went out to study for the holy ministry. This congregation, therefore, must always feel the deepest interest in you personally, and will follow you in your sacred work with earnest prayers. And now, as their pastor, in the name of this people, I bid you an affectionate farewell.

Classis, a committee was appointed by the Classis to ordain him to the Gospel ministry. This committee consisted of Revs. A. C. Whitmer, R. L. Gerhart and T. R. Dietz. This committee and the Executive Committee of the Board of Commissioners of Foreign Missions had charge of the services. After a voluntary by the choir, the services were opened with an invocation, reading of the Scriptures, and the announcement of a hymn by Rev. R. L. Gerhart. The sermon was preached by Rev. T. S. Johnston, D. D., Secretary of the Board of Foreign Missions, based on the words—Romans 10:12.

The candidate then presented himself before the altar and with great solemnity the services of ordination proceeded, conducted by Rev. A. C. Whitmer. The answers of the brother to the momentous questions were given with much feeling and earnestness. Rev. D. Van Horne, D. D., President of the Board of Commissioners of Foreign Missions, then commissioned the now ordained missionary to the work of the Church in Japan.

The new missionary followed with an address, of which the following is a brief synopsis:

Fathers, Brethren, Friends:— This altar of the Reformed Church in Mifflinburg has a threefold sacredness for me. Here in infancy I was baptized—given unto the Lord by my parents. Here, in boyhood, I sought and found our Lord and Saviour Jesus Christ and was confirmed. And now you have seen me ordained and installed as a foreign missionary. Truly these three scenes in my life's history will ever present to my memory the sweetest and holiest recollections. From yonder land of my foreign mission work I shall return, now and then, in thought and fancy to this endeared shrine.

I now stand upon the threshold of my life's work. I stand here, but not alone. I remember the promise, "Lo, I am with you always, even unto the end of the world." I am going forth, not in my own strength, but in the power of the Master. I forget my weakness in the consciousness that back of me is the whole Reformed Church. And what a force this is. Think of the missionary interest, love and zeal of our people. During the past summer I have seen an encouraging spirit of missions, and our faithful secretary, with some years of experience, will also gladly testify to this. Our people are ready for the work, willing to bring what they can to the treasury of the Lord. But a great work is yet to be done. These currents of missionary enthusiasm must be directed into proper channels of Christian activity. And just here, Fathers and Brethren, allow me a few words, plain yet not to find

Chicago, and professor of Sacred Rhetoric and Pastoral Theology in the Presbyterian Seminary in the North West, fathers the purest earthly inspiration of the convention. He is very able, logical, eloquent, impressive by reason of his great earnestness; tall, fine in appearance, grayish. In him is vital the highest meaning of work. Dr. Hartranft, Hartford, Conn., resembles in bearing his relative, Ex-Governor Hartranft, of our own Keystone. The Dr. is an able thinker and a powerful speaker.

At the new and lesser lights appear,—the Seminary representatives on the programme. Donald Grant, Rochester Seminary, Baptist, presents his subject in a clear, moderate and sound way. He is young; strong in thought, modest, but effective in his delivery. David B. Schneder, Lancaster Seminary, Reformed puts his whole soul into his paper. His young person quivers as of intense earnestness. His glows a mind of promise and spirituality. F. P. Witherspoon, Cumberland University, President, a tall and elderly man, advances good thoughts. E. L. Houghton, Andover Seminary, Congregationalist, also an elderly man, of medium growth, sweeps by in a logical haste. B. D. Gray, South Baptist Seminary, is a tall young man and modest, writes plainly and with effect. N. W. Clark, Drew Seminary, Methodist, has racy, stirring, wellchosen language, and is a young man of ability. C. B. Riggs, Lane Seminary, President, closes the onward flow of representative talent. He is clear, ornate in thought, and speaks effectively.

I have read this leaf of hearts—two pages from the great book of human life. It is infinite in its suggestions, beautiful with its knowledge of Christ, and inspired for the cause of missions.

(*The Messenger*, November 29, 1882)

18. W. E. ホーイの宣教師任職式(1885年10月15日)

ORDINATION AND COMMISSIONING OF REV. W. E. HOY
AS MISSIONARY TO JAPAN

This most interesting and solemn service took place during the sessions of the Synod of the United States, just held at Mifflinburg, on Thursday evening, the 15th inst. The programme as reported by the Committee on Religious Services was carried out in every particular.

The young brother having been examined and licensed by the West Susquehanna

Who are these students so manfully discussing the cause of missions? Whence have they come? What points of merit find me connected with their characters? Well, let me take a seat on the speaker's platform, and look out upon the leaf of written hearts. What is the first line recorded thereon? This: students from New England, active, energetic, telling in debate. Read on and on. Those from the Middle States, more powerful, liberal, pervaded by a deeper piety. From the South, less active, but generous and sincere. From the West, enterprising, watchful, though less internal than external. From Canada, of whom there are two, earnest, steady, dignified. I read that all these partake of the characteristics of the sections from which they come.

In intellectuality Union, Yale and Princeton probably stand in the front. As to system of religious thought, Lancaster ranks high, and holds a proud position with modesty and blushes of conscious worth reserved.

A large proportion of these students are well up in age. The older ones come largely from the South and middle West. The cultivation of the beard is pretty generally observed.

I read more eagerly as I trace the line of returned missionaries. These men bear the marks of a hallowed manhood. They are impressive and magnetic by reason of their evident self-consecration. Dr. J. F. Smith, a missionary from Turkey, professor in Theological Seminary there, seems to be wearing himself out for his cause. He is full of zeal, longing to influence others to take up the work. Rev. Thos. Craven, missionary in India, stands before me. His speech, rolling outward in tones of easy, hopeful earnestness, influences with a kingly command; for the man is of royal appearance. Rev. Blodget, Peking, China, holds in his grasp the scroll of twenty-six years of missionary labor. His is a tall, dignified, strongly intellectual, sweetly spiritual bearing. He argues calmly but powerfully for the mission cause. Another, though long in the work, is still enthusiastic, marked with a warmth that has become lasting in him, in the face of the stern realities of the missionary work.

And now I see the greater lights quietly shining on domestic fields. Dr. Geo. C. Lorimer, Chicago, speaks his poetic words of welcome. His manner is pleasing, open, full of eloquence. T. Edwin Brown, Providence, R. I., offers encouragement to the young men. Words of history and philosophy become his leading thoughts. Dr. Payne, President of Wesleyan College, Delaware, Ohio, is a smooth writer and pleasant speaker. Herrick Johnson, pastor of Christ Reformed Episcopal Church,

may be poured out upon their people, and the whole country be won for God and His Christ, our Saviour. And who doubts that the prayer of faith of these people for the conversion of their countrymen is not heard and answered by the Lord of hosts? We have evidence of this already. Yours in Christ,

J. P. Moore

(*The Messenger*, July 2, 1884)

17. W. E. ホーイ 「全米神学校外国伝道協議会報告」(1882年10月26日～29日)

OF THE INTER-SEMINARY ALLIANCE CHARACTER STUDY

By Wm. E. Hoy, of the Theological Seminary, Lancaster, Pa.

The Alliance is in session. I listen to the first impulse of my soul, and study the scene before me. I look upon life; feel its beauty, its warmth, its light; bring virtue, goodness, spirit of peace to my mind; think of the sentiment of divine love pervading the whole assembly; gather the fruit of holy intercourse between man and man; and rejoice in the bright and easy strength that flows before me like a full river in the sunshine of fraternal feeling. It is a view of promise, a paradise set out with the bloom of youth and refreshed by the fountains of age. Heart beats unto heart a quickening inspiration. Soul answers soul in the world of prophecy. Spirit joins spirit in creative exercise of song. I stand before a mighty deep, and cannot fathom it. What an intense joy it is to live in !

A sweet, natural, affecting enthusiasm courses through this band of men. Four hundred students, and a number of missionaries and clergymen—what of them ? What of the single purpose that moves their being ? What of the truth set forth in the kindled eye, or in the thrilling voice ? What mean the zeal, the fervor, the earnestness, running through familiar words? Watch these men. Watch them in their tender communications, and reach the depths of spiritual life. This is not intellect, nor genius, nor rhetoric; but an inward experience grounded in the gospel of Jesus Christ. To rouse, to quicken a love of the human soul, a sympathy with its fall, and a desire for its redemption, is the end of these men. It is their life in life.

This convention, free from the noise and tumult of the great city without, is impressive. The world in which it is engaged is that of the spirit. It is of striking interest, and awakens thought and inquiry.

The congregation was organized with fifteen adults and five children. Six adults and three children were, on account of close proximity and for other reasons, transferred to us from the Presbyterian church. The others consisted of those baptized and confirmed by Mr. Gring. Our Communion yesterday was a solemn feast, and will not so soon be forgotten by the missionaries and the people who took part and were present. First the missionaries communed. Then the elder and deacon by themselves. Then our wives and the rest of the congregation, sixteen in all, surrounded the altar and commemorated the dying love of our dear Lord and Saviour. Bro. Gring and the elder both made addresses on the nature and true observance of the Lord's Supper. Then the services, just as we have them at home, only that they were in the Japanese language, were gone through with. We felt the presence and power of the Holy Ghost in our midst. These people, though but so recently taught the way of Jesus, felt, it was evident, the presence of the Lord in this holy sacrament, and received, no doubt, a sacramental blessing in this, to many of them, their first observance of the Lord's Supper.

A collection, amounting to one yen and sixty-seven sen, equal to about \$1.50 in American money, was taken and placed upon the altar. But for the strange language and the strange appearance of the people, we observed an old-fashioned Reformed Communion, such as you and I, dear reader, have often been permitted to enjoy, and which we found so refreshing to our souls. I would say that Mr. Gring has already under instructions another catechetical class of some seven or eight persons, most of whom, if not all, are looking forward to baptism. Four of this number are young men, who come to our house and receive instruction in English from Mrs. Moore and myself. These young men are the fruits of Mrs. M.'s labors, since it is that through her efforts they became pupils of ours, and mainly through her influence that they were induced to become members of Bro. Gring's class.

In conclusion, I would say that devotional exercises are held every morning at our school from 8.30 to 9, conducted by the natives. And what is the most remarkable of all, is that six young men, several already members of the church, the others as yet not members, are holding a prayer-meeting every morning at 4.30 o'clock. They have chosen this unseasonable (unseasonable to us) hour in order that it may not interfere with their work and the work of the school. These young men pray not only for themselves, but that the Lord may come and convert their relations, friends and the people of the community.

The Christian people of Japan are crying mightily unto God that the Holy Spirit

organize a congregation and celebrate the Communion of the Lord's Supper. The programme was, however, of necessity changed. Bro. Gring, with the help of his teacher, has been translating the services, as given in our Liturgies, into the Japanese language. And, as he could not conveniently translate more than one of these services in a week, it became necessary to employ three Sundays, instead of one or two. Hence, on May 4th a baptismal service was held, on which occasion two children, the mother of whom was confirmed on the previous Sunday, were baptized. The following Sunday, May 11th, we effected an organization by the ordination and installation of an elder and deacon. And yesterday, May 18th, we observed the celebration of the Lord's Supper. The Japanese also fully approved of this plan, saying that it would be more pleasant to them, and would have a better effect than by crowding the service into one day. These people are in the habit of doing things slowly, so that a driving, hasty American is very apt to lose his patience over the slow rate at which things generally move on this side of the world.

I spoke of the solemnity which characterized our confirmation and adult baptismal service. I can only say that the other services were alike impressive and solemn. To have Japanese parents bring their children to a Christian altar and, in the act of holy baptism, present them to the Saviour and consecrate them to His service, promising to bring them up in the nurture and admonition of the Lord, is indeed a solemn and interesting sight.

One of the children as a little boy about six years of age, and his conduct during the service was more like that of a man than a child. He seemed to enter into the service almost as fully and devoutly as his parents, and at the conclusion, came forward and extended his hand to be welcomed into our midst.

Our elder and deacon are Mr. "Sudyuki," and "Ariah." The former was Mr. Gring's, and, for a while, my teacher. He had been a member of the Presbyterian Church, one of the first Christians in Tokio, and has, at the hands of his relatives, suffered not a little persecution on account of his Christian faith. The deacon is the old Chinese teacher of whom I spoke. His hair is almost snowy white. Both are men of intelligence and faith, capable of leading in public prayer, and taking part in the services of the sanctuary. According to the custom of the Church, they were set apart and inducted into their offices by the laying on of the hands of the minister. Being men of intelligence, faith and prayer, we believe they will adorn their offices, and prove of great service to the Church.

necessary funds for the purpose of erecting a suitable building, and furnishing it with needed apparatus.”

“Such a school would tend, perhaps, more than anything else to establish our church here. The Presbyterians, Methodists, Episcopalians, Congregationalists, Dutch Reformed and others, all have their boys’ and girls’ schools, and through them they are doing their best work. They are on the right track and we must do something of the kind too, or be swallowed up. The Japanese are thirsting for Western knowledge, and it will be by this means that the most influential among them will be brought to Christ. The poor must have the Gospel too, but they can be most readily reached and benefited through instruction also. I believe you would do well to make this matter prominent in your sermons and addresses, and solicit funds to be sent to the treasurer for this purpose.”

To which we only add that collections, and other contributions, in private donations or bequests, will be thankfully received by the treasurer, Rudolph F. Kelker, Harrisburg, Pa., who will, for this purpose, open a separate department as a *Building Fund*. All donations for this object should be so designated by the sender, and should not take the place of regular contributions for the support of the missionaries. It should be understood that the building would contain a chapel, as well as school-rooms, in which for a time at least, religious services could be held on the sabbath.

(*The Messenger*, June 20, 1883)

16. J. P. モール書簡(ジョンストン宛 1884年5月19日)

ORGANIZATION OF A REFORMED CHURCH—FIRST COMMUNION

The pastors of the Church are respectfully requested to read the following letter from Rev. J. P. Moore to their congregations, that the whole Church may know what the Lord is doing for us in Japan. His blessing is evidently with the work, and this should encourage us to do our duty, that all may have part in extending His kingdom in the “land of the rising sun.” T. S. Johnston, *Secretary*.

No. 4 Tsukji, Tokio, Japan, May 19th, 1884.

Dear Doctor:— In my last letter I gave you an account of our first confirmation and baptismal service, stating that we would, on the following Sunday, May 4th,

(26)

in human life and intercourse, yet in the light of subsequent events seem like a strange prophecy.

This is the way I was spared and led by the Lord, and finally, brought to a decision to go as a missionary to Japan. And now after forty years have passed over my head, I have great reason for believing that my going was according to the purpose and will of Him whose servant I have been, and whose work, though so imperfectly, I have been doing.

(Moore, Jairus P., *Forty Years in Japan, 1883—1923*, pp. 15-20.)

15. 「我々は日本に教育機関を持つべきか」(1883年6月20日)

SHALL WE HAVE AN EDUCATIONAL INSTITUTION IN JAPAN ?

Now that we are about to send forth the Rev. J. P. Moore and wife, our second missionary family to Japan, the question suggests itself, "What feature of the work should we emphasize ?" It is well known that there are different directions in which missionary efforts may be extended. We may look forward to the general work of preaching in streets, or in dwellings, hoping thus to influence at once the adult population; or we may make special effort in the way of the printing of papers, tracts and books, with a view of spreading abroad the truth in all the land in the shape of Christian literature. In both these forms of labor, Missionary Gring has already manifested commendable zeal and energy. What seems most suitable as an objective point in our foreign mission work at present, however, is well suggested in a private letter from the missionary already in the field to the brother who is so soon to join him in Tokio, and to whom he advances a hearty welcome. The suggestion relates to the founding of an Educational Institution, of which the little school near the central bridge in Tokio, already existing, may be the worthy beginning. The Reformed church has always honored education as the hand-maid of true religion. And the missionary elect is an experienced teacher in the languages, speaking the German with ease and fluency, and hence is well qualified to enter upon this feature of the work.

The letter, to which allusion has been made, runs as follows: "We must have some place in which to educate the young of both sexes, whom we hope to influence during the progress of our work. Perhaps in your tour through the church you may get the promise of some one or more individuals to advance the

me to go.

After some time had elapsed, a time during which I indulged in serious thought as to what was my duty; whether I should offer myself to the Board as an applicant or not, I decided that I would have a serious talk with my wife, and then decide the matter one way or the other. I presented to her the "pros and cons" of the case. I asked her whether she had really and truly, *prayerfully*, thought on the subject. Whether she had counted the cost for herself. Was she sure in her own mind that it was the right, the best thing, for her to go as a missionary to Japan? Her answer was, "Yes." Then I said, "What would you think if I were to offer myself to the Board of Foreign Missions?" And her answer was, "I should be delighted, if you think it best." My reply was, "The thing is done. I shall write at once both to Dr. Thomas S. Johnston, of Lebanon, Pa., who is the Secretary, and, also to Dr. David Van Horne, of Philadelphia, the President of the Board, and make application to be sent to Japan."

As I now look back, over more than forty years of my missionary life, and think of what went before; how my life had been spared when, as a very small child, I had been exposed to a great danger and saved in a remarkable way, it seems that the Lord must have saved me for this special work which I have been doing during these forty years. The event to which I am referring was, that when two years old I fell through the trapdoor in the floor of a well, forty feet deep; but with my tiny hands, I held on to the planks until my aunt, who was near by, lifted me out of the danger. That same aunt, who was a Moravian, and who at the time of my appointment was a very old woman, as I went to say good-bye to her, said: "Now, I know the Lord saved you from drowning as a child in order that you might do this work for Him in Japan."

There is another strange coincidence which I cannot help to mention in this connection, and which seems, as I think of it, almost like a prophecy of what my future life work was to be. At the time of my ordination and installation as pastor of the Millersville charge, my first and only pastoral charge, the Rev. Dr. E. V. Gerhart, Prof. of Dogmatic Theology in the Theological Seminary at Lancaster, Pa., preached the Ordination sermon based on the text, Galatians, First chapter and Fifteenth and Sixteenth verses—"But when it pleased God who separated me from my mother's womb, and called me by His grace, to reveal His Son in me that I might preach Him among the *heathen*, immediately I consulted not with flesh and blood." It was simply one of those strange coincidences which so frequently occur

experiences of the great missionaries such as Carey, Judson, Brainerd, and others.

Rev. Mr. and Mrs. Gring left for Japan in the spring of 1879, arriving there in May. And the Church rejoiced that now for the first time it had a missionary, under the care of its own Board, in the foreign field. Our Reformed Church did foreign mission work previous to that time; but not under its own direction. The missionaries who had gone out from our Church were under the care of the American Board, and the money contributed for foreign missions by the Church, was paid into the treasury of that Board; so that Rev. Mr. Gring was really the first one sent out and supported by the Church under its own Board.

After Mr. Gring had been on the field for a year and a half, or two, there was a call for a second missionary family. This call, as it was repeated in the Church papers, went a-begging for many months. When it was, in this way, brought to our notice many a time, my wife would say, "Why don't you respond?" to which I would reply, "You are not strong enough to go as a missionary to a heathen country;" "besides you would not want to leave your father, mother and sisters." But she was always of the same mind.

The kind of man the Board was looking for was one who was married, had some experience as a pastor in the home field, and not having a large family. So far as these conditions were concerned, we seemed to fill them. I was married, had five years' experience as a pastor, and no children. And, furthermore, my wife, as already observed, was enthusiastic about going; but the man in the case was not yet converted to the idea.

However, the seed which had been sown was not dead. There was a living germ which as the sequel shows, in due time, began to show signs of life and finally rooted, sprouted, and brought forth fruit. I began to think seriously on the subject. I asked myself the question, am I really fitted for such an undertaking? Is it right for me to leave my pastoral work, a work that I loved? Could I leave country, home and friends and go to far-away Japan? After all, is my wife strong enough for such a task? Is it right for me to take her?

Some time early in the spring of 1883, I received a letter from one of my college-mates, who had also been a room-mate of mine. In his letter, among other things, he said, "I wonder who will be our next missionary to Japan?" "Surely the Lord has His eye on some one. Have you ever thought that it might be you?" "You have a wife who is suitable, and you have no children." That letter gripped me. It seemed like a voice from another sphere calling me, pointing the right way for

so were the men who were present, twelve in all. It was indeed enjoyable labor. I explained to them who God, Christ and Satan were, and what Heaven is. We were both very much pleased with our first Sunday-school. I must close now though I have more to say. Yours in Christ,

A. D. Gring
(The Messenger, August 23, 1882)

14. J. P. モール「余はいかにして宣教師となりしや」(1925年)

HOW I WAS LED TO BECOME A MISSIONARY

I cannot say that I was born a missionary. The idea did not possess me from the time of my youth. Neither before I entered College, while at College, nor in the Theological Seminary; nor even after I first entered the ministry and became a pastor, had I any such idea as going to the Foreign Field.

At the meeting of the Eastern Synod of the Reformed Church at Easton, Pa., in the fall of 1878, the first missionary, the Rev. Ambrose D. Gring, was ordained and commissioned as missionary to Japan. With my wife I was present at that meeting, and we were both much impressed. Mr. Gring had been a college-mate of mine at Franklin and Marshall College, Lancaster, Pa., and a member of the same Literary Society, so that I knew him well. That he and his young wife should be willing to go to Japan and be so enthusiastic about it, as his speech at the time indicated, aroused my interest and sympathy so much that before we parted, I invited him and Mrs. Gring to visit us at Millersville, Pa., where I was Pastor at that time.

It was on a weekday that they came to see us and, therefore, they had no opportunity to appear before my people; but they remained over two days and, as a matter of course, the principal topic of conversation was Japan. I remember that either Mr. Gring or Mrs. Gring said, at the time of parting, "Perhaps you will some day come to Japan;" upon which my wife replied, "I am ready;" but I simply laughed at the idea, thinking it more of a joke than anything else.

This leads me to say that Mrs. Moore from the time of her girlhood seemed interested in Foreign Missions, and had the desire of being a missionary. I heard her say that as a member of the Sunday School of the First Presbyterian Church, Lancaster, Pa., she was fond of reading books which told the story of the lives and

waiting a little while we sang a hymn and offered prayer. Then we sang again, my teacher read a portion of the word of God, then we sang again, and then I began to preach. There were twelve present, men, women and children. None of these had ever heard the Gospel before. When I began to read my sermon they seemed to be trying to find the place in their hymn books. Poor people! I pitied them very much. I went on through very calmly, and was very much delighted for the privilege of preaching the Gospel to these people in their own language. The pleasure I experienced in my own soul while preaching the first sermon, seemed to compensate me for all the previous sacrifices and labors I had made. I am sure did our young men at home know the joy of preaching the Gospel to a people for the first time in their own language, there would be numbers of them giving the Board and Church no rest until they were sent to the heathen. I can conceive of no greater pleasure than that of teaching the heathen to worship the God who made them and the Saviour who redeemed them. After my sermon we sang again, and then my teacher took up the line of thought and spoke very nicely to them about the Gospel, and that this was the first day of our opening. He then closed with prayer, after which we sang again, and then we announced that there would be preaching here every Sunday, and also Sunday-school, after which we left, much encouraged indeed. My teacher remained to have a private talk with some people there in the neighborhood. We started with closed doors. We did not advertise it, for the reason that we wanted to have a better chance to work on a few at first. It was made known by the old man, and those who were there were from the immediate neighborhood.

Last Sunday we had another wet day, but we went and had audience of twenty, and very attentive. I preached without manuscript. I found that I could interest the people more. I enjoyed talking to them of the Saviour of the world as my theme. We had a very pleasant service, and I know they were benefited. In the afternoon we returned to begin Sunday-school, and when we came to the place we heard children sing, and when we opened the sliding doors, there were five children with my teacher and his wife singing. We entered and soon begin to sing, and had a prayer, then singing again. After this I began to teach them the first question and answer of the Heidelberg Catechism which I had written in Chinese on a black-board. I read it over once with them, and then had them to read it again and again until they had it committed. I then sang a stanza of a hymn two or three times and then went back to the question on the board. They were very much pleased and

which make quite a respectable room. The floor of these rooms is covered with straw mats, which I bought. The people at the entrance have a place to put their shoes, and then sit on the mats, with their feet under them. I pay about \$1.75 a month for rent, then I secured the mats, and paid \$3.50 binding money. The day after we both went up to get everything fixed. When we came to the house, we met the people as usual, and taking off our shoes, we were taken to a back room, and there we and the old man squatted on the mats, and presently in comes the daughter with tea on a tray, and then we all took tea, and then, as is the rule, they had a smoke. After this we had a little talk, and finally concluded the bargain. The old man brought in a paper after waiting a long while, and then the teacher laid it before me and read it, to which I agreed, and this he returned and put his seal to it, and just as he handed me the paper, I handed him the money. I also gave him fifty cents extra for sending around to the immediate neighbors a little dainty with my compliments. This is the custom for when any one moves into the neighborhood they issue out some little dainty to the neighbors. I was glad to comply with this, and it pleased the old man very much. After this we soon left for home again.

The next step in order was to get the necessary furniture, such as two chairs, desk, lamps, hymn books, Bibles, maps and blackboard. These I secured very easily, and in a few days all that was needed to begin was a sermon. I began on Monday morning with this, trying to carry on regular studies, also I suppose you wonder how I proceeded. Well, I wanted to give them first of all some idea of a one, true God. So I sat down and wrote it off first in English, then I translated it into Japanese, and after I had this done I called on my teacher to correct it. Then he wrote it in Chinese, and I copied it with a Japanese brush, on Japanese paper, and this was my manuscript, which I took to church on Sunday and read to my audience. I first announced the fact of a one, true God, but did not try to prove it. I then proceeded to tell them that all things were made by Him, and that He is the only God to be worshiped, that the idols could not help them in anyway, but God, who is all powerful, could.

During the week I had taken a severe cold, and when Sunday came it seemed to be worse. It also rained very much, but we went. Mrs. Gring went along to help with the singing. We took a double rikisha and started off in the rain, and when we got there, my teacher was there to welcome us with his smiling face. Presently in came the daughter of the house with tea, and presented her good wishes. After

(20)

Along with my preparation in the language there was another preparation going forward, and that a spiritual preparation, which is of prime importance. The Lord, I hope, has fitted me to endure in his service now what would have been hard to endure before, and in many things has opened my eyes. My whole heart is in the work, and I pray Him to make me a useful instrument in His hands to lead many to Himself.

I also hope from this time forward to do more for the people at home, by way of information of various kinds.

I have kept the property in good repair and find the experience of others true—that there is always something to be looked after and fixed. We suffer from bad workmen who have never learned their trades.

I have been able to do some work in the way of Scripture leaflets. I have distributed some 15,000, and my experience is such as to greatly encourage me in this line of work. I shall always use the printing press to aid me in my work; I could not do without it.

During the year the Lord has been gracious to us and kept us from sickness and harm, and our home in safety from earthquake and fire, for which we are most deeply grateful. Mrs. Gring has been very well; so have my son and myself.

We herewith return our thanks to the Board for the pleasant year we have passed, in which all our wants were met, and much encouragement given to us, and we assure the Board of our highest respect and love.

Yours, respectfully, in Christ,

Ambrose D. Gring
28 Tsukiji, Tokio, Japan.

13. A. D. グリング書簡(ジョンストン宛 1882年6月19日)

Mission House, Tokio, Japan, June 19th, 1882.

My Dear Doctor:— Between five and six o'clock in the morning of the first day of June, I made a circuit in the neighborhood of the place I intended to rent as my chapel. I was delighted with the quiet and neat appearance of things, and felt that I would have a splendid community to work on, where the people have more time to think of their spiritual interests. I came home with a determination to engage the place and so sent my teacher up to engage it. The house has two small rooms on the first floor and one on the second, These two rooms are thrown together,

endless variety of characters and style found in the language, and most of all, I have learned to be very humble when I speak of the language.

I hope when our helpers come on they will find many things at hand, and that they will be able in three years to accomplish much more than I have because of the assistance that I shall be able to give them. I am confident that I can save them a year's time, and that I can give them in a few lessons what cost me six months' work. I mean, if it will be agreeable to the persons, to give them a part of my time during their first year. It has always appeared to me to be a great waste of time and money that the younger missionaries should not have the direction of their older brethren at least for the first year, and in this way save much worry and labor, which is unnecessarily repeated by every new comer under the present system. The person you send will find a nice little library, belonging to the Church, of all the helps that are to be obtained, and some that cannot be now obtained, ready for his use. I have had my helper in view during my studies, and have preserved in writing what I thought would be helpful to him. I hope when he comes, and we are looking for him now, he will find as much pleasure in the study of the language as I have had, and still have, and I know we shall be very helpful to each other. I have felt a great want of companionship in my studies, as well as in other respects. Our loneliness at times is very deeply felt, and I hope and pray the Church to send us help.

I cannot refrain from returning my heartfelt gratitude—first, to Almighty God, and second, to the Board and Church—for the privilege and benefit of making this preliminary preparation for my work. I can now begin much more wisely, and will be likely to keep clear of breakers which I should have come upon had I begun sooner. I mean now to set to work, exercising my ministry wherever I shall find an opportunity prepared. I am exceedingly anxious to set to work. It has been a severe trial to remain silent so long, but I did it that I might be made more useful in after life, and I believe I shall be more useful because of this waiting. I can assure you that he who has the power to wait in hard study for three years, among heathen, before attempting any work, passes through an ordeal which is bound to fit him for many other harder things. I shall be delighted now to set out on Christian work of various kinds, as the work must necessarily be in the beginning. Just what form this work is to take I am not now able to say. This much I am sure of, that there is here a great harvest of souls to be reaped for the Church by him whom the Lord chooses.

teachers set apart for this work only. If the Church would like to have a school here to complement her work, she must not call upon me to conduct it, but must send a man out especially for that purpose, with the distinct understanding that he need not trouble himself about the language, and this will give him time to make the school a success.

Before we left America I had determined to spend three solid years in laying a foundation for my future work, if God so willed. I reasoned that if the Church at home thought it proper and necessary for her ministers to study four years at college, and three years at the seminary, after years of previous schooling, before entering the ministry among their own people, and in their native tongue, certainly she will not think it too long a time to study three years before attempting to minister the things of God to a HEATHEN FOREIGN PEOPLE and in a FOREIGN TONGUE.

When we arrived in Japan my determination was strengthened by the complaints and advice of the missionary brethren here; some complaining that they were driven to work before they were ready by the Church at home, and others advising me not to repeat their mistakes, but take plenty of time to prepare for work, and now I have to say that, by the providence of God, the consent of the Board, and the patience of the Church, I have finished my three years of very delightful and profitable study, and I am sure that this procedure has won for the Board and Church respect, which I hope may be deepened by what is to follow.

This three years' preparation is to me what every minister must feel his college and seminary course to be to him. I feel as I did when I left college and seminary. Those who have passed through these institutions know what that feeling is. It is certainly not with a feeling that we have acquired all that is to be acquired. It is certainly not with a consciousness that we are very wise and have mastered all that there is or ought to be mastered. No, every true student leaves his school days with feelings far different from these—he feels that he has only begun.

I say modestly that I have during these three years acquired some knowledge of the Japanese language, though it is not without the deep sense of a clear conviction that my knowledge is that of a beginner. I know something of the spoken and written language; I know something of the difficulties and intricacies of the language; I know something of the people among whom I am to labor—their character, cast of mind, and their needs. I am able to hold a limited conversation on most any subject; I can read the Bible with considerable comfort; I can read, by the aid of a dictionary, most any book; I have learned something of the almost

be willing to sacrifice the pleasure of studies in his own native and other languages.

The missionary who comes to the foreign field should have much useful knowledge stowed away in his mind, especially a knowledge of God and His Son. The work is so simple here, so primitive, that one who has had years of careful instruction at home, need gather very little more; but his greatest labor will consist in mastering the language so far as to be able to teach understandingly what he already knows, and to do this effectively will consume most of his time. The great and first thing for us to do is to make these people CHRISTIANS. There is not so much need of secular instruction as there is for decidedly Christian instruction. It is one thing to make a man a Christian, and it is another thing to make a man a scholar, and to lead a man to Christ by first teaching him the Western sciences is a long way around, and by no means a sure way. Very few are troubled with scientific difficulties, and those who are are rather difficult subjects, and we had better apply ourselves to those who are not troubled in this way.

The kind of work most needed in Japan is hard and persistent teaching of the fundamental doctrines of our religion. The great truths of the Word of God are to be repeated again and again, until they have fastened on the mind and in the heart. Patient labor in teaching the simplest truths of our religion is more needed than great learning—I mean foreign learning—he cannot have too much native information. It is not so necessary that these people become learned in our Western sciences as it is necessary for them to be saved. I do not say that schools are useless; but that they are of secondary importance, though a most valuable adjunct to Christian labor, and should be conducted by Christian professors, who give themselves entirely to the work of teaching, and not burden themselves with the native language. I think if the Church could look out several Christian professors and send them out to begin an academy it would be an excellent support to the mission; but it does appear to me that the minister should give himself wholly to the ministration of the Word in the native language, and to do this well he will have himself constantly employed. Ministers to preach the pure Word, and Christian teachers to teach them truths of the sciences—the two should by all means be kept distinct, and this is easily done.

As a minister, ordained to preach the Gospel among the heathen, I cannot turn aside to teaching secular knowledge. I believe this knowledge is a great benefit to the Church here, and should go along with our preaching; but this must be done by

resting place, though we shall always remember the kindness shown us by others. We met many missionaries, saw many missionary homes, and saw the fruit of missionary labor in their little churches: but while we were glad that so much had already been done, yet we could not help feeling sorry that our Reformed Church had no part in the work.

When I first heard a native preach, the language seemed to me such a gabble that I thought to myself, "well, nothing but a great deal of grace from God, and hard study, long continued, can ever enable me to speak it." I had a few suggestions as to the different ways of study, but no helpful direction. Consequently the only way open to me was to prepare a way for myself. There is a great deal of solid pleasure, however, to enter the woods, and by your own will, and in your own way, begin to clear away the brushwood and trees and prepare the soil for more substantial and useful purposes.

I began with a determination, by the help of God, to gather all the useful information I could in the three years allotted me for my preparatory studies. I laid hands on all the useful helps I found prepared to aid me, and for three solid years, with scarce a week's vacation, I studied almost incessantly on some parts of the language. I was careful not to overwork myself, which is easily done here, but I gave all the strength I had to my studies. I was employed at my studies from early morning to nine in the evening, except a few hours daily for exercise. I denied my family much of my society, and absented myself from many a social gathering, that I might find time to study. My other studies and reading were almost entirely abandoned; my papers, many of them, were left unopened, and my letters laid aside until I had time to read them.

One of the first things I discovered to be necessary to the acquisition of this language is INTENSE APPLICATION. The entire language—words, construction, thought, and form—is so entirely foreign to the Western mind, that nothing but the grace of God, and long, careful and constant application of the mind to it can make it our own. To give two or three hours a day to it is not enough, and he who wishes to make himself competent in this language must be willing to give his whole time and strength to it, and to sacrifice other studies. It is beyond question that he who is best furnished in the language has the largest field of usefulness open to him. Our usefulness is largely in proportion to our ability to make ourselves understood, and the missionary who wishes to be of the greatest service to his Master in Japan, must be willing not only to sacrifice the pleasures of his native land, but must also

had long thirsted for. I have my heart set upon him, and I believe that God is going to bring him out into the light of His dear Son, by the Holy Spirit, through the study of His Word. After a short time, I shall have him more under my influence; for he will be here on the place as soon as his room is fixed, which is now in process. I consider it a great blessing from God, that He permits me to labor for Him through my own tongue, while we are preparing ourselves to labor for Him in the *native* tongue. I hope to make him a good earnest Christian, and a staunch Reformer,—a *Reformer indeed*.

We are both very well, and much pleased with the country, and like the people. We also are delighted with the study of the language, which, though difficult, yet can be acquired by steady perseverance. We have quite a number of sentences, and a small vocabulary, and can make the servants understand very well. The language is quite musical when nicely spoken, very simple in construction, with very few rules. A good memory is one of the finest assistants to the acquiring of this language.

There is a great field for usefulness here. The large majority of the people have no religion, and Christianity may take these, if she will. There is very little opposition on the part of the people; for they do not have anything to stand on, and are easily led to consider the Christian religion. Oh that the Church might now come in and take Japan for Christ! It is an open field.

(*The Messenger*, September 24, 1879)

12. A. D. グリングの年次報告書(1882年6月1日)

Mission House, Tsukiji, Tokio, Japan, June 1st, 1882.

Dear Fathers and Brethren of the Board of Commissioners for Foreign Missions of the Reformed Church in the United States:

I have now finished my preparatory studies, reaching over a period of three years. I can honestly say that I never labored harder—never studied with so keen a relish, never studied one thing so constantly, and never loved anything better than the strangeness and difficulties of this language. I have honestly and conscientiously, for the sake of others who are to follow me, and my own sake, tried to lay for myself a solid foundation.

When we arrived in Japan everything was new and strange. For us, as missionaries of the Reformed Church, there was nothing prepared, not even a

11. A. D. グリリング書簡(ジョンストン宛 1879年8月11日)

Yokohama, 45 Bluff, Japan, Aug. 11, 1879.

The last letter I wrote you was from Tokio, where we were then stopping with Rev. J. L. Amerman of the Dutch Church. We hoped to be able to settle there at once, but were unable, because we could not secure a house within the foreign concession. The next best thing was to come to Yokohama, eighteen miles south of Tokio, and begin our home here, and commence on the study of the language. It took us several weeks to do this, but now we have secured a suitable house, in a good location, and have succeeded in getting a good servant and wife, and a very good teacher. Our house is small, has only four rooms, a *bungalow*, and very convenient. I could have secured a larger house, but the rent would be considerably higher, and would require more to furnish it. As it is, I have found that a small house requires, after all, a good deal to furnish it. We are paying twenty-seven dollars per month, for the whole compound, servants' quarters and teacher's room. We are very nicely fixed now, and in good running order. Our teacher, a young man of twenty years, has been coming to the house every morning for several hours during the hot weather, but the last week has been sick more or less, and has given us but half of the time. We hope he will soon be well again; for we are both very anxious to get on as fast with the language as possible. He is a nice-looking Japanese, and has had the advantage of seven years' schooling in the University of Tokio, which is under the control of foreigners mainly. He is also a Chinese student, which will be very helpful, since there is so much Chinese mixed with the Japanese writing. He is of the Samurai rank,—two-sworded men,—which custom, of carrying two swords in their belt, around the waist, has been done away of late. He speaks the English language very well, which is a great help to us. He is, I am glad to say, anxious to learn about the Christian religion, and I have engaged with him to give him catechetical instruction. He generally comes once a week, and then on Sabbath afternoon to recite his questions and answers in the Heidelberg Catechism. He is a good student, recites both questions and answers, and generally at every lesson reviews the preceding lessons from the beginning. It is a delight to instruct him, and a more attentive listener I never had. Who can know the great pleasure of breaking the light for the first time to a heathen mind. I never get tired teaching him. He seems to drink it in as something that his soul

We have just come from another parting scene; very different from that which will take place at Reading, yet, in some respects, perhaps, more truly a *farewell* meeting than that. It was the farewell to home; the parting from friends near and dear. Very few in number were those who, on the 10th inst., were gathered together in an "upper room," in a town not far south of the Pennsylvania and Maryland line. There were but seven, in all ; the missionary and his wife; a mother and a sister; one who was as a sister, and two who were as brothers. The trunks were packed and at the door; a sense of loneliness and desolation seemed creeping over the house; when, by agreement, we came together to spend the last half hour in the peaceful enjoyment of each other's presence, in gazing upon each other's face for the last time, and in saying the last kind words. Very many were our thoughts; few, in comparison, were our words. Better than any speech of our own it was, to take refuge in God's Word and in the voice of prayer, commending our departing friends to the care of the Almighty and everywhere present God. There was no weak sentimentalism in the parting; but, rather, the natural and inevitable sorrow of it was prevailed over and transfigured by such a steadfast and hopeful gaze into the future and its work, as one would wish to see in friends going on noble errands into far-off lands. Yet, in truth, very sad in such a going away from home; and very tender is the parting of friends, who may see each other's faces no more; and we could not avoid thinking, on the present occasion, of that parting between St. Paul and his friends, which is described in the 20th chapter of Acts: "And when he had thus spoken, he kneeled down, and prayed with them all. And they all wept,—sorrowing most of all for the words which he spake, that they should see his face no more. And they accompanied him unto the ship."

So, farewell, beloved friends. So, go forth, my brother, thou long-desired standard-bearer for us of the Reformed Church, to lift aloft the standard of the gospel in a far-off heathen land. Our thoughts, our hopes, our prayers are all with thee. We remember the light that was in thine eye, and the look that was on thy face, when the last words were spoken, and the last grasp of the hand was given; they were the token to us of God's blessing upon the work. "Be strong and of good courage; be not afraid, neither be thou dismayed; for the Lord thy God is with thee whithersoever thou goest."

J. S. K.

(*The Messenger*, March 19, 1879)

(12)

some positive action. If there is nothing to be done, there is but little use in consuming the time of its members, and incurring useless expenditure. Its members are among the overworked men of the Church, and nothing but an earnest desire to establish our Church in a foreign field could induce them to engage in the duties imposed upon them by the General Synod.

Surely we may indulge the hope that their labor will not be in vain. Japan has been selected, every facility is at hand to "go up and possess." It is a splendid field, "ripe for the harvest." Any missionary from our Church would be welcomed with open arms, and would find congenial laborers, with whom he could associate, and from whom he would receive counsel and sympathy.

Is there not some one, who will offer his services to the Board? Some one in whose heart there is a burning love for souls? Some one who loves the Reformed Church sufficiently to lift her out of the rut in which she is hub deep, by going out at once, thus enabling her to fulfil her Lord's command, to go into all the world, and preach the gospel to every creature. If so, please apply at our next meeting.

T. S. Johnston

Sec. B. F. M.

(*The Messenger*, November 28, 1877)

10. A. D. グリング夫妻壮行の辞(1879年3月13日)

FAREWELL

Before this communication makes its appearance in the columns of *the Messenger*, the farewell missionary service, to be held at Reading, Pa., on the 13th inst., will be numbered with the events of the past. It is interesting to think of that significant and important occasion: of the vast assembly that will be gathered together there; of the strains of fervent thanksgiving and praise that will there ascend to Almighty God; of the earnest words that will be spoken; of the solemn prayers with which our Church will commend its departing missionary to the keeping of the Lord. On behalf of the many who long to be there, but cannot be there, except in spirit, we would say, may the blessing of God be upon this service! May it produce an impression that shall never be forgotten, and impart such a stimulus to our missionary zeal and activity, as shall constitute the commencement of a new era in the history of our work as a Church!

meeting at Fort Wayne it directed the Board to take into serious consideration again the matter of establishing such a mission. The Board has resolved to go forward. Japan has been selected, and a particular locality will be selected. *A man is now wanted.* We should suppose that such a call would receive a ready response. It is a great opportunity. If no young man in the Church responds to such a call, we would not be surprised if the other sex should come forward and offer to enter upon the work. In Japan, as well as in China, and the East generally, suitable women are needed to aid in teaching and laboring generally for the good of the female sex, which can be approached so little by the male sex, owing to the peculiar customs that prevail. The Methodist Church has quite a number of female workers in the field, supported by the Woman's Missionary Society.

We hope to hear soon that the efforts of the Board have been successful and that the Reformed Church has a mission established in Japan.

(*The Messenger*, December 1, 1875)

9—2 献身への呼びかけ(1877年11月28日)

For nearly six years the Board of Foreign Missions appointed by the General Synod, has been trying to establish a mission. Meetings have been held, and the subject earnestly discussed. Various plans have been resorted to, in order to awaken interest in the matter. Articles have been written, and appeals made through the press. In addition, personal appeals have been made to ministers throughout the Church. Up to the present moment there have been none to offer, who were qualified for the position.

Our position, as a Church, differs materially from other denominations in the fact, that we have sufficient funds on hand, to send out one or more, if necessary, to the "ends of the earth." While other treasuries are empty, and overdrawn, our's is full and "running over." Another point of difference is also very palpable; others have more candidates than they can possibly accept, and we cannot, out of all our young learned, zealous, and pious ministers, obtain one who will say, "Here am I. Send me." The last point of difference which strikes us, is that others are reaping vast benefits from their foreign missions in the way of reflex influences, stimulating their benevolent work in general, which we do not have, and in which we are woefully deficient.

The Board is called together on Dec. 3d, to consider the situation, and to take

(10)

It will be remembered, that, what little was done at the last General Synod, in regard to this subject, had special reference to Japan, as furnishing the most accessible and promising field for foreign missionary labor, to be entered by our Church. Is there not some meaning and force for our Church of more than an ordinary nature in the coincidence between that action and the present call? So it strikes us, and so, we believe, it will strike others, if they will allow their minds to dwell on the subject. Shall we then heed the call? Or will we turn a deaf ear to it, as something which does not specially concern us?

Should the latter alternative be chosen, we fear we may be made to reap the fruits of our neglect of duty, to our sorrow at home. If the former, however, be adopted and the Church enter upon the foreign work with becoming zeal and energy, the choicest blessings, we confidently believe, will most certainly be realized. They that water others shall be watered themselves. The reflex influence for good, it would exert, would be most powerful, and happy. We close with the question: Shall we, as a Church, heed the present call of Providence and come up to our duty as plainly indicated by it?

(*The Messenger*, December 23, 1874)

9. 日本伝道献身への訴え

9-1 伝道開始への呼びかけ(1875年12月1日)

Attention is hereby directed to the Circular issued by order of the General Board of Foreign Missions. The subject of establishing a foreign mission has been before the Church for some time. There can be no satisfactory reason given why the Reformed Church in the United States, a body numbering from a quarter to a half million souls, should not engage in the work of foreign missions. On the contrary, the commission, go ye into *all the world* and preach my gospel, is just as binding on us as a denomination as on any other.

The only question is, how shall we, as a Church, prosecute this work? Shall we give our contributions to aid some other denomination? That might be proper, if we were too small and weak to support a mission of our own. But how can we take that position, when we consider our numbers and wealth? The General Synod, however, has expressed its judgement on this subject. It has said, at two successive meetings, that we should have a mission of our own, and at its last

The benevolent originators of this association were most judicious in determining to approach as near as possible to the Chinese with the blessings of education in their hands, to offer for their reception. Here in the name of the Society would I stand; by all laudable means endeavoring to convince them of the value of these gifts, and in this service, I am ready to toil until I die.

〔後略〕

(*The Chinese Repository*, Vol. X, No. 10, October 1841)

8. 外国伝道活動への呼びかけ(1874年12月23日)

THE CALL TO FOREIGN MISSIONARY WORK

In our issue of the 9th instant, we published an unusually interesting communication from the Rev. F. Fox, of Napa, California, giving a brief history of the young Japanese, who was converted to Christianity in his family some years ago, and has returned to it again, after a visit to his native country. We had intended calling attention to it at the time, and were prevented from doing so, only by an unusual press of other matters. It has frequently recurred to us since it was published, and we cannot forbear giving to our readers some of the thoughts it has awakened in our mind.

Our Church has thus far done comparatively little in foreign missionary work. For years its duty in this direction has been talked of, and some little was done formerly, through the agency of the American Board of Commissioners for Foreign Missions, towards supporting the Mission at Broosa, under the care of the Rev. Dr. B. Schneider, and at the present time, some little is also done towards supporting the missionaries from our Church, who are laboring in India, under the auspices of the German Evangelical Missionary Society, located at New York.

It is felt, however, by many, that the Church has not come up to its full measure of duty in regard to the cause of foreign missions. It ought to have one or more missions in foreign countries, which it can call distinctively its own, and until this is the case, the Church can, in our judgment, never be properly enlisted in this particular kind of work. It has appeared to us, that the opening in Japan, indicated by the Japanese convert to whom we have referred, assumes the character of a special and significant call to our Church to come up to its duty in regard to foreign missions.

this Society educates, come directly from the country and from the people of China, under our influence, and are not expatriated by doing so. They come with the consent and approbation of their nearest friends, who are themselves a part of the nation, and in some measure pledged by this assent, to receive their children kindly when they return. There is therefore much more reason and hope that boys who have been trained in the Society's schools, will be less affected by the prejudices that have been alluded to, than those who have resided abroad, during the period of their education. The pupils taught here will also be less divested of their national character, feelings and tastes, than others who have long intermingled with people of other nations. A careful observer of the Chinese in the Straits is not long in discovering the traces of this effect of mingling with foreigners, which must of course become more distinct in course of time, and may operate as a tie to detain them where they are, or to diminish their influence with their countrymen, should they return home. We, however, are sure that all those whom we educate, *will* return to their own people, and be associated with them in after life, and while they will be improved (we hope) in many respects, they will still be *Chinese*.

But what most dissociates the Chinese colonists from the great mass of the nation, is the fact that their children in those situations, having foreign mothers, know almost nothing of the language of their fathers. I have seen a group of 30 boys or more, from the age of ten to thirteen or fourteen years, of whom only one could speak a word of Chinese beyond the names of a few of the most familiar objects. In general, this language is as foreign to them as it is to us, and if they ever learn it, they must do it in the same way that we do. It is essential to the success of this Society, sir, that the pupils in its schools should be thoroughly versed in their own literature; otherwise they can never transfuse into it the knowledge which they derive from foreign sources, nor can they be respected among a people, where extensive literary attainments are the only way to eminence and distinction. It seems to me almost impossible, in *ordinary circumstances*, that a boy born and brought up in a colony, should rise to a station of commanding influence in China. If he makes tolerable attainments in the dialect of his neighborhood he will do well.

I am sure that the members of this Society concur with me in the sentiment that the post for us is *here*; that our point of attack, all friendly as it is, should be in China itself and nowhere else.

exerting a silent steady influence upon those communities, slowly but surely elevating them in the scale of society, and lending their aid to the cause of Christianity. But as means of affecting this country, they ought not in my present judgment, much to be relied on. Many things concur to strengthen this opinion. The very relation of a colony to the mother-country is one of them. Who would think of bringing about any great revolution in England, by measures set on foot in New South Wales or the Canadas ? It were opposing one's self to a current of influence that always sets in the opposite direction. The colonies on the other hand, would soon feel the effect of changes wrought at home. The argument is still more applicable to the case in hand. The Chinese who go abroad, by that very act outlaw themselves. The communities they form in other lands are not reckoned as belonging to the empire, and have as little to do with the Chinese government as if they did not exist. Now, what, humanly speaking, can be expected of them, so perfectly isolated from the mass of their countrymen ? Not certainly, that they will do much to improve the condition of China.

But perhaps it may be said, that many of the colonists will return to their own country, and so renew their connection with this people, with all the advantages derived from a residence, and, it may be, an education in more enlightened parts of the world. Could this be expected, it would very much enhance the value of schools among them, as means of indirect benefit to China. But according to the best information I have been able to obtain on the subject, not more than three or four in a hundred of those who emigrate from this country ever return again, and some say even less. Is it not evident then that the major part of what is done for the education of the Chinese in foreign lands must be confined in its effects to the places where they sojourn, when so few of those whom these efforts can reach, find their way back again to the 'central land ?'

But allowing that more were to return, and with the best intentions to do good among their own people, they are marked at once as the men who have been among 'barbarians' to learn wisdom, and who now, most arrogantly and presumptuously in the estimation of the Chinese, would teach them the ethics and philosophy of 'outside' dwellers in darkness. Such, you are well aware, sir, is the regard of this people for those of other lands, and such would be the reception that any innovations from such a source would meet with.

It may perhaps be thought, that the same difficulty lies in the way of our exertions here. In kind, it is true, but not in degree. In the first place those whom

discharge of duties they have seen fit to assign to me, but still permit me to say that of thanks I deserve none. If I have done what I could to promote the interests of this Society, it was no more than I ought to do. Less could not have been expected, for "to him that knoweth to do good and doeth it not, to him it is sin." I on the other hand feel greatly obliged to the members of the Society for the liberal means they have furnished me to carry out their plan of operations.

In the reports that I have sent in to the committee of trustees, and from which extracts have been read in your hearing to-day, perhaps all that is necessary has been said respecting my labors in behalf of the Society. You there see what studies have principally engaged my attention, what course has been pursued in the school, and so far as results can be spoken of, what has been effected, how much gained, and how much lost. The last of these reports has likewise given me an opportunity to express my thanks to the trustees for leave of absence during the last summer. While the cause of the necessity to leave home was distressing, an opportunity was thereby afforded me, to make observations upon schools similar to our own in other places, which I should ever have wished to enjoy, as a means of furthering the ends of the Morrison Education Society; and I trust it will be found not only that the health of my family has been benefited, but that the facilities for prosecuting the business of education here have been increased. For both those results, I am directly indebted to the gentlemen in whose hands the management of the concerns of the Society is placed.

The state of the Chinese schools at Singapore and Malacca, has already been concisely laid before you. I will, therefore, only take this opportunity to express my conviction in regard to one matter but slightly touched upon before, and no longer interrupt the deliberations of the meeting.

It is not because it is new that I introduce the subject now, for it was one of the persuasions that led to the formation of this Society. It is this, sir, that the founders of the Morrison Education Society selected the best spot for the sphere of their operations, and that if we would hope to effect any great change in the system of education prevalent in China, it must mainly be done, by efforts made in China itself. I am far from wishing to discourage those benevolent persons who have undertaken to educate the Chinese in their colonies abroad. I have seen too many happy fruits of their labors, to indulge such a thought even if any *à priori* reasoning of my own had ever suggested it. The schools among the Chinese colonists are of great value to those for whom they were intended: they are

bered. Of the good deed of Mary, when she anointed the head and feet of the Saviour with the ointment of spikenard, the Lord remarks: Mark xiv. 9. "Verily I say unto you, wheresoever this gospel shall be preached throughout the whole world, this also that she has done shall be spoken of her for a memorial of her."

The Bible speaks of several women with great applause, in particular of the blessed Virgin Mary, of Elizabeth, of Anna, the prophetess, and of the Tyro-Phoenician woman. And how great will be the reward of female laborers, in the Kingdom of Christ, in the world to come, who have labored so faithfully for Christ in the heathen world as contributors or as missionary aids ! Should not the example of women, who are so zealous in the cause of Christ, animate us to labor for the propagation of the gospel in heathen lands ? Now is our time, not only to pray for the conversion of the heathen, but also to labor for this end, and to send missionaries amongst them. Let us work for them, whilst it is yet day. The night cometh, when we can not work any more. May our Missionary star soon rise in the heathen world !

D. Willers

Fayette, N. Y., April 2d, 1873.

(*The Messenger*, April 23, 1873)

3. モリソン教育会第三年次報告(1841年9月29日)

[前略]

Art. V. *The Third Annual Report of the Morrison Education Society: read September 29th, 1841.*

The third annual meeting of the Morrison Education Society was held at the residence of Rev. S. R. Brown, in Macao, on Wednesday the 29th September, 1841. The following gentlemen were present, Messrs. L. Dent, J. Matheson, W. Bell, E. Moller, S. W. Williams, W. A. Lawrence, B. Hobson, and the Rev. Messrs. E. C. Bridgman, W. J. Boone, W. C. Milne, D. Ball, J. L. Shuck, and S. R. Brown. In the absence of the recording secretary, Mr. Brown was requested to act in his place *pro tem*.

[中略]

Mr. Brown responded to the resolution in the following terms:

I am not one, Mr. President, who undervalues the good opinion of others, especially when it is expressed by those whom it is my great desire to please, in the

in 1871, 63,000 more. Idolatry is there suppressed by the government, and many of the ancient idols broken into pieces.

Shall I recite any more of the fruits of Foreign Missions? When we direct our eyes to the Sandwich Islands, where a whole nation has embraced Christianity, it should indeed be a sufficient inducement to us to enter upon the noble work of introducing the Christian religion amongst heathen nations.

But the spirit of the great illustrious Reformers of the Reformed Church, such as Zwingli, Calvin, Ursinus, Olevianus, Oecolampadius, should likewise encourage us to labor for the heathen. We have as great and heroic men in our Church, as there are in any other. The Reformers were heroes in mind and body, relying upon God, and able to overcome the obstacles before them. They labored for the propagation of the Reformed Church. Our Church, and the Lutheran, are the first and the oldest Churches of the Reformation. The Reformed Church is dyed with the blood of martyrs, as much so as any other Church. Only think of the 75,000 Huguenots, who were sacrificed for the confession of their Redeemer.

When we look upon our great Reformers, and the many thousands of martyrs, who died for the confession of their faith, and who were so faithful in laboring for Christ, do they not speak to us from their tombs, and call upon us to propagate our religious faith over the world? It is true, we have labored in the cause of Foreign Missions twenty-five years. We had a missionary, the Rev. Dr. Schneider, at Aintab, but no mission. But whilst our missionary vessel lays at anchor in Syria, let us hoist our sails again, and prepare for new victories. A Church, which was amongst the first (if not the first) in the Reformation, a Church, which had such glorious Reformers and martyrs, who from their tomb summon us to new activity, should not be the last to labor for the conversion of the heathen. Our Church is a Foreign Missionary Church. The fathers, who laid the foundation of our Church in this country, came from the other side of the Atlantic. May the mantle of the fathers fall upon their children!

Amongst the encouragements for engaging in the work of Foreign Missions is also to be reckoned, what women are doing. The "Missionary Herald" for February, 1873, reports, that the Mission work for women, or the Woman's Board of Missions, has paid to several Missions, in Africa, Asia and America, the sum of \$28,205.77 cents. If the female sex, even in other denominations, is thus active in the propagation of the Kingdom of Christ, should not we learn a lesson from them and follow their noble example? What they do for Christ's sake will be remem-

more Missionaries. The A. B. C. F. M., or Congregationalists, the Presbyterians, the Reformed Church of America, the Episcopal, the German Evangelical Society, the Baptist Church, the Methodists, all engage with new zeal in the blessed work of converting the world to our Lord Jesus Christ.

The Missionary Societies of Germany are redoubling their efforts to send the gospel, wherever the gates of salvation are open. Basel, Berlin, Bremen, and the Moravian Church, are vigorously engaged in the same noble work. England, the first in the rank of Missions, by their "Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Lands," raised in 1701, £1537, and in 1871, £97,604, whilst the Church Missionary Society, and the London Missionary Society, are increasing their zeal to make the world subject to its lawful owner, the Lord Jesus Christ.

If we see the American Churches, and the European Churches also thus eagerly engaged in efforts to make this world the property of our Lord Jesus Christ, should it not induce us to follow their example? Is not the command: "Go ye into all the world," given to us as well as to other Churches? Let us then labor according to our means.

The Reformed Church of America, several years ago, made a small beginning in Foreign Missions; and now they have prosperous Missions in Arcot, Amoy, and have laborers even in Japan. I have seen it stated, that the first Christian congregation in the Empire of Japan belongs to the Reformed Church of America.

Another inducement for the Reformed Church in the United States to engage in Foreign Missions, is, that the world is now specially prepared to receive the gospel. An Armenian, at a meeting of the American Board of Foreign Missions, at Rochester, N. Y., said: Now is the time to send the Gospel to my nation. And we should also think, now is our time. Let us only direct our eyes to Japan. What mighty changes have taken place in that empire in a few years! Railroads have been commenced, and telegraphic communications established through the length of the empire. Education is encouraged. The lunar year is abolished, and the solar year introduced. The ancient holy days are set aside, and Sunday substituted for them, though their New Year's day is yet celebrated. The laws against Christianity are no more binding, and the first Christian congregation, so far, has not been disturbed.

What great changes have taken place in Madagascar! There are now more than 315,000 worshipers of the only true God, and adherents to Christianity. In 1870, 78, 752 professed Christ, in the congregations of the London Missionary Society, and

(2)

of feeling—nevertheless, it was one of the best meetings of the kind which was ever held on a similar occasion by us. Before the plates were handed round, one brother arose, and proposed, in behalf of his congregation, to be one of six to sustain One Foreign Missionary. *Four* immediately responded to this proposal, who then agreed to increase the amount (\$100) to *one hundred and twenty dollars each*, so that the amount necessary to sustain one missionary, (which is understood to be \$600 a year) was made up. Another brother, whose congregation has raised annually that amount for Foreign missions, stated, that as the funds were thrown together with contributions from several sister churches into the Treasury of the American Board, he did not feel himself authorized to pledge himself for his congregation now. The brethren who gave this noble example, were—

For Foreign Missions.

Rev. E. Heiner, Baltimore, for his charge, \$120, Rev. J. F. Berg, Philadelphia, 120, Rev. B. C. Wolff, Easton, 120. Rev. D. Zacharias, Frederick, 120. Rev. D. Zeigler, York co., Pa., 120.

The above amount (\$600) is understood to be the annual amount allowed for a missionary's services per year.

The following additional sums were pledged: Rev. H. Wagner, Lebanon, for his charge, \$50, Rev. J. C. Guldin, Chester co., 50, Rev. P. S. Fisher, Centre co., 50, T. L. Hoffeditz, Northampton co., 50, Hagerstown charge, (conditionally) 50, Rev. H. Bibighouse, (N. L.) Philadelphia, 50, Rev. J. Shell, Perry co., 50, Rev. D. Willers, Fayette, N. Y., 25, Rev. E. Kieffer, Bellefonte, Pa., 15, Mr. Moses Kieffer, 5—Total, for Foreign Missions, \$945.

[後略]

(*The Messenger*, October 10, 1838)

2. 外国伝道好機到来の訴え (1873年4月23日)

In the "Reformed Church Messenger" of March 26th, I saw a notice, for a meeting of our Board of Foreign Missions, on the 15th of April, at the lecture-room of the Reformed Church, at Harrisburg. I was very glad to learn, that our Church is preparing to move in the direction of propagating the Church of Christ in heathen lands. We have, at present, several inducements to labor in the cause of Foreign Missions.

First, The different American Churches are zealously engaged in sending out

英 文 資 料

1. ドイツ改革派教会外国伝道局の設置(1838年10月2日)

[前略]

[Lancaster, October 2, 1838]

The committee appointed by the Synod of last year, on the subject of Foreign missions, reported. Their report was accepted, and a free and very interesting discussion was had on this subject by various of the brethren. Some of them thought, that the peculiar claims of our large western population did not make it expedient to enter largely on the subject of *Foreign* missions at the present time, although these same brethren are known to feel deeply on the subject, and they and their congregations have given freely towards its support.

As to the *plan* of operation, the report recommended to Synod to unite with the American Board of Commissioners for Foreign Missions, and proposes the following resolutions for the adoption of Synod.

1. *Resolved*, that Synod during their present sessions form a Board of Foreign Missions, to be called "The Foreign Missionary Board of the German Reformed Church in the United States."

2. That a committee of five persons be appointed to draw up a constitution, and propose officers five persons for election.

3. That after the presentation and adoptions be appointed to correspond with the American Board, and endeavor to make such arrangements with them, as to a plan of co-operation as to the committee may seem best calculated to promote the interests of all concerned.

The report was adopted, and a committee to draft a constitution appointed.

[中略]

[Lancaster, October 3, 1838]

Missionary Meeting.

This evening the Board of Missions held their Anniversary in the Reformed church. Addresses were delivered by brother Willers in the German and brother Smaltz in the English language. The congregation was not very large, on account of various political meetings in the city which seem to have excited a great deal

surer.

Manuscript of the Speech of Masayoshi Oshikawa at the General Synod of the Reformed Church in the United States.

Moore, Jairus P. *Forty Years in Japan, 1893—1923*. Board of Foreign Missions, Philadelphia, 1925.

The Chinese Repository.

The Japan Evangelist.

The Missionary Guardian of the Reformed Church.

The Outlook of Missions.

清水東四郎遺稿、梅津吉之助・成瀬高編著『日本基督教会東北中会史』

(1968年)

東亜研究会『会報』

『当直日誌』

『東北文学』

「東北学院大学教授会記録」

『東北学院報』

『東北学院時報』

「東北学院関係公文書」

「東北学院理事会記録」

『東北教会時報』

英文資料

I Lancaster Theological Seminary Archives.

Acts and Proceedings of the General Synod of the Reformed Church in the United States.

Blue Book of the General Synod of the Evangelical and Reformed Church. Official Proceedings of the Japan Mission of the Reformed Church in the United States.

Personal letters of A. D. Gring, W. E. Hoy, D. B. Schneder, E. H. Zaugg and A. M. Ankeney.

The Christian World.

The Reformed Church Messenger.

II Tohoku Gakuin Archives.

Fifty Years of Foreign Missions of the Reformed Church in the United States 1877—1927. Board of Foreign Missions, Philadelphia, 1927.

Ledger of Sendai Theological Seminary in Account with W. E. Hoy, Trea-

収録資料一覧

邦文資料

I 学外団体所蔵資料

- 「大日本海外教育会関係書簡集」(渋沢史料館所蔵)
- 「県庁文書」(宮城県図書館所蔵)
- 「文部省公文書」(国立公文書館所蔵)
- 「横浜公会名簿」「横浜公会日誌」(東京女子大学比較文化研究所所蔵)

II 一般資料

- 同志社大学人文科学研究所編『特高資料による戦時下のキリスト教運動』1
(1972年)
- 遠軽町役場編『遠軽町史』(1957年)
 - 『福音週報』
 - 『福音新報』
- フルベッキ, G. F. 著『日本プロテスタント伝道史』上(1984年)・下(1985年)
(『日本基督教会歴史資料集』(7)・(8))
- 『女学雑誌』
- 『河北新報』
- 『七一雑報』
- 高谷道男編訳『S・R・ブラウン書簡集』(1965年)

III 本学院所蔵資料

- 福音新報社編『日本基督教会修養会「東山荘講演集」』(1935年)
 - 『芙蓉峯』
- 花輪庄三郎著『東北学院七十年史』(1959年)
 - 『神と人』
- 基督心宗教団編『押川方義・川合信水両先生往復書翰集』(1981年)
- メンセンディク, C. W. 著『シュネーダー博士の生涯』(1976年)
 - 「日本基督教会東北(宮城)中会記録」
- 野沢正著「東北学院労働会歴史」(1905年)
- 鬼塚正二編『恩師のみあと』
 - 『労働会雑誌』
 - 『仙台神学校文学会雑誌』

解 説

はじめに

本書は、すでに刊行された「通史篇」の史料集というべきものである。精力的に収集された膨大な資料を、一巻一〇〇ページという限定された中に収録するためには、一定の編集方針が必要である。資料篇の編集としてよく見受けられるのは編年体の形式、あるいは事項別の資料の配列などである。これらの編集方式による資料篇はそれなりの意味を持つが、それだけでは「通史篇」との関連が希薄になったり、無味乾燥になりがちである。編集委員会では、以上のような問題を念頭に置きながら、一貫した方針として、「通史篇」で部分的に引用された資料のほぼ全文を収録することに決定した。そうすることによって、「通史篇」と「資料篇」が有機的に関連づけられると考えられたからである。したがって本書は「通史篇」と同じ編・章構成とし、資料の配列も「通史篇」で利用した順序に原則的には従っている。しかし、「通史篇」引用資料の全文掲載だけでも予定のページ数をはるかに越えることになり、さらに資料の選択が必要になったが、その場合、留意したのは、「資料篇」だけでも本学院の歴史が生き生きと見えてくることであつた。その点からして、本書「資料篇」の編集にあつては、「通史篇」の読者が本学院のたどつた歴史をより良く理解するだけでなく、「通史篇」の著者とは別の視点から本学院の歴史を再考するための便宜をも与えるように工夫したつもりである。

そこで、本書「資料篇」に収録した資料を概略説明することにする。大別すると本学院所蔵資料と学院外資料になるので、後者から見ていきたい。

ミッシヨン資料 本学院はすでに『東北学院七十年史』を発売しているが、今回刊行された『東北学院百年史』（通史篇）の最大の特徴は、アメリカ合衆国にあるいわゆるミッシヨン資料を収集・駆使している点にある。言うまでもなく、本学院の設立にはアメリカ合衆国のドイツ改革派教会が大きな役割を果たしていた。ドイツ改革派教会が外国伝道活動に力を入れようとしたのは、一八三八年の外国伝道局の設置に始まるが、日本伝道のための宣教師派遣は一八七九（明治十二）年のグリーングが最初で、ついでモール、本学院の設立者の一人ホーイ、本学院の発展に寄与したシュネーダーも、同教会から派遣された宣教師である。彼等は多くの書簡や報告書、ならびに年次報告書を外国伝道局幹事宛に出している。これらの資料の多くは、ドイツ改革派教会が一八二七年から刊行し始めた機関紙に掲載されている。その機関紙が『メッセンジャー』である。ただ、在日して伝道や教育に従事している宣教師と本国の外国伝道局との間には、その方針をめぐる対立もあり、そのような事情からか、『メッセンジャー』に掲載されていない書簡も少なくない。これらの資料は、現在ランカスター神学校の文書保存庫に所蔵されている。本書「資料篇」では、『メッセンジャー』と同時に、これに掲載されていない書簡類も収録した。これらを一読すると、日本における宣教師たちの伝道・教育活動がいかに困難であり、これをいかに克服していったかをうかがい知ることができる。たとえば、本学院の前身である仙台神学校時代に関する資料が乏しい中で、当時の状況を生々しく伝えるホーイの書簡は貴重である。特に、本格的な校舎の建築のために、その敷地の獲得と建築費用を得るために行ったホーイの涙ぐましい努力が、その書簡に滲み出ている。創立当初から本学院の財政の大部分はアメリカからの資金的援助に依拠していたのであり、ホーイやシュネーダーは、その援助を仰ぐべく、本国の外国伝道局にしばしば書簡を送っている。また、一九一九（大正八）年三月二日の仙台大火で中学部の校舎と寄宿舎が全焼し、失意と悲嘆の直中にあつたシュネーダーが、学校の将来への希望を決して失つてはいないことを伝える貴重な書簡類を、本書ではできるだけ収録したつもりである。付け加えておくならば、本学院に関係

する外国人伝道者の私信ともいふべき書簡もランカスター神学校に所蔵されている。その中で、本書に収録したのは、ミセス・アンケニーの妹クララ・バーン宛の書簡である。それには第二次世界大戦による外国人宣教師の抑留という受難の状況や、戦後まもなく再来日した当時の日本の荒廃した有様が語られていて、興味深い。

県庁文書 現在宮城県図書館所蔵の宮城県公文書の中に、本学院関係の膨大な資料があり、「通史篇」でも利用したが、本書「資料篇」でもかなり収録した。史料末尾に「県庁文書」としたのである。公立学校のみならず、私立学校も文部省の管轄下にあつた。したがつて、学校の設立に関しては当然ながら、学校内の学則変更など細事にわたり、文部省の認可を必要とした。認可申請書類は「願書」として当該地の関係機関に提出され、その審査を経て文部省に届けられ最終的な認可を仰ぐという形式をとっている。これら官庁文書を見ると、はじめに市役所に提出され、県庁を経て文部省に届けられるものと、市役所を経ず直ちに県庁に提出され、文部省に届けられるという二系列のものがある。その差異については詳らかでない。「願書」の外に単なる「届書」もあるが、「願書」と同様な経由で文部省に届けられている。本学院関係の「県庁文書」の時期は、明治二十四（一八九一）年から大正十四（一九二五）年にわたるものである。昭和期以降のものは宮城県庁に保管されているが、庁舎新築にともなう仮庁舎への移転時期とも重なつて、調査することが不可能であつた。

本学院関係の「県庁文書」は、明治二十四年の従来の仙台神学校から東北学院に改組する「東北学院設置願」をもつて始まる。以来、資料は多岐にわたるが、学則改正にともなう願書、私立学校令にともなう届書、徴兵猶予に関する願書、専門学校令による認定願書、校舎新築願書、社団法人設置願書などがそれである。これらの「願書」や「届書」は一通の文書にとどまるわけではない。当時の学校の全容を知りうる諸項目が、添付書類などの形式をとつて記載されているのである。やや繁雑になるが、二、三の例を示せば、以下の通りである。明治二十四年七月の「東北学院設置願」は、仙台神学校から東北学院へと名称を改め、本格的な学校として文部省にその設置申請を行ったものである。この資料には、設置願書のみならず、「設置目的」、「位置」、「名称」、「経費」、「校舎坪数」、「敷地坪数」、「図書器具数」、「生徒

数」、「職員数」（履歴書添付）、「教則及校則」、「科用図書」、「設置主履歴」が具体的に記載されている。明治三十六年十二月の専門学校令による認定願書でも、「私立東北学院憲法第二条目的」、「目的」、「名称」、「位置」、「学則」、「本学院専門科生徒定員」、「経費予算」、「教員分任学科表」、「開校年月」、「設立者履歴書」、「敷地建物之図面」など、各項目ごとに詳細に記述されている。このような詳細な記載が、ほとんどの「願書」や「届書」で並列的になされていたり、あるいは添付書類として付されているのが「県庁文書」の特徴である。これらの項目を一覧しただけで明らかであろうが、まず、学校の所在地および敷地と建物の図面、それらの坪数が知られる。次いで、学校の年間の経費、予算が明らかにされる。生徒定員数や学則が明記されている。学科課程表や各教員の担当科目数では、当時の教育内容が如実に示される。また「科用図書」では、書名のみならず、その著者や出版社の名称さえ記載されているものもある。当時どのような図書が必要なものとして備えられ、学生が利用したかなどが知られる。特に注目したいのは、学校設立者の履歴書だけでなく、教員全員の履歴書も添えられていることである。これらは、その出身地、出身学校、職歴などが詳細にわかる唯一の資料であり、各個人の経歴をたどる場合の利用などに供することができる。重要なものの一つである。総じて「県庁文書」は、学校の全容を知りうる資料として貴重である。本書「資料篇」では、明治期のものについて、特に時代が古いだけに重要であるとみて、重複するものもあつたが、かなりのものを収録した。ただし、大正期に入ってから資料については、学則や学科課程表、校舎図面など、全く同一のものが、それぞれの「願書」や「届書」に重複して添付されている場合が多いので、それらを省略したことも少なくない。

国立公文書館資料 これら「県庁文書」中の「願書」や「届書」は文部省に届けられ、その裁可を得たのであるから、これら関係書類は文部省の公文書の中に存在していなければならない。この種の公文書は現在、国立公文書館に移管され、保存されている。本学院関係の資料ももちろんその中に含まれるが、大正十二（一九二三）年九月一日の関東大震災により文部省が焼失したため、現存するのはそれ以降のものである。しかし、収集した「県庁文書」が大正年間までの資料なのに対し、国立公文書館所蔵の本学院関係資料のほとんどが昭和期のものであつて、これらの資料が「県庁文

書」の補完的な役割を果たしてくれた。最も古い本学院関係資料は、大正十二年から昭和四年までの「東北学院教則規則」と題するものであるが、これは主として学則の改正にともなう関係書類である。また大正十四年から昭和五年にかけての「私立東北学院設置廃止位置改称」と題する資料には、大正十五年の創立四十周年時に完成した専門部校舎の建築認可申請書と、校地・校舎の図面類が大量に含まれている。資料に表題はないが、昭和六年から昭和十八年にわたるものとして、高等学部関係の諸資料が保存されている。表題が「東北学院中学校設置」とある昭和十八年の資料は、中学部から中学校への変更に伴うものである。さらに、「東北学院工業専門学校」と題する資料は、第二次世界大戦末期の昭和十九年、本学が存亡の危機に立った際に、航空工業専門学校としてかろうじて存続した時の設置願、および敗戦直後、航空工業専門学校から工業専門学校へと変更する認可申請書類である。これらの資料の中には、本学院所蔵の公文書資料と重複するものも少なくないが、文部省の公文書の末尾には、「備考」として文部省の関係役人が特に留意する事項を書き留めており、当然のことながら本学院の「控」には記載されていないだけに、注目される。国立公文書館所蔵の資料で本書に収録したのは、ページ数などの関係から、社団法人から財団法人への変更に関するものなど一部分にとどめた。

押川方義関係資料 本学院創立者の一人押川方義の明治初年における動向は、それほど詳らかではない。その一端を知る資料として本書に収録したのが、「横浜公会名簿」と「横浜公会日誌」である。これらの資料は、佐波亘編『植村正久と其の時代』にすでに紹介されている。原資料は現在、東京女子大学比較文化研究所に佐波文庫として残されているが、本書はこの原資料をもとにしている。ただし、これも分量の関係から、押川方義関係の部分だけとし、他は割愛せざるを得なかった。押川の初期活動は『七一雑報』、『S・Rブラウン書簡集』、フルベッキの『日本プロテスタント伝道史』などからもうかがえる。

押川の活動は、明治二十年代後半頃から、本学院の教育事業のみならず、海外へと伝道の目が向けられ、広く政界や財界とも深い関わり合いを持つようになってくる。明治二十七年の「大日本海外教育会」は、押川が中心となって結成

されたものである。その事業の一環として、朝鮮に京城学堂、三南学堂などが設立された。この間の事情を最もよく示すものは巖本善治の『女学雑誌』であるが、海外での事業に直接関わった人物から押川宛に出された書簡、あるいは国内における資金募集などに関する資料が、現在渋沢史料館に所蔵されている。これらは押川個人の活動に照明をあてる場合の極めて重要な資料ではあるが、本学院との直接の関係からすれば二次的なものとならざるを得ず、本書にはそのうちの数篇だけを収録することとした。

押川とその愛弟子川合信水との間でも、かなりの書簡が取り交わされている。その原資料は、山梨県の基督心宗教団不二山荘に保管されているが、これらは『押川方義・川合信水両先生往復書翰集』として公刊されているので、その中からいくつかを本書に転載した。

一 学院所蔵資料

押川家寄贈資料 つぎに、本学院所蔵資料に目を転じてみよう。押川方義の生年月日の確定にあたり、押川家に保存されてきた方義出生直後の産髪うぶかみの包み紙に銘記された実父の記録が、有力な資料となった経緯は「通史篇」で詳説した通りであるが、これらの押川方義関係資料はその後、孫の押川昌一氏より寄贈され、現在は本学院所蔵の貴重な資料として保存されている。本書では、これらの中からこの「産髪包紙銘記」をはじめ、押川方義が欧米視察旅行の途上、アメリカのドイツ改革派教会全国総会で行った演説の英文原稿を収録した。

理事会記録 本学院所蔵資料で何といっても重要なものは、「理事会記録」である。それには和文と英文の両様がある。和文は明治二十二（一八八九）年二月以降、英文は明治三十四（一九〇一）年四月から昭和十六（一九四一）年十月までのものが残されている。戦後の記録は和文のみである。「理事会記録」の記載様式は、審議・決定事項のみをほぼ箇条書的にしたものである。審議内容に関しては、一部の例外的なものを除いて記録はない。しかし、本学院の重要な問題

に關する最終的な決定機関である理事会の記録だけに、最も重要であるとして見て良いであろう。たとえば、従来まで必ずしも明確でなかったホーイと押川の辞任に至る経緯がこれによつて明らかにされた。後述する労働会が独立した組織から、理事会の直接管轄に置かれるに至つた事情なども知ることができる。戦後では、実現こそしなかつたものの、新たな校地の獲得を画して、八木山の買収問題があつたこと、また専門学校から大学への昇格時に、同じドイツ改革派教会の流れを組む宮城学院と合併して男女共学の学校を目指したことなど、目新しい問題を知り得るのである。これらを含めて、「理事会記録」から本書に収録した件数は多い。ただし、「理事会記録」は学院内のいわば機密文書に属するだけに、資料公開上の原則に照らして、昭和三十五（一九六〇）年以降のものは掲載しなかつた。

『東北学院時報』 本書「資料篇」で最も多く収録したのは、『東北学院時報』所載の資料である。『東北学院時報』が最初に発刊されたのは大正五（一九一六）年一月である。以後、昭和十八（一九四三）年一月まで発刊されたが、戦争の激化などの影響で、一時発刊は停止された。復刊したのは戦後の昭和二十四（一九四九）年十一月からである。この資料はそれぞれの時期における本学院の実情を知る上では、最も重要なものの一つである。やや具体的にみると、院長や教員・同窓生などの寄稿文、学部・学科の新設や増設などの拡充計画、大学（専門部）や中学・高等学校などの実情報告、校舎・礼拝堂その他諸施設の建築状況、あるいは諸行事、同窓生の動向など、本学院に關係する諸問題がくまなく記載されているのが特徴である。大正八年三月二日の仙台大火により焼失した中学部の校舎・寄宿舎の再建には、多大の資金を必要とした。本学院ではシュネーダーを通してのアメリカからの資金援助要請のみならず、広く国内の同窓生を中心とする寄附金募集を行ったが、その要請は『東北学院時報』を通じて行われているのである。院長などの寄稿文はその時代の本学院の教育方針を示す恰好の資料である。それぞれの段階における実情報告もこれもまた貴重であるし、創立記念日の式典などの諸行事なども見落とせない資料の一つである。これら『東北学院時報』から採録した資料を本書では多く掲載したが、これらを通して、本学院がたどつた歴史と継承されてきた建学の精神を理解するうえで、深く寄与するところがある。

教会関係資料 当然のことながら、本学院と教会との関係は密接である。明治十八（一八八五）年、押川方義が中心となり、仙台など五教会をもつて中会を組織することが、第三回日本基督教大会において認められ、宮城中会と称することになった。宮城中会は大正八（一九一九）年には東北中会と改称し、日本基督教団成立後の昭和十八（一九四三）年にまで至るが、この間の会議の議事録が『宮城中会記録』『東北中会記録』として残されている。初期の数年間を除いて、これらは本学院に所蔵されている。仙台神学校に関する資料が乏しいことは、すでに述べてきた通りであるが、神学校それ自体が宮城中会に所属する伝道者養成機関であった関係上、明治二十一年の神学校の憲法制定および翌二十二年の同憲法改正に関する審議経過が、『宮城中会記録』に載せられている。このように本学院と宮城中会との関係は非常に深いものであることから、本学院とは直接関係は少ないが、「宮城中会伝道委員規則」や押川方義と関わりのある一部の記録をも、神学校憲法に関するものと合わせて収録した。また『東北中会記録』には、仙台教会の分裂にともない、本学院教職員を中心とした東北学院教会が設立される経緯が記録されており、これらも本書に収録した。

この他、教会関係の資料として本学院の所蔵になるものが、明治三十四（一九〇一）年から大正十（一九二一）年にかけて発刊された『東北教会時報』である。これは全国版の『福音新報』に対し、もっぱら東北地方にある日本基督教会の伝道状況や個人消息などを報道する機関紙で、東北学院構内の教会時報社から発行されている。通史篇では、神学部卒業生のその後の任地や伝道に関する情報をこの『東北教会時報』から多く引用したが、本書ではシュネーダーの在職二十五年記念の報告記事や、本学院創立にあたり浄財を寄付した香味ちか女史に関する記事などを収録するに止めた。『東北教会時報』は、大正十一年からは『両羽の光』や『会津教壇』などと共に、東北中会の協力伝道局が発刊を開始した『神と人』と合同することとなる。この『神と人』も本学院に所蔵されているが、この中には本学院建学のシンボルともいえるべき「LIFE LIGHT LOVE」についてのシュネーダーの講演要旨「生命、光明、愛」があり、本学院にとつては欠かせないものであって、本書に収録した。

明治二十四（一八九一）年、内村鑑三の有名な不敬事件が起きるが、押川方義らはこれに激しく抗議した。これに関

する資料は、明治二十四年二月の『福音週報』に掲載されている。押川の思想の一端を示すものとして、これも本書に収録した。

労働会関係資料 働きながら祈り学ぶというのも、本学院の建学の精神の一つである。明治二十五年頃、押川を慕い笈を負うて集まる学生たちの自給・自立を図るために設けられた労働会は、多くの人材に勉学の機会を与え、学院全体の発展にも大きく貢献した。この労働会寄宿舎が明治二十九年に発刊した『労働会雑誌』と、発行後直ちに改称された『芙蓉峯』は、当時の学校の活動を知る上でも極めて有益な資料であるが、本書では一時本学院に在職した島崎藤村が寄稿した「芙蓉峯を読みて」を採録した。労働会それ自体についての資料としては、労働会の一員で、明治三十八年に専門部文科を卒業した野沢正の手書き本『東北学院労働会歴史』があり、これを収録した。また前述の通り、後年労働会が押川個人の手から理事局の管轄下に置かれることとなる事情を知る上から、「理事会記録」からも関係資料を収録した。

文学活動関係資料 本学における文学活動も熱心であり、明治二十三年に手書きの雑誌『眼』を発刊、三号から『仙台神学校文学会雑誌』と改題し、やがて校名変更にもない『東北学院文学会雑誌』となった。特に明治二十四年六月に発行された『仙台神学校文学会雑誌』第一巻は、当時学生として在籍していた岩野泡鳴や酒井勝軍等の自筆の原稿、後に教師となる天折の画家布施淡の水彩画などをそのまま製本したもので、本学院の貴重本である。本書ではこの中から、最初の学生の一人島貫兵太夫が学生の立場から仙台神学校の改革を提唱した「神学校改革論」を収録した。この発刊に当たっていた「東北学院文学会」が明治二十六年十月に、創刊号として『東北文学』を世に出した。小説、論説、評論、詩歌などを掲載し、二高の『尚志会雑誌』と共に東北の文学界に新風を吹き込んだ。明治三十年には当時在職中の島崎藤村が推されて文学会長に就任、五月発行の『東北文学』には彼の処女詩集『若菜集』の近刊広告が載せられている。この中から本書で収録したのは、創刊号掲載の「発刊の辞」と、創立二十五周年号に掲載された院長の式辞と、

来賓として参列した本多庸一の「祝辞」、前院長押川方義の講演などである。

公文書資料 戦前の本学院における見落とせない事件として、昭和六（一九三一）年の高等学部生徒同盟事件がある。これに関しては文部省からの問い合わせもあり、本書では「主務省関係書類」として整理・保存されている資料の中のこの事件に関する文書を収録した。またこの経過を詳細に記した本学院同窓会編の「東北学院高等学部事件報告」も残されているが、前者と重複するところもあり、紙数の関係もあつて省略することにした。

敗戦直前に本校は存亡の危機に見舞われたのであるが、昭和十九（一九四四）年に航空工業専門学校を設置し、これを乗り切るわけである。これに関係する資料が国立公文書館に所蔵されているが、本学院の「学校関係認可申請及届書綴」にもそれと同一の資料が収められている。航空工業専門学校の設置と敗戦直後工業専門学校と改称する際の関係資料は、本学院のものを収録した。

戦後における教育改革は、本学院にも大きな影響を与えた。本書に収録した『キリスト教教育調査』は、国の教育改革に対応しつつ、本学院の将来を展望した貴重な資料である。これには、当時郊外であつた八木山に六十八万坪の校地を取得し、さらに新たに小学校を設置して、小学校から大学にいたる一貫教育を目指そうとする雄大な構想が描かれている。

国の教育改革に対応し、本学院も着々とその準備にとりかかる。即ち専門学校から大学への昇格、短期大学の設置、短期大学法科第二部の増設、新制高等学校の設置などをつぎつぎと申請し、それぞれ認可されるに至つたのである。これらに関する資料は、本学院の「認可指令書綴」に含まれているが、この中で特に大学の昇格申請では文学部と商経学部の二学部で構成する予定であつたものが、文部省の認可の段階で文経学部という複合学部となつたことが記録されている。

本学院の建学の精神を担うべき中核となつていたのは、戦前の神学部であつたが、戦時体制の強化のなかで昭和十二（一九三七）年に日本神学校に合併する形で廃止された。その復活は戦後まもなくから本学院の意図するところであつ

たが、昭和二十六（一九五二）年になり神学科復活の実現を期して、文部省に設置認可申請を行った。しかし諸般の事情からそれを取り下げている。この申請書類と取り下げ願書が「大学に神学科増設認可申請」と題して残されているので、これを本書に収録した。

八木山に校地取得計画を持ちながら実現しなかったことは前述したが、昭和三十三（一九五八）年には多賀城にある国有地を校地として獲得すべく、「国有財産売払申請書」を東北財務局に提出して、その実現をみている。現在工学部と幼稚園が置かれている多賀城キャンパスがこれであり、これら関係書類も本書に収めた。

大学はやがて文経学部が文学部と経済学部の二学部に分離し、工学部、法学部が新設され、さらに学部のみならず、それぞれの学部に大学院が置かれ、東北・北海道唯一の私立総合大学として発展して行く。さらに高校においては、昭和三十年代の高校進学志望者の急増に対応して、市内榴ヶ岡に分校舎を開設、後に榴ヶ岡高等学校として分離独立して行く。これら学部の新設や大学院の設置、高校の分離等に関する申請・認可書などは、すべて本学院の資料を使用した。

その他の資料 その他では、本学院に関係する『河北新報』の記事を二、三、本書に収録した。これには、大正八年の仙台大火で中学部校舎が焼失する様が生々しく記されているし、戦時中、中学部校舎正面に掲げられていた「JEF LIGHT LOVE」の英文字を批判する記事、あるいは多賀城校地買収に関わる記事などの興味ある内容が載せられている。

本書「資料篇」は、前述したように「通史篇」で部分的に利用された資料の全文掲載を編集方針としている。ただし、「通史篇」刊行後、新たに発見された資料で、本学院の歴史に不可欠と思われるものを、二、三、収録している。前掲の島貫兵太夫が『仙台神学校文学会雑誌』に投稿した「神学校改革論」もその一つであるが、もう一つは、押川方義が明治二十四年九月の東北学院開院の時期に講話した「東北学院の教育方針」である。この資料は、鬼塚正二編『恩師のみあと』に収録されているものである。押川には東北学院における教育観を示す叙述物が少ないので、それを示す資料として価値のあるものとみて良いであろう。

最後に付け加えておかなければならないのは、『東北学院七十年史』からも、少なからず本書に資料として採録したことである。また、多くの刊行された著書などからも採録した。これらの資料は、すでに公にされたものであって、特別に解説する必要がないと判断したので、割愛した。

東北学院百年史資料略年表

西曆	元号	資料	関係事項	社会事項
一八三八	天保九	10月2日	ドイツ改革派教会、外国伝道局を設置。(一)	
一八三九	天保一〇		S・R・ブラウン、モリソン記念学校校長に就任。 〔三〕	
一八四九	嘉永二	12月5日	(西曆一八五〇年一月一七日) 押川方義、松山市にて出生。(四)	
一八五七	安政四	3月23日	D・B・シュネーダー、アメリカ合衆国ペンシルヴェニア州ボウマンズヴィルにて出生。	
一八五八	安政五	6月4日	W・E・ホーイ、ペンシルヴェニア州ミフリンバーグにて出生。	6月〜9月 米蘭露英仏と修 好通商条約締結
一八六九	明治二	4月頃	押川、松山藩派遣留學生の一人として上京。	6月17日 版籍奉還
一八七一	明治四	8月頃	押川、大学南校閉鎖にとまない、横浜修文館に移り、 J・H・バラ、S・R・ブラウンに師事。	
一八七二	明治五	2月2日	(太陽曆三月一〇日) 押川ら九名、横浜海岸教会にてバラより受洗。同日、 日本最初のプロテスタント教会である「日本基督公会」(横浜公会)設立。(五) 〔以下、月日はすべて太陽曆による。〕	8月3日 学制頒布 11月9日 太陽曆採用詔書公布、 12月3日を明治6年1月1日とする
一八七三	明治六	4月15日	ドイツ改革派教会外国伝道局、日本伝道を決議。(二、八、九)	

〔一〕内の数字は関連資料番号

一八七四	明治 七	5月15日 エディンバラ医療伝道会最初の日本宣教医T・A・ パーム夫妻来日。翌年四月二五日、新潟伝道を開始。 (七)	
一八七六	明治 九	1月3日 押川、パームの招請により新潟伝道開始。(一六)	
一八七八	明治 一 一	9月30日 ドイツ改革派教会外国伝道局、A・D・グリーングを 最初の日本派遣宣教師に選任。	
一八七九	明治 一 二	6月1日 グリーング夫妻、横浜着。(一〇、一一)	9月29日 教育令制定
一八八〇	明治 一 三	6月28日 グリーング、横浜より東京築地居留地二八番館へ転居。 6月 シュネーダー、フランクリン・アンド・マーシャル 大学卒業。 8月7日 新潟大火。 9月26日 押川、吉田亀太郎らと共に仙台に移住。	
一八八一	明治 一 四	5月1日 押川ら、超教派・独立の仙台教会設立。	
一八八二	明治 一 五	6月1日 グリーング、東京九段に伝道開始。(一二、一三)	
一八八三	明治 一 六	5月 シュネーダー、ランカスター神学校卒業、ペンシル ヴェニア州マリエッタにて伝道。 9月23日 J・P・モール夫妻来日。(一四、一五、一六)	
一八八五	明治 一 八	4月21日 ドイツ改革派教会外国伝道局、W・E・ホーイ、E・ R・ブルボー、M・B・オールドを日本派遣宣教師 に選任。 6月 ホーイ、ランカスター神学校卒業。(一七) 11月24日 押川ら、日本基督一致教会に加入、同時に宮城中会 結成。(一五、一五二) 12月1日 ホーイ、横浜着。(一八、一九) 12月4日 押川、バラ宅でホーイに会い、仙台にキリスト教主 義学校設立の協力を要請。(二〇)	

西曆	元号	資料関係事項	社会事項
一八八五	明治一八	12月21日 グリーンズ、モール、ホーイの三人、最初の宣教師会議を開催、「ジャパン・ミッション」(在日宣教師団)を組織。	12月22日 内閣制度制定、伊藤内閣成立。森有礼、初代文部大臣に就任
一八八六	明治一九	1月6日 在日宣教師団、仙台に神学校と女学校の設立を決議。 (三四、三五) 1月13日 ホーイ、仙台に着任。(二二、二二一、二二三、二二四) 5月 仙台神学校(木町通り・北六番丁角)の授業開始。 (二五、二六、二七、二八) 7月16日 プルポー、オールの二人、仙台に着任。二九日、両宣教師宅にて在日宣教師団会議を開催。(三〇) 9月18日 宮城女学校設置認可。	3月2日 帝国大学令公布 4月10日 師範学校令、小学校令、中学校令公布 5月10日 文部省、教科用図書検定条例公布
一八八七	明治二〇	4月 在日宣教師団、活動の中心を仙台に移すことに決定。 (三〇、四四) 5月18日 押川、ホーイら、本願寺仙台別院跡(南町通り・東二番丁角)を正式購入契約。 6月30日 七人の神学生、夏期伝道に出発、激励会開催。(三一) 11月20日 山形英学校開校。 12月21日 シュネーダー夫妻、横濱着。翌年一月一日、仙台着任。(三二、三三)	
一八八八	明治二二	12月 第三回宮城中会、「日本基督一致教会仙台神学校憲法」(二三条)を制定。(三六、三七、六二)	
一八八九	明治二三	3月2日 押川、欧米視察のため仙台発。翌年五月一六日、東京着。(三九、四〇) 3月15日 理事会で仙台神学校設立認可申請を発議。(三八、四一、四二)	2月11日 大日本帝国憲法発布

一八九〇	明治二三	9月5日	神学校校舍建築のため仙台教会より一部土地購入。 (四三)	10月30日 「教育に關スル勅語」 發布
一八九一	明治二四	2・3月	押川・植村正久・巖本善治ら、内村鑑三不敬事件に關し抗議。(七四)	11月17日 文部省、奉安殿設置の訓令発令
		6月	『仙台神学校文学会雑誌』発刊。(四八)	
		7月14日	「東北学院設置願」を県知事宛に提出。(四五、四六、四七、四八、四九、五〇)	
		9月18日	仙台神学校校舍完成。(五一)	
一八九二	明治二五	3月10日	労働会創設。(七三)	
		8月29日	東北学院理事局組織。「東北学院憲法」制定。(五二)	
		9月6日	学科課程を予科三年・本科四年・神学部三年と改正。 (五三)	
		9月7日	職員招聘規則等制定。(五四)	
		11月18日	東北学院開院式。(五五、五六、五七)	
一八九三	明治二六	2月21日	「規則改正認可願」提出。(五八、五九)	8月12日 文部省、小学校祝祭歌制定
		10月10日	『東北文学』創刊(終刊、昭和一七年二月、一二三号)。(六〇)	
		10月	ホーイ、『ジャパン・エヴァンジェリスト』(隔月刊)を創刊。(六一)	
		11月21日	ホーイ、最初の辞意表明。(八八)	
一八九四	明治二七	6月30日	東北学院神学部第一回卒業式。	8月1日 日清戦争勃発 (至翌年四月十七日)
		9月	理事局、ホーイの辞任届をめぐって紛糾。(八九、九〇、九一、九二)	
		12月8日	押川、本多庸一・巖本善治らと大日本海外教育会設立。(七五、七六、七七、七八、八〇)	

西曆	元号	資料関係事項	社会事項
一八九五	明治二八	3月29日 学則を改正、四月から普通科を五年とし、新たに文科・理科専修部二年を設置。(六三) 金子謹三、一年にわたる米國留学を終え、帰国直前に死去。(六九)	
一八九六	明治二九	1月 押川、本多らと北海道同志教育会設立。(七九) 4月28日 『芙蓉峯』(『労働会雑誌』改題)創刊(終刊、明治三一年九月、二五号)。(六五、六六、六七、六八) 9月8日 島崎春樹(藤村)、普通科作文・英語教師として来任。(六四) 12月15日 労働会、東八番丁の地所・建物を購入。(七二)	
一八九七	明治三〇	2月26日 「東北学院労働会憲法」制定。(七〇) 4月30日 宮城中会、ミッションより独立伝道を決議。(一五四) 9月13日 「労働会規約」制定。(七一)	
一八九八	明治三一	3月15日 普通科入学規定改正認可願提出。(八一) 4月 理科専修部廃止。	
一八九九	明治三二	8月3日 私立学校令公布、文部省訓令第二二号発令。(八二、八三、八四) 10月 ホーイ、東北学院辞任、中国伝道開始。(九四、九五)	
一九〇〇	明治三三	8月14日 押川、北清事変下に渡支、北京・天津に滞在(至翌年四月上旬)。(八五)	5月31日 北清事変勃発(至翌年九月七日)
一九〇一	明治三四	4月24日 押川、東北学院長辞任。シュネーダー、第二代院長に選任。(八六、八七、九七、一六〇、一六一、一六二、一六三) 10月20日 仙台日本基督教教会献堂式。(九九)	
一九〇二	明治三五	1月16日 普通科、徴兵猶予認定。(九八、一〇〇)	

一九〇三	明治三六	6月 11月25日	普通科、専門学校入学資格取得。 東北学院同窓会設立。	3月27日 専門学校令公布
一九〇四	明治三七	2月27日 4月14日 6月2日	専門科(文学部・神学部各三年)、専門学校令により認定。(一一〇一、一一〇二、一一〇三) 専門科、徴兵猶予認定。(一一〇三) 普通科新校舎の建築着工。(一〇八、一〇九、一一〇)	2月10日 日露戦争勃発 (至翌年九月五日)
一九〇五	明治三八	6月16日	専門科を専門部とし、文学部を文科、神学部を神学科と改称。	
一九〇八	明治四一	2月26日 9月14日 11月23日	小学校令改正(明治四〇年三月二日)にともない、普通科入学規則変更。 普通科、新校舎にて授業開始。 普通科新校舎落成式。(一一一、一一二)	
一九一一	明治四四	5月17日	創立二五周年記念式典挙行。(一〇五、一〇六、一〇七)	10月10日 辛亥革命勃発
一九一三	大正二	2月23日	押川ら、神田青年会館にて孫文歓迎会開催。押川の政治活動本格化。(一六五、一六六、一六七、一六八、一六九)	
一九一四	大正三	5月16日	創立二七周年記念式典並びにシュネーダー在職二五年祝典挙行。(一一四、一一五)	
一九一五	大正四	5月30日	香味チカ、死去。(一二九)	8月23日 対独宣戦布告
一九一六	大正五	4月	普通科を中学部と改称。(一二六)	
一九一八	大正七	1月1日 4月8日	『東北学院時報』創刊。 専門部に師範科、商科(各四年)を増設、神学科を第一部(三年)、第二部(四年)に改組。(一二六)	11月11日 第一次世界大戦終結

西曆	元号	資料関係事項	社会事項
一九一九	大正八	3月2日 中学部、仙台大火により校舎・寄宿舎焼失。(二一七、一一八、一一九)	
一九二〇	大正九	9月22日 専門部師範科卒業生に対する師範学校・中学校・高等女学校教員免許英語科無試験検定取扱認可。(二二七)	
一九二二	大正一一	4月 労働会閉鎖。 6月 中学部校舎・寄宿舎再建工事着工。(二一九、二二〇、一一一、一一二)	
一九二二	大正一一	9月30日 中学部再建寄宿舎落成。 6月27日 中学部再建校舎落成(九月より使用、献堂式翌年四月二一日)。(一二三、一二四、一二五)	
一九二三	大正一二	5月13日 東北学院教会設立。(一五五、一五六、一五七、一五八、一五九) 5月 シュネーダー夫妻、帰米(翌年一二月帰仙)。(二二九)	11月17日 国民精神作興に関する詔書発布
一九二五	大正一四	9月1日 関東大震災。(二二八) 4月 商科事件生起。(二八〇) 5月 神学部騒擾生起。(二八一) 5月 軍事教練(兵式体操)を正科として実施。(二一一) 5月 専門部校舎新築着工。(一三〇、一三一、一三二、一三三)	3月2日 普通選挙法成立 3月7日 治安維持法成立 4月13日 陸軍現役将校学校配属令公布
一九二六	大正一五 (昭和元)	6月7日 専門部商科卒業生に対する実業学校教員無試験検定取扱認可。	12月25日 大正天皇没、昭和と改元

略年表

一九二六	大正二五 (昭和元)	10月16日	創立四〇周年記念式典並びに専門部校舎落成式挙行。(一三四、一三五、一三六、一三七、一三八)	
一九二七	昭和二	3月3日	ホーイ、中国より帰米の途次、死去。	
一九二八	昭和三	1月10日 1月17日 2月21日	押川方義、死去。(一七〇、一七一、一七二、一七三) 専門部生徒定員変更認可。 専門部文科、師範科、商科の各予科(二年)を廃止し、四年制に改正する件認可。	2月20日 最初の普通選挙実施 6月29日 治安維持法改正
一九二九	昭和四	3月3日 4月29日 6月3日 8月31日 9月9日	ハウスキーパー記念社交館献堂式。(一三九、一四〇、一四一) シュネーダー夫妻帰米(翌年四月帰仙)。(一四四) 現役将校配属の通達。(一四三) 「財団法人東北学院」への組織変更認可。(一四二、一四五、一四六) 専門部を高等学部と改称、神学部は第二科を廃止し、第一科を本科と改称、さらに三年の予科を設置する件認可。	
一九三〇	昭和五	6月8日 11月3日	シュネーダー、仙台地方「神の国運動」宣言大会にて講演。(二四七) ラーハウザー記念礼拝堂地割式(翌年七月一九日定礎式)。(二四八、一四九)	
一九三一	昭和六	1月24日 7月13日	シュネーダー、全教員を招集し、基督教主義学校の危機に際しての東北学院の使命について演説。(一八二) 高等学部事件生起(至一〇月一四日)。(一八三、一八四、一八五)	9月18日 満州事変勃発
一九三二	昭和七	3月19日	ラーハウザー記念礼拝堂献堂式。(二五〇)	5月15日 五・一五事件

西暦	元号	資料関係事項	社会事項
一九三三	昭和八	7月25日 高等学部文科卒業生に対する師範学校・中学校・高等女学校教員歴史科無試験検定取扱認可。 外国伝道局、昭和九年度補助金四割減を通報。(一八六、一八七、一八八)	
一九三四	昭和九	1月 シュネーダーの長女メアリ、死去。(一八八) 4月12日 シュネーダー、院長辞意を表明。(一九二、一九三) 6月 ドイツ改革派教会、エヴァンジェリカル教会と合同し、福音・改革派教会を形成。海外伝道機関は国際伝道局と改称。 6月 出村剛、日本基督教会修養会(於東山荘)にて講演。(二六一)	2月18日 美濃部達吉の天皇機関説問題生起
一九三五	昭和一〇	5月21日 創立五〇周年記念式典挙行。(一九四、一九五) 10月29日 御真影奉戴式。	
一九三六	昭和一一	5月11日 シュネーダー、院長辞任。出村悌三郎、第三代院長に就任。(一九六) 5月16日 E・H・ゾーグ、ホーイ(初代)・シュネーダー(第二代)に続き、第三代理事長に就任。 6月1日 シュネーダー夫妻帰米(昭和一三年五月一六日横浜帰着)。(一九七)	2月26日 二・二六事件 11月25日 日独防共協定調印
一九三七	昭和一二	3月23日 神学部、日本神学校との合同により廃止の件認可。 (二〇一、二〇二、二〇三、二〇四、二〇五)	7月7日 日中戦争勃発 8月24日 国民精神総動員実施要綱決定
一九三八	昭和一三	10月5日 シュネーダー、死去。(二〇〇) 11月9日 東北中会分裂、奥羽中会設立。(一八九)	4月1日 国家総動員法発布

一九四二	昭和一七	<p>2月10日 第二中学部設置認可。(二二八、二二九)</p> <p>3月31日 高等学部商科第二部設置認可。(二二七)</p> <p>6月25日 アンケニー、シュレーヤー、ゾーグ、R・ゲルハードら、横浜出帆、交換船で帰米。(二二〇)</p> <p>8月 中学部、高等学部の卒業年限を、それぞれ四年、二年に短縮。</p>	<p>4月18日 米機東京空襲</p> <p>11月1日 大東亜省設置</p>
一九四一	昭和一六	<p>3月28日 高等学部文科生徒募集停止認可(翌年九月廃止)。(二一六)</p> <p>4月 学院経営の独立自営断行。</p> <p>5月 出村悌三郎、同窓会長として鮮満地同窓生を訪問。</p> <p>6月24日 ミセス・シュネーダー、死去。</p> <p>11月3日 御真影奉安殿落成。</p> <p>11月8日 同窓生戦没者の慰霊祭挙行。(二二〇)</p>	<p>6月24日 日本基督教団設立</p> <p>10月18日 東条内閣成立</p> <p>12月8日 太平洋戦争勃発</p>
一九四〇	昭和一五	<p>5月17日 配属将校質問事件生起。(二二四)</p> <p>5月20日 旧神学部校舎および敷地(南町通り)売却。</p> <p>7月26日 県学務部、基督教主義学校に対し、聖書を課外とすること等を要望。(二〇八)</p> <p>9月20日 ゾーグ、理事長および高等学部長を辞任。(二一五)</p> <p>10月 出村悌三郎、第四代理事長に就任。</p> <p>11月 東北学院維持会組織。(一九〇、一九一)</p>	<p>9月27日 日独伊三国同盟調印</p> <p>10月12日 大政翼賛会発足</p>
一九三九	昭和一四	<p>2月28日 高等学部東亜研究会『会報』発行。(二一一)</p> <p>3月4日 中学部生徒定員変更認可。(二〇六)</p> <p>5月22日 現役将校学校配属一五周年記念御親閲式(於宮城前)。(二一三)</p> <p>6月22日 「青少年学徒二賜ハリタル勅語」拜受式(五月二二日下賜)。</p> <p>この年から、勤労奉仕を正課の一部として実施。(二〇七)</p>	<p>3月30日 文部省、大学でも軍事教練を必修と通達</p> <p>4月8日 宗教団体法公布</p> <p>9月1日 第二次世界大戦勃発</p>

西曆	元号	資 料 関 係 事 項	社 会 事 項
一九四二	昭和一七	9月9日 中学位校舎玄関の学校標語三三に対し、「目障りな米英標語」の新聞報道。(二二二)	
一九四三	昭和一八	1月30日 『東北学院時報』特一二号(戦時版)をもって休刊。 4月1日 高等学部商科を高等商業部、中学部を中学校と改称。 7月6日 文部次官より「学徒戦時動員体制確立要綱実施ニ関スル件」通達。(二二二) 7月11日 文部大臣・厚生大臣より「学校報国隊出動令書」発令。(二二三)	10月21日 学徒出陣 12月24日 徴兵適齡臨時特例公布 この年、各種の兵役法改正、臨時特例公布
一九四四	昭和一九	3月15日 航空工業専門学校設置認可。(二二四、二二五、二二六) 6月 杉山元治郎、第五代理事長に就任。	1月18日 緊急学徒勤労働員方策要綱決定 8月23日 学徒勤労働令公布 10月18日 兵役法施行規則改正
一九四五	昭和二〇	7月10日 仙台空襲。(二二七、二二八) 12月4日 航空工業専門学校を工業専門学校と改称。(二二九) 3月30日 高等商業部・同第二部廃止認可。同日、専門学校令による東北学院専門学校設置認可。(二三〇、二三一、二三二、二三三、二三四、二三七)	8月15日 第二次世界大戦終結 1月1日 天皇神格化否定(人間宣言) 1月4日 軍国主義者の公職追放 3月5日 米国教育視察団来日
一九四六	昭和二一	4月1日 出村剛、専門学校長に、月浦利雄、中学校長に就任。 5月2日 理事会、八木山六八万坪の校地入手計画の審議を開始。(二三五) 9月13日 創立六〇周年記念式典挙行。(二三六) 10月 国際伝道局、援助再開を約束。(二四五、二四六) 11月 出村剛、第四代院長に就任。	11月3日 日本国憲法公布

一九四七	昭和二二	2月20日 『東北文学』（中学校）復刊。（二四〇、二四一） 2月26日 アンケニー夫妻、横浜着。（二四四） 3月31日 工業専門学校廃止認可。（二四二） 4月1日 （新制）中学校設置。（二五三） 5月2日 杉山元治郎、「教職不適格」の指定を受け、理事長辞任。 7月25日 鈴木義男、第六代理事長に就任。 9月 アメリカ文化研究所設立。（二九八）	3月15日 理事会、宮城学院との合併問題について審議。（二五五） 4月1日 （新制）高等学校、同第二部設置。月浦利雄、同学校長に就任、中学校長兼任。（二五四、二五六） 同日、小田忠夫、専門学校長に就任。 11月10日 「基督教教育調査」報告書作製。（二四三）	12月15日 私立学校法公布
一九四九	昭和二四	3月25日 （新制）大学文経学部設置認可。（二五二、二五四、二五七、二五八） 4月1日 小田忠夫、初代学長に就任。 9月29日 出村剛、死去。（二六二） 11月25日 『東北学院時報』刊行再開（通算一六三号）。 12月26日 出村悌三郎、死去。（二六三）		
一九五〇	昭和二五	2月4日 A・アンケニー、第五代院長に選任。（二六四） 3月14日 短期大学部（英文科第二部、経済科第二部）設置認可。（二五九、二六〇） 5月10日 創立六五年記念式典、アンケニー院長就任式、並びに大学諸施設献堂式挙行。（二四八、二六五） 12月20日 第一回「市民クリスマス」開催。翌年より「東北学院同窓会主催東北学院クリスマス」と改称。（二七四）		6月25日 朝鮮戦争勃発

西曆	元号	資料関係事項	社会事項
一九五二	昭和二七	4月1日 短期大学部法科第二部設置。(二七〇、二七一、二八二)	7月4日 破壊活動防止法案成立
一九五三	昭和二八	4月 中・高分離、中学校長に五十嵐正躬就任。 10月16日 大学、総合運動場を多賀城(笠神)に開設。 10月17日 シュネーター記念図書館落成式。(二四七、二四九、二五〇、二五一)	
一九五四	昭和二九	1月10日 中・高校理科棟落成式。 3月 中学校校舎(三階建六教室)完成。(二八八) 4月 中学校、入学定員を三〇〇名に増員。	
一九五五	昭和三〇	3月 中学校校舎(三階建九教室)増築完成。(二八八) 5月9日 シュネーター記念図書館玄関正面の壁飾「エホバを畏るゝは知識の本なり」完成。(二五二) 5月10日 創立七〇年記念式典挙行。(二八六、二八七、二八九、二九〇) 12月17日 在米同窓生寄贈の礼拝用鐘の献鐘式挙行。(二九二)	9月8日 対日平和条約、日米安全保障条約調印
一九五六	昭和三一	4月15日 ホーイ、出村悌三郎記念碑建碑式挙行。(二九一、二九三)	10月22日 大学設置基準決定

一九五七	昭和三一	11月	一般教育・英文学、経済学の三部門協議会発足。(二九九)	
一九五八	昭和三三	1月6日 2月5日 3月14日 4月	五十嵐正躬の会計理事転出、月浦利雄の中学校長兼任にともない、再び中・高一本化。 多賀城町(現多賀城市)の国有財産払下げ申請。(三一八、三一九) 学校と教会との伝道協力懇談会開催。(二九五) 中学校赤煉瓦校舎、都市計画により九教室喪失。同月、中・高校北校舎(四階建八教室)完成。	
一九五九	昭和三四	9月29日 3月20日 4月11日 7月20日	大学体育館「アセンブリー・ホール」献堂式。(二九六) 文経学部第二部(四年制)増設認可。(三〇〇) 高校榴ヶ岡校舎開設、入学式挙行。(三三二) 『東北学院七十年史』刊行。(二八四、二八五、二九七)	11月4日 プロテスタント宣教百年記念大会
一九六〇	昭和三五	3月31日	短期大学部廃止。(三〇一)	
一九六一	昭和三六	3月31日	文経学部にて文学専攻科設置認可。(三〇二)	
一九六二	昭和三七	2月17日 2月20日 2月27日	工学部増設認可。(三二二、三三三) 幼稚園設置認可。(三二九) 大蔵省、多賀城町の国有財産払下げ承認(翌日、売買契約締結)。	
一九六三	昭和三八	10月31日 2月15日 8月25日 9月6日	工学部新校舎落成式。 大学学生ホール「押川記念館」献堂式。 鈴木義男、死去。(三〇三) 杉山元治郎、第七代理事長に就任。 この年、学費改定反対などの学生運動生起。(三〇八)	

西曆	元号	資料関係事項	社会事項
一九六四	昭和三九	<p>1月25日 文学部(一部・二部)、経済学部(一部・二部)設置認可。(三〇五、三〇六)</p> <p>3月31日 大学院文学研究科修士課程(英語英文学専攻)設置認可。(三〇七―1)</p> <p>10月8日 大学六四年館献堂式。(三〇四)</p> <p>10月11日 杉山元治郎、死去。(三〇九)</p> <p>11月4日 山根篤、第八代理事長に就任。(三一―)</p> <p>1月25日 法学部増設認可。(三一〇)</p> <p>3月27日 大学院経済学研究科修士課程(財政金融専攻、四二年経済学専攻設置により廃止)増設認可。(三〇七―2)</p>	
一九六五	昭和四〇	<p>5月 泉町(現仙台市)に約一〇万坪の校地取得。</p> <p>11月20日 中・高校新校舎 礼拝堂献堂式。</p>	
一九六六	昭和四一	<p>3月28日 大学院文学研究科に博士課程(英語英文学専攻)、工学研究科に修士課程(応用物理学専攻)を増設認可。(三〇七―3)</p> <p>6月 大学六六年館完成。</p> <p>12月6日 青根セミナーハウス完成。</p>	5月16日 中国文化大革命開始
一九六七	昭和四二	<p>3月29日 大学院経済学研究科修士課程(経済学専攻)増設認可。(三〇七―4)</p> <p>4月1日 工学部に土木工学科増設。</p> <p>5月 大学六七年館完成。</p>	
一九六八	昭和四三	<p>1・2月 大学紛争、本学にも波及。(三一―、三一三)</p> <p>3月30日 大学院経済学研究科に博士課程(経済学専攻)、工学研究科に博士課程(応用物理学専攻)を増設認可。(三〇七―5)</p>	1月29日 東大紛争生起 7月1日 核拡散防止条約調印

一九六九	昭和四四	3月1日 山根篤、理事長を辞任。 3月31日 文経学部および同第二部廃止認可。(三二四) 4月1日 月浦利雄、第九代理事長に就任。 6・7月 大学紛争再燃、機動隊導入。	7月21日 アポロ一―号、月 面着陸 8月7日 大学運営臨時措置 法公布
一九七一	昭和四六	3月31日 大学院工学研究科修士課程に、機械工学専攻および 電気工学専攻増設認可。(三〇七―6) 8月31日 月浦利雄、中・高校長辞任。 9月1日 二関敬、同校長就任。 五十嵐正躬、高校榴ヶ岡校舎校長就任。	6月17日 沖縄返還協定調印
一九七二	昭和四七	2月1日 榴ヶ岡高校設置認可。(三三五、三三六) 2月 大学紛争激化、校舎不法占拠により機動隊導入。 8月23日 榴ヶ岡高校新校舎完成、定礎式挙行。(三三七)	
一九七三	昭和四八	7月19日 月浦利雄、死去。(三三八)	
一九七四	昭和四九	3月28日 大学院工学研究科博士課程に、機械工学専攻および 電気工学専攻増設認可。(三〇七―7) 3月30日 小田忠夫、第一〇代理事長に就任。	
一九七五	昭和五〇	3月25日 大学院法学研究科修士課程(法律学専攻)増設認可。 (三〇七―8)	4月30日 ベトナム戦争終結
一九七七	昭和五二	3月31日 二関敬、中・高校長辞任。五十嵐正躬、榴ヶ岡高校 長辞任。 4月1日 田口誠一、中・高校長就任。小田忠夫、榴ヶ岡高校 長兼任。	
一九七八	昭和五三	4月1日 大学院各研究科の修士課程、博士課程が、それぞれ 博士課程・前期課程、博士課程・後期課程と改称。 2月17日 大学九〇周年記念館定礎・献堂式。 4月1日 清水浩三、榴ヶ岡高校長就任。	6月12日 宮城県沖地震

西曆	元号	資 料 関 係 事 項	社 会 事 項
一九七九	昭和五四	3月8日 中・高校赤煉瓦校舎見送り式。 3月30日 大学院法学研究科に博士課程・後期課程（法律学専攻）を増設認可。（三〇七一—九） 9月17日 大学七八年館・部室棟定礎・献堂式。	
一九八〇	昭和五五	3月5日 中・高校シユネーダー記念館定礎・献堂式。 3月27日 工学部機械工場・機械実験棟定礎・献堂式。 6月12日 工学部隣接国有地売買契約締結。（三二二五） 9月25日 泉校地総合運動場および管理センター奉献式。	
一九八一	昭和五六	3月28日 大学八一年館定礎・献堂式。 4月1日 『東北学院報』創刊。 6月1日 創立百周年記念行事準備事務室設置。（三四三、三四四）	
一九八二	昭和五七	10月17日 工学部体育館定礎・献堂式。（三三二六） 1月1日 山根篤、死去。 3月13日 小田忠夫、死去。（三四五） 4月1日 情野鉄雄、第七代院長に就任、大学長兼任。 6月25日 児玉省三、第一代理事長に就任。（三四六） 11月18日 アーサイナス大学との国際教育交流協定締結（翌年一月四日正式調印）。（三一—五） 11月18日 図書館工学部分館定礎・献堂式（翌年五月開館）。（三二七）	
一九八三	昭和五八	3月5日 高校二部閉校式。（三四一） 10月14日 工学部礼拝堂定礎・献堂式。（三三八）	
一九八四	昭和五九	11月24日 新シユネーダー記念大学図書館（中央図書館）落成式。	

一九八五	昭和六〇	1月 5月15日 11月 12月10日	大学整備計画案（教養部泉校地移転等）公表。 創立百周年記念行事の概要決定。（三四九） 旧シュネーダー記念図書館、大学院校舎に改装。 新幼稚園舎定礎・献堂式。（三三〇）	
一九八六	昭和六一	4月21日 5月15日	押川方義記念碑献碑式。 創立百周年記念式典挙行。（三五〇、三五二、三五三） 同日、フランクリン・アンド・マーシャル大学との 国際教育交流協定締結。（三二六）	
一九八七	昭和六二	12月17日	中・高校新体育館定礎・献堂式。	
一九八八	昭和六三	3月29日 4月1日 12月22日	大学泉キャンパス校舎定礎・献堂式。 大学教養部、泉キャンパスに移転。 教養学部増設認可。	
一九八九	平成元	4月1日	教養学部開設。	1月7日 昭和天皇没、 平成と改元

編集後記

百年史編集委員会が設けられて以来九年、ここに『東北学院百年史』資料篇を刊行することができた。創立百周年に発刊した写真誌『東北学院の一〇〇年』を別とすれば、百年史本体としては昨年の「通史篇」に続き第二巻目である。誠に感謝にたえない。

一九八五年秋、編集委員会はそれまでの刊行計画を立て直して、百年史本体の内容を、通史篇、各論篇、資料篇の三部構成とし、一九八八年度内発刊を目標として出発した。しかし同時刊行には無理があったため、まず通史篇を一九八八年度（一九八九年三月末）内に、資料篇は一九九〇年三月、各論篇は一九九一年三月に刊行することとしたのである。

昨年五月、ほぼ予定どおり通史篇が発刊されるや、ただちに資料篇の編纂にとりかかった。まず通史篇に引用した資料の全文掲載を基本方針として、原資料の複写作業を開始したが、それだけでも膨大な量になることが明らかとなり、さらに約半分に厳選することとなった。それらに通史篇執筆完了後に発見された新たな資料を加え、全体を通史篇の篇章構成に従ってほぼ年代順に配列し直したのである。それは資料篇が通史篇の史料集であることを示すためであり、それによっても学院百年の歴史が一つのストーリーとして見えてくることになった。通史で敷衍触れただけの原資料も、資料篇で並行して読み直すことよって、より広く深い背景をそこから知ることができるのである。本書に収録した資料は約三七〇編、そのうち八〇余編は英文資料である。

編集にあたっては、原語・原文主義をとったため、「県庁文書」、各種の会議録、手紙など手書きや毛筆書きのものは、古文書と同様に、解説に苦勞することもしばしばであった。また既に活字化され、公刊されている資料についても、できるだけ原典に戻って再調査するよう努めた。これらの原資料に直接触れることは、その日その時の先人の息遣いに思いを馳せる好機であり、心楽しい作業でもあった。手書きの原稿は、邦文・英文すべて書き直して印刷所に手渡したが、特に邦文原稿の解説に当たっては、文学部史学科教授の守屋嘉美委員に多くの時間と労力を割いていただいた。同委員

には、多忙な本務のかたわら、歴史学の専門の立場から精力的にこの資料篇の編纂に携わっていただき、さらに資料の解説も執筆いただいた。誠に感謝の言葉もない。

巻末の資料年表は、原則として本文の資料に関係のある事項のみを選抜し、それに関連の資料番号を補記したものである。これは竹井一夫委員の尽力によるもので、他に類を見ないユニークなものとなった。本書に収録した資料の選択および編集・校正等すべての実務は、通史篇に続いて今回も出村彰編集主任、竹井一夫委員、史料室の松浦平藏室長、日野哲両委員の編集スタッフに担当いただき、感謝であつた。

最後に、資料の出版掲載にご理解とご協力をいただいた多数の学内外関係者各位、度重なる資料の追加また大幅な削除にも寛容を示され、作業を完遂された株式会社佐々木東北堂印刷製本所の諸氏に対して、心からの謝意を表する次第である。

残るは、いよいよ各論篇のみとなった。編集委員会では、既に執筆項目を選定し、十六名の方々にそれぞれ専門の立場からの論考を依頼した。来春これが発刊されれば、『東北学院百年史』の三部作が十年にして完成することとなる。これら三冊が相互に補完し合い、全体として百年史編集の本来の目的が達成されるであろう。一日も早い完成を待望するや切である。

一九九〇年五月

百年史編集委員会

委員長	小笠原 政 敏
主 任	出 村 彰
委 員	稲 垣 弘 輔
	大 江 善 男
	櫻 井 傳
	竹 井 一 夫

四 守 松 樋 日 西 土
津 屋 浦 渡 野 山 戸
隆 嘉 平 順 良
一 美 藏 一 哲 雄 清

東北学院百年史 資料篇 *History of Tohoku Gakuin: Collected Sources*

1990年5月15日 発行

編 集 東北学院百年史編集委員会

発 行 学校法人 東北学院

〒980 仙台市青葉区土樋一丁目3番1号

印 刷 株式会社佐々木東北堂印刷製本所

〒982 仙台市太白区鉤取一丁目2番12号

© 1990 Tohoku Gakuin Printed in Japan

